

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集

# 台太郎遺跡第18次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

(第1分冊 本文編)

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター  
盛岡市

# 台太郎遺跡第18次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

(第1分冊 本文編)



## 序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました盛岡南新都市計画整備事業を例にあげるもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発も県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、盛岡市南新都市開発整備事業に関連して、平成10年度に行われた台太郎遺跡第18次調査結果について収録したものであります。調査の結果、雫石川右岸の河岸段丘上に立地する奈良～平安時代を中心とした集落跡であることが明らかになりました。竪穴住居跡からは多くの土器をはじめとする各種の遺物が出土しており、北西側2kmに位置する古代城柵の志波城跡と集落構造の関連性を考える上での貴重な資料を提供することができました。

この本書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました盛岡市開発部盛南開発課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成13年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 千葉浩一

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市向中野字向中野28-6ほかに所在する<sup>だいたろう</sup>台太郎遺跡第18次発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、盛岡南新都市計画整備事業に伴い、県教育委員会文化課・盛岡市・地域振興整備公団の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 発掘調査は、平成10年度に行われ委託者が盛岡市である。
4. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡各次略号は、以下のとおりである。  
遺跡登録台帳番号……LE16-2269  
遺跡略号……ODT98
5. 調査期間と調査面積と野外調査担当者は、以下のとおりである。  
平成10年4月15日～11月24日/26,406m<sup>2</sup>/高橋義介・金子佐知子・下田隆衛・溜浩二郎・山口俊規  
・佐藤綾子・鈴木見詔
6. 調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。  
平成10年11月1日～平成11年3月31日/高橋義介・金子佐知子・鈴木見詔  
平成11年4月1日～平成12年3月31日/高橋義介
7. 本報告書の執筆は、高橋義介・金子佐知子・佐藤綾子が分担し、文末に氏名を( )で記している。
8. 本報告書は、第1分冊本文編と第2分冊写真図版編に分冊している。
9. 自然科学関連の分析鑑定と保存処理は、次の方々と機関に依頼した。(敬称略)  
石質鑑定……花崗岩研究会  
樹種同定……高橋利彦(木工舎ゆい)  
鉄製品の保存処理……岩手県立博物館  
鉄製鎧の同定……関山房兵(岩手県立博物館)
10. 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に依頼した。  
座標原点の測量……(株)吉田測量設計  
空中写真……東邦航空(株)
11. 本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。(敬称略)  
八木光則・千田和文・似内啓邦(盛岡市教育委員会)、吉田努・桐生正一(滝沢村教育委員会)、熊谷常正(盛岡大学)、齋藤邦雄(岩手県教育委員会)、千葉啓蔵(久慈市教育委員会)、西野修・佐々木真史(矢巾町教育委員会)、伊藤博幸・千田幸生・佐藤良和((財)水沢市文化振興事業団埋蔵文化財調査センター)、末光正卓((財)北海道埋蔵文化財センター)、仙庭伸久(札幌市市民局)、豊田宏良・松田淳子(千歳市教育委員会)、宇部則保(八戸市教育委員会)、村田晃一(宮城県教育庁)、長島栄一・松本知彦(仙台市教育委員会)、柳沼賢治・佐久間正明((財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団)、津野仁((財)栃木県文化振興事業団)、岩手県立博物館、盛岡市教育委員会
12. 野外調査にあたっては盛岡市と地元の方々に多大なるご協力をいただいた。
13. 本遺跡から出土した遺物および調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

# 目次

序  
例言

## 〔本文〕

I 調査に至る経過	1	6. 焼土遺構	398
II 遺跡の位置と環境	3	7. カマド状遺構	398
1. 遺跡の位置	3	8. 堀	406
2. 遺跡周辺の地形と地質	3	9. 溝跡	410
3. 基本層序	3	10. 波板状凹凸遺構(道路)	442
4. 周辺の遺跡	5	11. 楕円形周溝	444
III 調査の方法と室内整理	9	12. 井戸跡	446
1. 野外調査の方法	9	13. 柱穴状土坑	446
2. 室内整理の方法	10	14. 馬屋状遺構	461
IV 検出された遺構と遺物	21	15. 遺構外出土遺物	461
1. 概要	21	V まとめ	504
2. 竪穴住居跡	21	1. 遺構	504
3. 掘立柱建物跡	323	2. 遺物	510
4. 竪穴状遺構	345	報告書抄録	525
5. 土坑	361	職員一覧	526

## 〔図版〕

第1図 岩手県図に見る遺跡の位置	1	第16図 R A 118竪穴住居跡	26
第2図 遺跡の位置図	2	第17図 R A 118竪穴住居跡出土遺物(1)	27
第3図 遺跡周辺の地形分類図	4	第18図 R A 118竪穴住居跡出土遺物(2)	28
第4図 基本土層柱状図	4	第19図 R A 121竪穴住居跡(1)	30
第5図 周辺の遺跡分布図	7	第20図 R A 121竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)	31
第6図 グリット配置図	9	第21図 R A 121竪穴住居跡出土遺物(2)	32
第7図 凡例	11	第22図 R A 121竪穴住居跡出土遺物(3)	33
第8図 遺構配置図(東・北側調査区)	12・13	第23図 R A 122竪穴住居跡・出土遺物	34
第9図 遺構配置図(北・西側調査区)	14・15	第24図 R A 123竪穴住居跡	35
第10図 遺構配置図(西側調査区)	16・17	第25図 R A 123竪穴住居跡出土遺物	36
第11図 遺構配置図(南側調査区)	18・19	第26図 R A 124竪穴住居跡	37
第12図 遺跡周辺地形図	20	第27図 R A 124竪穴住居跡出土遺物	38
第13図 R A 099竪穴住居跡	22	第28図 R A 125竪穴住居跡	41
第14図 R A 099竪穴住居跡出土遺物	23	第29図 R A 125竪穴住居跡出土遺物	42
第15図 R A 117竪穴住居跡・出土遺物	25	第30図 R A 129竪穴住居跡(1)	43

第31图	R A 129豎穴住居跡(2)・出土遺物(1)……	44	第69图	R A 146豎穴住居跡(2)・出土遺物……	91
第32图	R A 129豎穴住居跡出土遺物(2)……	45	第70图	R A 148豎穴住居跡・出土遺物……	92
第33图	R A 129豎穴住居跡出土遺物(3)……	46	第71图	R A 151豎穴住居跡……	93
第34图	R A 129豎穴住居跡出土遺物(4)……	47	第72图	R A 151豎穴住居跡出土遺物……	94
第35图	R A 130豎穴住居跡・出土遺物(1)……	50	第73图	R A 155豎穴住居跡(1)……	96
第36图	R A 130豎穴住居跡出土遺物(2)……	51	第74图	R A 155豎穴住居跡(2)・出土遺物(1)……	97
第37图	R A 130豎穴住居跡出土遺物(3)……	52	第75图	R A 155豎穴住居跡出土遺物(2)……	98
第38图	R A 130豎穴住居跡出土遺物(4)……	53	第76图	R A 155豎穴住居跡出土遺物(3)……	99
第39图	R A 130豎穴住居跡出土遺物(5)……	54	第77图	R A 155豎穴住居跡出土遺物(4)……	100
第40图	R A 132豎穴住居跡(1)……	55	第78图	R A 156豎穴住居跡・出土遺物……	102
第41图	R A 132豎穴住居跡(2)……	56	第79图	R A 167豎穴住居跡・出土遺物……	103
第42图	R A 132豎穴住居跡出土遺物(1)……	57	第80图	R A 169豎穴住居跡・出土遺物……	104
第43图	R A 132豎穴住居跡出土遺物(2)……	58	第81图	R A 180豎穴住居跡……	106
第44图	R A 132豎穴住居跡出土遺物(3)……	59	第82图	R A 180豎穴住居跡出土遺物……	107
第45图	R A 133豎穴住居跡……	60	第83图	R A 185豎穴住居跡……	109
第46图	R A 133豎穴住居跡出土遺物……	61	第84图	R A 185豎穴住居跡出土遺物……	110
第47图	R A 135豎穴住居跡……	63	第85图	R A 186豎穴住居跡……	112
第48图	R A 135豎穴住居跡出土遺物……	64	第86图	R A 186豎穴住居跡出土遺物(1)……	113
第49图	R A 139豎穴住居跡……	65	第87图	R A 186豎穴住居跡出土遺物(2)……	114
第50图	R A 139豎穴住居跡出土遺物……	66	第88图	R A 192豎穴住居跡……	115
第51图	R A 140豎穴住居跡……	68	第89图	R A 192豎穴住居跡出土遺物……	116
第52图	R A 140豎穴住居跡出土遺物……	69	第90图	R A 193豎穴住居跡……	117
第53图	R A 141豎穴住居跡(1)……	70	第91图	R A 193豎穴住居跡出土遺物……	118
第54图	R A 141豎穴住居跡(2)……	71	第92图	R A 199豎穴住居跡……	119
第55图	R A 141豎穴住居跡(3)・R D 122土坑……	73	第93图	R A 210豎穴住居跡……	121
第56图	R A 141豎穴住居跡出土遺物(1)……	74	第94图	R A 210豎穴住居跡出土遺物……	122
第57图	R A 141豎穴住居跡出土遺物(2)……	75	第95图	R A 215豎穴住居跡……	124
第58图	R A 141豎穴住居跡出土遺物(3)……	76	第96图	R A 215豎穴住居跡出土遺物……	125
第59图	R A 141豎穴住居跡出土遺物(4)……	77	第97图	R A 218豎穴住居跡……	126
第60图	R A 141豎穴住居跡出土遺物(5)……	78	第98图	R A 218豎穴住居跡出土遺物(1)……	127
第61图	R A 142豎穴住居跡(1)……	81	第99图	R A 218豎穴住居跡出土遺物(2)……	128
第62图	R A 142豎穴住居跡(2)……	82	第100图	R A 219豎穴住居跡……	129
第63图	R A 142豎穴住居跡出土遺物(1)……	83	第101图	R A 219豎穴住居跡出土遺物……	130
第64图	R A 142豎穴住居跡出土遺物(2)……	84	第102图	R A 221豎穴住居跡……	131
第65图	R A 143豎穴住居跡・出土遺物……	85	第103图	R A 221豎穴住居跡出土遺物……	132
第66图	R A 144豎穴住居跡……	86	第104图	R A 225豎穴住居跡……	134
第67图	R A 145豎穴住居跡・出土遺物……	88	第105图	R A 225豎穴住居跡出土遺物……	135
第68图	R A 146豎穴住居跡(1)……	90	第106图	R A 229豎穴住居跡……	138・139

第107图	R A 229豎穴住居跡出土遺物(1)·····	140	第145图	R A 127豎穴住居跡·····	185
第108图	R A 229豎穴住居跡出土遺物(2)·····	141	第146图	R A 128豎穴住居跡(1)·····	187
第109图	R A 229豎穴住居跡出土遺物(3)·····	142	第147图	R A 128豎穴住居跡(2)・出土遺物(1)··	188
第110图	R A 272豎穴住居跡(1)·····	143	第148图	R A 128豎穴住居跡出土遺物(2)·····	189
第111图	R A 272豎穴住居跡(2)・出土遺物(1)··	144	第149图	R A 128豎穴住居跡出土遺物(3)·····	190
第112图	R A 272豎穴住居跡出土遺物(2)·····	145	第150图	R A 134豎穴住居跡・出土遺物·····	191
第113图	R A 272豎穴住居跡出土遺物(3)·····	146	第151图	R A 136豎穴住居跡·····	192
第114图	R A 307豎穴住居跡(1)·····	148	第152图	R A 136豎穴住居跡出土遺物·····	193
第115图	R A 307豎穴住居跡(2)・出土遺物(1)··	149	第153图	R A 137豎穴住居跡・出土遺物(1)····	195
第116图	R A 307豎穴住居跡出土遺物(2)·····	150	第154图	R A 137豎穴住居跡出土遺物(2)·····	196
第117图	R A 307豎穴住居跡出土遺物(3)·····	151	第155图	R A 137豎穴住居跡出土遺物(3)·····	197
第118图	R A 047豎穴住居跡(1)·····	153	第156图	R A 138豎穴住居跡·····	198
第119图	R A 047豎穴住居跡(2)・出土遺物(1)··	154	第157图	R A 138豎穴住居跡出土遺物(1)·····	199
第120图	R A 047豎穴住居跡出土遺物(2)·····	155	第158图	R A 138豎穴住居跡出土遺物(2)·····	200
第121图	R A 107豎穴住居跡·····	156	第159图	R A 147豎穴住居跡·····	202
第122图	R A 107豎穴住居跡出土遺物·····	157	第160图	R A 147豎穴住居跡出土遺物·····	203
第123图	R A 109豎穴住居跡·····	158	第161图	R A 149豎穴住居跡・出土遺物·····	204
第124图	R A 109豎穴住居跡出土遺物·····	159	第162图	R A 150豎穴住居跡・出土遺物(1)····	206
第125图	R A 110豎穴住居跡·····	160	第163图	R A 150豎穴住居跡出土遺物(2)·····	207
第126图	R A 110豎穴住居跡出土遺物·····	161	第164图	R A 152豎穴住居跡(1)·····	208
第127图	R A 111豎穴住居跡・出土遺物·····	163	第165图	R A 152豎穴住居跡(2)・出土遺物(1)··	209
第128图	R A 112豎穴住居跡・出土遺物·····	164	第166图	R A 152豎穴住居跡出土遺物(2)·····	210
第129图	R A 113豎穴住居跡・出土遺物·····	165	第167图	R A 152豎穴住居跡出土遺物(3)·····	211
第130图	R A 114豎穴住居跡・出土遺物·····	167	第168图	R A 152豎穴住居跡出土遺物(4)·····	212
第131图	R A 115豎穴住居跡·····	168	第169图	R A 153豎穴住居跡(1)·····	215
第132图	R A 115豎穴住居跡出土遺物·····	169	第170图	R A 153豎穴住居跡(2)・出土遺物(1)··	216
第133图	R A 116豎穴住居跡・出土遺物·····	170	第171图	R A 153豎穴住居跡出土遺物(2)·····	217
第134图	R A 119豎穴住居跡·····	173	第172图	R A 153豎穴住居跡出土遺物(3)·····	218
第135图	R A 119豎穴住居跡出土遺物·····	174	第173图	R A 153豎穴住居跡出土遺物(4)·····	219
第136图	R A 120豎穴住居跡·····	175	第174图	R A 154豎穴住居跡·····	220
第137图	R A 120豎穴住居跡出土遺物·····	176	第175图	R A 154豎穴住居跡出土遺物·····	222
第138图	R A 126豎穴住居跡·····	178	第176图	R A 158豎穴住居跡(1)·····	223
第139图	R A 126豎穴住居跡出土遺物(1)·····	179	第177图	R A 158豎穴住居跡(2)・出土遺物····	224
第140图	R A 126豎穴住居跡出土遺物(2)·····	180	第178图	R A 160豎穴住居跡・出土遺物·····	226
第141图	R A 126豎穴住居跡出土遺物(3)·····	181	第179图	R A 161豎穴住居跡(1)·····	227
第142图	R A 126豎穴住居跡出土遺物(4)·····	182	第180图	R A 161豎穴住居跡(2)・出土遺物····	228
第143图	R A 126豎穴住居跡出土遺物(5)·····	183	第181图	R A 162豎穴住居跡·····	230
第144图	R A 126豎穴住居跡出土遺物(6)·····	184	第182图	R A 162豎穴住居跡出土遺物(1)·····	232



第183図	R A 162竪穴住居跡出土遺物(2)……………	233	第220図	R A 190竪穴住居跡……………	282
第184図	R A 162竪穴住居跡出土遺物(3)……………	234	第221図	R A 191竪穴住居跡・出土遺物……………	284
第185図	R A 162竪穴住居跡出土遺物(4)……………	235	第222図	R A 194竪穴住居跡……………	285
第186図	R A 162竪穴住居跡出土遺物(5)……………	236	第223図	R A 194竪穴住居跡出土遺物……………	286
第187図	R A 163竪穴住居跡・出土遺物……………	237	第224図	R A 195竪穴住居跡……………	288
第188図	R A 165竪穴住居跡(1)……………	239	第225図	R A 195竪穴住居跡出土遺物……………	289
第189図	R A 165竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)…	240	第226図	R A 196竪穴住居跡……………	290
第190図	R A 165竪穴住居跡出土遺物(2)……………	241	第227図	R A 198竪穴住居跡……………	291
第191図	R A 165竪穴住居跡出土遺物(3)……………	242	第228図	R A 198竪穴住居跡出土遺物(1)……………	292
第192図	R A 165竪穴住居跡出土遺物(4)……………	243	第229図	R A 198竪穴住居跡出土遺物(2)……………	293
第193図	R A 165竪穴住居跡出土遺物(5)……………	244	第230図	R A 212竪穴住居跡……………	294
第194図	R A 168竪穴住居跡・出土遺物……………	245	第231図	R A 213竪穴住居跡……………	295
第195図	R A 170竪穴住居跡(1)……………	248	第232図	R A 213竪穴住居跡出土遺物(1)……………	296
第196図	R A 170竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)…	249	第233図	R A 213竪穴住居跡出土遺物(2)……………	297
第197図	R A 170竪穴住居跡出土遺物(2)……………	250	第234図	R A 214竪穴住居跡……………	298
第198図	R A 170竪穴住居跡出土遺物(3)……………	251	第235図	R A 214竪穴住居跡出土遺物(1)……………	299
第199図	R A 171竪穴住居跡……………	252・253	第236図	R A 214竪穴住居跡出土遺物(2)……………	300
第200図	R A 171竪穴住居跡出土遺物(1)……………	254	第237図	R A 216竪穴住居跡……………	301
第201図	R A 171竪穴住居跡出土遺物(2)……………	255	第238図	R A 217竪穴住居跡・出土遺物……………	302
第202図	R A 171竪穴住居跡出土遺物(3)……………	256	第239図	R A 220竪穴住居跡……………	303
第203図	R A 173竪穴住居跡・出土遺物……………	259	第240図	R A 222竪穴住居跡……………	304
第204図	R A 176竪穴住居跡・出土遺物……………	260	第241図	R A 224竪穴住居跡……………	305
第205図	R A 177竪穴住居跡(1)……………	262	第242図	R A 224竪穴住居跡出土遺物……………	306
第206図	R A 177竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)…	263	第243図	R A 226竪穴住居跡……………	307
第207図	R A 177竪穴住居跡出土遺物(2)……………	264	第244図	R A 227竪穴住居跡(1)……………	309
第208図	R A 178竪穴住居跡(1)……………	266	第245図	R A 227竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)…	310
第209図	R A 178竪穴住居跡(2)・出土遺物……………	267	第246図	R A 227竪穴住居跡出土遺物(2)……………	311
第210図	R A 179竪穴住居跡……………	268	第247図	R A 230竪穴住居跡……………	312
第211図	R A 179竪穴住居跡出土遺物……………	269	第248図	R A 230竪穴住居跡出土遺物……………	313
第212図	R A 181竪穴住居跡(1)……………	271	第249図	R A 231竪穴住居跡……………	314
第213図	R A 181竪穴住居跡(2)・出土遺物……………	272	第250図	R A 271竪穴住居跡……………	315
第214図	R A 182・183竪穴住居跡(1)……………	274	第251図	R A 271竪穴住居跡出土遺物……………	316
第215図	R A 182・183竪穴住居跡(2)・ 出土遺物……………	275	第252図	R A 302竪穴住居跡(1)……………	317
第216図	R A 184竪穴住居跡(1)……………	277	第253図	R A 302竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)…	318
第217図	R A 184竪穴住居跡(2)・出土遺物……………	278	第254図	R A 302竪穴住居跡出土遺物(2)……………	319
第218図	R A 188竪穴住居跡・出土遺物……………	280	第255図	R A 302竪穴住居跡出土遺物(3)……………	320
第219図	R A 189竪穴住居跡・出土遺物……………	281	第256図	R A 157竪穴住居跡・出土遺物……………	322
			第257図	R B 005掘立柱建物跡……………	324

第258図	R B 007掘立柱建物跡……………	325	第288図	R D土坑(5) ……………	373
第259図	R B 008掘立柱建物跡・出土遺物……	326	第289図	R D土坑(6) ……………	374
第260図	R B 009掘立柱建物跡……………	329	第290図	R D土坑(7) ……………	375
第261図	R B 013掘立柱建物跡……………	330	第291図	R D土坑(8) ……………	376
第262図	R B 018掘立柱建物跡・出土遺物……	331	第292図	R D土坑(9) ……………	377
第263図	R B 006掘立柱建物跡……………	333	第293図	R D土坑(10) ……………	378
第264図	R B 010掘立柱建物跡……………	334	第294図	R D土坑(11) ……………	379
第265図	R B 006・010掘立柱建物跡 出土遺物 ……………	335	第295図	R D土坑(12) ……………	380
第266図	R B 011掘立柱建物跡……………	336	第296図	R D土坑(13) ……………	381
第267図	R B 012掘立柱建物跡……………	338	第297図	R D土坑(14) ……………	382
第268図	R B 014掘立柱建物跡(1)……………	339	第298図	R D土坑(15) ……………	383
第269図	R B 014掘立柱建物跡(2)……………	340	第299図	R D土坑(16) ……………	384
第270図	R B 015掘立柱建物跡……………	341	第300図	R D土坑(17) ……………	385
第271図	R B 016掘立柱建物跡……………	342	第301図	R D土坑(18) ……………	386
第272図	R B 012・014～016掘立柱建物跡 出土遺物 ……………	344	第302図	R D土坑(19) ……………	387
第273図	R E 009・010竪穴状遺構・ 出土遺物 ……………	346	第303図	R D土坑(20) ……………	388
第274図	R E 011竪穴状遺構・出土遺物(1)……	347	第304図	R D土坑(21) ……………	389
第275図	R E 011竪穴状遺構出土遺物(2)……	348	第305図	R D土坑(22) ……………	390
第276図	R E 014・015竪穴状遺構 ……………	349	第306図	R D土坑(23) ……………	391
第277図	R E 014・015竪穴状遺構出土遺物 …	350	第307図	R D土坑(24)・出土遺物(1) ………	392
第278図	R E 006・012・013竪穴状遺構……	353	第308図	R D土坑出土遺物(2) ……………	393
第279図	R E 018・019竪穴状遺構・ 出土遺物 ……………	354	第309図	R D土坑出土遺物(3) ……………	394
第280図	R E 020・021竪穴状遺構・ 出土遺物 ……………	355	第310図	R D土坑出土遺物(4) ……………	395
第281図	R E 024・025竪穴状遺構・ 出土遺物 ……………	356	第311図	R D土坑出土遺物(5) ……………	396
第282図	R E 022・023竪穴状遺構・ 出土遺物 ……………	359	第312図	R D土坑出土遺物(6) ……………	397
第283図	R E 026～028竪穴状遺構・ 出土遺物 ……………	360	第313図	R D土坑出土遺物(7) ……………	398
第284図	R D土坑(1) ……………	369	第314図	R F焼土遺構 ……………	399
第285図	R D土坑(2) ……………	370	第315図	R F・R Zカマド状遺構(1) ………	402
第286図	R D土坑(3) ……………	371	第316図	R F・R Zカマド状遺構(2) ………	403
第287図	R D土坑(4) ……………	372	第317図	R F・R Zカマド状遺構(3) ………	405
			第318図	R G 042堀(1)……………	407
			第319図	R G 042堀(2)……………	408
			第320図	R G 081・083堀 ……………	409
			第321図	東側調査区 R G 溝跡(1) ………	411
			第322図	東側調査区 R G 溝跡(2) ………	412
			第323図	東側・北側調査区 R G 溝跡(1) ………	413
			第324図	東側・北側調査区 R G 溝跡(2) ………	414
			第325図	東側・北側調査区 R G 溝跡(3) ………	415

第326図	北側・西側調査区 R G 溝跡(1) ……	416	第357図	R Z 005柱穴状土坑西側調査区(2)……	458
第327図	北側・西側調査区 R G 溝跡(2) ……	417	第358図	R Z 005柱穴状土坑西側調査区(3)……	459
第328図	北側・西側調査区 R G 溝跡(3) ……	418	第359図	R Z 005柱穴状土坑出土遺物……	460
第329図	北側・西側調査区 R G 溝跡(4) ……	420	第360図	R Z 010・012馬屋状遺構・出土遺物	461
第330図	西側調査区 R G 溝跡(1) ……	421	第361図	遺構外出土遺物(1) ……	463
第331図	西側調査区 R G 溝跡(2) ……	422	第362図	遺構外出土遺物(2) ……	464
第332図	西側調査区 R G 溝跡(3) ……	423	第363図	遺構外出土遺物(3) ……	465
第333図	南側調査区 R G 溝跡(1) ……	424	第364図	遺構外出土遺物(4) ……	466
第334図	南側調査区 R G 溝跡(2) ……	425	第365図	遺構外出土遺物(5) ……	467
第335図	南側調査区 R G 溝跡(3) ……	426	第366図	遺構外出土物(6) ……	468
第336図	R G 042堀出土遺物……	427	第367図	遺構外出土遺物(7) ……	469
第337図	R G 042堀(2)・067溝跡出土遺物 ……	428	第368図	遺構外出土遺物(8) ……	470
第338図	R G 045溝跡出土遺物(1)……	429	第369図	遺構外出土遺物(9) ……	471
第339図	R G 045溝跡出土遺物(2)……	430	第370図	遺構外出土遺物(10) ……	472
第340図	R G 045溝跡出土遺物(3)……	431	第371図	遺構外出土遺物(11) ……	473
第341図	R G 045溝跡出土遺物(4)……	432	第372図	遺構外出土遺物(12) ……	474
第342図	R G 045溝跡出土遺物(5)……	433	第373図	奈良時代竪穴住居跡分布図 ……	505
第343図	R G 069・070・072・076・097・106 溝跡出土遺物 ……	434	第374図	平安時代竪穴住居跡分布図 ……	506
第344図	R G 099溝跡出土遺物(1)……	435	第375図	土器分類図(1) 坏・高坏・片口 ……	516
第345図	R G 099溝跡出土遺物(2)……	436	第376図	土器分類図(2) 鉢・小型甕 ……	517
第346図	R G 099溝跡出土遺物(3)……	437	第377図	土器分類図(3) 中型～大型甕 ……	518
第347図	R G 135溝跡出土遺物(1)……	438	第378図	土器分類図(4) 大型甕 ……	519
第348図	R G 135(2)・152・168溝跡出土遺物…	439	第379図	土器分類図(5) 大型甕・甑・壺 ・長胴扁平土器・手捏ね ……	520
第349図	R Z 008波板状凹凸遺構……	442	第380図	土器分類図(6) 球胴甕(1) ……	521
第350図	R Z 009・011波板状凹凸遺構 ……	443	第381図	土器分類図(7) 球胴甕(2)・ 須恵器・その他 ……	522
第351図	R Z 006・007楕円形周溝 ……	445	第382図	土器分類図(8) 土師器手捏ね・坏・ 高台坏・耳皿・鉢・甑・壺・甕 ……	523
第352図	R I 001・002井戸跡 ……	447	第383図	土器分類図(9) 須恵器坏・長頸瓶・ 壺・鉢・片口・甕・大型甕 ……	524
第353図	R I 001井戸跡出土遺物……	448			
第354図	R Z 005柱穴状土坑東側調査区(1)……	455			
第355図	R Z 005柱穴状土坑東側調査区(2)……	456			
第356図	R Z 005柱穴状土坑西側調査区(1)……	457			

〔 表 〕

第 1 表	周辺の遺跡一覧 ……	6	第 5 表	溝跡一覧(1)……	440
第 2 表	土坑一覧(1)……	366	第 6 表	溝跡一覧(2)……	441
第 3 表	土坑一覧(2)……	367	第 7 表	東側調査区柱穴状土坑一覧(1)……	450
第 4 表	土坑一覧(3)……	368	第 8 表	東側調査区柱穴状土坑一覧(2)……	451

第9表	東側調査区柱穴状土坑一覽(3)……………	452	第27表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土	
第10表	西側調査区柱穴状土坑一覽(1)……………	452		土師器・須恵器一覽(8)……………	489
第11表	西側調査区柱穴状土坑一覽(2)……………	453	第28表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土	
第12表	西側調査区柱穴状土坑一覽(3)……………	454		土師器・須恵器一覽(9)……………	490
第13表	奈良竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第29表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土	
	土師器・須恵器一覽(1)……………	475		土師器・須恵器一覽(10)……………	491
第14表	奈良竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第30表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土	
	土師器・須恵器一覽(2)……………	476		土師器・須恵器一覽(11)……………	492
第15表	奈良竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第31表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土	
	土師器・須恵器一覽(3)……………	477		土師器・須恵器一覽(12)……………	493
第16表	奈良竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第32表	竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外	
	土師器・須恵器一覽(4)……………	478		出土土師器・須恵器一覽(1)……………	494
第17表	奈良竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第33表	竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外	
	土師器・須恵器一覽(5)……………	479		出土土師器・須恵器一覽(2)……………	495
第18表	奈良竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第34表	竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外	
	土師器・須恵器一覽(6)……………	480		出土土師器・須恵器一覽(3)……………	496
第19表	奈良竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第35表	竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外	
	土師器・須恵器一覽(7)……………	481		出土土師器・須恵器一覽(4)……………	497
第20表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第36表	竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外	
	土師器・須恵器一覽(1)……………	482		出土土師器・須恵器一覽(5)……………	498
第21表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第37表	陶磁器一覽(1)……………	498
	土師器・須恵器一覽(2)……………	483	第38表	陶磁器一覽(2)……………	499
第22表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第39表	鉄器一覽(1)……………	500
	土師器・須恵器一覽(3)……………	484	第40表	鉄器一覽(2)……………	501
第23表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第41表	土製品一覽……………	501
	土師器・須恵器一覽(4)……………	485	第42表	石器・石製品一覽……………	502
第24表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第43表	古銭一覽……………	503
	土師器・須恵器一覽(5)……………	486	第44表	縄文土器一覽……………	503
第25表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第45表	古墳時代末～奈良時代 R A	
	土師器・須恵器一覽(6)……………	487		竪穴住居跡一覽……………	507
第26表	平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土		第46表	平安時代 R A 竪穴住居跡一覽……………	508
	土師器・須恵器一覽(7)……………	488			

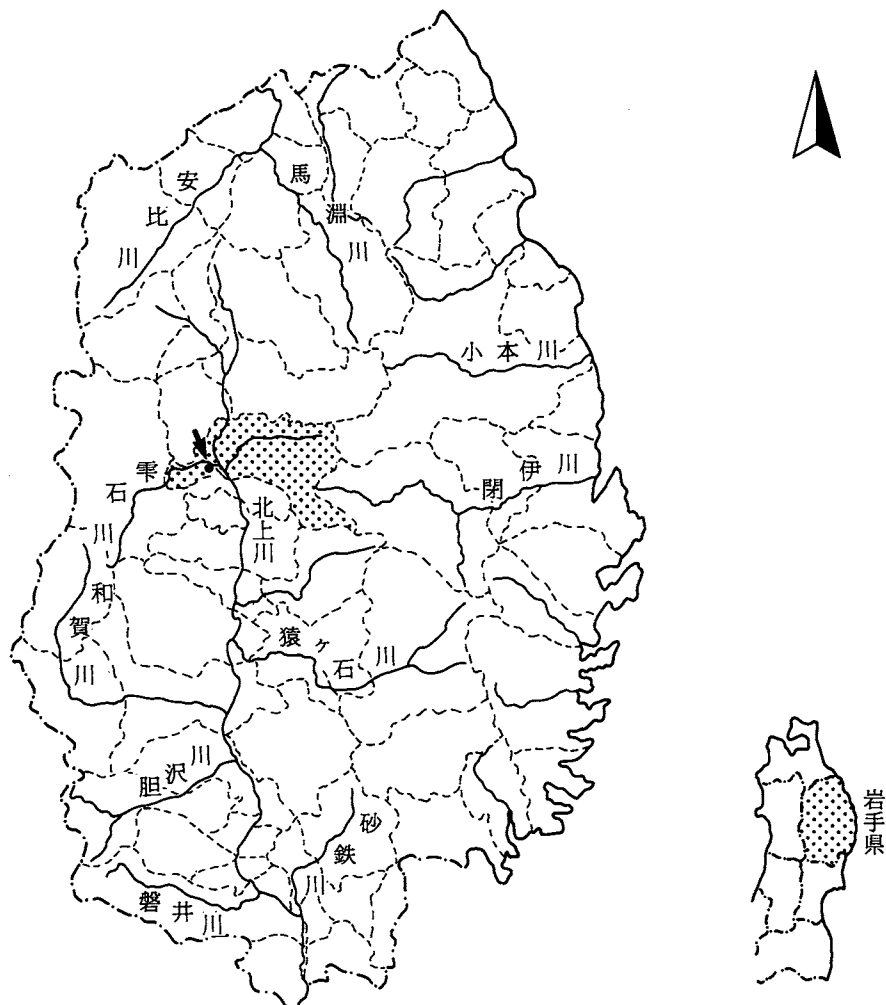
## I 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市がきたるべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年までの15年間に事業予定期間とし、面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施される事となった。

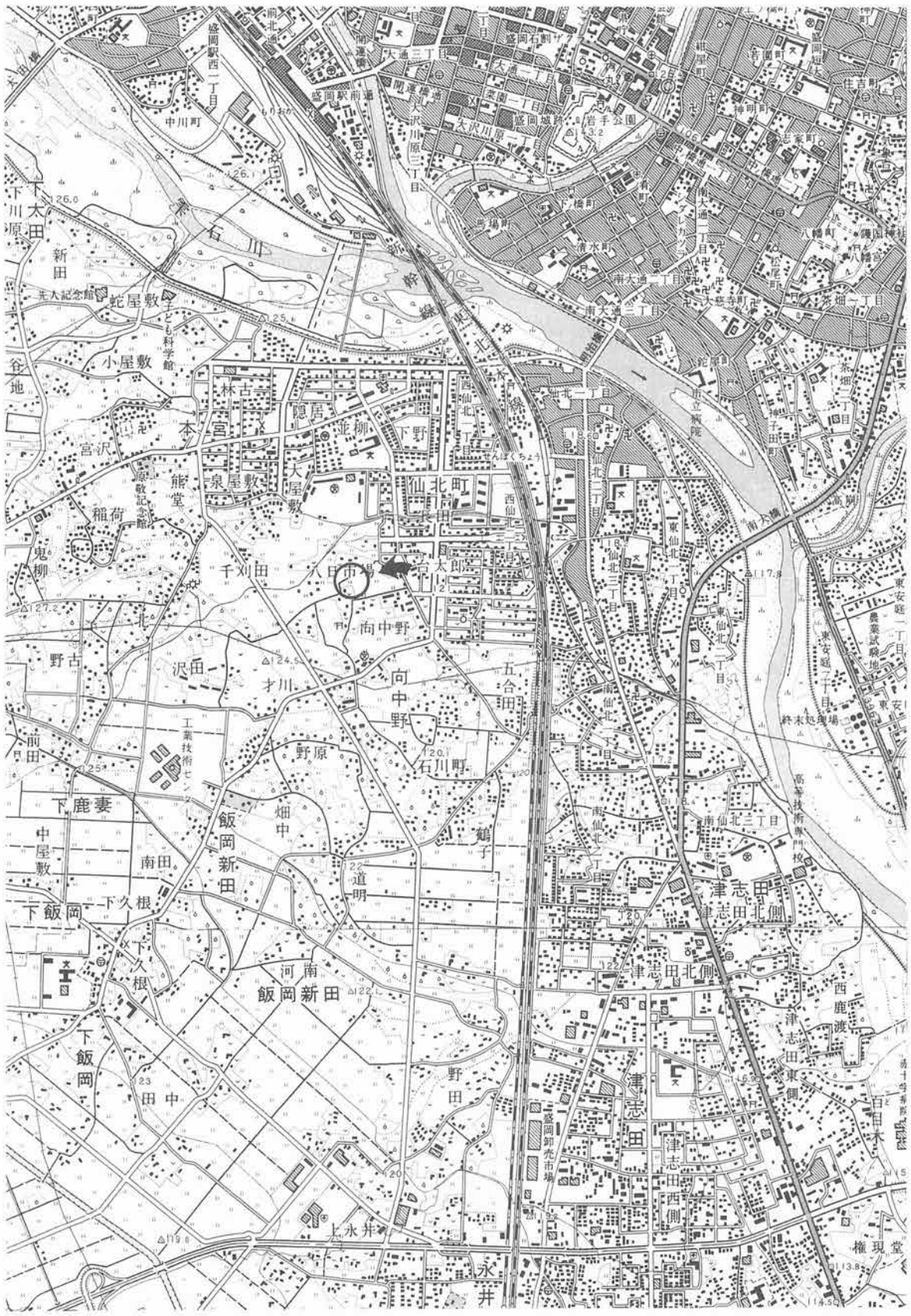
この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱いに付いても協議を重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は(財)岩手県文化振興事業団の受託事業とする事となった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果平成10年の事業として確定した。これを受けて、平成10年4月1日に(財)岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し発掘調査を実施する事となった。台太郎遺跡の第18次調査は平成10年4月15日に開始され、同年11月24日に終了した。



第1図 岩手県図に見る遺跡の位置





1 : 25,000 盛岡・矢幅

第2図 遺跡の位置図

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

台太郎遺跡が所在する盛岡市は、岩手県の中央部に位置している。遺跡は第2図に示すようにJR東北本線仙北町駅の南西側約900mにあり、雫石川右岸に形成された沖積段丘上に立地している。国土地理院発行の2万5千分の地形図「盛岡」NJ-54-13-14-2（盛岡新庄14号-2）の図幅に含まれ、北緯39度40分47秒、東経141度8分40秒付近にあたる。標高は120.90～121.90mで、現状は水田及び畑地である。

盛岡市は、近世以降南部氏の城下町として発展をとげ、現在岩手県の県庁所在地である。東側は下閉伊郡岩泉町・川井村、西側が岩手郡雫石町、南側が紫波郡紫波町・矢巾町、稗貫郡大迫町、北側が岩手郡滝沢村・玉山村の5町3村と隣接している。総面積は489.15km<sup>2</sup>、人口が28万7千人（平成12年）を有する北東北における中核都市である。

### 2. 遺跡周辺の地形と地質

北上平野の北端に位置する盛岡市は、東側の北上山地から中津川が、西側の奥羽脊梁山脈から雫石川が市の中央を南流する北上川と合流している。南東側には北上山地の最高峰である早池峰山（標高1913.50m）が、北西側に「南部片富士」と呼ばれる岩手山（標高2040.50m）が裾野を東側に広げ、北東側に姫神山（標高1124.50m）が望まれる。

北上川は県北部の岩手町御堂観音境内にその源を発し、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ延長243km、流域面積10.720km<sup>2</sup>の東北地方第一の河川である。この流域は盛岡市以北を上流域、盛岡から前沢町間が中流域、前沢町以南を下流域に区分している。盛岡市は中流域の上部にあたる。

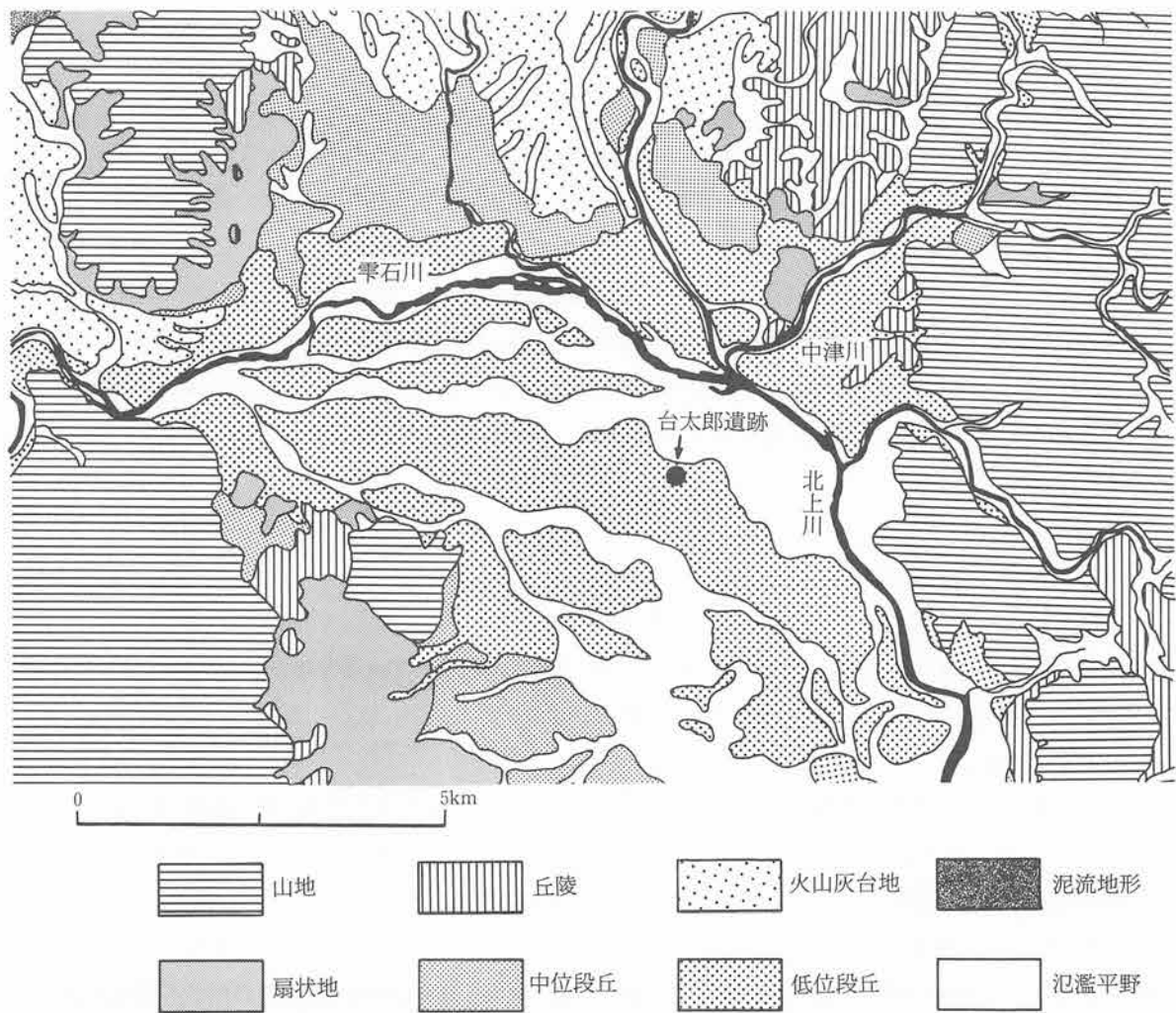
中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いによって対照的な様相を呈している。新第三系および火山岩類を主体とする奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給し、大小の扇状地が複合する広い平野部を西岸に作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって解析されて段丘化している。これに対して老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山地に続く丘陵縁辺部に小規模な段丘と沖積地が見られるだけである。

北上川流域における地形の研究は、中川久夫・ほか（1963）の業績によるのが大きい。中流域上部の盛岡～花巻間の段丘は、古い順に①石鳥谷段丘（高位）、②二枚橋段丘（中位）、③花巻段丘（低位）、④都南段丘（低位）に分類されている。低位段丘は細分され、花巻段丘は西部後背山地東麓から東側に発達している。遺跡が載る都南段丘は、花巻段丘の外方とこれを刻む河谷に沿って見られ、一般に河床面との比高が小さくその境界が不明瞭になる部分が多い。

本遺跡が立地する都南段丘の周辺地域には、雫石川の旧河道がいく条も見られ河道変遷が著しいことを示している。

### 3. 基本層序

調査区域内の現状は水田と畑地等で占められており、ほぼ平坦である。耕地整備による造成工事が行われ、旧地表面の改変が著しい箇所も多く、表土下位の地層は一様ではない。第4図は東側調査区の南側1B・C区と北側調査区-1-A区で観察された土層断面の模式図である。層序は上位からI層～V層に大別される。各時代の主要な遺構は、I・II層を除去したIII層からIV層上面にかけて発見されている。



第3図 遺跡周辺の地形分類図

I層：黒褐色～暗褐色土で、a・bの2層に細分される。

a層：黒褐色土 (10 YR3/2) 現在の表土層で休耕

田および畑地の耕作土である。層厚は10～40 cm。

b層：暗褐色粘土質土 (10 YR3/3) 全体に強く締

まっている。旧水田の堆積土で層厚は2～5 cm。

東側調査区1 B・C区の一部に見られる。

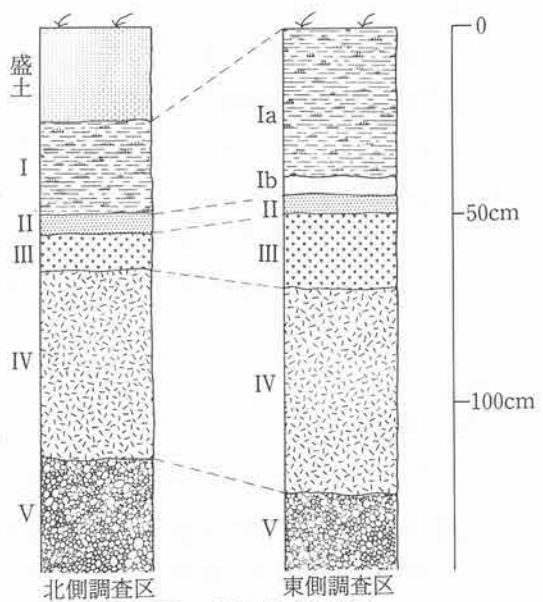
II層：褐色粘土 (10 YR4/4～4/6) で、層厚は5 cm前後。

旧水田面の床土で、下部には赤褐色の水酸化鉄の集積が著しい。また、北側調査区では下位に黒褐色粘土 (10 YR2/2) の薄い堆積が見られる。

III層：黒褐色土シルト質土 (10 YR2/2～3/2) 層厚は5

～20 cm。褐色土と黒褐色土の漸移層である。

IV層：褐色砂質シルト (10 YR3/4～4/4) 層厚は10～60



第4図 基本土層柱状図

cm前後。全体に堅く締まり、粘性がある。層厚は地点によって異なっている。

V層：段丘の基盤をなす砂礫層（10 YR4/6）で、層厚は確認していない。東側調査区南側の1A・B区ではIV層を挟まないで、III層中からの堆積が見られる。砂や礫の精粗により細分可能である。下部は径10～30cm大の礫層で構成されている。

#### 4. 周辺の遺跡

盛岡市内における遺跡は、岩手県遺跡台帳平成7年度によれば、521箇所余が登録されている。第5図は台太郎遺跡周辺の主な遺跡の分布を、雫石川右岸を中心に図示したものである。これらの遺跡分布状況を見ると、雫石川左岸と右岸では相対的な様相を示している。

左岸の台地上には、大館遺跡群をはじめとする縄文時代の集落遺跡が数多く分布している。それに対し右岸の低位段丘面上には、縄文時代の遺構は陥し穴状遺構が散在する程度となり、僅かに本宮熊堂A遺跡から縄文時代晩期中の竪穴住居跡が1棟発見されたにすぎない。しかし、古代の遺跡は多く八掛遺跡などの8世紀代の集落跡や、太田蝦夷森古墳群、延暦22(803)年に造営された古代城柵である志波城や林崎遺跡などの集落跡も数多く分布している。このような遺跡の分布域の相違は立地する地形面と大きく係わるものと考えられる。以下は近年周辺で調査された志波城跡、小幅遺跡、大宮北遺跡、本宮熊堂A遺跡、本宮熊堂B遺跡、台太郎遺跡、矢盛遺跡の概要である。

##### (14) 志波城跡

本遺跡の北西約2kmに位置する太田八丁遺跡は、昭和51・52年に東北縦貫自動車道建設に伴う調査が行われた。その後盛岡市教育委員会による範囲確認調査を経て、所在地が不明であった古代城柵『志波城跡』と認定された。昭和55年度から59年度に亘る5カ年計画による発掘調査によって、陸奥の国最北端の城柵跡としての独自性が明らかになるにいたり、昭和59年に国指定史跡となった。

発掘調査は昭和55年から毎年継続して行われており、平成11年までに第85次調査を数えている。平成5年度からは史跡保存整備事業も着手され、櫓および築地塀の復元工事が行われている。

##### (21) 小幅遺跡

遺跡は志波城跡の東側約1kmに位置している。雫石川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は126m前後である。平成5年に盛岡南新都市計画整備事業（以下は盛南開発事業）に伴う第1次調査（試掘）が行われ、翌年の平成6年に第2次調査が実施された。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡5棟・掘立柱建物跡1棟・溝跡3条・炭窯3基、近世の民家1棟等が検出されている。

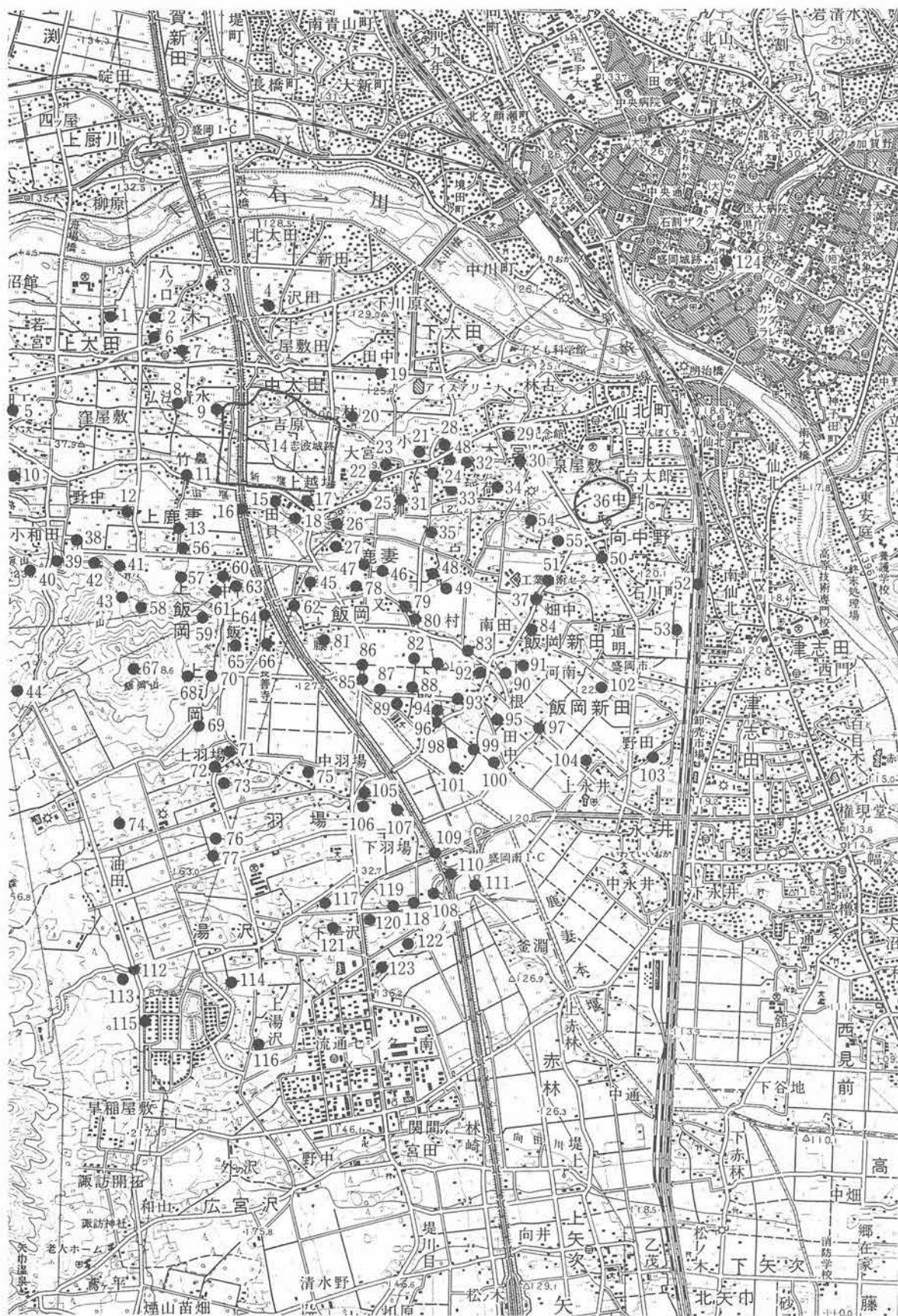
平成7年の第4次調査では、平安時代を中心に中世～近世の遺構と遺物が出土している。遺構は平安時代の竪穴住居跡10棟・掘立柱建物跡4棟・土坑7基・溝跡1基・円形周溝1基、中世の竪穴住居跡2棟、近世以降の竪穴状遺構12棟・溝跡11条・井戸跡2基である。

第5・7次調査は盛岡西バイパス関連に伴い、平成7年に第5次調査、平成8年に第7次調査が行われた。遺構は平安時代の掘立柱建物跡1棟・竪穴状遺構1棟・溝跡3条・土坑6基・道路状遺構1基、近世～近代の掘立柱建物跡2棟（17世紀前葉～19世紀）、竪穴状遺構2棟（19世紀前半以降）、溝跡2条、土坑1基等が検出されている。主な出土遺物は土師器（坏・高台坏・皿形・甕）、須恵器（坏・甕・壺）、鉄製品（刀子・雁又鎌・鎌）、古銭（寛永通寶・朝鮮通寶）、（肥前・古瀬戸・瀬戸・美濃・大堀相馬）、銅製品（和鏡）、木製品（漆器碗・曲物）等である。

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時代 / 備考	No	遺跡名	種別	時代 / 備考
1	細田	散布地	平安 / 土師器	63	高館	散布地	縄文 / 縄文土器(中期)・石器
2	松ノ木	集落跡	平安 / 土師器	64	大柳 I	集落跡	古代 / 土師器・須恵器
3	ハツ口	散布地	古代 / 土師器 / 住居跡	65	大柳 II	散布地	古代? / 土師器
4	八卦	集落跡	古代 / 土師器 / 住居跡 / 土坑	66	館野前	散布地	縄文 / 縄文土器(後期)
5	太田蝦夷森古墳群	古墳	奈良 / 土師器 / 刀・玉 / 和同開珎	67	飯岡山館	城館跡	中世
6	館	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡 / 城館跡 / 堀	68	飯岡赤坂	散布地	古代
7	上野屋敷	散布地	古代 / 土師器	69	いたこ塚	祭祀跡	近世
8	畑中	集落跡	古代 / 土師器	70	赤坂 II	散布地	平安? / 土師器
9	小沼	集落跡	平安 / 土師器・緑釉陶器 / 住居跡	71	羽場館	城館跡	中世 / 空堀
10	一本木	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡	72	羽場百目木	散布地	縄文 / 縄文土器(中期)
11	五兵衛新田	集落跡	古代 / 土師器	73	砂子塚	散布地	古代 / 小塚
12	天沼	集落跡	古代 / 土師器	74	アイノ野	散布地	縄文 / 縄文土器(晩期)
13	竹鼻	集落跡	古代 / 土師器	75	因幡	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器
14	志波城	城柵跡	平安 / 土師器 / 掘立柱建物跡 / 門跡	76	木節	集落跡	平安
15	田貝	集落跡	古代 / 土師器 / 住居跡	77	福千代	集落跡	奈良
16	竹花前	集落跡	平安 / 土師器・緑釉陶器 / 住居跡	78	二又	散布地	古代 / 土師器・須恵器
17	新堰端	城柵跡	縄文・古代 / 縄文土器(晩)・土師器	79	内村	集落跡	平安 / 土師器・常滑
18	石仏	集落跡	古代 / 土師器	80	中屋敷	散布地	古代 / 土師器
19	田中	散布地	平安 / 土師器	81	藤島 I	集落跡	縄文・古代 / 縄文土器・土師器
20	林崎	集落跡	平安 / 土器 / 掘立柱建物跡	82	深淵 I	集落跡	平安 / 住居跡
21	小幡	集落跡	平安 / 土器 / 住居跡 / 掘立柱建物跡	83	高屋敷	散布地	古代 / 住居跡
22	大宮	集落跡	古代・中世 / 土師器 / 住居跡	84	法領権現塚	祭祀跡	時代不明
23	大宮北	散布地	平安 / 土師器 / 住居跡 / 土坑 / 溝跡	85	飯岡林崎 II	集落跡	古代 / 土師器・須恵器・硯 / 住居跡
24	鬼柳 A	集落跡	古代 / 土師器	86	飯岡林崎 I	集落跡	平安 / 土師器
25	小林	集落跡	古代 / 土師器	87	上新田	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡
26	水門	集落跡	古代 / 土師器	88	深淵 II	集落跡	平安 / 住居跡
27	上越場 A	集落跡	古代 / 土師器	89	上新田 I	集落跡	平安 / 住居跡 / 上新田と重複
28	宮沢	散布地	平安時代 / 溝状遺構	90	下久根 I	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器
29	本宮熊堂 A	散布地	縄文 / 縄文土器(晩期) / 住居跡等	91	石持	散布地	古代 / 土師器・須恵器
30	本宮熊堂 B	集落跡	奈良~近世 / 土師器 / 住居跡 / 土坑	92	高屋敷 II	散布地	平安 / 土師器・須恵器
31	鬼柳 B	集落跡	古代 / 土師器	93	西	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡
32	稲荷	集落跡	平安時代 / 土師器・須恵器 / 溝跡	94	西田	集落跡	平安 / 須恵器
33	鬼柳 C	集落跡	古代 / 土師器	95	下久根 II	散布地	縄文・古代 / 縄文土器
34	野古 A	集落跡	平安? / 縄文土器・石器 / 溝跡 / 土坑	96	熊堂 I	集落跡	縄文・古代 / 縄文土器・土師器
35	野古 B	散布地	古代 / 土師器	97	松島	集落跡	古代 / 土師器・須恵器
36	矢太郎	集落跡	奈良~近世 / 土師器 / 住居跡 / 溝跡	98	熊堂 III	集落跡	平安 / 土師器・須恵器 / 住居跡
37	矢盛	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡 / 土坑 / 溝跡	99	熊堂 II	集落跡	平安 / 土師器・須恵器 / 住居跡
38	蟹沢下	散布地	古代 / 土師器	100	田中	集落跡	平安 / 土師器・須恵器・石器
39	二ツ沢	散布地	縄文・古代 / 土器(中・後) / 土師器	101	南谷地	集落跡	平安 / 土師器・須恵器 / 住居跡
40	小和田館	城柵跡	中世 / 堀 / 郭	102	夕寛	散布地	古代 / 土師器
41	蟹沢	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	103	横屋	集落跡	古代 / 土師器・須恵器
42	へび堂	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	104	葛本	散布地	古代 / 土師器・石器
43	オミ坂	散布地	縄文・平安 / 縄文土器・土師器	105	新井田 I	散布地	古代 / 土師器・須恵器
44	大ヶ森	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	106	新井田 II	散布地	古代 / 土師器・須恵器
45	辻屋敷	集落跡	古代 / 土師器	107	新田	集落跡	平安 / 土師器・須恵器
46	西田 A	集落跡	古代 / 土師器	108	間渡 I	散布地	古代 / 土師器
47	上越場 B	集落跡	古代 / 土師器	109	下羽場	集落跡	平安 / 土師器・須恵器・緑釉陶器
48	西田 B	集落跡	古代 / 土師器・須恵器	110	下湯沢	散布地	古代 / 土師器・須恵器
49	前田	集落跡	古代 / 土師器	111	大島	散布地	古代 / 土師器・須恵器
50	向中野館	城柵跡	中世 / 堀 / 土塁	112	湯壺	散布地	縄文 / 土器(晩期)・石器
51	細谷地	集落跡	古代 / 土師器	113	湯壺経塚	経塚	中世 / 常滑
52	南仙北	集落跡	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	114	後島	散布地	縄文 / 縄文土器・石器
53	向中野幅	集落跡	古代 / 土師器	115	湯沢	散布地	縄文 / 縄文土器(前・中・後期)
54	飯岡沢田	集落跡	古代 / 住居跡	116	島	墳墓	時代不明 / 小塚
55	飯岡才川	集落跡	古代	117	小田 I	散布地	古代 / 土師器
56	中村	散布地	平安 / 土師器・須恵器	118	間渡 II	散布地	古代 / 土師器・須恵器
57	月見山	散布地	縄文・古代 / 土器	119	間渡 III	散布地	平安 / 土師器・須恵器
58	山中	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	120	森子	散布地	古代 / 土師器
59	飯岡館	城柵跡	中世・縄文 / 空堀 / 縄文土器(中期)	121	小田 II	散布地	平安 / 土師器
60	堤	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	122	湯沢大館	城館跡	古代~中世 / 土師器・須恵器
61	高館古墳群	古墳	奈良~平安 / 土師器・蕨手刀	123	猪沢	散布地	古代 / 土師器
62	藤島 II	散布地	平安? / 土師器	124	盛岡城	城館跡	中世 / 近世 / 瓦・陶磁器 / その他





第5図 周辺の遺跡分布図

1:50,000

### (23)大宮北遺跡

遺跡は志波城跡の東側約1kmの河岸段丘上に位置している。昭和59年に第1次調査が行われ、平安時代の土坑8基と柱穴および柱穴状ピットが4基検出された。遺構の年代は出土した土師器から、10世紀に比定されている。平成8年は盛南開発事業に伴う調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構2棟、土坑6基、溝跡9条等が検出された。内1条の溝跡からは、十和田a降下火山灰(9世紀末～10世紀前半)の堆積が確認されている。

### (29)本宮熊堂A遺跡

遺跡はJR東北本線仙北町駅の西側1.5kmに位置し、雫石川右岸の標高123m前後の河岸段丘上に立地する。平成6年に盛南開発事業に伴う第1・2次調査(試掘)、平成8年に第3次調査が行われた。検出された主な遺構は縄文時代晩期を中心とする竪穴住居跡1棟、焼土遺構6基(縄文晩期2基)、土坑20基(縄文晩期13基・不明7基)、土器埋設2基(縄文時代晩期)である。出土遺物は縄文時代晩期の土器、石錘、石匙、石篋、石鏃、尖頭器、石斧、凹石、独鈷石等がある。

### (30)本宮熊堂B遺跡

遺跡はJR東北本線仙北町駅の西方約1.7kmに位置し、雫石川右岸の標高124m前後の河岸段丘上に立地している。平成5年に盛南開発事業に伴う第1次調査が行われ、奈良時代の竪穴住居跡2棟・土坑2基、平安時代の竪穴住居跡7棟・土坑12基・溝跡4条等が検出されている。遺物は土師器(坏・甕・瓶・鉢)、須恵器(坏・甕)、鉄製品(鋤先・紡錘車・釘・刀子)、土製勾玉、土玉等が出土している。平安時代の集落跡は、遺物から9世紀後半～10世紀前半に比定されている。

平成9年に第4・5次調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居跡14棟をはじめとし、平安時代の溝跡4条・土坑1基、中世以降の井戸跡1基等が検出された。出土遺物は土師器(坏・高台坏・甕)、須恵器(坏・甕・壺)で占められる。集落跡の時期は、8世紀後半～10世紀前半に比定されている。

### (36)台太郎遺跡

昭和60年5月に土地区画整備事業に伴う第1次調査が盛岡市によって行われ、それ以降平成11年まで24次調査を数える。第1～4次調査は竪穴住居跡(奈良時代8棟、平安時代14棟)、掘立柱建物跡2棟(内1棟は2間×2間の総柱建物跡)、溝跡7条、土坑12基が検出されている。平安時代の溝は、上幅が3.6～4.2m、深さが1.2～1.4mの規模で、東南東～西北西方向に長さが50m程が確認されている。

平成9年に盛南開発事業に伴う第15・16次調査が行われた。検出された遺構は、竪穴住居跡65棟(奈良時代10棟、平安時代52棟、中世3棟)、掘立柱建物跡3棟(中世)、竪穴状遺構4棟(近世～近代)、土坑43基(平安時代2基、中世2基、時期不明39基)、堀1条(中世)、橋脚跡4基(中世)、溝跡54条(平安6条、時期不明48条)等である。出土した主な遺物は土師器(坏・高台坏・甕・甑・片口)、須恵器(坏・壺・長頸瓶・甕・大甕・片口)、鉄製品(刀子・鋤先・釘・鎌)、装飾品(勾玉・管玉)、古銭(元豊通寶・寛永通寶)がある。

### (37)矢盛遺跡

遺跡はJR東北本線仙北町駅の南西側約1.6kmに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地する。現状は水田で、標高は124m前後である。平成4年に岩手県工業技術センター建設に伴う調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡3棟、時期不明の土坑1基・溝跡1条が検出されている。出土遺物から集落跡は、10世紀後半～11世紀初めに比定されている。

(高橋)

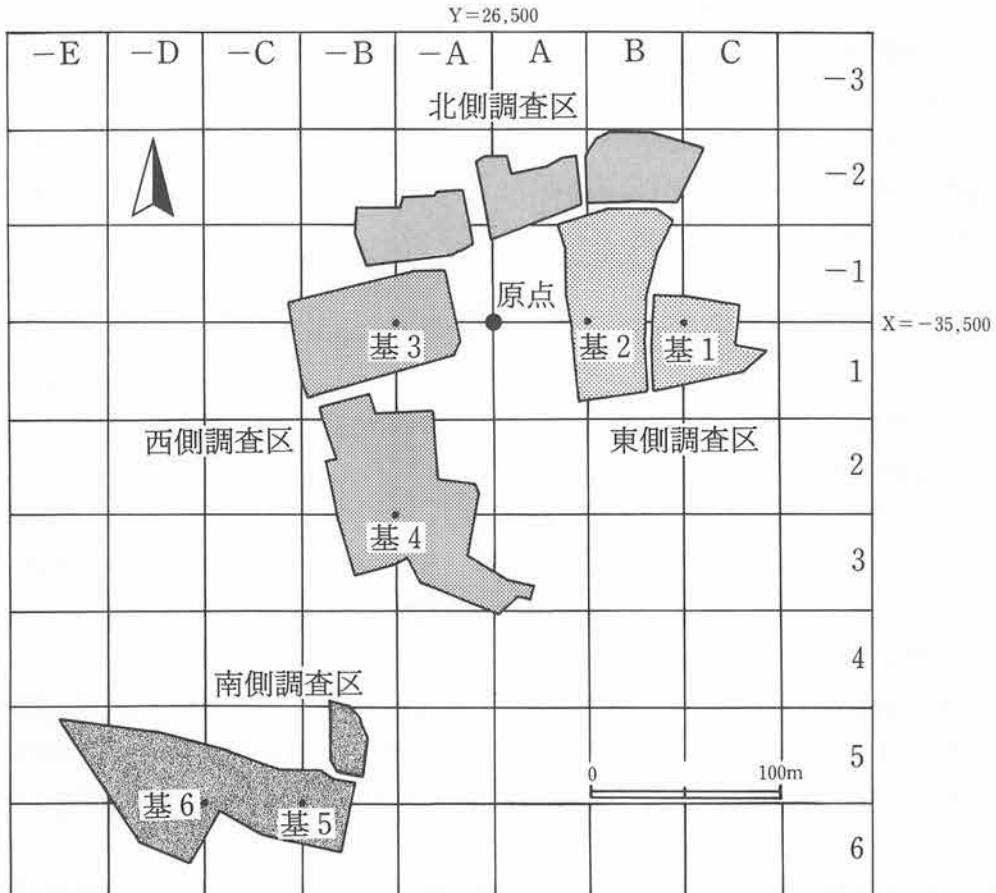
### III 調査の方法と室内整理

#### 1. 野外調査の方法

##### (1) 調査区の区割設定

台太郎遺跡の区割設定にあたっては、盛岡市教育委員会の方法に準じて行っている。台太郎地区全域の調査座標は、平面直角座標第X系の $X = -35,500.000$ 、 $Y = +26,500.000$ が原点である。この座標原点を基点として、遺跡全体を1辺50m×50mの大区画に区割を行い、さらに大区画を2×2mの25小区画に細分している。大区画は原点から東にアルファベットの大文字A～F、西に-A～-E、南北方向には北に-1～-3、南に1～6の数字を付した。また、小区画は西から東にアルファベット小文字a～y、北から南に数字の1～25を与えている。調査区の名称は、大区画と小区画の組合せで1A 01 a - 1 B 25 y というように呼称している。調査区内における各基準点の成果値と杭高（標高）は、次のとおりである。

基準点 1	$X = -35,500.000$ m、	$Y = +26,600.000$ m、	$H = 121.091$ m
基準点 2	$X = -35,500.000$ m、	$Y = +26,550.000$ m、	$H = 121.222$ m
基準点 3	$X = -35,500.000$ m、	$Y = +26,450.000$ m、	$H = 121.720$ m
基準点 4	$X = -35,600.000$ m、	$Y = +26,450.000$ m、	$H = 121.223$ m
基準点 5	$X = -35,750.000$ m、	$Y = +26,400.000$ m、	$H = 121.637$ m
基準点 6	$X = -35,750.000$ m、	$Y = +26,350.000$ m、	$H = 122.090$ m



第6図 グリッド配置図

## (2) 粗掘りと遺構検出

本調査に先立ち、平成7年度に盛岡市教育委員会により台太郎遺跡の全域 33,390 m<sup>2</sup>に対して、幅 2 m の試掘溝（トレンチ）86 本が設定され、5,174 m<sup>2</sup>の試掘調査が実施されている。西側と南側調査区については一部遺構の分布状況がある程度把握されていた。粗掘りは重機（ユンボ）を使用し、その後に人力によって遺構検出を行っている。

## (3) 遺構の命名

検出された遺構の命名については盛岡市教育委員会と同様に、次のとおり行っている。各遺構の番号は、盛岡市第 14 次調査からの通し番号を付した。種別を決めかねた遺構については、全て R Z として扱っている。

竪穴住居跡……R A	掘立柱建物跡……R B	柱穴列……R C	土 坑……R D
竪穴状遺構……R E	炉・焼土遺構……R F	堀・溝跡…R G	井戸跡……R I
その他の遺構…R Z			

## (4) 遺構の精査と実測

検出された遺構は、竪穴住居跡と竪穴状遺構が 4 分法、その他の遺構が 2 分法を原則とし精査を行い、必要に応じて適宜併用した。記録として必要な図面は、精査の各段階において行っている。

竪穴住居跡をはじめとする遺構の平面実測は、従来の簡易遣り方測量で行った。堀と溝跡は平板測量で作成している。各実測図の縮尺は 1/20 を基本とし、焼土と竪穴住居跡のカマド施設の断面図は 1/10、堀と溝跡の平面図は 1/100 である。遺構内の出土遺物は、床面直上のもは必要に応じて番号を付し、写真撮影・図面作成後に取り上げた。

## (5) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、6×7 cm判カメラ 1 台（モノクロ）と 35 mm判カメラ 2 台（モノクロ・リバーサル）を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を必要に応じて行っている。6×7 cm判カメラについては撮影を省略した遺構もある。他にポラロイドカメラ 1 台をメモ的に使用している。また、遺跡全域をセスナ機による空中写真撮影も実施している。

## (6) 広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環としては、10 月 10 日に調査成果を公開する現地説明会を開催している。

## 2. 室内整理の方法

### (1) 作業手順

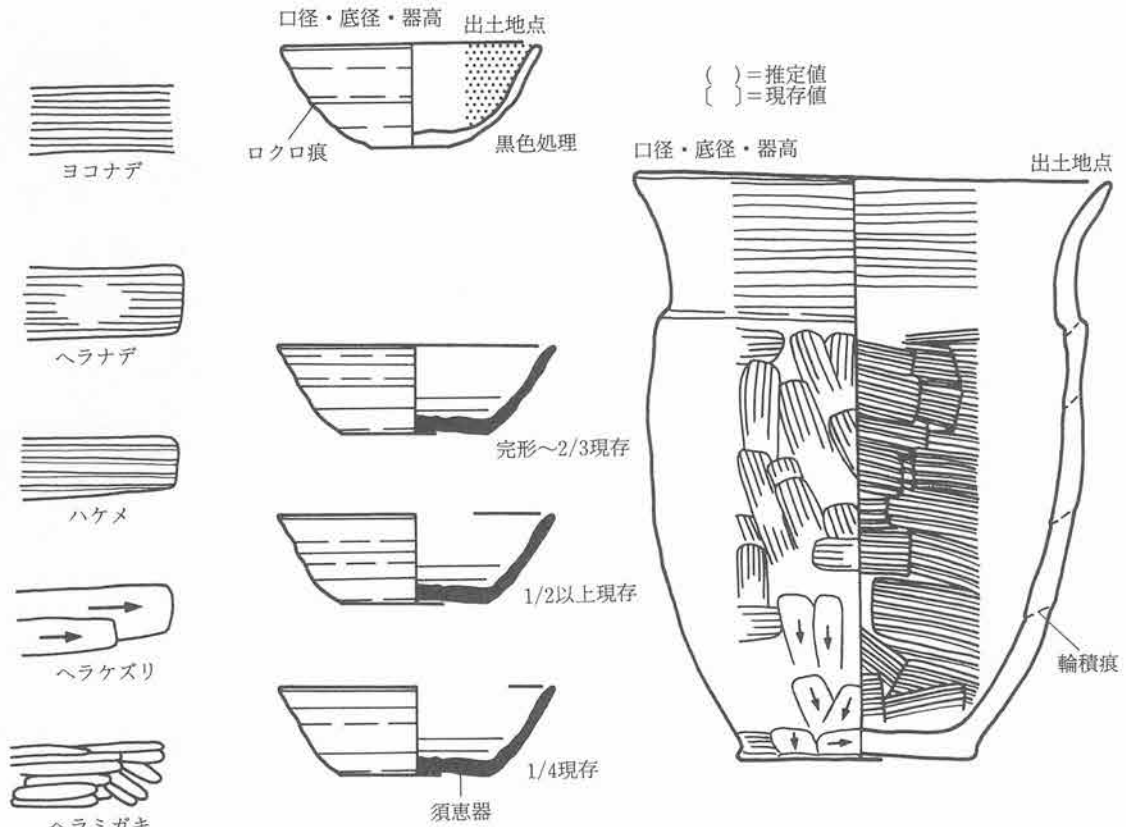
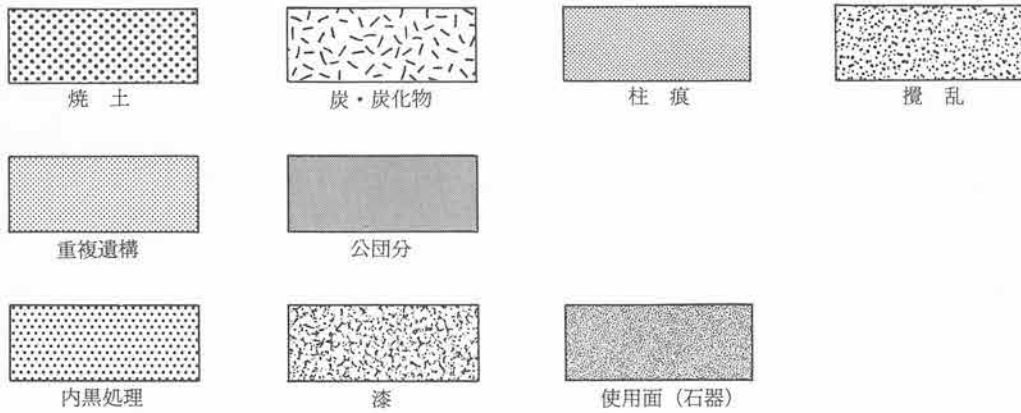
室内整理は現場で残った遺物の水洗・注記から開始し、各遺物ごとの仕分け、遺物の接合復元、遺物の実測、拓本、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、遺構・遺物図版、写真図版の順に作業を進めた。これらの作業と並行して遺物の計測、原稿の執筆、各種の鑑定・分析を行い報告書に掲載した。

### (2) 遺構

各遺構図版は次の縮尺を原則とし、図面はにそれぞれスケール・縮尺率を付している。遺構配置図は調査時に作成した図面を基に、仕上がり 1/600 で掲載した。竪穴住居跡・竪穴状遺構の平面・断面図 1/60・1/120 竪穴住居跡カマドの断面図 1/30、掘立柱建物跡の平面・断面図 1/100、土坑の平面・断面図 1/50、炉跡・カマド状遺構の平面・断面図 1/60、堀の平面図 1/200・1/800・断面図 1/40、溝跡の平面図 1/600・断面図 1/40、円形周溝の平面・断面図 1/50、井戸跡の平面・断面 1/50 等である。図版内の方位は座標北（基準点 1 の真北方向角は 0 度 11 分 51 秒西偏）を示している。

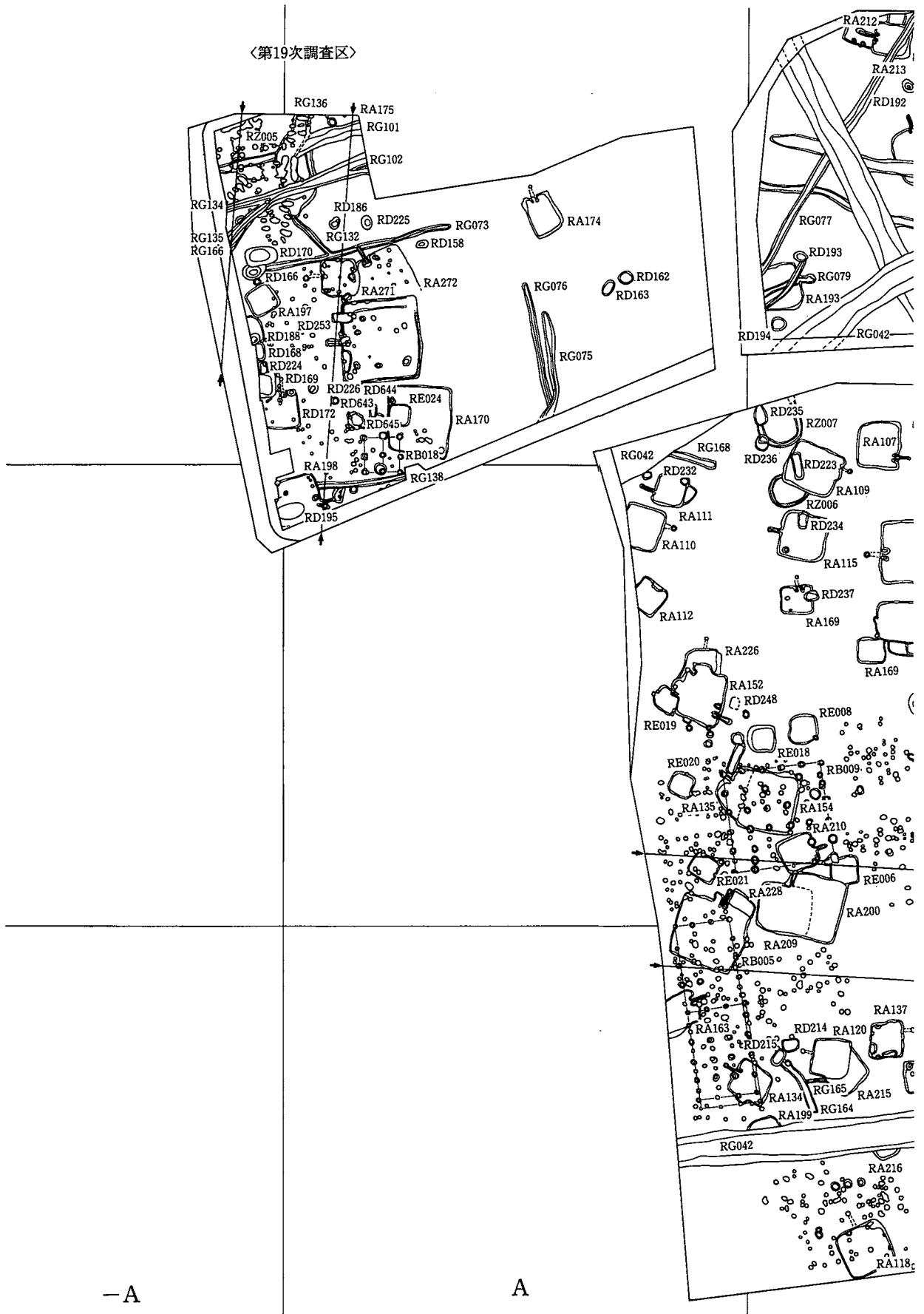
(3) 遺物

土器と陶磁器の実測は原則として、反転実測が可能なものに限って掲載した。土器の現存率は、口縁上部の表現で区別している。また、土器の器面調整は、中軸線の両側の半分を模式的に図化した。掲載遺物図版の縮尺率は小型のガラス玉が原寸、土製品・石製品・鉄製品・木製品が1/2、土器・土器拓影が1/3、須恵器の大甕が1/5等である。土器はP、石はSで図示し、土器の調整技法の表現は、凡例に示すとおりである。

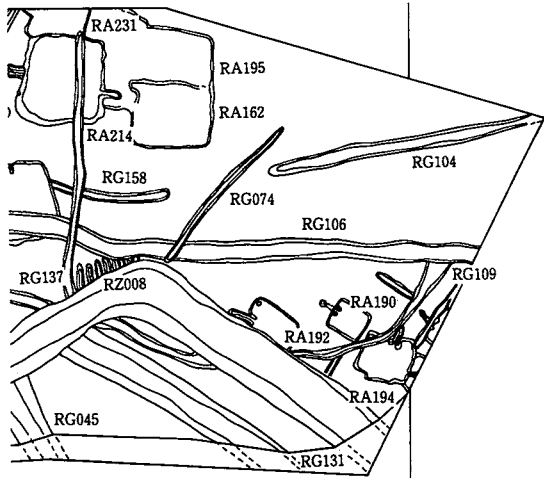


第7図 凡例

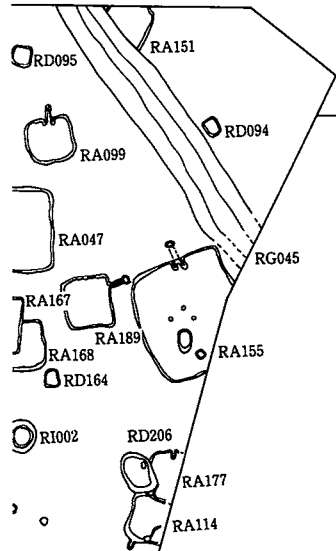




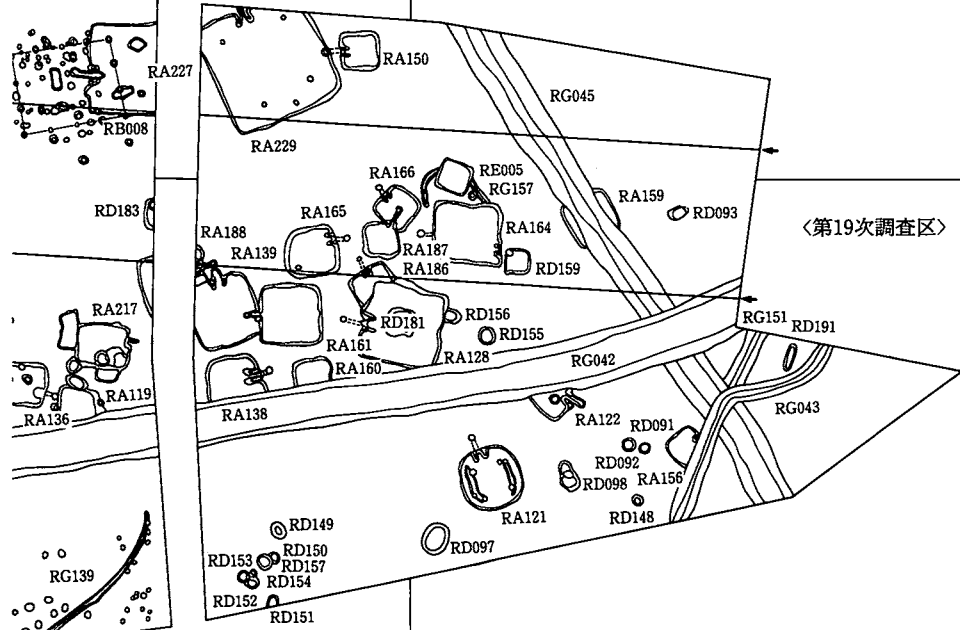
第8図 遺構配置図（東・北側調査区）



-2

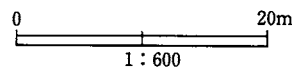


-1



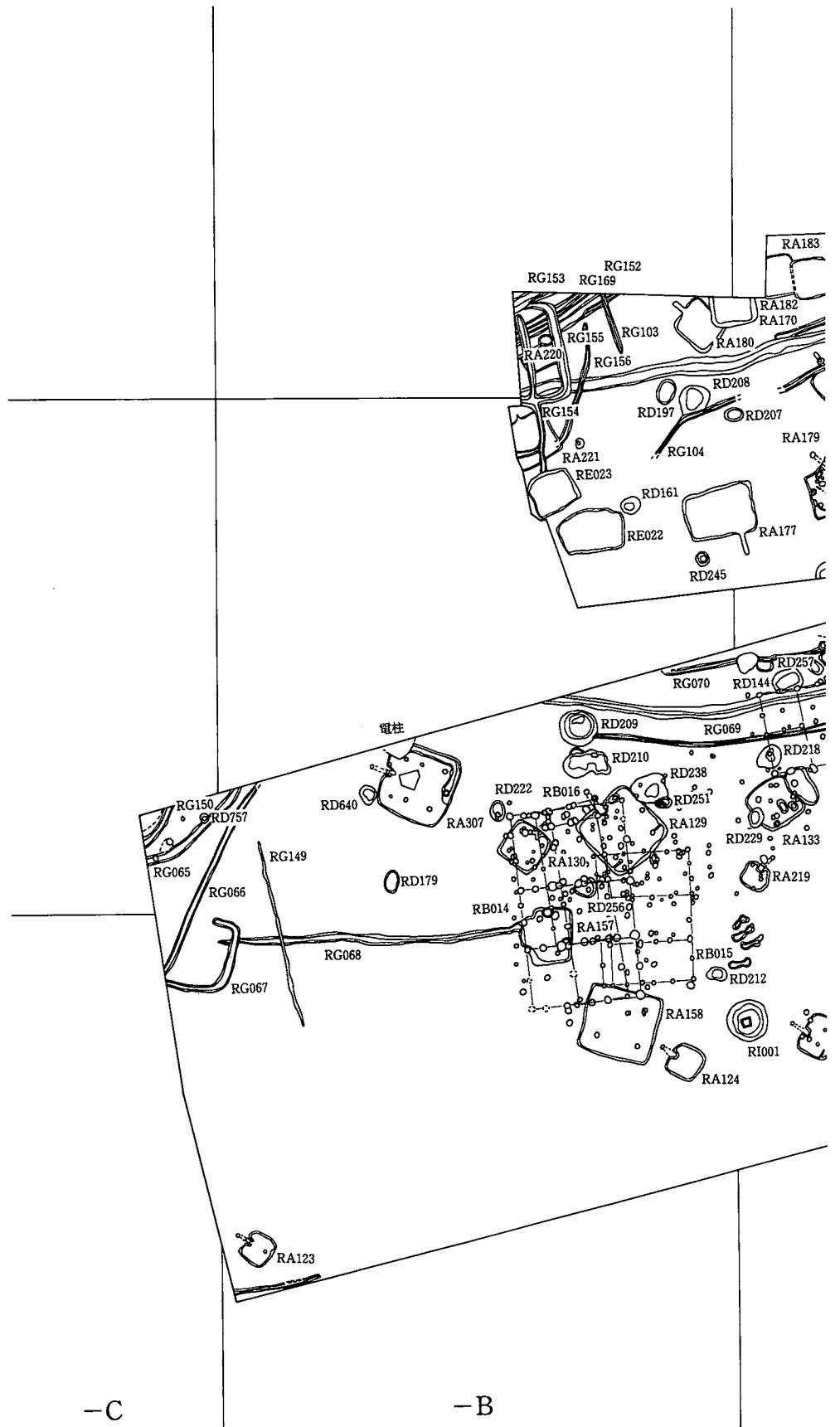
〈第19次調査区〉

1



B

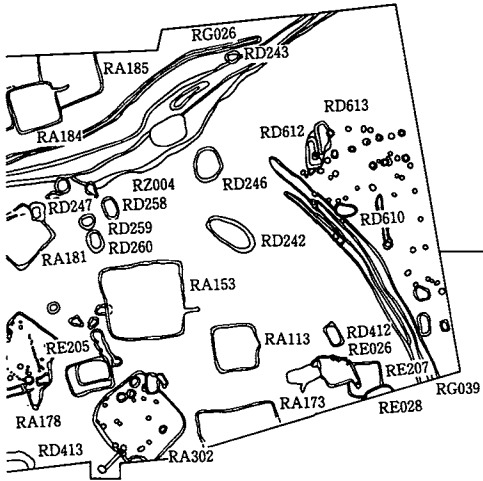
C



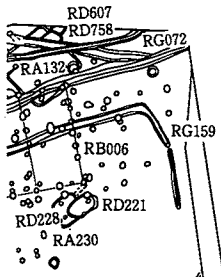
第9図 遺構配置図(北・西側調査区)



-2

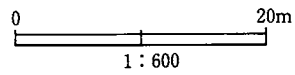


-1



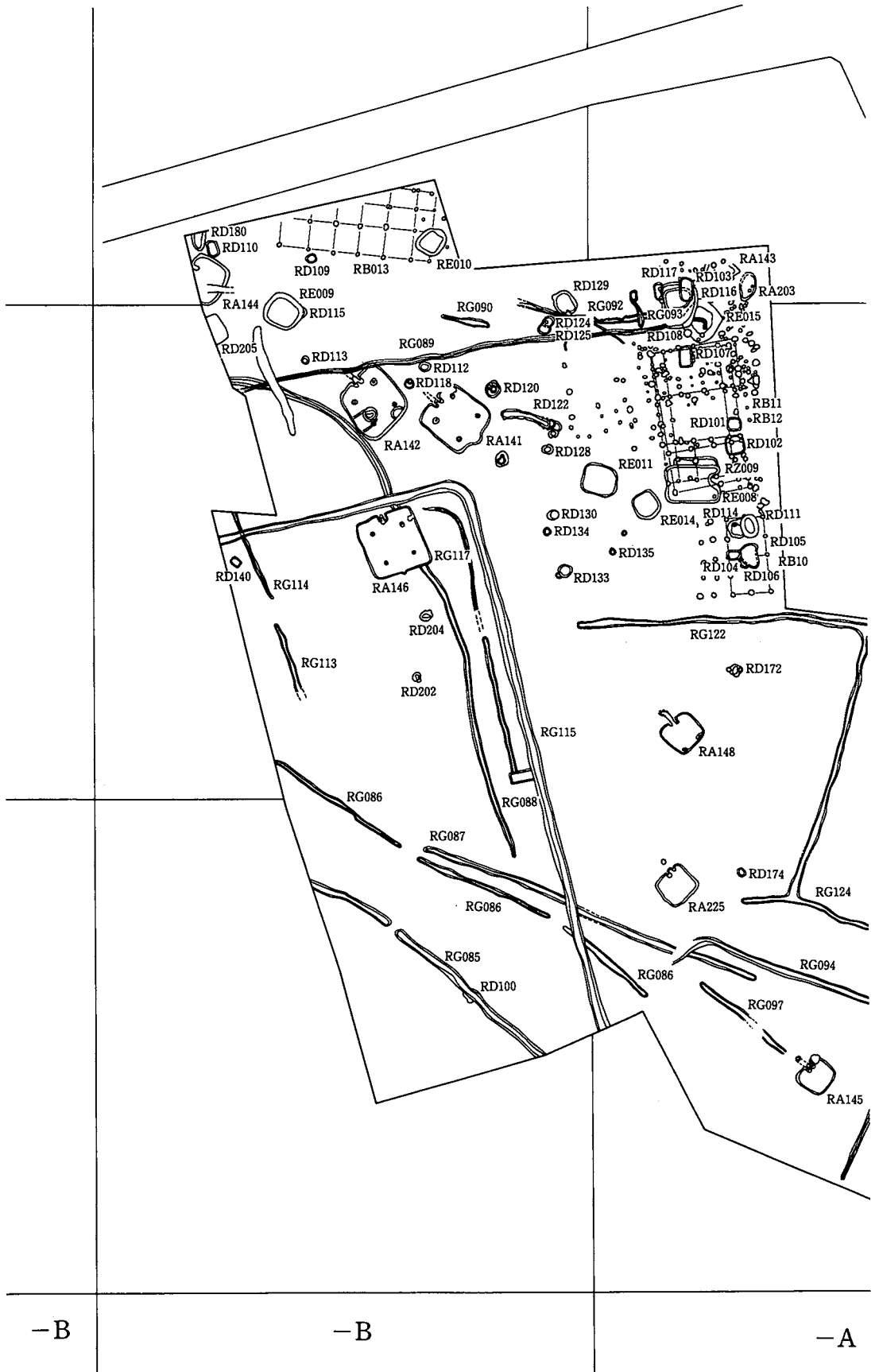
1

RA125

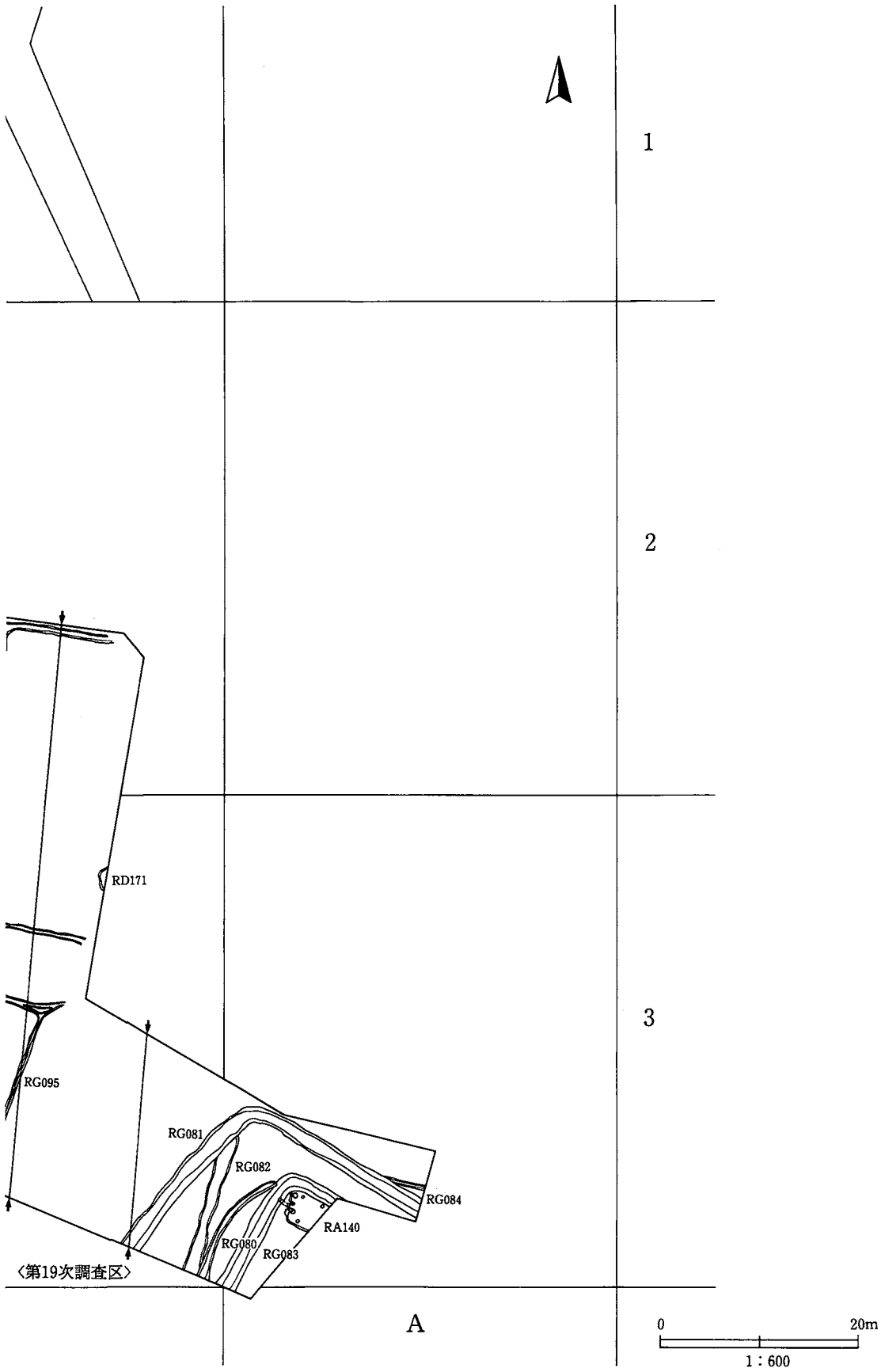


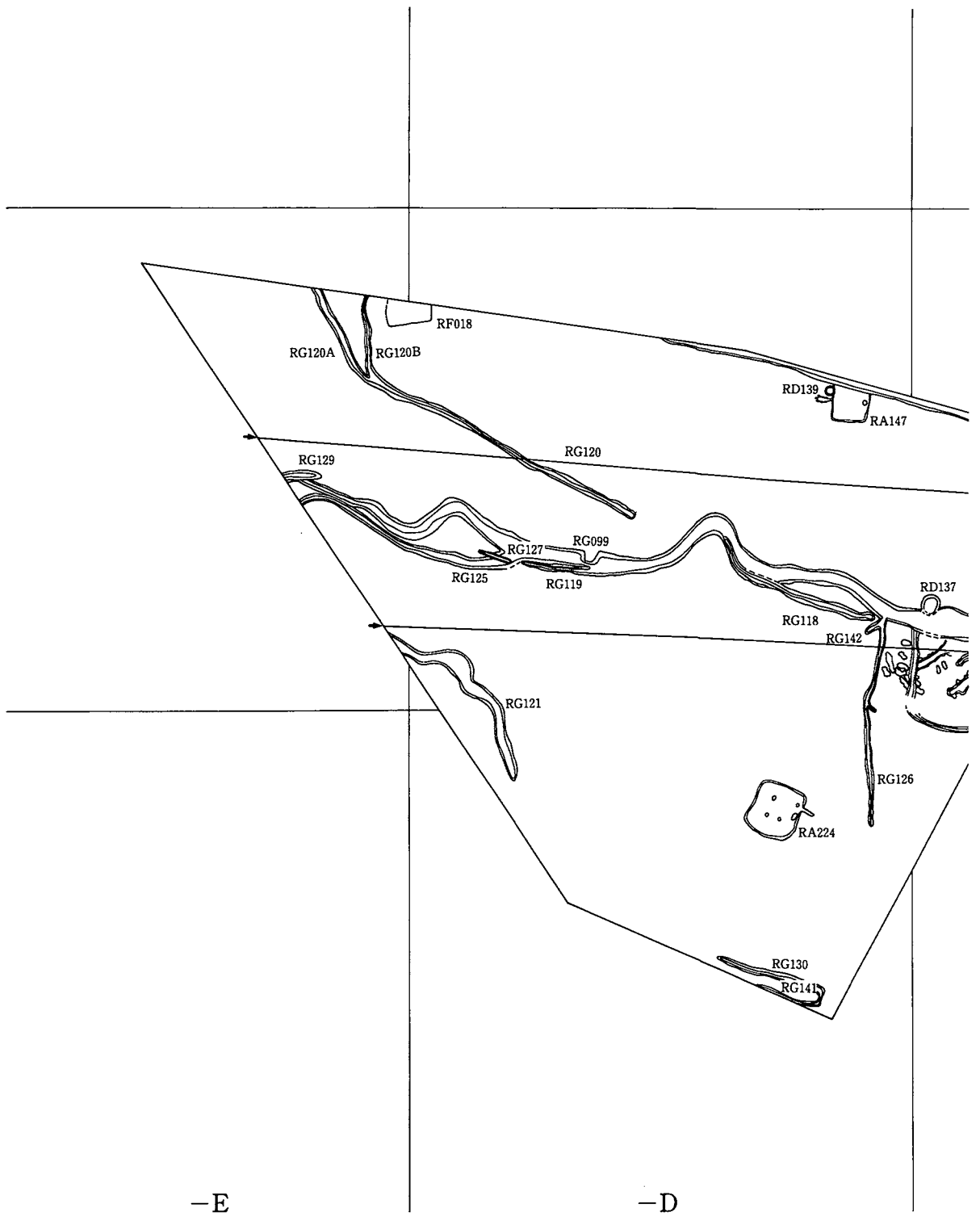
-A

A

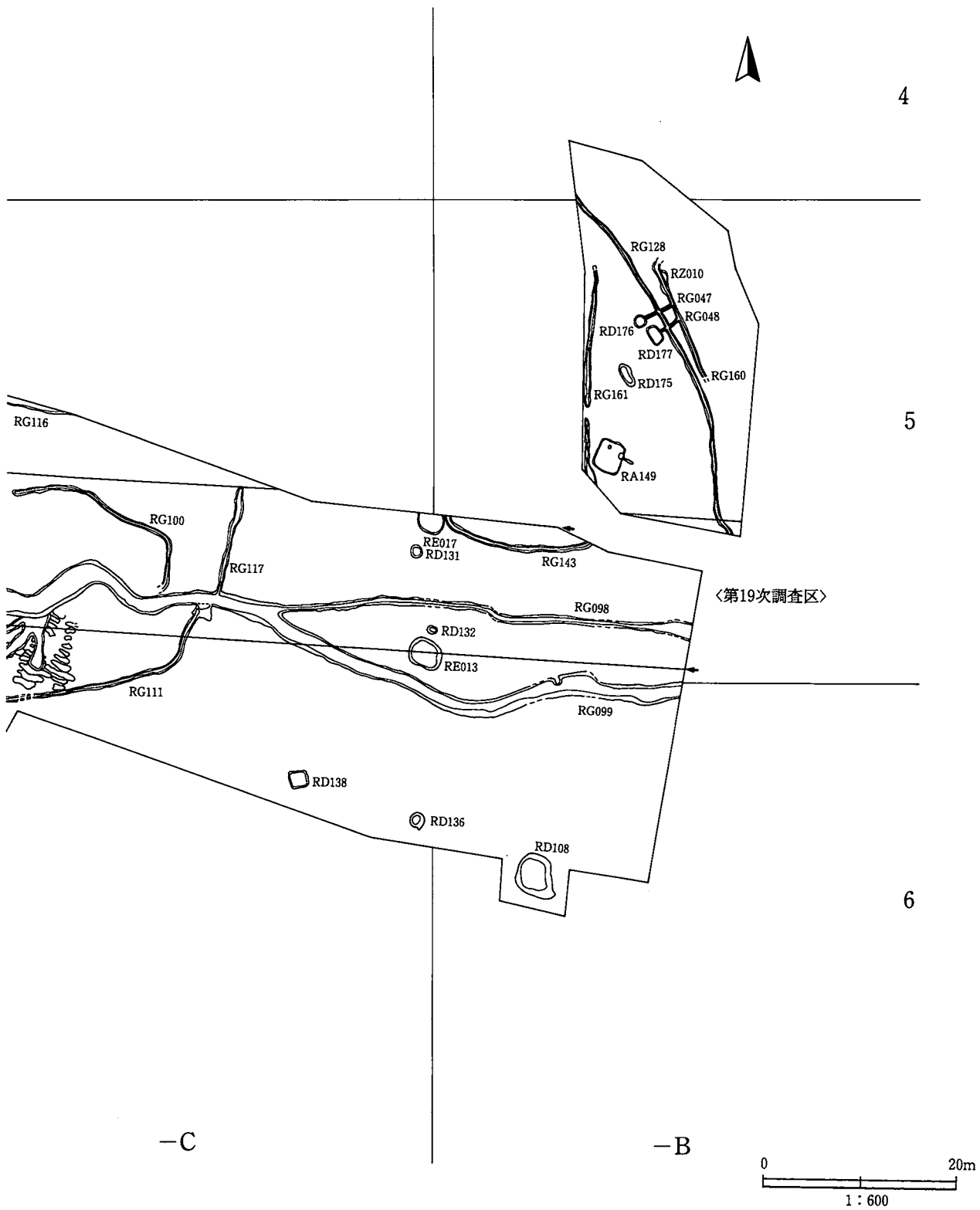


第10図 遺構配置図 (西側調査区)

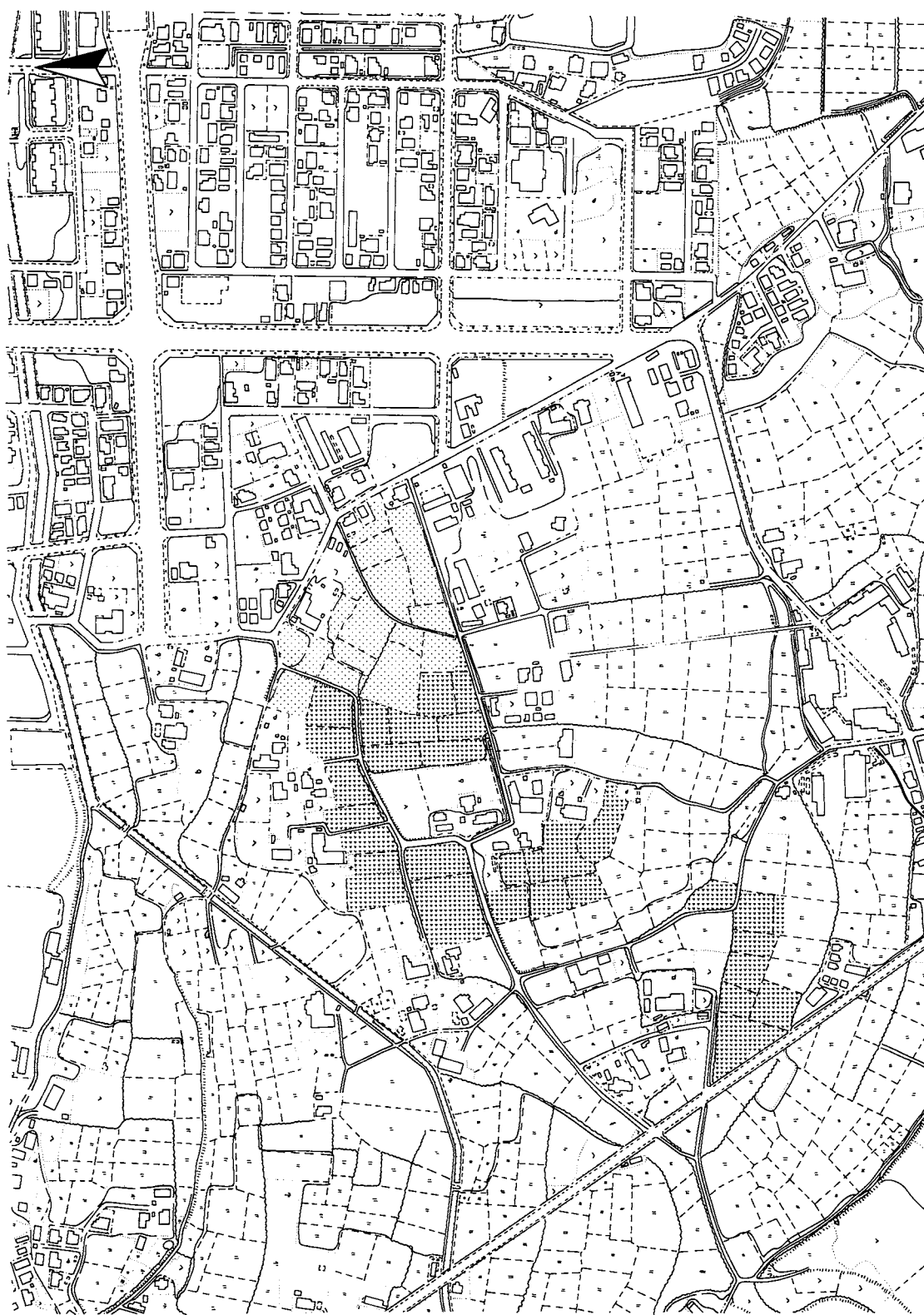




第11図 遺構配置図 (南側調査区)







第15・16次調査区 (平成9年度)    第18・19次調査区 (平成10年度)

0      100      200m

第12図 遺跡周辺の地形図

## IV 検出された遺構と遺物

### 1. 概要

第18次調査で検出された遺構は、古墳時代末～奈良・平安時代中世の竪穴住居跡108棟をはじめとし、中世～近世の掘立柱建物跡13棟、竪穴状遺構19棟、土坑163基、カマド状遺構13基、焼土遺構12基、中世の堀3条、溝跡100条、波板状凹凸遺構3カ所、楕円形周溝2基、井戸跡2基、柱穴状土坑638基、自然の流路5条等である。

出土した遺物の大部分は古墳時代末～奈良・平安時代の土師器と須恵器で占められ、縄文時代に属する土器と石器は僅かである。土器の器種は、坏、高坏、高台坏、甕、球胴甕、大甕、壺、長頸瓶、提瓶、甑、耳皿、片口である。また、特質される遺物としては碧玉製の管玉、コバルトガラス製小玉の装飾品、墨書の坏、線刻された坏、口縁部に山形文様を施した球胴甕がある。生活用具類は土製紡錘車・土錘、刀子・釘・鉄鏃・紡錘車・環状製品・鋤先・鎌等の鉄製品、砥石・磨石の石製品、他に中世の青磁茶碗破片、江戸時代の寛永通寶・キセルが出土している。

### 2. 竪穴住居跡

#### (1) 古墳時代末～奈良時代

古墳時代末～奈良時代の竪穴住居跡は、東側調査区から17棟、北側調査区から6棟、西側調査区から17棟が検出されている。

#### R A 099 竪穴住居跡 (第13・14図、写真図版6・197)

<位置> 東側調査区北寄りの-1~-2B区に亘って位置する。検出はIV層中位で黒褐色土の落ち込みによって確認している。<平面形・規模> 規模は3.58×3.34mで、平面形は隅丸方形を呈している。

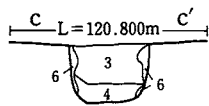
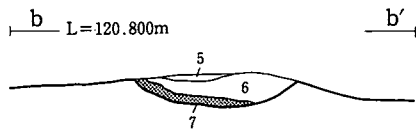
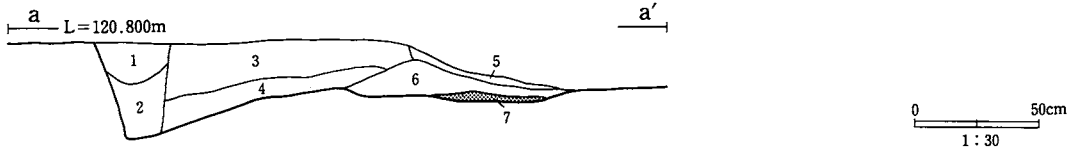
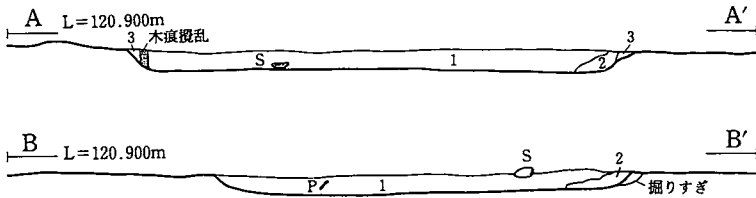
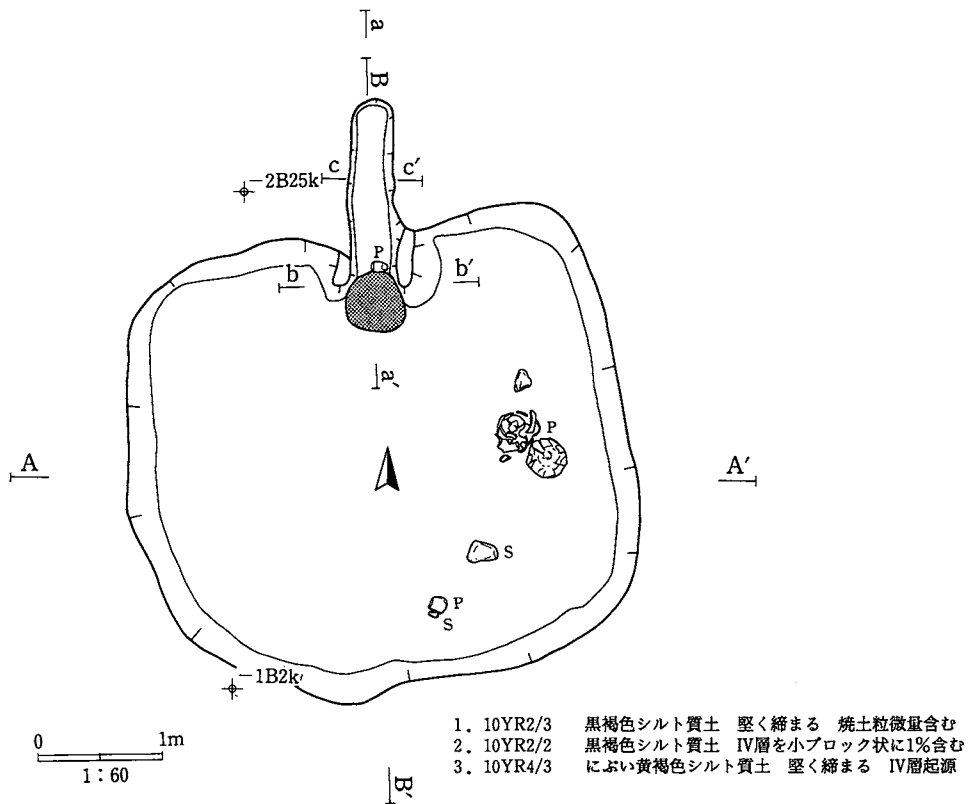
<埋土> 黒褐色砂質シルトを主体とする3層に大別される。1層は焼土粒を含み堅く締まり、2層がブロック状に黄褐色砂質シルトを混入している。<壁・床> 壁の上部は削平されており、床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は東壁17cm、西壁18cm、南壁13cm、北壁17cmを測る。床は平坦で堅く締まっている。貼り床は検出されない。

<柱穴状土坑・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは北壁のほぼ中央部に設置している。本体部は削平され崩壊している事から天井部の構造は不明である。袖部はIV層を削り出して造られているが、下端部だけを現存している。燃焼部は径48×47cm、厚さ4cmの円形気味の焼土が形成されている。煙道部は長さ1.06mを測り、緩やかな下り勾配で煙出し部に続いている。煙道の側壁は焼成を受け一部赤褐色に変化を生じている。煙出し部は削平のために上部構造が不明である。

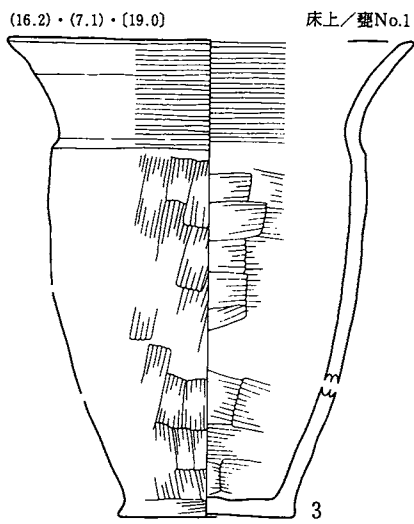
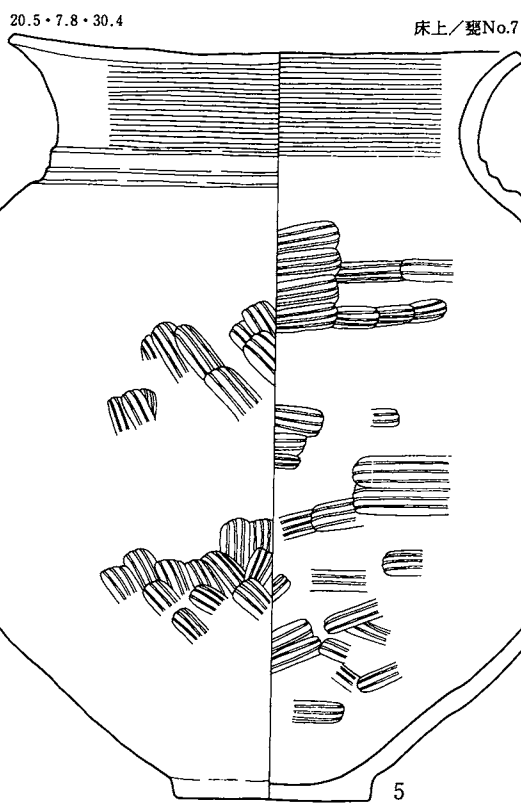
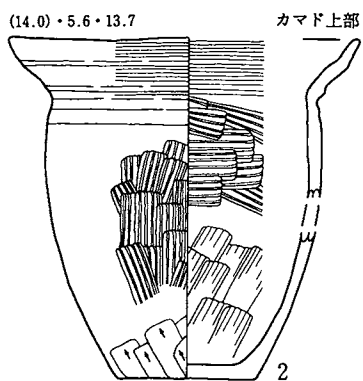
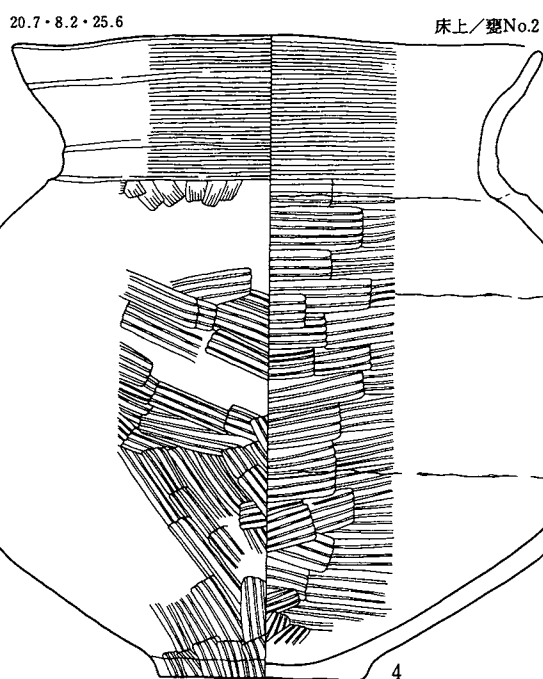
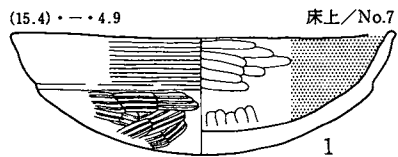
<遺物> カマド上部と東壁寄りの床上から土師器坏・甕・球胴甕が出土している。1はロクロ不使用の土師器坏(IAa群)である。丸底で体部中位に段が巡り、口縁部は外傾気味に立ち上がっている。口縁部外面はヨコナデ、体部～底部がハケメ調整を施している。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

2・3はロクロ不使用の土師器甕である。2の口縁部は頸部から外傾し端部が直立気味に立ち上がり、3が外反している。2の口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメで下半にヘラケズリ調整がある。3の器面調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面がヘラナデである。いずれも磨滅しており、体部外面に煤の付着がある。



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性弱 強く締まる
2. 10YR4/6 褐色シルト質土 粘性あり 黒褐色土10%混入 指圧痕あり
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 暗褐色土(7.5YR2/4)30%混入 焼土粒1%含む
4. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 赤褐色焼土粒(5YR4/8)20%混入
5. 7.5YR4/6 褐色シルト質土 粘性弱 強く締まる 全体に焼成
6. 10YR4/6 褐色シルト 炭化物5%・焼土粒3%含む
7. 7.5YR4/6 褐色焼土 炭化物3%含む

第13図 RA099竪穴住居跡



S=1/3

第14図 RA099竪穴住居出土遺物

4・5はほぼ完形のロクロ不使用の土師器球胴甕で、頸部～口縁部には多条の浅い段がある。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる4、強く外反している5がある。4の口唇部は丸味をもち、5が角ばっている。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメが施され、4の一部にヘラナデ調整も見られる。底部は丁寧なヘラナデ調整である。4の一部に粘土紐の積み上げ痕が見られ、5は胎土に小石と砂を多く含んでいる。

<時期> 時期は遺物の特徴から奈良時代に比定される。(高橋)

#### RA 117 竪穴住居跡 (第15図、写真図版197・198)

<位置・重複関係> 東側調査区の-1B区中央寄りに位置している。西側でRD 206土坑と重複し、切られている事から、新旧関係は本竪穴住居跡の方が古い。検出はIV層中位で確認している。<平面形・規模> 大部分は東側道路の調査区域外にあるため、規模の詳細は不明である。検出された西辺3.44m、南辺91cm、北辺2.04mを測る。確認された規模から一辺が3.50m前後の隅丸形状を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色砂質シルト単層で構成され、強く締まっている。<壁・床> 壁の上部は削平されているが、床面から外傾して立ち上がる。壁高は西壁18cm、南壁6cm、北壁18cmである。床は平坦で強く締まっている。貼り床は検出されない。<柱穴状土坑・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは北壁の中央部に設置している。本体部と煙道部の大部分は、調査区域外の道路下に延びる事から詳細が不明である。左袖部はIV層を削り出して造られ、規模は長さ81cm、幅30cmである。

<遺物> 床上と埋土中～下位から土師器の手捏ね土器・甕が出土している。6は口径6cm前後の小型手捏ね土器で、胎土に砂を多く含んでいる。7は床上から出土の底部と口縁部を欠損したロクロ不使用の土師器甕である。内外面とも磨滅しており、外面はヘラミガキ、内面がヘラナデ調整を施している。

8は隣接する遺構から流れ込みと思われる中世陶器の口縁部破片である。

<時期> 時期は遺物の特徴から奈良時代に比定される。(高橋)

#### RA 118 竪穴住居跡 (第16～18図、写真図版7・198・199)

<位置・重複関係> 東側調査区の1B区西側に位置している。IV層上面で黒褐色土の広がり確認されている。<平面形・規模> 規模は8.20×8.00mで、平面形は隅丸形状を呈する。

<埋土> 黒褐色砂質シルトを主体とする7層で構成されている。上層は黒褐色シルト質土で、褐色土を小ブロック状に含み強く締まっている。下層は水酸化鉄と微量の炭を含む黒色シルト質土で構成されている。最下層の3層は2層に類似する黒褐色シルト質土、4層は褐色土と黒色シルト質土との混合土層である。

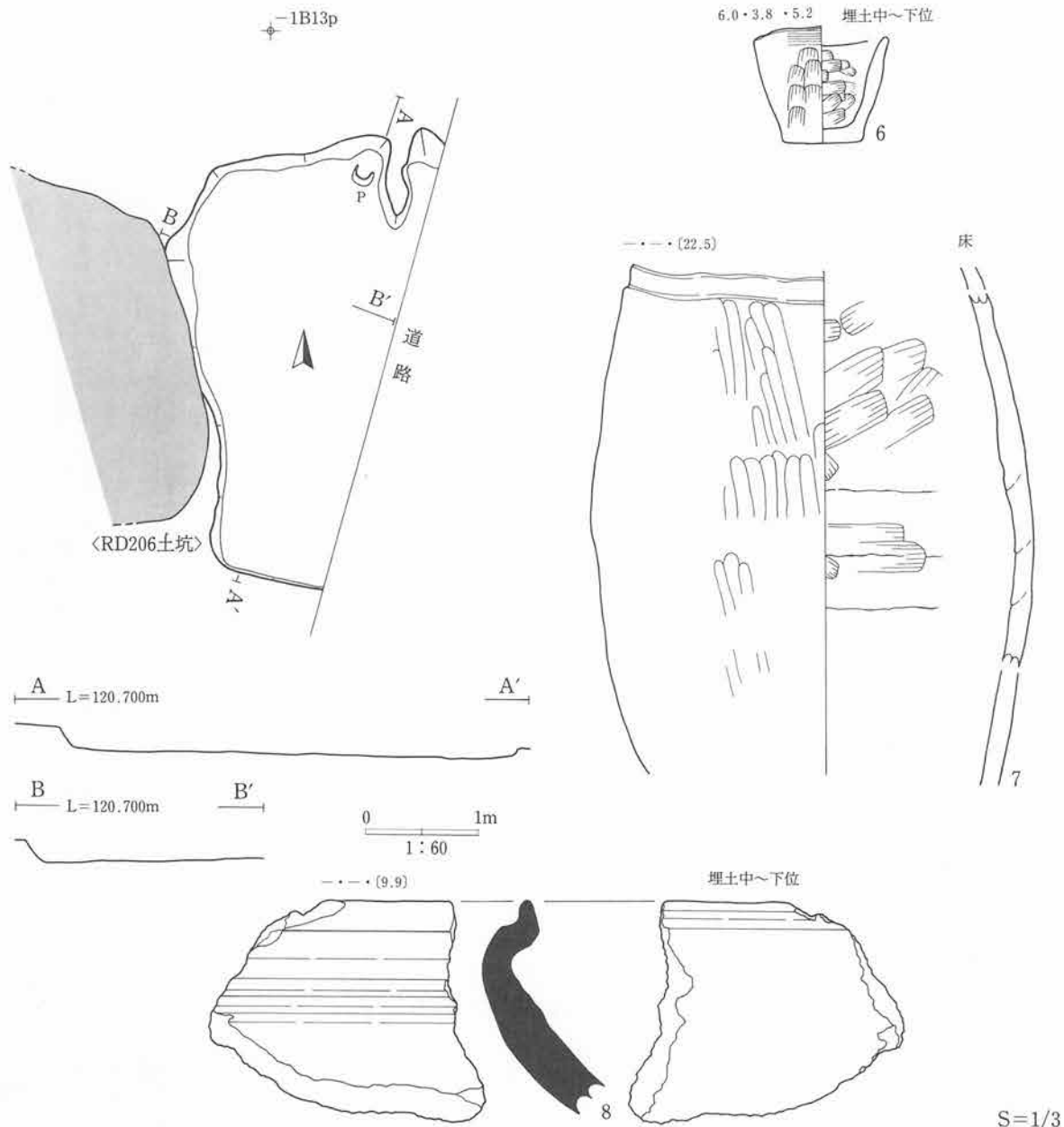
<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は東壁24cm、西壁17cm、南壁16cm、北壁16cm前後を測る。床はほぼ平坦で強く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・土坑> 柱穴状の土坑はP2～P12の11基検出されているが、位置的に主穴とはいえない。平面形は円形を調とするものが9基、楕円形が1基、方形1基である。

埋土は暗褐色～褐色粘土質土を主体としている。いずれも柱痕は確認されていない。土坑はP1で、平面形は楕円形を呈している。埋土は暗褐色～褐色シルト

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	62×43	26×24	36×36	33×33	30×26	31×26
深さcm	10	9	19	20	22	5
土坑No	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
直径cm	36×36	31×31	43×40	25×24	46×38	42×38
深さcm	21	15	14	19	31	25

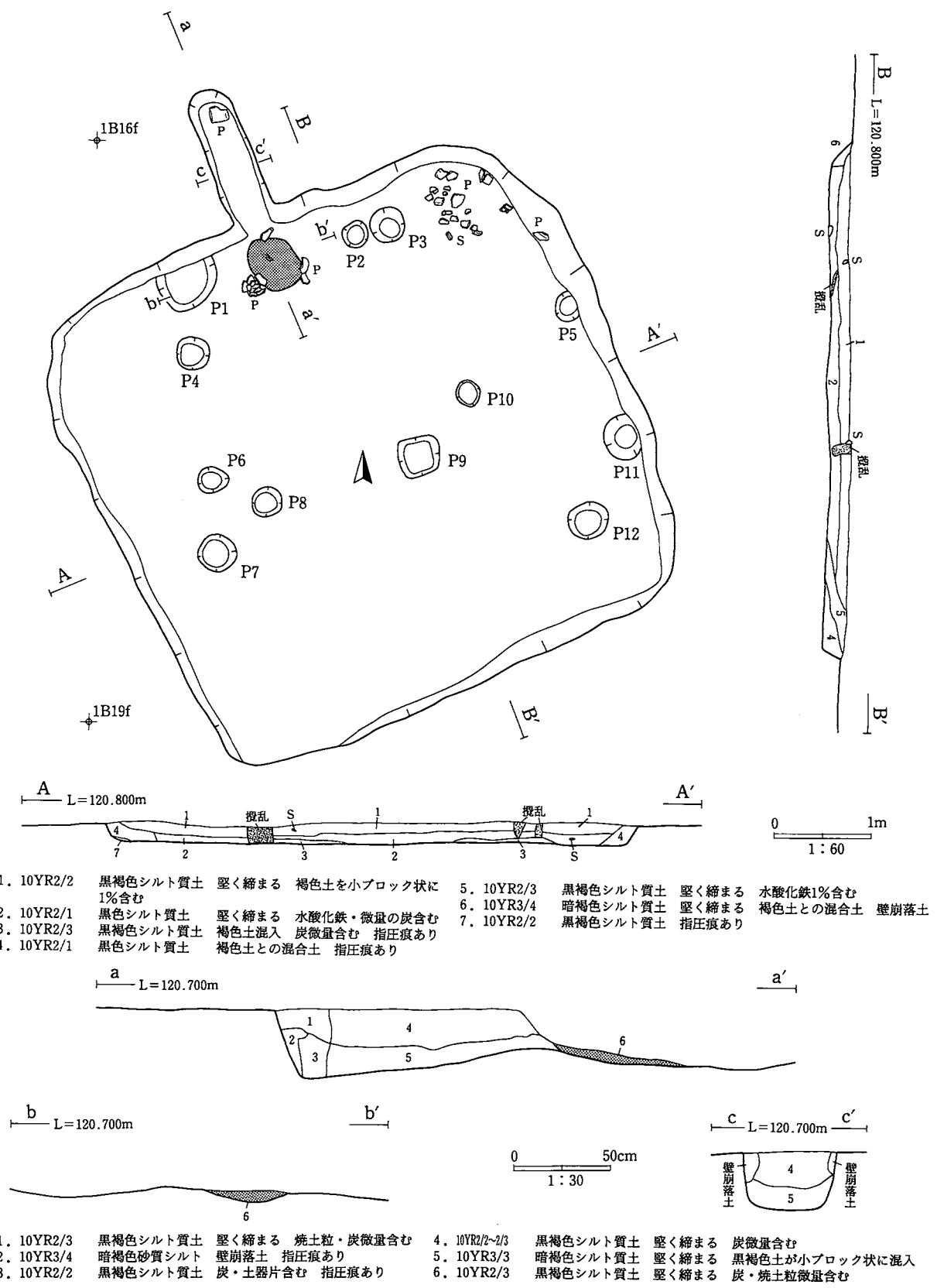
の単層で、微量の炭を含んでいる。位置的に貯蔵穴と思われる。<他の施設> 検出されない。



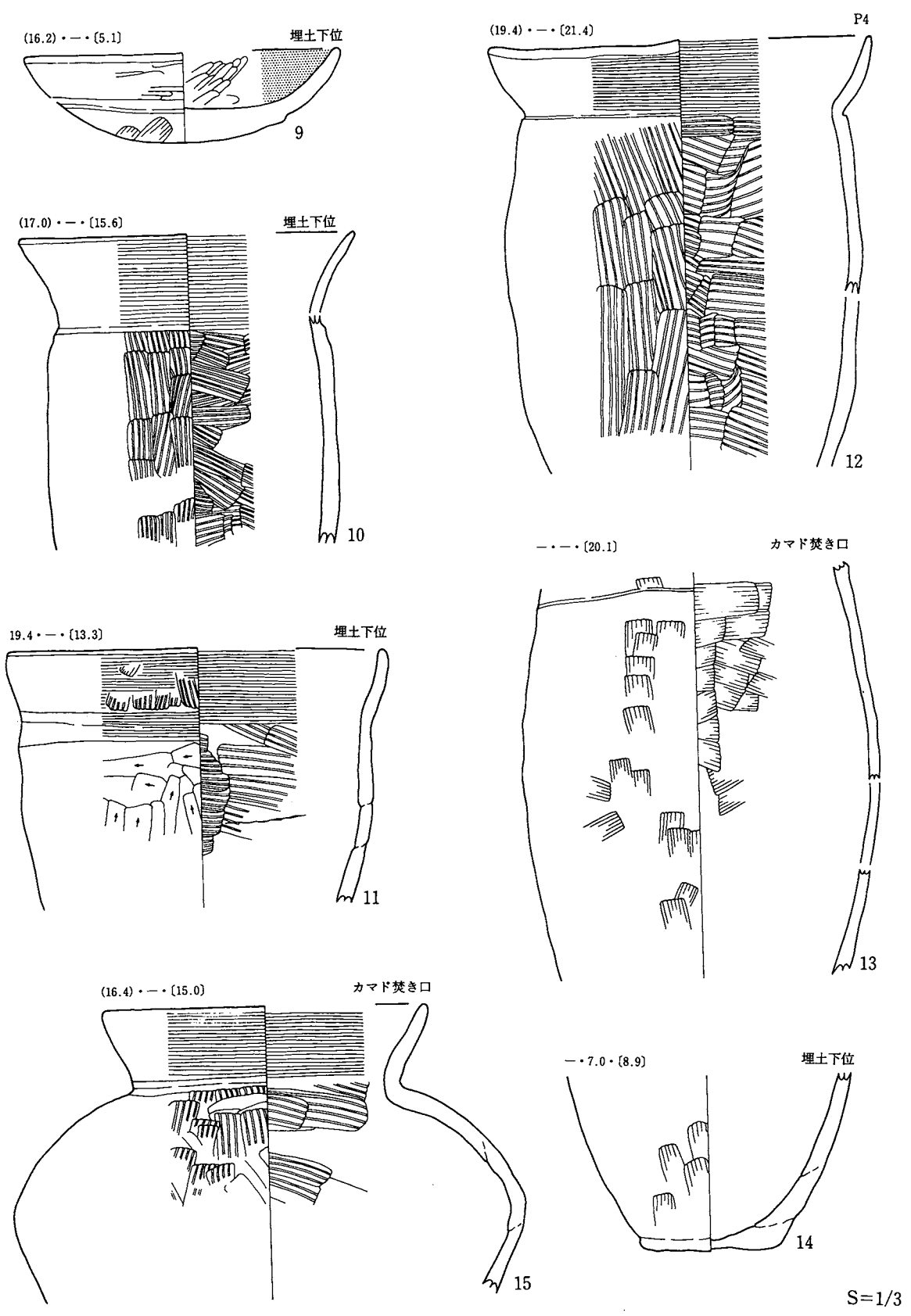
第15図 RA117竪穴住居跡・出土遺物

〈カマド〉 カマドは北壁の中央部付近に設置されている。本体部および煙道部上部は削平されている事から構造が不明である。両袖部は削平され現存していない。燃焼部は径 58×48 cmの楕円形焼土が形成している。厚さは5 cmである。煙道部は長さ約 1.40 m で、やや下がりながら煙出し部に続いている。煙出し部の上部構造は不明である。

〈遺物〉 カマド焚き口周辺の床上と埋土下位から土師器坏・甕・壺、石製紡錘車、鉄製品が出土している。1はロクロ不使用の土師器坏（IA a群）である。丸底で体部下半に段が巡り、口縁部は内湾している。口縁部と体部外面は細いヘラミガキ、底部がヘラナデ調整を施している。内面はヘラミガキ調整後に黒色処

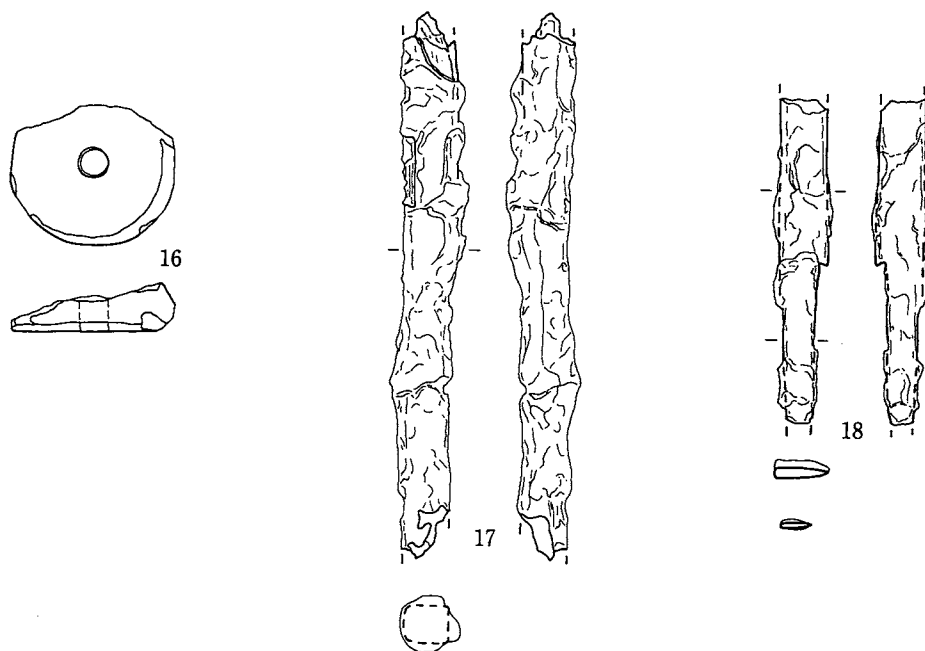


第16図 RA118竪穴住居跡



第17図 RA118竪穴住居跡出土遺物(1)





第18図 RA118竪穴住居跡出土遺物(2)

理されている。胎土に砂と金雲母を多く含み、焼成は良好である。

10～14 はロクロ不使用の土師器甕で、全体的に磨滅している。10～12 は底部、13 が口縁部と底部、14 が体部上半から口縁部を欠損する。口縁部は外反する 10、直立気味に立ち上がる 11・12 がある。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面が 10・12 がハケメ、11 がヘラケズリ、14 がヘラナデを施している。11・12 の胎土は砂と金雲母を多く含んでいる。

15 は底部を欠損したロクロ不使用の土師器壺で、口縁部は頸部からくの字状に外傾して立ち上がっている。体部上半部に最大径が有り、胎土に金雲母の混入が多く見られる。口縁部はヨコナデ、体部内外面はハケメ調整を施している。

16 は石製の紡錘車破片で径 4.4 cm、中央付近に径 8 mm の穿孔が見られる。17・18 は床上から出土の鉄製品である。17 は器種不明で両端部を欠損し、現存長 14.6 cm、幅 1 cm、厚さ 1 cm を測る。18 は刀子で茎と刃の一部は欠損している。現存長は 8.7 cm、厚さが 2 mm ほどである。

<時期> 時期は遺物の特徴から奈良時代に比定される。

(高橋)

#### RA 121 竪穴住居跡 (第 19～23 図、写真図版 7・199～201)

<位置・重複関係> 調査区東西側の 1 C 区に位置している。検出は III 層上面で黒褐色土の広がり確認されている。重複関係はない。<平面形・規模> 規模は 4.72×4.58 m で、平面形はやや円形を呈している。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする 12 層で構成されている。上層は黒褐色シルト質土で、褐色土が小ブロック状で混入している。下層は黒色シルトで褐色土と炭化物を含み、強く締まっている。<壁・床> 壁は床面から急傾斜で立ち上がり、壁高は東壁 22 cm、西壁 20 cm、南壁 22 cm、北壁 12 cm 前後を測る。床は西壁側の中央部付近がやや高まる他は、ほぼ平坦で強く締まっている。東壁側の床上には径 64×58 cm・厚さ 1 cm、中央部付近に径 50×30 cm・厚さ 10 cm の焼土が検出された。貼り床の下には東壁側に長さ 2.84 m、幅 0.66 m、

と西壁側に長さ 3.64 m、幅 0.66 m の溝状掘り方が 2 か所で検出されている。

〈柱穴・土坑〉 柱穴状の土坑は 6 基検出されおり、P 1～P 4 の 4 基が支柱穴である。平面形は円形を基調とするものが 5 基、方形が 1 基である。埋土は暗褐色を主体としている。柱痕は確認されていない。〈他の施設〉 検出されない。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	28×26	34×30	30×30	32×30	48×24	36×30
深さcm	48	35	50	50	8	17

〈カマド〉 カマドは北壁の中央部付近に設置されている。本体部は崩落しており、上部の構造は不明である。袖部はIV層を削り出して造られ、左袖長さ 88 cm・幅 46 cm、右袖長さ 90 cm・幅 64 cmを測る。燃烧部は 46×28 厚さ 14 cmの焼成がある。割り貫きの煙道部は、燃烧部からやや平行に長さ約 1.28 m 延び煙出し部に続いている。煙出し部は径 42×40 cm、深さ 32 cmの楕円形気味の土坑が掘り込まれている。上部の構造は削平され不明である。

〈遺物〉 カマド周辺と床上から土師器坏・高坏・甕・長頸壺・甑が出土している。19 はロクロ不使用の土師器坏（I B b 群）である。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部と体部外面は細いヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。小型の器形で、平底の底部に十の線刻が見られる。20 はロクロ不使用の土師器高坏の高台破片である。ヘラナデ調整を施しており、焼成は良好である。

21～34 はロクロ不使用の土師器甕である。21～23 は小型の器形、24～31・34 は長胴形、32・33 が球胴形である。21 の口縁部は内湾し、体部外面がハケメ、内面がヘラナデ調整である。22・23 の底部は欠損している。口縁部は 22 が直立気味に立ち上がり、23 が外傾する。口縁部はヨコナデ、体部外面がハケメ調整を施している。長胴形の甕は口縁部や底部を欠損し、磨滅しているものが多い。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がハケメないしヘラナデ調整を施している。30 の底部は木葉痕で、31 は全体に器形の歪みが大きい。

32・33 は球胴甕で、内外面とも磨滅が著しい。32 の口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり端部で内湾し、33 はくの字状に外反する。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメとヘラミガキ調整を施している。32 の底部はヘラナデ調整である。

35 はロクロ不使用の土師器長頸壺である。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部に浅い沈線が一条巡っている。体部は球形状を呈し、外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

36 は単口式の甑で、器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がハケメ、内面がヘラナデ調整である。

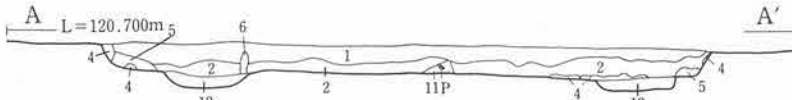
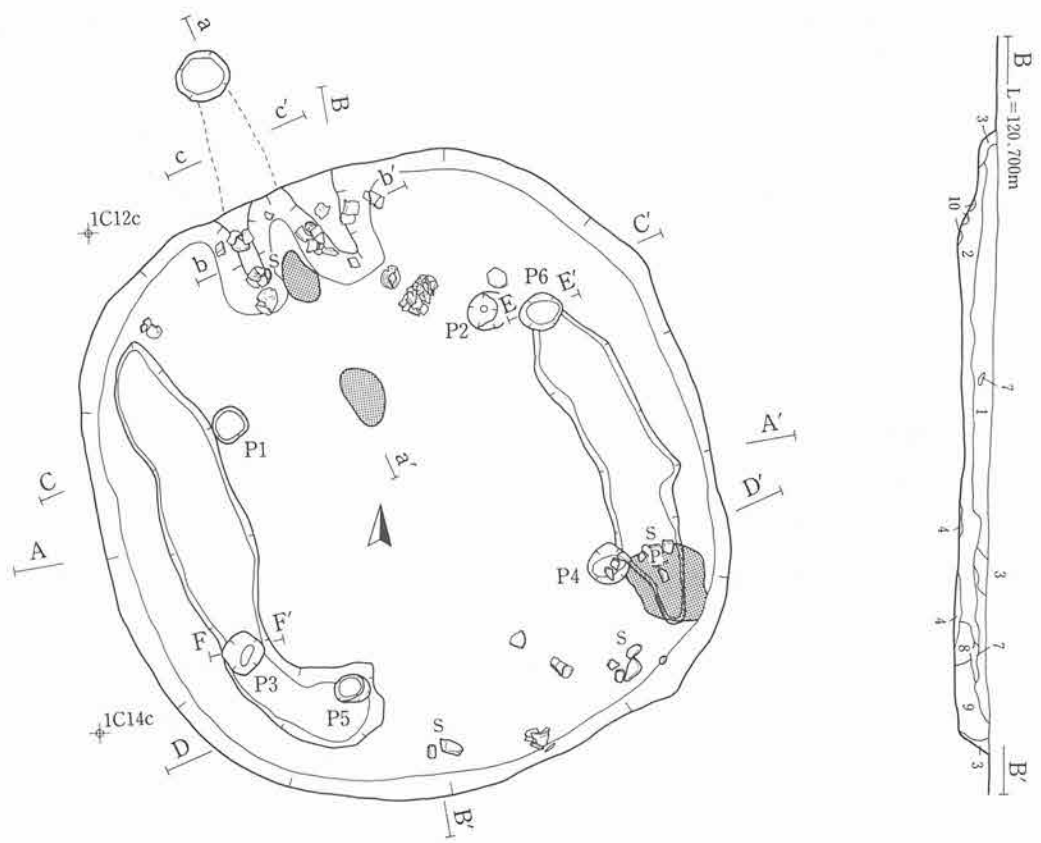
〈時期〉 時期は遺物の特徴から奈良時代に比定される。 (高橋)

#### RA 122 竪穴住居跡 (第 23 図、写真図版 8・201)

〈位置・重複関係〉 調査区東側の 1 C 区に位置している。検出はIII層上面で黒色の広がり確認されている。北側で中世の RG 042 堀と重複し切られている。新旧関係は (新) RG 042 堀→ (旧) RA 122 竪穴住居跡である。〈平面形・規模〉 規模は重複している事から不明である。検出された東辺 2.86 m、南辺 2.72 m を測る。平面形は検出された規模から隅丸方形状を呈すると思われる。

〈埋土〉 埋土は黒色シルトを主体とする 3 層に大別される。上層は黒色シルト、下層が黒褐色シルトで構成され、堅く締まっている。〈壁・床〉 壁は床面から急傾斜で立ち上がり、壁高は東壁 22 cm、南壁 27 cm を測る。床はほぼ平坦で堅く締まっている。

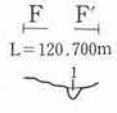
〈柱穴・土坑〉 柱穴は検出されない。土坑は 1 基検出され直径 76×74 cm、深さ 14 cm である。平面形は円形を呈している。埋土は暗褐色シルト主体の 3 層に細分され、黒褐色土を小ブロックで含み堅く締まる。



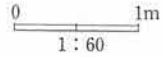
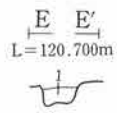
- |   |   |
|---|---|
| 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色土ブロック状に3%混入  | 7. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 黒色土50%含む           |
| 2. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり 褐色土1%混入 炭片微量含む  | 8. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 赤褐色焼土粒状(径0.10.5cm)に混入 |
| 3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 黒色土30%混入      | 9. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む                       |
| 4. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性あり 黒色土40%含む        | 10. 5YR3/3 暗赤褐色焼土 粘性弱 炭片微量含む                |
| 5. 10YR2/1 黒色シルト 粘性あり 褐色土(10YR4/6)30%混入 | 11. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性に富む 土器片含む             |
| 6. 10YR4/6 褐色粘土質シルト 粘性に富む               | 12. 10YR3/4 暗褐色シルト 黒褐色土20%混入                |



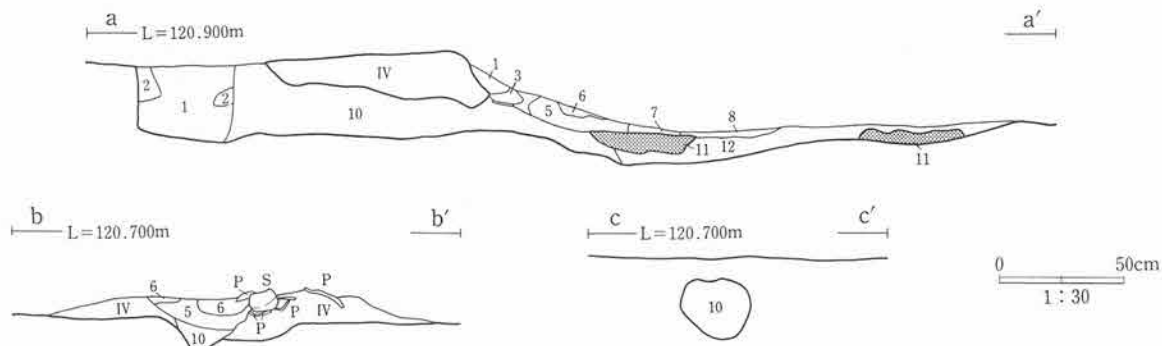
1. 10YR2/2 黒褐色シルト      1. 10YR2/3 黒褐色シルト 褐色砂質土微量混入



1. 10YR2/3 黒褐色シルト 褐色砂質土微量混入  
 1. 10YR2/3 黒褐色シルト 褐色砂質土微量混入  
 2. 10YR4/6 褐色砂質土 強く締まる

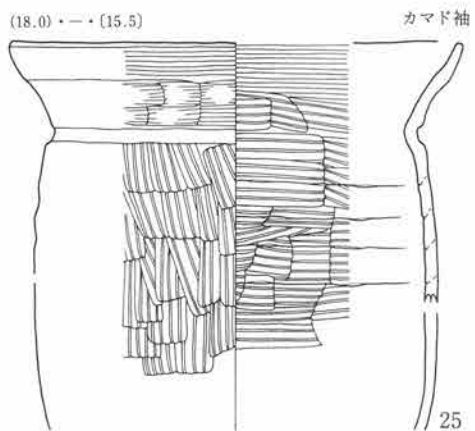
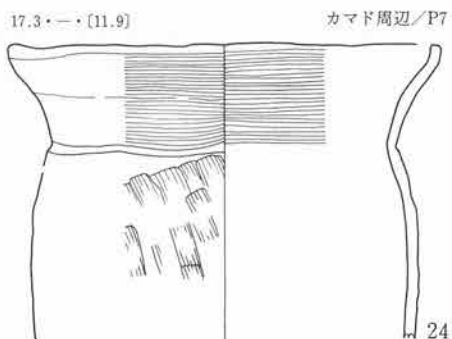
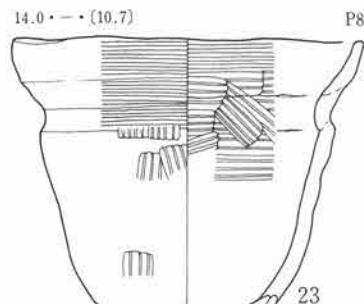
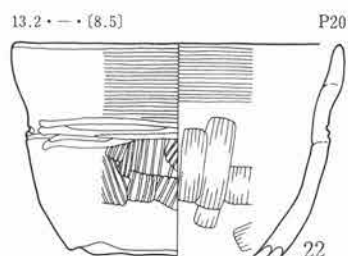
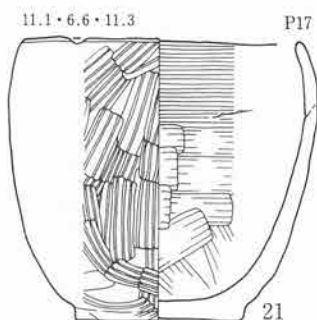
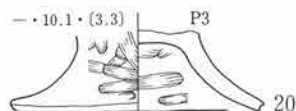
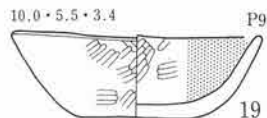


第19図 RA121竪穴住居跡(1)



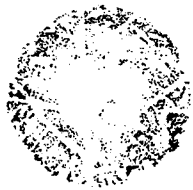
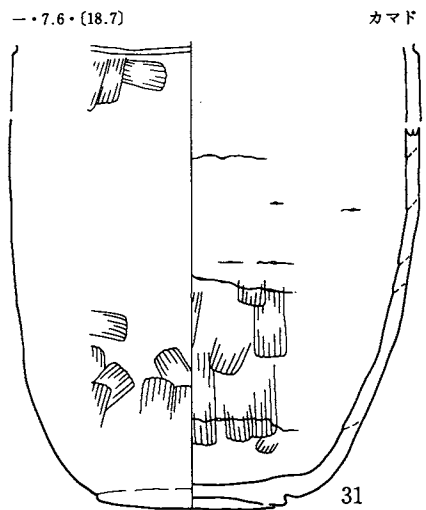
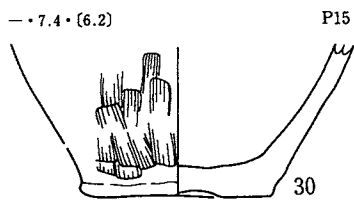
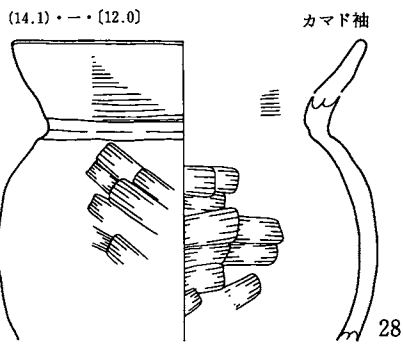
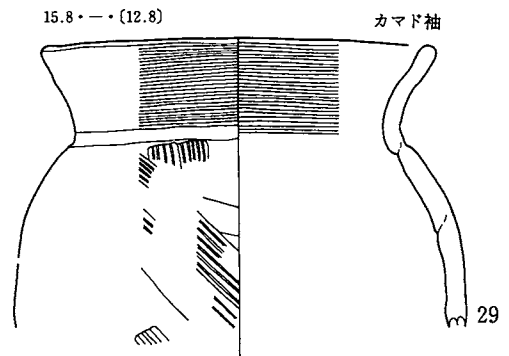
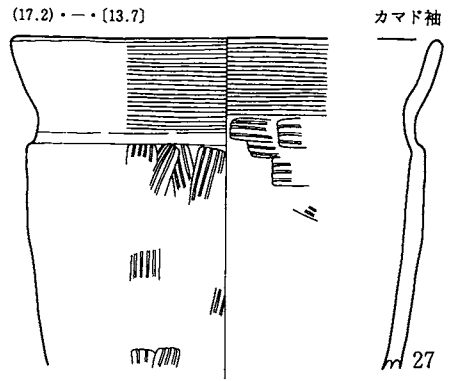
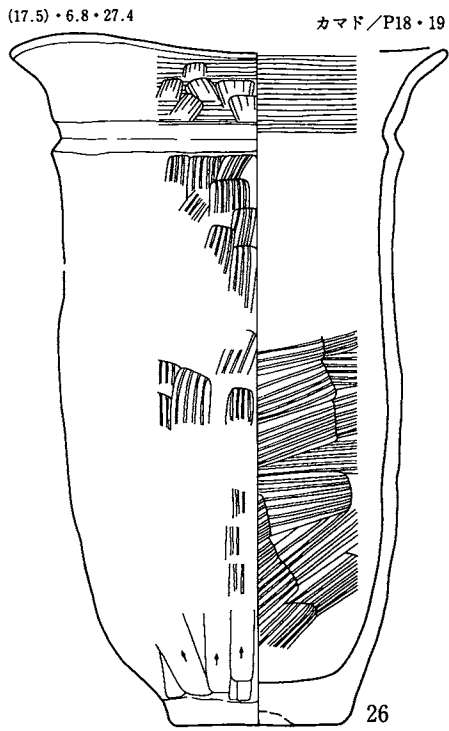
1. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト質土 褐色土3%混入
2. 10YR4/6 褐色シルト質土 黒褐色土30%混入
3. 7.5YR4/4 褐色シルト質土
4. 5YR3/4 暗赤褐色焼土 炭化物微量混入
5. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 焼土粒20%含む
6. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 焼土粒3%含む
7. 7.5YR4/6 褐色焼土

8. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 焼土微量混入
9. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色シルト質土 (10YR3/4)30%含む
10. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 焼土粒・炭混入
11. 5YR4/6 赤褐色焼土
12. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色砂質土10%混入



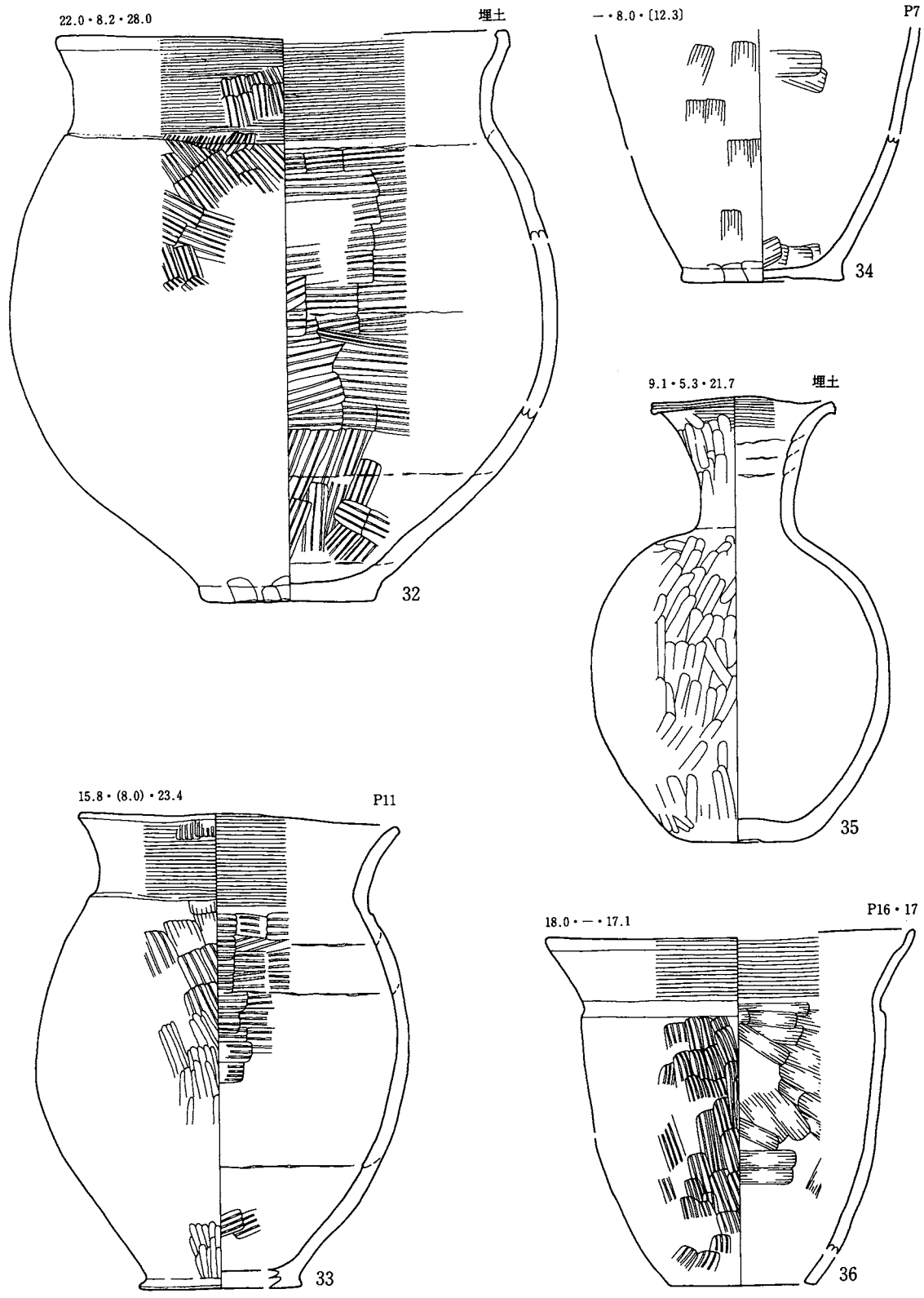
S=1/3

第20図 RA121竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



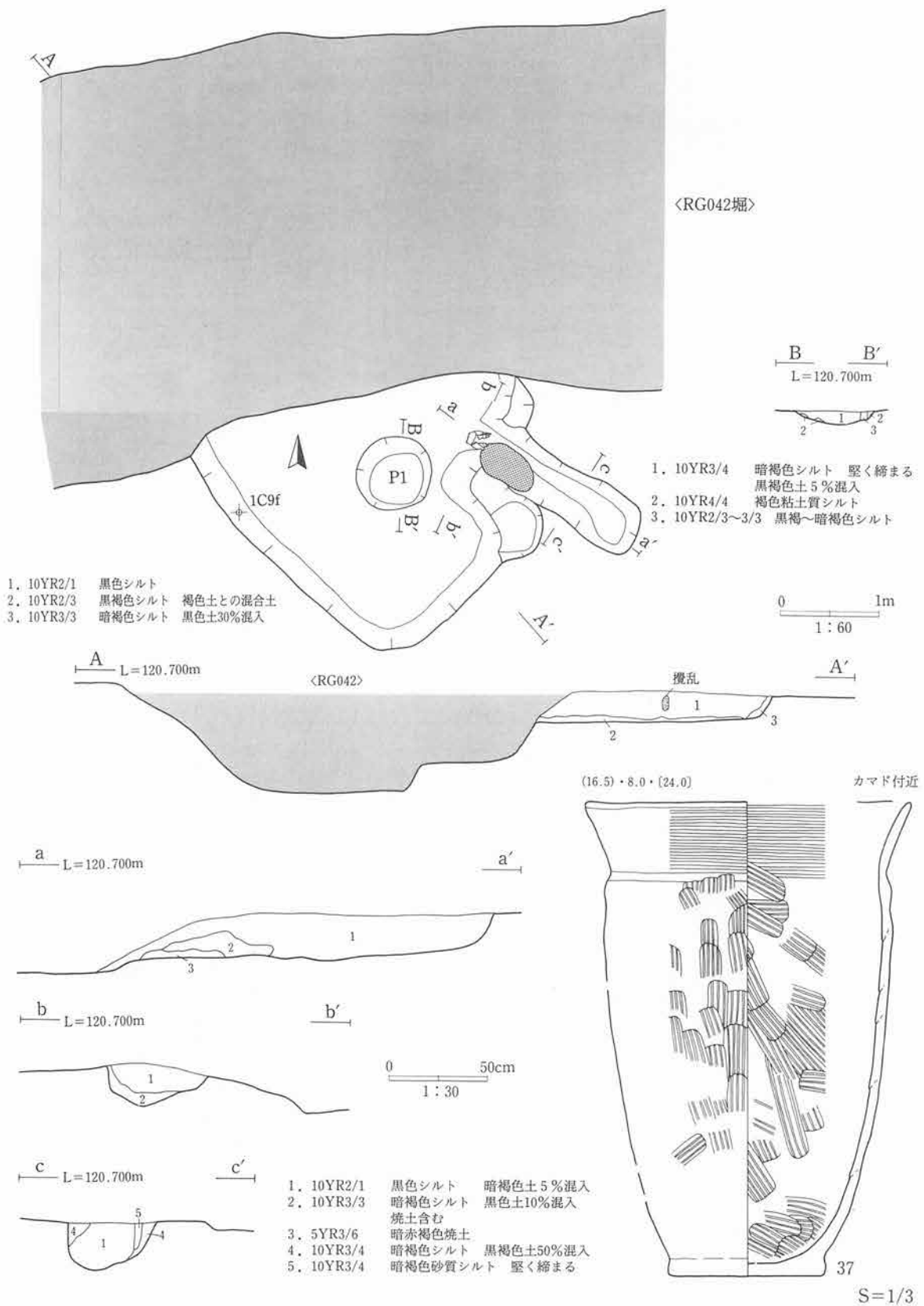
S=1/3

第21図 RA121竪穴住居跡出土遺物(2)



S=1/3

第22図 RA121竖穴住居跡出土遺物(3)



第23図 RA122竪穴住居跡・出土遺物



＜カマド＞ カマドは東壁の北東コーナー寄りに設置されている。本体部と煙道部の上部は削平されている事から構造が不明である。左袖は削平され、右袖は長さ 72 cm、幅 56 cm である。燃焼部は径 62×34 cm、厚さ 8 cm の焼土が楕円形状に形成されている。煙道は割り貫き式かは不明であるが、燃焼部からやや登り気味に長さ約 1.58 m 煙出し部に続いている。埋土は黒色シルトで占められ、暗褐色土ブロックが混入している。煙出し部の上部構造は削平され不明である。

＜遺物＞ カマド焚き口付近の床上から、ロクロ不使用の土師器甕が 1 点出土している。口縁部は 3 分の 1 ほどが現存しており、内外面とも磨滅が著しい。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり、口唇部が丸味をもつ。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面がハケメである。内面に粘土紐の積み上げ痕が見られ、底部は木葉痕を呈している。

＜時期＞ 時期は遺物の特徴から奈良時代に比定される。 (高橋)

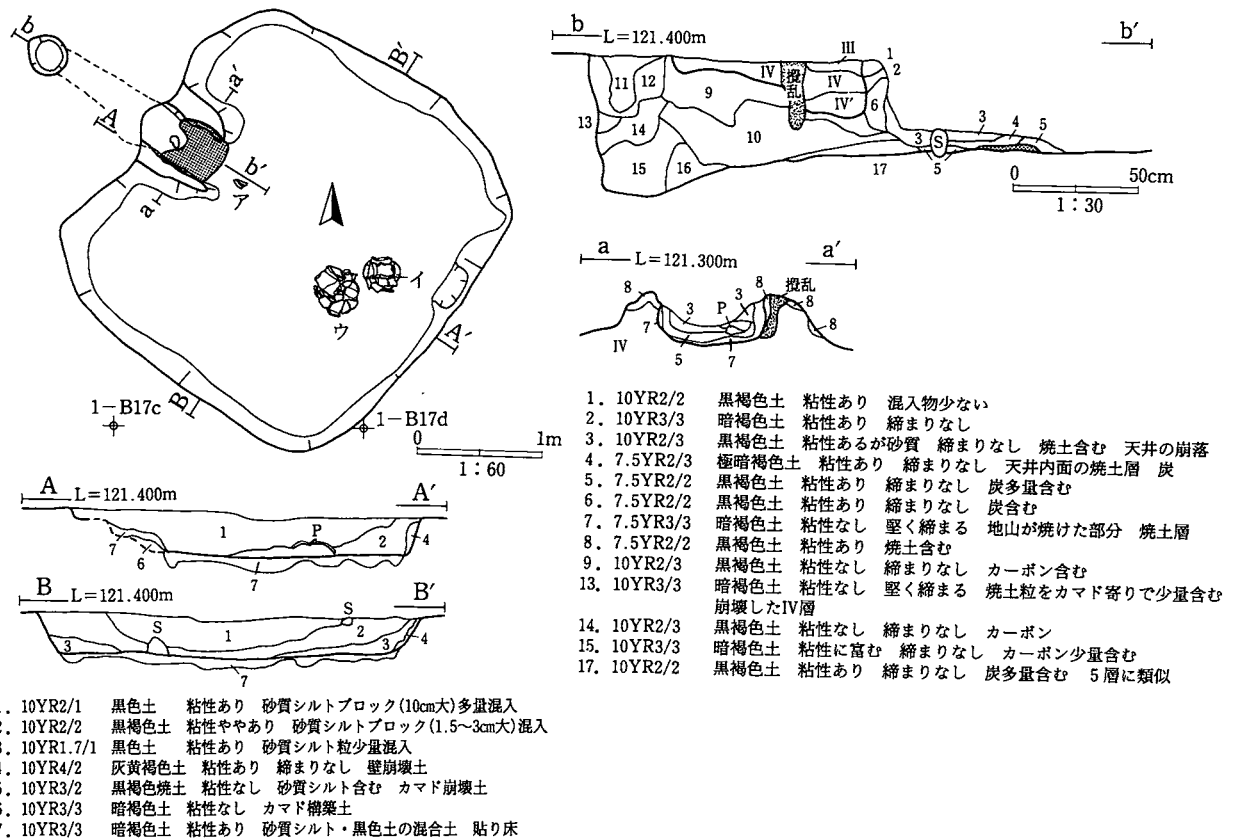
RA 123 竪穴住居跡 (第 24・25 図、写真図版 9・10・201・202)

＜位置＞ 調査区北東の 1-B 区の南西よりに位置する。重複はない。＜平面形・規模＞ 隅丸方形を呈し、北東壁はやや胴張りである。規模は 2.77×2.58 m である。

＜埋土＞ 4 層に細分され、砂質シルトの混入する黒～黒褐色土が主体である。＜壁・床＞ 壁は床面からやや外傾して、急に立ち上がる。壁高は 33 cm である。床はほぼ平坦で、貼り床が施される。貼り床は砂質シルトと黒色土の混合土で、締まっている。

土坑No	P 1
直径cm	30×26
深さcm	15

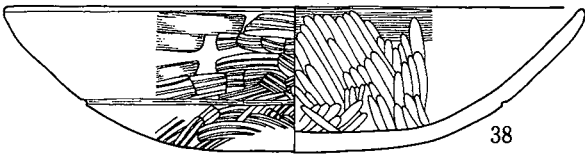
＜柱穴＞ 1 基のみ検出された。平面は円形を呈する。＜他の施設＞ 土坑などは検出されなかった。カマドの対面の壁の一部が、他よりも内側に 10～15 cm ほど張り出しており、さらに若干ステ



第24図 RA123竪穴住居跡

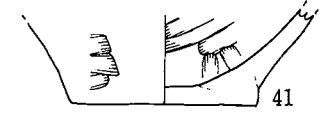
23.1・一・5.9

埋土Q2/3層



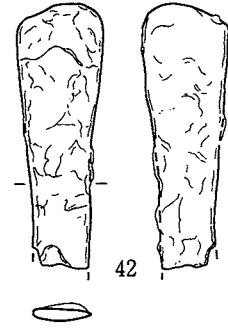
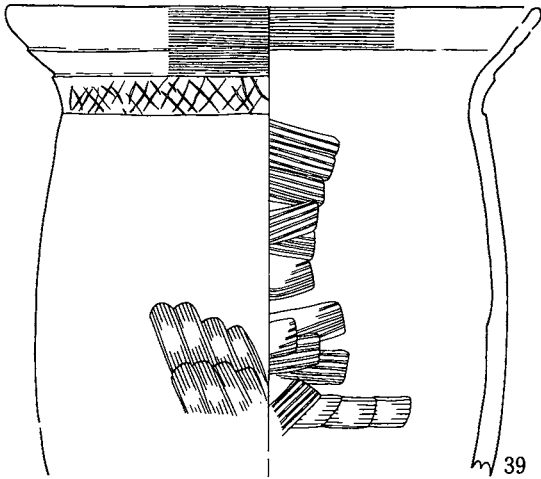
一・7.4・(3.9)

埋土Q3/3層



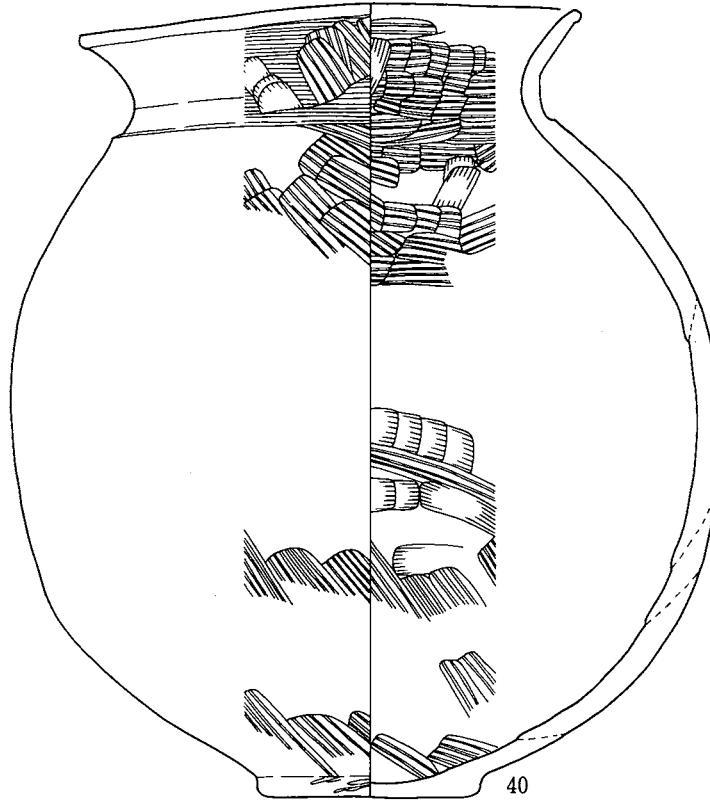
21.3・一・(18.7)

床上



19.9・8.8・31.6

床上



42はS=1/2  
38~41はS=1/3

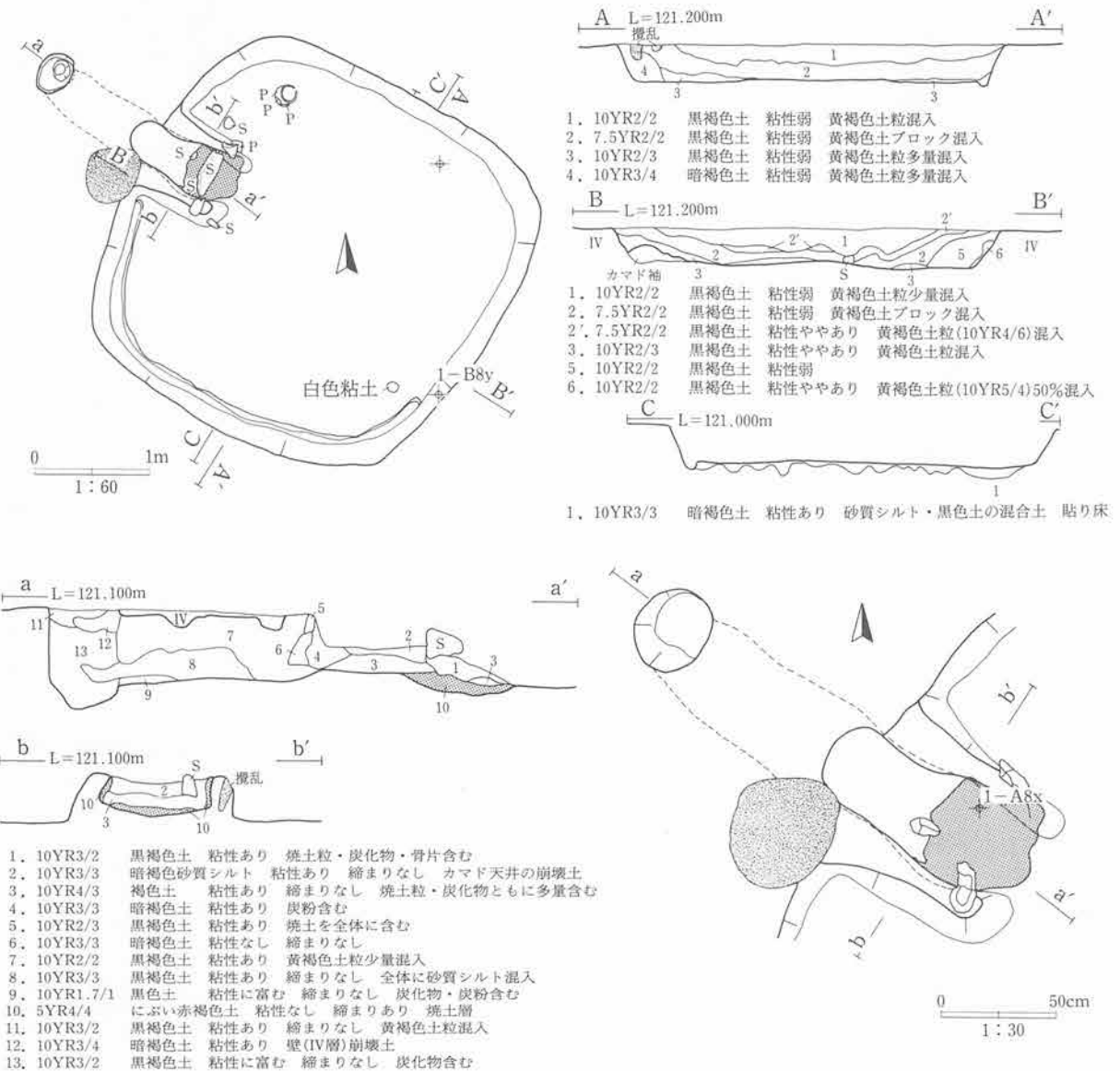
第25図 RA123竪穴住居跡出土遺物

ツブ状に凹んでいる。この張り出し部分には、焼土粒と炭が2～3cmの厚さで堆積していた。

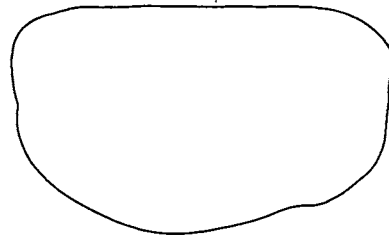
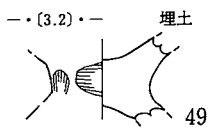
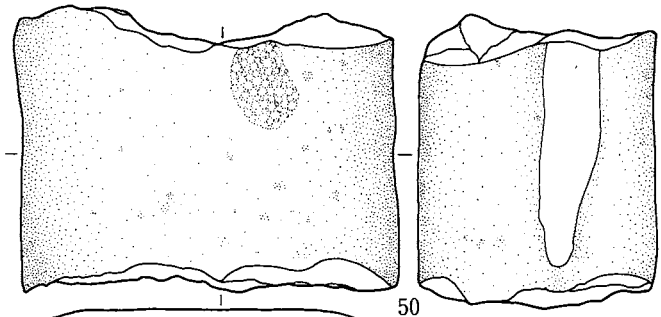
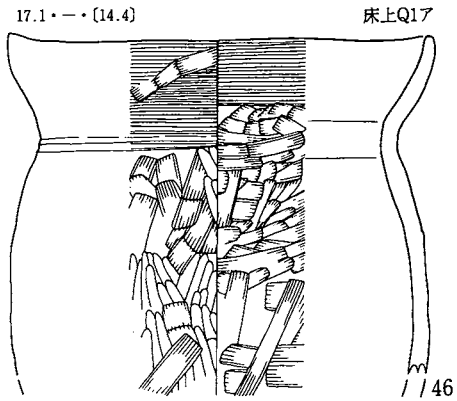
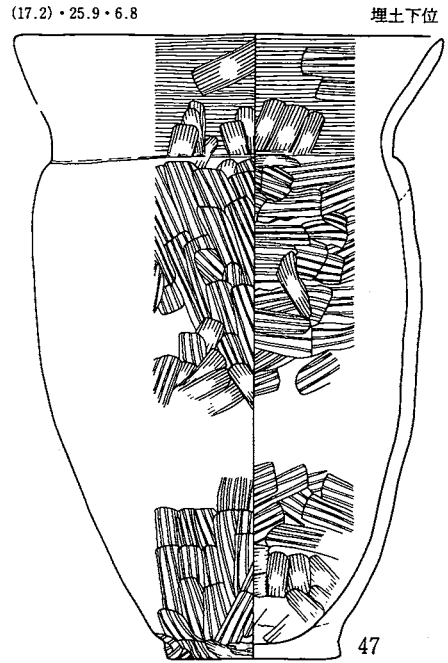
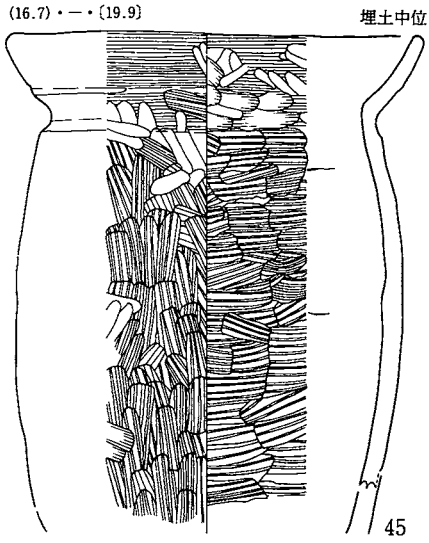
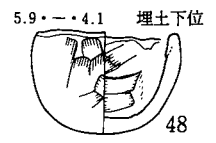
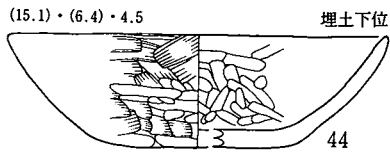
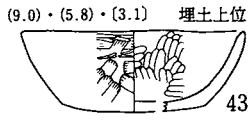
＜カマド＞ 北西壁の中央部に設置している。袖はIV層を削り出して構築している。天井を被覆した粘土はカマド内の埋土上部に落ち込んでいる。カマド手前の焚き口袖には芯となるような礫や土器は検出されなかった。燃焼部には43×47cmの範囲に焼土が不整形に形成されている。焼土の厚さは3cmである。カマド袖の内側も焼土化している。燃焼部の奥には長さ12cm、厚さ6cmの支脚と思われる円礫が直立した状態で検出された。

煙道部は長さ1.20mで、削り貫き式である。燃焼部からごく緩やかに下がり勾配で、煙出しに至って、急に下がる。煙道の入口は火熱を受けて、焼けている部分が見られる。煙道の埋土最下層には炭や焼土粒の混入した黒褐色土が堆積している。煙出し部は径36×32cm、深さ56cmの円形土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ 床面、埋土からロクロ不使用の土師器が出土している。カマド前の床面と南東よりの床から1cmほど浮いて土師器球胴甕40が出土した。両者は接合した。39は床から2cmほど浮いて出土した頸部に格子状の沈線文のある土師器甕である。ほかには壁際の3層上位から内黒の坏38、甕の底部41が出土している。



第26図 RA124竪穴住居跡



50はS=1/2  
43~49はS=1/3

第27図 RA124竪穴住居跡出土遺物

42は南東壁の壁際、埋土上層から出土した刀子と見られる鉄製品である。また、床面から一辺の長さが10～15cm、長さ25cmほどの角柱形の礫が出土しており、カマドの構築材の可能性が高い。

<時期> 出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。 (金子)

#### R A 124 竪穴住居跡 (第26・27図、写真図版11・12・202・203)

<位置・重複関係> 調査区北西の1-B区の北東よりに位置する。重複関係はない。<平面形・規模> 4辺すべてがやや胴張りの隅丸方形を呈する。規模は3.10×3.07mである。

<埋土> 6層に細分され、上層は黄褐色土粒が少量混入する黒褐色土、中～下層は黄褐色土が多く混入する黒褐色土である。<壁・床> 壁は床から外傾して立ち上がる。壁高は33cmである。床は平坦で、貼り床が施される。貼り床は砂質シルト、黒色土の混合土で、特に上面が堅く締まっている。<柱穴> 検出されなかった。<他の施設> 南西コーナー～南西壁～南東コーナーにかけて周溝が巡る。幅6～13cm、深さ7cmである。そのほか、カマド対面の南東壁南寄り付近の床面から2cmほど浮いて、径10cmの円形の白色粘土が検出されている。

<カマド> 北西壁の中央部に設置している。焚き口天井に設置していた天井石や被覆していた粘土はそのままカマド内埋土に落ちた状態で検出された。袖は焚き口付近を除き、第IV層を削り出して構築されており、内側がややオーバーハングしている。天井石は15×13×40cm大の角柱のような礫で、焚き口に芯として立てて埋設された円礫に渡すように置かれていた。燃焼部には径52×51cm、厚さ9cmの不正楕円形に焼土が形成されており、袖の内面も焼けて焼土化している。

煙道部は割り貫き式で、長さ1.03mである。煙出しに向かって徐々に下がり勾配に掘り込まれ、煙出しに至ってさらに深く下がる。煙道底面の一部には炭化物の堆積が見られる。煙出し部は径38×32cm、深さ43cmの円形土坑が掘り込まれている。

<遺物> カマド脇の北コーナー床面から46の土師器甕が出土した。埋土上位から坏43、埋土下位から坏44、甕45～47、手捏ね土器48などロクロ不使用の土師器が出土している。50は埋土から出土した使用痕のある礫で、敲痕、擦痕が確認された。

<時期> 出土遺物から奈良時代後半に属すると考えられる。 (金子)

#### R A 125 竪穴住居跡 (第28・29図、写真図版13・14・203・204)

<位置・重複関係> 調査区北西の1-A区に位置する。重複関係はない。検出はIV層である。この付近は水田の造成によって、III層がかなり削平されており、III層下層からIV層上面には褐鉄層が形成されていたことから、検出時にはIV層上面からやや下がった面で、遺構を確認した。

<平面形・規模> 隅丸の長方形を呈する。規模は3.76×3.30mである。

<埋土> 4層に細分され、上層は黄褐色土のブロックが混入する黒褐色土である。貼り床は褐鉄を多く含み、堅く締まっている。<壁・床> 壁は床からやや外傾して立ち上がる。壁高は18cmである。床は平坦で、堅く締まる。

<柱穴> 床面では検出できなかったが、貼り床をはがしたところ、2基の柱穴を検出した。<他の施設> カマドの右脇にあるP1は西の壁面にオーバーハングしている。埋土は黒色土と砂質シルトをブロック状に含んでおり、埋め戻しの可能性もある。住居跡東隅にP2を検出した。P2は上層に白色粘土や炭、焼土を多く含み、下層はIV層を掘り上げた黄褐色土と黒褐色土の混合土で、埋め戻しているようである。埋土から

出土した骨片数点はほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。カマド左脇のP3は黒褐色土、黄褐色土、焼土をブロック状に含む単層である。そのほか、溝1(長さ78cm、幅20cm、深さ27cm)、溝2(長さ76cm、幅18cm、深さ28cm)、溝3(長さ90cm、幅25cm、深さ31cm)を検出した。これらの溝は、床をはがしている段階で検出したものである。東壁よりの床面からは白色の粘土塊が出土している。また、南隅からはこぶし大の礫が2個重なった状態で出土している。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
直径cm	48×45	48×36	35×34	29×23	33×30
深さcm	21	21	12	42	46

<カマド> 北西壁のほぼ中央に設置している。天井は崩落し、直上から土師器甕が出土している。袖は手前焚き口に土師器甕を両側に据え、黒色土と砂質シルトの混合土で構築している。燃焼部後方には拳大の礫が左右に直立して検出されている。燃焼部には焼土が50×45cm、最大厚9cmに形成されている。カマド内の埋土は粘土や焼土を多く含む黒褐色土で、崩壊した天井の下と燃焼部の間の層には骨片が含まれている。

煙道部は長さ1.40m、幅36cmである。上面が削平されているが、壁の一部がオーバーハングしており、割り貫き式の煙道と考えられる。燃焼部から底面は緩やかに下り、煙出しの部分で急に下がる。埋土は炭や焼土、黄褐色土を含む黒色土が主体である。埋土から出土した骨片はほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。

<遺物> 埋土、床上、カマドからロクロ不使用の土師器が出土している。55はカマドの右袖、56は左袖の焚き口に芯材として使用されていた甕である。57はカマド天井の崩壊土直上から出土した甕で、体部にハケメ調整の後ミガキが施される。51は北東壁の壁際から出土した坏である。そのほか、埋土から52・53・54の土師器坏や58・59の甕が出土した。54はロクロ使用の坏であるが、流れ込みと考えられる。

<時期> 出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。(金子)

#### RA 129 竪穴住居跡(第30～34図、写真図版15・16・204～206)

<位置> 調査区北西の-1-B区に位置し、北東側がRD 238土坑(近世)、南東側がRD 239土坑(時期不明)、住居跡全面にわたって掘立柱建物跡(近世)と重複する。新旧関係は当遺構が切られていることから(新)RD 238土坑、RD 239土坑→掘立柱建物跡→(旧)RA 129住居跡である。検出はIV層上面である。

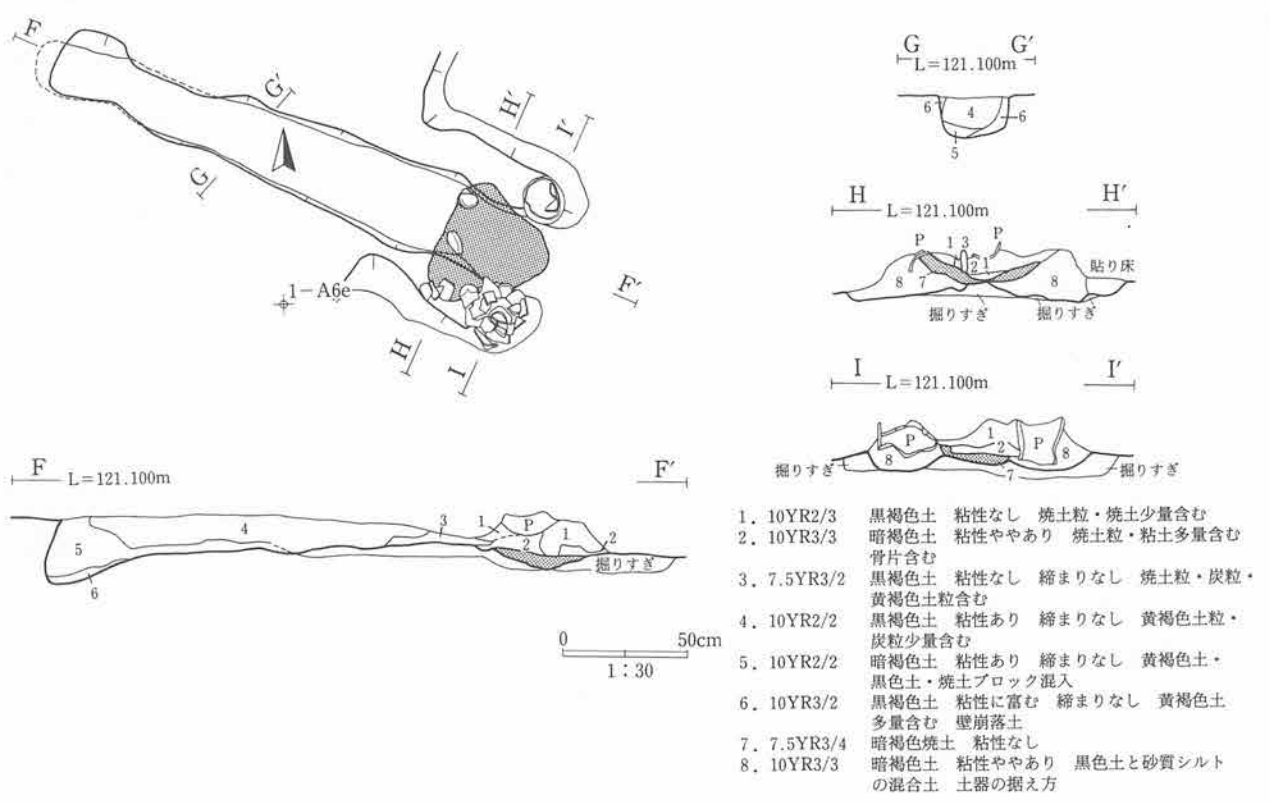
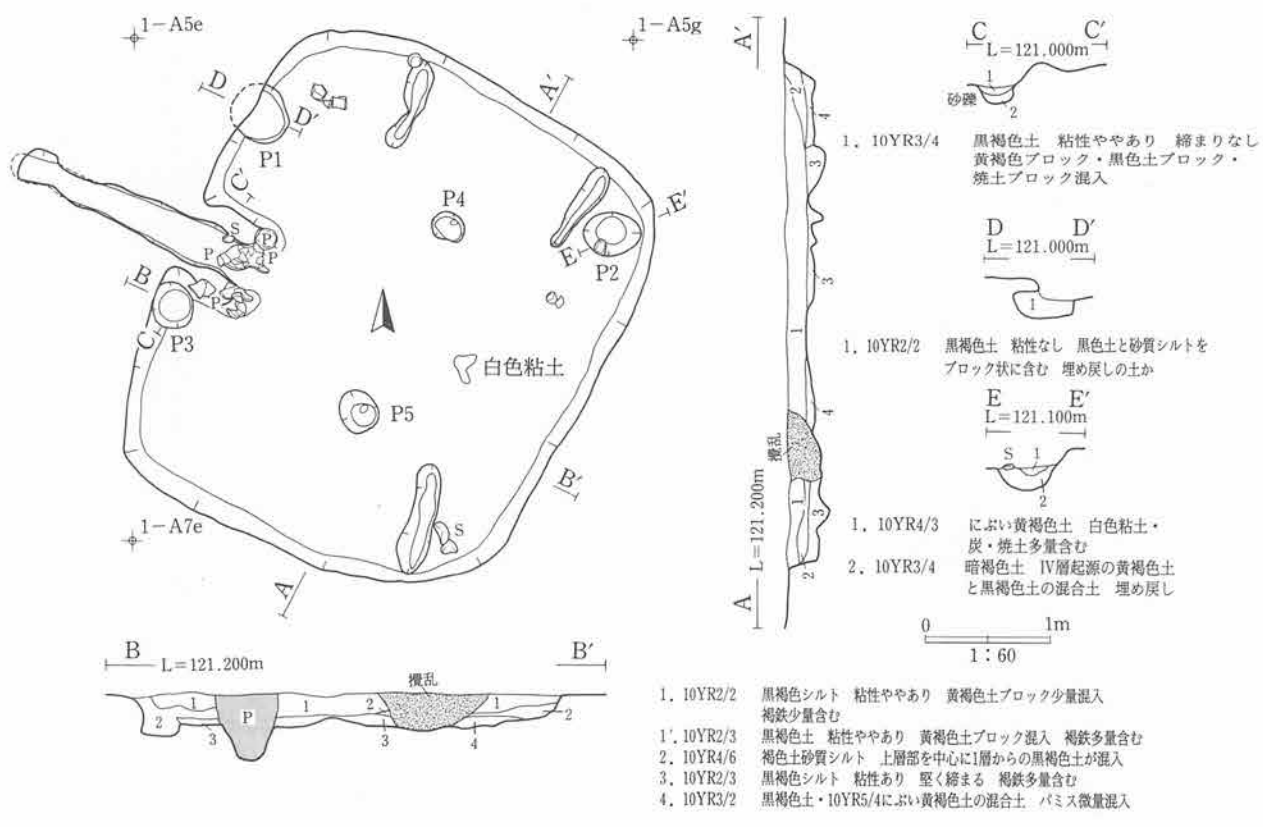
<平面形・規模> 隅丸方形を呈し、規模は7.18×6.85mである。

<埋土> 11層に細分される。上層の1層は黄褐色土ブロックや黒褐色土ブロックを多く含む。床面を覆うのは3層と6層、8層である。3層は黄灰色の粘土を層状に混入する黒褐色シルトで、6層、8層は砂質シルトの細粒や黄褐色土ブロックを含む黒色～黒褐色土である。<壁・床> 壁は床面から急に立ち上がっている。壁高は41cmである。床はほぼ平坦で、貼り床が施されている。貼り床は黒色シルトと黄褐色砂質シルトの混合土で、堅く締まっている。

<柱穴> 支柱穴と思われるのはP1～P4の4基である。そのほかに北西壁際のP5がある。ここから土師器甕が出土した。平面形は円形を基調としており、深さはP1～P4がほぼ70cmと一定している。埋土には柱の痕跡も認められる。

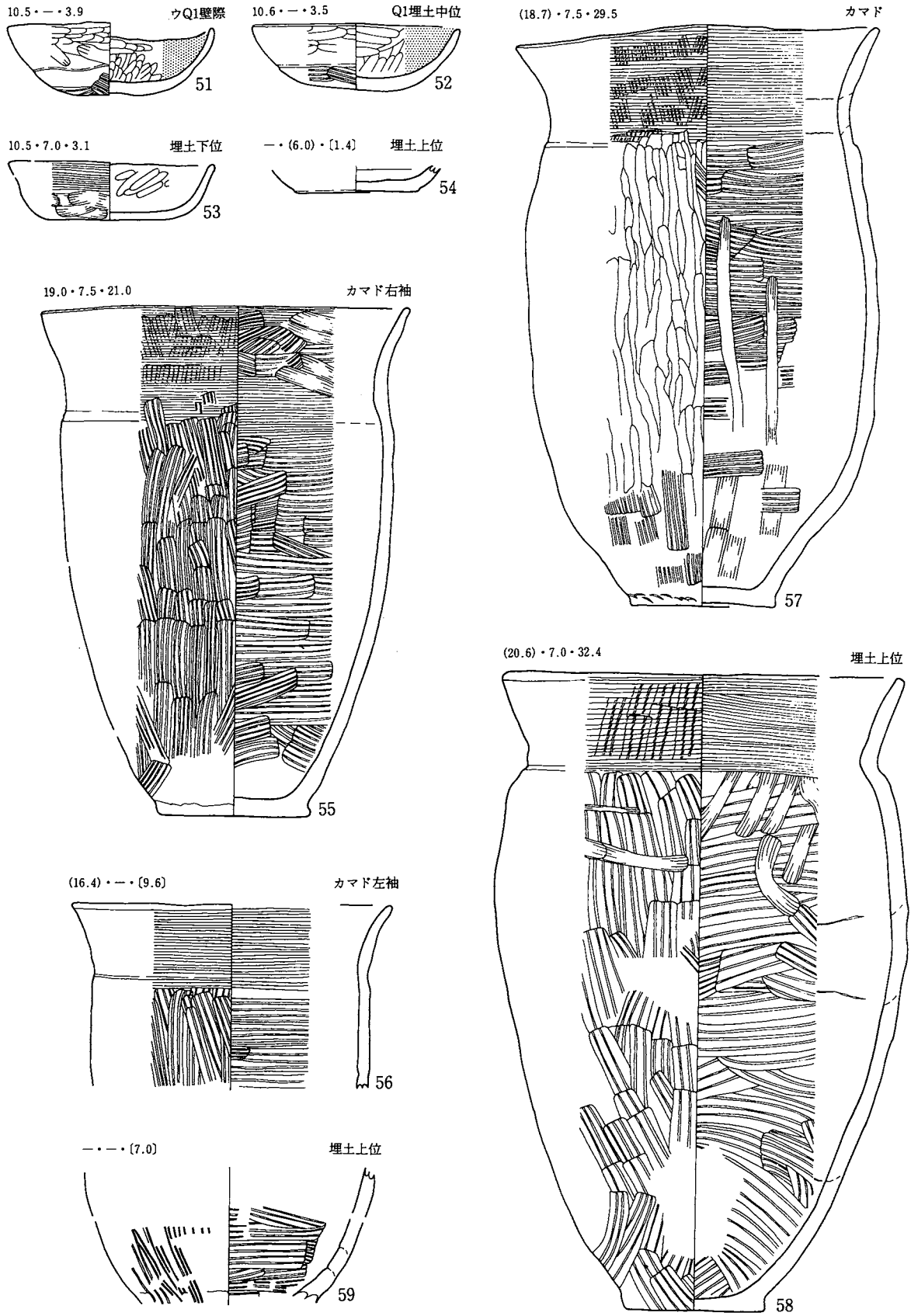
土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	48×38	52×41	38×36	30×30	32×25	116×66
深さcm	70	71	70	70	?	34

<他の施設> カマドの脇に貯蔵穴と思われる土坑P6がある。平面形は1.16×0.66m、深さは34cmで緩やかに掘り込んでいる。この土坑のカマド寄りから土師器が出土している。北東壁の北寄り、南東壁の中



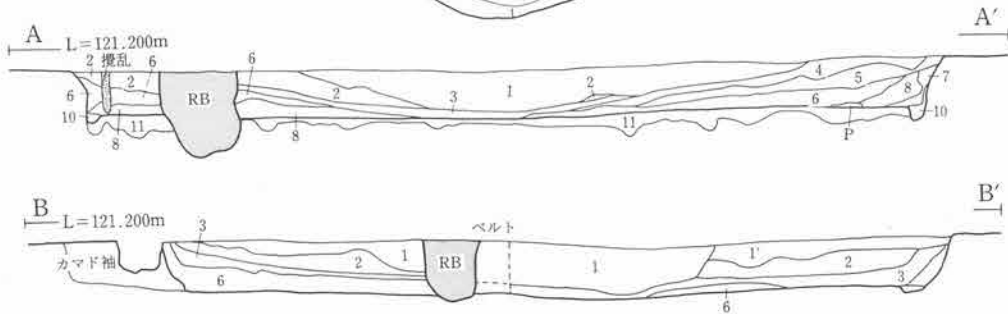
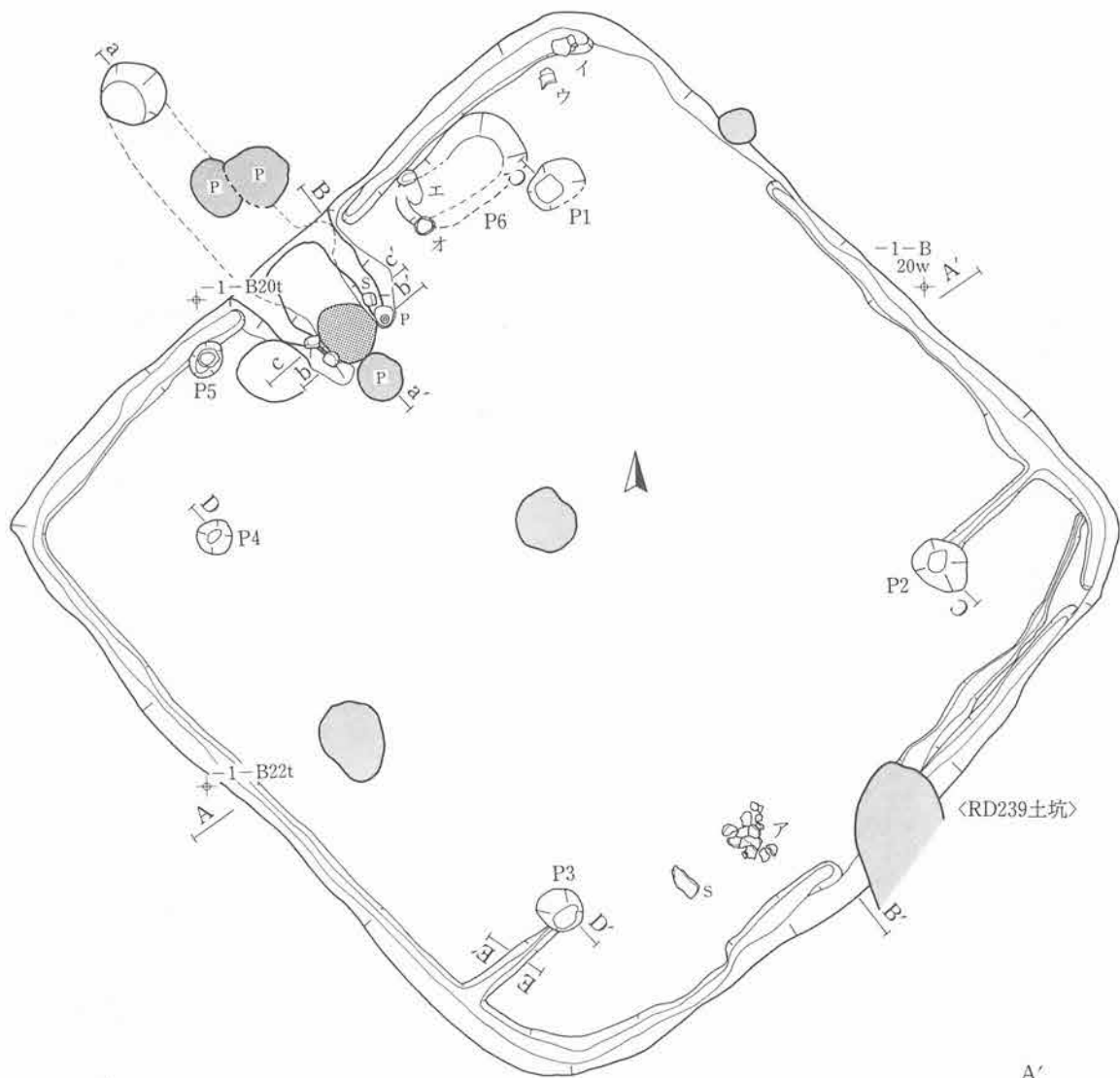
第28図 RA125竪穴住居跡





S=1/3

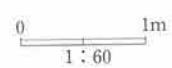
第29図 RA125竪穴住居跡出土遺物



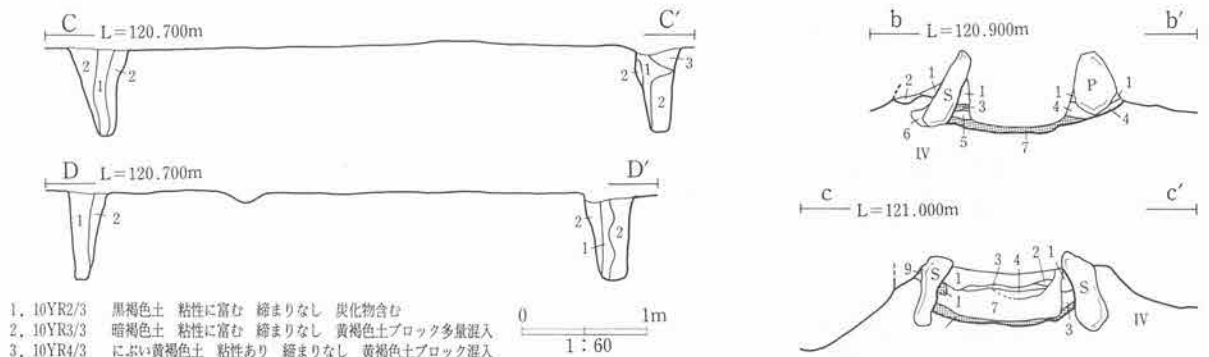
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック・黒色土ブロック多量混入
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒(砂質シルト)混入
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄灰色の粘土?を層状に混入
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 褐鉄少量含む
5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土粒混入
6. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 細かい砂質シルト粒混入
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性なし 砂質シルト層(IV層)の崩壊土
8. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 締まりなし
9. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック・黒色土粒微量混入
10. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 締まりなし
11. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 堅く締まる 黒色土・砂質シルトの混合土

E E'  
L=120.700m  
1 貼り床

1. 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(0.3~2cm大)混入

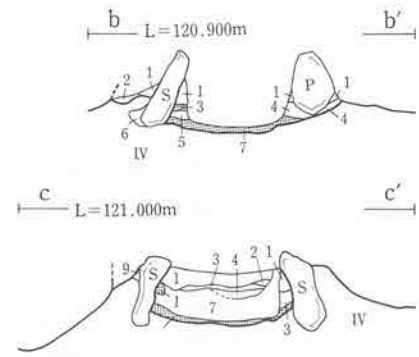


第30図 RA129竪穴住居跡(1)

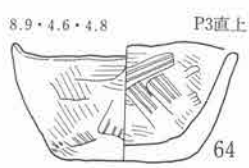
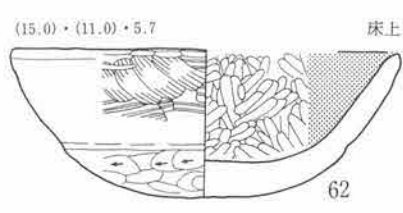
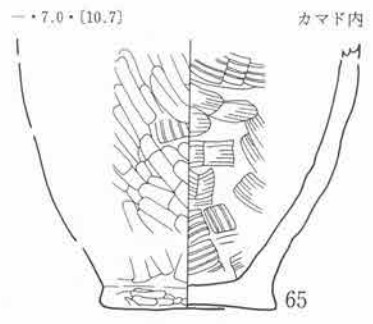
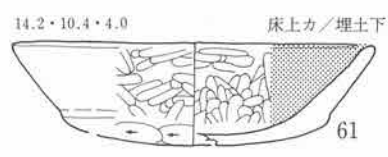
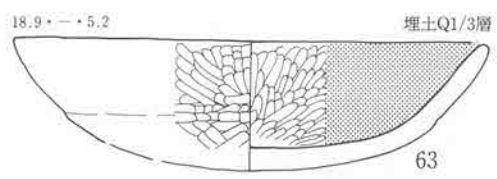
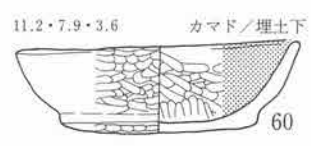
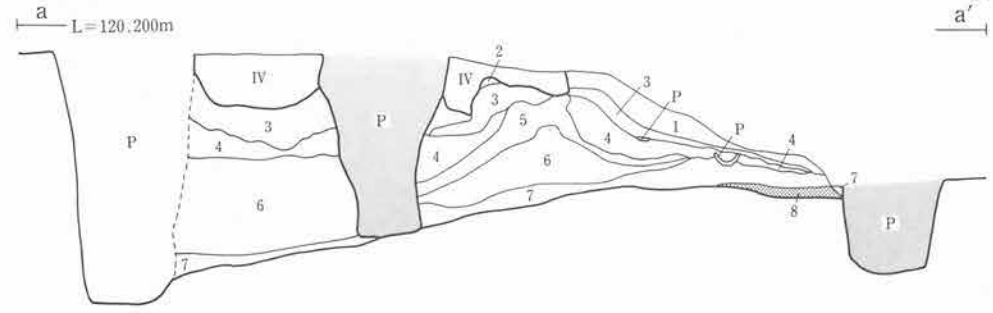


- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 炭化物含む
- 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土ブロック多量混入
- 3. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土ブロック混入

- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 締まりなし 焼土粒(0.3cm大)少量含む
- 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし
- 3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし
- 4. 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性なし
- 4' 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 締まりなし やや濡る
- 5. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 炭粉を含む
- 6. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 締まりなし
- 7. 5YR3/2 暗赤褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土粒混入 焼土・炭化物含む
- 8. 5YR4/4 におい赤褐色焼土 粘性ややあり 締まりなし 焼土ブロック(1cm大)含む
- 9. 10YR4/4 褐色土 粘性あり
- 10. 7.5YR3/4 暗褐色 粘性あり 締まりなし 焼土ブロック(1cm大)含む焼土層



- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 締まりなし 黄褐色土粒(0.3~0.5cm大)混入 焼土粒(0.5cm大)・炭化物(0.2~0.3cm大)含む
- 2. 7.5YR4/4 褐色土 粘性ややあり
- 3. 5YR4/6 赤褐色 粘性なし 黄褐色土粒(0.5cm大)少量混入 炭化物(0.5cm大)少量含む 焼土層
- 4. 7.5YR4/4 褐色土 粘性なし 焼土粒(0.2~0.3cm大)・炭化物(0.5~1cm大)含む
- 5. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黒色土ブロック(1~1.5cm大)混入
- 6. 10YR4/4 褐色土 粘性あり
- 7. 5YR4/4 におい赤褐色土 粘性ややあり 締まりなし 焼土ブロック(1cm大)含む焼土層

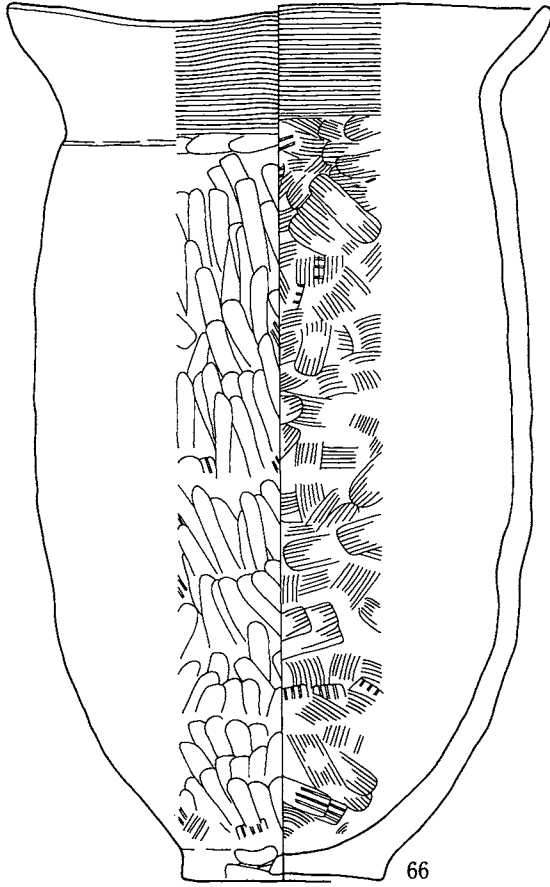


S=1/3

第31図 RA129竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)

21.2・7.9・34.2

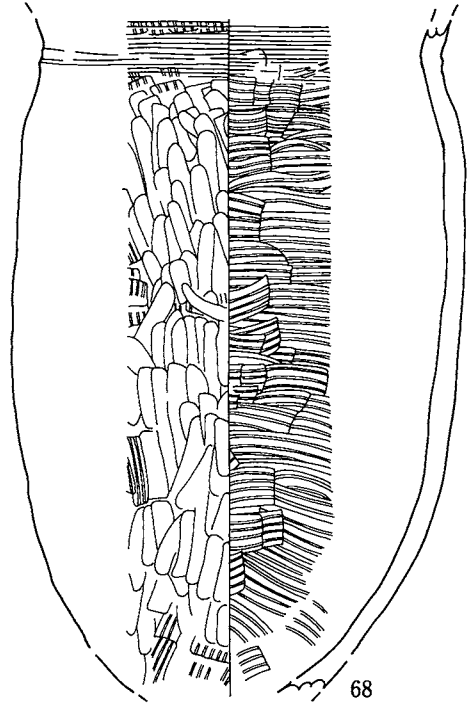
床上/埋土



66

--- (27.0)

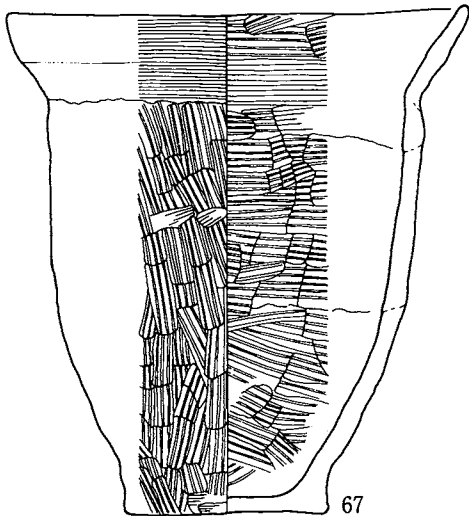
カマド右袖



68

18.3・8.1・20.3

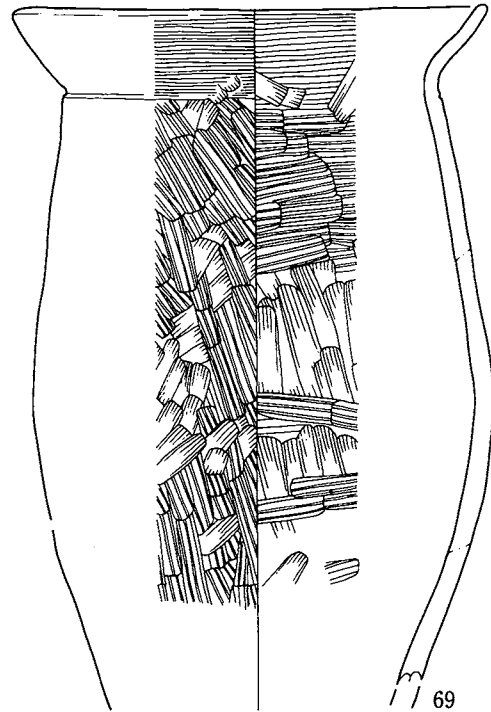
埋土下位



67

18.8・一・(22.9)

床上/埋土下位



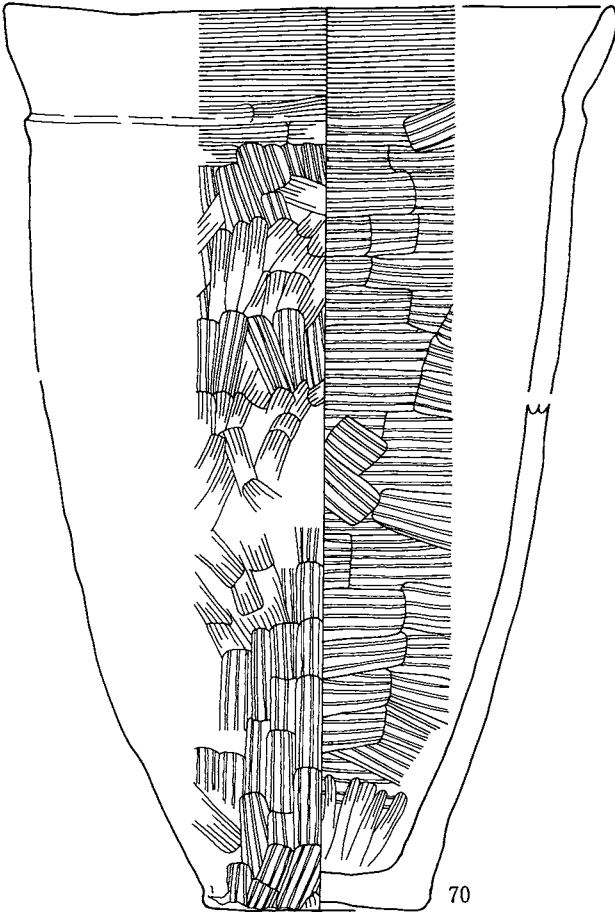
69

S=1/3

第32図 RA129竪穴住居跡出土遺物(2)

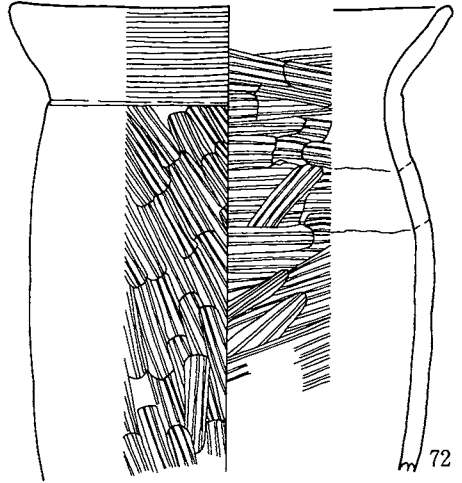
(23.8)・8.6・35.4

床上/埋土



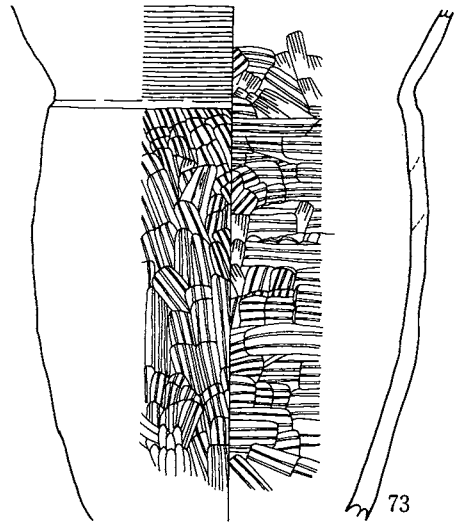
(17.2)・一・(18.7)

床上/カ



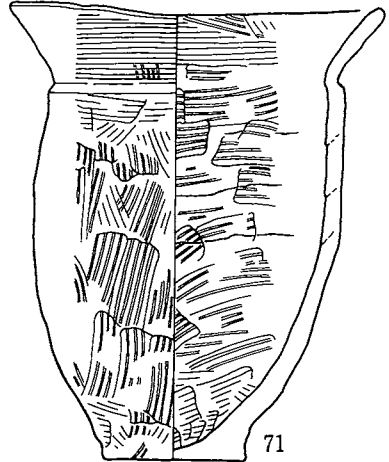
一・一・(20.1)

カマド脇



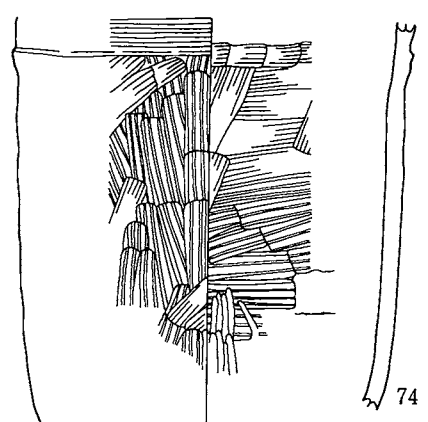
15.0・5.6・18.2

床上/エ



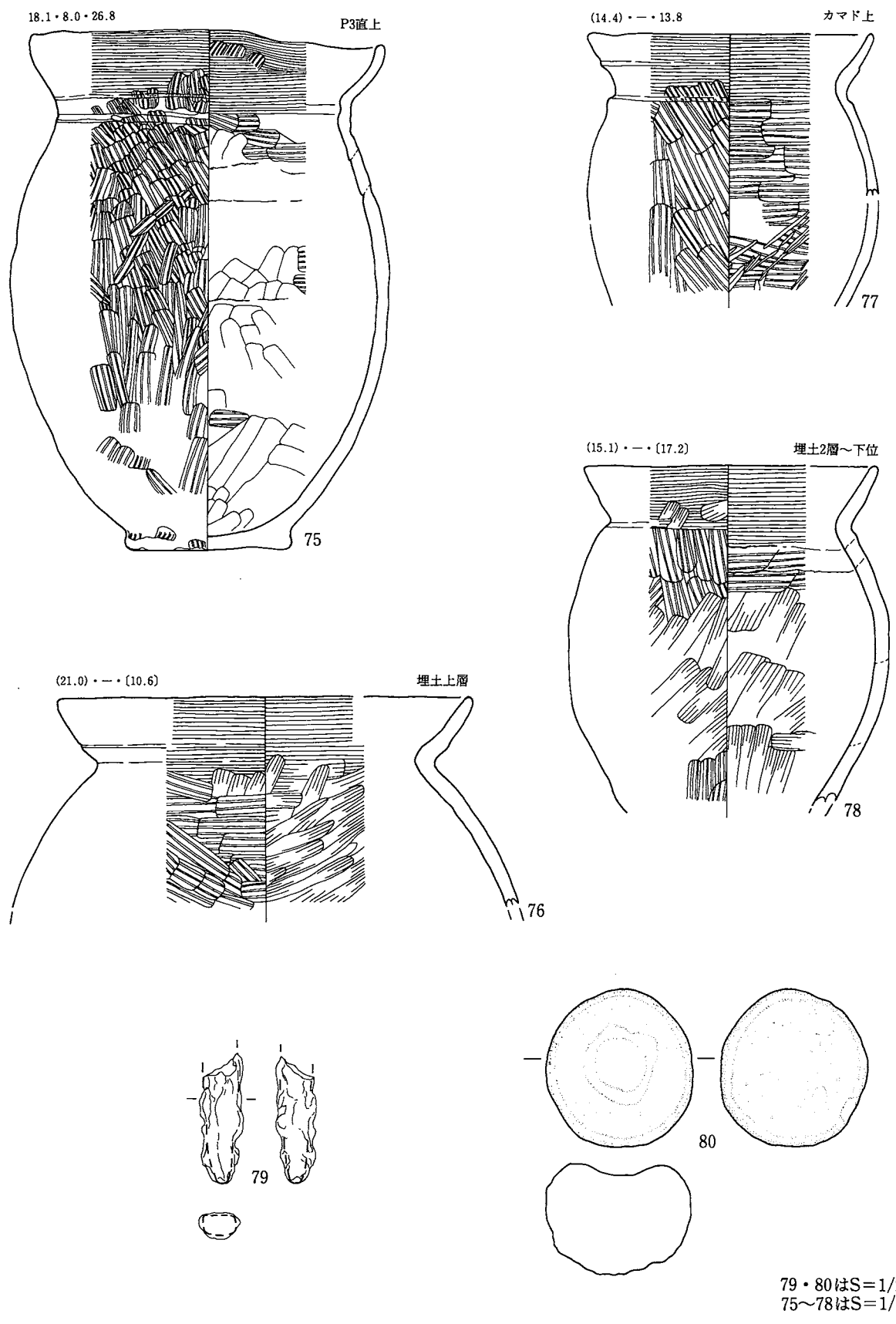
一・一・(16.0)

床上/オ



S=1/3

第33図 RA129竪穴住居跡出土遺物(3)



第34図 RA129竪穴住居跡出土遺物(4)

央を除いて壁際に溝が巡っている。幅は10～28 cm、深さ6～12 cmである。さらに、P 2とP 3からそれぞれ北東壁、南西壁に向かって間仕切り状の溝が検出された。長さが2.2 m、幅は11～20 cm、深さ約13 cmである。

<カマド> 北西壁のほぼ中央に設置している。天井は崩落しており、袖の一部は近世の掘立柱建物跡の柱穴によって破壊されているが、比較的残りは良く、袖は煙道に向かうに従いオーバーハングしている。袖は砂質シルトの基盤層を削り出して構築しているが、手前に土師器長胴甕の口縁と底部を欠いたものと、平たい角礫を両側に埋め込んで芯とし、奥に細長い円礫を両袖の内側の地山に据えて支えとしている。燃烧部は径52×44 cm、厚さ4 cmの焼土が形成されている。カマド内の埋土は崩落した天井と思われる黄褐色シルトが主である。

煙道部は一部が掘立柱建物跡の柱穴に切られているが、長さ2.10 mの削り貫き式で、燃烧部から緩やかに下り、煙出し部でさらに急に下がる。埋土の最下層は炭や焼土粒の混入する暗赤褐色土が堆積する。煙出し部は径55×52 cm、深さ1.02 mの円形土坑が掘り込まれている。

<遺物> 主に南東側中央部付近の床上と北西壁際、カマド周辺床上、カマド袖、P 5、P 6の埋土中からロクロ不使用の土師器が出土している。60はカマド内と埋土下位から出土した破片を接合した内面黒色処理された坏である。61・62は床面から、63は埋土から出土した内面黒色処理の坏である。64は手捏ねの小型の土器で、黒色処理は施されていない。内外面にナデ、ハケメが施されている。底部外面に木葉痕を残す。65はカマド内から出土した甕の体部下半で、支脚として使用されていたと考えられる。68はカマド右袖の芯に使用されていた甕で、天地逆に据えられていた。口縁部と底部を欠いている。66・69～72・74・75は床上から出土した甕である。71は小型の甕で、底部にハケメが残る。79は鉄製品で、P 1内埋土から出土している。80は凹石で、円礫の一面が浅くくぼんでいる。

<時期> 出土遺物から奈良時代と考えられる。 (金子)

#### R A 130 竪穴住居跡 (第35～39図、写真図版17・18・207～210)

<位置・重複関係> 調査区北西側の-1-B区の南寄りに位置する。住居跡のほぼ全面が掘立柱建物跡(近世)の柱穴と重複する。新旧関係は(新)掘立柱建物跡→(旧)R A 130 竪穴住居跡である。検出はIII層下位である。<平面形・規模> 隅丸の方形を呈する。北東側の辺はやや胴張り気味である。一辺の長さは4.10×3.90 m(下場で計測)である。

<埋土> 7層に細分され、上層は黄褐色土や黒色土ブロックを含む黒褐色土で、下層は黄褐色土の粒やブロックを多量に含む黒褐色土である。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がる。壁高は最大で44 cmである。床は平坦で堅く締まる。貼り床はない。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4
直径cm	34×?	30×28	32×28	32×30
深さcm	51	34	41	50

<柱穴> 4基検出されたが、うち1基は掘立柱建物跡の柱穴P 316に切られている。平面形は円形を基調としている。<他の施設> カマド東～東のコーナーから南東壁の北寄りを除いて周溝が巡る。幅は5～15 cm、深さ8 cmである。一部に幅4 cm、深さ12 cmほどの黒色の板の痕跡と思われる埋土が見られる。そのほか、床面ではP 1～P 4間、P 3～P 4間を結ぶように溝状に小さく蛇行している細長いプランがある。幅は5～10 cmでごく浅い。不明瞭な部分があり、溝としては検出できなかった。

<カマド> 北東壁のほぼ中央に設置している。袖はIV層を削り出して造っているが、燃烧部の部分はやや細長い円礫を芯としている。袖は主に手前がオーバーハングしている。天井として被覆した粘土は落ちてカマド内の上層に堆積している。燃烧部には57×62 cm、厚さ7 cmの焼土が不整形に形成されている。支脚と

して使用されたと思われる礫が焼土とその奥に2個、前後に並んで検出された。袖の内部壁も焼けて焼土化している。焼土の手前には54×32 cmの範囲に炭化物が広がっている。カマド内に堆積していた埋土から、骨片が数点出土している。これらはほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。

煙道部は長さ1.45 mの削り貫き式で燃焼部から水平に延び、煙出しでやや落ち込む。煙道内に堆積している埋土の下層には、炭や焼土が多く含まれている。煙出し部は掘立柱建物跡の柱穴に切られているが、径47 cmほど、深さ52 cmの円形を呈する土坑が掘り込まれている。

<遺物> 床面、埋土中から多くの遺物が出土した。埋土中の遺物はカマドの南側、東のコーナー付近、南東壁際、南のコーナー付近からロクロ不使用の土師器が多く出土している。特にカマド付近からは埋土の最上層からの出土が多い。南東壁際付近の埋土最下層からは、この他に拳大の扁平な礫が30個ほど集中して出土した。床面からはカマドの右袖付近や南東壁際から多く出土したが、この部分は埋土からも遺物が集中している部分である。床面からは81・84・85のロクロ不使用の土師器坏、86・89・90の小型の甕、88の壺、92・93の長胴甕、102・103の胴部がやや球胴状になる甕が出土した。105は小型の甕としたが鉢かもしれない。

坏のうち81・82は平底で、特徴的な器形である。81の底部は中央が非常に薄く作られている。また、82は内外面に段を持つ。84・85は外面下半～底部にハケメが施される。89・104は底部に木葉痕を残す。95・98は埋土から出土した甕であるが、R A 133 竪穴住居跡埋土出土の破片と接合している。106は埋土から出土した礫で、敲打痕が認められる。

<時期> 出土遺物から古墳時代末から奈良時代の住居跡と考えられる。 (金子)

#### R A 132 竪穴住居跡 (第40～44図、写真図版19・20・210～212)

<位置・重複関係> 調査区北西の-1-A区に位置する。東壁をR D 758土坑、東側から北側をR G 070、R G 072溝跡、南側をR G 069溝跡、R B 006、近世の柱穴と重複し、いずれの遺構よりも本遺構が古い。検出はIII層下位～IV層上面である。

<平面形・規模> 南側がやや胴張りの方形である。規模は4.70×4.77 mである。

<埋土> 6層に細分され、黒褐色土が主体であるが下層になるに従って、IV層起源の黄褐色土や炭粒の混入が多い。<壁・床> 壁はやや内湾気味に立ち上がり、壁高は26 cmである。床は貼り床で、IV層起源の黄褐色土とIII層起源の黒褐色土の混合土である。床面は平坦で、堅く締まっている。

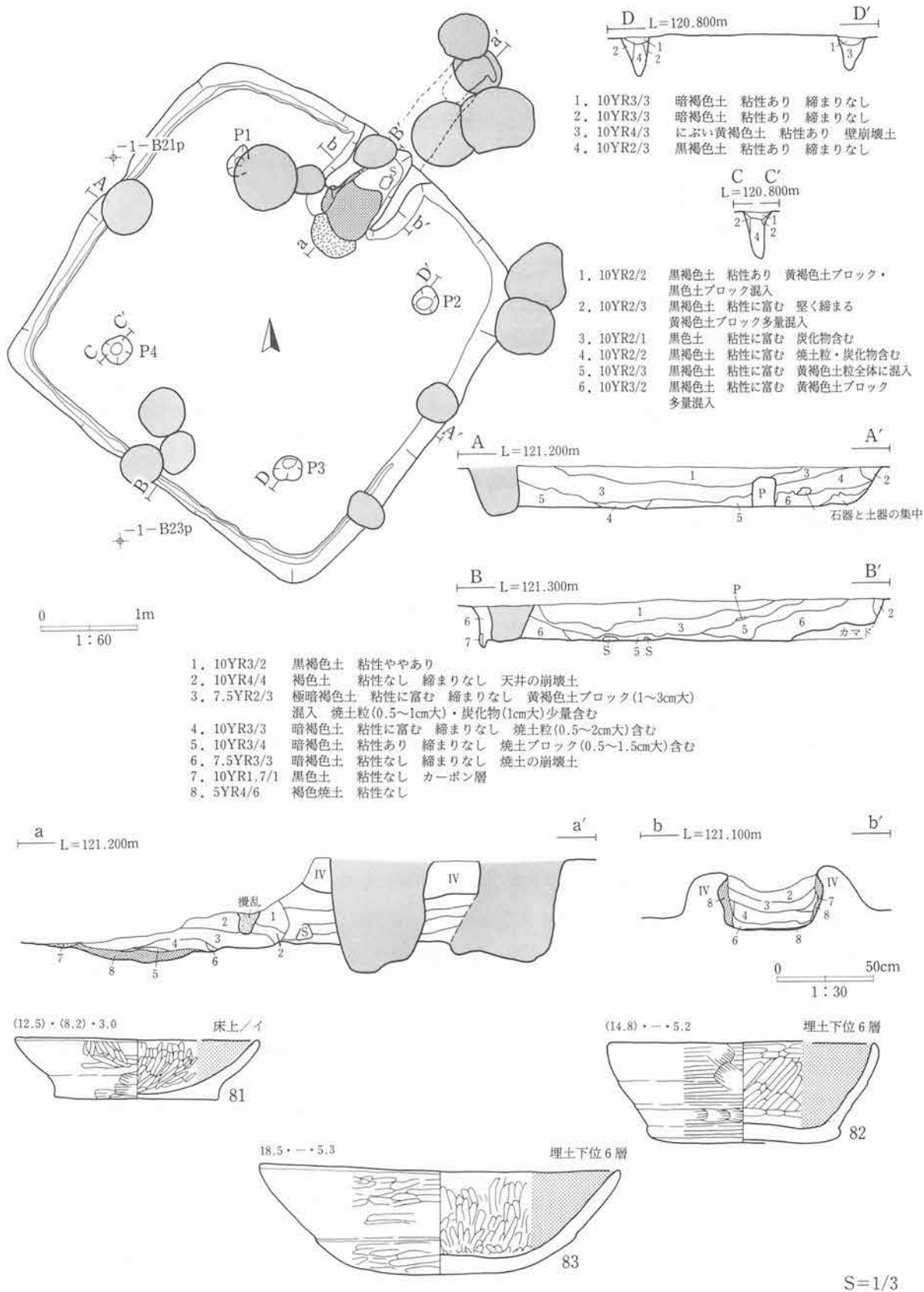
<柱穴> 4基検出された。4基とも径8～18 cm程度の柱痕が認められる。平面形は円形が主体であるが、胴張りの方形に近いものもある。

<他の施設> 北西隅を除き、3カ所のコーナーから土坑

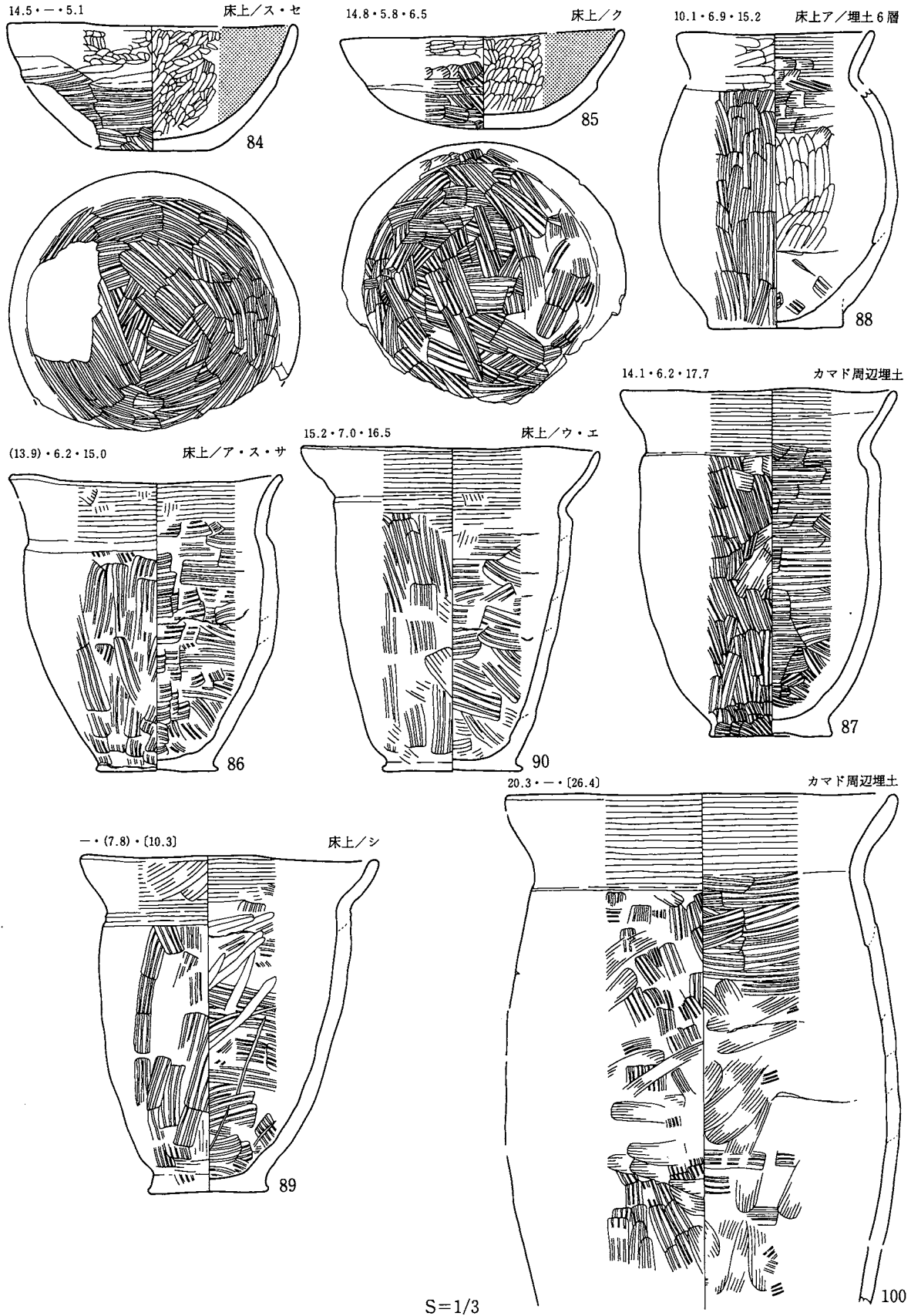
土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
直径cm	32×31	32×27	35×23	30×30	50×35	100×75	60×50
深さcm	38	29	36	47	11	18	23

が検出された。P 5は、ごく浅い不整形の土坑で、すぐ脇から球胴甕が出土している。P 6の埋土には焼土や炭、骨片が含まれている。P 7は混入物の少ない黒褐色土で埋め戻されている。壁際に北壁の一部と西壁の南よりを除いて、壁溝が巡っている。幅は7～13 cm、深さ8～10 cmである。床面からは間仕切り状の溝が5条検出されている。溝1～溝3は壁から床面に向かって延びている。溝1は長さ81 cm、幅10～21 cm、深さ7 cm、溝2は長さ1 m、幅7～21 cm、深さ9～14 cmで、先端が柱穴状に深くなっている。溝3は長さ96 cm、幅6～12 cm、深さ11 cmである。溝4は西壁に沿って検出され、両端は柱穴状の小穴となっている。長さは2.7 m、幅6～12 cm、深さ3 cmである。溝5は壁に近い床面からP 4に向かって延びており、長さ58 cm、幅6





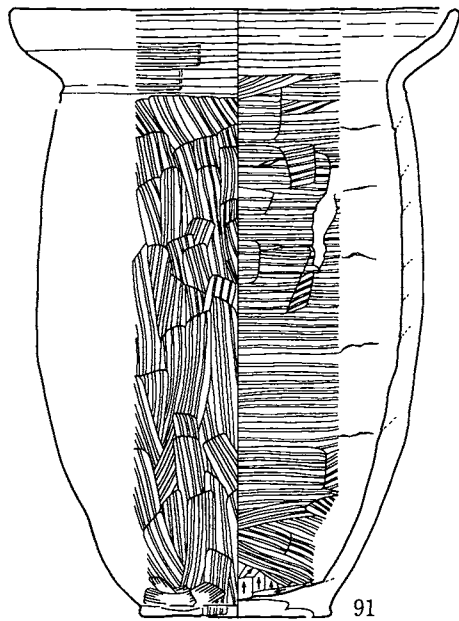
第35図 RA130竪穴住居跡・出土遺物(1)



第36図 RA130竪穴住居跡出土遺物(2)

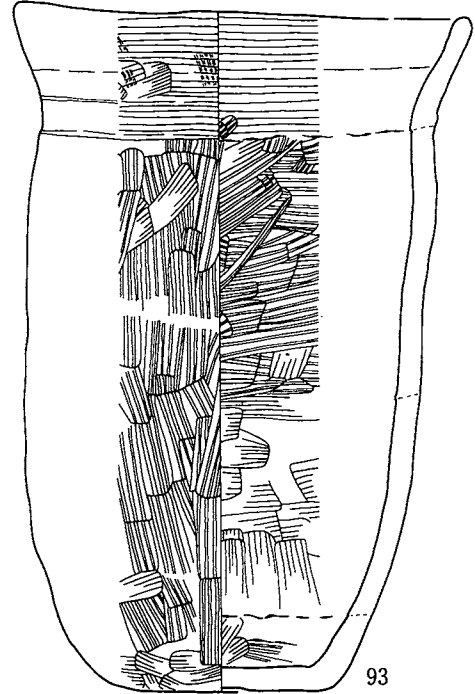
(17.7)・(7.5)・24.8

埋土壁際6層



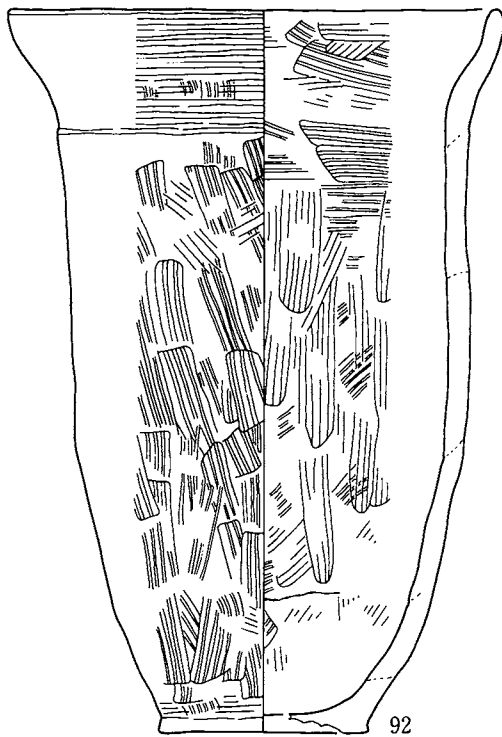
18.4・8.0・27.5

床上/カ・セ6層



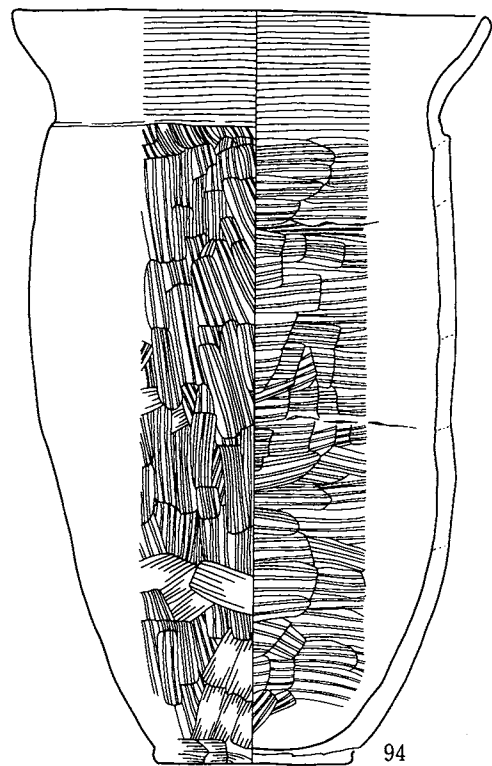
19.3・8.2・28.4

床上/カ・ケ・シ



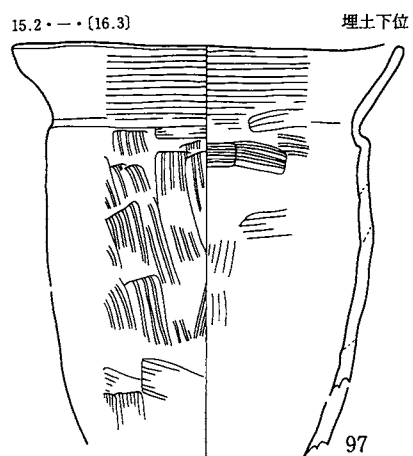
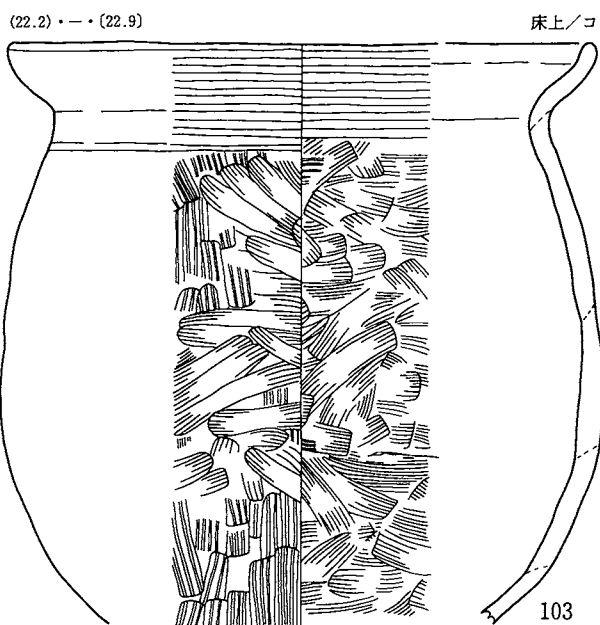
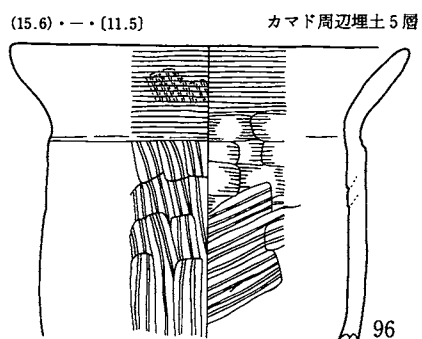
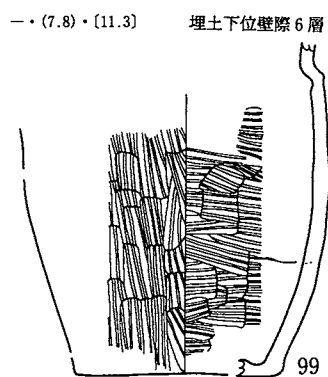
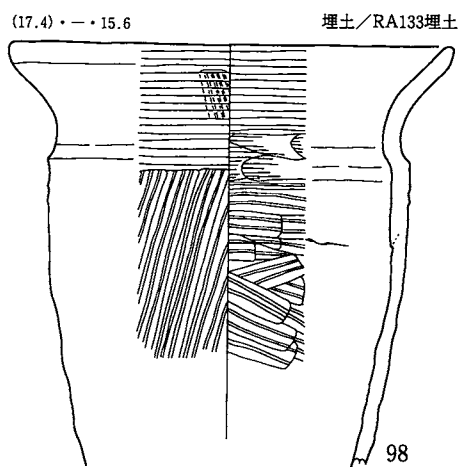
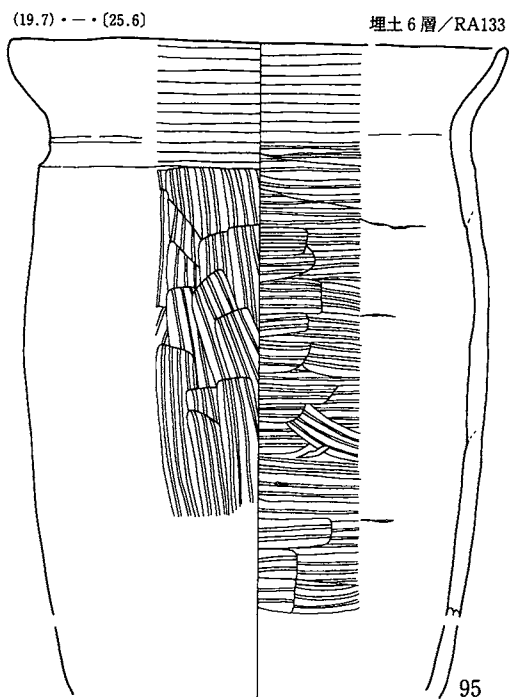
18.9・(9.0)・30.0

埋土下位



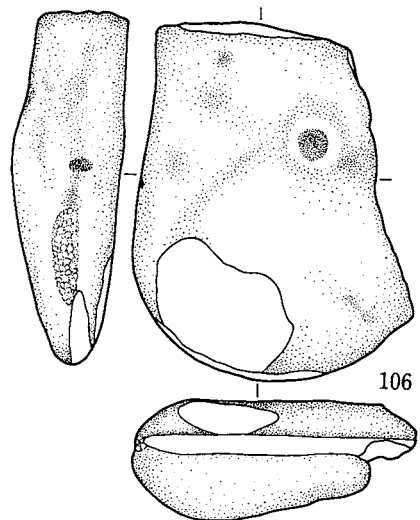
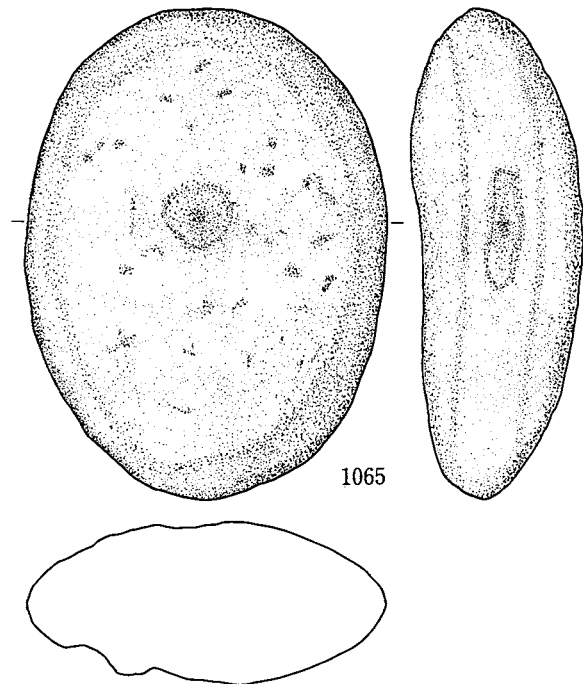
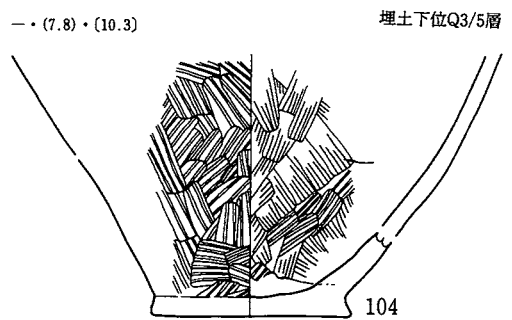
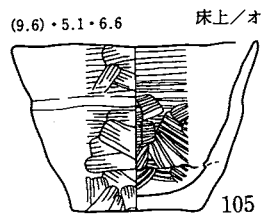
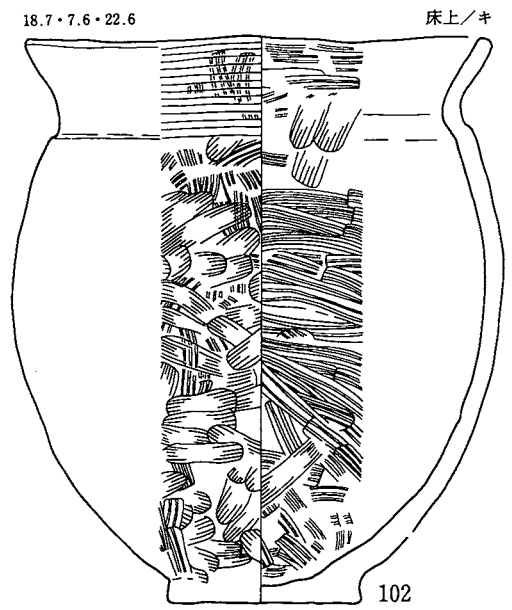
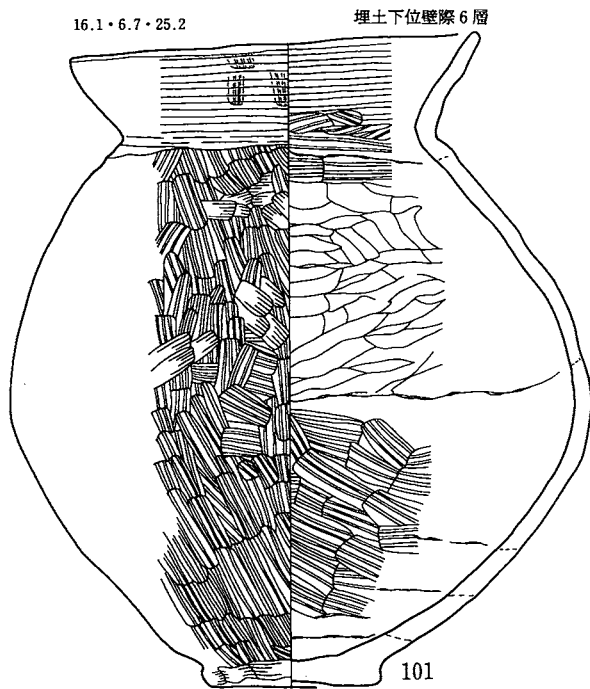
S=1/3

第37図 RA130竪穴住居跡出土遺物(3)



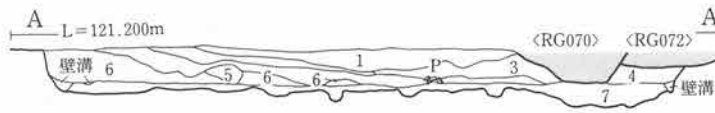
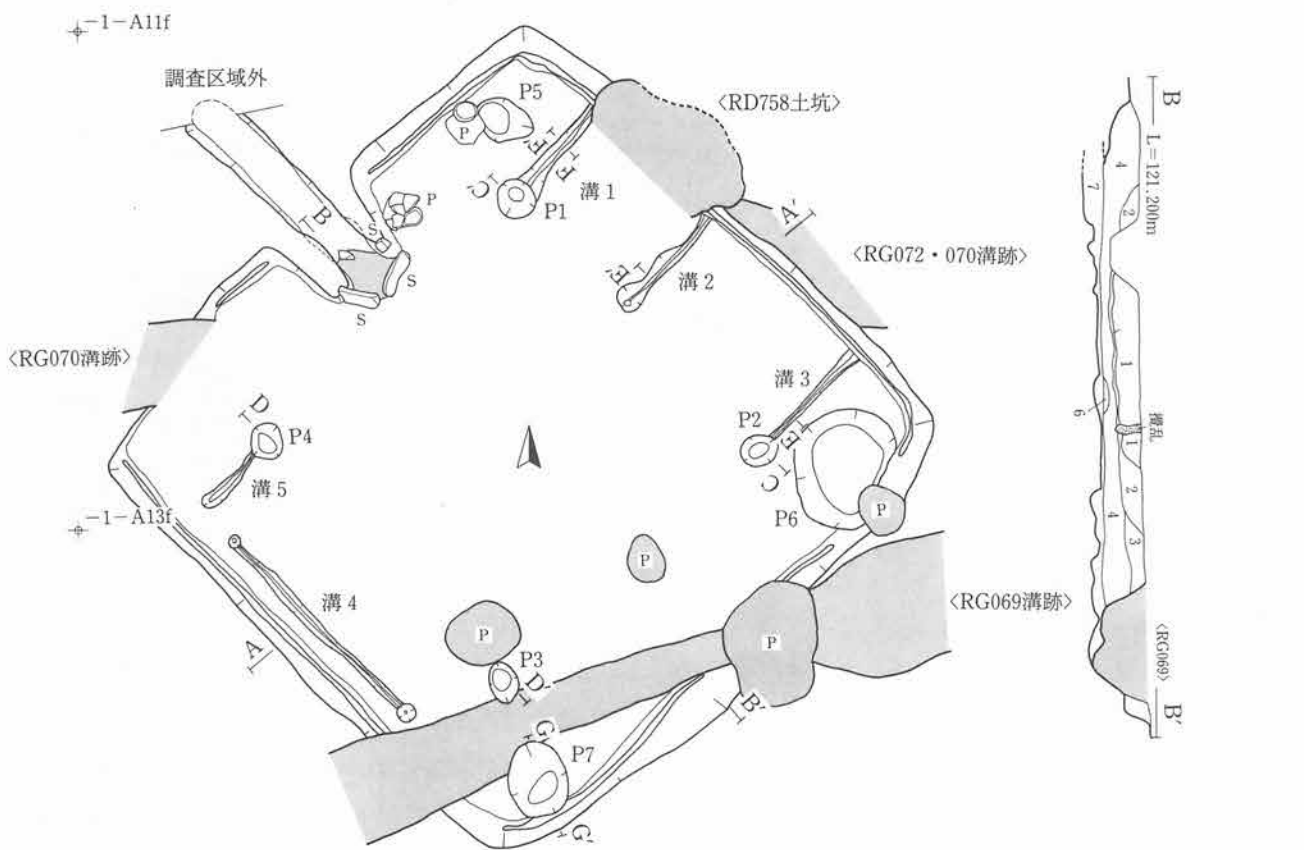
S=1/3

第38図 RA130竪穴住居跡出土遺物(4)



106・1065はS=1/2  
他はS=1/3

第39図 RA130竪穴住居跡出土遺物(5)



- |    |             |        |      |                                    |
|----|-------------|--------|------|------------------------------------|
| 1. | 10YR2/2     | 黒褐色土   | 粘性なし | 黄褐色土粒少量混入                          |
| 2. | 10YR3/2     | 黒褐色土   | 粘性なし | 黄褐色土粒多量混入                          |
| 3. | 10YR2/3     | 黒褐色土   | 粘性なし | 黄褐色土混入                             |
| 4. | 10YR2/3     | 黒褐色土   | 粘性なし | 炭粒含む                               |
| 5. | 10YR3/4     | 暗褐色土   | 粘性あり | 黄褐色土ブロックを非常に多量含む                   |
| 6. | 10YR2/3     | 黒褐色土   | 粘性なし | 黄褐色土多量混入                           |
| 7. | 10YR3/2-4/4 | 黒褐〜褐色土 | 粘性あり | IV層起源の褐色土にIII層起源の黒褐色土をブロック状に含む 貼り床 |

C L=121.100m

C'

D L=121.100m

D'



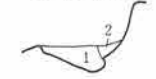
- |    |         |      |        |         |
|----|---------|------|--------|---------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性あり   |         |
| 2. | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性あり   | 締め戻し 柱痕 |
| 3. | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性ややあり | 埋め戻しの土  |

L=121.000m

E L=121.100m

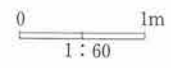
E'

G L=121.300m

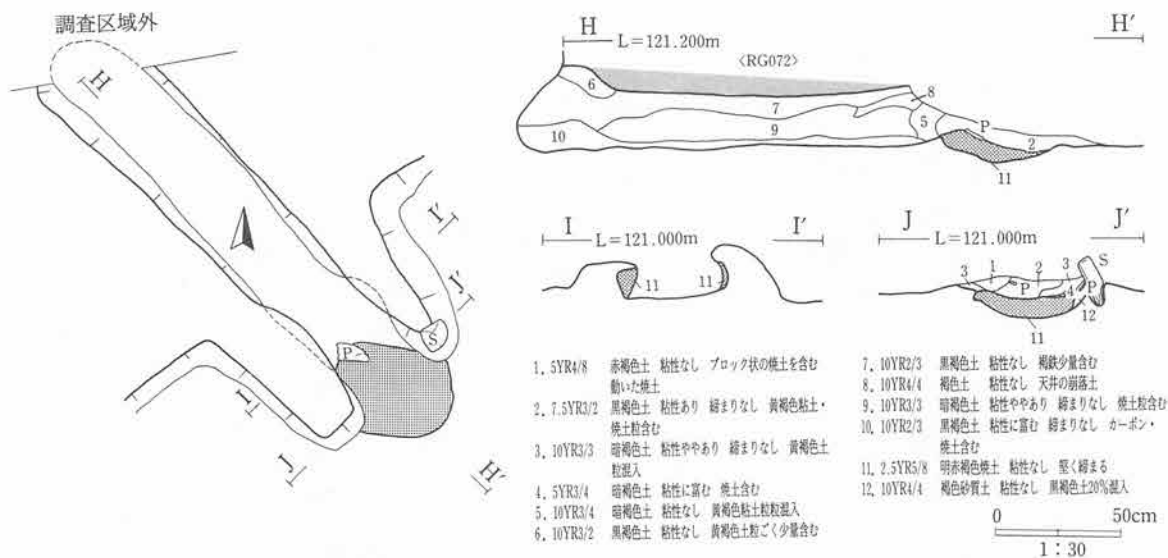


- |    |         |      |      |          |
|----|---------|------|------|----------|
| 1. | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性なし | 黄褐色土少量混入 |
|----|---------|------|------|----------|

- |    |         |      |      |          |
|----|---------|------|------|----------|
| 1. | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性あり | 締め戻しの土か？ |
| 2. | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性あり | 埋め戻しの土か？ |



第40図 RA132竪穴住居跡(1)



第41図 RA132竪穴住居跡(2)

～11 cm、深さ5 cmである。

<カマド> 北西壁のほぼ中央に位置する。天井は崩落し、崩落土の上と焚き口付近に長方形の礫が2個出土した。袖はIV層を削り出して造られているが、手前焚き口は長方形の角礫や黄褐色土で補強し、内側は内湾している。燃烧部には焼土が最大厚9 cmの厚さで堆積しており、袖内側も焼土化している。燃烧部の焼土直上から土師器甕の底部が出土している。煙道部は上面がRG 072に削られているため、切り貫き式か掘り込み式かは不明である。長さは1.25 m、幅は37 cmである。底部は燃烧部からはほぼ水平に延び、煙出し部で僅かに下がる程度である。埋土は焼土や炭粉を含む黒褐色土や暗褐色土が主体である。

<遺物> 床面や埋土からロクロ不使用の土師器が出土している。器種は坏、甕、球胴甕、壺である。床面カマド右脇の東コーナーから完形の球胴甕116、甕114、床面のほぼ中央からは壺115、坏107が出土した。そのほか埋土下層からも甕111などが出土している。119の須恵器甕破片は流れ込みと考えられる。120・121は埋土から出土した敲痕跡のある礫、122は埋土出土の砥石である。

<時期> 出土遺物から古墳時代末～奈良時代に属すると考えられる。

(金子)

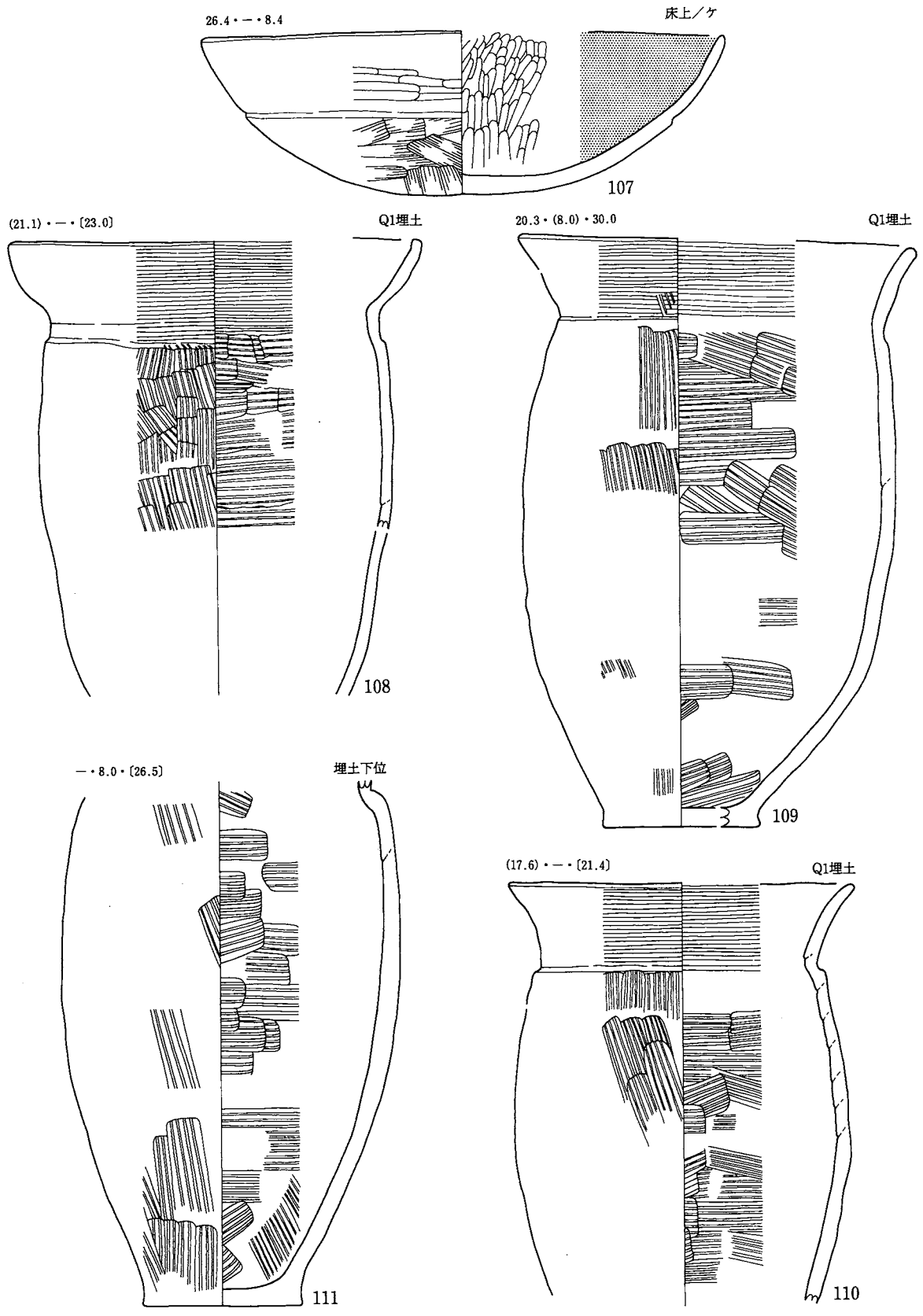
RA 133 竪穴住居跡 (第45・46図、写真図版21・22・212・213)

<位置・重複関係> 調査区北西の-1-A区南西に位置する。東壁をRD 228土坑、西壁をRD 229土坑、住居南東部をRD 259土坑、柱穴状土坑数基と重複している。新旧関係は当遺構が切られていることから、(新) RD 228土坑、RD 229土坑、RD 259土坑、柱穴状土坑→(旧) RA 133 竪穴住居跡である。検出はIII層下位～IV層上面である。また、東側の一部に攪乱を受けている。また、上面はかなり削平されているものと考えられる。

<平面形・規模> ややいびつな隅丸長方形を呈する。一辺の長さは4.25×4.43 mである。

<埋土> 5層に細分され、黄褐色土粒を含む堅く締まった黒色土が主体である。<壁・床> 壁は外傾して立ち上がる。壁高は23 cmである。床面はほぼ平坦で、貼り床が施される。貼り床は2層に細分されるが、2時期に亘るものではない。砂質シルトや黒色土のブロックを多く含んでおり、上面は堅く締まる。

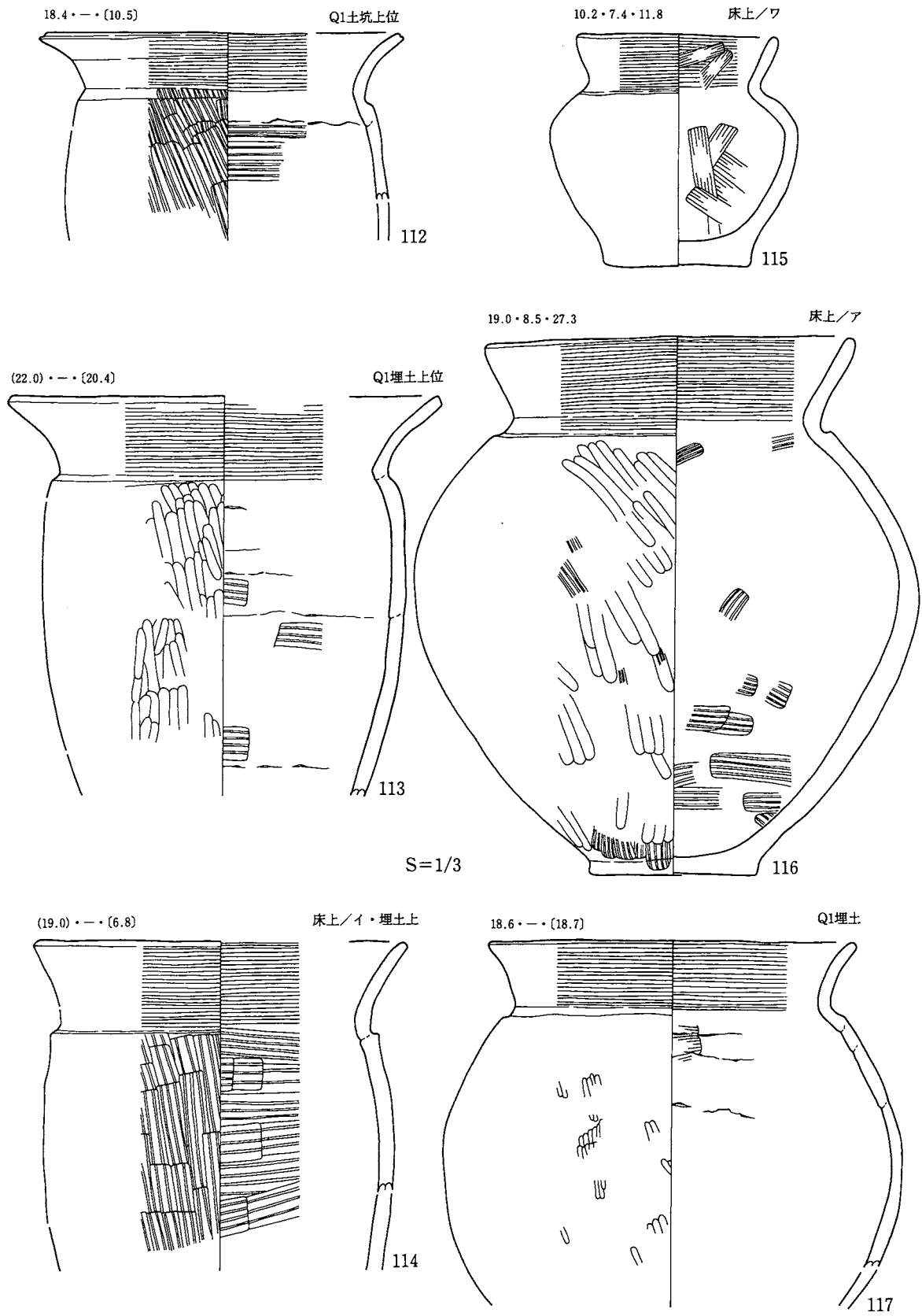
土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	70×64	36×30	100×72	68×58	45×40	56×50
深さcm	35	61	45	27	17	42



S=1/3

第42図 RA132竖穴住居跡出土遺物(1)

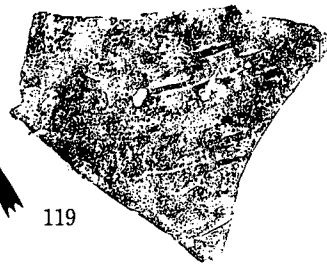
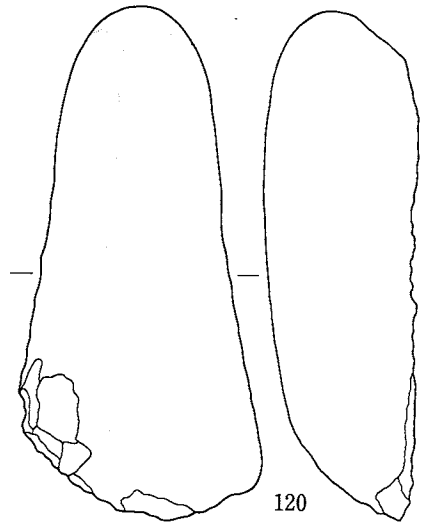
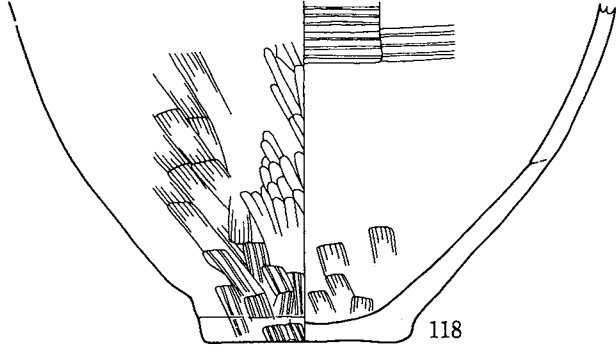




第43図 RA132竪穴住居跡出土遺物(2)

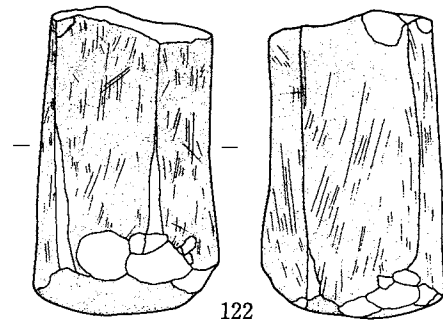
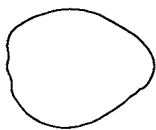
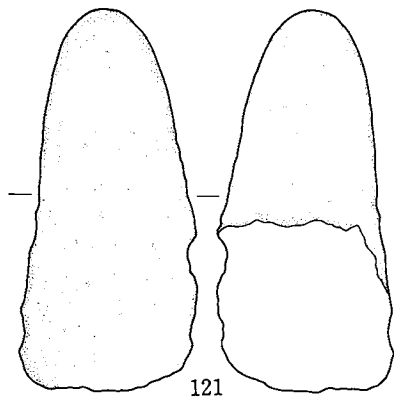
— 8.2・(12.5)

床上/ウ

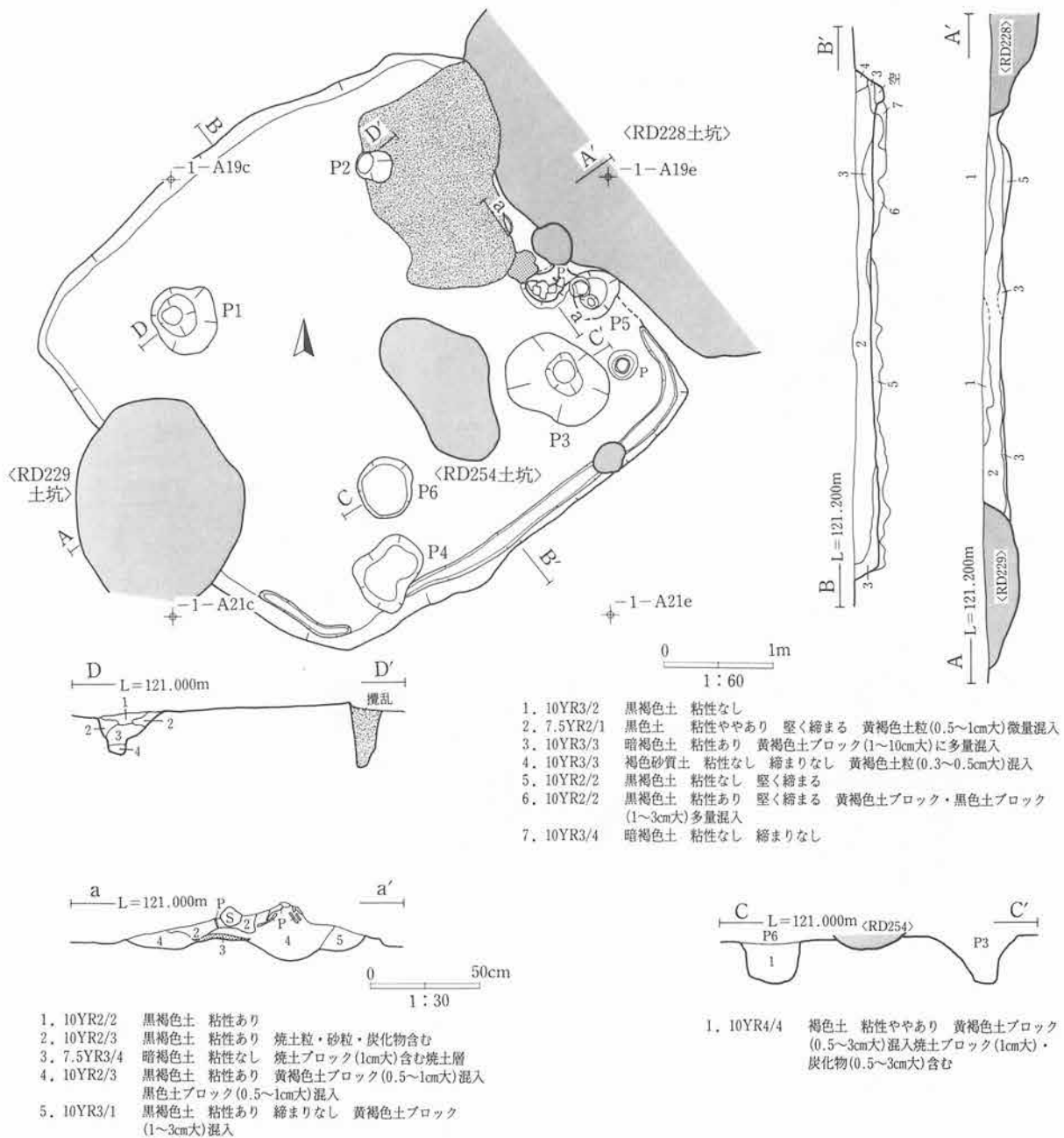


119

120~122はS=1/2  
118・119はS=1/3



第44図 RA132竪穴住居跡出土遺物(3)

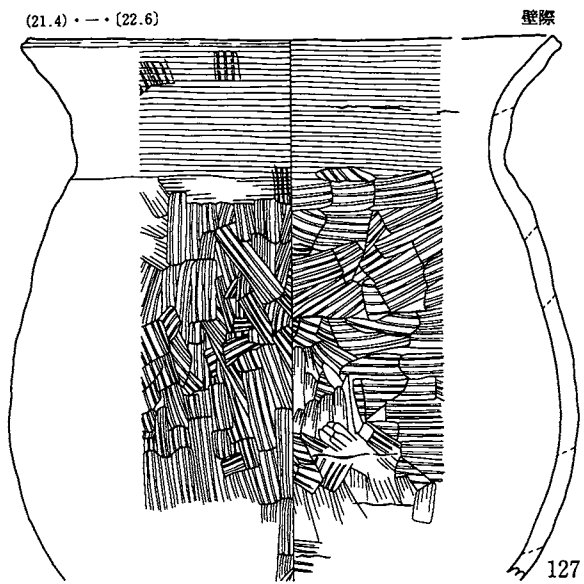
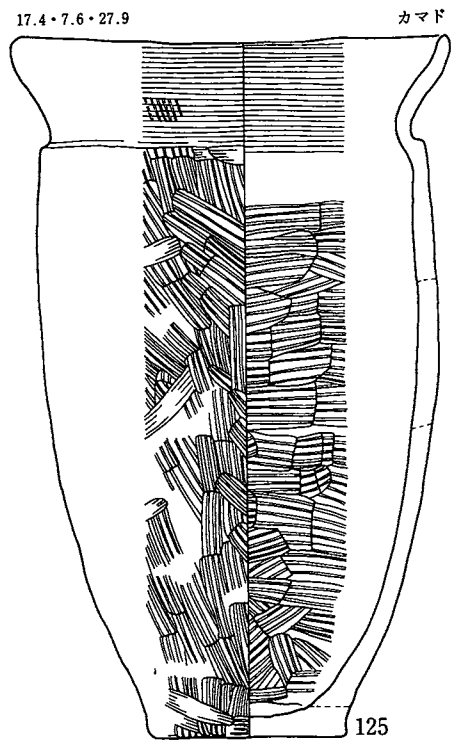
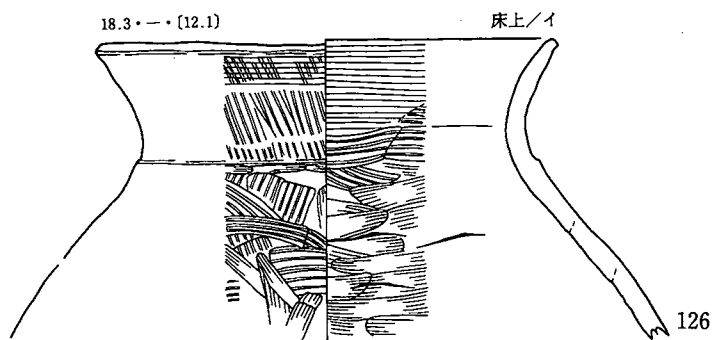
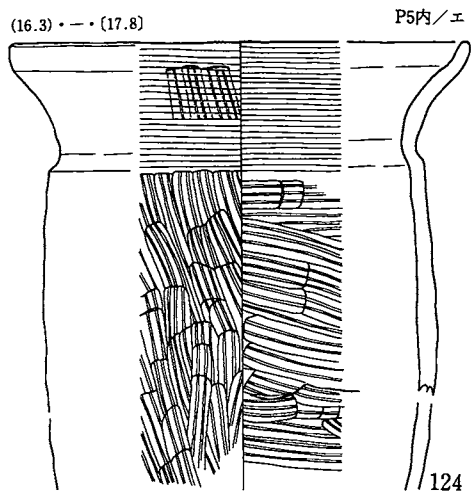
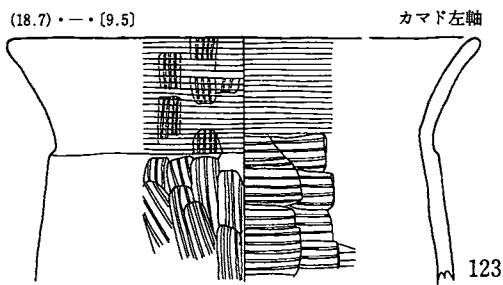


第45図 RA133竪穴住居跡

〈柱穴〉 6基の柱穴状土坑が検出されたが、支柱穴は位置や深さからP1、P2、P3、P6と考えられる。P2は上面が攪乱によって削平されている。P3は上面が広がり、断面形は漏斗状を呈している。

〈他の施設〉 南壁と南東、南西コーナーにかけて壁溝が検出された。幅は7~16cm、深さ6cmである。床面P1の南西壁よりの西側から白色粘土が5×5cmほどの範囲で検出された。

〈カマド〉 東壁のほぼ中央に位置している。カマドの向かって左袖と燃烧部の一部は攪乱によって、煙道と煙出しは柱穴状土坑と、RD228土坑によって削平されている。残る右側の袖もかなり削平され、袖上の土器も破片の状態で検出された。そのため袖の詳細は不明であるが、黄褐色土ブロックや黒色土ブロックが混入する黒褐色土で構築され、土師器甕を芯としていたものと考えられる。左袖からも芯としていたらしい円礫と土師器甕の胴部も直立して出土している。燃烧部は径29×25cmの不正円形に焼土が形成されている。



S=1/3

第46図 RA133竪穴住居跡出土遺物

焼土の厚さは2cmである。カマド埋土から骨片が出土している。これらはほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。

<遺物> カマドの両袖やカマド脇、壁際からロクロ不使用の土師器が出土している。カマド右袖に125、左袖に123が焚き口袖の芯材として使用されていた。126は球胴甕の上半部であるが、カマド右側の住居東コーナーに正位で据えられていたものである。124はカマドのすぐ右側の小土坑P5壁際から出土した。127は住居南東壁の壁際から出土した甕の破片である。

<時期> 出土遺物から奈良時代と考えられる。 (金子)

#### R A 135 竪穴住居跡 (第47・48図、写真図版213・214)

<位置・重複関係> 東側調査区の西寄りの1B区に位置している。東側で平安時代のR A 154 竪穴住居跡、中世のR B 009 掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は本遺構が切られていることから、(新)R B 009 掘立柱建物跡→R A 154 竪穴住居跡→(旧)R A 135 竪穴住居跡である。検出はⅢ層下位～Ⅳ層上面である。<平面形・規模> 重複している事から平面形と規模の詳細は不明である。検出された南西辺は3.58m、北西辺が3.98mを測り、コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は暗褐色シルトを主体とする5層に細分され、黄褐色土粒と下位に炭化物を含んでいる。<壁・床> 壁は直立気味に立ち上がり、壁高は南西壁42cm、北西壁29cmである。床面はほぼ平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<カマド> 北西壁のほぼ中央に設置している。本体部の大部分は削平され、詳細と天井部の構造が不明である。燃焼部は径74×52cmの円形状に焼土が形成されている。厚さは12cmである。袖部は地山のⅣ層を削り出して造られている。煙道部は焚き口部から1.01mほど緩やかに煙出し部に続いている。煙出し部は底面はやや掘り込まれている。上部構造は削平のため不明である。

<遺物> 床上とカマド袖部周辺から土師器・甕が出土している。128はロクロ不使用の土師器坏で、いずれも底部を欠損する。128は丸底(ⅠA a群)で、体部下半に段が巡っている。口縁部と体部外面はハケメ調整、内面は一部剥落しているがヘラミガキ調整後に黒色処理されている。

129は重複する平安時代の竪穴住居跡から流れ込んだと思われる、ロクロ使用の土師器坏である。口縁部は内湾し、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

130～133はロクロ不使用の土師器甕で、130～132は長胴形、133が球胴形である。130は口縁部破片で頸部から強く外反し、口唇部に浅い沈線が一条巡っている。口縁部はヨコナデと縦にハケメ調整が見られ、体部内外面がハケメ調整を施している。132は体部下半から底部破片で、内外面ハケメ調整である。131は全体に器形の歪みが大きい。底部の調整はいずれもヘラナデである。

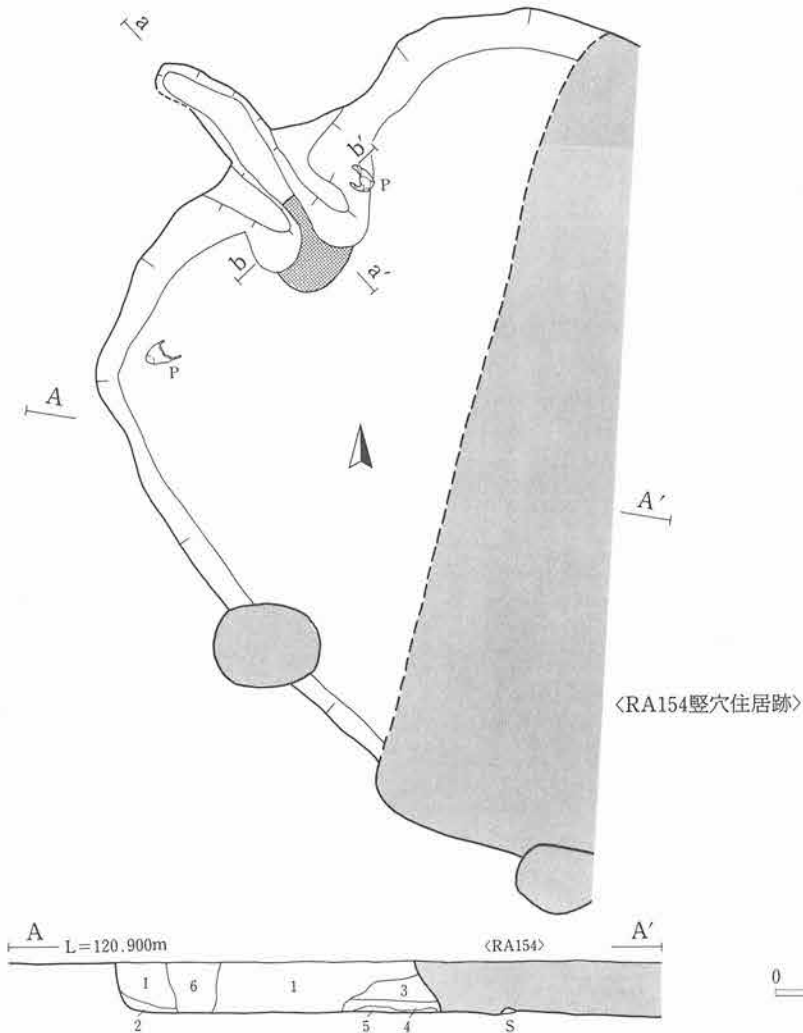
133は体部下半から底部を欠損する球胴甕で、頸部に段が巡り口縁部は外反する。器面調整は口縁部がヨコナデと縦方向にハケメ、体部内外面がハケメ調整である。

<時期> 出土遺物から奈良時代と考えられる。 (高橋)

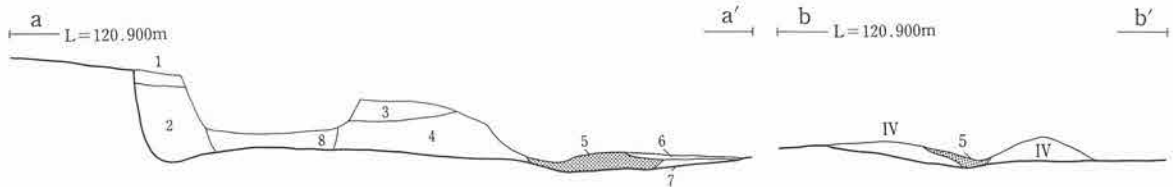
#### R A 139 竪穴住居跡 (第49・50図、写真図版23・214・215)

<位置・重複関係> 東側調査区の1B区に位置している。東側は平安時代のR A 161 竪穴住居跡、西側がR A 188 竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から(新)R A 161・188 竪穴住居跡→(旧)R A 139 竪穴住居跡である。Ⅳ層上面で黒～黒褐色土の落ち込みによって検出された。

1B16a

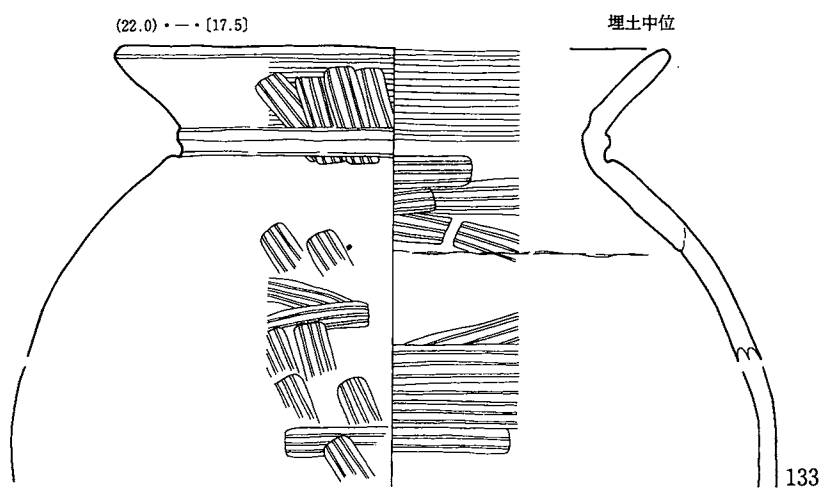
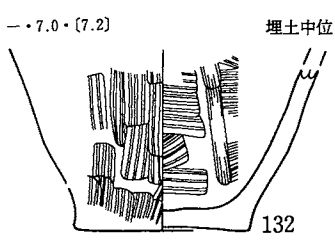
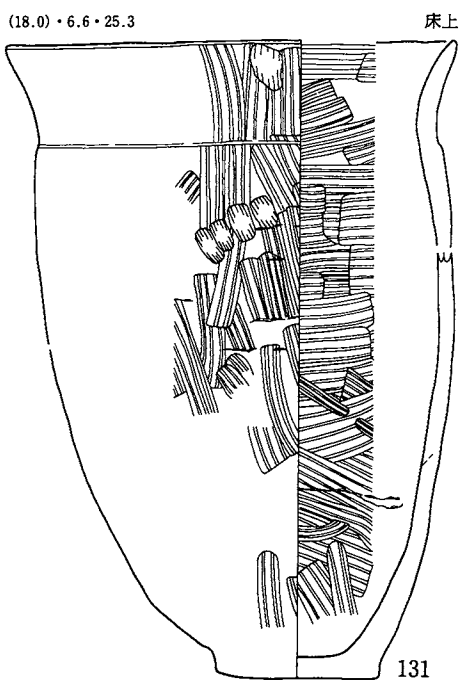
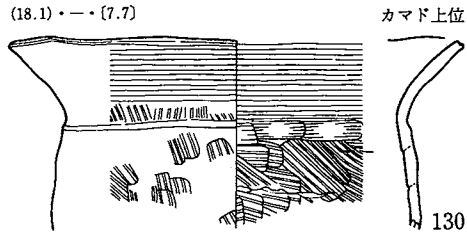
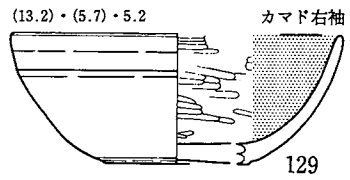
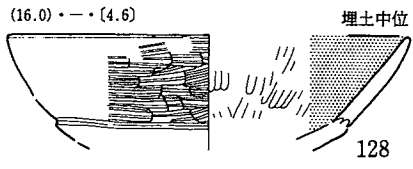


- 1. 10YR3/4 暗褐色シルト 黄褐色土粒3%含む
- 2. 10YR2/3 黒褐色シルト 黄褐色土粒25%含む
- 3. 10YR2/3 黒褐色シルト 黄褐色土ブロック2%・焼土ブロック1%・炭化物1%含む
- 4. 10YR3/3 褐色シルト 黄褐色土粒1%・炭化物1%含む
- 5. 10YR4/6 褐色砂質シルト 炭化物1%含む



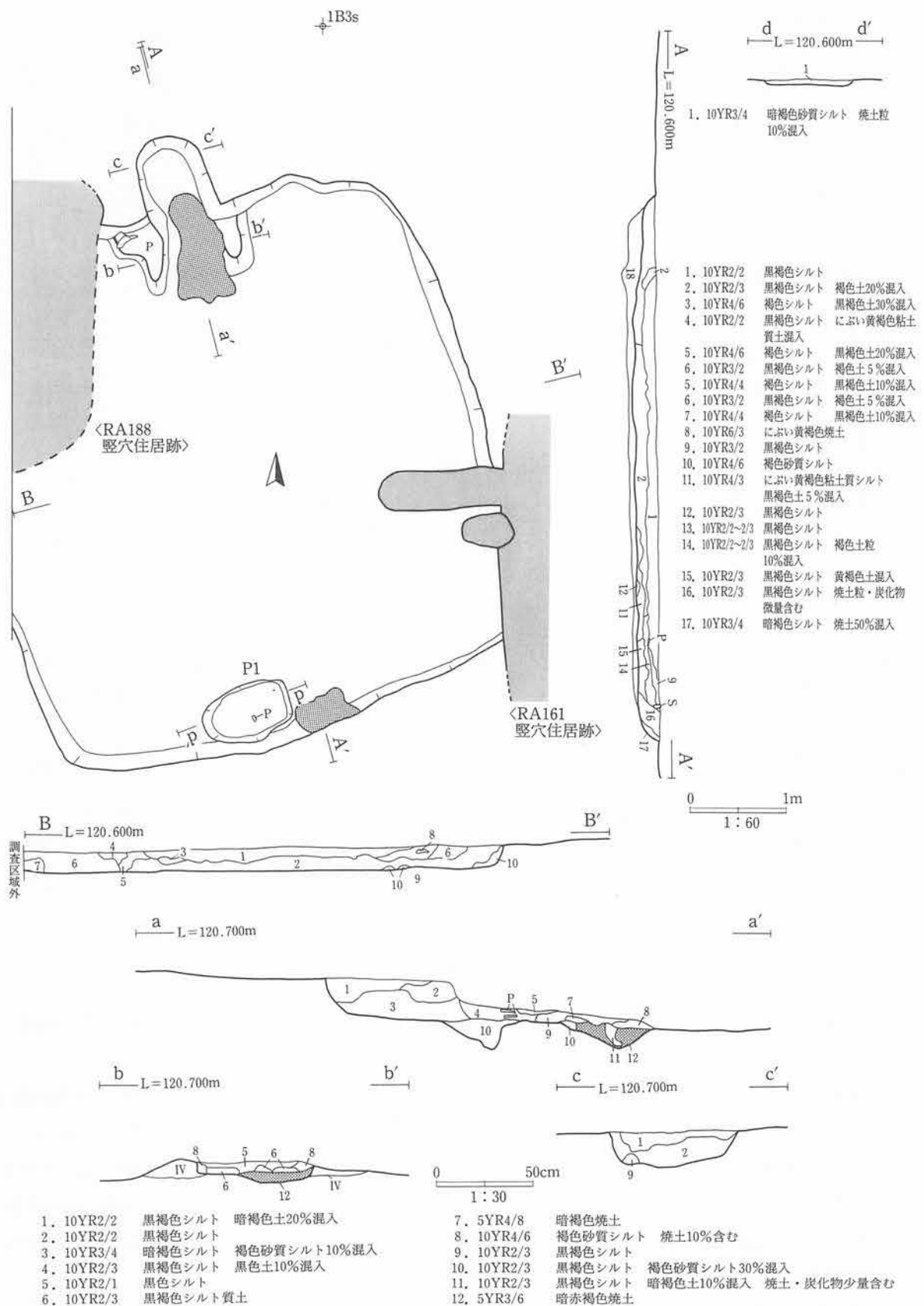
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭微量含む
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土 下部に焼土粒と炭を含む
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土20%混入
- 4. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土をブロック状に混入 炭微量含む
- 5. 5YR3/6 暗褐色焼土 堅く締まる 炭微量含む
- 6. 10YR2/3 黒褐色シルト 小動物の骨を多量含む 炭・焼土粒少量含む 指圧痕有り
- 7. 10YR4/6 褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土で汚れている IV層起源
- 8. 10YR4/4 褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土

第47図 RA135竪穴住居跡



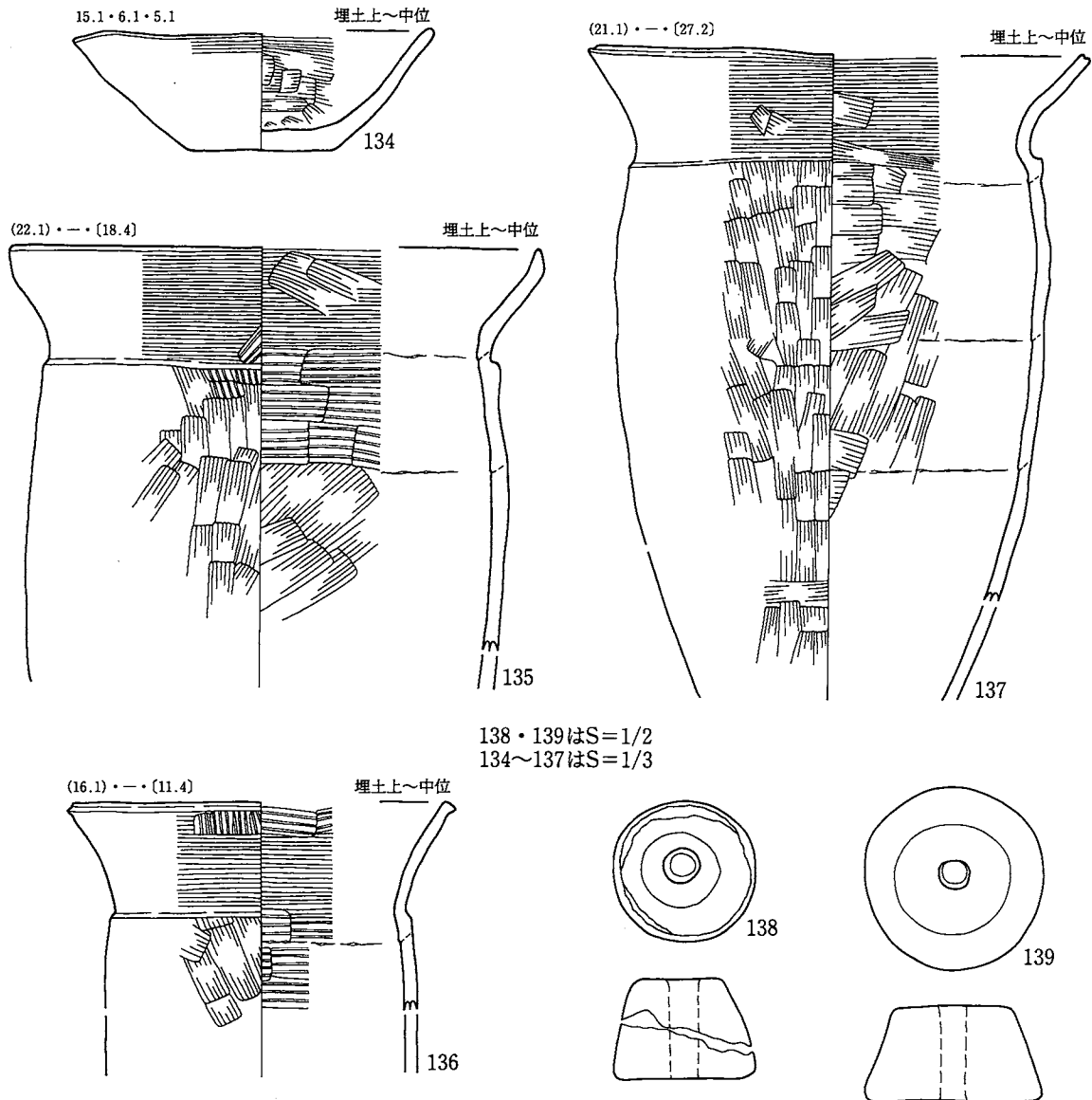
S=1/3

第48図 RA135竪穴住居跡出土遺物



第49図 RA139竪穴住居跡





第50図 RA139竪穴住居跡出土遺物

<平面形・規模> 西壁と北西コーナー側は遺構の重複と道路下に延びている事から詳細が不明である。検出された規模から5.20×5.06mの隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする17層に細分される。上層は黒褐色シルトがレンズ状に、下層は暗褐色土含んだ黒褐色土で構成されている。壁際にはにぶい黄褐色土が堆積している。自然堆積の様相を呈している。<壁・床> 壁は床面から直に立ち上がっている。壁高は東壁18cm、西壁20cm、南壁20cm、北壁12cmである。床面はIV層中にあり、ほぼ平坦で堅く締まっている。貼り床は黒褐色土混じりで厚さ7cmである。

<柱穴・他の施設> 柱穴は検出されない。南壁の中央寄りから径94×62cm、深さ16cmの楕円形土坑P1が検出されている。用途は不明である。

<カマド> カマドは北壁の中央部に設置している。本体部の大部分は崩壊し、袖部下位が僅かに現存している。袖部は地山のIV層を削り出して造っている。燃烧部は径1.18×0.60mの楕円形状で、厚さ24cm

の焼土が形成されている。煙道部は長さ 96 cm で、すぐ煙出し部に続く構造のものである。煙道部上半部は削平されている事から、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。埋土は黒褐色土を主体とし、上位には暗褐色土が混じり、下位に炭化物を含んでいる。

<遺物> 埋土上～中位から土師器坏・甕、土製紡錘車が出土している。134 はロクロ不使用の土師器坏で、器形の歪みが大きく内外面磨滅している。平底（I B b 群）で、口縁部は外傾して立ち上がっている。

135～137 はロクロ不使用の土師器甕で、いずれも底部を欠損している。口縁部は頸部から強く外反する 135・137、外傾気味に立ち上がる 136 がある。口唇部は片削ぎされた 135、角ばる 136、浅い沈線が一条巡る 137 である。器面調整は口縁部がヨコナデと一部に縦方向のハケメ、体部外面がヘラナデ調整を施している。

138・139 は土製紡錘車である。138 は一部欠損しているが径 5.1 cm、厚さ 2.7 cm、139 は床上から出土の完形品で径 5.1 cm、厚さ 2.7 cm を測る。円錐台形状を呈し、中央には径 8 mm の穿孔がある。

<時期> 出土遺物から奈良時代と考えられる。 (高橋)

#### R A 140 竪穴住居跡 (第 51・52 図、写真図版 24・25・215)

<位置・重複関係> 調査区西側の 3 A 区南西よりに位置し、北側と煙出しが R G 083 溝跡と重複する。また、南東側は調査区外に延びている。新旧関係は本遺構が切られていることから(新) R G 083 溝跡→(旧) R A 140 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面である。この付近は III 層の堆積が薄く、水田を除去するとすぐに検出面となることから遺構は上面がかなり削平されていると考えられる。

<平面形・規模> 調査区外に延びていることや重複のため、平面形や規模の詳細は不明であるが、確認できる部分から隅丸方形を基調としていたと考えられる。また、規模は一辺の長さが 3.50×3.30 m 以上と思われる。

<埋土> 3 層に細分され、焼土粒や炭化物、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が主体である。埋土中から出土した骨片はほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。<壁・床> 床から内湾気味に緩やかに立ち上がる。床は平坦で、堅く締まる貼り床は施されない。壁高は 10 cm である。

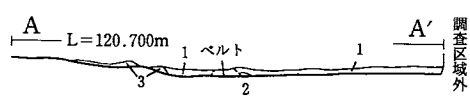
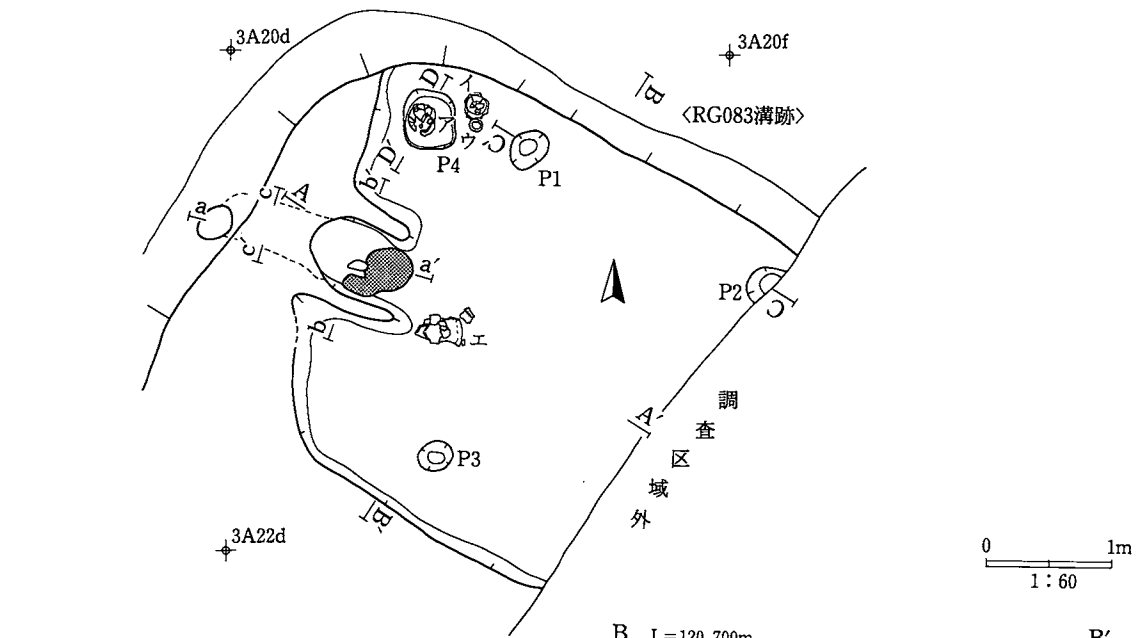
<柱穴> P 1～P 3 の 3 基が検出された。1 基は調査区外に延びている。もう 1 基は調査区外に存在すると思われる。平面形は円形を基調としている。<他の施設> カマド北側脇に貯蔵穴かと思われる土坑 P 4 が検出された。掘り込みは浅く底面から土師器甕 144 が倒立の状態出土した。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4
直径cm	35×28	36×?	30×25	55×50
深さcm	14	20	14	8

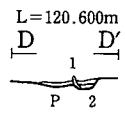
<カマド> 北西壁に設置している。袖や天井はかなり削平されており、不明な点が多い。袖は IV 層を削り出して構築されているが、焚き口の構造は不明である。燃焼部は径 59×35 cm、厚さ 7 cm の焼土が不整な円形に形成されている。カマド内には厚さ 6 cm、長さ 13 cm の円礫が立った状態で出土しており、支脚として用いられた可能性が高い。また、カマド内の埋土や焼土中から最大 1 cm 前後の骨片が多く出土している。カマド 3 層や焼土中から出土した骨はシカの中節骨及びほ乳類の骨片で、熱によって変色しているとの同定結果を得ている。

また、同じく煙道部は割り貫き式で、現存している長さが 80 cm である。燃焼部からごく緩やかな下がり勾配である。埋土底面には焼土粒や炭粒が見られる。3 層には骨片が含まれている。煙出し部は R G 083 溝跡に削平されて不明である。

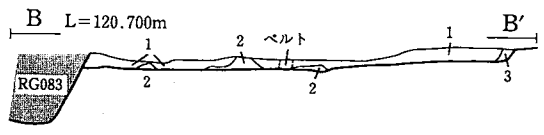
<遺物> 床面や P 4 内、埋土中からロクロを使用しない土師器甕、坏が出土した。北側のコーナー付近



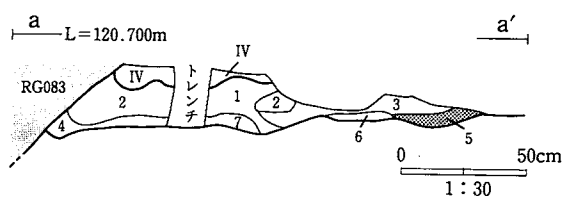
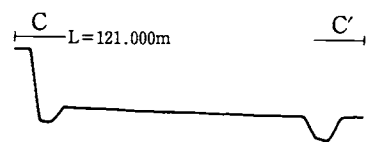
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 焼土粒・炭化物含む
- 2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック混入 炭化物微量含む
- 3. 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり 焼土粒・炭化物含む



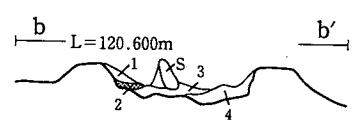
- 1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性なし 締まりなし 黄褐色土ブロック (0.5~1cm大)混入
- 2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 締まりなし 黄褐色土ブロック (0.5~1cm大)混入



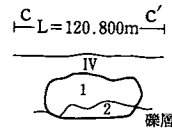
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 焼土粒・炭化物含む
- 2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック混入 炭化物微量含む
- 3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック混入 壁崩壊土



- 1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし IV層起源の砂質シルト塊・焼土粒各少量含む
- 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 炭化物少量含む IV層の崩壊土
- 3. 7.5YR4/4 褐色土 粘性なし 焼土・焼土粒多量含む 骨片含む
- 4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒含む におい赤褐色土 粘性なし 堅く締まる IV層が焼けた焼土層
- 6. 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性なし 炭粉多量に含む
- 7. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性なし 焼土粒多量に含む

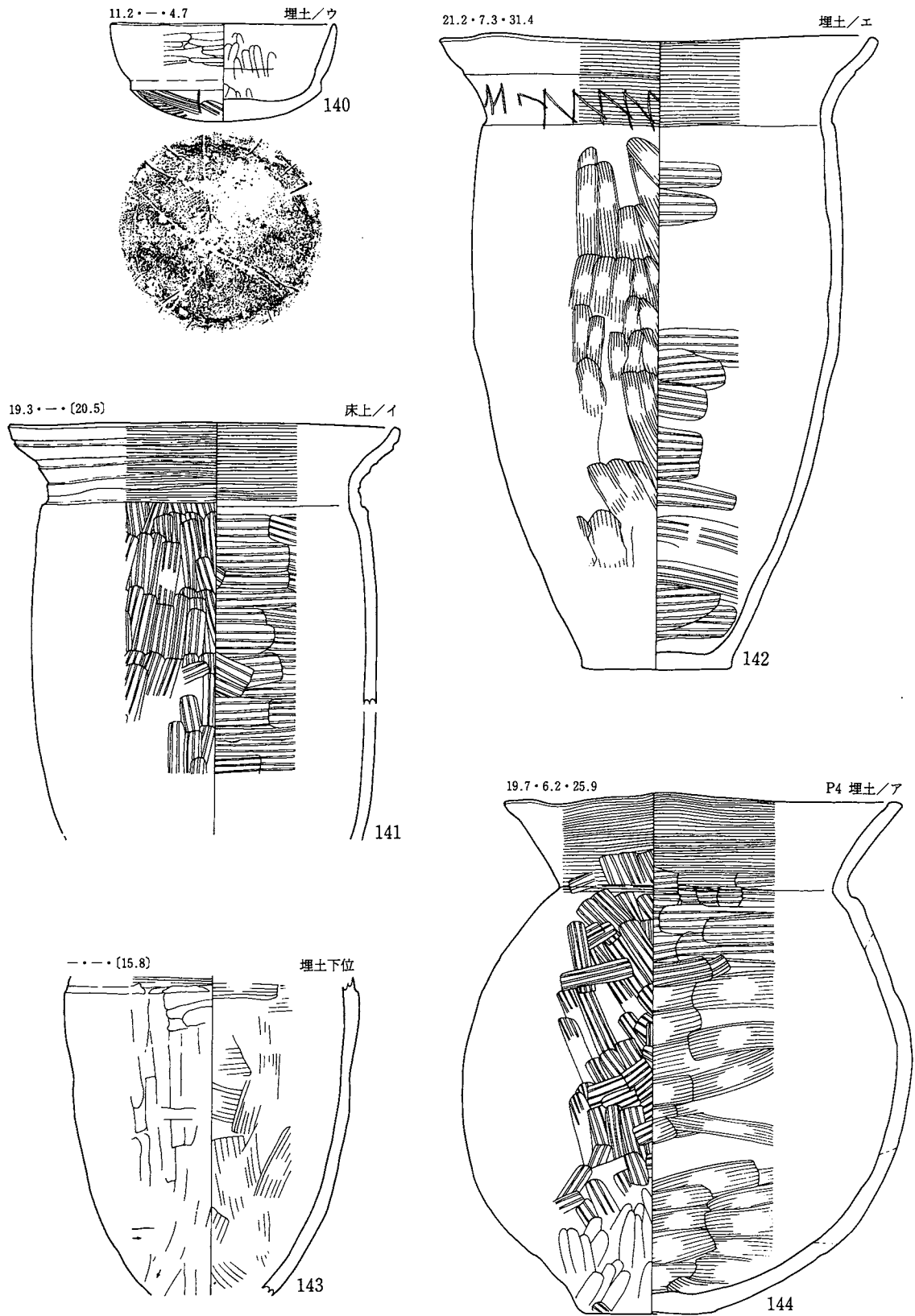


- 1. 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし 焼土粒(0.5~1cm大)含む
- 2. 7.5YR4/6 褐色焼土 粘性あり
- 3. 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性なし 焼土粒・炭化物(各0.5~1cm大)・骨片含む
- 4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 焼土粒少量含む



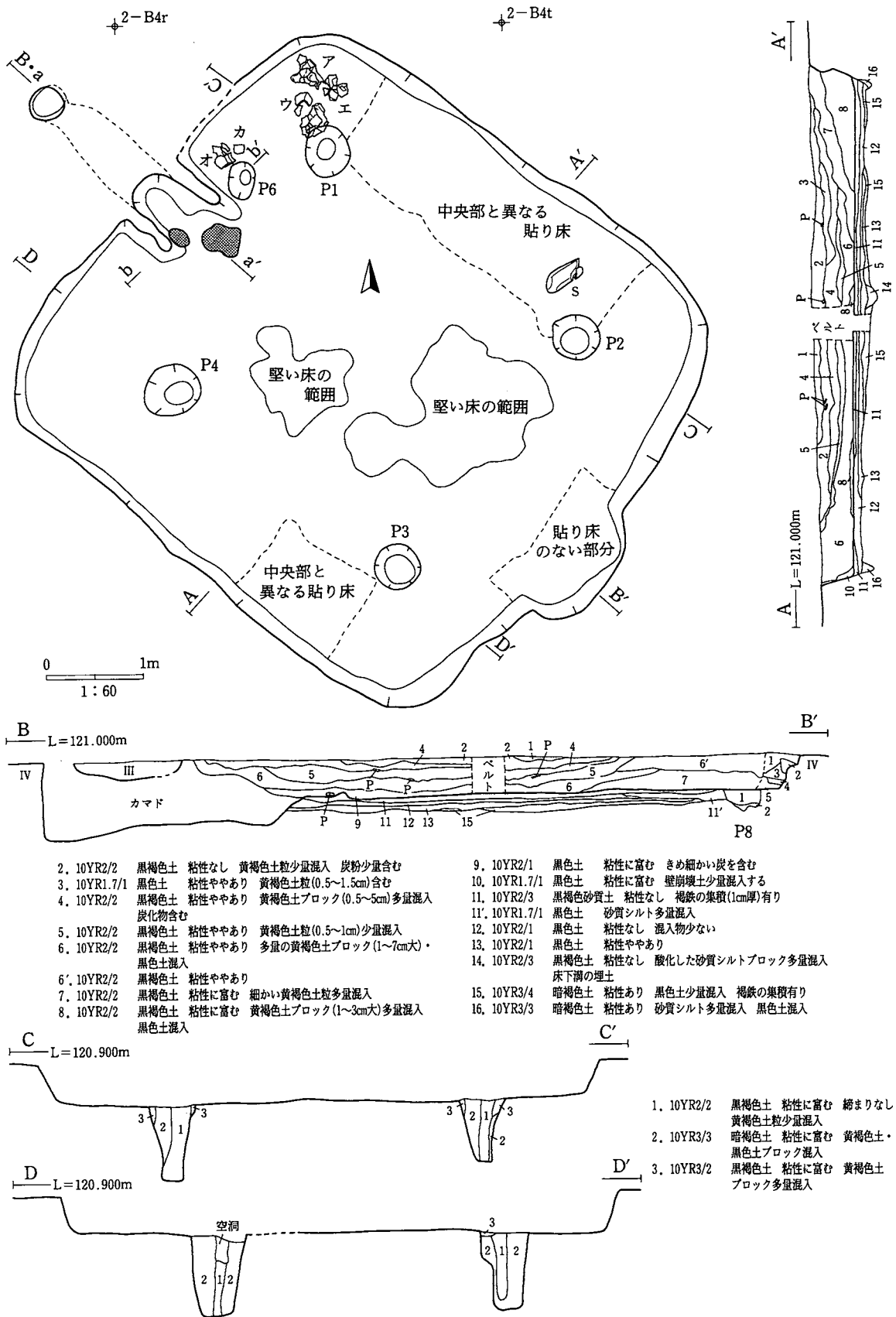
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 焼土粒(0.5cm大)・炭化物少量含む
- 2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 焼土粒(1cm大)・炭化物多量に含む

第51図 RA140竪穴住居跡

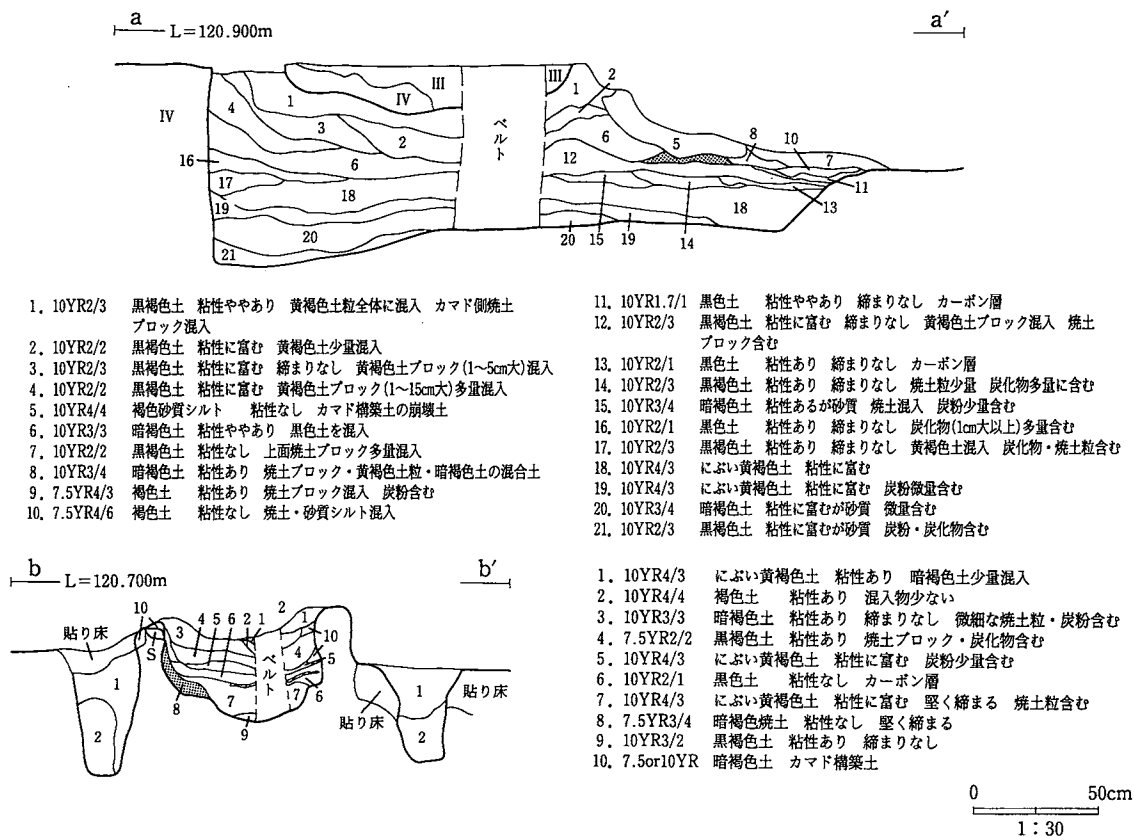


S=1/3

第52図 RA140竪穴住居跡出土遺物



第53図 RA141竪穴住居跡(1)



第54図 RA141竪穴住居跡(2)

では土器が集中していた。142 はカマドの前の床より 1 cm 浮いた状態で出土した。144 は P 4 内から倒立で(土圧で破片の状態)、141 は P 4 脇の床面から倒立の状態、140 は 141 のすぐ横で、床面から 2 ~ 3 cm ほど浮いた状態で出土した。140 は底部に刻印のある丸底の坏である。142 は頸部に山形の線刻のある長胴甕、141 は口縁部に多条の沈線のある長胴甕である。

<時期> 出土遺物から古墳時代末と考えられる。

(金子)

RA 141 竪穴住居跡 (第 53~60 図、写真図版 26・27・216~219)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-B 区北東よりに位置している。重複する遺構はない。検出は IV 層上面であるが、III 層中から遺物が多く出土し、自然の層でない埋土が確認できたことから、III 層中から確認できたものと思われる。

<平面形・規模> 南東壁に張り出しを持つ隅丸方形を呈する。規模は北西-南東方向の辺が 6.12 m (張り出し含む) × 北東-南西方向の辺が 5.22 m である。

<埋土> 炭粒や黄褐色土ブロックを含む比較的締まりのある黒~黒褐色土が主体であるが、黄褐色土ブロックの多少、黒色土の多少で 10 層に細分される。下層は粘性が強い。埋土全体に少量の骨片が含まれるが、北東隅の埋土下位~床面に特に集中して見られる。これらはほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。<壁・床> 壁は床から少し外傾して急に立ち上がる。床は平坦で、貼り床が施され、4 基の柱穴を結んだ線より内側が強く締まっている。特に強くやや酸化して褐鉄が集積しているのが、図示した部分である。また、点線の内側は貼り床に砂質シルトが混入されておらず、黒色土のみが張られている部分である。貼り床は 5 層に細分される。時期別なものか、一時期に順に別の土を張っていったものか

は不明である。貼り床の上層や最下層にも褐鉄の堆積がみられる。

<柱穴> 柱穴状土坑は6基検出された。そのうち支柱穴と思われるのはP1～P4の4基である。

土坑No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
直径cm	53×47	52×48	47×46	62×53	74×47	39×27	49×29	50×45	65×54	32×32
深さcm	66	76	84	85	38	39	42	25	36	34
土坑No.	P 11	P 12	P 13	平面形は円形を基調としており、断面には柱痕跡が残る。深さ64～85 cmと他の土坑に比較して大変深い。その他はカマド脇のP 6・P 7があるが、P 6は貼り床の上から、P 7は貼り床の下から掘り込まれており、用途は不明である。						
直径cm	48×48	58×58	74×64							
深さcm	20	28	35							

下から掘り込まれており、用途は不明である。

<他の施設> カマドの対面の壁中央が外側に140×41 cmの範囲で張り出している。張り出し部分の壁は床から若干の段を持って立ち上がる。この部分の床は貼り床もなく、堅く締まっていない。埋土も上層は余り濁りなく締まりがあって、IV層に類似するがやはり少し動いた土のようである。下層及び壁際は黄褐色土の粒やブロックが多量に混入した黒褐色土である。埋土下層から掌よりやや大きい角礫が数個出土した。

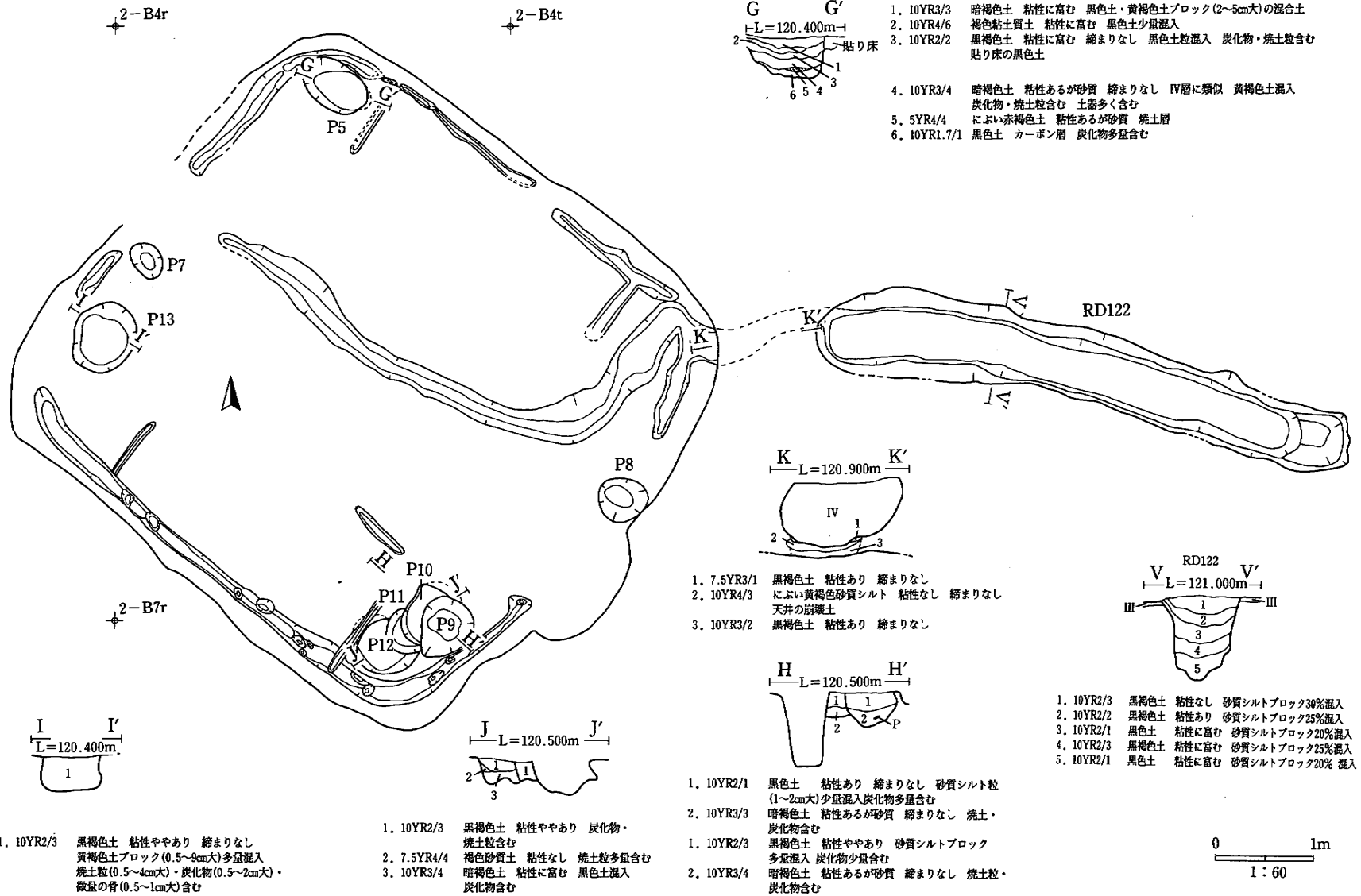
そのほか、本遺構の貼り床をはがした段階で床下から土坑、壁溝、間仕切り状の溝、外延溝といった多数の遺構が検出されている。P 5、P 7～P 13は床をはがして検出された土坑である。P 5はコーナーに位置する。長円形を呈し、南東壁がオーバーハングしている。埋土には焼土粒や土器片が多く混入し、底面よりやや浮いた状態で、焼土層も検出された。この焼土層は混入物がなく純粹であるが、住居内で形成された焼土を捨てたと考えるのが妥当であろう。埋土最下層からは炭化物を多く含む炭の層が堆積していた。P 7はカマドの南脇から検出された。楕円形を基調としており、深さはカマド北脇のP 6と同程度ある。当遺構は床下からの検出と見たが、P 6と同じように床上から検出すべきもので、対の柱穴となる可能性もある。P 8は南東壁の壁際から検出された。平面形は円形を基調としている。当初出入口に関連する柱穴かと考えたが、断面を観察した結果柱穴とは認めがたい。P 9～P 12は南コーナー付近に重複して位置している。新旧は(新) P 9→P 10→P 11→(旧) P 12である。いずれも平面形は円形を基調としている。P 10、P 12に関しては壁がオーバーハング気味である。これらの土坑はいずれもあまり深くない。P 9の埋土中から骨片が出土している。これらはほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。埋土は炭粒や焼土粒が多く混入している。P 13は西コーナー付近から検出された。平面形は長円形で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。埋土は単層で、多量の黄褐色土ブロックのほか、焼土粒、炭化物、微量の骨片が混入する。このことから本遺構は一気に埋め戻した可能性が高い。

壁溝は床上からは検出できなかったが、掘り方で南東壁の中央付近や西コーナー付近を除き、周っていることを確認した。幅は10～29 cmで、深さは6～12 cmである。南西壁際の溝の中に小穴が13基検出された。

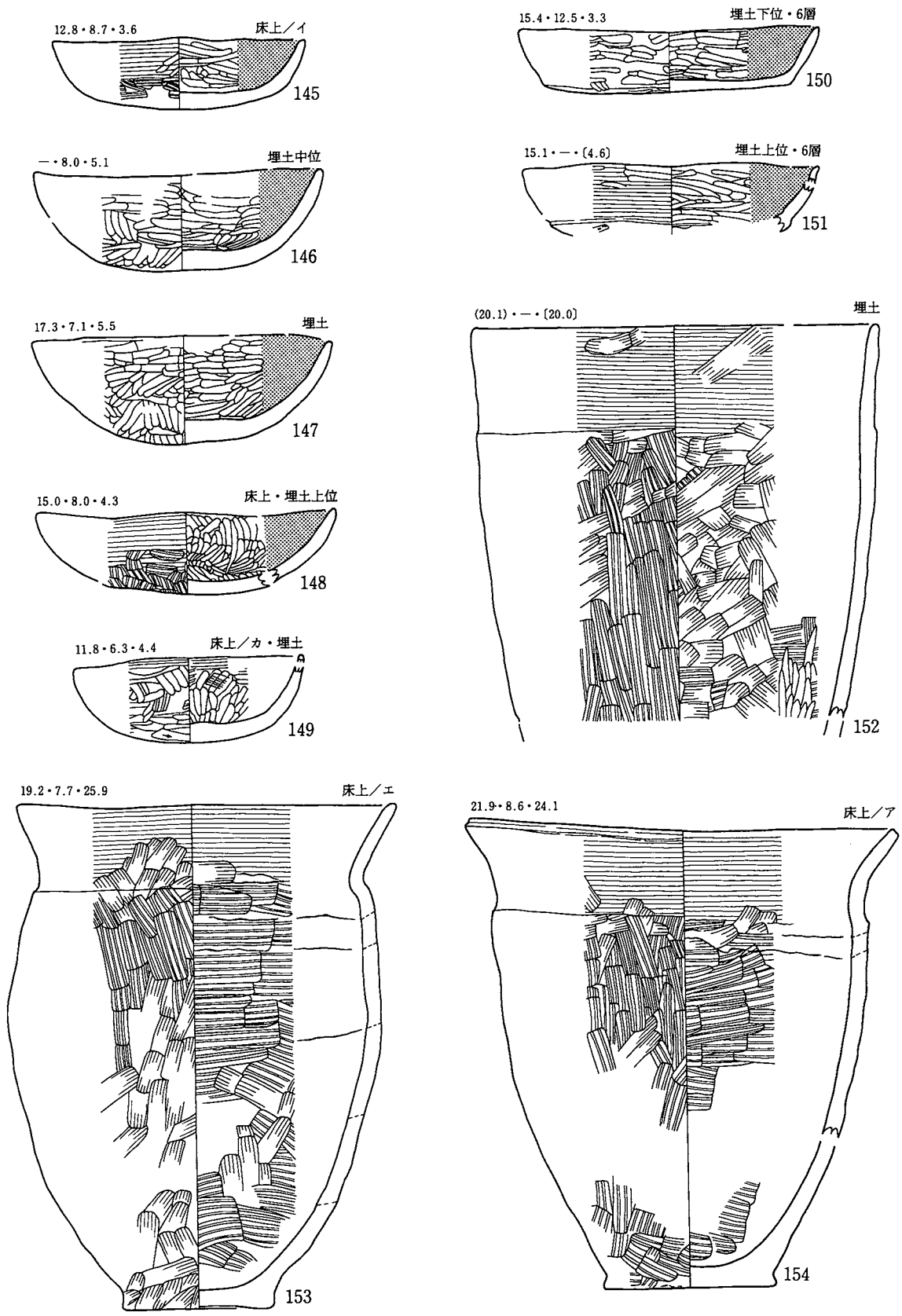
間仕切り状の溝は4基の支柱穴からそれぞれ北東壁、南西壁に向かって4条、P 3からP 4に向かって長さ68 cmのものが1条検出された。幅は6～17 cmで、深さ3～10 cm程度である。この中で、P 1及びP 2から北東壁に向かう溝は検出しづらく、幅や長さには誤りがあるかもしれない。また、P 3からP 4に向かう溝は特に浅く痕跡程度の検出である。

外延溝はカマドの下から南東壁に向かい、壁の手前で東に屈曲して若干蛇行しながら延び、東側に隣接するRD 122土坑にトンネル状の溝となって接続している。幅は23～48 cm、深さは12 cmほどである。溝底部の標高差は住居内では10 cmあり、RD 122土坑に向かって徐々に低くなっている。RD 122内の標高はさらに5 cm程低くなる。この溝の用途は不明であるが、形態上排水溝と見るのが妥当であろう。床下に存在する

第55図 RA141竪穴住居跡(3)・RD122土坑

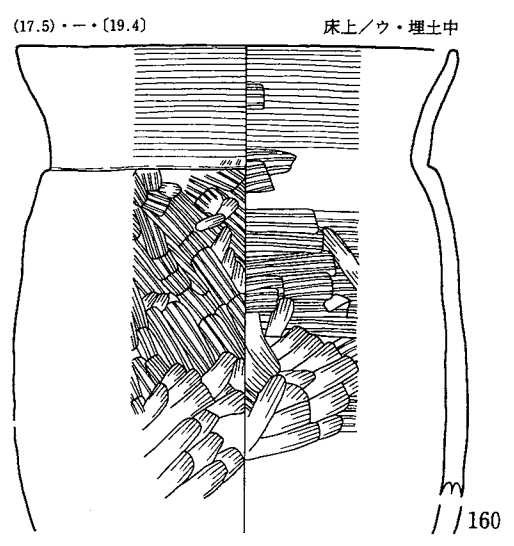
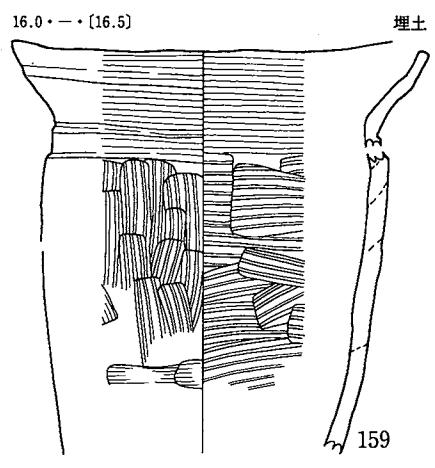
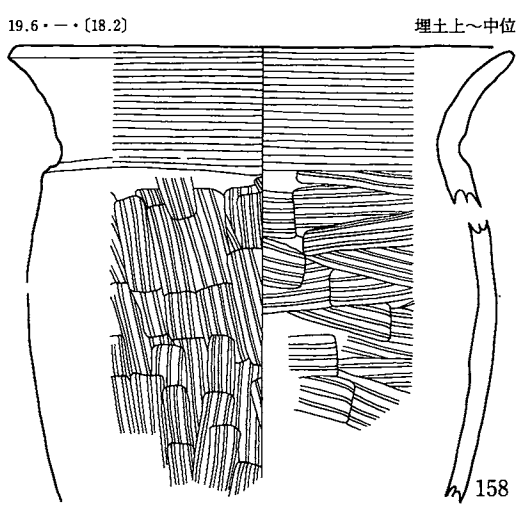
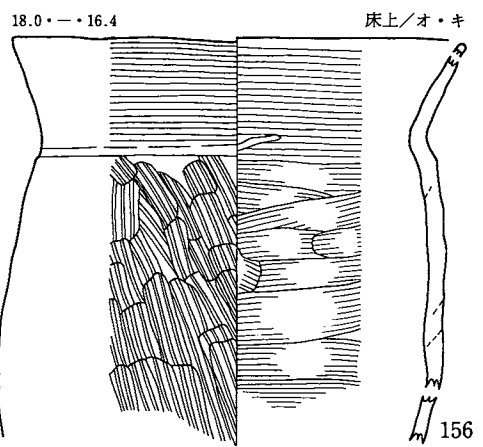
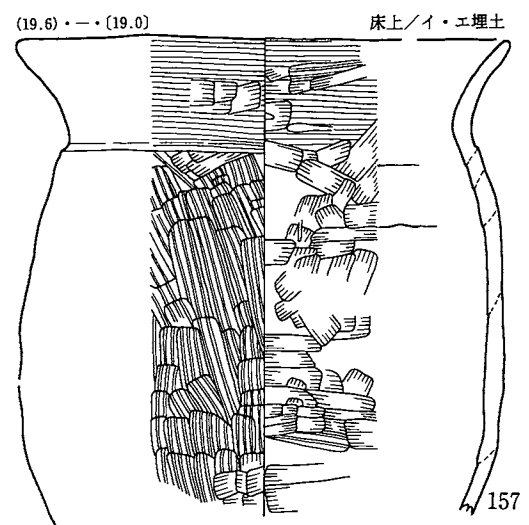
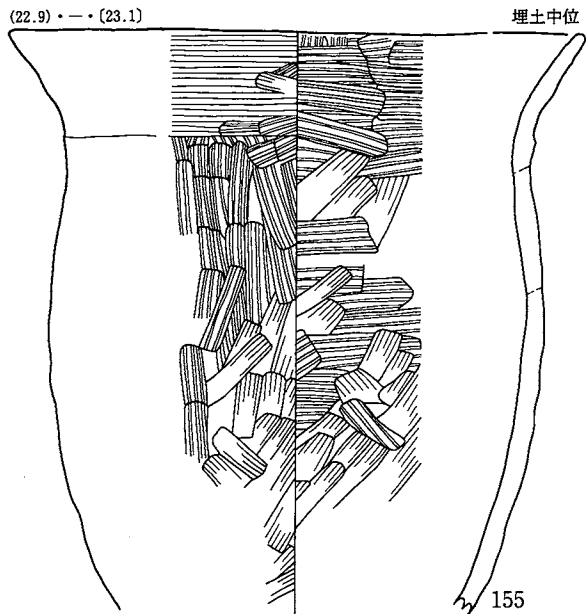






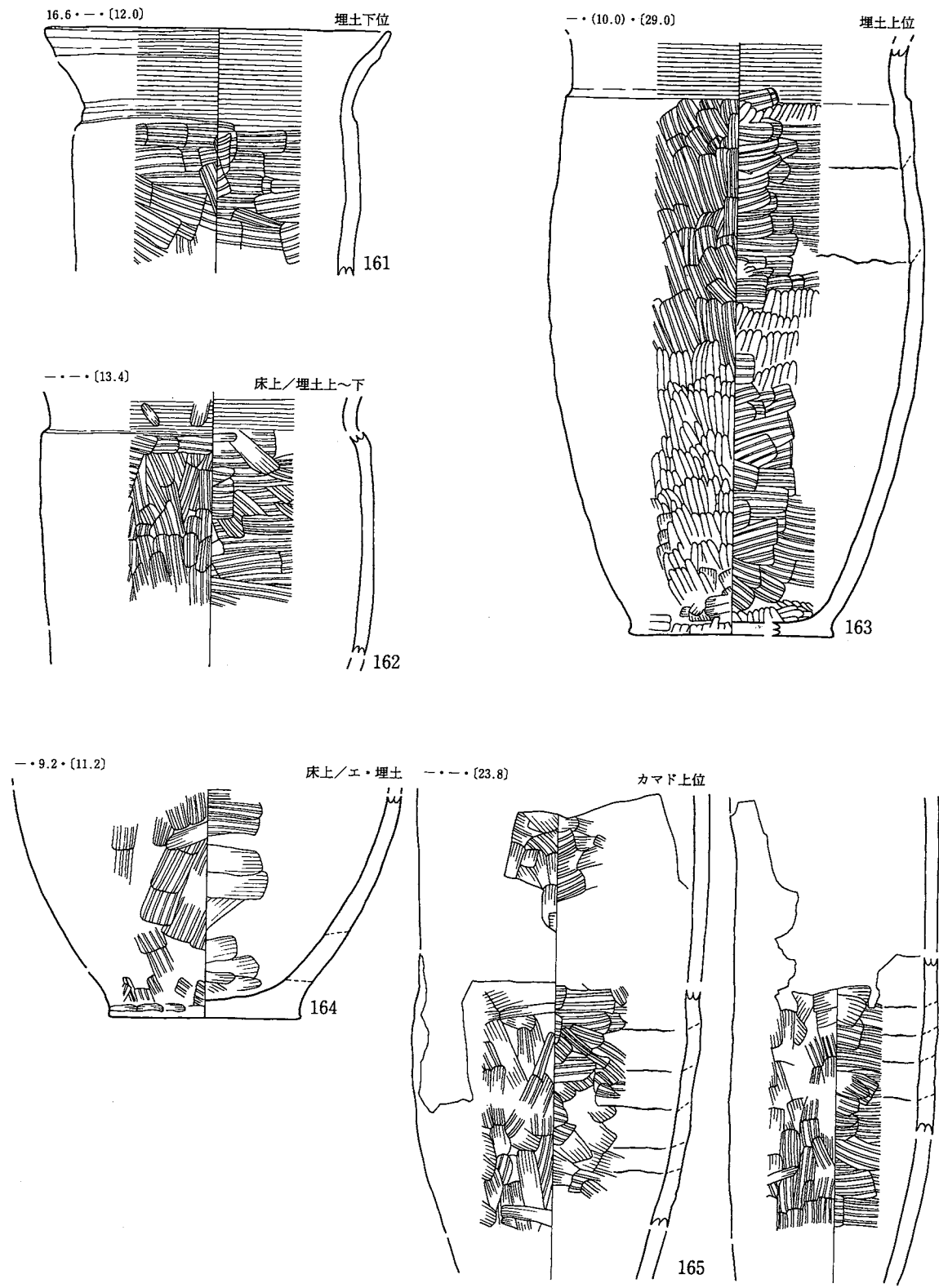
S=1/3

第56図 RA141竪穴住居跡出土遺物(1)



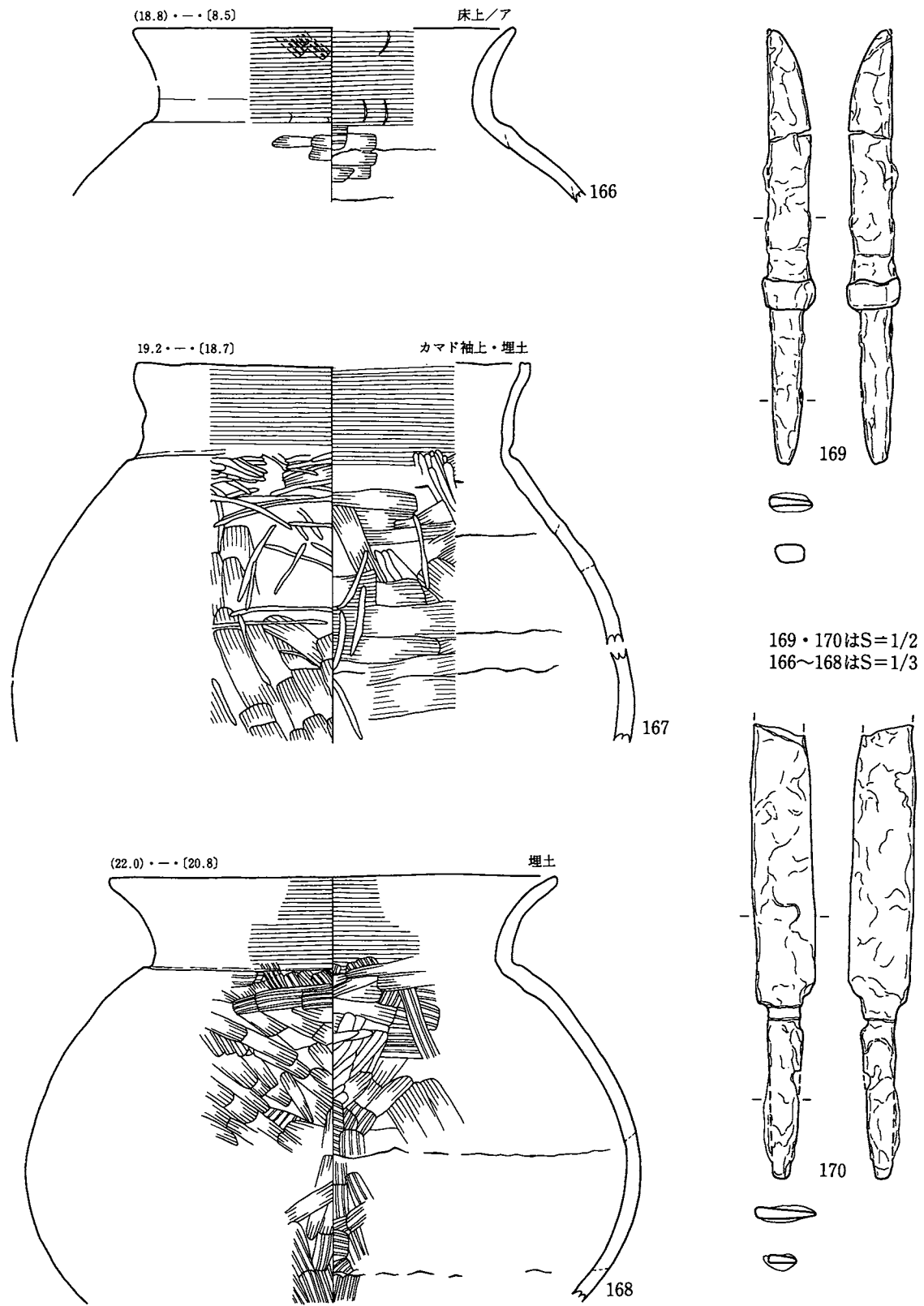
S=1/3

第57図 RA141竖穴住居跡出土遺物(2)

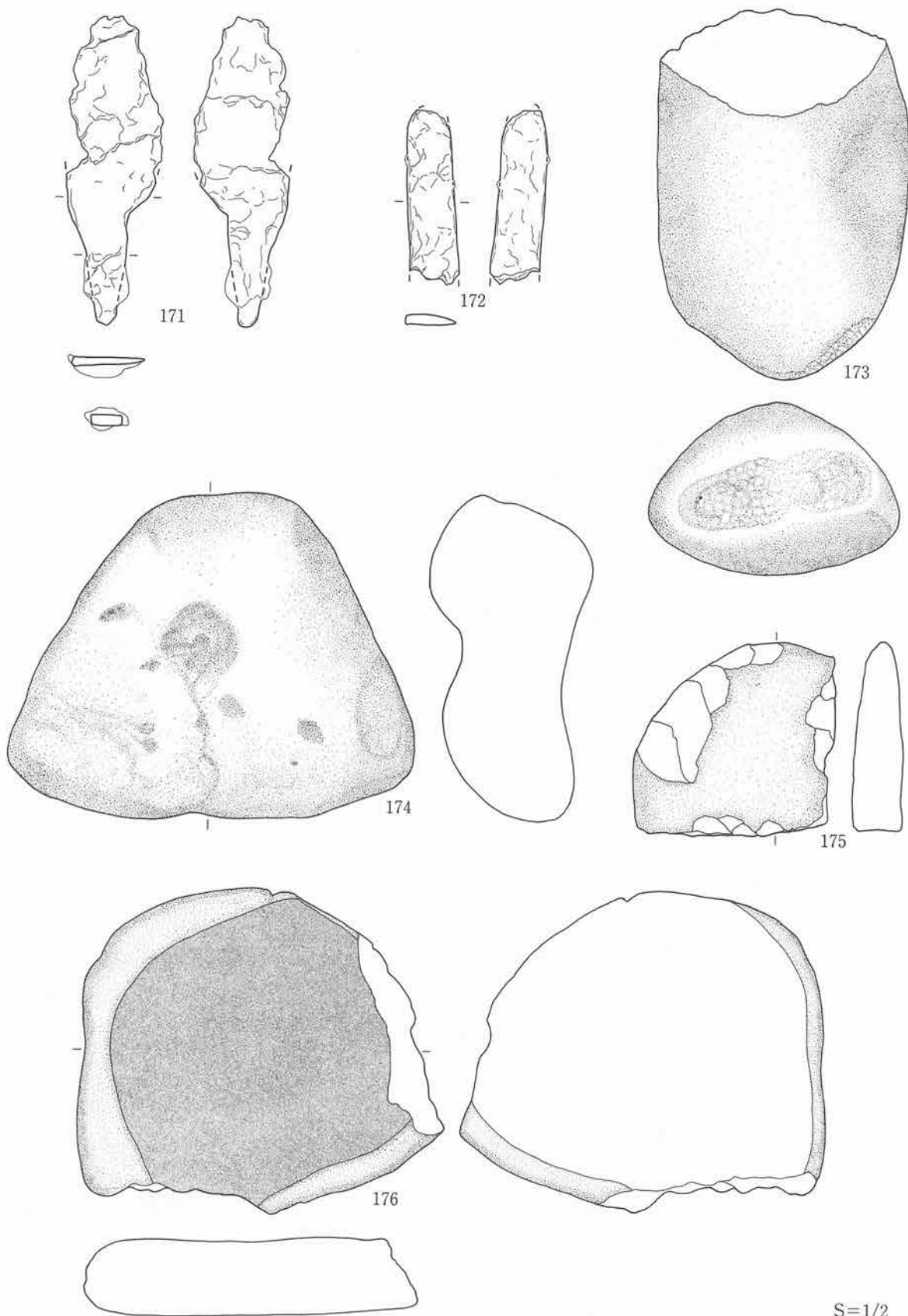


S=1/3

第58図 RA141竪穴住居跡出土遺物(3)



第59図 RA141竪穴住居跡出土遺物(4)



S=1/2

第60図 RA141竖穴住居跡出土遺物(5)

ことから板などを渡して使用していた可能性が高い。また、カマドの下から延びていることについては、カマド煙り出しなどからの雨水の流入により排水の必要があったのではないかと考えられる。

<カマド> 北西壁のほぼ中央に設置している。天井を被覆していた粘土は崩落し、カマド内に堆積している。袖はIV層を削り出して構築しているが、焚き口は角柱型の礫を両側に設置して芯としている。概して、右袖の残存状況は良いが、左側は残りが悪い。燃焼部は38×35 cm、厚さ5 cmの焼土が形成されている。袖の内側も焼けて、焼土化している。カマド内の埋土から骨片が出土した。これらはほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。

煙道部は割り貫き式で、長さ1.43 m、燃焼部から急に下がった後緩やかに、煙出し部に向かって下がり勾配に掘り込まれている。煙道～煙出しにかけて埋土の最下層には炭の粉を含んだ黒褐色土が堆積するが、中層～下層はIV層の崩落土が厚く堆積している。最上層のカマドよりの部分は焼土のブロックが多く含まれる。煙出し部は径36×34 cm、深さ72 cmの円形土坑が掘り込まれている。

<遺物> 埋土中と床面から多くのロクロ不使用の土師器が出土している。床面の主に北コーナー付近からは甕5個がつぶれた状態で出土した。153・154・157・160・166である。そのほか床上から145・148の土師器坏、156・162の甕が出土している。165はカマドの埋土中から破片の状態で出土した扁平胴長の土器である。埋土中からは、南西壁際から刀子と思われる鉄製品、埋土全体から数多くの土師器が出土している。器種は坏、甕のほか、甗、球胴甕がある。鉄製品も刀子数点が出土した。169は南西側の壁際から出土した刀子である。埋土中の遺物は、住居廃絶後埋没する途中で、廃棄された可能性が高い。また、P2の北やや壁よりから大型の礫が床直上から出土している。そのほか、173～176は埋土中位から下位より出土した敲打痕、磨り面、剝離痕のある礫である。

<時期> 出土遺物から奈良時代と考えられる。

(金子)

#### RA 142 竪穴住居跡 (第61～64図、写真図版28～30・220・221)

<位置・重複関係> 調査区西側の2-B区北よりに位置している。RD 119土坑と重複する。本遺構が切られていることから、新旧関係は(新)RD 119土坑→(旧)RA 142竪穴住居跡である。検出はIII層下位である。

<平面形・規模> 若干胴張り気味の隅丸方形を基調とする。一辺の長さは5.64×5.70 mである。

<埋土> 7層に細分され、黄褐色土粒やブロックを含む黒褐色土～黒色土が主体である。住居の南側壁よりの埋土中位には焼土も含まれている。床面中央からややカマドよりと、P3の南東コーナー付近の床面から焼土が検出された。いずれも床直上で、焼土との間に間層はない。焼土の厚さはごく薄い。これらのうち現地性と認められるのは床面中央よりカマド側に形成されたもので、この他は異地性の可能性がある。

<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がる。床は平坦で貼り床が施されており、5層に細分される。黄褐色土ブロックを含んだ黒色～黒褐色土である。特に上面は堅く締まっている。床面にはところどころ焼土が形成されている。南西隅の床面の一部に径85×85 cmの楕円形の焼土、床面中央部からややカマドよりに66×60 cmの不整形の焼土である。これら2カ所の焼土は床面が直接焼けて形成された可能性が高い。また、南東隅の床面から壁にかけては2.0×0.9 mの長円形の範囲に薄く焼土が堆積していた。この焼土は床が直接焼けたのではなく、異地性と思われる。

<柱穴> 主柱穴と思われるものはP1～P4の4基検出された。平面形は円形～長円形を基調としているが、P2はやや角ばっている。深さは61～79 cmである。埋土中には柱の痕跡が残っていた。

<カマド> カマドは北西壁の中央に設置している。天井を被覆していた粘土はカマド内に崩落している。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
直径cm	77×53	52×40	52×45	52×51	84×78	82×74	43×40	44×41	43×40	106×76
深さcm	82	77	64	85	32	33	20	18	25	26

焚き口の構造はかなりの部分が失われているため明らかでないが、袖はIV層を削り出して構築されている。燃焼部には、径56×53cm、厚さ4cmの焼土が形成されている。煙道部は割り貫き式で長さは1.60mである。燃焼部からごく緩やかな下がり勾配で、煙出し部へと続いている。煙道の天井は火熱のため部分的に焼けており、底部には炭粉を多く含む黒褐色土が堆積している。埋土中には焼土、炭粒が多く含まれる。煙出し部は径42×36cm深さ52cmの円形土坑が掘り込まれている。

<他の施設> 壁際に周溝が巡る。幅は5～30cm、深さ8～14cmである。南壁際の一部は、溝が二重になっている。西壁際の南半部分は溝が壁よりも10～20cm離れた位置に周っている。また、西壁の中央と南よりの部分から対面に向かって間仕切り状の溝が検出された。幅7～38cm、深さ4～8cmほどである。長さはそれぞれ、1.56mと1.74mである。

カマドの対面の壁際の中央よりやや東よりの部分は、1.26×0.86mの範囲で、周辺の床よりも5～8cmほどステップ状に高くなっている。上面は非常に堅く締まっており、5cmほどの凹みが2カ所認められる。このステップの西脇にはステップの側面に添うように幅13cm、長さ66cmの溝が掘り込まれる。溝と壁の接点には拳大の白色粘土が床から若干浮いた状態で検出された。

本住居跡の床をはがした段階で、床下から土坑が多く検出されている。P5、P6はカマド両脇から検出された土坑である。埋土は黄褐色土、黒褐色土、焼土のそれぞれと炭化物をブロック状に含む黒褐色土で、いずれも一気に埋め戻したようである。P7は北コーナー壁際から検出された。埋土には焼土、炭化物に加え、骨片が混入する。P8は南コーナーから検出された。埋土最下層に厚さ5cmの焼土層が認められる。現地性かと思われたが、純粋な焼土を土坑に捨てたものかもしれない。P9、P10は東コーナーに検出された土坑である。新旧は(新)P9→(旧)P10で埋土には焼土ブロック、炭化物が混入する点が共通している。P10の埋土中から出土した骨は種は不明であるが、ほ乳類の手根あるいは足根骨で、熱により変色しているとの同定結果を得ている。

<遺物> 埋土や床面からロクロ不使用の土師器が出土している。住居の北コーナーの床面から、そのままつぶれたような状態で、甕178・180・181が出土した。壁際からは甕の上半179が正立の状態で出土している。183はカマドの支脚として使用されていた土師器甕の底部である。184はカマド前の床面から破片の状態で出土した、甕の上半である。185はP1から出土した甕である。そのほか、埋土中から碧玉製の管玉187、住居南よりの床面からコバルトガラス製の小玉186が出土したことが特筆される。

<時期> 出土遺物から奈良時代に属する。

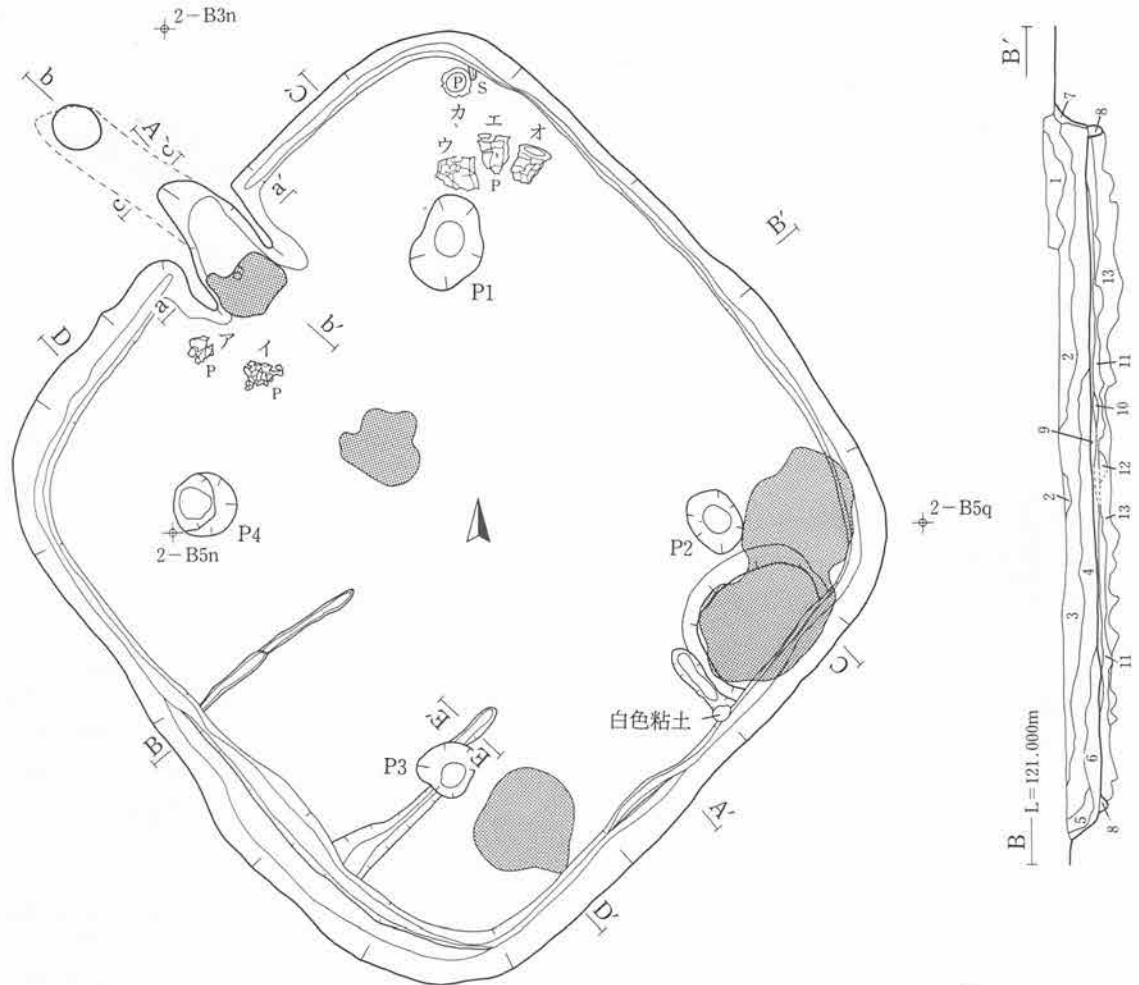
(金子)

#### RA 143 竪穴住居跡 (第65図、写真図版31・221)

<位置・重複関係> 調査区西側の1-A区南よりに位置する。住居跡全面にわたり、数基の柱穴状土坑と重複する。新旧関係は本遺構が切られていることから(新)柱穴状土坑→(旧)RA 143 竪穴住居跡である。検出はIII層下位である。

<平面形・規模> ややいびつな隅丸長方形を呈する。一辺の長さは2.76×2.30mである。

<埋土> 4層に細分される。上層は炭化物を含む黒褐色土、3は締まりのない炭層である。下層は焼土

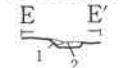


- |  |  |
|--|--|
| 1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性なし 黄褐色土粒少量混入                    | 9. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 堅く締まる 黄褐色土粒(0.5~5cm大)混入 斑土粒微量含む 粘り床の土が硬化したもの |
| 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(1~5cm大)・黒色土混入      | 10. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土粒(0.3~3cm大)混入                             |
| 3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒混入 2より混入物少ない             | 11. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック混入                                   |
| 4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒少量混入 南側壁土多量含む            | 12. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 黒色土粒(1~3cm大)少量混入                             |
| 5. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土粒少量混入                | 13. 10YR4/4 褐色土 粘性に富む 黒色土少量混入                                      |
| 6. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土粒(1~2cm大)・黒色土混入    | 14. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土粒(1~2cm大)・黒色土混入                   |
| 7. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 壁崩壊土                         | 14'. 10YR3/4 暗褐色土 粘性に富む 締まりなし                                      |
| 8. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土粒(0.5~2cm大)混入 壁崩壊土 |  |



- |  |
|--|
| 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 褐色土ブロック少量混入      |
| 2. 10YR1.7/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土ブロック少量混入 柱痕 |
| 3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック多量混入           |

L=120.500m

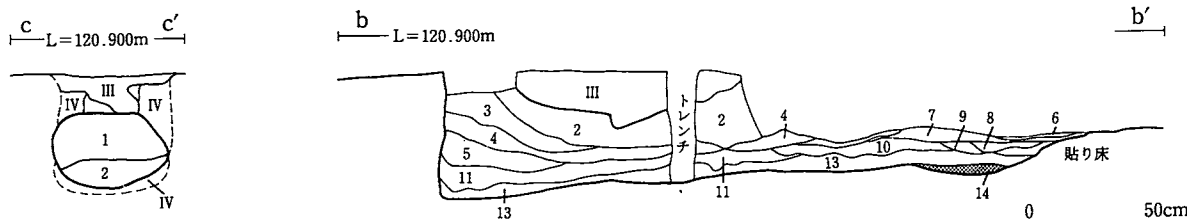


- |   |
|---|
| 1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒(0.5~1cm大)混入    |
| 2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒(0.5~1.5cm大)混入 |

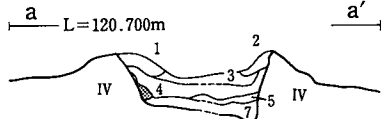


第61図 RA142竪穴住居跡(1)



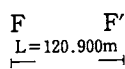


- 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒少量混入
- 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒混入 炭粉・焼土含む 炭粉は下半分にうず層状に堆積

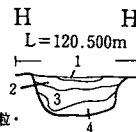


- 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黒色土粒混入 焼土粒含む
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし 袖の崩壊土
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 焼土ブロック・炭化物含む
- 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性あるが砂質 焼土・炭化物含む(特に壁際)
- 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性に富む カーボン層
- 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性に富む 焼土層
- 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 焼土粒・炭粉含む
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし 黒色土少量混入
- 10YR1.7/1 黒色土 粘性に富む 褐色土粒混入

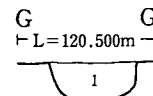
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 締まりなし 上面に黄褐色土粒少量混入
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土粒(0.1~0.5cm大)混入 炭粉含む 燃焼部傾けた黄褐色土 ブロック少量混入
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 細かい炭粉少量含む
- 10YR3/1 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし カーボン層と黄褐色土層の混入土 焼土ブロック(0.5~1cm大)含む
- 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土粒少量混入 焼土粒・炭化物含む 全体にカーボン多量含む
- 5YR3/2 暗赤褐色土 粘性に富む 締まりなし 焼土ブロック(多量)・炭化物含む
- 10YR3/3 暗褐色粘土質土 粘性あり 黒色土ブロック混入 焼土ブロック含む
- 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 焼土粒・炭化物含む
- 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性あり 締まりなし 焼土ブロック多量含む
- 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性なし 焼土少量含む
- 10YR4/3 黄褐色土 粘性に富む 締まりなし 炭化物少量含む カマド近辺では焼土を全体に含む
- 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 炭粉多量含む 焼土粒含む
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性に富む 焼土層



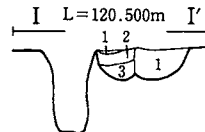
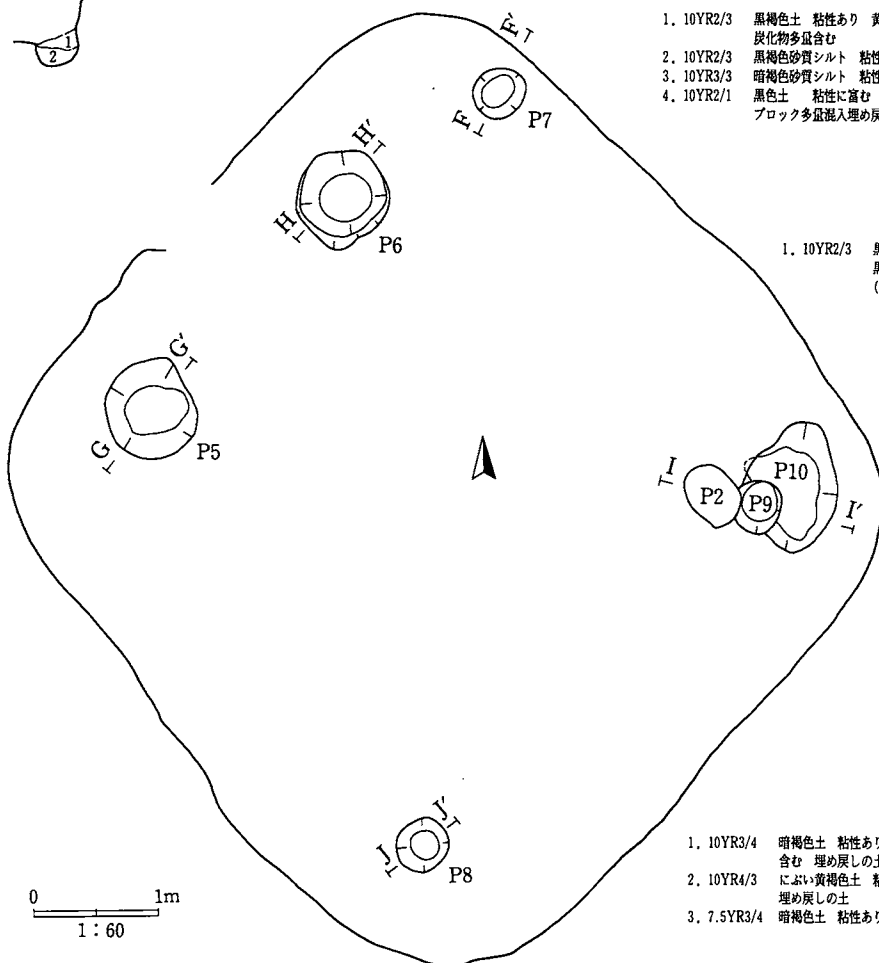
- 7.5YR2/2 黒色土 粘性あり 締まりなし 焼土ブロック(1~2cm大)・炭化物・骨片含む
- 10YR3/4 暗褐色砂質土 粘性なし IV層起源の砂質シルト 焼土の混入土



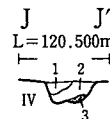
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒多量混入 焼土粒・炭化物多量含む
- 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性に富む 炭化物多量含む
- 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性に富む 焼土粒少量含む
- 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 砂質シルトブロック多量混入埋め戻しの土



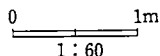
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土ブロック・黒色土ブロック・暗褐色土ブロック・焼土ブロック(各3cm大)を等分に含む



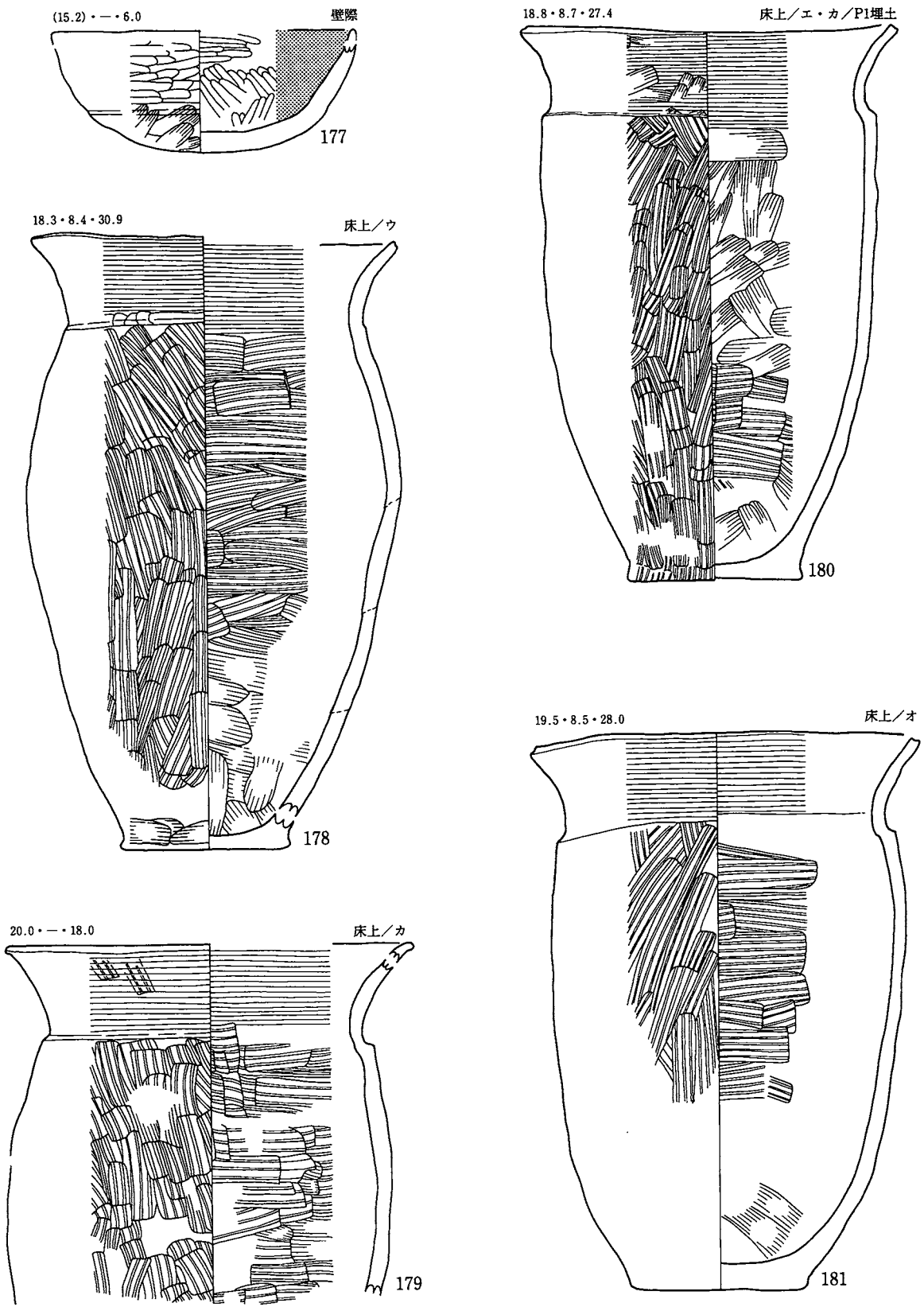
- 10YR1.7/1 黒色土 粘性なし 焼土ブロック含む
- 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 締まりなし 黒色土混入
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性に富む 焼土ブロック・炭化物含む



- 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 焼土ブロック(0.5~2cm大)・炭化物(0.3~1.5cm大)含む 埋め戻しの土
- 10YR4/3 黄褐色土 粘性あるが砂質 焼土粒・炭化物(共に1cm大)含む 埋め戻しの土
- 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性あり 締まりなし 焼土層

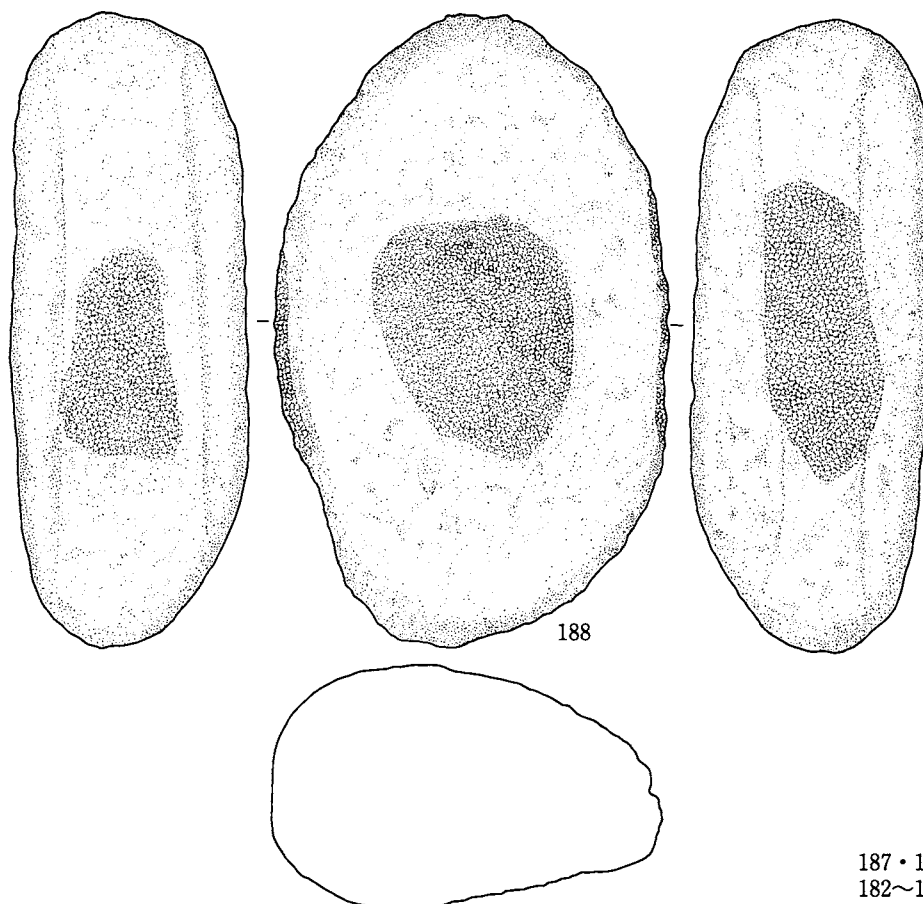
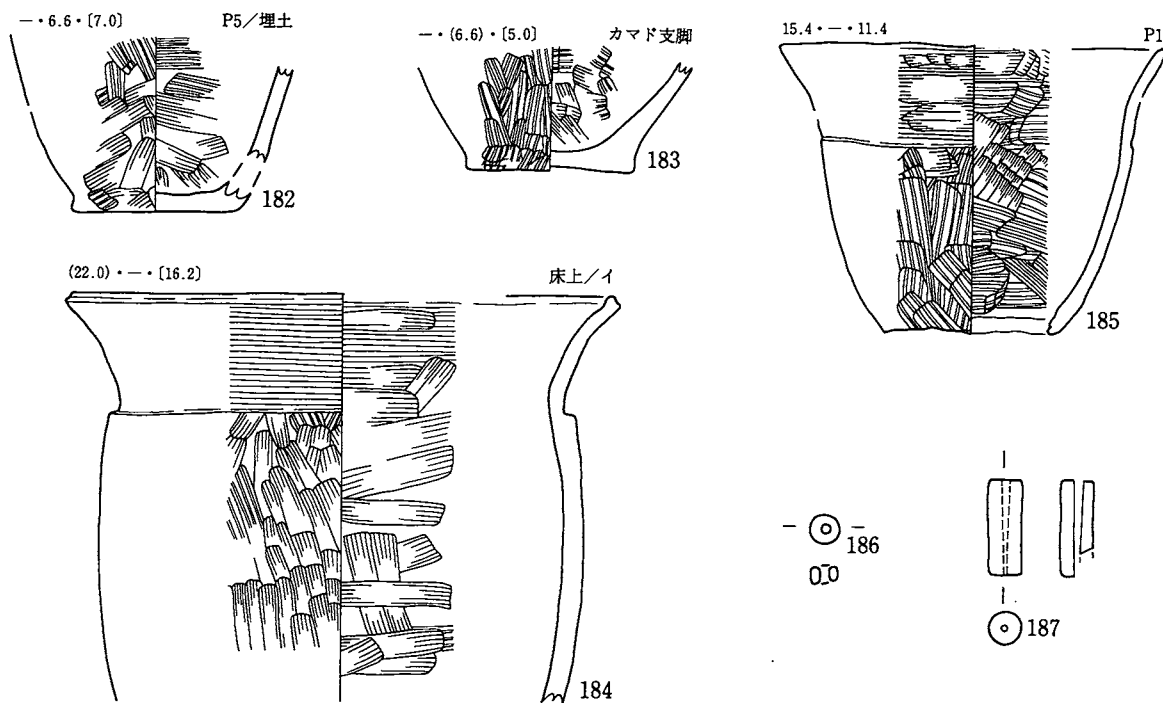


第62図 RA142竪穴住居跡(2)



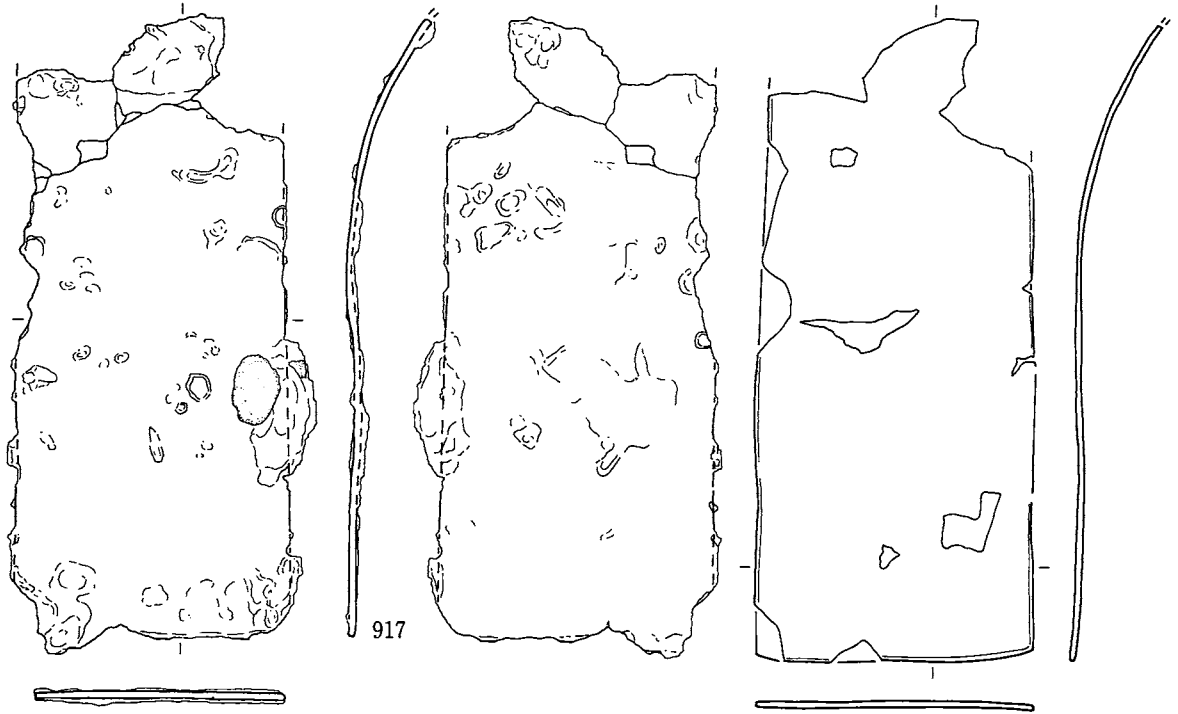
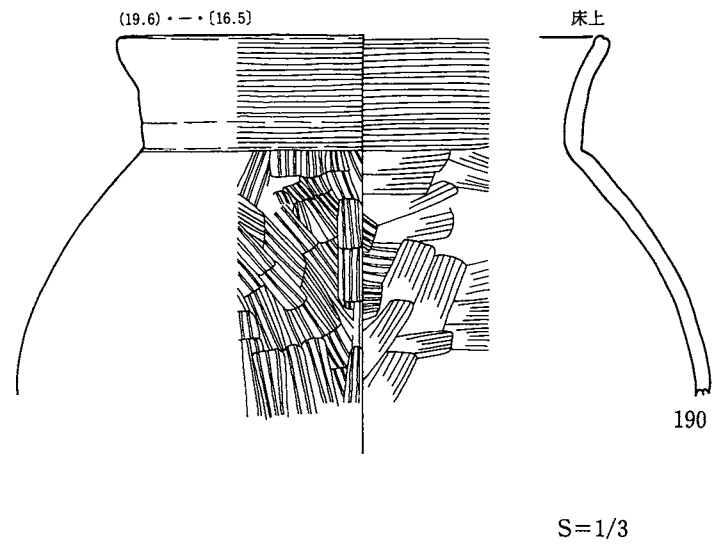
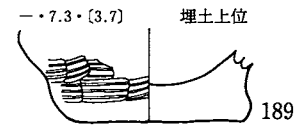
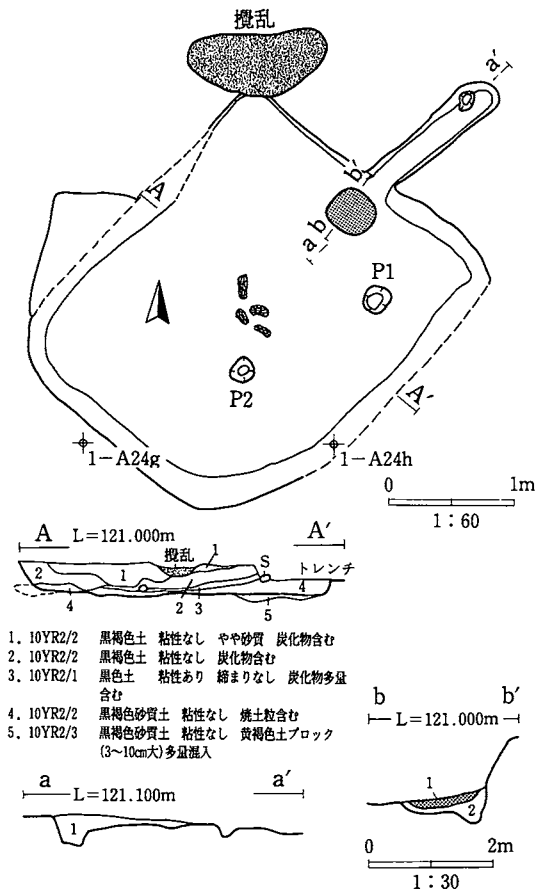
S=1/3

第63図 RA142竪穴住居跡出土遺物(1)



186は原寸  
 187・188はS=1/2  
 182~185はS=1/3

第64図 RA142竪穴住居跡出土遺物(2)



S=1/2

第65図 RA143竪穴住居跡・出土遺物

を含む黒褐色土である。本住居は焼けたものと考えられる。＜壁・床＞ 壁は床からやや内湾気味に立ち上がる。床は貼り床が施され、黄褐色土ブロックを多量に含む砂質土が貼られている。カマド袖と思われる部分のみ貼り床がない。貼り床の上面は堅く締まる。

＜柱穴＞ 床面上では検出できなかったが、床をはがした段階で柱穴状の土坑を2基検出した。比較的浅い土坑で、真に柱穴となり得るかは不明である。

＜カマド＞ 北東壁に位置する。天井や袖の部分は削平されて、現存していない。燃焼部には焼土が径34×36cmの楕円形に形成されている。焼土の厚さは4cmである。煙道部は長さ1.35m、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。

土坑No	P 1	P 2
直径cm	22×21	22×21
深さcm	15	14

燃焼部から緩やかに下がり勾配で、煙出しに至って急に下がる。煙道の埋土は炭化物や焼土粒、褐色土ブロックを含む黒褐色土である。＜遺物＞ 中央部カマド前の床面よりやや浮いて、鉄製品917が出土している。この鉄製品は鎧の鳩尾板の可能性がある旨、津野仁氏よりご教示を受けた。また、床面から190のロクロを使用しない土師器の球胴壺破片や炭化材が出土している。

＜時期＞ 出土した土器から奈良時代と考えられる。

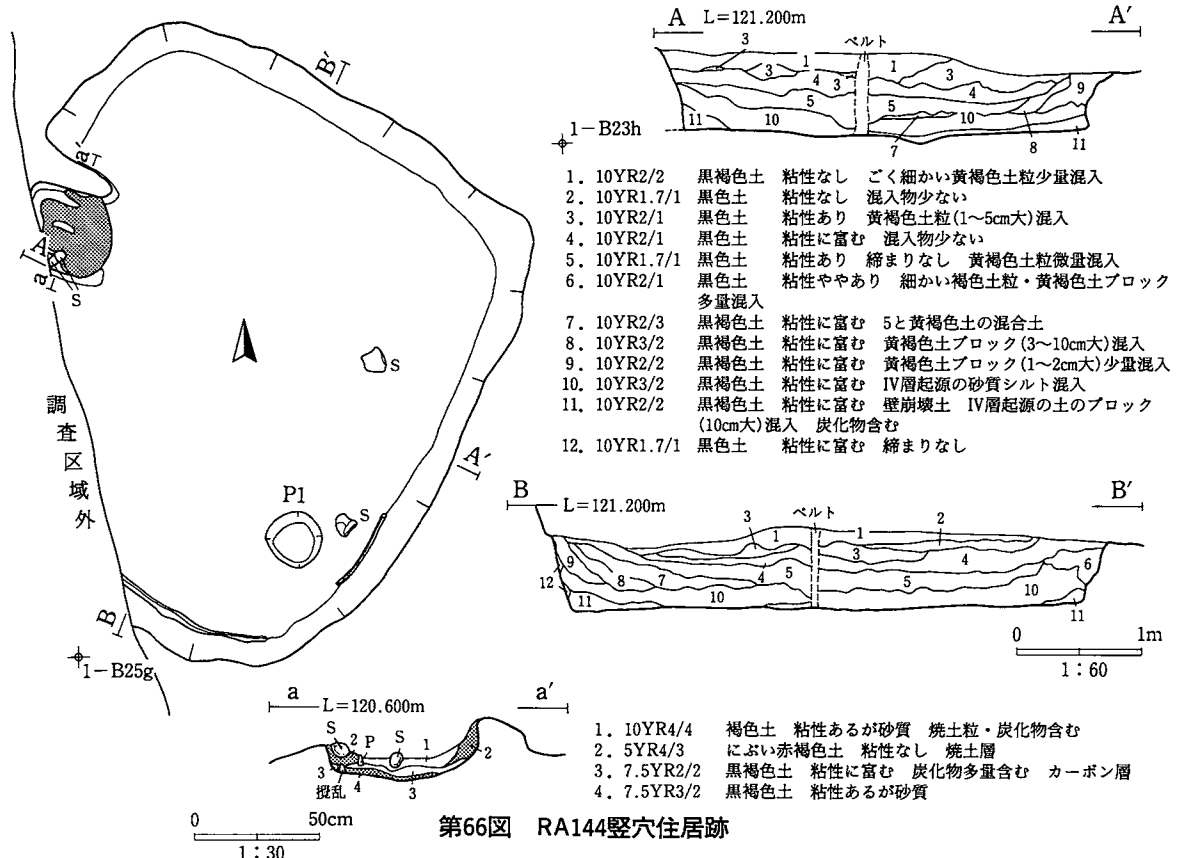
(金子)

#### RA 144 竪穴住居跡 (第66図、写真図版32)

＜位置・重複関係＞ 調査区西端の1-B区南側に位置する。住居跡の一部、カマド煙道は調査区外に延びている。RG 091 溝跡と重複し、(新) RG 091 溝跡→(旧) 本遺構である。検出はIII層下位である。

＜平面形・規模＞ ややいびつな隅丸方形を呈する。規模は4.11×3.65mである。

＜埋土＞ 12層に細分され、上層は混入物の少ない黒褐色土および黒色土、中層は黄褐色土粒を含む黒色土、下層はIV層起源の砂質シルトが混入する黒褐色土である。＜壁・床＞ 壁は床から外傾またはやや外反気



味に立ち上がる。壁高は67 cmである。床は平坦で貼り床はない。精査中に湧水があったため、不明な点もあるが、やや締まっているようである。南西の壁と南東壁の南よりの一部には周溝が巡っている。幅は5～8 cm、深さ3 cm、調査区外に延びているため長さは不明である。また、南東壁よりの床面の一部に白色の粘土が認められた。調査時には粘土と認識できず、位置や厚さ範囲などは記録していない。カマド周辺の床面には炭や焼土が薄く堆積している。

<柱穴> 南コーナーよりの床面に柱穴状の土坑P1を検出したが、柱穴とするには深さが不足するよう  
に思われる。<他の施設> 南東壁よりの床面に径15～20 cmの礫を検出した。

土坑No	P 1
直径cm	45×43
深さcm	13

<カマド> 北西壁のほぼ中央に位置している。左側の袖や煙道、煙出しは調査区外に延びている。袖はIV層を削り出して構築している。天井に被覆されていた粘土はカマド内に崩落している。カマド手前の焚き口左袖には芯となるような礫が存在したが、湧水のため精査時にかなり削ってしまい、芯であったかどうか不明である。燃焼部には68×60 cmの楕円形に焼土が形成されている。袖の内側もよく焼けており、焼土の厚さは最大で9 cmである。

<遺物> ロクロ不使用の土師器破片が出土しているが、小片で図化に至らなかった。

<時期> 出土遺物が少ないので、不明な点が多いが、土師器の破片やカマドの方向、構築方法などから古墳時代末～奈良時代に属すると考えられる。 (金子)

#### R A 145 竪穴住居跡 (第67図、写真図版33・34・221)

<位置・重複関係> 調査区西寄りの3-A区に位置する。削平のため重複関係は確認できなかったが、R G 097の延長線上に本住居跡が存在するため同溝と重複し、本住居跡の方が古い可能性がある。住居跡の北側が攪乱によって、一部破壊されている。検出面はIII層下位である。

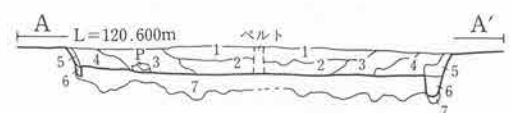
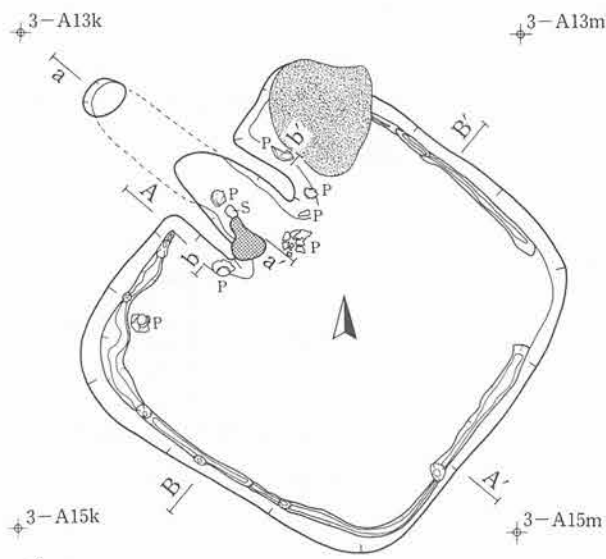
<平面形・規模> 隅丸方形を呈し、規模は3.17×2.88 mである。

<埋土> 6層に細分され、黄褐色土粒やブロックを含む黒褐色土が主体である。<壁・床> 壁は床からやや外反気味に立ち上がる。壁高は22 cmである。床はほぼ平坦で堅く締まり、表面には褐鉄層がごく薄く見られる。黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土で、貼り床が施される。北西壁のカマドより南側、南西壁、南東壁の南より北東壁に壁溝が検出された。幅6～23 cmで、深さ8～12 cmである。壁溝中には40 cm～1.5 mおきに径7～14 cm、深さ8～13 cmの小柱穴が認められる。

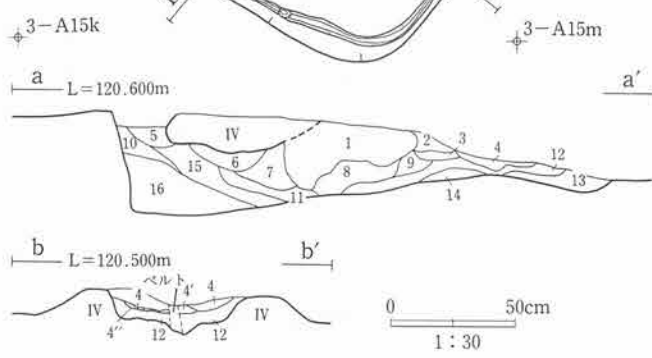
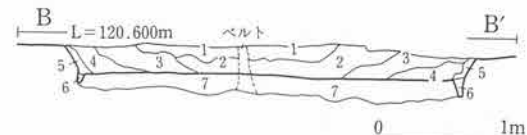
<柱穴・他の施設> 検出されなかった。

<カマド> 北西壁の中央からやや北寄りに位置する。天井を被覆していた粘土はカマド内に崩落している。袖はIV層を削り出して構築しており、焚き口からは袖の芯となるような礫や土器は出土しなかった。燃焼部の焼土の形成はあまり顕著でなく、天井部に形成された焼土が薄い層となって認められた程度である。カマド内部からは支脚に使用されていたと見られる礫と甕の底部が伏せられて検出された。カマドの埋土から骨片が出土している。これらはほ乳類のもので、全て熱による変色が認められるとの同定結果を得ている。煙道部は長さ1.10 mの削り貫き式で、底部は燃焼部から徐々に下がり勾配で煙出し部に至る。埋土は天井となったIV層の崩落土のほか、焼土粒や炭化物を含む灰褐色土、黄褐色土、黒褐色土～黒色土である。特に下層に炭化物や焼土が多い。煙出しには38×28 cmの楕円形土坑が掘り込まれている。

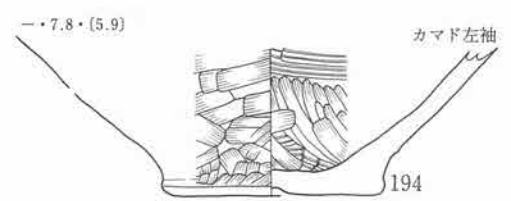
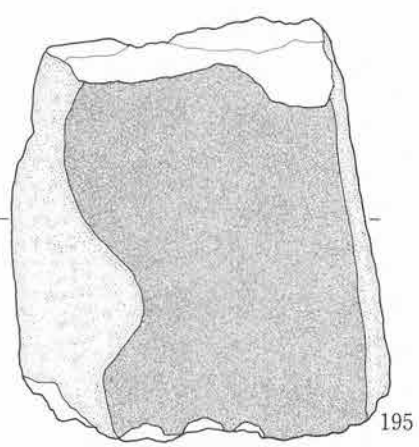
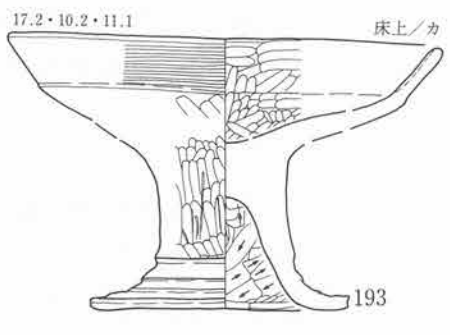
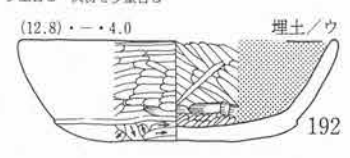
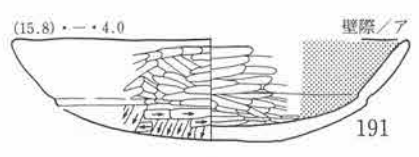
<遺物> 主にカマドの上や両脇、カマド前の床面など、カマド周辺からロクロ不使用の土師器が多く出土している。194はカマド左袖上から出土した球胴甕底部である。192はカマド上から、191は住居西コーナーの壁際4層から出土した坏である。193はカマド前の床面から出土した高坏である。



1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土粒(0.1cm大)部分的に少量混入
2. 10YR2/1 黒色シルト 粘性あり 黄褐色土粒(0.2~3cm大)微量混入 床面に接する部分少量褐鉄含む
3. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性あり 黄褐色土ブロック(1~2.5cm大)多量混入
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 部分的に黄褐色土粒少量混入
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 壁崩壊土
6. 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒混入 壁崩壊土
7. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 堅く締まる 黒褐色土・黄褐色土ブロックの混合土



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 暗褐色土・黄褐色土粒混入 焼土粒少量含む 天井の崩落土
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック多量混入 焼土含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 濁ったIV層土 カマド天井の崩壊土
4. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 焼土粒・多量の炭化物含む
- 4' 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性あり 焼土粒(0.5cm大)多量を含む
- 4'' 5YR4/8 赤褐色土 粘性あり 焼土層
5. 7.5YR4/4 褐色土 粘性弱 黒色土粒混入
6. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 炭化物少量含む
7. 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土多量混入
8. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む
9. 5YR3/2 暗赤褐色土 粘性に富む 焼土多量含む
10. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黒色土・暗褐色土・黄褐色土の混合土
11. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む
12. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 焼土粒・炭化物・骨片含む
13. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 焼土粒・炭化物・骨片含む
14. 7.5YR4/2 灰褐色土 粘性あり 締まりなし 焼土粒・炭化物含む
15. 10YR3/3 黄褐色土 粘性に富む 焼土粒・炭粒各少量含む
16. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 焼土ブロック(0.5~3cm大)多量含む 炭粉を多量含む



195はS=1/2  
191~194はS=1/3

第67図 RA145竪穴住居跡・出土遺物

<時期> 出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。

(金子)

#### R A 146 竪穴住居跡 (第 68・69 図、写真図版 34～36・222)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-B 区に位置する。住居の東側が R G 088 溝跡、煙道と煙出しが R G 115 溝跡と重複する。R G 088 溝跡の埋土は本住居跡と似通っているが、精査、断面の観察などで、新旧関係は (旧) R G 088 溝跡→R A 146 住居跡→R G 115 溝跡 (新) である。検出は III 層中である。

<平面形・規模> 方形を呈するが、カマドの対面の壁 (南壁) 中央に張り出しが認められる。規模は 6.13×6.00 m である。

<壁・床> 壁は床から外傾して立ち上がる。壁高は 23 cm である。床はほぼ平坦で、縮まっている。黄褐色土ブロックを大量に含む黒色土によって、貼り床が施されている。東壁の南側の一部と南壁、南東コーナー付近に壁溝が検出された。幅 10～15 cm、深さ 4～20 cm である。

<柱穴> P 1～P 4 の 4 基検出された。平面形は長円形を基調としている。<他の施設> 間仕切り状の溝が 3 条、東壁壁際から土坑 1

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
直径cm	39×33	39×31	37×22	42×37	56×55	58×54	57×55
深さcm	47	77	64	81	12	21	14

基 (P 5)、床下土坑 2 基 (P 6・P 7) が検出された。間仕切り状の溝は壁際、あるいは壁から柱穴に向かって延びている。溝 1 は P 2 に向かって延びており、長さ 1.15 m、幅 20～24 cm、深さ 7 cm、溝 2 は P 3 に向かって延びており、長さ 1.31 m、幅 10～22 cm、深さ 5～10 cm である。溝 3 は壁中から P 4 に向かって延びる溝であるが、P 3 に達する前に浅くなり、溝といえるほど深くない痕跡状のへこみが P 3 に達している。溝自体の長さは 65 cm、幅 12～18 cm、深さ 8 cm である。P 5 は東壁の北よりの壁際から検出された浅い土坑である。P 6・P 7 は床をはがしたところ、検出された床下の土坑である。張り出しは南壁中央に位置し、29 cm ほど壁が外側に張り出している。張り出しの西側壁際には 19×33 cm ほどの大きさの白色粘土が床より若干浮いて検出された。

<カマド> 北壁中央に位置する。天井に被覆された粘土はカマド内に崩落している。袖は IV 層を削り出して構築しており、焚き口には芯材となるような礫や土器は見られなかった。燃焼部には 69×44 cm の楕円形に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で 11 cm である。燃焼部の奥には拳大の礫の上に土師器甕の底部を伏せたものが出土した。支脚として使用されたと考えられる。

煙道部は削り貫き式で、長さ 1.48 m、幅 30～42 cm である。煙道底部は燃焼部からほぼ水平に延びるが、徐々に下がり勾配となり、煙出しに至って急に下がる。埋土は上層が III 層～IV 層の崩壊土を含む褐色土、下層が黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が主体である。

<遺物> 床面と埋土中からロクロ不使用の土師器が出土している。196 はカマド前の床面から出土した坏、199 はカマドの支脚として用いられていたと見られる甕の底部である。埋土中からは南東側から比較的多く出土した。197 は高台と思われる土器で 4 層から、198 の甕は上層から出土した。

<時期> 出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。

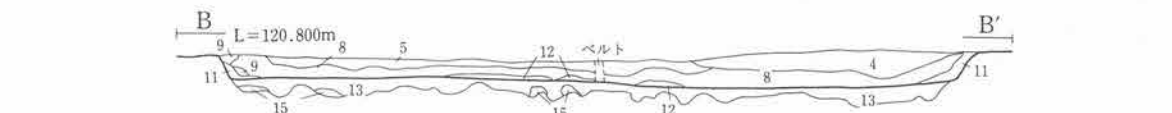
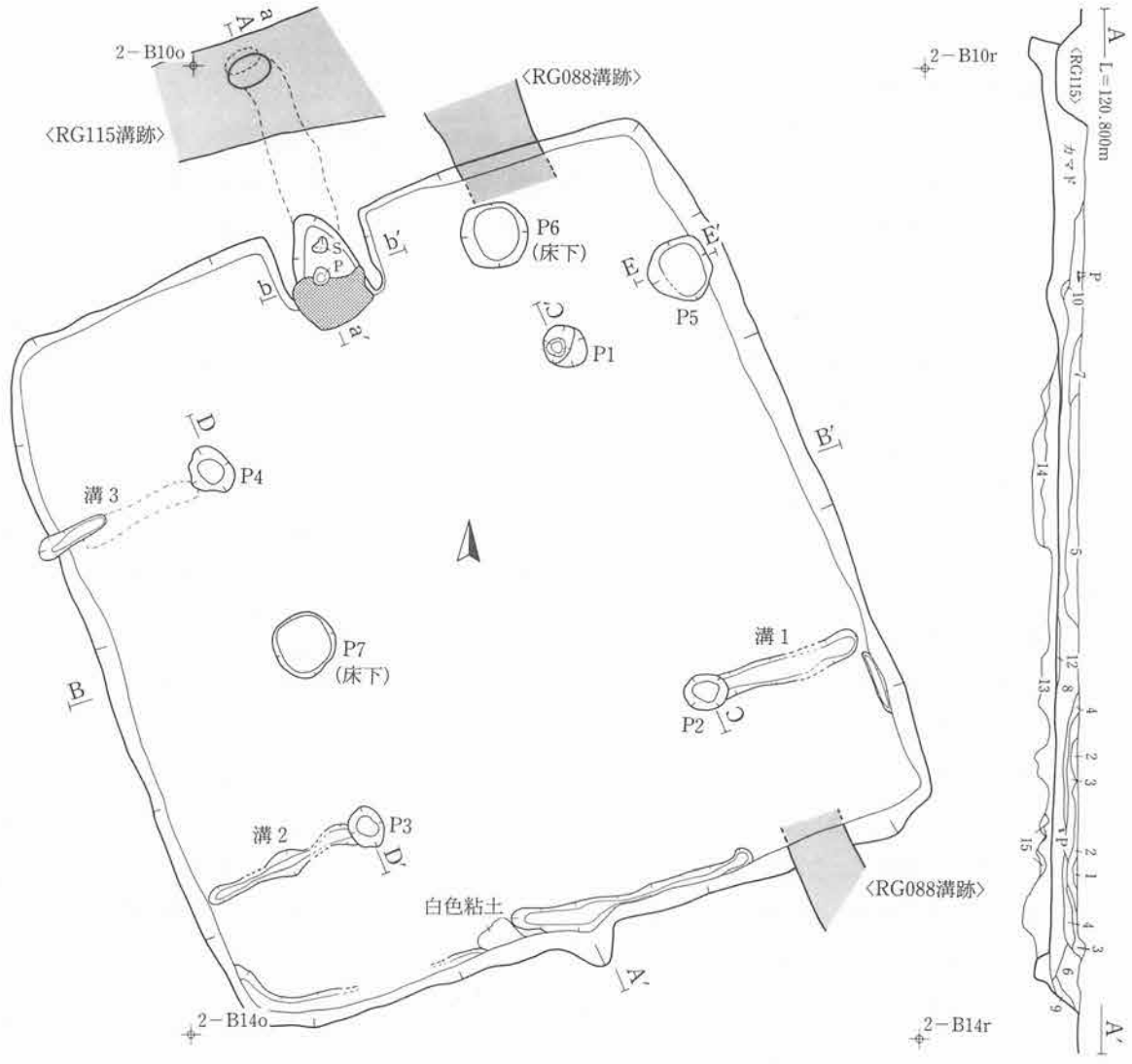
(金子)

#### R A 148 竪穴住居跡 (第 70 図、写真図版 37・38・222)

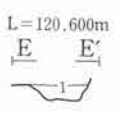
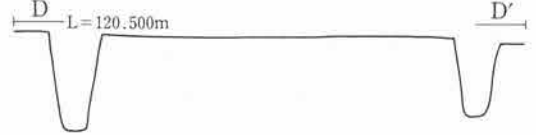
<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。重複関係はない。<平面形・規模> 隅丸方形を呈する。規模は 3.60×3.39 m である。検出は IV 層上面である。

<埋土> 5 層に細分され、黄褐色土ブロックや炭を含む黒褐色土～黒色土が主体である。カマドの脇の



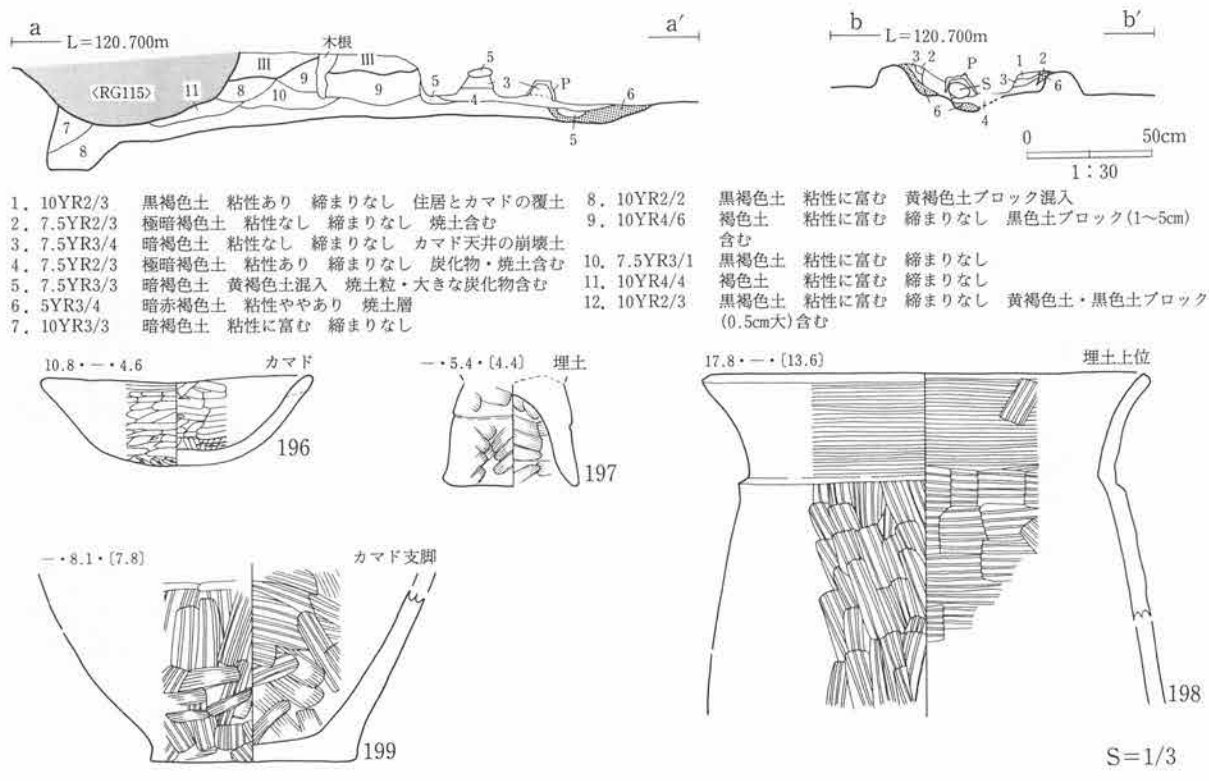


- |   |   |
|---|---|
| 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 堅く締まる 黄褐色土粒混入              | 9. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒多量混入             |
| 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒微量混入                | 10. 10YR4/4 褐色土 粘性に富む カマド崩壊土                |
| 3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒・黄褐色土ブロック混入           | 11. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む                       |
| 4. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 炭化物少量含む              | 12. 10YR1.7/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 混入物少ない (貼り床)  |
| 5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土混入 炭化物含む             | 13. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック(1~10cm大)大量含む |
| 6. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり                           | 14. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む                      |
| 7. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土粒多量混入                  | 15. 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり 締まりなし                |
| 8. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒・黄褐色土ブロック多量混入 炭化物少量含む |   |



- |  |
|--|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 締まりなし 黄褐色土粒(0.1~0.3cm大)混入 炭化物(0.5cm大)少量含む |
|--|

第68図 RA146竪穴住居跡(1)



第69図 RA146竪穴住居跡(2)・出土遺物

壁際からは少量の骨片が出土している。北側のコーナー付近の埋土中からは焼土が検出されている。また、住居中央の床面や壁際の埋土中から炭化物も出土しており、本住居は火を受けて焼けた可能性が高い。

<壁・床> 壁は床から外反、あるいはやや内湾気味に立ち上がる。壁高は27cmである。床面は平坦で締まっており、黄褐色粘土が多く混入した暗褐色土で貼り床が施される。第70図の破線で示した内部は周囲より床面が2~5cm盛り上がっている部分である。

<柱穴> 柱穴は検出されなかった。<土坑> 南東壁際から2基の土坑が検出された。P1は楕円形を呈する土坑で、埋土には白色粘土粒、骨片、黄褐色粘土粒、焼土粒が多く含まれる。P2は長円形を呈し、埋土は焼土粒を多く含む黒褐色土である。P1の南側に隣接して、床面から白色粘土が検出された。粘土は33×23cmの不整形で、厚さは6cmである。

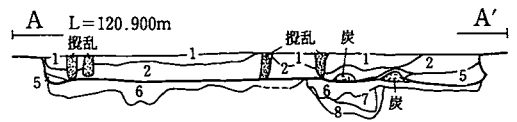
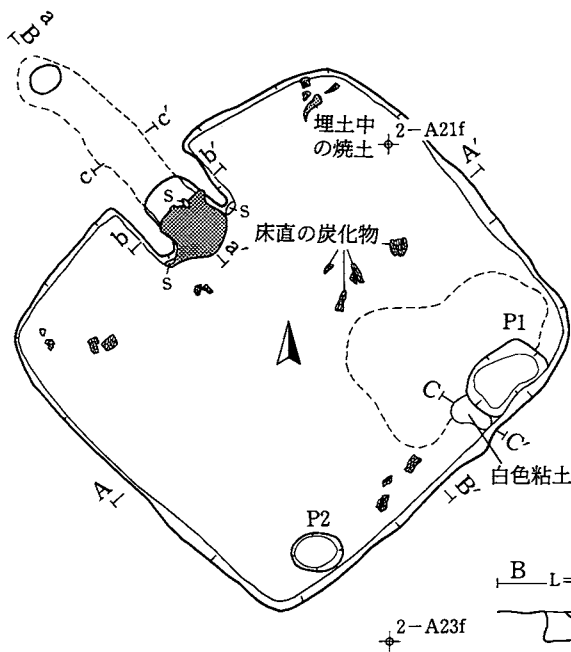
土坑No.	P 1	P 2
直径cm	67×42	43×32
深さcm	23	18

<カマド> 北西壁のほぼ中央に位置している。天井を被覆した粘土は崩落して、カマド内部に堆積している。袖はIV層を削り出して構築しているが、焚き口には厚みのない礫を芯として据えている。燃焼部は50×40cmの不整形に焼土が形成されている。袖の内側も焼土化しており、焼土の最大厚は11cmである。燃焼部奥には長円板状の礫が据えられている。支脚として使用したものと思われる。カマド内に堆積する土からも骨片が出土している。

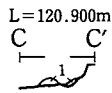
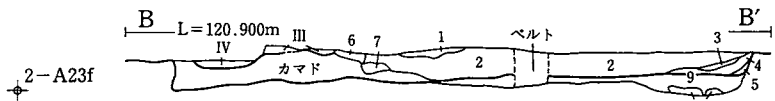
煙道部は長さ1.50m、幅35~44cmで刳り貫き式である。燃焼部からごく緩やかに下がり勾配で、煙出しに至っている。埋土は炭粉、炭を多く含む黒褐色土~黒色土である。

<遺物> ロクロ不使用の土師器が出土している。201はカマド内から出土した坏の破片で、底部に×状の線刻が施される。200は埋土中から出土した坏で、格子状の線刻が施され、その上からミガキが施されている。

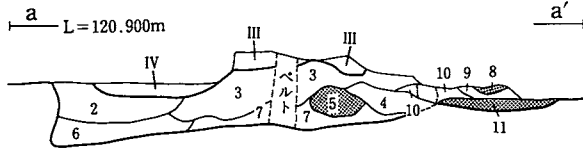
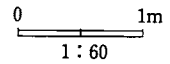
<時期> 出土遺物から奈良時代と考えられる。 (金子)



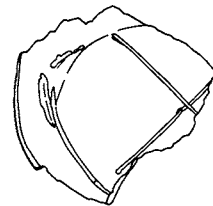
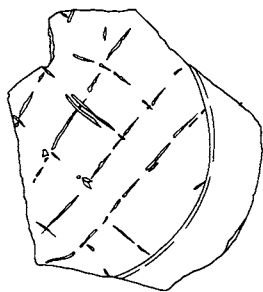
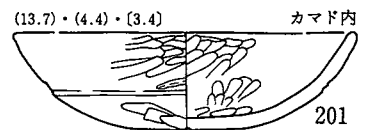
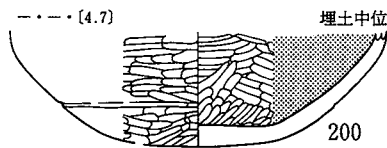
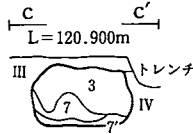
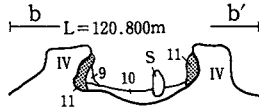
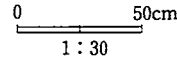
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土粒混入
- 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック少量混入 炭化物含む
- 3. 10YR2/1 黒色炭 粘性に富む 締まりなし
- 4. 10YR1.7/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 炭化物少量含む
- 5. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 締まりなし 壁崩壊土
- 6. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色粘土多量混入 炭粉含む カマド天井崩壊土
- 7. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 炭化物・焼土粒含む
- 9. 10YR4/3 暗褐色土 粘性弱 締まりなし 黒色土粒(径2cm大)含む
- 10. 10YR4/4 褐色土 粘性に富む 締まりなし



- 1. 1.5Y6/3 オリーブ黄色土 粘性ややあり



- 1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 炭化物含む 黄褐色粘土主体
- 2. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性あり 締まりなし 炭化物含む
- 3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭粉多量含む
- 4. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 焼土粒・炭化物含む
- 5. 5YR3/2 暗赤褐色土 粘性あり 強く締まる 焼土層
- 6. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 炭化物多量含む
- 7. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黒色土(炭粉?)含む
- 7. 7層よりも黒い層
- 8. 5YR4/4 におい赤褐色土 粘性なし 焼土層
- 9. 10YR1.7/1 黒色土 粘性なし 焼土粒少量含む
- カーボン層
- 10. 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性なし 焼土粒・炭化物・骨片含む
- 11. 5YR4/3 におい赤褐色土 粘性なし 焼土層



S=1/3

第70図 RA148竪穴住居跡・出土遺物

R A 151 竪穴住居跡 (第 71・72 図、写真図版 39・222・223)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 2 B 区南寄りに位置している。遺構の北側は調査区域外の道路下に延び、南側が R G 045 溝跡 (平安時代) と重複する。新旧関係は本遺構が切られている事から (新) R G 045 溝跡→ (旧) R A 151 竪穴住居跡である。IV 層上面で黒褐色土の広がりで見出されている。

<平面形・規模> 南側半部が重複する事から平面形・規模の全容が不明である。確認された規模は東辺 3.38 m、西辺 56 cm、北辺 54 cm を測る。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルトを主体とする 5 層に大別され、黄褐色土をブロック状に混入している。壁際に堆積する黄褐色砂質シルトには炭化物を含む。自然堆積による埋没と思われる。<壁・床> 壁は床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高は東壁 19 cm、西壁 14 cm である。床はほぼ平坦で締まっている。

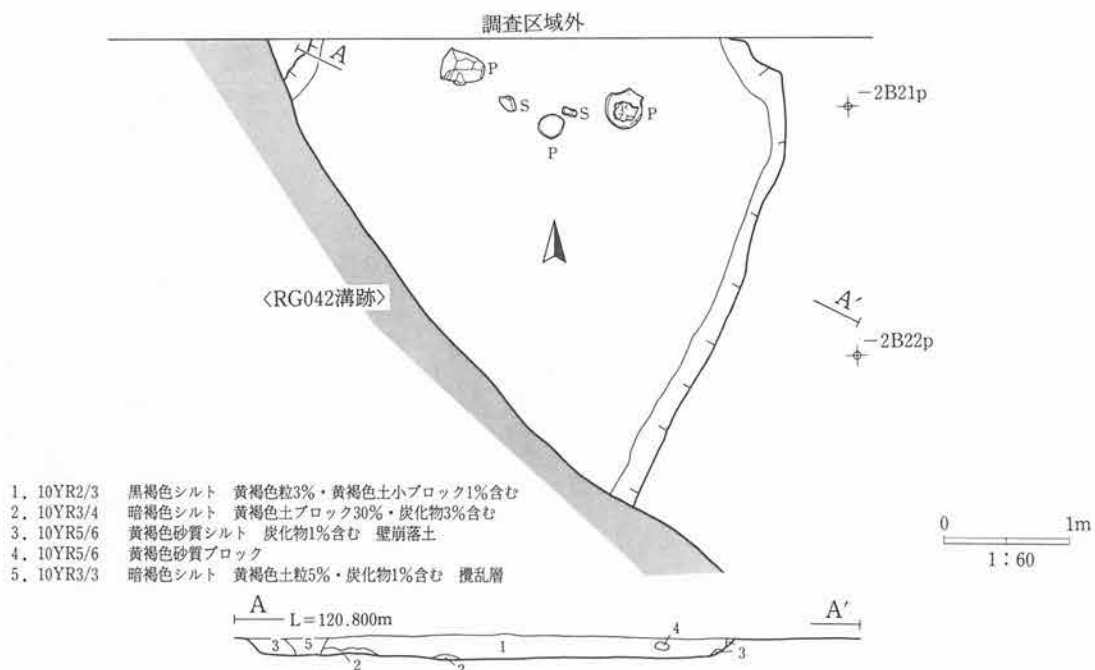
<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは検出されなかったが、道路下の北側に設置していると思われる。

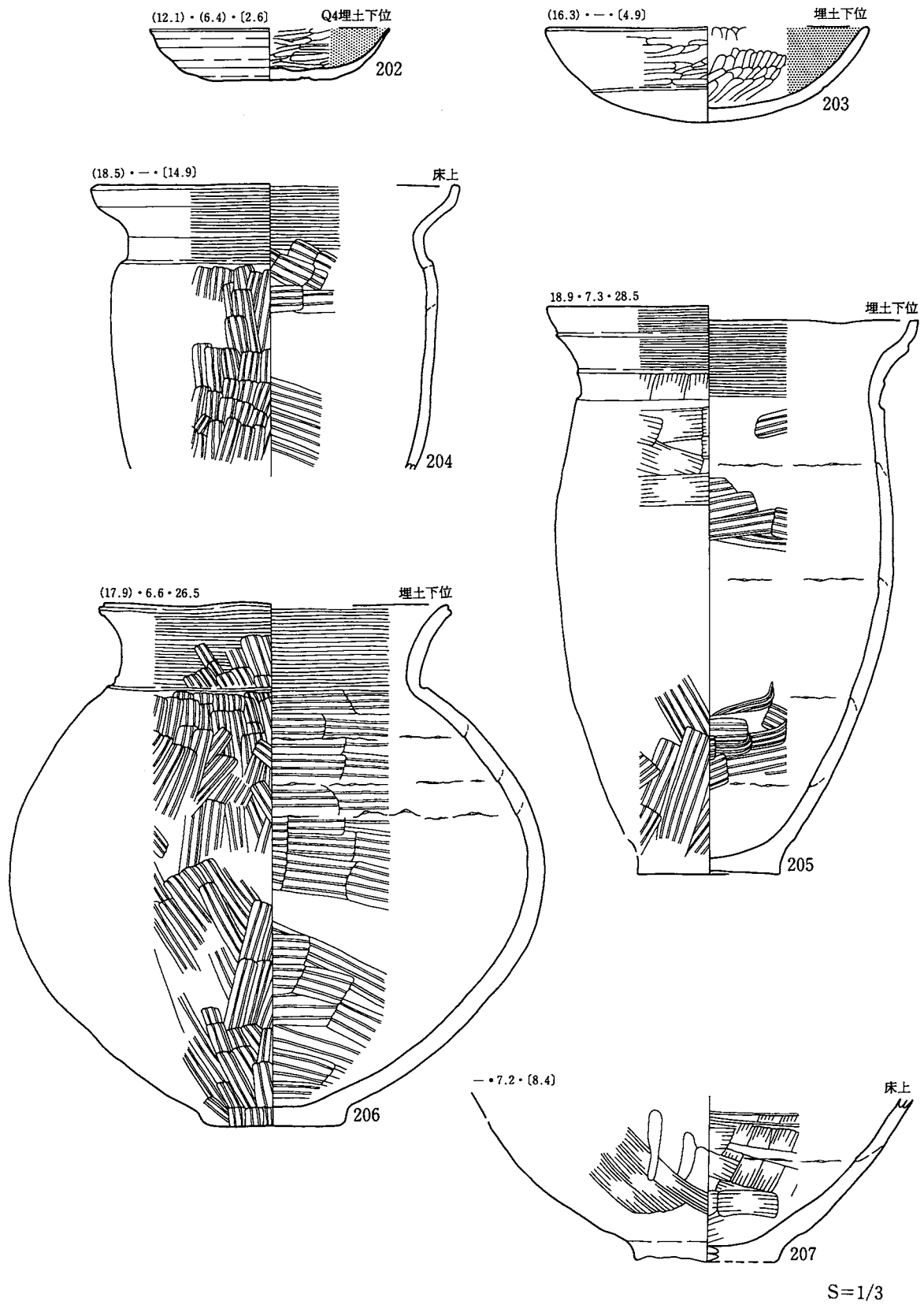
<遺物> 床上と埋土下位から、土師器坏・甕・球胴甕が出土している。202 の土師器坏は埋土下位からの出土であるが、重複する平安時代の溝跡から後世に流れ込んだものと思われる。203 はロクロ不使用の土師器坏 (I A a 群) である。丸底で体部下半に浅い段が巡り、口縁部は内湾気味に立ち上がっている。外面の上半部は横方向に細いヘラミガキ、内面は縦方向にヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部はヘラミガキ調整である。

204~207 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) である。204・205 は長胴形で、頸部に浅い段が巡っている。口縁部は頸部からくの字状に強く外反し、上半部で直立気味に立ち上がる。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ調整、体部内外面はハケメ調整と一部にヘラナデ調整が見られる。205 の底部はヘラナデ調整である。

206・207 は球胴甕で、207 は体部下半~口縁部を欠損している。206 の口縁部は頸部から強く外反し、口唇部に浅い一条の沈線が巡っている。口縁部は内外面ヨコナデ調整で、外面の一部に縦方向のハケメ調整が施



第71図 RA151竪穴住居跡



第72図 RA151竪穴住居跡出土遺物

している。体部外面はハケメ調整で、内面に粘土紐の積み上げ痕が明瞭に見られる。

<時期> 時期は土師器坏と甕の特徴から、奈良時代の8世紀前半代に比定される。(高橋)

#### R A 155 竪穴住居跡 (第73~77図、写真図版39・223~226)

<位置・重複関係> 東側調査区の一B区に位置している。東側にR G 045溝跡、西側にR A 189竪穴住居跡が近接している。<平面形・規模> 南東コーナーを含む東側の3分の1が調査区域外の道路下に延びる事から平面形・規模の全容が不明である。確認された規模は東辺3.65 m、西辺8.58 m、南辺3.42 m、北辺7.00 mを測る。検出された規模から9.00×8.30 mの隅丸長方形を呈すると思われる。南壁側の中央部はやや張り出している。

<埋土> 黒褐色シルト質土を主体とする4層に大別される。上層には焼土粒と微量の炭を含み、下位に褐色土がブロック状に混入し堅く締まっている。<壁・床> 壁は床面から外傾するように立ち上がり、壁高は西壁11 cm、南壁18 cm、北壁20 cmである。床は小起伏が一部に見られるが、平坦で堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑はP 1~P 5の5基検出されている。配置的に支柱穴とはならない。土坑P 6は南西コーナー寄りで見出されている。規模は28×25 cm、平面形は楕円形である。埋土は暗褐色シルトと黒褐色シルトで構成され、炭化物を含んでいる。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	184×111	29×29	34×31	28×26	77×60	28×25
深さcm	20	17	6	20	12	19

<カマド> カマドは北壁の中央部に設置している。本体部と煙道部の上半部は削平されている事から天井部の構造は

不明である。両袖部はにぶい黄褐色シルト質土で構築されている。支脚は確認されていない。燃焼部は径53×30 cmあり、楕円形状の焼土が厚さ7 cm形成されている。煙道部は掘り込み式か割り貫き式は不明である。煙道の全長は1.62 mを測り、燃焼部から緩やかに下がり煙出し部へと続いている。煙出し部は上部構造が不明である。

<遺物> カマド周辺部の床上と埋土上~中位から、土師器坏・甕・球胴甕・片口、須恵器・提瓶・甕、鉄製品が出土している。208・209はロクロ不使用の土師器坏(I A a群)である。丸底で体部下半に浅い段が巡り、口縁部は直立気味に立ち上がる208、内湾する209がある。外面は横方向に細いヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部は体部と同様にヘラミガキ調整である。

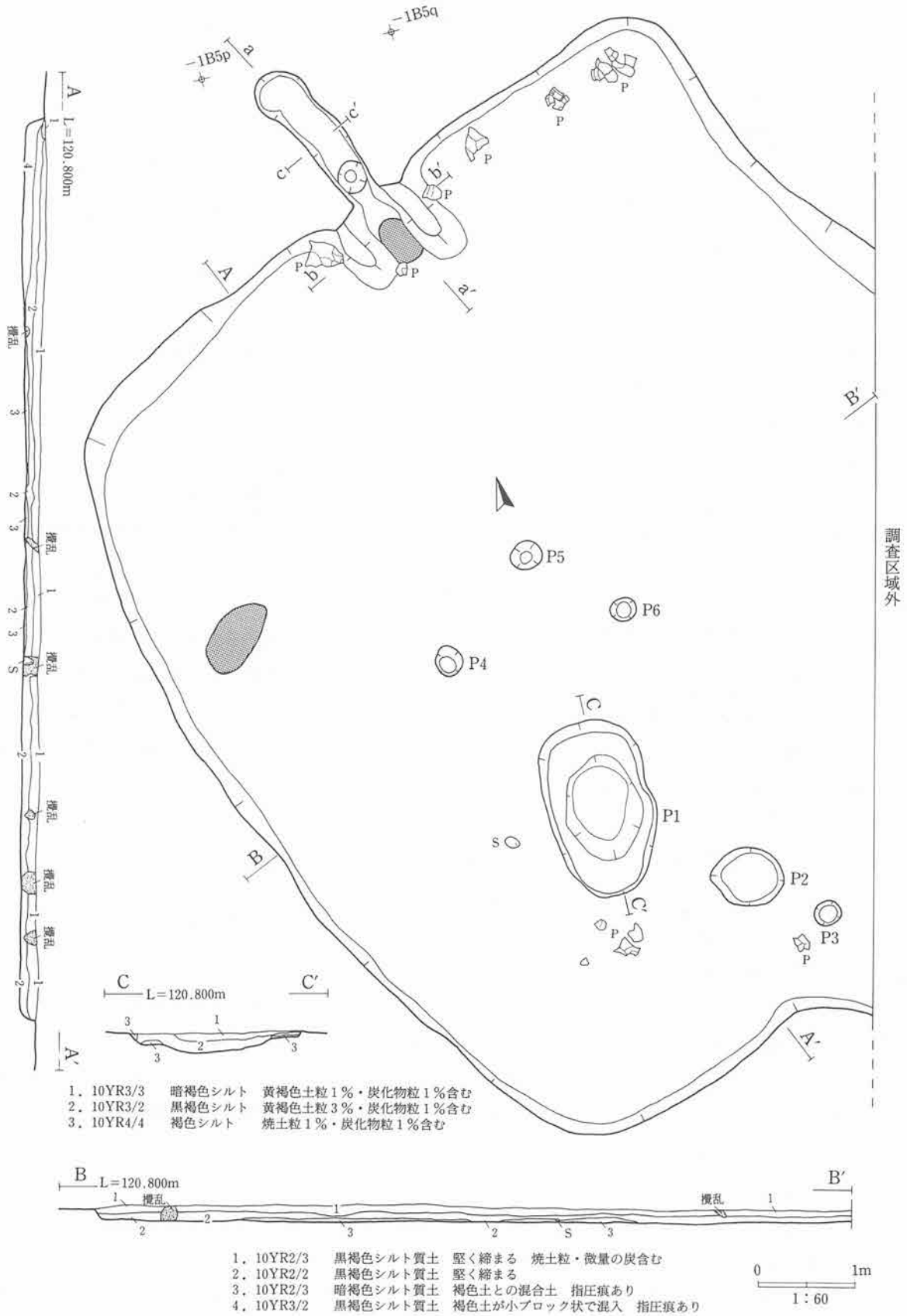
210~222はロクロ不使用の土師器甕(A II群)である。211・214・215・216・218は底部、219・220は体部上半から口縁部を欠損している。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり外傾する210~212、外傾する213・214、くの字に外反する215~217がある。口唇部に浅い沈線が巡るものは、212・214・216・217の4点である。口縁部は内外面ともヨコナデで一部に縦方向のハケメ調整も見られる。体部内外面はハケメ調整を施している。215~220は長胴甕で、内面に粘土紐の積み上げ痕が明瞭に見られる。221は底部破片である。

222は口縁部と体部下半~底部を欠損した球胴甕で、器面調整は体部内外面にハケメ調整を施している。

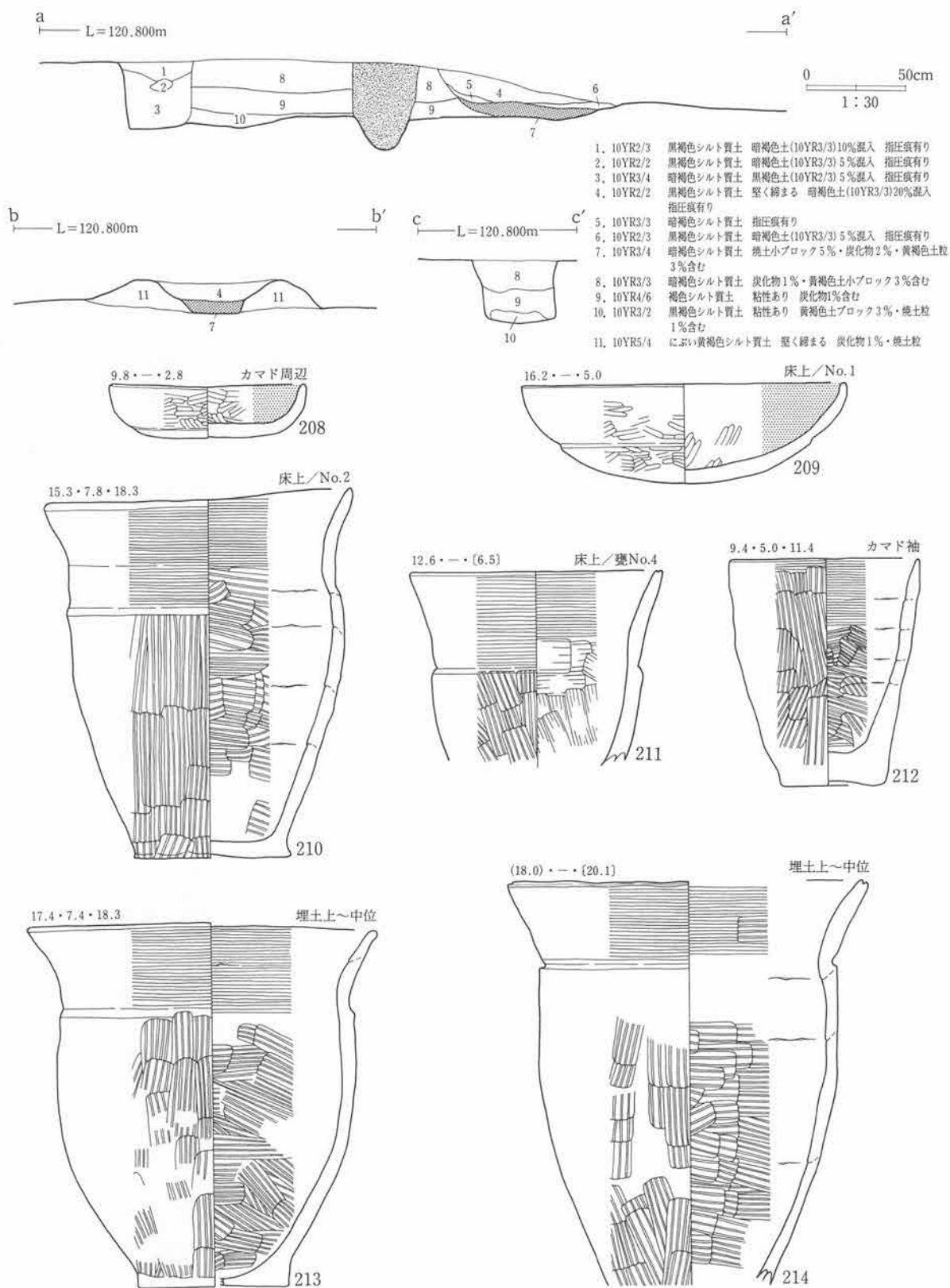
223は床上から出土したロクロ不使用の土師器片口である。底部は欠損しており、外面は磨滅している事から調整は不明である。内面の上半部には横方向のハケメ調整がある。

224は須恵器の提瓶で、口縁部の一部が欠損している。体部上半部には鉤状の貼り付けが見られ、体部外面にカキメを施している。225は須恵器甕の体部破片である。

226の鉄製品は刀子破片と思われるもので、現存長7.2 cm、幅2 cm、厚さ8 mmを測る。



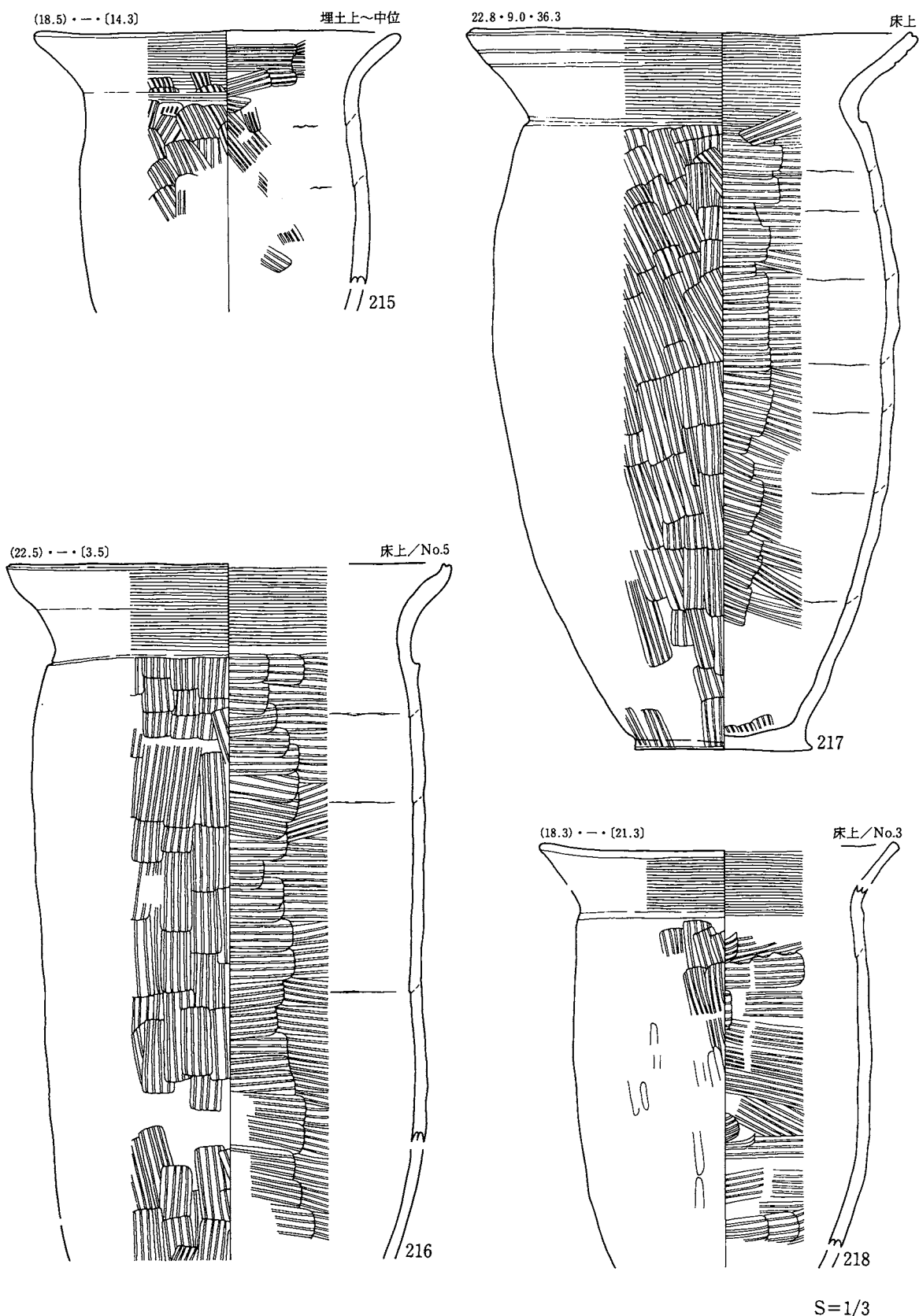
第73図 RA155竪穴住居跡(1)



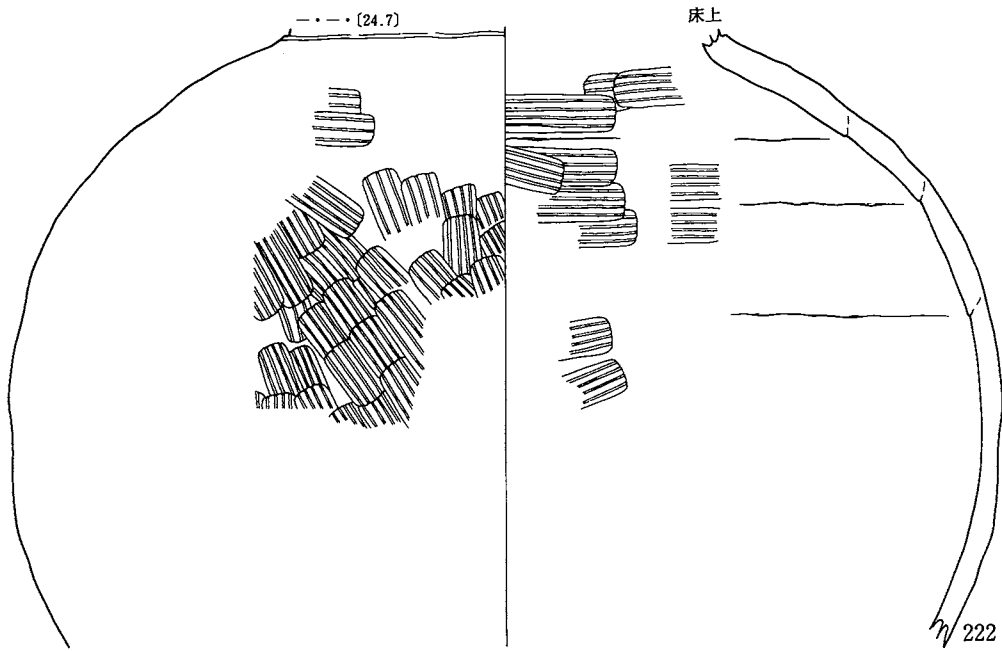
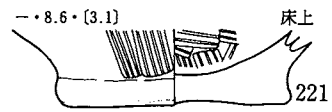
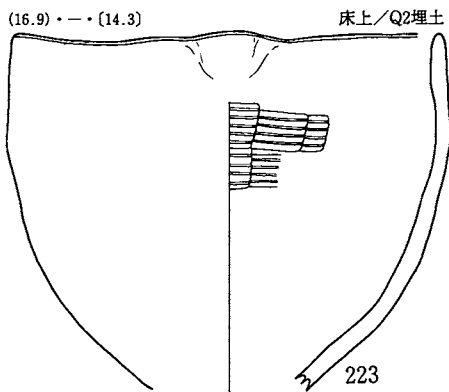
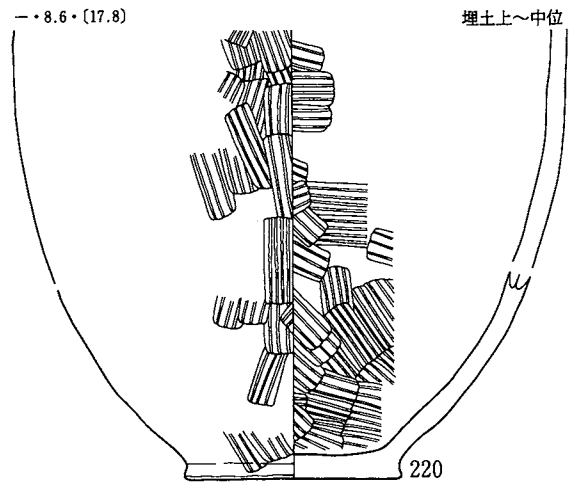
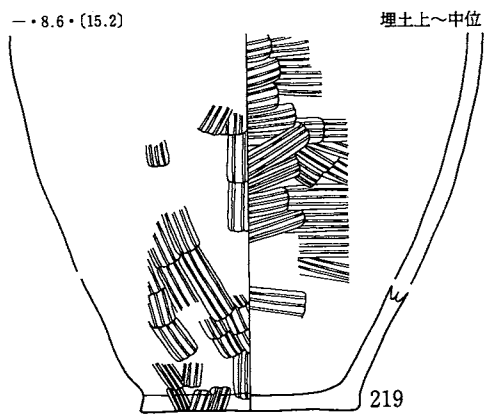
S=1/3

第74図 RA155竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



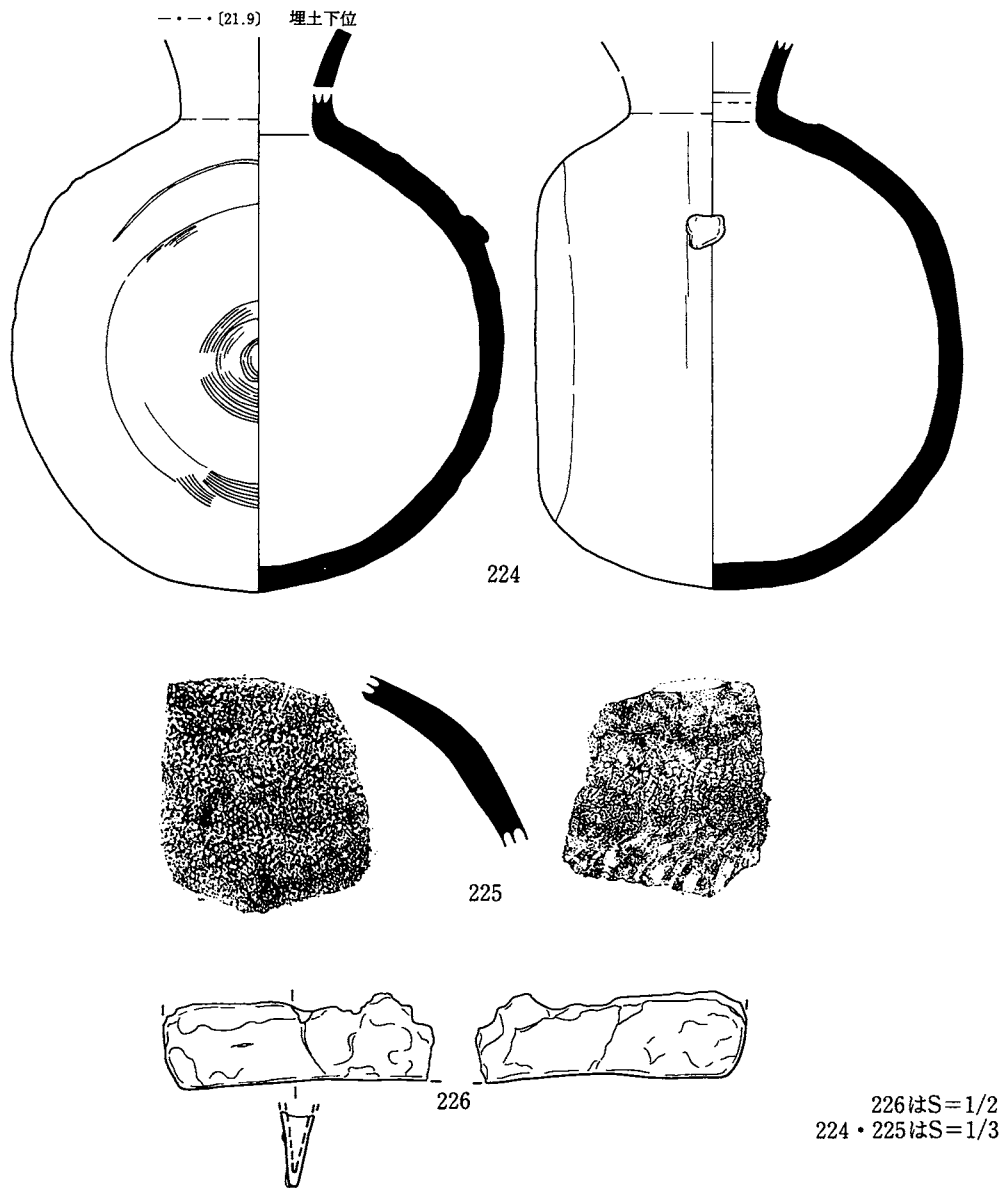


第75図 RA155竪穴住居跡出土遺物(2)



S=1/3

第76図 RA155竪穴住居跡出土遺物(3)



第77図 RA155竪穴住居跡出土遺物(4)

<時期> 時期は土師器坏と甕の特徴から、奈良時代の7世紀後半に比定される。

(高橋)

RA 156 竪穴住居跡 (第 78 図、写真図版 40・226)

<位置・重複関係> 東側調査区の1C区中央部付近に位置する。遺構の東側でRG 151 溝跡と重複しており、新旧関係は本遺構が切られている事から(新)RG 151 溝跡→(旧)RA 156 竪穴住居跡である。IV層上面で黒褐色土の広がりで見出されている。

<平面形・規模> 東側3分の2が重複する事から平面形・規模の全容が不明である。確認された規模は北西辺2.22m、南西辺2.31m、北東辺1.22mを測る。現存する規模から2.74×2.31mの隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト主体の2層に大別され、暗褐色土をブロックで混入し強く締まっている。埋土の様相は自然堆積と思われる。<壁・床> 壁は床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高は北西壁19cm、南西壁14cm、北東壁19cmである。床はほぼ平坦である。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは北東壁の中央部に設置されているが、重複し削平され左袖部が現存するだけである。袖部は暗褐色砂質シルトで造られ、長さ70cm、幅44cmを測る。

<遺物> カマド周辺部の床上から土師器杯・鉢・甕が出土している。227～230はロクロ不使用の土師器杯である。227～229の底部は丸底（I A a群）で体部と底部の境に段が巡っている。体部外面は横方向のハケメと一部にヘラミガキ、内面は放射状のヘラミガキ後に黒色処理をしている。底部はハケメ調整である。230は平底（I B b群）で体部に段がなく、口縁部は内湾気味に立ち上がっている。器形の歪みが大きく、胎土に金雲母を多く含む。体部外面と底部はヘラナデ調整を施している。

231は器形が台付鉢と思われるもので、高台部の一部は欠損している。口縁部は内湾し、器面調整は体部外面が細いヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

232はロクロ不使用の土師器球胴甕（A II群）の底部破片である。体部外面は縦方向のハケメ調整が施され、底部が木葉痕である。

<時期> 土師器杯の特徴から奈良時代の7世紀後半に比定される。 (高橋)

#### R A 167 竪穴住居跡 (第79図、写真図版40・226)

<位置・重複関係> 東側調査区の一1B区中央部北寄りに位置している。遺構西側で平安時代のR A 168竪穴住居跡と重複し切られている。新旧関係は(新) R A 168竪穴住居跡→(旧) R A 167竪穴住居跡である。また、南東コーナー側で浅い落ち込みと重複し、本遺構が切っている。検出はIV層上面で黒褐色土の広がり確認されている。

<平面形・規模> 西側3分の2が重複し削平される事から平面形・規模の全容が不明である。確認された規模は東辺3.20m、西辺1.00m、南辺3.80m、北辺1.42mを測る。現存する規模から3.58×3.42mの隅丸長方形を呈すると思われる。東辺の一部は削平を受けている。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする4層に大別され、炭を微量に含み強く締まっている。埋土は自然堆積と思われる。<壁・床> 壁は床面から緩やかな傾斜で立ち上がっており、壁高は10～16cmである。<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは検出されないが、削平を受けた北壁か西壁に設置されていたと思われる。

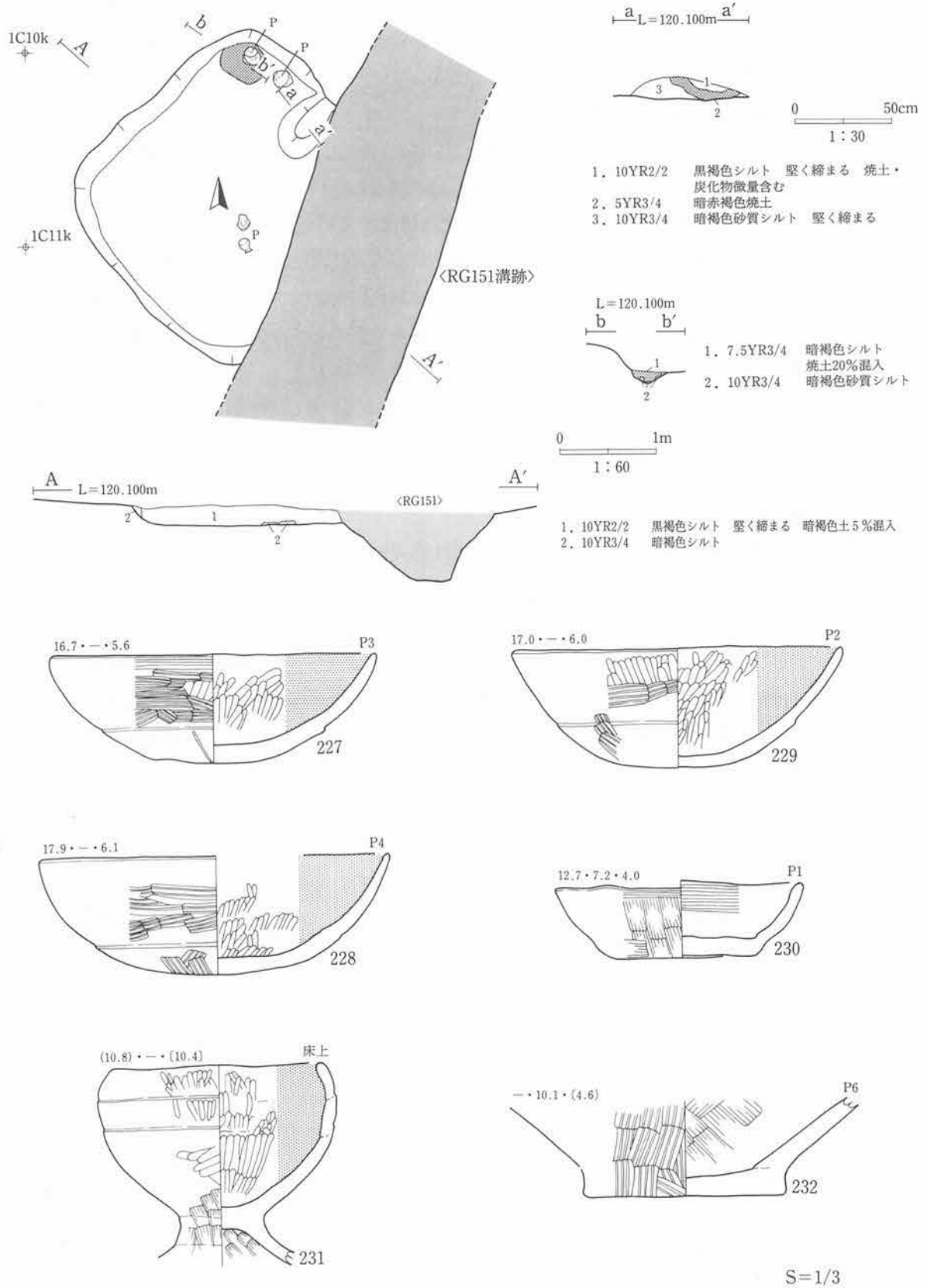
<遺物> 床上からロクロ不使用の土師器杯と須恵器甕が出土している。233は平底（I B b群）で体部に段がなく、口縁部は外傾気味に立ち上がる。体部外面は磨滅している事から器面調整は不明であるが、内面は縦方向のヘラミガキ調整後に黒色処理されている。

234は須恵器甕の体部破片である。

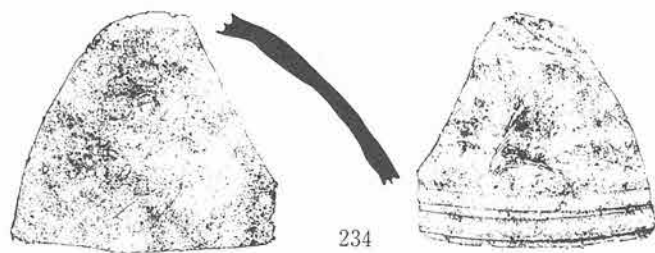
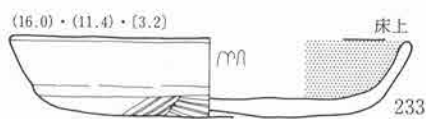
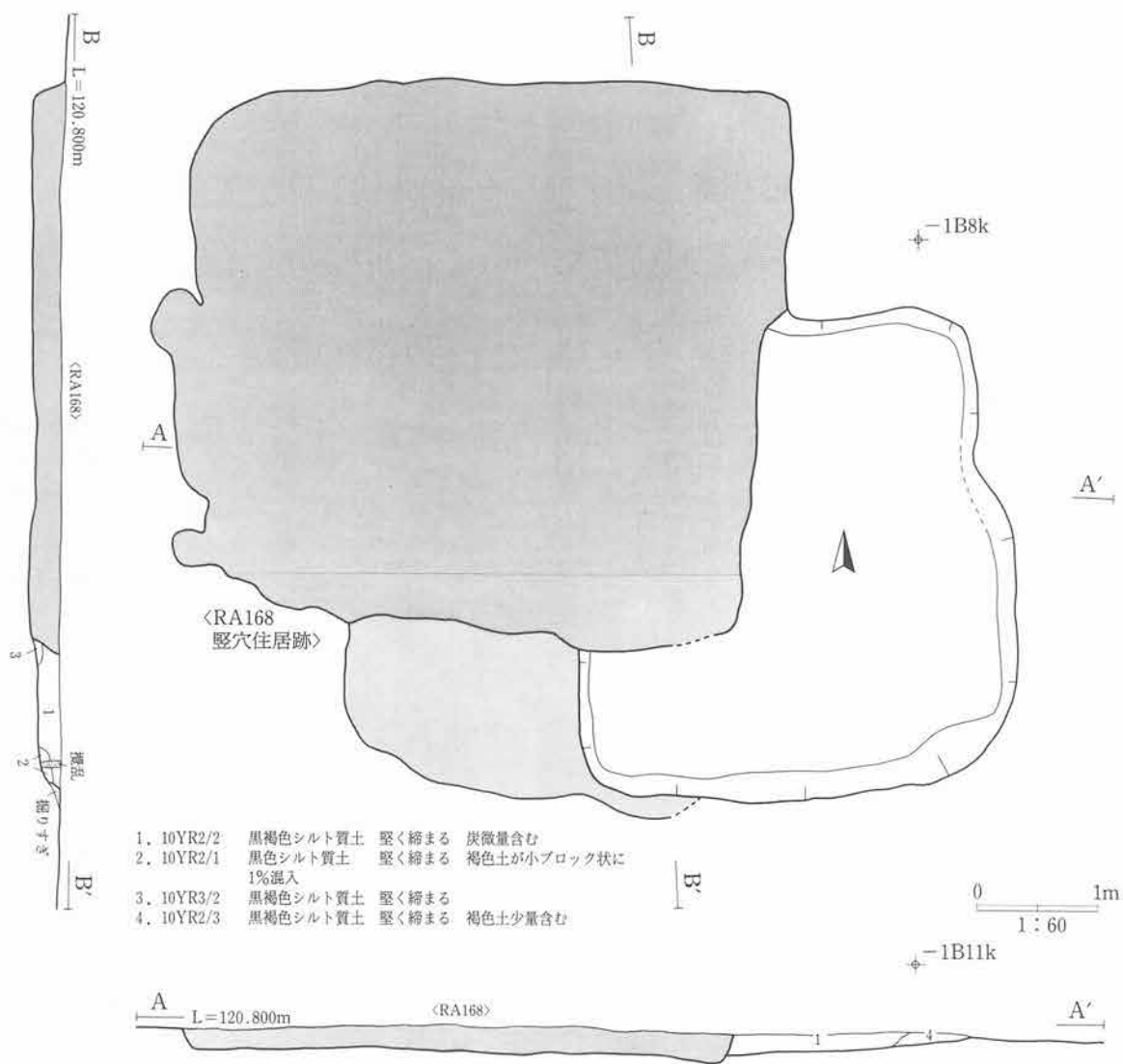
<時期> 土師器杯の特徴から奈良時代の8世紀に比定される。 (高橋)

#### R A 169 竪穴住居跡 (第80図、写真図版226)

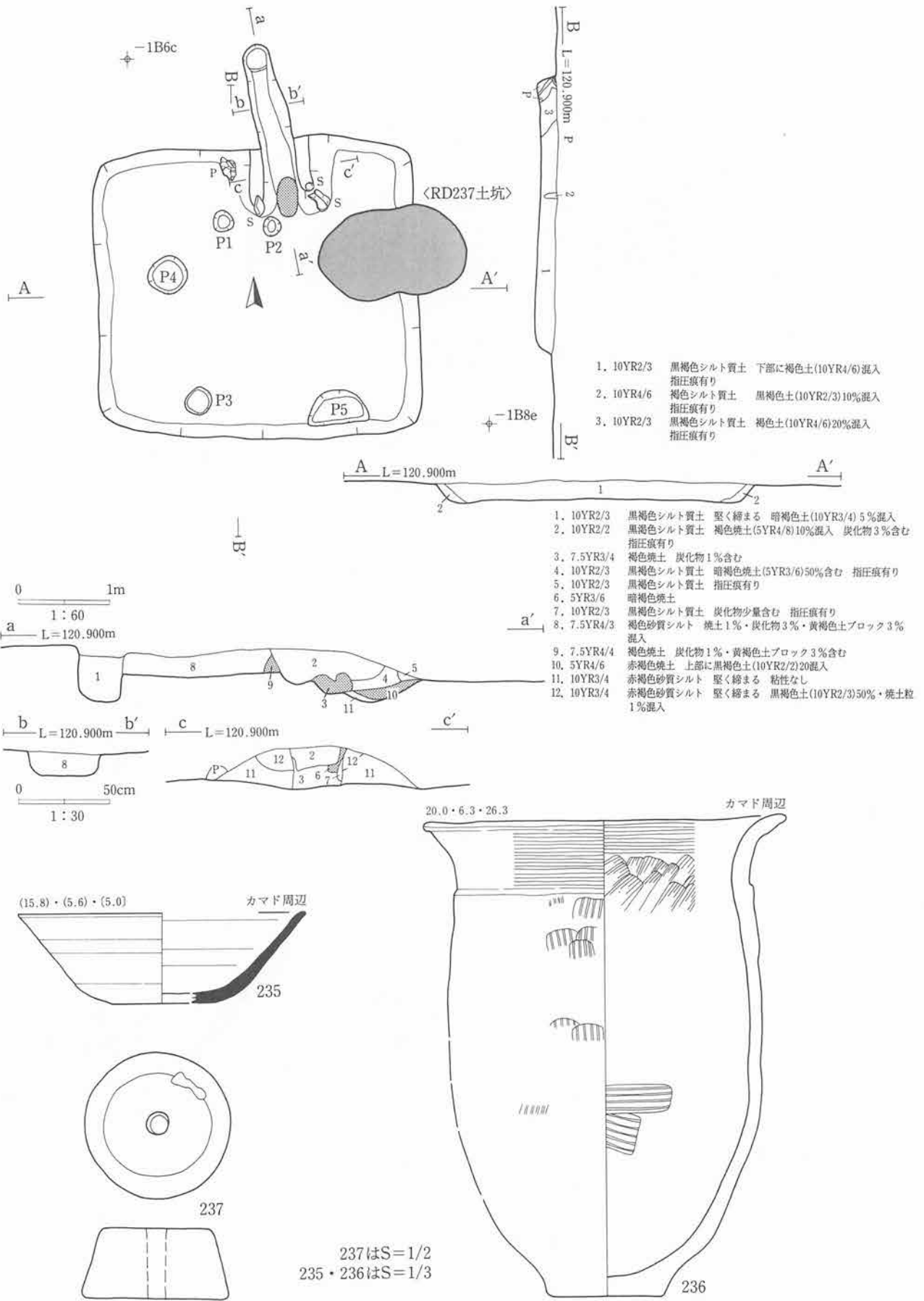
<位置・重複関係> 東側調査区の一1B区西寄りに位置し、遺構の東壁側でR D 237土坑と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から(新) R D 237土坑→(旧) R A 169竪穴住居跡である。IV層



第78図 RA156竪穴住居跡・出土遺物



第79図 RA167竪穴住居跡・出土遺物



第80図 RA169竪穴住居跡・出土遺物

上面で黒褐色土の落ち込みによって検出されている。

<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈しており、規模は3.28×2.92 mを測る。

<埋土> 埋土は3層に大別される。1層は大部分を占める黒褐色シルト質土、2層が壁際に堆積する褐色シルト質土、3層が褐色土をブロックで混入する黒色シルト質土で構成されている。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は東壁20 cm、西壁22 cm、南壁23 cm、北壁21 cmである。床は平坦で、貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑は3基検出され、平面形が円形ないし楕円形である。P1～P3は位置的に支柱穴とはいえない。土坑はP4・P5の2基で、用途は不明である。

土坑No.	P1	P2	P3	P4	P5
直径cm	23×22	22×20	32×28	43×41	68×38
深さcm	10	36	32	12	10

<カマド> カマドは北壁の中央部やや東寄りに設置されている。本体部と煙道部上半部が削平され崩壊している事から、上部構造は不明である。

袖部は黄褐色粘土で構築され、右袖長さ87 cm・幅49 cm、左袖長さ74 cm・幅50 cmを測る。著しく焼成を受け赤褐色化している。燃焼部は径44×23 cm、厚さ6 cmの楕円形状の焼土が形成されている。支脚は検出されていない。煙道部は長さ1.14 m、ほぼ平坦に煙出し部に延びている。煙出し部は径30×28 cm、深さ62 cmの円形土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

<遺物> カマド周辺部と床上から土師器坏・甕、土製品が出土している。235の土師器坏はカマド周辺部からの出土であるが、近接する平安時代の遺構から後世に流れ込んだものと思われる。

236はロクロ不使用の土師器甕(AII群)である。頸部に浅い段が巡り、口縁部は強く外反して立ち上がる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は全体に磨滅しているがヘラナデ調整である。内面はヘラナデとハケメ調整が見られる。底部はヘラナデ調整を施している。

237の土製品は円錐台形状の紡錘車で、径5.4 cm、厚さ1.9 cmを測る。ほぼ中央に径8 mmの穿孔が施されている。

<時期> 土師器坏の特徴から奈良時代の8世紀に比定される。(高橋)

#### RA 180 竪穴住居跡 (第81・82図、写真図版41・227)

<位置・重複関係> 北側調査区の一2-B区東側に位置し、遺構東コーナー側でRA 170 竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から(新) RA 170 竪穴住居跡→(旧) RA 180 竪穴住居跡である。IV層上面で黒褐色土の広がりで見出している。

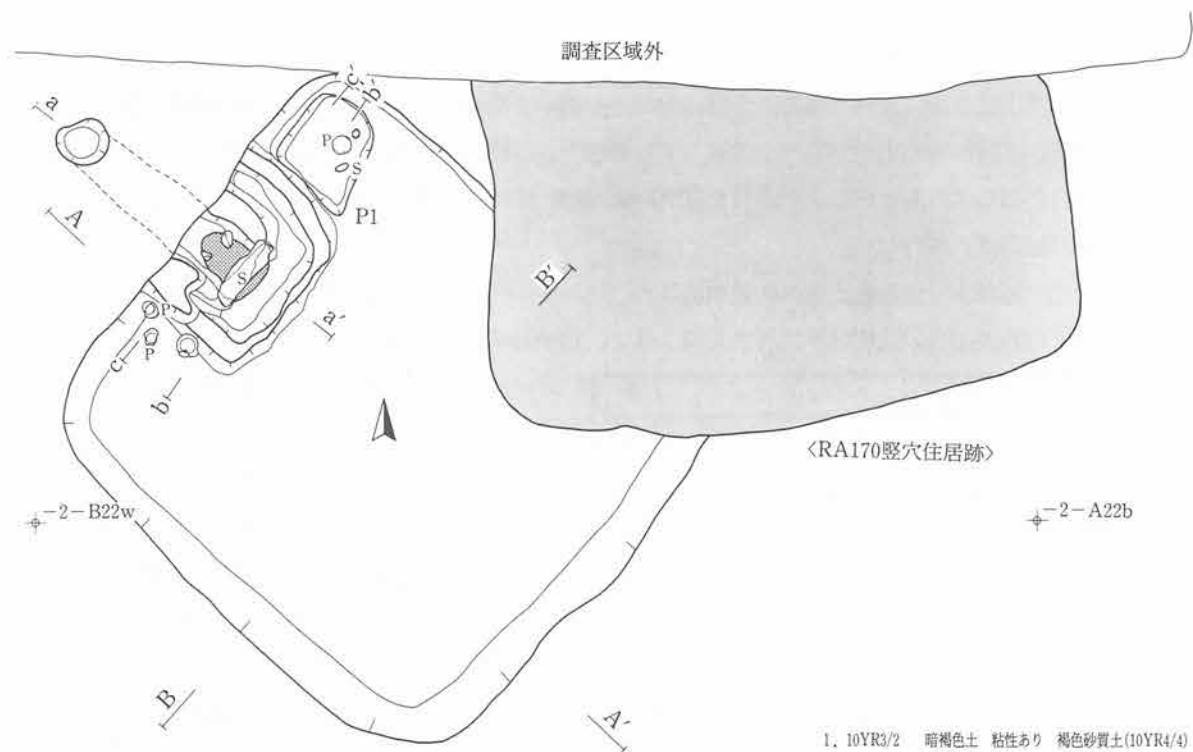
<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は3.76×3.52 mである。

<埋土> 埋土は黒褐色土を主体とする5層に大別される。1層は大部分構成する黒褐～暗褐色土、2層は十和田a降下火山灰とにぶい黄褐色砂質土を含んでいる。3層は粘性のある暗褐色土、4層がにぶい黄褐色砂質土を含む黒褐色土、5層が粘性のある褐色土である。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は南東壁29 cm、北西壁28 cm、南西壁30 cm、北東壁28 cmを測る。床は多少の凹凸があり堅く締まっている。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 右袖部脇から土坑P1が検出している。開口部径は76×65 cm、深さ10 cm、平面形は隅丸の長方形形状である。ロクロ不使用の土師器坏が出土しており、貯蔵穴と思われる。

<カマド> カマドは北西壁の中央部付近に設置されている。本体部は芯材と天井材の一部が現存しているが、上部を被覆した黄褐色粘土はすでに流失している。芯材は左側18×7 cm、右側24×10 cmの垂角礫、天





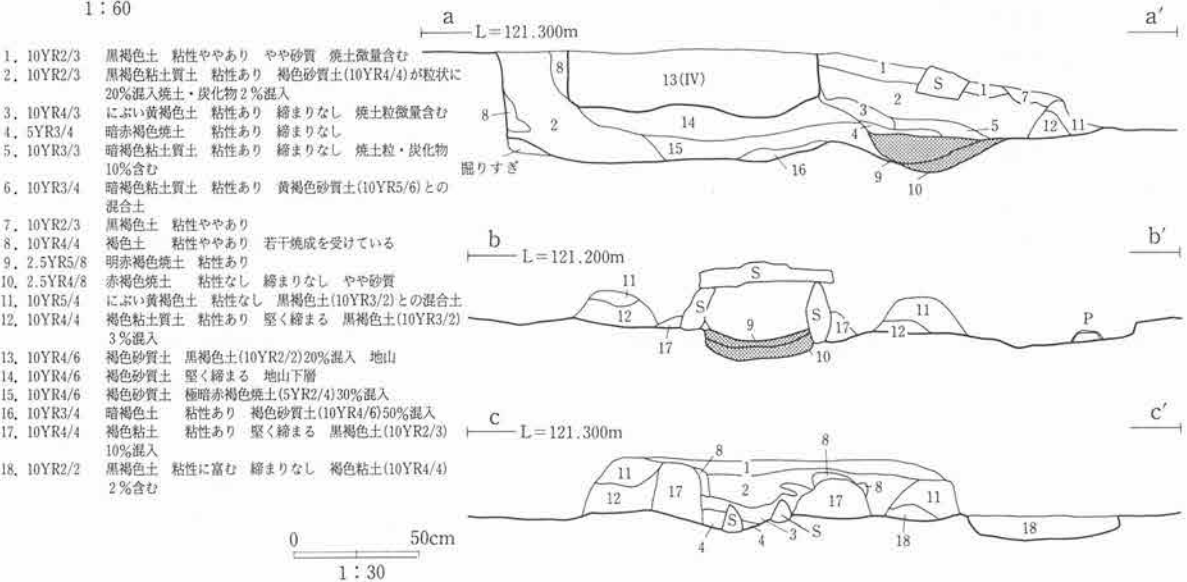
A L=121.200m

B L=121.200m

0 1m  
1:60

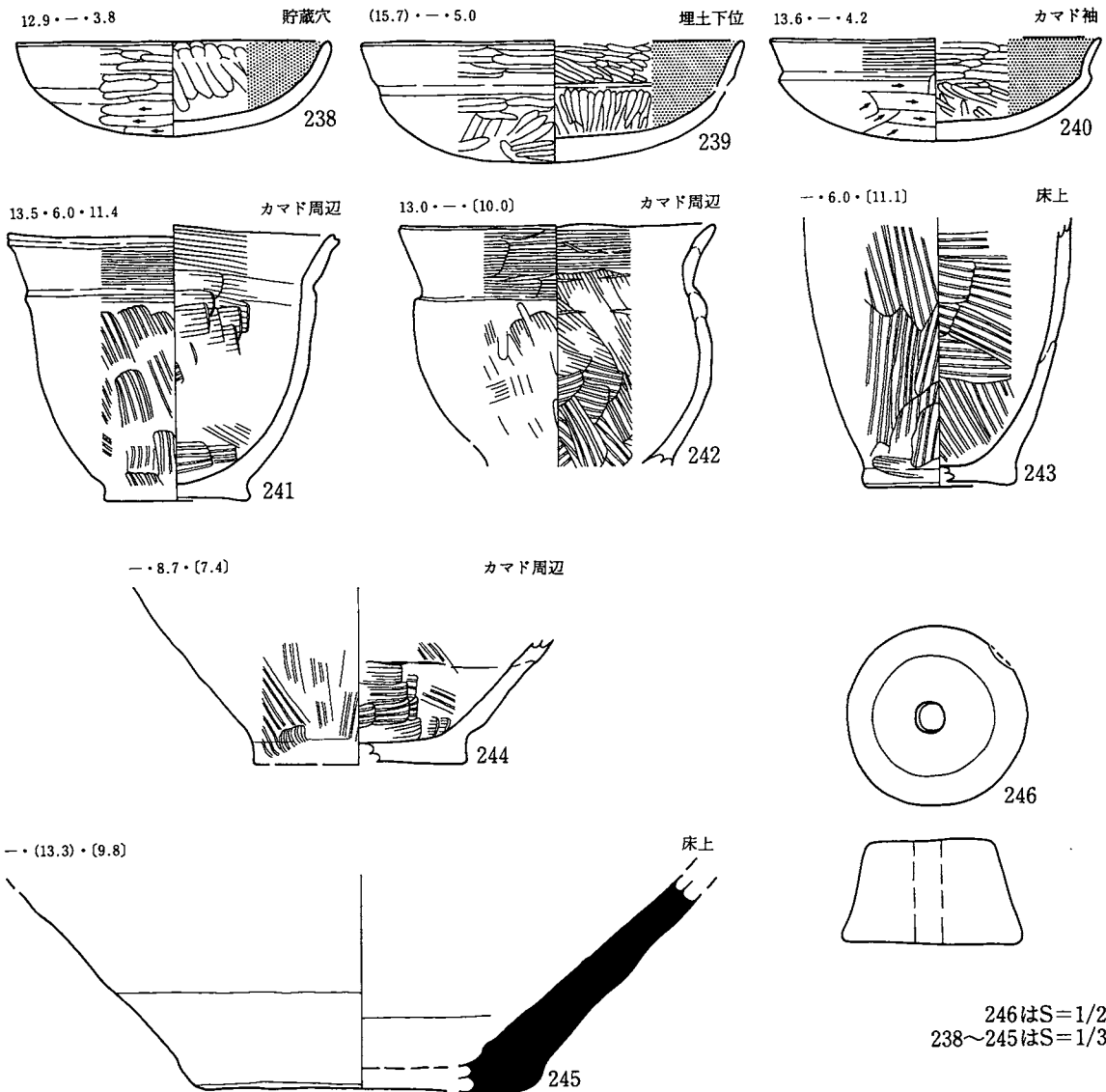
1. 10YR3/2 暗褐色土 粘性あり 褐色砂質土(10YR4/4) 10%含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黒色土(10YR2/1)20%・褐色砂質土(10YR4/4)10%混入
3. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土(10YR5/4)15%混入
4. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土(10YR5/4)30%混入

1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 旧表土
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 灰白色火山灰(十和田a)5%・黄褐色砂質土(10YR5/4)1%含む
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 黄褐色砂質土(10YR5/4)3%含む
4. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色砂質土(10YR5/4)1%含む
5. 10YR3/4 褐色土 粘性あり 3・4層の境界に砂質土1%含む 6層との境界に炭化物3%含む



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり やや砂質 炭土微量含む
2. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 褐色砂質土(10YR4/4)が粒状に20%混入 炭化物2%混入
3. 10YR4/3 黄褐色土 粘性あり 締まりなし 炭土粒微量含む
4. 5YR3/4 暗赤褐色粘土 粘性あり 締まりなし
5. 10YR3/3 暗褐色粘土質土 粘性あり 締まりなし 炭土粒・炭化物10%含む
6. 10YR3/4 暗褐色粘土質土 粘性あり 黄褐色砂質土(10YR5/6)との混入
7. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり
8. 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり 若干焼成を受けている
9. 2.5YR5/8 明赤褐色粘土 粘性あり
10. 2.5YR4/8 赤褐色粘土 粘性なし 締まりなし やや砂質
11. 10YR5/4 黄褐色土 粘性なし 黒褐色土(10YR3/2)との混入
12. 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性あり 堅く締まる 黒褐色土(10YR3/2)3%混入
13. 10YR4/6 褐色砂質土 黒褐色土(10YR2/2)20%混入 地山
14. 10YR4/6 褐色砂質土 堅く締まる 地山下層
15. 10YR4/6 褐色砂質土 極暗赤褐色粘土(5YR2/4)30%混入
16. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 褐色砂質土(10YR4/6)50%混入
17. 10YR4/4 褐色粘土 粘性あり 堅く締まる 黒褐色土(10YR2/3)10%混入
18. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 褐色粘土(10YR4/4)2%含む

第81図 RA180竪穴住居跡



第82図 RA180竪穴住居跡出土遺物

井材は長さ 54 cm、幅 8 cm、厚さ 7 cmの垂角礫を使用している。袖部は褐色粘土で構築され下端部が僅かに残っている。燃烧部は径 56×44 cmの楕円形焼土が形成され、厚さが 14 cmである。支脚は燃烧部奥に長さ 12 cm、幅 8 cmの石を 2ヶ使用している。煙道部は削り貫き式で、長さが 1.29 mを測り、下がり気味に煙出し部に延びている。煙出し部は径 43×36 cm、深さ 41 cmの楕円形土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

<遺物> カマドと周辺の床上と貯蔵穴から土師器坏・甕、須恵器甕、土製品が出土している。238~240はロクロ不使用の土師器坏である。238 (I A b群) は丸底で、口縁部は内湾気味に立ち上がっている。外面は横方向に細いヘラミガキ、下半部~底部はヘラケズリ調整、内面は縦方向にヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。239・240 (I A a群) は丸底で、体部上半と口縁部の境に浅い段が巡っている。口縁部は外傾気味に立ち上がる 239、頸部から強く外反する 240がある。239 は口縁部~底部外面が細いヘラミガキ、内面が放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。240 は口縁部がヨコナデ、体部~底部がヘラケズリ、

内面は黒色処理されている。

241～244 はロクロ不使用の土師器甕 (A II群) で、242 は底部、243 が口縁部を欠損している。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデで、一部にヘラナデ調整も見られる。体部外面は縦方向のハケメを施した 241・243、ヘラナデ調整の 242 がある。内面はハケメとヘラナデ調整である。244 は球胴甕の底部破片で、胎土に砂と金雲母を多く含み焼成も良好である。

245 は床上から出土した須恵器大甕の底部破片である。

246 の土製品は一部欠損した紡錘車である。円錐台形状を呈し、径 4.9 cm、厚さ 2.9 cm、中央付近に径 8 mm の穿孔がある。

<時期> 時期は土師器坏と甕の特徴から奈良時代の 8 世紀前半代に比定される。 (高橋)

#### R A 185 竪穴住居跡 (第 83・84 図、写真図版 42・227・228)

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2-A 区西寄りに位置し、北側は調査区域外に延びている。遺構の南西コーナー側は平安時代の R A 184 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は本遺構が切られている事から (新) R A 184 竪穴住居跡→ (旧) R A 185 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で確認されている。

<平面形・規模> 北側が調査区域外に続く事から平面形・規模の全容が不明である。現存する規模は東辺 2.82 m、西辺 2.23 m、南辺 3.62 m を測り、南東コーナーはやや角張っている。

<埋土> 埋土は 5 層に大別される。上層は大部分を構成する黒褐色土で褐色土をブロック状に含んでいる。下層は炭化物が混入する粘性のある黒褐色土である。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は東壁 20 cm、西壁 18 cm、南壁 17 cm である。床はほぼ平坦で、貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑は 4 基検出されている。P 1～P 4 の平面形は円形ないし楕円形、位置的に支柱穴とはいえない。土坑 P 5 は平面形が楕円形を呈している。用途は不明である。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
直径cm	49×42	39×38	40×40	44×41	70×53
深さcm	11	17	38	28	17

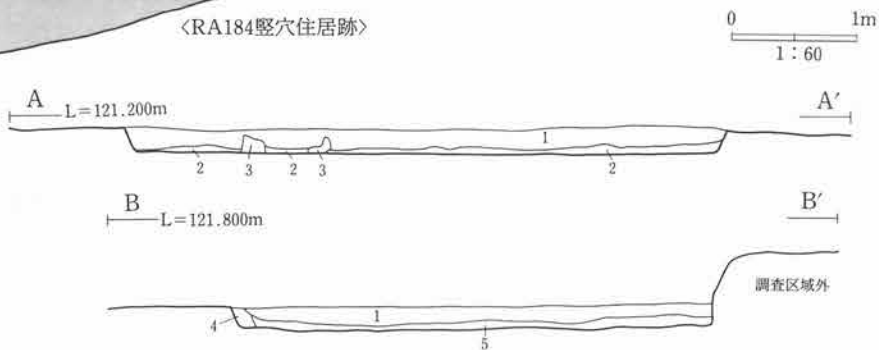
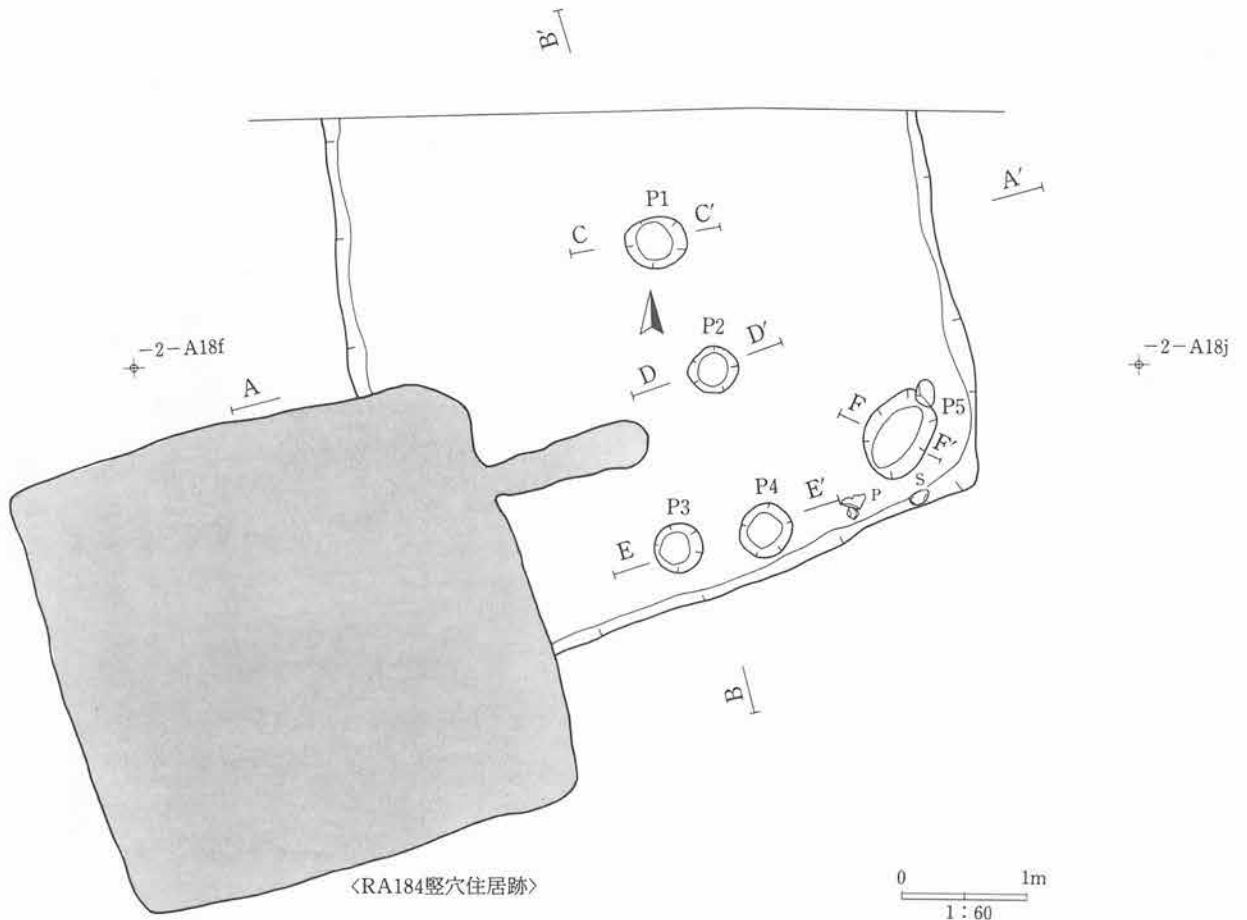
<カマド> カマドは検出されていないが、北側の調査区域外の北壁側に設置していると思われる。

<遺物> カマドと周辺と埋土中～下位からロクロ不使用の土師器坏・甕、鉄製品が出土している。247 の土師器坏 (I A a 群) は丸底で、体部下半と底部の境に段が巡り、口縁部は外傾気味に立ち上がっている。体部外面と底部は横方向のヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。248 (I B b 群) は器形の歪みが大きい。丸底で口縁部は外傾して立ち上がり、体部と底部に細いヘラミガキ、内面は放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理されている。

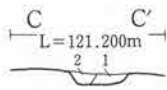
249～254 はロクロ不使用の土師器甕 (A II群) である。いずれも底部ないし口縁部を欠損している。口縁部は頸部から外傾する 249・250、くの字状に外反する 251 がある。249 の口唇部には浅い一条の沈線が巡っている。口縁部は内外面ともヨコナデで一部に縦方向のハケメやミガキ調整も見られる。体部外面はハケメやヘラナデ調整を施している。また、250・252 内面には粘土紐の積み上げ痕が見られる。254 の底部調整はヘラナデである。

255・256 の鉄製品は刀子破片である。255 は刃先で現存長 4.7 cm、幅 2 cm、厚さ 3 mm、256 が現存長 5.5 cm、幅 2 cm、厚さ 3 mm を測る。

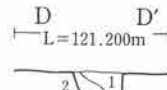
<時期> 時期は土師器坏と甕の特徴から奈良時代の 8 世紀に比定される。 (高橋)



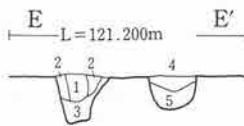
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 褐色土粒(10YR4/6) 3%混入
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物1%含む
3. 10YR3/4 暗褐色砂質土 粘性なし 黒褐色土(10YR3/1)10%混入
4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 褐色土(10YR4/4)がブロック状に5%混入
5. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性なし 暗褐色土(10YR3/4)との混合土



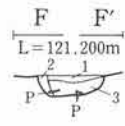
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり におい黄褐色土(10YR5/4)40%混入
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり におい黄褐色土(10YR5/4)3%混入



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり におい黄褐色土(10YR5/4)3%混入
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり におい黄褐色土(10YR5/4)10%混入

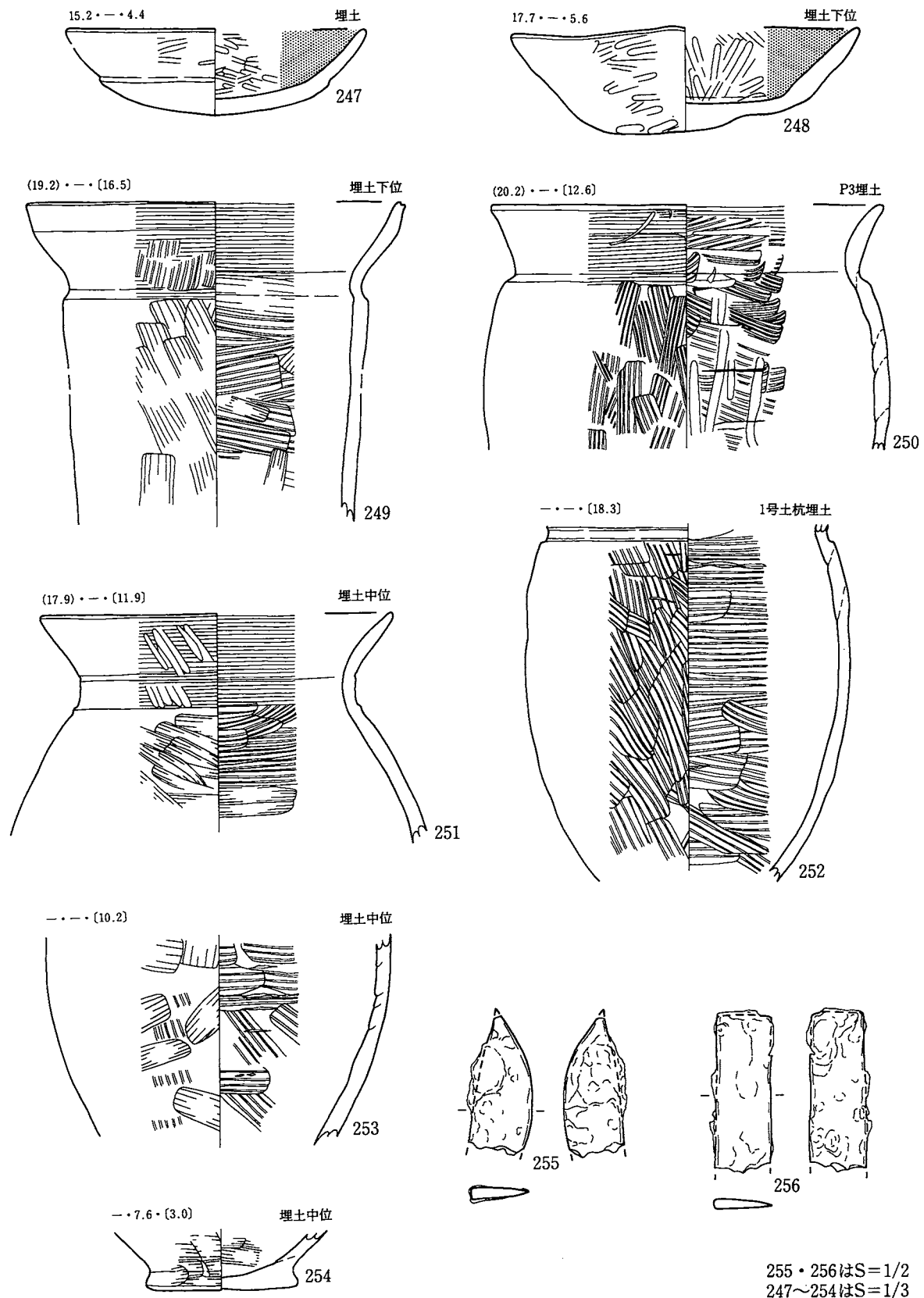


1. 10YR3/3 黒褐色土 粘性なし
2. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性あり 堅く締まる
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり におい黄褐色土(10YR5/4)10%混入
4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり におい黄褐色土(10YR5/4)5%混入
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり におい黄褐色土ブロック(10YR5/4・径0.3~0.5cm大)10%混入



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 明赤褐色焼土ブロック(2.5YR5/8)3%混入 炭化物1%含む
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性に富む 締まりなし 明赤褐~赤褐色焼土ブロック(2.5YR5/8~4/8・径1cm大)5%混入 炭化物3%・土器片含む
3. 10YR4/4 褐色土 粘性あり 黒褐色土(10YR2/2)10%混入

第83図 RA185竪穴住居跡



第84図 RA185竪穴住居跡出土遺物

R A 186 竪穴住居跡 (第 85～87 図、写真図版 43・228・229)

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区に位置し、北側 23 cm に R A 187 竪穴住居跡、北西側 1.35 m に R A 165 竪穴住居跡が近接している。遺構の南側で R A 128 竪穴住居跡 (平安時代) と重複し、本遺構が切られていることから、新旧関係は (新) R A 128 竪穴住居跡→ (旧) 本竪穴住居跡である。IV 層上面で検出されている。

<平面形・規模> 北東コーナーを含む北側の 3 分の 1 は隣接する第 19 次調査区内に延び、南側が重複する事から平面形・規模の全容が不明である。確認された規模は東辺 1.79 m、西辺 1.90 m、北辺 2.85 m を測り、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> R A 128 竪穴住居跡に切られ僅かしか残っていないが、黒褐色シルトを主体とする 5 層に大別され、中～下位に褐色土をブロック状に混入している。自然堆積による埋没と思われる。<壁・床> 壁は床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高は東壁 29 cm、西壁 21 cm、北壁 27 cm である。重複する R A 128 竪穴住居跡と床面の比高はなく、小起伏があるものの平坦で堅く締まっている。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは北壁の中央部に設置している。一部は崩壊しているが左右の袖部も良く現存し、燃烧部内から甕が 2 個埋設された状態で出土している。両袖部は IV 層の削り出しで造られ、焚き口部には土師器長胴形甕を倒立で埋設している。支脚は確認されていない。燃烧部は幅約 45 cm、奥行き 60 cm 前後あり、燃烧部の焼土は確認されていない。煙道部は削り貫き式と思われるが、上半部は削平され不明である。煙道の全長は 85 cm を測り、燃烧部床面から平坦に延びて煙出し部へと続いている。煙出し部は径 35×32 cm、深さ 40 cm の円形状土坑が掘り込まれている。

<遺物> 遺物はカマドと周辺の床上から、土師器坏・甕が出土している。257・258 はロクロ不使用の土師器坏である。257 (I A a 群) は丸底で体部下半に浅い段が巡り、口縁部は内湾気味に立ち上がっている。外面の上半部は横方向に細いヘラミガキ、下半部がハケメ調整、内面は縦方向にヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部はハケメとヘラミガキ調整である。

258 (I B b 群) は口縁部が外傾して立ち上がり、体部下半に浅い段が巡っている。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部と底部が細いヘラミガキを丁寧に施している。

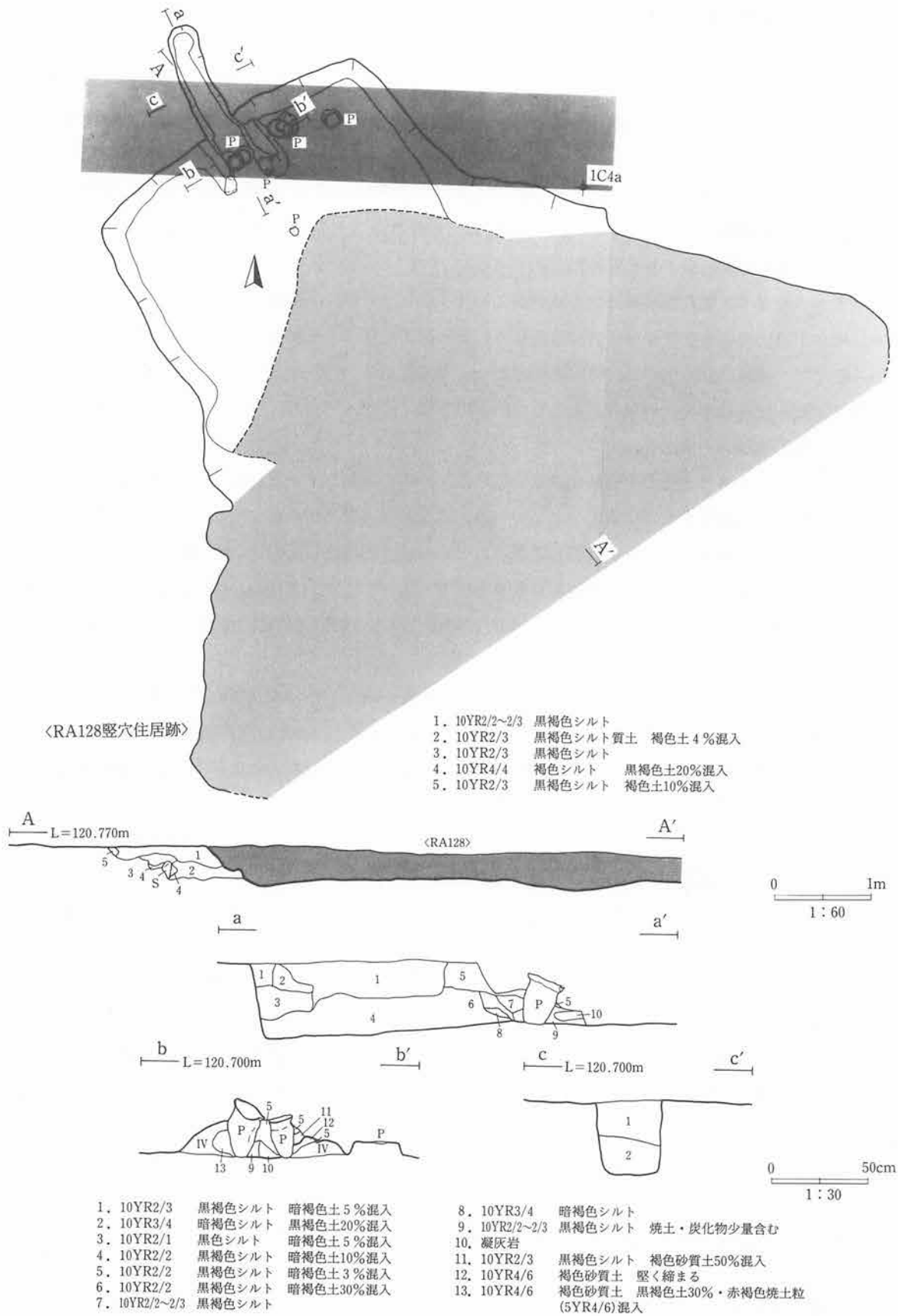
259～266 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) である。259～262 はカマド内と焚き口部の埋設土器で、頸部に浅い段が巡っている。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり外傾する 259、強く外反する 261、外傾気味に立ち上がる 260・262 がある。口縁部は内外面ともヨコナデで一部にハケメ調整も見られる。体部内外面はハケメ調整を施している。265 はほぼ完形の長胴甕で、322・323 の口縁部は頸部から外反して立ち上がり上半部で直立し、口唇部は丸味を呈している。調整は口縁部がヨコナデと縦方向のハケメ調整、体部内外面がハケメ調整を施している。また、内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に見られる。263・264 は底部破片で、264 の底部がヘラナデ調整である。

267 は口縁部を欠損した球胴甕で、体部内外面はハケメとヘラナデ調整を施している。焼成は良好で胎土に石と砂を多く含んでいる。

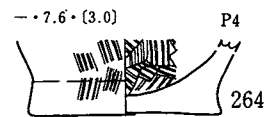
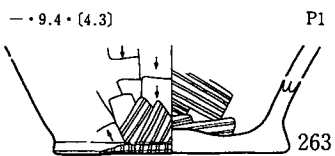
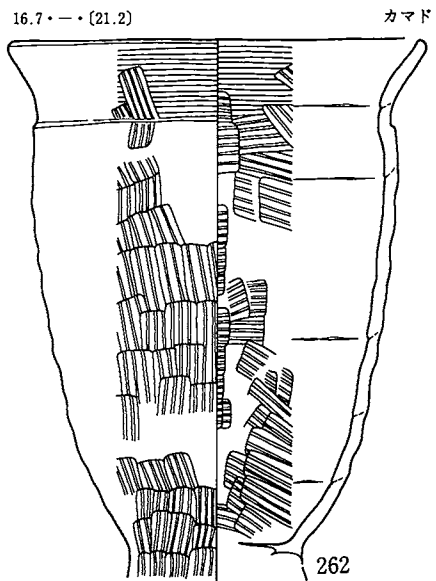
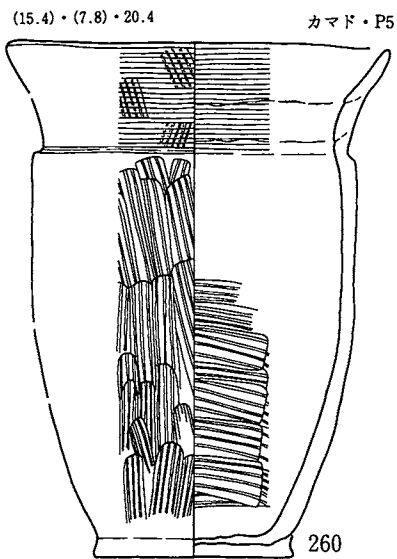
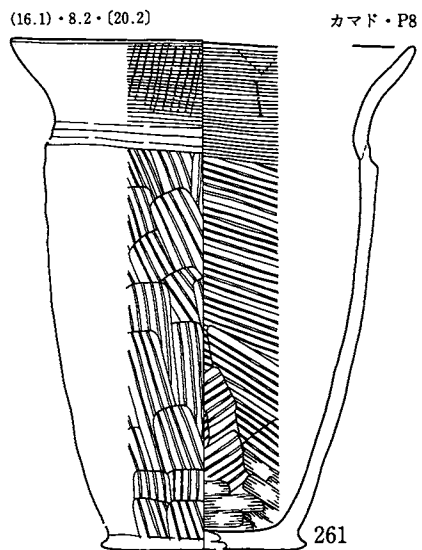
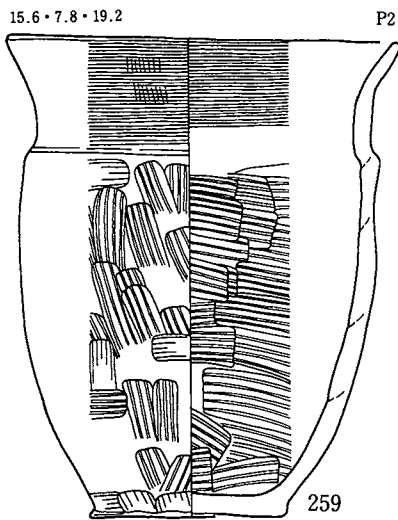
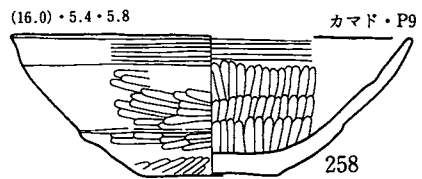
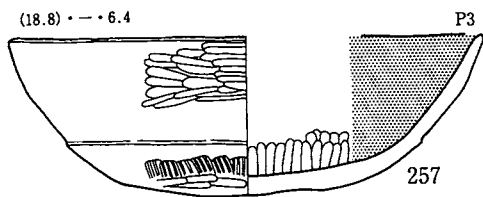
<時期> 時期は土師器坏と甕の特徴から奈良時代の 8 世紀前半代に比定される。 (佐藤・高橋)

R A 192 竪穴住居跡 (第 88・89 図、写真図版 44・229・230)

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 B 区東寄りに位置している。遺構の南側で中世の R G 042 堀と重



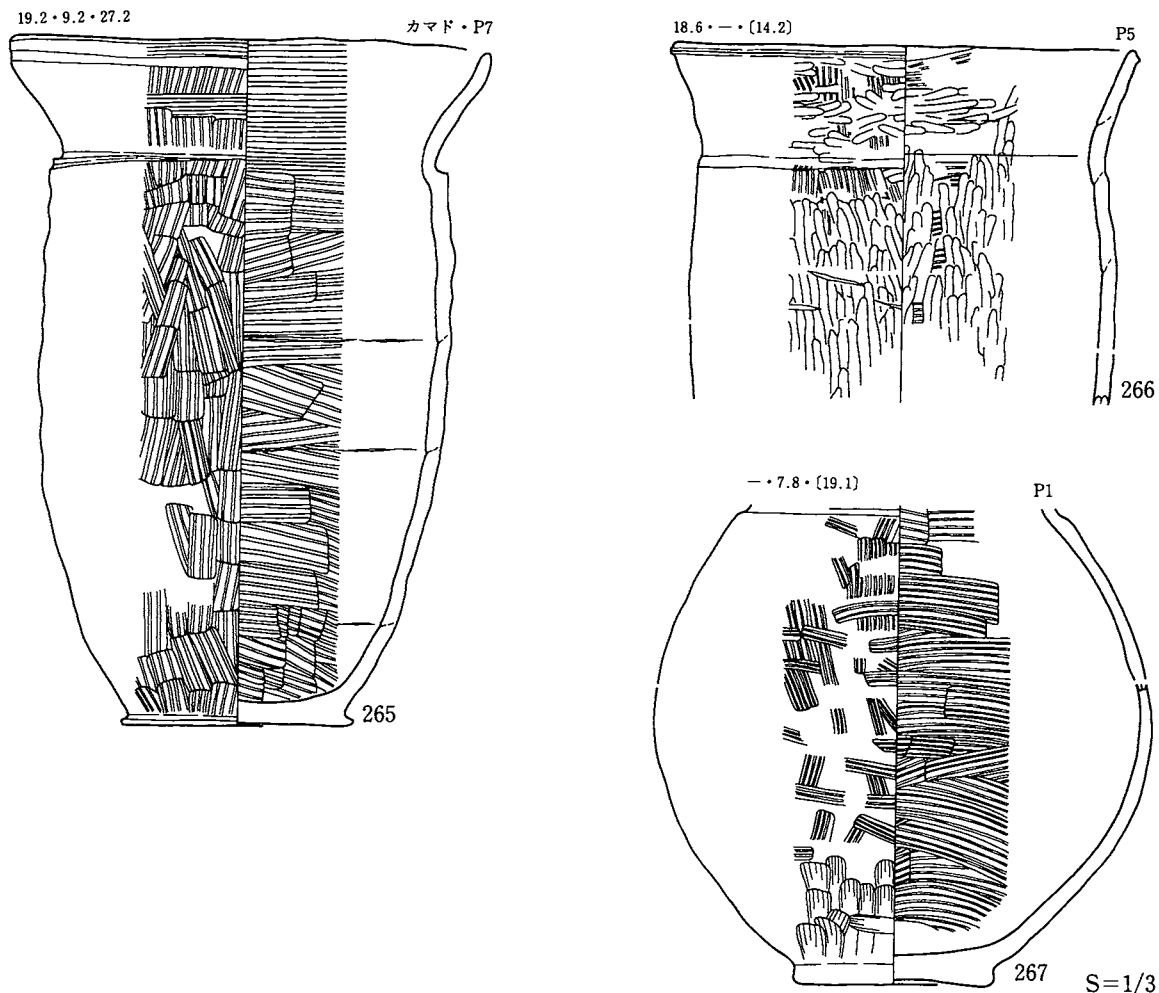
第85図 RA186竪穴住居跡



S=1/3

第86図 RA186竪穴住居跡出土遺物(1)





第87図 RA186竪穴住居跡出土遺物(2)

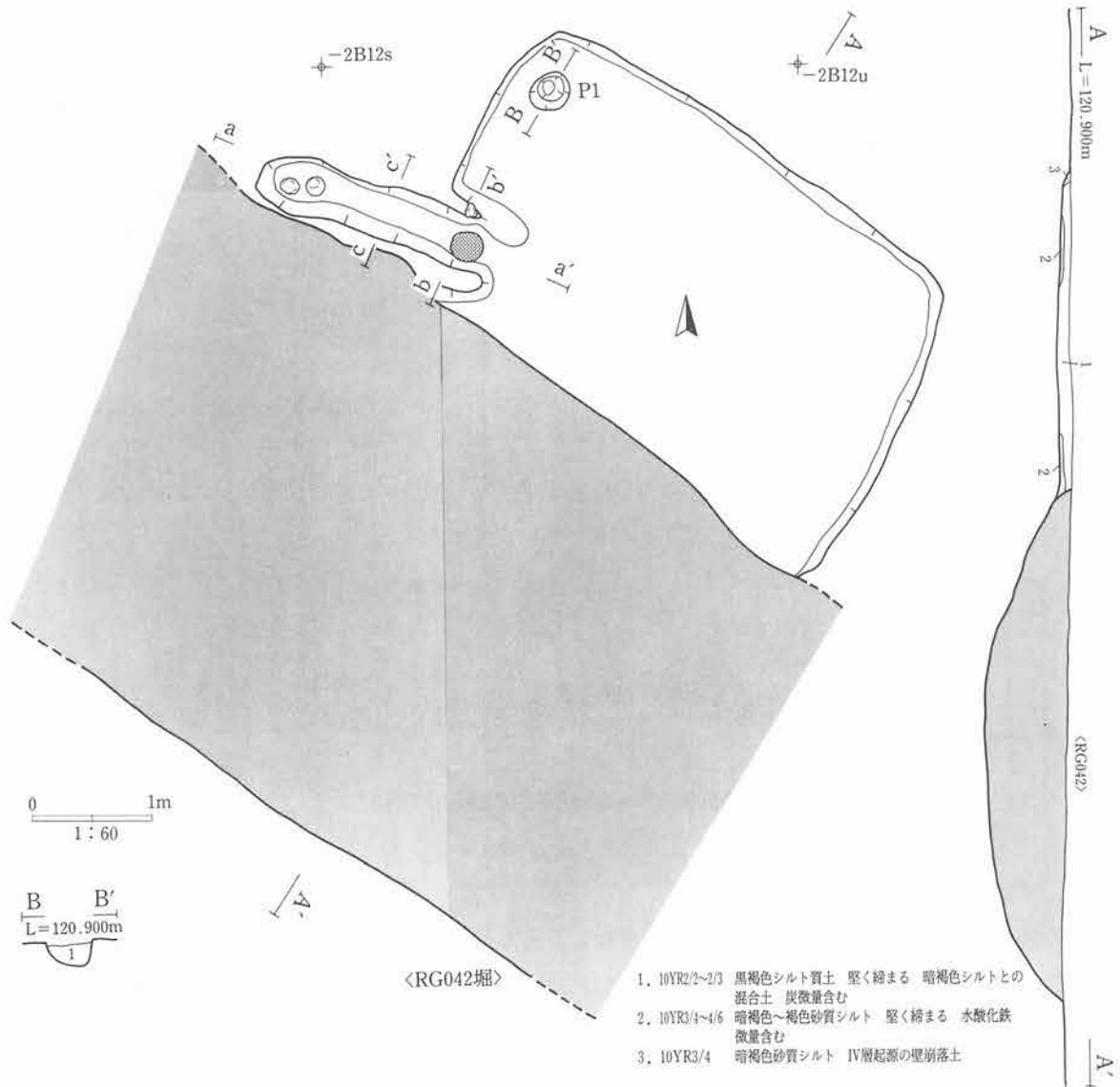
複し、本遺構が切られている事から新旧関係は（新）RG 042 堀→（旧）RA 192 竪穴住居跡である。IV層上面で黒褐色土の広がりで見出されている。

<平面形・規模> 遺構の南西側半分は堀で削平されている事から平面形・規模の全容が不明である。確認された規模は南東辺 2.65 m、北西辺 2.32 m、北東辺 3.80 m を測る。現存する規模から一辺 4.10 m 前後の隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土主体の 3 層に大別され、暗褐色土と炭を含み強く締まっている。埋土の様相は自然堆積と思われる。<壁・床> 壁は床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高は南東壁 6 cm、北西壁 10 cm、北東壁 8 cm である。床はほぼ平坦で強く締まっている。貼り床は確認されない。

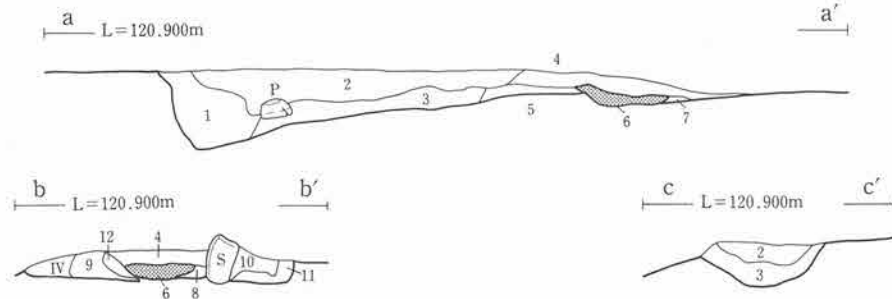
<カマド> カマドは北西壁側に設置している。IV層の削り出しで作られた袖部は削平され、僅かに左袖部下半が現存している。燃焼部は径 28×25 cm、厚さ 6 cm の円形焼土が形成されている。支脚は確認されていない。煙道部は割り貫き式と思われるが、上半部は削平されおり不明である。煙道の全長は 1.56 m で、燃焼部床面から緩やかな下がり勾配で延び煙出し部へと続いている。煙出し部の上部構造は不明である。

<遺物> カマド煙道部と埋土中～下位からロクロ不使用の土師器坏・甕が出土している。268～270 はロ



<RG042堀>

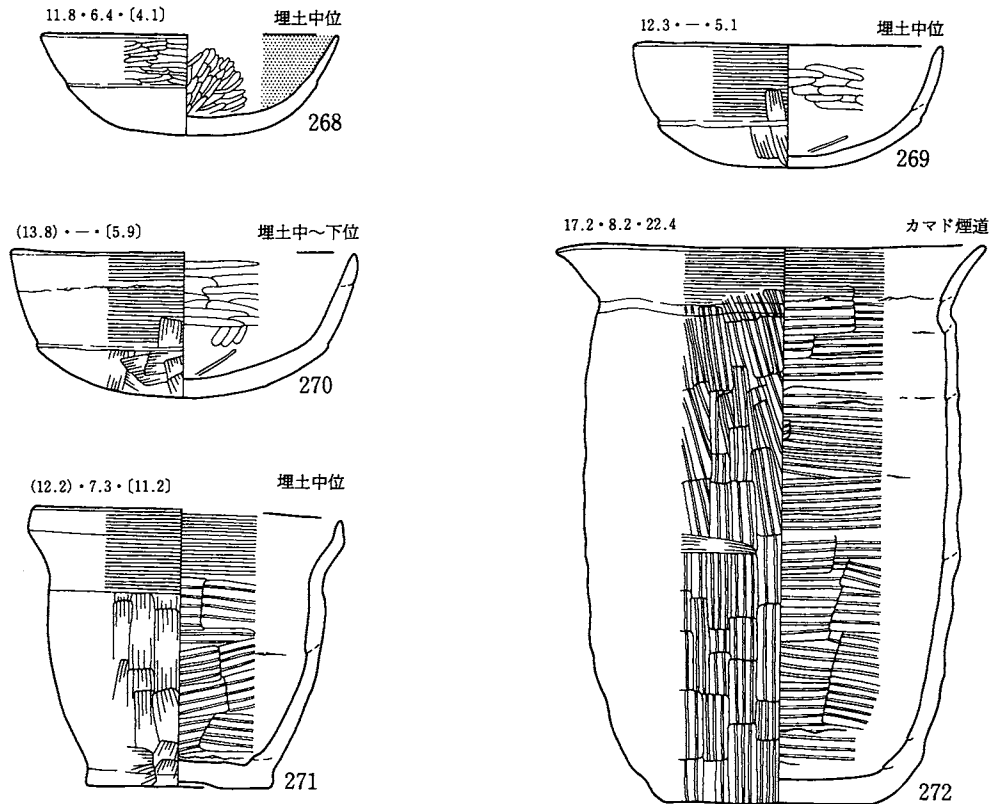
1. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色シルトとの混合土 炭微量含む
2. 10YR3/4~4/6 暗褐色~褐色砂質シルト 堅く締まる 水酸化鉄微量含む
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト IV層起源の壁崩落土



1. 10YR4/4 褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土との混合土 炭微量含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土が小ブロック状に2%混入
3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 1層に類似 炭・焼土粒微量含む
4. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロック状に混入 炭・焼土粒微量含む
5. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒と褐色土の混合層 炭少量含む
6. 5YR3/6 暗赤褐色焼土 堅く締まる 炭微量含む
7. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒含む
8. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 堅く締まる IV層起源 黒色土で汚れている

0 50cm  
1:30

第88図 RA192竪穴住居跡



S=1/3

第89図 RA192竪穴住居跡出土遺物

クロ不使用の土師器坏（I A a 群）である。いずれも丸底で、体部の中位ないし下半に浅い段が巡っている。口縁部は外傾する 268、直立気味に立ち上がる 269・270 がある。器面調整は 268 の体部外面が横方向の細かいヘラミガキ、269・270 がヨコナデ調整である。268 の内面は放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理されている。269 の底部内外面と 270 内面には米状の線刻がある。

271・272 はクロ不使用の甕（A II 群）である。271 は小型の器形で、口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり、口唇部が片削ぎされている。器面調整は口縁部が内外面ヨコナデ、体部外面は縦方向にヘラナデ、内面は横方向にハケメ調整を施している。

272 の口縁部は頸部から強く外反して立ち上がり、口唇部は丸味をもつ。焼成は良好で、口縁部は内外面ヨコナデ、体部内外面がハケメ調整を施している。外面には煤が付着し、内面上半部に粘土紐の積み上げ痕が見られる。

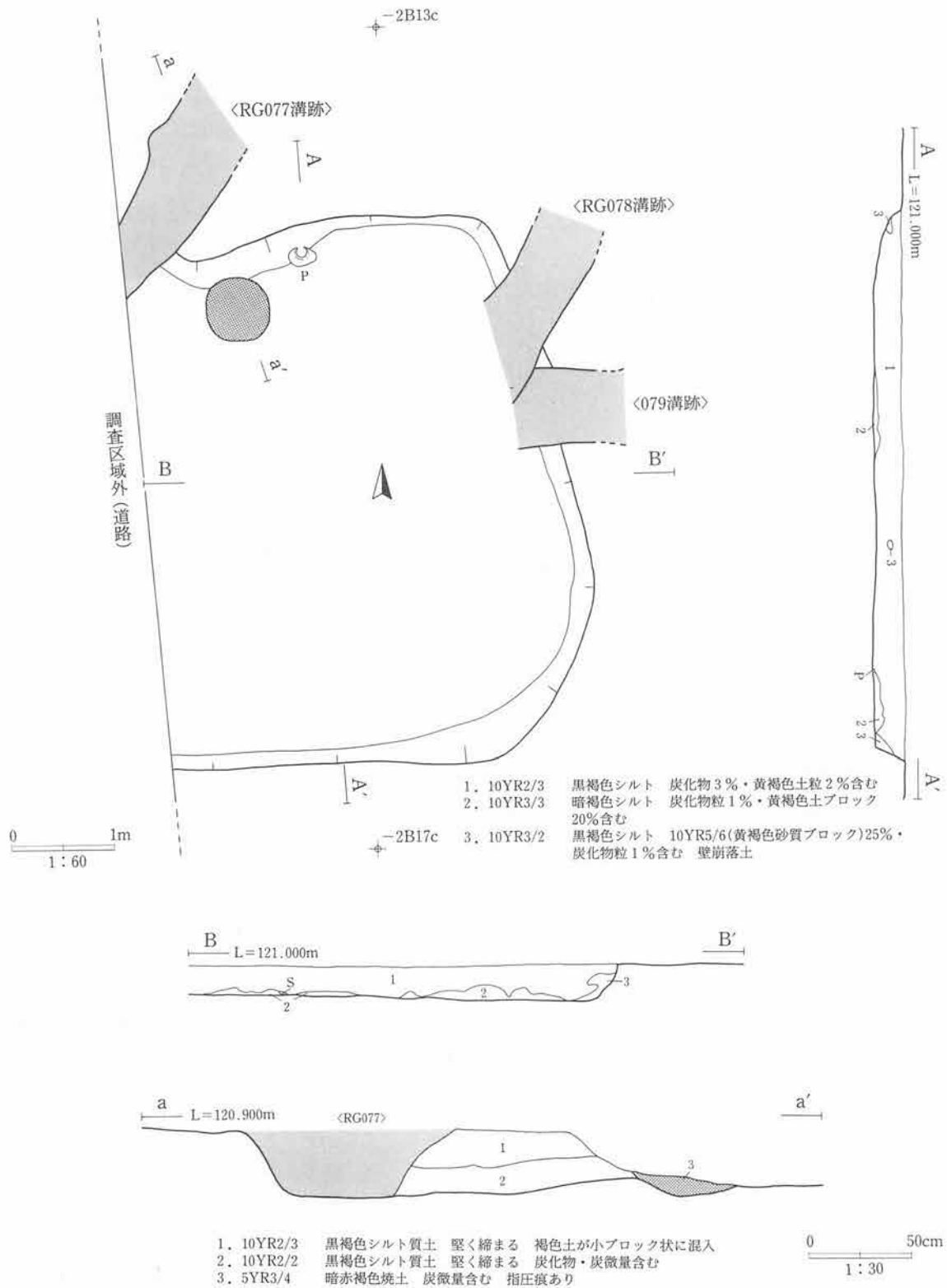
<時期> 土師器坏の特徴から奈良時代の 8 世紀に比定される。

(高橋)

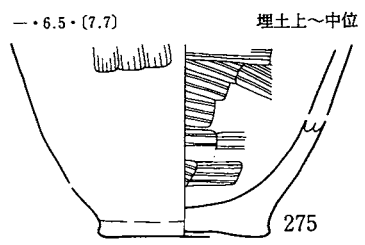
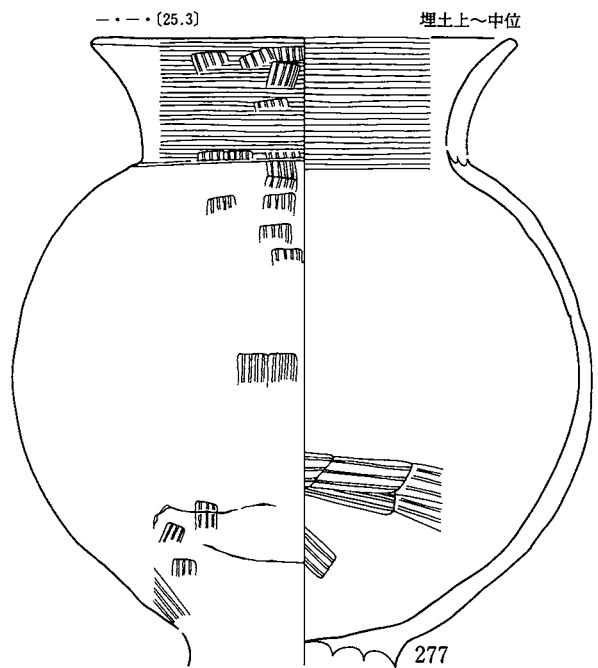
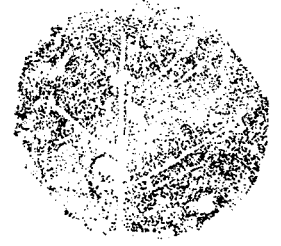
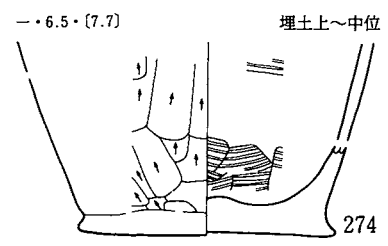
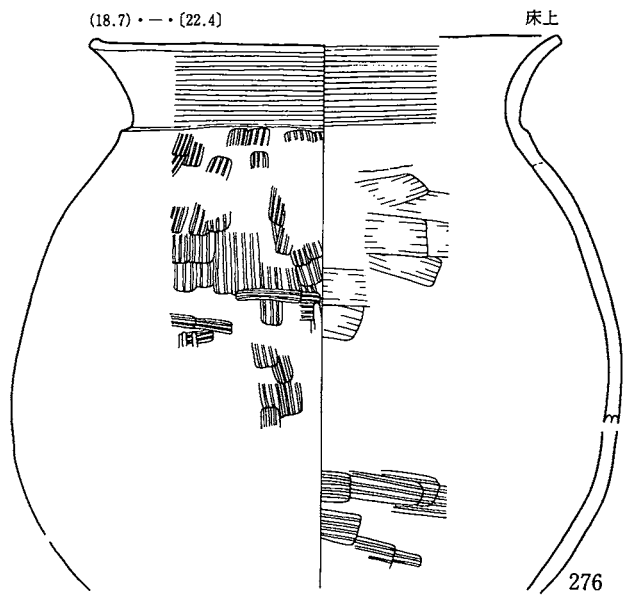
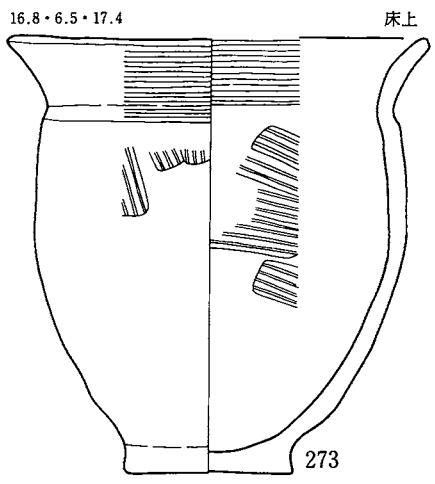
#### RA 193 竪穴住居跡（第 90・91 図、写真図版 45・230）

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 B 区西寄りに位置している。RG 077～079 溝跡と重複し、本遺構が切られていることから新旧関係は（新）RG 077～079 溝跡→（旧）RA 193 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で黒褐色土の広がり確認されている。

<平面形・規模> 遺構の西側約半分は調査区域外の道路下に延びていることから、平面形・規模の全容が

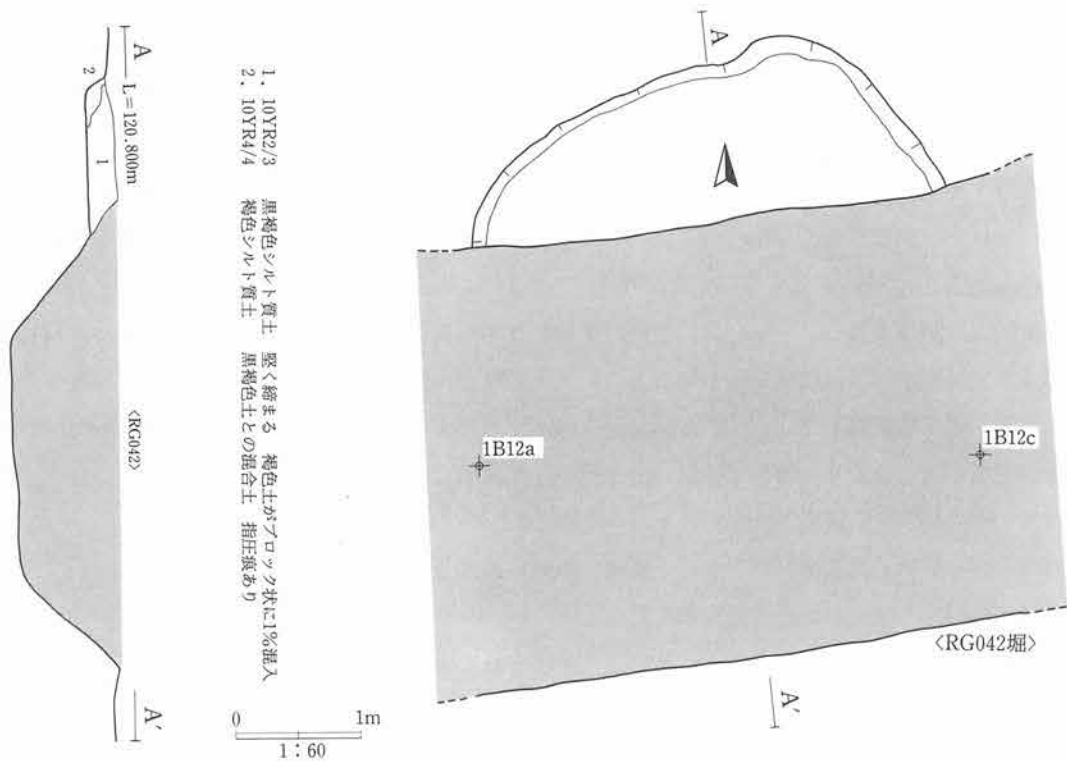


第90図 RA193竪穴住居跡



S=1/3

第91図 RA193竪穴住居跡出土遺物



第92図 RA199竪穴住居跡

不明である。確認された規模は東辺 4.40 m、南辺 3.60 m、北辺 3.36 m を測る。北東と南東コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト主体の 3 層に大別され、黄褐色土粒と炭化物を含み強く締まっている。自然堆積と思われる。<壁・床> 壁は北壁側が床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、東・南壁側は外傾して立ち上がっている。壁高は東壁 32 cm、南壁 30 cm、北壁 24 cm である。床は平坦で強く締まっている。貼り床は確認されない。

<カマド> カマドは北壁側に設置している。煙道部は溝跡で削平され、本体部と両袖も崩壊している事から詳細が不明である。僅かに燃烧部が現存するだけである。燃烧部は径 64×62 cm の円形を呈し、厚さ 8 cm の焼土が形成されている。

<遺物> 床上と埋土中から土師器甕が出土している。273～277 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) である。273 は床上から出土しており、口縁部は頸部から外傾して立ち上がっている。内外面とも磨滅が著しいものの、口縁部は内外面ヨコナデ、体部内外面がハケメ調整を施している。274・275 は体部下半～底部破片である。274 の底部は木葉痕で、胎土に砂の混入が多い。

276・277 は底部を欠損した球胴甕である。口縁部は頸部からくの字状に外反し、口唇部が角ばっている。器面調整は口縁部内外面がヨコナデで一部に縦方向のハケメ調整が見られる。体部は磨滅しているがハケメ調整を施している。胎土には砂と小石が多く混入している。

<時期> 坏や甕の特徴から奈良時代 8 世紀に比定される。

(高橋)

#### R A 199 竪穴住居跡 (第 92 図、写真図版 45)

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区に位置し、北側 2 m に R B 005・007 掘立柱建物跡が近接している。南側で中世の R G 042 堀と重複し切られている事から、新旧関係は (新) R G 042 堀→ (旧) 本竪穴住居跡である。検出面は IV 層上～中位で確認されている。

<平面形・規模> 遺構の大部分は R G 042 堀に削平されている事から、平面形・規模の詳細が不明である。検出された規模は東辺 1.46 m、北辺 2.95 m で、北東コーナーは隅丸を呈している。検出された規模や形状から、一辺 3 m 前後の隅丸方形と思われる。

<埋土> 一部しか残っていないが、上層は黒褐色シルト質土で構成され、褐色土がブロック状に混入し堅く締まっている。下層は褐色シルト質土と黒褐色土の混合土層である。<壁・床> 壁は床面から急傾斜で立ち上がり、壁高は東壁 18 cm、北壁 20 cm 前後を測る。重複する R B 042 堀の底面とは 65 cm の比高がある。床はほぼ平坦で堅く締まり、西側で V 層の砂礫層が一部露出している。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> 不明であるが、削平された東壁か西壁に設置していたと思われる。

<遺物・時期> 破片のため図面掲載をしなかったが、ロクロ不使用の坏・甕を出土している。坏 (I A a 群) は底部と体部の境に段が巡り、内面が黒色処理されている。甕 (A II 群) は体部～底部破片があり、体部外面をハケメ調整している。坏や甕の特徴から奈良時代 8 世紀前半頃に比定される。 (高橋)

#### R A 210 竪穴住居跡 (第 93・94 図、写真図版 46・231)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 B 区に位置し、北側 40 cm に R A 154 竪穴住居跡 (平安時代)、南東側 1.52 m に R E 006 竪穴状遺構が近接している。中世の R B 009 掘立柱建物跡と重複し、切られている事から新旧関係は (新) R B 009 掘立柱建物跡→ (旧) 本竪穴住居跡である。IV 層上面で黒～黒褐色土の広がりによって検出されている。

<平面形・規模> 南西コーナーと南壁、東壁の一部は隣接する第 19 次調査区に延びている。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は 3.53×3.41 m である。

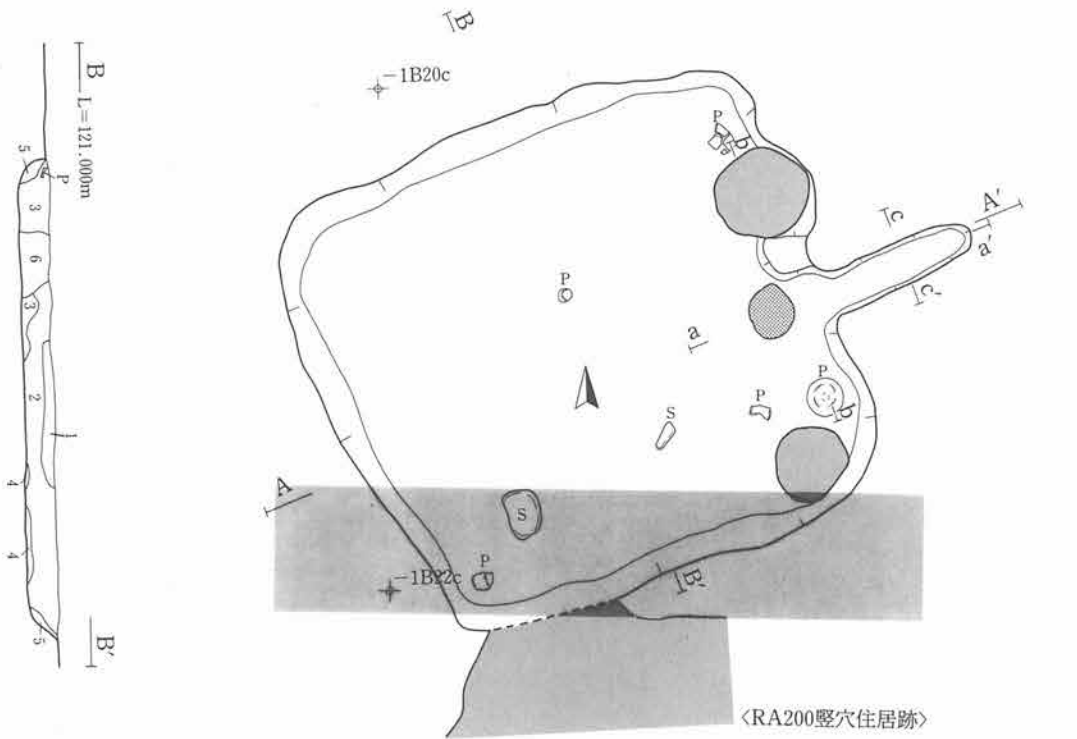
<埋土> 黒褐色土を主体とする 8 層で構成されている。中央部は黒褐色シルト質土がレンズ状に、壁際の中位から下位は黒褐色シルトに褐色土や焼土・炭化物が混入した土が堆積している。自然堆積の様相を呈している。<壁・床> 壁の上半部は削平されており、床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁 17 cm、西壁 23 cm、南壁 23 cm、北壁 22 cm を測る。床面は IV 層中にあり、ほぼ平坦で堅く締まる。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁のやや南東コーナー寄りに設置している。本体部の大部分は崩壊し、左袖部を僅かに現存するだけである。燃焼部は径 39×35 cm の楕円形状で、薄い焼土の形成が見られる。芯材と支脚は検出されない。

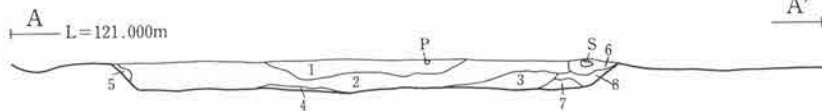
煙道部上半部は削平されている事から、割り貫き式かは不明である。長さは 1.01 m を測り、燃焼部から約 17 度の下り勾配で煙出し部へと続いている。埋土は黒褐色土を主体とし、上位には暗褐色土が混じり、下位に炭化物を含んでいる。煙出し部の規模は径 24 cm、深さ 26 cm である。

<遺物> 床面からは土師器坏・甕が出土しているが内 4 点を図面掲載している。297 はロクロ不使用の土師器坏 (I A a 群) で、口縁部は外傾する。底部は丸底で体部との境に明瞭な段が巡っている。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は放射状のヘラミガキ後に黒色処理されている。底部はハケメ調整が施されている。

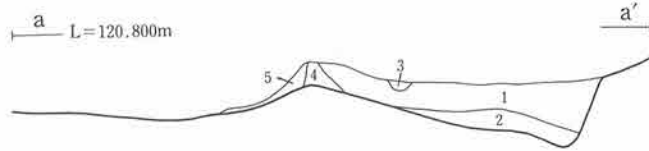


〈RA200竪穴住居跡〉

0 1m  
1 : 60

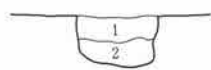


- |    |         |        |       |              |
|----|---------|--------|-------|--------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 堅く締まる | 黄褐色砂質土5%混入   |
| 2. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 堅く締まる |              |
| 3. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト |       |              |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 堅く締まる | 褐色土微量混入      |
| 5. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 堅く締まる | 暗褐色土10%混入    |
| 6. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト |       | 褐色土10%混入 礫含む |
| 7. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 堅く締まる | 焼土3%混入       |
| 8. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 堅く締まる | 小礫・炭化物微量含む   |



b L=120.800m b'

c L=120.800m c'

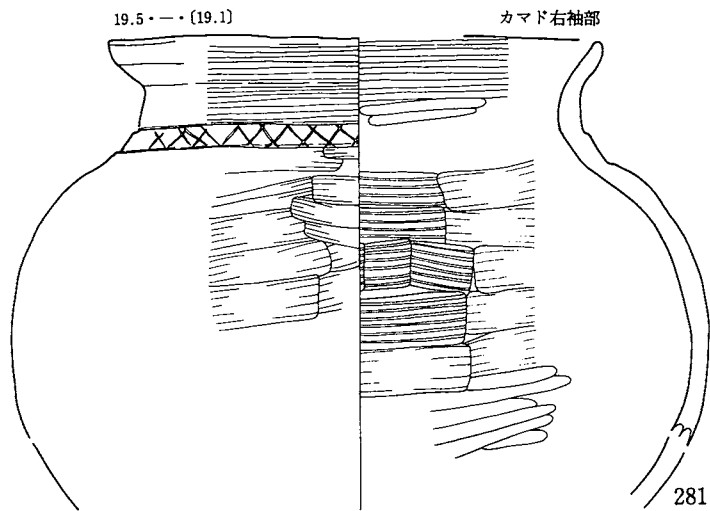
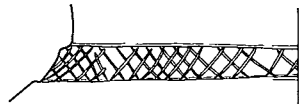
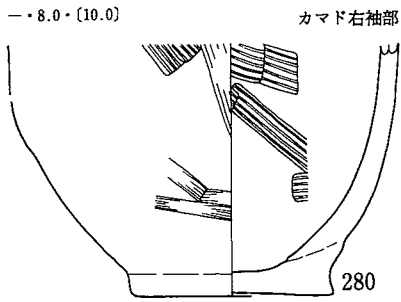
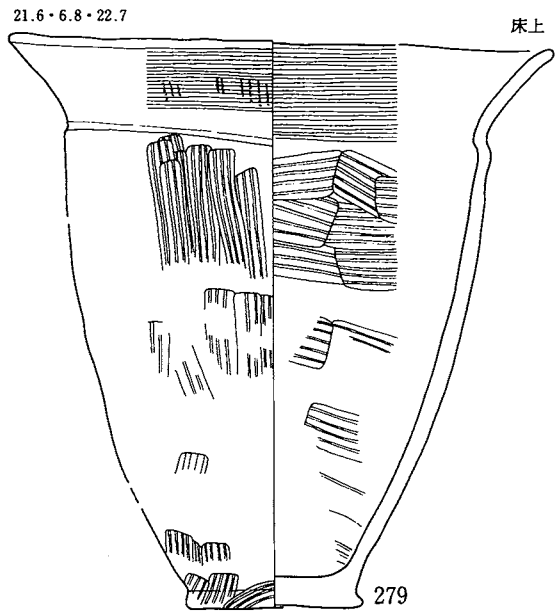
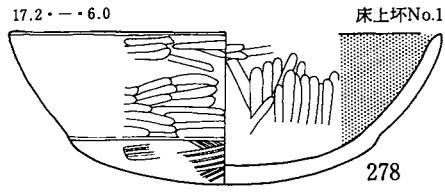


- |    |         |        |           |          |
|----|---------|--------|-----------|----------|
| 1. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 暗褐色土20%混入 | 焼土粒1%混入  |
| 2. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 炭化物3%含む   |          |
| 3. | 10YR4/6 | 褐色シルト  | 堅く締まる     |          |
| 4. | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 堅く締まる     | 褐色土10%混入 |
| 5. | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 黒褐色土10%混入 |          |
| 6. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 堅く締まる     |          |

0 50cm  
1 : 30

第93図 RA210竪穴住居跡





S=1/3

第94図 RA210竪穴住居跡出土遺物

279～281 はロクロ不使用の甕（A II群）で、器形から 281 が球胴形で他が長胴形である。279 のは口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部が丸味をもつ。口縁部は内外面ヨコナデ、体部はハケメ調整である。280 は口縁部を欠損し、器形全体が歪み磨滅している。

281 は底部を欠損した球胴甕である。口縁部は頸部から外反気味に立ち上がり、頸部に単沈線による鋸歯状の山形文様が描かれている。磨滅しているが器面調整は口縁部が内外面ヨコナデ、体部外面がヘラナデ、内面がハケメとヘラナデ調整が施されている。

<時期> 土師器坏の特徴から奈良時代の 8 世紀前半に比定される。 (佐藤・高橋)

#### R A 215 竪穴住居跡 (第 95・96 図、写真図版 47・231)

<位置・重複関係> 東側調査区西端の 1 B 区に位置している。東側 3.6 m に R A 136 竪穴住居跡、北西 1 m に R A 137 竪穴住居跡が近接する。北西側で平安時代の R A 120 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は切られている事から (新) R A 120 竪穴住居跡→ (旧) 本竪穴住居跡である。検出は IV 層上～中位で確認されている。

<平面形・規模> 遺構の北西壁側が重複する事から、平面形・規模の詳細が不明である。検出された規模は南東辺 3.50 m、北東辺 3.10 m、南西辺 2.83 m、東と南側コーナーは隅丸である。検出された規模や形状から、一辺 3.50 m 前後の隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 黒褐色シルト質土を主体とする 4 層に大別される。上位～中位は水酸化鉄を含み堅く締まり、下位は黒褐色シルトと褐色土の混合土層、壁際に壁崩落土の暗褐色シルト質土が堆積する。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 壁は床面から直に近い傾斜で立ち上がり、壁高は南東壁 33 cm、北東壁 32 cm、南西壁 27 cm を測る。重複する R A 120 竪穴住居跡の床面とは 7～10 cm の比高がある。床は多少凹凸があり、一部で V 層の砂礫層が露出し堅く締まっている。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> 不明であるが、重複する北西壁側に設置していたと思われる。

<遺物> 埋土中～下位と床上からロクロ不使用の土師器坏・椀・甕と土錘が出土している。282 は底部丸底の坏（I A a 群）で、底部と体部の境に段が巡っている。内面は磨滅しているが、ヘラミガキ調整後に黒色処理されている。

283 は小型の椀である。口縁部は底部から内湾気味に立ちあがり、内外面ともヘラナデ調整を施している。焼成は良好で胎土に砂と小石を含む。

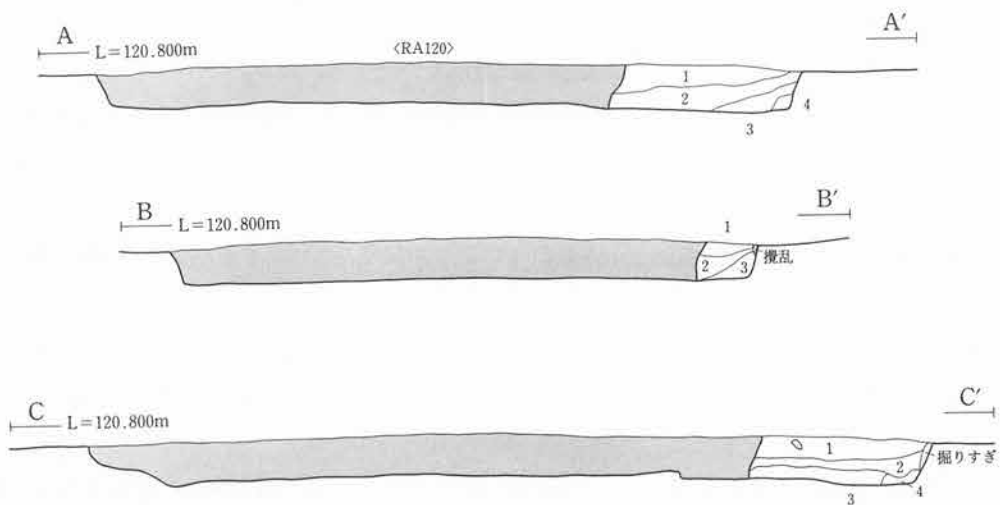
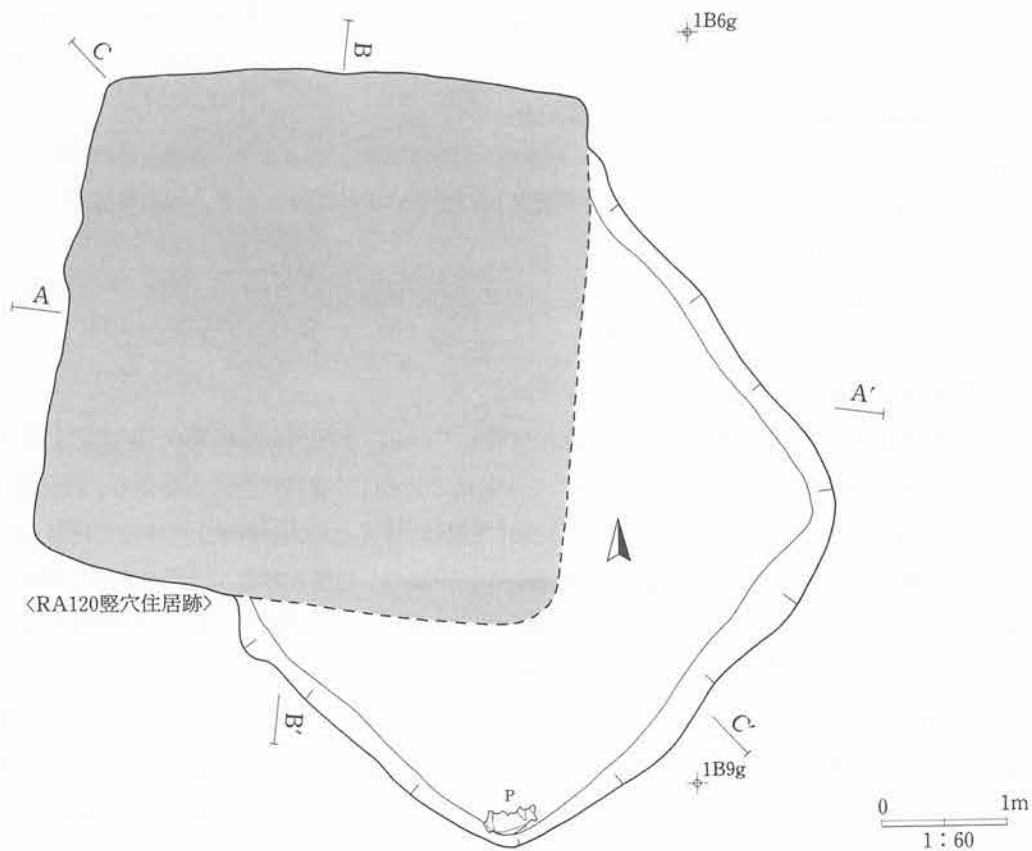
284 は頸部に浅い段があるロクロ不使用の長胴甕（A II群）である。口縁部は頸部から外傾し端部が直立気味に立ち上がり、口唇部は角ばり一条の沈線が巡っている。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面がハケメ、底部がヘラナデである。

285 はほぼ完形の土錘で、中央には径 4 mm の穿孔があり、長さ 5.2 cm、幅 1.9 cm、厚さ 1.8 cm を測る。

<時期> 坏や甕の特徴から奈良時代 8 世紀前半頃に比定される。 (高橋)

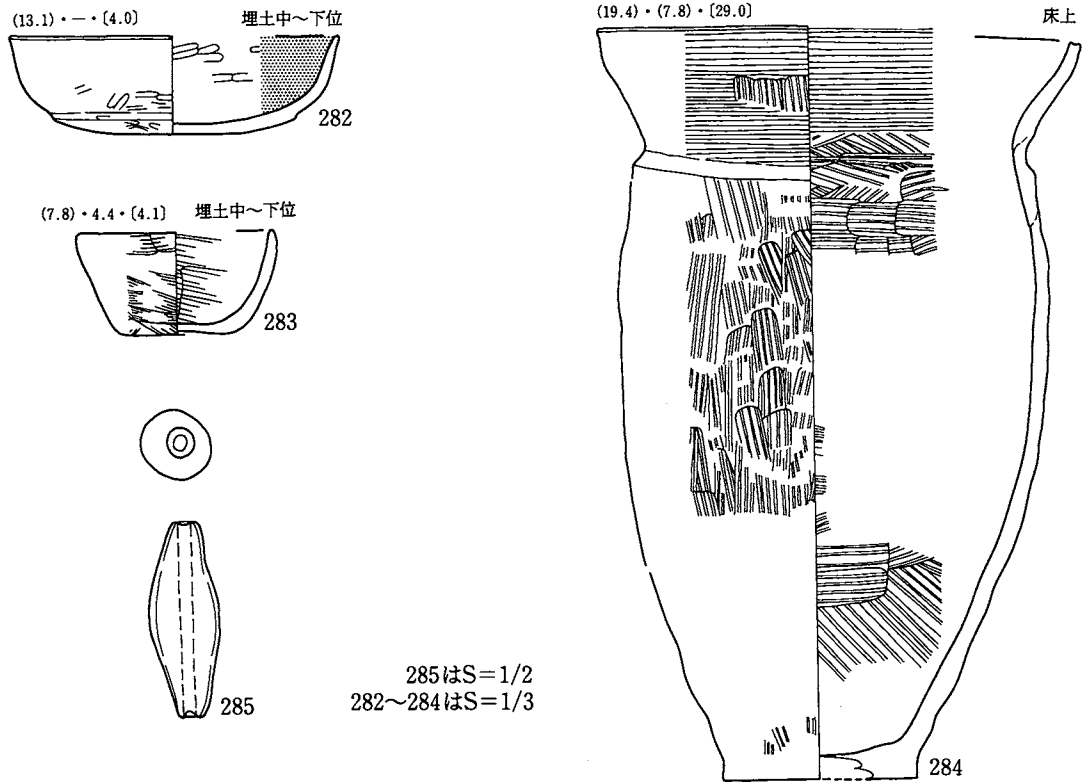
#### R A 218 竪穴住居跡 (第 97～99 図、写真図版 48・232)

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 B 区に位置している。東側で R G 158 溝跡、南側で R G 106 溝跡と重複する。新旧関係は当遺構が R G 106 溝跡に切られ、R G 158 溝跡を切っている事から (新) R G 106 溝跡→ R A 218 竪穴住居跡→ (旧) R G 158 溝跡である。IV 層上面で検出している。<平面形・規模> 遺構の南東コーナーは削平されている事から、平面形の詳細は不明である。規模は 5.90×5.80 m を呈し、平面形は



- |    |         |          |       |                |
|----|---------|----------|-------|----------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 水酸化鉄混入         |
| 2. | 10YR2/1 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 炭1%混入 水酸化鉄微量含む |
| 3. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 褐色土の混合土        |
| 4. | 10YR2/3 | 暗褐色シルト質土 | IV層起源 | 褐色土の混合土 指圧痕あり  |

第95図 RA215竪穴住居跡



第96図 RA215竪穴住居跡出土遺物

隅丸方形である。

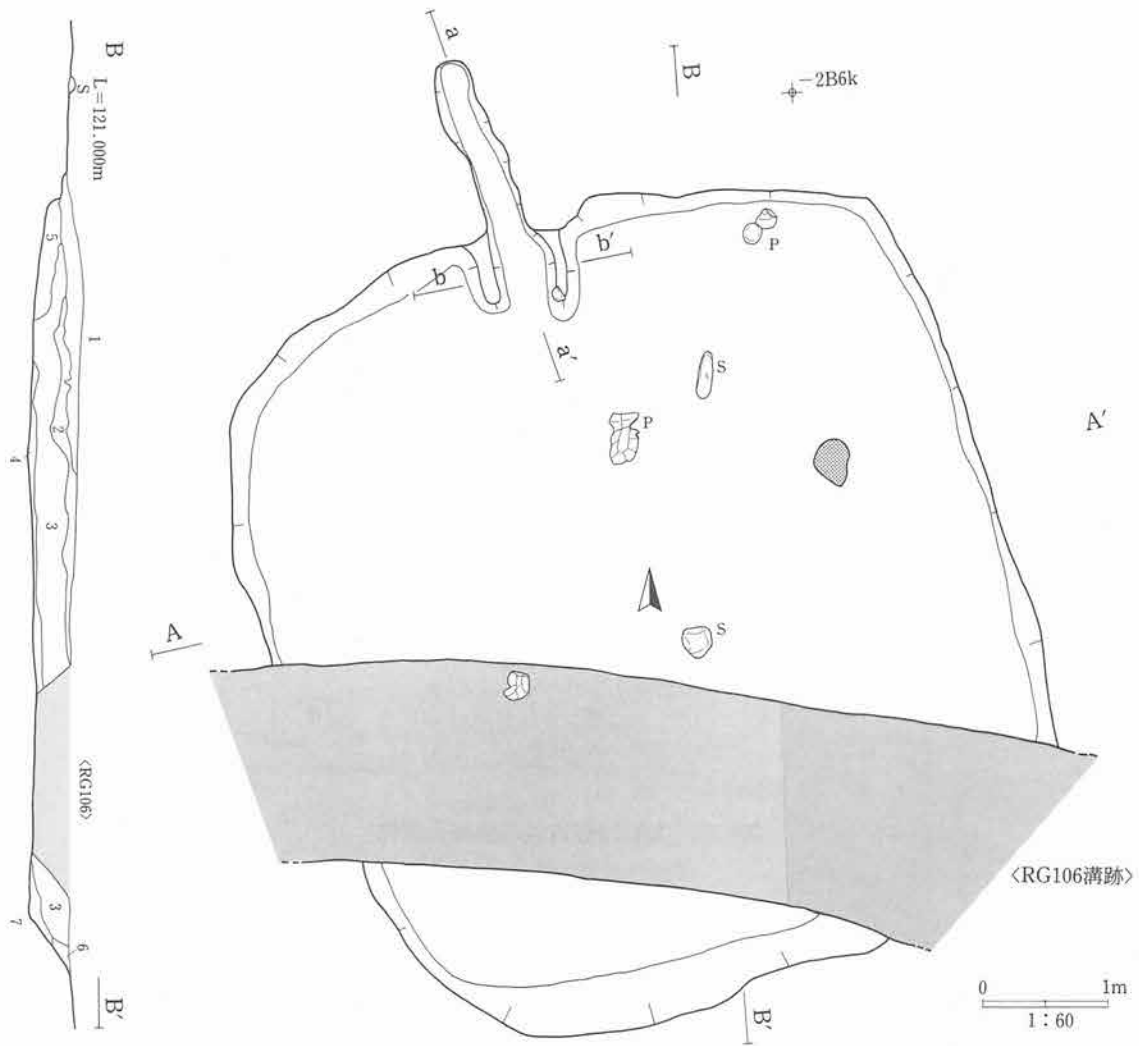
<埋土> 黒褐色シルト質土主体の9層に大別される。上層は水酸化鉄を多く含む黒褐色シルト、下層は微量の炭と水酸化鉄小ブロックを含み、壁際に焼土粒と炭を堆積している。全体に堅く締まっている。<壁・床> 壁は床面から直立気味に立ち上がり、壁高は東壁 27 cm、西壁 22 cm、南壁 35 cm、北壁 26 cmである。床は平坦で、カマド周辺が堅く締まっている。中央部東壁寄りの床上には径 37×27 cm、楕円形気味の焼土が 1 基検出されている。<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは北壁のほぼ中央に設置している。本体部の大部分と煙道上半部は削平されている事から、全容と天井部の構造が不明である。両袖部はIV層を削り出して造られているが、上半部は崩壊している。燃焼部の焼土は確認されない。煙道部は上半部が削平されているが、剥り貫きと思われる。長さは 1.10 m で、焚き口部から緩やかな下がり勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部の構造は不明である。

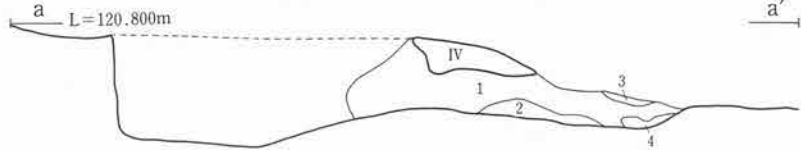
<遺物> 床上とカマド周辺部から土師器坏・高坏・甕・鉢と鉄製品が出土している。286・287 はロクロ不使用の土師器坏（I A a 群）で、丸底で底部と体部下半の境に段が巡っている。口縁部と体部外面は横方向の細かいヘラミガキ、内面は放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理をしている。

288 はロクロ不使用の土師器高坏である。口縁部は台部から内湾気味に立ち上がり、体部内外面がヘラミガキ調整後黒色処理を施している。

289～291・293・294 はロクロ不使用の土師器甕（A II 群）である。口縁部は頸部から外反する 289・290、外傾する 291 がある。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部は外面は 289 がハケメとヘラケズリ調整、290 がヘラミガキ調整、291 がハケメ調整を施している。内面は磨滅しているがハケメ調整が見られる。

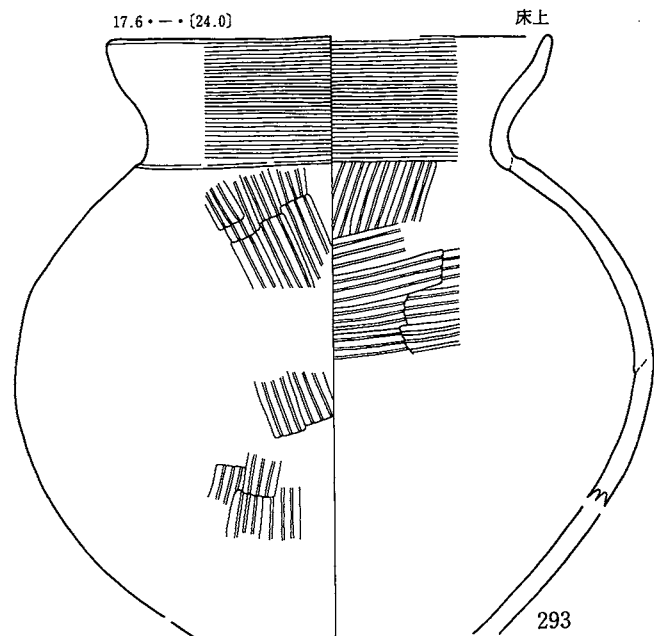
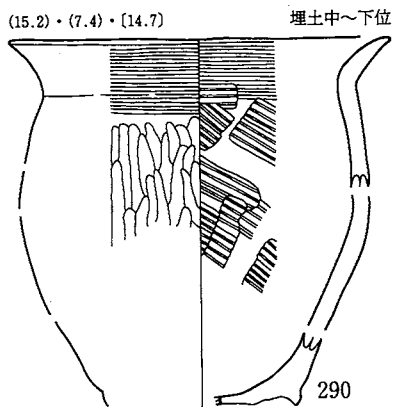
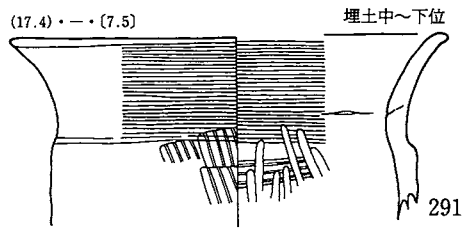
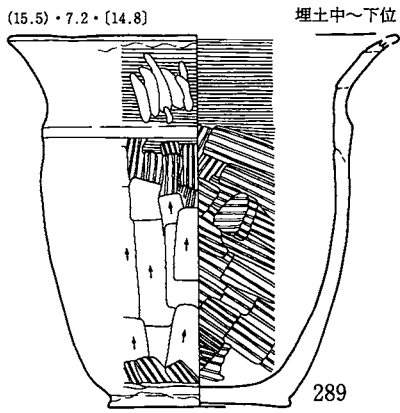
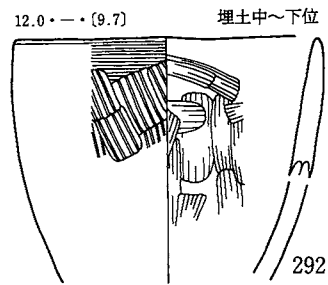
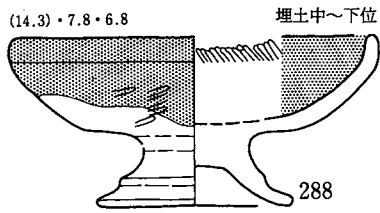
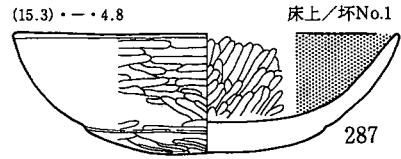
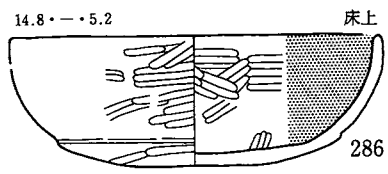


- |    |         |          |       |                     |
|----|---------|----------|-------|---------------------|
| 1. | 10YR2/3 | 黒褐色砂質シルト | 堅く締まる | 水酸化鉄多量・炭少量含む        |
| 2. | 10YR3/1 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 1層に類似 炭微量含む         |
| 3. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 水酸化鉄が小ブロックで堆積 炭微量含む |
| 4. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 炭微量含む               |
| 5. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 焼土粒多量 | 炭微量含む               |
| 6. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 褐色土との混合土            |
| 7. | 10YR3/3 | 暗褐色シルト質土 | 堅く締まる |                     |
| 8. | 10YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | 堅く締まる | 水酸化鉄1%含む            |
| 9. | 10YR2/3 | 黒褐色砂質シルト | 堅く締まる | 焼土粒・微量の炭含む          |



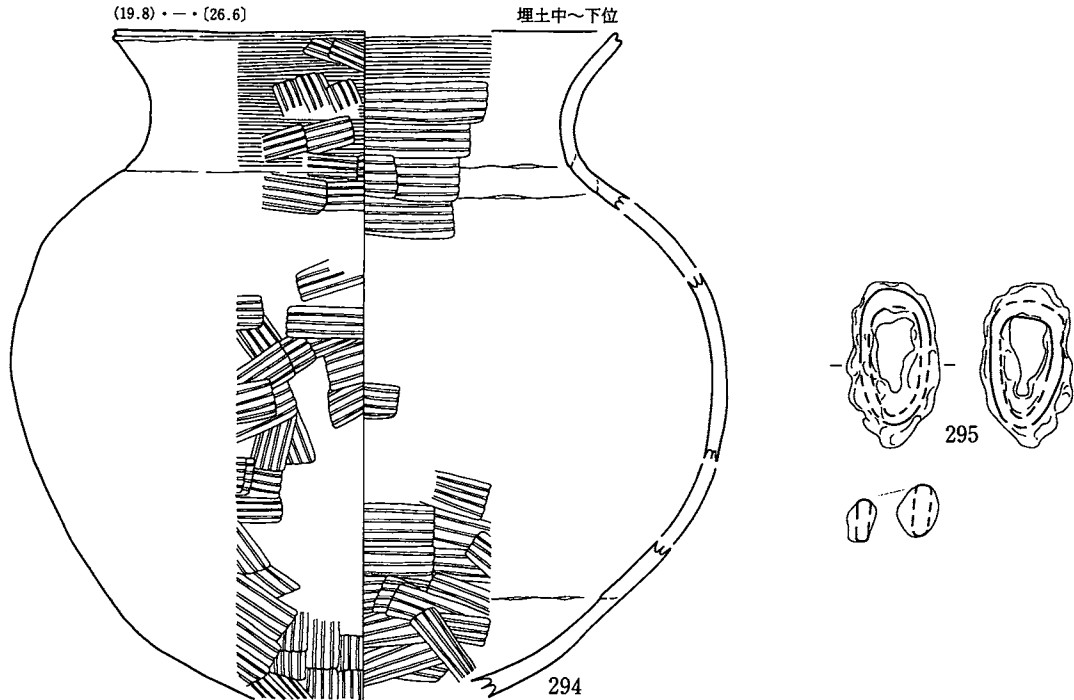
- |    |         |          |              |           |                  |
|----|---------|----------|--------------|-----------|------------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 褐色土が小ブロックで混入 | 焼土粒・炭微量含む | 小動物の骨を少量含む 指圧痕あり |
| 2. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 炭・焼土粒微量含む    | 指圧痕あり     |                  |
| 3. | 5YR5/8  | 明赤褐色焼土   | 堅く締まる        |           |                  |
| 4. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 炭微量含む        | 指圧痕あり     |                  |

第97図 RA218竪穴住居跡



S=1/3

第98图 RA218竖穴住居跡出土遺物(1)



295はS=1/2  
294はS=1/3

第99図 RA218竪穴住居跡出土遺物(2)

293・294 は底部を欠損した球胴甕である。293 の口縁部は頸部からくの字状に外反し、上半部で直立気味に立ち上がっている。口縁部はヨコナデ、体部内外面がハケメ調整である。294 は口唇部に一条の沈線が巡り、口縁部が強く外反している。口縁部は内外面ヨコナデと一部にハケメ調整、体部がハケメ調整を施している。

292 はロクロ不使用の土師器鉢と思われる口縁部破片である。口縁部は直立し、ヨコナデ調整が施され、体部外面が縦方向のハケメ調整である。

295 は器種が不明のリング状鉄製品で、径4.4×2.5 cm、厚さ8 mmを測る。

<時期> 坏や甕の特徴から奈良時代8世紀に比定される。

(高橋)

#### RA 219 竪穴住居跡 (第100・101図、写真図版49・233)

<位置・重複関係> 調査区北西側の-1-A区南西側に位置する。煙道部がRD 167土坑と重複する。新旧関係は当遺構が切られていることから(新)RD 167土坑→(旧)RA 219住居跡である。検出はIII層下位である。

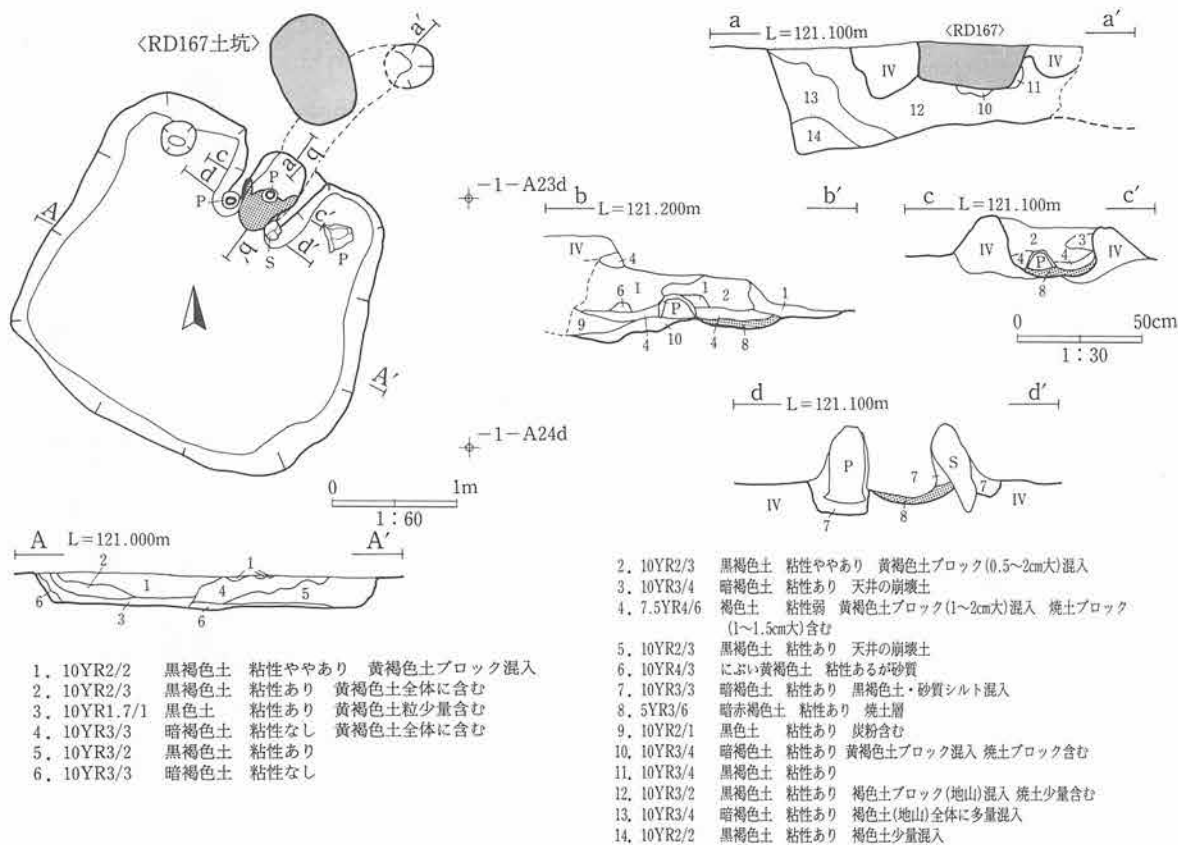
<平面形・規模> 南東壁、南西壁がやや胴張りの隅丸方形を呈する。一辺の長さは2.32×2.48 mである。

<埋土> 6層に細分され、黄褐色土を含む黒褐色土が主体である。上層ほど締まりがあり、下層は締まりが弱い。<壁・床> 壁は床からやや内湾あるいは外傾気味に立ち上がる。床は平坦で、締まっている。

<柱穴> 北コーナーから1基検出された。平面形は円形を基調としている。精査中は確認できなかったが、この柱穴は掘立柱建物跡の一部で住居埋没後に掘り込まれている可能性もある。<他の施設> 検出されない。

土坑No.	P 1
直径cm	28×28
深さcm	32

<カマド> 北東壁の中央部に設置している。袖はIV層を削り出して構築しているが、焚き口の部分は長



第100図 RA219竪穴住居跡

胴甕の底を欠いたものと、円柱形の円礫を芯としている。燃烧部は径45×44cm、厚さ5cmの不整円形の焼土が形成されている。内部中央には甕の底部が天地逆に置かれ、支脚として使用されていた可能性がある。

煙道部は割り貫き式で、長さ1.38m、煙出し部からいったん下がってまた上がり、さらに緩やかな下り勾配に掘り込まれている。煙出し部はカマドの中軸線よりもやや東にふれて位置しており、煙道も東に向かって少し曲がっている。煙出し部は径40×40cm、深さ42cmの円形土坑が掘り込まれている。

〈遺物〉 カマド内、カマド袖、カド脇北東コーナーの理土下層のほか、埋土中からロクロ不使用の土師器が出土している。299はカマド左袖の芯材として使用されていた甕で、底部が欠けている。300はカマドの支脚と考えられる甕の底部。298は床面から出土した甕の状版である。埋土から甕のほか、鉢か甑と見られる土器の破片301が出土している。

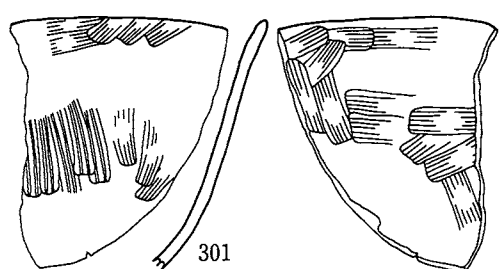
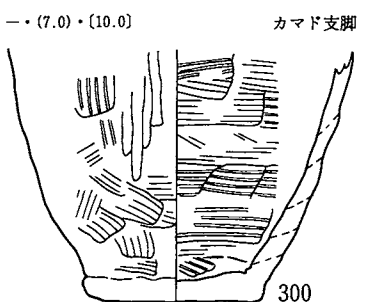
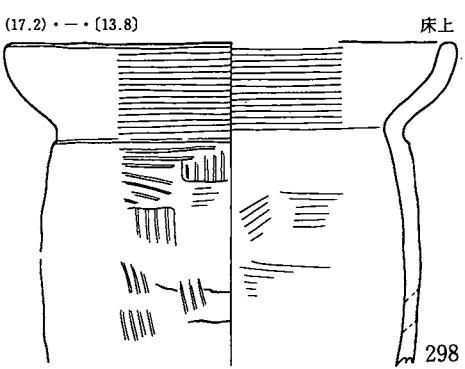
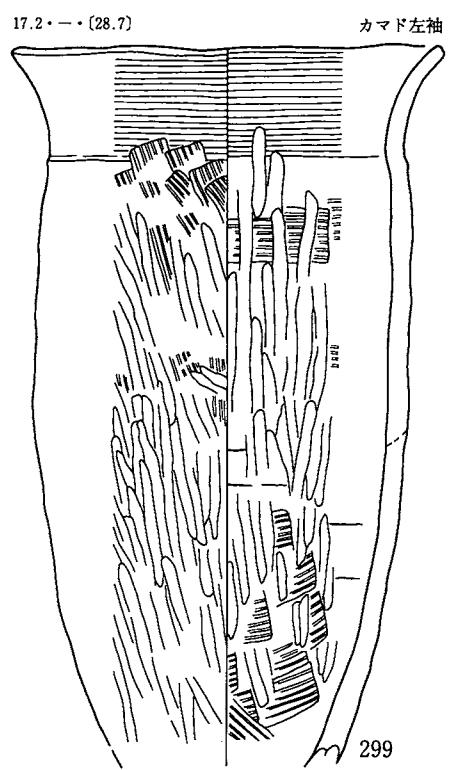
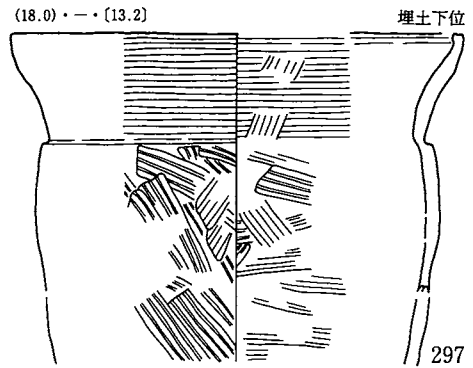
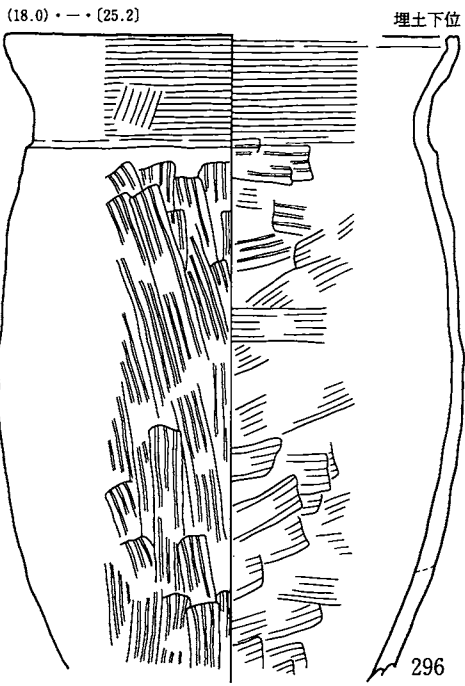
〈時期〉 出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。(金子)

RA 221 竪穴住居跡 (第102・103図、写真図版50・233・234)

〈位置・重複関係〉 北側調査区の一-B区に位置し、RG 154・156溝跡と重複している。新旧関係は当遺構が両溝跡に切られている事から(新)RG 154溝跡→RG 156溝跡→(旧)RA 221竪穴住居跡である。検出はIV層上面である。〈平面形・規模〉 遺構の西側3分の1が調査区域外に延びる事から、平面形・規模の詳細が不明である。検出された規模は東辺3.72m、南辺4.42m、北辺3.28mである。検出された規模や形状から、一辺4.60m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

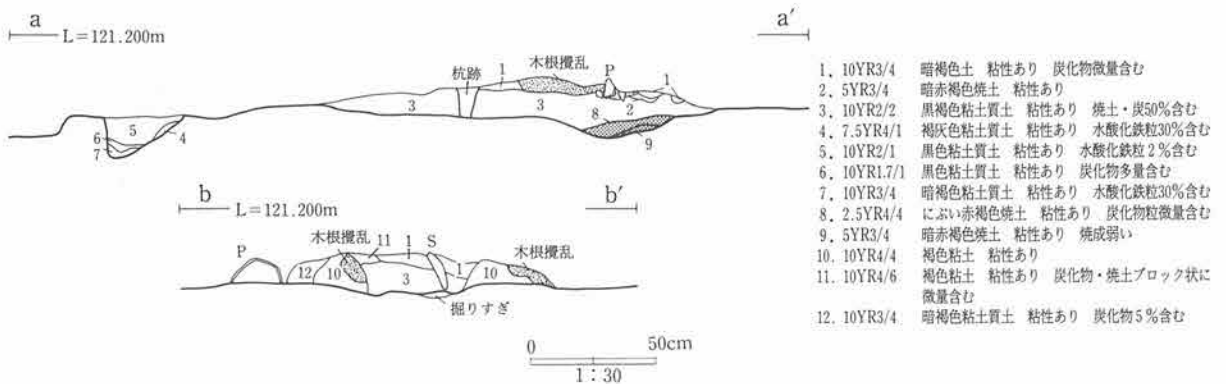
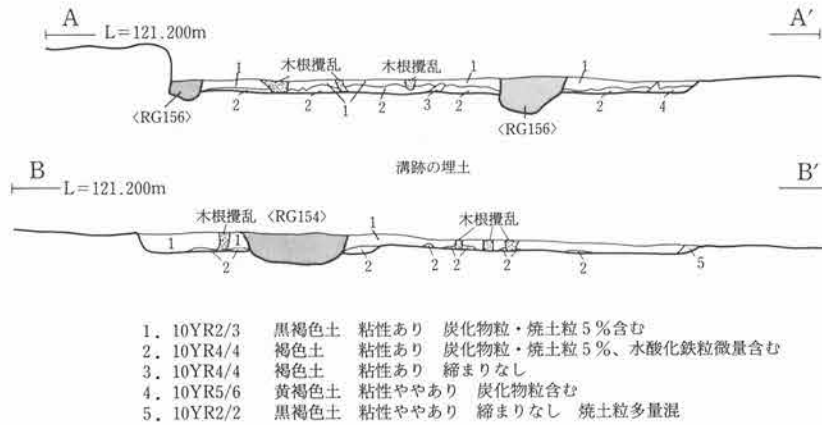
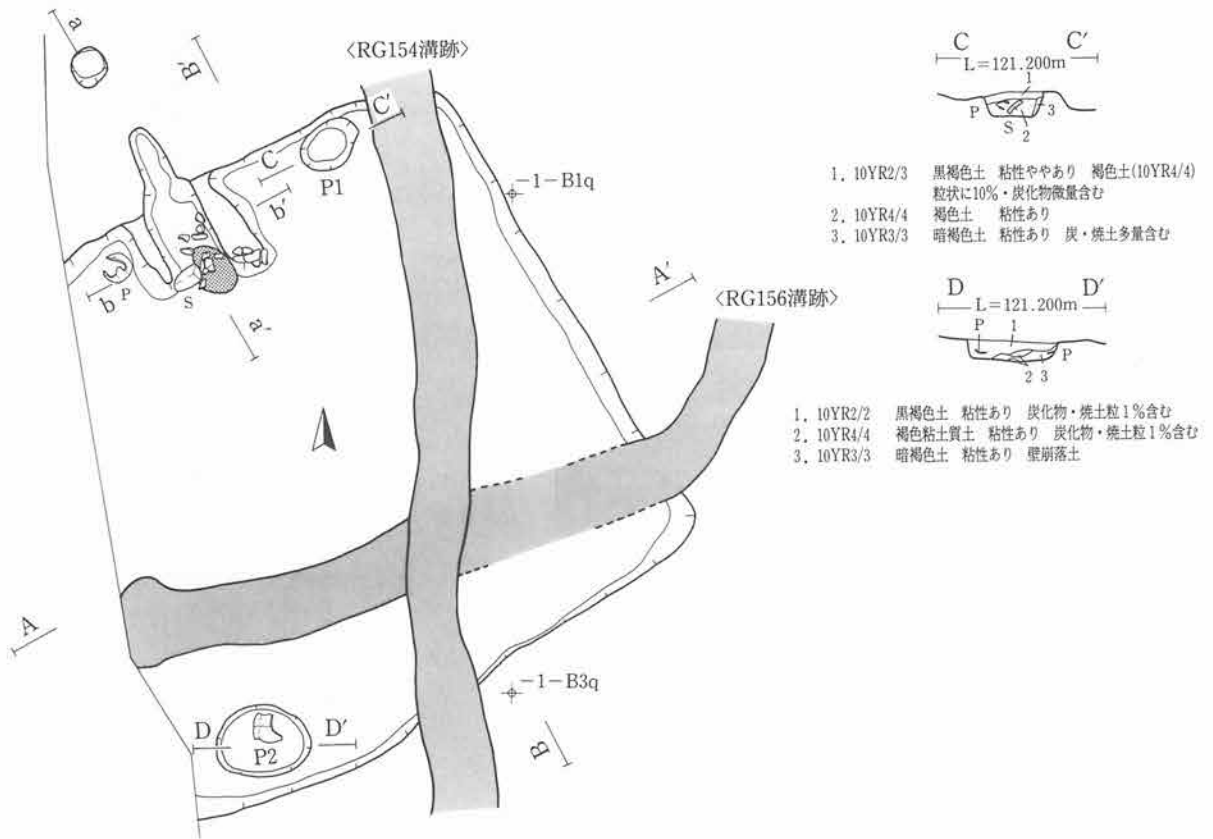
〈埋土〉 埋土は黒褐色土を主体とする5層に大別される。上位は炭化物と焼土粒を含み、下位に水酸化鉄粒を混入し堅く締まっている。〈壁・床〉 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は東壁9cm、南壁14cm、



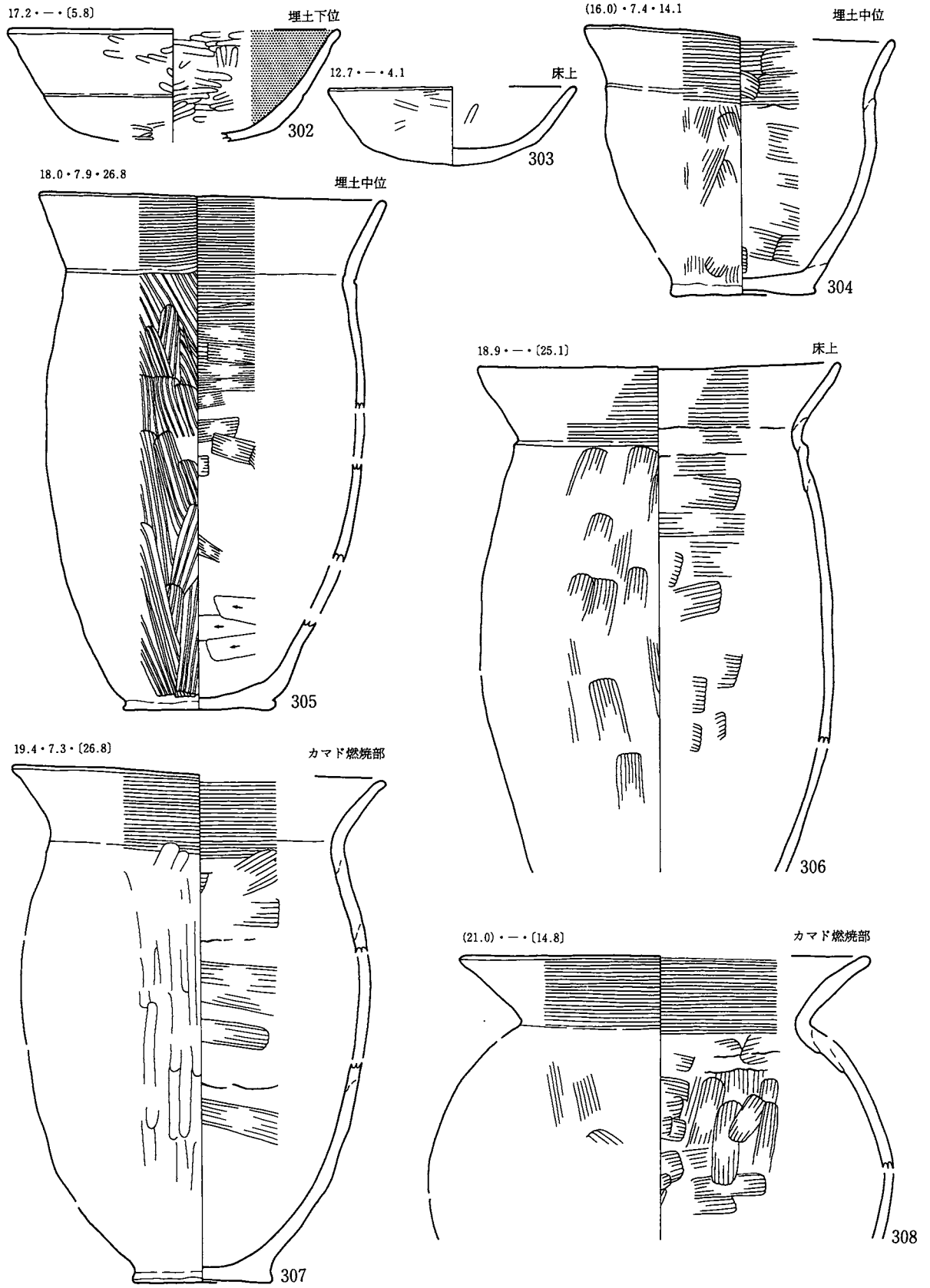


S=1/3

第101図 RA219竪穴住居跡出土遺物



第102図 RA221竪穴住居跡



第103図 RA221竪穴住居跡出土遺物

北壁 7 cmを測る。床は多少凹凸が見られ、堅く締まっている。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 土坑は2基検出されている。北壁北東コーナー寄りにP 1土坑、南壁南西コーナー寄りにP 2土坑である。平面形は楕円形で、P 1は貯蔵穴と思われる。

土坑No	P 1	P 2
直径cm	50×36	74×59
深さcm	20	16

<カマド> カマドは北壁に設置している。本体部の大部分は崩壊し、袖部下半を現存している。燃焼部は径 44×32 cmの楕円形状で、上部に芯材に使用した亜円礫が散在している。焼土は厚さ 6 cmの形成が見られる。支脚は確認していない。

煙道部上半部～一部下半は削平されていることから、割り貫き式かは不明である。長さは 1.40 mを測り、燃焼から上り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は大部分が削平を受け、僅かに下端部が現存している。径 32×29 cm、深さ 13 cmの円形土坑が掘り込まれている。

<遺物> 床上とカマド焼き口周辺から土師器坏・甕が出土している。302・303はロクロ不使用の土師器坏である。302 (I A a群)は丸底で、体部下半に浅い段が巡っている。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部は丸味をもつ。体部外面は磨滅しているが横方向に細いヘラミガキ、内面がヘラミガキ調整後に黒色処理をしている。303 (I A b群)は丸底で、器面調整は内外面の剝離が著しいため一部にヘラミガキ調整が見られるだけである。胎土には砂の混入が多い。

304～307はロクロ不使用の土師器甕 (A II群)で、305～307は長胴形の器形である。口縁部は頸部から外傾する 304～306、くの字状に外反する 307がある。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面はハケメ・ヘラナデ・ヘラケズリ調整等がある。307は焼成が良好で胎土に砂と金雲母を多く含んでいる。

308は底部を欠損したロクロ不使用の土師器球胴甕である。口縁部は頸部からくの字状に強く外反し、口唇部が丸味をもつ。口縁部はヨコナデ、体部内外面がヘラナデ調整を施している。体部内面の頸部付近には粘土紐の積み上げ痕が明瞭である。

<時期> 坏や甕の特徴から奈良時代 8世紀に比定される。 (高橋)

#### R A 225 竪穴住居跡 (第 104・105 図、写真図版 51・52・234・235)

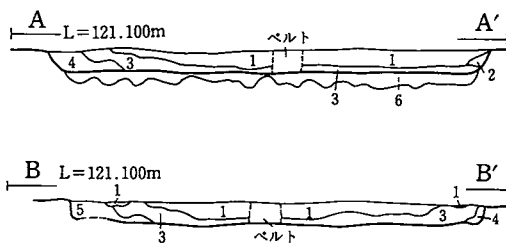
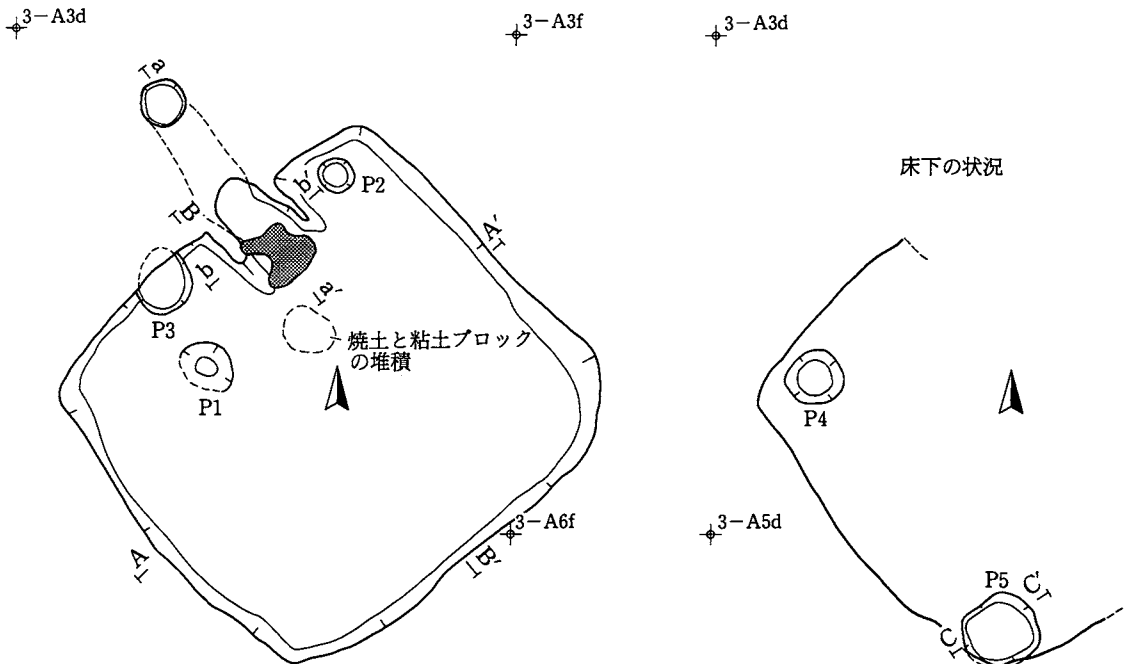
<位置・重複関係> 調査区西側の 3-A区に位置する。重複関係はない。検出はIII層下位～IV層上面である。<平面形・規模> 隅丸方形を呈する。規模は 3.40×3.20 mである。

<埋土> 5層に細分され、黄褐色土を含んだ黒褐色土～黒色土が主体である。カマド周辺の埋土には焼土粒も含まれている。<壁・床> 壁は床からやや内湾気味に立ち上がる。壁高は 20 cmである。床は黒褐色土と砂質シルトの混合土で貼り床が施され、平坦で堅く締まっている。カマド前の床面には焼土と焼土ブロックの薄い堆積が 42×32 cmの楕円形の範囲に認められる。

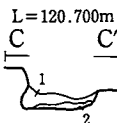
<柱穴> P 1があるが深さ、位置、対となる柱穴が欠けていることから、主柱穴とは考えられない。埋土は焼土、炭、黄褐色土の混入する暗褐色土である。<土坑> 土坑は4基検出された。P 2・P 3はカマドの両脇から検出された土坑である。P 2は北西の壁中に張り出し、壁はオーバーハングしている。両土坑とも埋土は、焼土、炭、黄褐色土の混入する暗褐色土である。P 4・P 5は貼り床を除去したところ検出した楕円形の土坑である。P 5は南コーナーに位置する。壁中に張り出して、壁はややオーバーハングしている。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
直径cm	47×38	30×28	51×47	44×42	63×57
深さcm	21	11	14	16	12

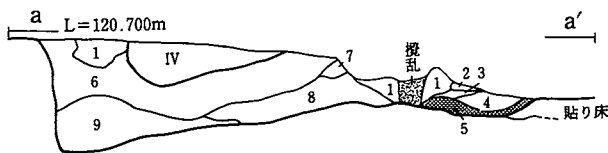
<カマド> 北西壁の中央よりやや北側に位置する。天井は崩落している。袖はIV層を削り出して構築している。焼き口には特に芯材となるような礫や土器は設置されていない。焼土は 50×44 cmの不整形に形成さ



- |            |      |      |                              |
|------------|------|------|------------------------------|
| 1. 10YR    | 黒褐色土 | 粘性あり | 黄褐色土粒少量混入                    |
| 2. 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性あり | 壁崩壊土                         |
| 3. 10YR2/1 | 黒色土  | 粘性あり | 黄褐色土粒少量混入                    |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性あり | 黄褐色土ブロック多量混入                 |
| 5. 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性あり | 黄褐色土粒混入 焼土粒含む                |
| 6. 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性あり | 強く締まる 黒褐色土・砂質シルト<br>ブロックの混合土 |



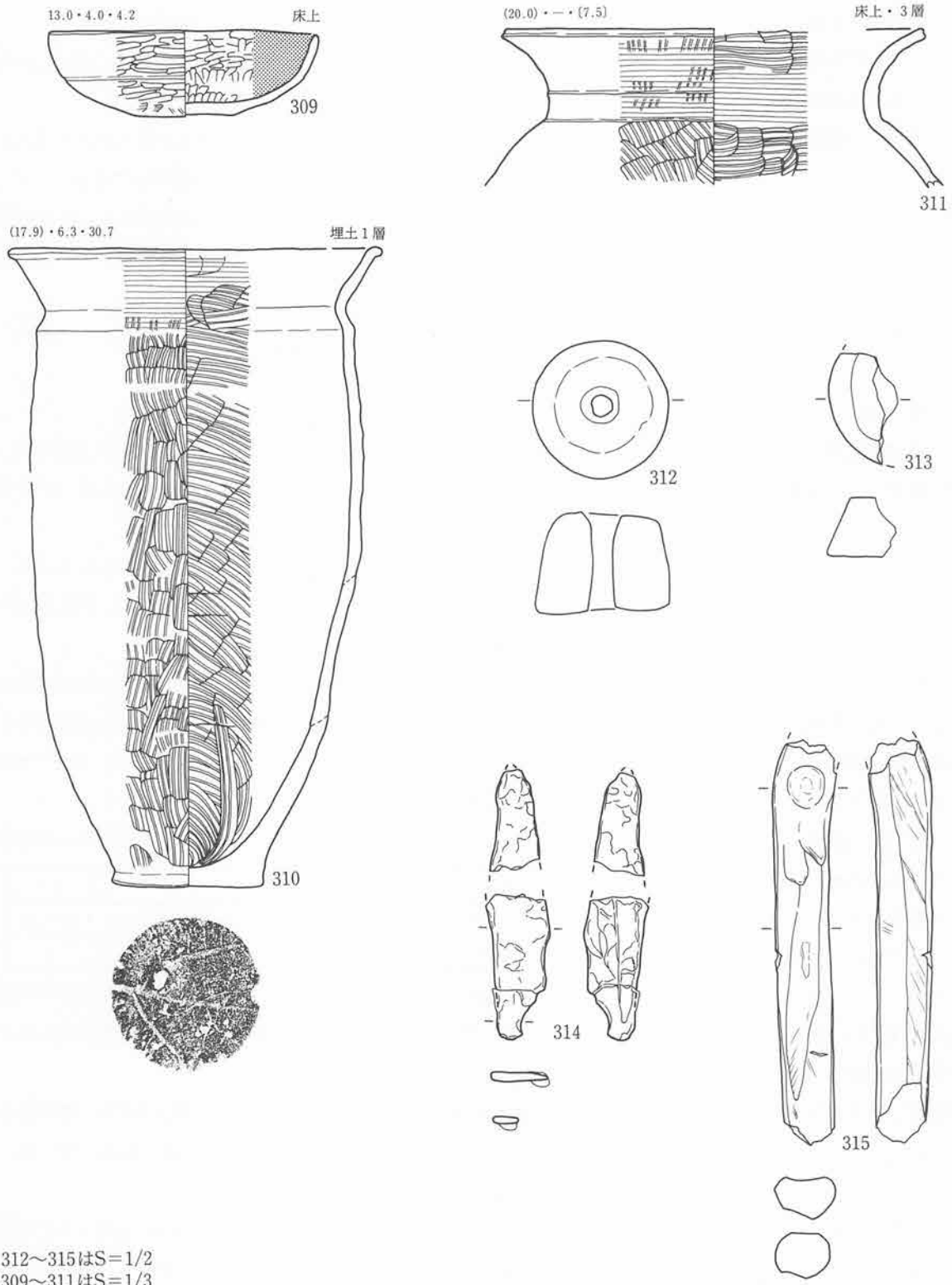
- |            |      |        |                                |
|------------|------|--------|--------------------------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性あり   | 締まりなし 黄褐色土ブロック(2~5cm大)<br>多量混入 |
| 2. 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性ややあり | 砂質シルトの崩壊土                      |



0 50cm  
1:30

- |              |         |        |                    |
|--------------|---------|--------|--------------------|
| 1. 10YR3/3   | 暗褐色土    | 粘性あり   | 黒色土混入 焼土粒含む        |
| 2. 10YR3/3   | 暗褐色土    | 粘性に富む  | 締まりなし 黄褐色粘土に黒色土が混入 |
| 3. 10YR1.7/1 | 黒色土     | 粘性ややあり | 締まりなし カーボン層        |
| 4. 5YR4/4    | にぶい赤褐色土 | 粘性なし   | 強く締まる 焼土粒・炭化物を多量含む |
| 5. 5YR3/2    | 暗赤褐色土   | 焼土層    | 粘性ややあり             |
| 6. 10YR2/3   | 黒褐色土    | 粘性に富む  | 焼土ブロック含む           |
| 7. 10YR2/3   | 黒褐色土    | 粘性なし   | 強く締まる              |
| 8. 10YR2/3   | 黒褐色土    | 粘性なし   | 焼土ブロック含む           |
| 9. 10YR2/3   | 黒褐色土    | 粘性に富む  | 炭化物含む              |

第104図 RA225竪穴住居跡



第105図 RA225竪穴住居跡出土遺物

れ、最大厚は6 cmである。袖の内側もよく焼けて、焼土化している。

煙道部は割り貫き式で、長さ1.2 m、幅36～46 cmである。底部は燃焼部からやや上がった後、煙出しに向けて下がり勾配となる。埋土は炭化物や焼土ブロックを含む黒褐色土である。

<遺物> 床面や埋土からロクロ不使用の土師器が出土している。住居ほぼ中央の床から1 cmほど浮いた状態で309の坏、住居北西側床面から311の球胴甕口縁部破片、カマド前の床面から紡錘車312が出土した。310は住居南コーナー付近の1層から出土した甕である。312・313は紡錘車で、前者は床面から、後者は埋土下層から出土した。314は埋土上層から出土した刀子である。315は用途不明の棒状土製品でカマドから出土した。

<時期> 出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。 (金子)

#### RA 229 竪穴住居跡 (第106～109 図、写真図版53・235～237)

<位置・重複関係> 東側調査区の一B区に位置し、東側で平安時代のRA 150 竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、本遺構が切られている事から(新) RA 150 竪穴住居跡→(旧) 本竪穴住居跡である。IV層上面で黒褐色土の広がりによって検出している。

<平面形・規模> 遺構の北東コーナーは畦畔の下に延びており、北西コーナーを道路に切られている。また、南西コーナーは隣接する第19次調査区側に延びている事から、規模の全容が不明である。確認された規模は8.98×8.87 mを測り、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐～暗褐色土を主体とし、全体に暗褐色土を混入している。下位は水酸化鉄の堆積が多く、一部に焼土粒と炭化物を含んでいる。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 壁の上半部は削平されており、床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁35 cm、西壁30 cm、南壁36 cm、北壁21 cmである。床は北側がやや高まるものの、平坦で堅く締まっている。

<柱穴> 柱穴状土坑はP1～P5の5基を検出しており、位置的にP1～P4が主柱穴である。平面形はP1～P4が円形で、P5が楕円形である。埋土は黒褐色土に暗褐色土が少量混入している。柱痕は確認されていない。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
直径cm	28×25	44×35	35×32	43×36	35×26
深さcm	77	65	76	87	9

<カマド> 北壁の中央部に設置している。本体部の大部分は削平されているために、全容および天井部の構造は不明である。袖部はIV層を削り出して造られ、芯材に石や甕の使用は認められない。燃焼部は径64×60 cmの不整形を呈し、焼土の最大厚は13 cmである。

煙道上半部は削平されている事から、割り貫き式かは不明である。長さは現存部で45 cmを測り、燃焼部からほぼ平坦で煙出し部へと続いている。埋土は黒褐色～極暗褐色土を主体とし、焼土粒を少量含んでいる。煙出し部は畦畔の下に延びているために不明である。

<遺物> 床上と埋土中～下位から土師器坏・甕・片口・甑、須恵器坏が出土しているが、内16点を掲載している。316はロクロ不使用の土師器坏(I A a群)である。口縁部は直立気味に立ち上がり、体部下半に浅い段が巡っている。器面調整は外面がヘラミガキ、内面が細いヘラミガキ後に黒色処理を施している。底部は横方向のヘラケズリが見られる。

317はロクロ成形の須恵器高台坏である。底部が切り離されて後に回転ヘラケズリ再調整を施し、低い高台を付している。焼成は良好である。

318～325はロクロ不使用の土師器甕(A II群)である。器形により大小はあるが322・323は球胴形、他が

長胴形である。320・321 は底部、324・325 は口縁部を欠損している。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる318～320 と外反する321 があり、320 の口唇部には浅い一条の沈線が巡っている。調整は口縁部がヨコナデと共通するものの、体部外面が320・321 がハケメ、318・319 がヘラミガキとヘラナデと差が見られる。内面はハケメとヘラナデ調整がある。324 は小型の器形で、底部が木葉痕である。325 は磨滅しているが内外面ともハケメ調整を施している。体部外面には煤が付着し、胎土に金雲母を多く含んでいる。

322・323 は球胴甕である。322 の口縁部は頸部からくの字に外反して立ち上がり、口唇部は角ばっている。口縁部はヨコナデ、体部外面がハケメ、内面がハケメとヘラナデ調整である。323 は口縁部と底部を欠損している。器面は磨滅しているが、口縁部はヨコナデの上にハケメ調整が、体部外面が一部ハケメの上にヘラミガキ調整が施されている。内面はハケメとヘラナデ調整である。

328 はロクロ不使用の土師器片口である。口縁部は半分以上が欠損するものの、直に立ち上がっている。内外面ともハケメ調整を施しており、内面に粘土紐の積み上げ痕が明瞭である。胎土に小石と金雲母を多く含み、焼成は粗雑である。

329 はロクロ不使用の単口式甕である。器形に歪みがあり、全体が磨滅している。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面がハケメである。

326・327 は須恵器大甕の口縁部と底部破片である。326 の口縁部はロクロ成形痕があり、327 の底部は外面が平行叩き具痕、内面が平行当て具痕が施されている。

土製品は紡錘車が1点出土している。330 は一部を欠損するが径4.2 cm、厚さ1.9 cmの円錐台形状を呈している。中央部寄りに径8 mmの穿孔があり、焼成は良好で胎土に金雲母を多く含んでいる。

石製品は331の紡錘車がある。凝灰岩を丁寧に加工して作られており、一部欠損するが形状は円錐台形状で、径4.2 cm、厚さ3.7 cm、中央部に径8 mmの穿孔が施されている。

<時期> 時期は坏の特徴から奈良時代の7世紀後半に比定される。

(佐藤・高橋)

#### RA 272 竪穴住居跡 (第110～113図、写真図版53・237～239)

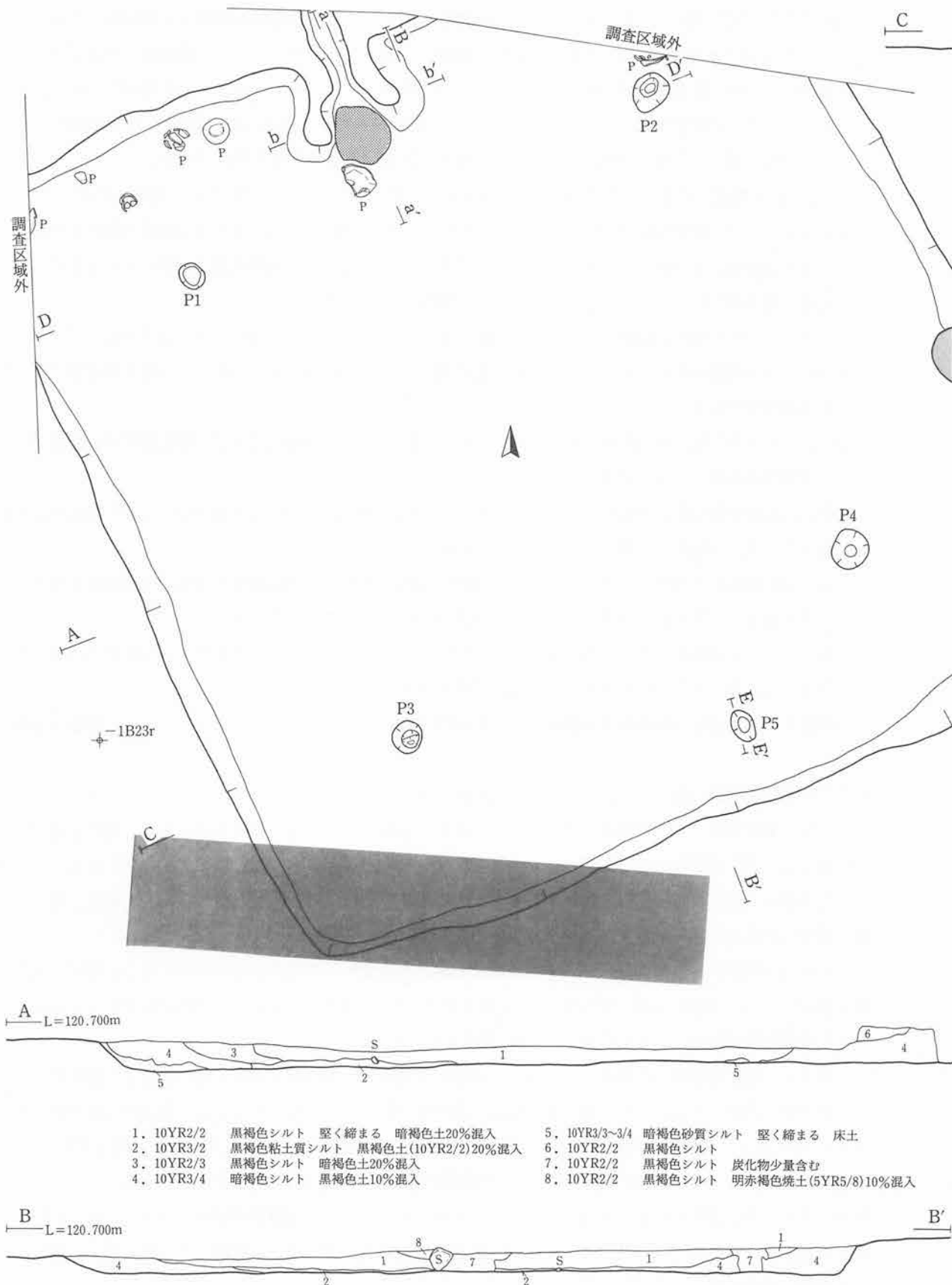
<位置・重複関係> 北側調査区中央部の2A区に位置し、西側は平安時代のRA 271 竪穴住居跡、南側がRA 171 竪穴住居跡2棟と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から(新) RA 171・271 竪穴住居跡→(旧) 本竪穴住居跡である。RA 171 と271 竪穴住居跡との新旧関係は不明である。検出はIV層上面から中位にかけ黒褐色土の広がりによって確認されている。

<平面形・規模> 2棟の竪穴住居跡と重複する事から平面形・規模の詳細が不明である。検出された規模は東辺7.13 m、西辺84 cm、南辺96 cm、北辺4.72 mで、北東・南東コーナーが隅丸を呈している。確認された規模や形状から、7.90×7.60 m前後の隅丸方形と思われる。

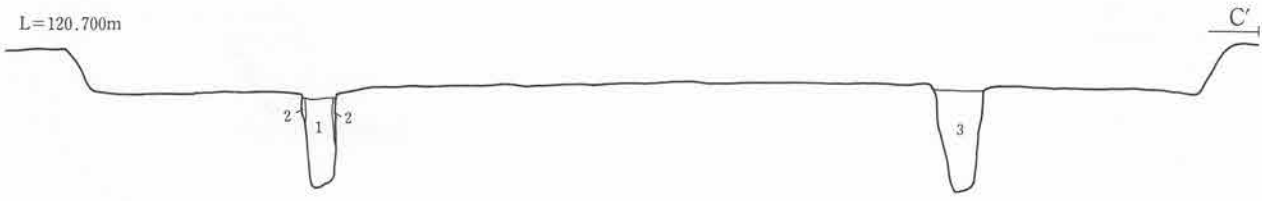
<埋土> 埋土は黒色～黒褐色シルト質土の6層に大別され、上位がブロック状の褐色土と微量の炭を含み全体に堅く締まっている。中位は1層に類似し焼土粒の混入が見られ、下位は炭と炭化物の含有量が多くなる。<壁・床> 壁は一部で崩落があるものの、床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁22 cm、北壁33 cmを測る。床は中央から東壁側の一部で礫層が露出しやや高まり、全体に堅く締まっている。南側で重複するRA 171 竪穴住居跡の床面とは約8 cmの比高がある。また、中央部東壁寄りの床上には不整形の焼土(規模1.05×0.73 m、厚さ3 cm)と炭(規模1.75×1.23 m、厚さ2 cm)が散在する事や埋土の様相から焼失家屋と思われる。

<柱穴・土坑> 柱穴状土坑はP 1～P 11の11基を検出している。支柱穴は本来4本柱と思われるが、

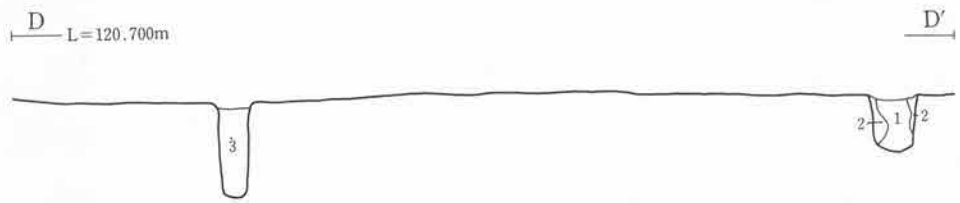
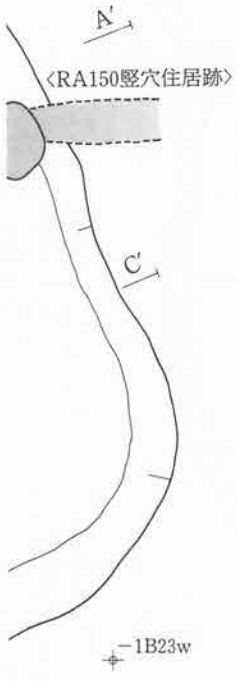




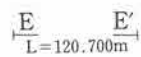
第106図 RA229竪穴住居跡



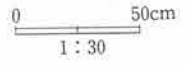
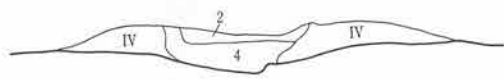
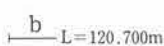
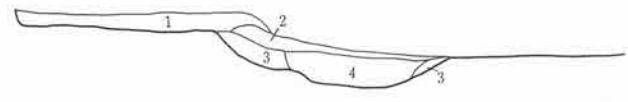
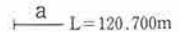
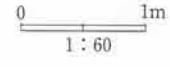
- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト 暗褐色土10%混入 炭化物・水酸化鉄少量含む
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 締まりなし 暗褐色土5%混入
- 3. 10YR3/4 暗褐色シルト



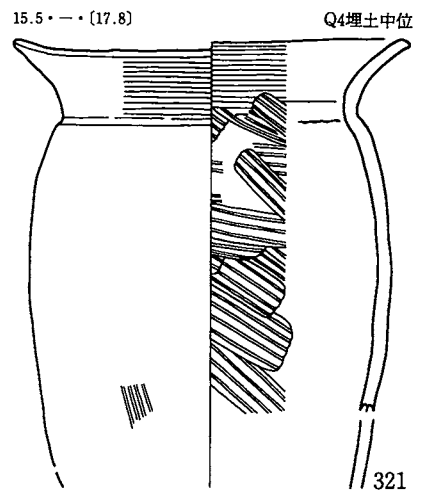
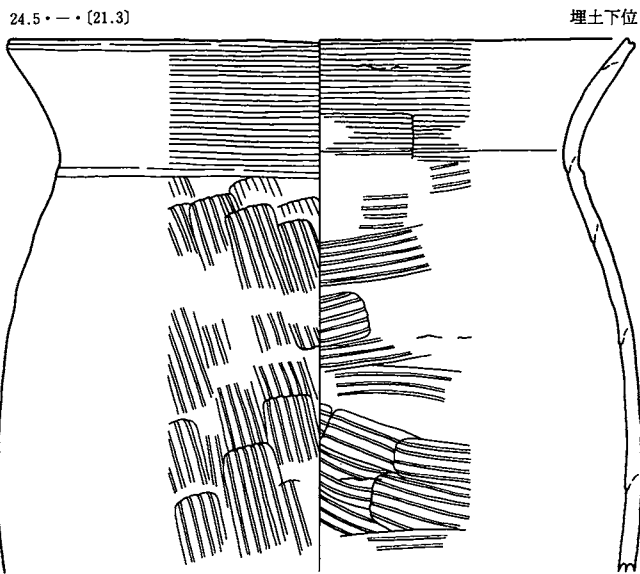
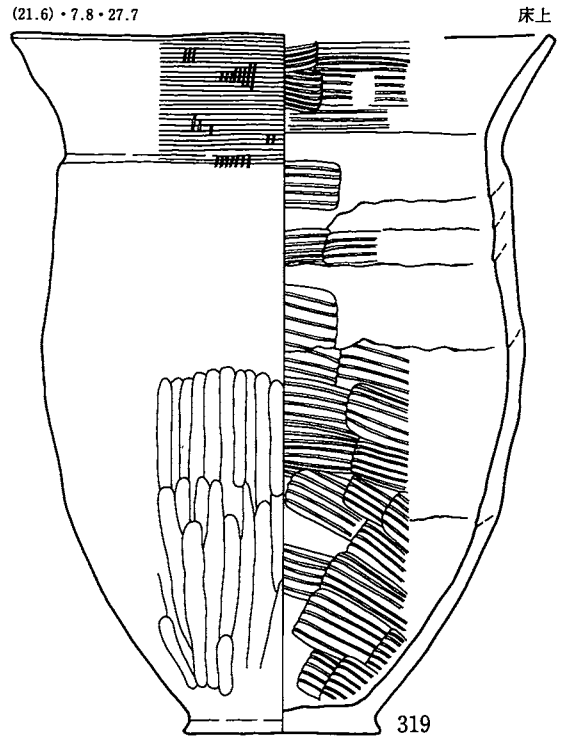
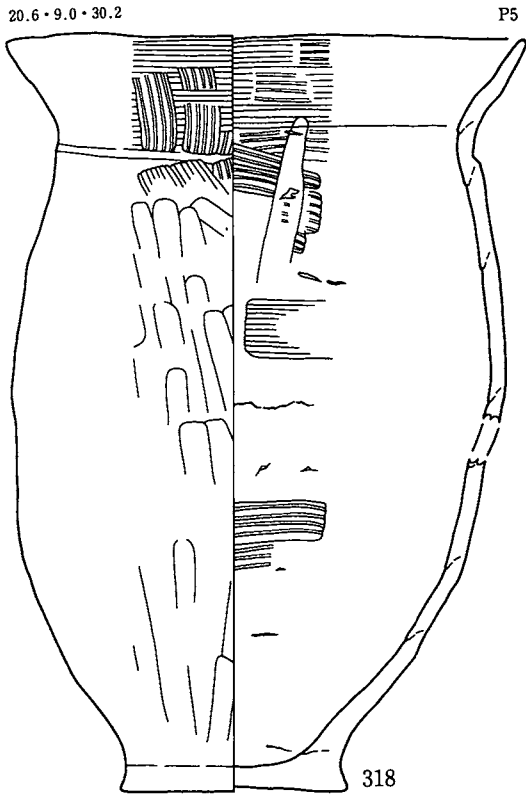
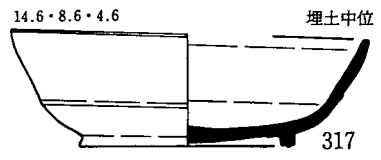
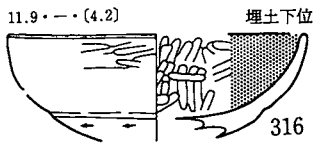
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 締まりなし 暗褐色土5%混入
- 2. 10YR3/4 暗褐色シルト
- 3. 10YR2/3 黒褐色シルト 暗褐色土10%混入 全体に砂を少量含む



- 1. 10YR2/1 黒色シルト

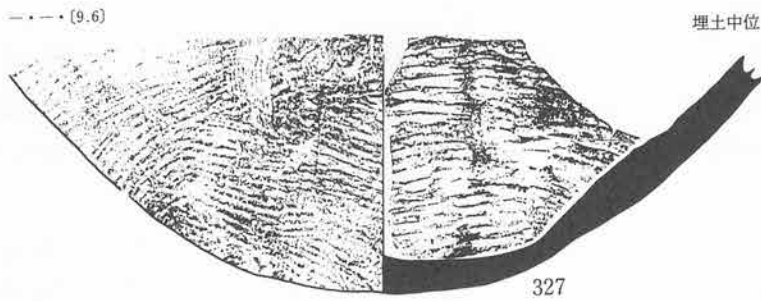
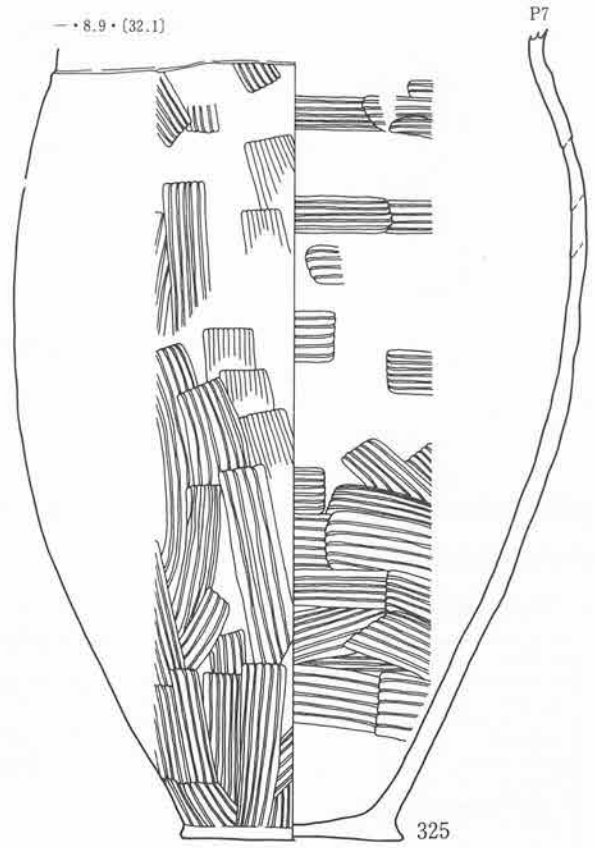
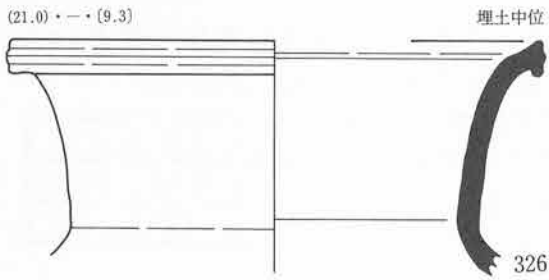
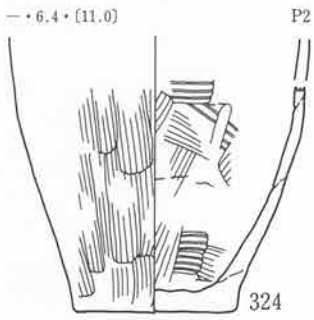
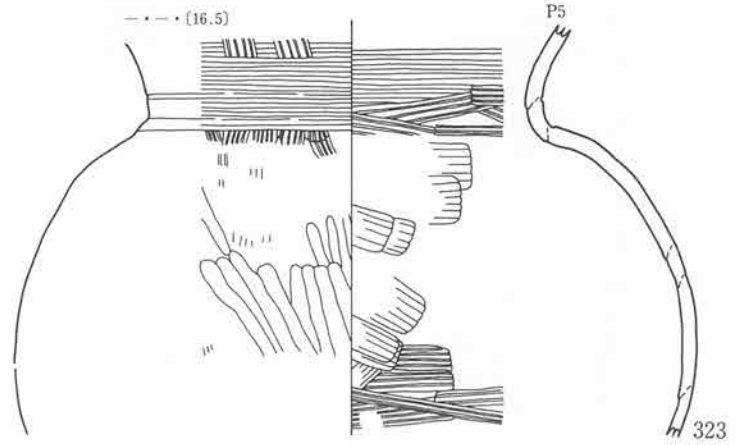
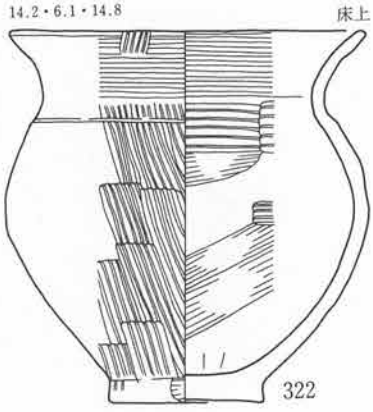


- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト 暗褐色土20%混入
- 2. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 炭化物・焼土粒少量含む
- 3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 堅く締まる 上部に焼土粒含む
- 4. 5YR4/6 赤褐色焼土



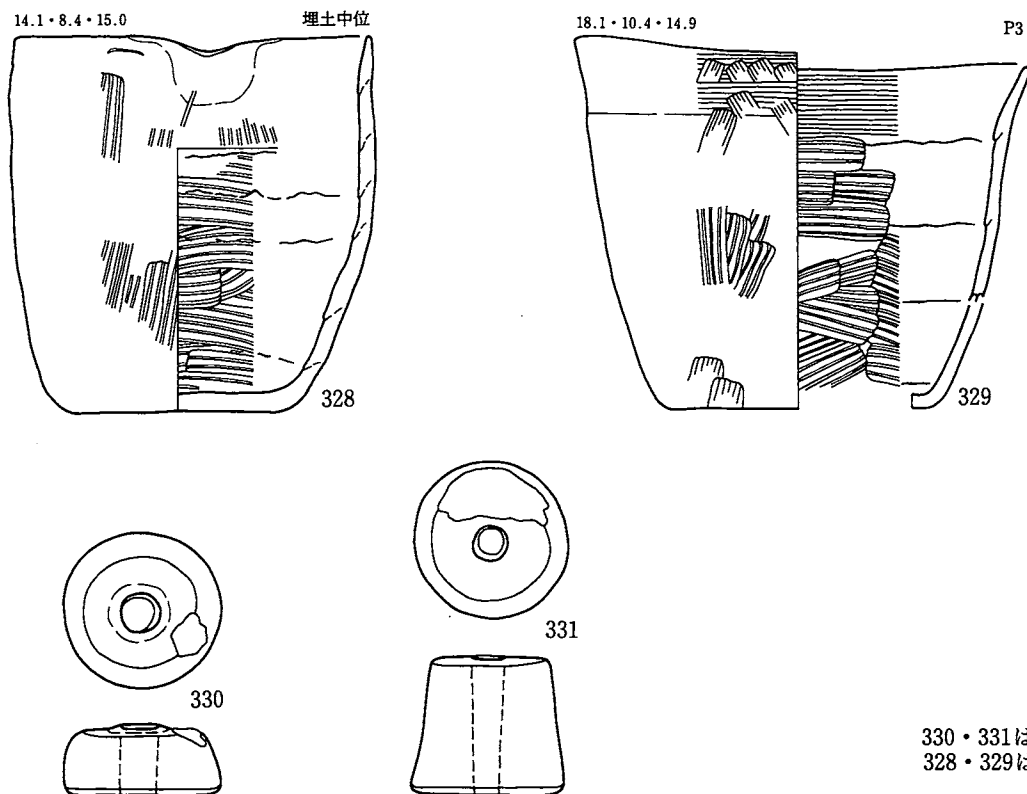
S=1/3

第107图 RA229竖穴住居跡出土遺物(1)



S=1/3

第108图 RA229竖穴住居跡出土遺物(2)



第109図 RA229竪穴住居跡出土遺物(3)

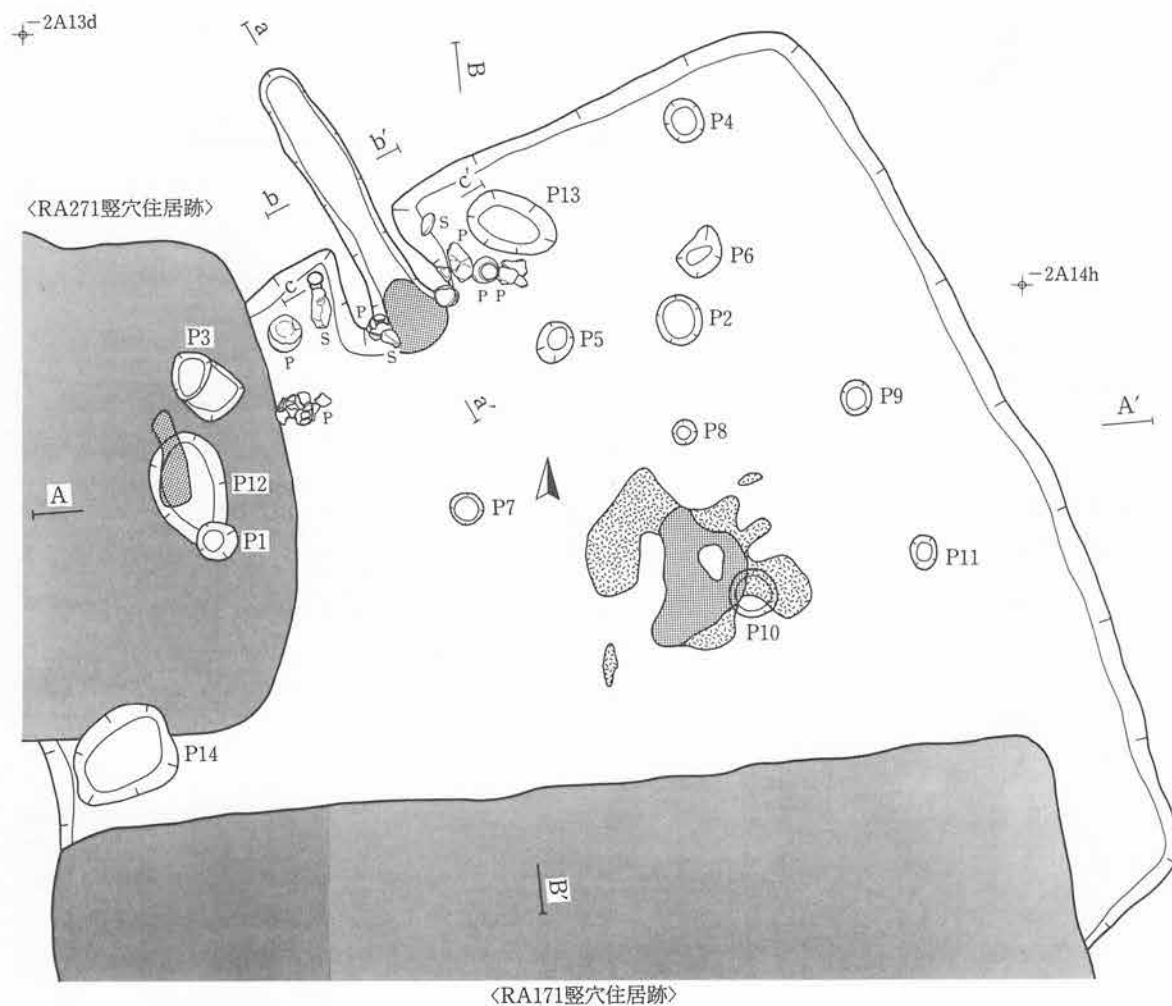
遺構の重複のためにP 1・P 2が現存しているだけである。平面形は円形で、埋土は黒褐色土の単層で、柱痕は確認されない。土坑はP 12～P 14の3基で、平面形はいずれも楕円形状である。埋土の堆積状況は柱穴状土坑と同様であるが、用途や性格は不明である。P 13土坑は位置的に貯蔵穴かと思われる。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
直径cm	33×30	41×36	61×42	36×31	35×27	37×30	27×26	21×20	28×25	38×38
深さcm	16	14	15	8	17	26	16	10	12	9
土坑No	P 11	P 12	P 13	P 14						
直径cm	27×21	89×59	73×47	83×72						
深さcm	8	24	6	25						

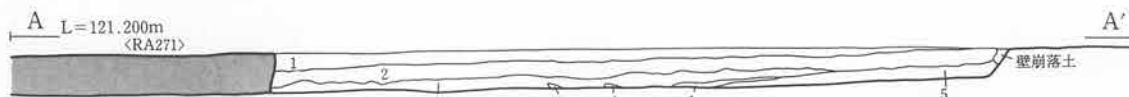
<カマド> 北壁のほぼ中央部に設置している。本体部は崩壊と削平されている事から天井部の詳細が不明である。袖部はIV層を削り出して造られているが、焚き口側に土師器の甕2個と亜角礫4個を芯材に使用している。その上を被覆したと思われる褐色粘土はすでに流失している。燃焼部は径60×43cmの楕円形状で、最大で厚さ9cmの焼土が形成されている。

煙道部は長さ1.34mを測り、燃焼部からやや下がり勾配で煙出し部へと続いている。上半部は削平されている事から、削り貫き式かは不明である。埋土は黒褐色土を主体とし、焼土粒と微量の炭を含み堅く締まっている。煙出し部の構造は削平のため構造が不明である。

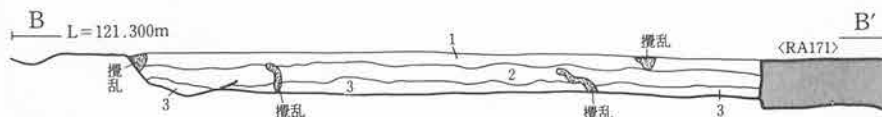
<遺物> 床上とカマド袖部周辺から土師器甕・球胴甕、土製品、鉄製品が出土している。332～339は口



0 1m  
1:60

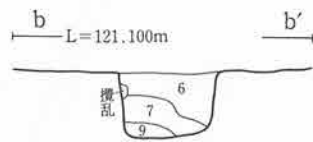
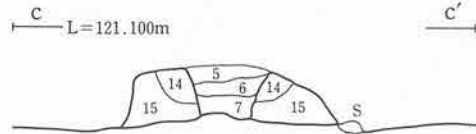
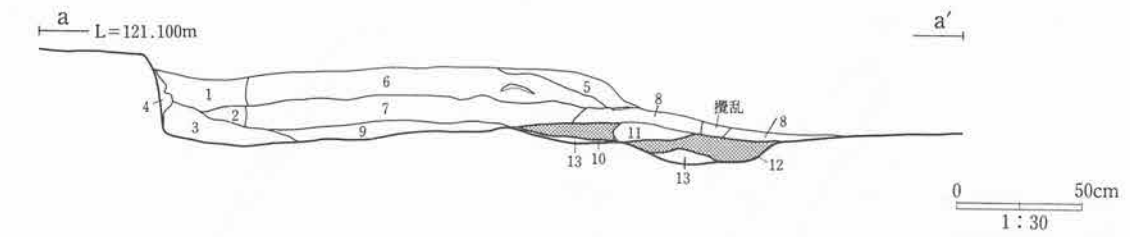


1. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで1%混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 1層に類似 褐色土を小ブロックで5%混入 焼土粒・炭を微量含む
3. 10YR3/2 2層に類似 炭を多量含む



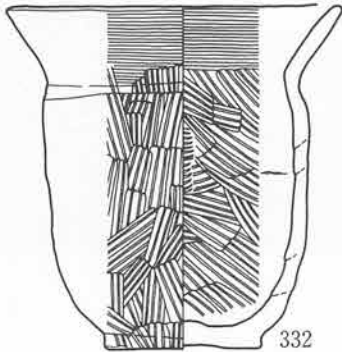
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を微量含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土ブロック(径0.5~2cm大)を3%含む 微量の炭と焼土粒を含む
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 締まりあり 2層に類似 炭を微量含む
4. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 炭を多量含む 指圧痕有り
5. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土と小ブロックで5%含む

第110図 RA272竪穴住居跡(1)



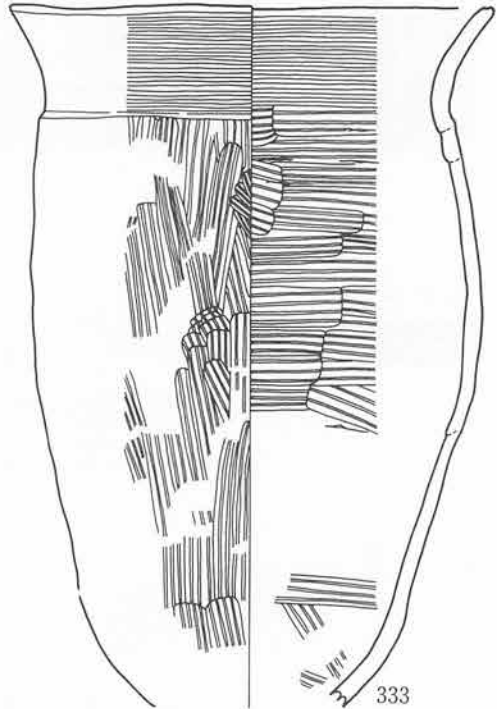
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 褐色土を小ブロックで1%混入 指圧痕有り
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性に富む 指圧痕有り
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土 褐色土を小ブロックで5%混入 指圧痕有り
4. 10YR4/4 褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土で汚れている
5. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 炭微量含む
6. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭微量・焼土粒含む
7. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで混入 焼土粒微量含む
8. 7.5YR4/4 褐色シルト質土 焼土粒と炭の混泥土 指圧痕有り
9. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・炭少量含む
10. 5YR3/2 暗赤褐色土 焼土粒との混泥土 指圧痕有り
11. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 焼土粒・炭多量含む 指圧痕有り
12. 5YR4/4 赤褐色焼土 炭微量含む 指圧痕有り
13. 10YR4/4 褐色シルト質土 堅く締まる IV層起源とする地山 焼成を受けている
14. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・炭多量含む 焼成を受けている
15. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる IV層起源とする地山 (削り出しの袖部)

13.3・6.1・13.7 床上/No.3



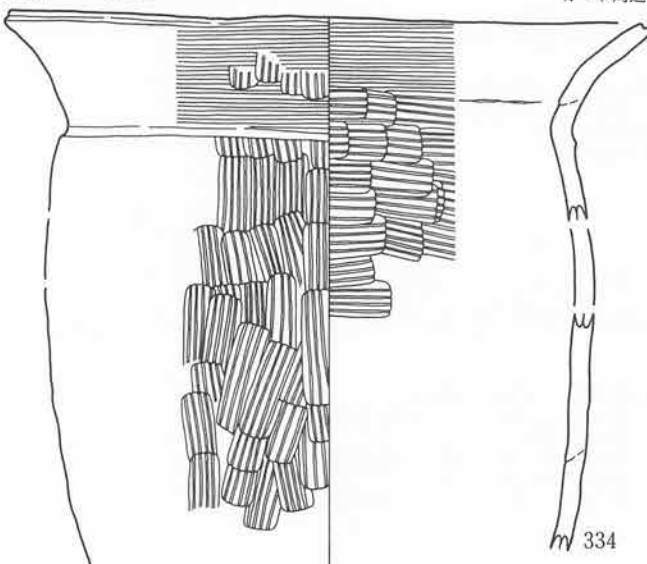
19.3・一・〔27.7〕

カマド東袖部



(25.5) 一・〔22.0〕

カマド周辺

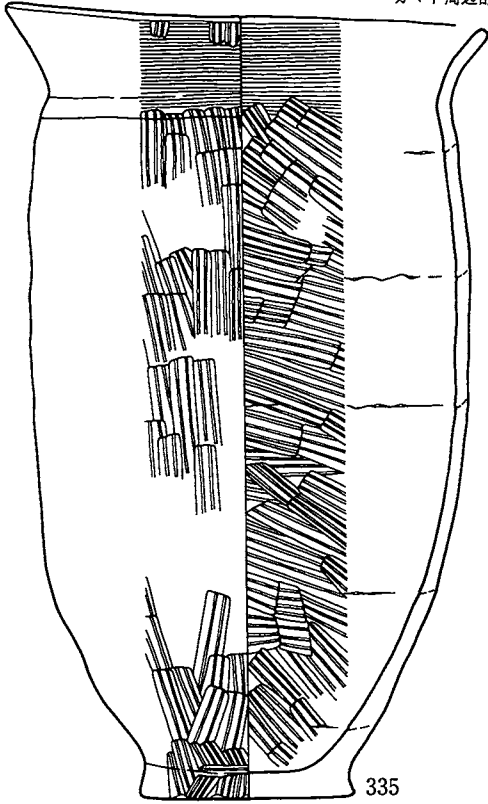


S=1/3

第111図 RA272竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)

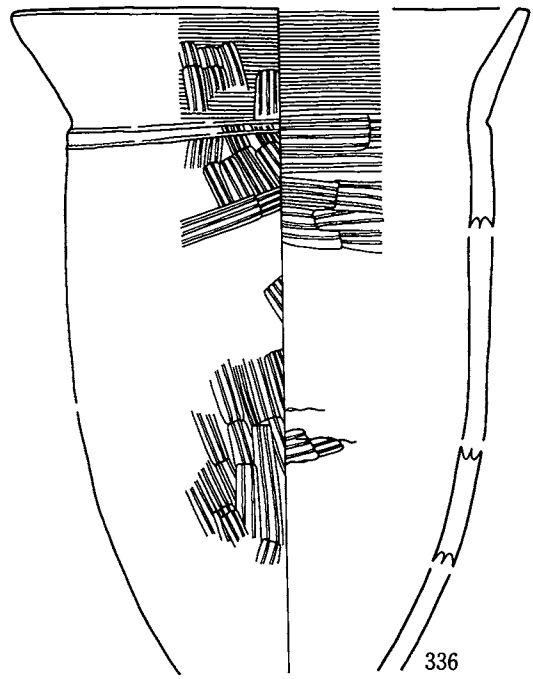
19.2・8.6・31.5

カマド周辺部



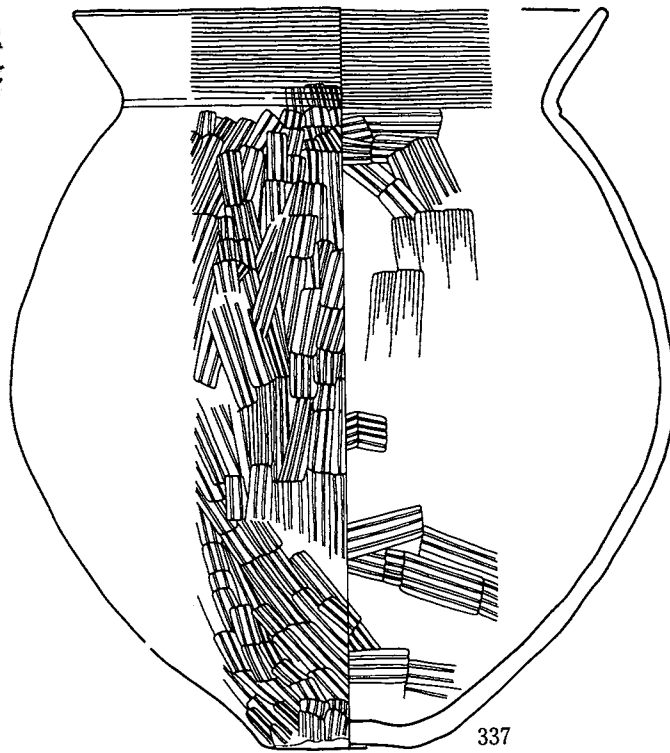
(20.6)・一・(26.4)

カマド西袖部



(21.3)・5.7・(29.2)

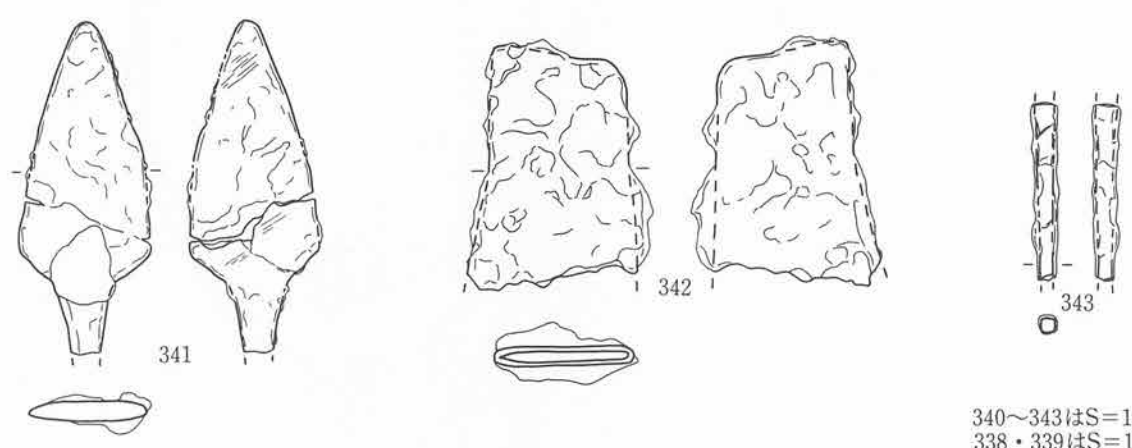
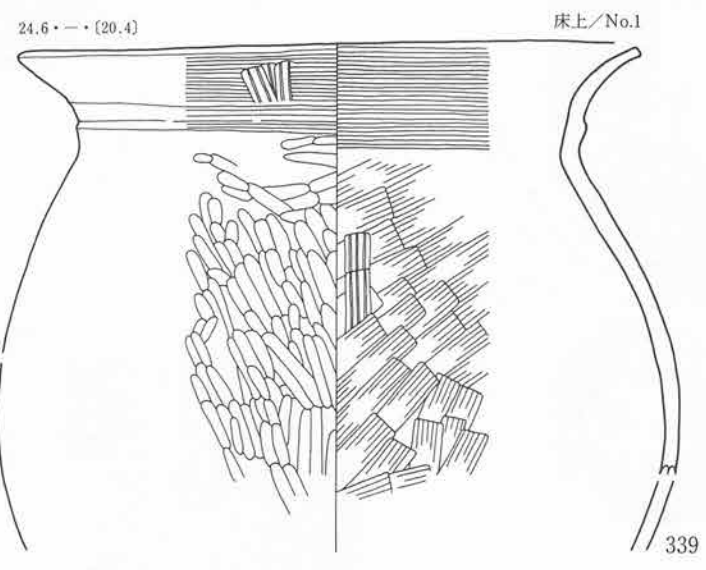
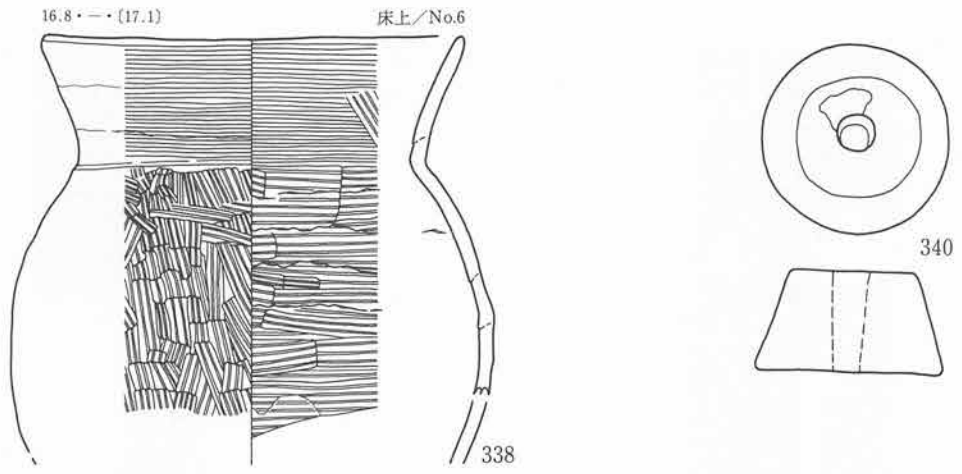
床上/No.7



S=1/3

第112図 RA272竪穴住居跡出土遺物(2)





第113図 RA272竪穴住居跡出土遺物(3)

クロ不使用の土師器甕（A II群）で、333～336 は長胴形、337～339 が球胴形の器形である。332 は床上から出土した完形品で、口縁部は頸部から外傾して立ち上がっている。口縁部はヨコナデ、体部内外面はハケメ調整である。また、内面の底には煮汁と思われる付着物が見られる。長胴甕の口縁部は外傾する 336、頸部からくの字状に外反する 333～335 があり、333・334 の口唇部には沈線が一条巡っている。器面調整は口縁部がヨコナデで、一部に縦方向のハケメ調整を施したものもある。体部内外面はハケメ調整を基調としている。335 の底部は木葉痕である。

337 の球胴甕は頸部に浅い段が巡り、口縁部は強く外反している。338・339 は底部を欠損している。口縁部はヨコナデ、体部外面は 337・338 がハケメ、339 が丁寧なヘラミガキ調整を施している。338 の体部下半には粘土紐の積み上げ痕が見られる。

340 は土製紡錘車で径 5 cm、厚さ 2.6 cm、中央に径 4～5 mm の穿孔がある。

鉄製品は 3 点出土している。341 は鉄鏃で現存長 8.9 cm、最大幅 3.5 cm、厚さ 2.5 mm である。342 は器種が不明で現存長 6.5 cm、最大幅 4.3 cm、厚さ 2.5 mm を測る。343 は両端部を欠損した釘で径 4 mm、現存長 4.8 cm である。

<時期> 甕の特徴から奈良時代 8 世紀に比定される。

(高橋)

#### R A 307 竪穴住居跡（第 114～117 図、写真図版 54・239～241）

<位置> 西側調査区北端の - 1 - B 区に位置しており、南西コーナー側で R D 640 土坑が近接する。IV 層上面で黒色土の広がりによって検出している。

<平面形・規模> 北西コーナー側と中央部西寄りに電柱があるために詳細は不明である。平面形は検出された範囲から隅丸方形を呈すると思われ、規模は一辺 6.75 m を測る。

<埋土> 5 層に大別され、上位は黒色シルト質土、下位が褐色土を小ブロックで含む黒褐色シルト質土で構成されている。全体に水酸化鉄の混入が多く、堅く締まっている。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 南壁側の一部で緩やかな他は、床面から直立気味に立ち上がっている。壁高は東壁 22 cm、西壁 12 cm、南壁 25 cm、北壁 32 cm である。床は中央部付近で多少凹凸があり、南西壁寄りに砂礫層上面が一部露出している。貼り床は確認されていない。

<柱穴> 柱穴状土坑は P 1～P 9 の 9 基検出しており、位置的に P 1～P 6 が主柱穴と考えられる。平

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
直径cm	42×37	30×30	46×43	44×44	46×38	32×22	31×26	21×19	92×58
深さcm	67	20	62	67	24	56	28	28	10

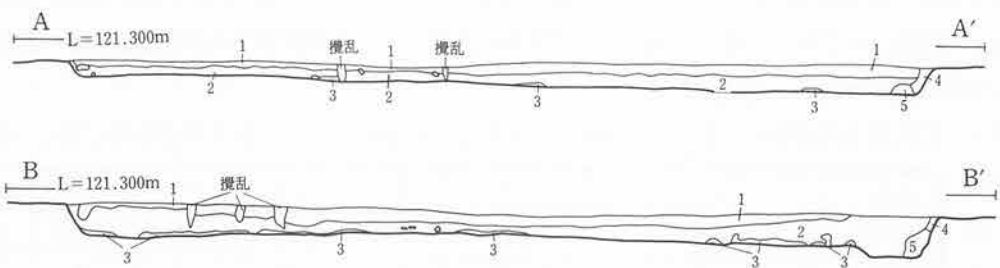
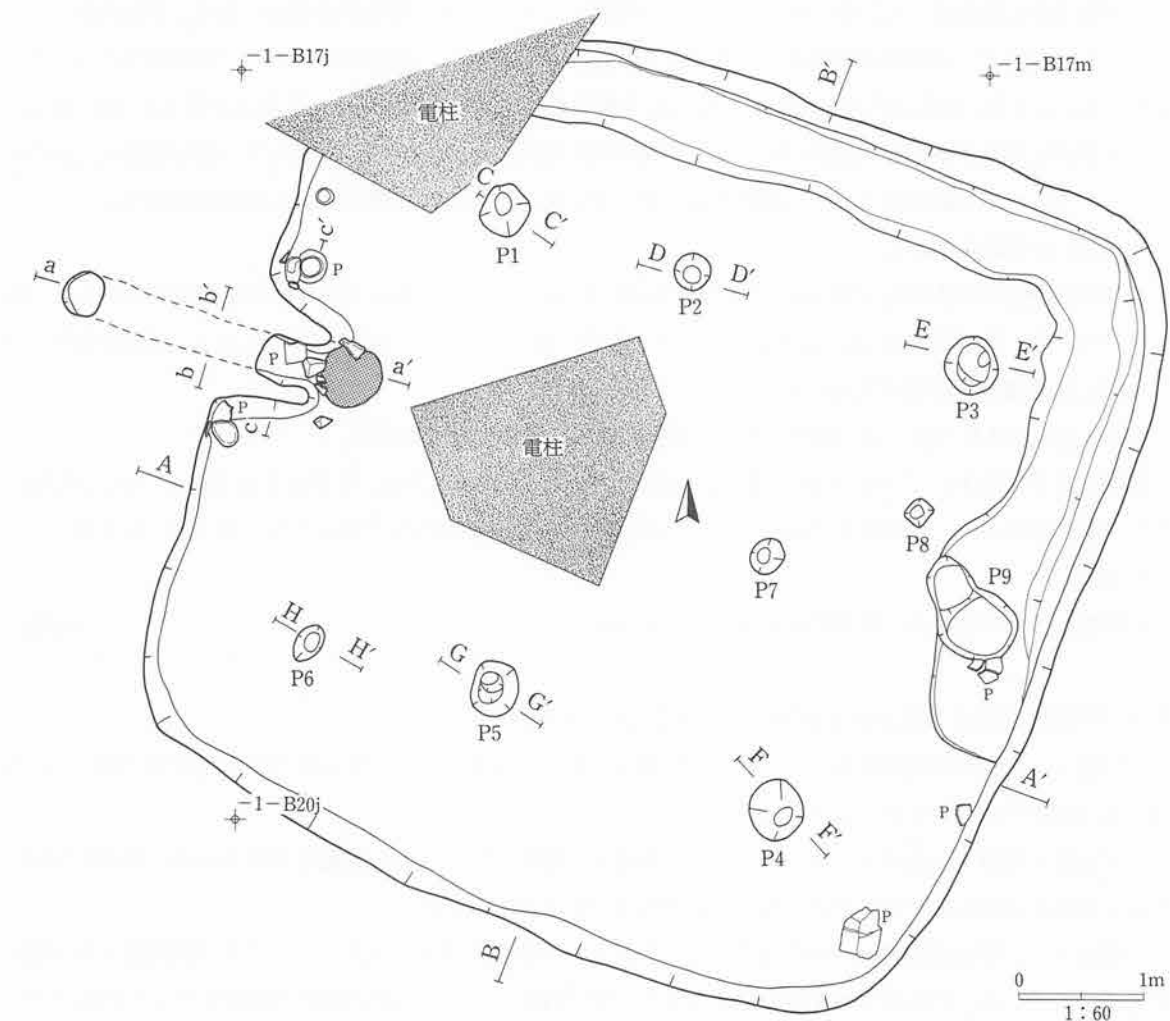
～P 4、長方形が P 5、楕円形が P 6 である。柱痕は 5 基で確認され、径が 15～20 cm 前後である。

<周溝> 周溝は北壁側と東壁の中部付近まで検出されている。上幅は 50～最大 80 cm、深さ 6～9 cm で壁際に沿って巡り、底面は平坦である。

<カマド> 西壁のほぼ中央部付近に設置している。本体部は削平を受けていることから上部構造は不明である。IV 層を削りだして作られた袖部は芯材に垂角礫を据えている。燃焼部は径 50×48 cm、厚さ 10 cm の楕円形焼土が形成され、上部に本体部に使用したと思われる垂角礫が散在している。

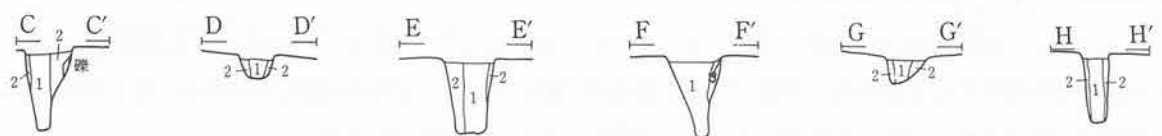
割り貫き式の煙道部は長さ 1.44 m を測り、下がり勾配で煙出し部に延びている。煙出し部は径 36×31 cm、深さ 37 cm の円形土坑が掘り込まれている。上部構造は削平され不明である。

<遺物> カマド周辺の床上と埋土下位から土師器杯・甕が出土している。344～347 はクロ不使用の土



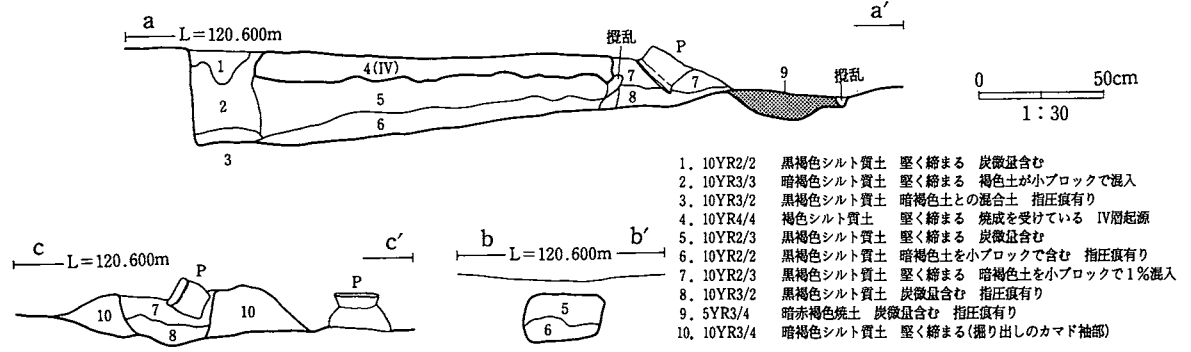
- |            |          |       |                |
|------------|----------|-------|----------------|
| 1. 10YR2/1 | 黒色シルト質土  | 堅く締まる | 全体に水酸化鉄を含む     |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 褐色土を小ブロックで1%混入 |
| 3. 10YR3/3 | 暗褐色シルト質土 | 堅く締まる | 全体に水酸化鉄を含む     |
| 4. 10YR3/4 | 暗褐色シルト質土 | 堅く締まる | 壁崩落土 IV層起源     |
| 5. 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる | 暗褐色土1%混入       |

C-C'~H-H' L=121.000m

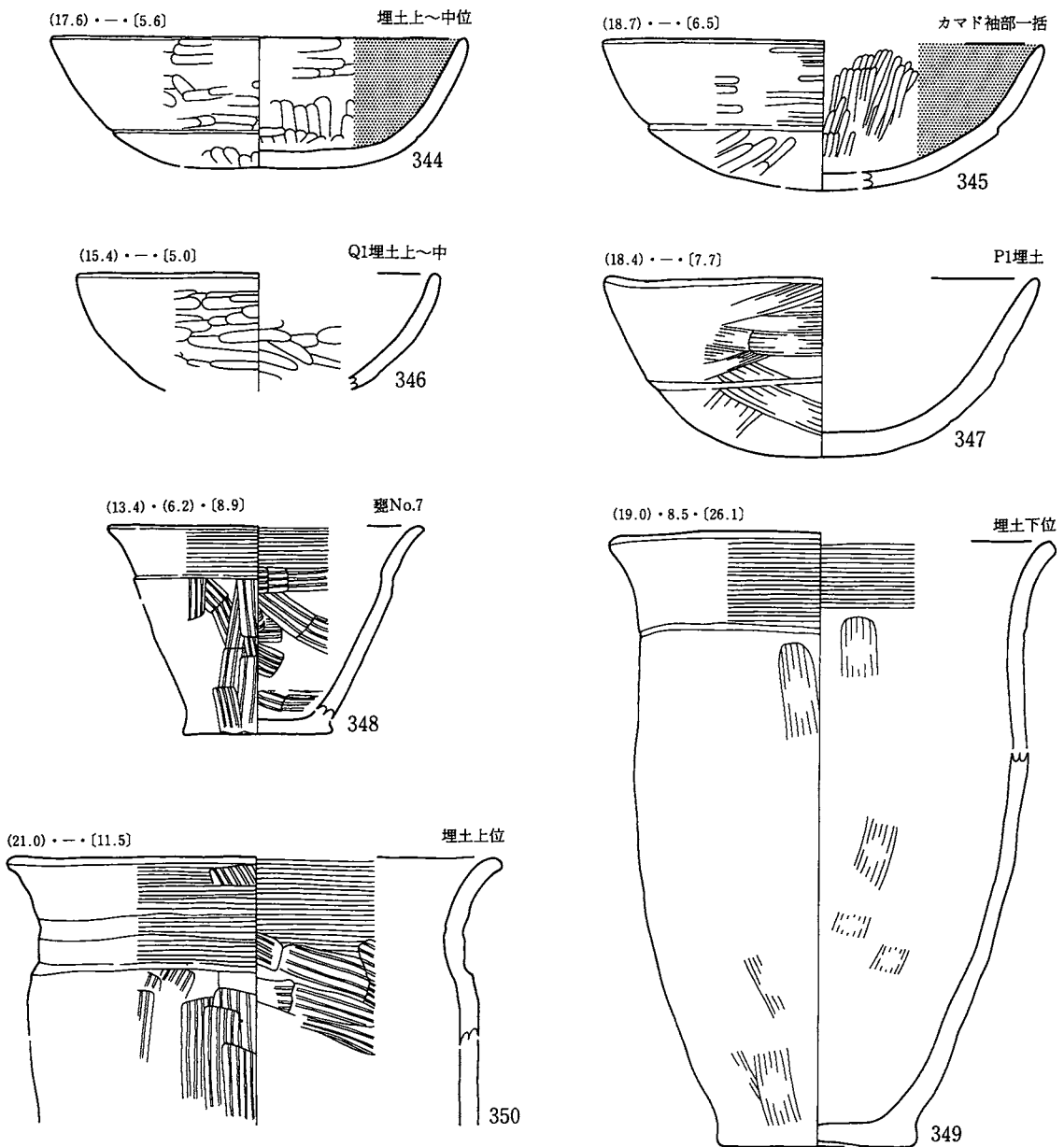


- |            |          |                   |                 |
|------------|----------|-------------------|-----------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 褐色土が小ブロック状で混入(柱痕) | 指圧痕有り           |
| 2. 10YR3/2 | 黒褐色シルト質土 | 堅く締まる             | 褐色土との混合土(掘り方埋土) |

第114図 RA307竪穴住居跡(1)



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭微塵含む
2. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土が小ブロックで混入
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 暗褐色土との混合土 指圧痕有り
4. 10YR4/4 褐色シルト質土 堅く締まる 焼成を受けている IV層起源
5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭微塵含む
6. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 暗褐色土を小ブロックで含む 指圧痕有り
7. 10YR3/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土を小ブロックで1%混入
8. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 炭微塵含む 指圧痕有り
9. 5YR3/4 暗赤褐色焼土 炭微塵含む (撥り出しのカマド袖部)
10. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる (撥り出しのカマド袖部)

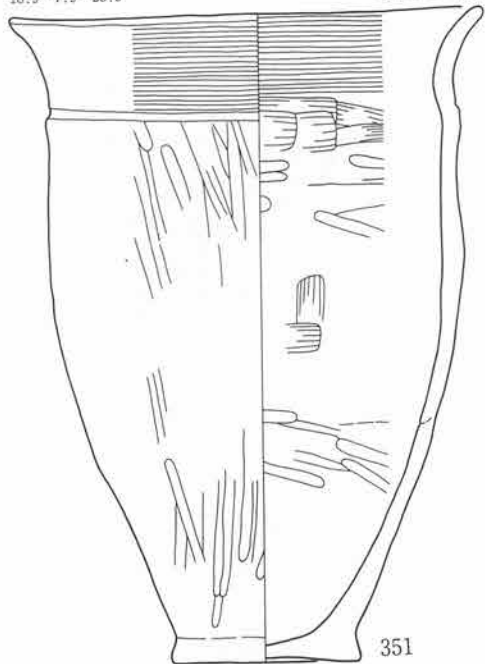


第115図 RA307竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)

S=1/3

18.9・7.9・25.9

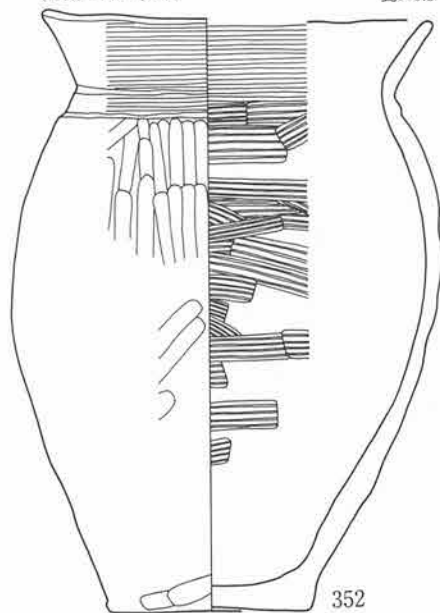
埋土中～下位



351

(15.5)・7.9・(23.9)

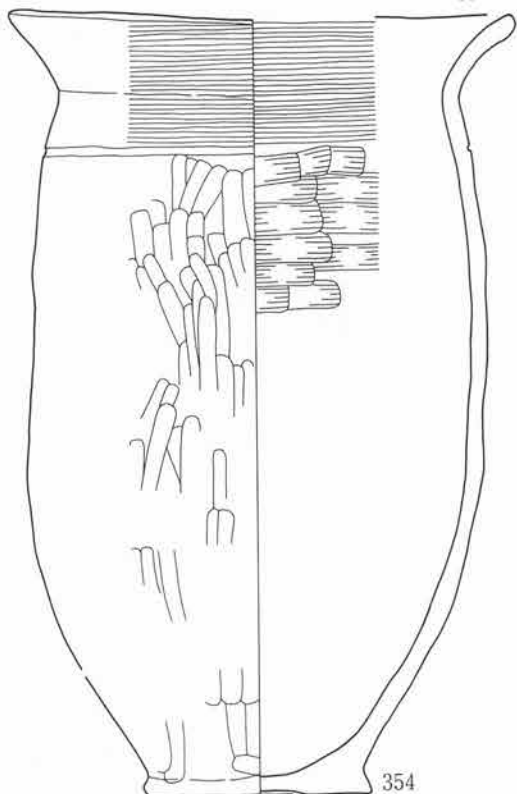
壺No.3



352

20.3・8.8・31.2

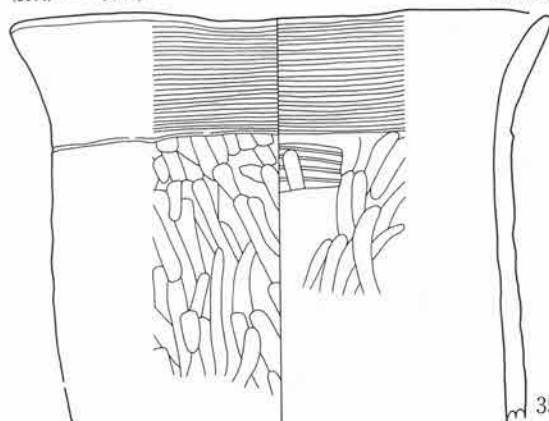
壺No.6



354

(21.4)・--・(15.6)

壺No.5



353

--・6.6・(3.2)

埋土上位

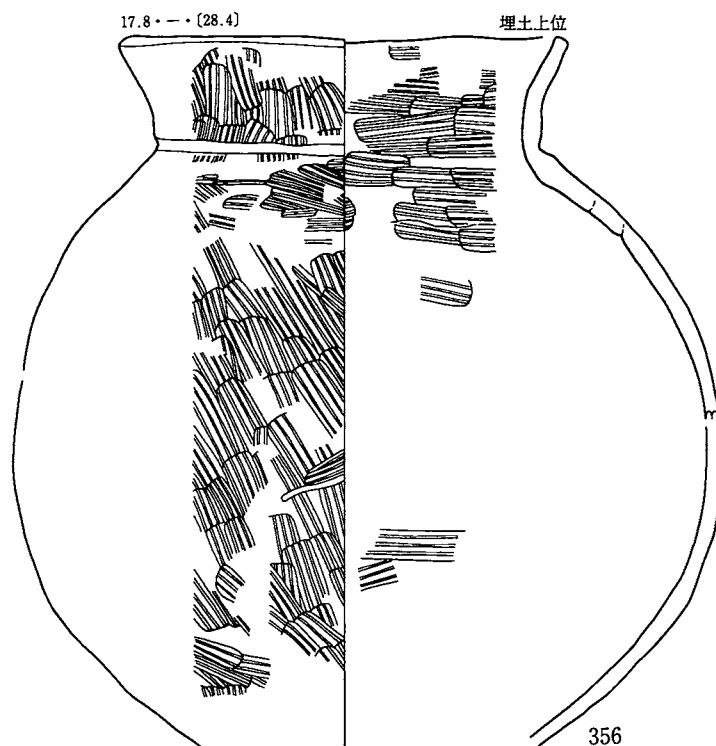


355



S=1/3

第116図 RA307竪穴住居跡出土遺物(2)



S=1/3

第117図 RA307竪穴住居跡出土遺物(2)

師器坏である。344・345・347 (I A a 群) は丸底で、体部下半に浅い段が巡っている。346 (I A b 群) の底部は一部欠損しているが丸底で段が無い。口縁部は外傾して立ち上がる 334・345・347、内湾する 346 である。体部外面は細いヘラミガキ調整を施した 344~346、ヘラナデ調整の 347 がある。内面は剝落して不明な 347 を除き、放射状の細いヘラミガキ調整後に黒色処理をしている。胎土に砂の混入が多いのは 347 である。

348~356 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) で、348 は小型の器形、349~353 は長胴形、356 は球胴形である。口縁部は頸部から外反する 349~351・354、外傾する 348・352・353 がある。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ調整で、350 の外面の一部に縦方向のハケメが見られる。体部外面はハケメ調整が 348・350、ヘラナデ調整が 349、縦方向のヘラケズリ調整が 351・354 である。内面はハケメ、ヘラナデ、一部にヘラミガキ調整を施している。355 は木葉痕の底部破片である。

356 は底部を欠損した球胴甕である。頸部には浅い段が巡り、口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり上半部で外傾している。口縁部と体部内外面の器面調整はハケメ調整である。体部内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭で、胎土に砂と金雲母を含んでいる。

<時期> 坏や甕の特徴から奈良時代 8 世紀に比定される。

(高橋)

## (2) 平安時代

平安時代の竪穴住居跡は、東側調査区から28棟、北側調査区から26棟、西側調査区から4棟、南側調査区から3棟検出されている。

### R A 047 竪穴住居跡 (第118～120図、写真図版68・69・241・242)

<位置・重複関係> 東側調査区の一1B区北寄りに位置している。他の遺構との重複関係はなく、IV層上面で検出されている。<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈し、規模は6.46×6.34mである。

<埋土> 埋土は5層に大別され、上層は粘性のある黒褐色シルト質土で構成され、下層がブロック状の褐色土を含む黒褐色シルト質土である。壁際には暗赤褐色焼土のレンズ状の堆積が見られる。

<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は東壁24cm、西壁38cm、南壁27cm、北壁29cmを測る。床は小起伏が見られ、カマド焚き口周辺部が堅く締まっている。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> 西壁の中央部やや南寄りに設置している。本体部は崩落している事から上部構造が不明である。両袖部は暗褐色シルト質土で造られているが、芯材などの構築材は検出されない。燃焼部は径54×49cmの円形状の焼土が厚さ10cmで形成されている。支脚は確認されていない。

煙道部上半部は削平されているが、側壁の一部に垂角礫を使用した掘り込み式である。長さは1.64mを測り、燃焼部から下がり勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径約46×45cm、深さ31cmの円形状土坑が掘り込まれている。埋土は黒褐色シルト質土に炭と小礫を含んでいる。

<遺物> カマド周辺の床上と焚き口部から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。357・358はロクロ使用の土師器坏である。357は口縁部が体部上半から外傾して立ち上がる器形で、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理(A I a群)を施している。底部の切り離しは回転糸切りである。

358は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器(A II a群)で、底部の切り離しが回転糸切りである。

360は須恵器坏(B II a群)の底部破片で、底部の切り離しは回転糸切りである。他に図面掲載しなかったが底部破片で4点ほど出土している。359は体部下半～底部破片の須恵器長頸瓶である。胎土に砂と石の混入が多く見られ、底部は回転糸切りである。

361・362はロクロ不使用の土師器甕で、361が小型、362が長胴形の器形である。361の口縁部は短く頸部から外反して立ち上がり、内外面がヨコナデ調整を施している。体部内外面はハケメ、底部がヘラナデ調整である。362は体部下半～底部を欠損した長胴甕である。口縁部はヨコナデ調整で、頸部からくの字状に外反し口唇部に浅い一条の沈線が巡っている。胎土は石の混入が多く、焼成は良くない。体部の器面調整は内外面ともハケメ調整である。

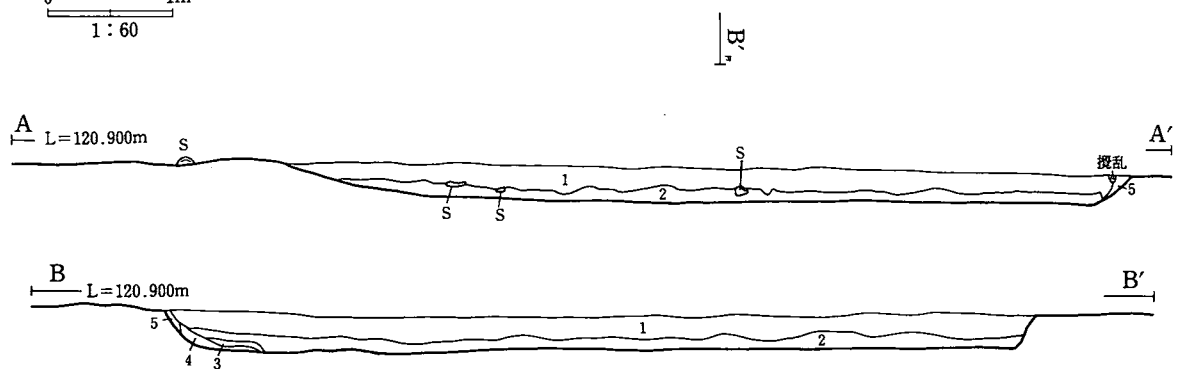
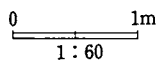
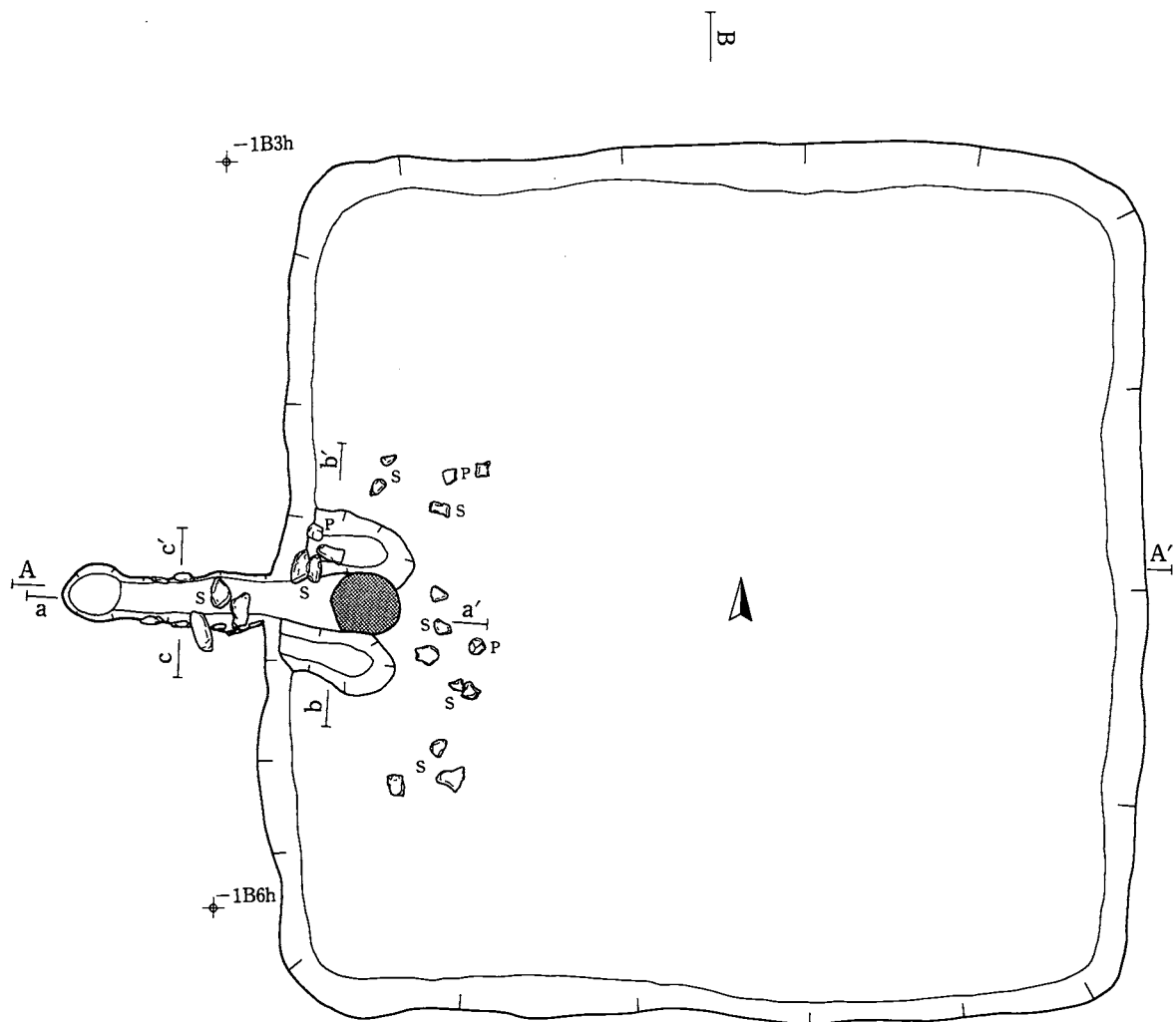
363・364は須恵器甕の体部と思われる破片で、外面は平行叩き具痕、内面は放射状当て具痕である。

<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。

(高橋)

### R A 107 竪穴住居跡 (第122図、写真図版55・242)

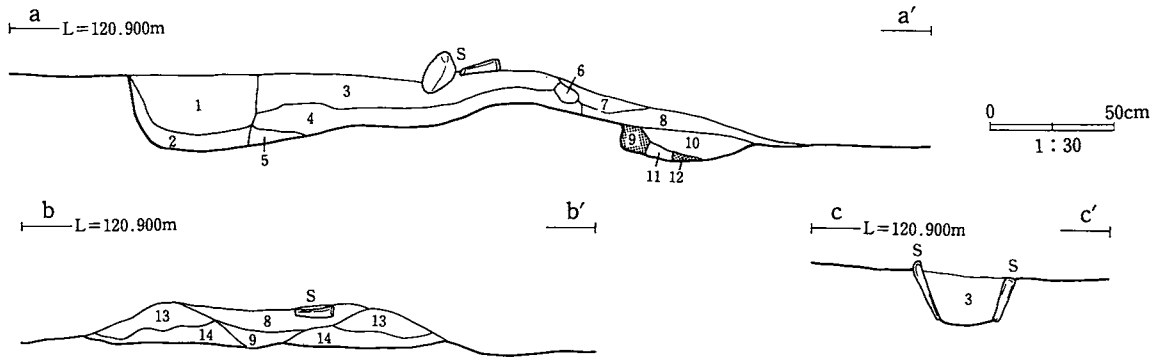
<位置・重複関係> 東側調査区北端部の一2B区～一1B区に亘って位置する。他の遺構との重複関係はない。IV層上面で黒褐色土の落ち込みで検出している。<平面形・規模> 平面形は隅丸台形状を呈しており、規模は4.90×4.40mを測る。北辺側はやや張り出している。



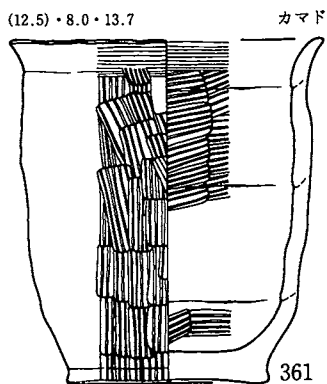
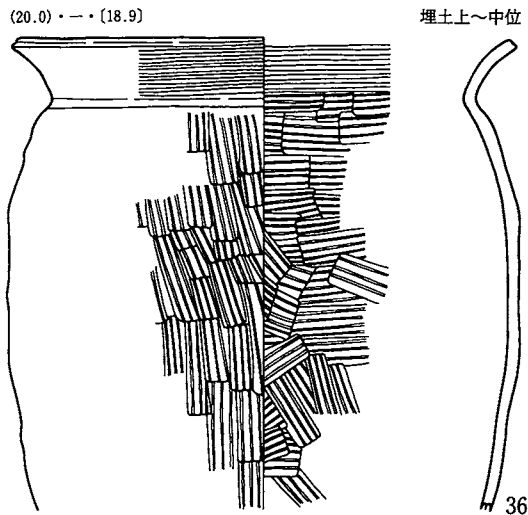
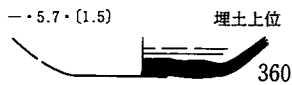
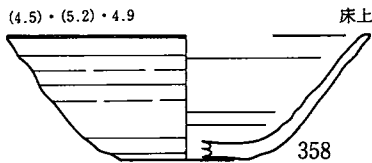
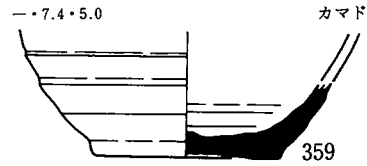
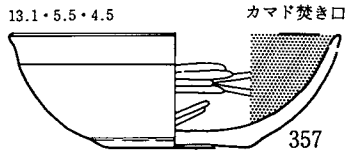
- |            |          |                         |
|------------|----------|-------------------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 粘性あり                    |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 褐色土(10YR4/6)ブロック状に5%混入  |
| 3. 5YR3/6  | 暗赤褐色焼土   | 粘性あり 黒褐色土(10YR2/2)10%含む |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 粘性ややあり                  |
| 5. 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 粘性弱                     |

第118図 RA047竪穴住居跡(1)



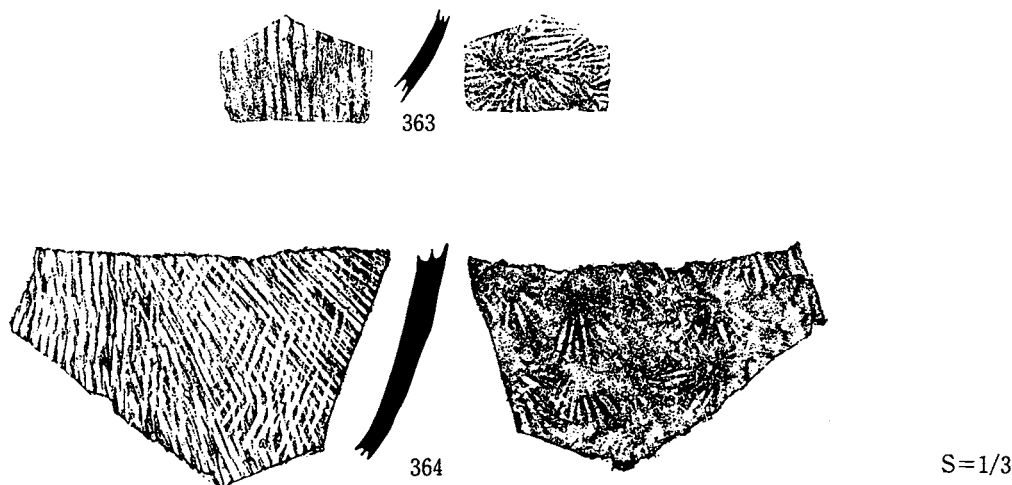


- |  |  |
|--|--|
| 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土(10YR3/4)上部に20%混入炭微量混入 | 7. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる 焼土粒微量混入         |
| 2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土                                  | 8. 7.5YR3/4 暗褐色シルト質土 赤褐色焼土粒(5YR4/8)50%含む 炭1%混入 |
| 3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土                                  | 9. 5YR4/6 赤褐色焼土                                |
| 4. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性に富む 赤褐色焼土(5YR4/8)30%混入 指圧痕あり   | 10. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性あり 指圧痕あり                |
| 5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 暗褐色土(10YR3/4)10%混入 圧痕あり     | 11. 5YR3/4 暗褐色砂礫                               |
| 6. 5YR4/6 赤褐色焼土                                      | 12. 5YR4/8 赤褐色焼土                               |
|  | 13. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる 焼土粒5%含む        |
|  | 14. 10YR4/3 暗褐色砂土                              |



S=1/3

第119図 RA047竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



第120図 RA047竪穴住居跡出土遺物(2)

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする7層に大別される。主体を占める黒褐色土は中央部にレンズ状に堆積し、ブロック状の褐色土を含んでいる。壁際の3層には小礫が混入している。<壁・床> 壁は北側が直立し、他が床面から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁24cm、西壁32cm、南壁28cm、北壁29cmである。床は多小凹凸が見られるが平坦で、強く締まっている。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁の南東コーナー寄りに設置している。本体部は崩落し、上部を被覆した粘土も流失し現存していない。芯材には長さ24~30cm、幅8~15cmの亜角礫を使用している。燃焼部は径54×38cmの楕円形状の焼土が形成され、厚さが6cmである。

煙道部は上半部が削平されていることから、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。燃焼部から1.34m上り、そこから緩やかな下がり勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径28×26cm、深さ32cmの円形状土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

<遺物> 床上とカマド右袖周辺から土師器坏、須恵器坏が出土している。365~371はロクロ使用の土師器坏で、365・371の口縁部が欠損している。365は(A I e群)内面の磨滅が著しいが放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

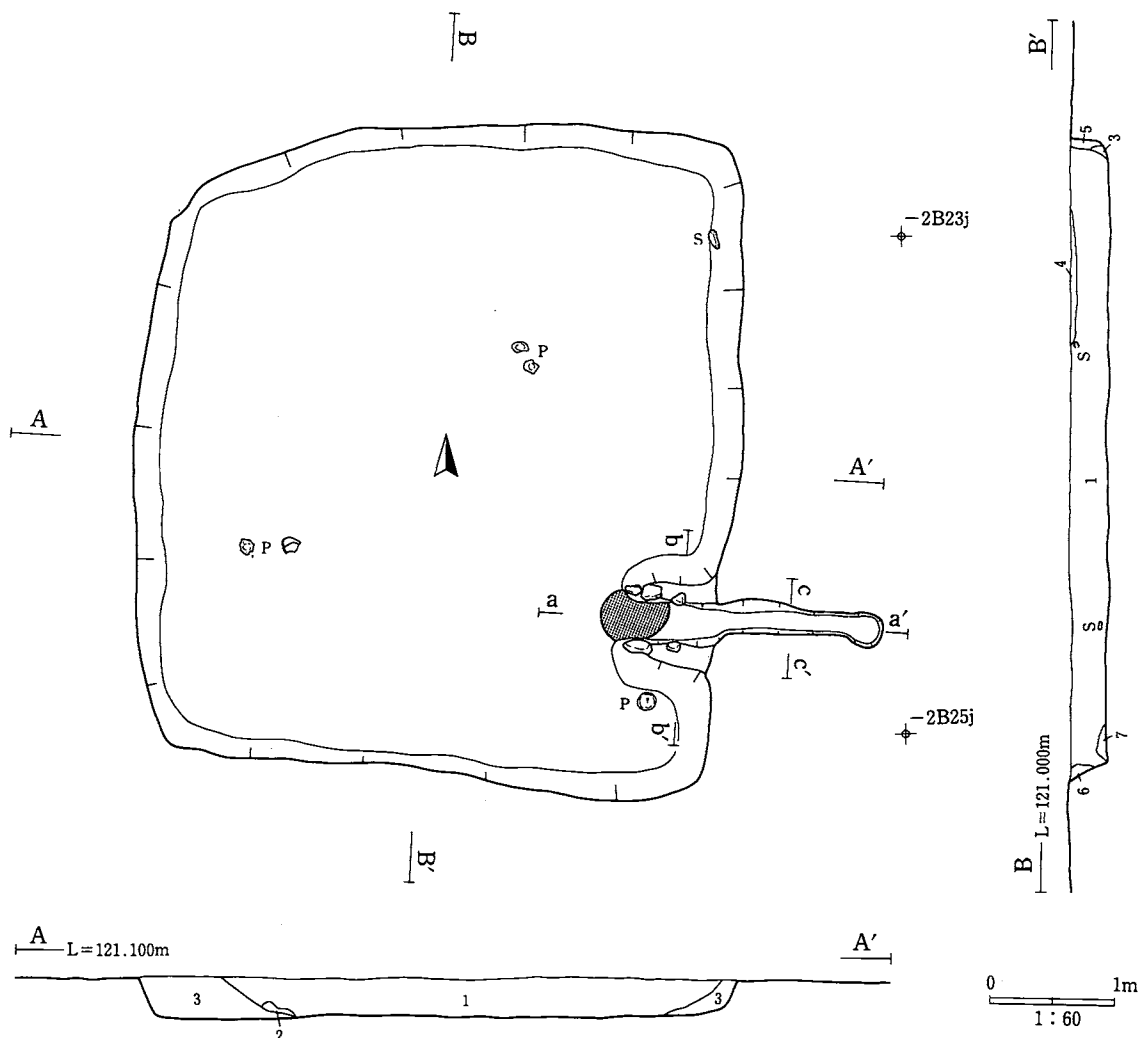
366~370は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器(A II群)で、底部の切り離しは回転糸切りが366・367(A II a群)、回転ヘラ切りが368~370(A II c群)、再調整されている371(A II d群)である。口縁部は体部から外傾して立ち上がるものが多く、焼成は全体に良好である。

372・373は須恵器坏(B II群)である。底部の切り離しは372が回転糸切り(B II a群)、切り離した後に再調整(B II b群)を施した373がある。

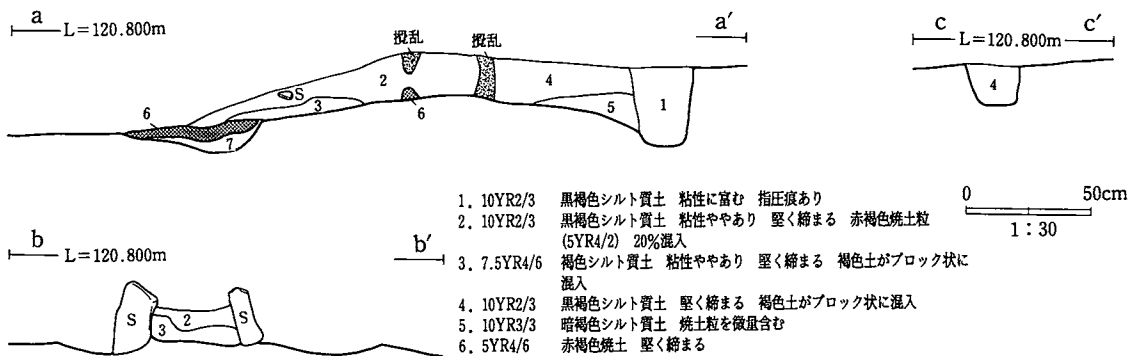
図面掲載しなかったが、ロクロ不使用の土師器甕の口縁部と体部破片も出土している。口縁部は短く外反し立ち上がり、体部外面にハケメ調整が見られる。

<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。

(高橋)

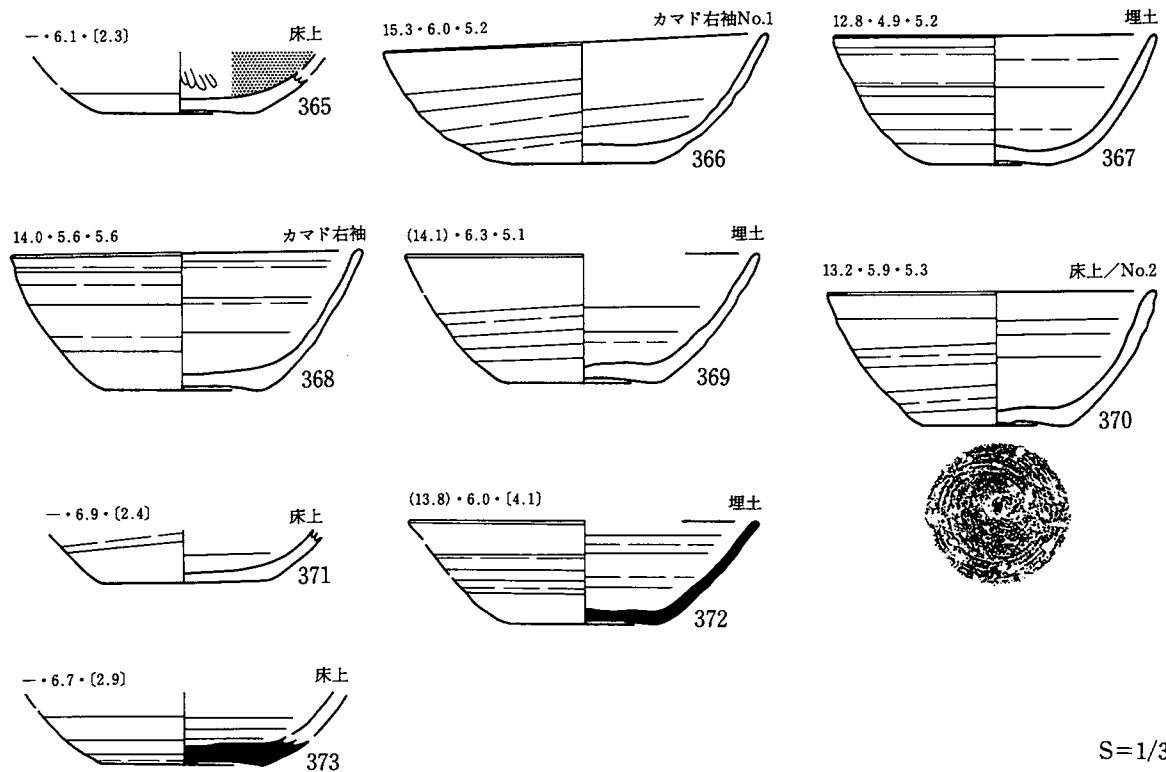


- |   |  |
|---|--|
| 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 礫(径1~5cm大)5%程度含む         | 5. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 強く締まる 褐色シルト質土(10YR4/6)10%含む   |
| 2. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性に富む 赤褐色焼土(5YR4/6)ブロック状に50%含む | 6. 10YR4/6 褐色シルト質土 粘性あり                                |
| 3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 礫(径1~3cm大)10%程度含む        | 7. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性弱 褐色土(10YR4/6)10%混入 礫(径1~3cm大)含む |
| 4. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 粘性弱 黒褐色土(10YR4/4)5%混入         |  |



- |  |
|--|
| 1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性に富む 指圧痕あり                      |
| 2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性ややあり 強く締まる 赤褐色焼土粒(5YR4/2)20%混入 |
| 3. 7.5YR4/6 褐色シルト質土 粘性ややあり 強く締まる 褐色土がブロック状に混入        |
| 4. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 強く締まる 褐色土がブロック状に混入               |
| 5. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 焼土粒を微量含む                         |
| 6. 5YR4/6 赤褐色焼土 強く締まる                                |

第121図 RA107竪穴住居跡



第122図 RA107竪穴住居跡出土遺物

R A 109 竪穴住居跡 (第 123・124 図、写真図版 56・242)

<位置・重複関係> 東側調査区北端部の-1 B~-2 B区に亘って位置する。西壁側でRD 233 土坑と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から(新) RD 233 土坑→(旧) RA 109 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で黒褐色土の広がり確認されている。<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は5.80×5.10 mである。

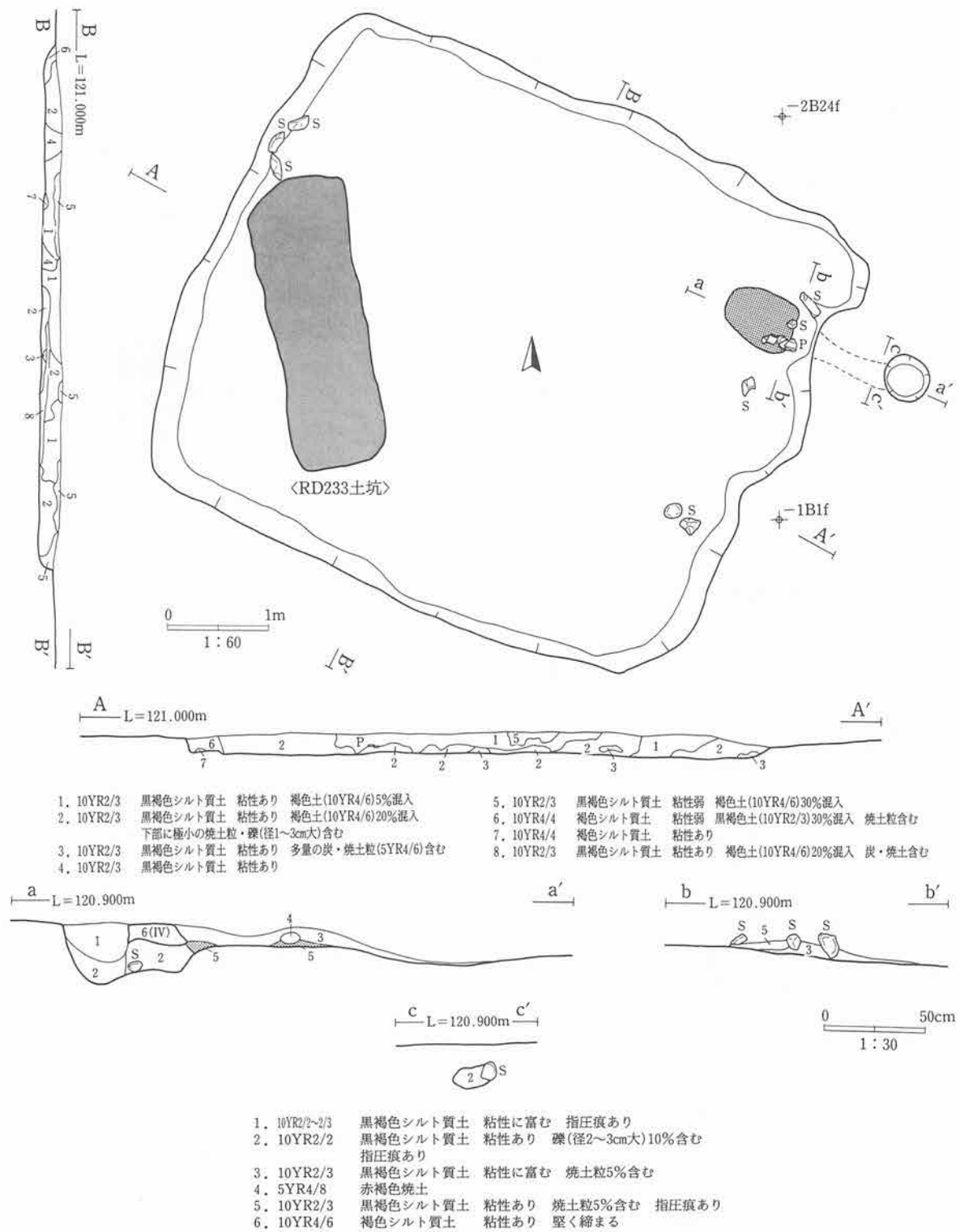
<埋土> 埋土は8層に大別される。主体を占める黒褐色シルト質土は褐色土をブロック状に含み、下位に炭と焼土粒を混入している。粘性があり、堅く締まっている。<壁・床> 壁は床上から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁14 cm、西壁18 cm、南壁15 cm、北壁14 cmを測る。床は小起伏が見られ、堅く締まる。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

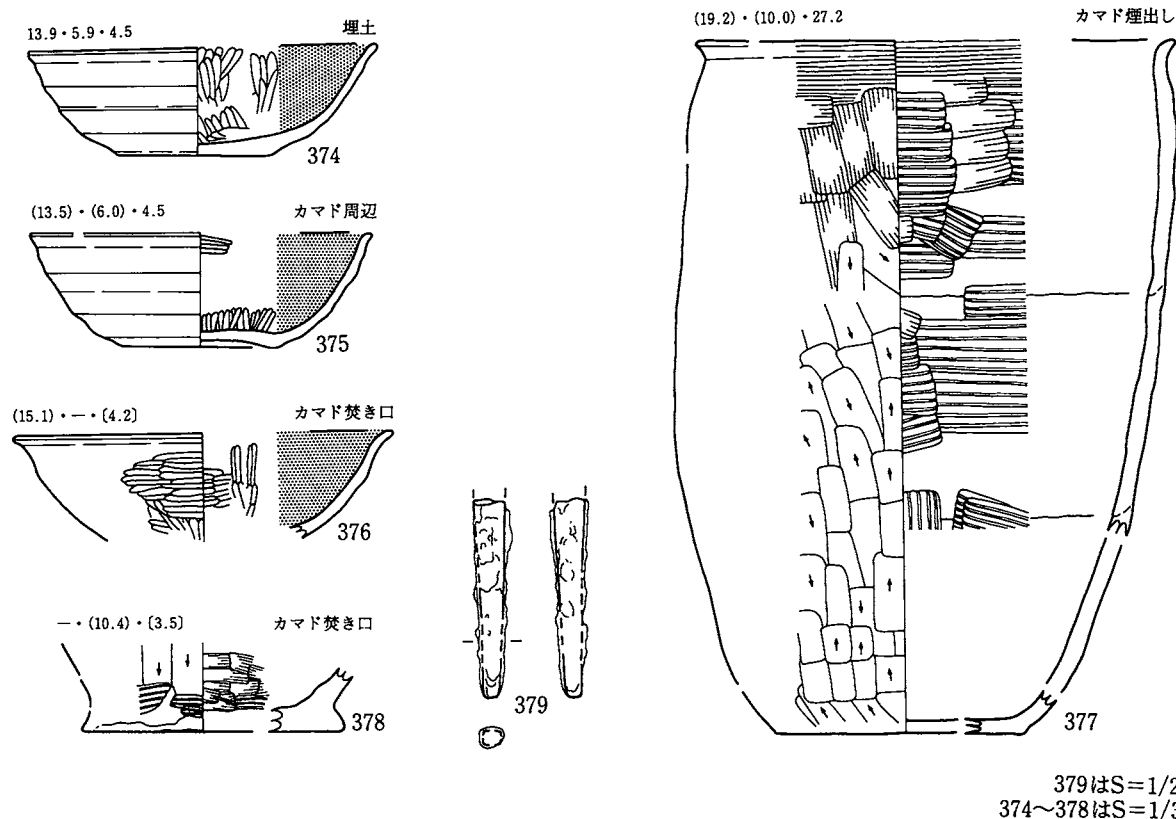
<カマド> カマドは東壁の北東コーナー寄りに設置している。本体部は削平を受けて崩落し、僅かに燃焼部の下端が現存するだけである。上にはカマド構築材と思われる礫の破片が散在している。燃焼部は径72×54 cmの楕円形の焼土が形成され、削平のために厚さは2 mmほどである。

煙道部は削平を受けているが割り貫き式で、横断面は径41×20 cmの楕円形を呈している。長さは1.18 mで、燃焼部から48 cm平らに延び、そこから下がり勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径45×44 cm、深さ31 cmの円形状土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

<遺物> カマド焼き口部周辺から土師器坏、須恵器坏、埋土上位から鉄製品が出土している。374~376はロクロ使用の土師器坏(A I a群)で、口縁部は体部から外傾して立ち上がる374・375、外反する376がある。内面は放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理を施しており、底部の切り離しは回転糸切りである。376



第123図 RA109竪穴住居跡



379はS=1/2  
374~378はS=1/3

第124図 RA109竪穴住居跡出土遺物

の体部外面には細いヘラミガキ調整が見られ、胎土に金雲母を多く含んでいる。

377・378はロクロ不使用の土師器甕（A II群）である。377の口縁部は短く頸部から強く外反し、内外面にヨコナデ調整を施している。体部外面は上半部がヘラナデ、下半が縦方向のハケメ調整である。底部は木葉痕で、胎土に石の混入が多く焼成は雑である。378はカマド焼き口部から出土した木葉痕の底部破片である。

379の鉄製品は鉄鏝の基部と思われる破片で、現存長5.3cm、幅1cm、厚さ6mmを測る。

<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。

（高橋）

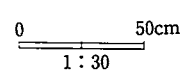
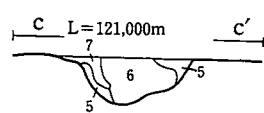
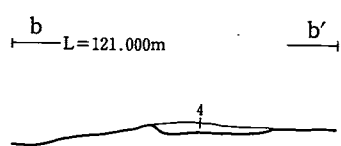
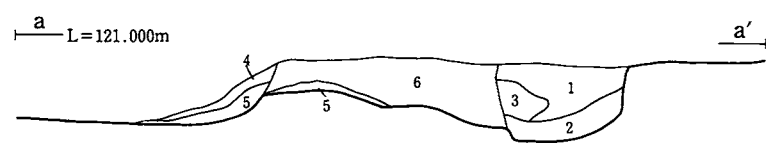
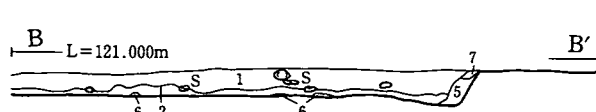
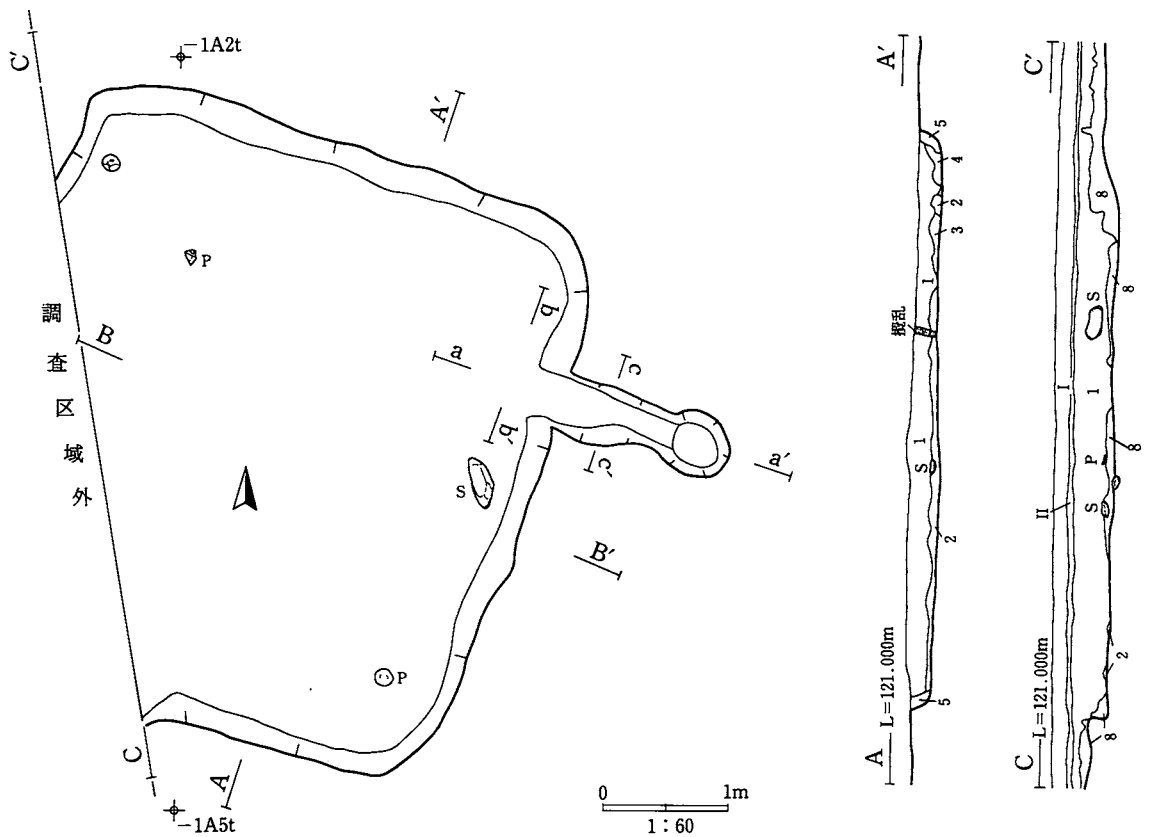
#### RA 110 竪穴住居跡（第125・126図、写真図版56・242・243）

<位置・重複関係> 東側調査区の西端部-1A区に位置している。他の遺構との重複関係はない。検出はIV層上面で黒褐色土の広がりによって確認している。<平面形・規模> 遺構の南西コーナーが調査区域外に延びていることから、規模の全容は不明である。検出された規模は東辺4.10m、西辺0.84m、南辺2.10m、北辺3.74mを測る。検出された規模等から4.20×3.80mの隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土はシルト質土を主体とする8層に細分される。上層の1層は大部分を占める粘性のある黒褐色シルト質土で、炭片を含んでいる。下層は褐色土がブロック状に混入する黒褐色シルト質土で構成されている。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁28cm、西壁20cm、南壁16cm、北壁18cmである。床面はほぼ平坦で、やや締まっている。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

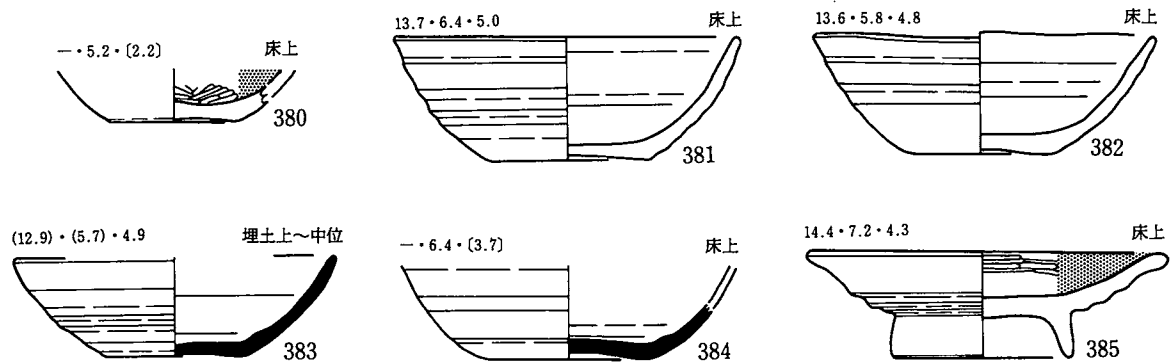
<カマド> カマドは東壁の北東コーナー寄りに設置している。本体部は削平を受け現存していない。東壁寄りの床からは、カマド構築材と思われる長さ42cm、幅17cmの垂角礫が1個出土している。煙道部は



- |             |          |        |                                     |
|-------------|----------|--------|-------------------------------------|
| 1. 10YR2/2  | 黒褐色シルト質土 | 粘性ややあり | 炭片微量含む                              |
| 2. 10YR2/2  | 黒褐色シルト質土 | 粘性あり   | 褐色土(10YR4/6)ブロック状に30%混入             |
| 3. 10YR2/2  | 黒褐色シルト質土 | 粘性あり   | 褐色土(10YR4/6)ブロック状に30%混入<br>炭片・焼土粒含む |
| 4. 10YR2/3  | 黒褐色シルト質土 | 粘性弱    | 褐色土(10YR4/6)5%混入                    |
| 5. 10YR2/3  | 黒褐色シルト質土 | 粘性弱    | 褐色土(10YR4/6)30%混入                   |
| 6. 10YR4/6  | 褐色シルト質土  | 粘性ややあり | 黒褐色土(10YR2/2)20%混入                  |
| 7. 10YR2/3  | 黒褐色シルト質土 | 粘性ややあり | 褐色土(10YR4/6)20%混入                   |
| 8. 10YR4/6  | 褐色シルト質土  | 粘性あり   | 黒褐色土(10YR2/2)10%混入                  |
| I. 10YR2/2  | 黒褐色土     | 粘性弱    | 耕作土                                 |
| II. 10YR2/2 | 黒褐色土     | 粘性弱    | 酸化物30%含む 床上                         |

- |            |          |       |                                     |
|------------|----------|-------|-------------------------------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 粘性に富む | 指圧痕あり                               |
| 2. 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 粘性に富む | 黒褐色土(10YR2/2)30%混入 指圧痕あり            |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 粘性に富む | 暗褐色土(10YR3/4)20%混入 指圧痕あり            |
| 4. 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 粘性に富む | 暗褐色土(10YR3/4)20%混入 焼土粒3%含む<br>指圧痕あり |
| 5. 10YR3/4 | 暗褐色砂質シルト | 粘性あり  | 堅く締まる 黒褐色土(10YR2/2)40%混入<br>炭化物1%含む |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色シルト質土 | 粘性に富む | 赤褐色焼土粒(5YR4/6)5%混入 指圧痕あり            |
| 7. 10YR2/2 | 黒褐色シルト質土 | 粘性あり  |                                     |

第125図 RA110竪穴住居跡



S=1/3

第126図 RA110竪穴住居跡出土遺物

上半部を削平されているため、掘り込み式か割り貫き式か不明である。長さは1.42 mで、燃焼部から下がり勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径54×52 cm、深さ31 cmの楕円形土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。埋土は黒褐色シルト質土が主体で、焼土粒と炭が混入している。

<遺物> 床上から土師器坏・高台坏、須恵器坏が出土している。380～382はロクロ使用の土師器坏（A I a群）である。380は口縁部を欠損しており、内面がヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切りである。

381・382は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a群）で、底部の切り離しが回転糸切りである。胎土に砂と石の混入が多く見られ、382は器形の歪みが著しい。

383・384は底部の切り離しが回転糸切りの須恵器坏（B II a群）で、383の口縁部は外傾して立ち上がる。

385はロクロ使用の土師器高台坏で、内面が細いヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。焼成は良好で、胎土に砂が多く混入している。

細片のため図面掲載しなかったが、ロクロ不使用の土師器甕（A II群）の体部片が数点出土している。体部外面はヘラケズリ調整を施している。

<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。 （高橋）

#### RA 111 竪穴住居跡（第127図、写真図版56・243）

<位置・重複関係> 東側調査区の一A区に位置し、東壁側でRD 232土坑と重複している。遺構の新旧関係は本遺構が切っている事から（新）RA 111竪穴住居跡→（旧）RD 232土坑である。検出はIV層上面で黒褐色土の広がり確認されている。<平面形・規模> 平面形はやや歪みのある隅丸方形を呈しており、規模は3.28×3.00 mである。

<埋土> 埋土はシルト質主体の7層に大別される。大部分を占める黒褐色シルト質土は、焼土粒と褐色土をブロック状に含んでいる。下位には焼土粒と炭の混入が多く見られる。<壁・床> 壁は床上から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁28 cm、西壁24 cm、南壁18 cm、北壁26 cmである。床はほぼ平坦で、強く締まっている。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 北東コーナー寄りから、P 1土坑（径78×70 cm、深さ11 cm）を1基検出している。平面形は楕円形状を呈しているが、用途が不明である。

<カマド> カマドは西壁の南東コーナー寄りに設置している。本体部は削平され僅かに燃焼部が現存す



るだけである。燃焼部は径 52×46 cm の楕円形状の焼土が形成され、厚さが 4 cm である。

煙道部は長さ 1.68 m を測り、割り貫き式である。横断面形は径 27×18 cm の楕円形状を呈している。煙道は燃焼部から下がり勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径 38×36 cm、深さ 28 cm の円形状土坑が掘り込まれている。黒褐色土の埋土には小礫が多く混入している。

<遺物> 床上と埋土中位から土師器坏・高台坏、須恵器坏・甕、磨石が出土している。386 は口縁部を欠損したロクロ使用の土師器坏である。内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a 群）で、底部の切り離しは回転糸切りである。387 は内面に黒色処理を施しているロクロ使用の土師器高台坏の破片である。

388 は 3 分の 1 が現存する須恵器坏（B II a 群）の底部破片で、底部の切り離しが回転糸切りである。

389 は須恵器甕の体部～口縁部破片で、口縁部は頸部から強く外反して立ち上がり、口唇部に浅い沈線が一条巡っている。

390 は片面に使用痕が見られる磨石で、長さ 6.2 cm、幅 5.4 cm、厚さ 4.7 cm を測る。

<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。 (高橋)

#### R A 112 竪穴住居跡（第 128 図、写真図版 57・243）

<位置・重複関係> 東側調査区西端部の - 1 A 区に位置している。他の遺構との重複関係はない。IV 層上面で黒褐色土の広がりで見出している。<平面形・規模> 西側コーナーが調査区域外に延びていることから、規模の全容は不明である。検出された規模は南東辺 2.87 m、北西辺 1.28 m、南西辺 1.34 m、北東辺 3.00 m を測る。検出された規模から 3.20×3.10 m 前後の隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする 3 層に大別される。1 層は褐色土をブロック状に含み、2 層は堅く締まり、3 層が焼土粒を混入している。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は南東壁 13 cm、北西壁 9 cm、南西壁 15 cm、北東壁 14 cm である。床面は平坦で、やや堅く締まっている。北東壁側にはスロープ状の高まりが見られる。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは検出されないが、調査区域外の北西壁か南西壁側に設置していると思われる。

<遺物> 床上と埋土中位からロクロ使用の土師器坏、須恵器坏が出土している。391 は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a 群）で、底部の切り離しが回転糸切りである。口縁の一部は欠損している。

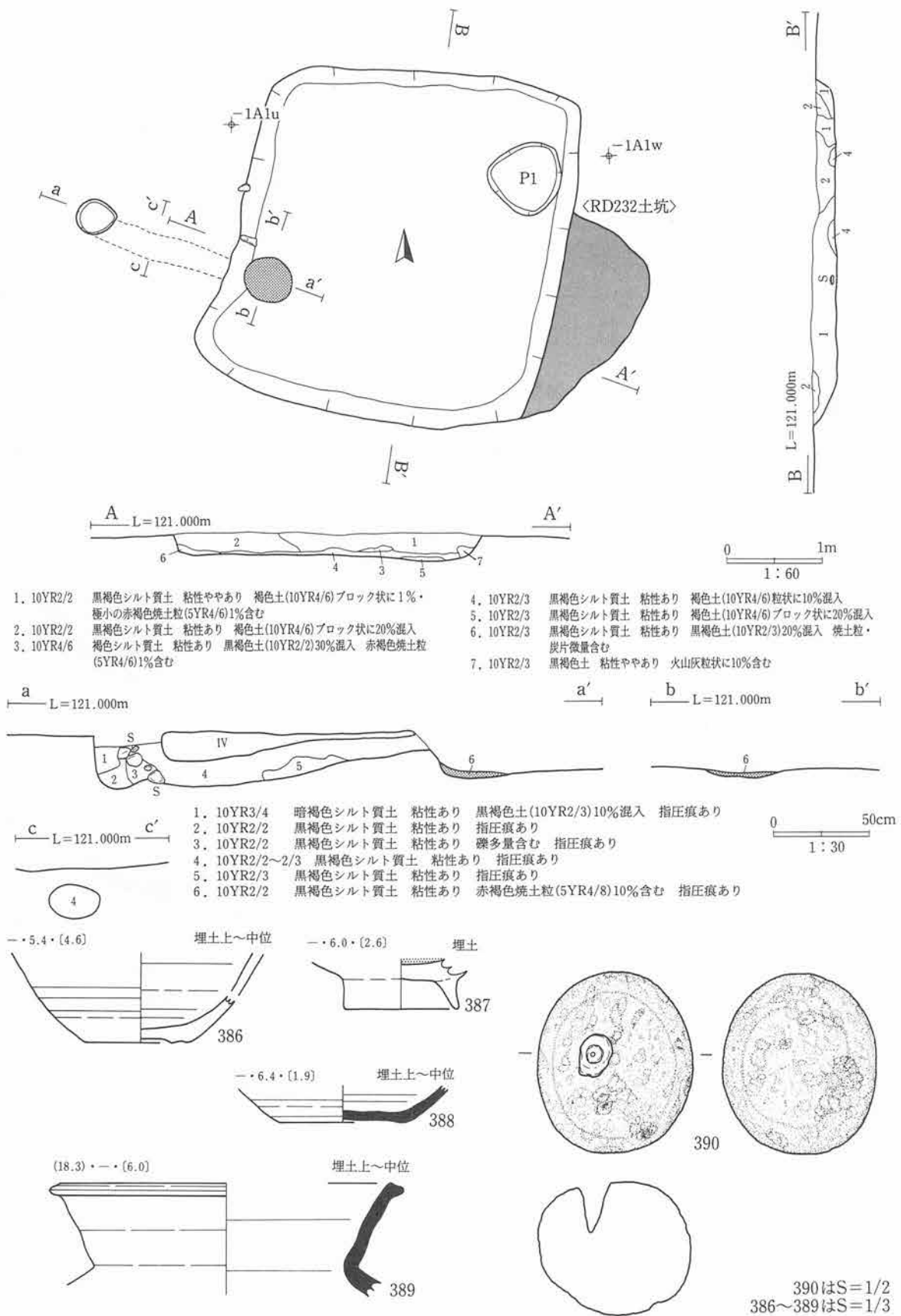
392～394 は底部の切り離しが回転糸切りの須恵器坏（B II a 群）で、口縁部は体部上半から外傾して立ち上がる 394、外反する 392・393 がある。

図面掲載しなかったがロクロ不使用の土師器甕の口縁部・体部破片も出土している。体部外面にはハケメ調整が施されている。

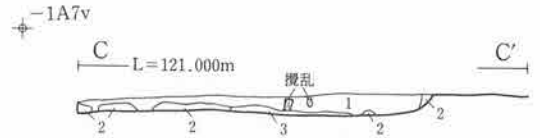
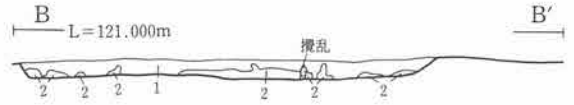
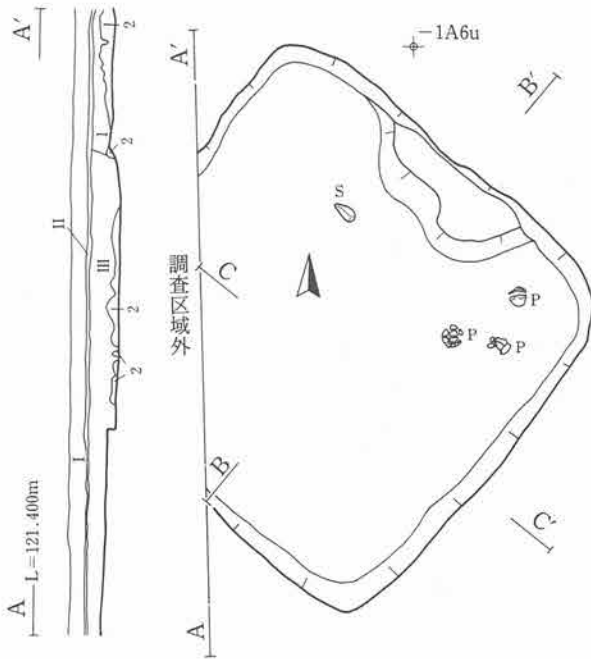
<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。 (高橋)

#### R A 113 竪穴住居跡（第 129 図、写真図版 58・243）

<位置・重複関係> 北側調査区の西側 - 1 - A 区に位置している。他の遺構との重複関係はない。IV 層上面で褐色土の広がりで見出している。<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は 3.50×3.40 m である。

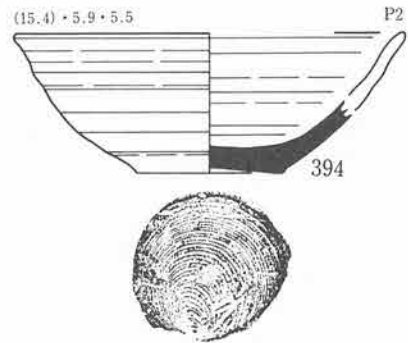
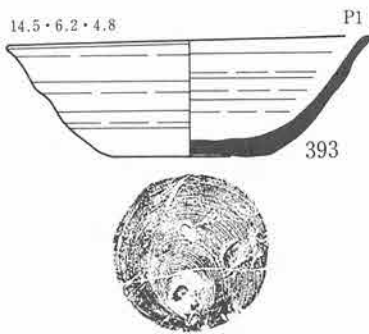
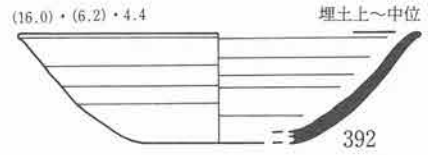
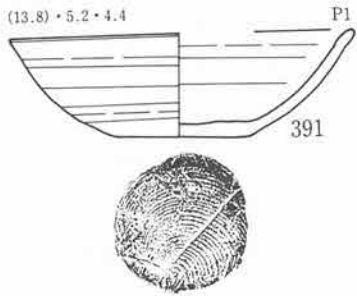


第127図 RA111竪穴住居跡・出土遺物



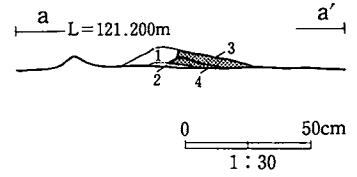
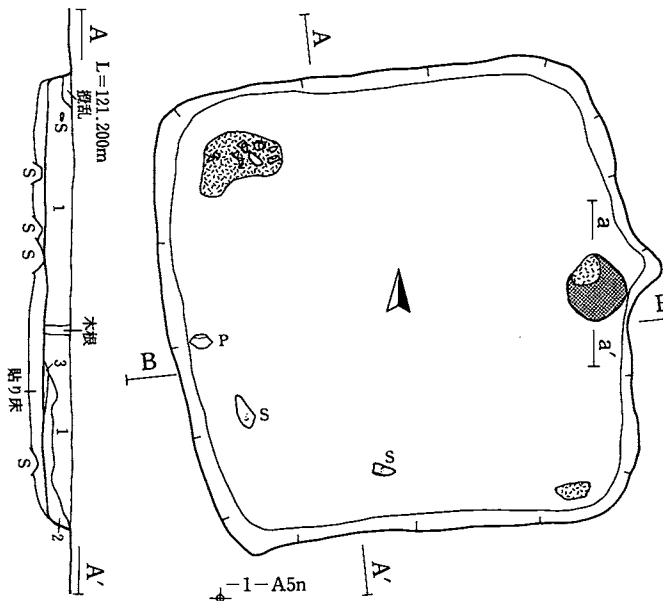
0 1m  
1:60

- I. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性弱 耕作土
- II. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性弱 堅く締まる 酸化物50%混入 床土
- III. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性弱 堅く締まる
- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる 褐色土(10YR4/6)5%混入
- 1'. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性弱 堅く締まる 焼土粒・炭化物微量混入
- 2. 10YR4/6 褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる 黒褐色土(10YR2/3)10%混入
- 3. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性弱 堅く締まる 赤褐色焼土(5YR4/6)20%混入

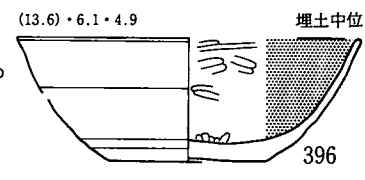
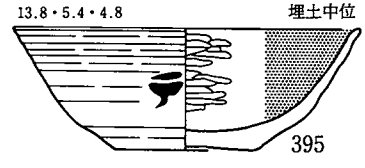


S=1/3

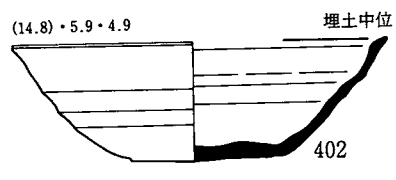
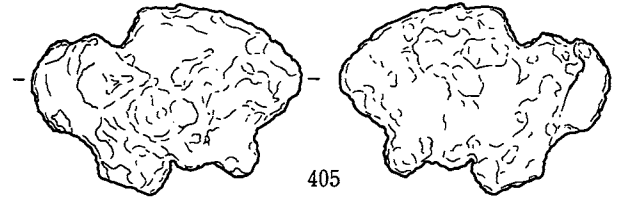
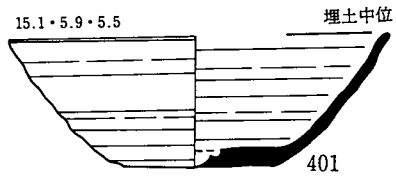
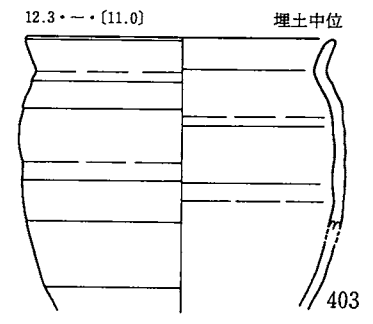
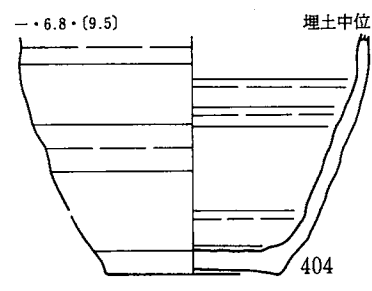
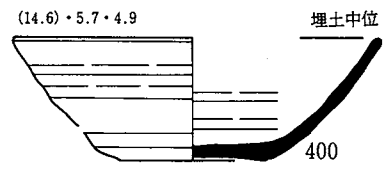
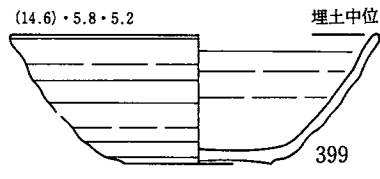
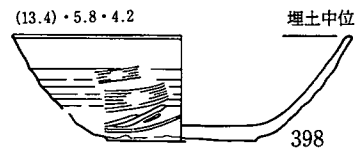
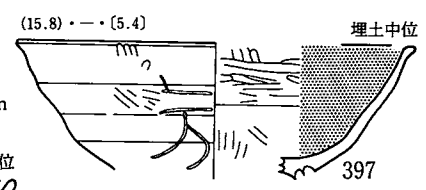
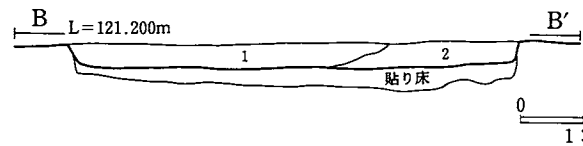
第128図 RA112竪穴住居跡・出土遺物



- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり やや砂質 焼土1%・炭化物少量含む
- 2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり やや砂質 焼土5%含む
- 3. 5YR4/6 赤褐色焼土 粘性あり 褐色土(10YR2/3)と地山との混合土の赤変化 におい赤褐色土 粘性あり 3層よりも若干地山との混合度が高い
- 4. 5YR4/4



- 1. 10YR2/3 褐色土 粘性なし 褐色土(10YR4/6)1%含む
- 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物粒1%含む
- 3. 10YR3/2 黒褐色砂質土 粘性ややあり 縮まりなし
- 1. 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり やや砂質 黒褐色土(10YR2/2)10%混入



405はS=1/2  
395~404はS=1/3

第129図 RA113竪穴住居跡・出土遺物

<埋土> 埋土は褐色土を主体とする3層に大別される。1層は大部分を占める褐色土で、2層が炭化物を含み、3層が締まりがない黒褐色砂質土で構成されている。<壁・床> 壁は床上から急傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁18cm、西壁19cm、南壁18cm、北壁18cmを測る。床は平坦で、貼り床が施されている。貼り床は褐色土と黒褐色土の混合土で、良く締まっている。北西と南東コーナー寄りの床上には、炭の薄い堆積が見られる。<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁の中央部に設置しているが、本体部と煙道部は削平され僅かに燃焼部の焼土が現存するだけである。燃焼部は径54×46cmの楕円形状焼土が形成されている。厚さは6cmである。

<遺物> 埋土中位から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏、鉄製品が出土している。395・396・398・399はロクロ使用の土師器坏である。395・396（A I a群）は内面をヘラミガキ調整後に黒色処理を施しており、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土に砂と金雲母を多く含んでいる。

398・399はいわゆる赤焼き土器（A II a群）で、底部の切り離しが回転糸切りである。398は体部下半の外面に工具痕が見られる。

397は土師器高台坏で、高台部を欠損している。体部外面は線刻があり、内面が黒色処理されている。

400～402は須恵器坏（B II a群）で、底部の切り離しが回転糸切りである。口縁部は体部から外傾気味に立ち上がっている。焼成は良好で、胎土に砂を多く混入している。

403・404はロクロ使用の土師器甕（A I 群）で、403は底部、404が体部上半から口縁部を欠損している。ロクロ成形痕が明瞭で、胎土に砂を多く含んでいる。404の底部の切り離しは回転糸切りである。

405の鉄製品は鉄滓と思われる破片で、長さ5.1cm、幅7.2cm、厚さ1.6cmを測る。

<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。 (高橋)

#### RA 114 竪穴住居跡 (第129図、写真図版59・243)

<位置・重複関係> 東側調査区中央部付近の-1B区に位置し、北西コーナー側でRD 206土坑と重複している。遺構の新旧関係は本遺構が切られている事から（新）RD 206土坑→（旧）RA 114竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認している。<平面形・規模> 遺構東側が調査区域外の道路下に延びている事から、規模の全容は不明である。検出された規模は西辺2.78m、南辺2.34m、北辺2.30mを測る。検出された規模から一辺3.40m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

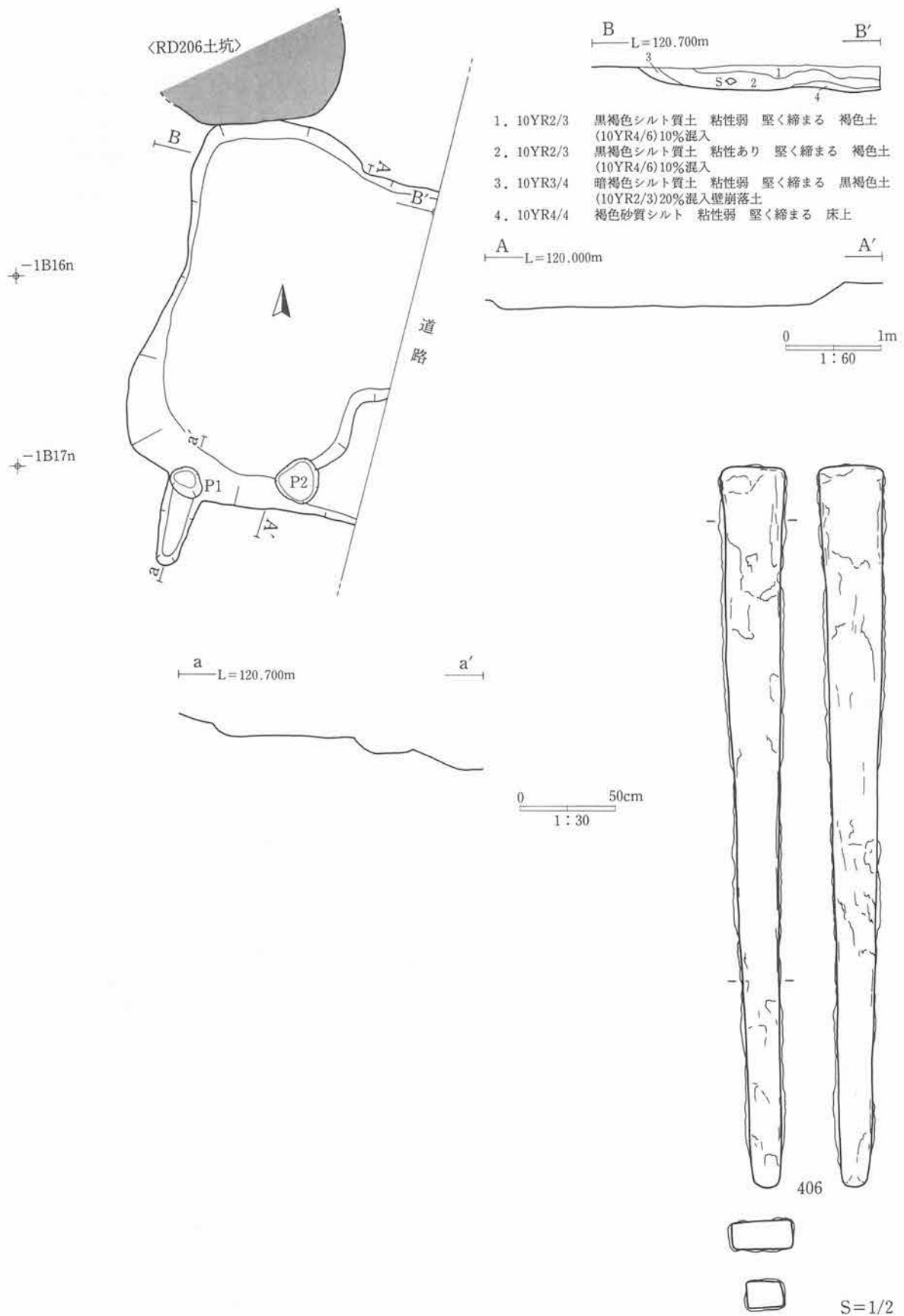
<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする4層に大別される。上層は褐色土の混合土で、下層が炭化物を含む黒褐色土で構成されている。壁際には強く締まった暗褐色砂質土が堆積している。<壁・床> 壁は床上から外傾して立ち上がっている。壁高は西壁19cm、南壁21cm、北壁15cmである。床は平坦で強く締まっている。貼り床は検出されない。<柱穴・他の施設> 柱穴状の土坑は2基検出されている。平面形は楕

土坑No	P 1	P 2
直径cm	34×28	46×44
深さcm	9	18

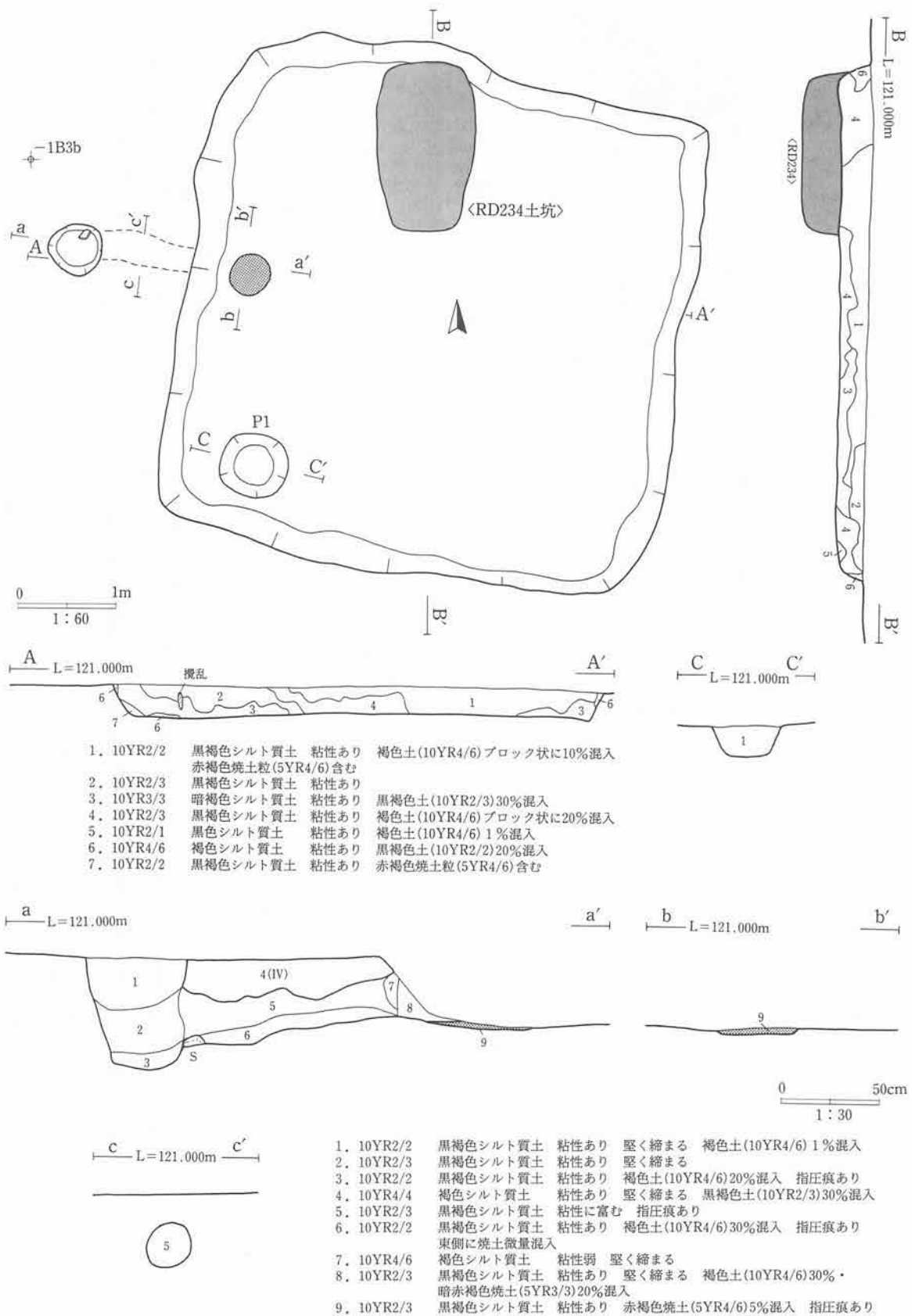
円形である。位置的に支柱穴とはなりえない。南西コーナー寄りには長さ76cm、幅36cmの溝状の落ち込みを検出しているが、用途は不明である。<カマド> カマドは検出されないが、調査区域外の東壁側に設置している可能性がある。

<遺物> 埋土上位から鉄製品が出土している。406は先端部の一部を欠損した釘で、現存長25.3cm、幅2.1cm、厚さ1cmを測る。

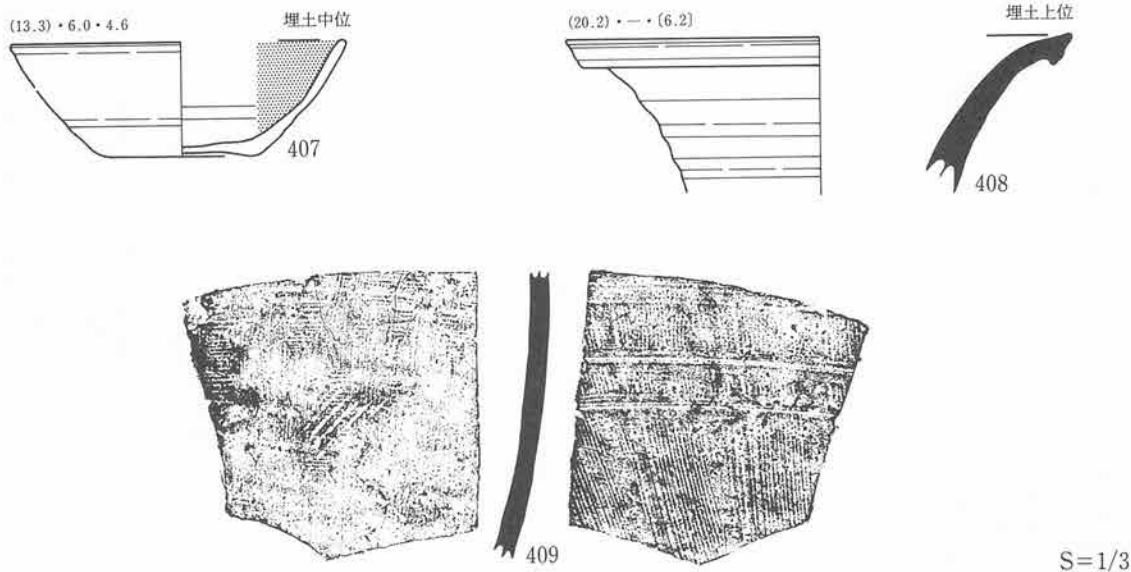
<時期> 出土遺物は少ないが、周辺の竪穴住居跡の遺構形態から平安時代に属すると思われる。(高橋)



第130図 RA114竪穴住居跡・出土遺物



第131図 RA115竪穴住居跡



第132図 RA115竪穴住居跡出土遺物

RA 115 竪穴住居跡 (第 131・132 図、写真図版 59・244)

<位置・重複関係> 東側調査区の北寄り-1 B区に位置している。北壁側でRD 234 土坑と重複し、本遺構が切られている。新旧関係は(新) RD 234 土坑→(旧) RA 115 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で黒褐色土の広がり確認されている。<平面形・規模> 平面形はやや歪みのある隅丸方形を呈し、規模は4.70×4.60 mである。

<埋土> 埋土はシルト質土を主体とする7層に大別される。大部分を占める1層の黒褐色シルト質土は、褐色土との混合土で焼土粒を僅かに含んでいる。壁際には黒褐色土粒を含む褐色シルト質土が堆積する。

<壁・床> 壁は床上から急傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁 29 cm、西壁 29 cm、南壁 30 cm、北壁 30 cmを測る。床は中央部付近がやや高まり、堅く締まっている。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 南西コーナー側から、P 1 土坑(径 70×65 cm、深さ 29 cm)を検出している。平面形は円形を呈している。位置的に貯蔵穴と思われる。

<カマド> カマドは西壁のほぼ中央部に設置している。本体部は削平され僅かに燃焼部下端が現存するだけである。燃焼部は径 42×39 cmの円形状の焼土が形成され、厚さが 3 cmを測る。

煙道部は良く残っており、径 24×23 cmの円形状に割り貫きされている。長さは 1.48 m、燃焼部から下がり勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径 54×53 cm、深さ 57 cmの円形状の土坑が掘り込まれている。埋土は焼土と炭を含む黒褐色シルト質土が主体である。

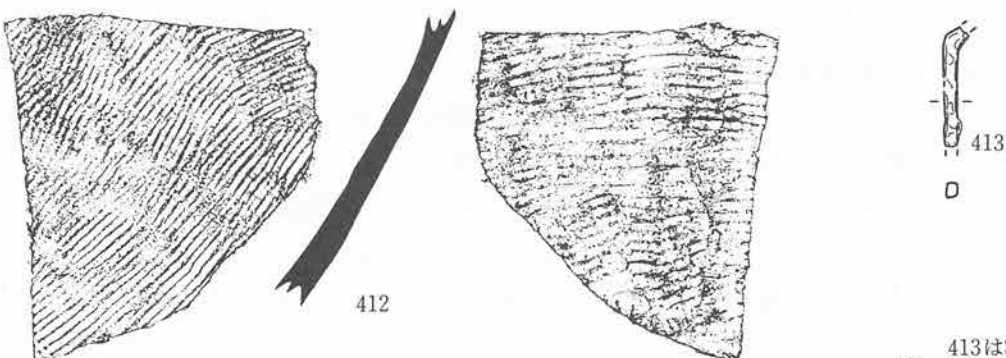
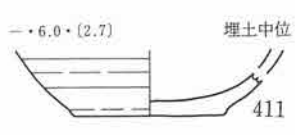
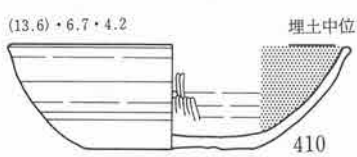
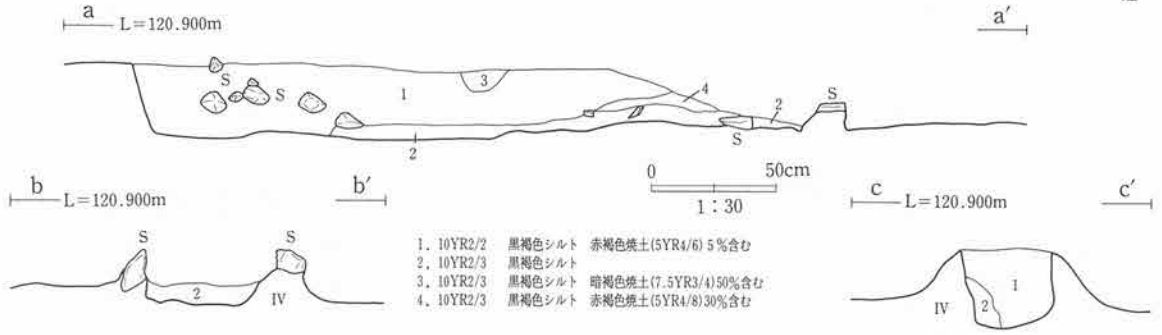
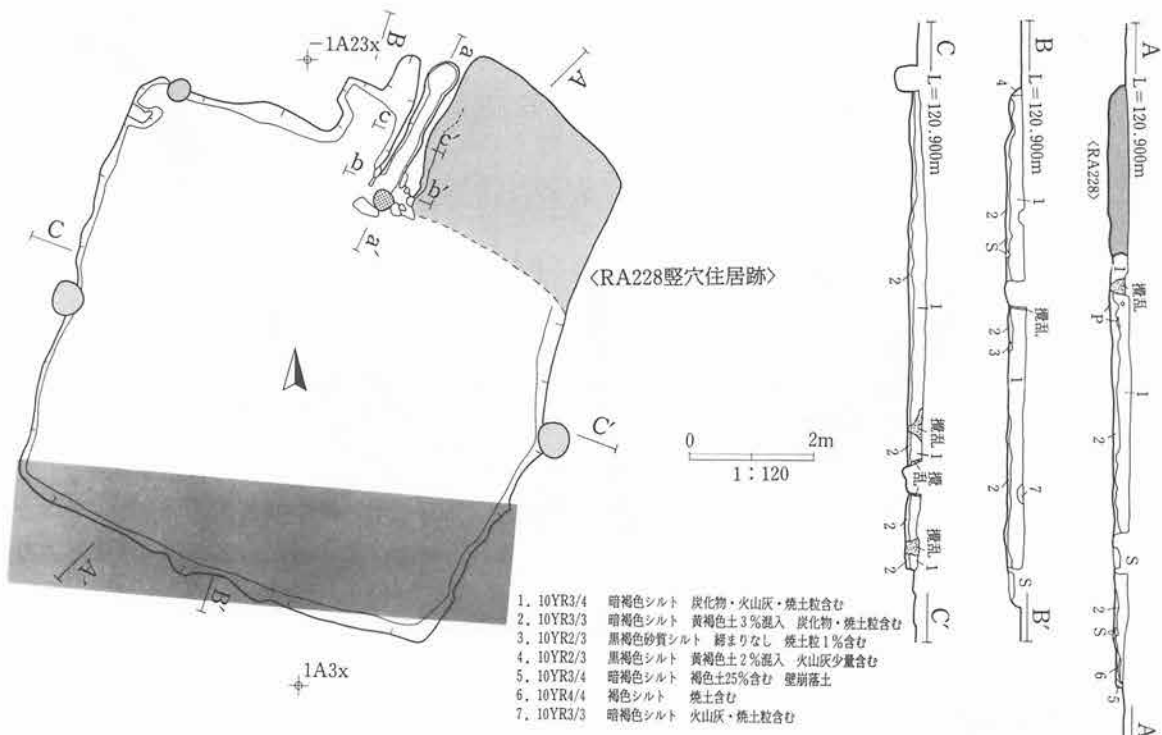
<遺物> 埋土中位からロクロ使用の土師器坏、須恵器甕が出土している。407 は内面黒色処理を施した土師器坏(A I a群)で、回転糸切りの底部に×の線刻がある。

408・409 は須恵器大甕の口縁部と体部破片である。408 はロクロ成形痕を残す口縁部で、頸部から外反して立ち上がっている。409 の内外面は平行叩き具痕が施されている。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。

(高橋)





413はS=1/2  
 410~412はS=1/3

第133図 RA116竪穴住居跡・出土遺物

#### R A 116 竪穴住居跡（第 133 図、写真図版 244）

<位置・重複> 東側調査区の一 1 A～1 A 区に亘って位置しており、北側 1.45 m に R E 021 竪穴状遺構が近接する。中世の R B 005 掘立柱建物跡と奈良時代の R A 228 竪穴住居跡と重複している。本遺構が R B 005 掘立柱建物跡に切られ R A 228 竪穴住居跡を切っている事から、新旧関係は（新）R B 005 掘立柱建物跡→本竪穴住居跡→（旧）R A 228 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で確認している。

<平面形・規模> 南東コーナーと南壁の一部だけが調査区内にあり、遺構の大部分は隣接する第 19 次調査区に延びている。平面形は方形を呈し、規模は 7.58×6.86 m である。

<埋土> 暗褐色土を主体とする 2 層に大別される。上～中位にかけては炭化物・炭・火山灰を少量含む暗褐色シルト、下位は暗褐色シルトに黄褐色土が少量混入している。自然堆積の様相を示している。

<壁・床> 壁の上半部は崩落するものの、床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁 20 cm、西壁 10 cm、南壁 22 cm、北壁 19 cm を測る。重複する R A 228 竪穴住居跡とは床面の比高はなく、ほぼ平坦で堅く締まり、一部に砂礫層の円礫が散在している。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> 北壁のほぼ中央部に設置している。本体部の左右袖部を含む大部分は崩壊している。燃焼部周辺には径 8～40 cm 大の垂角礫 8 個が散在しており、カマドの構築材に関わる可能性もある。燃焼部は径 33×30 cm の円形状である。支脚は確認されていない。

煙道部上半部は削平のため割り貫き式かは不明であるが、長さは 1.56 m を測り、燃焼部から水平に煙出し部へと続いている。煙出し部は径約 54×48 cm、深さ 28 cm の円形状土坑が掘り込まれている。埋土は黒褐色土シルトに焼土と大小の礫を含んでいる。

<遺物> 埋土上～中位で土師器坏・甕、須恵器坏・甕、鉄製品等が出土している。410・411 はロクロ使用の土師器坏である。410（A I a 群）は内面が放射状のヘラミガキ後に黒色処理を施し、底部は回転ヘラ切りで一部に再調整がある。胎土は金雲母を多く含んでいる。411（A II a 群）は底部の切り離しが回転糸切りである。他に口縁部が外傾するものや、内湾気味に立ち上がる坏破片もある。

図面掲載しなかったがロクロ不使用の土師器甕（A II 群）も数点出土している。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部に浅い二条の沈線が巡るもの、底部は木葉痕で、内面にハケメ調整を施した底部～体部破片もある。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面ヘラナデとハケメを施している。

412 は須恵器甕の体部破片で、体部内外面に平行叩き具痕が施されている。図化しなかった中には甕の口縁部や、体部外面が平行叩き具痕、内面が放射状の当て具痕を施した破片も見られる。

413 は鉄製紡錘車の糸巻き棒先端部と思われる破片である。現存長は 3.2 cm、幅 4 mm、厚さ 3 mm を測り、断面形は長方形を呈している。

<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。 （佐藤・高橋）

#### R A 119 竪穴住居跡（第 134・135 図、写真図版 60・244・245）

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 B 区中央部付近に位置している。西側で R A 136 竪穴住居跡の煙出し部、南側が中世の R G 042 堀、北側で近世の攪乱土坑と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から、（新）攪乱土坑→R G 042 堀→R A 136 竪穴住居跡→（旧）R A 119 竪穴住居跡である。IV 層上面で検出している。

<平面形・規模> 南側半分が R G 042 堀に切られている事から、平面形・規模の全容は不明である。検

出された規模は東辺 1.70 m、西辺 2.66 m、北辺 2.40 m である。検出された規模から 3.00×2.80 m 前後の隅丸長方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は3層に大別される。上層は褐色土をブロック状に含んだ黒褐色シルト質土、下層が炭をブロック状に混入し堅く締まっている。壁際には暗褐色シルト質土の混合土が堆積する。壁高は東壁 30 cm、西壁 25 cm、北壁 24 cmを測る。床面はほぼ平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは北壁の中央部西寄りに設置されている。本体部は崩壊し、煙道部は土坑に削平され、僅かに燃焼部が現存するだけである。燃焼部は径 44×40 cmの楕円形状の焼土が形成され、厚さが 5 cmを測る。燃焼部周辺と東壁側の床には、カマド構築材と思われる亜角礫が数個散在している。

<遺物> 床上と埋土中～下位から土師器坏・甕、須恵器壺・甕が出土している。414・415・417 は底部切り離しが回転糸切りの須恵器坏（B II a 群）で、口縁部が体部から外傾して立ち上がっている。

416 は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a 群）で、底部の切り離しが回転糸切りである。外面には煤の付着が見られ、胎土に砂と石を多く含んでいる。

419 はロクロ不使用の土師器甕（A II 群）で、底部を欠損する。口縁部は短く頸部から外傾して立ち上がり、体部は球胴形を呈している。口縁部はヨコナデ、体部内外面がハケメ調整を施している。

418 は床上から出土したほぼ完形の須恵器壺で、体部外面に細いヘラミガキ調整を施している。底部の切り離しは回転糸切りである。421 は須恵器小型壺の体部上半～口縁部の破片で、焼成も良好である。

420・422・423 は須恵器大甕の口縁部と体部破片である。体部外面は平行叩き具痕、内面が放射状の当て具痕を施している。

<時期> 出土した遺物から平安時代前期に比定される。 (高橋)

#### RA 120 竪穴住居跡 (第 136・137 図、写真図版 245)

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区西寄りに位置し、東～南壁側で奈良時代の RA 215 竪穴住居跡と重複している。遺構の新旧関係は、本遺構が切っている事から (新) RA 120 竪穴住居跡→(旧) RA 215 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で黒褐色土の広がりによって確認されている。<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は 4.10×3.90 m である。

<埋土> 埋土はシルト質を主体とする 6 層に大別される。大部分を占める黒褐色シルト質土は、焼土粒と微量の炭を含み堅く締まっている。下層の一部には焼土の堆積が見られる事から、焼失家屋と思われる。

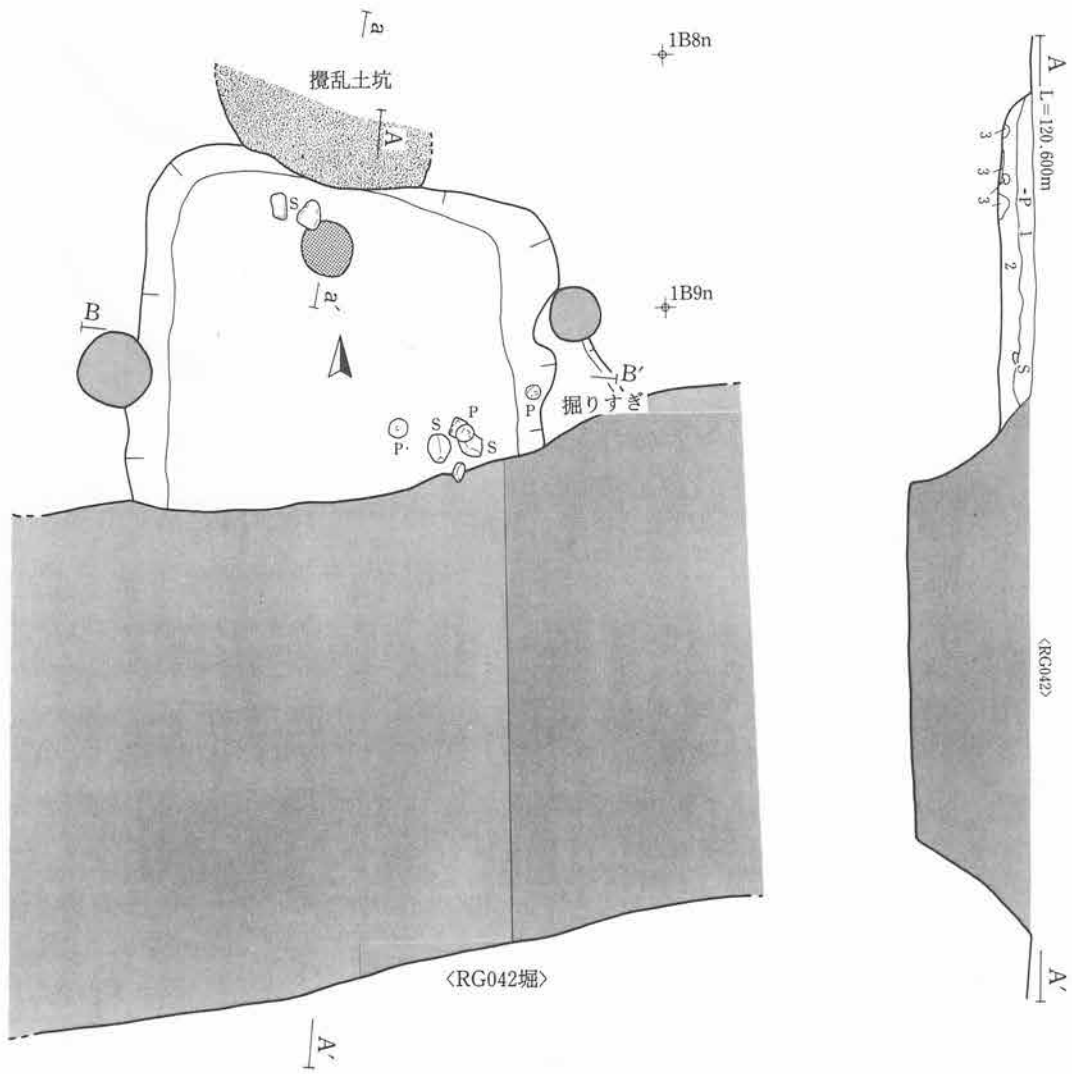
<壁・床> 壁は床上から外傾して立ち上がり、壁高は西壁 28 cm、南壁 25 cm、北壁 26 cmを測る。床は多少凹凸があり、堅く締まっている。重複する RA 215 竪穴住居跡の床の比高は 5 cm である。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 南西コーナーと南東コーナー寄りから柱穴状の土坑 P 1・P 2 が検出されている。平面形は楕円形状を呈し、位置的に柱穴と思われる。

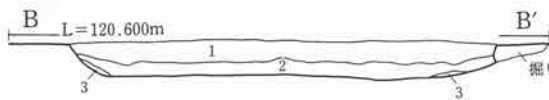
土坑No	P 1	P 2
直径cm	58×26	32×28
深さcm	26	8

<カマド> カマドは西壁の中央部に設置している。本体部は削平され僅かに燃焼部が現存するだけである。燃焼部は径 70×68 cmの不整楕円形状焼土が形成されている。厚さは 2 cm である。

煙道部は割り貫き式で、長さが 1.26 m である。径 29×25 cmの楕円形状に割り貫かれ、煙道は燃焼部からほぼ平坦に煙出し部へと続いている。煙出し部は径 46×30 cm、深さ 24 cmの楕円形状土坑が掘り込まれ、黒



0 1m  
1:60



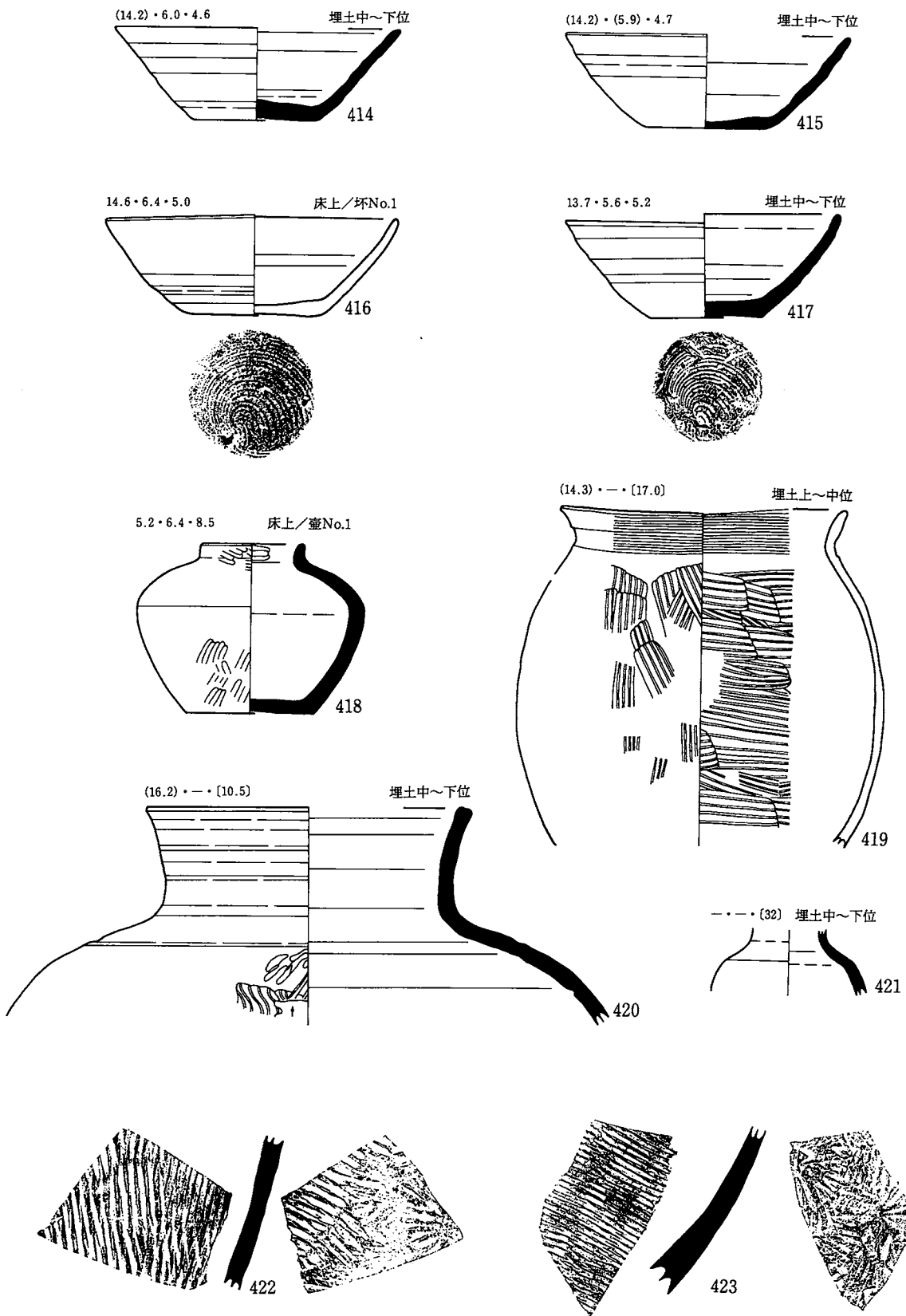
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロック状に混入  
焼土粒・炭微量含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 2層に類似 褐色土2%混入
3. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土との混合土



0 50cm  
1:30

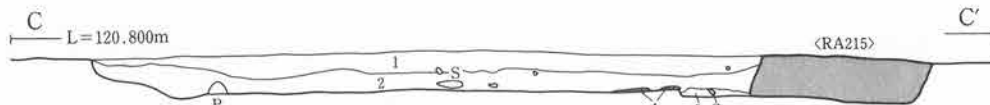
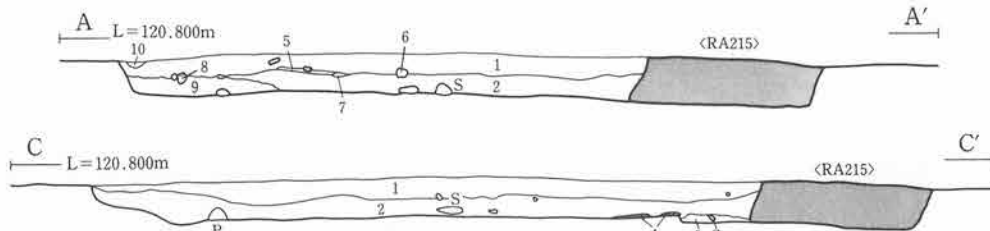
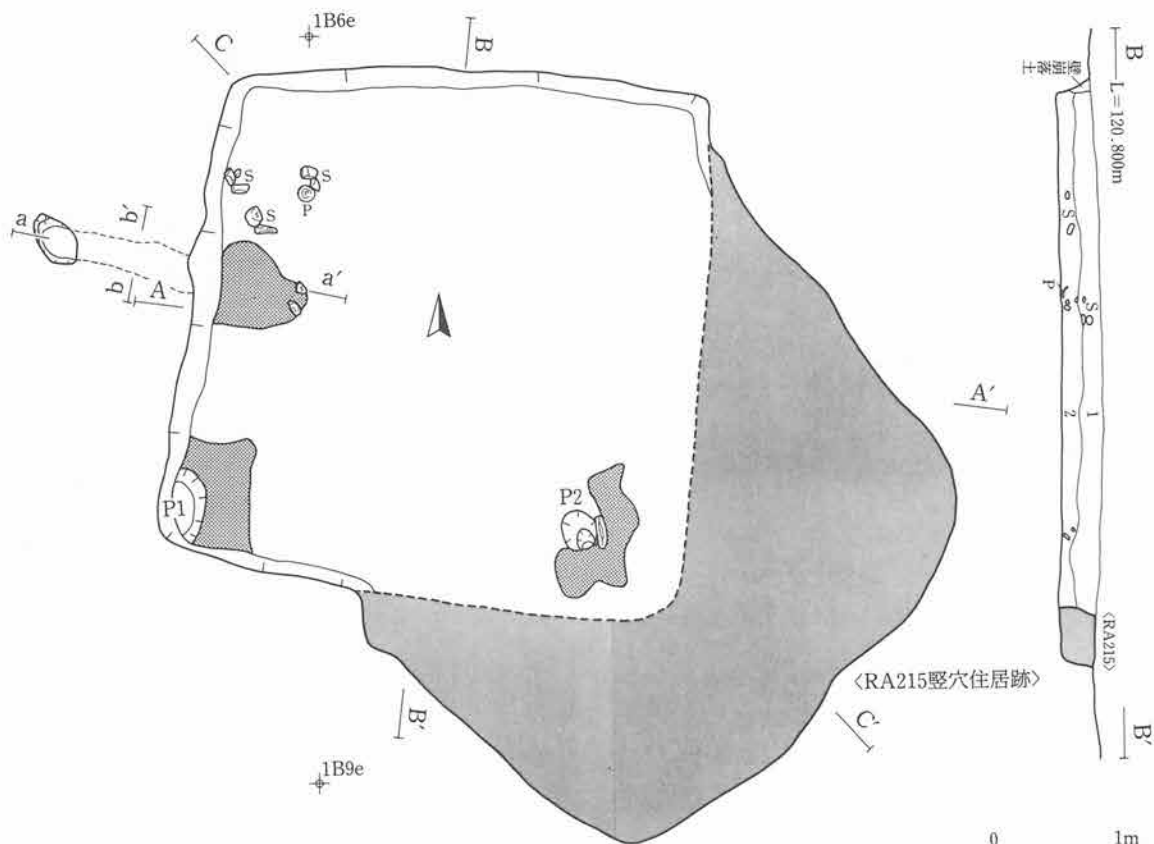
1. 5YR3/4 暗赤褐色焼土 黒褐色土10%混入

第134図 RA119竪穴住居跡

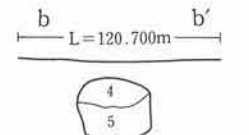
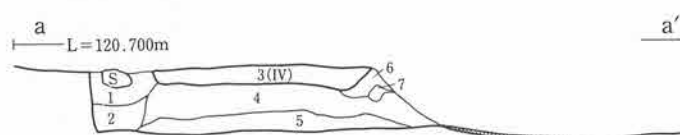


S=1/3

第135图 RA119竖穴住居迹出土遺物



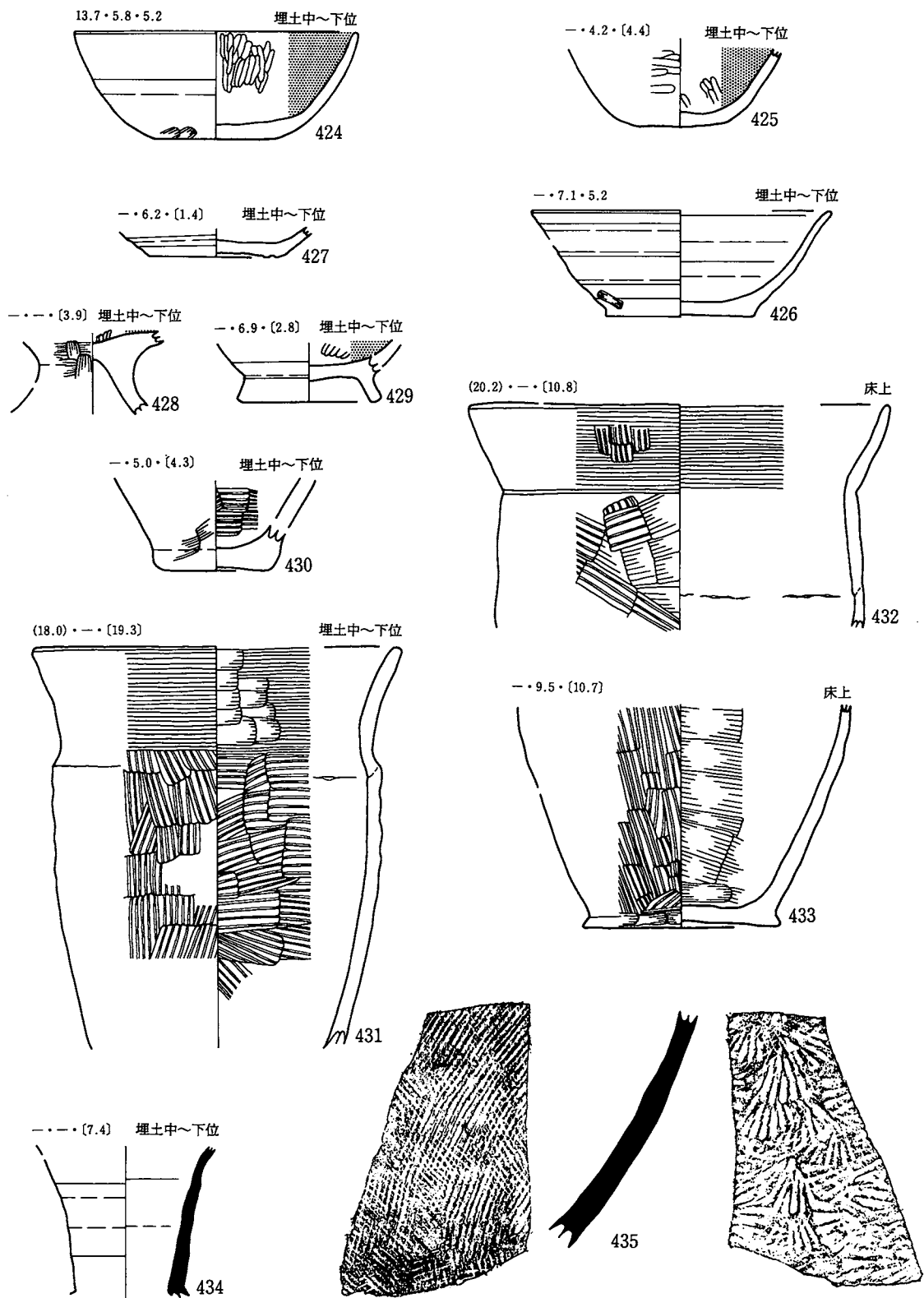
- |   |  |
|---|--|
| 1. 10YR2/1 黒褐色シルト質土 堅く締まる。一部に褐色土が小ブロック状に混入<br>焼土粒・炭微量含む | 6. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色シルト質土との混合土       |
| 2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・炭2%含む                     | 7. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 水酸化鉄の混入がある         |
| 3. 10YR2/1 黒色シルト質土 褐色土が小ブロックで混入                         | 8. 10YR2/1 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭を1%混入し、水酸化鉄を微量に含む |
| 4. 5YR3/3 暗赤褐色焼土 締まりなし                                  | 9. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土の混合土である         |
| 5. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土が小ブロック状に1%混入               | 10. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 指圧痕がつく、IV層起源の褐色土の混合土である |



- |  |
|--|
| 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる 黒褐色土(10YR2/3) 10%混入                     |
| 2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 黒褐色土(10YR2/3)・炭3%混入 指圧痕あり                     |
| 3. 10YR2/4 暗褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる 黒褐色土(10YR2/3) 10%混入                     |
| 4. 10YR2/2-2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 暗褐色土(10YR3/4)10%・暗褐色焼土粒(5YR4/8)1%混入 指圧痕あり |
| 5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 指圧痕あり   |
| 6. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる 焼土粒・炭1%含む                               |
| 7. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性あり 堅く締まる 黒褐色土(10YR2/2) 30%混入                     |

0 50cm  
1:30

第136図 RA120竪穴住居跡



S=1/3

第137図 RA120竪穴住居跡出土遺物

褐色土の埋土には小礫と炭を混入している。上部構造は不明である。

<遺物> カマド周辺部の床上と埋土中～下位から土師器坏・高台坏・手捏ね、須恵器長頸瓶・甕等が出土している。424 はロクロ使用の土師器坏 (A I b群) で、口縁部は体部から外傾して立ち上がる。内面は放射状のヘラミガキ後に黒色処理を施し、底部は回転糸切りで再調整されている。

425 はロクロ不使用の土師器坏 (I A b群) で、口縁部を欠損している。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面がヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部はヘラナデ調整である。

426・427 は底部の切り離しが回転糸切りで、内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a群) である。焼成は良好である。

428 はロクロ不使用の土師器高台坏の高台部破片である。429 はロクロ使用の土師器の高台坏で、口縁部を欠損している。いずれも内面はヘラミガキ調整後に黒色処理されている。

430 はロクロ不使用の土師器手捏ね土器で、体部外面と底面にハケメ調整を施している。

431～433 はロクロ不使用の土師器甕 (A II群) で、431・432 は体部下半～底部、433 が口縁部を欠損している。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる 432、外反する 431 がある。433 の底部はヘラナデ調整を施している。器面調整は口縁部内外面がヨコナデで、一部にハケメ調整も見られる。体部外面は縦方向のハケメ、内面がハケメとヘラナデ調整である。

434 は須恵器長頸瓶の口縁部破片で、ロクロ成形痕が明瞭である。435 は須恵器甕の体部破片で、体部外面に平行叩き具痕、内面が放射状の当て具痕を施している。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代前期に比定される。 (高橋)

#### R A 126 竪穴住居跡 (第 138～144 図、写真図版 61・62・245～249)

<位置・重複関係> 調査区西側の - 1 - A 区に位置する。近世と思われる柱穴状土坑数基と重複しており、新旧関係は (新) 柱穴状土坑 → (旧) R A 126 竪穴住居跡である。検出面は IV 層上面である。

<平面形・規模> やや胴張りの長方形である。規模は 4.80×4.35 m である。

<埋土> 5 層に細分される。全体に炭粒、炭化材、焼土、拳大の焼土ブロックを多く含んだ黒褐色土で、焼けた住居と考えられる。床面からは板状の炭化材も検出されている。<壁・床> 壁は床から外傾して立ち上がる。また、北壁と東壁の中央付近は壁が袋状にオーバーハングしている。床は若干の凹凸がある。おおむね堅く締まっているが北コーナー付近と住居中央部を除く壁際はあまり締まっていない。特に北コーナー付近は床面を認識できず、精査時に本来の床よりも下げてしまった。住居中央部の床面は火を受けて広範囲に焼土が形成されている (第 138 図、スクリーン部分)。また、西壁中央の壁際からはよく締まって堅い焼土が 48×34 cm の範囲で楕円形状に検出されている。

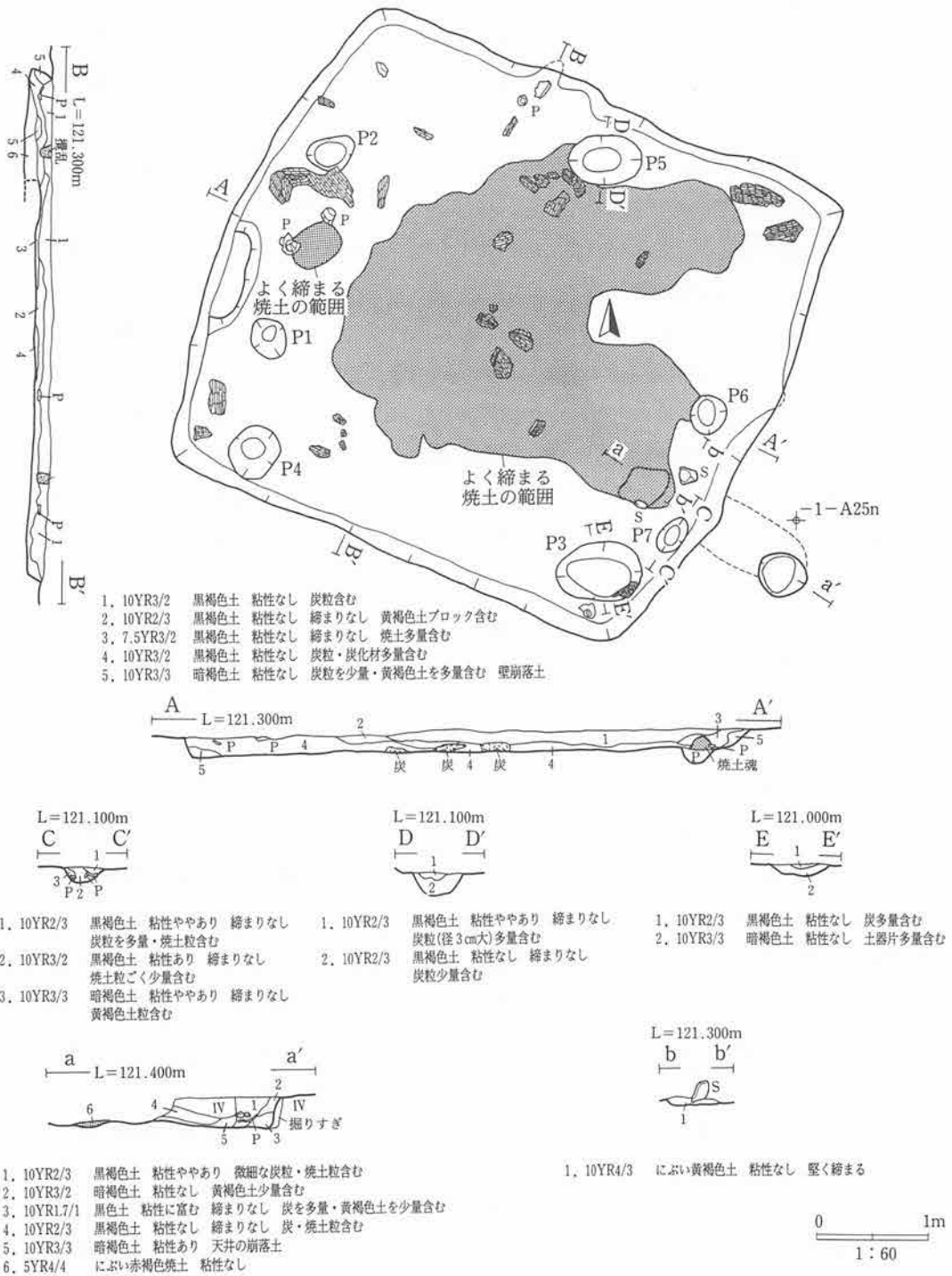
<柱穴> 西壁際から P 1・P 2・P 4、北壁際から P 5 が検出されたが、柱穴となるか不明である。P 1 の埋土には炭や焼土粒が含まれる。P 2 は浅い土坑で、埋土に焼土や炭が含まれている。<他の施設> カ

マド右側南東コーナーから浅い土坑 P 3 が検出された。土坑の埋土は炭を多量に含み、下層は

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
直径cm	39×34	45×33	77×54	49×41	67×46	36×35	37×22
深さcm	21	10	11	16	21	15	15

土器片を多量に含んでいる。土坑の壁際からは炭化材が出土した。P 6 はカマド左袖の左側から検出された小土坑である。埋土に焼土や炭を含む。P 7 はカマド右袖の直下と思われる位置から検出された小土坑で、カマドの袖の構築に使われたものかもしれない。カマドに対面する西壁の中央からやや南よりにステップ状



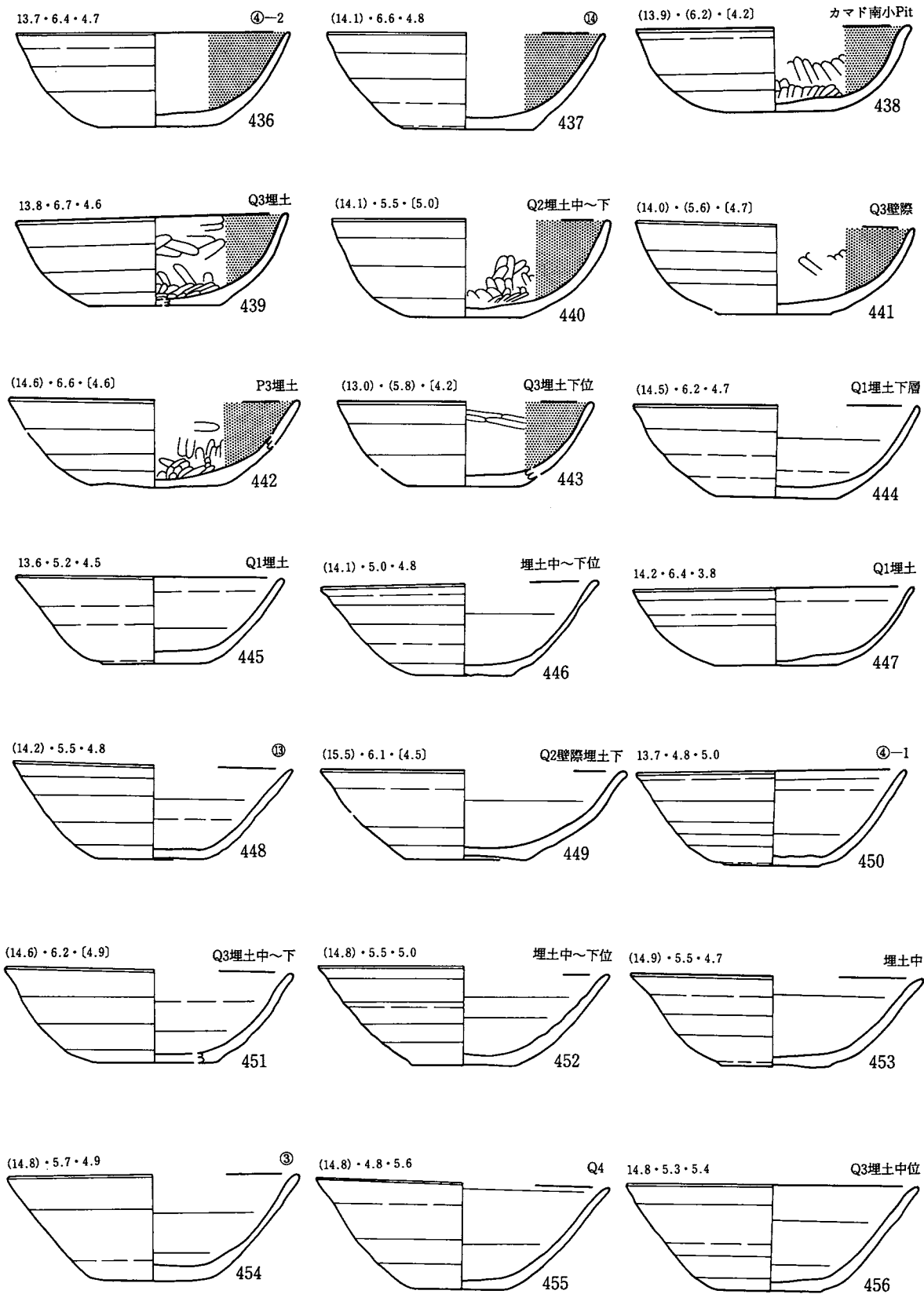


第138図 RA126竪穴住居跡

の段が確認された。規模は1.05×0.30mで、段の上面は堅く締まっている。

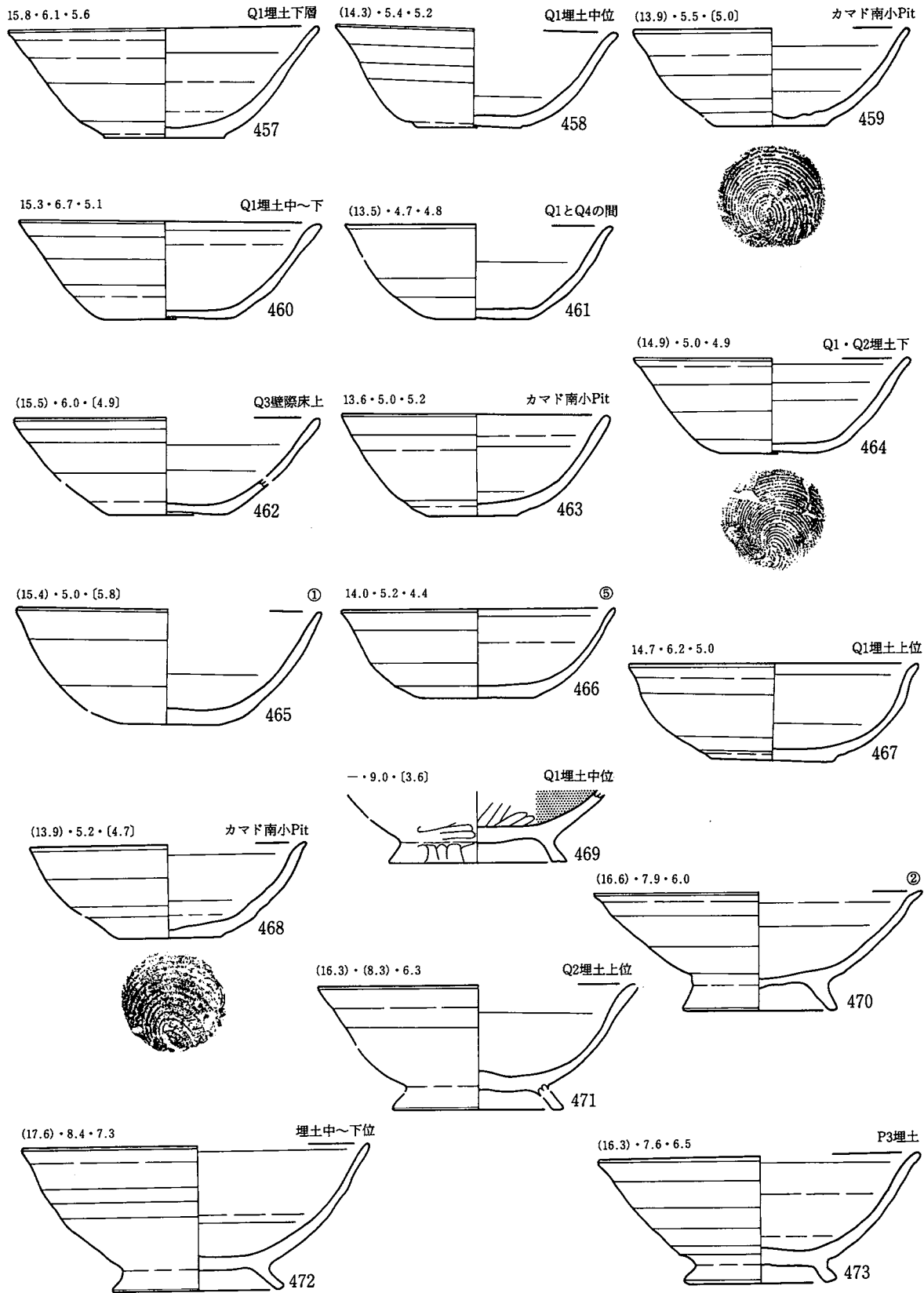
<カマド> 東壁の中央から南よりに位置している。カマドの天井や袖は失われており、左袖の芯材として使用されたと見られる長方形の礫が直立しているのみである。礫は堅く締まった黄褐色土中に据えられている。燃烧部は45×33cmの不整形に焼土が形成され、焼土の最大厚は6cmである。

煙道部は長さ1m、幅53cmの刳り貫き式である。煙道の底は燃烧部より緩やかな下がり勾配で、煙出しに至る。埋土は炭、黄褐色土粒、焼土粒などを含む暗褐色土～黒褐色土と天井の崩落土である。煙出しの埋土



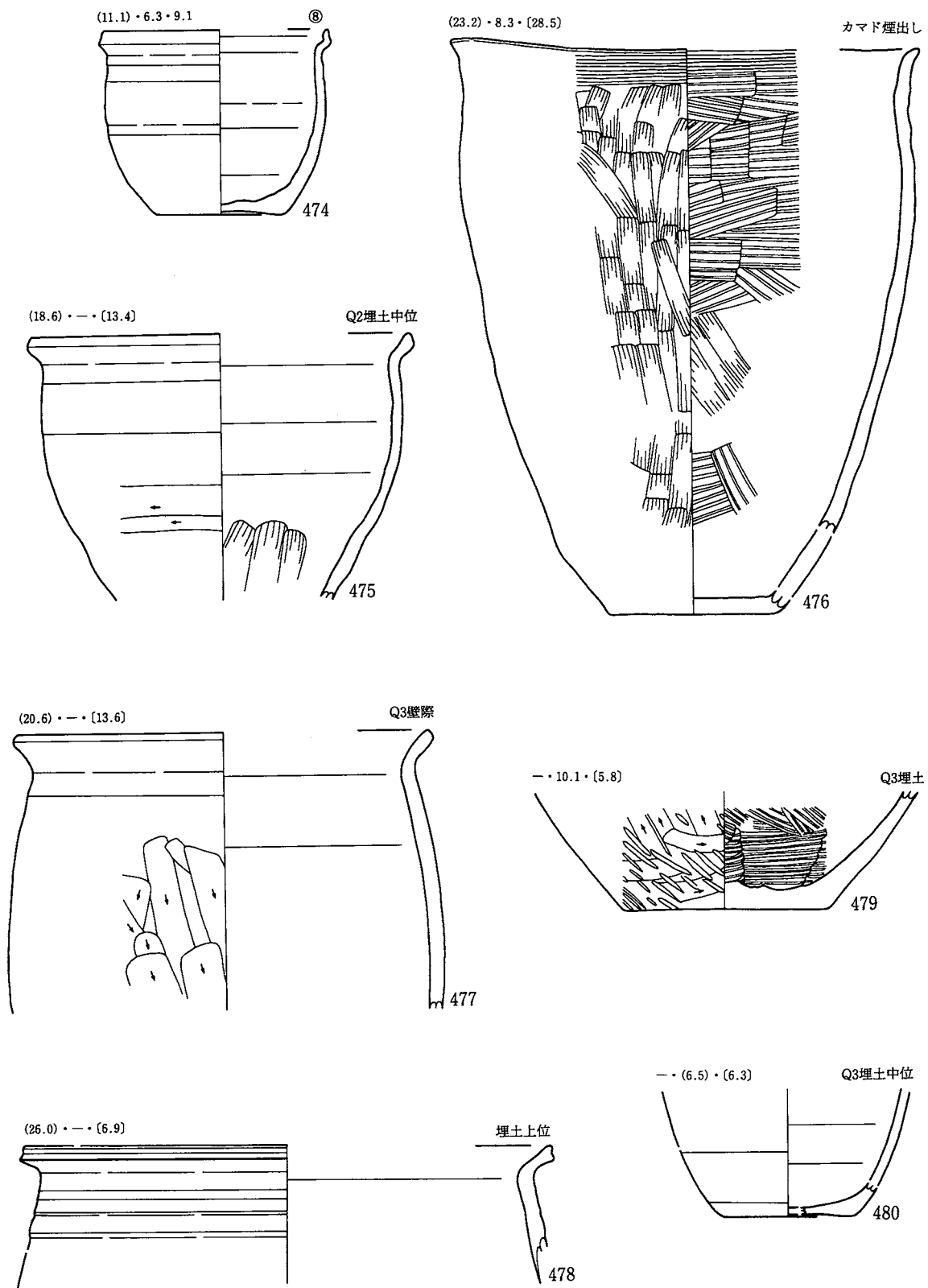
第139図 RA126竪穴住居跡出土遺物(1)

S=1/3



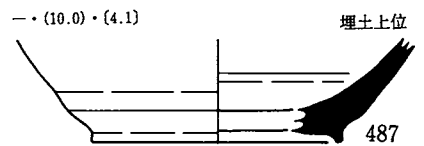
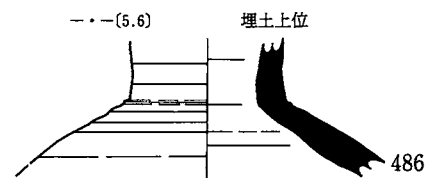
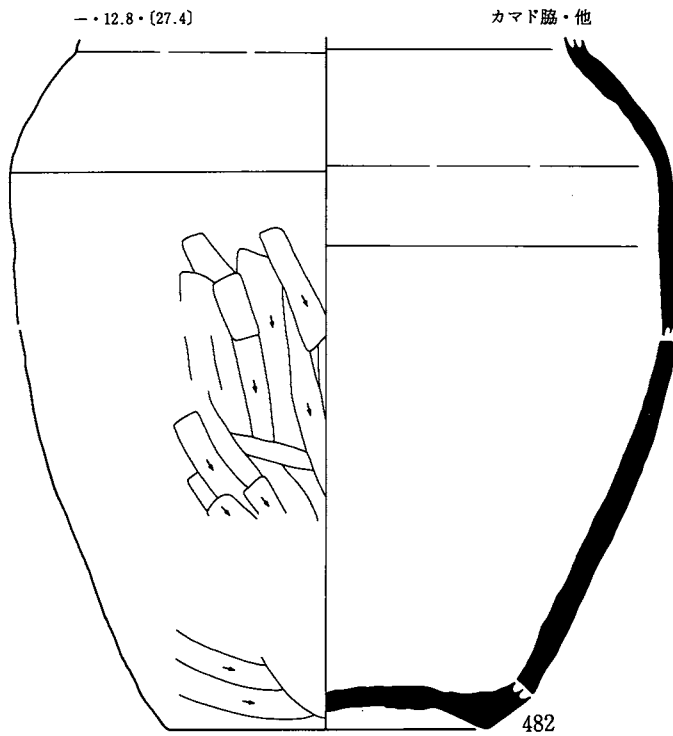
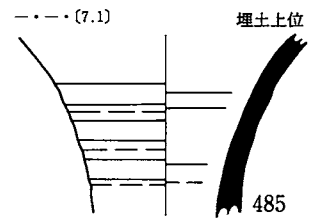
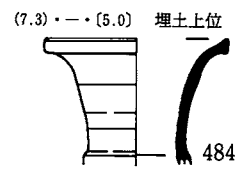
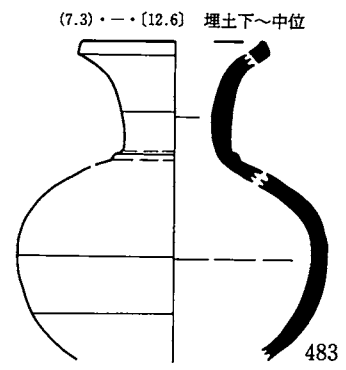
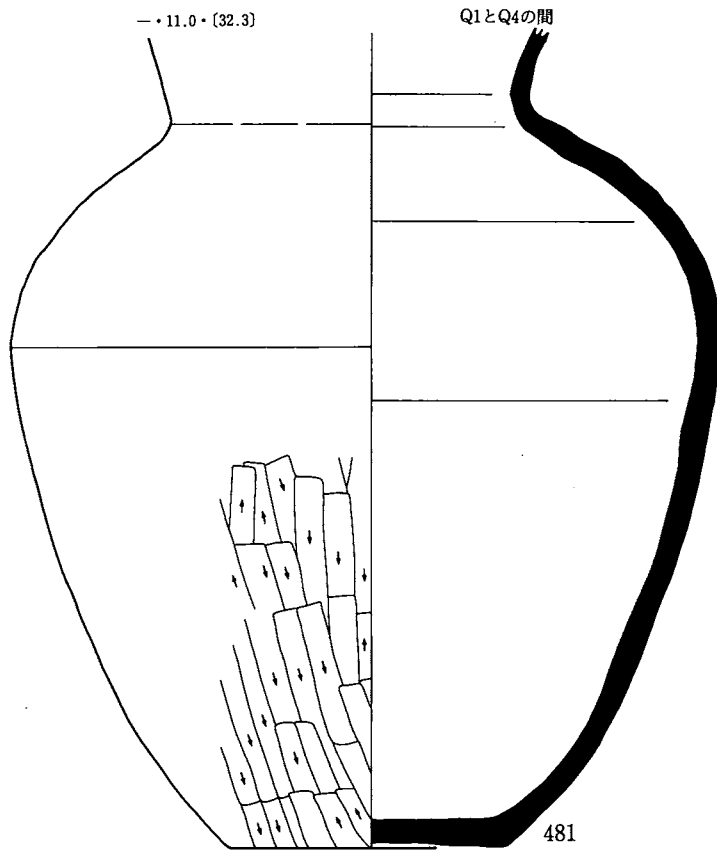
S=1/3

第140図 RA126竪穴住居跡出土遺物(2)



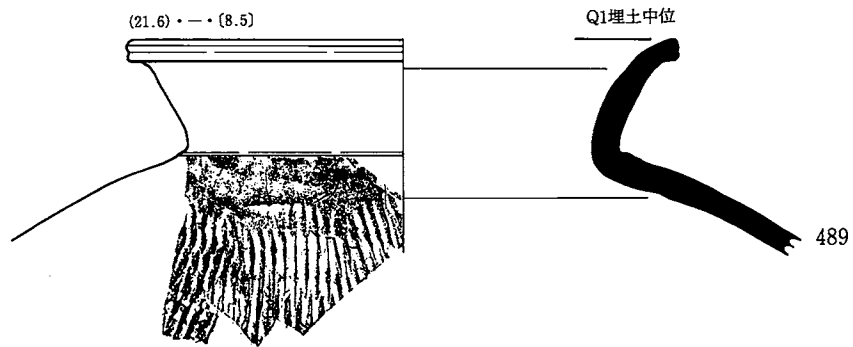
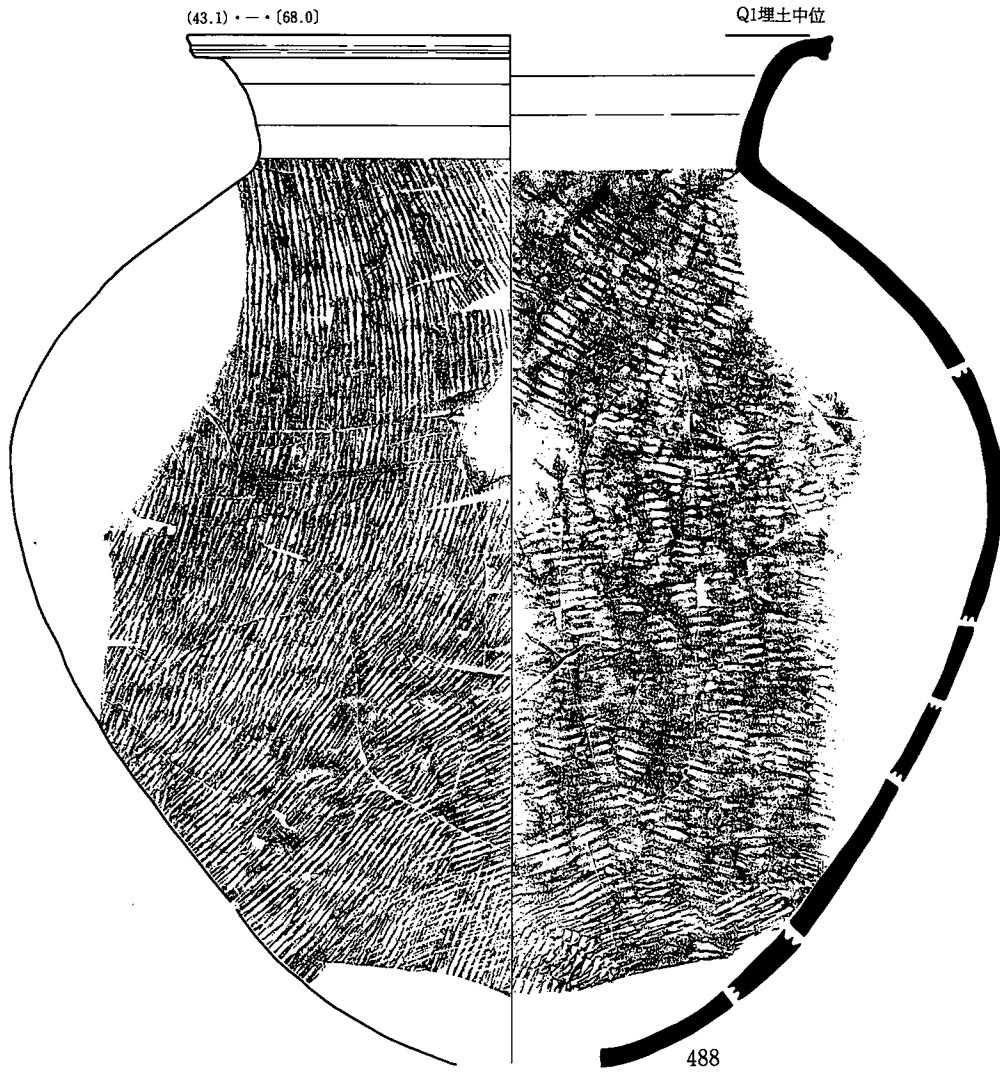
S=1/3

第141図 RA126竪穴住居跡出土遺物(3)



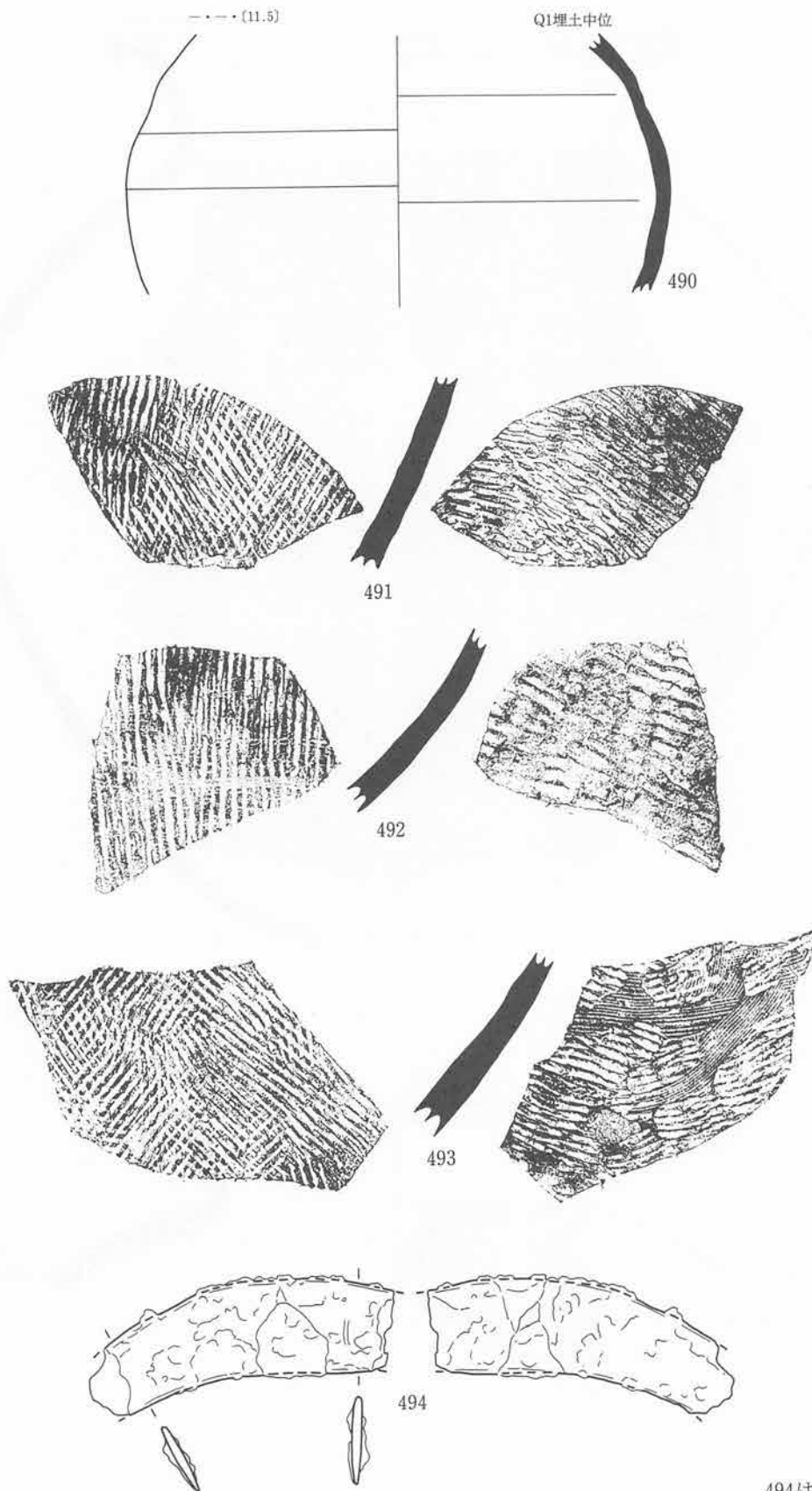
S=1/3

第142図 RA126竪穴住居跡出土遺物(4)



489はS=1/3  
488はS=1/5

第143図 RA126竖穴住居跡出土遺物(5)



494はS=1/2  
 他はS=1/3

第144図 RA126竪穴住居跡出土遺物(6)

中には土師器甕の比較的大きな破片や礫が含まれる。

＜遺物＞ 埋土中、床面ともにおびただしい数の土器が出土した。ロクロ使用の土師器坏や甕、ロクロ不使用の土師器甕、内面に黒色処理を施さないいわゆる赤焼き土器の坏、高台坏、須恵器大甕、壺、長頸瓶である。須恵器大甕と壺は、主に南西側と西側の埋土中から破片の状態出土した。炭と須恵器破片が交互に重なって出土している部分もある。488・489 は住居北西側の埋土中位から出土した。481・490 は西側埋土中位から出土した甕である。土師器坏は床面に数個重ねた状態で出土している 436・450 がある。床面に形成された焼土上から出土した坏は 466 である。そのほか床面から出土した土器は 462・470 の坏、474 の小型の甕である。また、P7からは 459・468 が出土している。カマド煙出しからは土師器のロクロ不使用の甕 476 が出土した。494 は床面に形成された焼土上から出土した鎌である。

＜時期＞ 出土した遺物から平安時代と考えられる。

(金子)

### RA 127 竪穴住居跡 (第 145 図、写真図版 63)

＜位置・重複関係＞ 調査区西側の -1-A 区に位置する。重複関係はない。遺構のほとんどは調査区外に延びており、検出したのは南西コーナー付近である。また、道路の路肩工事のため道路際は攪乱を受けている。検出面はIV層上面である。

＜平面形・規模＞ 調査区外に延びているため不明な点が多いが、方形を基調としていると考えられる。規模は不明である。

＜埋土＞ 黒褐色土で、下層は黄褐色土粒を多量に含む。＜壁・床＞ 壁は床から外傾して立ち上がる。床は若干の凹凸はあるもののほぼ平坦で、黄褐色土ブロックを含む褐色土で貼り床が施される。締まりはあまりない。

＜柱穴＞ 壁際から P1～P4 の柱穴状の小土坑

土坑No	P1	P2	P3	P4
直径cm	52×34	47×45	28×25	25×21
深さcm	20	5	8	12

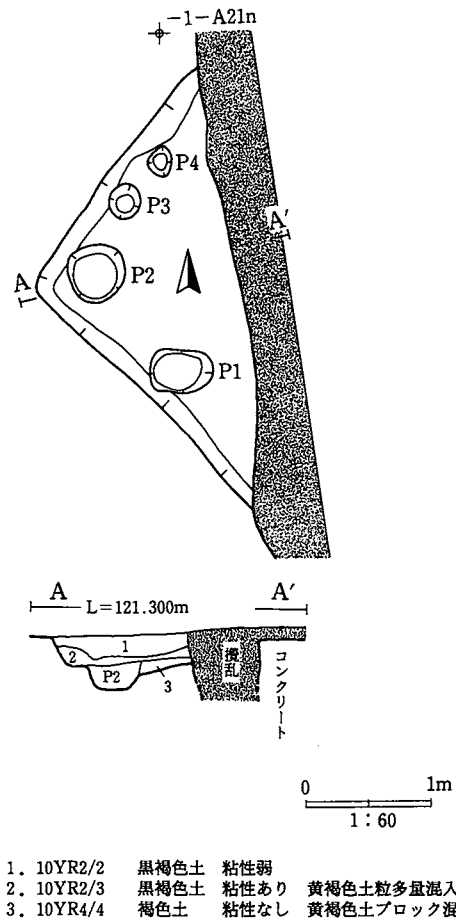
が検出された。やや浅いが、柱穴の可能性はある。

＜他の施設＞ 検出しない。

＜遺物＞ 埋土から小片の須恵器がごく少量出土した。

＜時期＞ 出土した遺物から平安時代としたが、壁際に並ぶ柱穴から中世に属する可能性もある。

(金子)



第145図 RA127竪穴住居跡

### RA 128 竪穴住居跡 (第 146～149 図、写真図版 64・250)

＜位置・重複関係＞ 東側調査区の 1B～1C 区に亘って位置している。南東コーナーで中世の RG 042 堀、北西コーナーが RA 186 竪穴住居跡、中央部で RD 181 土坑と重複する。本遺構が RA 186 竪穴住居跡・R



D 181 土坑を切り、掘に切られている事から新旧関係は（新） R G 042 堀→ R A 128 竪穴住居跡→（旧） R A 186 竪穴住居跡・ R D 181 土坑である。土坑と R A 186 竪穴住居跡の新旧関係は不明である。IV層上面で黒褐色土の落ち込みで検出されている。

<平面形・規模> 北西と南東コーナーは削平されている事から詳細が不明である。検出された規模は 6.10×6.00 m を測り、平面形は隅丸方形を呈している。

<埋土> 埋土は黒褐色シルトを主体とする 13 層に大別される。上層はやや堅く締まり、下層はブロック状の褐色土との混合土で、焼土粒と炭を多く含んでいる。壁際には堅く締まった褐色土が堆積している。

<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は東壁 21 cm、西壁 14 cm、南壁 20 cm、北壁 32 cm である。床は黒褐色シルトの貼り床が施され、多少の小起伏が見られる。

<柱穴・他の施設> 柱穴は検出されない。土坑は P 1～P 6 の 6 基が検出されている。平面形は円形ないし楕円形である。埋土には炭と焼土粒

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	72×64	56×42	145×104	61×54	98×26	66×42
深さcm	14	10	13	6	7	14

を混入する土坑が多い。用途は不明である。

<カマド> カマドは西壁の中央部やや南寄りに設置している。本体部は崩落している事から上部構造が不明である。両袖部はIV層を削り出して造られているが、削平され僅かに下端部が現存するだけである。燃焼部は焼成を強く受け、焼土が焚き口部の後方まではみ出して広がっている。焼土の形成は良く径 123×98 cm の不整形で、厚さが 18 cm である。支脚は燃焼部の前方に径 18×11 cm、厚さ 6 cm の亜円礫を使用している。

煙道部は削り貫き式で、長さが 1.66 m を測る。燃焼部から下がり勾配で煙出し部へと続いている。側壁は焼成を受け赤褐色化をしている。煙出し部は径 42×39 cm、深さ 74 cm の円形状土坑が掘り込まれ、埋土の黒褐色土シルトに炭と焼土粒を多く含む。

<遺物> 床上とカマド周辺部から土師器坏・甕、須恵器坏・長頸瓶・甕、石製品、鉄製品等が出土している。495 はロクロ使用の土師器坏 (A I a 群) で、口縁部を欠損している。内面は磨滅しているがヘラミガキ後に黒色処理を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。

496 は底部の切り離しが回転糸切りで、内外面にロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a 群) である。口縁部は欠損しており、胎土に砂と石を多く含んでいる。

497・499 は須恵器坏 (B II a 群) で、497 の口縁部は外反し、499 が外傾して立ち上がっている。底部の切り離しは回転糸切りである。

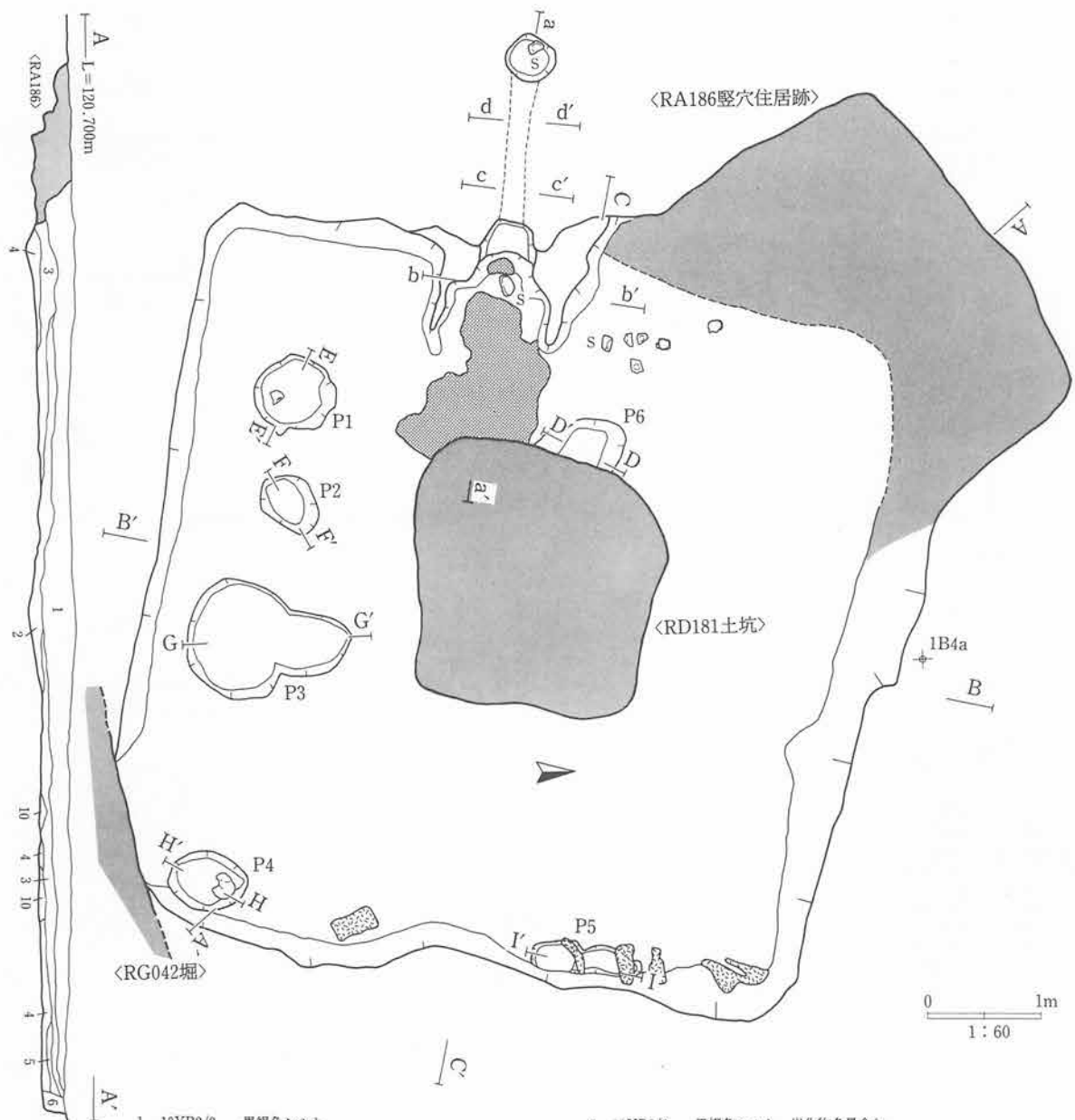
500 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) の体部下半～底部破片で、体部外面はヘラナデ調整を施している。底部は木葉痕である。

498 は底部切り離しが回転糸切りの須恵器長頸瓶の底部破片である。506 は須恵器長頸瓶の体部上半～肩部破片で、内外面ともロクロ成形痕が明瞭である。

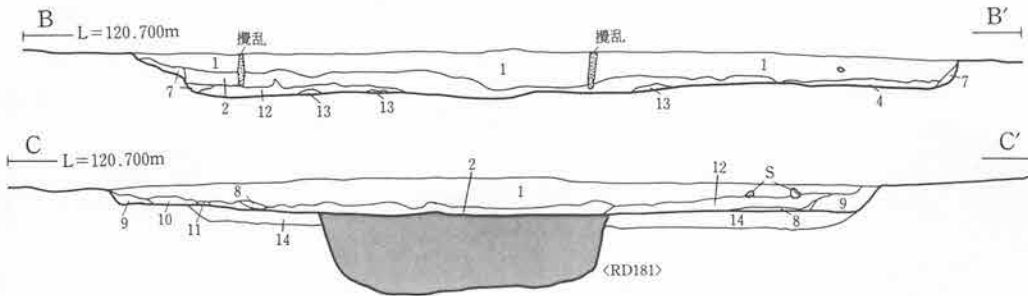
501～505 は須恵器甕の体部破片である。体部外面は平行叩き具痕、内面が放射状の当て具痕と平行叩き具痕が見られる。

507 の石製品は端部に使用痕がある敲石で、長さ 5.5 cm、幅 4.7 cm、厚さ 2.3 cm を測る。508 の鉄製品は床上から出土した釘で、両端部を欠損しており、現存長は 3.7 cm、幅 4 mm、厚さ 3 mm である。

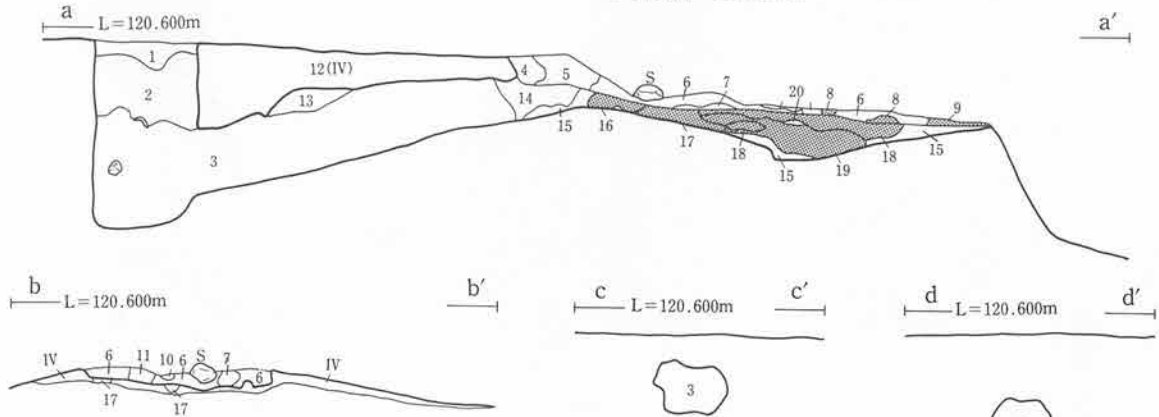
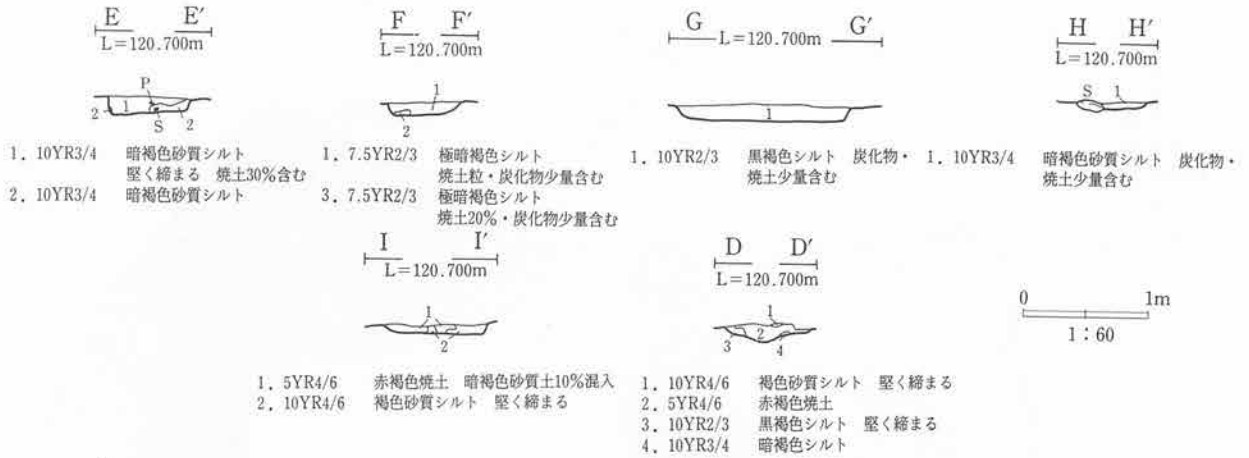
<時期> 出土した坏と甕から平安時代前期に比定される。 (高橋)



- |                |          |                   |             |          |                      |
|----------------|----------|-------------------|-------------|----------|----------------------|
| 1. 10YR2/2     | 黒褐色シルト   |                   | 8. 10YR2/2  | 黒褐色シルト   | 炭化物多量含む              |
| 2. 10YR2/2     | 黒褐色シルト   | 褐色土10%混入 焼土・炭化物含む | 9. 10YR3/4  | 暗褐色シルト   |                      |
| 3. 10YR2/1~2/2 | 黒~黒褐色シルト | 炭化物含む             | 10. 10YR3/4 | 暗褐色シルト   | 黒褐色土10%混入 炭化物・焼土微量含む |
| 4. 10YR2/2     | 黒褐色シルト   | 褐色砂質土20%混入        | 11. 10YR3/4 | 暗褐色シルト   | 黒褐色土10%混入 焼土微量含む     |
| 5. 10YR2/3     | 黒褐色シルト   | 褐色土5%混入           | 12. 10YR2/2 | 黒褐色シルト   | 褐色土10%混入 炭化物多量含む     |
| 6. 10YR2/3     | 黒褐色シルト   | 褐色土10%混入          | 13. 10YR5/6 | 黄褐色砂質シルト |                      |
| 7. 10YR4/4~4/6 | 褐色砂質シルト  | 堅く締まる             | 14. 10YR2/2 | 黒褐色シルト   | 褐色土20%混入             |

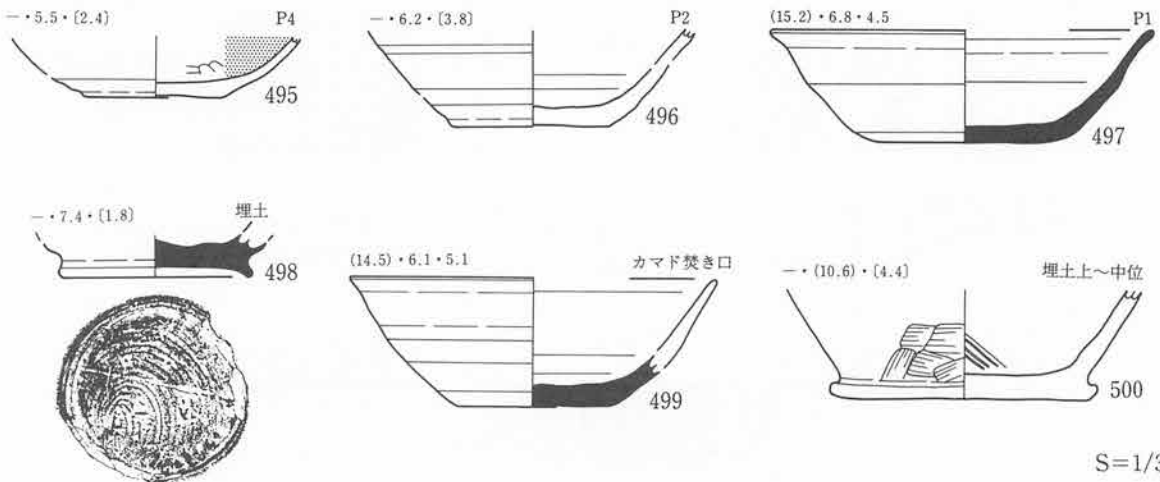


第146図 RA128竪穴住居跡(1)

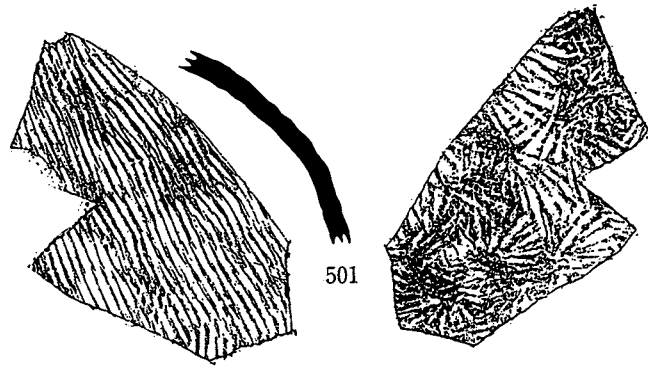


- |                                 |                            |
|---------------------------------|----------------------------|
| 1. 10YR2/3 黒褐色シルト 堅く締まる 焼土粒3%含む | 11. 5YR3/3 暗赤褐色焼土 暗褐色砂質土混入 |
| 2. 10YR2/2~3 黒褐色土 堅く締まる 炭化物微量含む | 12. 10YR4/6 褐色砂質シルト 堅く締まる  |
| 3. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性に富む 焼土含む    | 13. 10YR3/3 暗褐色シルト 堅く締まる   |
| 4. 5YR2/3 極暗赤褐色焼土               | 14. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土10%混入 |
| 5. 10YR3/3 堅く締まる 黒褐色シルト         | 15. 10YR4/6 褐色砂質シルト 堅く締まる  |
| 6. 5YR3/3 暗赤褐色焼土                | 16. 5YR4/6 赤褐色焼土 黒褐色土10%混入 |
| 7. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 焼土粒50%含む     | 17. 5YR4/6 赤褐色焼土           |
| 8. 5YR4/6 赤褐色焼土                 | 18. 5YR4/6 赤褐色焼土 黒褐色土20%混入 |
| 9. 5YR3/6 暗赤褐色焼土                | 19. 5YR5/8 暗赤褐色焼土          |
| 10. 5YR5/8 暗赤褐色焼土               | 20. 10YR5/4 濃い黄褐色砂質土       |

0 50cm  
1:30



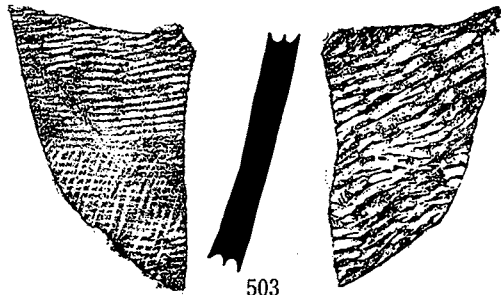
第147図 RA128竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



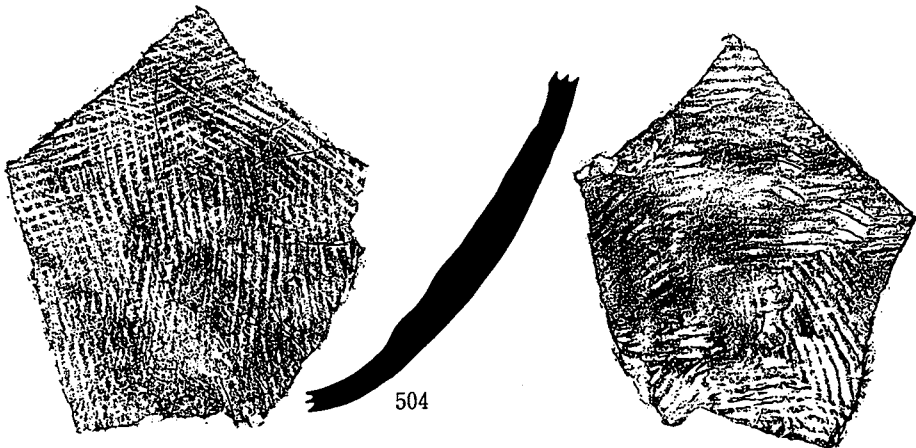
501



502



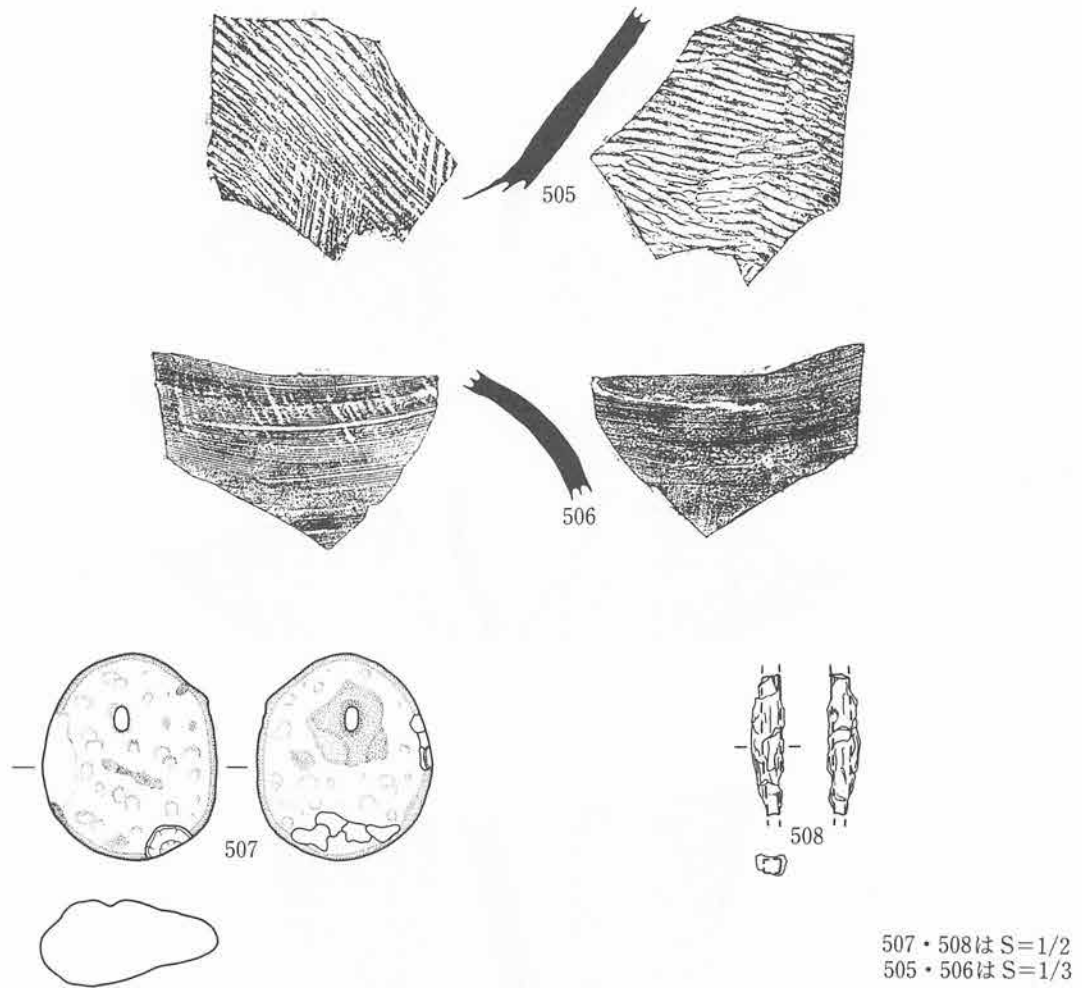
503



504

S=1/3

第148图 RA128竖穴住居跡出土遺物(2)



507・508は S=1/2  
505・506は S=1/3

第149図 RA128竪穴住居跡出土遺物(3)

R A 134 竪穴住居跡 (第 150 図、写真図版 65・251)

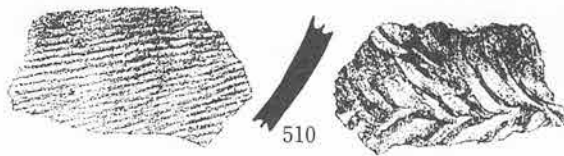
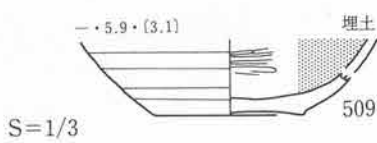
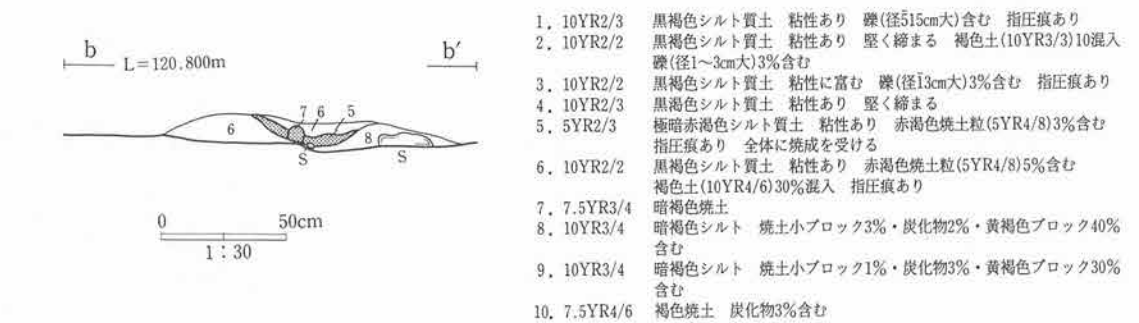
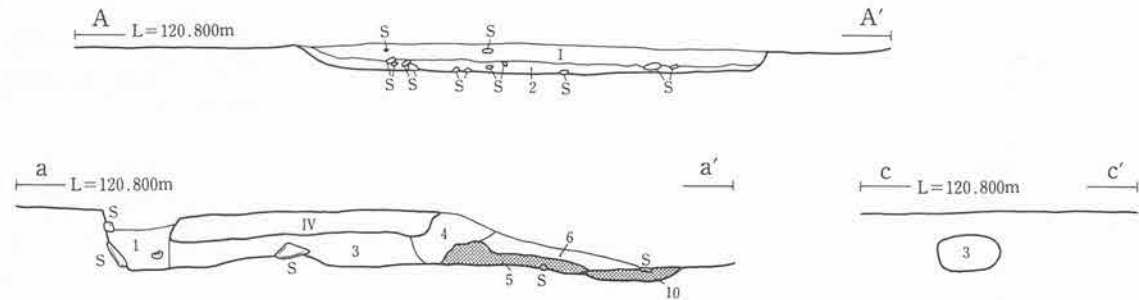
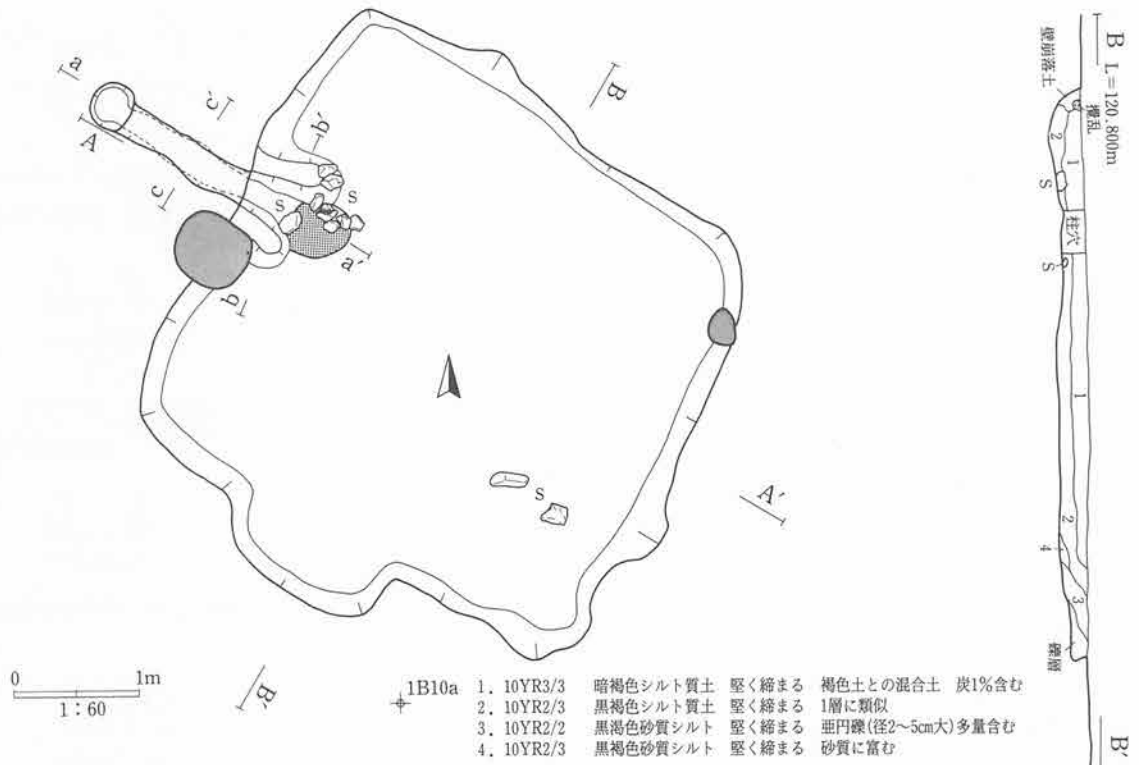
<位置・重複関係> 東側調査区の1A～1B区に亘って位置し、一部でR B 005・007 掘立柱建物跡と重複している。遺構の新旧関係は、本遺構が切られている事から(新) R B 005・007 掘立柱建物跡→(旧) R A 134 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認されている。<平面形・規模> 平面形は南西壁側で50cmほど張り出しがある隅丸方形を呈しており、規模は3.76×3.50mである。

<埋土> 埋土は4層に大別される。上層は暗褐色シルト質土で褐色土がブロックで混入し、下層が強く締まった黒褐色シルト質土で構成されている。壁際には珪円礫を多く含んでいる。<壁・床> 壁は床上から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁16cm、西壁18cm、南壁22cm、北壁14cmを測る。床は起伏があり、一部に礫層上面が露出している。貼り床は確認されていない。

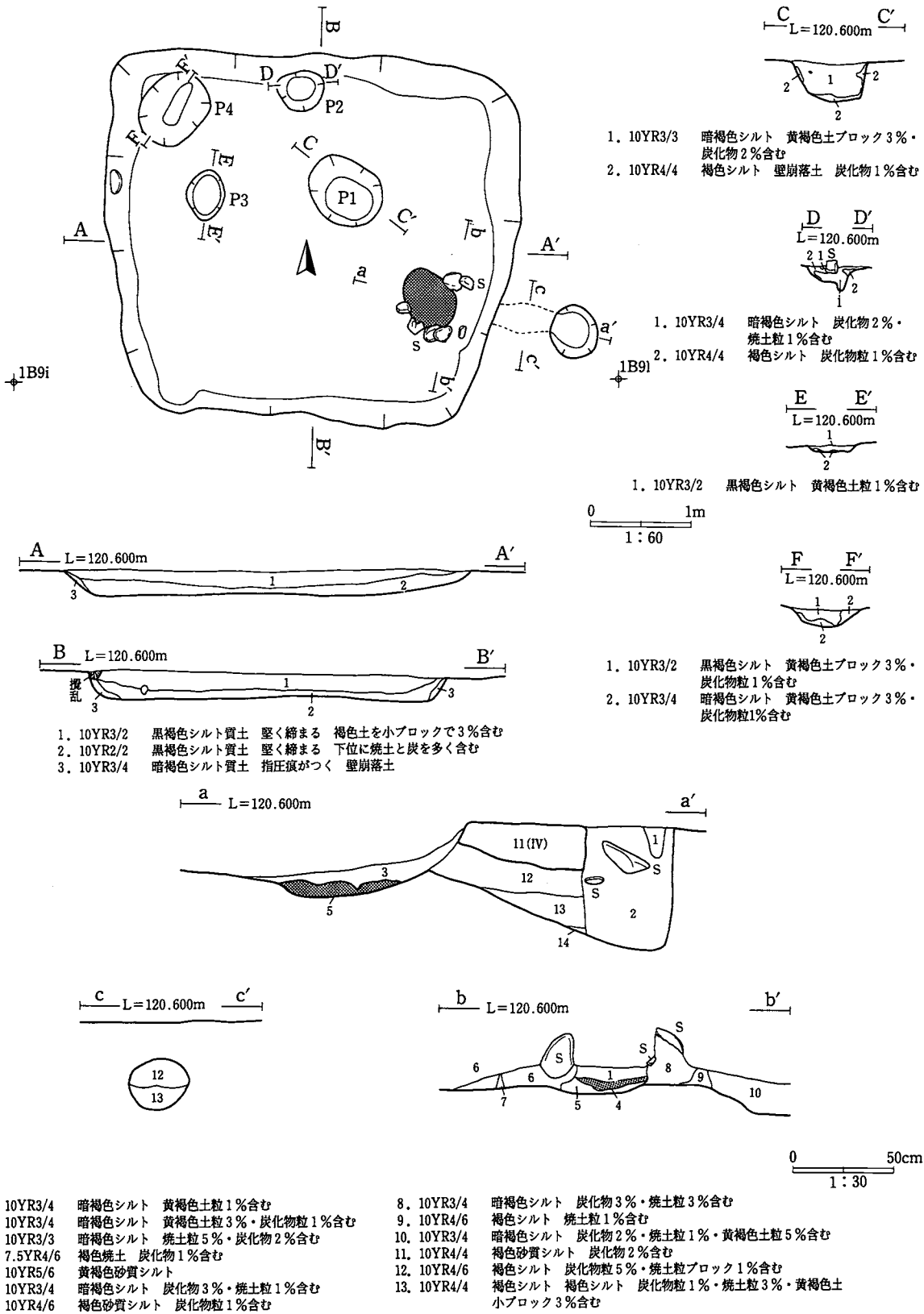
<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは北西壁の中央部に設置している。本体部は崩壊し、袖部上半部も削平されている。燃焼部の上にはカマド構築材の珪円礫や角礫が散在している。燃焼部は径52×43cmの楕円形状焼土が形成され、厚さが4cmである。

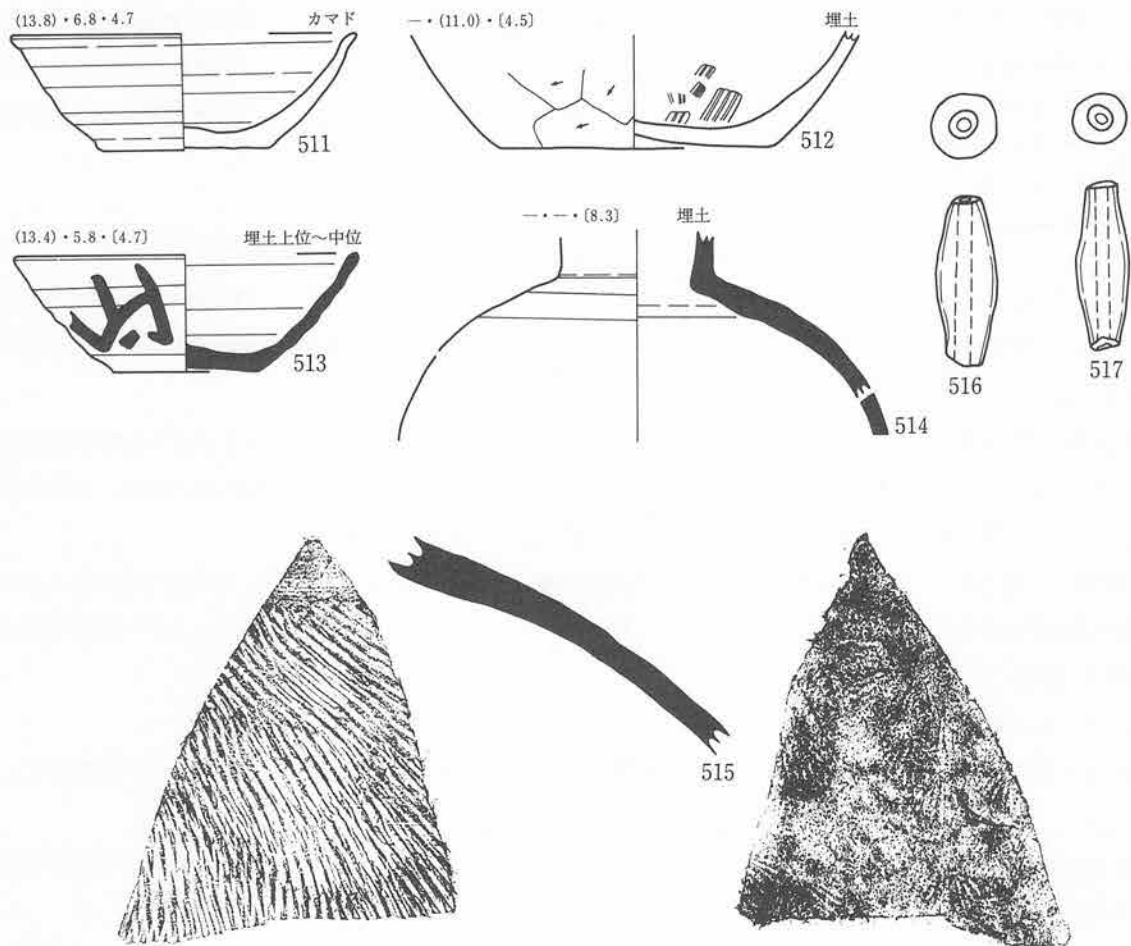
煙道部は径25×15cmの楕円形状に割り貫かれ、煙道は燃焼部から1m平らに延び、すこし上がってその後



第150図 RA134竪穴住居跡・出土遺物



第151図 RA136竪穴住居跡



第152図 RA136竪穴住居跡出土遺物

516・517はS=1/2  
511~515はS=1/3

緩やかな下がり勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径 38×34 cm、深さ 24 cm の楕円形状土坑が掘り込まれ、埋土の黒褐色土には上部構造材と思われる礫が多く混入する。

<遺物> 埋土から土師器坏、須恵器甕破片が出土している。509 は底部の切り離しが回転糸切りで、内面にヘラミガキ後に黒色処理を施したロクロ使用の土師器坏 (A I a 群) である。

510 は須恵器甕の体部破片で、体部外面に平行叩き具痕を施している。破片のため掲載しなかったが、ロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) の体部破片も出土している。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代前期に比定される。

(高橋)

#### R A 136 竪穴住居跡 (第 151・152 図、写真図版 66)

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区中央北寄りに位置している。検出は IV 層上面黒褐色土の落ち込みで確認している。<平面形・規模> 平面形は台形状を呈しており、規模は 3.60×3.20 m である。

<埋土> 埋土は 3 層に大別される。上層は褐色土を小ブロックで含む黒褐色シルト質土で、下層が炭と焼土粒を多く含む黒褐色シルト質土で構成されている。壁際には暗褐色土の壁崩落土が堆積している。

<壁・床> 壁は東・西壁が床上から緩やかに立ち上がり、南・北壁が外傾する。壁高は東壁 16 cm、西壁



25 cm、南壁 23 cm、北壁 27 cmを測る。床はほぼ平坦で、カマド周辺部が堅く締まる。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 柱穴は検出されない。北壁側から土坑が4基検出されている。平面形は楕円形状である。

土坑№	P 1	P 2	P 3	P 4
直径cm	77×61	46×39	50×38	75×58
深さcm	36	22	7	17

用途は不明であるが、壁際の2基は貯蔵穴かと思われる。

<カマド> カマドは東壁の南東コーナー寄りに設置している。本体部は崩壊し削平されており、僅かに左袖部の下端と燃焼部が現存するだけである。袖部には芯材に使用した長さ23 cm、幅16 cmの垂角礫が検出されている。燃焼部の上には垂角礫が数個散在する。燃焼部は径62×48 cmの楕円形状焼土が形成され、厚さが8 cmである。

煙道部は長さ1.04 mで、径30×26 cmの円形状に割り貫かれている。燃焼部から急な下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部には径52×49 cmの円形土坑が掘り込まれている。深さは61 cmである。埋土の暗褐色シルトには炭化物和礫を多く含んでいる。上部の構造は不明である。

<遺物> 埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・長頸瓶・甕、土製品が出土している。511は内外面にロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器(A II d群)である。口縁部は外傾して立ち上がり端部で僅かに外反する器形で、焼成も良好である。

513は外面に墨書された須恵器坏(B II a群)で、底部の切り離しは回転糸切りである。

512はロクロ不使用の土師器甕(A II群)の底部破片である。外面はヘラケズリ、内面がハケメ調整を施している。

514は須恵器長頸瓶の体部上半～口縁部破片で、外面の一部が剥落している。515は体部外面が平行叩き具痕、内面に放射状の当て具痕のある須恵器甕の体部上半～肩部破片である。

516・517の土製品は土錘である。ほぼ完形品で、長さは4.5 cm、幅1.4～1.7 cm、厚さ1.3～1.6 cmを測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。(高橋)

#### R A 137 竪穴住居跡(第153～155図、写真図版66・251・252)

<位置・重複関係> 東側調査区の1 B区に位置し、検出はIV層上面で確認している。他の遺構との重複関係はない。<平面形・規模> 平面形は歪のある隅丸長方形を呈しており、規模は3.80×3.30 mである。

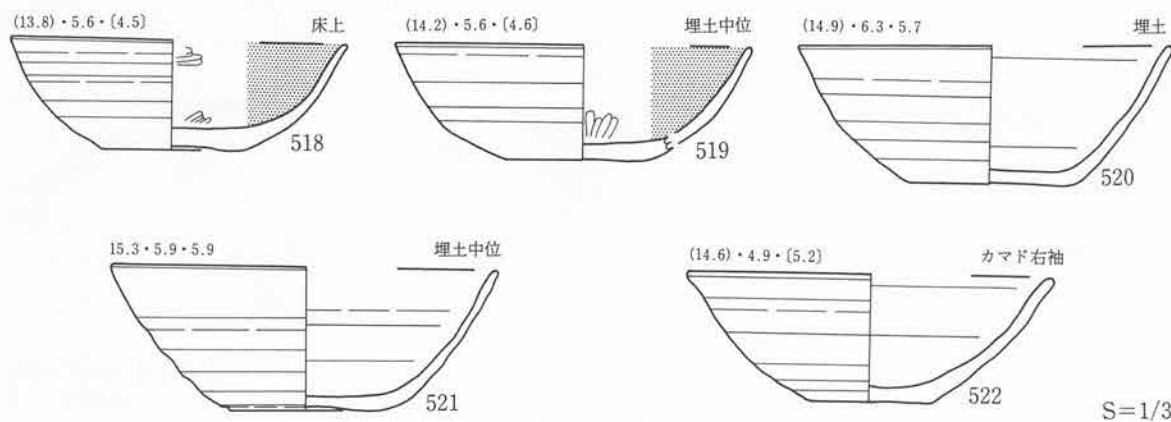
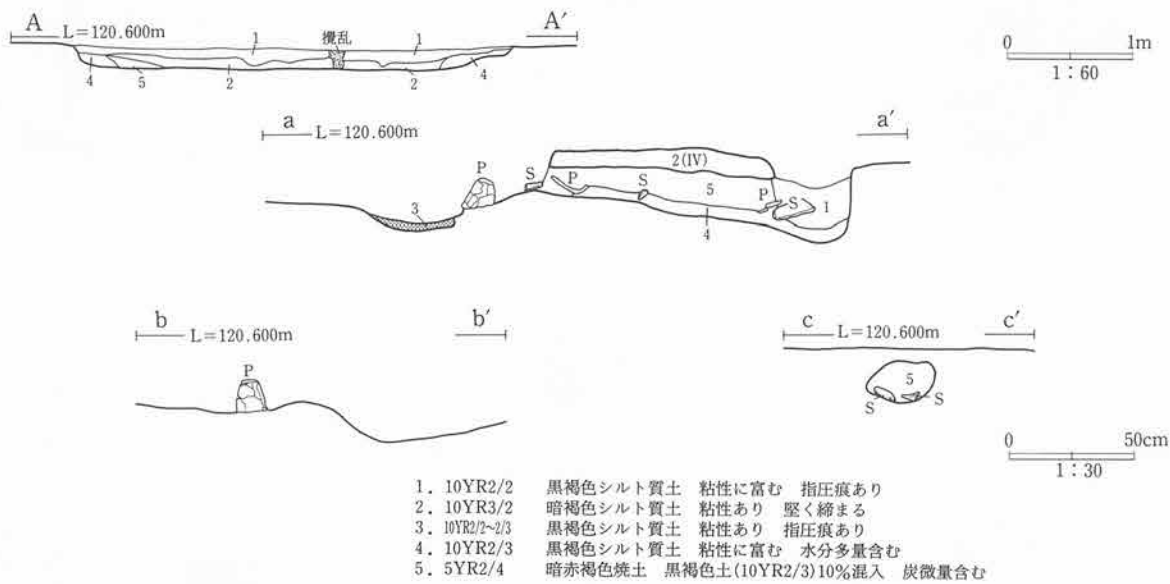
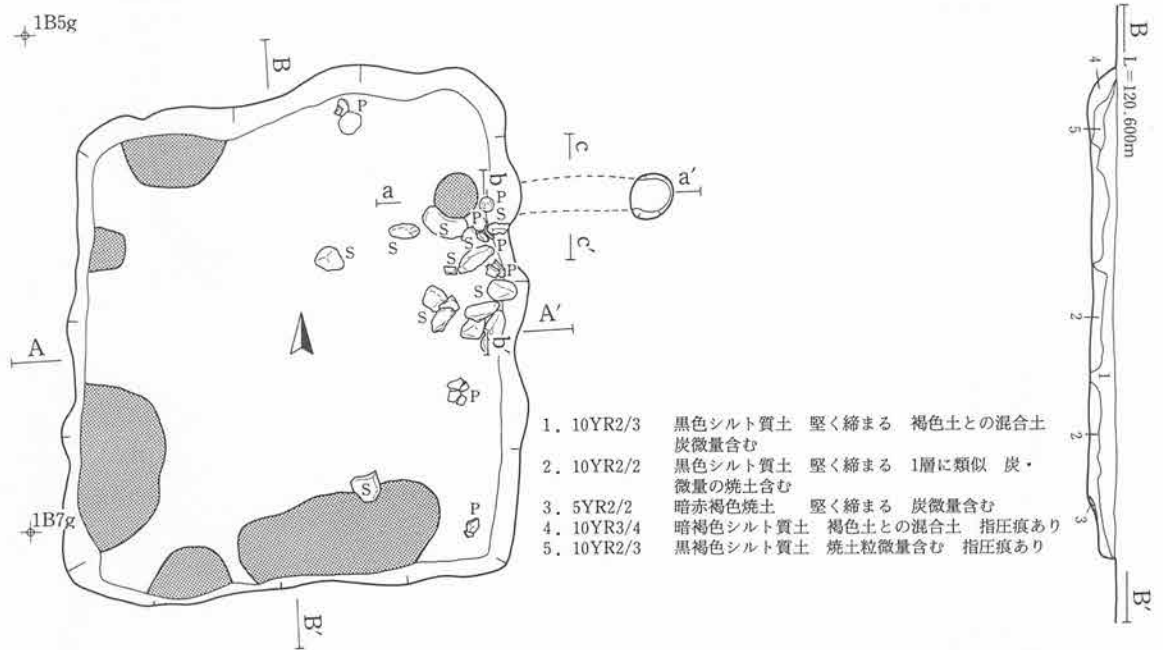
<埋土> 埋土はシルト質土を主体とする5層に大別される。上層は褐色土との混合土で微量の炭を含み、下層は堅く締まった黒褐色シルト質土で構成されている。<壁・床> 壁は床上から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁20 cm、西壁38 cm、南壁20 cm、北壁19 cmを測る。床はほぼ平坦で、堅く締まっている。厚さ2 cm前後の焼土の散布が5カ所に見られる。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

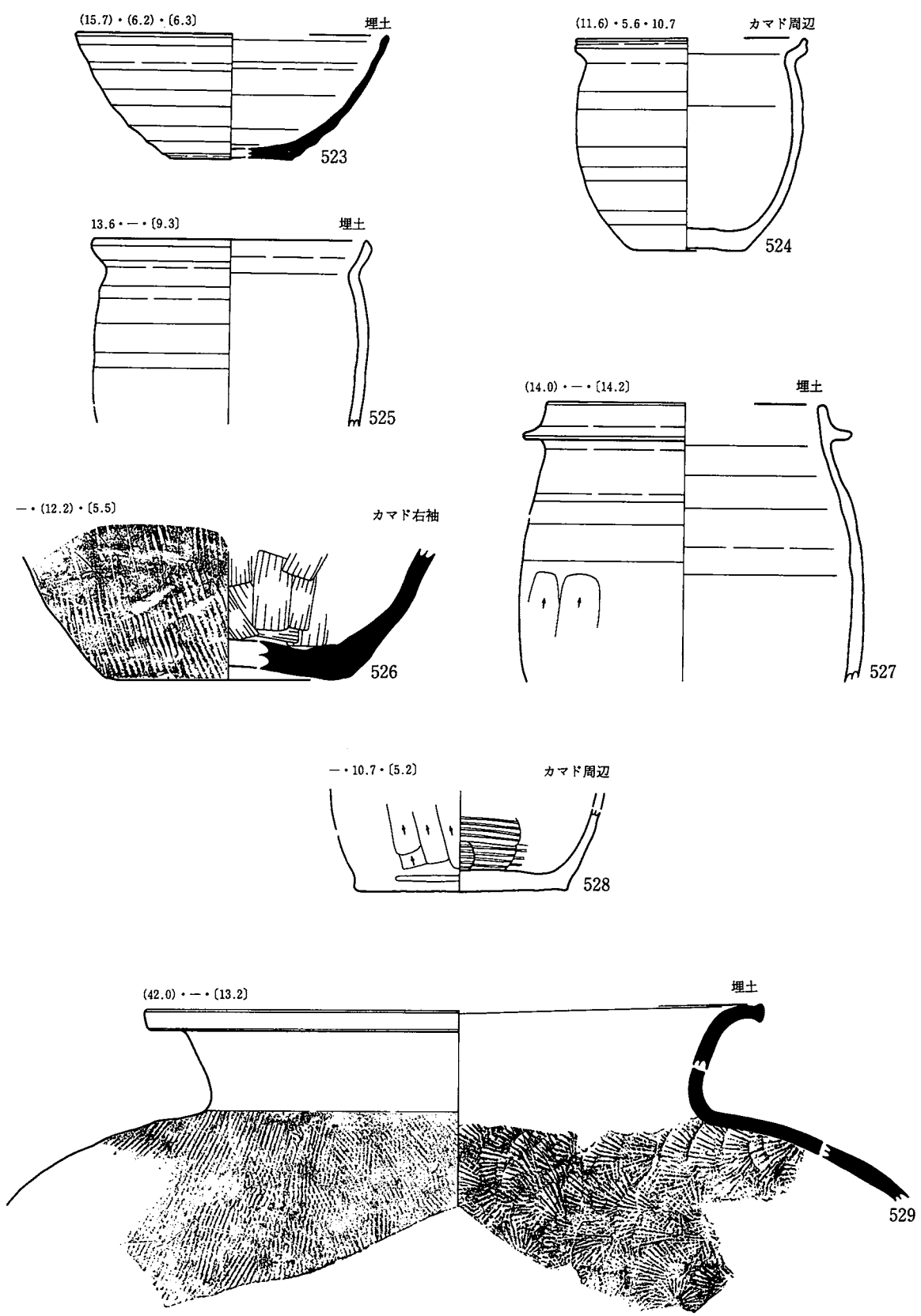
<カマド> カマドは東壁の北東コーナー寄りに設置しているが、本体部は崩壊しており、構築材と思われる垂角礫が燃焼部の南側の床上に散在している。現存する燃焼部は径35×34 cmの楕円形状焼土が形成されている。厚さは3 cmである。支脚は土師器甕の体部下半～底部破片を転用している。

煙道部は長さ1.22 mで、径85×17 cmの楕円形状に割り貫かれている。燃焼部から緩やかな下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部には径38×33 cmの楕円形土坑が掘り込まれ、深さが32 cmである。埋土の黒色シルト質土には炭と焼土粒を微量に含んでいる。

<遺物> カマド右袖部周辺と床上から土師器坏・甕・甗、須恵器坏・甕、鉄製品が出土している。518・

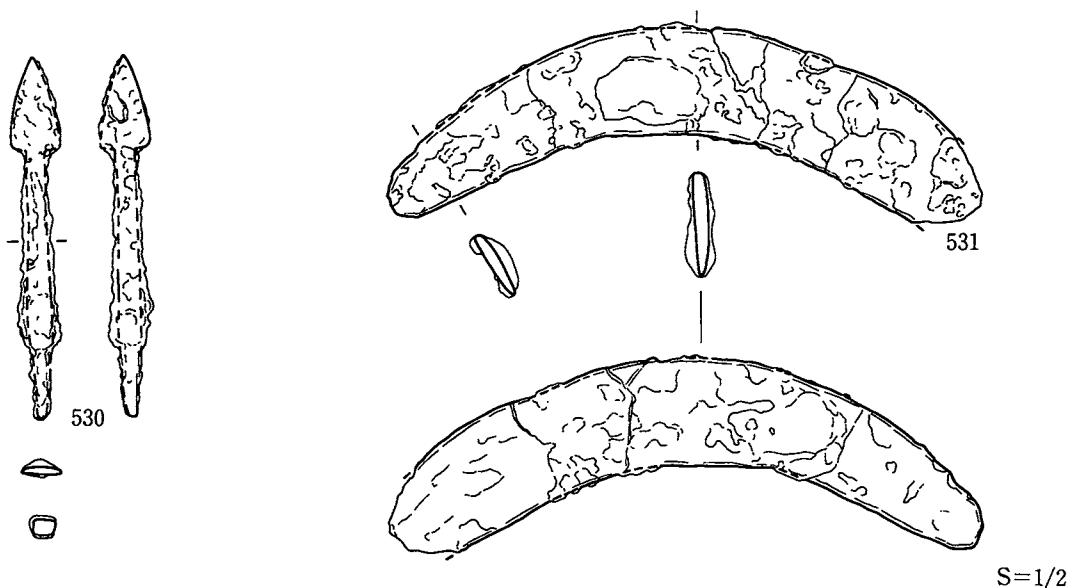


第153図 RA137竪穴住居跡・出土遺物(1)



523~528は S=1/3  
529は S=1/4

第154図 RA137竪穴住居跡出土遺物(2)



第155図 RA137竪穴住居跡出土遺物(3)

519 は内面をヘラミガキ調整後に黒色処理を施した、ロクロ使用の土師器坏 (A I a 群) である。

520～522 はロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a 群) で、口縁部は体部から外傾して立ち上がっている。底部の切り離しはいずれも回転糸切りである。

524・525・528 はロクロ使用の土師器甕 (A I 群) で、525 は底部、528 が体部～口縁部を欠損している。524 は小型の器形で、口縁部は短く頸部からくの字に外反し、口唇部に一条の沈線が巡っている。525 はロクロ成形痕が明瞭で、胎土に砂と石を多く含んでいる。528 の体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面がハケメ、底部がヘラナデ調整を施している。

527 は 2 分の 1 現存の単口式と思われるロクロ使用の土師器甕である。上端部はつばが巡り、体部外面下半に縦方向のヘラケズリ調整を施している。

526 は須恵器甕の底部破片で、体部外面が平行叩き具痕、内面がヘラナデ調整である。529 は須恵器甕の体部上半～口縁部の破片で、口縁部が頸部から強く外反して立ち上がっている。体部外面には平行叩き具痕、内面に放射状の当て具痕を施している。

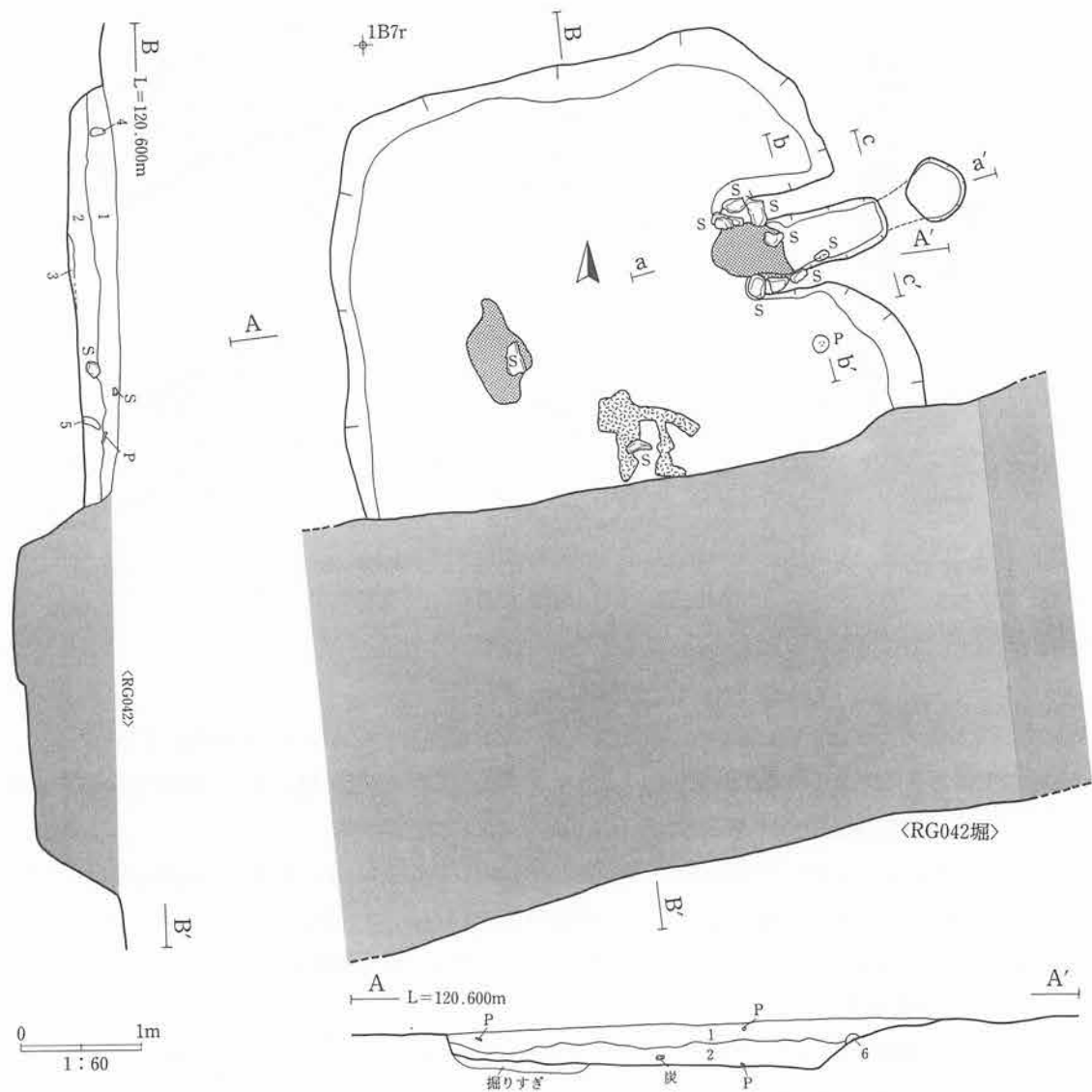
鉄製品は 530・531 である。530 はほぼ完形の鉄鏃で、長さ 9.7 cm、基部の幅 8 mm、厚さ 3 mm である。531 は鎌で一部が欠損している。現存長は 15.8 cm、幅 2.7 cm、厚さ 3 mm を測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代前期に比定される。 (高橋)

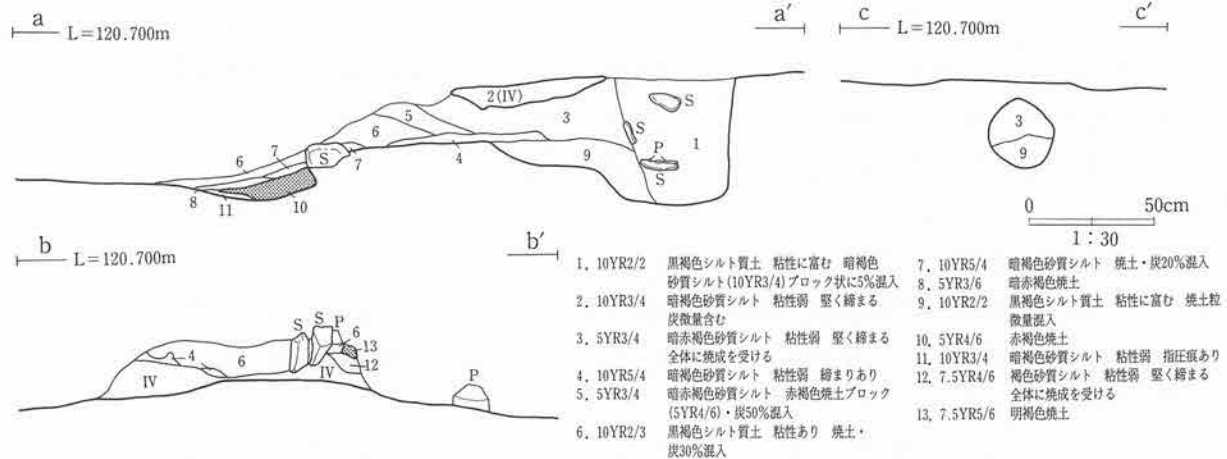
#### R A 138 竪穴住居跡 (第 156～158 図、写真図版 67・252・253)

<位置・重複関係> 東側調査区南側の 1 B 区に位置し、南側で中世の R G 042 堀と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から、(新) R G 042 堀→(旧) R A 138 竪穴住居跡である。検出面は IV 層上面で確認されている。

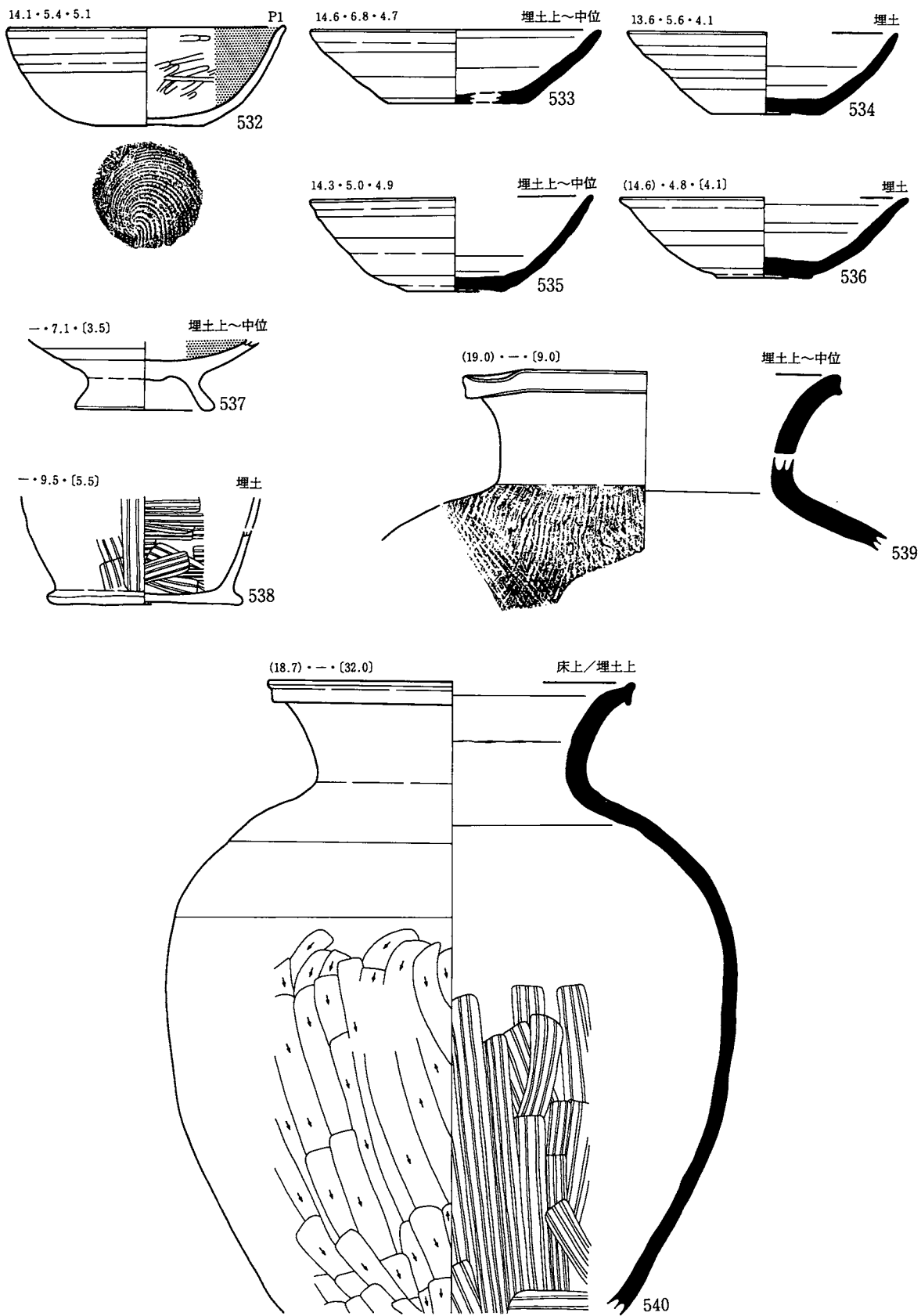
<平面形・規模> 南側半分が R G 042 堀に切られている事から、平面形・規模の全容は不明である。検出された規模は東辺 3.04 m、西辺 3.08 m、北辺 3.00 m である。検出された規模から一辺が 4.80 m 前後の



- |  |  |
|--|--|
| 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 土器片含む                 | 4. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 明赤褐色焼土粒(5YR5/6)5%含む |
| 2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 炭塊・赤褐色焼土塊(5YR4/8)多量含む | 5. 10YR4/4~6 褐色シルト質土 粘性あり                    |
| 3. 10YR4/6 褐色土(10YR4/6・径0.51cm)ブロック状に含む        | 6. 5YR3/2 暗赤褐色焼土 粘性あり                        |
| 3. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性なし                        |  |

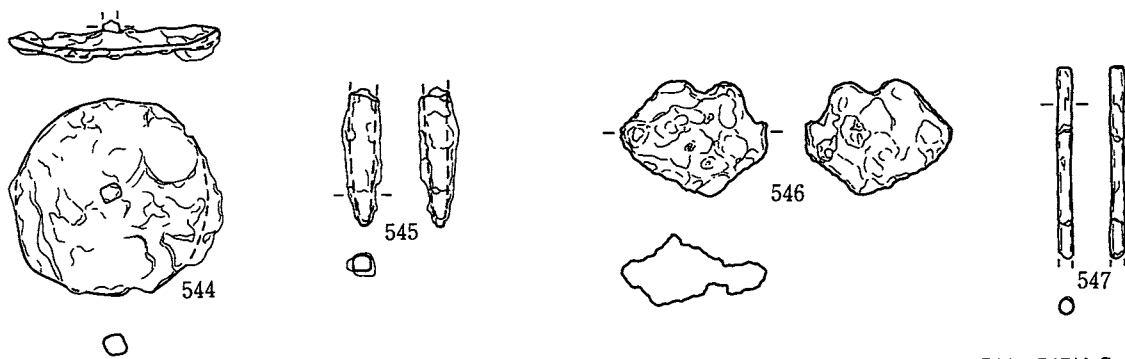
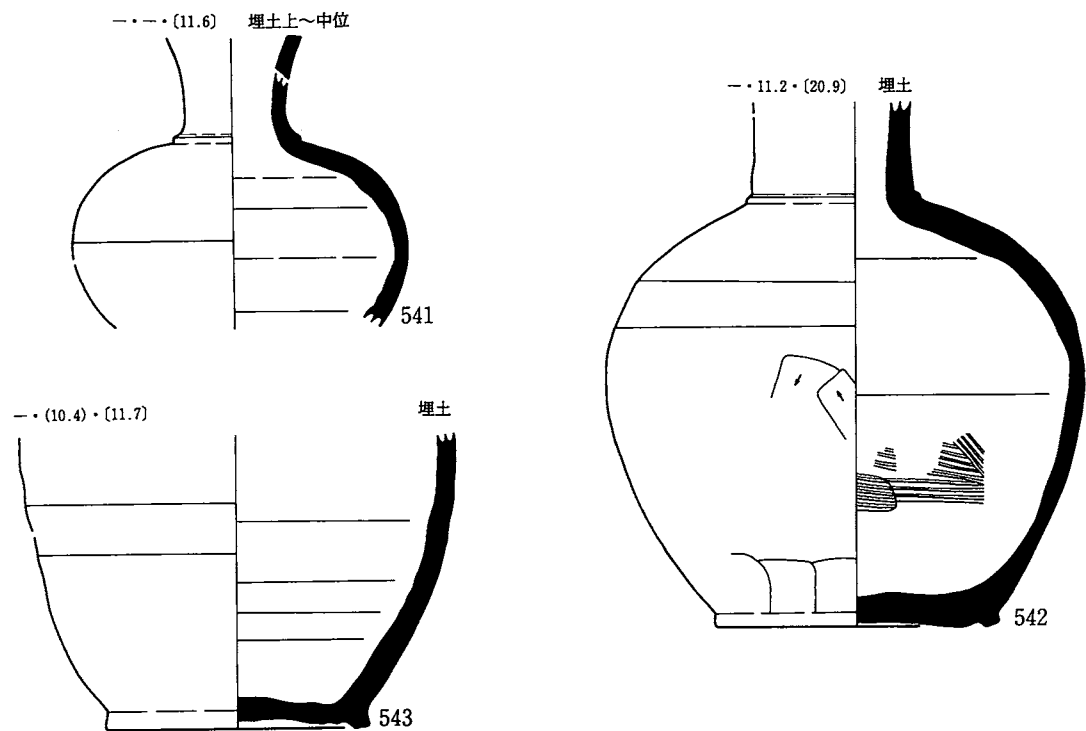


第156図 RA138竪穴住居跡



S=1/3

第157図 RA138竪穴住居跡出土遺物(1)



544~547は S=1/2  
541~543は S=1/3

第158図 RA138竪穴住居跡出土遺物(2)

隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする7層に大別される。上層からは土器が多く出土し、下層は褐色土をブロック状混入し、炭と焼土を多量に含んでいる。焼失住居と思われる。壁高は東壁 28 cm、西壁 25 cm、北壁 38 cmを測る。床面はほぼ平坦で、カマド周辺部が堅く締まっている。中央部付近の床上には炭化材と焼土が散在している。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁側に設置されている。本体部は崩壊し、袖部下端と燃焼部が現存するだけである。袖部はIV層を削りだして造られ、焚き口側の側壁には芯材に垂角礫を使用している。燃焼部は径 60×45 cmの楕円形状の焼土が形成され、厚さが 8 cmを測る。支脚は径 18×9 cm、厚さ 10 cmの垂円礫を使用している。

煙道部は3分の2が崩落している。長さ1 m、径28×27 cmの楕円形状に割り貫かれ、燃焼部から75 cmは水平に延び、そこから緩やかな下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部には径48×47 cmの円形土坑が掘り込まれている。深さは50 cmを測る。埋土の黒褐色シルトには礫を多く混入している。

<遺物> 床上と埋土中位から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・長頸瓶、鉄製品等が出土している。532はロクロ使用の土師器坏で、内面は放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。口縁部は体部から外傾して立ち上がり、底部が回転糸切り(A I a群)である。537はロクロ使用の土師器高台坏の破片である。内面は剝落が著しいが黒色処理を施している。

533~536は底部の切り離しが回転糸切りの須恵器坏で、口縁部は体部から外傾する533・535、内湾気味に立ち上がる534、外反する536がある。

538はロクロ不使用の土師器甕(A II群)の体部下半~底部破片で、器面調整は内外面ともハケメ調整を施している。

539は体部外面に平行叩き具痕を施した須恵器甕の口縁部破片である。540は底部を欠損した須恵器甕で、体部外面下半に縦方向のヘラケズリ、内面にハケメ調整を施している。

541~543は須恵器長頸瓶で、541が口縁部の一部と底部、542・543が口縁部を欠損する。いずれもロクロ成形痕が明瞭で、542の体部外面にはヘラケズリ調整が一部見られる。

鉄製品は544~547である。544・545は紡錘車と糸巻き棒破片で、紡錘車は径5.2 cm、厚さ2 mmを測る。546は鉄滓、547は釘で現存長5.1 cm、幅4 mm、厚さ4 mmである。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。(高橋)

#### RA 147 竪穴住居跡(第159・160図、写真図版68・69・254)

<位置・重複関係> 調査区南西の5-D区に位置する。RD 139土坑、RG 116溝跡と重複しており、新旧関係は(新)RG 116溝跡、RD 139土坑→(旧)RA 147竪穴住居跡である。検出はIII層下位~IV層上面である。<平面形・規模> 隅丸方形を呈する。規模は約3.60×3.35 mである。

<埋土> 黄褐色土粒の混入する黒褐色土が主体である。<壁・床> 壁はやや内湾気味に立ち上がる。床は平坦で、南西側を除く床中央部がよく締まって堅い。貼り床はない。

<柱穴> 検出されなかった。<他の施設> カマド北側に浅い土坑P 1が検出された。埋土には焼土粒、炭粒、土器片が含まれる。東壁中央壁際からはP 2が検出されている。

<カマド> 西壁中央よりやや北側に位置する。天井、袖は崩壊している。左側の袖に芯材として使用されたと考えられる坏が、伏せた状態で検出された。

土坑No	P 1	P 2
直径cm	92×52	55×47
深さcm	11	22

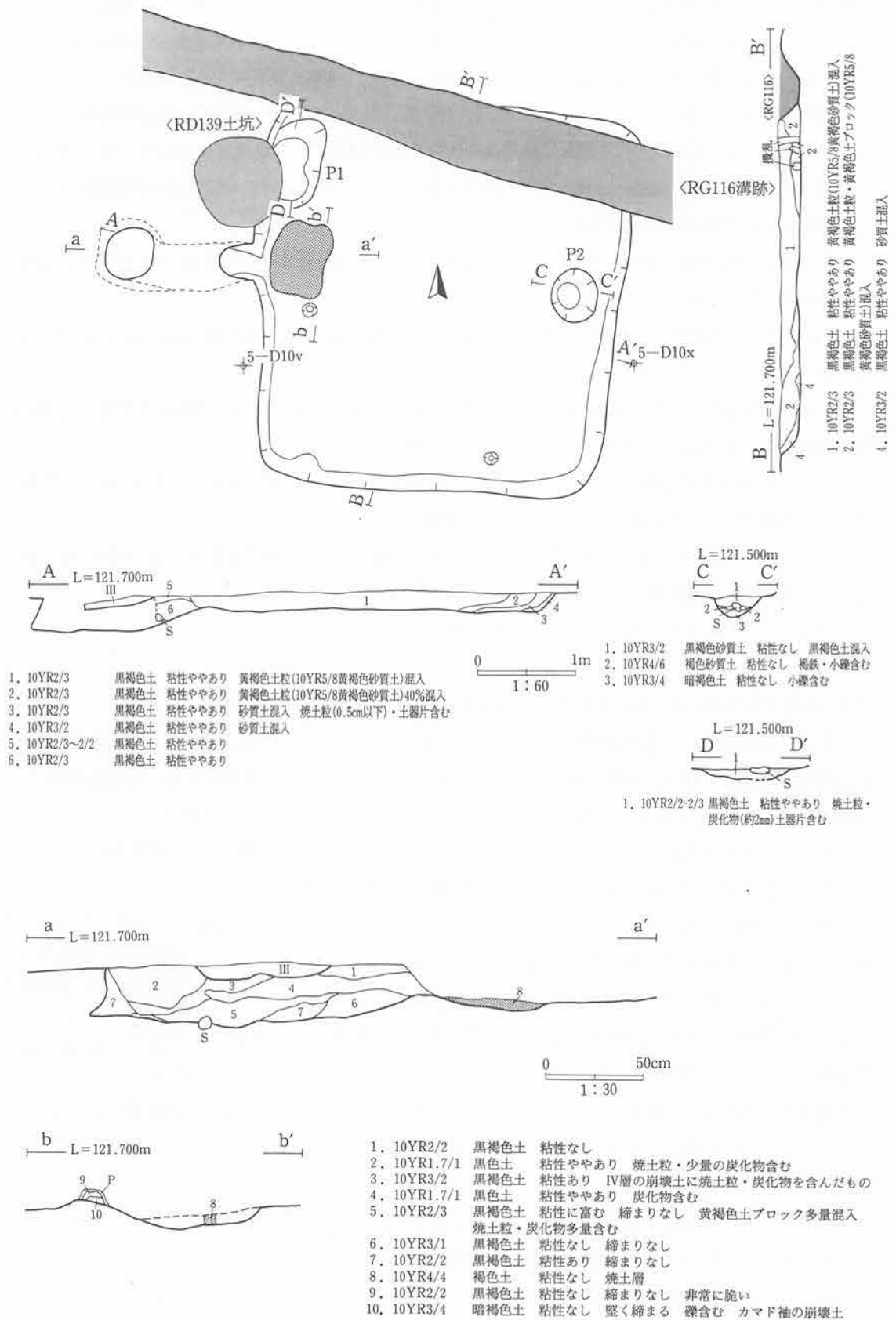
燃焼部は75×57 cmの不整形に焼土が形成されている。焼土の厚さは5 cmほどである。

煙道部は長さ1.6 m、幅42~50 cmの割り貫き式である。焼土や炭化物の混入した黒褐色土~黒色土が主体であるが、天井の崩壊土や焼土の堆積も見られる。煙出し部分からは底から子供の人頭大の礫や、上層の壁際から三角柱状の礫が出土した。

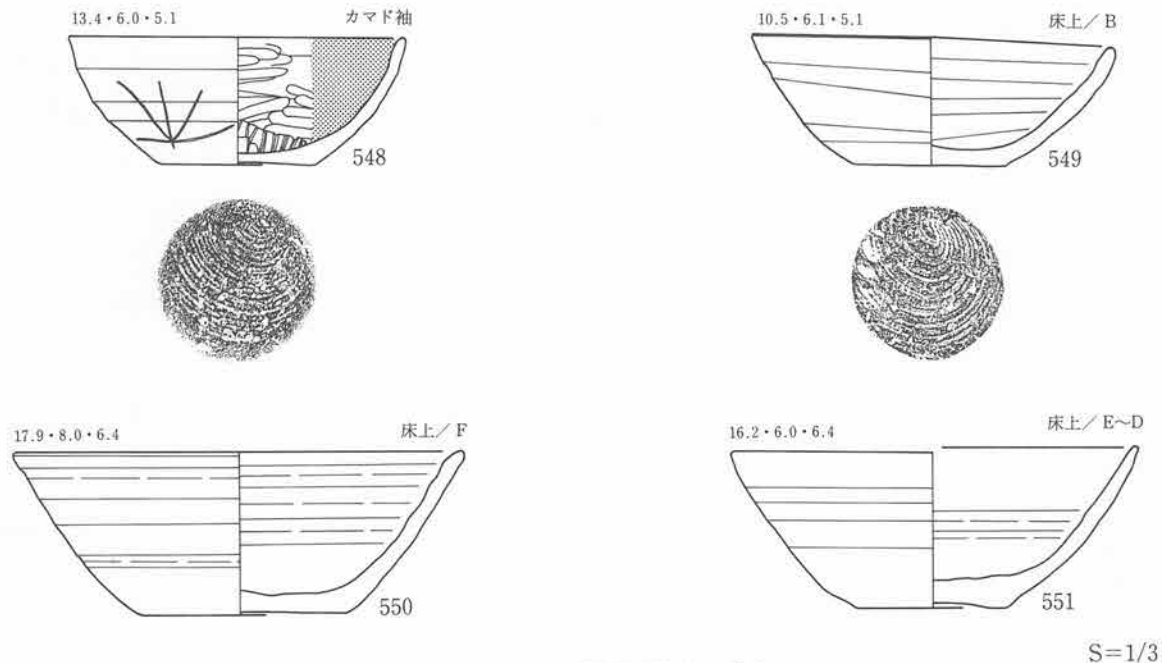
<遺物> カマド左袖に使用されていたロクロを使用した内黒の土師器坏548のほか、床面からは土師器坏549~551が出土した。548は線刻が認められる。

<時期> 出土遺物から平安時代に属する。(金子)





第159図 RA147竪穴住居跡



第160図 RA147竪穴住居跡出土遺物

RA 149 竪穴住居跡 (第 161 図、写真図版 69・70・254)

<位置・重複関係> 調査区南西側の 5-B 区に位置する。重複はない。検出は IV 層上面である。<平面形・規模> 隅丸長方形を呈するが、北壁の東半分はやや張り出している。規模は 3.15×2.70 m である。

<埋土> 砂質土、炭化物、焼土粒を含む黒褐色土が主体である。埋土下層の一部には、焼土の堆積や、炭化材が見られる。カマド周辺からは十和田 a 降下火山灰と見られる灰白色土が薄く堆積している。<壁・床> 壁は床からやや内湾気味に立ち上がる。床は緩やかな凹凸はあるものの、ほぼ平坦で堅く締まる。黄褐色土の混入する黒褐色土によって、貼り床が施されている。

<柱穴> 南東コーナー付近の壁際と北側の床面から 2 基の土坑が検出された。柱穴かどうかは不明である。<他の施設> 検出されない。

<カマド> 東壁の北寄りに位置する。天井と袖はほとんど残っていないが、土師器坏・甕を伏せて芯材としているようである。カマド内部から須恵器坏が出土している。支脚として使われた可能性がある。カマドの左右の床面には炭化物が堆積している。燃焼部には焼土が 47×32 cm の範囲で楕円形に堆積している。焼土の厚さは最大で 5 cm である。

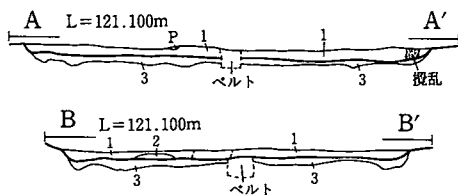
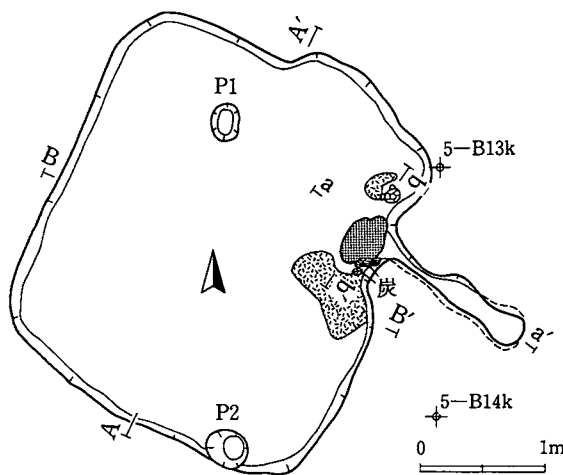
土坑No	P 1	P 2
直径cm	30×22	35×30
深さcm	22	26

煙道部は長さ 1.25 m、幅 15~25 cm で、割り貫き式であったと思われるが、検出の際上面を削ったため、天井は残っていない。底部は燃焼部からいったん上がった後、煙出しに向かって下がり勾配となる。埋土は黄褐色土や、焼土を含む黒褐色土が主体である。

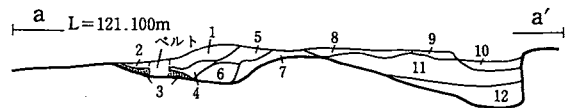
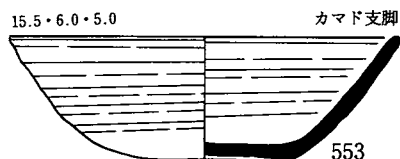
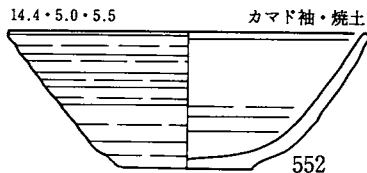
<遺物> 552 の土師器坏、554 の甕はカマド袖に使用されていた。553 は須恵器坏でカマド内から出土した。

<時期> 出土遺物から平安時代に属する。

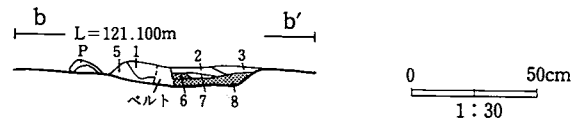
(金子)



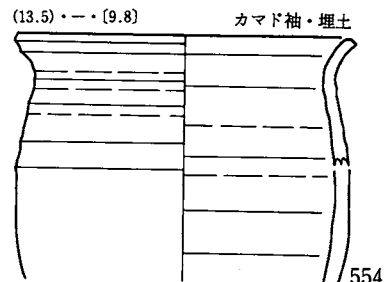
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂質土粒混入 炭化物(0.5~1cm大)・焼土粒(0.5cm以下)・少量のローム含む カマド袖付近十和田a火山灰含む
2. 5YR4/8 赤褐色土 粘性ややあり 炭化物(0.5cm以下)含む 焼土層
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒混入 貼り床



1. 10YR3/2 黒褐色粘土 粘性ややあり 焼土粒・炭化物(3cm以上)含む
2. 炭 焼土含む
3. 5YR4/6 赤褐色土 粘性ややあり 焼土層
4. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 焼土粒・ローム含む
6. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり ローム含む
7. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性ややあり ローム多量含む
8. 10YR2/3 黒褐色砂質土 粘性ややあり ローム少量含む
9. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性ややあり 黒褐色土混入 ローム多量含む
10. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 焼土少量含む
11. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり
12. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂質土粒混入



1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 焼土粒(0.5cm大)・ローム含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物80%・ローム含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物・ローム含む
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 多量の焼土粒(1cm以下)・炭化物・ローム含む
5. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 焼土粒(0.5cm以下)含む
6. 5YR4/6 赤褐色土 粘性ややあり 焼土層
7. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 焼土・ローム含む
8. 5YR3/6 暗赤褐色土 粘性ややあり ローム含む 焼土層



S=1/3

第161図 RA149竪穴住居跡・出土遺物

R A 150 竪穴住居跡 (第 162・163 図、写真図版 71・254・256)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 B 区南東隅に位置し、西側で奈良時代の RA 229 竪穴住居跡と重複している。新旧関係は本遺構が切っている事から (新) RA 150 竪穴住居跡→(旧) RA 229 竪穴住居跡である。検出面はIV層上面で黒褐色土の広がりによって確認されている。

<平面形・規模> 隅丸方形を呈し、規模は 2.66×2.50 m である。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする 10 層に大別される。上層はレンズ状に堆積し、中位は褐色土との混合土で微量の炭化物を含み、下層は褐色土をブロック状に混入している。壁高は東壁 27 cm、西壁 33 cm、南壁 31 cm、北壁 27 cm を測る。床面は多少起伏が見られ、中央部付近が強く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは西壁のほぼ中央部に設置されている。本体部の大部分は崩壊し、袖部下部と燃焼部が現存するだけである。袖部はIV層を削り出して造られている。燃焼部は径 34×28 cmの楕円形状の焼土が形成され、層厚は9 cmを測る。

煙道部は径 24×18 cmの楕円形状気味に削り貫かれ、燃焼部から緩やかな下がり勾配で煙出し部に続いている。長さは1.53 mである。煙出し部は径 60×49 cm、深さ 65 cmの楕円形土坑が掘り込まれている。埋土の黒褐色シルトには、上部の構築材と思われる礫を多く含んでいる。

<遺物> カマド左袖部周辺と床上から土師器坏・甕、須恵器甕、鉄製品が出土している。555 はロクロ使用の土師器坏（A I a 群）で、内面をヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。体部外面は剝落し、器形も歪んでいる。底部の切り離しは回転糸切りである。

556 は底部の切り離しが回転糸切りで、ロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a 群）である。口縁部は体部から外傾して立ち上がっている。

557 はロクロ調整痕が明瞭な須恵器長頸瓶の口縁部破片である。

558 はロクロ不使用の土師器甕（A II 群）で、口縁部は頸部からくの字に外反し、内外面にヨコナデ調整を施している。体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面がヨコナデ調整である。底部は大部分を欠損しているがヘラナデ調整が見られる。

559～564 は須恵器甕の体部と底部破片である。体部外面は平行叩き具痕、内面が放射状の当て具痕を施している。564 の内面はヘラナデ調整が施されている。

鉄製品は壁際から出土した 565 の釘がある。端部が欠損し、現存長 15.8 cm、幅 1.1 cm、厚さ 6 mm を測る。

<時期> 出土遺物から平安時代に属する。 (高橋)

#### R A 152 竪穴住居跡 (第 164～168 図、写真図版 72・255～257)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 A 区に位置している。R A 226 竪穴住居跡、R E 019 竪穴状遺構、R B 009 掘立柱建物跡、R D 249 土坑と重複している。遺構の新旧関係は R A 226 竪穴住居跡・R E 019 竪穴状遺構を本遺構が切り、R B 009 掘立柱建物跡・R D 249 土坑を切っている事から (新) R D 249 土坑→R B 009 掘立柱建物跡→R A 152 竪穴住居跡→(旧) R A 226 竪穴住居跡・R E 019 竪穴状遺構である。検出はIV層上面で確認されている。<平面形・規模> 西壁・北壁側で重複する事から詳細が不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は 5.30×4.60 m を測る。

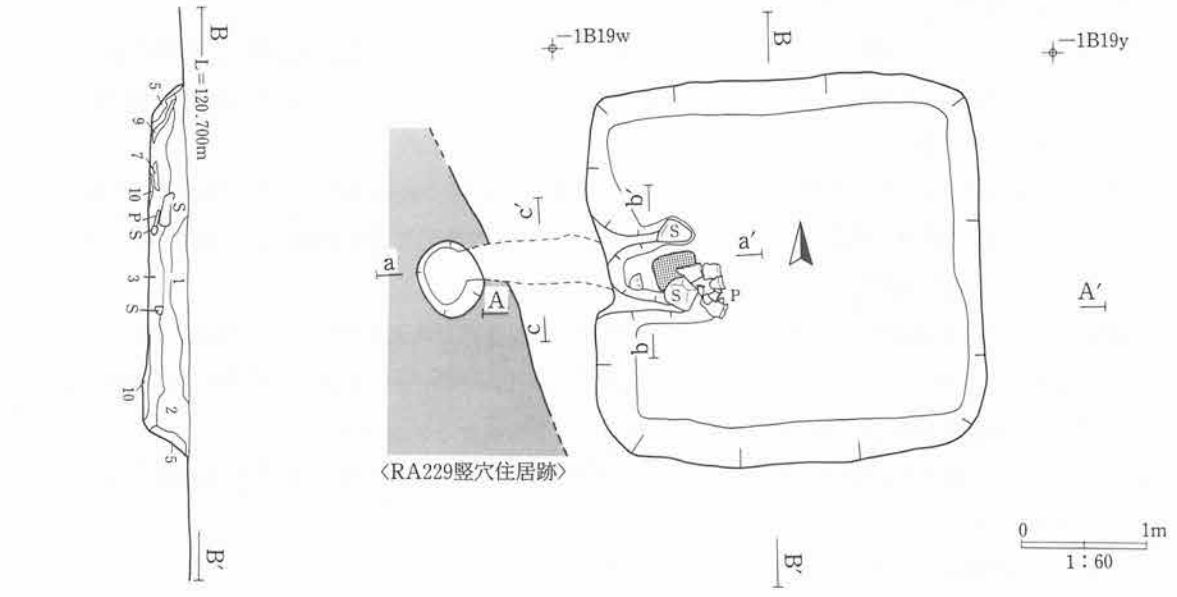
<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする 5 層に大別される。上層は十和田 a 降下火山灰、中位が炭と焼土粒を微量に含み、下層は水酸化鉄と炭を混入し堅く締まっている。<壁・床> 壁は床上から外傾して立ち上がり、壁高は東壁 21 cm、南壁 28 cm、北壁 18 cm である。床はほぼ平坦で、カマド周辺部が堅く締まっている。貼り床は確認されていない。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑は P 2～P 3 の 3 基検出されているが、位置的に支柱穴とはいえない。

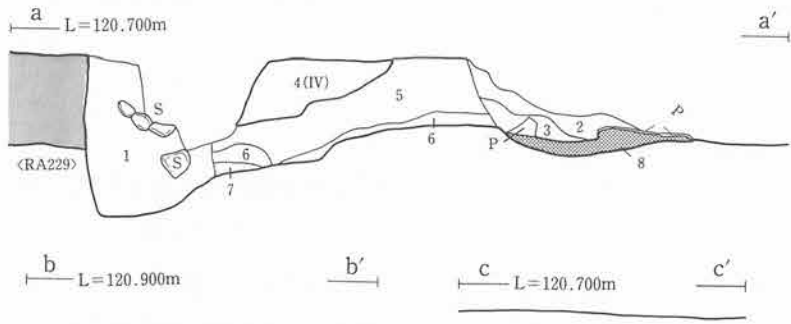
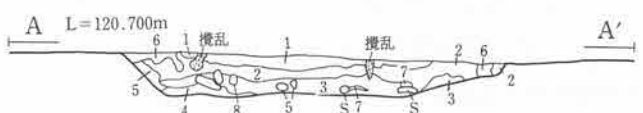
土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4
直径cm	80×48	32×32	32×32	26×25
深さcm	12	7	16	23

P 1 土坑は東カマド左脇から検出している。平面形は楕円状で、深さは 12 cm である。貯蔵穴と思われる。

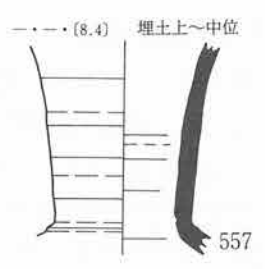
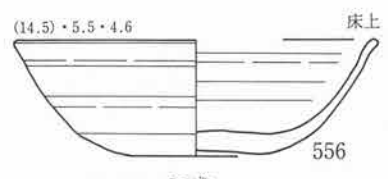
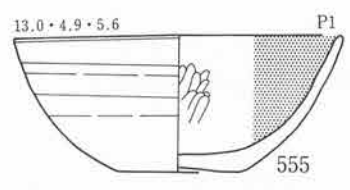
<カマド> カマドは東壁の南東コーナー寄りと西壁中央部西寄りに 2 基設置している。本体部は大部分が崩壊し、僅かに西カマドの燃焼部が現存するだけである。両カマドの構築材の礫は燃焼部周辺の床上に散



- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト
- 2. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト 褐色土30%混入  
炭化物微量含む
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト 褐色土10%混入
- 4. 10YR3/3 暗褐色シルト 焼土含む
- 5. 10YR3/4 暗褐色シルト 壁面落土
- 6. 10YR2/1~2/2 黒~黒褐色シルト
- 7. 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物含む
- 8. 10YR2/2 黒褐色シルト 砂質土含む
- 9. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土含む
- 10. 10YR4/6 褐色シルト

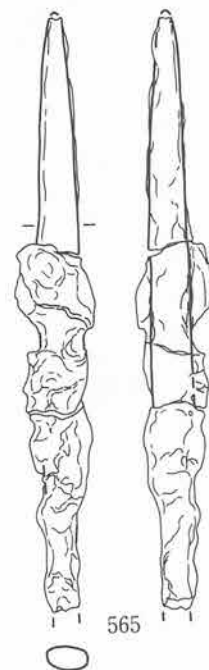
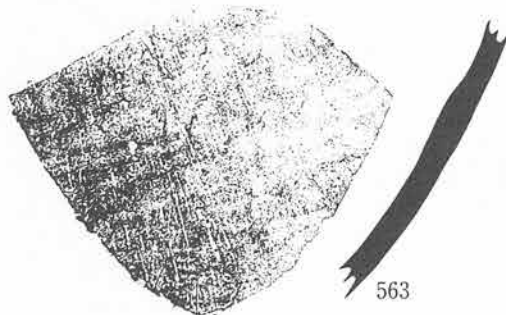
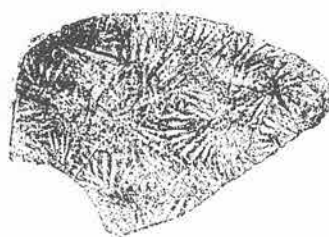
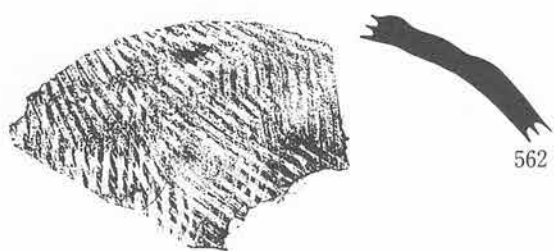
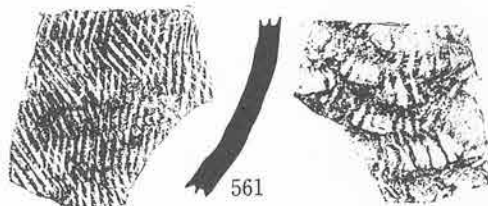
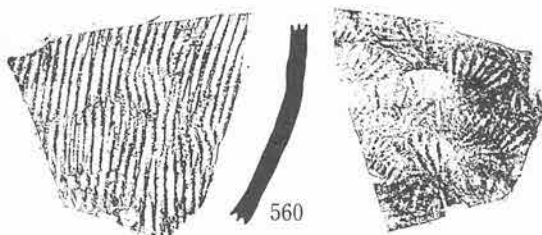
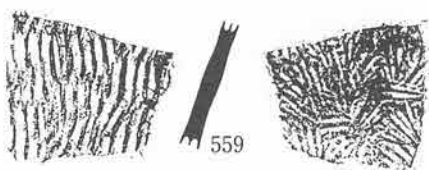
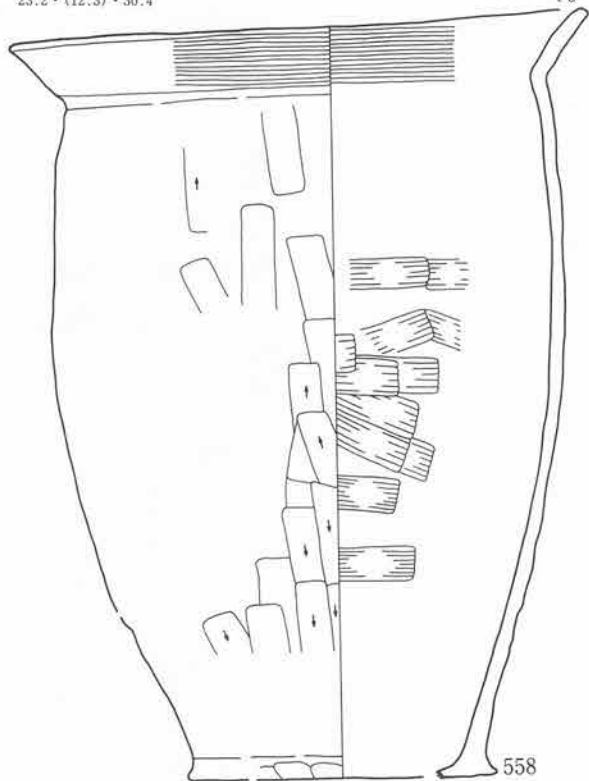


- 1. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト 下部に  
暗褐色シルト混入
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 暗褐色土10%混入  
焼土・炭化物微量含む
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土10%含む
- 4. 10YR3/3 暗褐色シルト 黒褐色土10%混入
- 5. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト
- 6. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 7. 10YR2/2 黒褐色シルト
- 8. 5YR4/8
- 9. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 10. 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土粒40%混入



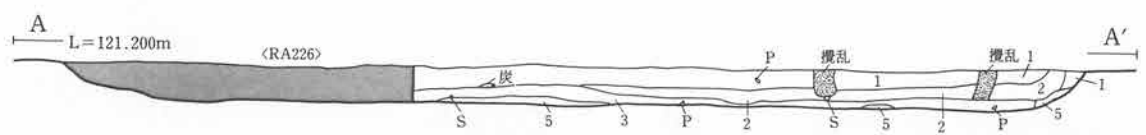
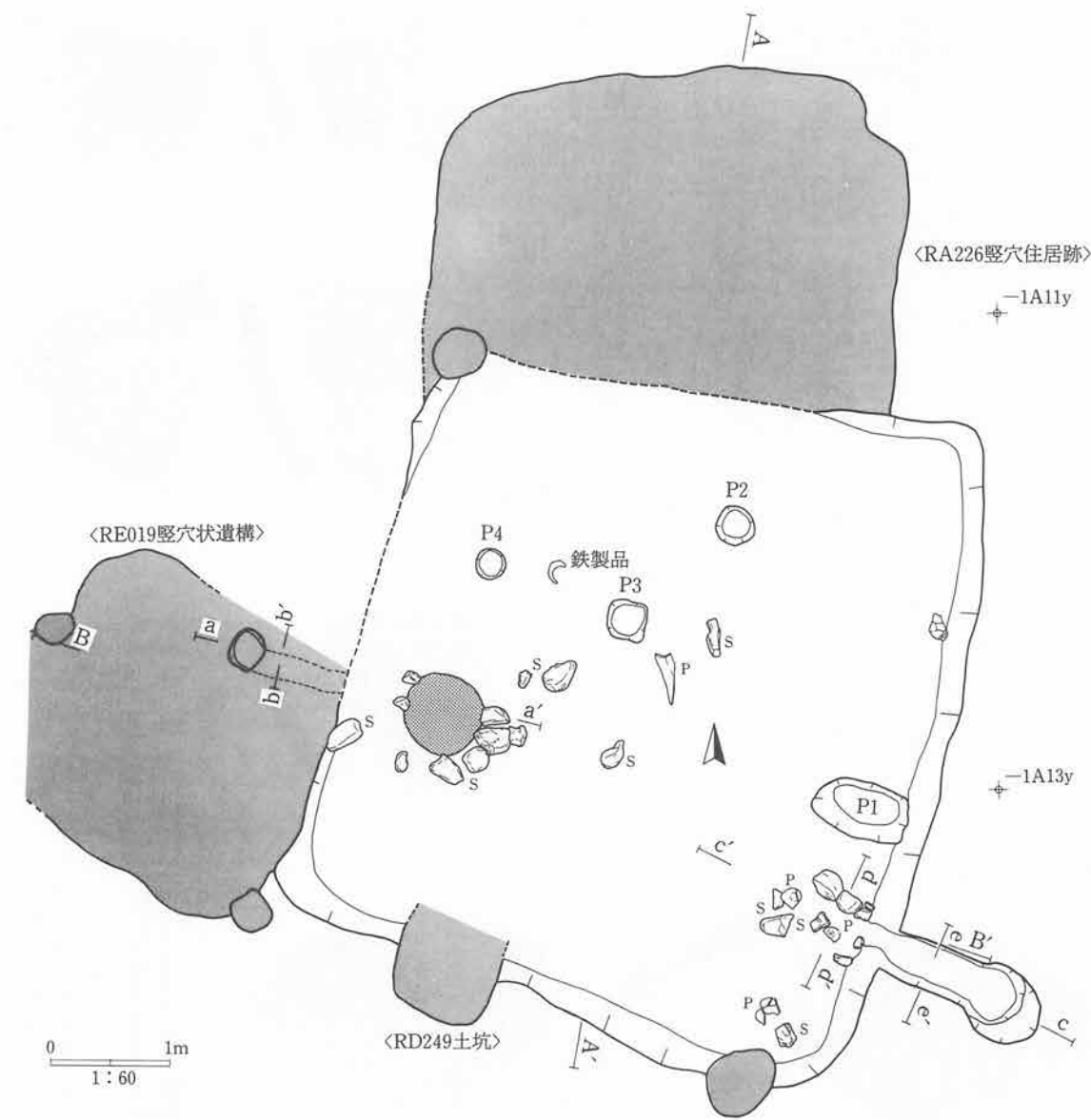
S=1/3

第162図 RA150 縦穴住居跡・出土遺物(1)

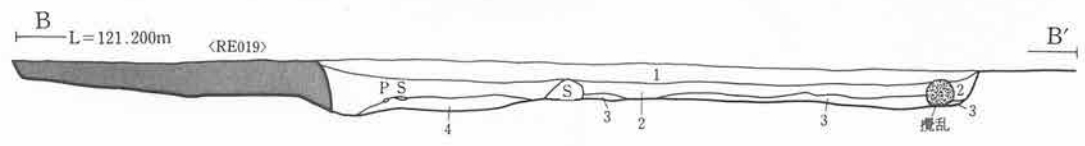


565は S=1/2  
558~564は S=1/3

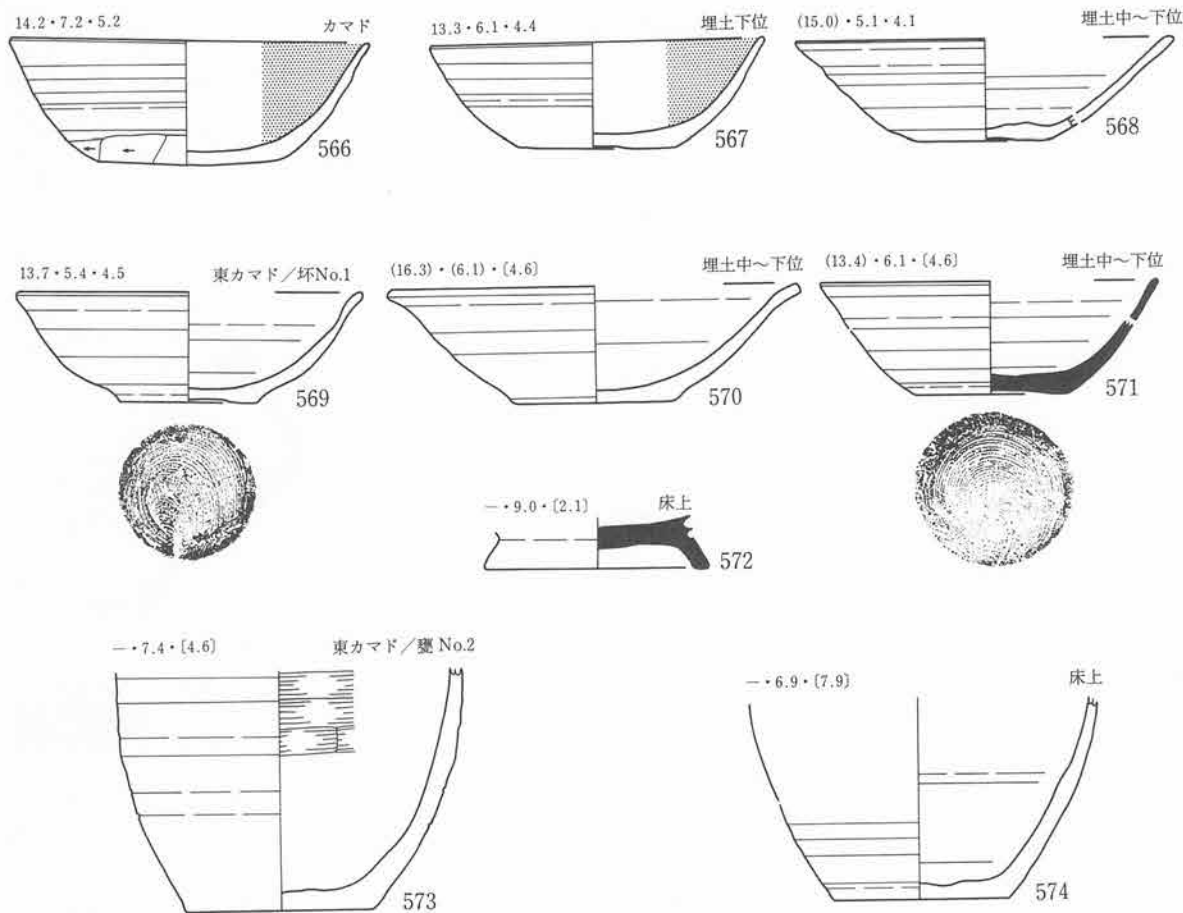
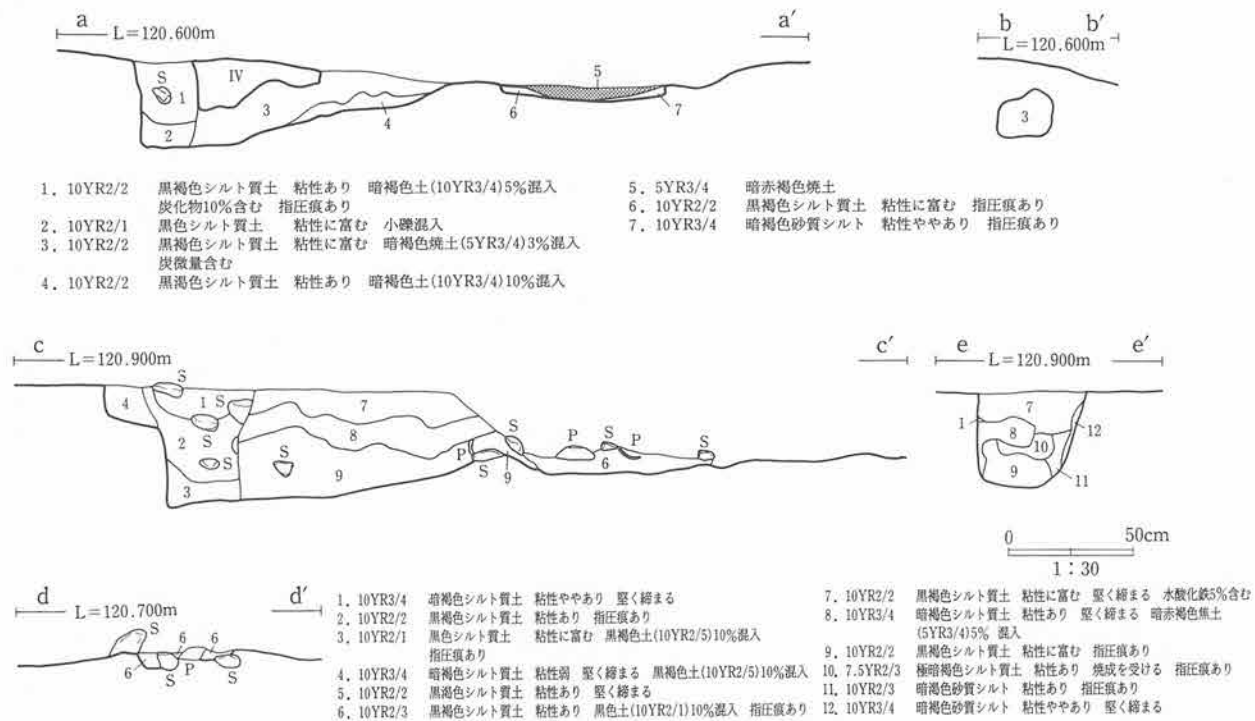
第163図 RA150竪穴住居跡出土遺物(2)



1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土・十和田a火山灰が小ブロック状で2%混入 焼土粒・炭微量含む
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭・焼土粒少量混入
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 炭・酸化鉄少量混入 指圧痕あり
4. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 焼土粒と炭の混合土 指圧痕あり
5. 10YR2/2-3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土



第164図 RA152竪穴住居跡(1)



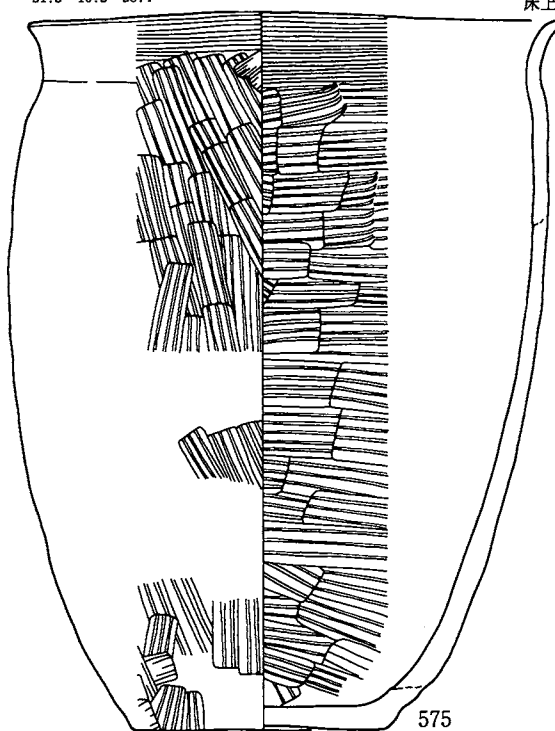
第165図 RA152竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)

S=1/3



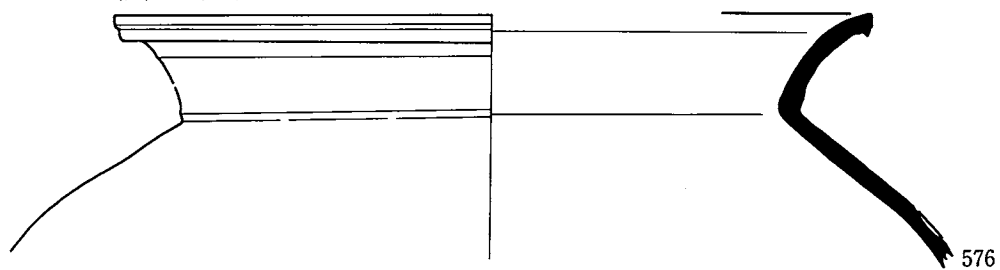
21.3・10.2・28.4

床上



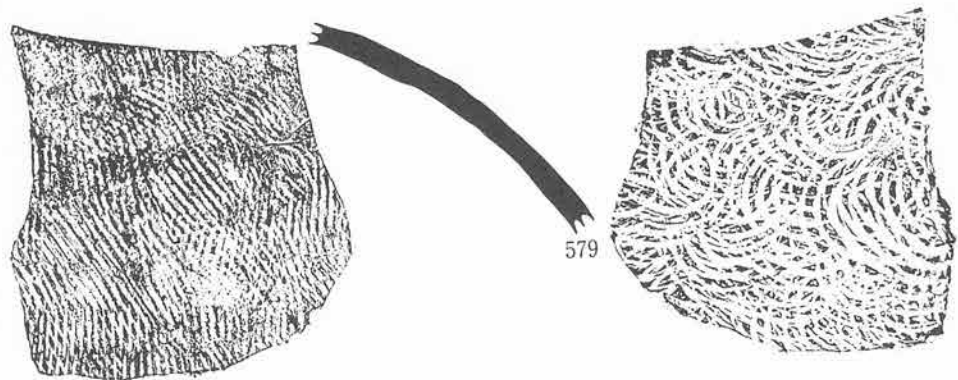
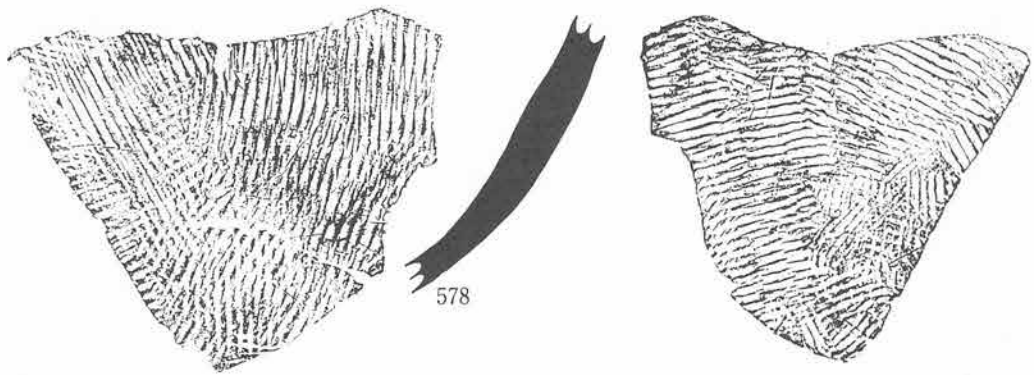
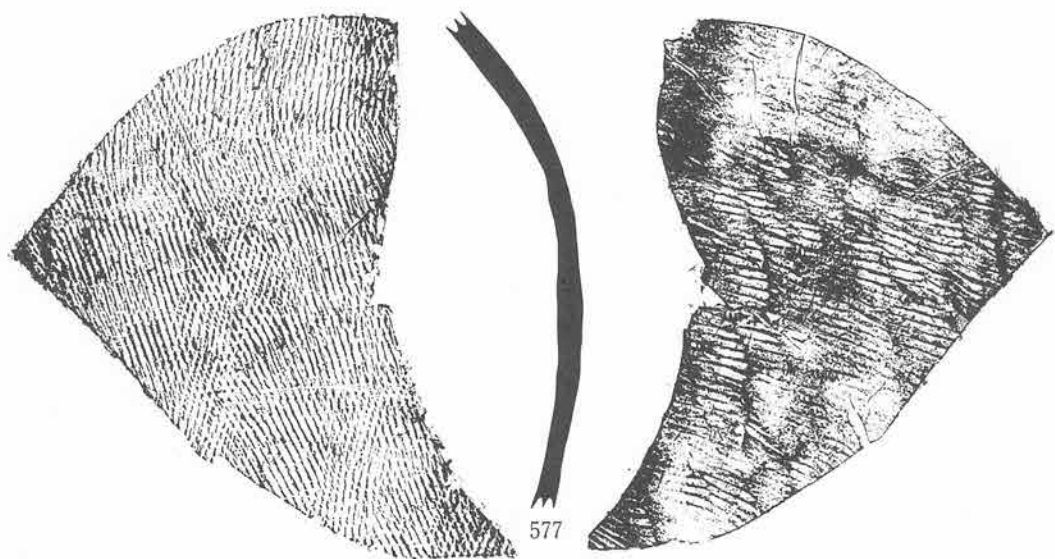
(5.0)・--・(16.3)

床上



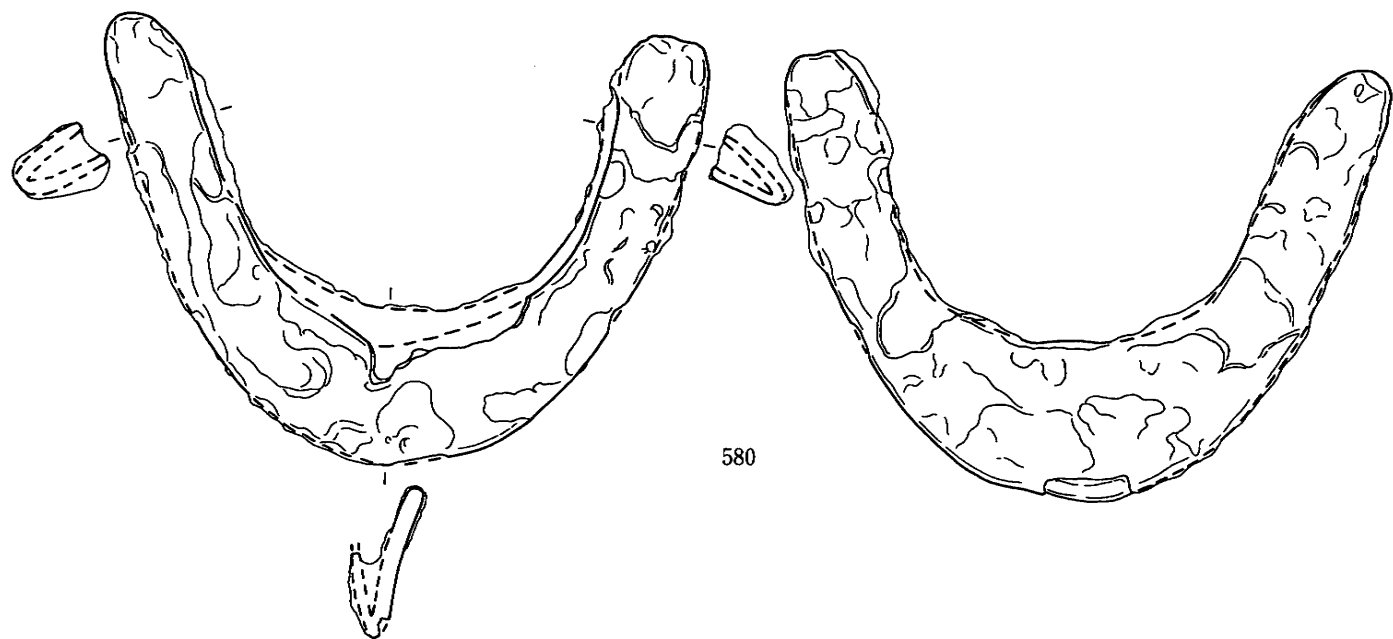
575は S=1/3  
576は S=1/5

第166図 RA152竪穴住居跡出土遺物(2)



S=1/3

第167図 RA152竪穴住居跡出土遺物(3)



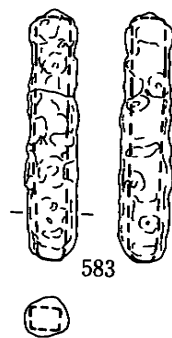
580



581



582



583

S=1/2

第168图 RA152竖穴住居跡出土遺物(4)

在している。西カマドの燃焼部は径 66×64 cmの楕円形状焼土が形成され、厚さが 5 cmである。東カマドの燃焼部の焼土は検出されていない。燃焼部の現存状態から使用時期差が見られる。

西カマドの煙道部は径 22×15 cmの楕円形状に割り貫かれ、長さ 1.00 m である。煙道は燃焼部から下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径 33×28 cm、深さ 34 cmの楕円形土坑が掘り込まれている。東カマドの煙道上半部は削平されている事から、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。煙道部は西カマドと同様に下がり勾配で煙出し部に延びている。黒～暗褐色土の埋土には上部構造材に使用した礫が多く混入する。

〈遺物〉 床上と東カマド周辺部から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、鉄製品等が出土している。556・567 はロクロ使用の土師器坏である。内面は磨滅しているが黒色処理を施し、底部は回転糸切りで再調整 (A I b 群) されている。566 の体部下半には横方向のヘラケズリ調整が見られる。

568～570 は底部の切り離しが回転糸切りで、ロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a 群) である。口縁部は外傾して立ち上がる 568、外反する 569・570 がある。

571 は底部が回転糸切りの須恵器坏 (B II a 群) である。口縁部の一部を欠損し、胎土に砂と石の混入が多い。572 は須恵器高台坏の台部破片である。

573・574 は口縁部を欠損したロクロ使用の土師器甕 (A I 群) で、底部切り離しが回転糸切りである。

575 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) で、口縁部は短く頸部から外反する。口縁部は内外面がヨコナデ、体部内外面はハケメ調整を施している。底部は木葉痕で、胎土に砂と石を多く含んでいる。

576～579 は須恵器甕の口縁部と体部破片である。外面は平行叩き具痕、内面は放射状の当て具痕と平行叩き具痕がある。

鉄製品は 580～583 である。580 はU字形の鋤先で、木製部の柄と装着する風呂部分はV字状になっている。ほぼ完形品で、長さ 11.8 cm、幅 16.1 cm、厚さ 7 mmを測る。581 は器種不明。582 は釘で、現存長 3.5 cm、幅 6 mm、厚さ 6 mmである。583 は紡錘車の糸巻き棒破片で、現存長 6.4 cm、幅 8 mm、厚さ 6 mmを測る。

〈時期〉 出土した坏と甕から平安時代に比定される。 (高橋)

#### R A 153 竪穴住居跡 (第 169～173 図、写真図版 73・257～260)

〈位置・重複関係〉 北側調査区の一 1 - A 区北側に位置している。西壁の中央部付近で R Z 013 カマド状遺構と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から (新) R Z 013 カマド状遺構→ (旧) R A 153 竪穴住居跡である。IV層上面で検出されている。〈平面形・規模〉 平面形は隅丸方形を呈し、規模は 6.20×6.00 m である。

〈埋土〉 埋土は 3 層に大別される。1 層は大部分を占める褐色土をブロック状に含む黒褐色土、2 層が締まりのない黒色土、3 層が黒色混合土の褐色土で構成されている。〈壁・床〉 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は東壁 8 cm、西壁 15 cm、南壁 16 cm、北壁 25 cmを測る。床は小起伏が見られ、カマド周辺部が堅く締まっている。また、黒褐色土の厚さ 8～28 cmの貼り床が施されている。

〈柱穴・他の施設〉 柱穴状土坑は 8 基検出されているが、位置的に P 1～P 4 が支柱穴と思われる。平

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
直径cm	50×50	62×48	150×98	37×30	46×33	42×37	63×44	27×22	53×45	38×32
深さcm	26	20	28	32	18	22	26	19	32	31

面形は楕円形が多い。

〈カマド〉 カマドは東壁中央南寄りに設置している。本体部は崩落している事から上部構造が不明であ

る。左袖部は大部分が削平を受け、右袖が褐色シルトで造られ、芯材に垂角礫を使用している。燃焼部は径56×54 cmの円形状焼土が厚さ6 cmで形成されている。支脚は確認されていない。

煙道は上半部が削平されている事から、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。長さは1.22 mを測り、燃焼部から小起伏して煙出し部へと続いている。煙出し部は径約43×31 cm、深さ8 cmの円形状土坑が掘り込まれている。埋土は黒褐色土で占められている。

<遺物> カマド本体部とその周辺の床上から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・長頸瓶・甕、土製品、鉄製品等が出土している。584はロクロ不使用の土師器坏（I A a群）である。丸底で体部下半と底部の境に段が巡り、口縁部は外傾して立ち上がっている。体部外面はヘラミガキ、内面は放射状の細かいヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

585～591はロクロ使用の土師器坏で、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理をしている。口縁部は体部から外傾して立ち上がっている。底部の切り離しは回転糸切り（A I a群）が587、切り離し後に再調整（A I b群）した586・589・591、回転ヘラ切り（A I e群）が588・590である。588・590の体部下半には横方向にヘラケズリ調整を施している。587の胎土には多く金雲母を混入している。

592～611は底部の切り離しが回転糸切りで、ロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a群）である。口縁部は体部から外傾して立ち上がる592～604、端部で外反する605～609がある。体部のロクロ成形痕は明瞭なものが多く、610・611は体部外面に墨書が見られる。

612は貼り床埋土から出土した須恵器坏（B I a群）で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

613～618はロクロ使用の土師器高台坏である。口縁部は端部が外反するもの、体部から外傾して立ち上がるものがある。613・614の内面はヘラミガキ調整後に黒色処理され、613の胎土には金雲母が混入している。

619・620はロクロ不使用の土師器甕（A II群）で、620は体部下半～底部の破片である。619は小型の器形で、口縁部は短く頸部から直立気味に立ち上がっている。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラナデで下半部にヘラケズリ調整を施している。内面はハケメとヘラナデ調整がある。

621は須恵器長頸瓶である。球胴形の器形で、口縁部は頸部から外反して立ち上がっている。体部外面上半はヘラナデ、下半にヘラケズリ調整が見られる。全体に焼成は良好である。

622・623は須恵器甕の底部と口縁部破片で、622の体部外面はヘラケズリされている。623は口縁部が頸部から強く外反して立ち上がり、外面は平行叩き具痕である。

624は完形の土錘で、長さ4.1 cm、幅2.2 cm、厚さ2.2 cmを測る。ほぼ中央に径6 mmの穿孔がある。

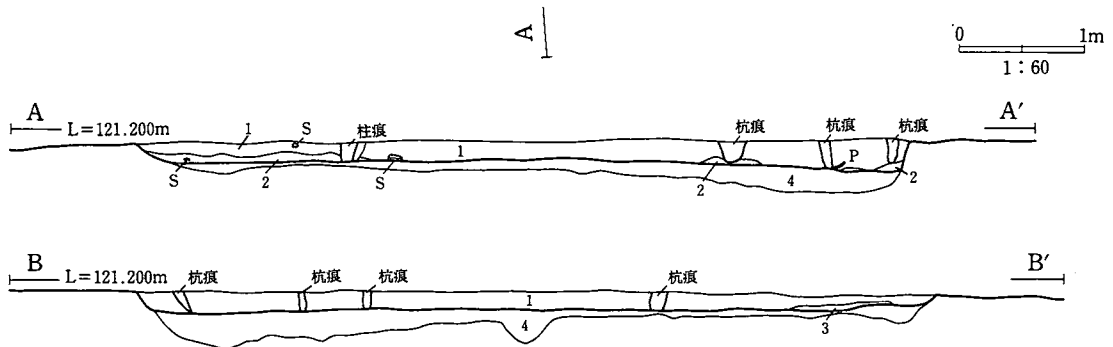
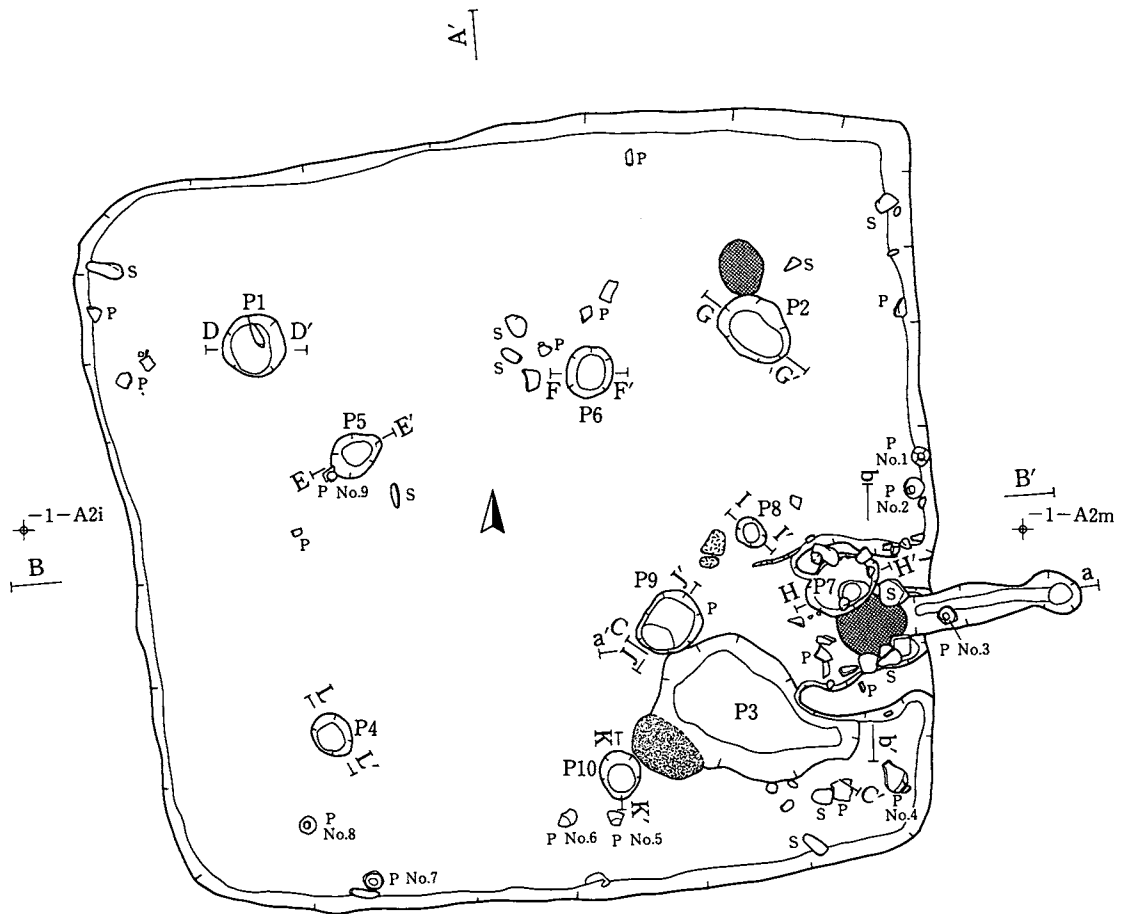
鉄製品は625～633の9点が出土している。625～627は鎌、629～631は釘、633は鋸、628・632は器種不明の鉄製品である。いずれも端部ないし両端部を欠損する。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。 (高橋)

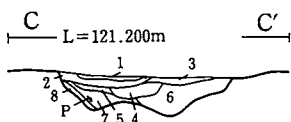
#### R A 154 竪穴住居跡（第174・175図、写真図版74・260・261）

<位置・重複関係> 東側調査区の一1A～B区に亘って位置している。西側でR A 135 竪穴住居跡、R B 009 掘立柱建物跡と重複している。新旧関係はR A 135 竪穴住居跡を本遺構が切り、R B 009 掘立柱建物跡に切られている事から（新）R B 009 掘立柱建物跡→R A 154 竪穴住居跡→（旧）R A 135 竪穴住居跡である。IV層上面で検出されている。<平面形・規模> 西辺は重複のために詳細が不明であるが、検出された規模から一辺6.20 m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土主体の6層に大別される。上層は炭を微量に含み、下層が褐色土との

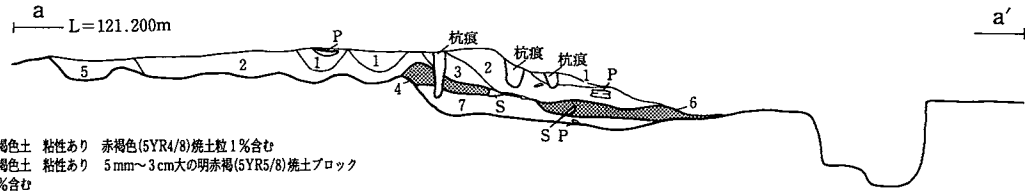
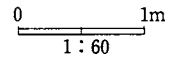
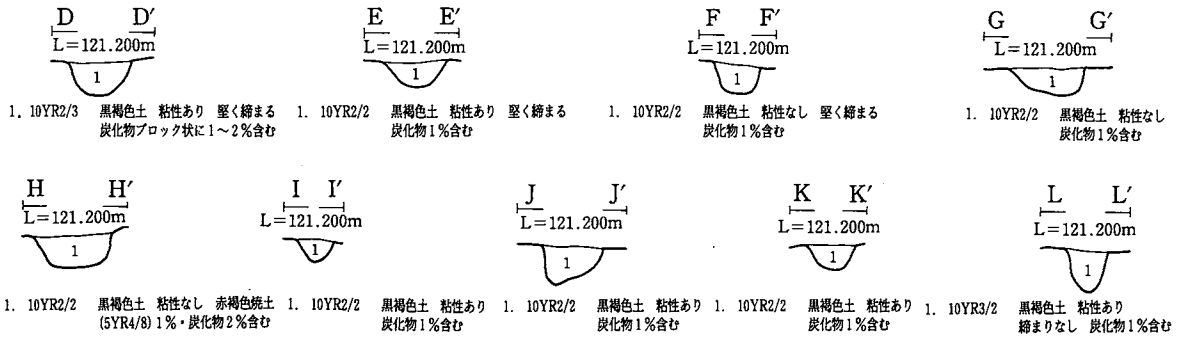


1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 堅く締まる 褐色焼土(7.5YR4/4)1%・炭化物  
ブロック2%含む
2. 10YR2/1 黒色土 粘性なし
3. 10YR4/4 褐色土 粘性あり 黒褐色土(10YR3/1)40%含む
4. 10YR3/1 黒褐色土 粘性ややあり 褐色粘土(10YR4/4)20%含む

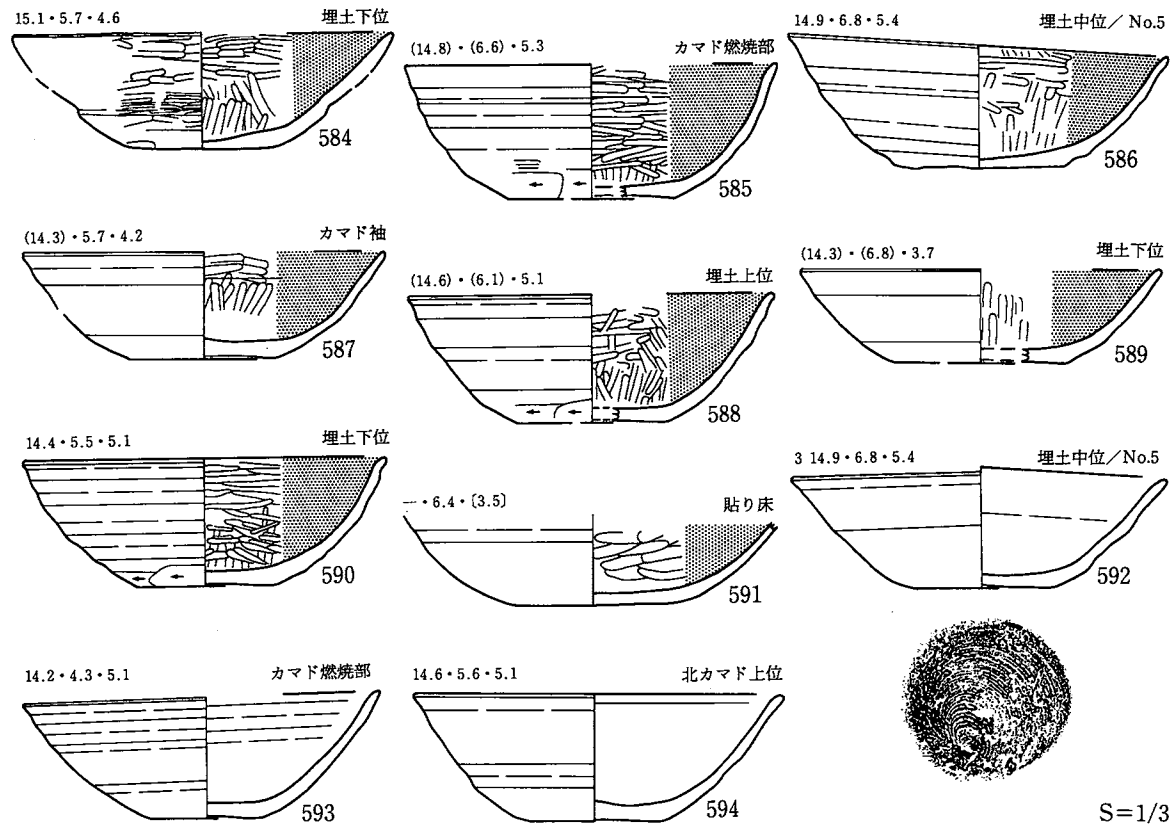
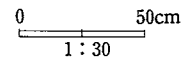
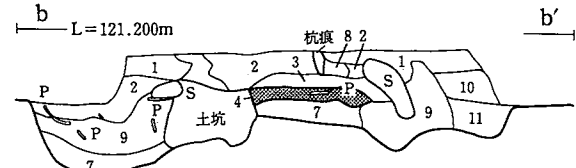


1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり
3. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性あり 暗赤褐色(5YR3/3)焼土2%・炭化物1%含む
4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)3%・炭化物1%含む
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)ブロック状に5%含む
6. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)10%・径2cm程度の炭化物片  
2%含む
7. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり
8. 10YR4/6 褐色土 粘性あり 黒褐色土(10YR2/3)3%含む 壁崩落土

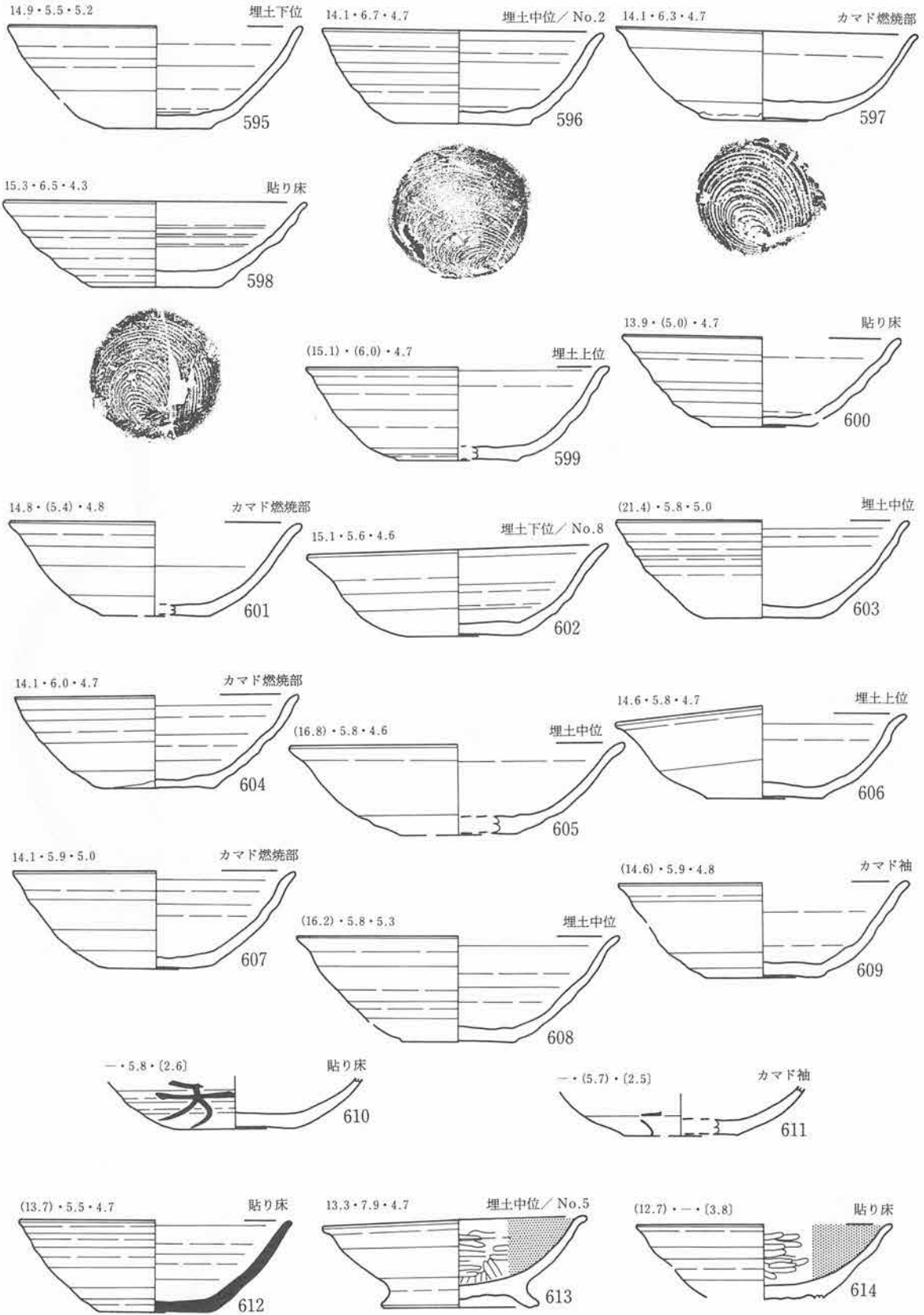
第169図 RA153竪穴住居跡(1)



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 赤褐色(5YR4/8)焼土粒1%含む
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 5mm~3cm大の明赤褐(5YR5/8)焼土ブロック15%含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 径5mm~1cm大の明赤褐(5YR3/8)焼土ブロック5%含む
5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり
6. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 上部部明赤褐(2.5YR5/8)に赤変色 炭化物5%含む
7. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 6層との境界部付近に僅5mm程度の焼土粒5%・炭化物3%含む
8. 10YR3/1 黒褐色土 粘性なし 褐色土(10YR4/6)との混泥土
9. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 堅く締まる におい・黄褐色砂質土(10YR5/4)10%含む
10. 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし 堅く締まる 褐色粘土(10YR4/4)との混泥土
11. 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし 堅く締まる 褐色粘土(10YR4/4)30%含む



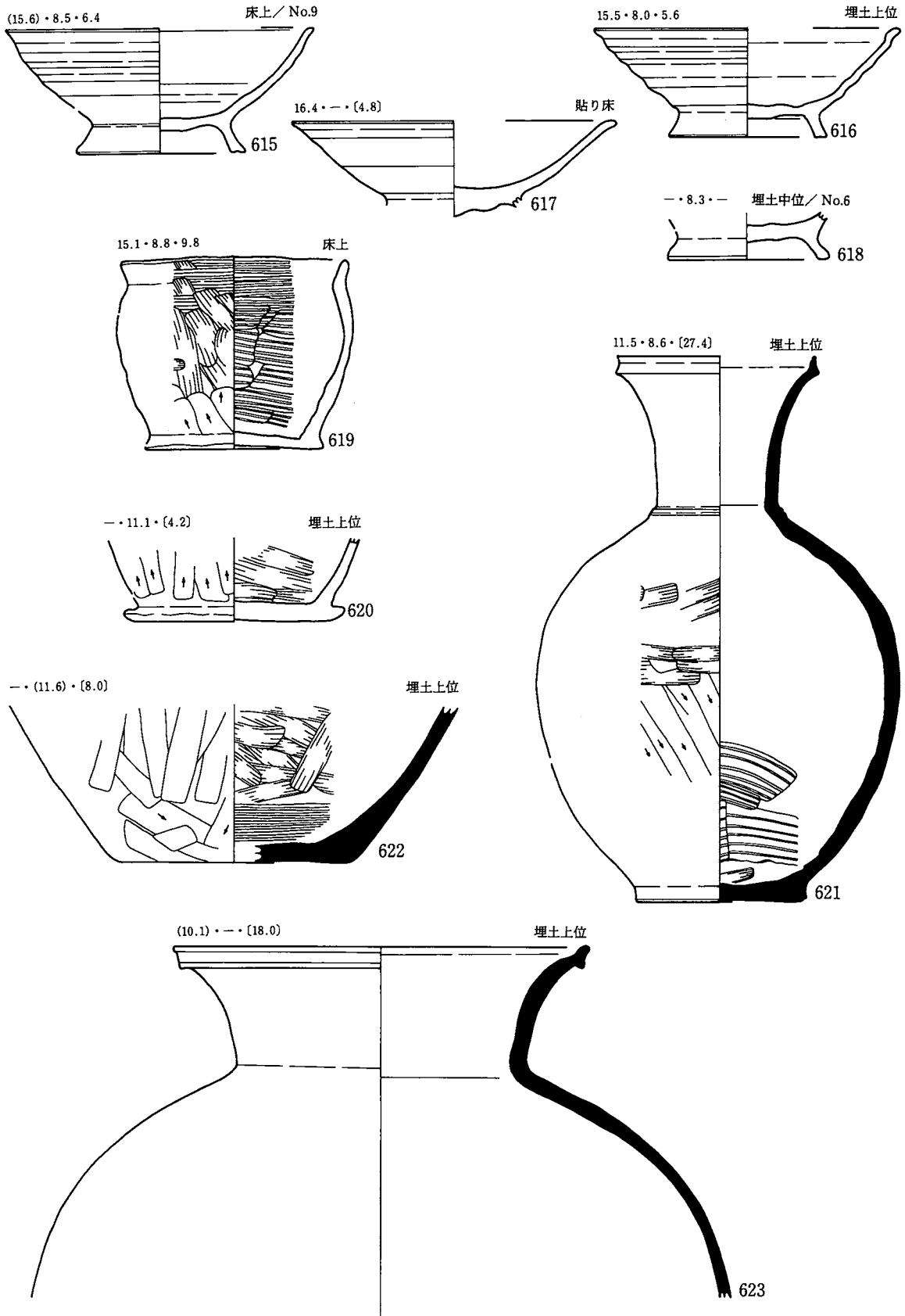
第170図 RA153竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



S=1/3

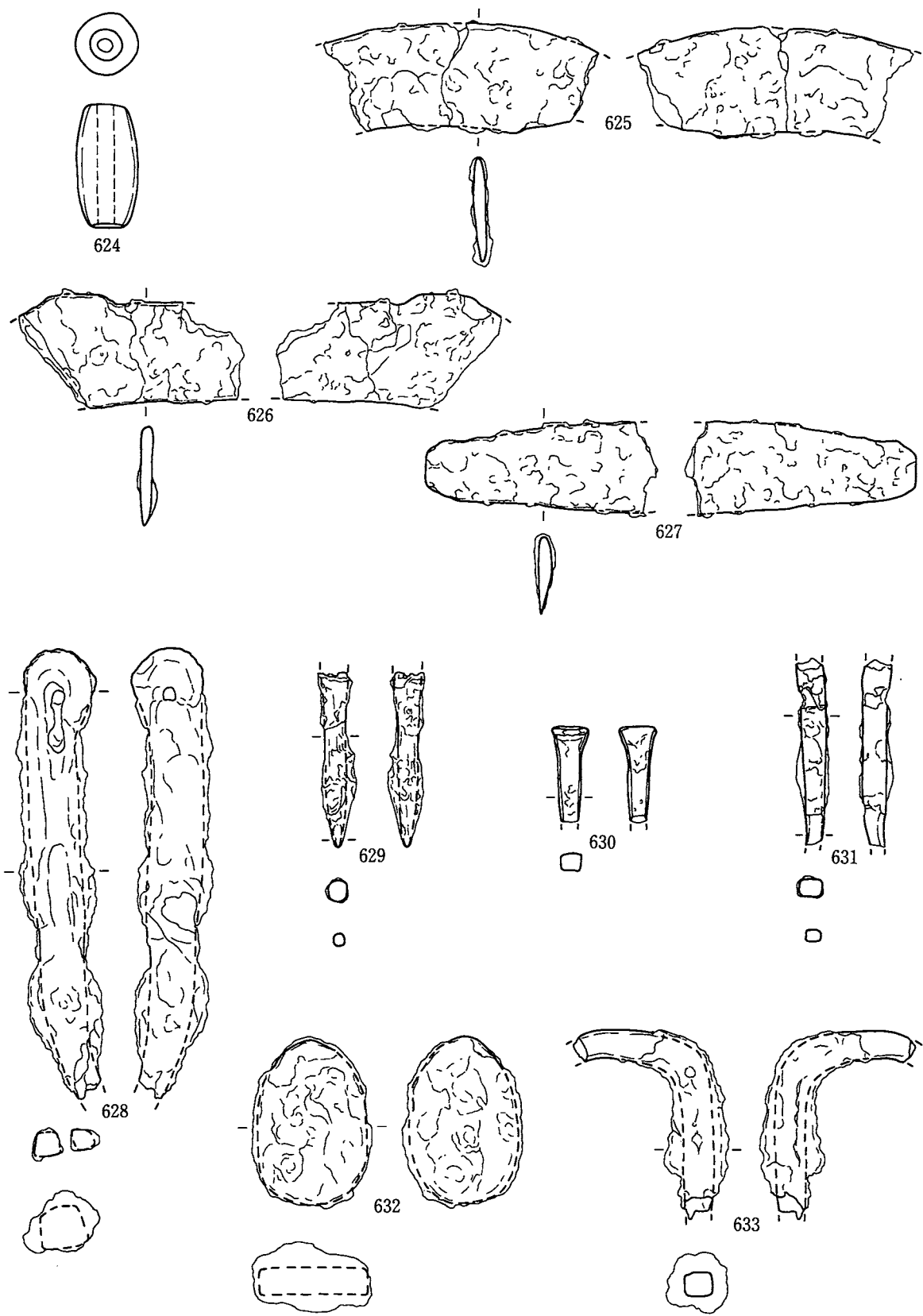
第171図 RA153竪穴住居跡出土遺物(2)





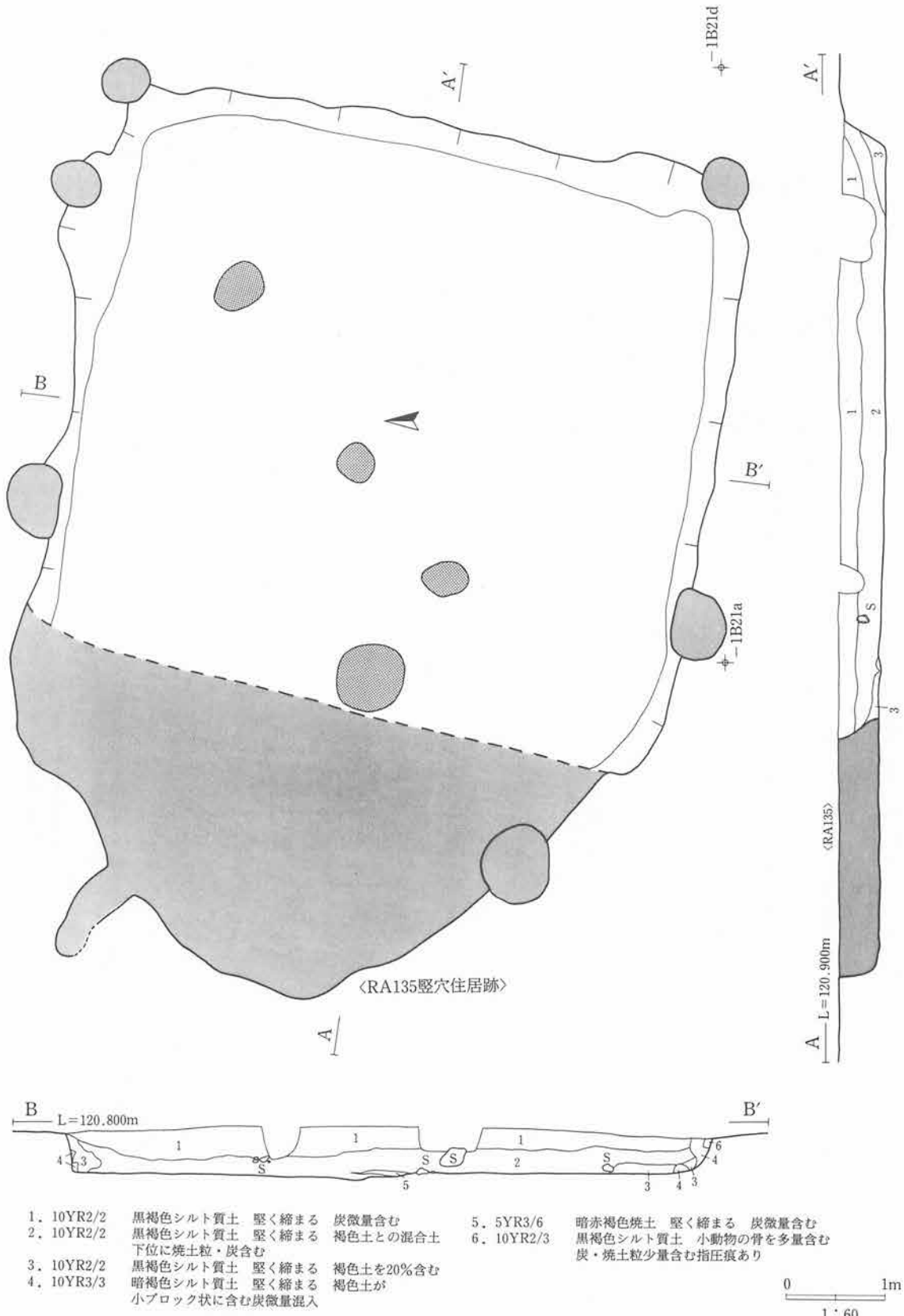
第172図 RA153竪穴住居跡出土遺物(3)

S=1/3



S=1/2

第173图 RA153竖穴住居跡出土遺物(4)



第174図 RA154竪穴住居跡

混合土で堅く締まっている。〈壁・床〉 壁は床面から急傾斜に立ち上がり、壁高は東壁 45 cm、南壁 32 cm、北壁 40 cmを測る。床はほぼ平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

〈柱穴・他の施設〉 検出されない。

〈カマド〉 カマドは検出されないが、遺構が重複する西壁側に設置していたと思われる。

〈遺物〉 埋土中～下位から土師器坏・甕、須恵器坏・長頸瓶、土製品、石製品、鉄製品等が出土している。634 は丸底のロクロ不使用の土師器坏 (I A a 群) で、体部下半に浅い段が巡っている。口縁部は体部から外傾して立ち上がり、体部外面は細いヘラミガキ、内面がヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

635 は底部切り離しが回転糸切りの須恵器坏 (B II a 群) で、焼成も良好である。

636～640 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) である。636・637 は体部下半から底部を欠損する。口縁部は頸部からくの字状に外反し、端部を上方に引き出している。口縁部は内外面がヨコナデ、体部外面がハケメ、内面がハケメとヘラナデ調整がある。637 の胎土には金雲母を混入している。638～640 は体部から底部破片で、底部はヘラナデ調整が施されている。器面調整は体部外面が 638 がヘラミガキ、639・640 がハケメ調整、内面がいずれもハケメ調整である。

641 はロクロ使用の土師器甕 (A I 群) で、底部の切り離しが回転糸切りである。小型の器形で、口縁部は短く頸部からくの字状に外反している。

642 は須恵器長頸瓶の口縁上半部の破片で、ロクロ成形痕が明瞭である。

643 は完形の土製紡錘車である。円錐台形状を呈し、中央には径 8 mm 前後の穿孔があり、径 5.5×5.4 cm、厚さ 2.3 cm を測る。

644 は砥石で 1 面が良く使用されている。現存長 5.5 cm、幅 2.4 cm、厚さ 1.7 cm である。

鉄製品は 2 点出土している。645 は鉄鏝の基部破片で、現存長 4.1 cm、幅 1 cm、厚さ 4 mm である。646 は両端部を欠損した釘で、現存長 3.7 cm、幅 7 mm、厚さ 6 mm を測る。

〈時期〉 出土した坏と甕から平安時代に比定される。 (高橋)

#### R A 158 竪穴住居跡 (第 176・177 図、写真図版 76・77・261)

〈位置・重複関係〉 調査区北側の 1-B 区北東寄りに位置し、住居跡の北半を掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は (新) 掘立柱建物跡→(旧) R A 158 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面である。

〈平面形〉 方形を呈する。一辺の長さは 6.80×6.52 m である。

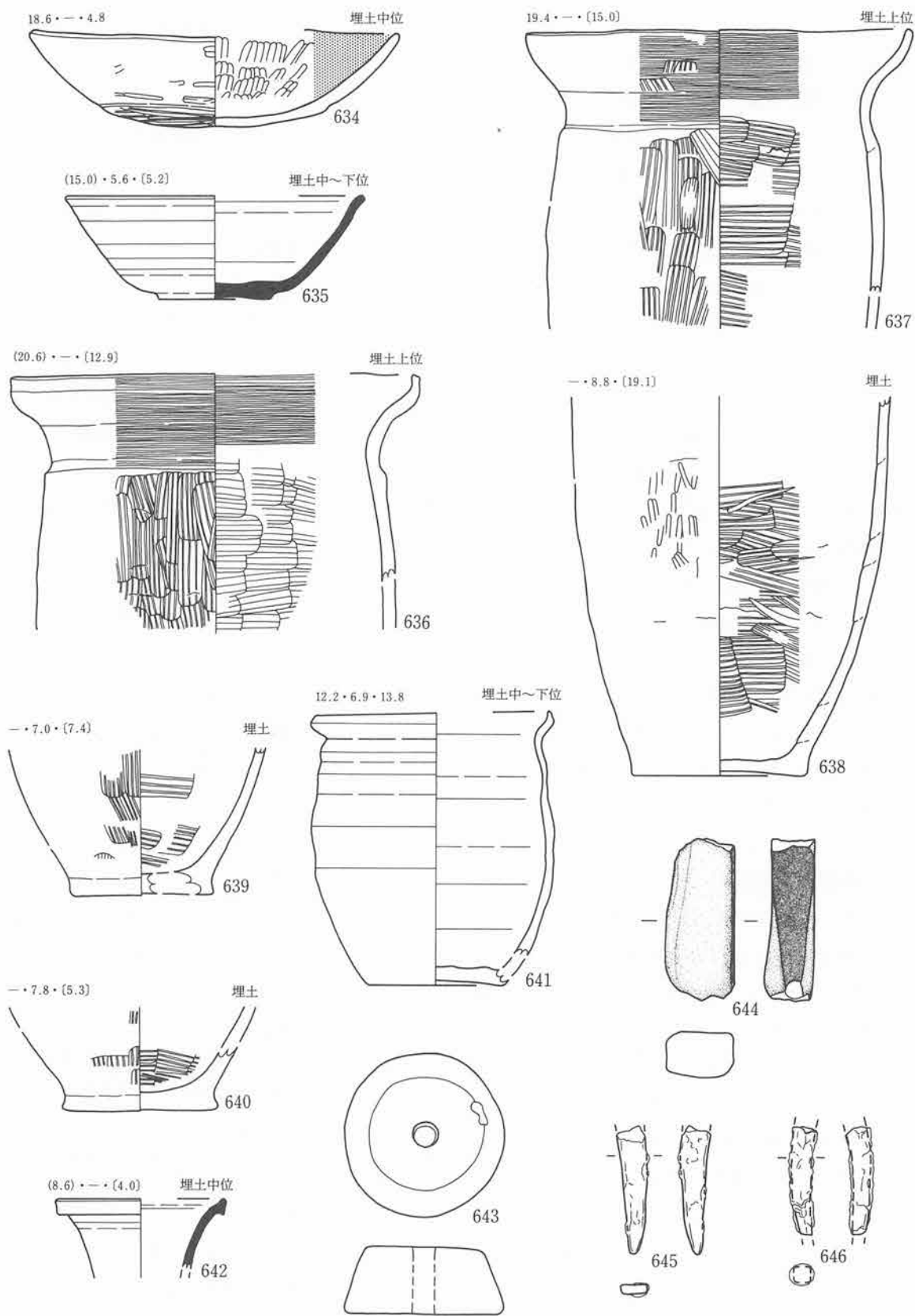
〈埋土〉 6 層に細分され、上層は黄褐色土や黒色土を多量に含む黒褐色土、中層は黄褐色土、多量の黒色土、焼土粒を含む暗褐色土、下層は焼土粒を少量含んだ黒色土で、いずれも締まっている。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
直径cm	66×63	30×22	50×48	62×42	20×17
深さcm	51	45	45	45	?

〈壁・床〉 壁は床面から外傾して急に立ち上がる。壁高は 46 cm である。床はおおむね平坦だが P 3 周辺はやや凹んでいる。壁際を除いて堅く締まっており、貼り床は施されない。

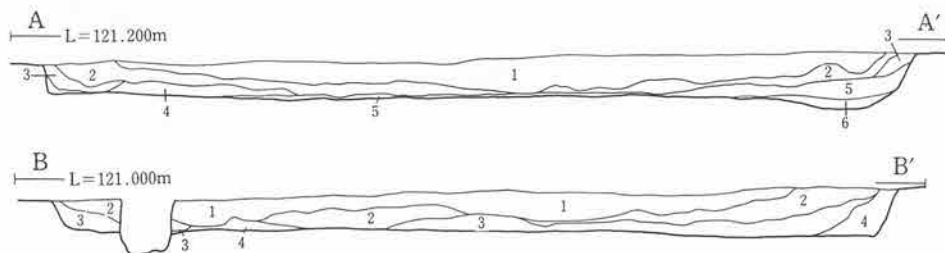
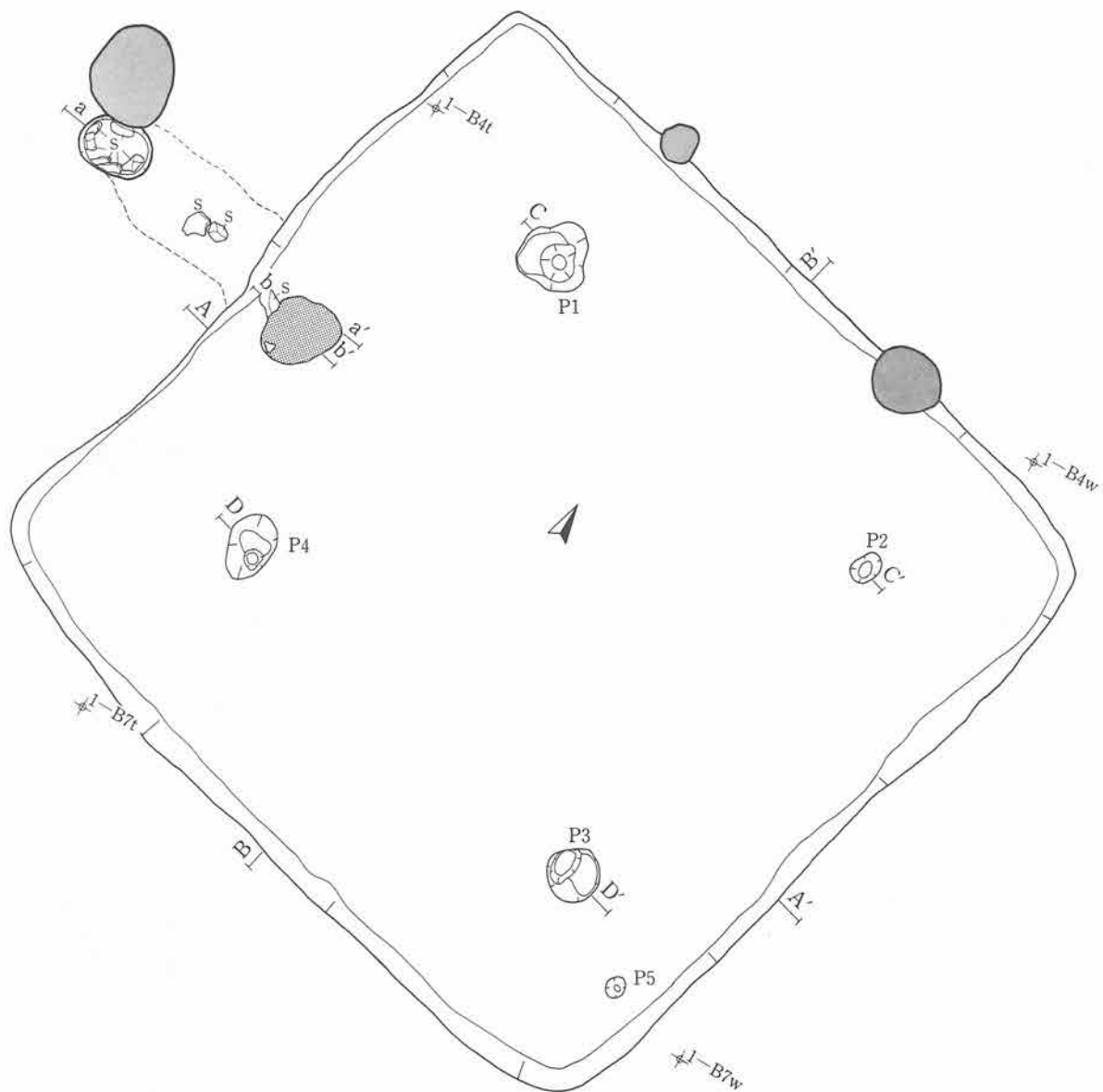
〈柱穴〉 5 基検出された。そのうち支柱穴と思われるのは P 1～P 4 までの 4 基である。平面形は円形を基調としていると思われるが、P 1 は不整形、P 2 は掘立柱建物跡の柱穴と重複し切られている。P 3 の壁際に小柱穴 P 5 が 1 基検出されている。〈他の施設〉 検出されない。

〈カマド〉 カマドは北西壁のほぼ中央に設置している。袖や天井は残っていない。周辺の埋土中に円礫が多く出土したことから、それらの礫を芯材としていた可能性がある。燃焼部は 72×58 cm、厚さ 10 cm の不



643~646は S=1/2  
634~642は S=1/3

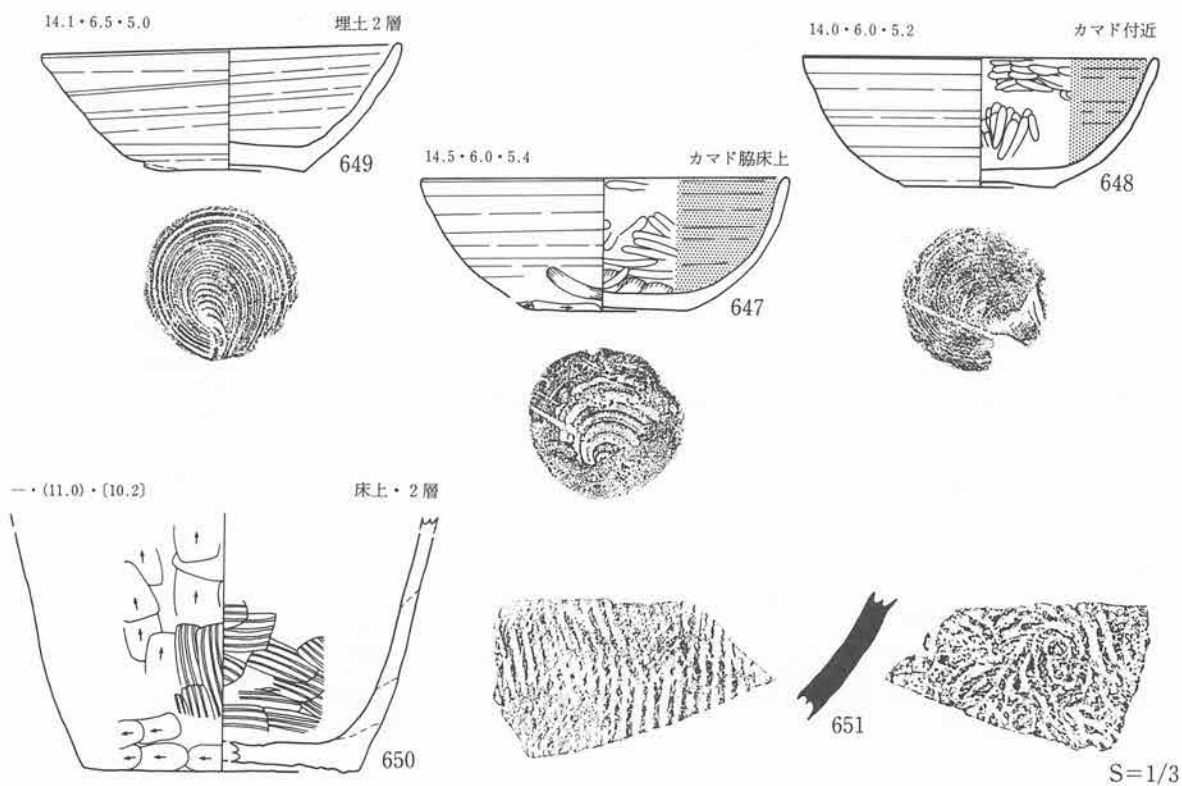
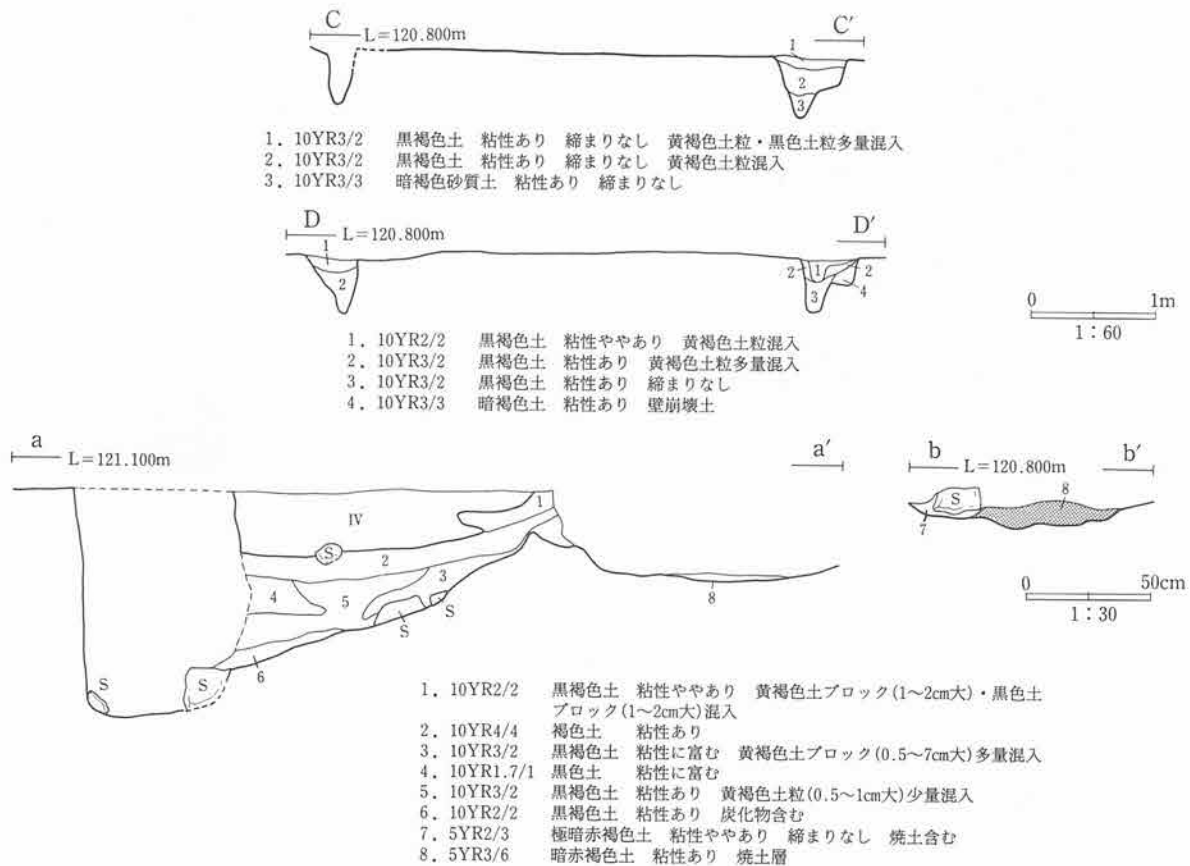
第175図 RA154竪穴住居跡出土遺物



- |            |   |            |  |
|------------|---|------------|--|
| 1. 10YR2/3 | 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック(1~4cm大)・黒色土ブロック(2~10cm大)多量混入                   | 4. 10YR3/3 | 暗褐色土 粘性なし 堅く締まる 黄褐色土粒(0.1~1cm大)少量・黒色土ブロック(1~3cm大)多量混入            |
| 2. 10YR3/4 | 暗褐色土 粘性なし 堅く締まる 黄褐色土粒(0.5~2cm大)・黒色土ブロック(2~4cm大)多量混入 焼土粒(1cm大)微量含む | 5. 10YR2/3 | 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック(1~2cm大)・黒色土ブロック(2~3cm大)多量混入 焼土粒(0.5~1cm大)微量含む |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒(0.2~0.8cm大)微量混入 焼土粒(0.5~1cm大)微量含む               | 6. 10YR4/6 | 褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック(1~3cm大)・黒色土ブロック(1~3cm大)非常に多量混入                 |

0 1m  
1:60

第176図 RA158竪穴住居跡(1)



第177図 RA158竪穴住居跡(2)・出土遺物

整な円形に焼土が形成されている。

煙道部は割り貫き式で長さ 1.92 m、燃焼部から比較的急な下がり勾配で煙出し部に向かい、煙出しではさらに下がる。燃焼部に近い煙道底部は火熱を受けて赤色化している。埋土下層の一部には炭化物の堆積が見られる。煙出し部は径 66×52 cm、深さ 92 cm の円形土坑が掘り込まれており、底部には角礫が壁に沿って円形に組まれている。

<遺物> カマド周辺の床面からロクロ使用の土師器坏 647・648 が出土している。精査時によく確認できなかったが、これらはカマド袖の芯材に使用されていた可能性がある。650 は土師器甕の底部で、床面出土の破片と 2 層出土の破片が接合している。649 は土師器坏で、埋土から出土したものである。そのほか埋土から須恵器甕破片 651 が出土している。

<時期> 出土遺物から平安時代に属する。 (金子)

#### R A 160 竪穴住居跡 (第 178 図、写真図版 74・261)

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区に位置し、西側 2 m には平安時代の R A 138 竪穴住居跡、北側 1.20 m に R A 161 竪穴住居跡、北東側 2.20 m に R A 128 竪穴住居跡が近接している。南側で中世の R G 042 堀と重複し、本遺構が切られている事から新旧関係は (新) R G 042 堀→ (旧) R A 160 竪穴住居跡である。IV 層の上面で黒褐色土の広がりによって検出されている。

<平面形・規模> 南半部が R G 042 堀に切られている事から詳細は不明である。規模は東辺 1.90 m、西辺 1.88 m、北辺 2.48 m を測る。平面形は検出された範囲から、隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 黒褐～暗褐色シルトを主体とする 8 層に大別される。上位は褐色土シルトがブロック状に混入し、下位は黒褐色土を多く含み堅く締まっている。壁際には暗褐色砂質シルトの壁崩落土が堆積している。自然堆積の埋没と思われる。<壁・床> 壁は上部が削平されており、床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁 20 cm、西壁 22 cm、北壁 27 cm を測る。床は小起伏があり、堅く締まっている。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> 堀に切られる事から不明であるが、周辺遺構の形態から東壁ないし西壁に設置していたと思われる。

<遺物> 埋土中位から土師器坏・壺と須恵器坏が少量出土している。652・653 はロクロ使用の土師器坏である。652 (A I c 群) は口縁部が外傾して立ち上がっている。内外面磨滅するものの、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。体部下半と底部にヘラナデの再調整が見られる。653 は坏 (A I a 群) の体部下半から底部破片で、底部は回転糸切りである。内面は放射状のヘラミガキ後に黒色処理を施している。他に破片のために図面掲載をしなかったが、須恵器坏も数点出土している。

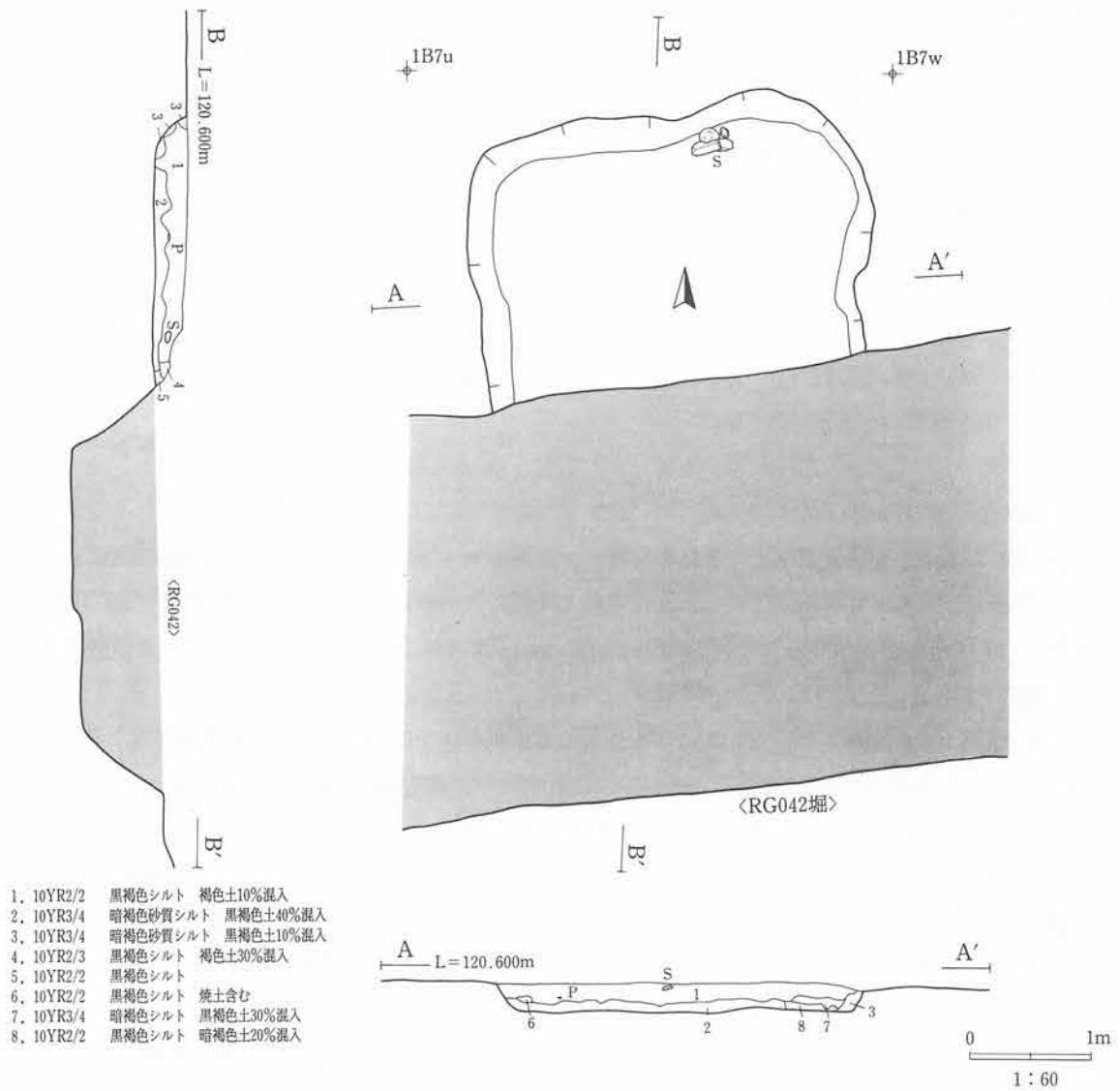
654 は体部が球胴形の小型壺で、口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部が角ばっている。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面が丁寧なヘラミガキ、底部がヘラナデである。体部外面には赤色顔料の付着が見られる。

<時期> 出土した遺物から平安時代に比定される。 (高橋)

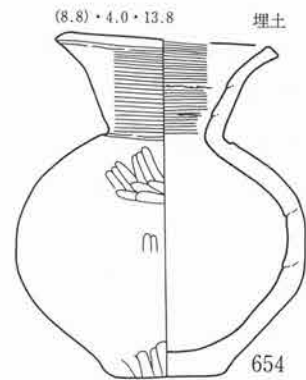
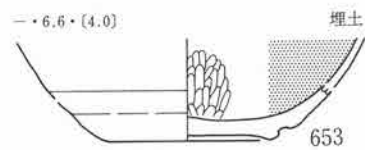
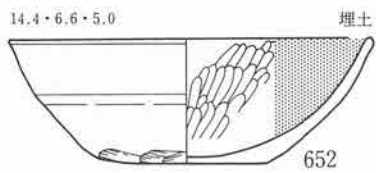
#### R A 161 竪穴住居跡 (第 179・180 図、写真図版 78・261・262)

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区に位置し、東側 3 m に R A 128 竪穴住居跡・R A 186 竪穴住居跡、北側 60 cm に R A 165 竪穴住居跡が近接している。北側で R A 165 竪穴住居跡、西側で奈良時代の R A 139



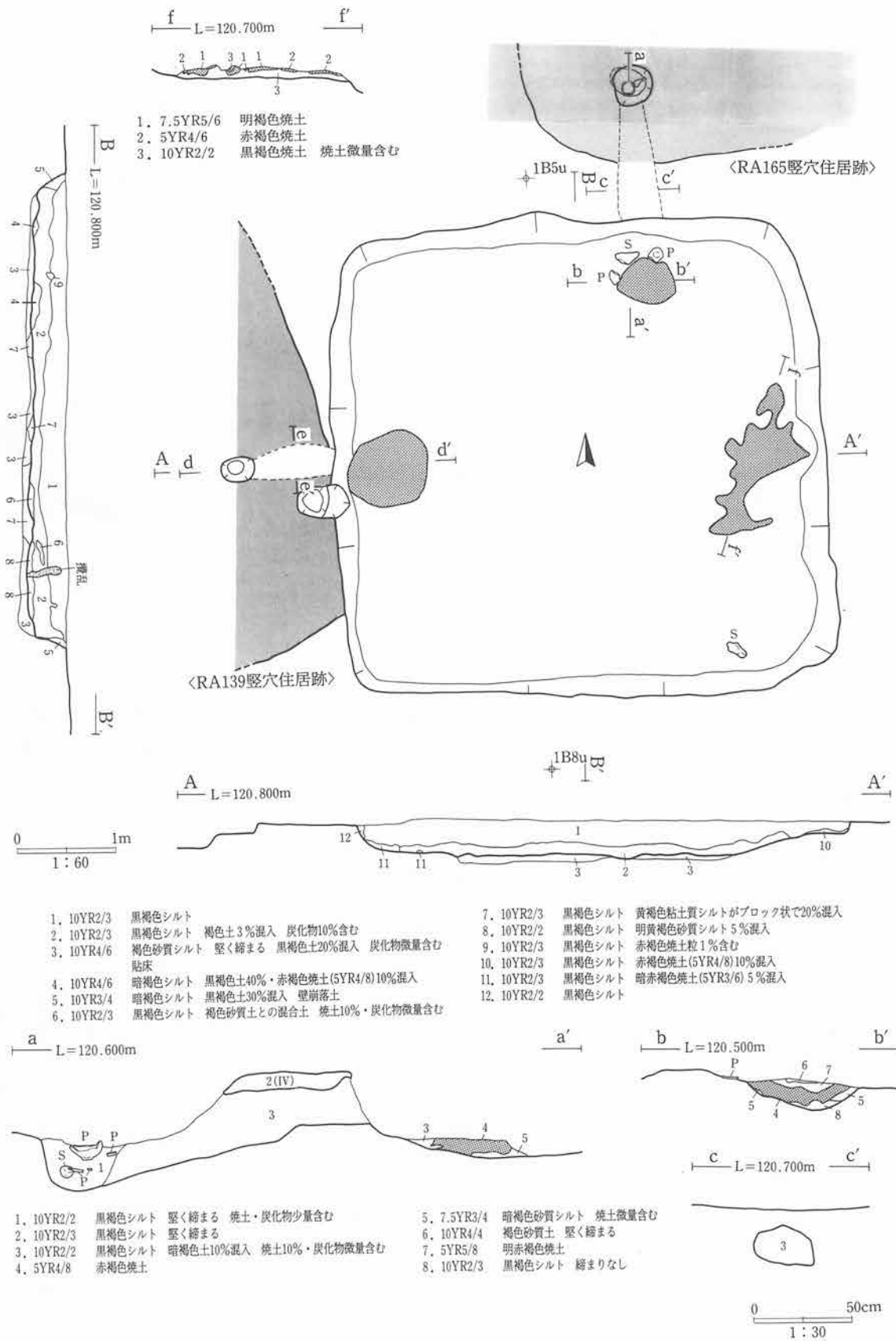


- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 褐色土10%混入
- 2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 黒褐色土40%混入
- 3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 黒褐色土10%混入
- 4. 10YR2/3 黒褐色シルト 褐色土30%混入
- 5. 10YR2/2 黒褐色シルト
- 6. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土含む
- 7. 10YR3/4 暗褐色シルト 黒褐色土30%混入
- 8. 10YR2/2 黒褐色シルト 暗褐色土20%混入

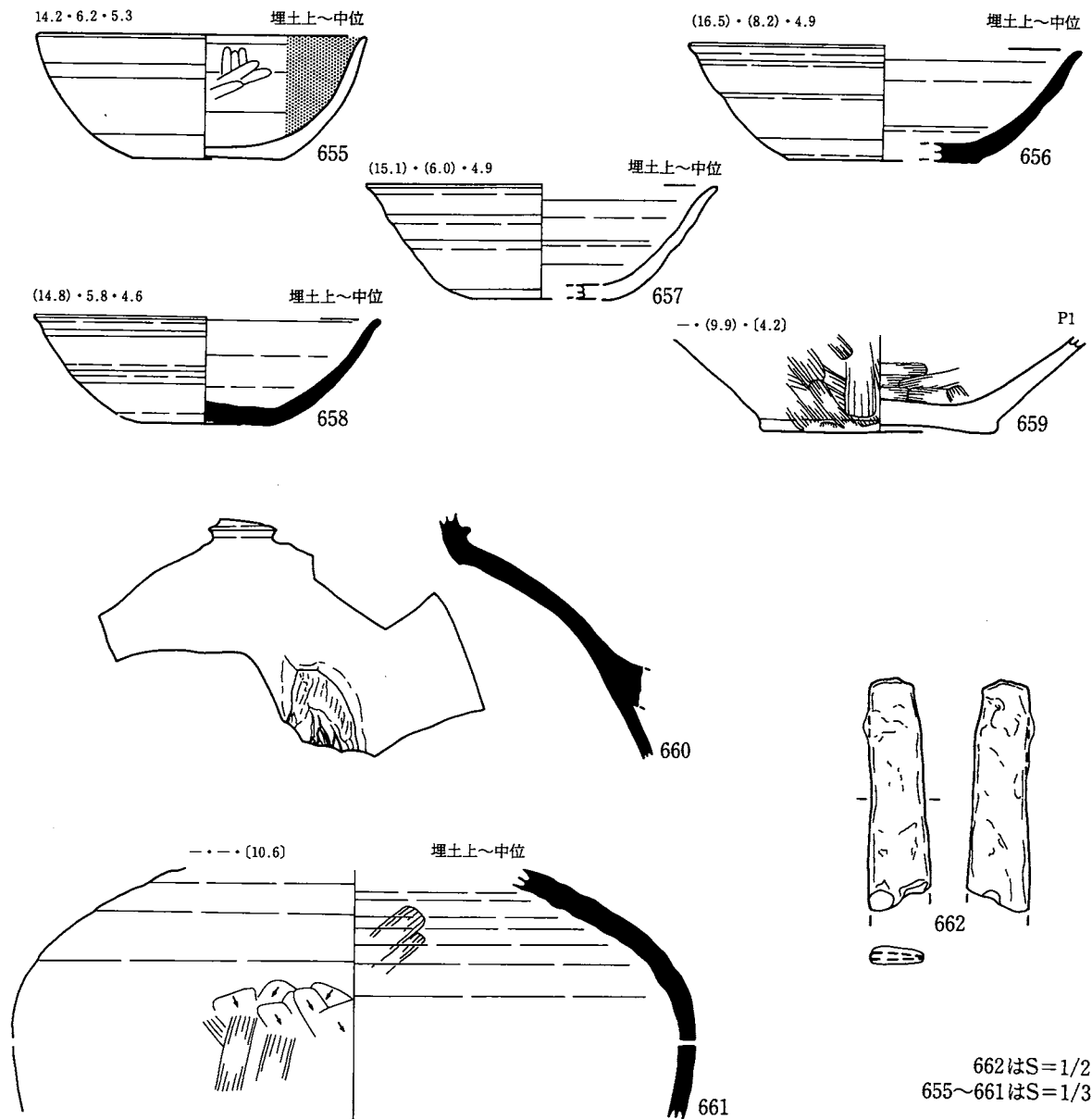
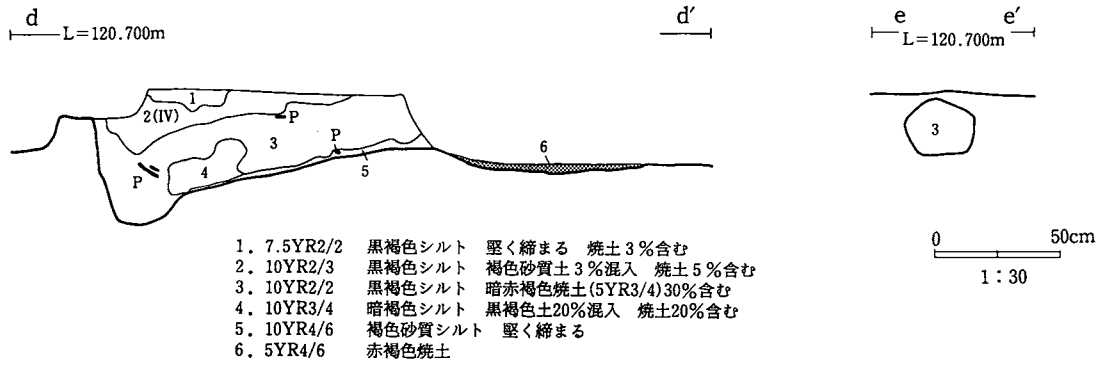


S=1/3

第178図 RA160竪穴住居跡・出土遺物



第179図 RA161竪穴住居跡(1)



662はS=1/2  
 655～661はS=1/3

第180図 RA161竪穴住居跡(2)・出土遺物

竪穴住居跡と重複している。新旧関係は R A 165 竪穴住居跡に本遺構が切られ、R A 139 竪穴住居跡を切っている事から、(新) R A 165 竪穴住居跡→R A 161 竪穴住居跡→(旧) R A 139 竪穴住居跡である。遺構検出はIV層の上面で確認されている。

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈し、規模は4.50×4.40 mである。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする10層に大別される。上層～中位は黒褐色シルトがレンズ状に、下層はブロック状の褐色土と焼土粒、壁際には暗褐色シルトに黒褐色土が混入する壁崩落土が堆積している。自然堆積で埋没したものと思われる。<壁・床> 壁の上半部は崩落しており、南壁は床面から急傾斜で、他の壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁12 cm、西壁26 cm、南壁32 cm、北壁30 cmを測る。黒褐色シルトの貼り床が施され、厚さは4～12 cmである。北側が若干高まるものの、平坦で堅く締まっている。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは2基検出されている。①北カマドは北壁の中央部やや東寄りに設置し、袖部を含む本体部の大部分は崩壊し燃焼部だけが現存している。燃焼部の焼土範囲は径60×45 cmの不整楕円形状で、厚さは最大で8 cmを測る。燃焼部周辺の床面から土師器坏・甕の破片および角錐形の礫が出土したが、カマドの構築材に関わるものかは不明である。支脚は確認されていない。

煙道の一部と煙出し部上半部は削平されている。割り貫き式の煙道部は長さ1.54 mで、燃焼部からほぼ平らに37 cm延びた後下り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径42×39 cm、深さ23 cmの円形状土坑が掘り込まれている。埋土は黒褐色シルトを主体とし、焼土粒と炭化物を少量含む。

②西カマドは西壁のほぼ中央部に設置している。北カマドと同様に本体部は崩壊しており、燃焼部だけが現存している。燃焼部は径79×78 cmの円形状焼土が形成され、厚さが4 cmである。

煙道は長さ1.14 mで、径28×23 cmの楕円形状に割り貫かれ、燃焼部から緩やかな下り勾配で煙出し部に延びている。煙出し部は径35×24 cm、深さ43 cmの楕円形状土坑が掘り込まれている。

<遺物> 埋土中～下位で土師器、須恵器、鉄製品等が出土している。655・657はロクロ使用の土師器坏(A I b群・A II a群)で、底部の切り離しが回転糸切りである。655の口縁部は体部から丸味を持って軽く外傾し、口縁端部は直立する。底部は回転糸切り後に一部再調整され、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。657は底部を欠損しており、口縁部は体部から外傾して立ち上がっている。

656・658は須恵器坏(B II a群)で、底部から外傾して立ち上がり、口縁端部が軽く外反している。底部の切り離しは回転糸切りである。

659はロクロ不使用の土師器甕(A II群)体部下半～底部の破片で、外形から球胴形の器形と思われる。体部外面はハケメ、内面がハケメ調整を施し、胎土に砂と金雲母を多く混入している。底部は木葉痕である。

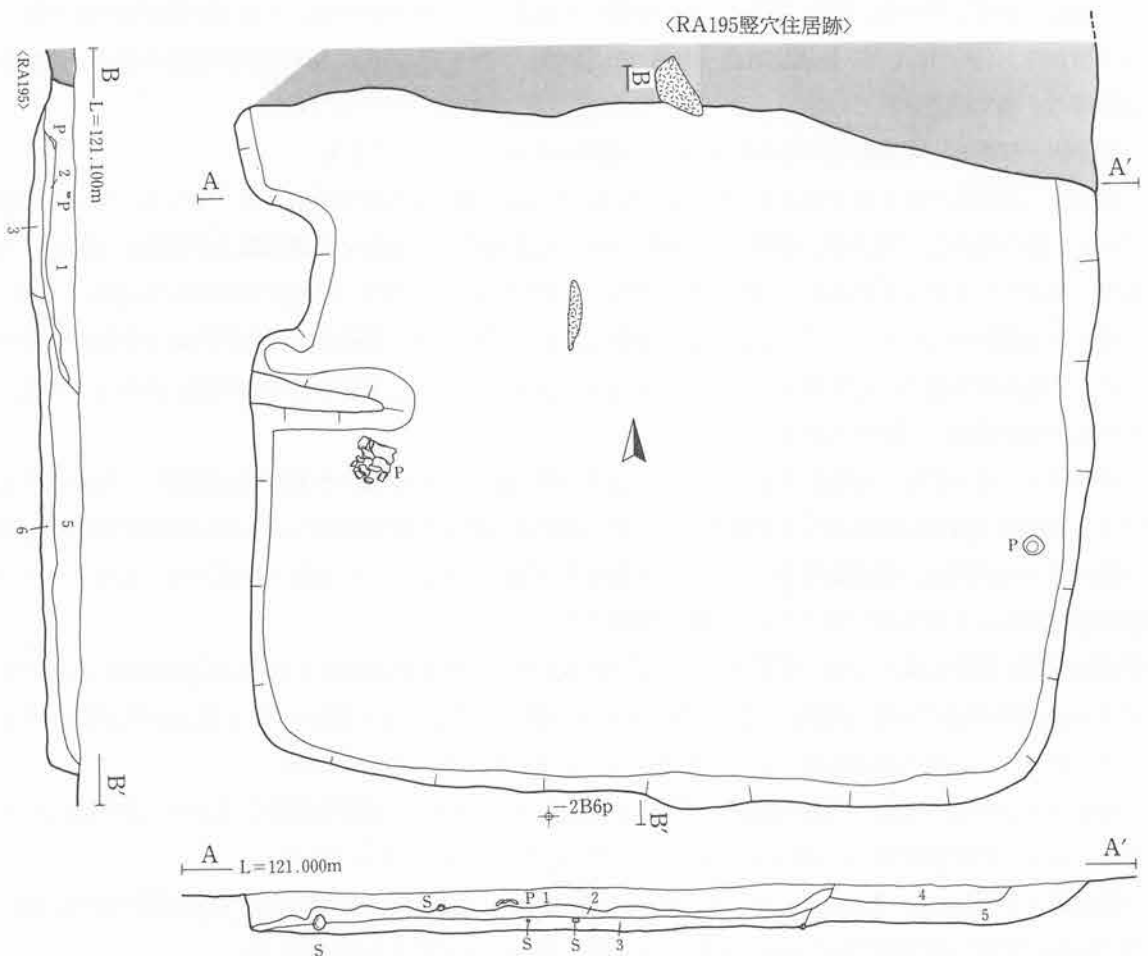
660・661は須恵器である。660は肩部に耳の付いた長頸瓶、661が壺ないし瓶の体部～肩部の破片である。660の内外面はロクロナデ痕、661は外面が頸部から肩部の最大径までロクロナデ痕、体部が縦方向のヘラケズリとヘラナデ調整が施されている。

662は先端と茎を欠損した刀子破片である。現存長は6.7 cm、幅1.4 cm、厚さ2 mmを測る。

<時期> 遺物の特徴が奈良時代と推定される球胴甕以外は平安時代に属する事から、本竪穴住居跡は平安時代前期の9世紀代に比定される。(佐藤・高橋)

## R A 162 竪穴住居跡 (第181～186図、写真図版79・262～265)

<位置・重複関係> 東側調査区の一2B区北側に位置している。北側でR A 195 竪穴住居跡と重複して



- |    |         |        |                                   |
|----|---------|--------|-----------------------------------|
| 1. | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 炭化物粒2%・焼土粒2%・炭化物小ブロック1%含む         |
| 2. | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 焼土ブロック5%・炭化物40%含む 炭化物層            |
| 3. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 黄褐色土ブロック5%・炭化物粒2%・焼土粒1%含む         |
| 4. | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 小礫(径0.2~0.6cm大)含む                 |
| 5. | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 黄褐色土小ブロック3%・黄褐色土粒5%・焼土粒1%・炭化物1%含む |
| 6. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 黄褐色土粒3%・焼土粒1%・炭化物2%含む             |

0 1m  
1:60

いる。新旧関係は本遺構が切られている事から、(新) R A 195 竪穴住居跡→(旧) R A 162 竪穴住居跡である。遺構検出はIV層の上面で、暗褐色土の広がりによって確認されている。

<平面形・規模> 北側がR A 195 竪穴住居跡に切られている事から、全容は不明である。規模は東辺4.70m、西辺5.00m、南辺5.80mを測る。平面形は検出された範囲から、一辺が6.40m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は6層に大別される。上層は炭化物と焼土粒を多く含む暗褐色シルト、中位が焼土ブロックと炭化物の混合土の暗褐色シルト、下層が黄褐色土を小ブロック混入する黒褐色シルトで構成されている。

<壁・床> 壁の上部は崩落している。南壁と西壁は床面から垂直に、東壁は緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は東壁27cm、西壁30cm、南壁27cmである。床はほぼ平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは西壁側に設置しているが、本体部の大部分は崩壊し、左袖の下端部だけが僅かに現存しているだけである。現存する左袖の長さは1.30m、幅48cmである。燃焼部および煙道部は検出されない。

<遺物> 床面と埋土中～下位から土師器手捏ね・坏・長頸瓶・甕、須恵器長頸瓶・甕、鉄製品が出土している。663は土師器の手捏ね土器で、口縁部は外傾して立ち上がっている。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理され、胎土に砂と石を多く含んでいる。

664～674は土師器坏である。664・665はロクロ使用の土師器坏（A II a群）で、底部の切り離しが回転糸切りである。内面は磨滅しているが黒色処理を施している。

666・674は底部の切り離しが回転糸切りで、内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a群）である。口縁部は外傾する666・671、体部から内湾気味に立ち上がる672～674がある。

675は須恵器坏（B II a群）で、口縁部は底部から外傾して立ち上がっている。底部の切り離しは回転糸切りである。

676・677はロクロ使用の土師器甕（A I群）の口縁部と体部下半～底部の破片である。676の口縁部は短く頸部からくの字状に外反し、口唇部が角張っている。

678はロクロ使用の土師器長頸瓶で口縁部を欠損している。体部外面にはハケメ調整を施している。

679～682はロクロ不使用の土師器甕（A II群）である。679・680・682は体部上半～口縁部を欠損している。681の口縁部は頸部からくの字状に外反し、ヨコナデ調整を施している。体部外面は縦方向のハケメ、内面がヨコナデ調整を施している。内面は粘土紐の積み上げ痕が明瞭である。682は口縁部を欠損するが、球胴形の器形を呈している。内外面はハケメ調整である。

683～691は須恵器甕・大甕（B群）で、口縁部は頸部から強く外反して立ち上がる器形が多い。体部外面は平行叩き具痕、内面は平行叩き具痕・円形状の当て具痕・ヘラナデ調整等が見られる。690の体部下半には縦方向のヘラケズリ調整が施され、689の体部は球胴形の器形である。

692～697は須恵器長頸瓶である。692・693は口縁部、694は体部上半～口縁部、696～697が体部下半～底部の破片である。いずれも内外面はロクロ成形痕が明瞭で、696の体部外面にヘラケズリ調整が施されている。

698は先端と基部の一部を欠損した鎌で、現存長は13.2 cm、幅3.1 cm、厚さ2 mmを測る。

<時期> 遺物の特徴から平安時代に比定される。 (高橋)

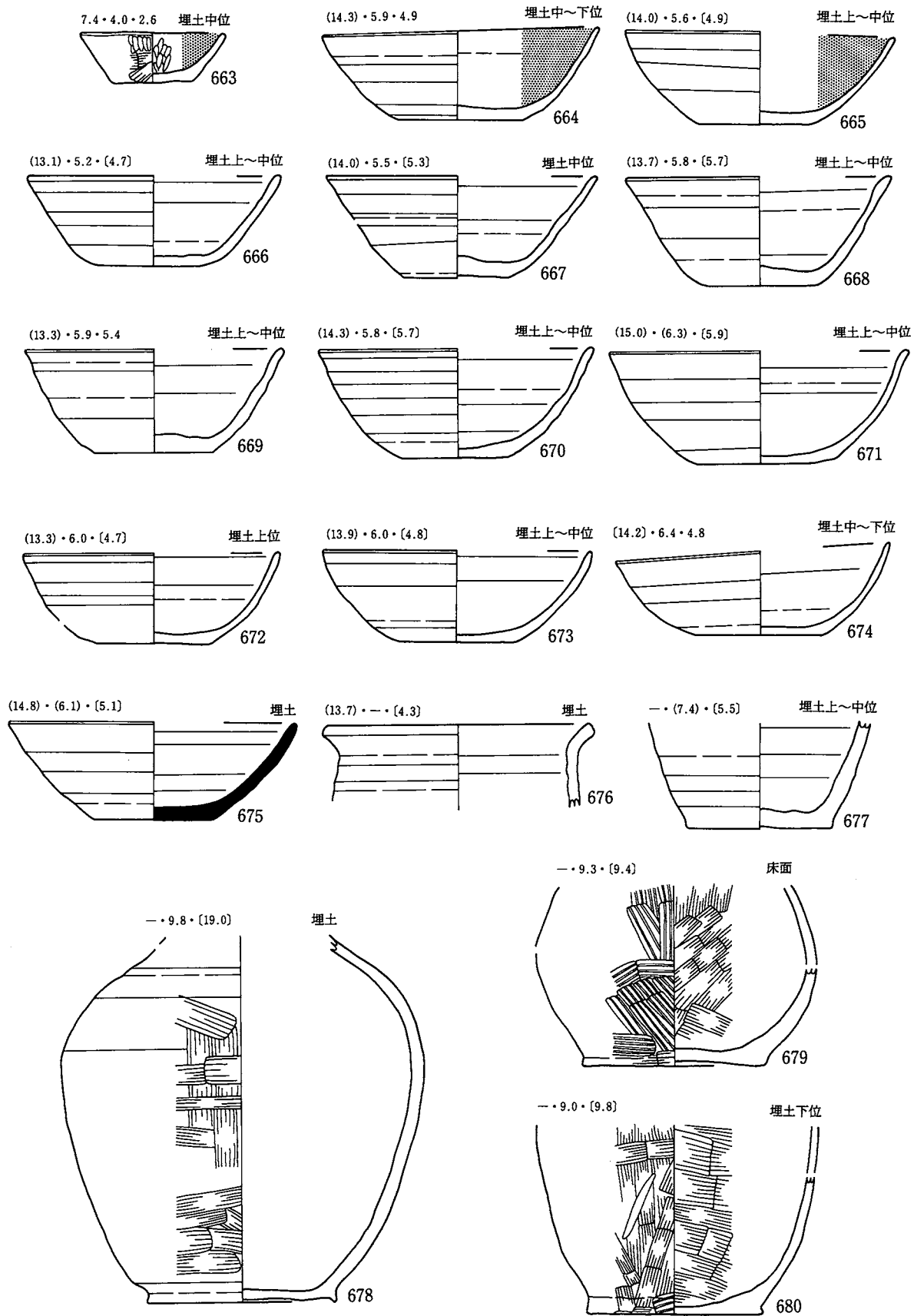
#### R A 163 竪穴住居跡（第187図、写真図版80・266）

<位置・重複関係> 東側調査区西端の1 A区に位置している。一部で中世のR B 005・007掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から、(新) R B 005・007掘立柱建物跡→(旧) R A 163竪穴住居跡である。IV層上面で暗褐色土の広がりで見出している。<平面形・規模> 西側が調査区域外に延びている事から、規模の全容は不明である。規模は東辺3.34 m、南辺2.96 m、北辺2.50 mを測り、検出された規模から一辺が3.50 m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土はシルトを主体とする4層に大別される。1層は大部分を占める黄褐色土を含む混合土の暗褐色シルト、2層が締まりのある黒褐色シルトで構成されている。<壁・床> 壁の上部の大部分は削平されており、床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は東壁6 cm、南壁3 cm、北壁5 cmである。床面はほぼ平坦で堅く締まり、一部に砂礫層が露出している。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁の中央部北寄りに設置しているが、本体部の大部分は崩壊し、燃焼部が現存しているだけである。燃焼部の焼土範囲は径30×26 cmの楕円形状で、厚さは7 cmである。煙道部は上半部が削平され掘り込み式か割り貫き式かは不明である。煙道は長さ1.15 mで、燃焼部から緩やかに下がりながら煙



第182図 RA162竪穴住居跡出土遺物(1)

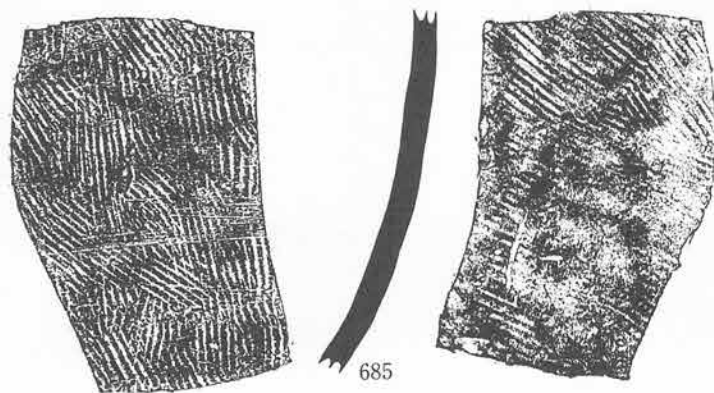
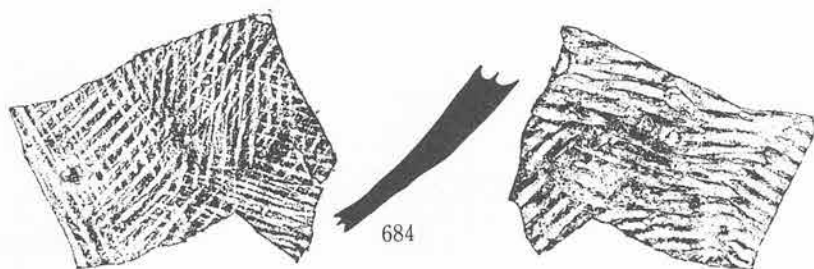
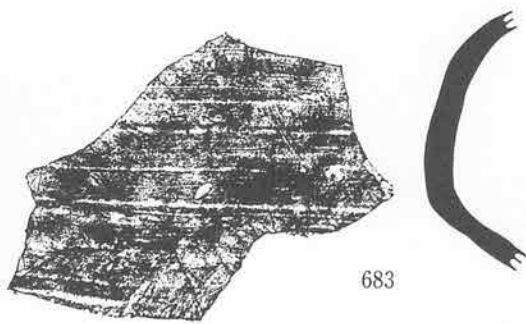
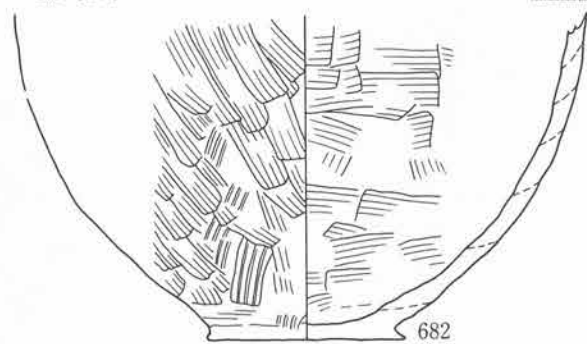
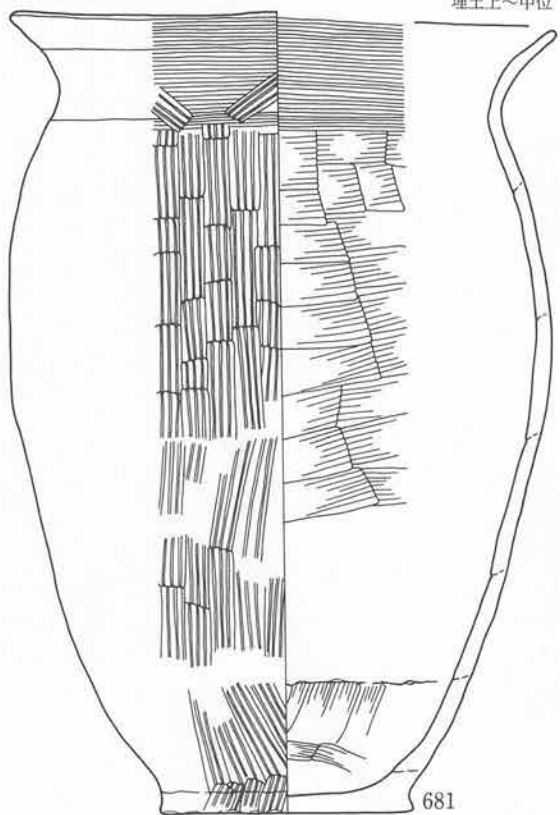
S=1/3

(21.7)・10.0・32.0

埋土上~中位

—・8.0・(13.0)

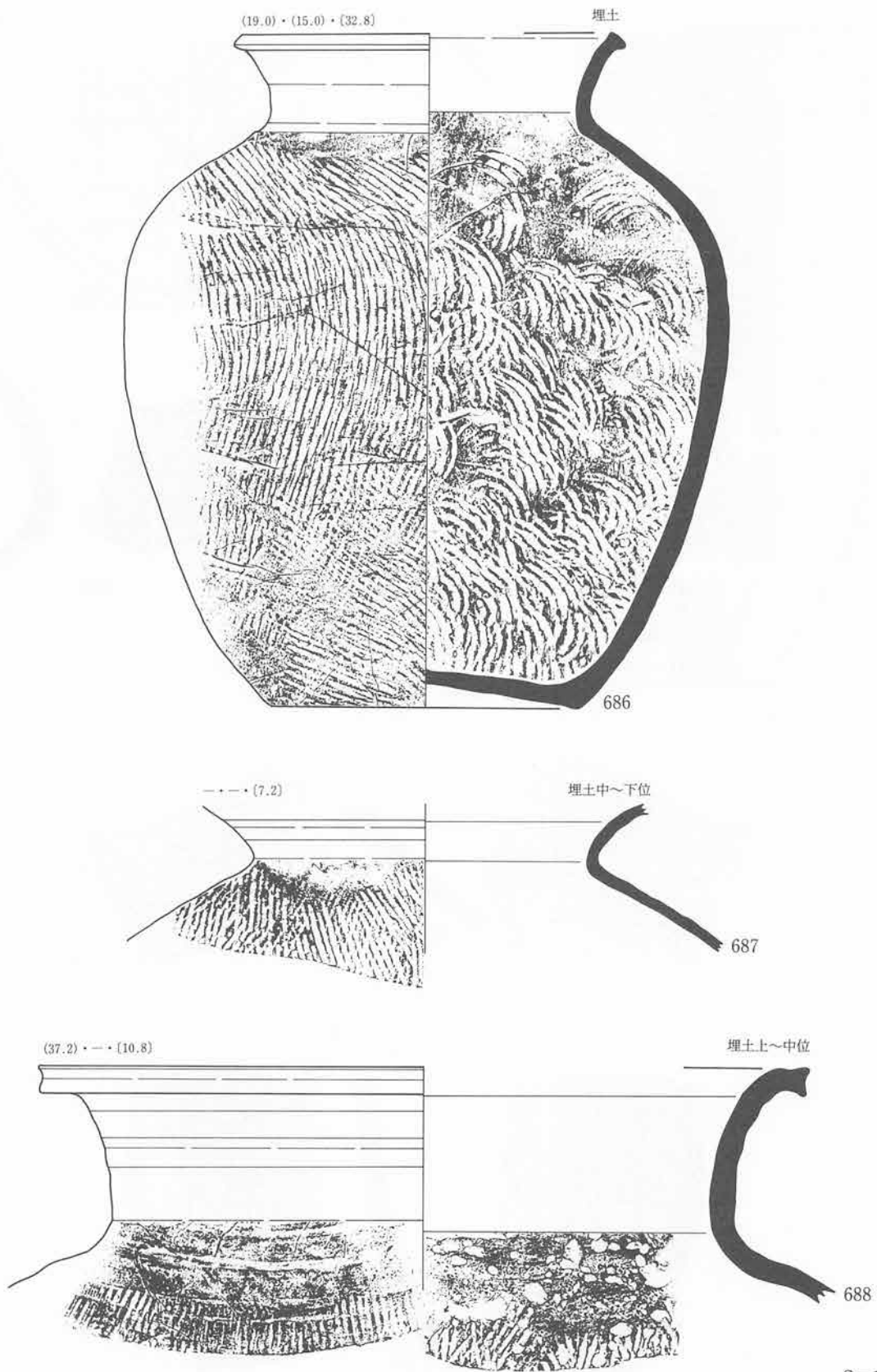
埋土上位



S=1/3

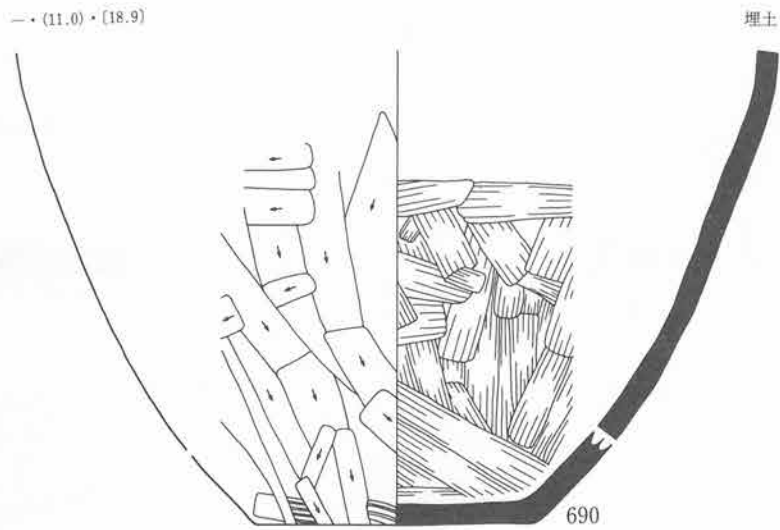
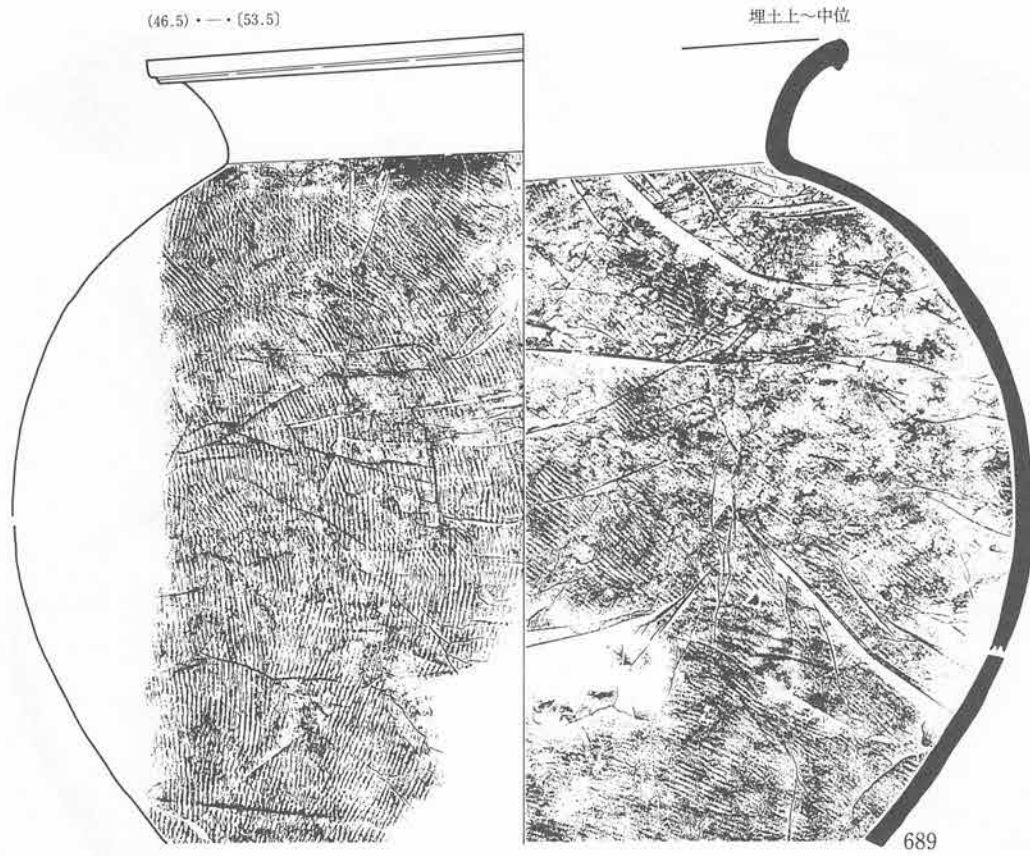
第183図 RA162竪穴住居跡出土遺物(2)





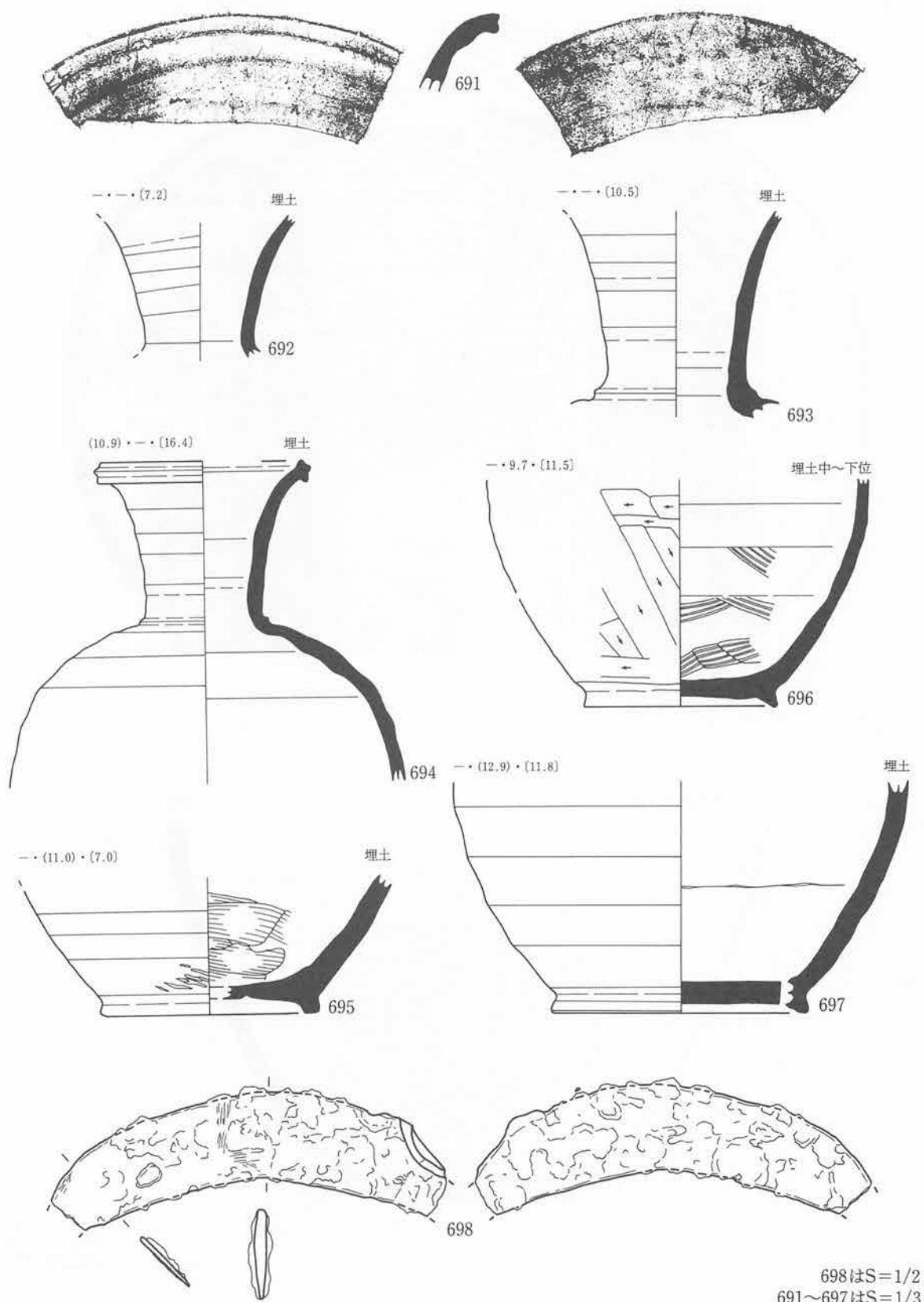
S=1/3

第184図 RA162竪穴住居跡出土遺物(3)

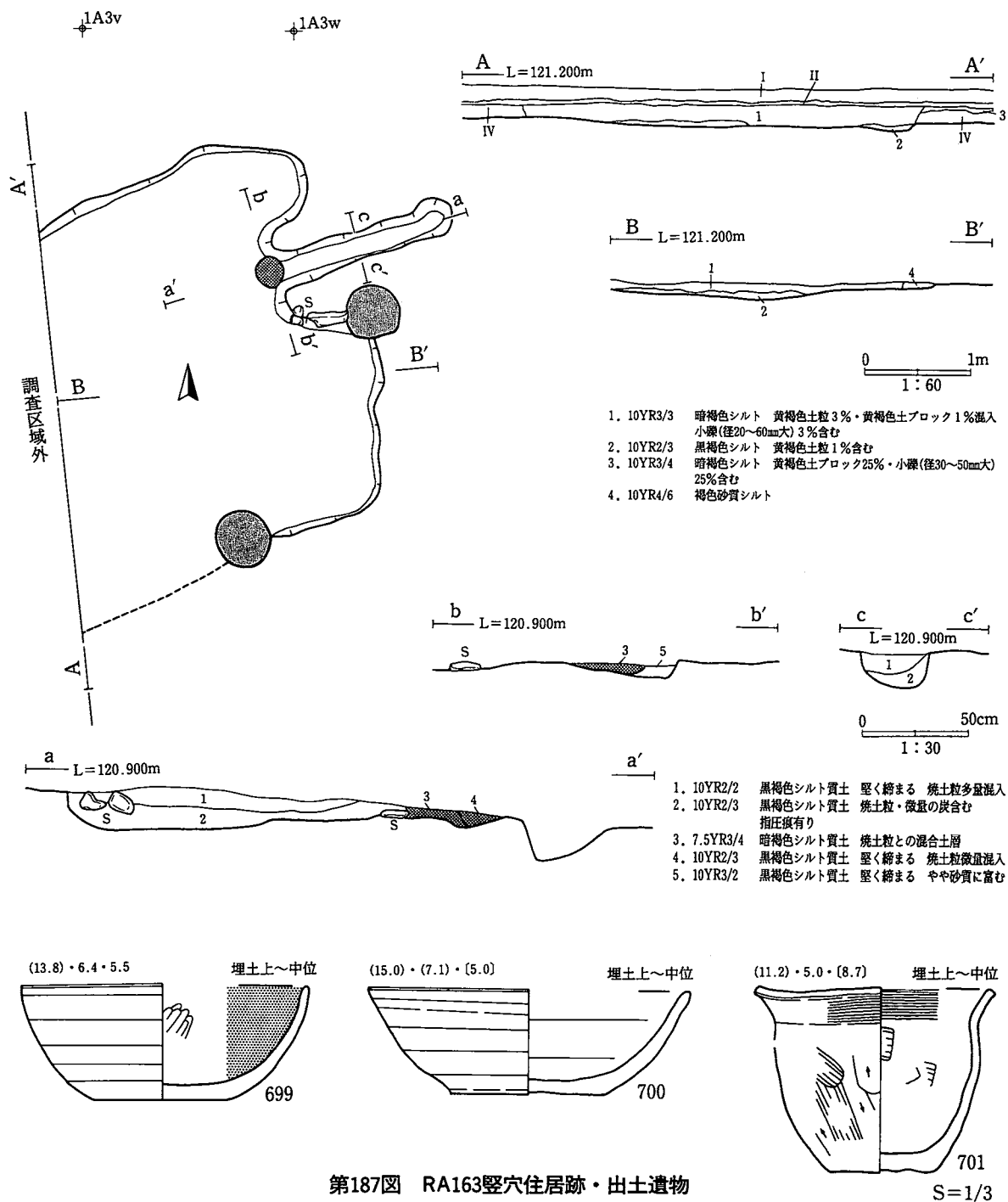


690はS=1/3  
689はS=1/5

第185図 RA162竪穴住居跡出土遺物(4)



第186図 RA162竪穴住居跡出土遺物(5)



第187図 RA163竪穴住居跡・出土遺物

出し部に続いている。煙出し部の構造は不明である。

<遺物> 埋土上~中位で土師器坏・甕が出土している。699はロクロ使用の土師器坏(A II a群)で、内面は磨滅しているがヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部はヘラナデの再調整である。

700は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器(A II a群)で、底部の切り離しが回転糸切りである。3分の1が現存し焼成も良好で、口縁部は外傾して立ち上がっている。

701はロクロ不使用の土師器甕(A II群)である。小型の器形で、口縁部は頸部から外傾する。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラナデと縦方向のヘラケズリ調整、底部がヘラナデ調整である。

<時期> 遺物の特徴から平安時代に比定される。

(高橋)

R A 165 竪穴住居跡 (第 188~193 図、写真図版 80・266~269)

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区に位置している。東側 2 m に R A 187 竪穴住居跡、南側 60 cm に R A 161 竪穴住居跡、南東側 1.35 m に R A 186 竪穴住居跡が近接する。遺構検出は IV 層の上面で黒~黒褐色土の広がりによって確認されている。また、南壁側で平安時代の R A 161 竪穴住居跡の北カマド煙道と重複している。新旧関係は本遺構が切られている事から、(新) R A 161 竪穴住居跡→(旧)本竪穴住居跡である。

<平面形・規模> 南西コーナーと南壁側の一部だけが調査区内で、遺構の大部分は隣接する第 19 次調査区に延びている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は 3.70×3.57 m である。

<埋土> 黒褐色土シルトを主体とし、上~中位は黒褐色シルト質土がレンズ状に、下位の一部は褐色砂質シルトで堅く締まっている。壁際には、褐色砂質シルトに黒褐色土が混入する壁崩落土が堆積している。自然堆積で埋没したものと思われる。<壁・床> 壁の上半部は崩落しており、南壁は床面から急傾斜で、他の壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁 33 cm、西壁 28 cm、南壁 27 cm、北壁 22 cm を測る。黒褐色シルトの貼り床が施され、厚さは 4~7 cm である。北側が若干高まるものの、平坦で堅く締まる。

<柱穴> 柱穴状の土坑は P 1~P 6 の 6 基検出している。平面形は P 1・P 4・P 6 が楕円形、P 2・P 5 が不整形、P 3 が円形を呈する。埋土は P 1・P 4~P 6 では黒色土を主体に構成され、P 2 は中位~下位に炭化物を、P 3 は上~下位にかけ焼土を含んでいる。いずれも位置的に柱穴とは考えられない。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	63×44	41×29	40×34	57×44	40×38	58×43
深さcm	20	18	5	12	17	29

<カマド> カマドは西壁北東コーナー寄りに設置している。袖部が僅かに現存するほかは崩壊している。燃焼部付近には数個の垂角礫と土師器甕の破片が散在するが、カマド構築材に関わる物かは不明である。燃焼部は幅 50 cm、奥行き約 70 cm である。袖部の一部には燃焼を受けた痕跡が見られる。支脚は確認されていない。

煙道部は長さ 1.08 m の割り貫き式で、燃焼部から約 11 度の下り勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径 51×48 cm、深さ 38 cm の円形状土坑が掘り込まれている。

<遺物> 埋土上~中位から土師器と須恵器が多く出土しており、拓本を含めて 28 点掲載している。702・703 はロクロ使用の土師器坏である。702 (A I a 群) は底部から軽い丸味を持ち外傾し、口縁端部が僅かに外反する器形である。内面は磨滅しており、ヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。703 (A II a 群) の口縁部は外傾して立ち上がっている。いずれも底部の切り離しは回転糸切りである。

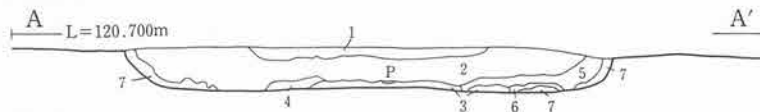
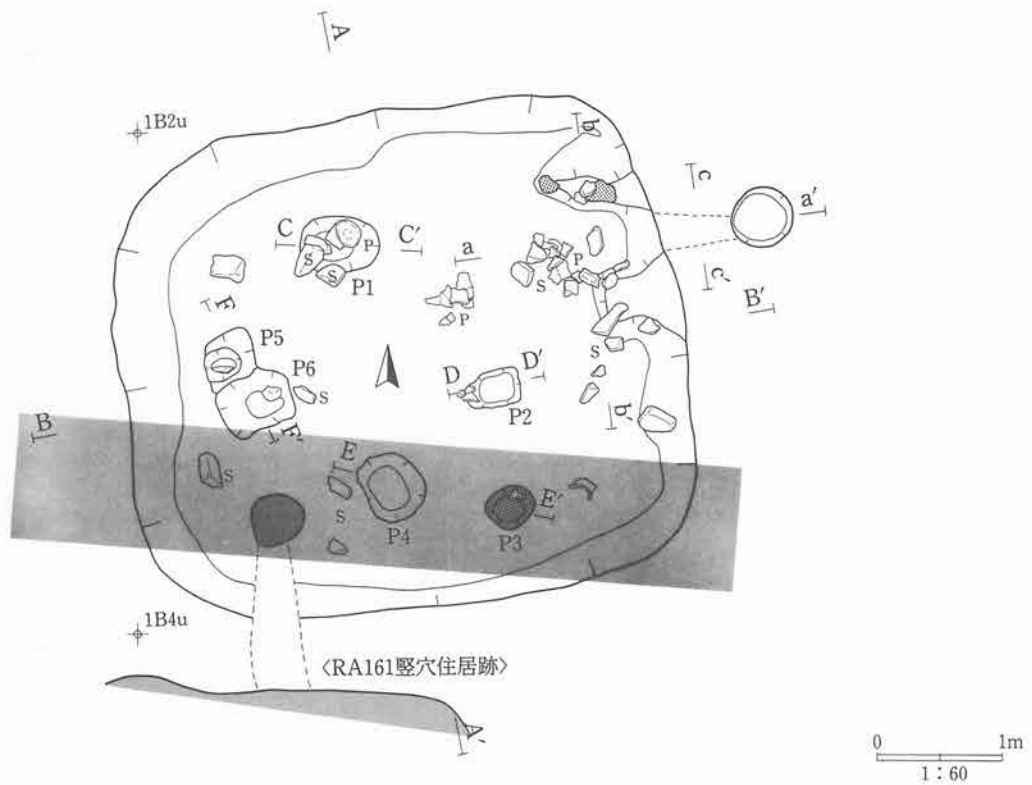
704 はロクロ使用の土師器鉢で底部を欠損している。器面調整は外面が下半部に斜め方向のヘラケズリ、内面がヘラミガキ後に黒色処理を施している。胎土に砂と小石を多く含んでいる。

705 はロクロ使用の土師器長胴甕 (A I 群) である。体部外面は上部がロクロナデ、中~下部がヘラケズリ、内面は下部の一部にロクロナデ調整を施している。器形は底部から僅かに膨らみながら立ち上がり、頸部で軽く窄んだ後口縁部が外反する。

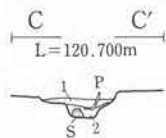
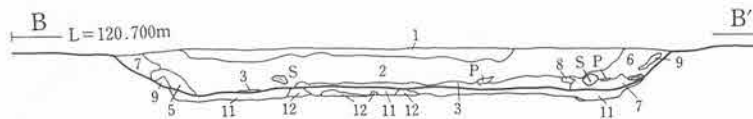
707~710 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) である。707 は体部の下部から底部の甕破片で、内外面にヘラナデやハケメ調整を施している。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がる 708、外反する 709・710 がある。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面が 708 がヘラケズリ、709・710 がハケメである。内面は 708・709 がヘラナデ、710 がハケメ調整を施している。709・710 の内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。

706 はロクロ使用の体部下半~底部の土師器壺で、体部外面が横方向のヘラケズリ、内面がハケメ調整である。

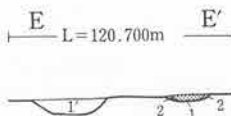
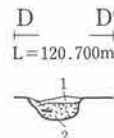
須恵器は 711~727 で、器種には甕・大甕・壺・長頸瓶等がある。711・712・716 は甕である。711 はロク



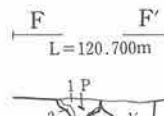
- |  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| 1. 10YR2/2-2/3 黒褐色シルト 褐色土10%混入             | 7. 10YR4/6 褐色砂質シルト 黒褐色土40%混入 炭化物少量含む |
| 2. 10YR2/2-2/3 黒褐色シルト                      | 8. 5YR3/6 暗赤褐色焼土 黒褐色土混入              |
| 3. 10YR2/3 黒褐色シルト 褐色砂質土混入 炭化物含む            | 9. 炭                                 |
| 4. 10YR2/2-2/3 黒褐色シルト 褐色土がブロック状に30%混入      | 10. 10YR3/4 暗褐色シルト                   |
| 5. 10YR2/1 黒色シルト 褐色土3%混入                   | 11. 10YR2/3 黒褐色シルト 堅く締まる 貼床          |
| 6. 10YR2/1-2/2 黒〜黒褐色シルト 褐色土少量混入 炭化物・焼土少量含む | 12. 10YR4/6 褐色砂質シルト 貼床               |



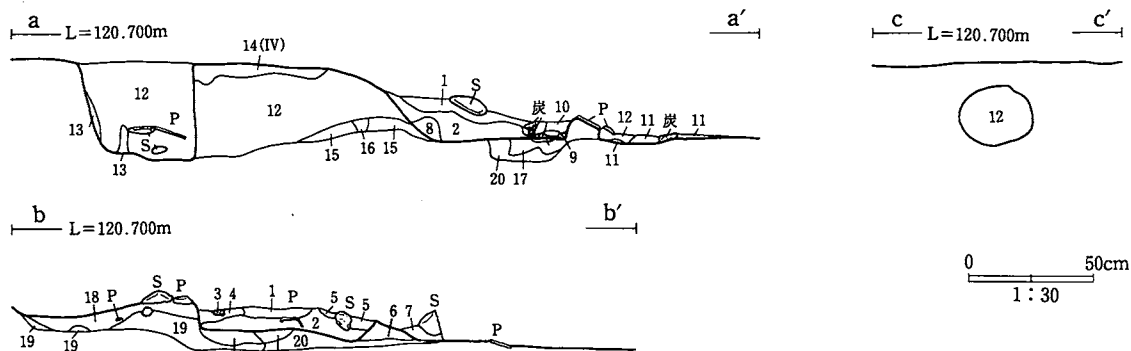
- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1. 10YR2/3 黒褐色シルト 堅く締まる  | 1. 10YR4/6 褐色砂質シルト 炭化物30%混入 |
| 褐色砂質土10%混入 炭化物含む         | 2. 炭                        |
| 2. 10YR4/6 褐色砂質シルト 堅く締まる |                             |



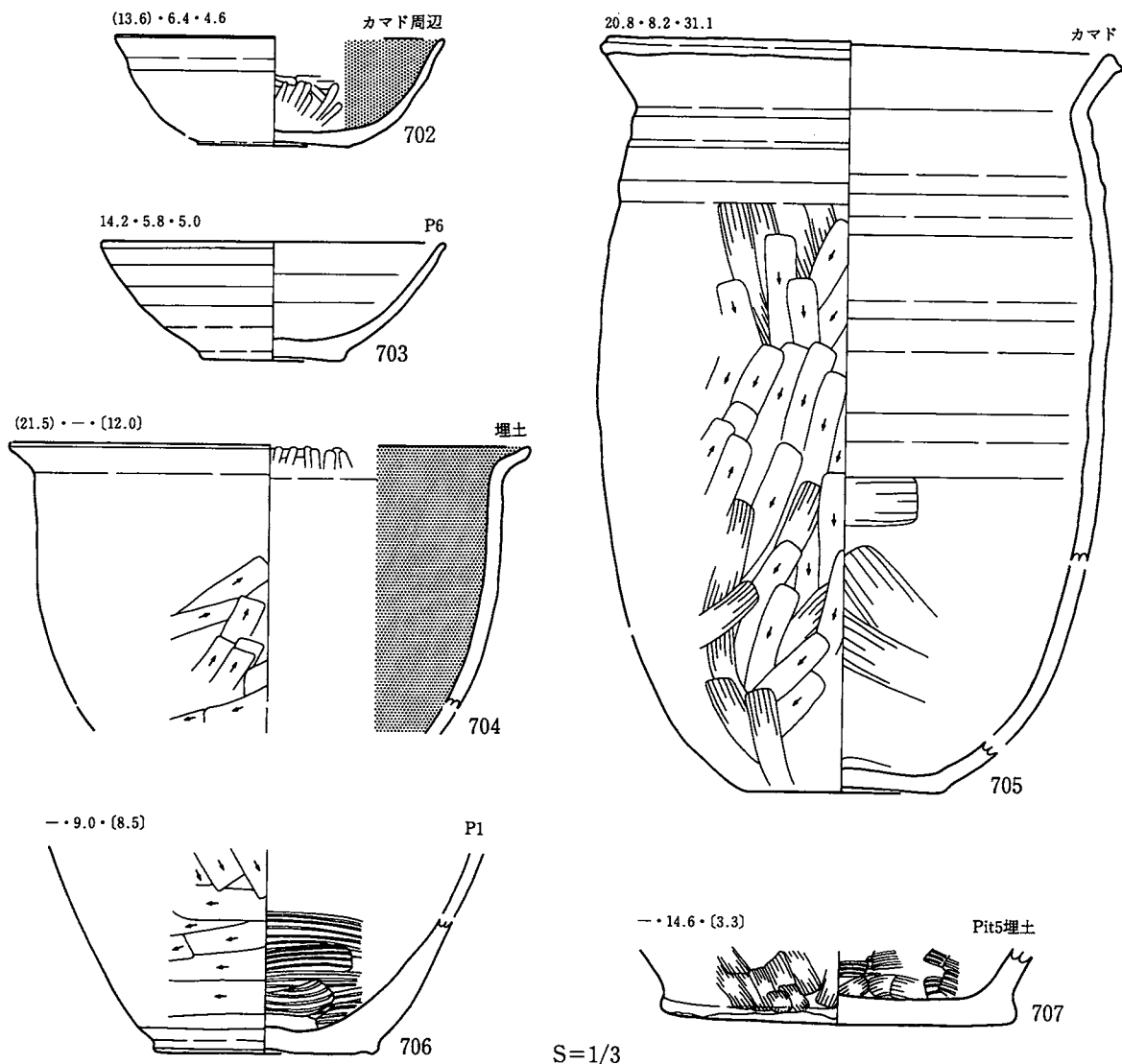
- |                            |                         |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. 5YR4/8 赤褐色焼土            | 1. 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土粒含む |
| 2. 10YR4/6 褐色砂質シルト         | 2. 10YR4/6 褐色砂質シルト      |
| 1'. 10YR2/3 黒褐色シルト 褐色砂質シルト | 1'. 10YR2/3 黒褐色シルト      |
| 10%混入 炭化物少量含む              |                         |



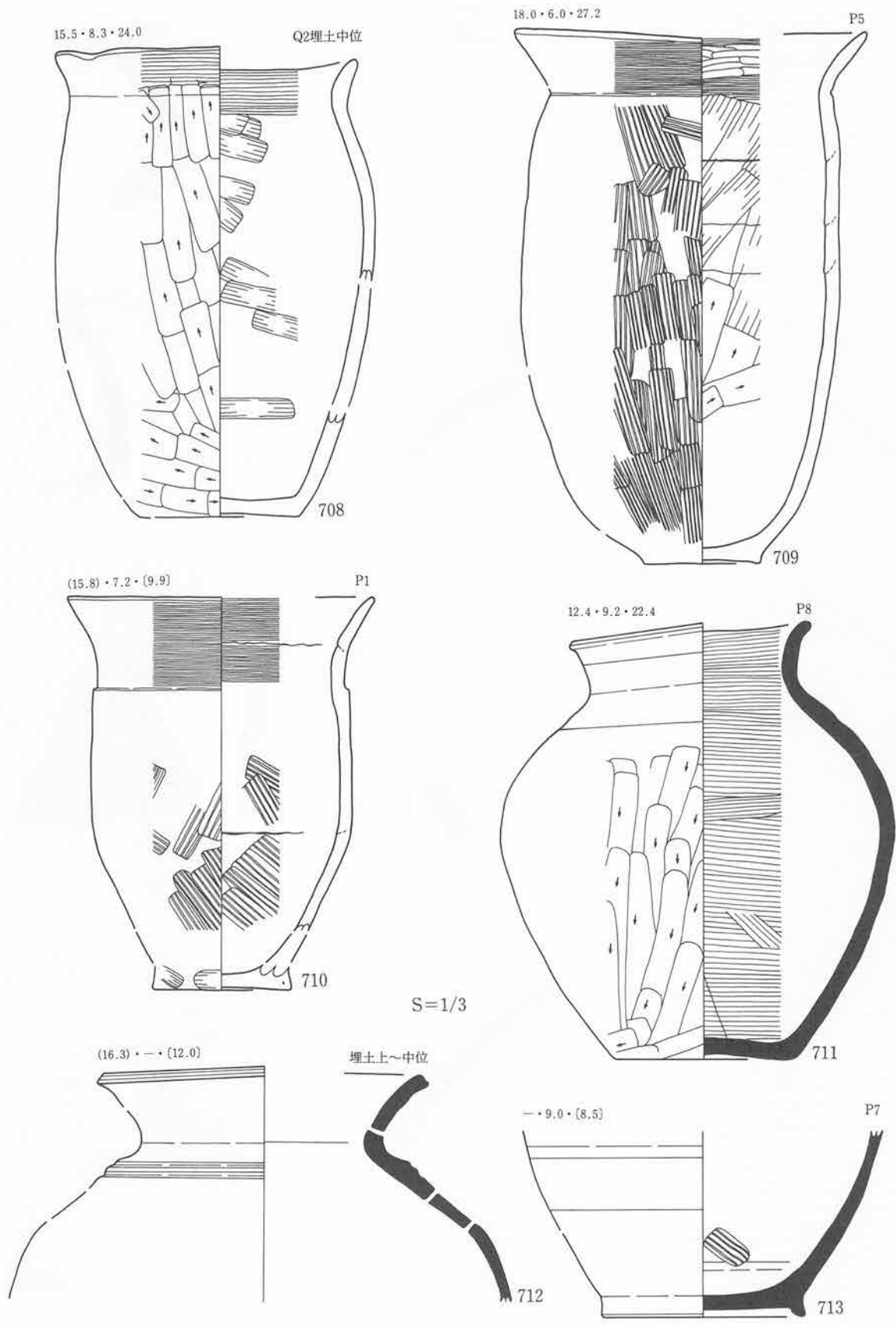
第188図 RA165竪穴住居跡(1)



- |  |  |
|--|--|
| 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土粒3%・炭化物含む                    | 11. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 炭化物30%含む                       |
| 2. 7.5YR3/4 暗褐色シルト 赤褐色焼土粒(5YR4/8)10%・炭化物含む       | 12. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土粒1%含む                         |
| 3. 5YR5/6 明赤褐色焼土                                 | 13. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト                              |
| 4. 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土3%含む                         | 14. 7.5YR2/2 暗褐色シルト 堅く締まる 暗褐色土10%混入                |
| 5. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 焼土3%含む                       | 15. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト                              |
| 6. 10YR4/6 褐色シルト 暗褐色土30%混入 カマド袖部分                | 16. 10YR2/3 黒褐色土 攪混                                |
| 7. 10YR3/4 暗褐色シルト                                | 17. 10YR2/3 黒褐色シルト におい赤褐色焼土(5YR4/4)30%混入           |
| 8. 10YR2/1 黒色シルト 明赤褐色焼土ブロック(5YR5/6)10%混入・炭化物少量含む | 18. 10YR2/1 黒色シルト 堅く締まる 赤褐色焼土(5YR4/6)30%混入 炭化物少量含む |
| 9. 5YR5/6 明赤褐色焼土                                 | 19. 10YR4/4 暗褐色シルト 堅く締まる                           |
| 10. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 焼土粒1%含む                      | 20. 10YR2/3 黒褐色シルト 堅く締まる 焼土10%含む                   |

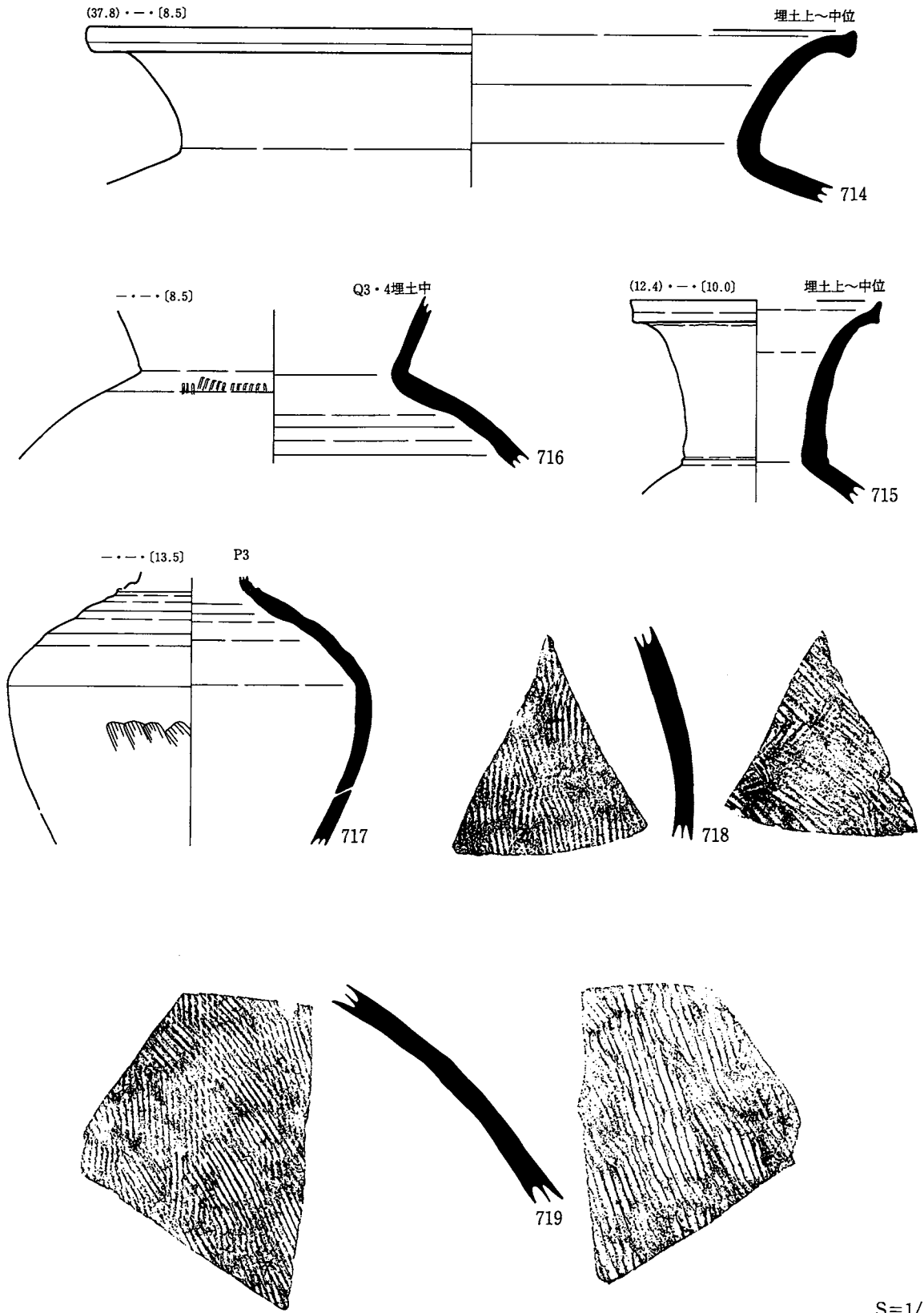


第189図 RA165竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



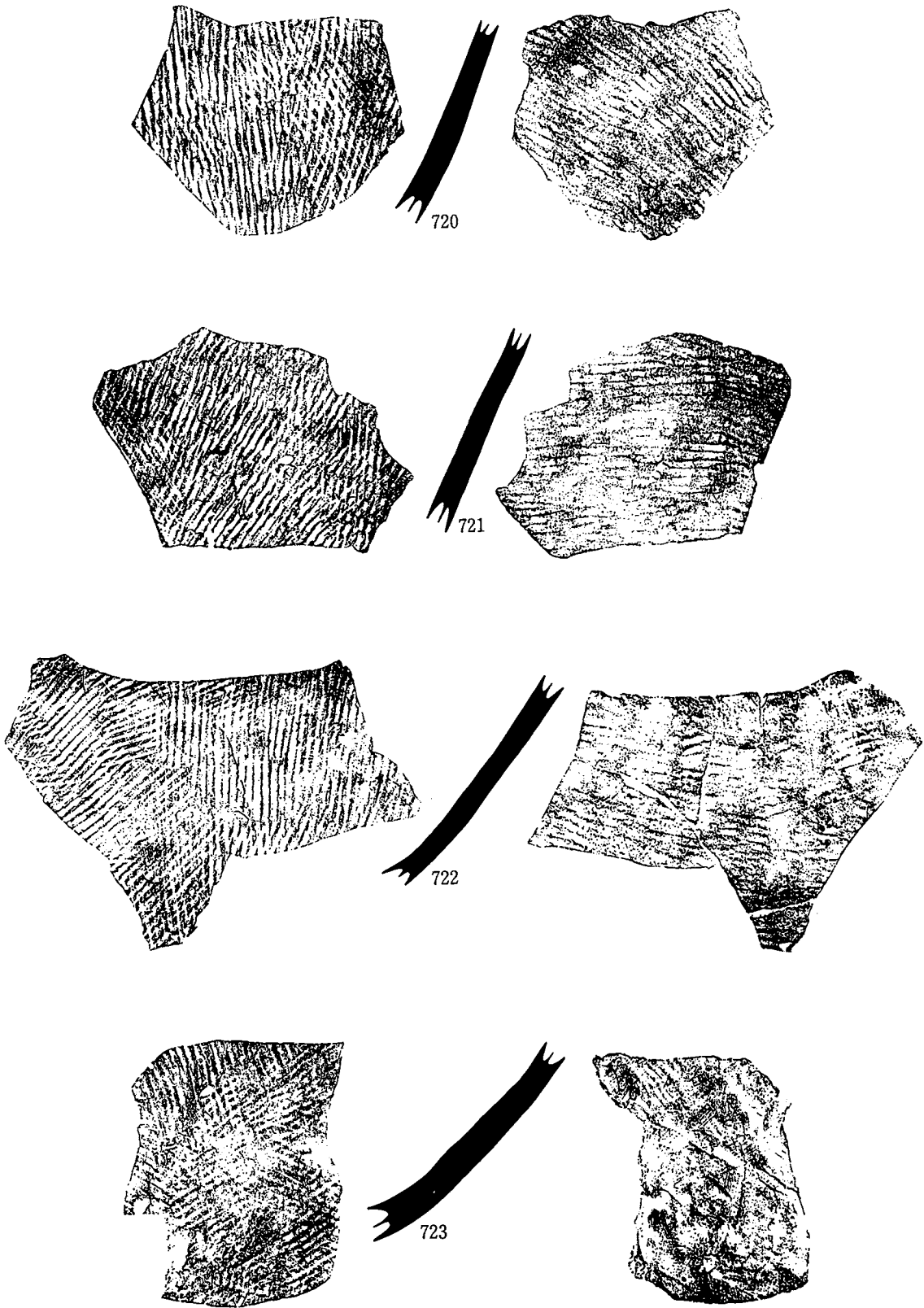
第190図 RA165竪穴住居跡出土遺物(2)





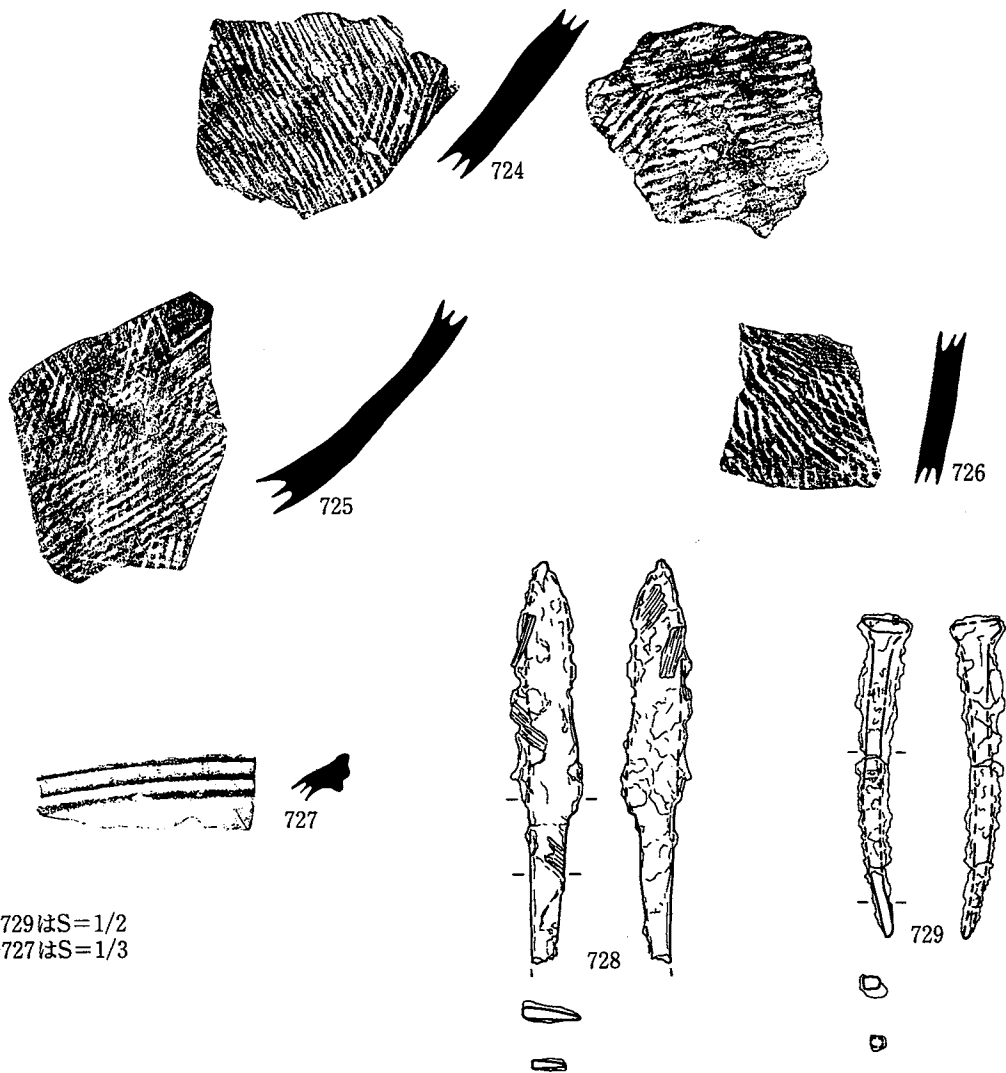
S=1/3

第191図 RA165豎穴住居跡出土遺物(3)



S=1/3

第192图 RA165豎穴住居跡出土遺物(4)



728・729はS=1/2  
724～727はS=1/3

第193図 RA165竪穴住居跡出土遺物(5)

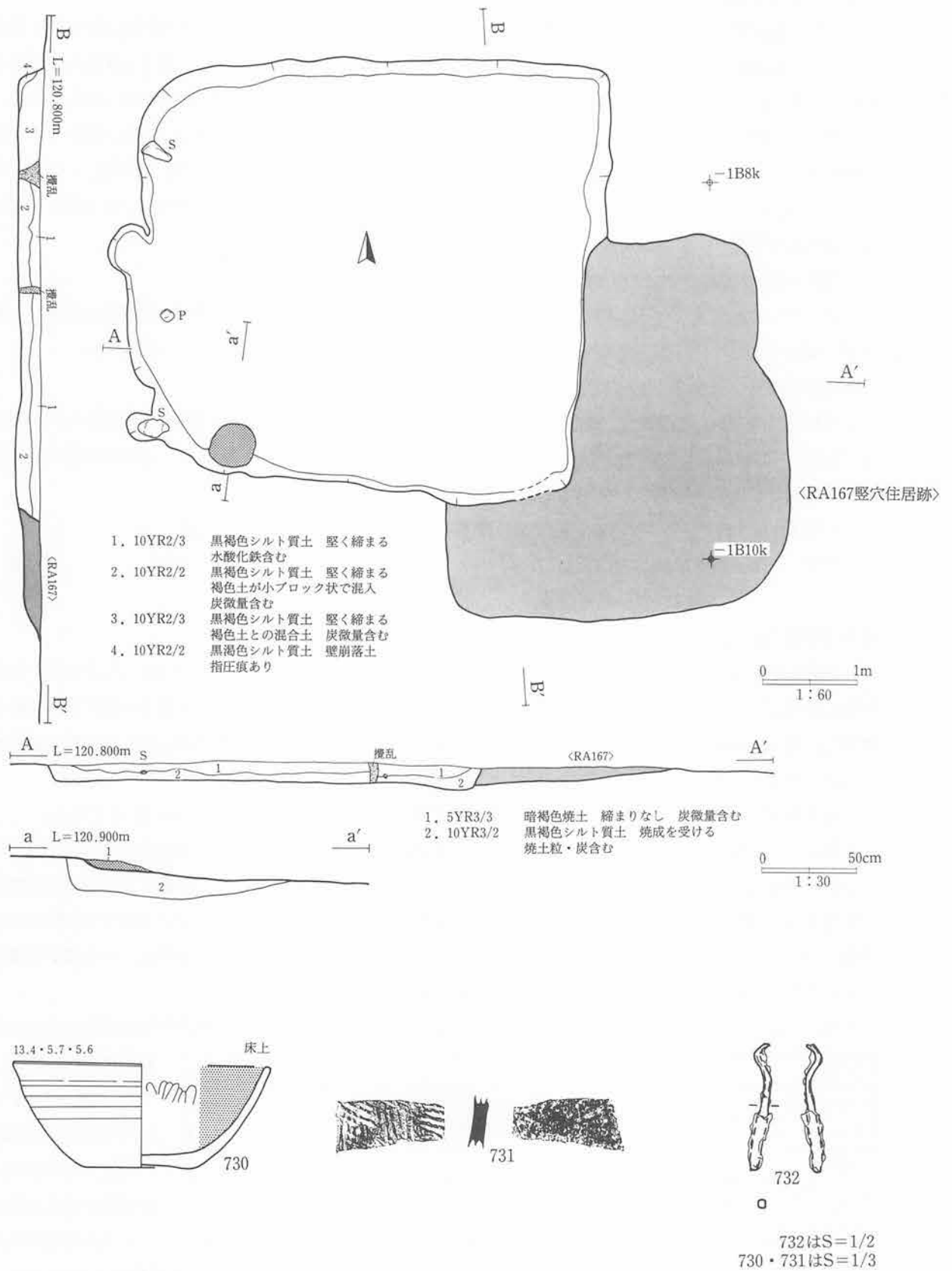
口成形で、外面の下半部に縦方向にヘラケズリ調整が施されている。712 は体部上半～口縁部、713 は壺で、体部下半～底部破片である。

714・718～726 は大甕の口縁部ないし体部破片である。714 はロクロ成形痕を残す大甕で、口縁部は頸部からくの字状に外反している。718～726 の外面は平行叩き具痕、718 の内面は平行当て具痕に放射状当て具痕が付され、他は平行当て具痕である。

715・717・727 は長頸瓶で、715 は頸部～口縁部、717 は頸部下端～体部、727 は口縁端部破片である。717 の外面の下半部はヘラケズリ調整が施されている。

728 は刀子で、錆が著しく茎の一部を欠損している。現存長は10.6 cm、幅1.5 cm、厚さ3 mmである。729 はほぼ完形の角釘で、長さ8.5 cm、幅4 mm、厚さ4 mmを測る。

<時期> 土師器坏がロクロ使用で、甕がロクロ使用とロクロ不使用が混在する事から、平安時代の9世紀前半頃に比定される。  
(佐藤・高橋)



第194図 RA168竪穴住居跡・出土遺物

R A 168 竪穴住居跡 (第 194 図、写真図版 269)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 B 区中央付近に位置し、遺構の西側で R A 167 竪穴住居跡と重複している。本遺構が切っている事から新旧関係は (新) R A 168 竪穴住居跡→(旧) R A 167 竪穴住居跡である。IV層上面で検出している。<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は 4.70×4.20 m である。

<埋土> 埋土は黒褐色シルトを主体とする 4 層に大別される。上層は水酸化鉄を含み堅く締まり、下層が褐色土を小ブロックで混入する。<壁・床> 壁の上半部は削平されているが、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁 19 cm、西壁 30 cm、南壁 9 cm、北壁 20 cm を測る。床面はほぼ平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。R A 167 竪穴住居跡の床の比高は 4 cm 前後である。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは南壁の南西コーナー寄りに設置している。袖部を含む本体部の大部分は崩壊し、燃焼部が現存するだけである。燃焼部の焼土範囲は径 46×45 cm の楕円形状で、厚さは 4 cm である。

煙道部と煙出し部は削平され確認できない。

<遺物> 床上から土師器坏、須恵器甕、鉄製品が出土している。730 はロクロ使用の土師器坏(A I a 群)で、外面の一部が剝落している。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。731 は須恵器甕の体部破片で、外面が平行叩き具痕である。

732 の鉄製品は釘で、長さ 4.5 cm、幅 3 mm、厚さ 4 mm を測る。断面形は方形である。

<時期> 出土した坏から平安時代に比定される。 (高橋)

R A 170 竪穴住居跡 (第 195~198 図、写真図版 81・269~271)

<位置・重複関係> 北側調査区中央の一 2 A 区に位置しており、北側 60 cm に R A 171 (平安時代) と西側 40 cm に R D 644・645 土坑が隣接する。平安時代の R A 024 竪穴状遺構、中世の R B 018 掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は本遺構が 2 棟に切られている事から (新) R B 018 掘立柱建物跡→R A 024 竪穴状遺構→(旧) R A 170 竪穴住居跡である。検出は IV 層中位で確認している。

<平面形・規模> 平面形は東辺側に最大長をもつ隅丸台形を呈し、規模は 7.30×6.65 m である。

<埋土> 4 層に大別され、上位は炭と焼土粒を含む暗褐色シルト質土で、褐色土がブロック状に混入している。下層は上層に類似する黒褐色シルト質土で構成され、堅く締まっている。壁際には褐色の壁崩落土が堆積する。<壁・床> 上部は削平されており、床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁 13 cm、西壁 12 cm、南壁 2 cm、北壁 14 cm を測る。北東コーナー寄りの床に砂礫層の露出が見られ、中央部から東壁にかけ多少高まるほかは堅く締まっている。貼り床は検出されない。

<柱穴・土坑> 柱穴状土坑は P 1~P 16 の 16 基検出しているが、埋土の堆積状況や位置的に支柱穴と

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
直径cm	29×28	28×25	31×29	72×64	62×50	44×40	51×48	33×29
深さcm	14	12	10	18	13	18	21	6
土坑No	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16
直径cm	34×33	23×22	21×20	71×58	70×44	46×40	23×21	25×24
深さcm	13	10	15	13	8	8	10	15

は考えられない。

<カマド> カマドは西壁のほぼ中央部に設置しているが、燃焼部の焼土が現存するほかは削平され

構造は不明である。燃焼部は径 38×34 cm の楕円形状で、焼土の層厚は 3 cm である。支脚は検出されていない。

割り貫き式の煙道は断面形が径 20 cm 大の不整円形状で、長さ 2.30 m を測る。燃焼部から 15 度の傾斜で煙

出し部に続き、煙出し部はやや斜めに径48×42cmの楕円形土坑が掘り込まれている。埋土は黒褐色～暗褐色シルト質土で構成され、炭と大小の亜円礫を含んでいる。

<遺物> 床上と埋土中～下位で土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・鉢を多く出土している。内31点の図面掲載をしている。733～746はロクロ使用の土師器坏である。733～737・745は内面をヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切り(A I a群)が733・734・745、回転ヘラ切り(A I e群)が735・736である。口縁部は底部から外傾する733、内湾気味に立ち上がる734・735がある。

738～744は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器(A II a群)で、底部の切り離しが回転糸切りである。胎土には砂と石を多く含んでいる。

746は底部が2分の1現存する高台坏破片で、内面はヘラミガキ後に黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切りである。

747～755は底部の切り離しが回転糸切りの須恵器坏(B II a群)である。口縁部は底部から外傾して立ち上がる747～749・752～755、端部側で外反する750・751がある。753～755は器高が7cm以上の深めの器形である。

756～758・760はロクロ不使用の土師器甕(A II群)で、756は底部、757～760は体部から口縁部を欠損している。756の口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、内外面にヨコナデ調整を施している。体部外面の器面調整は758がヘラナデ、757が縦方向のハケメと下半部にヘラミガキ、760がヘラケズリ調整である。内面はハケメとヘラナデ調整が施されている。底部はヘラナデ調整である。

759はロクロ使用の土師器甕(A I群)で、底部を欠損している。口縁部は短く頸部からくの字状に外反し、端部を上方に引き出している。全体に磨滅しており、体部外面下半には縦方向にヘラケズリ調整が施されている。

761は口縁部の一部を欠損する須恵器鉢である。口縁分は頸部で強く外反し、底部の切り離しは回転糸切りである。762は床上から出土した須恵器甕(B群)である。体部下半部にはヘラケズリ調整が施され、口縁部が外反している。底部はヘラナデ調整である。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代9世紀代に比定される。

(高橋)

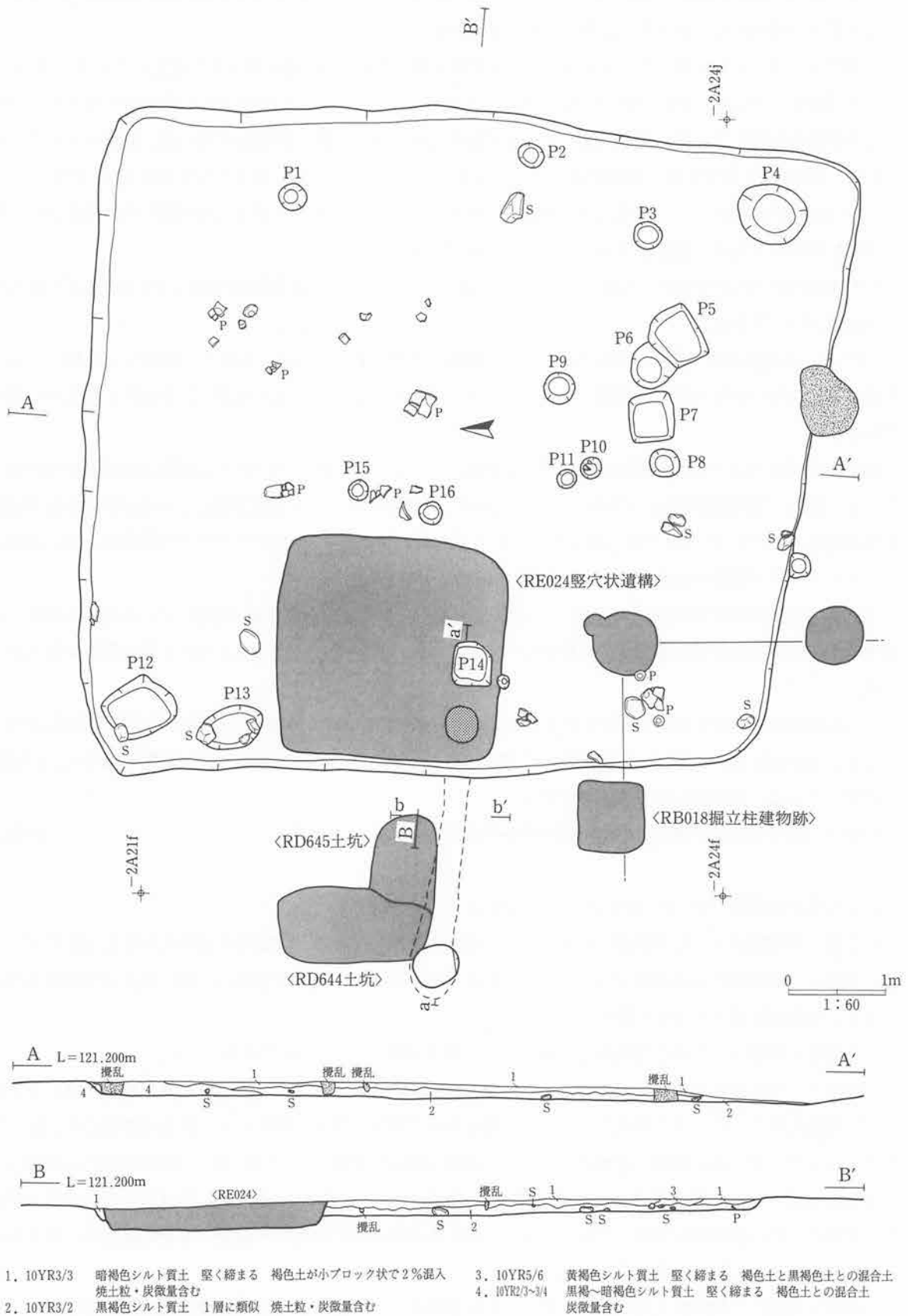
#### R A 171 竪穴住居跡 (第199～202図、写真図版82・271～273)

<位置・重複関係> 北側調査区中央部の-2A区に位置している。北側で奈良時代のR A 272 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本遺構が切っている事から(新) R A 171 竪穴住居跡→(旧) R A 272 竪穴住居跡である。検出はIV層上～中位で確認している。

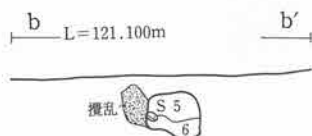
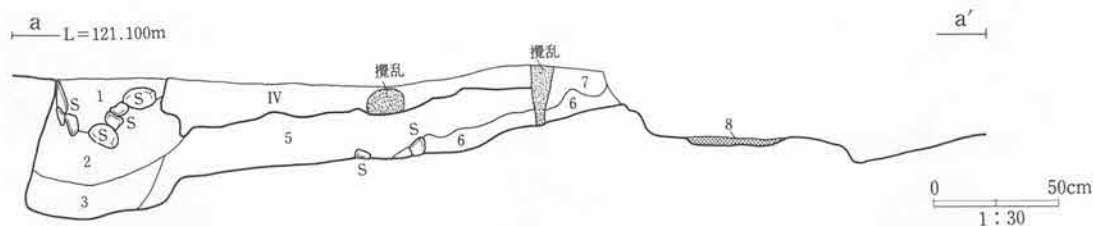
<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は8.70×8.20mである。

<埋土> 埋土はシルト質土を主体とする4層に大別される。上層は炭と焼土粒を含む黒暗褐色シルト質土で、褐色土を小ブロックで混入している。下層は上層に類似する黒暗褐色シルト質土で構成され、炭と炭化材を多く含んでいる。壁際には褐色シルト質土の壁崩落土が堆積する。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁30cm、西壁26cm、南壁25cm、北壁32cmを測る。床はほぼ平坦で堅く締まり、遺構の一部に砂礫層が露出している。また、炭と炭化材が多く中央部～北壁の床上に散布し、焼土も検出されている事から焼失家屋と思われる。

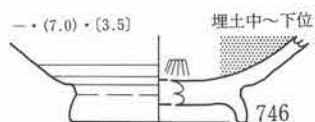
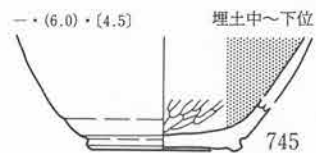
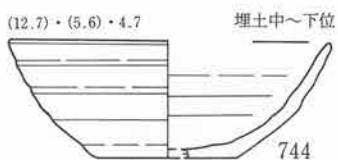
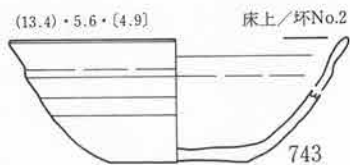
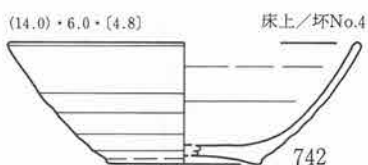
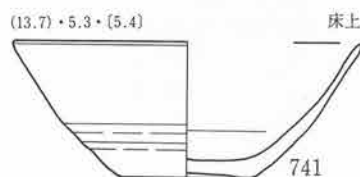
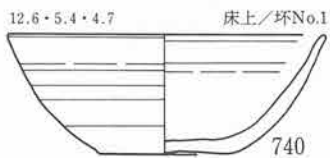
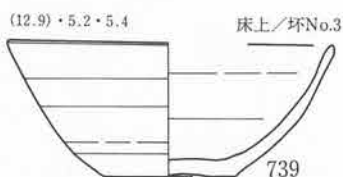
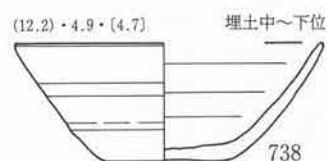
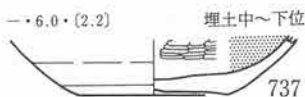
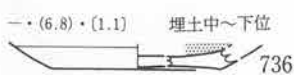
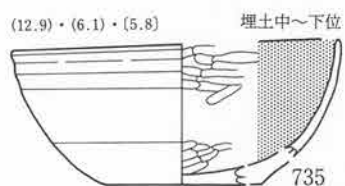
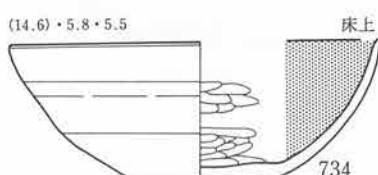
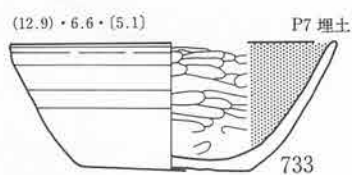
<柱穴・周溝> 柱穴状土坑はP 1～P 14の14基検出しているが、埋土の堆積状況や位置的にP 1・P 4～P 6が主柱穴である。本来6本柱と思われるが、北壁側の2基は砂礫層が露出する事から検出されない。



第195図 RA170竪穴住居跡(1)



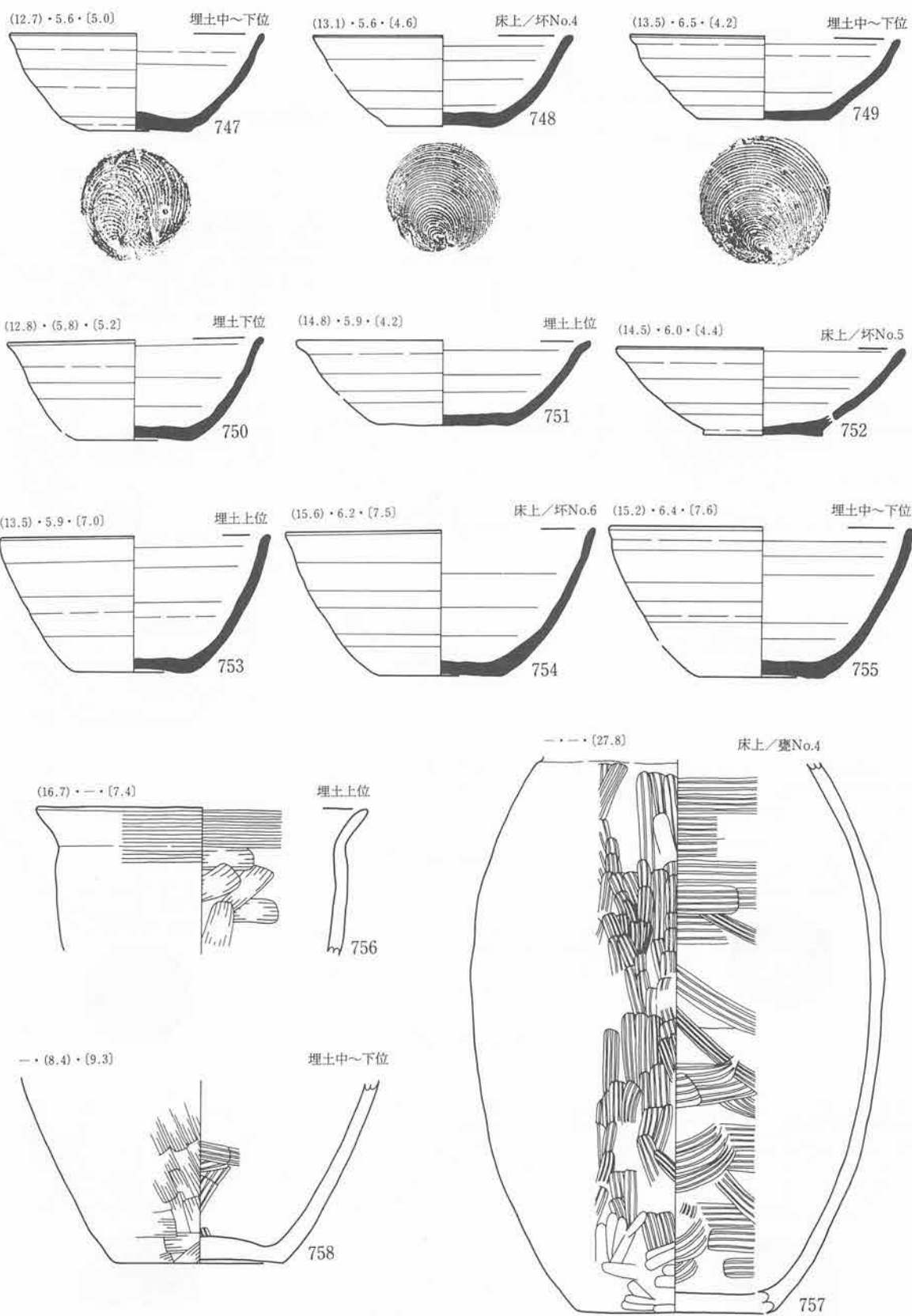
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 褐色土1%混入 指圧痕有り
- 2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 礫多量含む 指圧痕有り
- 3. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 炭・褐色土少量含む 指圧痕有り
- 4. 10YR4/4 褐色砂質シルト 埋崩落土 指圧痕有り
- 5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 褐色土5%混入 炭微量含む 指圧痕有り
- 6. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土1%混入
- 7. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土・焼土粒少量含む
- 8. 5YR3/3 暗赤褐色シルト質土 焼土粒との混合土 指圧痕有り



S=1/3

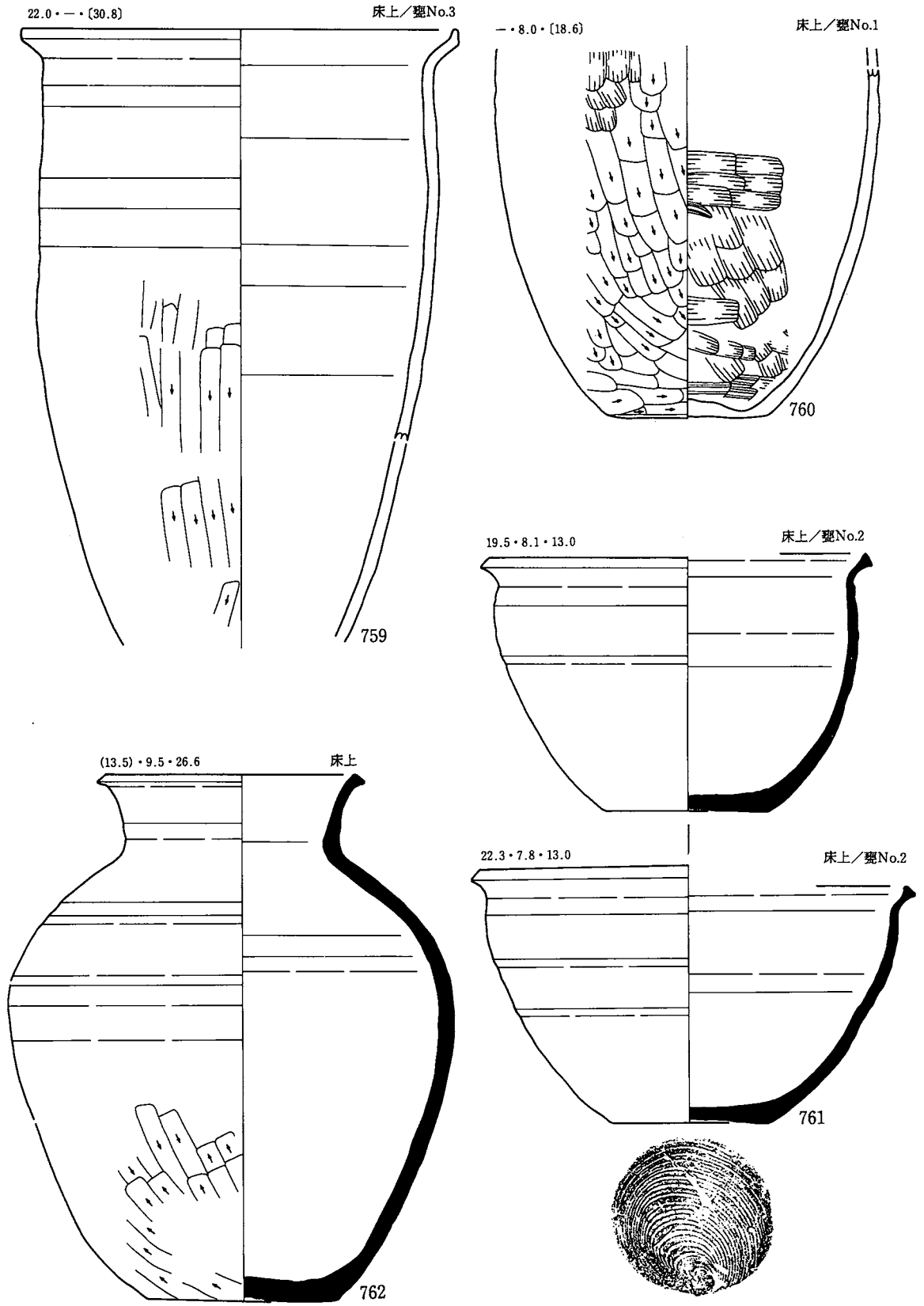
第196図 RA170竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)





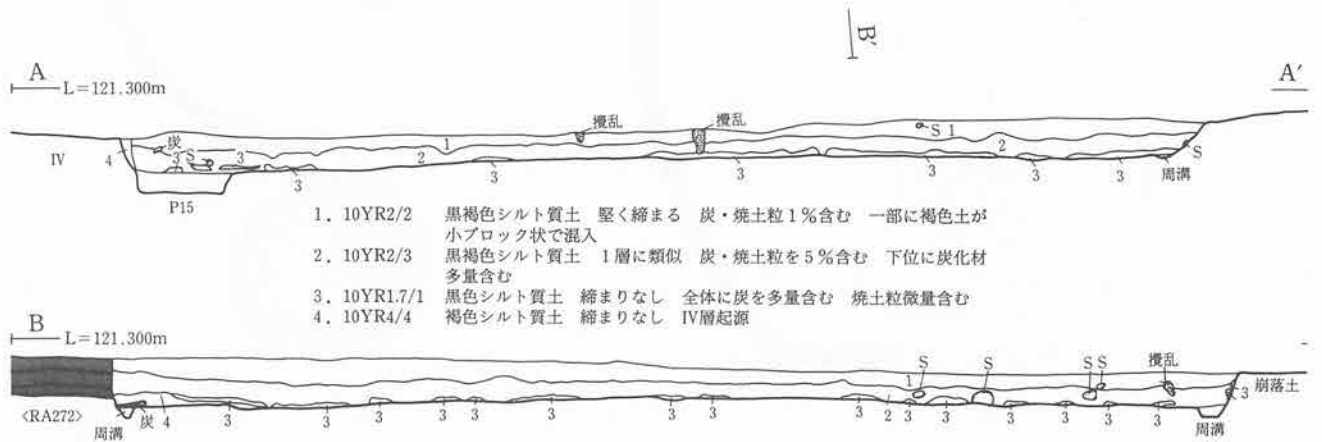
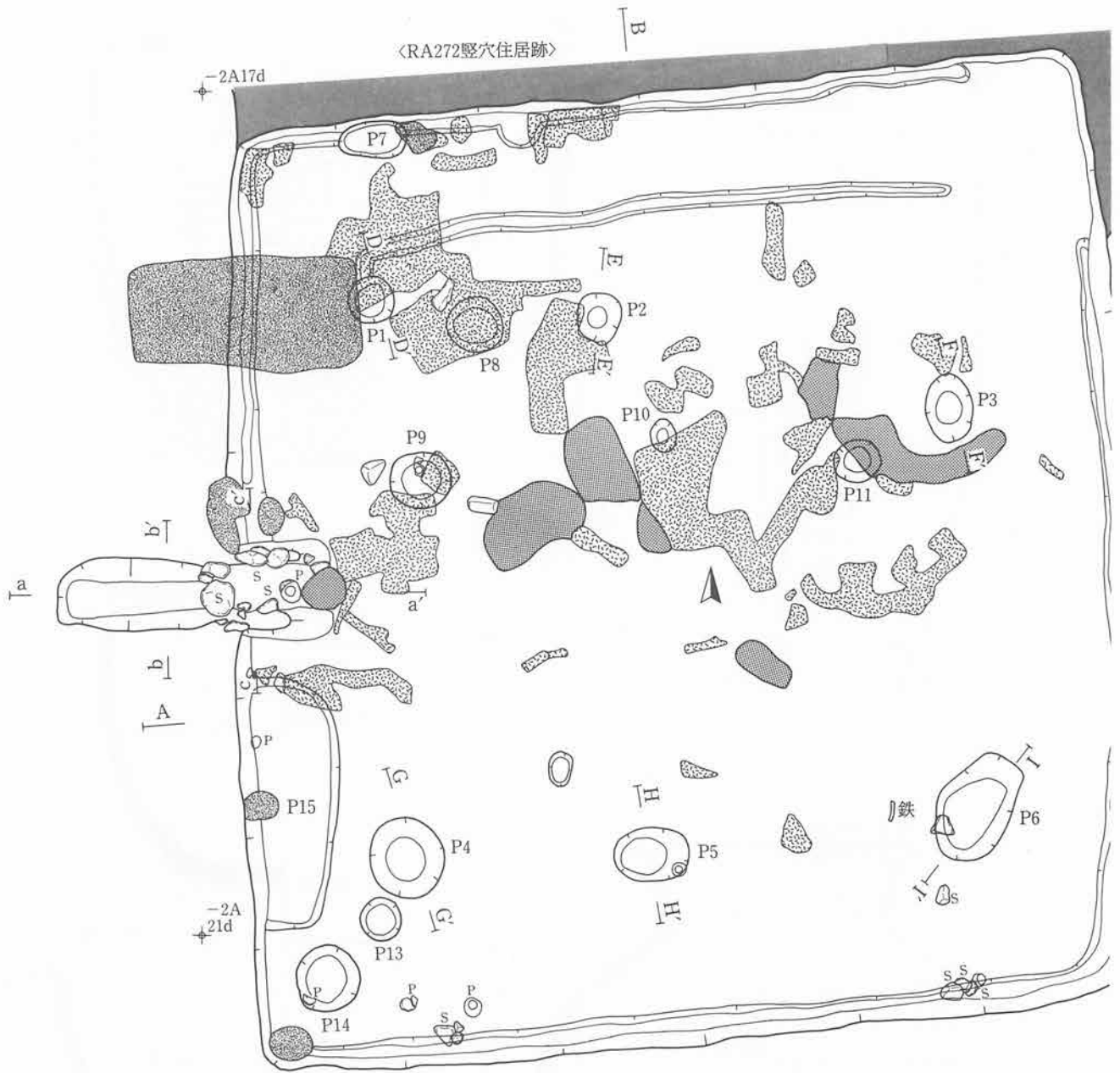
S=1/3

第197图 RA170竖穴住居跡出土遺物(2)

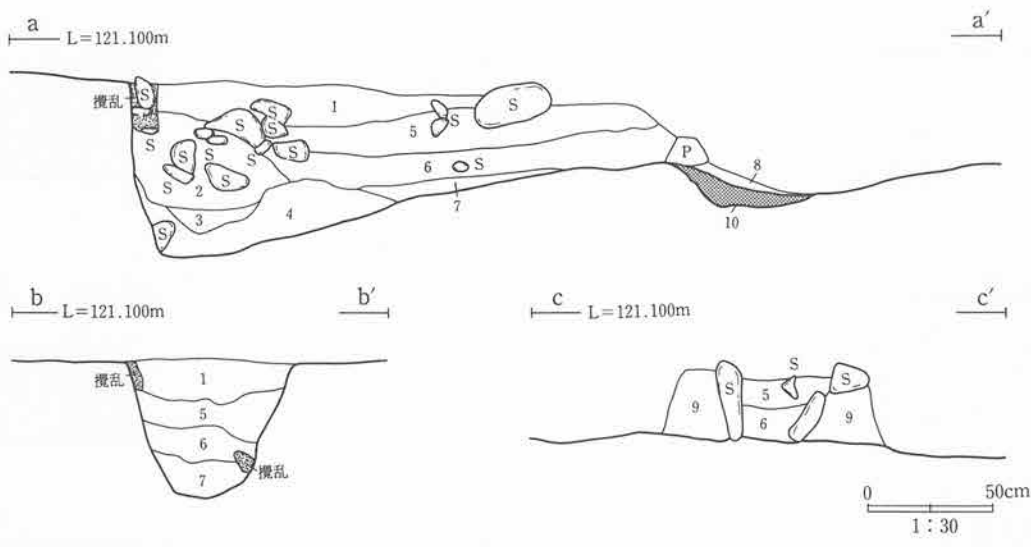


S=1/3

第198図 RA170竪穴住居跡出土遺物(3)

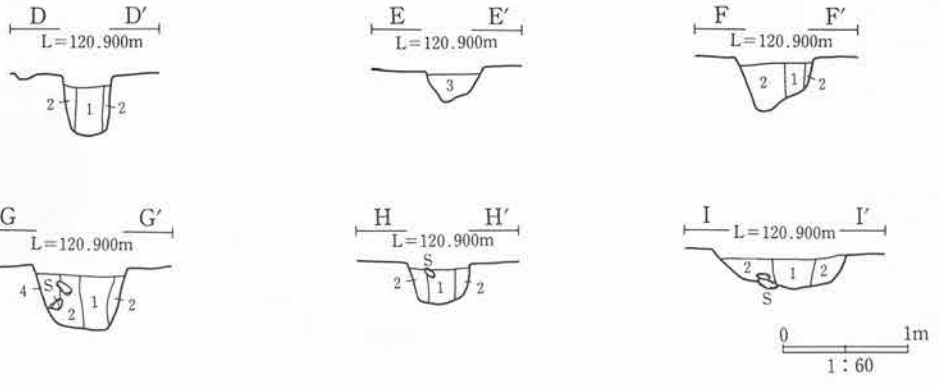


第199図 RA171竪穴住居跡



1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・炭少量含む 一部焼成を受けている
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで混入 焼土粒・炭含む
3. 5YR3/4 暗褐色土 黒褐色土を小ブロックで3%混入 指圧痕有り
4. 10YR2/1 黒色シルト質土 炭・焼土粒少量含む 指圧痕有り
5. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロック状に5%混入 焼土粒少量含む
6. 7.5YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロック状に1%含む 焼土粒少量含む
7. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 焼土粒・炭微量含む 指圧痕有り
8. 7.5YR3/3 暗褐色シルト質土 焼土粒・炭含む 指圧痕有り
9. 10YR4/4 褐色シルト質土 堅く締まる 全体が焼成を受けている IV層起源
10. 5YR3/6 暗赤褐色焼土 炭微量含む 指圧痕有り

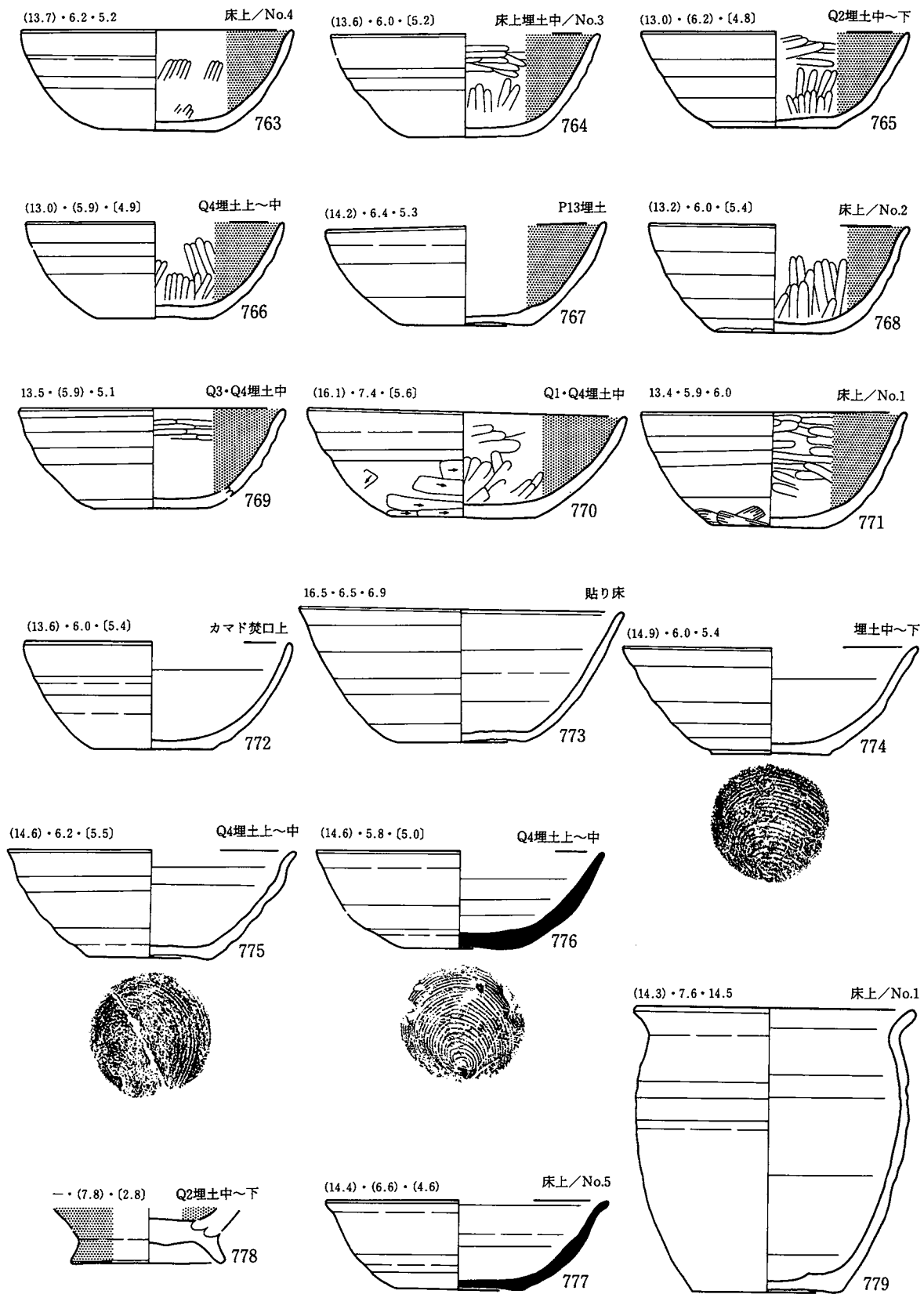
A'



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 炭多量含む(柱根) 指圧痕有り
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土 礫多量含む(掘り方埋土)
3. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭多量含む
4. 10YR4/4 褐色砂質シルト 堅く締まる 黒褐色土との混合土

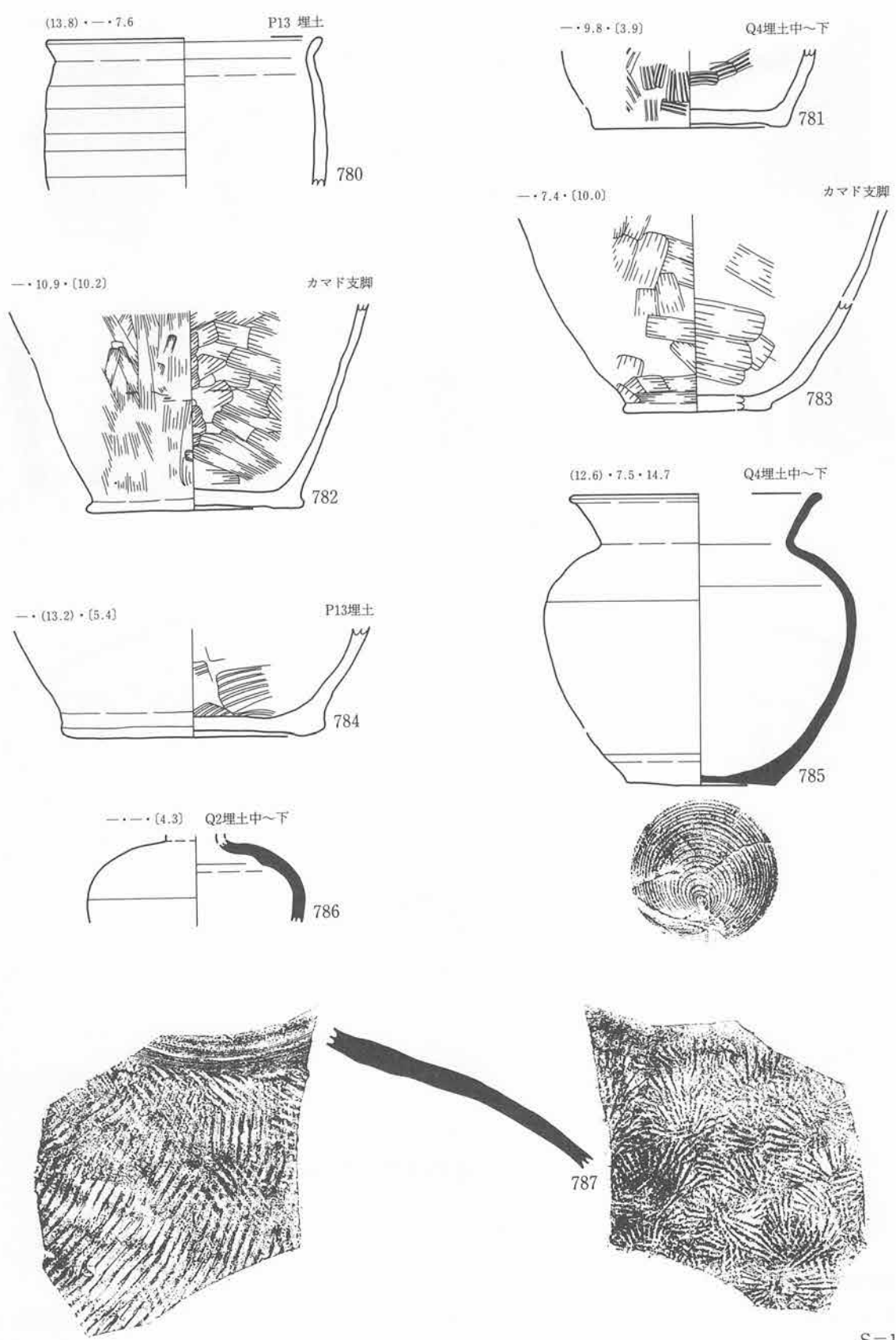
I

B'  
IV

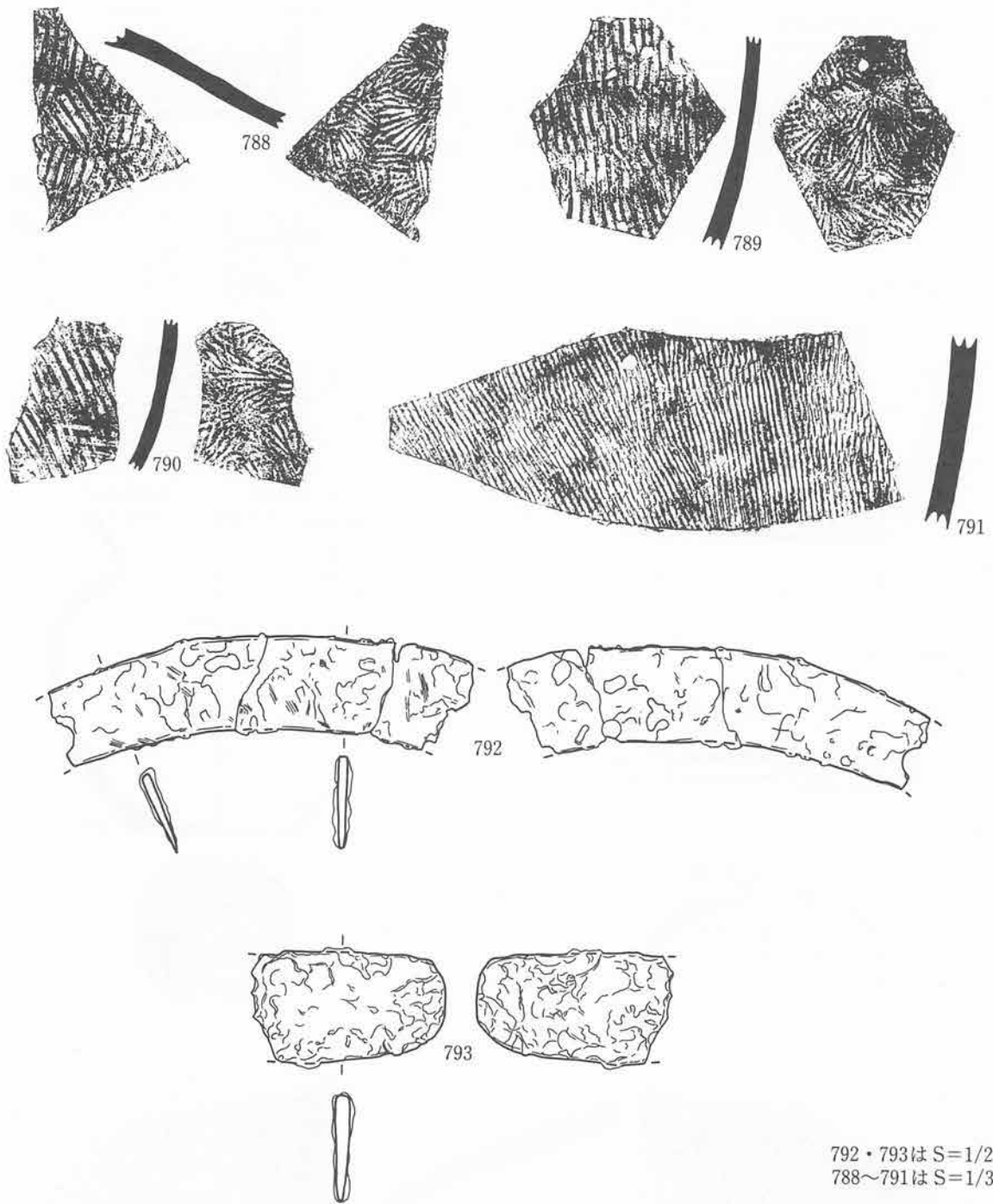


S=1/3

第200図 RA171竪穴住居跡出土遺物(1)



第201図 RA171竪穴住居跡出土遺物(2)



第202図 RA171竪穴住居跡出土遺物(3)

平面形は円形ないし楕円形があり、柱痕が確認されている。

周溝は北東コーナー側と西壁の南側半分を除いて、幅 8～20 cm、深さ 10 cm 前後で巡っている。北壁側には長さ 5.70 m、幅 14 cm、深さ 8 cm の間仕切りと思われる溝がある。土坑 P 15 は西壁側のカマド左袖脇で検出された貯蔵穴である。規模は開口部径 2.40 m×76 cm で、平面形は楕円形状を呈している。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
直径cm	29×28	28×25	31×29	72×64	62×50	44×40	51×48
深さcm	14	12	10	18	13	18	21
土坑No	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14
直径cm	34×33	23×22	21×20	71×58	70×44	46×40	23×21
深さcm	13	10	15	13	8	8	10

<カマド> 西壁の中央部に設置されている。本体部は大部分が崩壊しており、天井部の構造は不明である。両袖部には長さ22～32cm、幅8cm前後の垂角礫を数個芯材に据えている。上

を被覆した粘土は流失し現存していない。燃焼部は径42×36cmの楕円形状で、焼土が厚さ8cmで形成されている。支脚は土師器甕の体部下半～底部を伏せて転用している。

煙道部は上半部を削平されている事から、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。長さは1.70mで、燃焼部の奥壁から11度の下がり勾配で煙出し部に続いている。煙道内の側壁には火熱による赤褐色変化が見られる。煙出し部の上部構造は不明である。埋土は黒褐色～暗褐色シルト質土で構成され、炭・焼土粒と大小の礫を多く含んでいる。

<遺物> 床上とカマド袖部・焚き口周辺部から土師器坏・甕、須恵器坏・壺・長頸瓶・甕、鉄製品を出土している。763～771は内面をヘラミガキ後に黒色処理をしたロクロ使用の土師器坏である。口縁部は底部から外傾して立ち上がる器形が多い。770の体部外面下半には横方向のヘラケズリ調整を施している。底部の切り離しは回転糸切り（A I a群）が767・769・773～775、切り離した後に再調整されているもの（A I b群）が763～766・768・770～772である。774・775の胎土には砂と石が多く混入している。

772～775は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II群）である。底部の切り離しは回転糸切り（A II a群）が773～775、切り離した後に再調整された（A II d群）772がある。

778はロクロ使用土師器高台坏の破片である。内外面に黒色処理を施しており、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

776・777は須恵器坏（B II a群）である。口縁部は底部から外傾して立ち上がる776、端部が外反する777がある。底部の切り離しは回転糸切りである。

779・780はロクロ使用の土師器甕（A I群）である。779は口縁部の一部を欠損しており、口縁部は短く頸部から強く外反し、底部は回転糸切りである。780は口縁部が3分の1現存している。

781～784はロクロ不使用の土師器甕（A II群）の底部破片で、全体に磨滅し剝落したものが多い。782・783はカマド支脚に使用されている。器面調整は体部内外面がヘラナデ調整を施している。782の底部は木葉痕である。胎土には砂と石が多く混入している。

785は口縁部の一部を欠損する須恵器壺である。口縁分は頸部でくの字状に外反しており、底部の切り離しは回転糸切りである。786は長頸瓶の体部破片で、小型の器形である。

787～791は須恵器甕の体部破片で、他に大甕の破片も見られる。体部外面は平行叩き具痕、内面は平行叩き具痕・放射状の当て具痕である。

鉄製品は792・793の鎌が床面から出土している。端部ないし両端部を欠損しており、792は現存長13.0cm、幅2.8cm、厚さ3mm、793は現存長6.1cm、幅3.2cm、厚さ4mmを測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代9世紀代に比定される。

（高橋）

#### R A 173 竪穴住居跡（第203図、写真図版83・273）

<位置・重複関係> 北側調査区の一-A区北寄りに位置している。他の遺構との重複関係はない。検



出はIV層上面で確認している。

<平面形・規模> 南側の3分の2以上が調査区域外に延びる事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は東辺1.30 m、西辺2.50 m、北辺5.76 mを測り、北東・南西コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は3層に大別される。上層の1層は水酸化鉄を多く含む灰黄褐色土、2層は炭を含む暗褐色土、3層が暗褐色土ブロックとの混合土である。<壁・床> 壁は床面から直立気味に立ち上がり、壁高は東壁15 cm、西壁16 cm、北壁20 cmを測る。床は厚さ5～7 cmの褐色土の貼り床が施され、堅く締まっている。北西コーナー寄りの床には、径44×30 cmの不整楕円形状の炭が散在している。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑は北西コーナー寄り、P1（直径38×34 cm、深さ10 cm）が検出されている。平面形は円形である。1基しか確認されないため、支柱穴かは不明である。

<カマド> カマドは調査区域内では検出されない。

<遺物> 床上と埋土下位から土師器坏、須恵器甕、鉄製品を出土している。794・796はロクロ使用の土師器坏で、内面はヘラミガキ後に黒色処理を施している。794の体部外面下半はヘラケズリ調整され、底部の切り離しは回転ヘラ切り（A I e群）である。796は口縁部が外傾して立ち上がり、底部の切り離しが回転糸切り（A I a群）である。胎土には砂と金雲母を混入している。

795は底部の切り離しが回転糸切りで、内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a群）である。4分の1が現存し、胎土には砂の混入が多い。

797は須恵器甕の肩部～体部破片で、体部外面が平行叩き具痕を施している。

798の鉄製品は床上から出土した紡錘車破片である。糸巻き棒の大部分は欠損しており、紡錘車径4.8 cm、厚さ2 mmを測る。現存する糸巻き棒は幅0.5 cm、厚さ3 mmである。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代9世紀代に比定される。 (高橋)

#### R A 176 竪穴住居跡 (第204図、写真図版84・273)

<位置・重複関係> 北側調査区の一2-A～B区に亘って位置している。南東コーナー側でR A 180 竪穴住居跡と重複し、本遺構が切っている。新旧関係は(新) R A 176 竪穴住居跡→(旧) R A 180 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認している。

<平面形・規模> 北側の半分以上が調査区域外に延びる事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は東辺2.00 m、西辺2.30 m、南辺3.50 mを測り、南東・南西コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は6層に大別される。上層は粘性のある黒褐色土、中位が十和田a降下火山灰を含む黒褐色土、下層が褐色粘土粒を含む暗褐色土で構成されている。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は東壁44 cm、西壁38 cm、南壁50 cmである。床は起伏があり、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

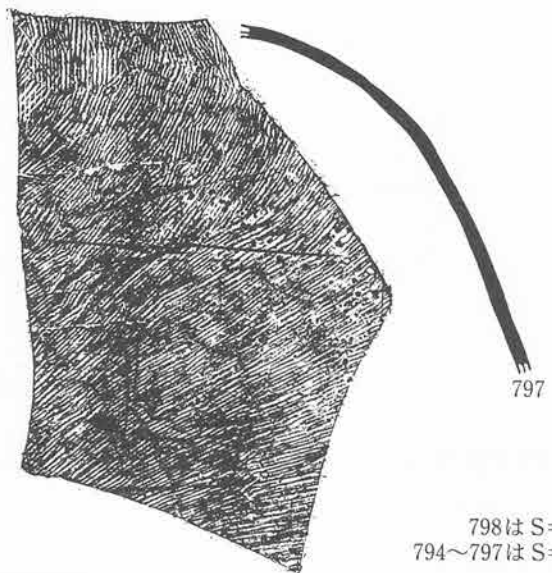
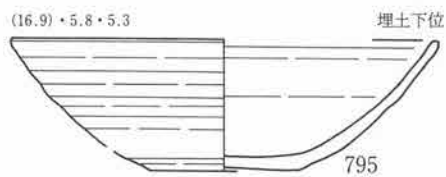
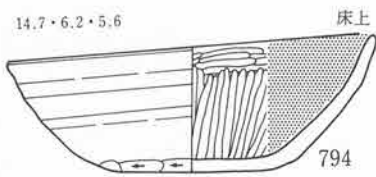
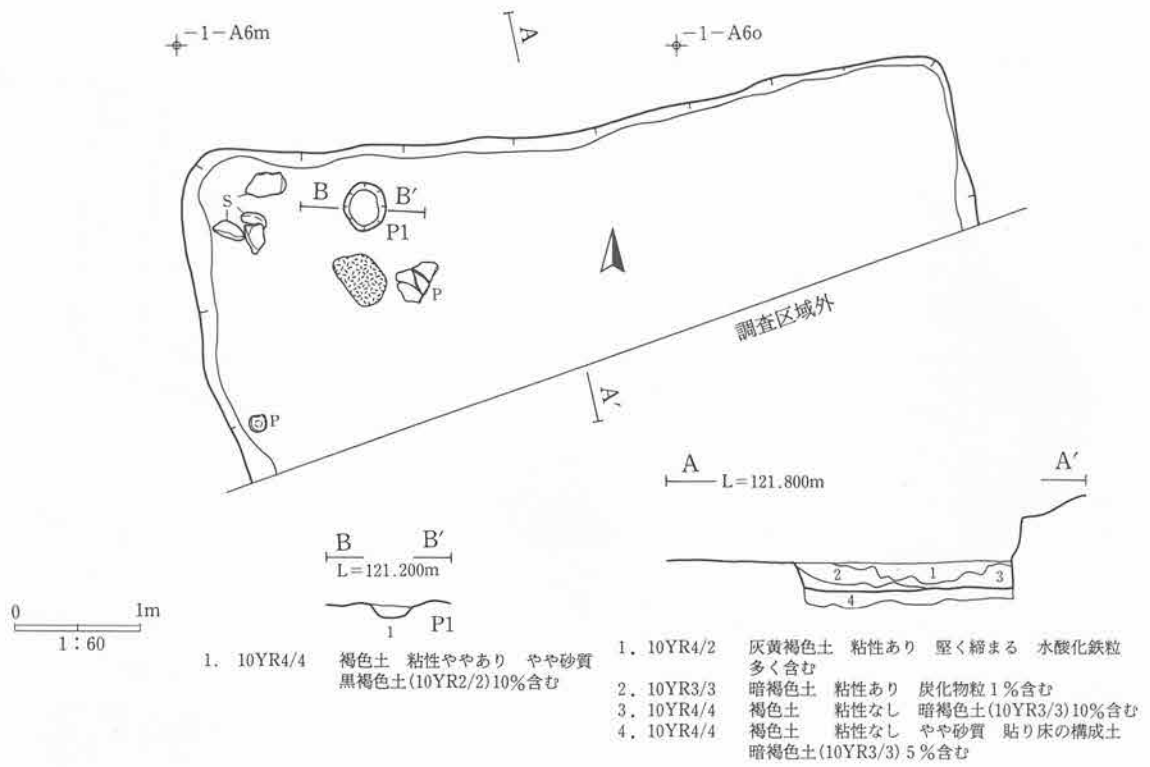
<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは調査区域内では検出されない。

<遺物> 床上から土師器坏、鉄製品を出土している。799は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a群）である。底部の切り離しは回転糸切りで、外面に煤の付着が見られる。

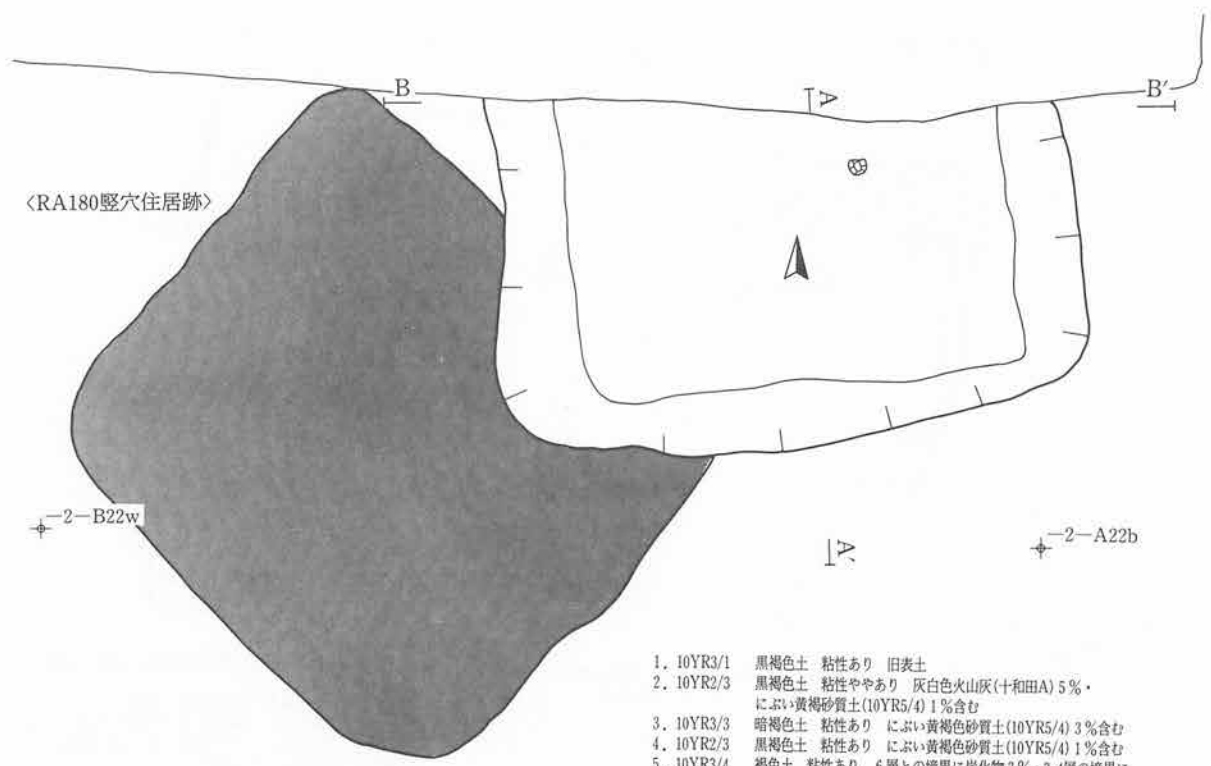
798は器種が不明のボタン状鉄製品で、径2.9 cm、厚さ1.6 cmを測る。

<時期> 出土した遺物から平安時代9世紀代に比定される。 (高橋)

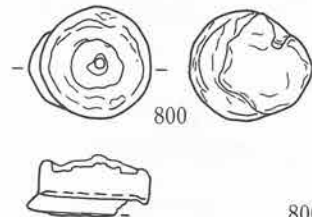
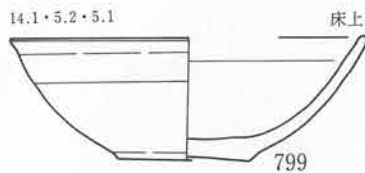
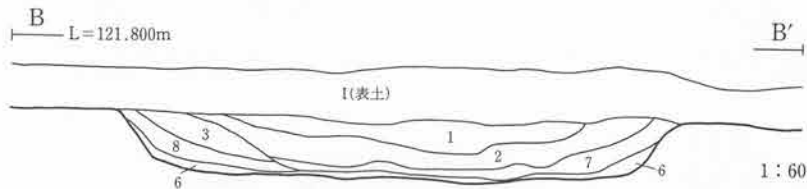
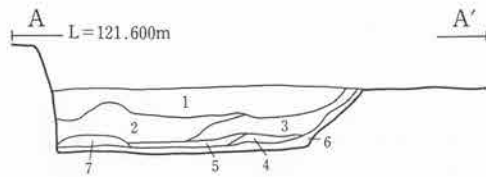


798は S=1/2  
794~797は S=1/3

第203図 RA173竪穴住居跡・出土遺物



1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 旧表土
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 灰白色火山灰(十和田A)5%・  
にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)1%含む
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)3%含む
4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)1%含む
5. 10YR3/4 褐色土 粘性あり 6層との境界に炭化物3%・3,4層の境界に  
砂質土1%含む
6. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 径5mm程度のブロック状で褐色粘土  
(10YR4/4)10%・にぶい黄褐色砂質土20%含む
7. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)3%含む
8. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)15%含む



800は S=1/2  
799は S=1/3

第204図 RA176竪穴住居跡・出土遺物

RA 177 竪穴住居跡 (第 205~207 図、写真図版 85・273・274)

<位置・重複関係> 北側調査区中央の-1-A~-B区に亘って位置している。遺構との重複関係はない。検出はIV層上~中位で確認している。

<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は6.40×4.40mである。

<埋土> 黒褐色土の4層に大別される。上層は炭化物と明黄褐色土を小ブロックで含み、下層は褐色土粒を混入し堅く締まっている。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は東壁20cm、西壁18cm、南壁24cm、北壁23cmである。中央部付近が多少高まるほかは平坦で、堅く締まっている。貼り床は検出されない。

<柱穴・土坑> 柱穴状土坑はP1～P7の7基検出している。埋土の堆積状況や位置的に主柱穴はP2・

土坑No	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
直径cm	40×40	38×35	40×35	57×55	44×33	36×34	35×30	140×110
深さcm	26	17	64	40	14	15	24	16

P5・P7の3基と思われる。P1は位置的にずれる可能性

もある。南東コーナーからP8の貯蔵穴が検出されている。平面形は不整楕円形状である。

<カマド> カマドは南壁の南東コーナー寄りに設置されている。袖部を含む本体部の大部分は崩壊している事から全容が不明である。右袖部に芯材に使用した礫が1個現存するだけである。燃焼部は径54×45cmの楕円形状で、層厚5cmの焼土が形成されている。支脚は検出されない。

煙道は径20cm前後の円形状に刳り貫かれ、長さが2.14mを測る。燃焼部から緩やかな下がり勾配で煙出し部に続き、煙出し部は径48×46cmの楕円形状土坑が掘り込まれている。埋土は黒色～暗褐色土で構成され、炭と焼土粒を含んでいる。煙出し部の上部構造は不明である。

<遺物> カマド周辺部と貼り床から土師器坏・須恵器長頸瓶・甕、鉄製品が出土している。801～806は口縁使用の土師器坏である。口縁部は底部から外傾して立ち上がる801～805、端部でやや外反する806がある。内面は磨滅や剥落したものもあるが、ヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切り(AI a群)が801・803・805・806、切り離した後に再調整されているもの(AI b群)が802・804である。805の胎土には金雲母を混入している。

807・808は内外面とも口縁痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器(AII a群)である。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土には砂と金雲母の混入が多く見られる。

809は体部下半～底部が現存する須恵器長頸瓶で、内面にハケメ調整を施している。810は須恵器甕の体部破片で、体部内外面は平行叩き具痕である。

鉄製品は811～823の13点が出土している。811は鉄鏃で基部の一部を欠損している。現存長は8.5cm、幅3.8cm、厚さ1.0cmを測る。812～815は紡錘車と糸巻き棒破片で、812の紡錘車は径4.6cm、厚さ2mmである。816は鎌と思われる破片、817～823は端部ないし両端部を欠損した釘である。

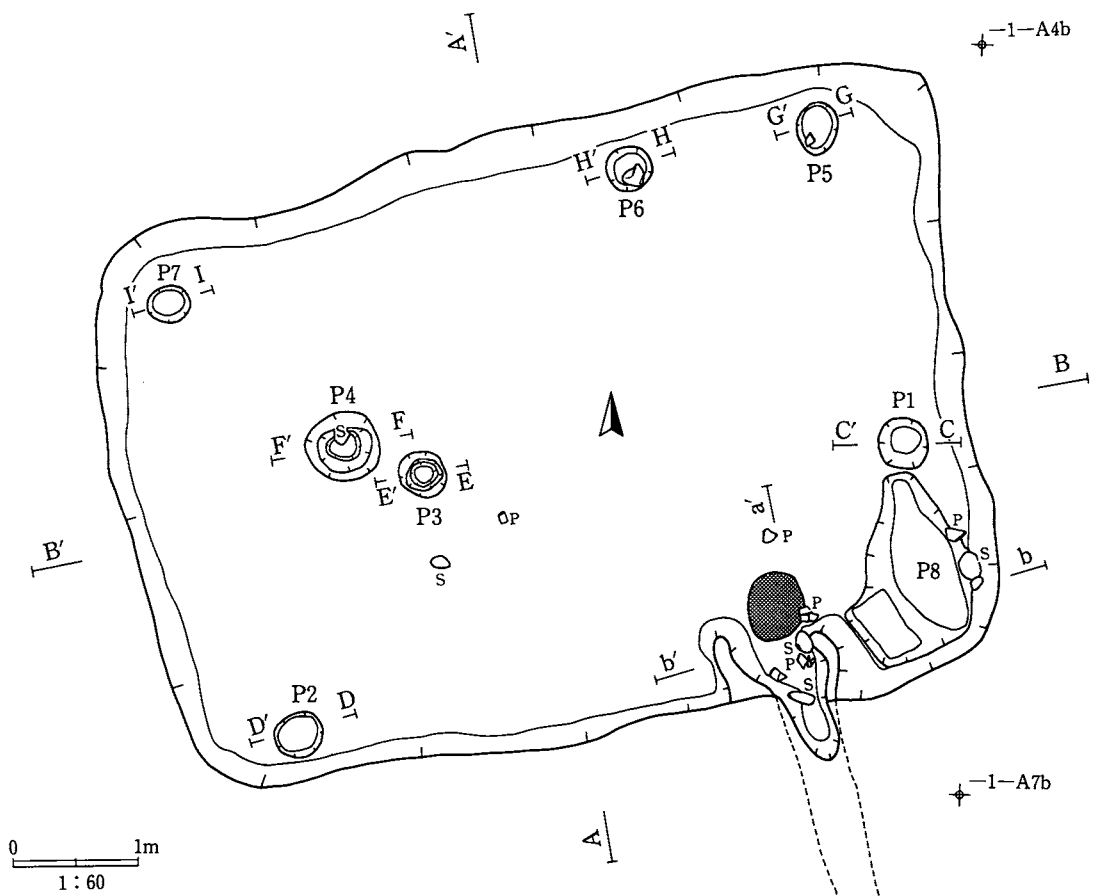
<時期> 出土した坏と甕から平安時代9世紀代に比定される。(高橋)

#### R A 178 竪穴住居跡 (第208・209図、写真図版86・275)

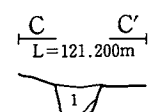
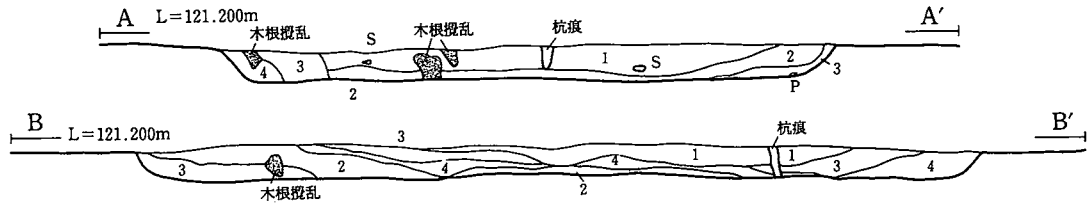
<位置・重複関係> 北側調査区の一-A区に位置している。北東側でR A 179 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本遺跡が切っている事から(新) R A 178 竪穴住居跡→(旧) R A 179 竪穴住居跡である。検出はIV層上～中位で確認している。

<平面形・規模> 規模は4.60×4.20mの隅丸長方形を呈している。

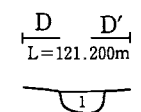
<埋土> 埋土はシルト質土を主体とする5層に大別される。上層は大部分を占める黒褐色シルト質土で炭を微量に含み、下層が堅く締まる黒褐色シルトで構成されている。<壁・床> 壁の上部の大部分は削平され、床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は西壁13cm、南壁18cm、北壁16cmである。床面は多少凹凸が見られ、堅く締まっている。貼り床は褐色～黒褐色シルト質土で3cm前後施されている。



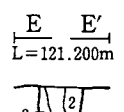
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 明黄褐色土粒(10YR7/6)1%・炭化物10%含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 褐色土(10YR4/6)3%含む
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)20%含む



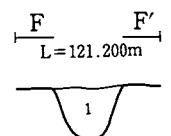
1. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 黄褐色砂質土 (10YR5/6)ブロック状に含む
2. 10YR4/4 褐色砂質土 粘性ややあり



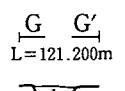
1. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 黄褐色砂質土 (10YR5/6)ブロック状に含む



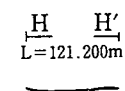
1. 10YR4/4 褐色砂質土 粘性ややあり
2. 10YR3/2 黒褐色粘土質土 粘性あり



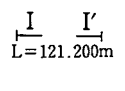
1. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 黄褐色砂質土 (10YR5/6)ブロック状に含む



1. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 黄褐色砂質土 (10YR5/6)ブロック状に含む

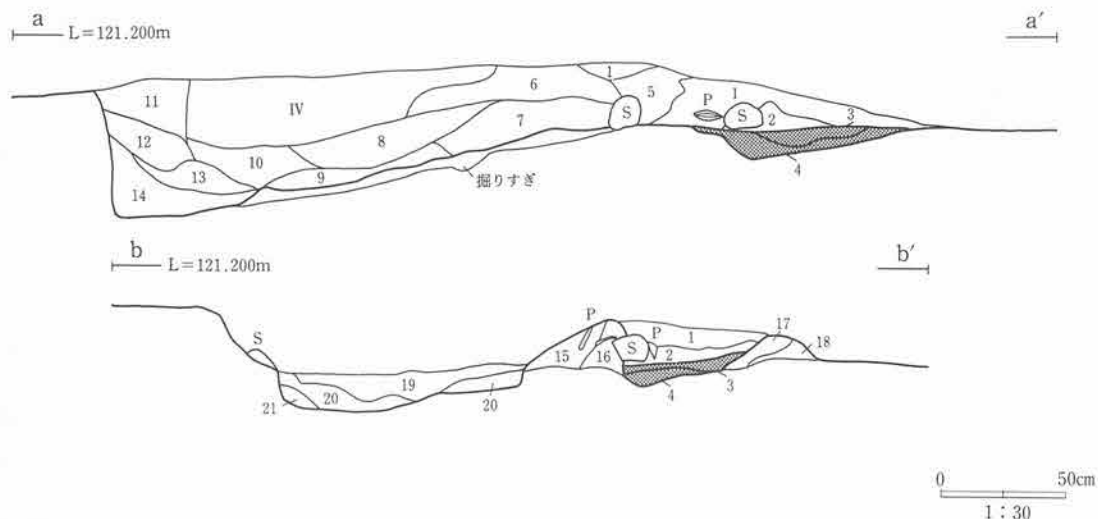


1. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 黄褐色砂質土 (10YR5/6)ブロック状に含む

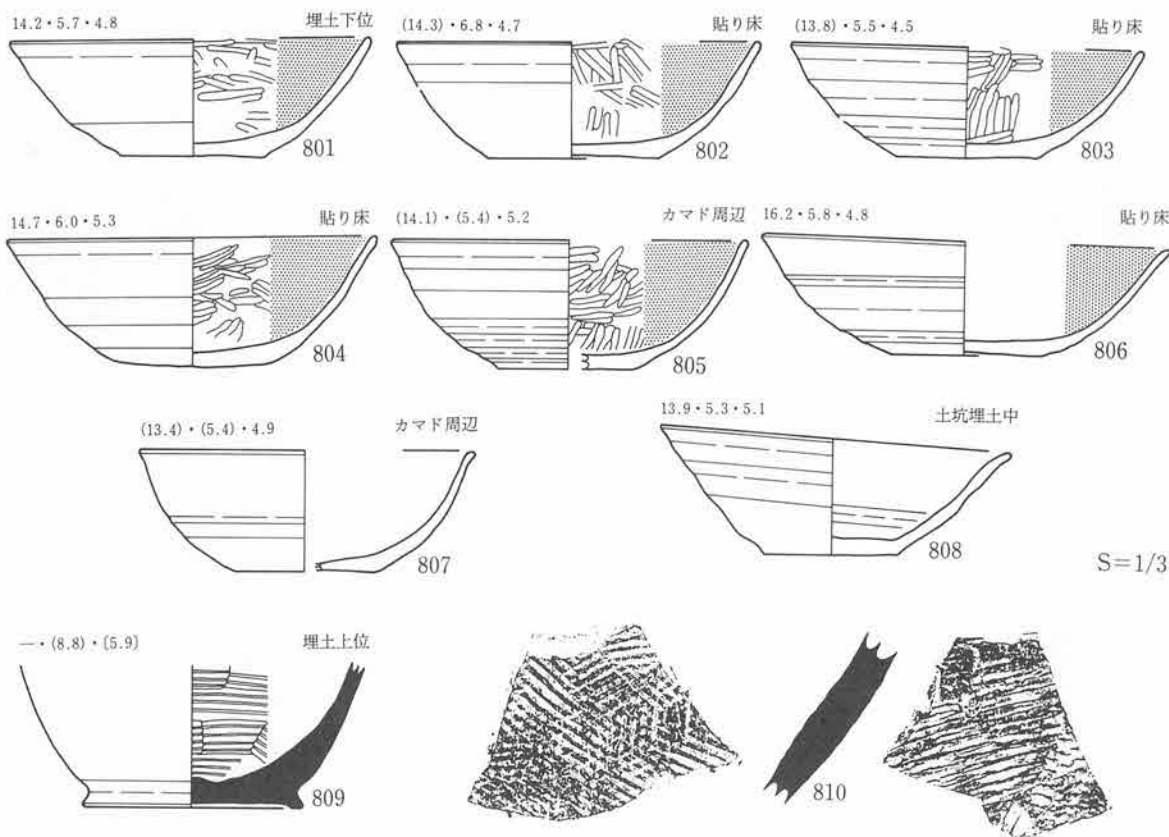


1. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 黄褐色砂質土 (10YR5/6)ブロック状に含む

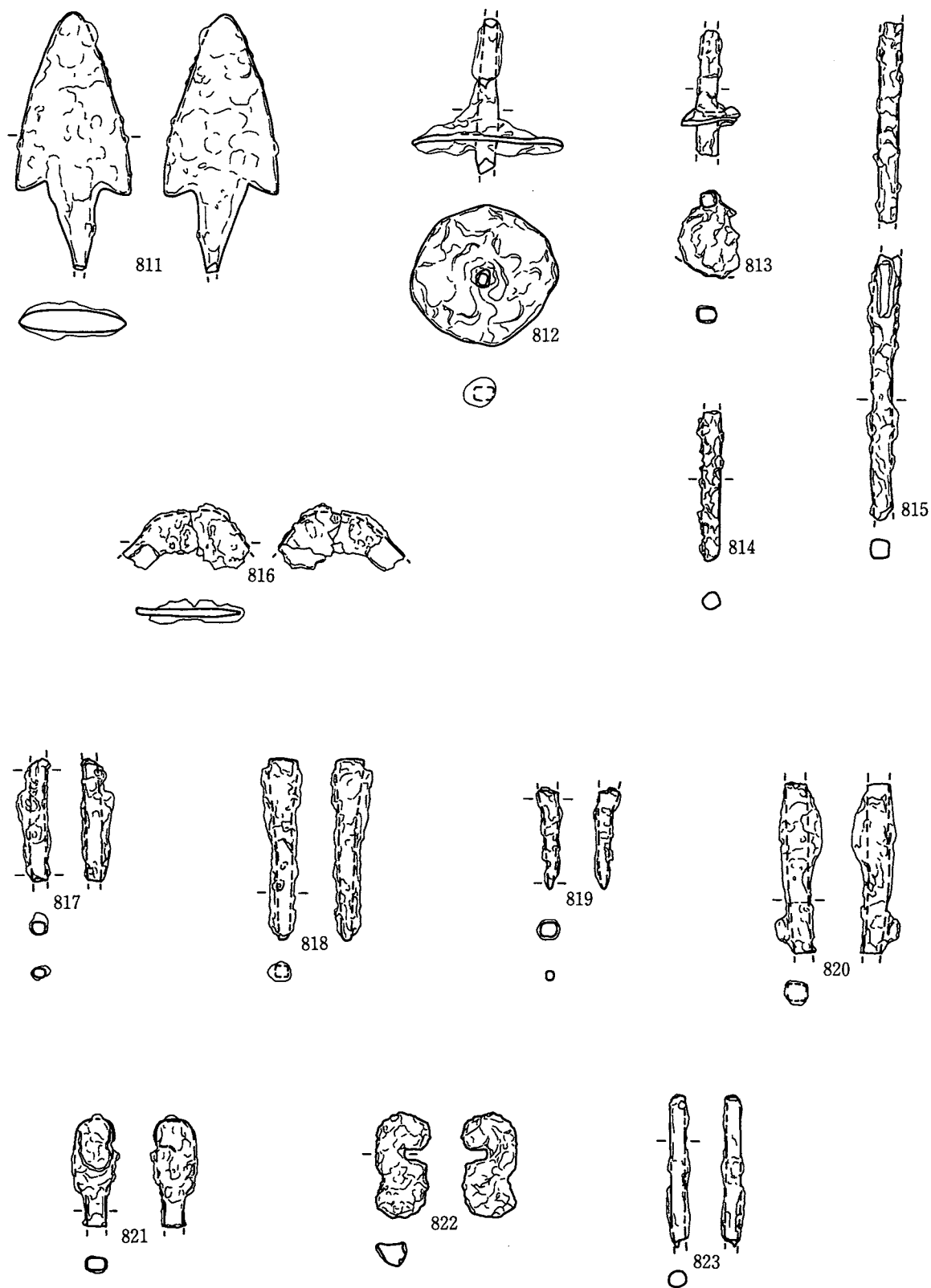
第205図 RA177竪穴住居跡(1)



- |             |         |        |  |
|-------------|---------|--------|--|
| 1. 10YR2/3  | 黒褐色土    | 粘性あり   |  |
| 2. 10YR2/2  | 黒褐色土    | 粘性あり   | 暗赤褐色焼土(5YR3/4) 3%含む                          |
| 3. 2.5YR4/6 | 赤褐色焼土   | 粘性あり   |  |
| 4. 10YR4/4  | 褐色土     | 粘性ややあり | 3層との境界部で暗赤褐色(2.5YR3/6)へ若干の赤変化                |
| 5. 10YR2/3  | 黒褐色土    | 粘性あり   | 黄褐色土(10YR3/4) 2%含む                           |
| 6. 10YR2/2  | 黒褐色土    | 粘性あり   | 暗赤褐色焼土(5YR3/4)ブロック 3%含む                      |
| 7. 10YR2/3  | 黒褐色土    | 粘性ややあり | 締まりなし 径1~3mm程度の暗赤褐色焼土(5YR3/4)ブロック 3%・炭化物1%含む |
| 8. 10YR3/3  | 暗褐色土    | 粘性ややあり | 締まりなし 径1~3mm程度の黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)15%含む       |
| 9. 10YR3/2  | 黒褐色土    | 粘性なし   | 褐色砂質土(10YR4/4)20%含む                          |
| 10. 10YR2/3 | 黒褐色土    | 粘性ややあり | 締まりなし 径3cm程度の地山ブロック 10%・炭化物1%含む              |
| 11. 10YR3/3 | 暗褐色土    | 粘性あり   | 径3~5cm程度の黄褐色粘土(10YR5/6)50%含む                 |
| 12. 10YR3/1 | 黒褐色土    | 粘性あり   | 径3~5cm程度の黄褐色粘土(10YR5/6)20%含む                 |
| 13. 10YR2/1 | 黒色土     | 粘性ややあり | 黄褐色粘土(10YR5/6)10%含む                          |
| 14. 10YR3/2 | 黒褐色土    | 粘性あり   | 黄褐色粘土(10YR5/6) 5%含む                          |
| 15. 10YR3/3 | 暗褐色土    | 粘性ややあり | 径1cm程度の赤褐色焼土ブロック(2.5YR4/6) 1%含む              |
| 16. 10YR2/2 | 黒褐色土    | 粘性ややあり | 黄褐色粘土(10YR5/6)10%含む                          |
| 17. 10YR3/4 | 暗褐色土    | 粘性なし   | 暗赤褐色焼土(2.5YR3/4) 1%・炭化物3%含む                  |
| 18. 10YR3/4 | 暗褐色土    | 粘性なし   |  |
| 19. 10YR3/2 | 黒褐色粘土質土 | 粘性あり   | 炭化物・焼土粒微量含む                                  |
| 20. 10YR4/4 | 褐色砂質土   | 粘性なし   | 炭化物微量含む                                      |
| 21. 10YR4/4 | 褐色土砂質土  | 粘性弱    | 20層と類似するが炭化物を含まない                            |



第206図 RA177竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



S=1/2

第207图 RA177竖穴住居跡出土遺物(2)

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑は9基検出され、埋土の様相と位置的にP2・P3が支柱穴となる。4

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
直径cm	58×54	42×35	58×56	38×34	36×32	52×36	43×36	67×62	29×17	41×18
深さcm	43	45	34	28	13	19	20	8	8	9

本柱を基本とするが、対応する東側では確認できなかった。東壁側に径4～20cmの円形ないし楕円形の杭穴が17個一直線上に並んで検出されている。間仕切りのなものである。また、南壁側には幅60cm前後、深さ10～13cmの掘り方の落ち込みが確認されている。

<カマド> カマドは南壁の中央部東寄りに設置している。本体部の大部分は崩壊し、煙道部東側が攪乱削平されている事から詳細が不明である。燃焼部の焼土は確認されていない。煙道部の上半部は削平され、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。

煙道部は長さ1.60mで、燃焼部から緩やかに下がりながら煙出し部に続いている。煙出し部は径40×31cm、深さ19cmの楕円形状土坑が掘り込まれている。煙出し部の上部構造は不明である。

<遺物> カマド内と埋土上～中位から土師器坏・須恵器甕、鉄製品が出土している。824～826はロクロ使用の土師器坏である。824は口縁部が底部から外傾して立ち上がり、内面がヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部は切り離し後に再調整(AIc群)されている。

825・826は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器(AIIa群)である。口縁部は3分の1が現存し、底部の切り離しは回転糸切りである。825は小型の器形である。

827～831は須恵器甕の体部破片である。体部外面は平行叩き具痕、内面が平行叩き具痕と放射状の当て具痕が見られる。

832の鉄製品は器種が不明で、現存長4.1cm、幅1.2cm、厚さ7mmを測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代9世紀代に比定される。(高橋)

#### RA 179 竪穴住居跡 (第210・211図、写真図版86・275・276)

<位置・重複関係> 北側調査区の一-A区に位置している。南西側でRA 178 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本遺構が切られている事から(新)RA 178 竪穴住居跡→(旧)RA 179 竪穴住居跡である。検出はIV層上～中位で確認している。

<平面形・規模> 重複し遺構の半分以上が削平されている事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は南東辺1.80m、北西辺3.20m、北東辺3.80mである。コーナー側は隅丸を呈している。検出された規模から、一辺4.20m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

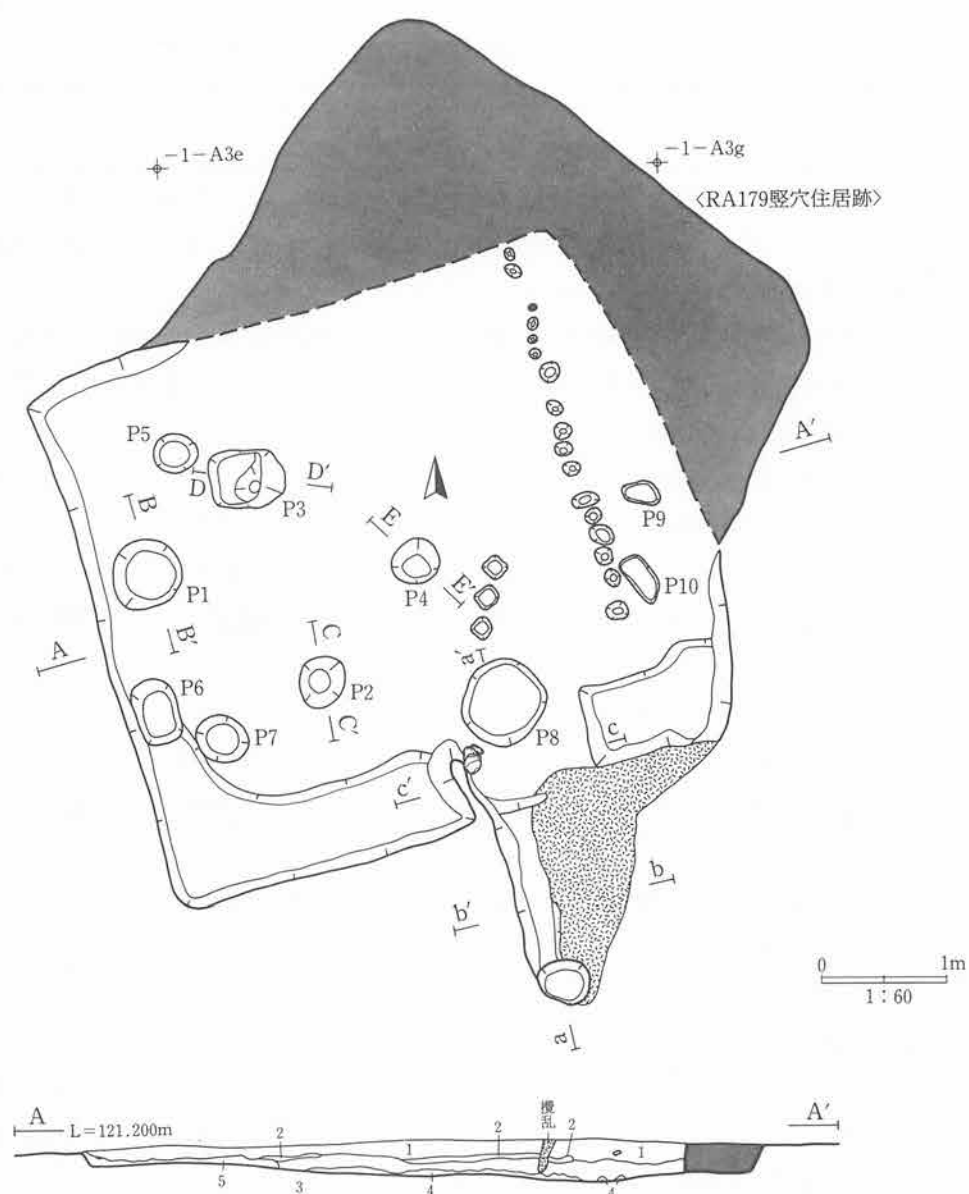
<埋土> 埋土は僅かしか現存しないが6層に大別される。上層は炭と焼土粒を含み大部分を占める黒褐色シルト質土、下層が強く締まる暗褐～黒褐色シルトで構成されている。<壁・床> 壁は上部の大部分が削平され、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は南東壁17cm、南西壁23cm、北東壁23cmを測る。床面はほぼ平坦で、強く締まっている。RA 178 竪穴住居跡との床の比高は2cm程である。貼り床は褐色～黒褐色シルト質土で3cm前後施されている。

<柱穴・他の施設> 柱穴はP1～P4が検出されている。平面形は円形と楕円形を呈している。

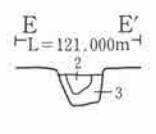
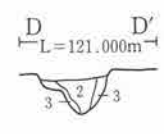
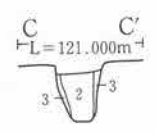
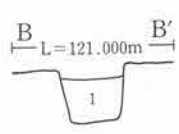
土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
直径cm	24×20	23×22	32×29	26×27	91×44
深さcm	58	45	45	47	80

P5は平面形が楕円形で、位置的に貯蔵穴である。埋土は黒褐色土で構成されている。



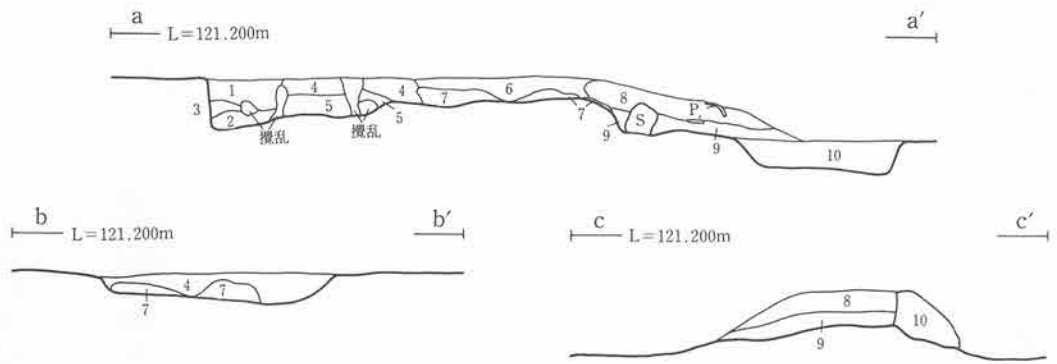


- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭微量含む
- 2. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで3%混入
- 3. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで1%混入
- 4. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで2%混入
- 5. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭・焼土粒微量含む



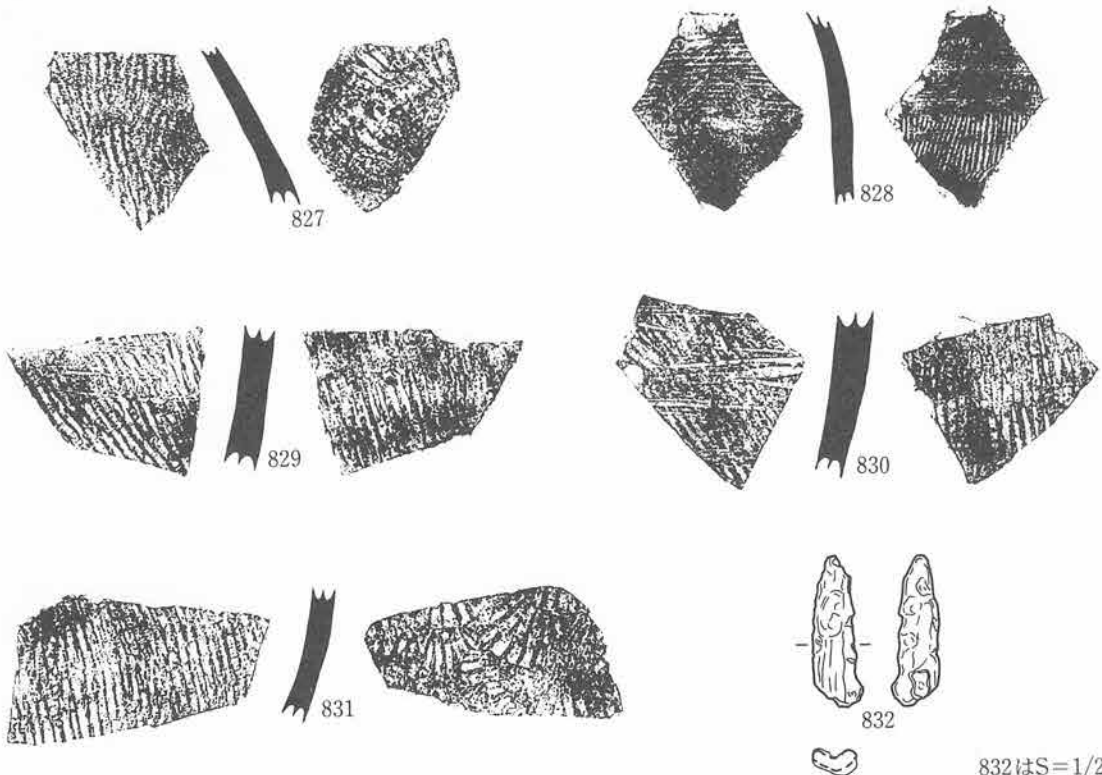
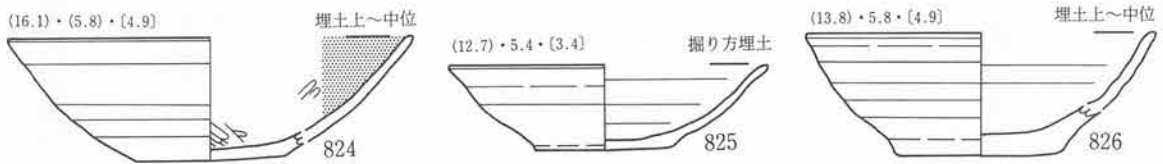
- 1. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土
- 2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土と暗褐色土を小ブロックで1%含む (柱痕)
- 3. 10YR4/6 褐色シルト質土 堅く締まる (掘り方埋土)

第208図 RA178 竖穴住居跡(1)



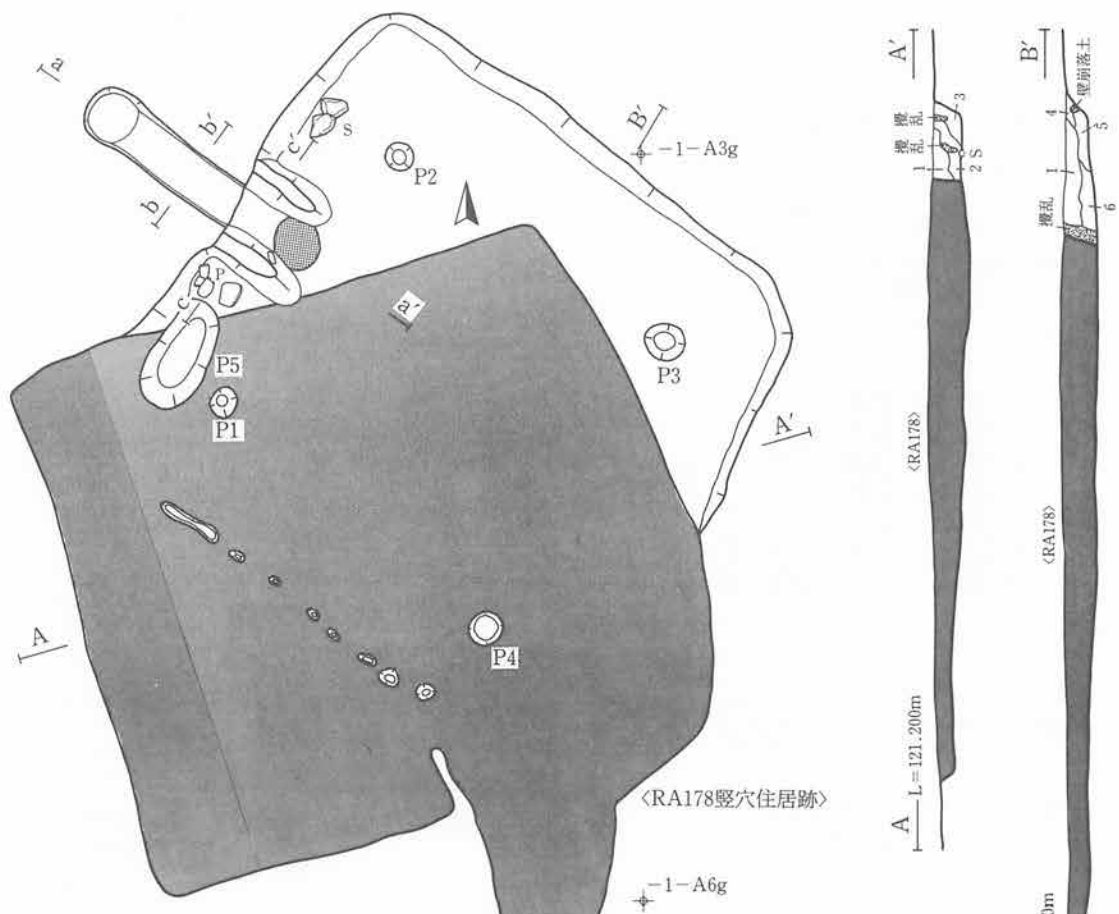
1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロック状で3%混入 炭微量含む
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 炭多量混入
3. 10YR4/6 褐色シルト質土 堅く締まる
4. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土5%混入
5. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 焼土粒・炭多量混入 指圧痕有り
6. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・炭微量含む
7. 5YR4/6 赤褐色焼土 堅く締まる
8. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで1%混入 焼土粒微量含む
9. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土を小ブロック状で2%混入
10. 5YR4/4 濃い赤褐色焼土 堅く締まる 褐色土との混合土

0 50cm  
1:30

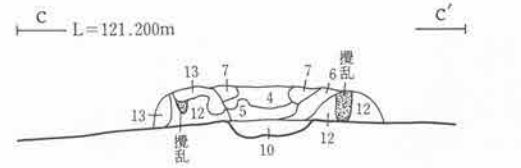
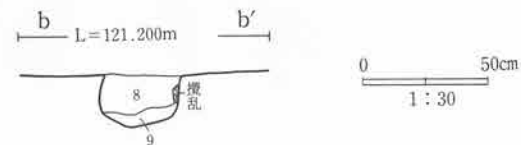
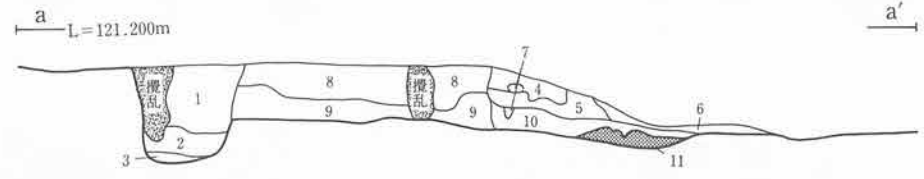


832はS=1/2  
824~831はS=1/3

第209図 RA178竪穴住居跡(2)・出土遺物



1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・炭1%混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 暗褐色土との混合土 炭微量・焼土粒含む
3. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで混入 焼土粒・炭2%含む
4. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 暗褐色土との混合土 指圧痕有り
5. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 砂質に富む 黒褐色土との混合土
6. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土を小ブロックで1%混入

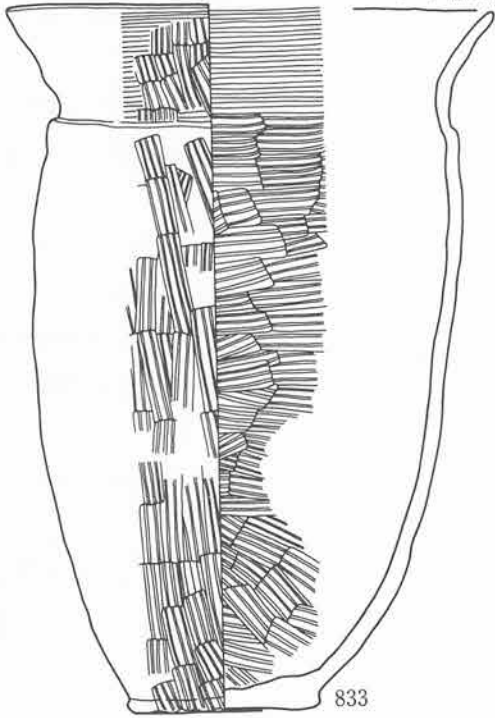


1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロック状で3%混入 炭微量含む
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 炭多量混入
3. 10YR4/6 褐色シルト質土 堅く締まる
4. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土5%混入
5. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 焼土粒・炭多量混入 指圧痕有り
6. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・炭微量含む
7. 5YR4/6 赤褐色焼土 堅く締まる
8. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで1%混入 焼土粒微量含む
9. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土を小ブロック状で2%混入
10. 5YR4/4 濃い赤褐色焼土 堅く締まる 褐色土との混合土
11. 5YR3/4 赤褐色焼土 堅く締まる 炭微量含む
12. 10YR4/4 褐色砂質シルト 堅く締まる IV層起源(雨り出しの袖部)
13. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで10%混入

第210図 RA179 竪穴住居跡

(19.5)・7.7・28.2

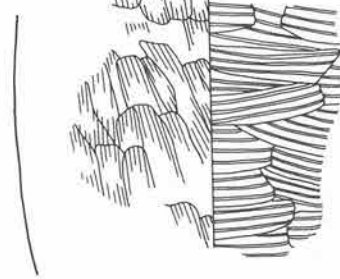
カマド袖上部



833

--- (11.6)

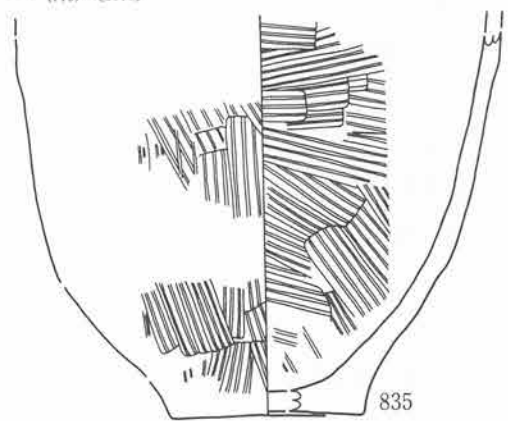
埋土



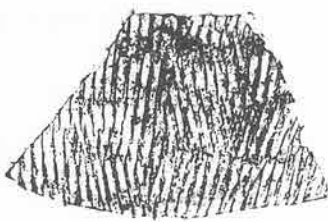
834

--- (7.6)・(16.1)

埋土中～下位



835



836



842



837



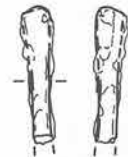
838



839



843



840



841



842・843はS=1/2  
833～841はS=1/3

第211図 RA179竪穴住居跡出土遺物

<カマド> カマドは北西壁のほぼ中央部に設置されている。本体部の大部分は崩壊し、袖部下半が現存している。袖部はIV層を削り出して造られており、長さ72～80 cm、幅30 cm前後を測る。燃焼部は径44×36 cmの楕円形状の焼土が形成され、層厚が7 cmである。支脚は検出されない。

煙道部は上半部が削平され、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。煙道部は長さ1.46 mで、燃焼部から緩やかな上りで煙出し部に続いている。煙出し部は径45×42 cm、深さ39 cmの円形土坑が掘り込まれている。埋土の黒褐色土には炭と焼土粒を含んでいる。煙出し部の上部構造は不明である。

<遺物> カマド袖部周辺と埋土中～下位から土師器甕、須恵器甕、鉄製品を出土している。833～835はロクロ不使用の土師器甕(A II群)である。833は頸部に浅い段が巡り、口縁部は頸部から外反して立ち上がっている。器面調整は口縁部が内外面がヨコナデ、外面の一部に縦方向のハケメ調整がある。体部は内外面ともハケメ調整を施している。底部はハケメ調整である。834・835は体部および底部破片で、外面がヘラナデとハケメ調整である。

836～841は須恵器甕や長頸瓶の体部破片で、体部外面は平行叩き具痕、内面が平行叩き具痕と放射状当て具痕が見られる。

鉄製品は842が器種不明である。843は端部を欠損した釘で、現存長3.7 cm、幅5 mm、厚さ3 mmを測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代9世紀代に比定される。(高橋)

#### RA 181 竪穴住居跡(第212・213図、写真図版87・276)

<位置・重複関係> 北側調査区の一-A～二-A区に亘って位置し、RD 189・247土坑、RG 104溝跡と重複している。本遺構が切られている事から新旧関係は(新)RD 189・247土坑→RG 104溝跡→(旧)RA 181竪穴住居跡である。検出はIV層上～中位で確認している。

<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は3.90×3.60 mである。

<埋土> 埋土は黒褐色土を主体とする3層に大別される。上層は炭化物とにぶい黄褐色土を含み、下層が褐色土粒と炭化物を多く混入し堅く締まっている。<壁・床> 壁上部の大部分は削平され、床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は南東壁13 cm、北西壁17 cm、南西壁17 cm、北東壁18 cmを測る。床面は平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。中央部付近の床上には、炭化材と焼土が散在する事から焼失家屋と思われる。

<柱穴・土坑> 柱穴状土坑はP1～P7の7基検出している。埋土の堆積状況や位置的に支柱穴はP1

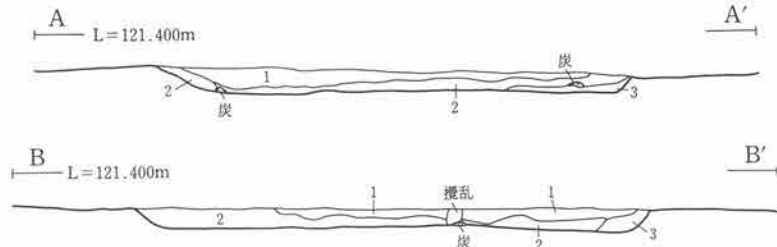
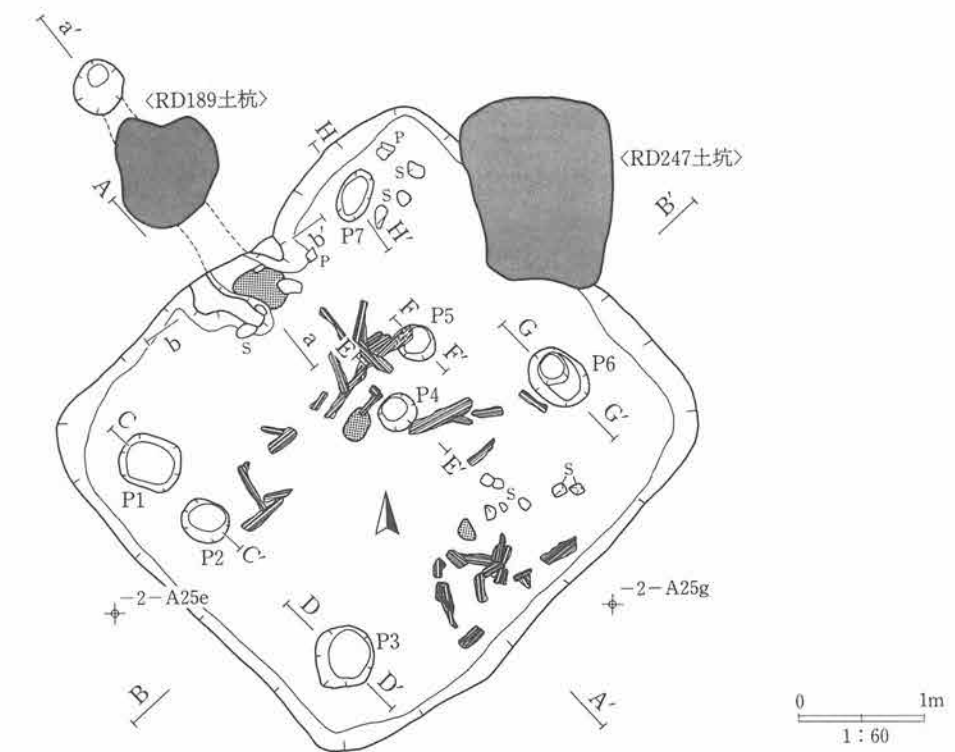
土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
直径cm	49×41	38×33	48×47	30×28	30×29	53×39	42×25
深さcm	58	13	11	18	27	25	10

P 3・P 5・P 6・P 7の4基である。平面形は楕円形状を呈している。

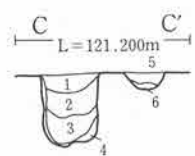
<カマド> カマドは北西壁の中央部に設置されている。本体部の大部分は崩壊し、煙道部の一部が土坑と重複し削平されている事から全容は不明である。袖部は褐色粘土質土で造られている。燃焼部は径44×34 cmの不整楕円形状で、層厚5 cmの焼土が形成されている。支脚は検出されない。

煙道は径25 cm大の楕円形状に割り貫かれ、長さ1.94 mを測る。燃焼部から下がり気味に延びて煙出し部に続いている。煙出し部は径43×39 cmの円形土坑が掘り込まれている。埋土は褐色～にぶい黄褐色土で構成されている。煙出し部の上部構造は不明である。

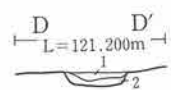
<遺物> 埋土下位から土師器甕、須恵器甕、土製品を出土している。844はロクロ不使用の土師器甕(A II群)で、底部を欠損している。口縁部は頸部からくの字状に外反して立ち上がり、口唇部に浅い一条の沈



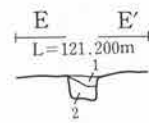
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 炭化物1%・にぶい黄褐色土(10YR6/3)3%含む
- 2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 炭化物10%・暗褐色焼土(7.5YR3/4)2%・褐色土粒(10YR4/6)10%含む
- 3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物3%・褐色土粒(10YR4/6)50%含む
- 4. 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性あり 径1~3mm程度の黒色土粒(10YR2/1)15%含む  
カマド袖構成土



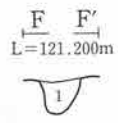
- 1. 10YR2/2 黒色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)10%含む
- 2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)5%含む
- 3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり
- 4. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)30%含む
- 5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)15%含む
- 6. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)20%含む



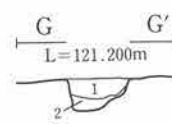
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)3%混入
- 2. 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性あり 黒褐色土(10YR2/2)3%混入



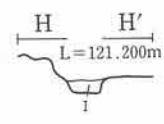
- 1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり
- 2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)15%含む



- 1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)10%混入  
炭化物含む

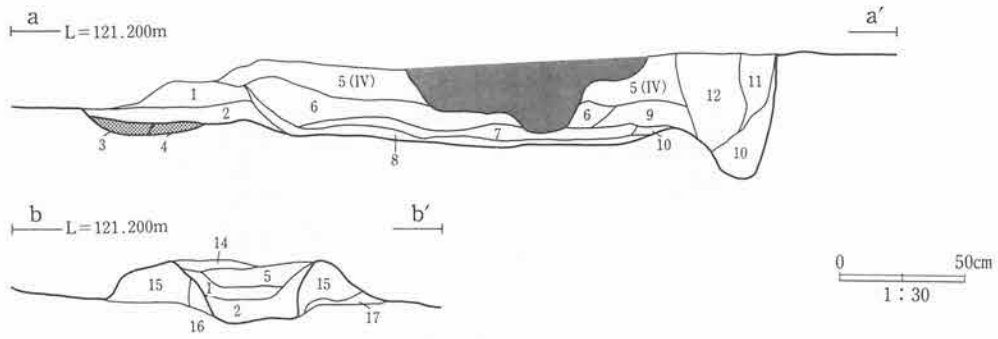


- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 褐色粘土(10YR4/4)10%含む
- 2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 径5mm~1cm程度の褐色粘土(10YR4/4)ブロック5%含む

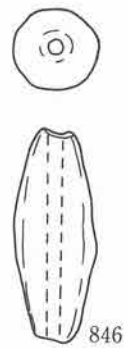
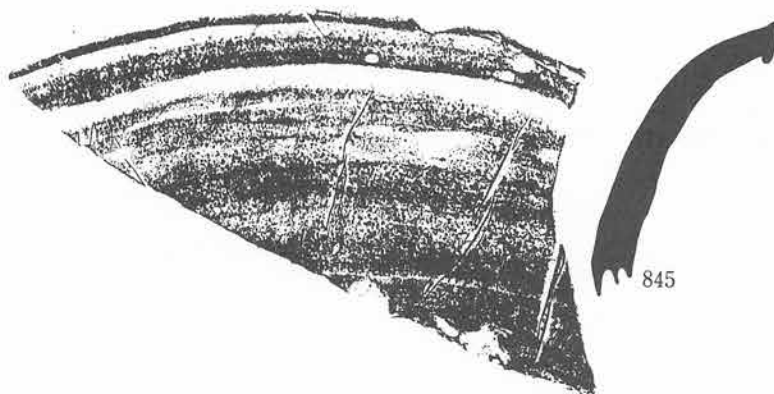
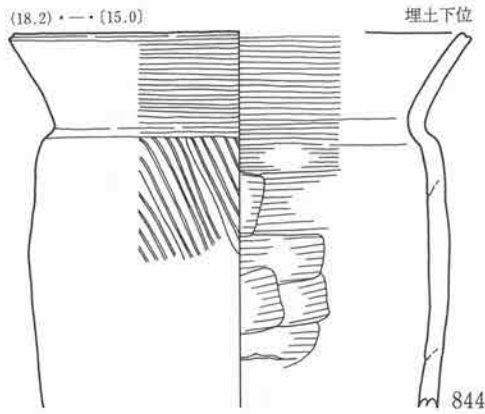


- 1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)10%含む

第212図 RA181竪穴住居跡(1)



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 暗褐色焼土(5YR3/6) 1%・暗褐色土(10YR3/4) 5%混入
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 暗褐色焼土ブロック(5YR5/6・径0.5cm大)10%混入炭化物5%含む
3. 5YR5/6 明赤褐色土 粘性あり 黒色土(10YR2/1)20%混入 炭化物3%含む
4. 5YR5/6 明赤褐色土 粘性ややあり
5. 10YR4/4 褐色土 粘性あり 暗褐色土(10YR3/4)20%混入 地山
6. 10YR4/4 褐色土 粘性あり 黒褐色土(10YR3/1)20%混入 炭化物10%含む
7. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 黒褐色土(10YR3/1)25%混入
8. 10YR4/4 褐色土 粘性あり 黒褐色土(10YR3/1)10%混入
9. 10YR5/4 におい黄褐色粘土 粘性あり 黒褐色土(10YR3/1)15%混入
10. 10YR4/6 褐色土 粘性あり 黒褐色土(10YR3/1)20%混入
11. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)10%混入
12. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性あり 黒褐色土(10YR3/1) 5%混入
13. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 褐色土(10YR4/6) 2%混入 炭化物1%含む
14. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 褐色土(10YR4/4) 3%混入
15. 10YR4/4 褐色粘土質土 粘性あり 黒色土(10YR2/1・径0.1~0.3cm大)15%混入
16. 10YR4/3 褐色粘土質土 粘性あり 15層と同じ土だが若干の赤変化を受ける
17. 10YR5/4 黄褐色土 粘性あり 黒色土(10YR2/1) 3%混入



846はS=1/2  
844・845はS=1/3

第213図 RA181竪穴住居跡(2)・出土遺物

線が巡っている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケメ、内面がヘラナデ調整である。

845 は須恵器大甕（B群）の口縁部破片である。

土製品は846の土錘がある。完形品で長さ5.8 cm、幅2.2 cm、厚さ2.1 cmを測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代9世紀代に比定される。 (高橋)

#### R A 182 竪穴住居跡 (第214・215 図、写真図版 88・276)

<位置・重複関係> 北側調査区の一2-A区西側に位置している。東側でR A 183 竪穴住居跡と重複し、本遺構が切られている。新旧関係は(新) R A 183 竪穴住居跡→(旧) R A 182 竪穴住居跡である。検出はIV層上～中位で確認している。

<平面形・規模> 西北側の3分の1以上が調査区域外に延びる事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は東辺0.84 m、南辺2.80 m、北辺2.10 mを測り、北東コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は3層に大別される。1層は大部分を占める焼土と炭を含む黒褐色土、2層が粘性のある褐色土、3層が壁崩落土の褐色土である。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は南壁21 cm、北壁17 cmである。床は多少凹凸があり、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑が3基検出されている。P 2が遺構の中央部付近にある事から支柱穴の

土坑No	P 1	P 2	P 3
直径cm	30×22	42×36	20×20
深さcm	29	31	17

可能性もある。平面形は隅丸長方形を呈している。

<カマド> カマドは調査区域内では検出されないが、西壁側に設置していると思われる。

<遺物> 床上と土坑から土師器坏・須恵器片口が出土している。849・850・853・854・856 は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器である。口縁部は底部から外傾して立ち上がっている。底部の切り離しは回転糸切り（A II a 群）が849・850・853・856、回転ヘラ切り（A II c 群）が854である。845の体部下半には再調整が施されている。

860は須恵器片口で、口縁部の一部を欠損している。底部の切り離しは回転糸切りである。

<時期> 出土した坏から平安時代に比定される。 (高橋)

#### R A 183 竪穴住居跡 (第214・215 図、写真図版 89・276)

<位置・重複関係> 北側調査区の一2-A区西側に位置している。西側でR A 182 竪穴住居跡、東側でR A 184 竪穴住居跡と重複している。R A 182 竪穴住居跡を本遺構が切り、R A 184 竪穴住居跡に切られている事から、新旧関係は(新) R A 184 竪穴住居跡→R A 183 竪穴住居跡→(旧) R A 182 竪穴住居跡である。検出はIV層上～中位で確認している。

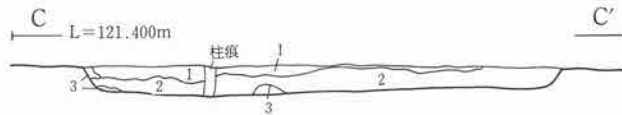
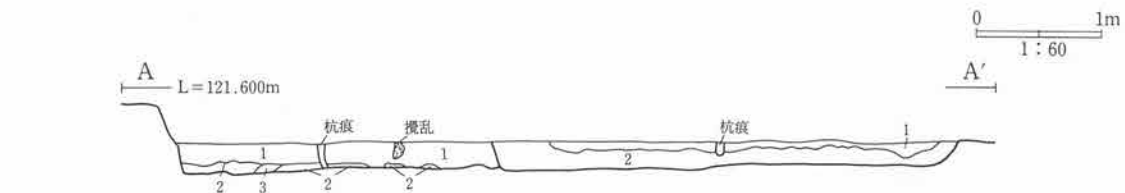
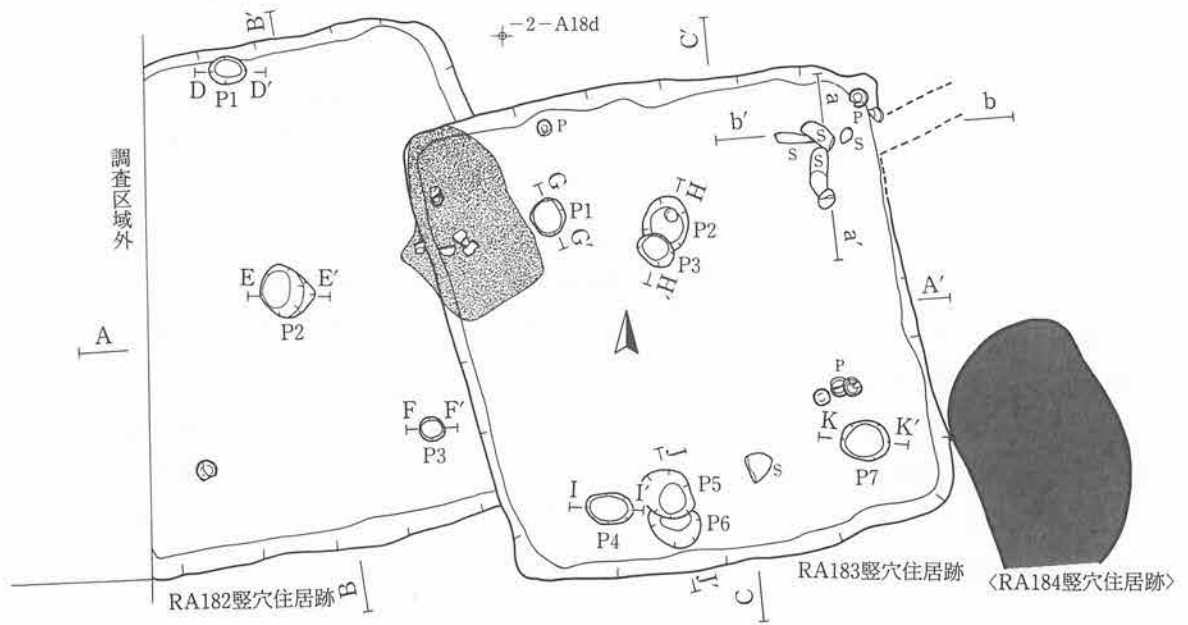
<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.60×3.50 mである

<埋土> 埋土は4層に大別される。1層は大部分を占める焼土と炭を含む黒褐色土、2層が黒褐色土をブロック状に含む褐色土で構成されている。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は東壁19 cm、西壁21 cm、南壁20 cm、北壁16 cmを測る。床はほぼ平坦で、堅く締まっている。北西コーナー側には炭が径1.50×1.00 mの不整形に散布している。貼り床は確認されない。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
直径cm	29×27	43×36	31×24	38×25	44×38	44×31	39×32
深さcm	15	26	21	15	41	34	11

<柱穴・他の施設> 柱穴状遺構は7基検出されている。平面形は円形と楕円形があり、埋





- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり  
焼土・炭化物をブロック状に含む
- 2. 10YR4/6 褐色土 粘性ややあり  
黒褐色土(10YR2/3)微量含む
- 3. 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり  
黒褐色土(10YR2/3)微量含む

- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり  
焼土・炭化物をブロック状に含む
- 2. 10YR4/6 褐色土 粘性ややあり  
黒褐色土(10YR2/3)微量含む
- 3. 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり  
ブロック状で2層中に混入

D-D'~F-F'はL=121.200m



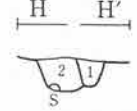
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 褐色砂質土(10YR4/6)  
ブロック状に少量含む

L=121.400m



- 1. 10YR3/4 暗褐色砂質土 黒褐色土(10YR2/2)  
ブロック状に含む

L=121.400m



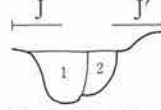
- 1. 10YR2/2 黒褐色粘土質土 炭化物微量含む
- 2. 10YR2/2 黒褐色粘土質土

L=121.400m



- 1. 10YR3/4 暗褐色砂質土 黒褐色土(10YR2/2)  
ブロック状に含む

L=121.400m



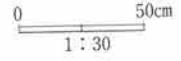
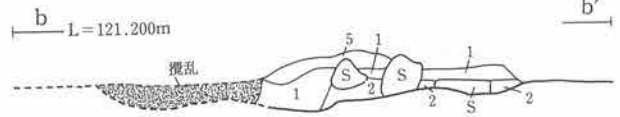
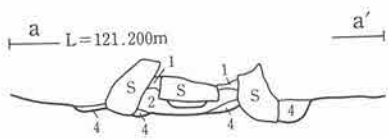
- 1. 10YR2/2 黒褐色粘土質土 炭化物微量・  
10cm程度の礫1個含む
- 2. 10YR2/2 黒褐色粘土質土

L=121.400m

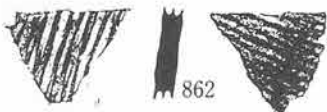
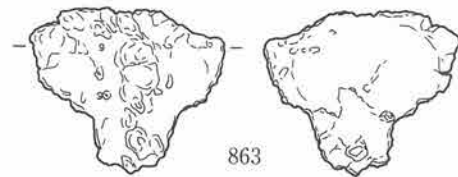
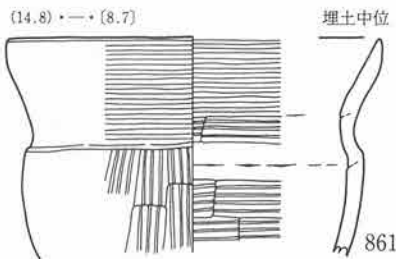
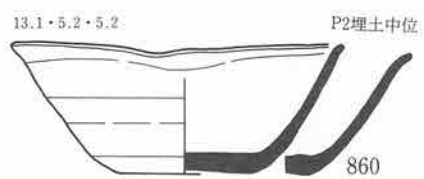
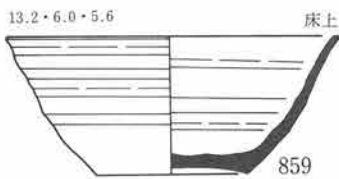
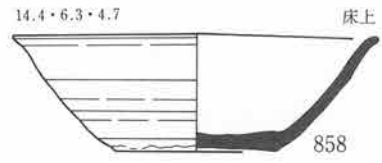
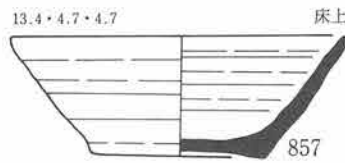
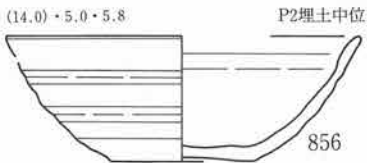
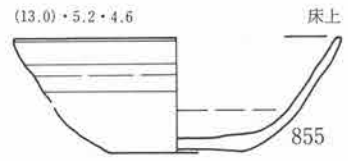
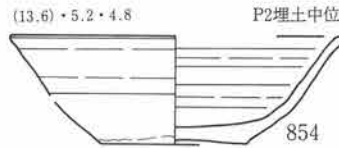
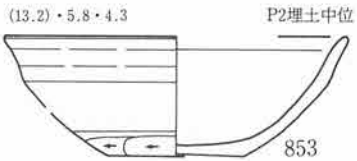
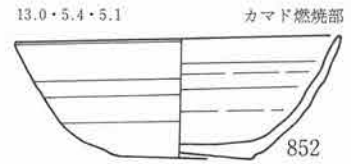
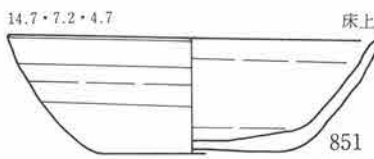
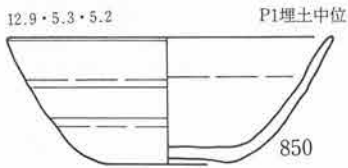
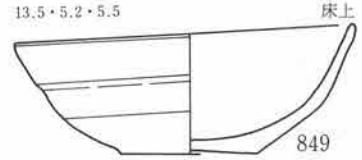
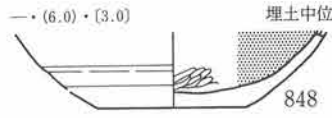
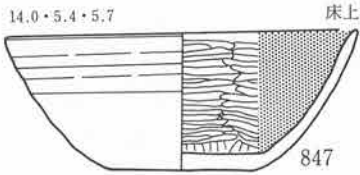


- 1. 10YR3/4 暗褐色砂質土 黒褐色土(10YR2/2)  
ブロック状に含む

第214図 RA182・183竪穴住居跡(1)



1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 焼土微量含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 焼土5%・炭化物微量含む
3. 2.5YR2/4 極暗赤褐色焼土 粘性ややあり
4. 10YR3/4 暗褐色粘土質土 粘性あり
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 焼土・炭化物をブロック状に含む



863は S=1/2  
847~862は S=1/3

第215図 RA182・183竪穴住居跡(2)・出土遺物

土の状況と位置的にP 1・P 4・P 7の3基が支柱穴と思われる。

<カマド> カマドは東壁の北東コーナー側に設置されている。本体部の大部分は崩壊し、煙道部も攪乱削平されている事から全容が不明である。両袖部に使用した芯材の礫が3個現存するだけで、燃焼部の焼土は検出されない。

<遺物> 床上とカマド燃焼部から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、鉄製品が出土している。847・848はロクロ使用の土師器坏で、848の口縁部は欠損する。内面は放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部は847が回転糸切り（A I a群）、848が切り離した後に再調整（A I b群）されている。

851・852・855は底部の切り離しは回転糸切りで、内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a群）である。口縁部はいずれも底部から外傾して立ち上がり、胎土に砂と石を多く含む。

857～859は底部の切り離しが回転糸切りの、須恵器坏（B II a群）である。焼成は良好である。

861は体部下半から底部を欠損したロクロ不使用の土師器甕（A II群）である。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部は片削ぎされている。器面調整は口縁部ヨコナデ、体部内外面がハケメ調整である。

862は須恵器甕の体部破片で、体部内外面は平行叩き具痕である。863は器種不明の鉄製品で、長さ4.4cm、幅5.2cm、厚さ4mmを測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。

（高橋）

#### RA 184 竪穴住居跡（第216・217図、写真図版90・277）

<位置・重複関係> 北側調査区の-2-A区西側に位置している。東側でRA 185 竪穴住居跡、西側でRA 183 竪穴住居跡と重複する。本遺構が2棟を切っている事から、新旧関係は（新）RA 184 竪穴住居跡→RA 183 竪穴住居跡→（旧）RA 185 竪穴住居跡である。検出はIV層上～中位で確認している。

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.65×3.55mである

<埋土> 埋土は3層に大別される。1層は褐色土をブロック状に含み大部分を占める黒褐色土、2層が炭化物を混入する黒褐色土、3層が暗褐色の砂質土で構成されている。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は東壁12cm、西壁15cm、南壁11cm、北壁13cmを測る。床は多少凹凸があり、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
直径cm	34×25	37×27	32×25	30×29	68×39
深さcm	26	21	27	25	10

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑は4基検出されているが、埋土の状況と位置的に支柱穴とはならない。カマド左袖の北東コーナーからP 5の貯

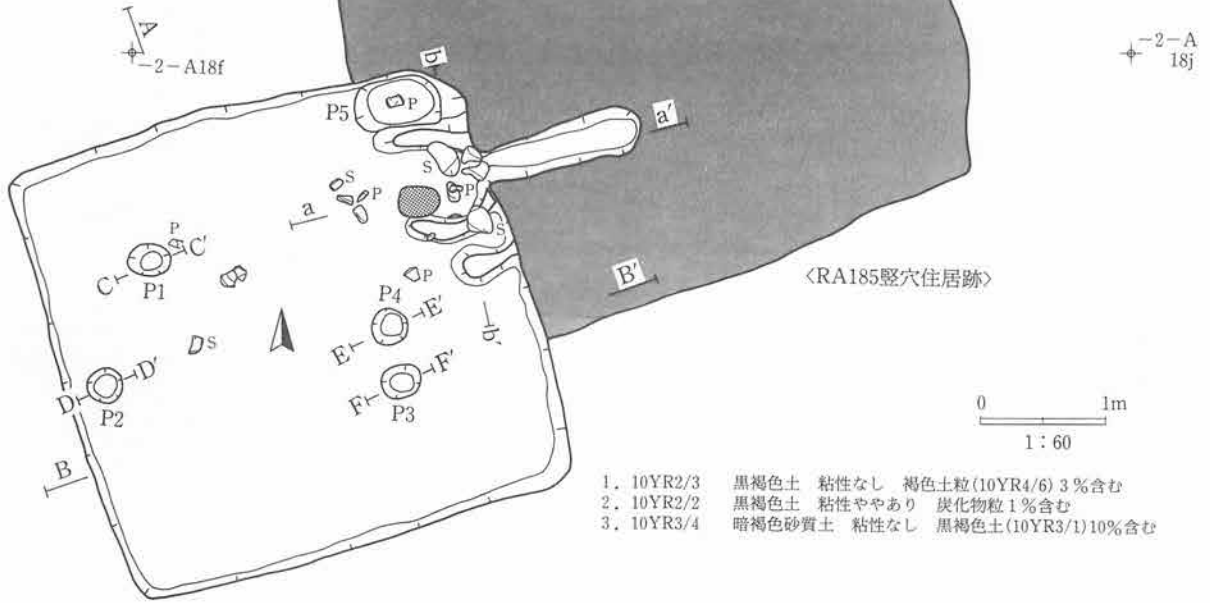
蔵穴が検出されている。平面形は楕円形で、埋土から土器を出土している。

<カマド> カマドは東壁の北東コーナー寄りに設置されている。袖部を含む本体部の大部分は崩壊している事から全容が不明である。左袖部には芯材に使用した礫が1個現存している。燃焼部は径33×24cmの楕円形状を呈している。支脚は検出されない。

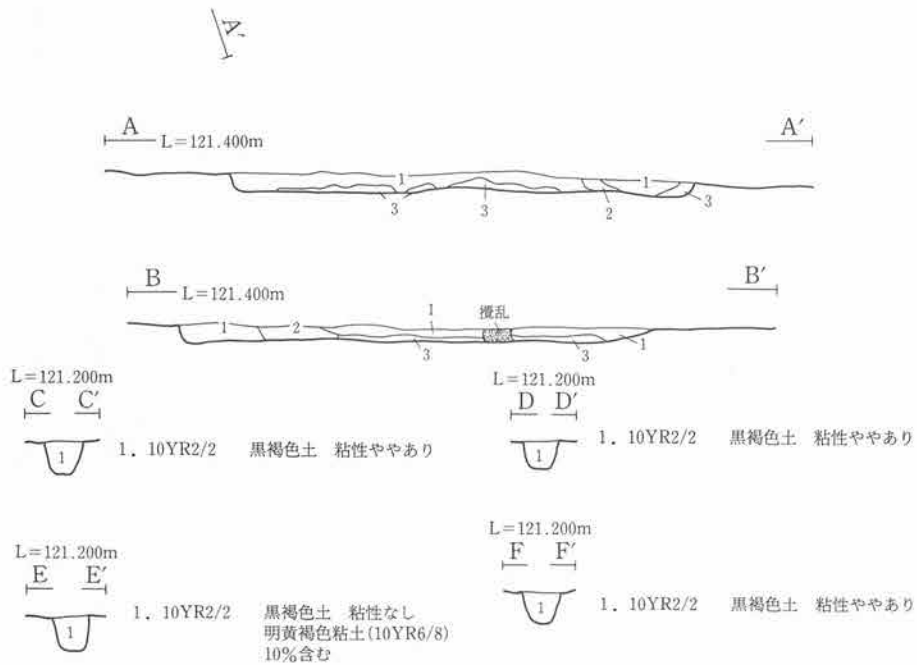
煙道部は上半部が削平されており、掘り込み式か削り貫き式かは不明である。煙道部は長さ1.28mで、燃焼部から水平に煙出し部に続いている。煙出し部の上部構造は不明である。

<遺物> カマド燃焼部周辺と床上から土師器坏・甕、須恵器長頸瓶が出土している。864～869はロクロ使用の土師器坏である。口縁部は端部で外反する864、底部から外傾して立ち上がる865～869がある。内面は放射状のヘラミガキ後に黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切り（A I a群）が866・867・869、切り離した後に再調整（A I b群）された865・868、回転ヘラ切り（A I e群）の864である。864の

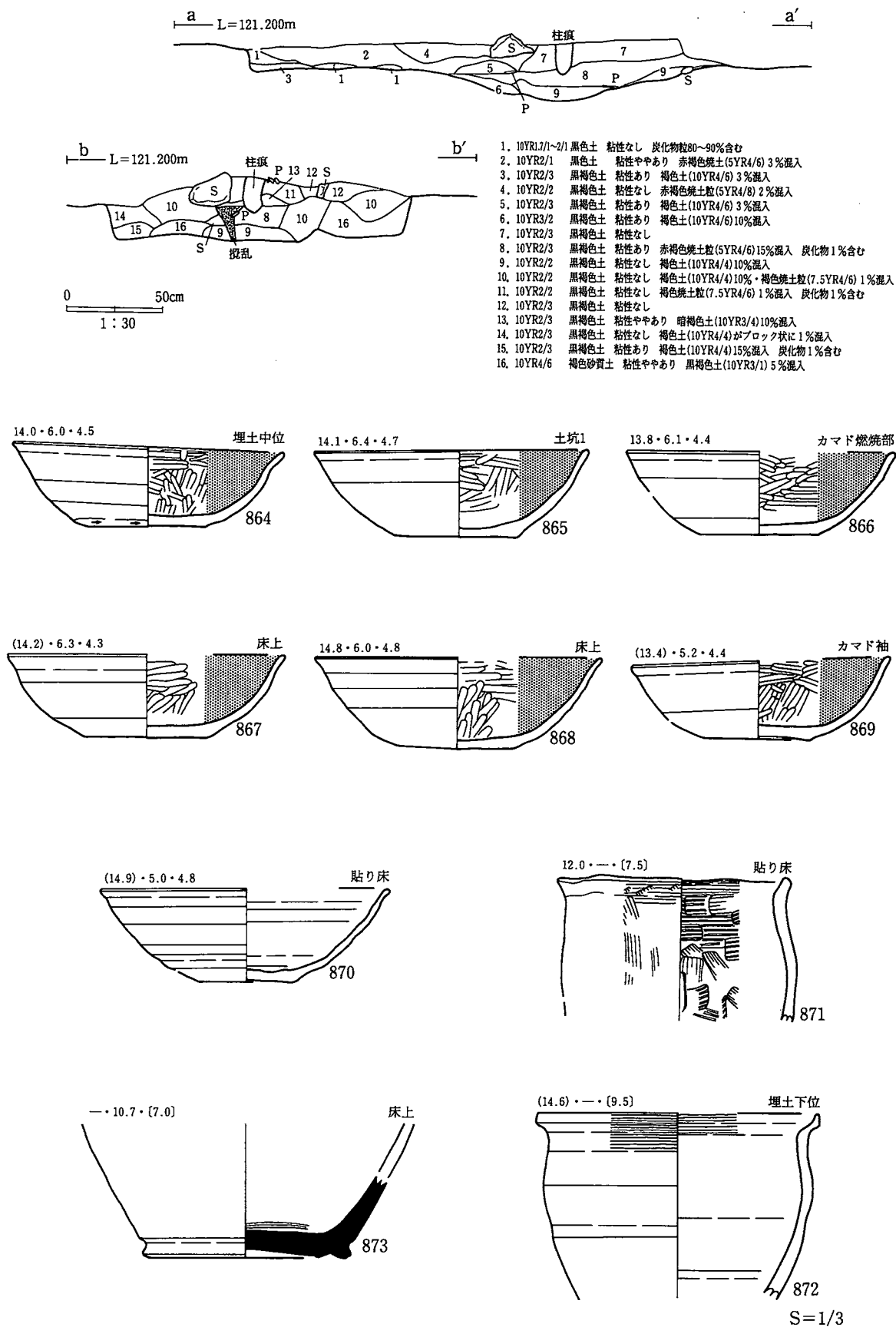
調査区域外



- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 褐色土粒(10YR4/6) 3%含む
- 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物粒1%含む
- 3. 10YR3/4 暗褐色砂質土 粘性なし 黒褐色土(10YR3/1)10%含む



第216図 RA184竖穴住居跡(1)



第217図 RA184竪穴住居跡(2)・出土遺物

体部外面下半はヘラケズリ調整が見られる。

870 は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a 群) である。口縁部は外傾して立ち上がり、底部の切り離しが回転糸切りである。

871 は底部を欠損したロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) である。口縁部は短く頸部から直立気味に立ち上がり、口唇部は角張っている。口縁部はヨコナデ、体部外面がヘラナデ、内面がハケメ調整を施している。外面に剝落が見られる。

872 はロクロ使用の土師器甕 (A I 群) で、底部を欠損している。口縁部は短く頸部から強く外反する。

873 は須恵器長頸瓶の底部破片である。ロクロ成形痕が明瞭で、底部はヘラ切りの後再調整されている。

<時期> 出土した遺物から平安時代に比定される。 (高橋)

#### R A 188 竪穴住居跡 (第 218 図、写真図版 91・277)

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区に位置し、南西側 1.70 m に RD 183 土坑が近接している。遺構の大部分は道路に切られ、北東コーナーとカマド煙道部の一部が隣接する第 19 次調査区に延びている。検出面は IV 層の上面で、黒～黒褐色土の広がりによって確認している。

<平面形・規模> 遺構の中心を道路に切られている事から詳細は不明である。検出された範囲と形状から、規模は約 5.00×4.50 m、平面形は方形ないし菱形の形状を呈すると思われる。

<埋土> 黒褐色土を主体とし、上位に十和田 a 降下火山灰を含み、中～下位にかけて炭化物を微量に混入している。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 壁は床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高は東壁 35 cm、西壁 31 cm を測る。床面は IV 層中にあり、ほぼ平坦で堅く締まっている。北西コーナー付近の床面で、径 28×16 cm の楕円形状焼土を検出している。重複する R A 139 竪穴住居跡の床面との比高はない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> 東壁の北東コーナー寄りに設置しているが、袖部が現存する他は崩壊している。燃焼部は幅・奥行きとも不明である。径 22 cm の不整形に広がる焼土を確認したが、大部分は道路下に続く事から詳細が不明である。

煙道部は長さ 1.14 m の割り貫き式で、燃焼部の奥壁から約 35 cm 平らに延びた後、28 度の下がり勾配で煙出し部に続いている。また、煙道内の側壁の一部は火熱による赤褐色変化が見られ、煙出し部は径 53×50 cm、深さ 28 cm の円形状土坑が掘り込まれている。

<遺物> 埋土中位から須恵器大甕の破片が 1 点出土している。874 (B 群) は肩部上位から口縁部の破片で、頸部～口縁部がロクロナデ、肩部外面が平行叩き具痕、内面が青海波文か同心円文の当て具痕である。

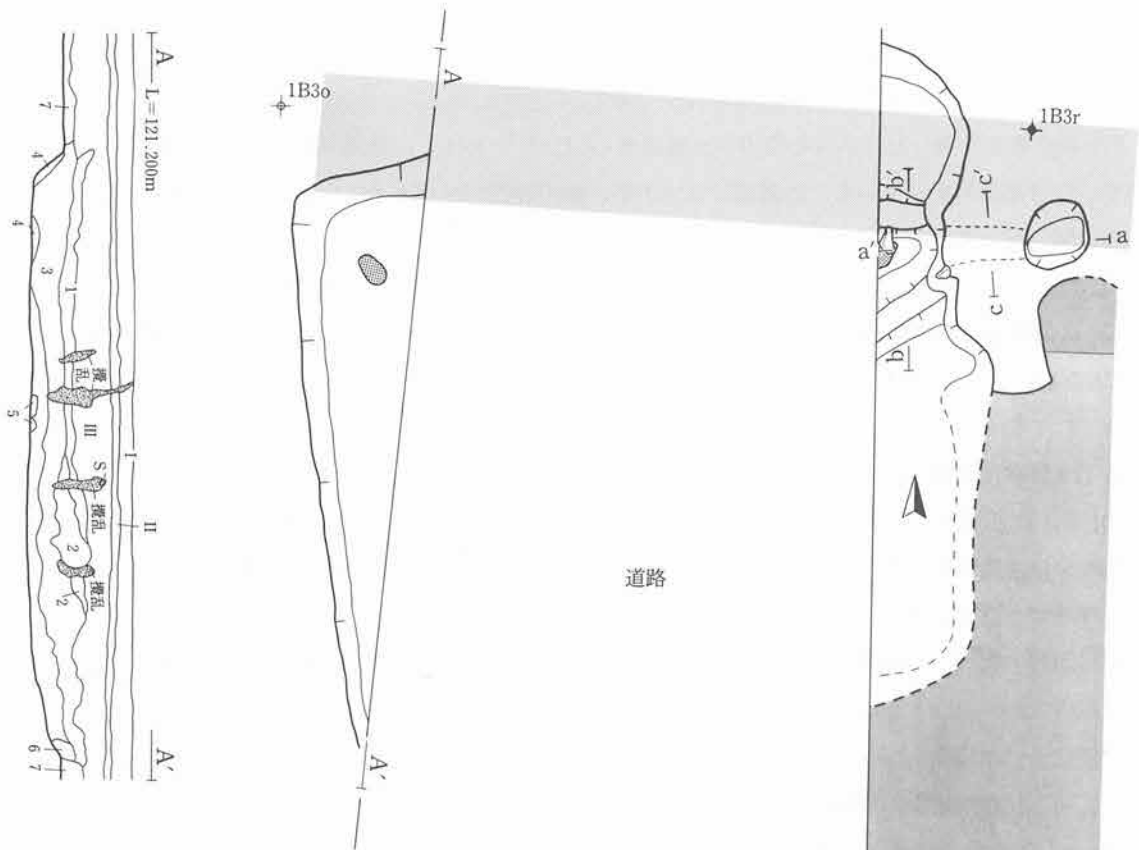
<時期> 須恵器大甕の破片の特徴からは時期は不詳であるが、周辺の竪穴住居跡や遺構形態から平安時代に比定されると思われる。 (佐藤・高橋)

#### R A 189 竪穴住居跡 (第 219 図、写真図版 91・277)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 B 区中央部北寄りに位置している。他の遺構との重複はない。検出は IV 層上面で確認している。

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈し、規模は 3.80×3.60 m である

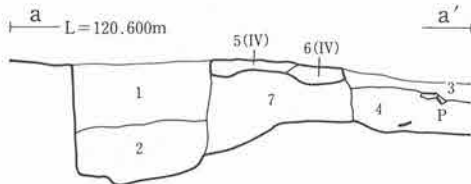
<埋土> 埋土は暗褐色土シルト質土を主体とする 3 層に大別される。上層は褐色土との混合土で堅く締まり、下層が炭化物と褐色土粒を混入している。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり、壁



- 1. 10YR3/2 黒褐色シルト 耕作土
- II. 10YR3/2 黒褐色シルト 水酸化鉄を層状に含む 床土
- III. 10YR2/2 黒褐色土
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色火山灰(10YR5/4)がブロック状に20%混入
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 暗褐色土(10YR3/4)30%混入
- 3. 10YR2/3 黒褐色シルト 暗褐色土(10YR3/4)5%混入 炭化物微量含む
- 4. 10YR2/2 黒褐色シルト
- 5. 10YR4/6 褐色砂質シルト 黒褐色土30%混入
- 6. 10YR2/2 黒褐色シルト 褐色土5%混入 炭化物含む
- 7. 10YR4/4~4/6 褐色シルト 黒褐色土10%混入

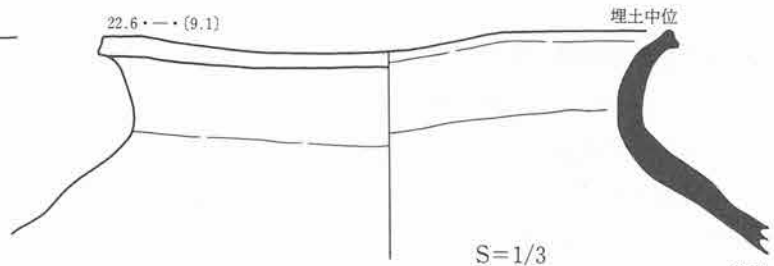
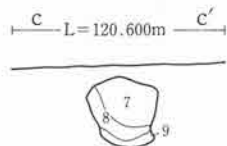
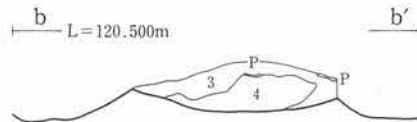
0 1m  
1:60

〈RA139竪穴住居跡〉



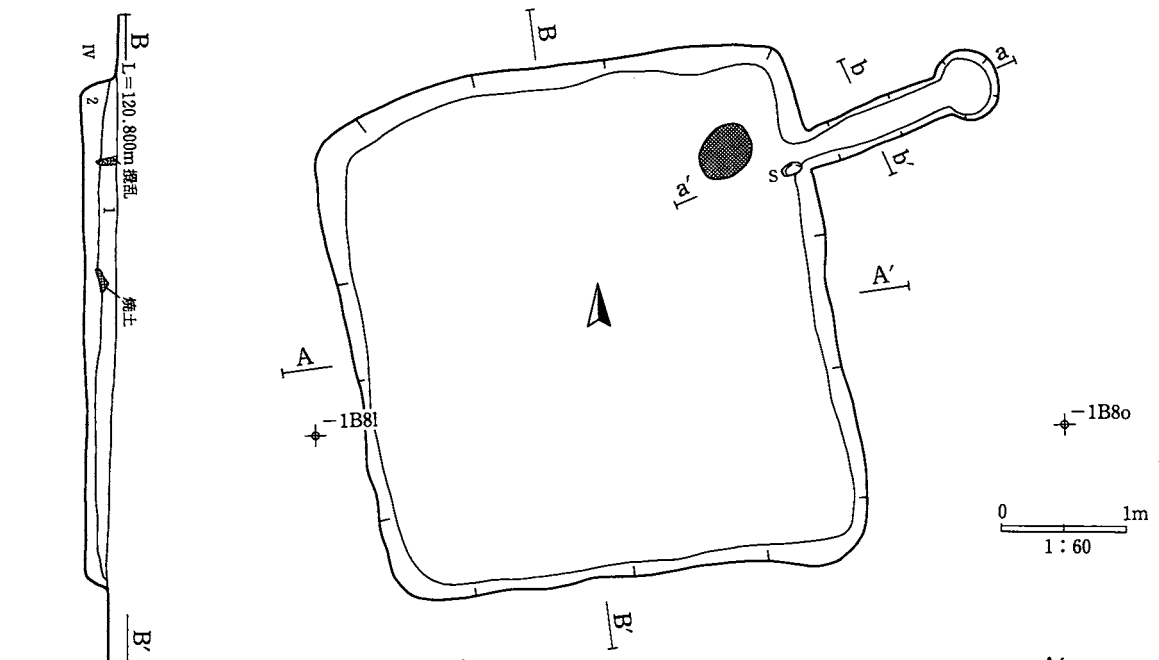
- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト 締まりなし
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト
- 3. 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土・炭化物少量含む
- 4. 5YR3/2 暗赤褐色シルト 赤褐色焼土20%混入 炭化物少量含む
- 5. 10YR4/4 褐色砂質シルト 黒褐色土10%混入
- 6. 10YR4/4 褐色砂質シルト 黒褐色土10%・赤褐色焼土(5YR4/8)20%混入
- 7. 10YR2/2 黒褐色シルト 赤褐色焼土(5YR4/6)20%混入
- 8. 10YR2/3 黒褐色シルト 黄褐色土1%混入 焼土・炭化物少量含む
- 9. 10YR3/2 黒褐色シルト 黄褐色土(5YR4/8)1%混入 焼土・炭化物少量含む

0 50cm  
1:30

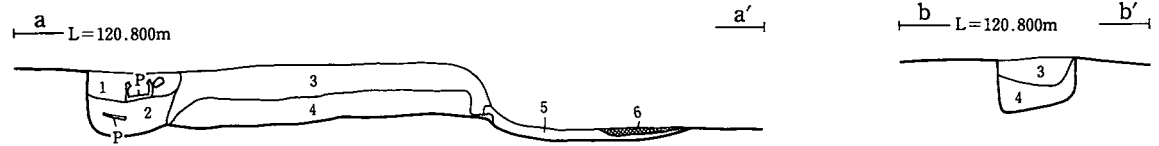


第218図 RA188竪穴住居跡・出土遺物

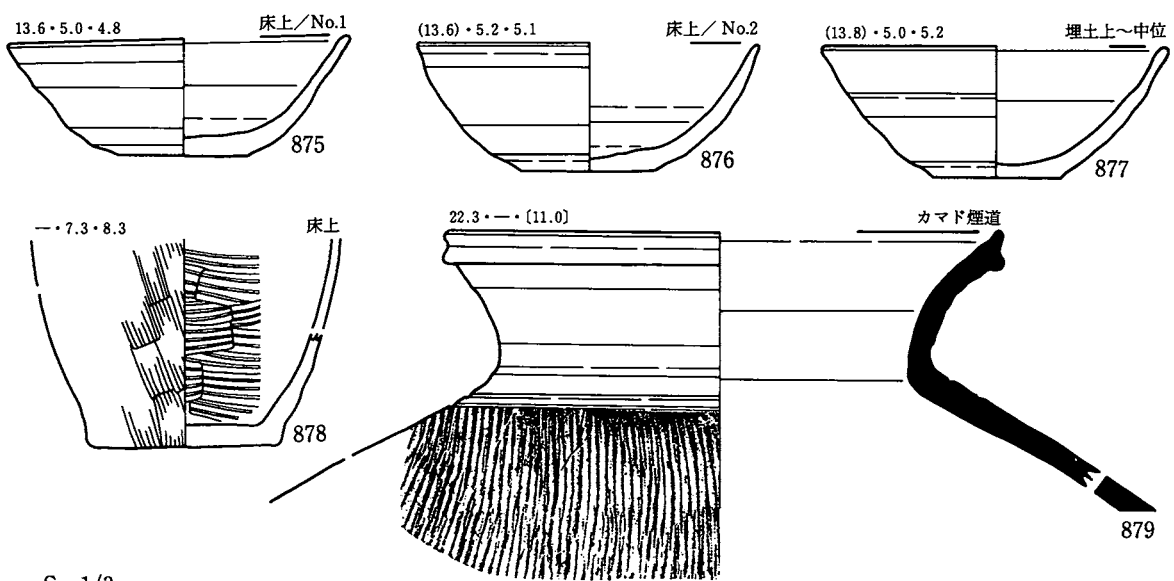
874



1. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 1層に類似 炭微量含む 指圧痕あり
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・微量の炭含む
4. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 十和田降下火山灰40%含む
5. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土が小ブロック状に混入



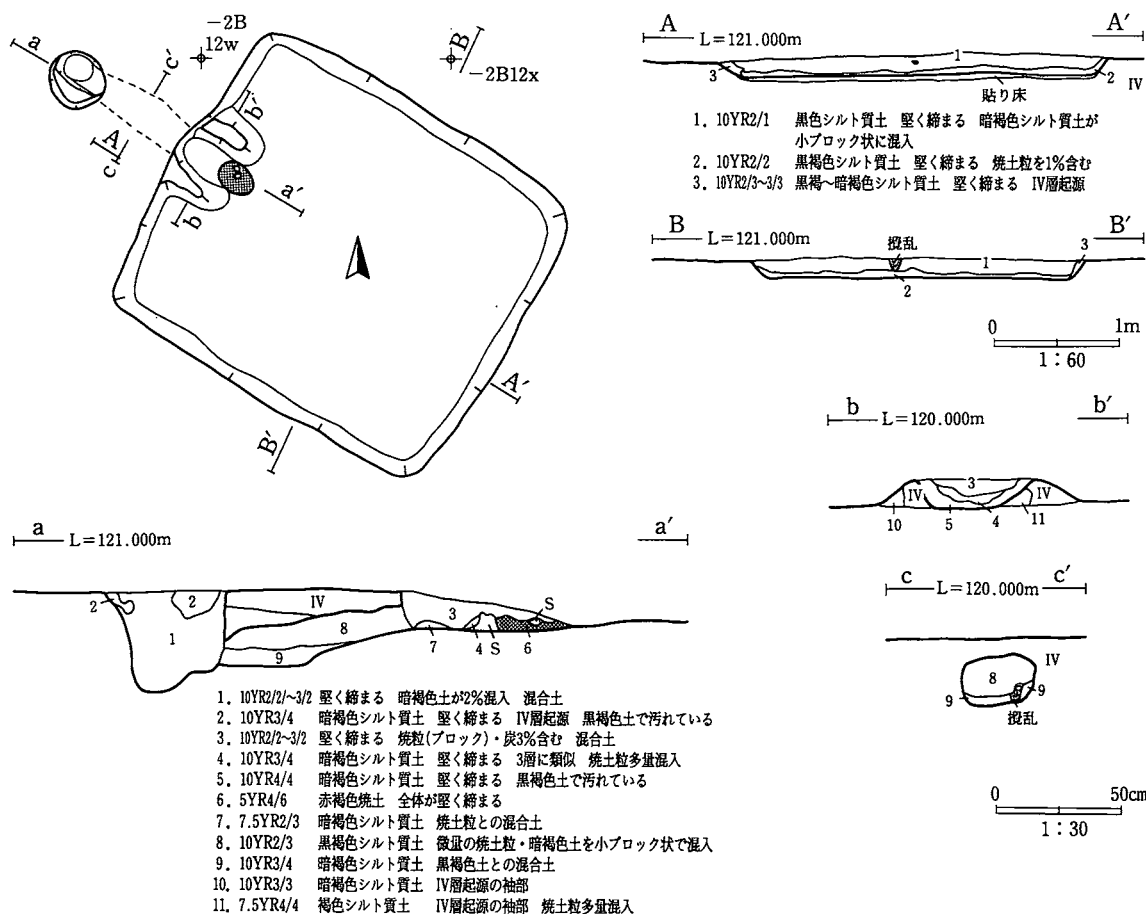
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 暗褐色土(10YR2/4)10%混入  
焼土粒・炭少量含む 指圧痕あり
2. 10Y2/2R 黒褐色シルト質土 粘性あり 焼土粒・炭少量含む 指圧痕あり
3. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり 赤褐色焼土(5YR4/6)10%ブロック状に混入
4. 10YR4/4 褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる
5. 10YR4/6 褐色シルト質土 粘性あり 黒色土(10YR2/1)20%混入 指圧痕あり
6. 10YR4/4 褐色シルト質土 粘性あり 黒褐色土(10YR2/3)5%・赤褐色焼土(4/6)10%混入



S=1/3

第219図 RA189竪穴住居跡・出土遺物





第220図 RA190竪穴住居跡

高は東壁 23 cm、西壁 12 cm、南壁 17 cm、北壁 29 cmである。床は中央部が多少高まり、強く締まっている。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> 東壁の北東コーナー寄りに設置している。本体部と両袖部は崩壊し、僅かに燃焼部が現存するだけである。燃焼部は径 48×37 cmの楕円形状焼土が形成され、厚さは 2 cmを測る。

煙道部上半部は削平されている事から、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。長さは 1.62 cmで、燃焼部から緩やかな下がり勾配で煙出し部に続いている。煙道内側壁の一部は火熱による赤褐色変化が見られる。煙出し部は径 56×50 cm、深さ 25 cmの円形状土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

<遺物> 床上とカマド煙道部から土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。875~877 は口縁部の現存が 3分の2・3分の1で、内外面ともロクロ痕の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a 群) である。底部の切り離しは回転糸切りで、胎土に砂と石を多く含んでいる。口縁部は底部から丸味をもって内湾する 876、外傾する 875・877 がある。

878 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) で、口縁部を欠損している。体部外面はヘラナデ、内面が横方向のハケメ、底部がヘラナデ調整を施している。

879 は須恵器大甕の肩部~口縁部破片である。口縁部は頸部からくの字状に強く外反して立ち上がり、口唇部に一条の沈線が巡っている。体部外面は平行叩き具痕である。

<時期> 坏と甕の特徴からは平安時代に比定される。

(高橋)

R A 190 竪穴住居跡（第 220 図、写真図版 92）

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 B 区東寄りに位置している。他の遺構との重複はない。検出はIV層上面で黒色土の広がりによって確認している。

<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は 2.80×2.40 m である

<埋土> 埋土は 3 層に大別される。上層は暗褐色土ブロックとの混合土で堅く締まり、下層が炭と焼土粒を含む黒褐色シルト質土、壁際に壁崩落土の黒褐～暗褐色シルト質土が堆積している。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は南東壁 14 cm、北西壁 12 cm、南西壁 16 cm、北東壁 15 cm を測る。床はほぼ平坦で、締まっている。床は厚さ 2～5 cm の黒褐色土の貼り床が施されている。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁のほぼ中央部に設置している。本体部と両袖部は崩壊していることから、天井部の構造は不明である。袖部は下半部が現存し、IV層を削り出して造られている。燃焼部は径 31×22 cm の楕円形状に焼土が形成され、厚さは 5 cm である。

煙道部は径 36×34 cm の楕円形状に削り貫かれ、長さが 1.20 m である。燃焼部から 34 度の下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径 45×32 cm、深さ 40 cm の楕円形状土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

<遺物> カマド煙道部の埋土から、ロクロ使用の土師器甕（A I 群）と須恵器甕（B 群）の体部細破片を 2 点出土しただけである。

<時期> 出土遺物は少ないものの甕の特徴から平安時代に比定される。 (高橋)

R A 191 竪穴住居跡（第 221 図、写真図版 93・277）

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 C 区東寄りに位置している。西側で R G 110 溝跡と重複し、本遺構が切られていることから新旧関係は（新）R G 110 溝跡→（旧）R A 191 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認している。

<平面形・規模> 東側の 3 分の 2 以上が道路下の調査区域外に延びる事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は南西辺 0.94 m、北西辺 2.80 m を測り、北東コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は 3 層に大別される。1 層は褐色土シルトを小ブロックに含む黒褐色シルト質土、2 層は炭と焼土粒を混入する黒褐色シルト質土、3 層が堅く締まりのある黒色砂質シルトで構成されている。<壁・床> 壁は床面から直立気味に立ち上がり、壁高は南西壁 20 cm、北東壁 16 cm を測る。床はやや凹凸が見られ、堅く締まっている。

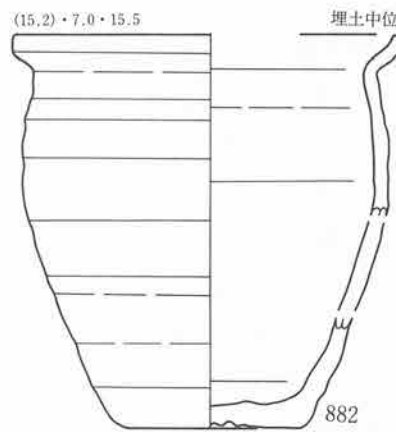
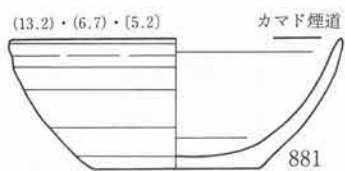
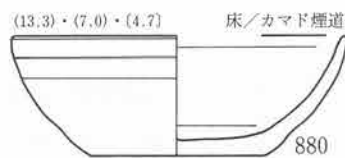
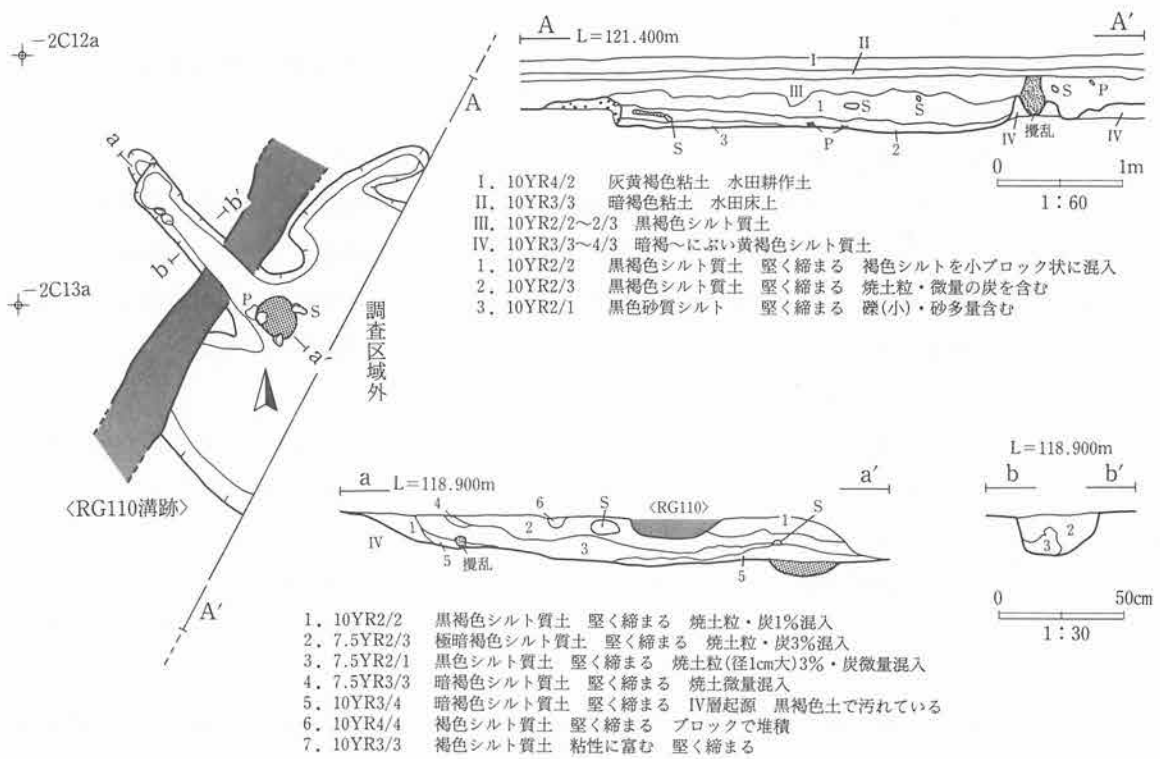
<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは北西壁のほぼ中央部に設置している。両袖部を含む本体部は崩壊していることから、構造等の詳細が不明である。現存する燃焼部は径 34×30 cm の楕円形状焼土が形成され、厚さは 5 cm である。

煙道部上半部は削平されている事から、掘り込み式か削り貫き式かは不明である。長さは 1.10 m で、燃焼部から緩やかな上り勾配で煙出し部に続いている。煙出し部の上部構造は削平され不明である。

<遺物> カマド煙道部内と埋土中位からロクロ使用の土師器坏・甕が出土している。880・881 は底部の切り離しが回転糸切りで、内外面ともロクロ痕の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a 群）である。880 の内外面は磨滅しており、881 は胎土に砂と金雲母を多く含んでいる。

882 はロクロ使用の土師器甕（A I 群）である。小型の器形で、口縁部は頸部からくの字状に外反して立ち



S=1/3

第221図 RA191竪穴住居跡・出土遺物

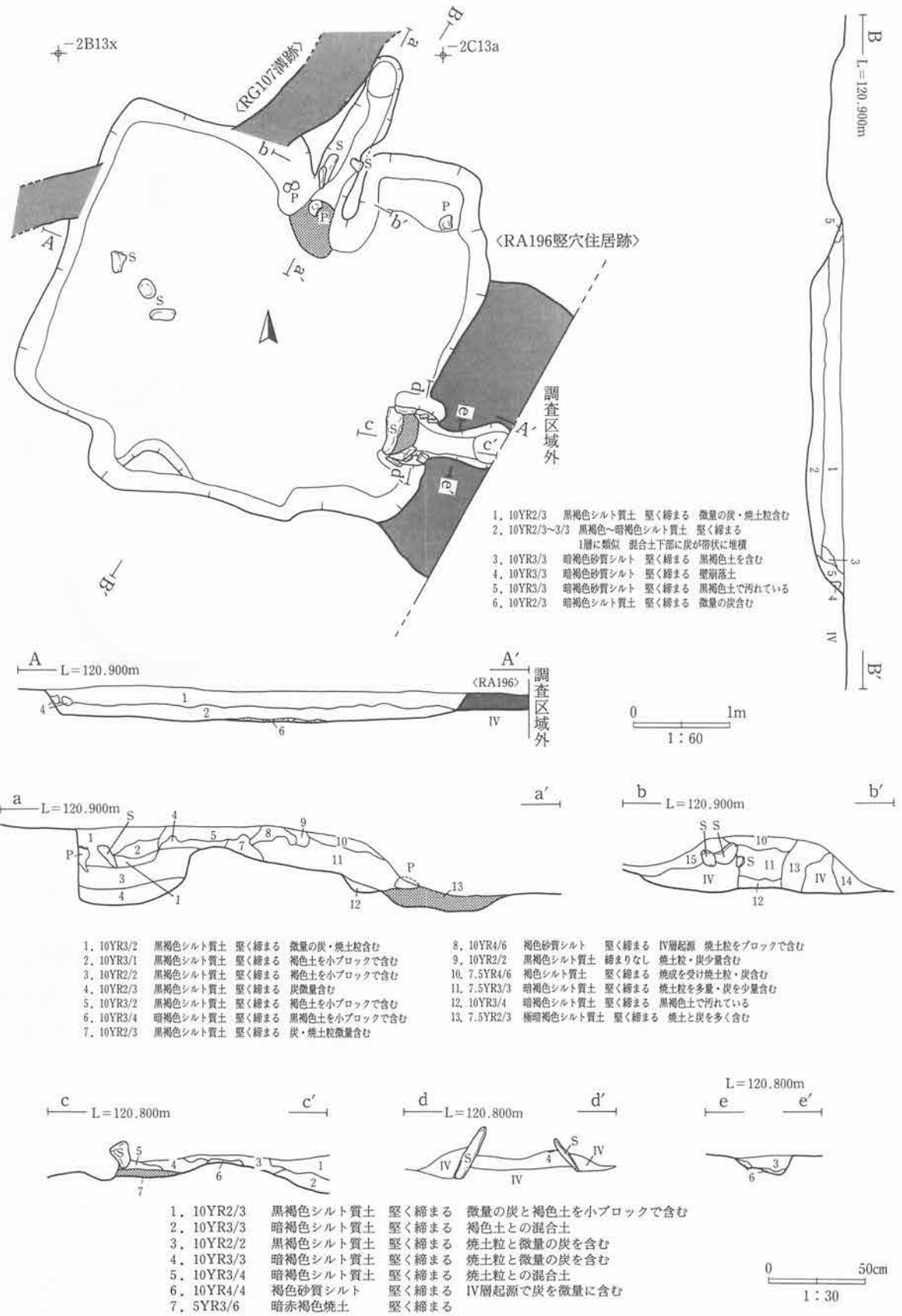
上がっている。体部内外面のロクロ成形痕が明瞭である。

<時期> 坏と甕の特徴からは平安時代に比定される。

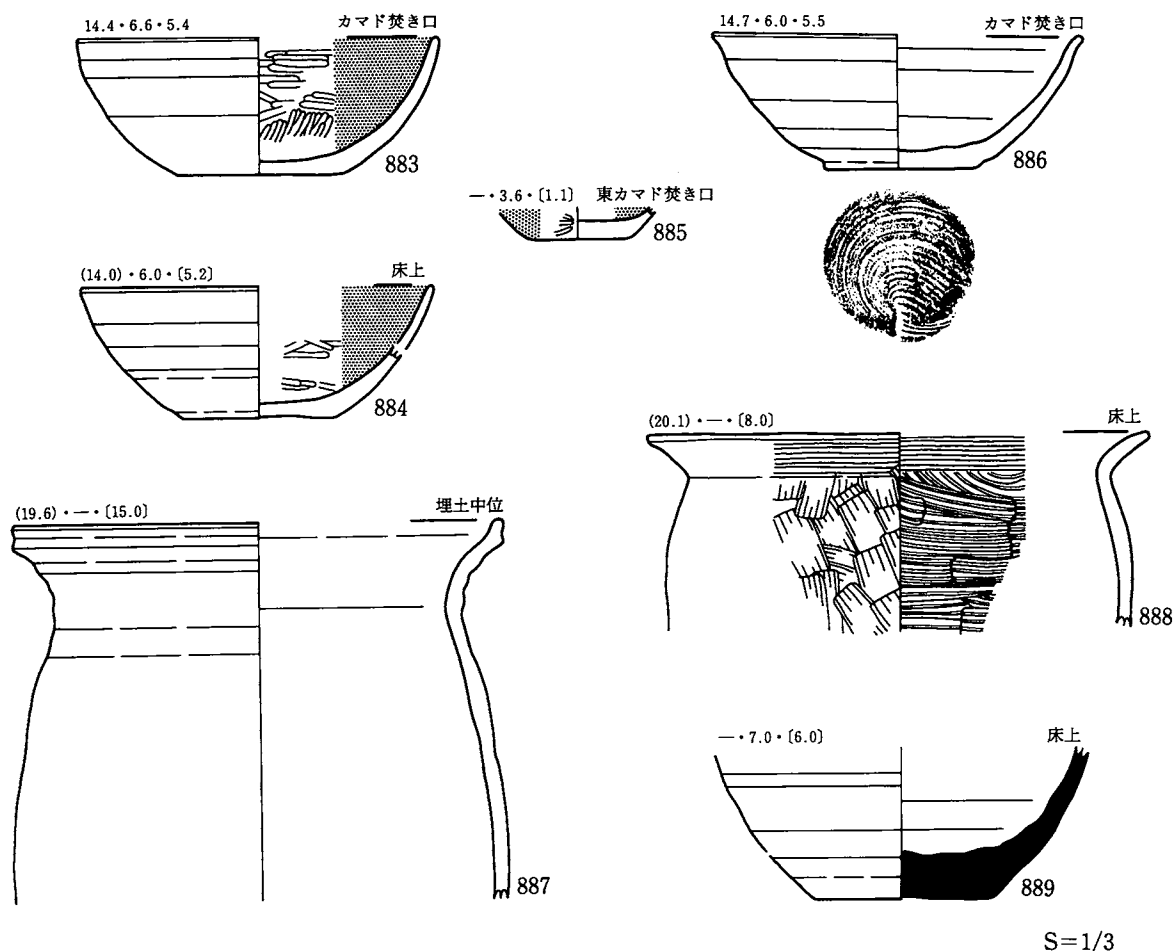
(高橋)

RA 194 竪穴住居跡 (第 222・223 図、写真図版 94・278)

<位置・重複関係> 北側調査区の一2 B~C区に亘って位置している。西側でRG 117 溝跡、東側でRA 196 竪穴住居跡と重複している。本遺構が溝に切られ、RA 196 竪穴住居跡を切っている事から新旧関係は(新) RG 117 溝跡→RA 194 竪穴住居跡→(旧) RA 196 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認し



第222図 RA194竪穴住居跡



第223図 RA194竪穴住居跡出土遺物

ている。

<平面形・規模> 平面形は南壁側に40cm前後の張り出し部を持ち、東側が歪みのある隅丸長方形を呈している。規模は3.90×3.10mである

<埋土> 埋土は6層に大別される。上層は焼土と炭を含む黒褐色シルト質土、下層が黒褐～暗褐色土シルト質土の混合土で下部に炭が帯状に堆積している。焼失家屋と思われる。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は東壁18cm、西壁26cm、南壁26cm、北壁33cmを測る。床は多少起伏があり、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁と北壁から検出している。①東カマドは東壁の南東コーナー寄り設置している。煙出し部の一部が調査区域外に延びている事から詳細が不明である。本体部は芯材に垂角礫を使用しているが、上部を被覆した粘土は流失している。また、燃焼部の上には構築材の垂角礫が散在する。燃焼部は径46×33cmの楕円形状焼土が形成され、厚さは4cmである。支脚は確認されていない。

煙道部上半部は削平されている事から、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。現存する長さは70cmで、燃焼部から下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は調査区域外に延びる事から詳細が不明である。

②北カマドは北壁の中央部東寄りに設置している。本体部の大部分は崩壊し、左袖部は溝跡で削平され、

右袖部下半部が現存する。右袖はIV層を削り出して造られている。燃焼部は径 60×46 cmの不整楕円形状に焼土が形成され、厚さは 8 cmである。支脚には土師器坏を伏せて転用している。

煙道部は長さが 1.04 m で、燃焼部から上り勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径 44×34 cm、深さ 39 cmの円形状土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

<遺物> 床上とカマド焼き口周辺部から土師器手捏ね土器、坏・甕、須恵器長頸瓶が出土している。885 は土師器手捏ね土器である。口縁部を欠損しているが、内外面はヘラミガキ調整後に黒色処理されている。

883・884 はロクロ使用の土師器坏で、口縁部は底部から内湾気味に立ち上がっている。内面は放射状のヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部は 884 が回転糸切り (A I a 群)、883 が切り離した後に再調整 (A I b 群) している。

886 は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a 群) で、底部の切り離しが回転糸切りである。口縁部は外傾して立ち上がっている。

887 は体部下半から底部を欠損したロクロ使用の土師器甕 (A I 群) である。口縁部は頸部から外反する。

888 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) で、底部を欠損している。口縁部は短く頸部からくの字状に外反し、ヨコナデ調整である。体部の器面調整は外面がヘラナデ、内面がハケメ調整を施している。

889 は須恵器長頸瓶の体部下半から底部の破片で、ロクロ調整痕が明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。

(高橋)

#### R A 195 竪穴住居跡 (第 224・225 図、写真図版 95・278)

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 B 区北側に位置している。西側で R A 222 竪穴住居跡、南側で R A 162 竪穴住居跡と重複している。本遺構が R A 162 竪穴住居跡に切られ、R A 222 竪穴住居跡を切っている事から新旧関係は (新) R A 162 竪穴住居跡→R A 195 竪穴住居跡→(旧) R A 222 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認している。

<平面形・規模> 遺構の半分以上が重複し削平されている事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は東辺 4.00 m、北辺 6.30 m を測り、北東コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は 2 層に大別される。1 層は焼土粒と炭を混入する暗褐色シルト、2 層が焼土ブロックと炭化物を多く含む暗褐色シルト質で構成されている。焼失家屋と思われる。<壁・床> 壁は床面から直に立ち上がり、壁高は東壁 23 cm、北壁 20 cm である。床はほぼ平坦で、締まっている。貼り床は確認されない。西寄りの床上には長さ 10~26 cm、幅 6~8 cmの石がまとまって散在している。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑 P 1 (直径 35 cm、深さ 7 cm) が検出している支柱穴かは不明である。

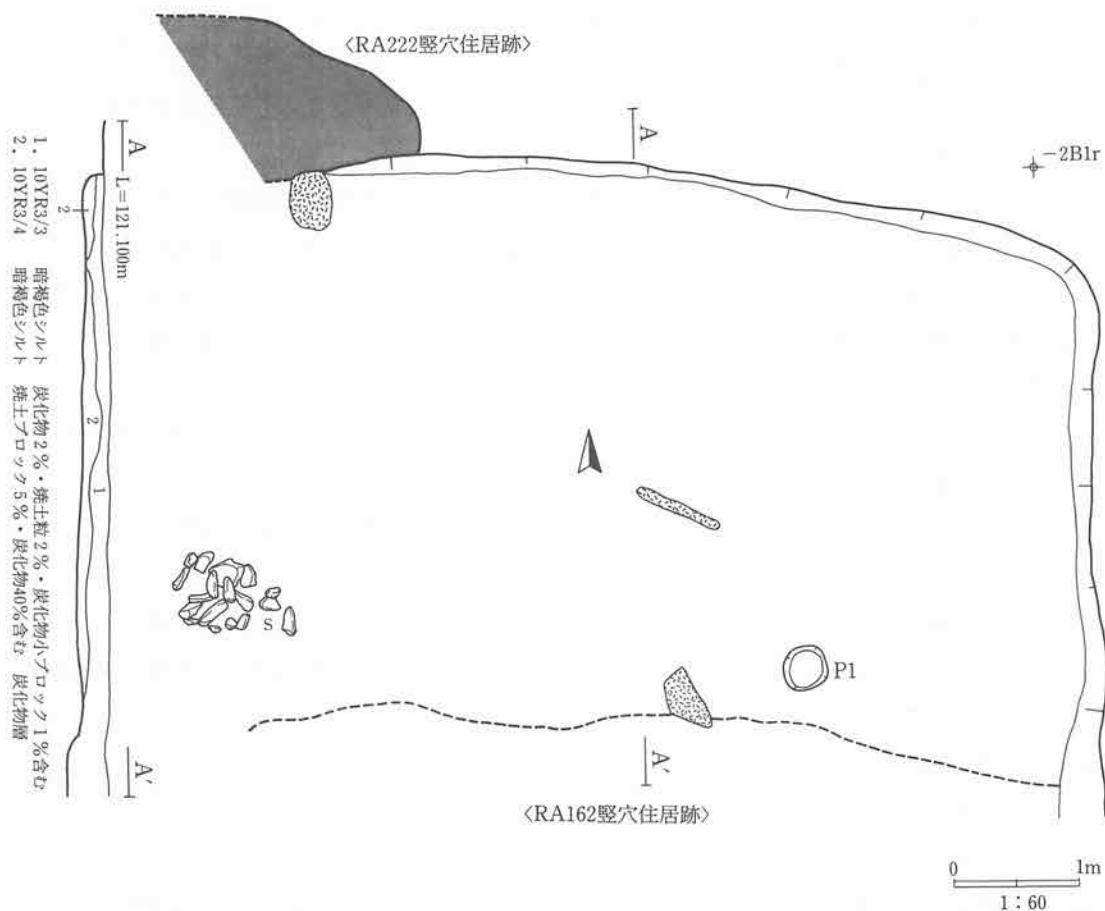
<カマド> カマドは検出されない。

<遺物> 埋土中~下位で土師器坏・高台坏・甕、須恵器甕、鉄製品が出土している。890 はロクロ使用の土師器坏で、口縁部は体部から外傾して立ち上がっている。内面は磨滅しているがヘラミガキ後に黒色処理を施し、底部の切り離しが回転糸切り (A I a 群) である。

891・892 は底部の切り離しが回転糸切りで、内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a 群) である。口縁部は外傾して立ち上がっている。

893・894 はロクロ使用の土師器高台坏である。893 は高台部、894 が体部から口縁部を欠損している。

895・896 はロクロ使用の土師器甕 (A I 群) で、体部上半から口縁部破片である。ロクロ成形痕が明瞭で、



第224図 RA195竪穴住居跡

口縁部は短く頸部から外反して立ち上がっている。

897・898 は須恵器甕の底部と体部破片である。897 は体部外面にヘラケズリ、898 の体部外面は平行叩き具痕、内面が放射状当て具痕である。

鉄製品は 899 の紡錘車が出土している。紡錘車は径 5.6 cm、厚さ 4 mm の円盤状で、糸巻き棒が現存長 13.2 cm を測る。900 は器種不明で、現存長 17.3 cm、幅 1.2 cm、厚さ 6 mm である。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。 (高橋)

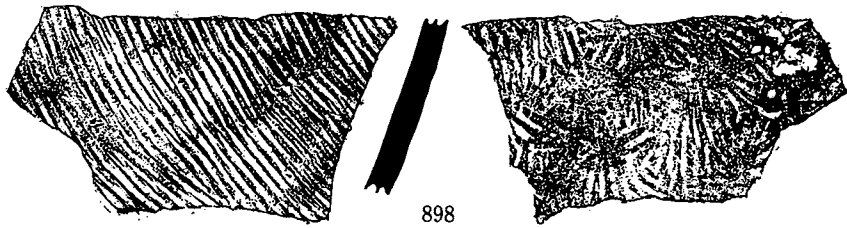
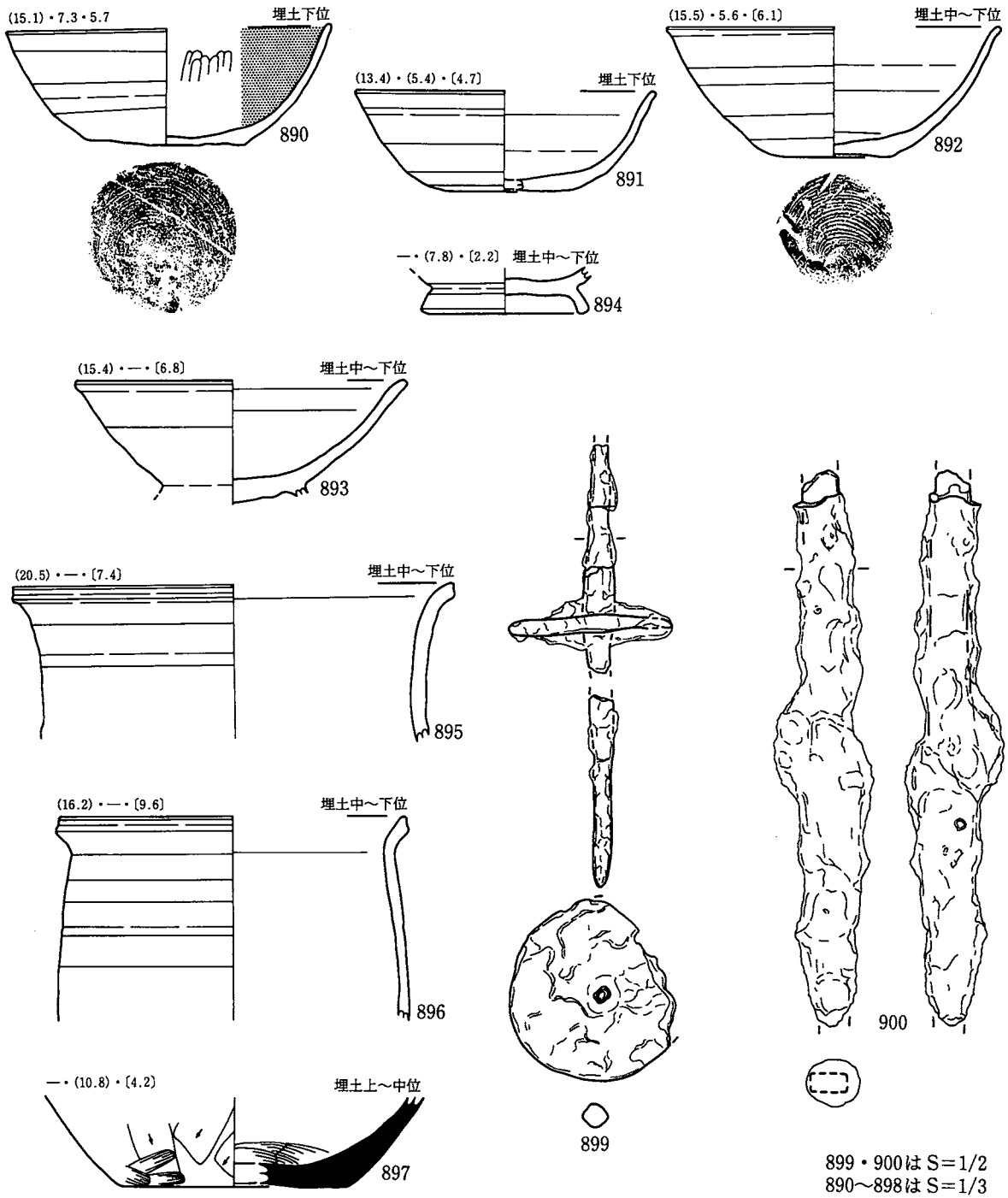
#### RA 196 竪穴住居跡 (第 226 図、写真図版 95)

<位置・重複関係> 北側調査区の - 2 B ~ C 区に亘って位置している。西側で RA 194 竪穴住居跡と重複している。本遺構が切られている事から新旧関係は (新) RA 194 竪穴住居跡 → (旧) RA 196 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で確認している。

<平面形・規模> 3 分の 2 以上が東側の調査区域外の道路下に延びる事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は南辺 66 cm、北辺 65 cm である。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成され、褐色土をブロック状に含み堅く締まる。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は南壁 12 cm、北壁 25 cm を測る。床はほぼ平坦で、締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑が 1 基検出している。P 1 は直径 32 × 25 cm、深さ 22 cm で、平面形が楕



第225図 RA195竪穴住居跡出土遺物



円形を呈している。支柱穴かは不明である。

<カマド> カマドは調査区域内では検出されない。

<遺物・時期> 遺物は出土していないが、周辺の  
 竪穴住居跡の形態等から平安時代に属すると思われる。

(高橋)

**RA 198 竪穴住居跡** (第 227~229 図、写真図版 279・280)

<位置・重複関係> 北側調査区の一-A~A区に亘って位置している。西側でRG 195 土坑、東側でRG 138 溝跡と重複している。本遺構が溝跡を切り、土坑に切られている事から新旧関係は(新)RG 195 土坑→RA 198 竪穴住居跡→(旧)RG 138 溝跡である。検出はIV層上面で確認している。

<平面形・規模> 西側と南側は調査区域外の道路下に延びる事から、平面形と規模の全容は不明である。また、西側の3分の2以上は第19次調査区である。確認された規模は東辺4.60m、西辺1.40m、北辺3.90mを測る。北東コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は黒褐色土を主体とする6層に大別される。上層には焼土粒と礫を含み、下層が褐色砂質土を混入している。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がっており、壁高は東壁26cm、北壁24cmである。床はほぼ平坦で、強く締まっている。黒褐色土の貼り床は厚さ5cmで施されている

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑が4基検出している。平面形は楕円形を呈し、埋土の状況と位置的に主

土坑No.	P 1	P 2	P 3	P 4
直径cm	44×38	30×27	42×76	57×50
深さcm	—	—	—	17

柱穴とはいえない。

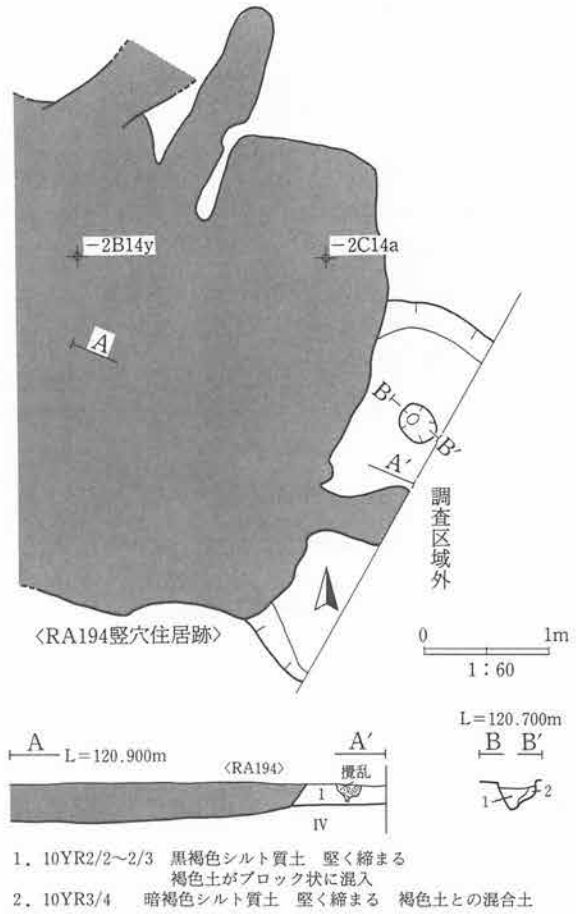
<カマド> 東壁の中央部南寄りに設置されている。左袖部と本体部の大部分を崩壊している。現存する右袖は長さ30cm、幅25cmを測り、上部には構造材と思われる亜角礫が散在している。燃烧部は径26×22cm、厚さ4cmの焼土が形成されている。

煙道部は一部で崩落している。径20×12cmの楕円形状に切り貫かれ、長さは1.48mである。燃烧部から緩やかな下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径45×42cm、深さ31cmの円形土坑が掘り込まれ、黒褐色土の埋土に上部構造材の礫が多く混入する。

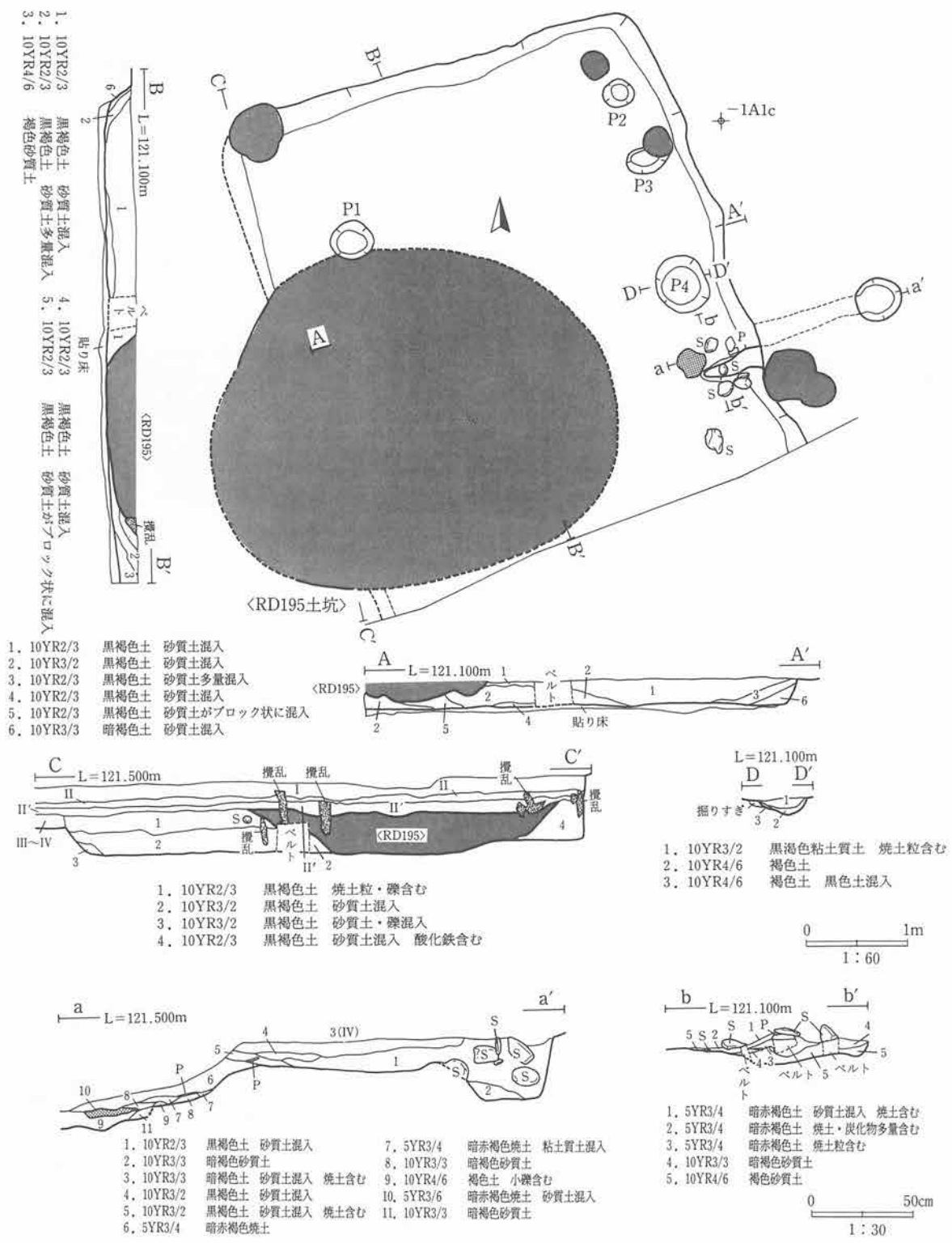
<遺物> カマド焚き口周辺と床上から土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。901~903はロクロ使用の土師器坏で、内面ヘラミガキ調整後に黒色処理(A I a群)を施している。901・902は底部の一部、903が口縁部を欠損する。口縁部は体部から外傾して立ち上がり、底部の切り離しが回転糸切りである。

904~906は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器(A II群)である。底部の切り離しは回転糸切りが905・906で、切り離した後に再調整された904がある。

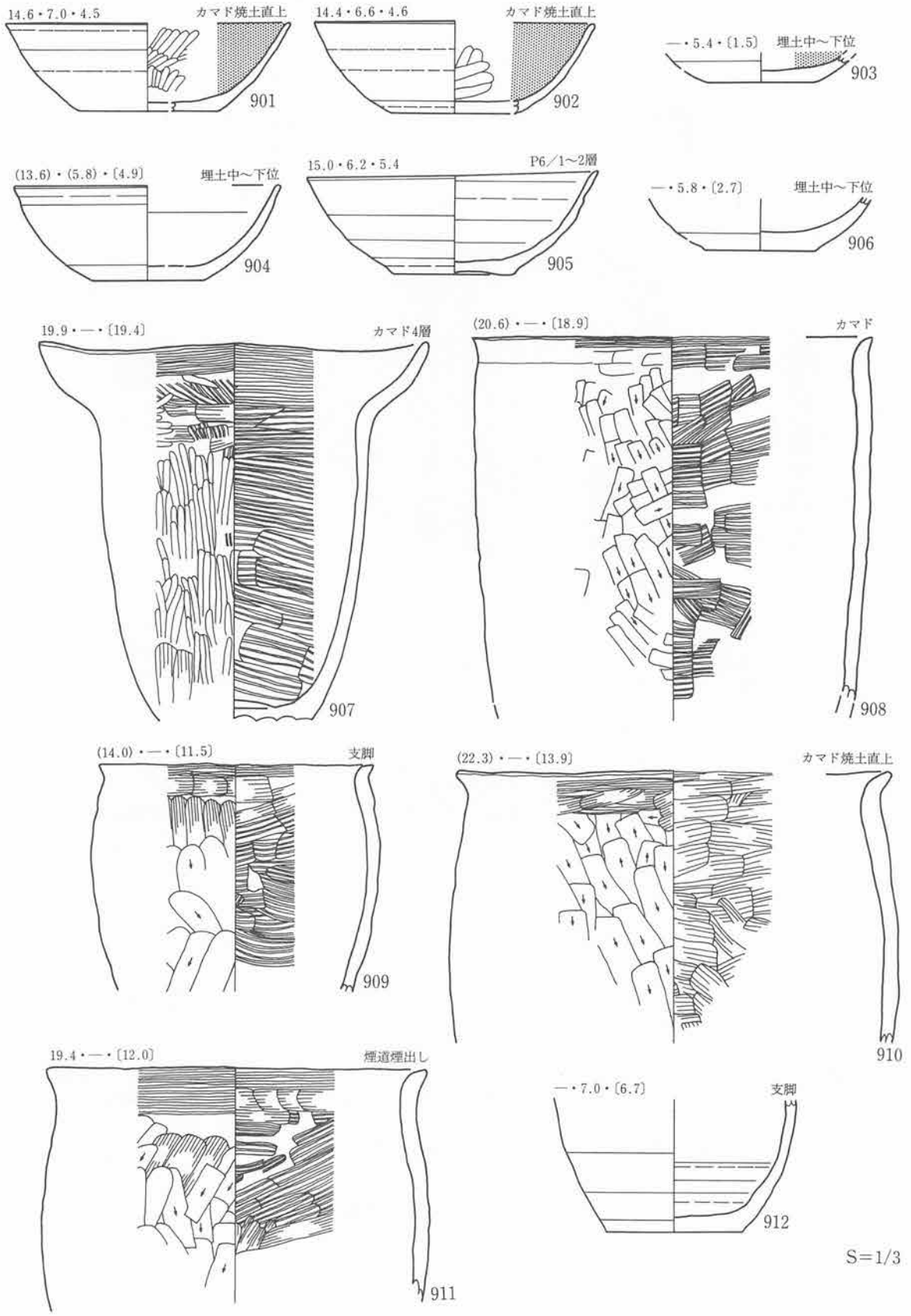
907~911はロクロ不使用の土師器甕(A II群)で、いずれも底部を欠損している。口縁部は頸部から外反



第226図 RA196竪穴住居跡

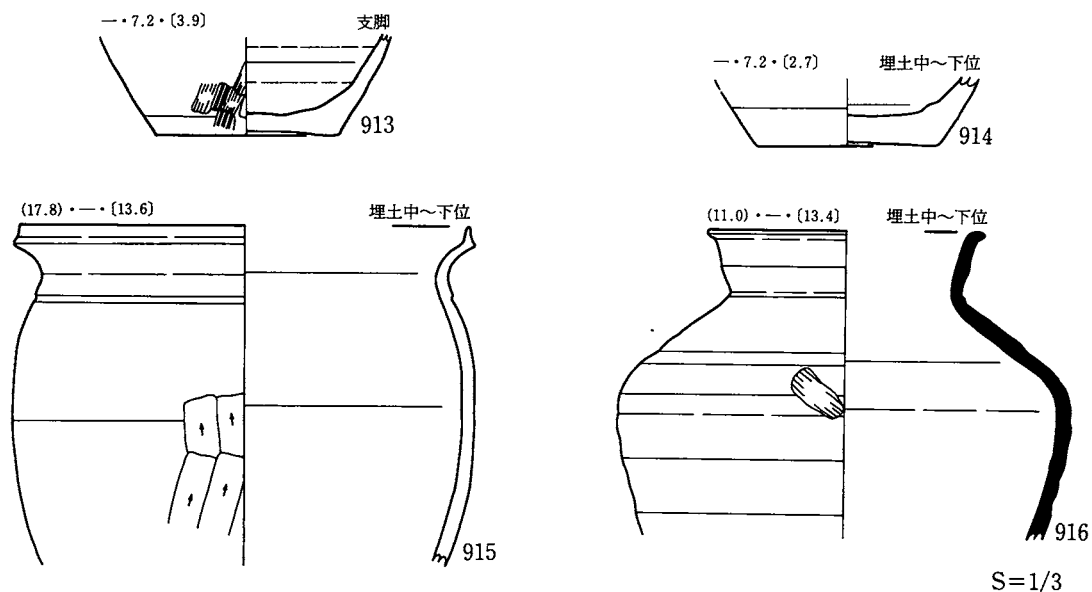


第227図 RA198竪穴住居跡



S=1/3

第228図 RA198竪穴住居跡出土遺物(1)



第229図 RA198竪穴住居跡出土遺物(2)

し端部上半で外傾する 907、直立に立ち上がる 908、外反する 909・911 がある。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、ヘラナデ調整等が見られる。内面はハケメとヘラナデ調整を施している。907・910 の胎土には金雲母を多く含み、911 は体部外面に炭化物が付着している。

912～915 はロクロ使用の土師器甕（A I 群）で、912・913 は支脚として使用されている。915 は底部を欠損しており、口縁部は頸部からくの字状に外反し、体部下半に縦方向にヘラケズリ調整が施されている。

916 は底部を欠損した須恵器甕である。口縁部は 3 分の 1 現存しており、ロクロ成形痕が明瞭である。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。 (高橋)

#### RA 212 竪穴住居跡 (第 230 図、写真図版 280)

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 B 区北側に位置し、東側で RA 213 竪穴住居跡と重複している。本遺構が切られている事から新旧関係は (新) RA 213 竪穴住居跡→ (旧) RA 212 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で確認している。

<平面形・規模> 半分以上が北側の調査区域外に延びる事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は西辺 1.40 m、南辺 3.25 m で、南西コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 埋土は褐色シルトを主体とする 5 層に大別され、炭化物と焼土粒を含み堅く締まっている。

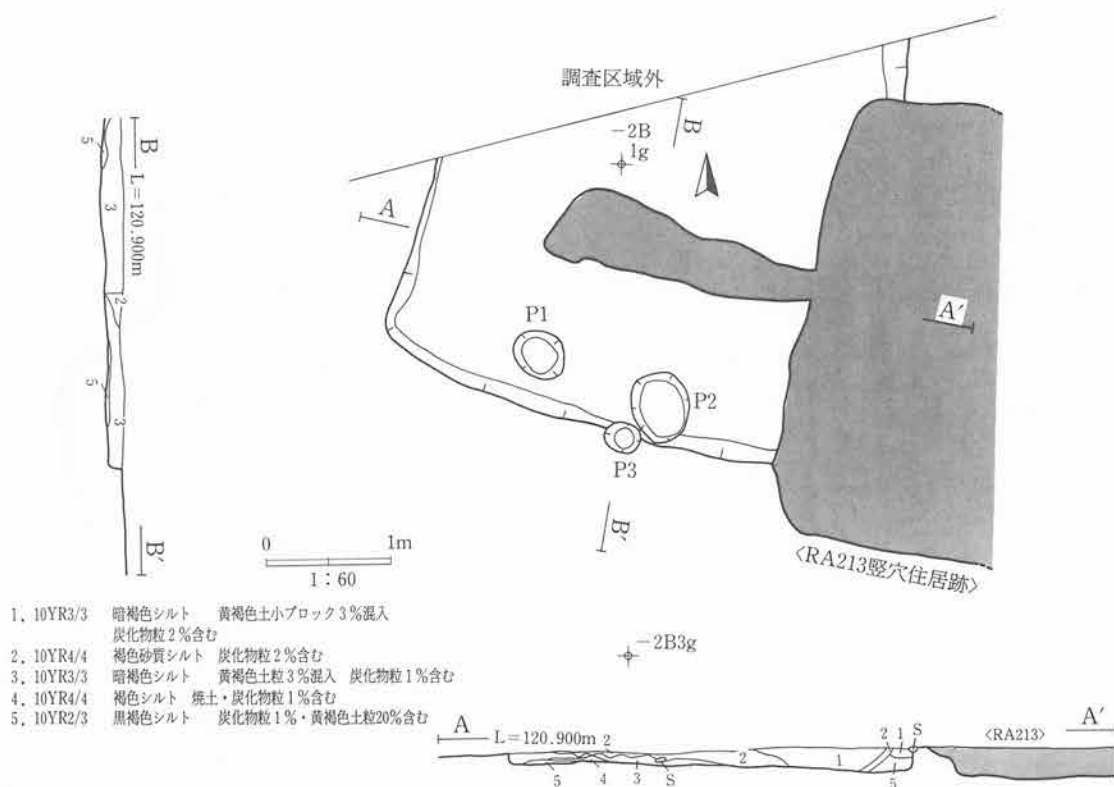
<壁・床> 壁は床面から垂直気味に立ち上がり、壁高は西壁 12 cm、南壁 11 cm を測る。床は平坦で、やや堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑が 3 基検出している。平面形は円形ないし楕円形で、位置的に支柱穴とはいえない。

土坑No	P 1	P 2	P 3
直径cm	45×37	56×47	30×24
深さcm	12	24	27

<カマド> カマドは調査区域内では検出されない。

<遺物・時期> 遺物は出土していないが、周辺の竪穴住居跡の形態等から平安時代に属すると思われる。 (高橋)



第230図 RA212竪穴住居跡

RA 213 竪穴住居跡 (第 231～233 図、写真図版 96・280・281)

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 B 区北側に位置している。東側で RG 077 溝跡、西側で RA 212 竪穴住居跡と重複している。本遺構が溝跡に切られ、RA 212 竪穴住居跡を切っている事から新旧関係は(新) RG 077 溝跡→RA 213 竪穴住居跡→(旧) RA 212 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認している。

<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は 3.75×3.20 m である。

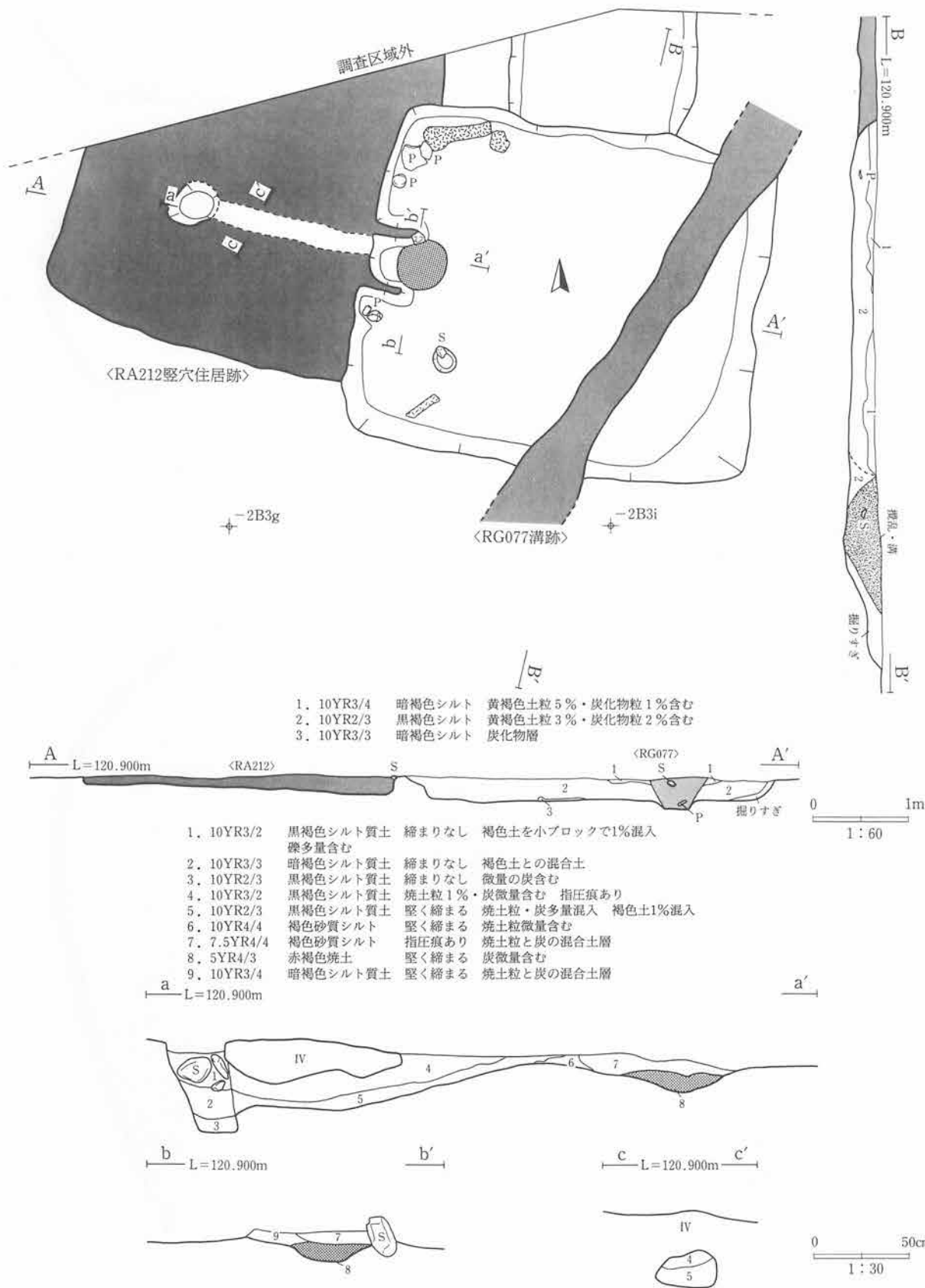
<埋土> 埋土は上層が黄褐色土をブロック状に含む暗褐色シルト、中～下層が炭化物を含む黒褐色シルトで構成されている。最下層に炭化物層がある。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は東壁 22 cm、西壁 5 cm、南壁 27 cm、北壁 3 cm を測る。床は平坦で、強く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 柱穴状土坑が 1 基 (直径 29×23 cm、深さ 7 cm) 検出している。

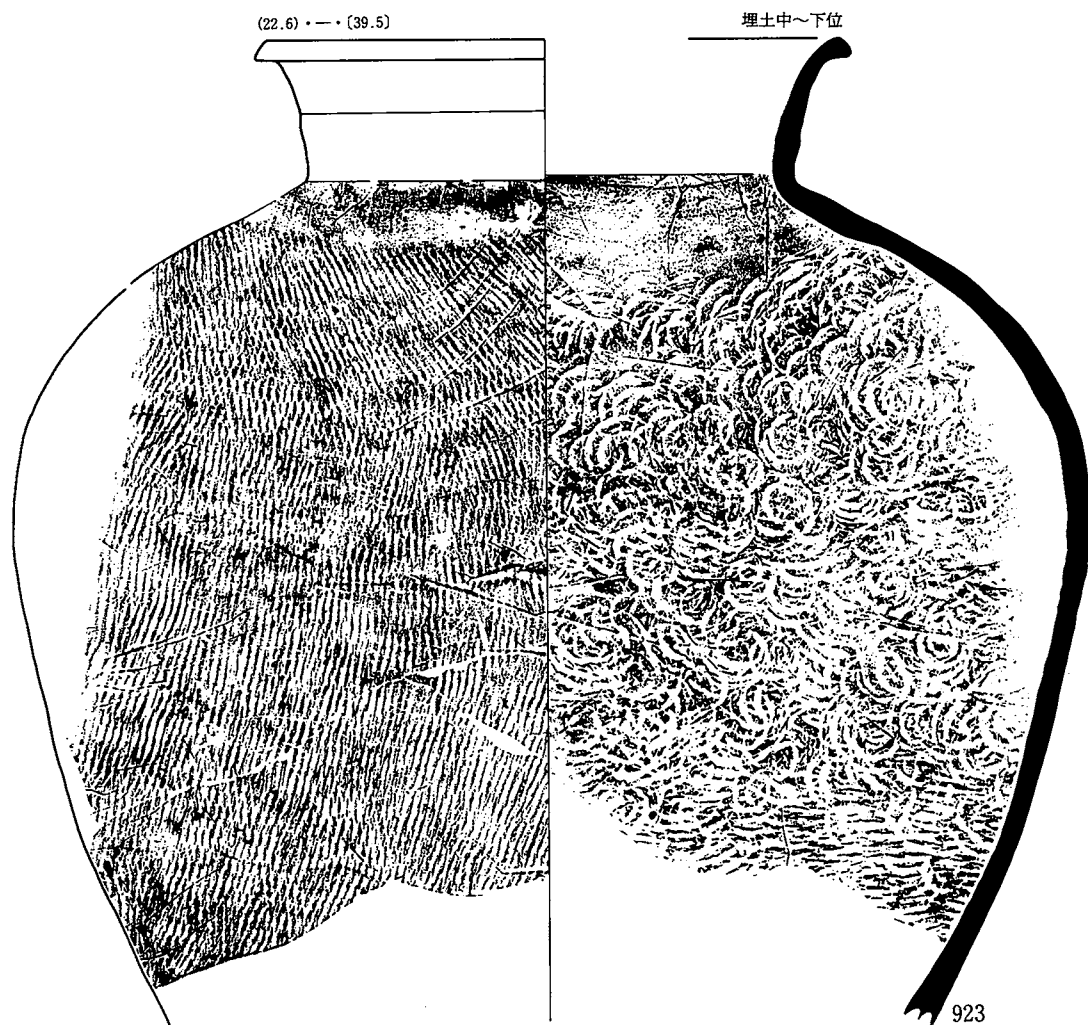
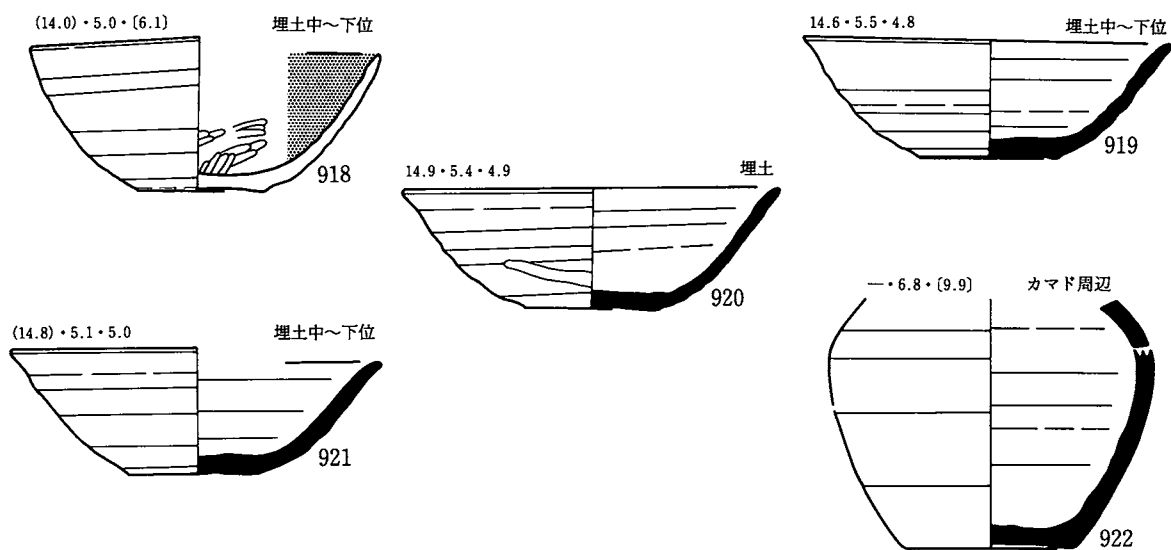
<カマド> カマドは西壁の中央部に設置している。両袖部を含む本体部の大部分は崩壊し、右袖部の芯材 (長さ 22 cm、幅 12 cm) と燃焼部が現存している。燃焼部は径 52×49 cm の円形状に焼土が形成され、厚さは 9 cm である。支脚は検出されない。

煙道部は径 33×17 cm の楕円形状に削り貫かれ、下がり勾配で煙出し部に続いている。長さは 2.18 m である。煙出し部は径 56×44 cm、深さ 48 cm の楕円形状土坑が掘り込まれ、黒色土の埋土に上部構造材の礫が多く混入している。

<遺物> 埋土中～下位とカマド周辺から土師器坏・甕、須恵器坏・長頸瓶・甕、土製品が出土している。918 は口縁部を 3 分の 2 現存するロクロ使用の土師器坏である。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理(A I a

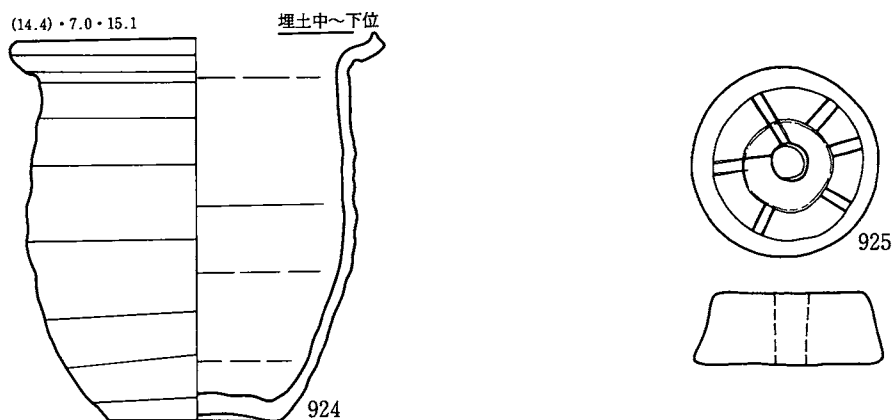


第231図 RA213竪穴住居跡



S=1/3  
923は S=1/5

第232図 RA213竪穴住居跡出土遺物(1)



925は S=1/2  
924は S=1/3

第233図 RA213竪穴住居跡出土遺物(2)

群)を施し、底部の切り離しが回転糸切りである。

919～921は須恵器坏で、口縁部は底部から外傾して立ち上がっている。焼成は良好で、底部の切り離しが回転糸切り(B II a群)である。

924はロクロ使用の土師器甕(A I群)である。小型の器形でロクロ成形痕が明瞭で、口縁部は短く頸部からくの字状に外反する。底部の切り離しは回転糸切りである。

922はロクロ成形が明瞭な須恵器長頸瓶で、肩部から口縁部を欠損している。底部の切り離しは回転糸切りである。

923は底部を欠損した須恵器大甕である。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口唇部が角張っている。体部外面は平行叩き具痕、内面が放射状の当て具痕である。

925は床上から出土した土製の紡錘車である。円錐台形状を呈しており、中央に径4mmの穿孔があり、径5cm、厚さ1.9cmを測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。(高橋)

#### RA 214 竪穴住居跡 (第 234～236 図、写真図版 97・282)

<位置・重複関係> 北側調査区の一2B区北側に位置している。東側でRG 140溝跡、北側でRA 231竪穴住居跡と重複している。本遺構が溝跡に切られ、RA 231竪穴住居跡を切っている事から新旧関係は(新)RG 140溝跡→RA 231竪穴住居跡→(旧)RA 214竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認している。

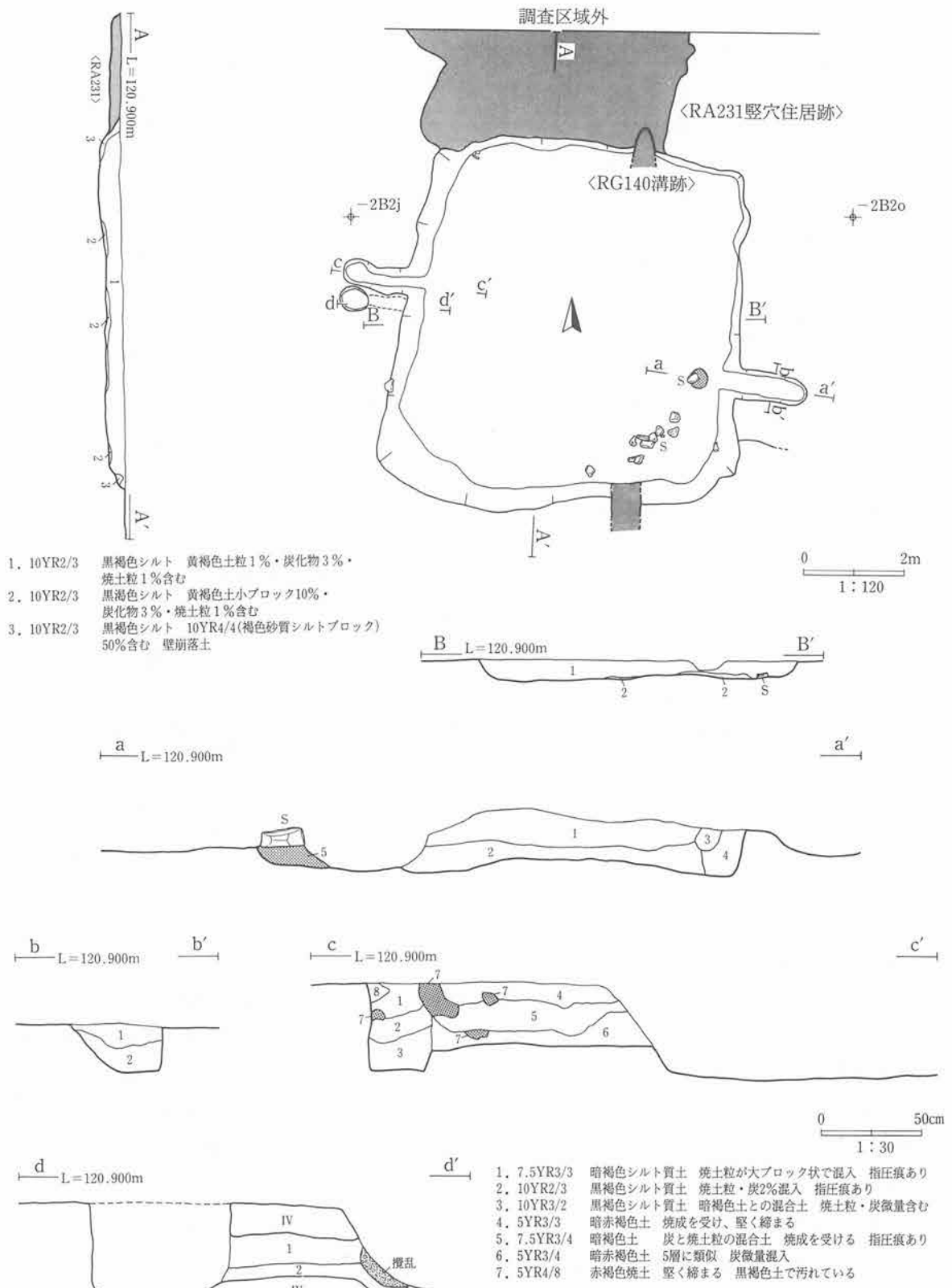
<平面形・規模> 平面形は南東コーナー側が歪みのある隅丸長方形を呈し、規模は6.70×6.10mである。

<埋土> 埋土は黒褐色シルトを主体とする3層に大別される。1層は炭化物と焼土粒を含み、2層が褐色土のブロックと炭を混入し、3層が壁際に堆積をする。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は東壁32cm、西壁30cm、南壁32cm、北壁42cmを測る。床は中央部が高まるものの平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

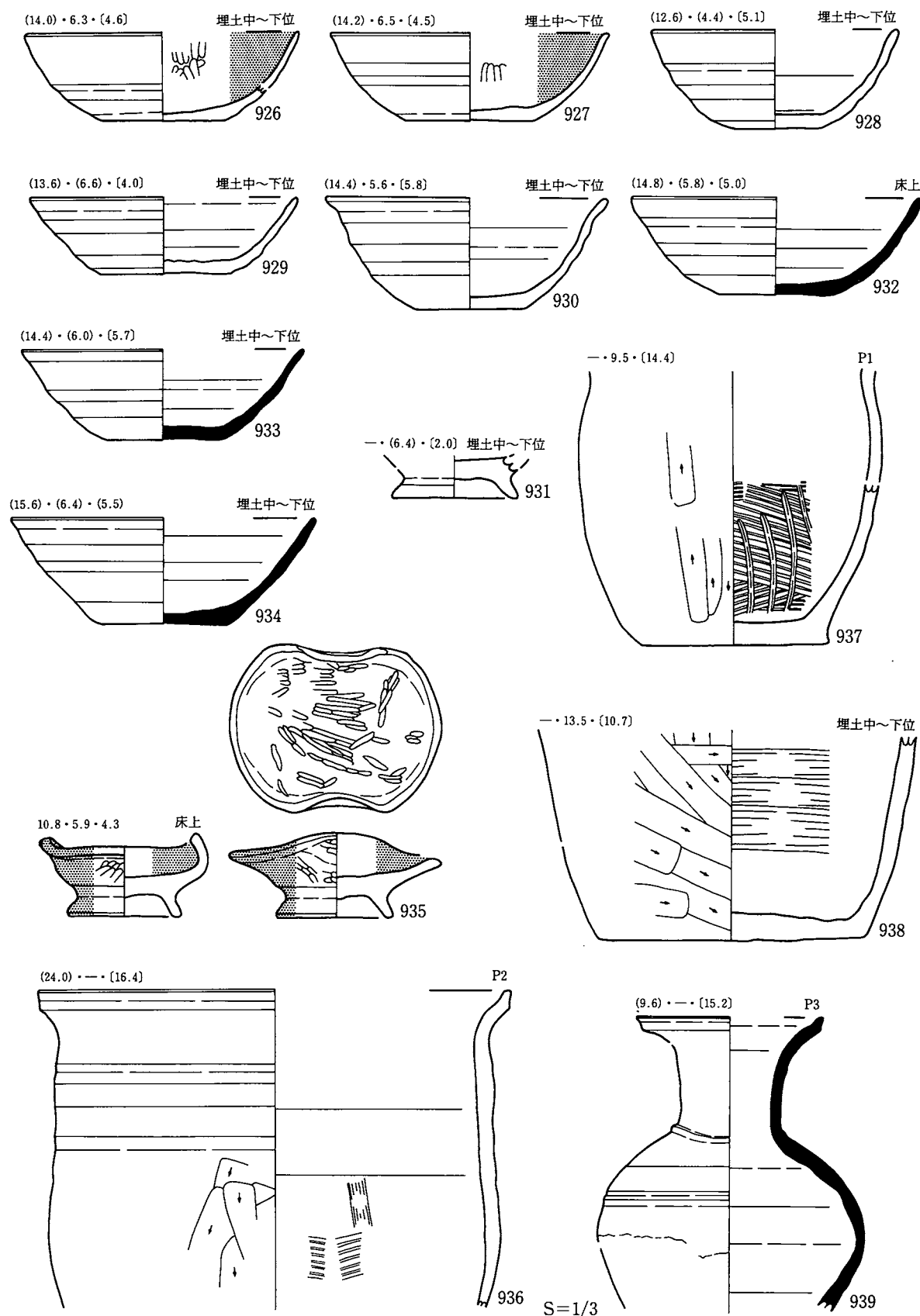
<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁に2基と西壁に1基検出している。①東カマドは東壁の中央部南寄りに設置している。本体部は削平されており、僅かに燃焼部が現存するだけである。燃焼部は径40×38cmの円形状に焼土が形成され、厚さは9cmである。支脚は確認されていない。

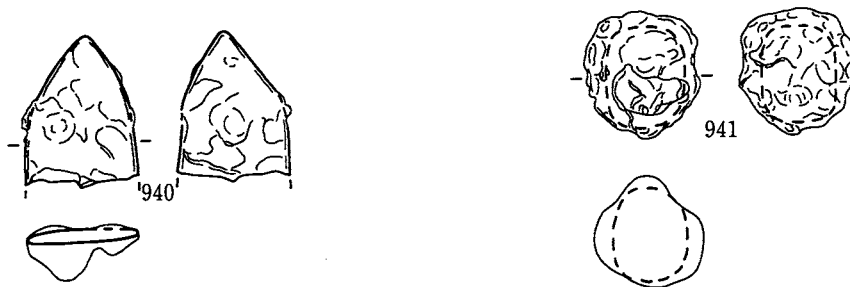




第234図 RA214堅穴住居跡



第235图 RA214竖穴住居跡出土遺物(1)



S=1/2

第236図 RA214竪穴住居跡出土遺物(2)

煙道部上半部は削平されている事から、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。現存する長さは1.40 mで、燃焼部から56 cm上がり、そこから緩やかな下がり勾配で煙出し部に続いている。

②西カマド（新）は西壁の中央部に設置されている。本体部と煙道部上半部は削平され、燃焼部の焼土は検出されない。現存する煙道部は長さ1.36 mで、緩やかな下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径52×48 cm、深さ43 cmの楕円形状土坑が掘りこまれている。

③西北カマド（旧）は西壁の中央部の（新）カマドの南側に設置されている。煙道部だけが現存しているだけである。煙道部は径15 cmの円形状に割り貫かれ、長さが1.30 mである。燃焼部側から緩やかな下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径56×50 cm、深さ48 cmの楕円形状土坑が掘り込まれている。上部構造は削平され不明である。

<遺物> 埋土中～下位と床上から土師器坏・高台坏・耳皿・甕、須恵器坏・長頸瓶、鉄製品が出土している。926・927はロクロ使用の土師器坏である。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施し、底部の切り離し後に再調整（A I b群）されている。

928～930は内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a群）である。底部の切り離しは回転糸切りで、930は器形の歪みが大きい。931は高台坏の高台破片で磨滅している。

932～934は須恵器坏（B II a群）である。焼成は良好で、口縁部は底部から外傾して立ち上がり、底部の切り離しが回転糸切りである。

935はほぼ完形のロクロ使用の土師器耳皿で、内外面は細いヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。胎土には金雲母を多く含む。

936はロクロ使用の土師器甕（A I群）で、底部を欠損している。口縁部は短く頸部から外反し、体部外面に縦方向のヘラケズリ調整がある。

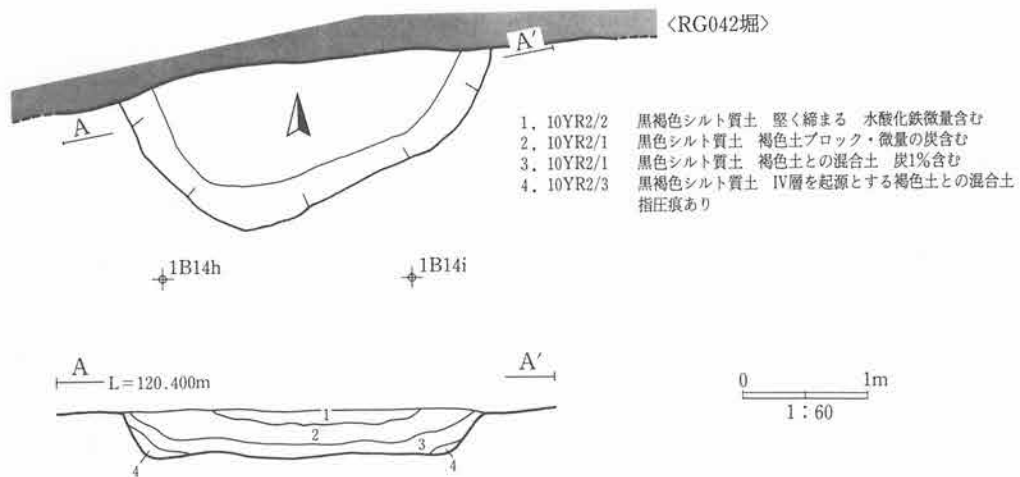
937・938はロクロ不使用の土師器甕（A II群）で、口縁部を欠損している。器面調整は体部外面がヘラケズリ、内面がハケメとヘラナデ調整である。937の内面にはヘラ書きの沈線が見られる。

939は底部を欠損した須恵器長頸瓶で、ロクロ成形痕が明瞭である。器形は全体に歪んでいる。

940は刀子の先端部破片で、現存長4.1 cm、幅3 cm、厚さ2 mmである。941は床上から出土したボール状の器種不明の破片で、径3.5×3.1 cm、厚さ3 mmを測る。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。

（高橋）



R A 216 竪穴住居跡 (第 237 図、写真図版 97)

<位置・重複関係> 東側調査区の南端部 1 B 区に位置している。南南西側 6.7 m には奈良時代の R A 118 竪穴住居跡が近接する。北側で中世の R G 042 堀と重複し、本遺構が切られている事から新旧関係は (新) R G 042 堀 → (旧) R A 216 竪穴住居跡である。IV 層上～中位で検出されている。

<平面形・規模> 平面形・規模の詳細は、遺構の大部分を R G 042 堀に切られている事から不明である。検出された規模は西辺 90 cm、南辺 2.25 m を測り、南西コーナーは隅丸を呈している。

<埋土> 黒色シルトを主体とする 4 層に大別される。上位は水酸化鉄を微量に含む褐色土シルトで構成され、中位が炭と褐色土ブロックを含み、下位は黒色シルト質土と褐色土の混合土層である。壁際には褐色土の壁崩落土が堆積している。自然の埋没と思われる。<壁・床> 床面から急傾斜で立ち上がり、壁高は西壁 38 cm、南壁 34 cm である。床は小起伏が見られ堅く締まっている。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> 不明であるが、周辺遺構の形態から西壁ないし北壁に設置していたと思われる。

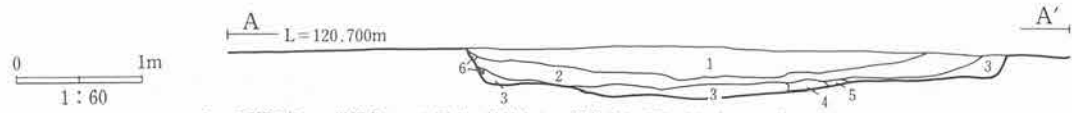
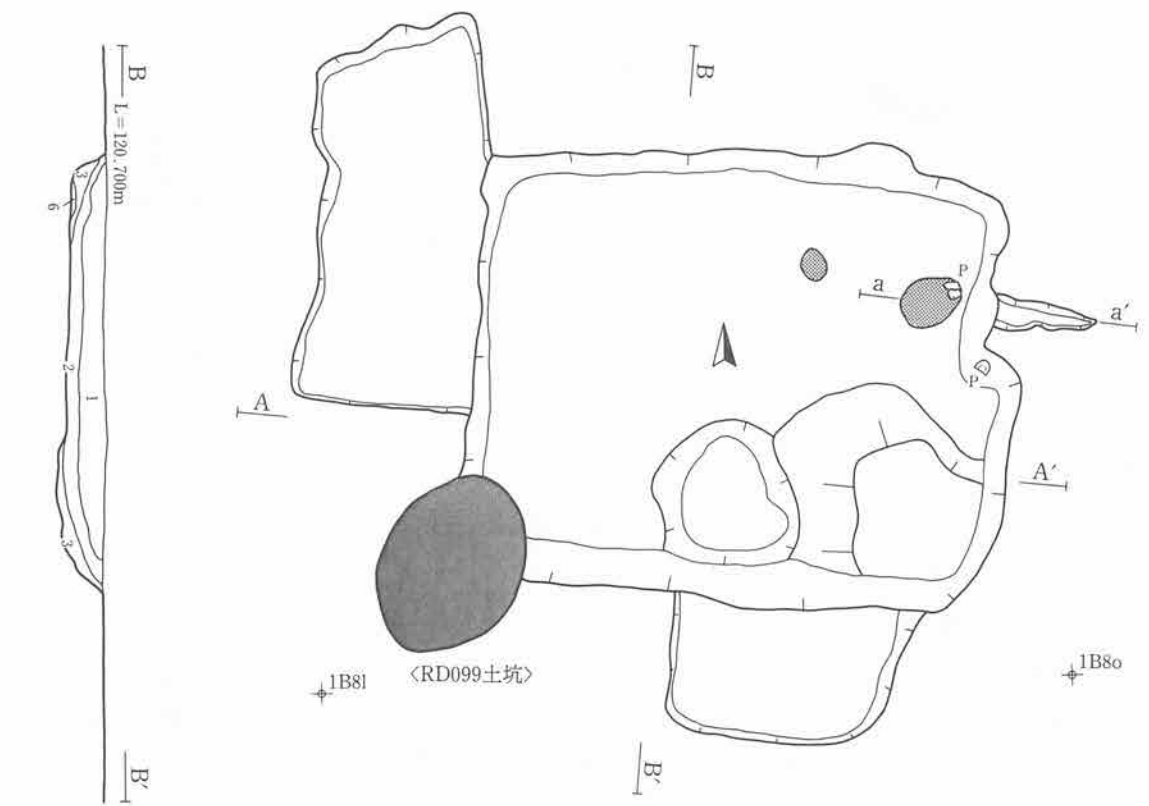
<遺物・時期> 埋土中から土師器・甕を少量出土しているが、破片のため図面掲載はしていない。甕はロクロ使用 (A I・A II 群) で、甕はロクロ不使用の体部破片で、外面にハケメ調整を施している。時期は甕の特徴から、平安時代の 9 世紀前半に比定される。 (高橋)

R A 217 竪穴住居跡 (第 238 図、写真図版 98・283)

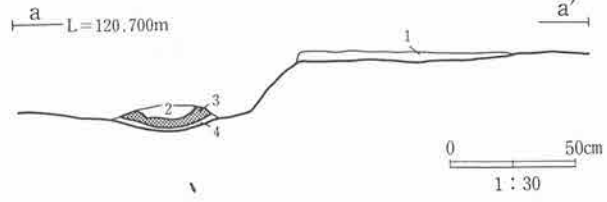
<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区中央部に位置している。東西コーナー側で R D 099 土坑と重複している。本遺構が土坑に切られている事から新旧関係は (新) R D 099 土坑 → (旧) R A 217 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で黒褐色土の広がり確認している。

<平面形・規模> 平面形は南壁側に張り出し部 (1.70 × 1.00 m) がある隅丸長方形を呈し、規模は 4.10 × 3.10 m である。

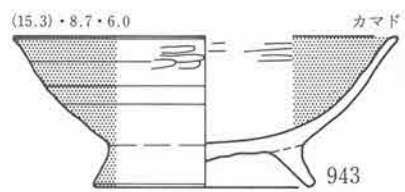
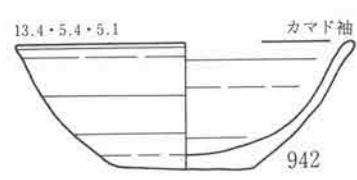
<埋土> 埋土は 6 層に大別される。上層は小ブロック状の褐色土と炭・焼土粒を含み、中位は十和田 a 降下火山灰を混入する黒褐色シルト質土、下層が褐色土の混合土の黒褐色シルト質土で構成されている。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 壁は床面から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁 20 cm、西壁



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)ブロック状に5%混入  
炭・焼土粒微量含む 指圧痕あり
2. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 鈍い黄橙色火山灰(10YR6/4)30%混入  
炭微量含む
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)ブロック状に20%混入  
炭・焼土粒微量含む
4. 10YR4/6 褐色粘土質シルト 粘性あり 強く締まる
5. 10YR4/6 褐色粘土質シルト 粘性あり 強く締まる 黒褐色土(10YR2/3)10%混入
6. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性ややあり 黒褐色土(10YR2/3)20%混入 指圧痕あり

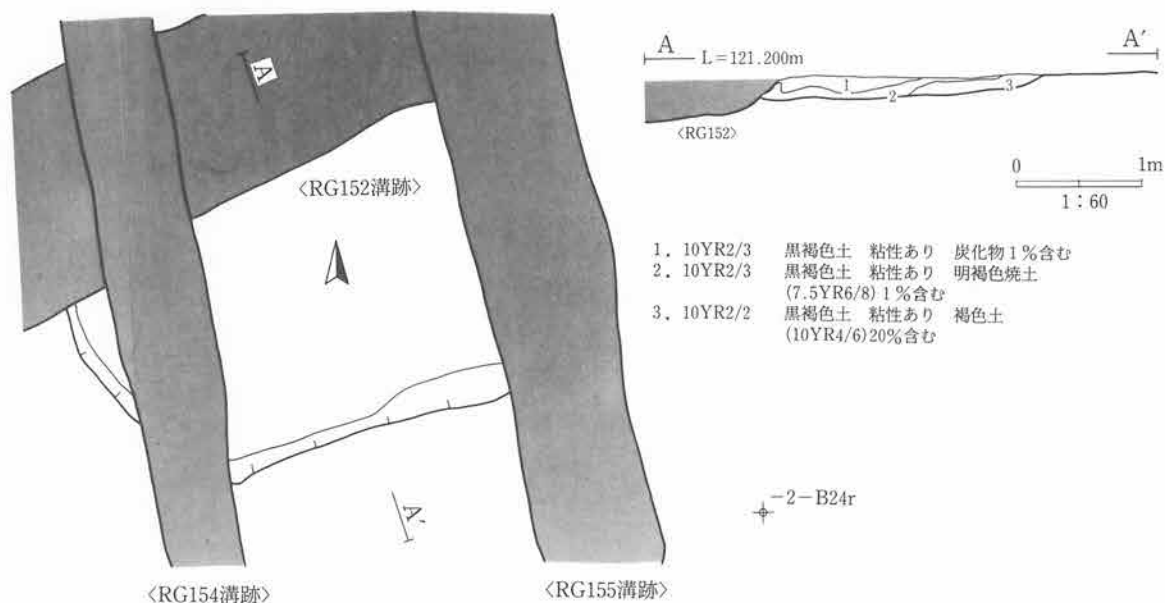


1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 強く締まり、  
焼土粒と炭を微量に含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 赤褐色土  
との混合土
3. 5YR3/6 暗褐色焼土
4. 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性ややあり  
強く締まっている



S=1/3

第238図 RA217竪穴住居跡・出土遺物



第239図 RA220竪穴住居跡

29 cm、南壁 34 cm、北壁 27 cmを測る。床は凹凸があり、全体に堅く締まっている。貼り床は確認されない。南東コーナー側は床から緩やかなスロープ状になっており、出入口の可能性もある。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは東壁の北東コーナー寄りに設置している。両袖部を含む本体部と煙道部の大部分が削平されている事から、全容は不明である。現存する燃焼部は径 50×38 cmの楕円形状焼土が形成されており、厚さが 4 cmである。支脚は検出されない。煙道部と煙出し部は削平され詳細が不明である。

<遺物> カマド袖部周辺から土師器坏、須恵器甕が少量出土している。942 は底部の切り離しが回転糸切りで、内外面ともロクロ痕の調整を持たないいわゆる赤焼き土器（A II a 群）である。口縁部は体部から外傾して立ち上がり、胎土に砂と石の混入が多い。

943 はロクロ使用の土師器高台坏で、内外面に黒色処理を施している。口縁部は台部から外傾して立ち上がり、口唇部は丸味をもっている。

944・945 は須恵器甕（B 群）の体部破片で、体部内外面は平行叩き具痕である

<時期> 出土した坏と甕の特徴から平安時代に比定される。

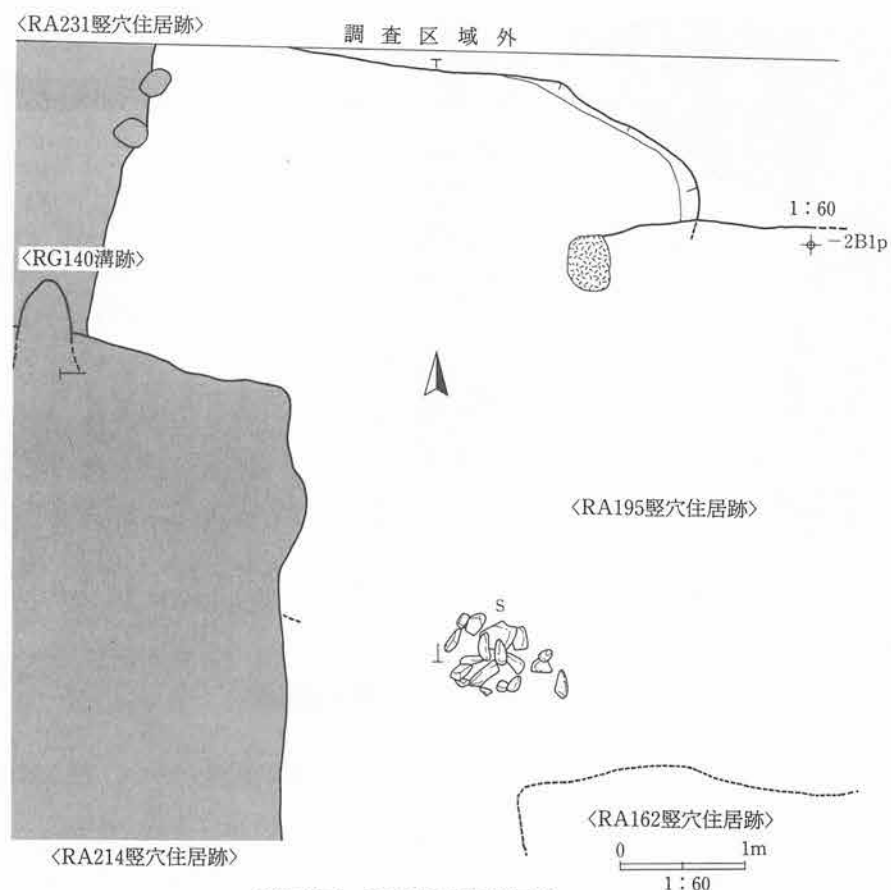
（高橋）

#### RA 220 竪穴住居跡（第 239 図、写真図版 99）

<位置・重複関係> 北側調査区の - 2 - B 区南側に位置している。北側で RG 152 溝跡、西側で RG 154 溝跡、東側で RG 155 溝跡と重複している。本遺構が 3 条の溝跡に切られている事から新旧関係は（新）RG 154 溝跡・RG 155 溝跡→RG 152 溝跡→（旧）RA 220 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で確認している。

<平面形・規模> 半分以上が溝跡と重複し切られている事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は西辺 1.10 m、南辺 2.30 m を測る。

<埋土> 埋土は黒褐色土の 3 層で構成され、炭と焼土粒を含み堅く締まっている。<壁・床> 現存する



第240図 RA222竪穴住居跡

壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は西壁 11 cm、南壁 10 cm を測る。床は平坦で、やや堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは検出されない。

<遺物・時期> 遺物は出土していないが、周辺の竪穴住居跡の形態等から平安時代に属すると思われる。

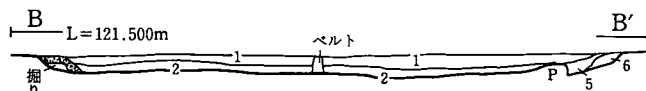
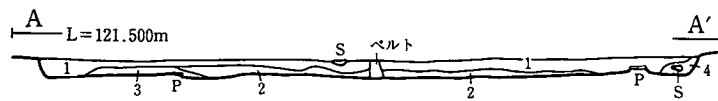
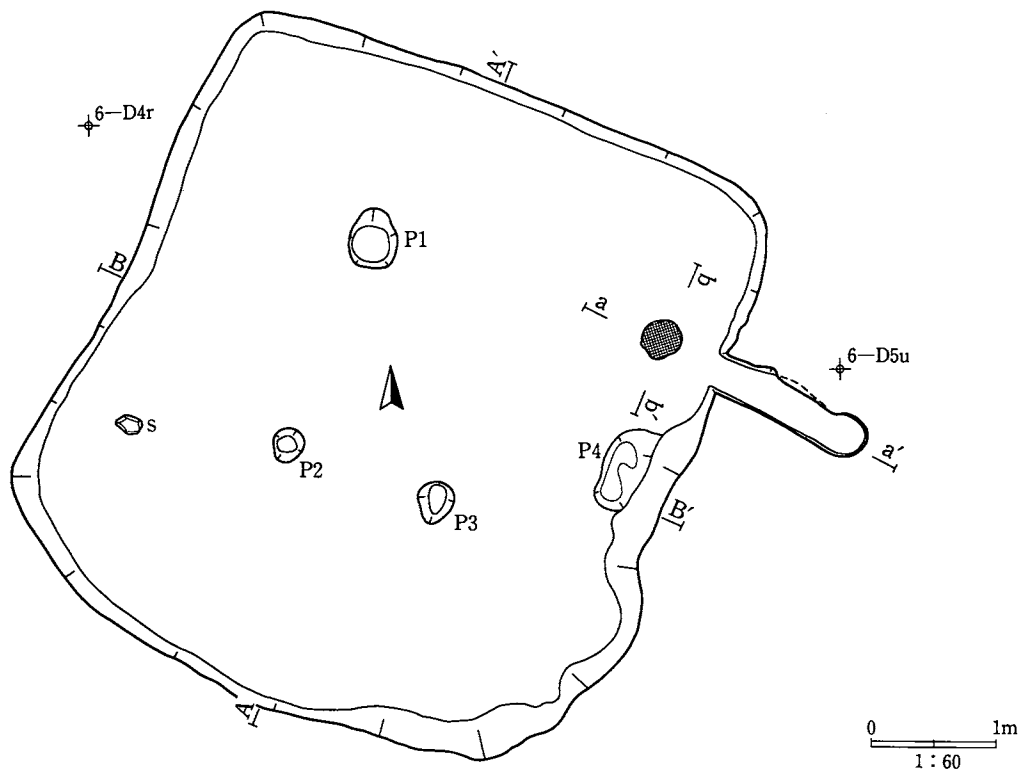
(高橋)

#### RA 222 竪穴住居跡 (第 240 図)

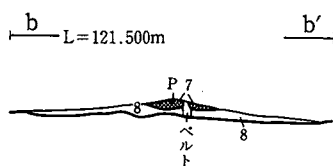
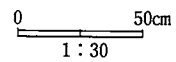
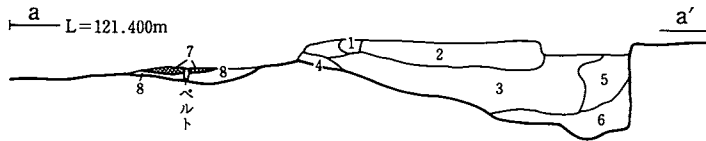
<位置・重複関係> 北側調査区の - 2 B 区北側に位置している。東側で RA 195 竪穴住居跡、西側で RG 140 溝跡・RA 231・214 竪穴住居跡と重複している。本遺構が 3 棟竪穴住居跡に切られている事から新旧関係は (新) RG 140 溝跡→RA 195・214 竪穴住居跡→RA 231 竪穴住居跡→(旧) RA 222 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で確認している。

<平面形・規模> 半分以上が溝跡と重複し切られている事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は北辺 3.20 m である。

<埋土> 土層観察用のベルトは設定していないが、埋土は炭を含む暗褐色シルトを主体としている。<壁・床> 現存する壁は床面から直に立ち上がっており、壁高は 16 cm 前後を測る。床はほぼ平坦で、堅く締まっ



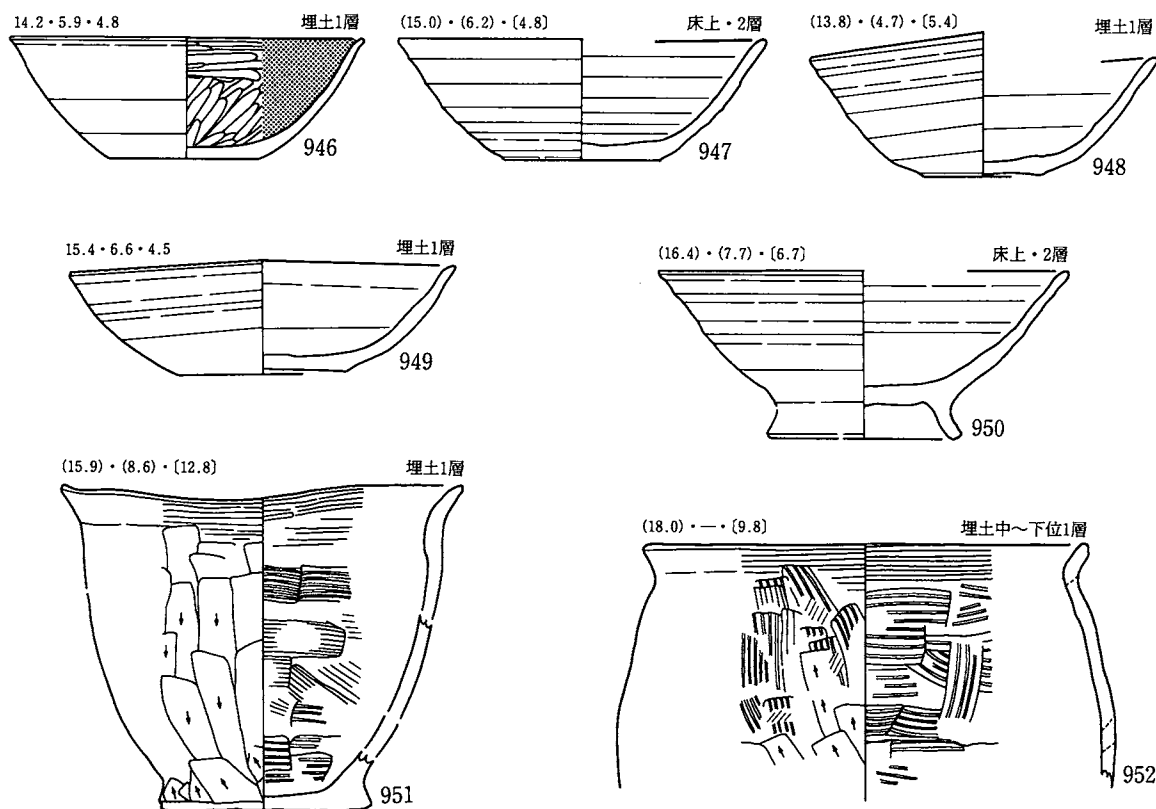
- 1. 2.5YR3/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 灰白色火山灰ブロック微量混入 砂質シルト粒多量・炭含む
- 2. 2.5YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土粘土質ブロック多量混入 炭微量含む
- 3. 10YR1.7/1 黒色土 粘性ややあり
- 4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒多量含む
- 5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 焼土粒・炭多量含む
- 6. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 壁崩落土



- 1. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 焼土多量含む
- 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 焼土含む
- 3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 焼土粒・炭粒・黄褐色土粒含む
- 4. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 締まりなし 砂質シルト多量含む
- 5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし
- 6. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土粒多量含む
- 7. 5YR3/3 暗赤褐色焼土粒 粘性あり
- 8. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性あり 砂質シルト少量含む

第241図 RA224竪穴住居跡





S=1/3

第242図 RA224竪穴住居跡出土遺物

ている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。

<カマド> カマドは検出されない。

<遺物・時期> 遺物は出土していない。時期は周辺の竪穴住居跡の形態や重複関係から平安時代に属すると思われる。

(高橋)

RA 224 竪穴住居跡 (第 241・242 図、写真図版 100・283)

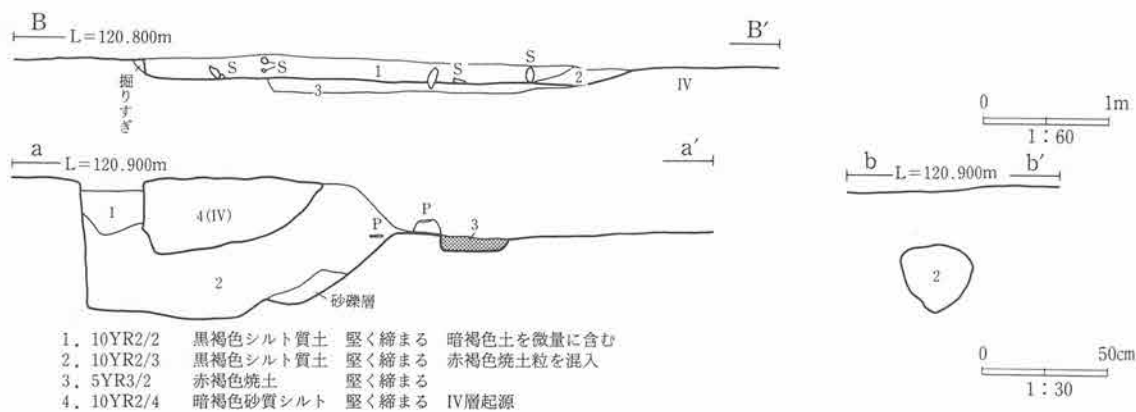
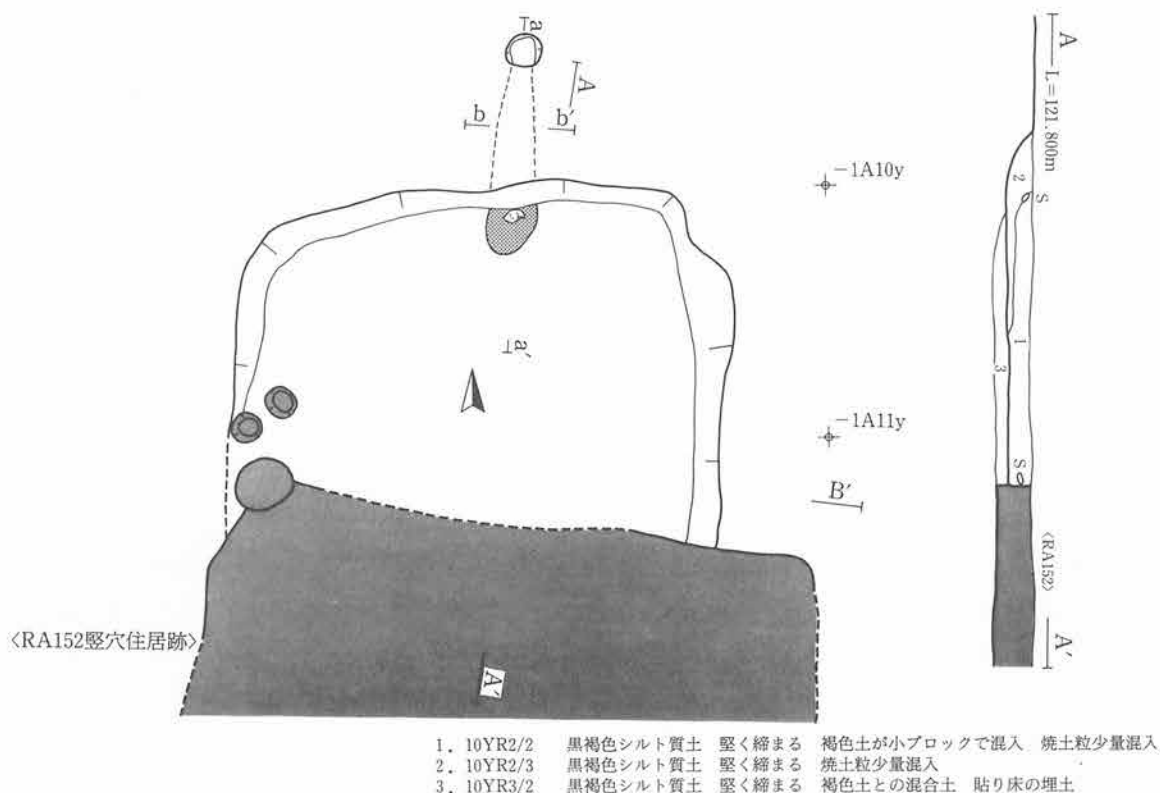
<位置・重複関係> 調査区南西側の 6-D 区に位置する。重複関係はない。<平面形・規模> 南壁が胴張りの隅丸方形を呈する。規模は 5.10×4.80 m である。検出面は IV 層である。

<埋土> 6 層に細分される。上層は炭や灰白色火山灰ブロックを少量含む黒褐色土、下層は粘土質の黄褐色土ブロックを多量に含む黒褐色土である。<壁・床> 壁はやや内湾気味に立ち上がる。壁高は 15 cm である。床はほぼ平坦である。貼り床はない。

<柱穴> 床面から P 1～P 3 の 3 基が検出された。<他の施設> カマドの南脇壁際から土坑 P 4 が検出された。

<カマド> 東壁北寄りに位置する。袖や天井は失われている。燃焼部は 32×32 cm の円形に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で 4 cm である。煙道は長さ 1.3 m、幅 32

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4
直径cm	47×39	35×29	27×25	70×35
深さcm	17	18	24	19



第243図 RA226竪穴住居跡

cmで、壁はオーバーハングしている。割り貫き式かどうかは、上面が削られていることから不明である。底部は燃焼部から徐々に下がり勾配で、煙出しにいたってさらに下がる。埋土は焼土や炭粒を含む黒褐色土や黒色土である。

〈遺物〉 埋土からロクロ使用の土師器杯とロクロ不使用の土師器甕、いわゆる赤焼き土器が出土した。947は赤焼き土器、950は土師器杯で、いずれも床上や埋土2層から出土した破片を接合したものである。そのほか埋土から内黒の土師器杯946、土師器甕951・952が、赤焼き土器の杯948・949が出土した。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

(金子)

R A 226 竪穴住居跡 (第 243 図、写真図版 101)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 A 区東側に位置している。南側で R A 152 竪穴住居跡と重複している。本遺構が切られている事から新旧関係は (新) R A 226 竪穴住居跡→(旧) R A 152 竪穴住居跡である。検出は IV 層上面で確認している。

<平面形・規模> 南側半分以上が重複し切られている事から、平面形と規模の全容は不明である。規模は東辺 2.60 m、西辺 1.30 m、北辺 3.00 m を測る。確認された規模から一辺が 3.50 m 前後の隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色土シルト質土で構成され、2 層に細分される。焼土粒と褐色土を小ブロックで混入している。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は東壁 16 cm、西壁 15 cm、北壁 19 cm である。床はほぼ平坦で、締まっている。黒褐色シルト質土の厚さ 8~12 cm の貼り床が施されている。

<柱穴・他の施設> 柱穴は検出されない。

<カマド> カマドは北壁の中央部に設置している。両袖部と本体部は崩壊し、燃焼部が現存している。燃焼部は楕円形状の焼土が形成され、厚さは 6 cm である。支脚は土師器甕の底部破片を転用している。

煙道部は径 29×27 cm の不整楕円形状に削り貫かれ、長さが 1.20 m である。燃焼部から下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径 28×26 cm、深さ 52 cm の円形状土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

<遺物・時期> 細破片のために図面掲載はしていないが、埋土下位からロクロ使用の土師器坏(A II 群)、須恵器甕の口縁部と体部破片が僅かに出土している。時期は出土した遺物から平安時代に属する。(高橋)

R A 227 竪穴住居跡 (第 244~246 図、写真図版 101・283・284)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 B 区に位置する。西側で中世の R B 008 掘立柱建物跡と重複し、遺構が切られている事から新旧関係は、(新) R B 008 掘立柱建物跡→(旧) R A 227 竪穴住居跡である。検出は III 層上面で黒褐色土の広がりによって確認している。

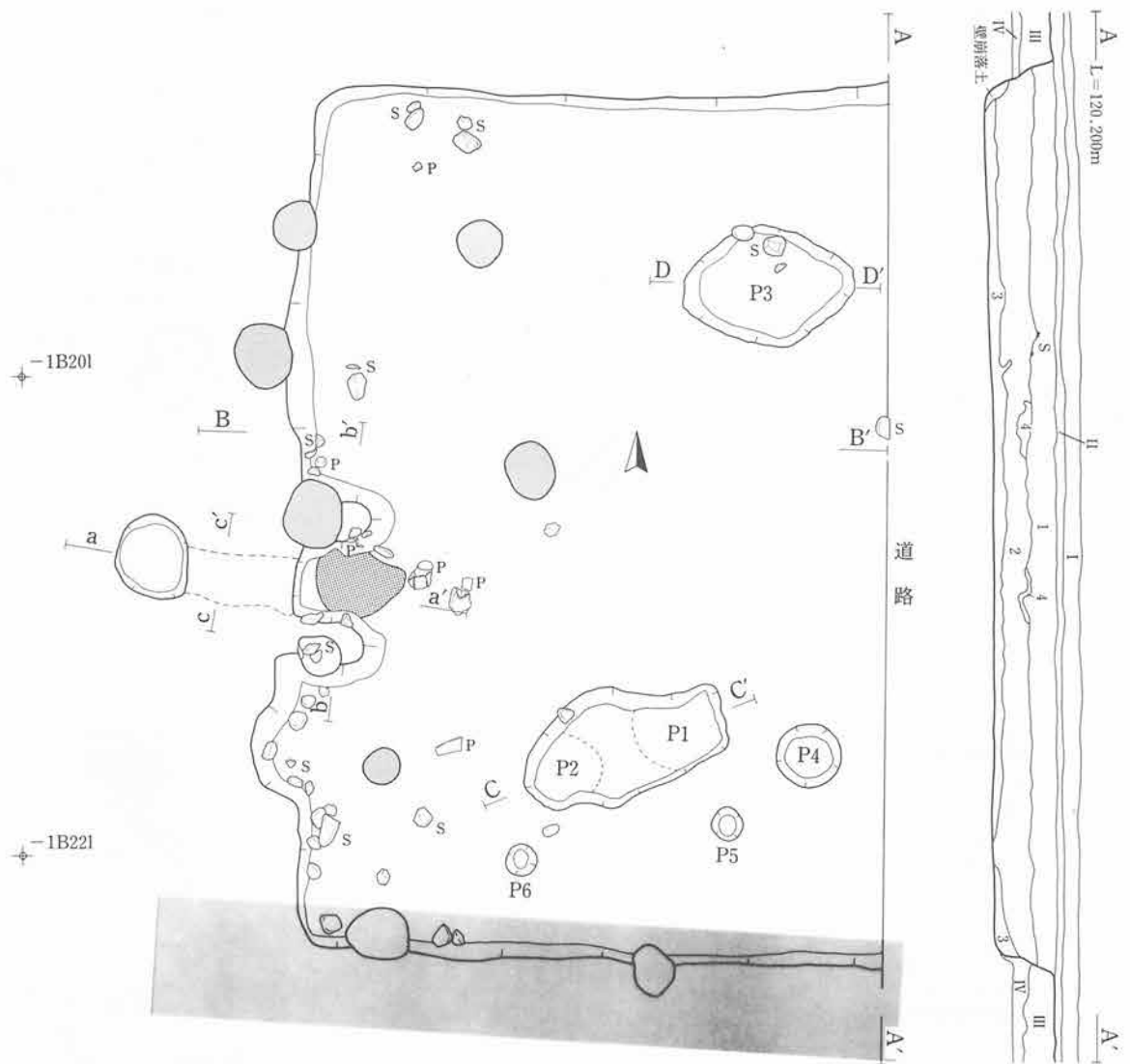
<平面形・規模> 遺構の東側を道路に切られ、南壁側を除く大部分は隣接する第 19 次調査区側に延びている。検出された部分から平面形は隅丸方形を呈すると思われる。確認された規模は西辺 6.88 m、南辺 4.70 m、北辺 4.58 m である。

<埋土> 黒褐色土シルトを主体とする 5 層で構成されている。上位の 1 層は炭化物と焼土粒を微量に含み、1 層と 2 層の間に十和田 a 火山灰が帯状に堆積している。下位は黒褐色土シルト質土に褐色土がブロック状に混入する。自然堆積の様相を示している。<壁・床> 壁の上半部は崩落しているが、床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は西壁 33 cm、南壁 26 cm、北壁 23 cm を測る。床面はほぼ平坦で堅く締まっている。西壁付近には径 8~10 cm 大の垂円礫と垂角礫が散在している。

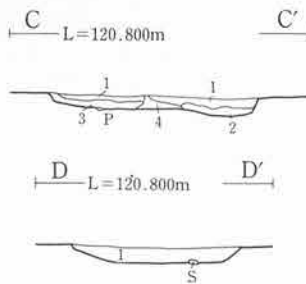
<柱穴・土坑> 土坑は P 1~P 3 の 3 基を検出している。平面形は P 1・P 2 が不整形、P 3 が楕円形状である。埋土は褐色主体で、少量の焼土粒を含んでいる。柱穴状土坑は P 4~P 6 の 3 基検出しているが、いずれも位置

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	75×65	66×62	140×99	54×51	30×27	28×26
深さcm	14	12	12	19	29	32

的に支柱穴とは考えられない。埋土は黒褐色土を主体に構成し、僅かに褐色土が混じっている。柱痕は確認されていない。



1. 10YR2/2 黒褐色シルト 堅く締まる 炭化物・焼土粒微量含む
2. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト 堅く締まる 褐色土がブロック状に1%混入
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 褐色土がブロック状に10%混入 焼土微量・炭化物少量含む
4. 10YR5/3~5/4 におい黄褐色火山灰 堅く締まる 十和田a火山灰層
5. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 堅く締まる

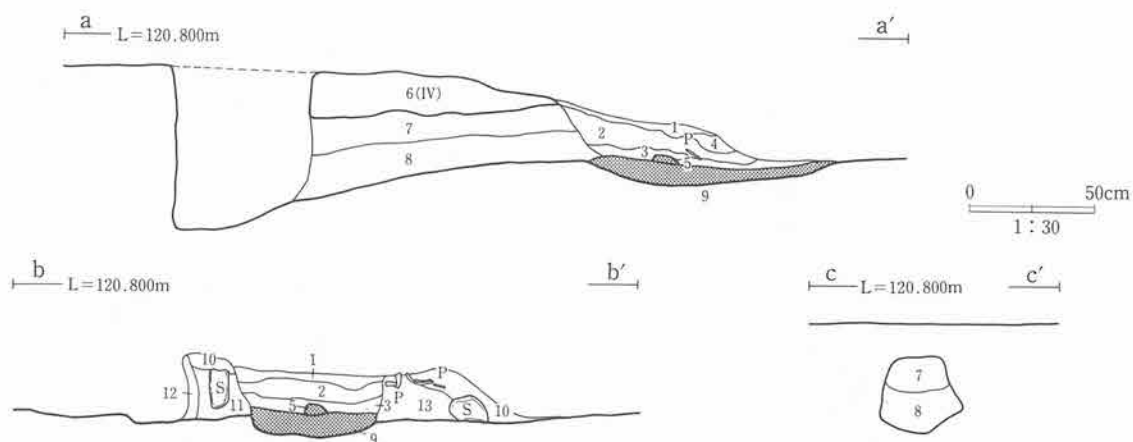


1. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 赤褐色焼土粒(5YR4/6)・褐色砂質土(10YR4/6)10%混入 指圧痕あり
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 赤褐色焼土粒(5YR4/6)20%混入炭1%含む
3. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性あり 堅く締まる 黒褐色土(10YR2/2~2/3)30%混入
4. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性なし 堅く締まる

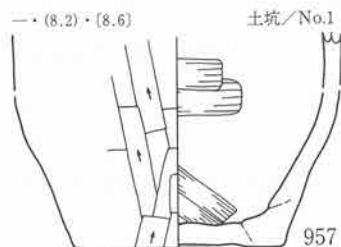
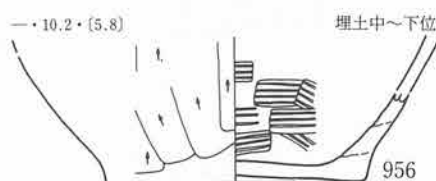
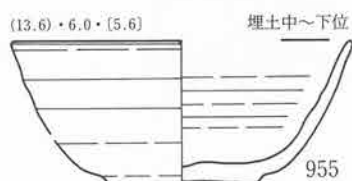
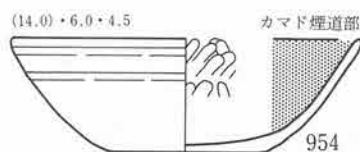
1. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト 褐色砂質シルト10%混入 焼土粒10%混入

0 1m  
1:60

第244図 RA227竪穴住居跡(1)



- |     |          |         |         |                    |
|-----|----------|---------|---------|--------------------|
| 1.  | 10YR2/3  | 黒褐色シルト  | 堅く締まる   | 焼土5%含む             |
| 2.  | 10YR2/3  | 黒褐色シルト  | 堅く締まる   | 赤褐色焼土(5YR4/8)20%含む |
| 3.  | 10YR3/3  | 暗褐色シルト  | 焼土粒少量含む |                    |
| 4.  | 10YR4/6  | 褐色砂質シルト | 堅く締まる   |                    |
| 5.  | 5YR4/8   | 赤褐色焼土   |         |                    |
| 6.  | 10YR3/3  | 暗褐色シルト  | 堅く締まる   | 黒褐色土10%混入          |
| 7.  | 10YR2/2  | 黒褐色シルト  | 焼土5%含む  |                    |
| 8.  | 7.5YR2/3 | 極暗褐色シルト | 焼土5%含む  |                    |
| 9.  | 5YR3/6   | 暗赤褐色焼土  |         |                    |
| 10. | 10YR2/2  | 黒褐色シルト  | 堅く締まる   | 暗褐色土10%混入 焼土粒3%混入  |
| 11. | 10YR2/2  | 黒褐色シルト  | 堅く締まる   | 暗褐色土10%混入 焼土粒10%混入 |
| 12. | 10YR2/2  | 黒褐色シルト  | 堅く締まる   | 暗褐色土20%混入 焼土粒5%混入  |
| 13. | 10YR3/4  | 暗褐色シルト  | 堅く締まる   | 黒褐色土20%混入          |

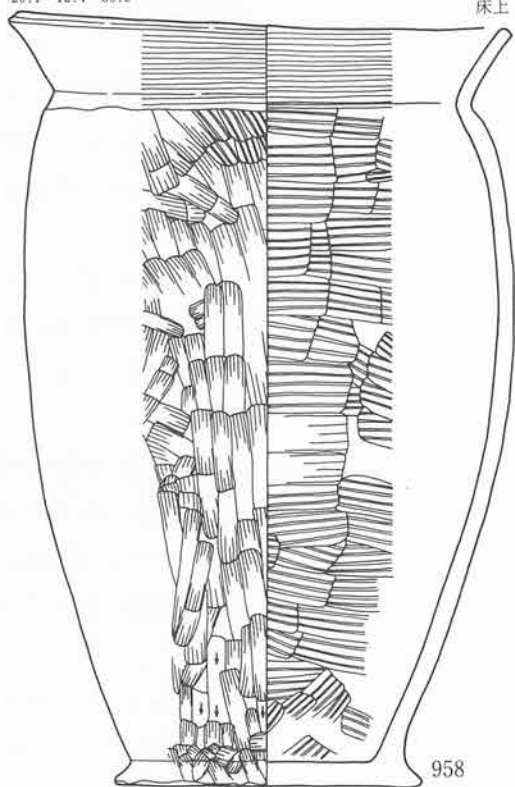


S=1/3

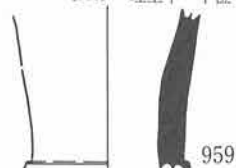
第245図 RA227竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)

20.1・12.4・30.9

床上

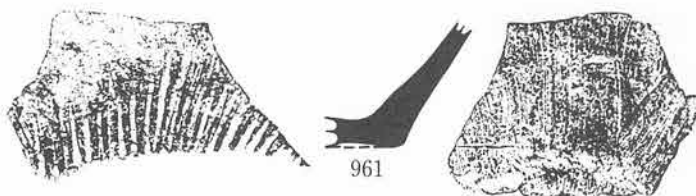
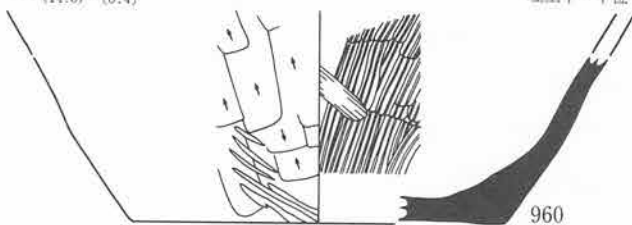


--- (6.5) 埋土中~下位



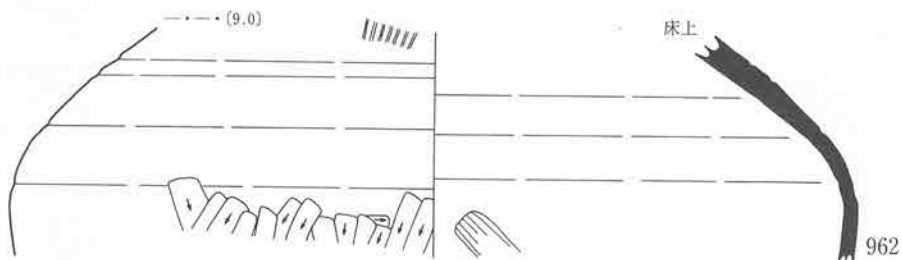
--- (14.8)・(8.4)

埋土中~下位



--- (9.0)

床上



S=1/3

第246図 RA227竖穴住居跡出土遺物(2)

<カマド> 西壁中央のやや南西コーナー寄りに設置している。本体部の天井部は崩落によって失われているものの、現存状態は良好である。袖部は数個の垂角礫を芯材に据え、この上を黒褐～褐色シルトで覆って構築している。燃烧部は径 73×54 cm の不整形状を呈し、焼土の層厚は 8 cm を測る。支脚は確認されない。

割り貫き式の煙道部は長さ 1.50 m を測り、本体部から約 11 度の下り勾配で煙出し部へと続いている。埋土は黒褐～極暗褐色土が主体で、焼土粒を少量含んでいる。煙出し部は径 69×61 cm、深さ 62 cm の円形状の土坑が掘り込まれている。

<遺物> 床上とカマド周辺部の埋土中～下位から土師器と須恵器が多く出土している。953～955 はロクロ使用の土師器坏で、いずれも底部の切り離しが回転糸切りである。口縁部が外傾して立ち上がる 953・954 (A I a 群) は、内面をヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。954 はカマド煙道部内から出土し、全体に器形の歪みが著しい。955 (A II a 群) は口縁部を 5 分の 1 ほど現存し、焼成が良好である。

956～958 はロクロ不使用の土師器甕 (A II 群) である。956・957 は体部下半～底部破片で、胎土に砂と石の混入が多い。器面調整は外面がヘラケズリ、内面は 956 がハケメ、957 がヘラナデ調整である。956 の底部は木葉痕で、内面に粘土紐の積み上げ痕が認められる。958 の口縁部は頸部からくの字状に外反し、口唇部は角ばっている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面がヘラナデ、内面が横方向にハケメ調整を施している。底部は木葉痕である。

959～962 は須恵器である。969 は長頸瓶の口縁部破片、960・961 が甕の体部～底部破片、962 が壺の体部破片である。960・961 の外面は平行叩き具痕後縦方向のヘラケズリ、内面にカキメ調整が施されている。962 の外面は肩部下位にヘラケズリ、内面の一部にカキメ以外はロクロ成形痕である。

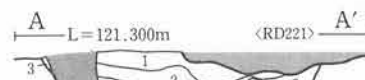
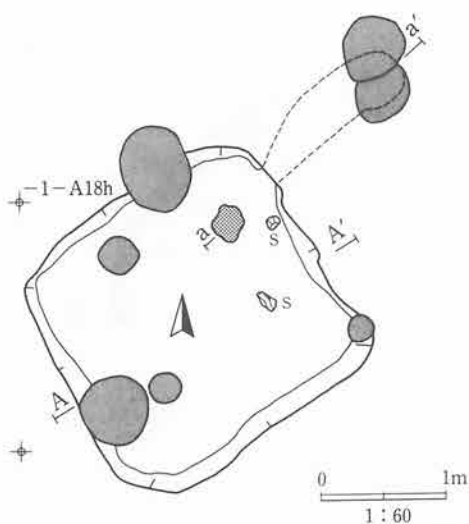
<時期> 時期は出土した遺物から平安時代の 9 世紀代に比定される。

(佐藤・高橋)

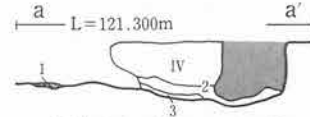
#### RA 230 竪穴住居跡 (第 247・248 図、写真図版 102・284)

<位置・重複関係> 調査区西側の -1-A 区に位置する。RD 221 土坑、柱穴状土坑と重複し、新旧関係は、(新) RD 221 土坑・柱穴状土坑→(旧) RA 230 竪穴住居跡である。<平面形・規模> 隅丸方形を呈する。規模は 2.00×2.00 m である。

<埋土> 黄褐色土や炭粒を含む暗褐色土が主体である。<壁・床> 壁は床から外傾して立ち上がる。壁

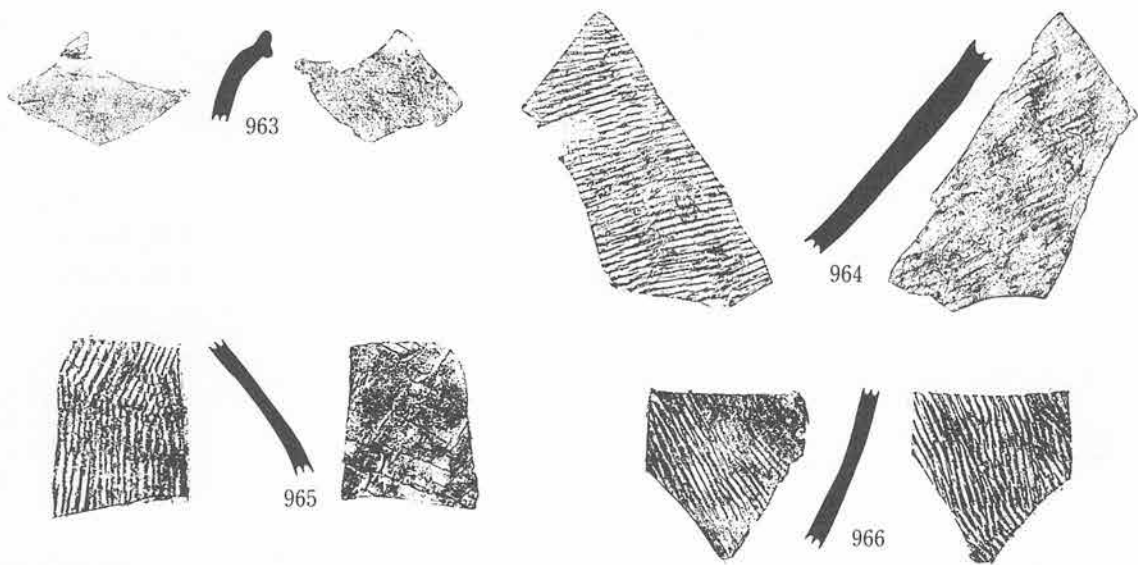


1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒・炭粒含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロックを多量・黒色土ブロックをごく少量含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒・微量の炭粒含む
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 堅く締まる



1. 5YR4/3 にぶい赤褐色焼土 粘性なし 堅く締まる
2. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 締まりなし IV層起源の崩落した黄褐色土ブロック混入 炭少量含む
3. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 締まりなし 炭粉多量含む

第247図 RA230竪穴住居跡



S=1/3

第248図 RA230竪穴住居跡出土遺物

高は37 cmである。床は平坦で堅く締まる。貼り床はない。

<柱穴> 検出されなかった。<他の施設> 床面中央からやや東寄りに18×11×12 cm程の礫が直立して出土した。礫は周辺を非常に堅く締まる黒褐色土で固めている。

<カマド> 東壁の最も北寄りに位置する。袖や天井の部分は若干周辺埋土よりも堅いような気がしたが、識別できなかった。右袖にあたる部分にやや長い円礫の直立があり、芯材としていたと考えられる。燃烧部は26×24 cmの範囲に不整形に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で4 cm程度である。

煙道部は長さ1.4 m、幅22～40 cmで、割り貫き式である。底部は燃烧部からごく緩やかに下がり勾配で煙出しに至る。埋土は炭粉を含む黒褐色土～暗褐色土で、下層に特に炭が多い。

<遺物> 須恵器が出土している。963は長頸瓶の口縁部破片である。964～966は須恵器甕の破片である。

<時期> 出土遺物から平安時代に属する。

(金子)

#### RA 231 竪穴住居跡 (第249図)

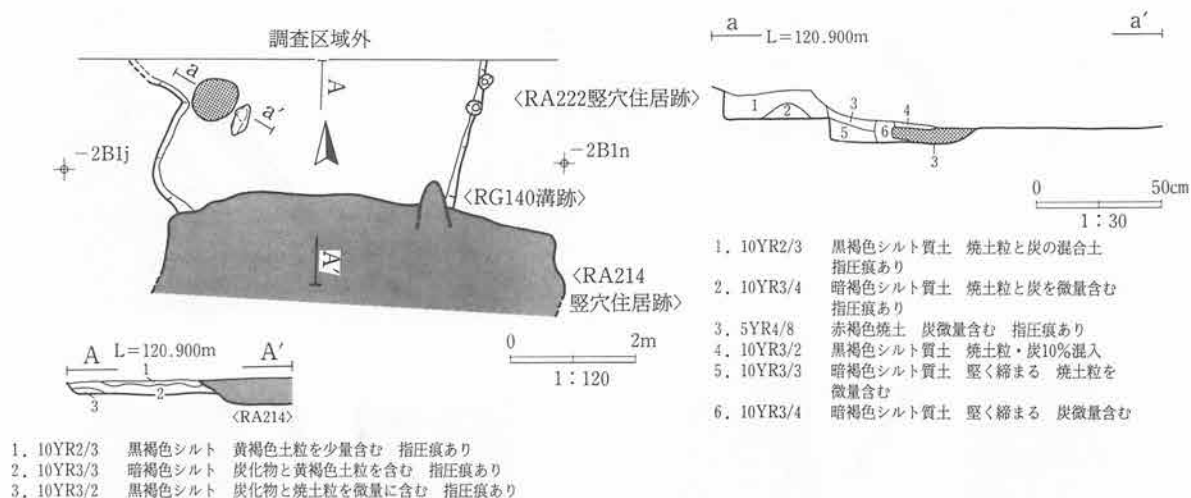
<位置・重複関係> 北側調査区の一2B区北側に位置している。南側でRG 140 溝跡・RA 214 竪穴住居跡、東側でRA 222 竪穴住居跡と重複している。本遺構がRG 140 溝跡・RA 214 竪穴住居跡に切れ、RA 222 竪穴住居跡を切っている事から新旧関係は(新) RG 140 溝跡→RA 214 竪穴住居跡→RA 231 竪穴住居跡→(旧) RA 222 竪穴住居跡である。検出はIV層上面で確認している。

<平面形・規模> 南側が遺構の重複で切れ、北側が調査区域外に延びている事から、平面形と規模の全容は不明である。確認された規模は東辺2.30 m、西辺2.00 m、南辺90 cmを測り、南西コーナーは隅丸である。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする3層で構成されている。<壁・床> 現存する壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は10 cm前後を測る。床はほぼ平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 検出されない。





第249図 RA231竪穴住居跡

〈カマド〉 両袖部と本体部は削平され、僅かに燃焼部が現存する。燃焼部は径76×64cmの楕円形状を呈し、焼土の層厚は6cmを測る。煙道部は水平に煙出し部に延びているが、調査区域外に延びる事から詳細不明である。

〈遺物・時期〉 遺物の出土はないものの、時期は周辺の遺構の形態等から平安時代に属すると思われる。  
(高橋)

RA 271 竪穴住居跡 (第250・251図、写真図版284)

〈位置・重複関係〉 北側調査区の-2A区西側に位置している。東側でRA 272 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本遺構が切っている事から(新) RA 271 竪穴住居跡→(旧) RA 272 竪穴住居跡である。検出はIV層上～中位で確認している。

〈平面形・規模〉 遺構が重複する事から、平面形と規模の詳細が不明である。確認された規模は西辺3.30m、南辺1.90m、北辺3.10mである。検出された規模から一辺3.80m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

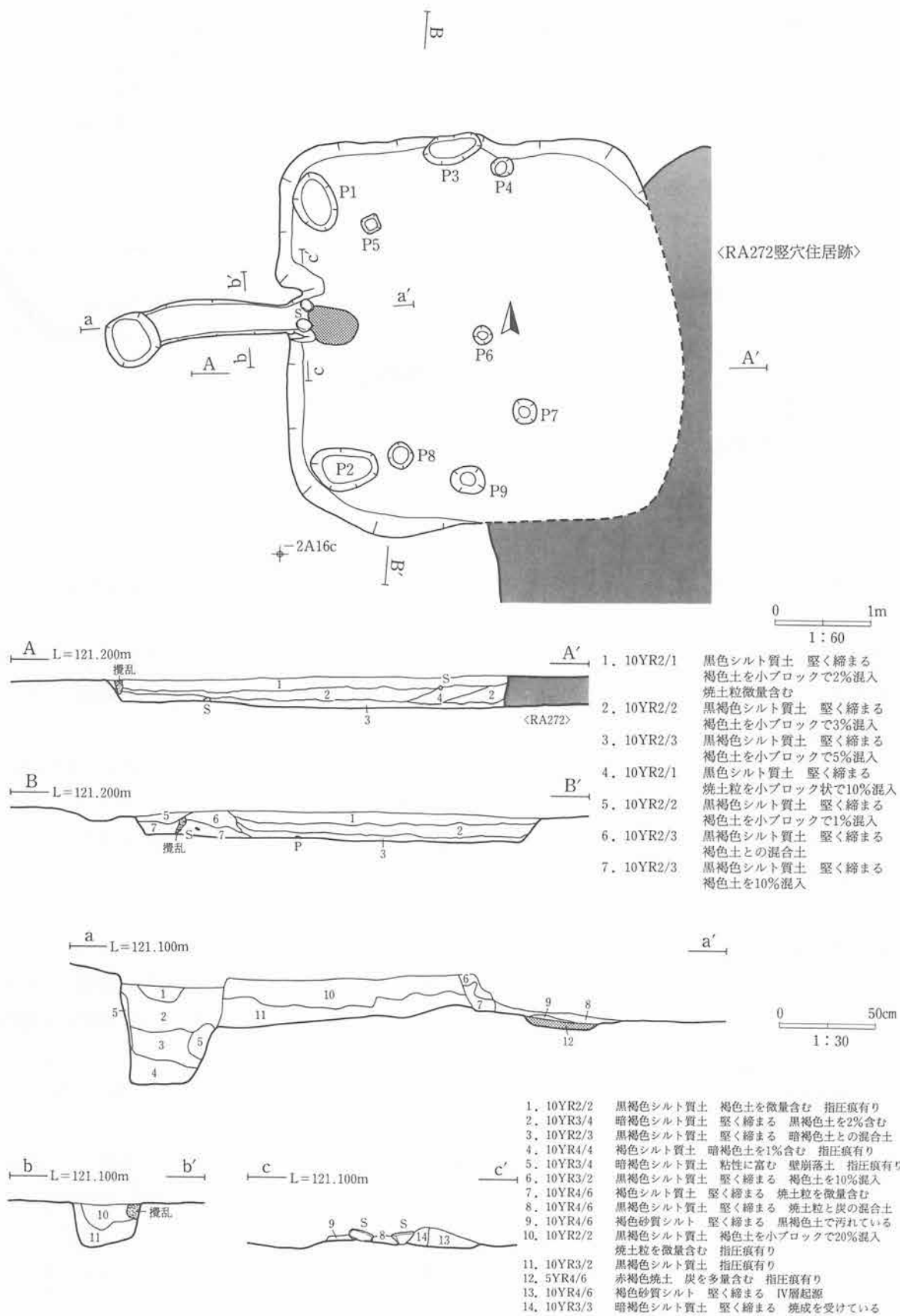
〈埋土〉 埋土はシルト質土を主体とする7層に大別される。上層は褐色土を小ブロックで含み、中位～下層が堅く締まる黒褐色シルト質土で構成されている。〈壁・床〉 壁の上部は削平され、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は西壁23cm、南壁26cm、北壁18cmを測る。床面はほぼ平坦で、堅く締まっている。貼り床は確認されない。

土坑No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
直径cm	62×43	70×44	61×29	22×20	18×18	18×18	25×24	25×24	35×38
深さcm	14	13	15	20	11	17	16	20	16

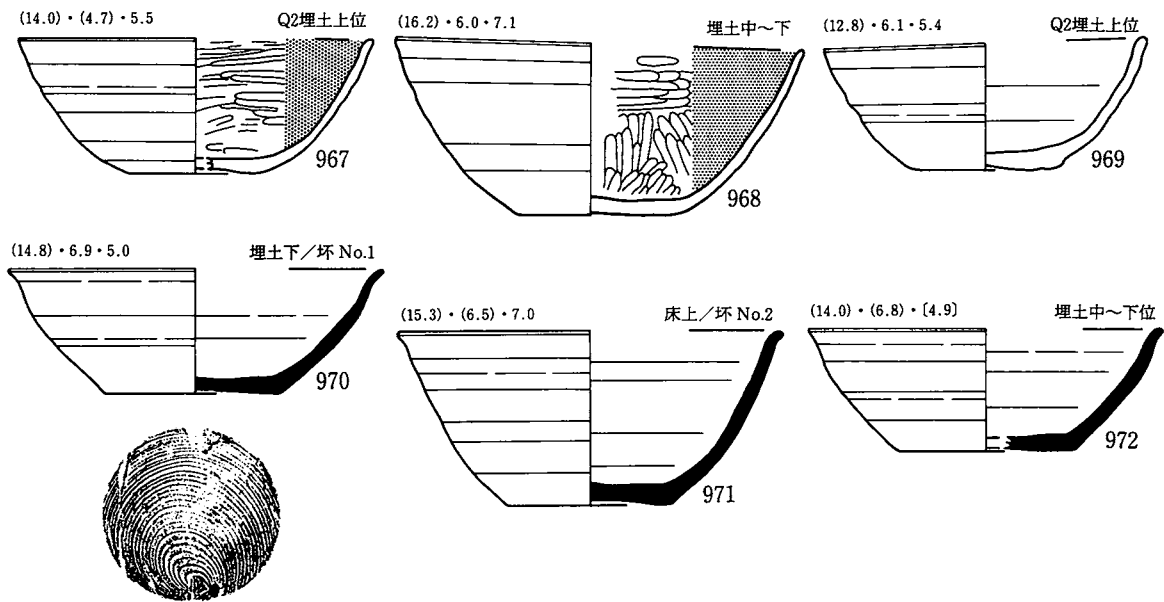
〈柱穴・他の施設〉 柱穴状土坑は9基検出され、埋土の様相と位置的にP 1・P 2が支柱穴となる。4本柱を基本とするが、対応する東側では確認できなかった

〈カマド〉 カマドは西壁の中央部北寄りに設置している。本体部の大部分は削平されており、燃焼部が現存するだけである。燃焼部の焼土は層厚4cmを測り、径52×38cmの楕円形状に形成されている。支脚は煙道部寄りに石を2個使用している。

煙道部は上半部が削平されている事から、掘り込み式か割り貫き式かは不明である。煙道部は長さ1.90m



第250図 RA271竪穴住居跡



S=1/3

第251図 RA271竪穴住居跡出土遺物

で、燃焼部から緩やかに下がり勾配で煙出し部に続いている。煙出し部は径 56×50 cm、深さ 57 cm の楕円形状土坑が掘り込まれている。煙出し部の上部構造は不明である。

<遺物> 埋土中～下位と床上から土師器坏、須恵器坏が出土している。967・968 はロクロ使用の土師器坏 (A I a 群) で、底部の切り離しが回転糸切りである。口縁部は外傾して立ち上がり、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

969 は底部の切り離しが回転糸切りで、内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器 (A II a 群) である。口縁部は外傾して立ち上がり、胎土に砂と石を多く含んでいる。

970～972 は須恵器坏である。いずれも底部の切り離しは回転糸切りで、970 の器形の歪みが大きい。

<時期> 時期は出土した坏から平安時代に比定される。 (高橋)

#### RA 302 竪穴住居跡 (第 252～255 図、写真図版 103・284～286)

<位置・重複関係> 北側調査区の一 1 - A 区北寄りに位置する。北東側 RD 603 土坑と重複し、本遺構が切られている事から新旧関係は、(新) RD 603 土坑 → (旧) RA 302 竪穴住居跡である。検出は IV 層中位で黒褐色土の広がりによって確認している。

<平面形・規模> 遺構の南コーナー側が調査区域外の道路下に延びる事から、規模の詳細は不明である。確認された規模は 6.00×5.60 m、平面形が隅丸長方形を呈している。

<埋土> 埋土はシルト質土を主体とする 6 層に大別される。上層は炭化物と焼土粒を微量に含む黒色シルト質土、下層は黒褐色シルト質土に褐色土が小ブロック状に混入し、強く締まっている。最下層には多量の炭と焼土の堆積が見られる事から、焼失家屋と思われる。<壁・床> 壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は南東壁 20 cm、北西壁 36 cm、南西壁 20 cm、北東壁 12 cm を測る。床面は中央部がやや高まり、全体に強く締まっている。

<柱穴・土坑> 柱穴状土坑は 14 基検出されており、位置的に P 1～P 4 の 4 基が主柱穴と思われる。土



- 1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 焼土粒・炭微量含む
- 2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土が小ブロック状で2%混入  
炭微量・焼土粒含む
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 炭・焼土粒含む 指圧痕有り
- 4. 10YR2/1 黒色シルト質土 炭多量混入 指圧痕有り
- 5. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 褐色土との混泥土 焼土粒・炭少量含む  
指圧痕有り
- 6. 10YR4/4 褐色砂質シルト 堅く締まる 黒褐色土で汚れている

L=120.800m



- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 褐色土・微量の炭混入 指圧痕有り
- 2. 10YR4/4 褐色砂質シルト 黒褐色土を小ブロックで1%混入  
指圧痕有り

L=120.800m



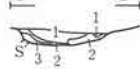
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭微量含む
- 2. 10YR1.7/1 黒色シルト質土 黒褐色土との混泥土 炭微量含む  
指圧痕有り
- 3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 焼土粒と炭との混泥土  
指圧痕有り
- 4. 10YR1.7/1 黒色シルト質土 炭多量・焼土粒微量含む  
指圧痕有り
- 5. 10YR4/4 褐色砂質シルト 堅く締まる 黒褐色土で汚れている

L=120.800m



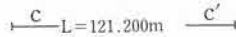
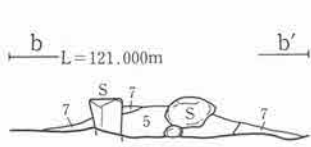
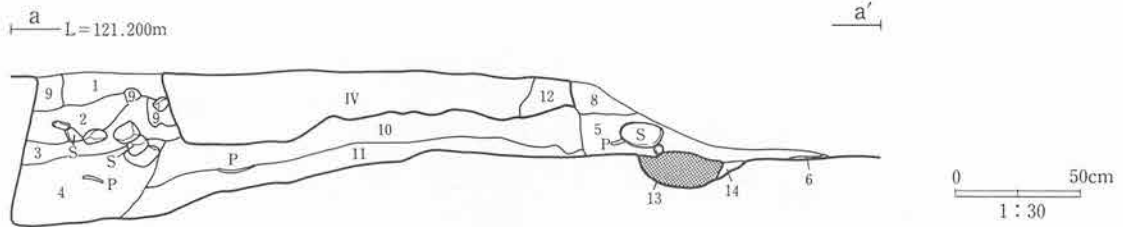
- 1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土20%混入
- 2. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒色土1%混入

L=120.800m

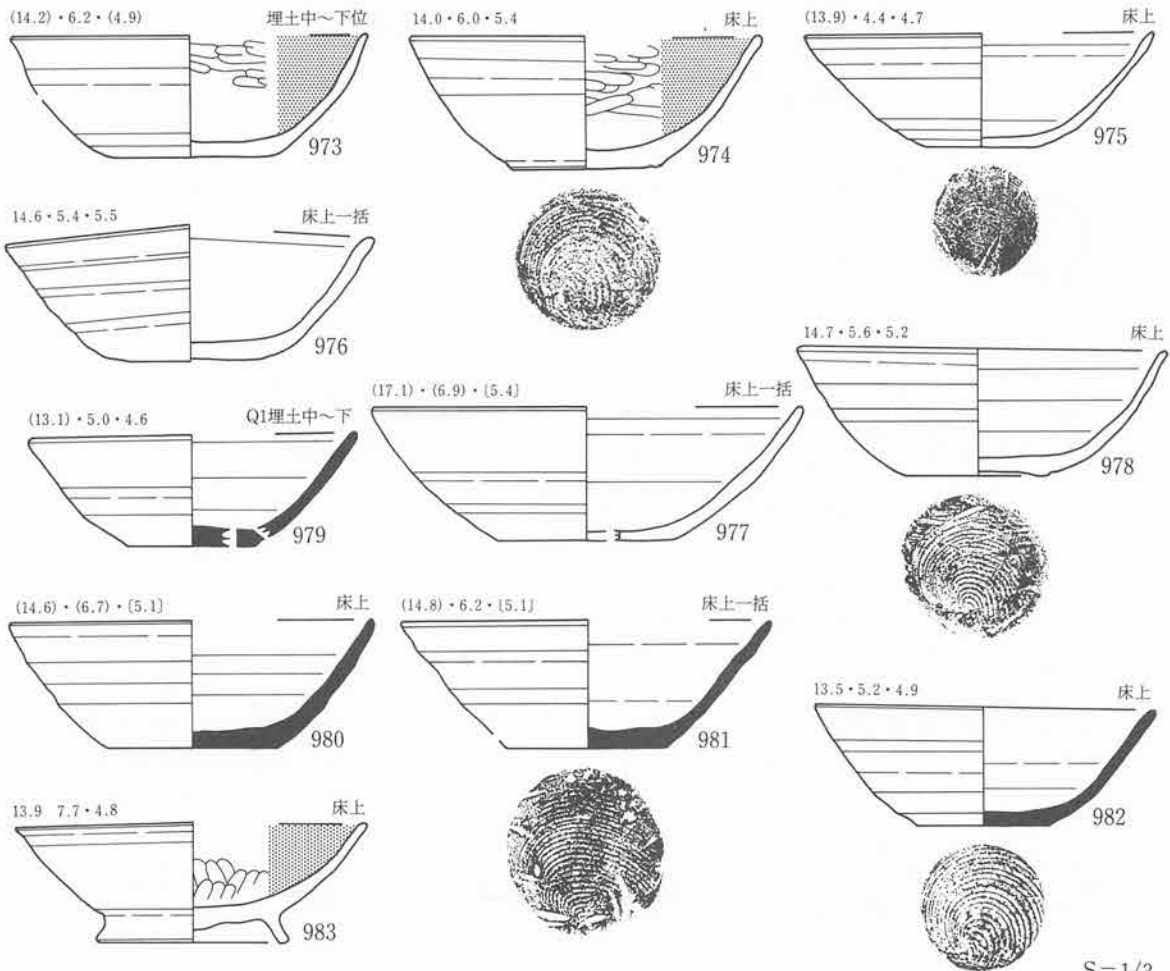


- 1. 5YR4/6 暗褐色焼土 炭微量含む 指圧痕有り
- 2. 5YR2/2 黒褐色シルト質土 焼土粒との混泥土  
炭微量含む
- 3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる  
褐色土を小ブロックで1%混入

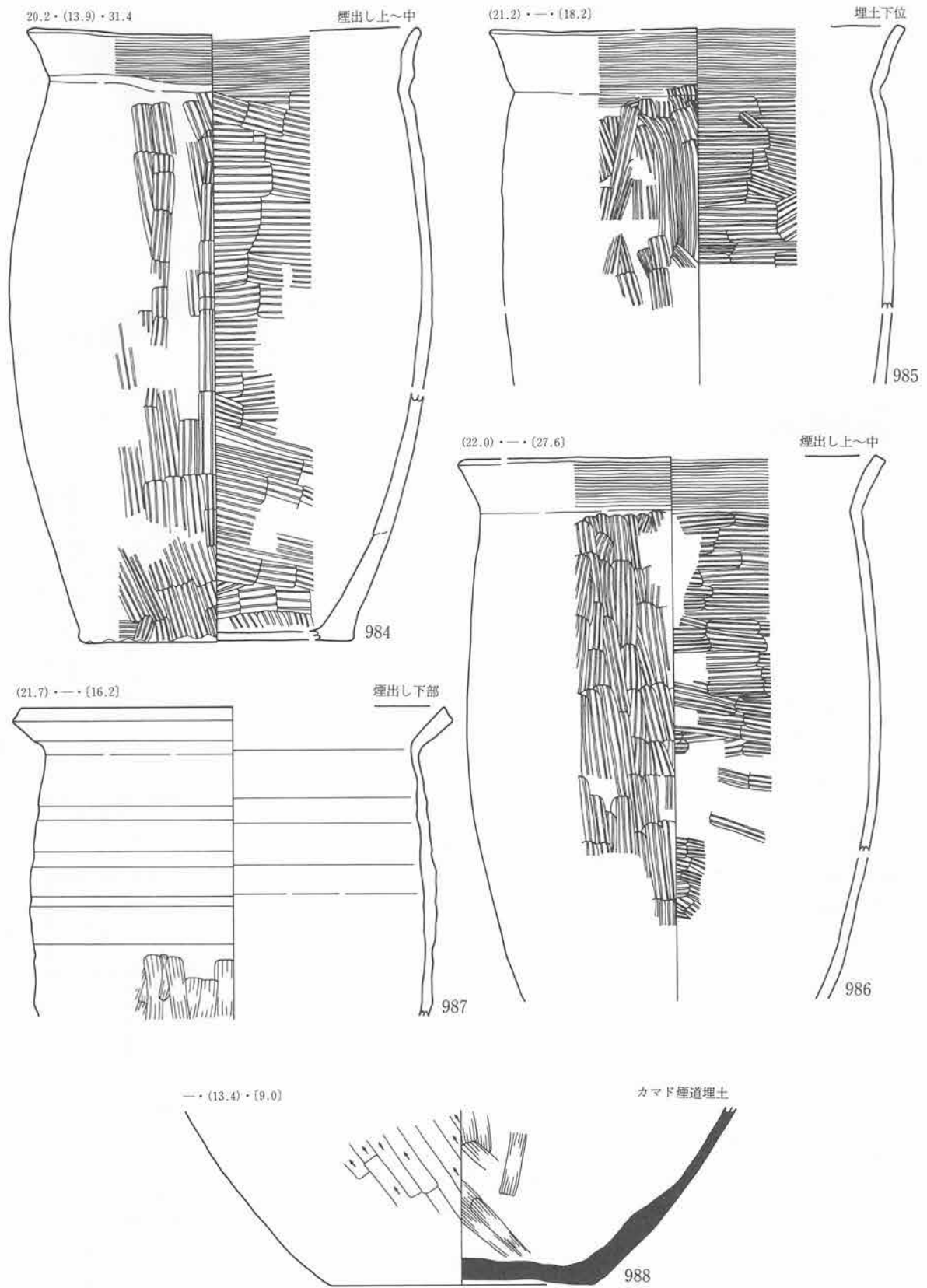
第252図 RA302竪穴住居跡(1)



- |              |           |             |                       |
|--------------|-----------|-------------|-----------------------|
| 1. 10YR2/3   | 黒褐色シルト質土  | 堅く締まる       | 褐色土が小ブロックで1%混入        |
| 2. 10YR3/2   | 黒褐色シルト質土  | 堅く締まる       | 1層に類似                 |
| 3. 10YR2/3   | 黒褐色シルト質土  | 炭微量含む       | 指圧痕有り 1層に類似           |
| 4. 10YR2/1   | 黒色シルト質土   | 焼土粒・炭少量含む   | 指圧痕有り                 |
| 5. 7.5YR3/3  | 暗褐色シルト質土  | 焼土粒と褐色土の混合土 | 炭微量含む 指圧痕有り           |
| 6. 10YR3/4   | 暗褐色砂質シルト  | 堅く締まる       | 褐色土で汚れている             |
| 7. 7.5YR4/4  | 褐色シルト質土   | 焼土粒を微量含む    | (カマド袖部)               |
| 8. 7.5YR3/2  | 褐色シルト質土   | 堅く締まる       | 焼土粒・炭微量含む             |
| 9. 10YR4/4   | 褐色砂質シルト   | 堅く締まる       | IV層起源                 |
| 10. 7.5YR4/4 | 褐色シルト質土   | 堅く締まる       | 焼土粒をブロック状で10%混入 炭微量含む |
| 11. 7.5YR4/3 | 褐色シルト質土   | 堅く締まる       | 焼土粒・炭多量含む 全体に焼成を受けている |
| 12. 7.5YR3/4 | 褐色シルト質土   | 堅く締まる       | 炭・焼土粒を少量含む 焼成を受けている   |
| 13. 5YR3/6   | 極暗褐色焼土    | 堅く締まる       | 焼成が著しい                |
| 14. 5YR2/3   | 極暗赤褐色土    | 焼土粒・炭多量含む   | 指圧痕有り                 |
| 15. 5YR3/2   | 暗赤褐色シルト質土 | 堅く締まる       | 炭・褐色土を小ブロックで混入        |
| 16. 10YR4/4  | 褐色砂質シルト   | 堅く締まる       | IV層起源                 |

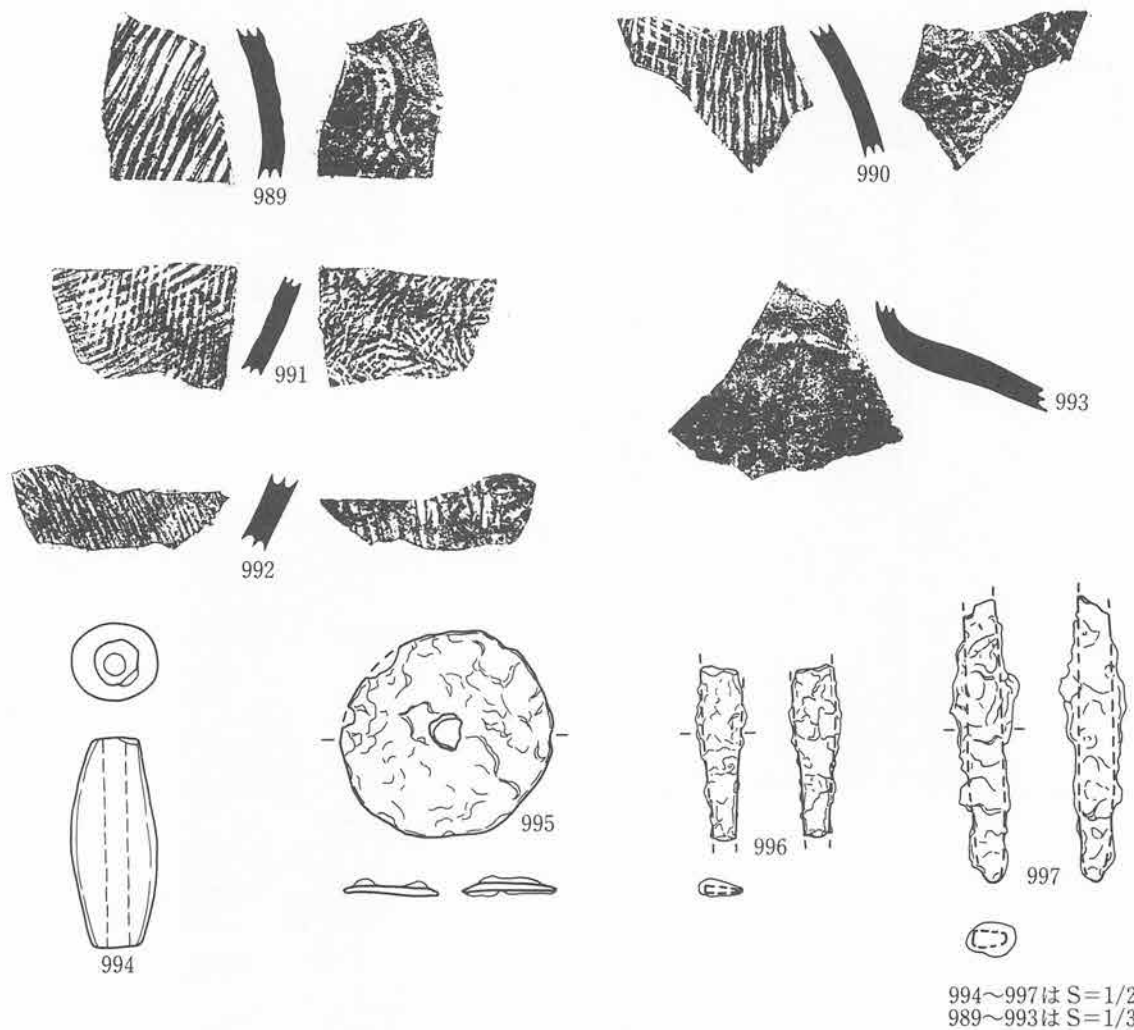


第253図 RA302竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



S=1/3

第254図 RA302竪穴住居跡出土遺物(2)



第255図 RA302竪穴住居跡出土遺物(3)

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
直径cm	50×28	8×34	34×27	65×46	41×37	84×72	67×66	78×68	136×60	22×20
深さcm	21	60	48	3	20	23	28	21	4	10
土坑No	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19	
直径cm	36×36	31×26	28×23	33×32	76×72	16×13	20×16	32×29	20×18	
深さcm	18	16	15	23	16	4	9	17	10	

坑はP 5～P 9の5基が検出している。平面形は円形ないし楕円形で、P 9は左袖部に隣接してある事から貯蔵穴のと思われる。他の遺構は用途が不明である。

〈カマド〉 カマドは南西壁の南コーナー寄りに設置しているが、本体部と両袖部は削平されて下端が現存するだけである。燃烧部は径54×48cmの楕円形状で、焼土の層厚は14cmを測る。支脚は確認していない。

煙道部は径26×16cmの楕円形気味に刳り貫かれ、長さが1.20mである。本体部から緩やかな下り勾配で煙出し部へと続いている。埋土は黒～褐色シルト質土が主体で、炭と焼土粒を含んでいる。煙出し部は径66×54cm、深さ60cmの楕円形状の土坑が掘り込まれている。上部構造は不明である。

〈遺物〉 カマド周辺と床上から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・長頸瓶・甕、土製品、鉄製品等が出

土している。973・974 はロクロ使用の土師器坏で、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切りが974 (A I a群)、切り離した後に再調整された973 (A I b群) である。

975～978 はロクロ使用の土師器坏で、内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないいわゆる赤焼き土器である。底部の切り離しは回転糸切り (A II a群) が975・976・978 で、再調整されている (A II d群) 977 がある。

980～982 は須恵器坏で、底部の切り離しが回転糸切り (B II a群) である。982 は完形品で、口縁部は底部から外傾して立ち上がっている。器形に歪みが見られる。

983 はロクロ使用の土師器高台坏である。口縁部は3分の2現存し、内面にヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。胎土には金雲母が混入する。

984～986 はロクロ不使用の土師器甕 (A II群) で、いずれも底部を欠損する。口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、内外面にヨコナデ調整を施している。体部内外面はハケメ調整である。

987 はロクロ使用の土師器甕 (A I群) である。底部を欠損しており、口縁部は短く頸部からくの字状に外反して立ち上がり、口唇部に浅い沈線が一条巡っている。ロクロ成形痕が明瞭である。

988～993 は須恵器長頸瓶・甕・大甕の体部破片である。998 は大甕の底部、993 が長頸瓶の肩部破片である。体部外面は平行叩き具痕、内面が平行叩き具痕と放射状の当て具痕がある。

土製品は土坑から994の土錘が出土している。一部欠損するが長さ5.6 cm、幅2.4 cm、厚さ2 cmである。鉄製品は紡錘車と刀子破片がある。995は紡錘車で、径5.5 cm、厚さ2 mmを測る。996・997は刀子で端部を欠損している。996は現存長4.7 cm、幅1.2 cm、厚さ2 mm、997は7.6 cm、幅1.3 cm、厚さ5 mmである。

<時期> 出土した坏と甕から平安時代に比定される。 (高橋)

### (3) 中世

#### R A 157 竪穴住居跡 (第256図、写真図版286)

<位置・重複関係> 調査区北西の-1-B区と1-A区に亘って位置する。西側をR G 068 溝跡、北側をR D 255 土坑、東側をR D 220 土坑、建物跡全体に掘立柱建物跡と重複する。新旧関係はR G 068 溝跡を本遺構が切り、他の遺構に切られていることから(新) R B 014 掘立柱建物跡・R D 220 土坑・R D 255 土坑→R A 157 竪穴住居跡→(旧) R G 068 溝跡である。検出はIV層上面である。

<平面形・規模> 西壁に張り出しと思われる突出を持つ隅丸の長方形を呈する。東西方向の辺の長さは張り出しを含め4.83 m、南北の辺の長さが5.24 mである。

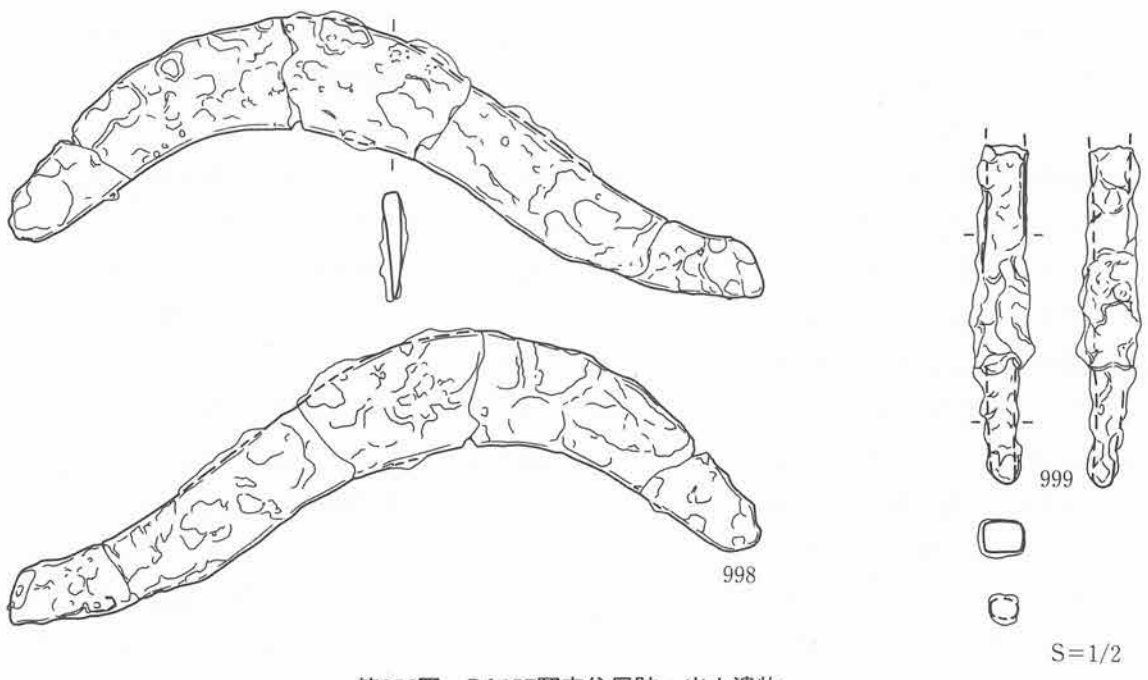
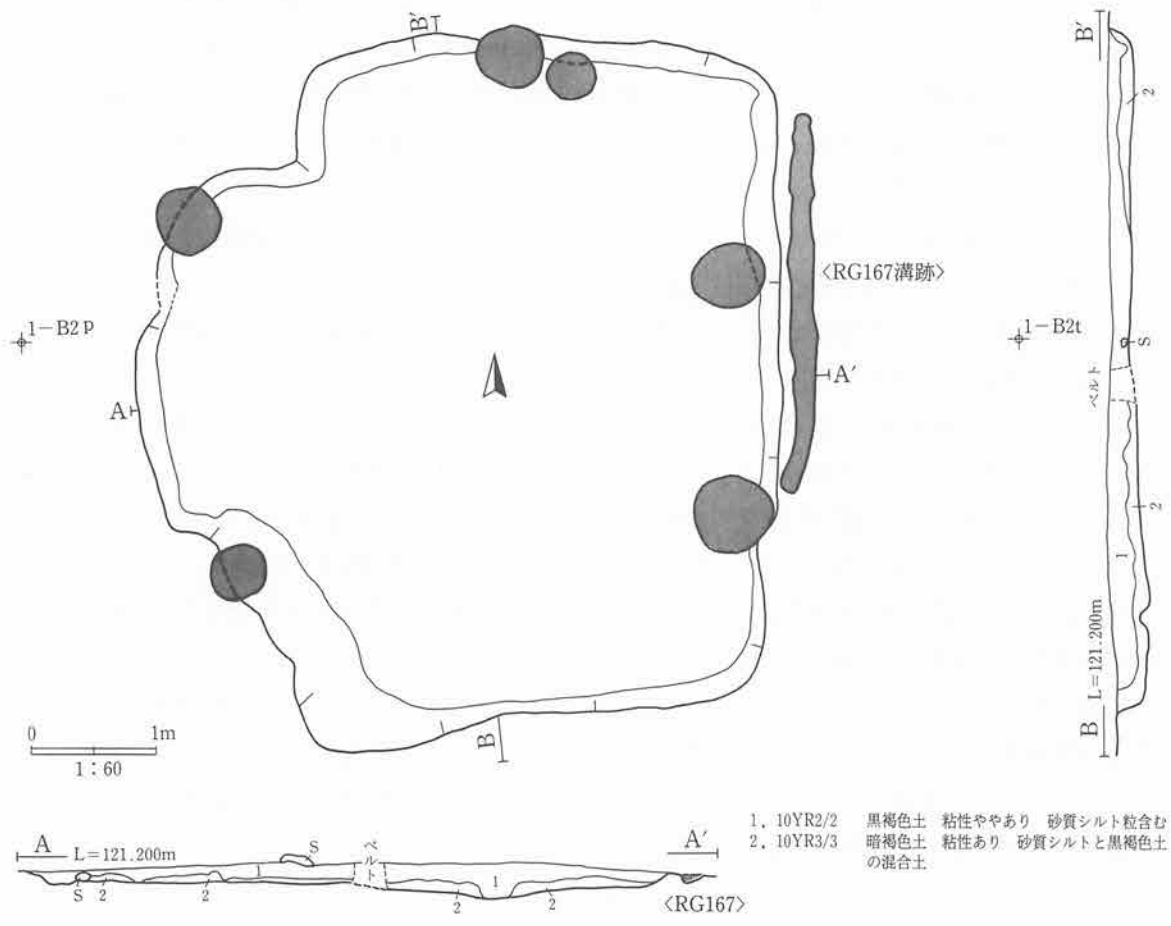
<埋土> 2層に細分される。上層は締まりのある黒褐色土、下層は砂質シルトをブロック状に含む暗褐色土である。<壁・床> 壁は床面から外傾、あるいはやや内湾気味に立ち上がる。特に西壁の立ち上がりははごく緩やかである。床は西側と北側がやや高く平坦ではない。張り床はない。

<柱穴> 検出されなかった。<他の施設> 本遺構の東壁の外側にR G 167 溝跡が検出された。長さ3.06 m、幅23 cm、深さ7 cmである。東壁に沿うように検出されていることから、本遺構と関連が深いと思われるが詳細は不明である。溝の埋土は黄褐色土の混入する黒色土1層で、板の痕跡などは検出されなかった。

<カマド・炉> 検出されなかった。

<遺物・時期> 埋土から土師器破片が出土したが、小片で図化に至っていない。998は鎌、999は刀子で、いずれも埋土中より出土した。確実に遺構に伴う遺物がないので不明であるが、平安時代より新しく遺構の形態から中世に属すると思われる。 (金子)





第256図 RA157竪穴住居跡・出土遺物

### 3. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、東側調査区で4棟、西側調査区で8棟、北側調査区で1棟検出されている。時期は中世6棟、近世7棟である。時代順に以下記載をする。

#### (1) 中世

##### R B 005 掘立柱建物跡 (第257図、写真図版104・105)

<位置・重複関係> 東側調査区の一・一～A・B区に亘って位置し、北東側約5mにR B 009 掘立柱建物跡が隣接している。本遺構はR A 116・134・163 竪穴住居跡・R B 007 掘立柱建物跡の4棟と重複している。新旧関係は3棟の竪穴住居跡と掘立柱建物跡を切っている事から、(新)R B 005 掘立柱建物跡→R B 007 掘立柱建物跡→(旧)R A 116・134・163 竪穴住居跡となる。各竪穴住居跡における新旧関係は不明である。III層上位で検出され、西側で砂礫層(V層)が一部露出している。

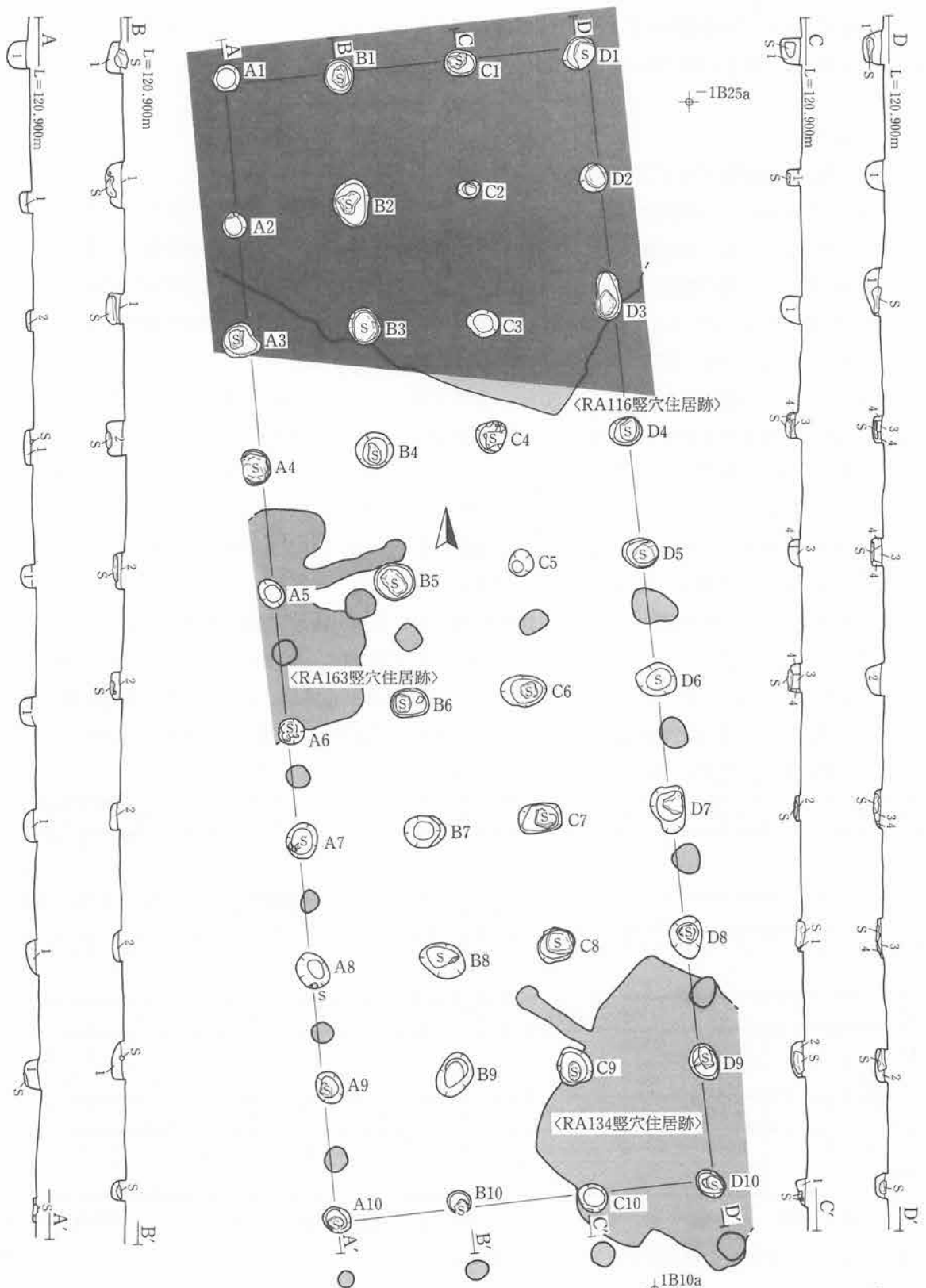
<規模・方向> 規模は桁行9間(19.30m)、梁行3間(6.05～6.42m)を呈し、礎石を使用した掘立柱建物跡である。棟方向は南南東～北北西を示し、北に対して8度30分西偏する。

<身舎> 桁行の柱間寸法は、西側A 1柱～A 10柱が2.37m+1.92m+2.16m+2.13m+2.30m+1.90m+2.18m+2.06m+2.26m、東側D 1柱～D 10柱が2.22m+2.10m+2.20m+2.10m+2.18m+2.12m+2.16m+2.18m+2.05m。梁行柱間寸法は、北側のA 1柱～D 1柱が1.90m+2.00m+1.15m、南側のA 10柱～D 10柱が2.10m+2.22m+2.10mである。

<掘り方・柱痕> 柱穴掘り方の平面形は円形、楕円形、方形、隅丸長方形等があり、楕円形が6割弱を占めている。規模は径30～85cmの範疇で、深さは8～37(平均23.8)cmを測る。柱痕は径24～30cm前後で、C 4～6柱・D 4・5・7柱で確認している。また、27本の柱穴から径20～50cm大の扁平な河床礫を使用した礎石を検出している。柱穴の上部は削平されている事から詳細不明であるが、本来すべての柱穴に使用していたと思われる。柱穴埋土は、微量に炭を含む黒褐色シルトを主体としている。

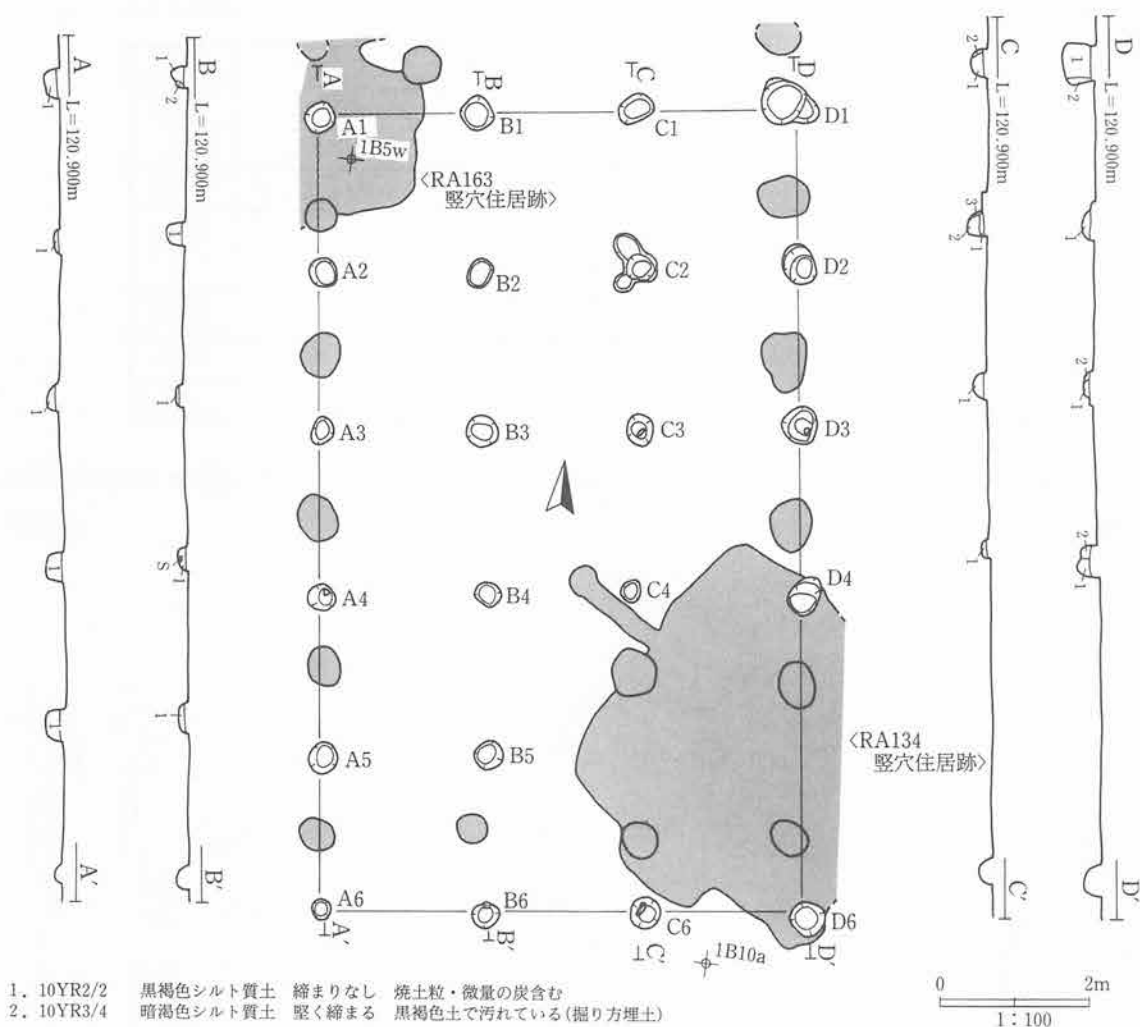
柱穴No	A 1柱	A 2柱	A 3柱	A 4柱	A 5柱	A 6柱	A 7柱	A 8柱	A 9柱	A 10柱
直径cm	46×45	42×40	66×58	62×48	52×39	45×44	61×50	63×50	51×48	48×42
深さcm	35	22	12	18	26	18	22	20	31	8
柱穴No	B 1柱	B 2柱	B 3柱	B 4柱	B 5柱	B 6柱	B 7柱	B 8柱	B 9柱	B 10柱
直径cm	58×51	80×60	64×56	66×64	71×63	65×48	70×66	68×60	77×69	40×39
深さcm	29	34	26	32	20	20	21	17	23	24
柱穴No	C 1柱	C 2柱	C 3柱	C 4柱	C 5柱	C 6柱	C 7柱	C 8柱	C 9柱	C 10柱
直径cm	53×46	39×30	50×48	55×53	45×42	79×55	72×52	70×54	68×60	52×48
深さcm	37	25	37	27	24	26	13	11	23	20
柱穴No	D 1柱	D 2柱	D 3柱	D 4柱	D 5柱	D 6柱	D 7柱	D 8柱	D 9柱	D 10柱
直径cm	58×50	49×46	85×82	58×50	60×53	67×58	81×60	70×57	66×52	56×43
深さcm	36	33	30	21	24	34	16	12	22	23

<遺物・時期> 遺物は一部の柱穴から、流れ込みの土師器破片を僅かに出土している。時期を決定する遺物はないが、柱間尺と棟方向から見て中世に属すると思われる。(高橋)



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土が小ブロック状に混入 炭化物微量含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 褐色シルトとの混合土 面円礫(径1~10cm大)20%含む
3. 10YR2/1 黒色シルト 締まりなし 柱痕
4. 10YR2/2~3/2 黒褐色シルト 堅く締まる 褐色土との混合土 炭化物微量含む

第257図 RB005掘立柱建物跡



第258図 RB007掘立柱建物跡

**R B 007 掘立柱建物跡 (第 258 図、写真図版 104・105)**

<位置・重複関係> 東側調査区の 1 B 区に位置している。本遺構は RA 134 竪穴住居跡と R B 005 掘立柱建物跡の 2 棟と重複している。新旧関係は R B 005 掘立柱建物跡に切られ、竪穴住居跡を切っている事から、(新) R B 005 掘立柱建物跡→R B 007 掘立柱建物跡→(旧) RA 134 竪穴住居跡である。III層上位で検出されており、西側と南側の一部で砂礫層 (V層) が露出している。

<規模・方向> 規模は桁行 5 間 (10.66~10.74 m)、梁行 3 間 (6.26~6.50 m) の掘立柱建物跡である。棟方向はやや南南東~北北西を示し、北に対して 7 度 30 分西偏している。

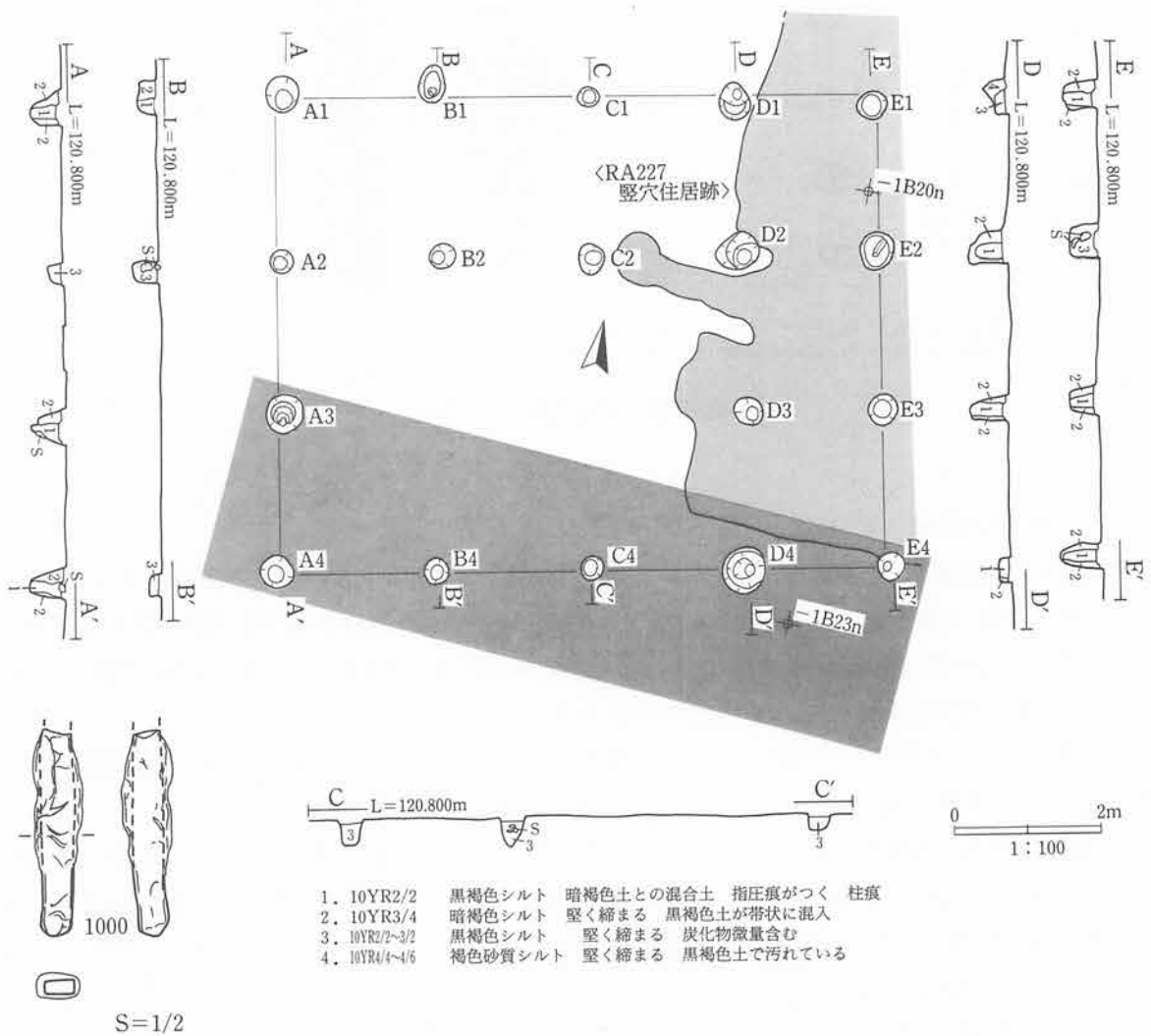
<身舎> 桁行の柱間寸法は、西側 A 1 柱~A 6 柱が 2.08 m+2.14 m+2.20 m+2.16 m+2.08 m、東側 D 1 柱~D 6 柱が 2.20 m+2.10 m+2.32 m+2.12 m+2.12 m。なお、D 4 柱は削平されている事から D 4 と D 5 柱間は推定値である。梁行柱間寸法は、北側の A 1 柱~D 1 柱が 2.10 m+2.16 m+2.00 m、南側の A 6 柱~D 6 柱が 2.20 m+2.16 m+2.14 m である。

<掘り方・柱痕> 柱穴掘り方の平面形は円形、楕円形、不整形等があり、内円形がほぼ半分を占めている。規模は径 28~64 cm の範疇で、深さは 10~34 (平均 20.4) cm を測る。上部が削平を受けている事から柱

痕の確認はできなかった。柱穴埋土は、焼土粒と炭微量に含む黒褐色～暗褐色シルトで構成されている。

柱穴No.	A 1 柱	A 2 柱	A 3 柱	A 4 柱	A 5 柱	A 6 柱	B 1 柱	B 2 柱
直径cm	42×40	40×38	39×30	40×36	42×40	28×28	44×42	42×32
深さcm	21	10	17	25	26	11	23	27
柱穴No.	B 3 柱	B 4 柱	B 5 柱	B 6 柱	C 1 柱	C 2 柱	C 3 柱	C 4 柱
直径cm	46×46	38×32	40×38	38×34	50×36	45×44	46×36	32×28
深さcm	12	15	15	19	24	29	20	13
柱穴No.	C 5 柱	C 6 柱	D 1 柱	D 2 柱	D 3 柱	D 4 柱	D 5 柱	D 6 柱
直径cm	—	42×41	64×56	56×44	53×48	58×41	—	46×45
深さcm	—	19	34	20	14	31	—	24

<遺物・時期> 時期を決定する遺物は出土していないが、重複するRB005 掘立柱建物跡と柱間尺と棟方向が類似する事から中世に属すると思われる。(高橋)



第259図 RB008掘立柱建物跡・出土遺物

R B 008 掘立柱建物跡 (第 259 図、写真図版 106・287)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 B 区に位置し、西北西側約 9 m には R B 009 掘立柱建物跡が隣接している。遺構の東側で平安時代の R A 227 竪穴住居跡と重複しており、新旧関係は本遺構が竪穴住居跡を切っていることから、(新) R B 008 掘立柱建物跡→(旧) R A 227 竪穴住居跡である。検出はⅢ層上面から中位で確認されている。また、南側桁行と西側梁行柱穴の 6 本は、第 19 次調査区内(公団側)に延びている。<規模・方向> 規模は桁行 4 間(8.10~8.40 m)、梁行 3 間(6.25~6.40 m)である。棟方向はやや東北東~西南西を示しており、北に対し 13 度西偏する。

<身舎> 桁行の柱間寸法は、北側の A 1 柱~E 1 柱が 2.00 m+2.20 m+2.00 m+1.90 m、南側の A 4 柱~E 4 柱が 2.20 m+2.10 m+2.10 m+2.00 m である。梁行柱間寸法は西側 A 1 柱~A 4 柱が 2.20 m+2.10 m+2.10 m、東側 E 1 柱~E 4 柱が 1.96 m+2.15 m+2.14 m を測る。

<掘り方・柱痕> 柱穴掘り方の平面形は、円形と楕円形が大部分を占めており、規模が径 29~56 cm、深さ 18~58 (平均 38) cm を測る。柱痕は径 15~20 cm 大で、A 1・A 3・A 4・B 1・D 2・D 3・E 1・E 4 柱の 8 本から検出している。柱穴の埋土は、暗褐~黒褐色シルトで構成され、炭を微量に含み堅く締まっ

柱穴No	A 1 柱	A 2 柱	A 3 柱	A 4 柱	B 1 柱	B 2 柱	B 3 柱	B 4 柱	C 1 柱	C 2 柱
直径cm	50×45	33×32	53×50	47×42	52×35	37×33	—	37×34	30×29	39×37
深さcm	43	22	48	52	27	37	—	18	35	40
柱穴No	C 3 柱	C 4 柱	D 1 柱	D 2 柱	D 3 柱	D 4 柱	E 1 柱	E 2 柱	E 3 柱	E 4 柱
直径cm	—	33×32	51×42	56×48	46×37	60×56	42×39	53×45	46×40	37×36
深さcm	—	22	32	54	52	18	47	42	38	58

ている。

<遺物・時期> 遺物は C 2 柱穴埋土から、鉄製のくさびと思われる破片が 1 点出土している。1000 は長さ 5.7 cm、幅 8 mm、厚さ 4 mm で両端部を欠損している。錆のため全容は不明である。他に時期を決定する遺物は出土していないが、柱間尺と棟方向から見て中世に属すると思われる。(高橋)

R B 009 掘立柱建物跡 (第 260 図、写真図版 107)

<位置・重複関係> 遺構は東側調査区の一 1 B 区に位置し、東南東側約 9 m に R B 008 掘立柱建物跡が隣接している。奈良時代の R A 135 竪穴住居跡、平安時代の R A 154・210 竪穴住居跡、R E 006 竪穴状遺構の 4 棟と重複している。新旧関係は各遺構を切っていることから、(新) R B 009 掘立柱建物跡→R A 154・210・R E 006 竪穴状遺構→(旧) R A 135 竪穴住居跡となる。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面にかけて検出している。また、南側の一部 4 本の柱穴は、第 19 次調査区内(公団側)に延びている。

<規模・方向> 規模は桁行 5 間(10.90 m)、梁行 5 間(10.60 m) の方形に近い掘立柱建物跡である。棟方向はやや南南東~北北西を示しており、北に対し 7 度 30 分西偏する。

<身舎> 桁行・梁行の柱間寸法は、東側の E 1 柱~E 6 柱が 2.30 m+1.94 m+2.20 m+2.06 m+2.10 m、西側 A 1 柱~A 6 柱が 2.18 m+2.06 m+2.10 m+2.15 m+2.10 m、南側が A 6 柱~F 6 柱が 2.20 m+2.47 m+1.78 m+2.36 m+2.08 m、北側が A 1 柱~E 1 柱が 2.16 m+2.30 m+2.04 m+2.18 m+2.20 m である。

<掘り方・柱痕> 柱穴掘り方の平面形は円形、楕円形、方形、隅丸長方形等があり、楕円形が半数以上を占めている。規模は径 38~106 cm、深さは 11~52 (平均 27.5) cm、柱痕は径 15~20 cm を測る。また、礎石は径 20~40 cm 大の亜円礫や亜角礫を使用しており、20 本の柱穴で検出されている。埋土は黒褐~褐色シル

柱穴No	A 1 柱	A 2 柱	A 3 柱	A 4 柱	A 5 柱	A 6 柱	B 1 柱	B 2 柱	B 3 柱	B 4 柱
直径cm	64×56	73×63	75×57	67×51	68×62	81×57	67×48	57×53	69×65	75×73
深さcm	28	32	34	23	18	52	35	22	32	27
柱穴No	B 5 柱	B 6 柱	C 1 柱	C 2 柱	C 3 柱	C 4 柱	C 5 柱	C 6 柱	D 1 柱	D 2 柱
直径cm	64×57	73×70	72×68	71×65	70×64	63×55	38×29	55×45	74×55	44×40
深さcm	50	48	23	20	25	21	11	38	33	34
柱穴No	D 3 柱	D 4 柱	D 5 柱	D 6 柱	E 1 柱	E 2 柱	E 3 柱	E 4 柱	E 5 柱	E 6 柱
直径cm	77×65	91×68	56×49	—	78×66	71×58	63×61	76×61	76×70	62×58
深さcm	28	30	15	—	30	18	23	11	22	33
柱穴No	F 1 柱	F 2 柱	F 3 柱	F 4 柱	F 5 柱	F 6 柱				
直径cm	75×59	90×63	86×84	61×60	93×87	106×68				
深さcm	26	40	31	11	19	20				

トで構成され、炭化物と焼土粒を含んでいる。

<遺物・時期> 遺物は出土していないが、隣接する R B 008 掘立柱建物跡と棟方向や柱間尺が類似する事から中世に属すると思われる。(高橋)

#### R B 013 掘立柱建物跡 (第 261 図、写真図版 110)

<位置・重複関係> 調査区西側の 1-B 区に位置する。建物の北側は調査区外に延びている。南東隅付近で R E 010 竪穴状遺構と重複する。明確には確認できなかったが、新旧関係は(新) R B 013 掘立柱建物跡→(旧) R E 010 竪穴状遺構と思われる。検出はIV層下位～III層上面である。

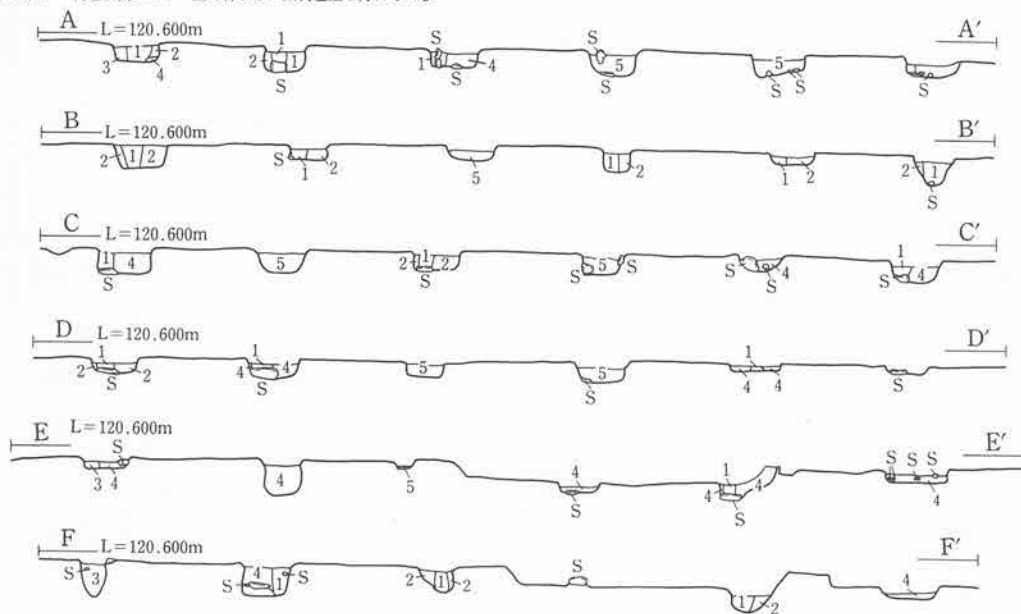
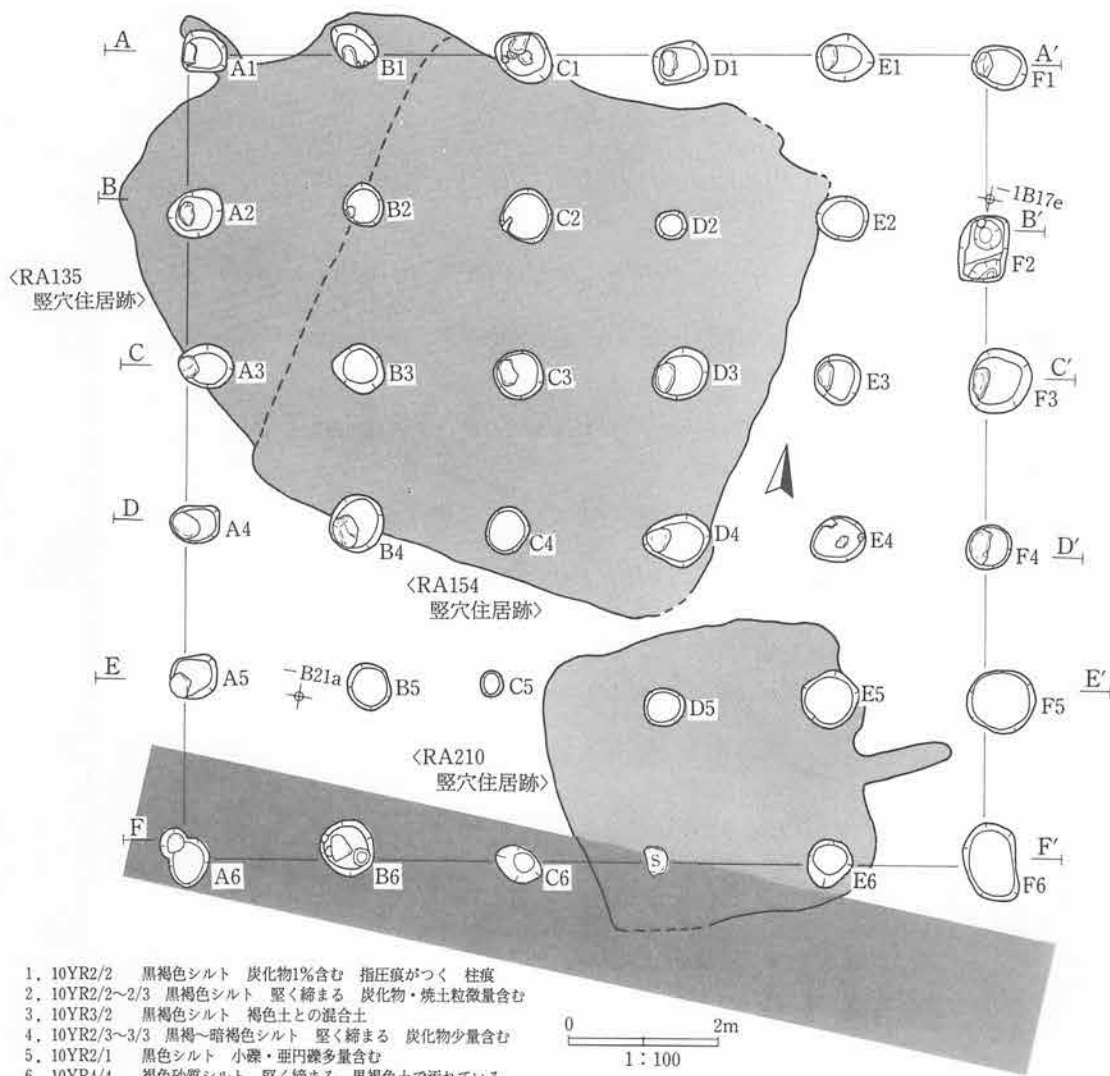
<規模・方向> 規模は桁行 6 間 (15.50 m)、梁行 3 間 (7.1 m) 以上の東西棟で、おそらく梁行は北側に延びるものと思われる。棟方向は東南東～西北西を示し、北に対して 3 度東偏している。

<身舎> 東側と南側に庇をもつ、桁行 5 間で、P 109 の北側で P 106 の西側にあたる部分の柱穴が検出されなかったため、梁行き 3 間になると考えられる。桁行の柱間寸法は、南側 P 90～P 102 柱が、3.0 m+2.60 m+2.53 m+2.80 m+2.80 m+1.85 m、梁行柱間寸法が東側 P 95～P 106 柱が 2.9 m+2.25 m+1.85 m である。

<掘り方・柱痕> 柱穴掘り方の平面形は円形を基調とし、楕円形 (P 99・P 101)、隅丸方形 (P 94) もある。規模は径 23～56 cm、深さは 27～57 cm である。柱痕は P 92、P 95、P 101、P 102 で確認している。柱穴埋土は黄褐色土ブロックの混入する黒色土のほか、黒褐色土を主体としている。

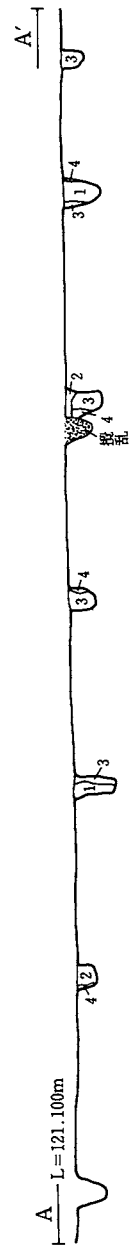
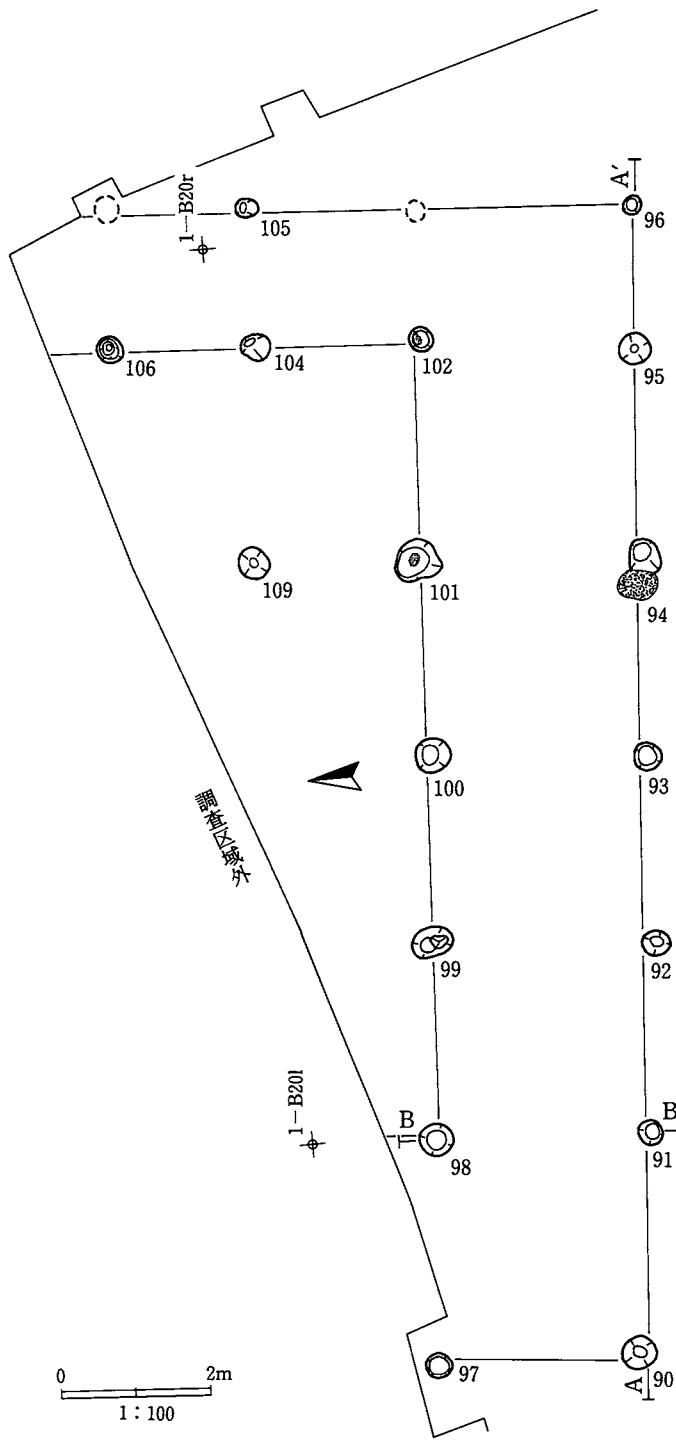
柱穴No	P 90	P 91	P 92	P 93	P 94	P 95	P 96	P 97	P 98	P 99
直径cm	48×45	35×32	39×33	39×37	49×43	42×41	28×23	37×35	47×43	56×38
深さcm	40	27	57	39	50	52	32	30	38	55
柱穴No	P 100	P 101	P 102	P 104	P 105	P 106	P 109			
直径cm	47×45	63×62	35×31	39×37	32×26	48×35	43×39			
深さcm	61	48	32	36	40	41	?			

<遺物・時期> 遺物は出土していない。時期は確かではないが、柱間尺などから見て中世に属すると思われる。(金子)

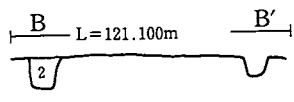


第260図 RB009掘立柱建物跡

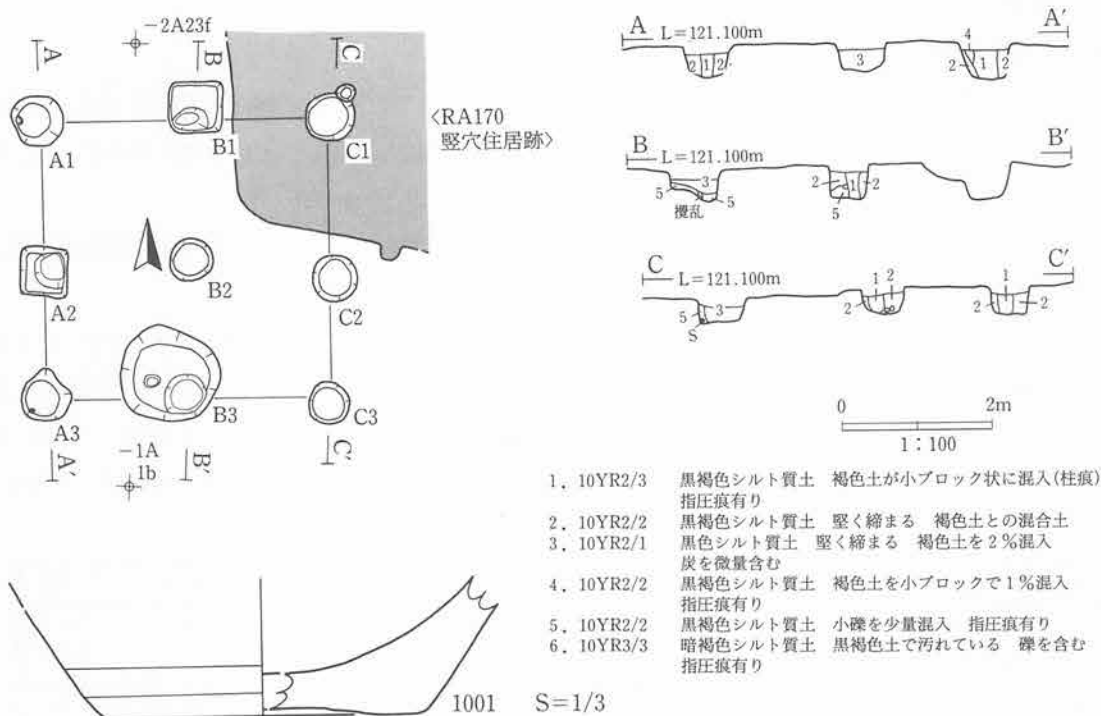




- 1. 柱痕
- 2. 黒褐色土の埋土
- 3. 黄褐色土ブロックが混入する黒色土
- 4. 壁崩落土



第261図 RB013掘立柱建物跡



第262図 RB018掘立柱建物跡・出土遺物

R B 018 掘立柱建物跡 (第 262 図、写真図版 108・287)

<位置・重複関係> 遺構は北側調査区の-1 A区に位置し、北東側で平安時代 RA 170 竪穴住居跡と重複している。新旧関係は竪穴住居跡を切っている事から、(新) R B 018 掘立柱建物跡→(旧) R A 170 竪穴住居跡である。検出はIV層中位面で確認されている。

<規模・方向> 規模は桁行2間(3.88m)、梁行2間(3.80m)のほぼ方形を呈する掘立柱建物跡である。北に対しては1度程西偏をしている。

<身舎> 桁行・梁行の柱間寸法は、東側のC1柱~C3柱が2.10m+1.70m、西側A1柱~A3柱が2.00m+1.76m、南側がA3柱~C3柱が1.88m+2.00m、北側がA1柱~C3柱が2.00m+1.88mである。

<掘り方・柱痕> 柱穴掘り方の平面形は円形、楕円形、方形等があり、円形が半数以上を占めている。規模は径54~132cm、深さは32~50(平均41.3)cm、柱痕は径18~22cm前後を測る。B3柱は径が1m以上と他に比較して規模が大きい。埋土は黒~黒褐色シルト質土を主体としており、炭を微量に含んでいる。

柱穴No.	A1柱	A2柱	A3柱	B1柱	B2柱	B3柱	C1柱	C2柱	C3柱
直径cm	72×68	65×64	65×62	73×68	58×58	132×128	76×74	62×60	56×54
深さcm	44	38	48	42	46	50	32	34	38

<遺物・時期> 遺物はB2柱埋土中から、1001の中世陶器甕底部破片が1点出土している。時期は遺物と柱間尺から中世に属すると思われる。(高橋)

(2) 近世

R B 006 掘立柱建物跡 (第 263・265 図、写真図版 106・287)

<位置・重複関係> 調査区北西の1-A区に位置する。RA 132 竪穴住居跡、RD 144 土坑、RD 218 土坑、RD 228 土坑、RD 223 土坑、RG 159 溝跡、RG 069 溝跡と重複し、どの遺構よりも新しい。検出はIV層上面である。

<規模・方向> 桁行6間(11.6m)、梁行4間(8.0m)の東西棟で、棟方向は東北東～西南西である。北に対して9度30分西偏する。

<平面形式> 4間×6間の直屋で、間取りは下手と真ん中に梁行いっぱい部屋を取り、上手には2間×2間の部屋が2部屋ある。「広間型三間取り」の間取りを呈する。桁行きの柱間寸法は南側柱が西側から1.85m+2.06m+1.80m+2.00m+2.02m+1.85m、北側柱は西から1.91m+1.98m+2.02m+1.90m+1.88m+1.98mである。梁行は西側柱が北から2.13m+1.95m+1.75m+2.10m、東側柱が北から1.95m+2.00m+1.95m+2.15mで、平均6尺6寸である。

柱穴No	P 500	P 501	P 502	P 503	P 504	P 505	P 506	P 507	P 508	P 509
直径cm	55×52	46×43	52×51	57×52	53×52	45×43	69×62	41×38	54×42	47×46
深さcm	60	63	55	76	62	48	52	26	25	43
柱穴No	P 510	P 511	P 512	P 513	P 514	P 515	P 516	P 517	P 518	P 519
直径cm	47×41	61×55	48×46	62×54	50×44	64×52	62×54	50×46	51×42	52×43
深さcm	60	65	66	66	55	58	75	37	48	33
柱穴No	P 520	P 521	P 528	P 688	P 689					
直径cm	43×41	57×53	27×25	75×57	42×35					
深さcm	33	37	27	35	32					

<掘り方・柱痕> 柱掘り方の平面形は楕円形、円形を基調としている。規模は41～75cmの範囲で、深さは25～75cmである。側柱では19基中15基に黒褐色土の柱痕跡が認められる。埋土は黄褐色土ブロックや黒色土ブロックを含む黒褐色土～暗褐色土である。

<遺物・時期> 遺物の出土はないが、平面形態から近世に属すると考えられる。(金子)

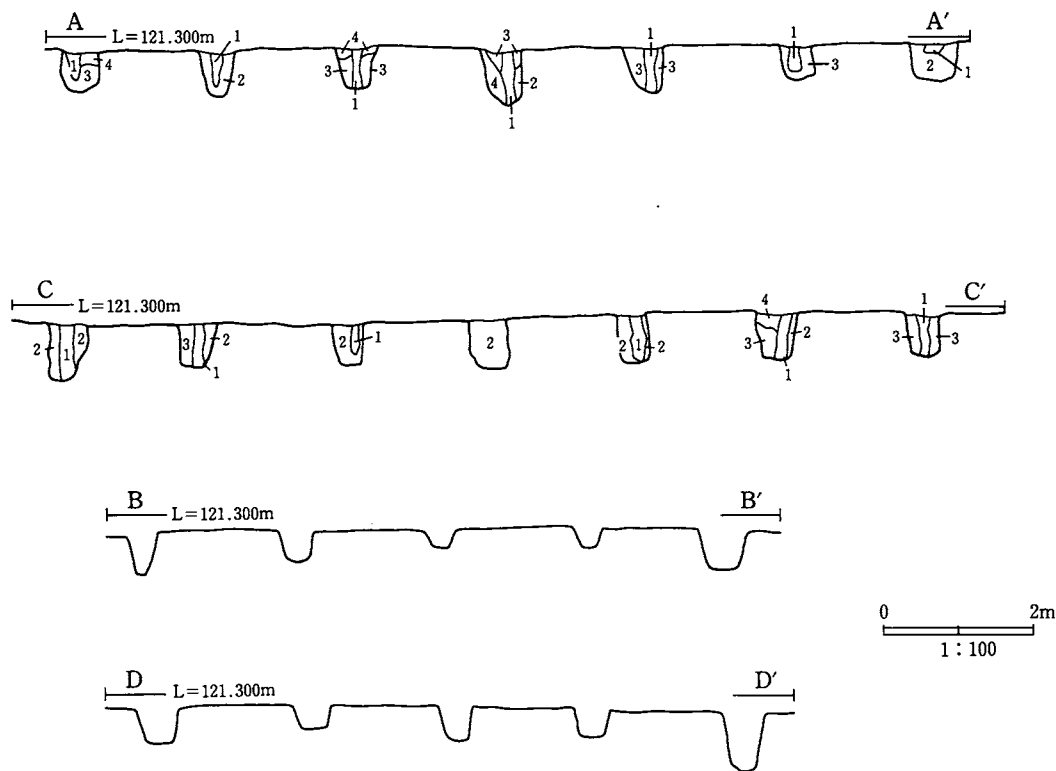
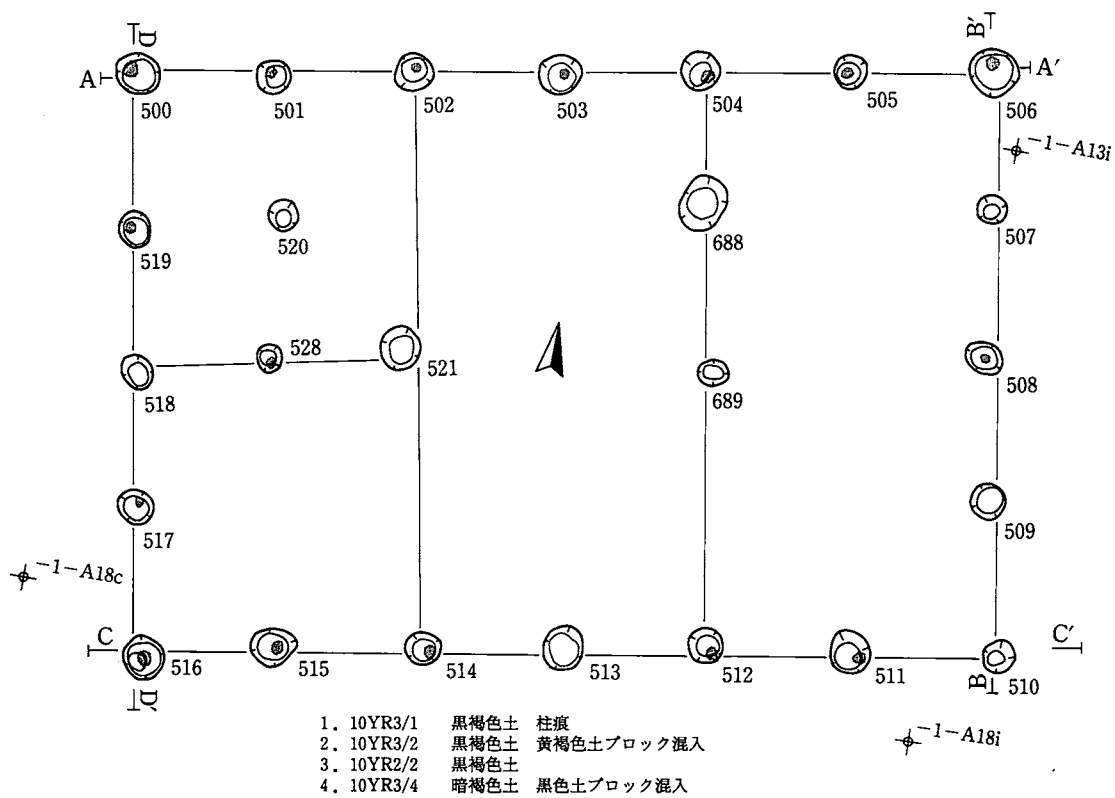
R B 010 掘立柱建物跡 (第 264・265 図、写真図版 109・287)

<位置・重複関係> 調査区西側の2-A区に位置する。RD 104 土坑、RD 105 土坑、RD 106 土坑、RD 111 土坑、RD 119 土坑と重複し、新旧関係は(旧)RB 010 掘立柱建物跡→RD 106 土坑→RD 105 土坑→(新)RD 104 土坑と(旧)RB 010 掘立柱建物跡→RD 119 土坑→(新)RD 111 土坑である。

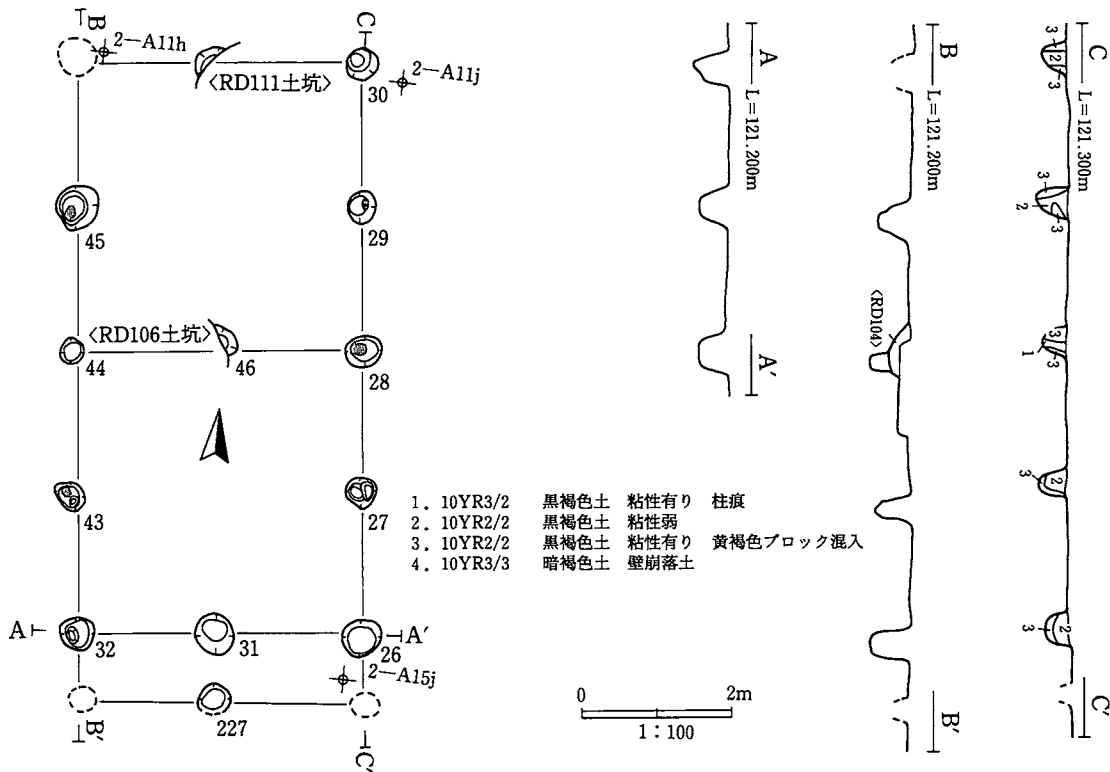
<平面形態・規模> 検出された部分は4.5間(8.9m)×2間(4.3m)の南北に長い建物であるが、東側

柱穴No	P 26	P 27	P 28	P 29	P 30	P 31	P 32	P 43	P 44	P 45
直径cm	53×49	41×41	50×42	45×37	45×41	55×50	48×43	46×34	46×34	63×55
深さcm	38	37	33	43	34	39	52	49	52	40
柱穴No	番なし	P 227	P 46							
直径cm	50×?	44×?	45以上							
深さcm	?	26	27							

が調査区外に延びている可能性があり、現時点では東西棟か南北棟か不明である。南側に半間の下屋柱が付



第263図 RB006掘立柱建物跡



第264図 RB010掘立柱建物跡

く。2間×2間の部屋を2部屋南北にとっている。西側梁行の柱間寸法は南から1.95m(6尺4寸)+1.83m(6尺)+1.85m(6尺1寸)+?mである。桁行の柱間寸法は南側で、西から1.95m(6尺4寸)+2.00m(6尺6寸)mである。〈方向〉 南北の軸方向は、北に対して5度30分西偏する。

〈掘り方・柱痕〉 柱穴の平面形は円形、楕円形を基調としている。規模は径が37~55cm、深さ26~52cmの範囲である。柱痕跡は検出された柱穴13基中、5基に認められる。

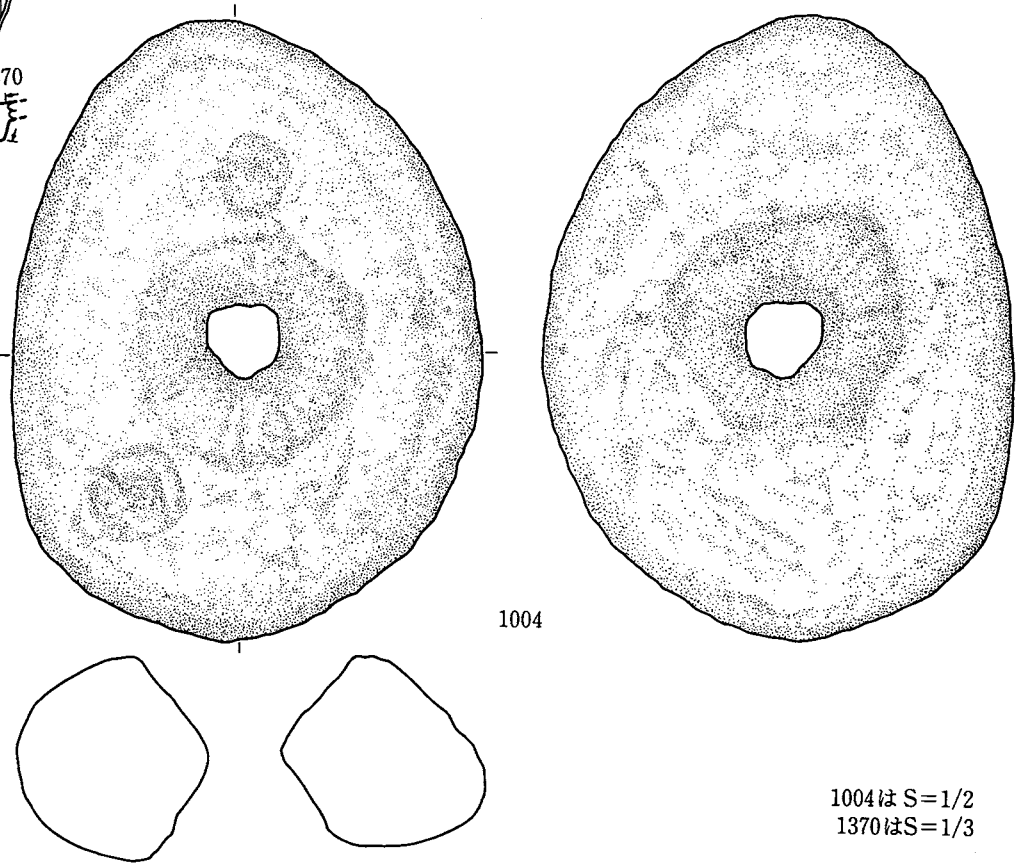
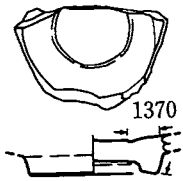
〈遺物・時期〉 P 29から18世紀の肥前産の陶器(1370)が出土している。このことから、本建物跡は18世紀頃のものと考えられる。また、P 30からは有孔石製品が出土している。(金子)

#### RB 011 掘立柱建物跡 (第266図、写真図版110)

〈位置・重複関係〉 調査区西側の2-A区に位置する。RD 107土坑、RD 101土坑、RD 102土坑、RZ 012馬屋、RB 012掘立柱建物跡と重複する。本掘立柱建物跡の柱穴P 153が、RB 012掘立柱建物跡のP 154を切っていること、同じくP 11がRB 012掘立柱建物跡のP 65を切っていることから新旧関係は(旧)RB 012掘立柱建物跡→(新)RB 011掘立柱建物跡である。RD 107土坑、RD 101土坑は柱穴が直接切りあっていないため、新旧は不明である。RD 102土坑、RZ 012馬屋は本遺構よりも新しく、(旧)RB 011掘立柱建物跡→(新)RD 102土坑、RZ 012馬屋となる。

〈平面形態・規模〉 東西に下屋柱の付く梁行3間、桁行6間の南北棟で、3間×2間の3部屋が南北に並んでいる。また、最も北の部屋に東側に続くと見られる半間分の柱が検出されている。これより東は調査区外であるため、未調査であるが、東側に馬屋の付く曲屋であった可能性も高い。梁行の柱間寸法は北側で、

RB010



1004は S=1/2  
1370は S=1/3

第265図 RB006・010掘立柱建物跡出土遺物

柱穴No	P 114	P 115	P 117	P 118	P 55	P 58	P 8	P 62	P 21	P 97	P 86
直径cm	61×48	45×40	47×45	43×42	60×49	46×43	87×63	65×57	52×45	70×41	56×55
深さcm	44	58	45	35	63	69	69	63	67	55	65
柱穴No	P 88	P 13	P 153	P 25	P 225	P 212	P 211	P 135	P 10	P 11	P 12
直径cm	45×41	53×44	57×57	42×37	60×42	48×47	51×49	63×52	49×49	57×43	55×57
深さcm	69	69	64	48	41	54	58	60	41	49	65
柱穴No	P 22	P 23	P 24	P 224	P 210	P 216	P 217	P 132	P 69		
直径cm	49×43	50×45	50×46	45×41	44×40	52×49	43×42	35×32	46×42		
深さcm	51	57	63	70	36	39	39	24	51		

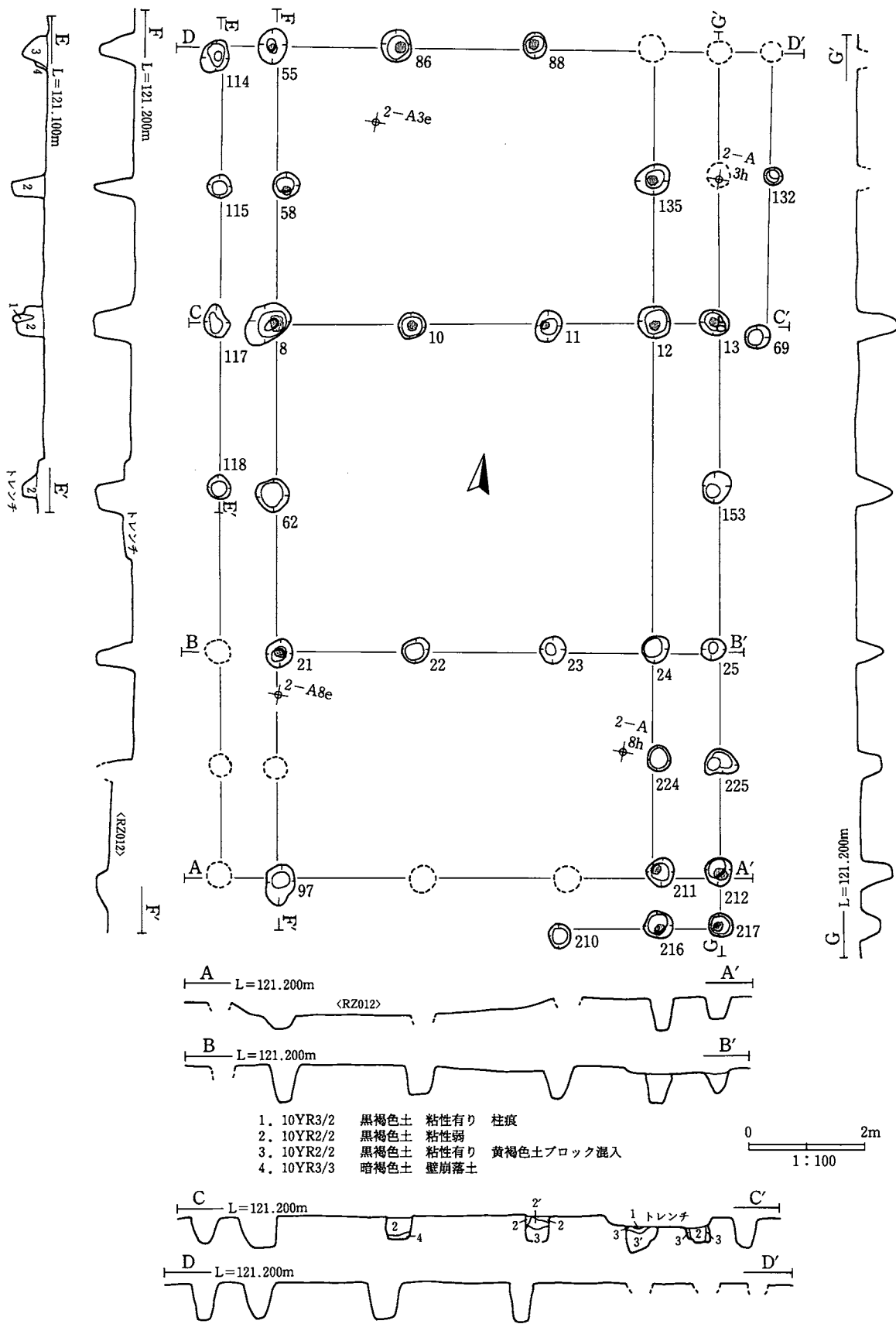
西から 2.22 m (7 尺 3 寸)+2.34 m (7 尺 7 寸)+2.08 m (6 尺 9 寸)、桁行の柱間寸法は西側で南から 3.95 m(13 尺、2 間分、R Z 012 馬屋跡と重複しているため、破壊されたか、検出できなかったと思われる)+2.70 m (8 尺 9 寸)+2.96 m (9 尺 8 寸)+2.30 m (7 尺 6 寸)+2.47 m (8 尺 2 寸) である。

<方向> 桁行きの軸方向は7度30分西偏している。

<掘り方・柱痕> 柱穴は円形～楕円形を基調としている。径は32～70 cm、深さは24～70 cmの範囲である。柱痕跡は検出された柱穴31基中15基に認められた。

<遺物・時期> 建物跡からの遺物の出土はないが、周辺の遺構外出土遺物から本建物跡は近世に属すると考えられる。

(金子)



第266図 RB011掘立柱建物跡

R B 012 掘立柱建物跡 (第 267・272 図、写真図版 110・287)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。R D 107 土坑、R D 101 土坑、R D 102 土坑、R Z 012 馬屋、R B 012 掘立柱建物跡と重複する。R B 011 掘立柱建物跡の柱穴 P 153 が、本掘立柱建物跡の P 154 を切っていること、同じく R B 011 掘立柱建物跡の P 11 が本掘立柱建物跡の P 65 を切っていることから新旧関係は R B 012 掘立柱建物跡→R B 011 掘立柱建物跡である。R D 107 土坑、R D 101 土坑は柱穴が直接切りあっていないため、新旧は不明である。R D 102 土坑、R Z 012 馬屋は本遺構よりも新しく、R B 011 掘立柱建物跡→R D 102 土坑、R Z 012 馬屋となる。

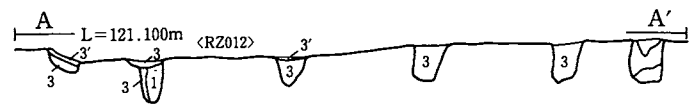
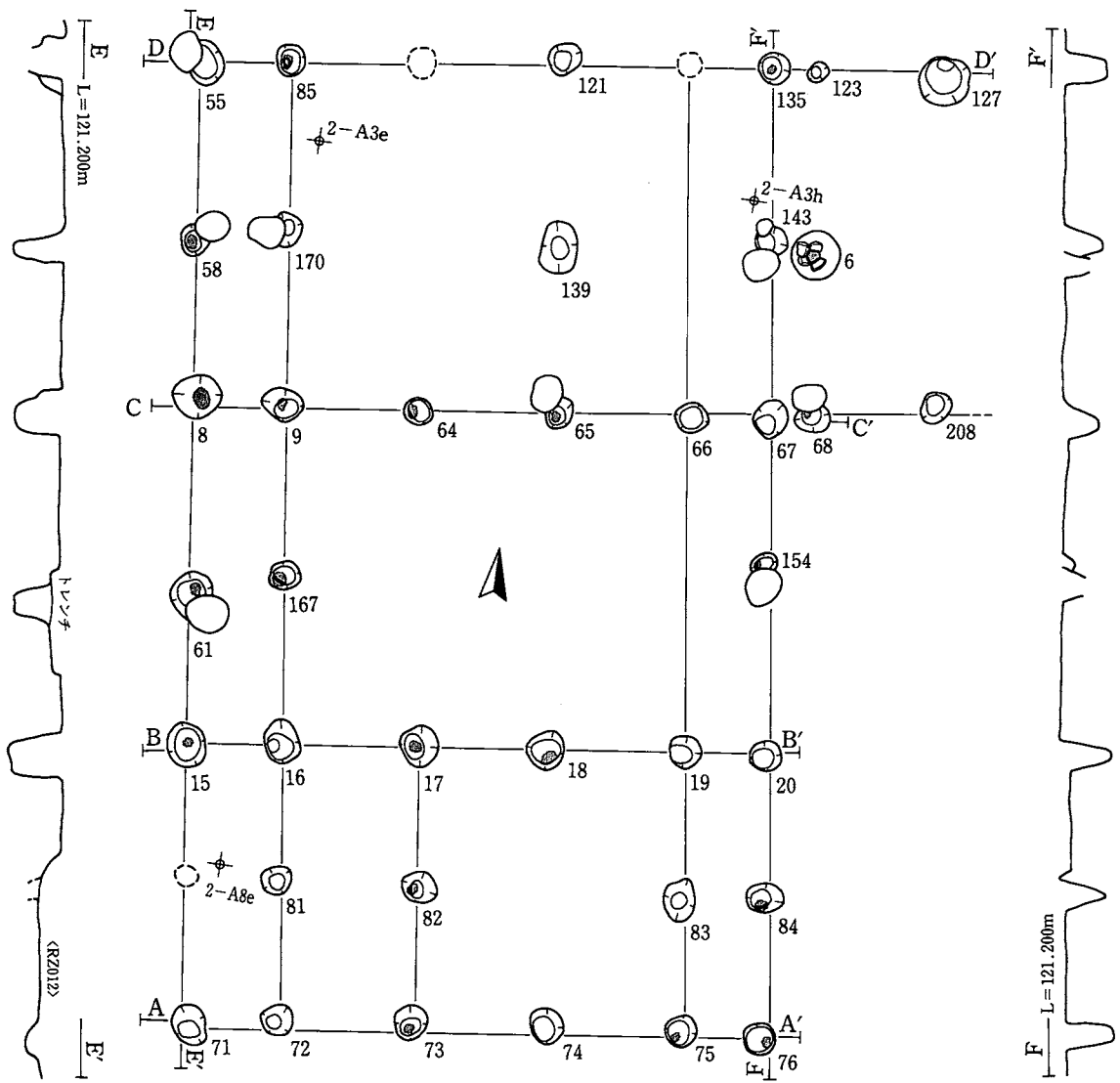
柱穴No	P 55	P 58	P 8	P 61	P 15	P 71	P 85	P 170	P 9	P 167
直径cm	63×50	44×39	68×60	59×?	63×52	58×46	40×35	49×?	59×46	45×38
深さcm	54	70	65	62	75	52	61	76	87	71
柱穴No	P 16	P 81	P 72	P 135	P 143	P 67	P 154	P 20	P 84	P 76
直径cm	61×47	45×41	45×43	43×43	44×?	53×47	38×?	43×41	52×41	47×45
深さcm	70	77	75	58	55	71	20	75	65	66
柱穴No	P 121	P 123	P 127	P 139	P 6	P 64	P 65	P 66	P 68	P 208
直径cm	46×41	31×23	72×70	72×49	67×67	41×37	46×7	48×43	49×?	50×47
深さcm	65	60	45	60	57	68	68	52	42	53
柱穴No	P 17	P 18	P 19	P 82	P 83	P 73	P 74	P 75		
直径cm	57×54	55×52	46×44	53×43	61×45	49×46	50×45	45×45		
深さcm	76	71	76	82	75	55	52	57		

<平面形・規模> 東西に下屋のつく梁行 3 間、桁行 6 間の南北棟で、南側の最も上手となる部分に、2 間×2 間、1 間×2 間の部屋が東西に並び、それより北に 3 間×2 間の部屋が 2 部屋並んでいる。また、下手となる北側の部屋の前面には東側に柱列が延びていることから、東側に馬屋をもつ曲屋となる可能性が高い。梁行の柱間寸法は南側で、西の下屋柱から 1.25 m (4 尺 1 寸)+1.85 m (6 尺 1 寸)+1.85 m (6 尺 1 寸)+1.25 m (4 尺 1 寸)、桁行の柱間寸法は北側から 2.25 m (7 尺 4 寸)+2.40 m (7 尺 9 寸)+2.40 m (7 尺 9 寸)+2.25 m (7 尺 4 寸)+1.85 m (6 尺 1 寸)+1.92 m (6 尺 3 寸) である。<方向> 桁行きの軸方向は 7 度 10 分西偏している。

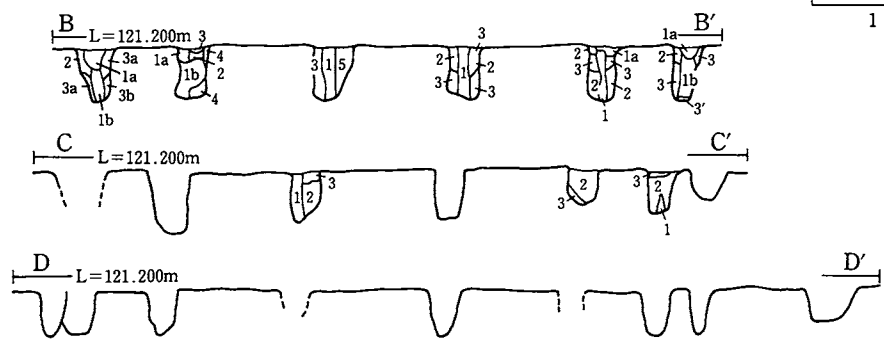
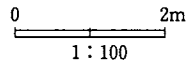
<掘り方・柱痕> 平面形は円形、楕円形を基調としている。径は 23~72 cm、深さは 20~77 cm である。

<遺物・時期> P 16 の埋土から 9 枚の銭が出土した。(1005~1010) これらのうち 1 枚は遺存状態が悪く、図化に至らなかった。また、1007・1009 は 2 枚の銭が密着している。銭は全て寛永通寶で、確認できたのは古寛永 (初鑄年代 1636 年)、新寛永文銭 (初鑄年代 1668 年) である。1009 は裏面が見えないので、新寛永の文銭か 3 期 (初鑄年代 1697 年及び 1767 年) のものか不明である。これらの遺物と周辺から近世の陶磁器が出土していることから、本遺構は近世に属すると考えられる。 (金子)

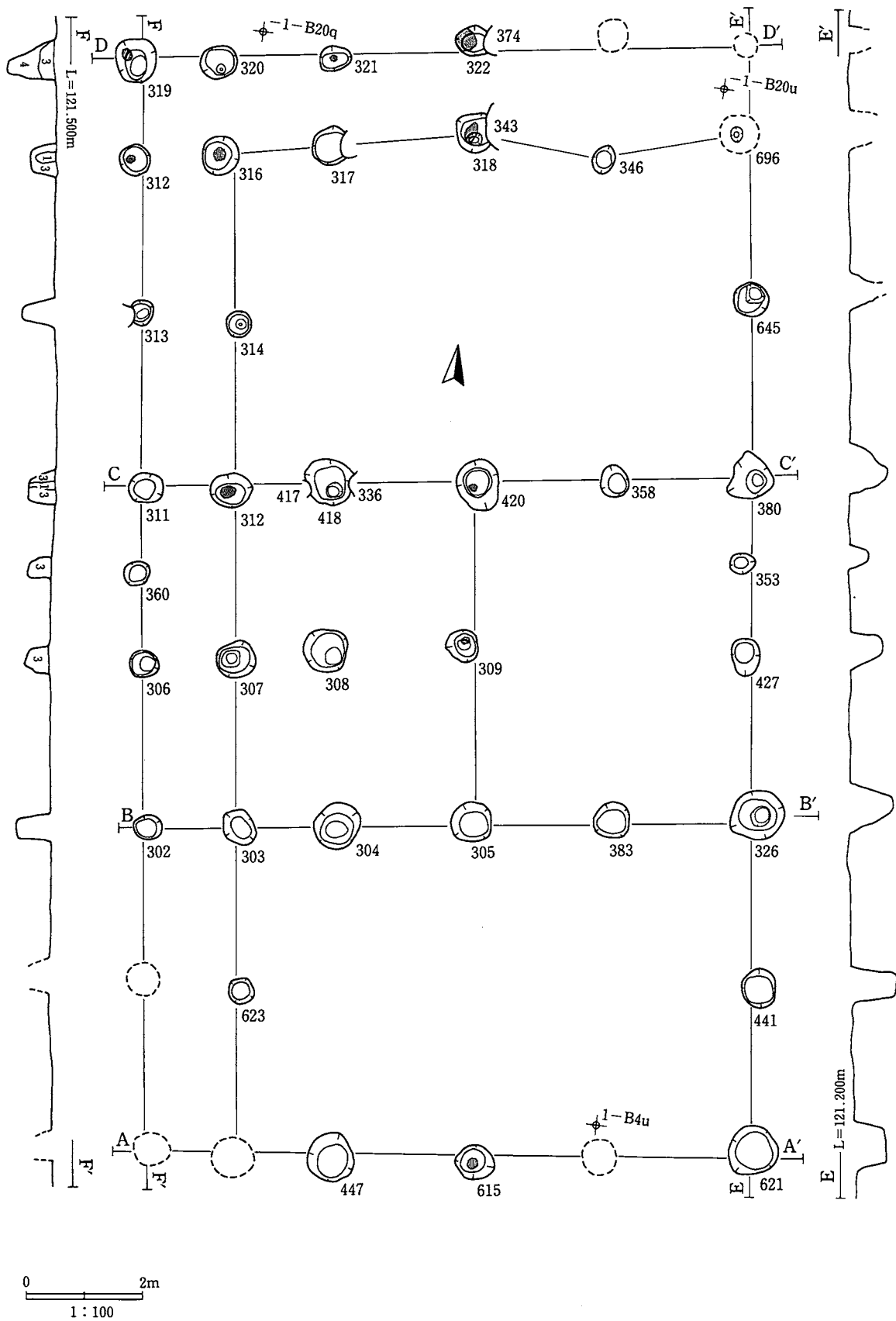




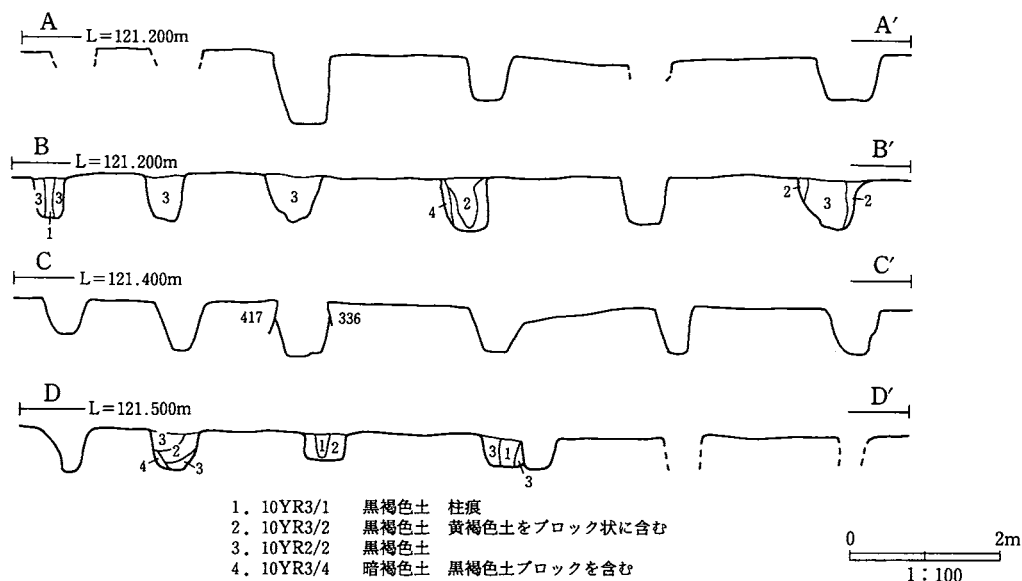
- 1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 柱痕
- 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱
- 3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロックが混入する
- 4. 10YR3/3 暗褐色土 壁崩落土



第267図 RB012掘立柱建物跡



第268图 RB014掘立柱建物跡(1)



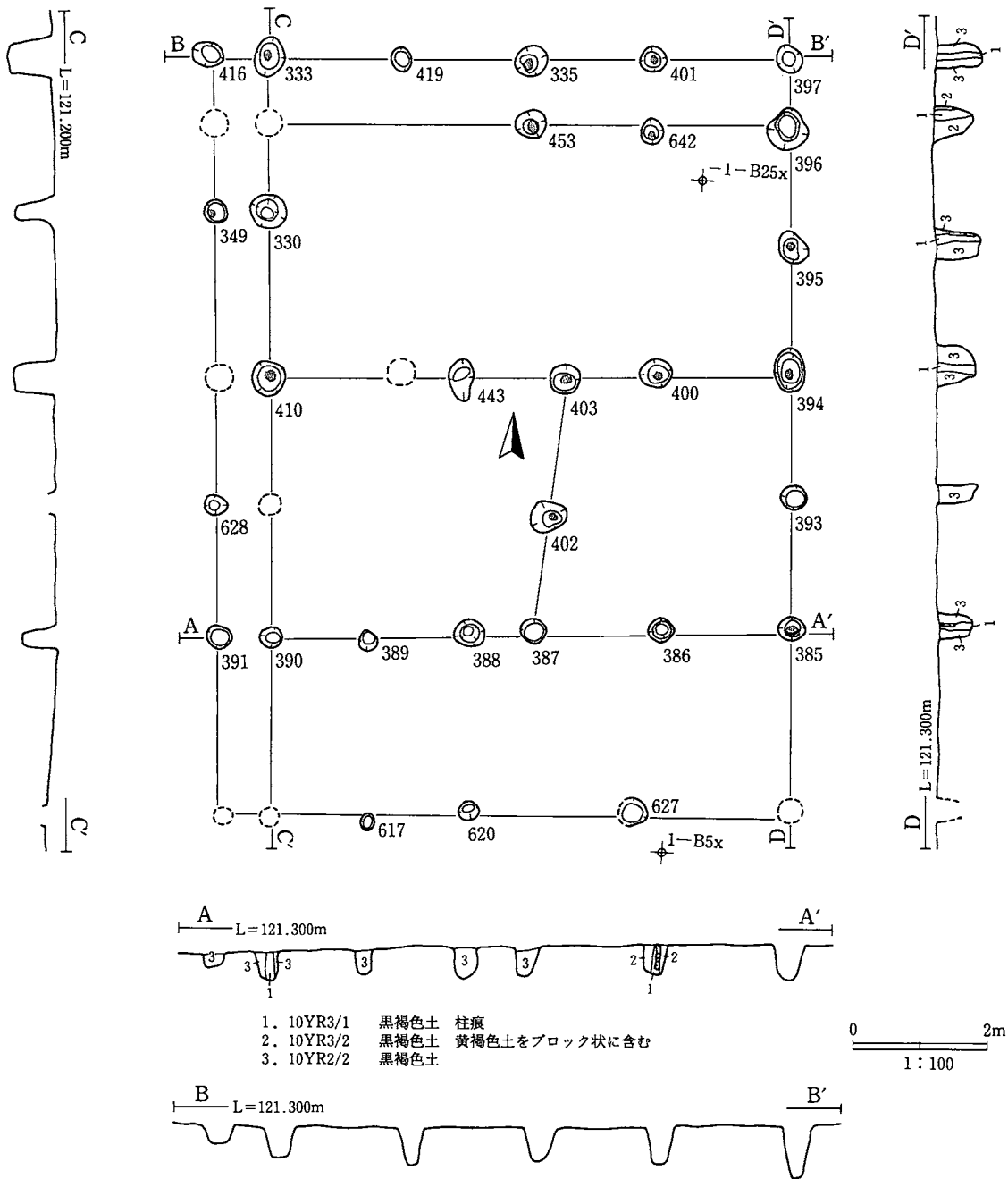
第269図 RB014掘立柱建物跡(2)

RB 014 掘立柱建物跡 (第 268・269・272 図、写真図版 111)

<位置・重複関係> 調査区西端の-1-B~-1-Bに位置する。RB 015 掘立柱建物跡、RB 016 掘立柱建物跡、RA 129 竪穴住居跡、RA 130 竪穴住居跡、RA 157 竪穴住居跡、RD 256 土坑、RD 255 土坑、RD 220 土坑と重複する。掘立柱建物跡との新旧関係は重複する柱穴がないことから不明である。また、いずれの竪穴住居跡よりも新しい。RD 256 土坑に切られ、RD 255 土坑、RD 220 土坑を切っている。

柱穴No	P 319	P 312	P 313	P 311	P 360	P 306	P 302	P 320	P 316	P 314
直径cm	87×70	52×53	45×39	60×51	45×40	52×50	51×43	63×55	70×63	46×44
深さcm	85	47	59	49	42	42	60	54	56	43
柱穴No	P 312	P 307	P 303	P 623	P 696	P 645	P 380	P 353	P 427	P 326
直径cm	74×60	70×68	67×55	47×46	27×21	61×60	87×77	45×36	65×49	97×85
深さcm	69	72	62	48	?	?	65	34	55	79
柱穴No	P 441	P 621	P 321	P 322	P 317	P 318	P 346	P 418	P 420	P 358
直径cm	69×58	91×83	55×43	52×?	69×66	68×?	51×37	87×?	89×73	56×49
深さcm	79	55	35	42	68	56	43	77	60	65
柱穴No	P 308	P 309	P 304	P 305	P 383	P 447	P 615			
直径cm	81×79	56×56	82×73	80×69	62×62	85×81	70×61			
深さcm	76	44	64	71	61	95	59			

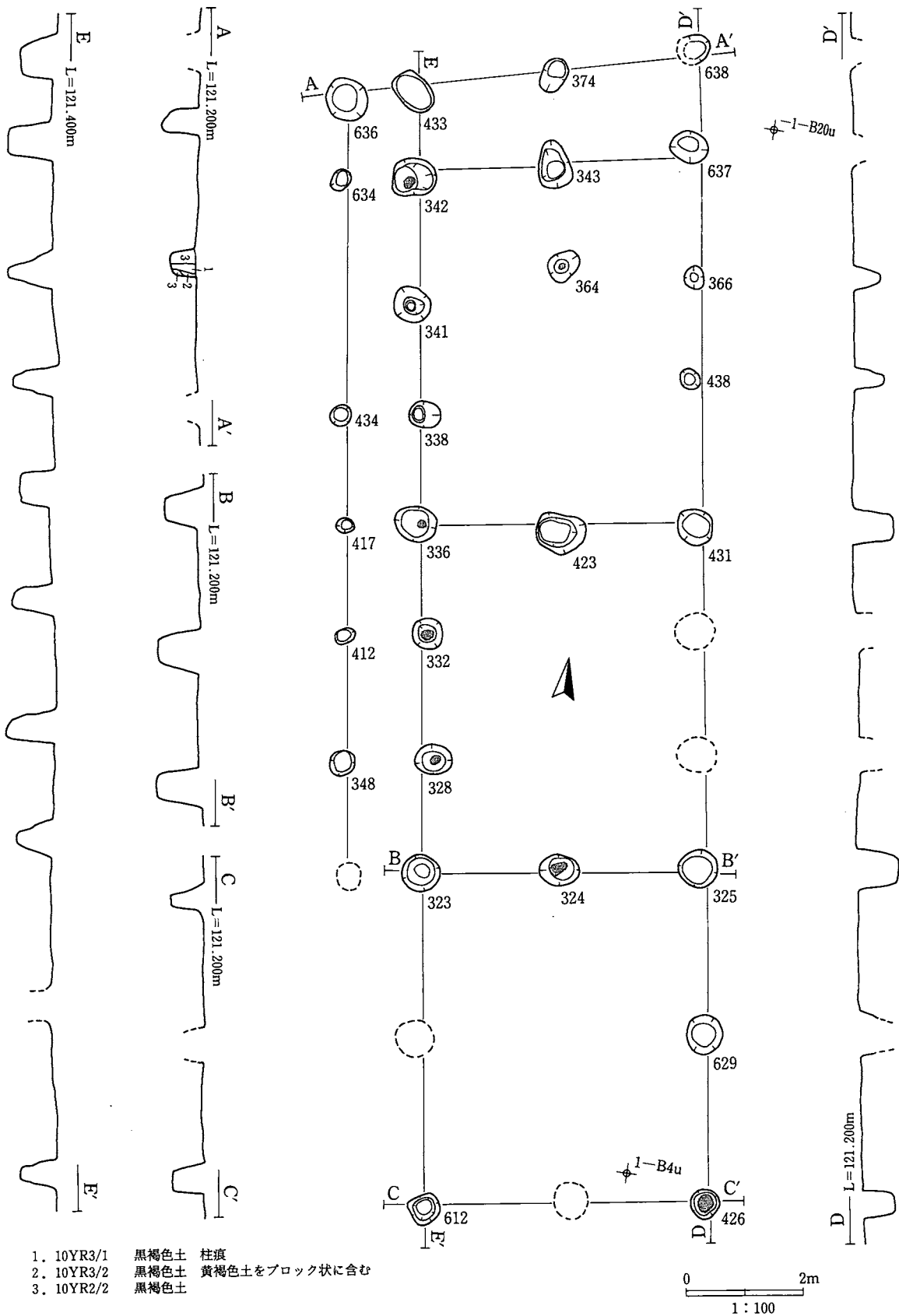
<平面形・規模> 北側と西側に下屋が付いた梁行4間、桁行6間の南北棟である。南側に4間×2間、つぎに2間×2間の2部屋を東西に取り、最も北に4間×2間の部屋を取っている。梁行の柱間寸法は北側で下屋柱から1.52m(5尺)+1.90m(6尺3寸)+2.45m(8尺1寸)+2.35m(7尺6寸)+2.34m(7尺7寸)で、下屋柱を除く最も西側の柱間が狭い。桁行は東側で南から、2.90m(9尺6寸)+3.00m(9尺9寸)+2.84m(9尺4寸)+半間1.52m(5尺)+半間1.45m(4尺8寸)+3.20m(10尺6寸)+2.75m(9尺1寸)である。



<方向> 桁行の軸は6度30分西偏している。

<掘り方・柱痕> 平面形は円形を主体としている。径は21~87cm、深さ34~95cmである。柱の痕跡は14基で検出された。柱穴の埋土内には根がため石と見られる円礫が多く据えられているものもあった。P 303、P 312、P 316、P 308、P 346である。

<遺物・時期> P 307の埋土から不明の鉄製品が出土している。P 304の底面からは銅銭が複数枚出土しているが、腐食が進んでおり、図化できなかった。P 380の埋土から1012の染付が、P 358の埋土から陶



第271図 RB016掘立柱建物跡

器摺鉢の破片 1013 が出土している。本遺構はこれらの出土遺物から近世に属すると考えられる。(金子)

**R B 015 掘立柱建物跡** (第 270・272 図、写真図版 111・287)

<位置・重複関係> 調査区西端の-1-B~-1-Bに位置する。R B 015 掘立柱建物跡、R B 016 掘立柱建物跡、R A 129 竪穴住居跡、R D 239 土坑と重複する。R D 239 土坑、各掘立柱建物跡との新旧関係は重複する柱穴がないことから不明である。また、R A 129 竪穴住居跡よりも新しい。

<平面形・規模> 北側と西側に下屋をもつ梁行4間、桁行5間の南北棟である。南側に4間×1間の部屋、つぎに2間×2間の部屋と2間×2間の部屋を東西に取り、最も北側に4間×2間の部屋を配している。柱間は東側柱、西側柱と北側、南側で異なっている。梁行の柱間寸法は北側で西下屋柱から0.85m(2尺8寸)+2.0m(6尺6寸)+1.9m(6尺3寸)+1.9m(6尺3寸)+2.0m(6尺6寸)、桁行の柱間寸法は東側で、北側下屋柱から1.0m(3尺3寸)+1.80m(5尺9寸)+1.88m(6尺2寸)+1.88m(6尺2寸)+2.0m(6尺6寸)である。

<方向> 桁行の軸方向は2度30分西偏している。

<掘り方・柱痕> 平面形は円形、楕円形を基調としている。径は22~63cm、深さは12~77cmである。柱痕跡は30基中、17基から検出されている。

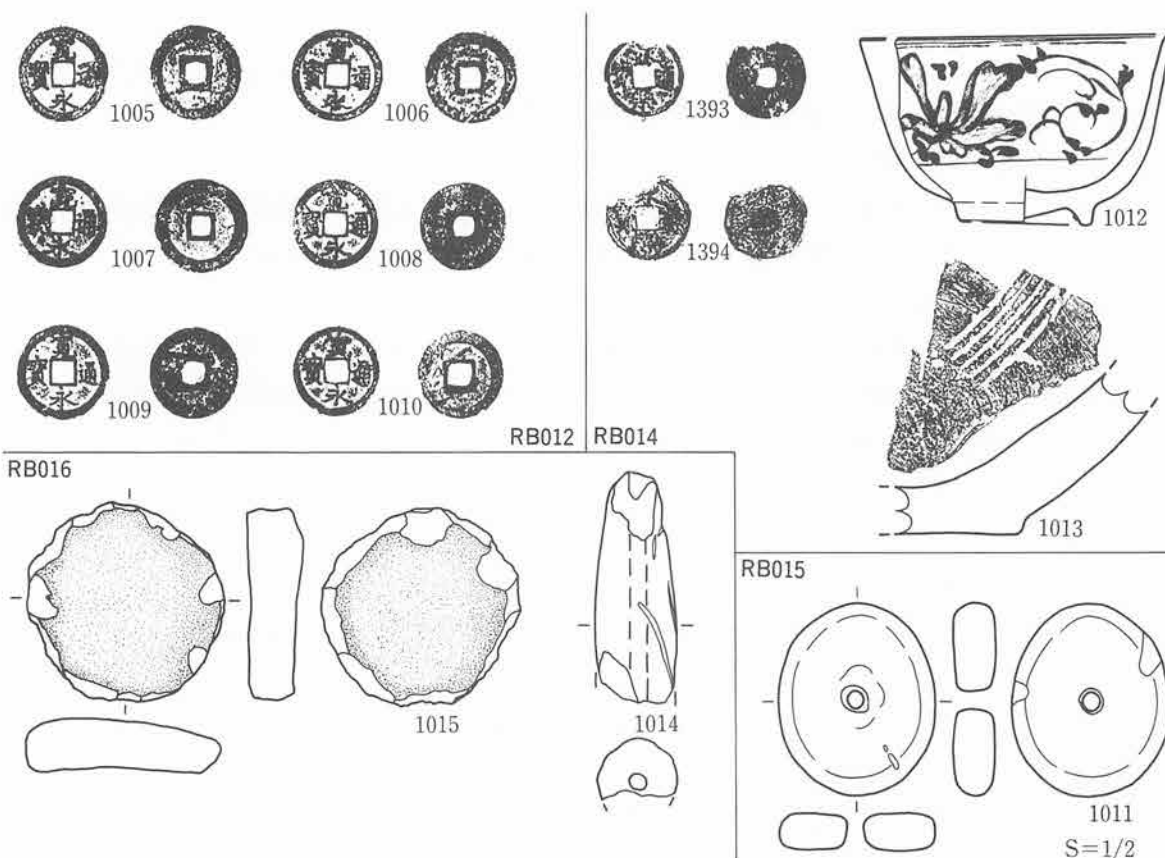
<遺物・時期> P 336の埋土から有孔石製品が出土しているが、流れ込みと考えられる。その他は遺物はないが、周辺から出土した陶磁器から、本建物は近世に属する可能性が高い。(金子)

柱穴No	P 416	P 349	P 628	P 391	P 333	P 330	P 410	P 390	P 397	P 396
直径cm	48×37	36×34	35×29	37×35	60×45	57×53	54×52	35×33	44×37	62×62
深さcm	29	43	?	20	56	58	61	53	77	59
柱穴No	P 395	P 394	P 393	P 385	P 419	P 335	P 401	P 453	P 642	P 443
直径cm	51×38	66×46	41×36	42×36	37×30	50×45	40×38	47×43	38×34	63×38
深さcm	69	58	62	51	55	50	55	?	27	58
柱穴No	P 403	P 400	P 402	P 389	P 388	P 387	P 386	P 617	P 620	P 627
直径cm	48×44	51×43	56×46	32×28	45×41	40×39	40×38	26×22	32×29	42×?
深さcm	43	56	47	37	47	45	46	12	16	55

**R B 016 掘立柱建物跡** (第 271・272 図、写真図版 111・287)

<位置・重複関係> 調査区西側の-1-B区、1-B区にまたがって位置している。R A 129 住居跡、R A 157 住居跡、R D 220 土坑、R D 256 土坑と重複し、新旧関係は(旧)R A 157 竪穴住居跡→R D 220 土坑→(新)R D 256 土坑である。

<平面形・規模> 北側と西側の一部を除いて下屋をもつ梁行2間、桁行8間の南北棟である。南側に2間×2間、つぎに2間×3間、北側に2間×3間部屋を配している。梁行の柱間寸法は北側で、西下屋から半間1.20m(3尺6寸)+2.50m(8尺3寸)+2.40m(7尺9寸)、桁行は西側で、北下屋柱から1.62m(5尺3寸)+2.14m(7尺1寸)+1.85m(6尺2寸)+1.88m(6尺2寸)+1.90m(6尺3寸)+2.15m(7尺1寸)+1.90m(6尺3寸)である。これに続く最も南側の部屋の西側柱間寸法は調査の際に1基見逃しているため、5.72mである。<方向> 桁行きの軸方向は8度10分西偏している。<掘り方・柱痕> 平面形は円形、楕円形を基調としている。径は25~81cm、深さ27~80cmで、身舎の柱に比べ、特に西側下屋柱が小さく、浅い。柱痕跡は28基中、7基に認められた。



第272図 RB012・014～016掘立柱建物跡出土遺物

柱穴No.	P 636	P 634	P 434	P 417	P 412	P 348	P 433	P 342	P 341	P 338
直径cm	79×73	41×30	39×36	33×25	37×25	49×44	79×54	79×64	64×59	55×45
深さcm	72	38	27	37	32	49	63	79	78	80
柱穴No.	P 336	P 332	P 328	P 323	P 612	P 638	P 637	P 366	P 438	P 431
直径cm	73×61	53×52	64×53	66×63	57×57	51×?	65×55	40×35	40×33	69×61
深さcm	62	72	86	62	62	?	?	46	51	73
柱穴No.	P 325	P 629	P 426	P 374	P 343	P 364	P 423	P 324		
直径cm	68×65	67×61	50×49	63×43	81×59	59×48	86×68	70×55		
深さcm	79	?	58	46	64	72	54	74		

<遺物・時期> P 304、P 311 から石製円盤及び土錘が出土しているが、流れ込みと考えられ、他に特に時期を示すような遺物は出土していない。周辺状況から近世に属する可能性が高い。(金子)

#### 4. 竪穴状遺構

竪穴状遺構は、東側調査区で5棟、西側調査区で7棟、北側調査区で7棟検出されている。19棟の時期は、奈良時代5棟、平安時代9棟、時期が不明5棟である。奈良時代から順に記載をする。

##### (1) 奈良時代

###### RE 009 竪穴状遺構（第273図、写真図版112）

〈位置・重複関係〉 調査区西側の2-B区に位置する。東コーナーをRD 115土坑と重複し、新旧関係は（新）RE 009竪穴状遺構→RD 115土坑である。〈平面形・規模〉 やや胴張りの隅丸方形を呈する。規模は3.69×3.40 m、壁高は65 cmである。

〈埋土〉 粘性に富む黒褐色土が主体で、黄褐色土ブロックの多少で9層に細分される。自然堆積の様相を呈している。

〈壁・床〉 壁はやや外傾して立ち上がる。床は締まりがあり平坦である。柱穴など他の施設は検出されない。

〈遺物・時期〉 奈良時代に属すると思われる。 (金子)

###### RE 010 竪穴状遺構（第273図、写真図版113・288）

〈位置・重複関係〉 調査区西側の1-B区に位置する。RB 013掘立柱建物跡を構成する柱穴と重複している。新旧関係は精査中には確認できなかったが、柱間などから建物の年代を考えると（新）RB 013掘立柱建物跡→（旧）RE 010竪穴状遺構である。〈平面形・規模〉 胴張りのややいびつな隅丸方形を呈する。規模は2.88×2.57 m、壁高は57 cmである。

〈埋土〉 黒色土、黒褐色土が主体で、黄褐色土を含む。8層に細分され、底面や壁際には黄褐色土の崩壊土が多い。

〈壁・床〉 壁は内湾気味に立ち上がる。床は若干の起伏はあるが平坦で、締まりがある。柱穴などの施設はない。

〈遺物・時期〉 埋土下層よりロクロ不使用の土師器が出土している。1016は中央部、1017は壁際から出土した坏で、体部に段が残る。1018は甕の下半部で、底部がやや突出している。これらの出土遺物から、奈良時代に属すると思われる。 (金子)

###### RE 011 竪穴状遺構（第274・275図、写真図版114・228）

〈位置・重複関係〉 調査区西側の2-A区に位置する。重複関係はない。〈平面形・規模〉 やや胴張りの隅丸長方形を呈する。規模は3.61×3.10 m、壁高は24 cmである。

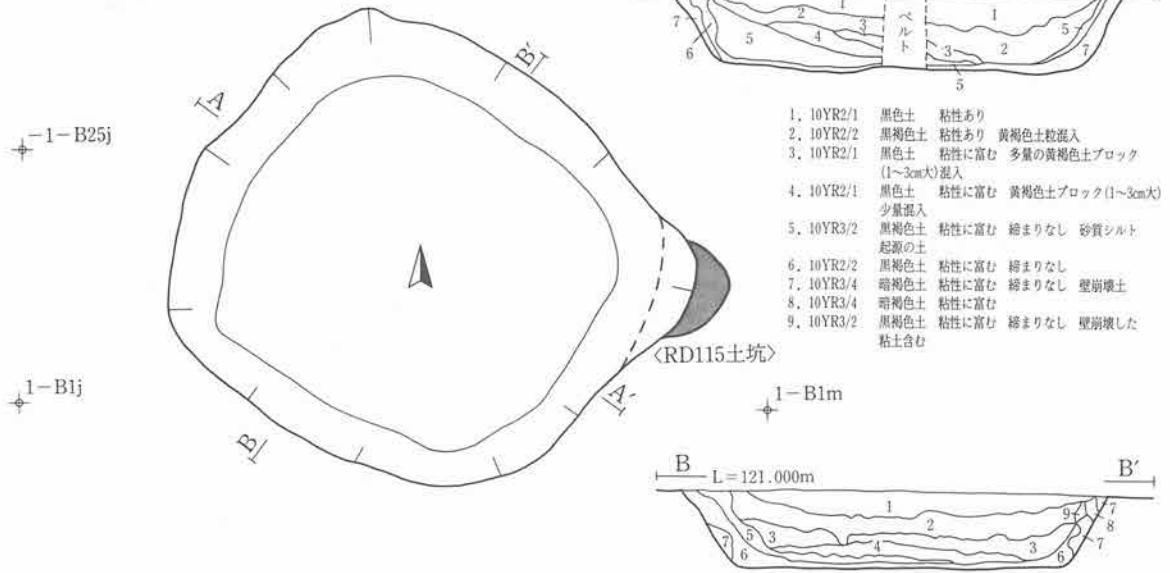
〈埋土〉 粘性があり、黄褐色土ブロックを含む黒色土が主体である。6層に細分される。

〈壁・床〉 壁はやや内湾気味に立ち上がる。柱穴などの施設はない。床は若干の起伏はあるが、平坦で、よく締まっている。

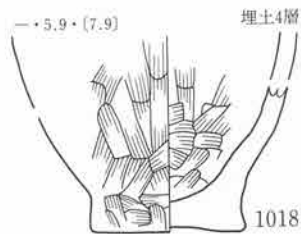
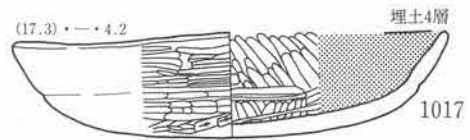
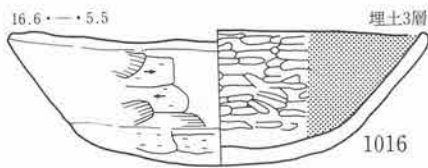
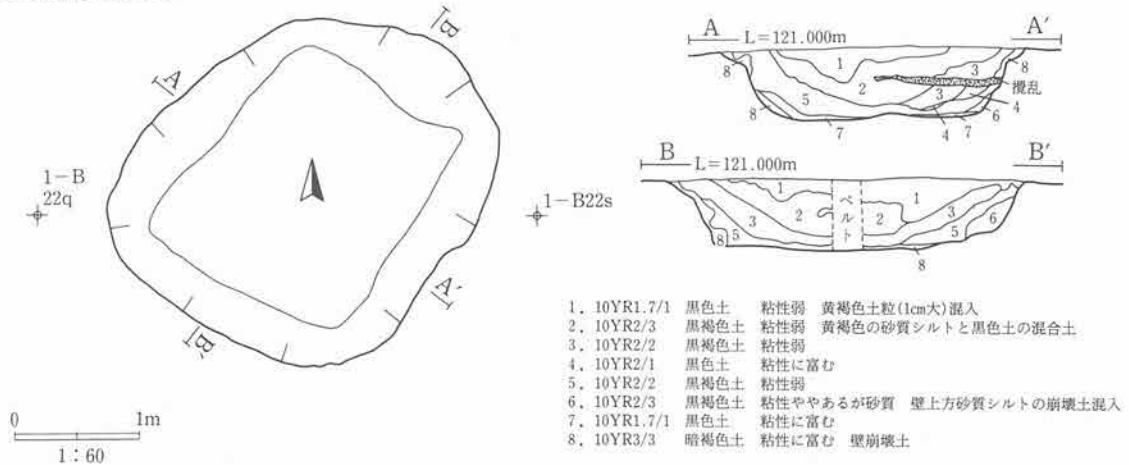
〈遺物・時期〉 床直上、埋土下層から、ロクロ不使用の土師器が出土した。1020・1021の鉢、1024・1026の甕は西よりの壁際から出土した。そのうち、1021・1024は倒立の状態出土している。なお1021は底部を欠いた状態で出土したが、RE 104竪穴状遺構埋土7層出土の底部と接合した。1023の甕は床のほぼ中央から潰れた状態で出土した。1025の甕は北東よりの壁際から床より若干浮いたような状態で、倒立で出土した。



RE009竪穴状遺構



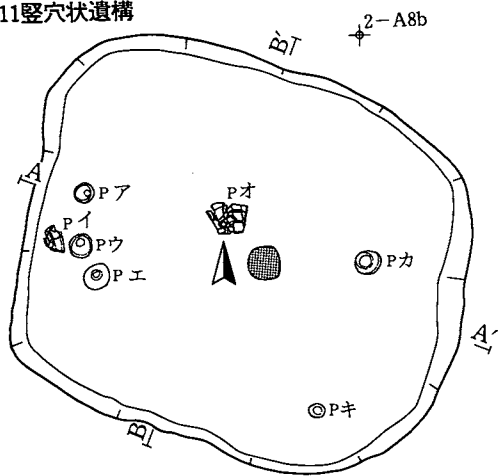
RE010竪穴状遺構



S=1/3

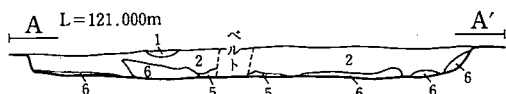
第273図 RE009・010竪穴状遺構・出土遺物

RE011 竪穴状遺構

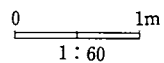


2-A8b

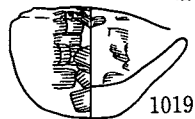
2-A10b



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 堅く締まる 黄褐色土粒(0.1~2cm大) 多量混入
2. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(0.2~1cm大) 少量混入
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.1~1.5cm大)混入 褐鉄少量混入
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.2~1cm大)混入
5. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.5~1cm大)混入
6. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(0.5~1cm大)混入

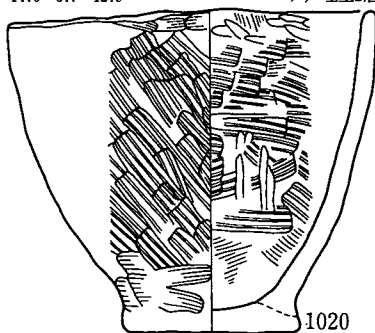


(7.2)・3.5・(4.5) 埋土2層



1019

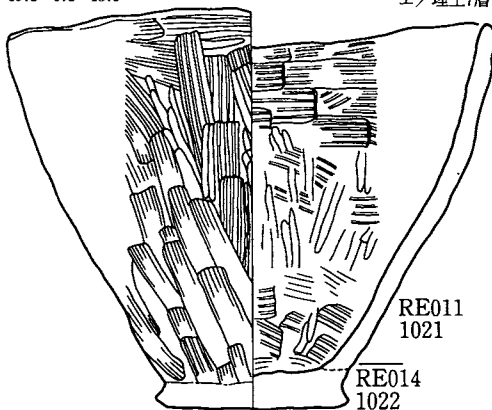
14.6・6.7・12.9



1020

ア/埋土2層

19.2・6.8・15.9

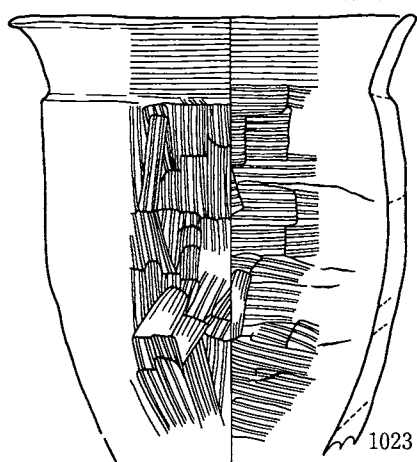


RE011  
1021

RE014  
1022

エ/埋土7層

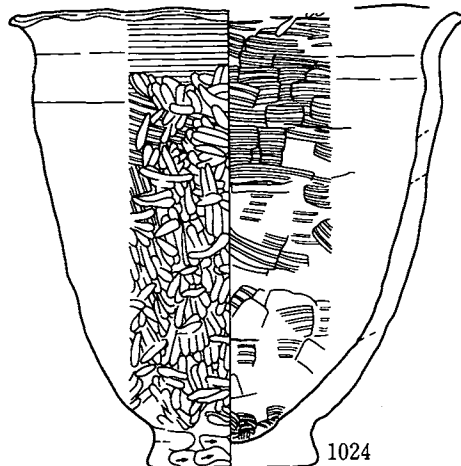
15.1・—・(17.8)



1023

床上/オ

18.1・6.8・18.3

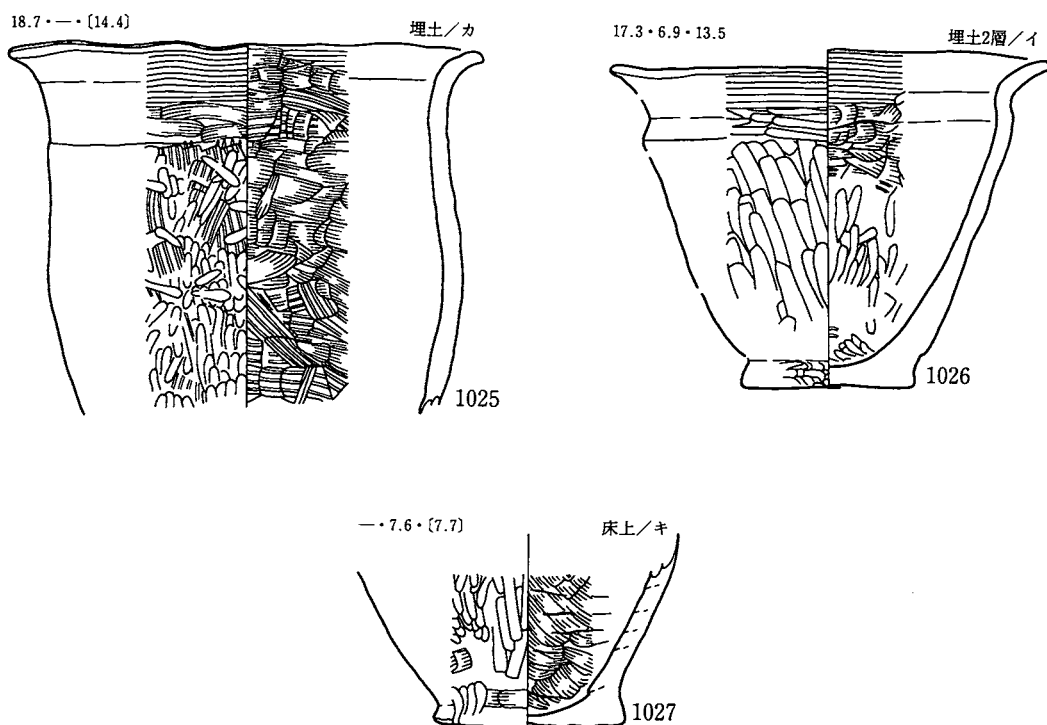


1024

床上/ウ

S=1/3

第274図 RE011 竪穴状遺構・出土遺物(1)



S=1/3

第275図 RE011 竪穴状遺構出土遺物(2)

1027 の甕底部は南東よりの壁際から倒立の状態出土している。これらの出土遺物から本遺構は古墳時代末から奈良時代に属すると考えられる。(金子)

RE 014 竪穴状遺構 (第 276・277 図、写真図版 115・288)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。重複関係はない。<平面形・規模> やや胴張りの隅丸方形を呈する。規模は 2.80×2.75 m、壁高 52 cm である。

<埋土> 黒褐色土が主体で、黄褐色砂質シルトを含む。8 層に細分される。最上層には砂粒を含む。

<壁・床> 壁は内湾して立ち上がる部分と外反して立ち上がる部分がある。北西壁は他の辺に比して、急に立ち上がる。南東壁はいったん急に立ち上がった後、緩やかに立ち上がる。床は平坦で、締まっている。柱穴などの施設はない。

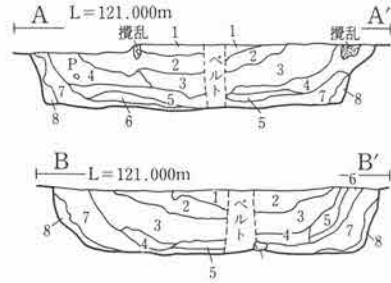
<遺物・時期> 埋土からロクロ不使用の土師器が出土している。1022 は埋土下層より出土した鉢の底部で、RE 011 竪穴状遺構出土の土器と接合した。1028 は埋土上位から出土した手捏ねの土器、1029 は埋土 6 層、1030 は埋土 2 層から出土した坏である。これらの出土遺物から、本遺構は古墳時代末から奈良時代に属すると考えられる。(金子)

RE 015 竪穴状遺構 (第 276・277 図、写真図版 116・287・288)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。RG 089 溝跡、RD 108 土坑、柱穴状土坑と重複しており、本遺構が最も古い。<平面形・規模> 隅丸方形を呈する。規模は 3.76×3.66 m、壁高は 81 cm である。

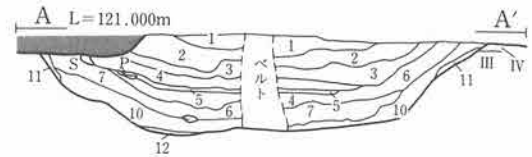
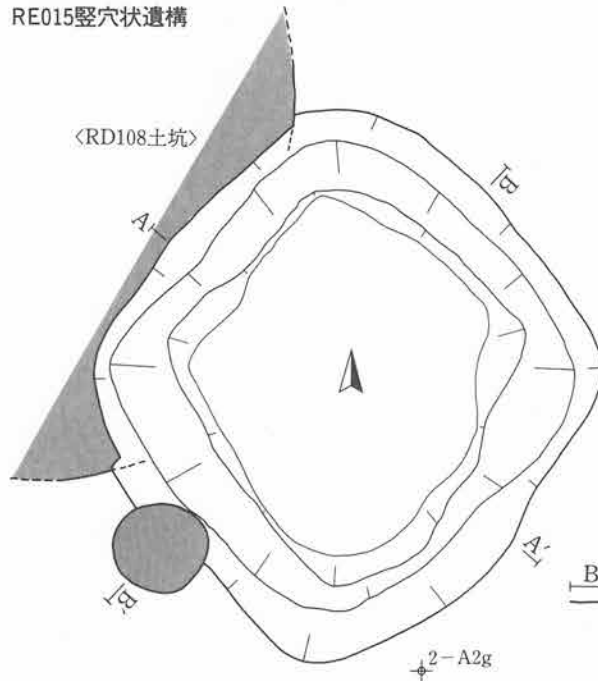
<埋土> 黒色土や黒褐色土が主体で、黄褐色土や粘土の含有量で 12 層に細分される。埋土中位の第 5 層

RE014 竪穴状遺構

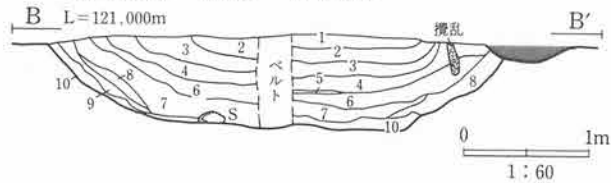


- |    |         |      |        |                 |
|----|---------|------|--------|-----------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性なし   | 混入物は少ないが砂粒少量含む  |
| 2. | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性なし   | 砂質シルト粒混入        |
| 3. | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性あり   | 砂質シルト少量混入 炭化物含む |
| 4. | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性ややあり | 砂質シルトを全体に多く含む   |
| 5. | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性あり   | 砂質シルト少量混入       |
| 6. | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性なし   | 砂質シルト含む         |
| 7. | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性あり   | 締まりなし 混入物少ない層   |
| 8. | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 粘性あり   | 砂質シルト層の崩壊土      |

RE015 竪穴状遺構



- |     |           |      |         |                          |
|-----|-----------|------|---------|--------------------------|
| 1.  | 10YR1.7/1 | 黒色土  | 粘性なし    | 混入物少ない層                  |
| 2.  | 10YR1.7/1 | 黒色土  | 粘性ややあり  | 砂質シルト粒少量混入               |
| 3.  | 10YR2/2   | 黒褐色土 | 粘性あり    | 多量の砂質シルトブロック (1~5cm大) 混入 |
| 4.  | 10YR2/3   | 黒褐色土 | 粘性あるが砂質 | 砂の中に褐鉄少量含む               |
| 5.  | 10YR2/1   | 黒色土  | 粘性に富む   | 多量の炭化物含む                 |
| 6.  | 10YR3/2   | 黒褐色土 | 粘性に富む   | 多量の砂質シルト粒 (1~2cm大) 混入    |
| 7.  | 10YR3/3   | 暗褐色土 | 粘性に富む   | 多量の粘土ブロック (3~5cm大) 混入    |
| 8.  | 2.5Y3/2   | 黒褐色土 | 粘性に富む   | 混入物少ない層                  |
| 9.  | 2.5Y3/2   | 黒褐色土 | 粘性に富む   | オリーブ褐色の粘土粒少量混入           |
| 10. | 10YR4/1   | 褐灰色土 | 粘性に富む   | 砂・多量の褐鉄含む                |
| 11. | 10YR3/3   | 暗褐色土 | 粘性ややあり  | 壁崩壊土                     |
| 12. | 2.5Y2/1   | 黒色土  | 粘性に富む   |                          |



第276図 RE014・015竪穴状遺構

は炭化物を多く含む厚さ 3~6 cm の薄い層である。

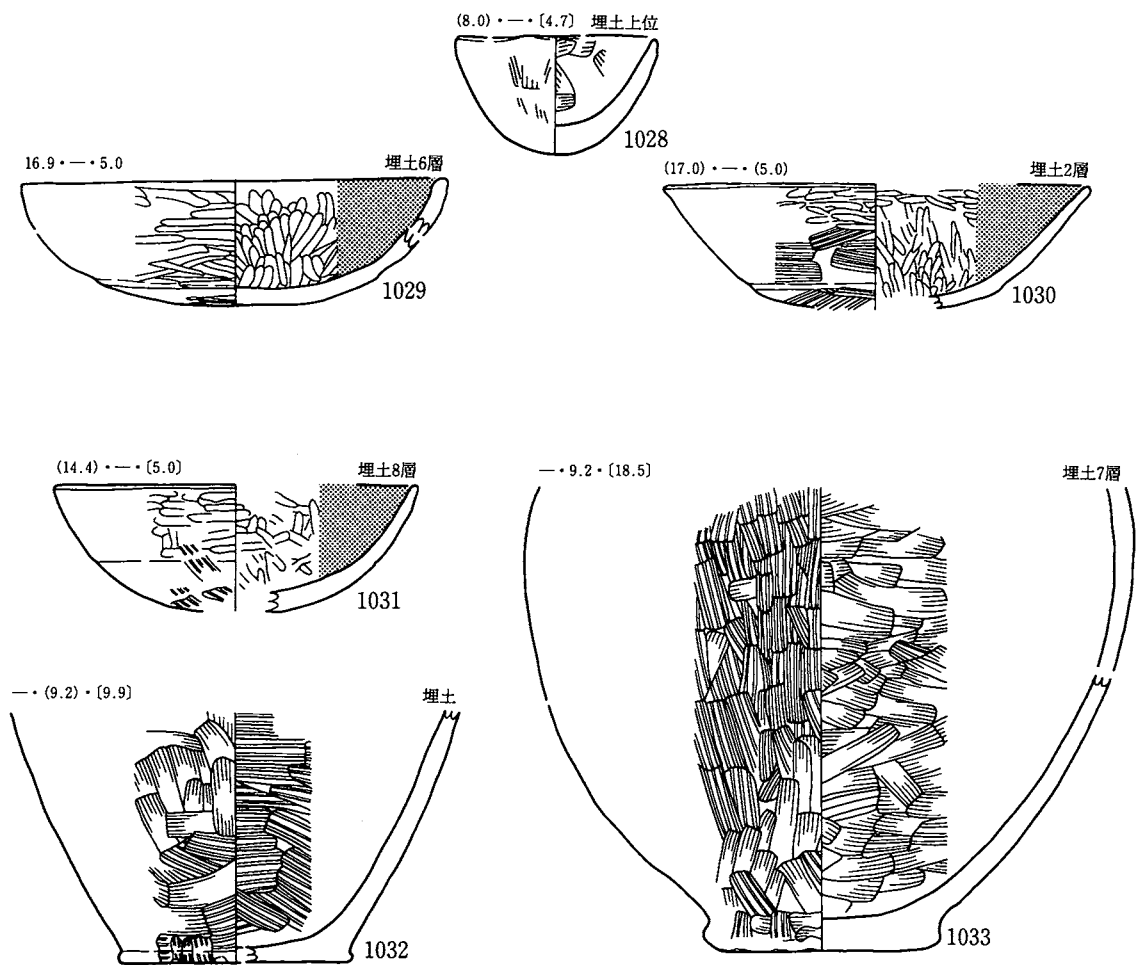
<壁・床> 壁は緩やかに内湾しながら立ち上がり、中位に緩やかな段がある。床はやや内湾気味である。柱穴などの施設はない。

<遺物・時期> 埋土からロクロ不使用の土師器が出土している。1031 は 8 層から出土した坏、1032 は甕の底部、1033 は 7 層から出土した球胴甕の下半である。これらの出土遺物から、本遺構は奈良時代に属すると思われる。  
(金子)

## (2) 平安時代

### RE 006 竪穴状遺構 (第 278 図、写真図版 117・287)

<位置・重複関係> 東側調査区の一 1 B 区に位置し、検出は IV 層上面で黒褐色土の広がりによって確認



S=1/3

第277図 RE014・RE015竪穴状遺構出土遺物

されている。遺構南側の半分以上は第19次調査区（公団側）に延びており、RA 200 竪穴住居跡・RB 009 掘立柱建物跡（中世）の2棟と重複している。新旧関係は2棟に切られている事から、（新）RB 009 掘立柱建物跡→RA 200 竪穴住居跡→（旧）RE 006 竪穴状遺構である。

<平面形・規模> 南西コーナーをRA 209 竪穴住居跡、北西コーナーをRB 009 掘立柱建物跡と重複する事から、不詳な点もあるが平面形は隅丸方形を呈すると思われる。規模は2.77×2.63mを測る。

<埋土> 埋土は黒褐色土を主体とする2層に大別される。上～中位は黒褐色シルトに炭化物や焼土が混じり、下位は暗褐色シルトで構成されている。埋土状況は自然堆積の様相を示している。

<壁・床> 壁はいずれも床面から急傾斜で立ち上がり、壁高は東壁15cm、西壁17cm、南壁14cm、北壁18cmである。床は平坦で、堅く締まっている。柱穴や他の施設は検出されない。

<遺物・時期> 埋土中位から磨滅したロクロ使用の土師器杯・ロクロ不使用の甕、須恵器杯の口縁部と底部を僅かに出土しているが、破片のため図面掲載をしていない。時期は遺物から平安時代に比定される。

（佐藤）

RE 012 竪穴状遺構（第278図、写真図版118・287）

<位置・重複関係> 調査区西側の2-A区、2-B区にまたがって、検出された。RG 089 溝跡と重複

し、新旧関係は（新）R G 089 溝跡→（旧）R E 012 竪穴状遺構である。

<平面形・規模> かなり削平されており、東側、南側の壁が不明であるが、隅丸の長方形を呈すると考えられる。規模は短辺が3.70 m、長辺が5.00 m程度あると思われる。壁高は残存値で、最高18 cmである。

<埋土> 上層と下層の2層に細分され、粘性のない黒褐色土が主体である。

<壁・床> 壁は緩やかに立ち上がる。床は緩やかな起伏がある。柱穴などの施設はない。

<遺物・時期> 土師器、須恵器などの小片が埋土より出土しているが、凶化に至らなかった。出土遺物より、平安時代に属すると考えられる。 (金子)

#### R E 013 竪穴状遺構 (第278図、写真図版119)

<位置・重複関係> 調査区南側の5-C区に位置しており、黒褐色土の落ち込みによって検出された。遺構の重複はない。

<平面形・規模> 楕円形を呈しており、規模は2.74×2.50 mを測る。

<埋土> 黒褐色土を主体とする4層に細分され、粘性があり炭化物を含んでいる。

<壁・床> 北西壁と南東壁側は緩やかに立ち上がり、壁高は北東壁18 cm、南西壁12 cm、北東壁24 cm、南東壁34 cmである。床は緩やかな起伏が見られる。柱穴や他の施設は検出されない。

<遺物・時期> 破片のため図面掲載はしていないが、埋土から土師器を僅かに出土している。時期は遺物から平安時代に属すると考えられる。 (高橋)

#### R E 018 竪穴状遺構 (第279図、写真図版120・287)

<位置> 東側調査区の一1B区に位置し、検出はIV層上面で黒褐色土の落ち込みによって確認している。

<平面形・規模> 平面形は西壁側がやや弧状を呈する隅丸方形で、規模は2.50×2.40 mである。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする7層に大別される。1層は遺構の中央部側に堆積する黒褐色シルト質土で、炭と焼土粒を少量含んでいる。2層は1層と類似し、褐色粘土質シルトとの混合土である。3層は壁側に分布が見られ、径2～3 cm大の礫を含有している。4層は堅く締まっている。5層はIV層を起源とする壁の崩落土である。6層の褐色シルト質土は黒褐色土との混合土で、堅く締まっている。7層は黒褐色粘土質土である。埋土状況は自然堆積の様相を示している。

<壁・床> 西壁側は崩落しているものの、他の壁は床面から急傾斜に立ち上がっている。壁高は東壁30 cm、西壁34 cm、南壁28 cm、北壁34 cmを測る。砂層上面を床面にしており、中央部がやや高まり炭と焼土粒が散在している。また、中央部には、径83～75 cmの円形状の褐色粘土が厚さ1～2 cmで貼られている。その下には、開口部径59×55 cm・深さ9 cm前後の円形土坑が掘り込まれている。

<遺物・時期> 埋土中位から土師器と須恵器を出土している。591はロクロ不使用の土師器甕(A II群)で、底部を欠損している。口縁部は頸部から外反し、口唇部は丸みを持っている。調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がハケメを施している。593は須恵器甕(B群)の体部破片、592は須恵器の長頸壺の体部破片である。時期は遺物から平安時代に比定される。 (高橋)

#### R E 019 竪穴状遺構 (第279図、写真図版120・289)

<位置・重複関係> 東側調査区の一1A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の落ち込みによって確認されている。本遺構は北側で攪乱土坑と東側でR A 152 竪穴住居跡と重複している。新旧関係は切られている事

から、(新) 攪乱土坑→R A 152 竪穴住居跡→(旧) R E 019 竪穴状遺構である。

<平面形・規模> 平面形は北東壁と南東壁側の一部が遺構と重複する事から詳細が不明である。検出された北東辺は1.13 m、北西辺が1.83 m、南西辺が2.24 m を測る。確認された規模から2.70×2.35 m 前後の不整形状を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする5層に大別される。上層の1層は褐色土と十和田a火山灰を小ブロック状に混入し、堅く締まっている。2層の黒褐色シルト質土は、炭と焼土粒を少量混入する。3・4層は暗褐色シルト質土構成され、炭と焼土粒を少量含み堅く締まっている。5層は褐色土との混合土である。埋土状況は自然堆積の様相を示している。

<壁・床> 南西壁側が床面から急傾斜で立ち上がり、他の壁は緩やかである。壁高は北東壁15 cm、北西壁14 cm、南西壁28 cmである。床は多少凹凸があり、締まっている。また、重複するR A 152 竪穴住居跡の床面とは約10 cmの比高がある。柱穴や他の施設は検出されない。

<遺物・時期> 埋土からロクロ使用の土師器坏と須恵器坏を出土しているが、破片のため図面掲載をしたのは1点である。594はロクロ使用の土師器坏(A I a群)で、口縁部は欠損している。内面は磨滅しているが内黒処理を施し、底部切り離しが回転糸切り調整である。時期は遺物から平安時代に比定される。

(高橋)

#### R E 020 竪穴状遺構 (第280図、写真図版121・289)

<位置> 東側調査区-1 A区に位置しており、遺構の南南東側5 mにはR E 021 竪穴状遺構、北側6.5 mにR E 019 竪穴状遺構が近接する。検出面はIV層上面で、黒褐色土の落ち込みによって確認している。

<平面形・規模> 平面形は南東コーナー側がやや張り出す隅丸方形状を呈しており、規模は2.30×2.28 mを測る。

<埋土> 黒褐色シルト質土で構成され、上層はブロック状の暗褐色土と微量の炭と焼土粒を混入している。下層は上層に類似し下端部に炭を多く含み、堅く締まっている。埋土状況は自然堆積の様相を示す。

<壁・床> 西壁と北壁は床面から急傾斜で立ち上がり、壁高は北東壁32 cm、南東壁29 cm、南西壁23 cm、北西壁28 cmである。床は中央部付近がやや高まる他は平坦で、締まっている。北西壁側の床上には薄い炭と焼土粒の散布が見られる。柱穴および他の施設は検出されない。

<遺物・時期> 遺物は埋土中位から須恵器坏・甕と鉄製品が出土している。598は口縁上部を欠損する須恵器坏(B II a群)で、底部切り離しが回転糸切りである。599・600は須恵器甕(B群)の体部破片で、外面は平行タタキメ痕が施されている。

73は刀子で刃部の一部が欠損している。錆のために全容は不明であるが、現存長11.2 cm、幅1.2 cm、最大厚4 mmを測る。時期は遺物から平安時代に比定される。

(高橋)

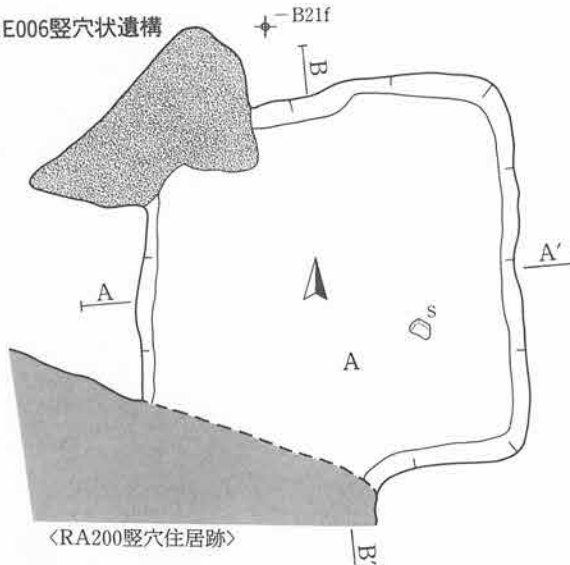
#### R E 021 竪穴状遺構 (第280図、写真図版121・289)

<位置> 遺構は東側調査区-1 A区に位置しており、南側1.45 mにR A 116 竪穴住居跡・北北西側5 mにR E 020 竪穴状遺構が近接する。検出面はIV層上面で、黒褐色土の広がりによって確認している。

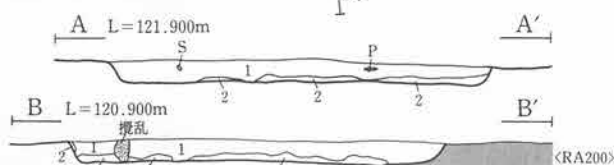
<平面形・規模> 北壁側の一部が調査区内にあるだけで、大部分は第19次調査区(公園側)に延びている。また、南コーナーを除く三方の隅を柱穴状土坑に切られている事から、平面形の詳細は不明である。規模は2.78×2.38 mを測り、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする3層で構成され、全体に堅く締まっている。埋土状況は自然堆積の

RE006 竪穴状遺構

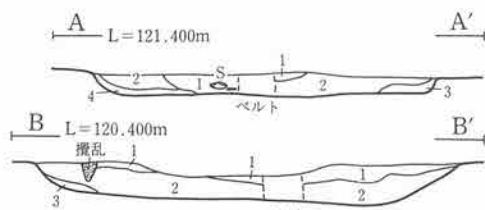
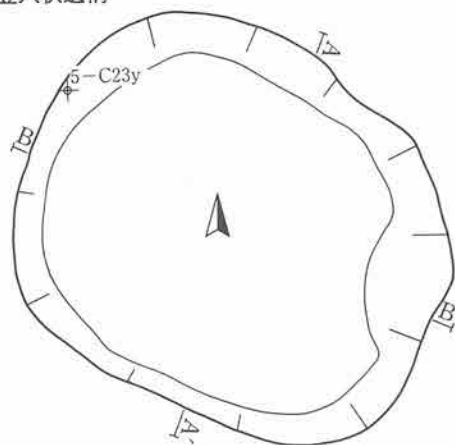


<RA200 竪穴住居跡>



- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 堅く締まる 砂質シルトブロック混入
- 2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 砂質シルトと黒褐色土の混合土 壁前壊土

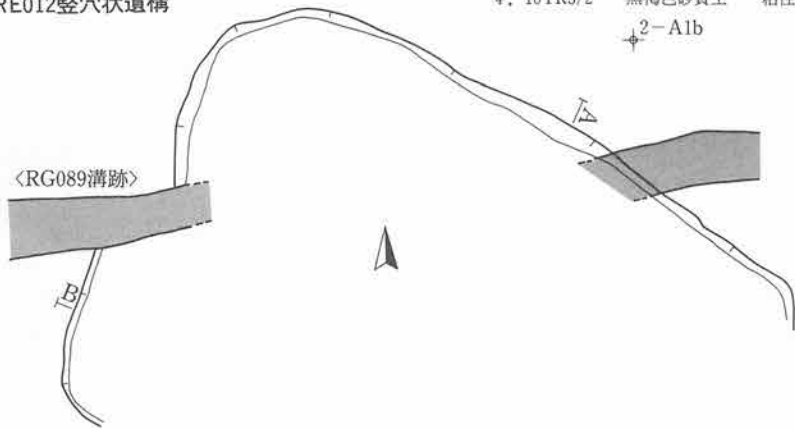
RE013 竪穴状遺構



- 1. 10YR 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物(0.3~1cm大)・土器片含む
- 2. 10YR3/2 黒褐色粘土質土 粘性あり 炭化物(0.3~1cm大)・褐鉄少量含む
- 3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 砂粒・褐鉄多量含む
- 4. 10YR3/2 黒褐色砂質土 粘性ややあり 褐鉄含む

2-A1b

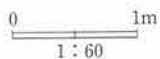
RE012 竪穴状遺構



<RG089 溝跡>



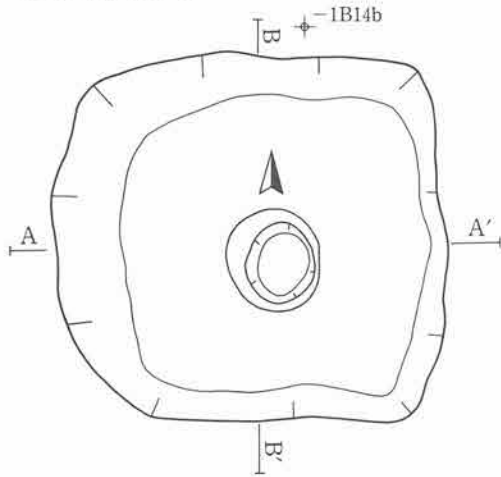
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 褐色土1%混入 炭化物・焼土粒少量含む 堅く締まる
- 2. 10YR3/4 暗褐色シルト 褐色土との混合土 堅く締まる



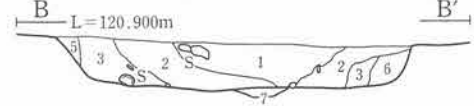
第278図 RE006・012・013 竪穴状遺構



RE018 竖穴状遺構

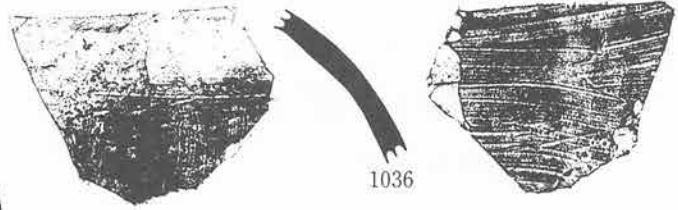
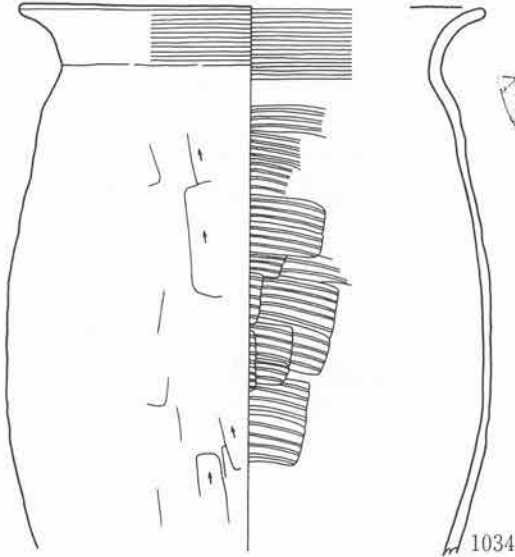


1. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト質土 炭・焼土粒1%含む 指圧痕有り
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色粘土質シルト(10YR4/6) 30%混入 水酸化鉄1%混入
3. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 礫(径2~3cm大)10%含む
4. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる
5. 10YR4/6 褐色シルト質土 堅く締まる 壁崩落土
6. 10YR4/6 褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土30%含む
7. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 堅く締まる



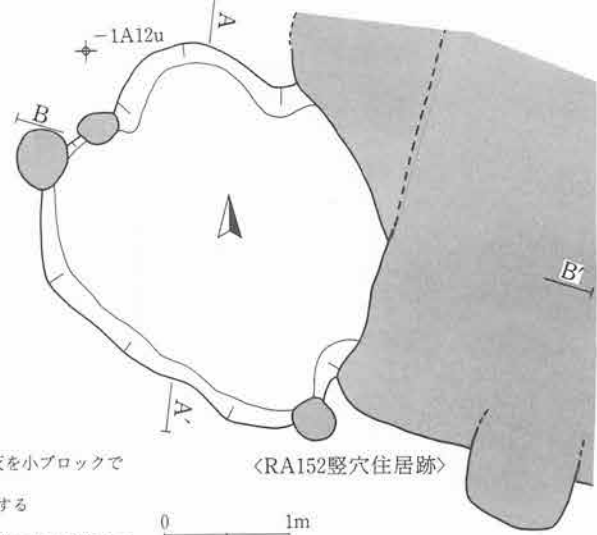
1035

(18.5)・---・(21.9)

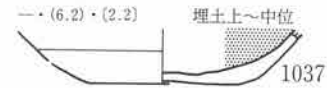
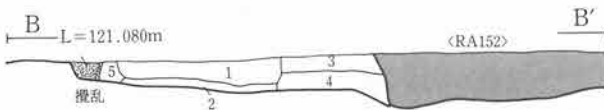
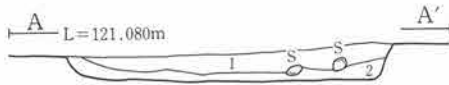


1036

RE019 竖穴状遺構



1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土と十和田火山灰を小ブロックで 2%混入する 焼土粒・炭を微量含む
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭・焼土粒を少量混入する
3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を1%含有する
4. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 3層に類似 焼土粒・炭を少量含有する
5. 10YR2/2~3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土

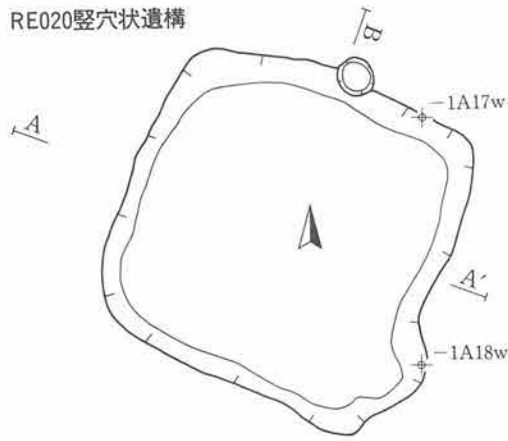


1037

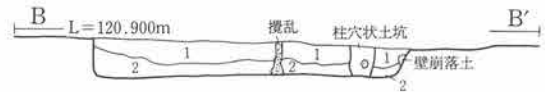
1034~1037はS=1/3

第279図 RE018・019 竖穴状遺構・出土遺物

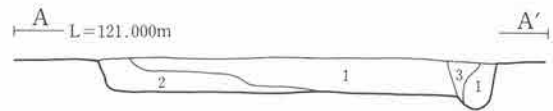
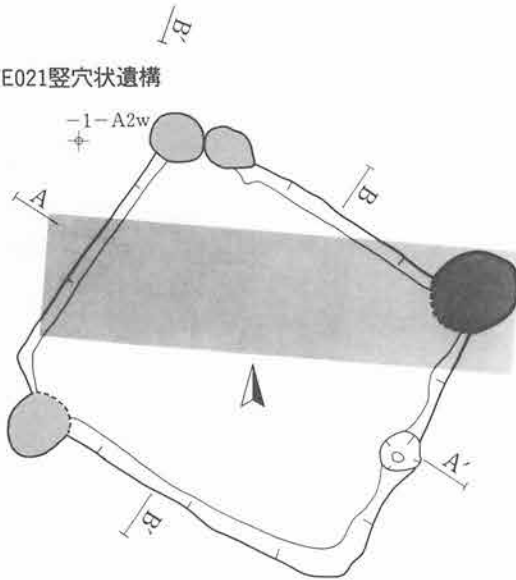
RE020 竪穴状遺構



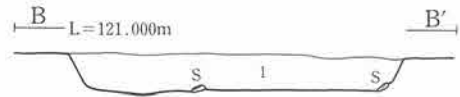
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土を小ブロック状に1%含有 微量の炭・焼土粒を混入
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 1層に類似 下部に炭を多量混入
3. 10YR2/2~3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土



RE021 竪穴状遺構

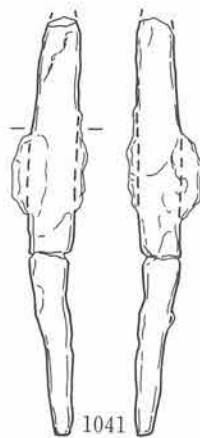
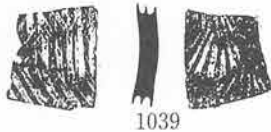
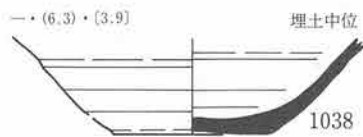


1. 10YR2/2 黒褐色シルト 堅く締まる
2. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト 暗褐色土5%含む 堅く締まる
3. 10YR3/1 黒褐色シルト 焼土粒含む



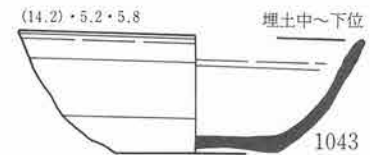
0 1m  
1:60

RE020



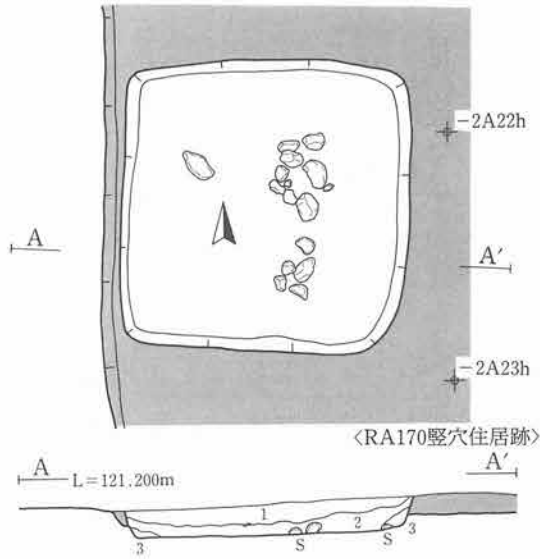
1041は S=1/2  
1038~1040・1042・1043は S=1/3

RE021



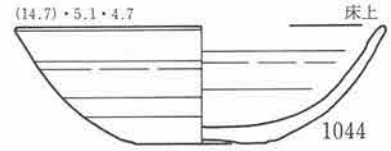
第280図 RE020・021 竪穴状遺構・出土遺物

RE024 竪穴状遺構



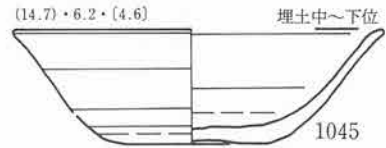
0 1m  
1:60

<RA170 竪穴住居跡>



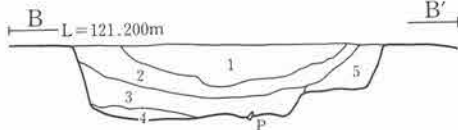
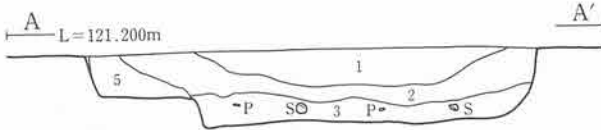
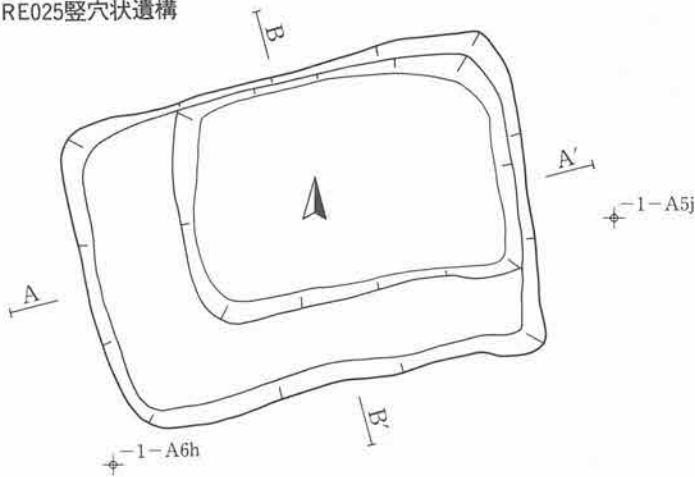
S=1/3

1. 10YR2/2 褐色シルト質土 褐色土を小ブロックで1%混入  
焼土粒・炭を含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 1層に類似 褐色土を2%混入  
炭を微量含む
3. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土

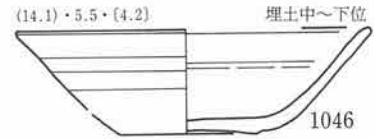


1045

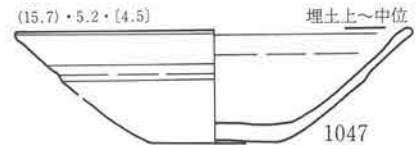
RE025 竪穴状遺構



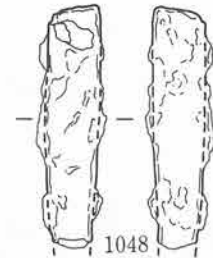
1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土をブロック状に30%混入  
微量の焼土粒を含む
2. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 1層に類似 褐色土をブロック状に40%混入
3. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土をブロック状に30%混入  
微量の炭を含む
4. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土
5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土をブロック状に30%混入  
微量の炭を含む



1046



1047



1048は S=1/2  
1045～1047は S=1/3

第281図 RE024・025 竪穴状遺構・出土遺物

様相を示している。

〈壁・床〉 壁は床面からやや急傾斜で立ち上がり、壁高は北東壁 25 cm、南東壁 28 cm、南西壁 27 cm、北西壁 24 cmである。床はほぼ平坦で、堅く締まっている。柱穴および他の施設は検出されない。

〈遺物・時期〉 遺物は埋土中・下位から須恵器坏（B II a 群）が出土している。922・933 の口縁部は、やや直線的に立ち上がり、底部切り離しが回転糸切りである。時期は遺物から平安時代に比定される。

（佐藤）

#### R E 024 竪穴状遺構（第 281 図、写真図版 122・289）

〈位置・重複関係〉 北側調査区中央寄りの－2 A 区に位置し、平安時代の R A 170 竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、本遺構が切っている事から（新）R E 024 竪穴状遺構→（旧）R A 170 竪穴住居跡である。検出は R A 170 竪穴住居跡の埋土断面精査中に確認されている。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸方形を呈し、規模は 2.15×2.15 m である。

〈埋土〉 埋土は褐色シルト質土を主体とする 3 層に大別される。1 層は焼土粒と炭を含む褐色シルト質土、2 層が微量の炭を含む褐色シルト質土である。3 層の暗褐色シルト質土は、褐色土との混合土で堅く締まっている。

〈壁・床〉 壁は床面から急傾斜で立ち上がっており、東壁 11 cm、西壁 9 cm、南壁 23 cm、北壁 11 cm 前後を測る。床は一部で礫層が露出しており、多少凹凸が見られる。全体に堅く締まり、炭と焼土粒の薄い堆積がある。また、中央部付近の床上から、遺構が廃棄された後に投げ入れられたと思われる径 10～30 cm 大の亜角礫と亜円礫が 15 個ほど散在している。

〈遺物・時期〉 遺物は床上からロクロ使用の土師器坏（A II a 群）が 1 点出土している。1105 は口縁部を 3 分の 1 程欠損し、内外面とも剝落をしている。口縁部は内湾気味に立ち上がり、底部の切り離しは回転糸切りである。時期は遺物から平安時代に比定される。

（高橋）

#### R E 025 竪穴状遺構（第 281 図、写真図版 122・289）

〈位置〉 北側調査区西寄りの－1－A 区に位置し、本遺構の南側 20 cm には R A 302 竪穴住居跡、西側 1 m に R A 178 竪穴住居跡が近接している。検出は IV 層上～中位で、黒褐色土の落ち込みで確認されている。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は 3.45×2.30 m である。

〈埋土〉 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする 5 層に大別される。1 層は微量の焼土粒を含む黒褐色シルト質土で、褐色土がブロック状に混入している。2 層も 1 層と同様の褐色土がブロック状に混入し、堅く締まっている。3・4 層は下層を構成する暗褐色シルトで、ブロック状の褐色土と微量の炭を含有している。5 層は壁際に堆積し、微量の炭と焼土粒を含み堅く締まっている。埋土状況は自然堆積の様相を示している。

〈壁・床〉 壁は崩落カ所もあるが床面から急傾斜で立ち上がり、東壁 53 cm、西壁 32 cm、南壁 33 cm、北壁 46 cm を測る。床は二段（下位の規模 2.54×1.64 m）に掘られており、いずれも多少凹凸が見られる。床面の比高は西側で 26 cm、南側が 18 cm 程である。

〈遺物・時期〉 遺物は埋土中・下位から 1106～1108 のロクロ使用の土師器坏（A II a 群）が出土している。口縁部は底部から外傾して立ち上がり、底部の切り離しは回転糸切りである。111 は刀子で、両端部を欠損する事から全容が不明である。現存長は 6.5 cm、幅 1.4 cm、最大厚 4 mm を測る。時期は遺物から平安時代に比定される。

（高橋）

### (3) 時期不明

#### R E 022 竪穴状遺構 (第 282 図、写真図版 123)

<位置> 北側調査区の西端部-1-B区に位置し、検出はIV層上面で黒褐色土の長方形の落ち込みで確認されている。本遺構の北東側約 50 cmにはR D 061 土坑、北西側 1.40 mにR E 023 竪穴状遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は北壁側が張り出す隅丸長方形を呈しており、規模は 5.98×3.90 m を測る。

<埋土> 埋土は黒褐色土を主体とする 3 層で構成され、全体にブロック状の褐色土を含み堅く締まっている。埋土状況は自然堆積の様相を示している。

<壁・床> 壁は西壁側が床面から急傾斜で立ち上がるものの、他の壁は緩やかである。壁高は東壁 16 cm、西壁 13 cm、南壁 13 cm、北壁 14 cmである。床はIV層中位にあり、ほぼ平坦で堅く締まっている。柱穴や他の施設は検出されない。

<遺物・時期> 遺物の出土がなく、時期は不明である。 (高橋)

#### R E 023 竪穴状遺構 (第 282 図、写真図版 122・289)

<位置・重複関係> 北側調査区西端部の-1-B区に位置し、検出はR E 022 竪穴状遺構と同様にIV層上面で確認されている。本遺構は北側でR G 154 溝跡と重複し、新旧関係は溝に切られている事から(新)R G 154 溝跡→(旧)R E 023 竪穴状遺構である。南東側 1.40 mにはR E 022 竪穴状遺構が隣接している。

<平面形・規模> 平面形は多少歪みのある隅丸長方形を呈しており、規模は 4.15×3.57 m を測る。

<埋土> 埋土はシルト質土の 2 層で構成されている。1 層は黒褐色で暗褐色土を少量含み、2 層は黒～黒褐色土で、小ブロック状の水酸化鉄を多量に含有し堅く締まる。埋土状況は自然堆積の様相を示す。

<壁・床> 壁は緩やかに床面から立ち上がり、壁高は 13～22 cm前後を測る。床は多少凹凸が見られるものの平坦で、全体が堅く締まっている。

<遺物・時期> 須恵器甕 (B群) 体部破片 669 が 1 点出土している。埋土上部から出土のために、時期は不明である。 (高橋)

#### R E 026 竪穴状遺構 (第 283 図、写真図版 125・289)

<位置・重複関係> 北側調査区-1-A区の北側に位置し、IV層上面で方形の落ち込みによって確認されている。本遺構は東側でR E 027 竪穴状遺構と重複し、西側が新しい攪乱土坑で切られている。新旧関係はR E 027 竪穴状遺構を切っている事から(新)攪乱土坑→R E 026 竪穴状遺構→(旧)R E 027 竪穴状遺構である。

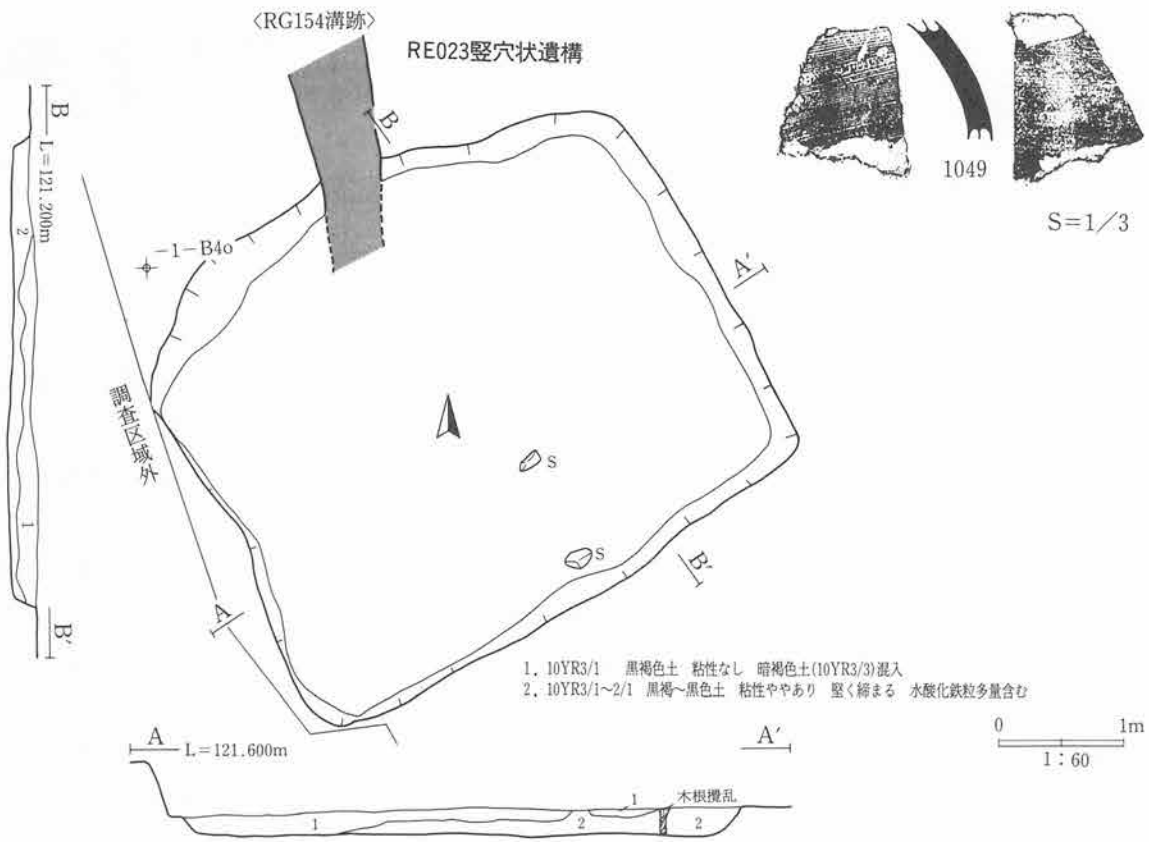
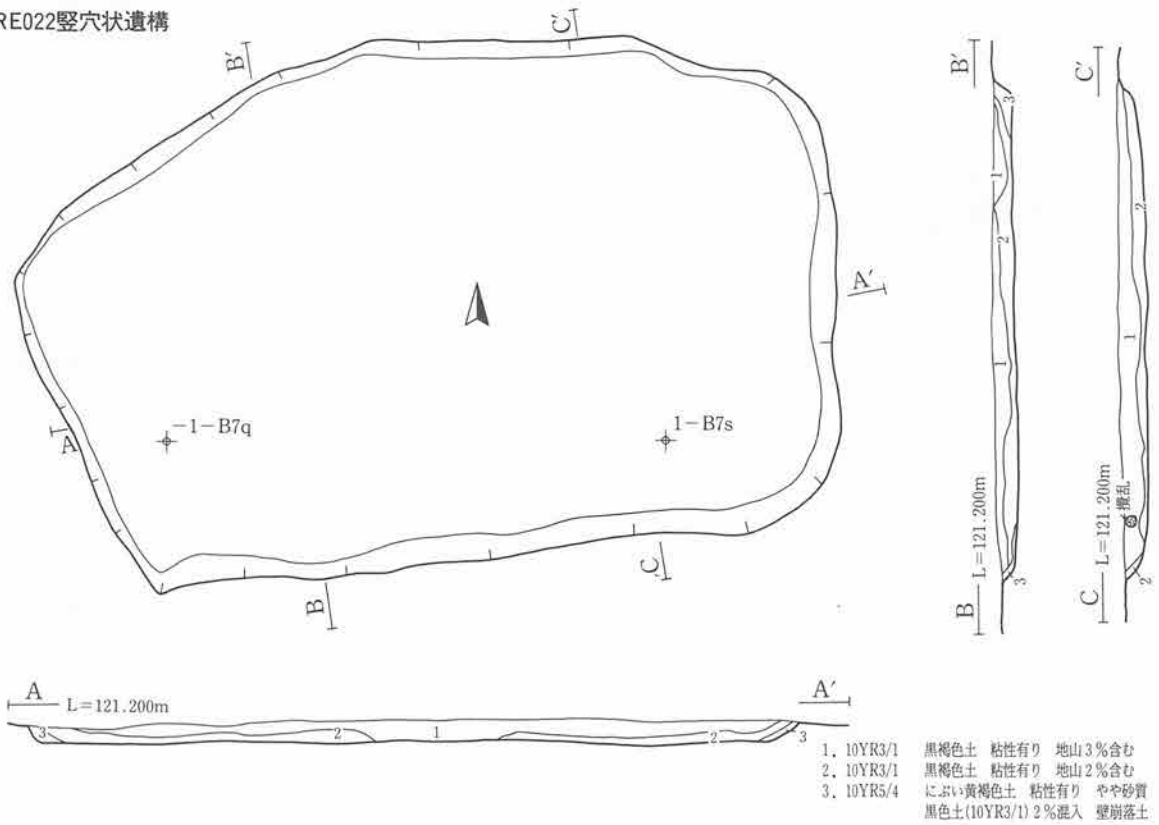
<平面形・規模> 重複するために平面形の詳細は不明であるが、南東コーナーに長さ 85 cm、幅 50 cmの張り出し部を持つ不整形を呈しており、確認された規模は 2.50×2.34 m を測る。

<埋土> 埋土は上層が水酸化鉄を多く含む黒色砂質シルト、下層が水酸化鉄をブロック状に含む黒褐色砂質シルトで構成されている。埋土状況は自然堆積の様相を示している。

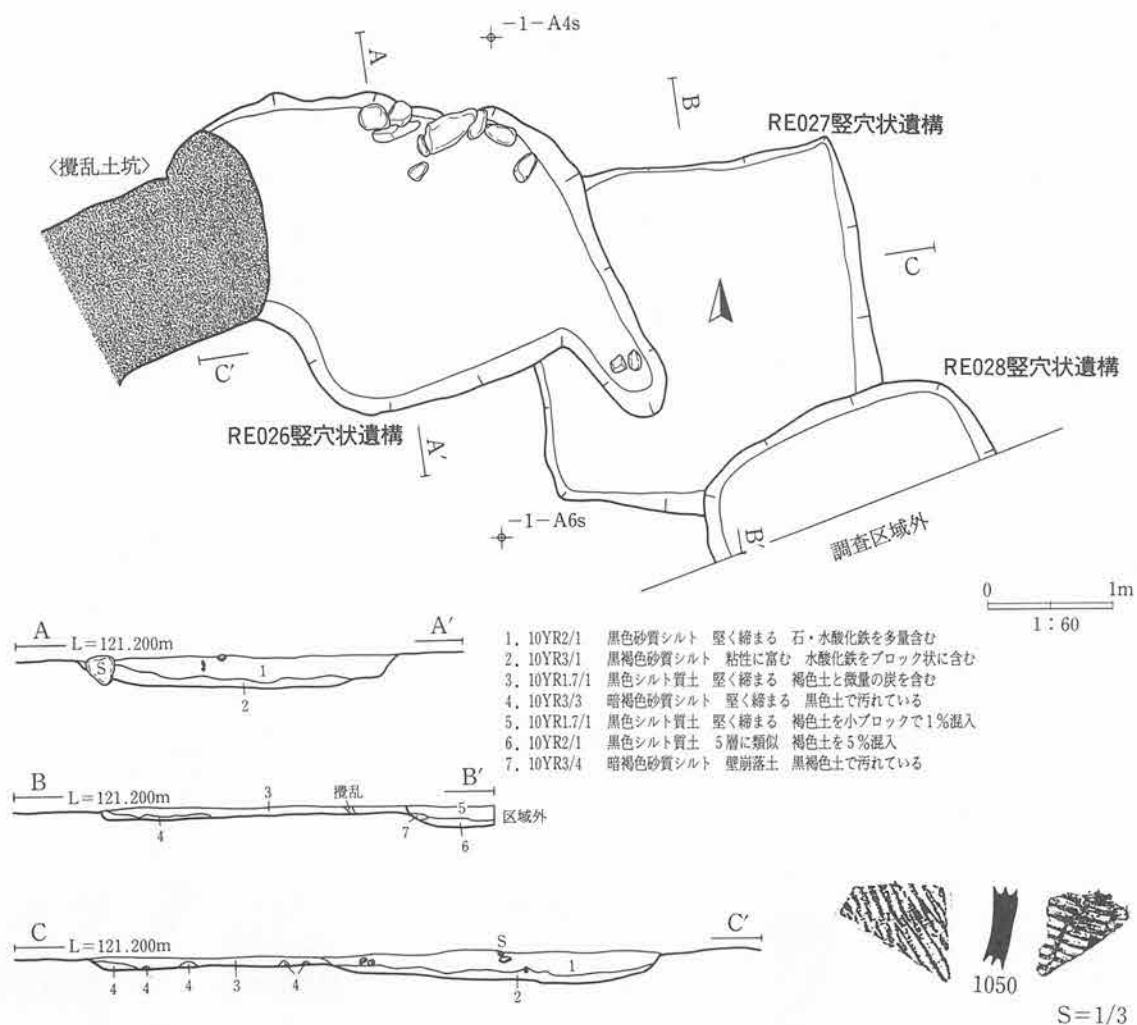
<壁・床> 壁は南壁側が床面から急傾斜で立ち上がっており、壁高は 5～18 cm前後を測る。床は中央部付近がやや窪んでおり、全体に堅く締まっている。北壁の床上には、遺構が廃棄された後に投げ入れられたと思われる径 20～50 cm大の垂角礫と垂円礫が 20 数個まとまって出土している。

<遺物・時期> 埋土上位から流れ込みの須恵器甕 (B群) 体部破片 1109 が 1 点出土している。他に遺物の出土がない事から、時期は不明である。 (高橋)

RE022 竖穴状遺構



第282図 RE022・023 竖穴状遺構・出土遺物



第283図 RE026～028竪穴状遺構・出土遺物

RE 027 竪穴状遺構 (第 283 図、写真図版 125)

<位置・重複関係> 北側調査区-1-A区に位置し、検出はIV層上面で方形状の落ち込みによって確認されている。本遺構は西側でRE 026 竪穴状遺構、南側でRE 028 竪穴状遺構の2棟と重複している。新旧関係は両遺構に切られている事から(新)RE 026・028 竪穴状遺構→(旧)RE 027 竪穴状遺構となる。また、RE 026・028 竪穴状遺構間の新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 北西と南東コーナー側で2棟の竪穴状遺構と重複する事から、平面形の詳細は不明である。規模は2.60×2.54 mを測り、平面形は現存する規模から方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は2層に大別される。上層は黒色シルト質土、下層は暗褐色砂質シルトで構成されており、微量の炭を含み堅く締まっている。埋土状況は自然堆積の様相を示している。

<壁・床> 壁は崩落しており、床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。削平されている事から全体に残りが悪く、壁高は東壁8 cm、西壁1 cm、南壁2 cm、北壁17 cmを測る。床はほぼ平坦で、堅く締まる。

<遺物・時期> 埋土から遺物の出土がなく、時期は不明である。

(高橋)

#### R E 028 竪穴状遺構 (第 283 図、写真図版 125)

<位置・重複関係> 北側調査区-1-A 区の北側に位置している。検出は R E 027 竪穴状遺構と同様に IV 層上面である。本遺構は北側で R E 027 竪穴状遺構と重複し、新旧関係は R E 027 竪穴状遺構を切っている事から (新) R E 028 竪穴状遺構→(旧) R E 027 竪穴状遺構である。

<平面形・規模> 遺構の南側は用水路および市道の下に延びている事から、平面形・規模の詳細が不明である。現存する東辺は 60 cm、西辺が 50 cm、北辺が 1.90 m を測る。規模は径 2.00 m 前後の隅丸方形を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒色シルト質土を主体とする 3 層に大別される。上層は褐色土を小ブロックで混入し、下層は褐色土を多く含み強く締まっている。

<壁・床> 壁高は東壁 22 cm、西壁 12 cm、北壁 21 cm を測り、壁は床面から急傾斜で立ち上がっている。床は強く締まり、ほぼ平坦である。重複する R E 027 竪穴状遺構床面との比高は約 12 cm である。

<遺物・時期> 遺物の出土がなく、時期は不明である。 (高橋)

## 5. 土坑

土坑は各調査区から 157 基検出され、時期が奈良～近世に属している。特質されるものや遺物が出土した遺構を中心に記述を行い、各土坑の平面形・規模等は第 2～4 表に一括して掲載している。

#### R D 91 土坑 (第 284 図、写真図版 126)

<位置・重複関係> 調査区東側の 1 C 区南側に位置している。<平面形・規模> 平面形は円形を呈し、規模は開口部で 89×78 cm、深さは 9 cm である。底は多少凹凸があり、壁は底面から外傾して立ち上がる。

<埋土> 黒褐色シルト質土主体の 3 層に細分され、上～中位には炭片と焼土粒がブロック状に混入している。<遺物・時期> 遺物の出土がなく、時期は不明である。 (高橋)

#### R D 94 土坑 (第 284 図、写真図版 126)

<位置・重複関係> 調査区東側の-1 B 区北寄りに位置している。<平面形・規模> 平面形は北側がやや広がる隅丸長方形を呈し、規模は開口部で 1.36×1.11 m、深さは 10 cm を測る。底は平坦で強く締まり、壁は底面から外傾して立ち上がっている。

<埋土> 埋土は 3 層に細分され、1 層は焼土をブロック状に含む黒褐色土、2 層が暗赤褐色焼土、3 層が粘性のある暗褐色土である。<遺物・時期> 埋土から土師器甕の口縁部破片が 1 点出土している。時期は遺物から平安時代と思われる。 (高橋)

#### R D 95 土坑 (第 284・307 図、写真図版 126)

<位置・重複関係> 調査区東側の-2 B 区南寄りに位置している。<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈し、規模は開口部で 1.68×1.63 m、深さは中央部で 19 cm を測る。底はほぼ平坦で、全体が強く締まっている。壁は底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土で構成され、2 層に細分される。褐色をブロック状に含み、下位に微量の炭を混入している。<遺物・時期> 埋土から須恵器の破片を出土している。1051～1053 は須恵器坏 (B II a 群) で、底部の切り離しが回転糸切りである。1054 は須恵器大甕の体部破片で、内外面は平行叩き目痕である。時期は遺物から平安時代に比定される。 (高橋)



R D 101 土坑 (第 285 図、写真図版 128)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。R B 011 掘立柱建物跡、R B 012 掘立柱建物跡と重複するが、柱穴と直接切り合っていないため、新旧関係は不明である。<平面形・規模> 隅丸方形を呈し、辺の長さは開口部で 1.41×1.31 m、深さは 33 cm である。底は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。

<埋土> 2 層に細分される。焼土粒や炭化物を含む締まりのない黒褐色土で、埋め戻しの可能性がある。

<遺物・時期> 遺物は出土しなかった。詳細な時期は不明であるが、平面形が R D 102 に類似することから、近世に属する可能性が高い。 (金子)

R D 102 土坑 (第 285 図、写真図版 128)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。R B 011 掘立柱建物跡、R B 012 掘立柱建物跡と重複し、本遺構の方が新しい。<平面形・規模> 隅丸方形を呈し、辺の長さは開口部で 1.95×1.94 m、深さは 17 cm である。底は若干の起伏があるが、ほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

<埋土> 4 層に細分され、礫を大量に含む黒褐色土で、壁際に堆積した層以外は埋め戻した可能性がある。<遺物・時期> 埋土中より、大堀相馬産の陶器 1058・1059、石臼 1060 のほか、磁器色絵碗の破片、染付碗、陶器破片が出土している。これらの出土遺物より、本遺構は近世に属すると考えられる。 (金子)

R D 107 土坑 (第 287・307 図、写真図版 129)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。R B 011 掘立柱建物跡、R B 012 掘立柱建物跡と重複するが、直接柱穴と切り合っていないので、新旧は不明である。なお、P 87 とも重複しており、本土坑の方が新しい。<平面形・規模> 隅丸長方形を呈し、辺の長さは開口部で 2.21×1.18 m、深さ 58 cm である。底は若干の起伏があるものの平坦で、壁は底から直に立ち上がる。

<埋土> 2 層に細分され、礫や炭化物を含む暗褐色土、砂質シルトが主体である。特に上層は均質で、埋め戻された可能性が高い。<遺物・時期> 埋土中より寛永通寶 1055 や大堀相馬産と思われる陶器片、磁器染付片が出土している。これらの遺物から、本遺構は近世に属すると考えられる。 (金子)

R D 122 土坑 (第 55 図)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-B 区に位置する。本遺構東端で R D 126 土坑と重複し、本遺構の方が新しい。<平面形・規模> 東西に長い溝状を呈する。規模は開口部で長さ 5.52 m、幅 0.92 m、深さ 86 cm である。本遺構の西には約 1 m 離れて、R A 141 住居跡が存在する。そのカマド直下から床下を溝が通っており、その溝が住居東隅に達して、住居の外へ延び(外延溝)、本遺構とトンネル状につながっている。トンネルは高さ 10~17 cm、幅 20~35 cm である。底面は住居内の溝底標高よりも最大で 15 cm ほど低い。底面は内湾して中央部が溝状に深い。東端ではステップ状に 1 段高くなっている。壁は底面より外反して立ち上がる。

<埋土> 5 層に細分され、砂質シルトブロックを含む黒褐色~黒色土が主体である。<遺物・時期> 埋土からロクロ不使用の土師器破片が出土している。1061 は球胴甕の底部と思われる破片である。これらの遺物と外延溝でつながる R A 141 住居跡出土土器の年代観から、本遺構は奈良時代に属すると考えられる。 (金子)

R D 123 土坑 (第 289・308 図、写真図版 132)

<位置・重複関係> 調査区東側の 2-B 区北側東寄りに位置し、IV 層上面で黒褐色土の落ち込みによっ

て検出している。重複関係はない。〈平面形・規模〉 平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で1.47×1.31 m、深さ52 cmである。底面は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。

〈埋土〉 3層に細分されるが、炭化物、砂質シルト、黒褐色土の混合土である。〈遺物・時期〉 1層よりロクロ不使用の土師器坏1062・1063が出土した。確実に本遺構にこれらの遺物が伴うか不明の点もあるが、本遺構は奈良時代に属する可能性がある。 (金子)

#### R D 141 土坑 (第290図、写真図版135)

〈位置・重複関係〉 調査区東側の-1A区北寄りに位置している。〈平面形・規模〉 平面形は北側がやや広がる楕円形を呈し、規模は開口部で1.01×0.75 m、深さは8 cmを測る。底は平坦で締まり、壁は底面から外傾して立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする2層に大別され、褐色土がブロック状に混入する。

〈遺物・時期〉 遺物の出土はなく時期が不明である。 (高橋)

#### R D 144 土坑 (第290・309図、写真図版136)

〈位置・重複関係〉 調査区北東側の-1-A区に位置する。R B 006 掘立柱建物跡と重複し、本遺構が古い。〈平面形・規模〉 隅丸長方形を基調とする。辺の長さは開口部で2.85×2.04 m、深さ51 cmである。底面はやや凹凸があり、壁も内湾あるいは外反して立ち上がる。

〈埋土〉 焼土粒や炭化物を多量に含む黒褐色土が主体である。〈遺物・時期〉 埋土からロクロ使用の土師器坏1066～1068、高台付坏1069、ロクロ不使用の甕1070・1071、須恵器甕破片1072～1074が出土した。これらの遺物から本遺構は平安時代に属すると考えられる。 (金子)

#### R D 156 土坑 (第292・309図、写真図版139)

〈位置・重複関係〉 調査区東側の1C区北側西寄りに位置している。〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は開口部で1.40×1.09 m、深さは12 cmを測る。底は緩やかな凹凸があり、壁は底面から外傾して立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は2層に細分され、1層は黒色土で焼土粒と炭を含みブロック状に含む。2層はやや粘性のある黒褐色シルト質土である。〈遺物・時期〉 埋土から土錘が1点出土している。遺物から時期の確定はできないが、周辺の出土遺構例から平安時代と思われる。 (高橋)

#### R D 157 土坑 (第292・309図、写真図版139)

〈位置・重複関係〉 調査区東側の1B区中央東南寄りに位置している。R D 150 と重複し本土坑が切られていることから、(新)R D 150 土坑→(旧)R D 157 土坑である。〈平面形・規模〉 平面形は円形を呈し、規模は開口部で1.20×1.10 m、深さは中央部で42 cmを測る。底は平坦で、全体が強く締まっている。壁は底面から外傾して立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする7層に細分される。上層は暗褐色土を小ブロックで含み、下位は強く締まり水酸化鉄が混入している。〈遺物・時期〉 埋土から須恵器破片を出土している。1077は大甕の体部破片で、外面は平行叩き目が施されている。時期は遺物から平安時代と思われる。 (高橋)

R D 162 土坑 (第 293 図、写真図版 140)

<位置・重複関係> 調査区北側の-2 A 区東寄りに位置し、南西側に R D 163 土坑が隣接している。

<平面形・規模> 平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で 1.64×1.38 m、深さは 16 cm を測る。底は堅く締まり平坦である。壁は緩やかに底面から外傾して立ち上がっている。

<埋土> 埋土は 2 層に大別される。1 層は黒褐色シルト質土で微量の炭を含み、2 層が水酸化鉄を含む暗褐色砂質シルトで構成されている。<遺物・時期> 埋土から土師器甕の体部破片を 1 点出土している。遺物から時期は平安時代と思われる。 (高橋)

R D 163 土坑 (第 293 図、写真図版 140)

<位置・重複関係> 調査区北側の-2 A 区東寄りに位置し、北東側に R D 162 土坑が隣接している。

<平面形・規模> 平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で 1.72×1.05 m、深さは中央部で 19 cm を測る。底は平坦で、堅く締まっている。壁は底面から外傾して立ち上がっている。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土と暗褐色砂質シルトの 2 層に大別される。<遺物・時期> 埋土からクロ使用の土師器坏破片を出土している。時期は遺物から平安時代と思われる。 (高橋)

R D 178 土坑 (第 294・310 図、写真図版 141)

<位置・重複関係> 調査区南側の 6-B 区に位置する。重複関係はない。<平面形・規模> 南北に長い隅丸方形を基調としているが、南東隅が外側にやや張り出している。辺の長さは開口部で 5.30×3.77 m、深さは 44 cm である。底面は平坦で、壁はやや外反して立ち上がる。

<埋土> 3 層に細分されるが、下層は泥質の黒色土、上層は砂粒を含む黒褐色土である。泥のたまり具合などから底より中位位まで水によって埋まり、その後また水が被って黒色土の堆積があったものと思われる。<遺物・時期> 埋土上位から釘と思われる鉄製品 1083、近世以降と思われる白磁片 1443 が出土している。時期は不明であるが、近世以降と考えられる。 (金子)

R D 221 土坑 (第 299・312 図、写真図版 149)

<位置・重複関係> 調査区西側の-1-A 区に位置し、R A 230 竪穴住居跡、柱穴状土坑と重複する。新旧関係は(旧) R A 230 竪穴住居跡→R D 221 土坑→(新) 柱穴状土坑である。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。規模は開口部で 2.82×1.44 m、深さ 18 cm である。底面は凹凸があり、壁はやや内湾して立ち上がる。

<埋土> 3 層に細分され、焼土粒や黄褐色土ブロックを含む。<遺物・時期> 埋土より須恵器甕の破片が出土した。この土坑は平安時代の R A 230 竪穴住居跡を壊して作られているので、本遺物が必ずしも遺構に伴うとは断定できない。時期は平安時代以降と考えられる。 (金子)

R D 227 土坑 (第 300・311 図)

<位置・重複関係> 調査区西側の-1-C 区に位置し、R G 065 と重複する。R G 065 を掘り上げ後、検出したが、新旧関係は確認できなかった。<平面形・規模> 円形を基調としている。径は開口部で 55×47 cm で、深さは不明である。底面は平坦で壁は比較的直立して立ち上がる。

<埋土> 調査の際の下手際により不明である。<遺物・時期> 埋土より寛永通寶 1094~1097 の 4 枚のほ

か、腐食が進み図化できなかつた1枚、1112の磁器皿(染付)が出土している。出土遺物より近世に属すると考えられる。なお、周辺の土坑の状況により、本遺構は墓穴かそれに関する施設の可能性がある。

(金子)

#### R D 253 土坑 (第 305 図、写真図版 156)

<位置・重複関係> 調査区北側の-2 A区西寄りに位置している。R A 171 竪穴住居跡と重複し本遺構が切っている事から、新旧関係は(新) R D 235 土坑→(旧) R A 227 竪穴住居跡である。<平面形・規模> 平面形は長方形を呈し、規模は開口部で2.17×1.04 m、深さは14 cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は直に底面から立ち上がっている。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土の単層で、褐色土がブロック状に混入し強く締まっている。

<遺物・時期> 遺物の出土はなく時期は不明である。

(高橋)

#### R D 413 土坑 (第 305 図)

<位置・重複関係> 調査区北側の-1-A区北寄りに位置し、IV層上面で黒褐色土の半円形の落ち込みによって検出している。<平面形・規模> 南側半分は道路(調査区域外)の下に延びる事から、詳細は不明である。検出された規模から、開口部径3 m前後の円形を呈すると思われる。深さは中央部で52 cmである。底はほぼ平坦で、水酸化鉄の薄い堆積がある。壁は底面から緩やかに立ち上がり、壁高が西壁32 cm、東壁45 cmを測る。

<埋土> 埋土は黒～黒褐色粘土質土を主体とする3層に大別される。上層には小ブロック状の褐色土で、水酸化鉄が混入している。下層は締まりのある黒色粘土である。<遺物・時期> 遺物の出土がなく時期は不明である。

(高橋)

#### R D 755 土坑 (第 307・313 図)

<位置・重複関係> 調査区西側の-1-C区に位置する。重複関係はない。<平面形・規模> 円形を呈する。径は開口部で67×60 cm、深さは不明である。底は平坦で、壁はやや直立気味に立ち上がる。

<埋土> 当初柱穴と考えたため、記録をとっていない。

<遺物・時期> 埋土から麻布にくるまれた多数の古銭1107が出土した。これらの古銭の中の1枚は寛永通寶である。このことから、本遺構は近世に属し、周辺の土坑の状況により墓穴かそれに関連する施設の可能性がある。

(金子)

#### R D 756 土坑 (第 307・312 図)

<位置・重複関係> 調査区西側の-1-C区に位置する。重複関係はない。<平面形・規模> 円形を呈する。径は開口部で38×36 cm、深さ23 cmである。底は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

<埋土> 調査の際の不手際で記録をとっていない。<遺物・時期> 埋土中から寛永通寶がさしの状態で出土した1108～1111。取り上げるときに崩れてしまったものもあるが、1108・1109は数枚が密着し、穴に藁状の繊維が残っている。さしの状態になっていたと考えられる。これらの遺物から、本遺構は近世に属し、周辺の土坑の状況により、墓穴かそれに関連する施設の可能性がある。

(金子)

R D 757 土坑 (第 307・313 図)

<位置・重複関係> 調査区西側の-1-B区に位置する。R G 065 と重複し本遺構の方が新しい。

<平面径・規模> 円形を呈する。径は開口部で87×81 cm、深さ62 cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。底面には棺桶の桶底と思われる木質部分が51×47 cmの範囲で円形に残っていた。

<埋土> 5層に細分され、そのうち2層、3層は棺桶の部分であったと思われる。幅は底面の桶底の径とも一致する。<遺物・時期> 3層からは軟化した人骨と思われる骨の破片、人頭大よりやや小ぶりの礫、寛永通寶1113~1121が出土している。これらの寛永通寶のうち1121はさしの状態で麻布にくるまれ、さらに籠と思われる編み物に入っていたようである。出土遺物から、本遺構は近世に属し、墓穴と考えられる。

(金子)

第2表 土坑一覧(1)

No	遺構名	位置(グリッド)	平面形	開口部 cm	底部 cm	深さ cm	備考	時期	図版	写真
1	RD091	1C11j	円形	89×78	76×66	9		不明	284	126
2	RD092	1C11i	円形	110×103	81×75	14		〃	〃	〃
3	RD094	-1B1r	隅丸長方形	136×111	118×94	10		平安	〃	〃
4	RD095	-2B23j	隅丸方形	168×163	145×137	19	須恵器坏・甕出土	〃	〃	〃
5	RD097	1C15a	楕円形	255×213	209×140	36		〃	〃	127
6	RD098	1C13g	不整形	246×122	198×75	45		〃	285	〃
7	RD099	1B8l	楕円形	150×110	101×68	21	青磁片出土	中世	〃	〃
8	RD100	3-B11s	不整形	(148×125)	(138×82)	17	RG085に切られる	古代?	〃	〃
9	RD101	2-A7h	隅丸方形	141×131	116×108	33		近世	〃	128
10	RD102	2-A8h	隅丸方形	195×194	177×172	17	1058~1060のほか、色絵、染付磁器、陶器出土	〃	〃	〃
11	RD103	1-A25e	長方形	218×135	201×120	16	RD108と重複する	近世?	286	〃
12	RD104	2-A13h	隅丸長方形	139×100	108×87	26	RD105・106と重複する RB010と関連?	〃	285	〃
13	RD105	2-A13i	不整形	258×[160]	244×[145]	13	RD104と重複 RB010と関連? 陶器出土	〃	286	〃
14	RD106	2-A14h	不整形	169×103	145×85	39	RD104・105と重複	〃	〃	〃
15	RD107	2-A3e	長方形	221×118	206×112	58	寛永通寶(1055)、大堀相馬碗、染付出土	近世	287	129
16	RD108	2-A1e	隅丸長方形	447×346	400×313	17	RD103・117と重複する 振り鉢破片出土	〃	286	〃
17	RD109	1-B23l	不整形	[122]×95	105×85	11	大堀相馬碗破片出土	〃	287	〃
18	RD110	1-B23g	隅丸長方形	175×109	143×86	71	埋め戻しの埋土	近世以降	〃	130
19	RD111	2-A12i	楕円形	227×161	150×100	95	磁器、染付、大堀相馬産陶器出土	近世	〃	〃
20	RD112	2-B4g	楕円形	117×106	89×71	34		古代?	〃	〃
21	RD113	2-B3k	円形	80×78	59×53	50	土師器甕出土	奈良	288	〃
22	RD114	2-A12n	不整形	189×[183]	[141]×134	56	RD111と重複、埋土類似する	近世	287	131
23	RD115	2-B1k	不整形	(88×72)	(62×49)	16	RE009に切られる	奈良以前	288	〃
24	RD116	1-A25e	不整形	287×219	259×183	48		近世?	〃	〃
25	RD117	1-A25d	長方形?	160×(82)	(150×75)	18	RD108と重複する	〃	286	〃
26	RD118	2-B5p	円形	92×90	78×70	48		奈良?	288	132
27	RD119	2-B6n	円形	145×149	114×93	49	RA142を切る	奈良以後	〃	〃
28	RD120	2-B5t	楕円形	65×[51]	52×40	39	RD121を切る	古代?	〃	〃
29	RD121	2-B5u	不整形	147×107	[134]×100	36	RD120と重複する	古代	〃	〃
30	RD122	2-B5u	溝状	552×92	473×47	86	RA141と延外溝でつながる	奈良	308	—
31	RD123	2-B8u	楕円形	147×131	99×99	52	ロクロ不使用の土師器坏出土	〃	289	〃
32	RD124	2-B1w	楕円形?	[127]×104	[102]×81	25	RD125と重複する	古代?	〃	133
33	RD125	2-B2w	円形?	[130]×112	[108]×96	20	RD124と重複する	不明	〃	〃
34	RD126	2-B7x	不整形	[102]×82	[84]×62	10	RD122に切られる	奈良以前	〃	〃
35	RD127	2-B7x	不整形	[100]×99	66×63	17	RD126を切る?	奈良?	〃	〃
36	RD128	2-B8w	不整形	104×96	74×64	22	RD126・127に埋土類似	〃	〃	〃
37	RD129	1-B25x	楕円形	246×210	[210]×169	34		古代?	〃	134
38	RD130	2-B11x	楕円形	119×102	95×85	75	須恵器甕出土 壁が崩壊	平安	〃	〃
39	RD133	2-B14x	不整形	149×135	122×112	16	RF016を切る	古代?	〃	〃
40	RD134	2-B12w	楕円形	83×69	71×53	14	炭化物含む	〃	290	〃
41	RD135	2-A13b	不整形	72×58	57×44	10		〃	〃	135
42	RD136	6-C8y	不整形	163×156	104×87	60		不明	〃	—
43	RD138	6-C6s	方形	179×172	169×148	22		〃	〃	—
44	RD139	5-D10u	円形	91×87	78×73	7	RA147を切る	平安以降	〃	—
45	RD140	2-B14h	隅丸長方形	113×88	97×66	22		近世以降	〃	135
46	RD141	-1A1u	楕円形	101×[75]	84×63	8		不明	〃	〃
47	RD142	-1A15v	隅丸方形	67×62	48×40	24		〃	〃	〃
48	RD144	-1-A14d	不整形	285×204	230×120	51	須恵器・土師器出土	平安	〃	136
49	RD145	-1A16w	楕円形	97×79	66×50	21		不明	291	〃
50	RD146	-1A15w	円形	79×72	54×53	25	ロクロ不使用の土師器甕出土	奈良	〃	〃

第3表 土坑一覧(2)

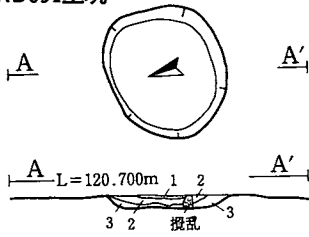
No	遺構名	位置(グリッド)	平面形	開口部 cm	底部 cm	深さ cm	備考	時期	図版	写真
51	RD147	-1B14a	楕円形	87×63	68×37	21		不明	291	136
52	RD148	1A13j	楕円形	94×83	55×43	46		〃	〃	137
53	RD149	1B15t	楕円形	141×111	67×40	49		〃	〃	〃
54	RD150	1B16t	楕円形	94×[67]	63×48	28	RD157と重複する	〃	〃	〃
55	RD151	1B17t	楕円形?	85×[79]	[60]×56	24		〃	〃	〃
56	RD152	1B17s	不整形	[117]×104	74×67	22	RD153・154と重複する	〃	〃	138
57	RD153	1B16s	円形?	[91]×88	74×[69]	29	RD152と重複する	平安	〃	〃
58	RD154	1B16s	楕円形?	[64]×56	81×21	21	RD152と重複する	〃	〃	〃
59	RD155	1C7d	楕円形	140×124	106×88	37		不明	292	〃
60	RD156	1C6b	隅丸長方形?	140×109	115×80	12	土錘出土	平安	〃	139
61	RD157	1B16t	円形	120×[110]	139×130	42	RD150と重複する 須恵器甕出土	〃	〃	〃
62	RD158	-2A14h	楕円形	123×76	65×41	50		〃	〃	〃
63	RD160	1B10u	不整形	175×118	162×100	15	RG042と重複する	〃	〃	〃
64	RD161	-1-B6t	楕円形	192×153	49×42	42	須恵器坏出土	〃	〃	144
65	RD162	-2A15s	楕円形	164×138	129×110	16		〃	293	140
66	RD163	-2A16r	楕円形	172×105	151×72	19		〃	〃	〃
67	RD164	-1B11k	不整形	163×146	130×112	20		〃	〃	〃
68	RD167	-1-A23c	楕円形	88×59	77×53	25	ロクロ不使用型 RA219を切る	〃	〃	一
69	RD172	2-A19h	不整形	[131]×123	106×66	29	柱穴に切られる	不明	〃	141
70	RD173	2-A12b	不整形	62×50	54×35	5	炭化物多い	古代	〃	〃
71	RD174	3-A4h	隅丸方形	102×90	77×55	27		不明	〃	〃
72	RD175	5-B10k	楕円形?	235×100	188×49	34		〃	〃	一
73	RD176	5-B7k	不整形	130×118	123×101	7		〃	〃	一
74	RD177	5-B8l	隅丸長方形	195×127	191×99	16		〃	294	一
75	RD178	6-B11f	不整形	530×377	350×279	44	近現代の白磁碗、鉄製品出土	近現代	〃	141
76	RD179	-1-B24j	楕円形	214×139	186×107	22		奈良	〃	142
77	RD180	1-B22f	不整形?	[193]×134	[180]×77	63	ヘラ切り土師器坏、球胴甕出土	〃	〃	一
78	RD181	1B6y	不整形	282×232	219×166	50	RA128内	平安	295	142
79	RD189	-1-A24e	不整形	90×87	66×41	30		不明	〃	一
80	RD191	1C8p	楕円形	213×57	147×45	25		〃	〃	142
81	RD192	-2B5i	楕円形	164×126	47×32	45		〃	〃	一
82	RD193	-2B14c	楕円形	165×119	79×71	22		〃	〃	142
83	RD194	-2B18c	円形	170×161	140×121	42	鉄滓出土	〃	〃	143
84	RD196	-2-B23p	楕円形	138×107	131×99	10		〃	〃	144
85	RD197	-2-B25v	楕円形	291×169	74×61	27		〃	〃	〃
86	RD198	1B15f	円形	144×93	68×62	20		〃	296	143
87	RD199	1B15e	円形	95×86	76×64	24		〃	〃	〃
88	RD200	2-B20t	楕円形	73×65	(55×43)	8	炭化物多量	古代?	〃	〃
89	RD201	2-B19s	円形?	(54×53)	39×(34)	4	炭化物多量	〃	〃	145
90	RD202	2-B19q	楕円形	99×78	77×36	21	焼土・炭化物	〃	〃	〃
91	RD203	1-A25h	不整形	288×172	261×148	21		近世?	〃	〃
92	RD204	2-B16q	不整形	141×115	104×48	28		不明	〃	一
93	RD205	2-B2g	不整形	297×[121]	?	42		古代	〃	145
94	RD206	-1B15o	不整形	367×261	290×201	14		不明	297	146
95	RD207	-1-A1a	楕円形	182×123	154×91	22		〃	〃	一
96	RD208	-1-B1x	不整形	318×[242]	39×33	42	RG104と重複する 寛永通寶(1087)出土	近世	〃	144
97	RD209	-1-B17s	不整形	370×356	225×223	52	須恵器(1088)出土	古代	298	146
98	RD210	-1-B19t	不整形	445×218	307×84	20	RD211と重複する	不明	299	〃
99	RD211	-1-B18s	楕円形?	(145×121)	(130×98)	52	RD210と重複する	〃	〃	〃
100	RD212	1-A4a	不整形	192×126	114×93	39		〃	297	147
101	RD213	-1-A21h	円形	84×82	66×58	10	新しい埋土	近世以降	〃	〃
102	RD214	1B7c	隅丸長方形	182×133	162×114	14	RA134 図面内	平安	298	〃
103	RD215	1b8b	隅丸長方形?	191×128	157×86	32		〃	〃	148
104	RD216	-1A16y	隅丸長方形	352×96	336×71	30	RD217と重複する	不明	〃	〃
105	RD217	-1A15y	不整形	128×[125]	[110]×101	23	RD216と重複する 土師器甕(1089)出土	奈良?	299	147
106	RD218	-1-A18c	不整形	264×201	129×73	27		不明	300	148
107	RD219		楕円形	114×66	[94]×34	24	RG069・柱穴に切られる	古代	299	一
108	RD220	1-B2r	円形?	101×99	[78]×76	14	RA157を切る	中世以降	〃	〃
109	RD221	-1-A19i	不整形	282×144	[255]×121	18	須恵器(1092, 1039)出土	平安	〃	149
110	RD222	-1-B20o	楕円形	195×135	168×98	17		不明	300	〃
111	RD223	-1-A19e	楕円形	92×[67]	79×[55]	11	RB006に切られる	近世以前	〃	〃
112	RD227		楕円形	54×46	36×32	?	RG065と重複、寛永通寶(109~41097)、染付	近世	〃	一
113	RD228	-1-A19e	不整形	420×227	(383)×186	43	RA123と重複する	近世?	301	〃
114	RD229	-1-A21b	不整形	209×150	134×80	33	RA133を切る	不明	〃	150
115	RD230	1B14g	楕円形	86×75	56×46	23		〃	300	〃
116	RD231	1B19j	楕円形	106×95	59×43	15		〃	〃	〃
117	RD232	1A2w	不整形	214×[120]	184×[112]	16	RA111と重複する	〃	〃	〃
118	RD233	-2B25c	長方形?	290×94	269×75	30	RA109内	平安	〃	151
119	RD234	-1B4c	隅丸長方形	174×102	146×65	29		不明	301	〃

第4表 土坑一覧(3)

No	遺構名	位置(グリッド)	平面形	開口部 cm	底部 cm	深さ cm	備考	時期	図版	写真
120	RD235	-2B23a	不整形	[209]×129	204×111	12		不明	301	151
121	RD236	-2B24a	楕円形	166×140	[157]×124	18		平安	302	〃
122	RD237	-1B8d	楕円形	166×92	120×76	34	RA169 と重複する	不明	〃	152
123	RD238	-1-B20v	不整形	346×262	156×124	35	磁器碗(1090)、鉄、刀子出土	近世?	〃	〃
124	RD239	-1-B23w	楕円形?	[160]×93	85×44	54	RA129 を切る 埋め戻しの単層	奈良以降	〃	〃
125	RD240	-1-A13f	円形?	93×88	54×34	33	RG070 を切る	不明	〃	〃
126	RD241	-2-A23g	円形	121×115	110×96	19	RG135 と重複する	〃	〃	153
127	RD242	-2-A25n	楕円形	385×227	122×105	28	須恵器(1098~1099)、釘出土	平安	303	〃
128	RD243	-2-A18n	不整形	115×89	92×56	31		不明	〃	〃
129	RD244	-1-B3r	楕円形	91×81	53×33	27		〃	〃	〃
130	RD245	-1-B7x	円形	144×133	58×54	20		〃	〃	154
131	RD246	-2-A22m	楕円形	273×213	140×113	29		〃	〃	〃
132	RD247	-2-A24f	不整形	165×118	90×81	46	有孔石製品(1101)出土	〃	〃	〃
133	RD248	-1-A13y	隅丸長方形	128×109	110×95	25		〃	〃	155
134	RD249	-1A14v	隅丸長方形?	86×[64]	74×[55]	39	RD152 と重複する	〃	304	〃
135	RD250	-1-A13e	楕円形?	[232]×94	[202]×75	19	RG070 に切られる	〃	〃	〃
136	RD251	-1-B20w	不整形	156×145	123×76	43	RD238 と重複 (新旧関係) 埋め戻しの土	〃	〃	155
137	RD252	-1-A13l	楕円形	[103]×82	56×55	13	RG069 を切る	〃	〃	〃
138	RD253	-2A17d	長方形	217×104	207×93	14		〃	305	156
139	RD254	-1-A20d	不整形	149×85	80×40	18	RA133 と重複 (新旧不明)	〃	〃	〃
140	RD255	1-B1q	楕円形	[110]×84	98×72	8	瓦器片、陶器片出土	中世?	〃	〃
141	RD256	-1-B24s	不整形	[218]×200	[176]×167	?	RB014 に切られる	近世?	〃	〃
142	RD257	-1-A14c	隅丸長方形?	144×109	130×[93]	33	RG070 に切られる 埋め戻しの土	不明	304	156
143	RD258	-2-A24i	楕円形	176×122	31×31	19		〃	〃	154
144	RD259	-2-A24h	楕円形	132×108	99×64	23		〃	〃	〃
145	RD260	-2-A25i	楕円形	171×131	133×97	38		〃	〃	〃
146	RD410	-1-A4v	不整形?	80×59	51×44	33		〃	305	157
147	RD411	-1-A3v	隅丸長方形	174×91	143×62	35		〃	〃	〃
148	RD412	-1-A4r	隅丸長方形	193×99	165×78	36		〃	〃	157
149	RD413	-1-A9e	円形?	[305]×[105]	[206]×[95]	120	寛永通寶(1057)出土	近世	〃	〃
150	RD603	-1-A6k	隅丸長方形	162×107	150×89	22	RA302 竪穴住居と重複	不明	〃	〃
151	RD607	-1-A10h	楕円形	96×[83]	[83]×60	27	RD758 と重複 (新旧不明)	〃	306	〃
152	RD610	-2-A24t	不整形	167×97	153×78	19		〃	〃	〃
153	RD611	-1-A2w	不整形	118×111	93×89	19		〃	〃	157
154	RD612	-2-A22g	不整形	298×133	205×49	36		〃	〃	〃
155	RD613	-2-A21r	不整形	305×[150]	205×[95]	53	須恵器長頸瓶、甕出土	平安	〃	〃
156	RD640	-1-B20i	不整形	185×174	112×96	14		不明	〃	〃
157	RD643	-2A23d	不整形	215×168	135×113	38		〃	〃	〃
158	RD644	-2A23e	隅丸長方形	156×80	122×54	24	RD645 と重複する	〃	307	157
159	RD645	-2A23e	隅丸長方形	[90]×67	[88]×37	13	RD644 と重複する	〃	〃	〃
160	RD664	-	-	-	-	-		〃	311	〃
161	RD755	-1-C21x	円形	66×62	37×35	?	寛永通寶出土 墓か	近世	307	〃
162	RD756	-1-C20y	円形	36×35	18×18	?	寛永通寶出土 墓か	〃	〃	〃
163	RD757	-1-B21a	円形	88×78	73×64	61	寛永通寶出土 墓か	〃	〃	〃
164	RD758	-1-A10h	楕円形	152×144	120×118	37	RA132 を切る	平安以降		

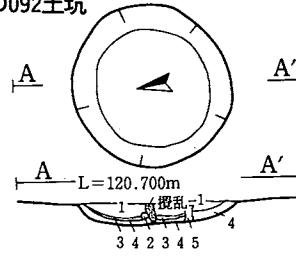
[ ] は現存値、( ) は推定値である。

RD091土坑



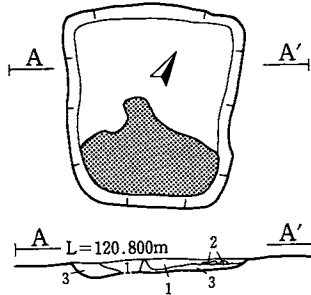
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性弱 褐色焼土(7.5YR4/6)ブロック状に50%混入 指圧痕あり
  2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色焼土(7.5YR2/2)微量混入
  3. 10YR2/1 黒褐色シルト質土 粘性に富む 黒褐色土(10YR2/2)30%混入
- ※全体に炭片混入

RD092土坑



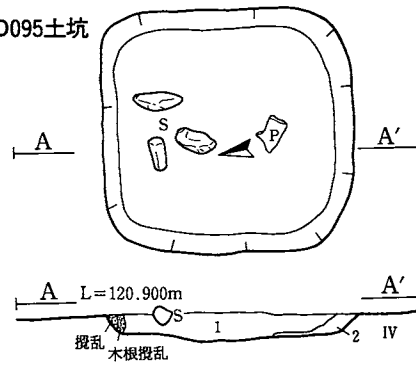
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 暗褐色土(10YR3/3)20%混入 炭片・焼土粒微量含む
2. 7.5YR4/4 褐色焼土 粘性なし 黒色土(10YR1.7/1)含む
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 炭を層状(厚さ0.5~1cm)に含む
4. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 粘性あり
5. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性弱

RD094土坑



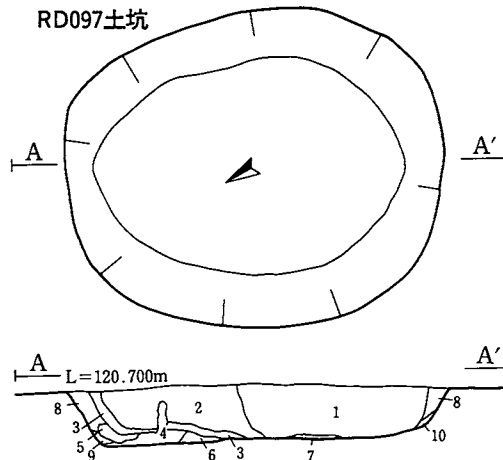
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性弱 赤褐色焼土(5YR4/6)がブロック状(径0.5~1cm第)に10%混入
2. 5YR3/2 暗赤褐色焼土 粘性弱 赤褐色焼土粒(5YR4/6)微量混入
3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性あり 黒褐色シルト質土(10YR2/2)30%混入

RD095土坑



1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる IV層起源の褐色ブロックを1%含む 須恵器の坏を混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土層 下に炭を微量混入

RD097土坑

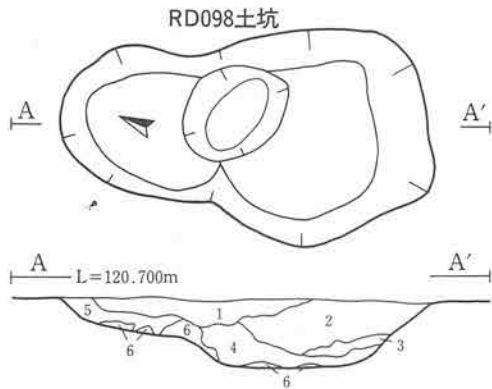


1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 微量の炭・暗褐色土がブロックで1%混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 暗褐色土ブロック3%混入
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 暗褐色土との混合土層
4. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる IV層起源と思われる
5. 10YR2/3 暗褐色シルト質土 締まりなし 焼土粒・微量の炭含む
6. 10YR2/3 暗褐色シルト質土 粘性に富む 堅く締まる
7. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 水酸化鉄多量混入
8. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる
9. 10YR2/2 暗褐色シルト質土 焼土粒微量含む 8層に類似
10. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 IV層を起源とする壁崩落土

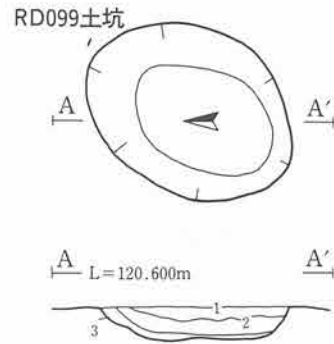
0 1m  
1 : 50

第284図 RD土坑(1)

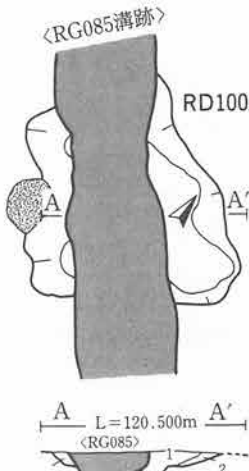




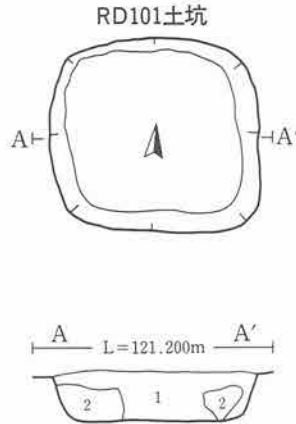
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合層(30%)
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 水酸化鉄含む
3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる IV層起源
4. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土が小ブロックで混入
5. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土が小ブロックで混入  
炭を微量含む
6. 10YR4/4 褐色シルト質土 3層に類似 黒褐色土で汚れている



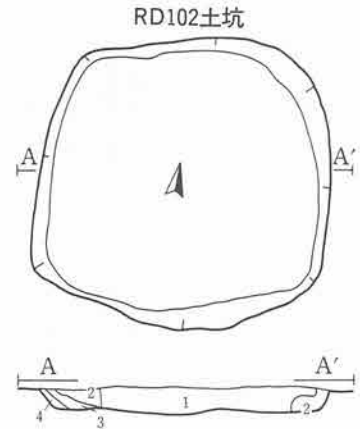
1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土がブロック状に10%混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 水酸化鉄微量含む
3. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を帯状に混入



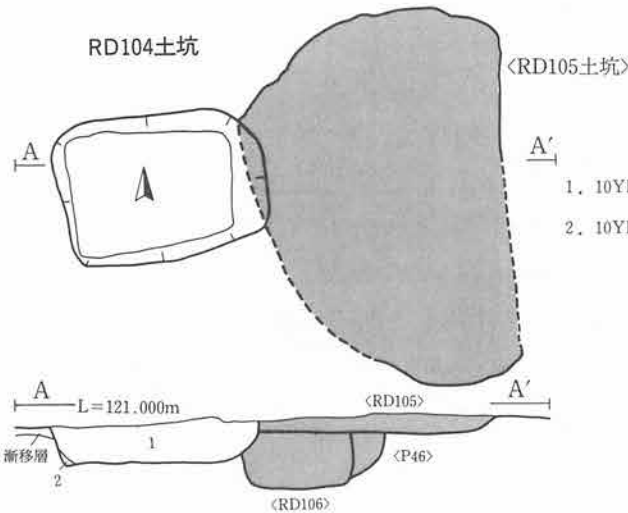
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性に富む 黄褐色土ブロックが少量混入 褐鉄を含む
2. 10YR3/2 褐色土 粘性に富む



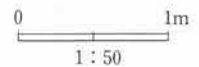
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 焼土粒・炭化物含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 締まりなし 砂粒含む



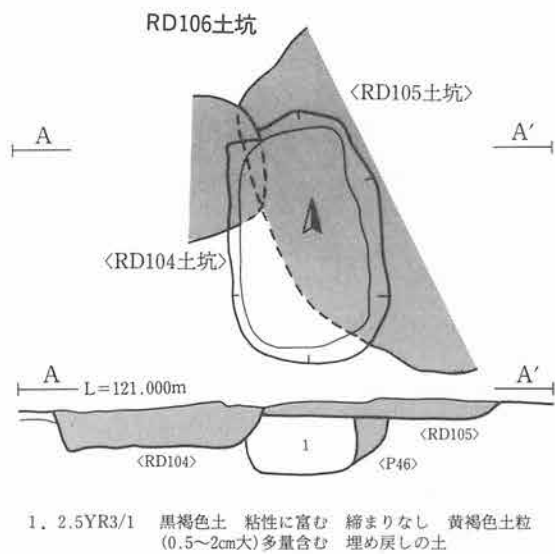
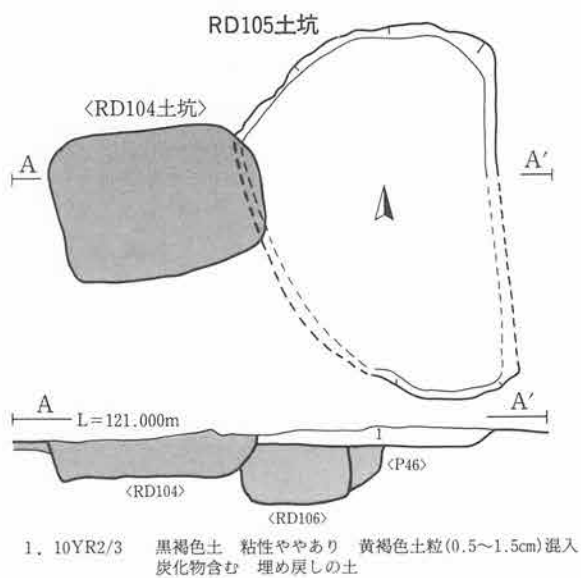
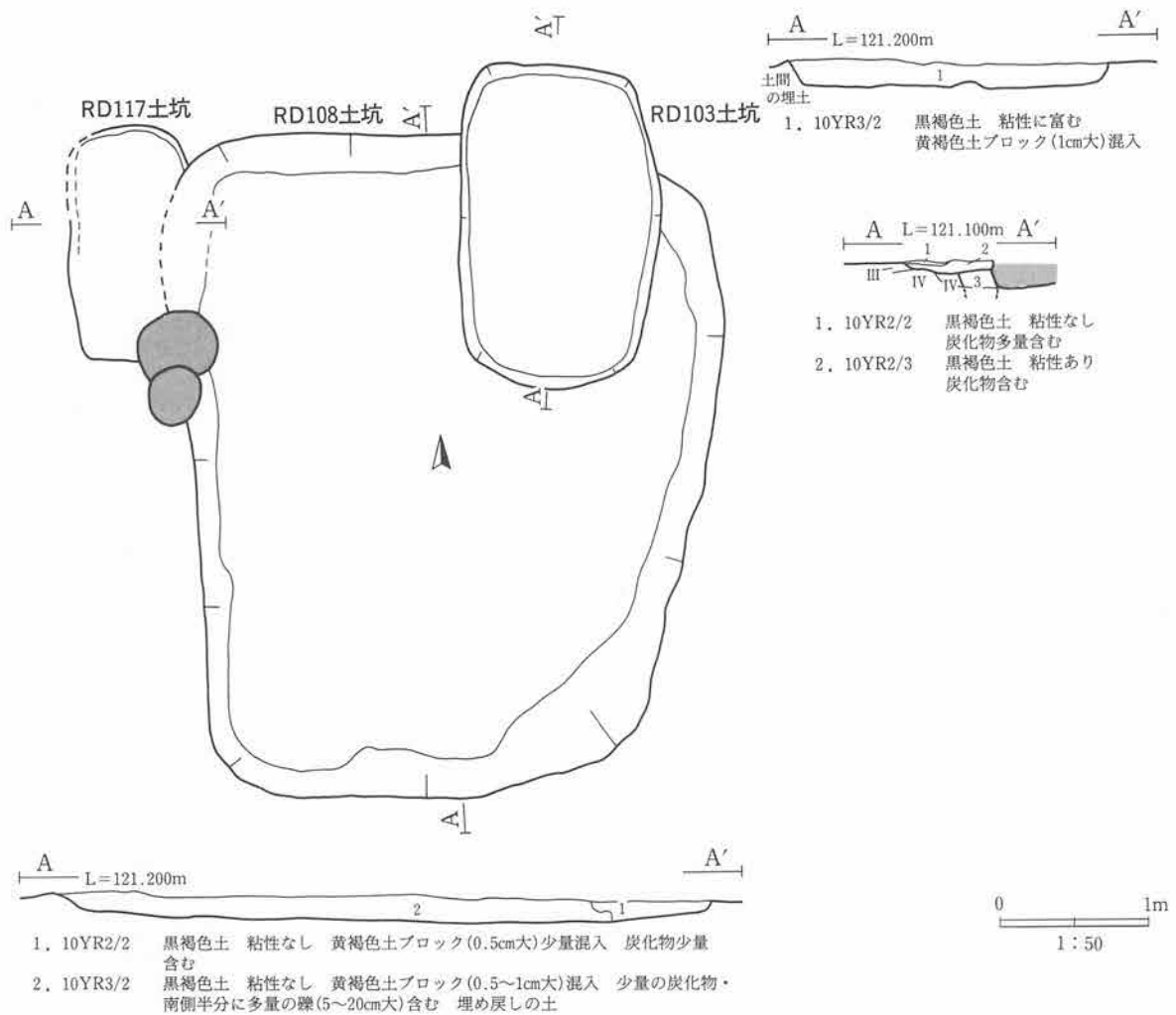
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 礫(5~20cm大)多量含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 礫(3cm大)少量含む
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり



1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土ブロック(0.5~3cm大)多量混入 埋め戻しの土
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし 締まりなし 壁の砂質シルトの崩壊土

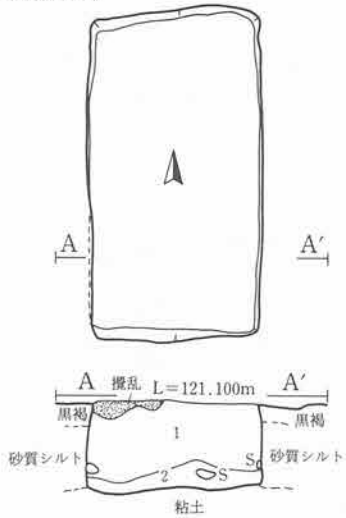


第285図 RD土坑(2)



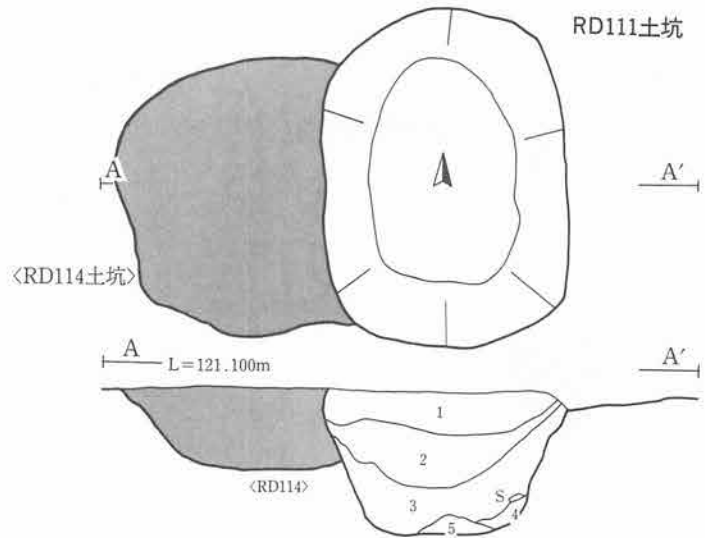
第286図 RD土坑(3)

RD107土坑



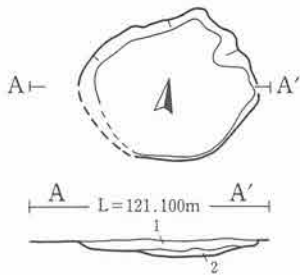
1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし 締まりなし 砂質シルト起源の土に黒褐色土混入 礫(3cm~こぶし大)含む
2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性あり 締まりなし 礫・炭化物含む

RD111土坑

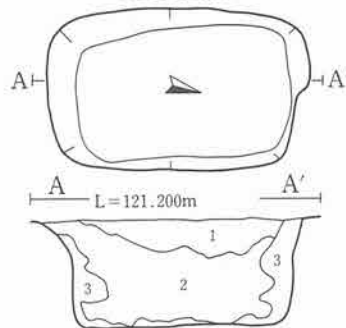


1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 焼土粒(0.1~0.3cm大)3%・炭化物(0.5~1cm大)2%含む
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 褐鉄5%含む
3. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性に富む 黄褐色土ブロック(1~1.5cm大)混入
4. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性に富む 褐鉄(0.5~1cm大)含む
5. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性に富む 褐鉄(1~3cm大)含む

RD109土坑

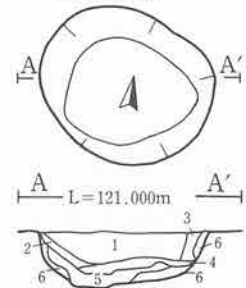


RD110土坑



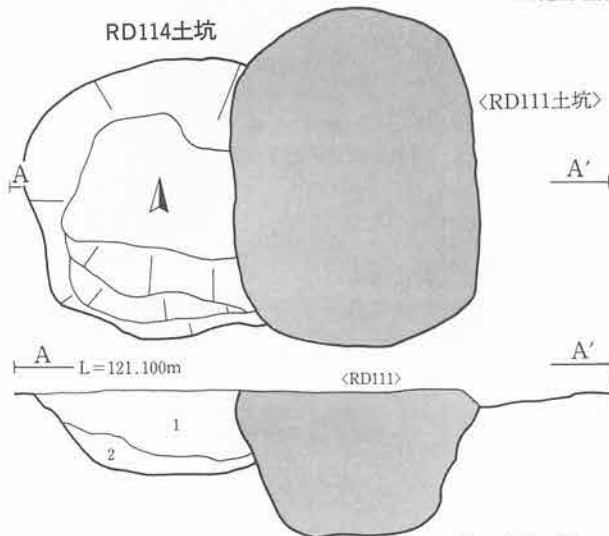
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(1~3cm大)まばらに混入
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土ブロック(1~20cm大)混入
3. 10YR4/4 褐色土 粘性に富むが砂質 締まりなし 黒褐色土少量混入

RD112土坑

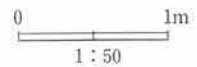


1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土ブロック(10YR3/4)混入
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土ブロック(10YR4/4)混入
3. 10YR3/2 暗褐色土 粘性あり 締まりなし 黒色土ブロック混入
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 締まりなし
6. 10YR3/3 黒褐色土 粘性あり

RD114土坑

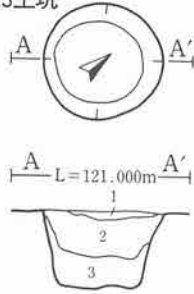


1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 堅く締まる 黄褐色土粒(0.2~0.8cm大)・炭化物(0.5~1cm大)微量含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(1~10cm大)混入 炭化物(0.5~1cm大)含む



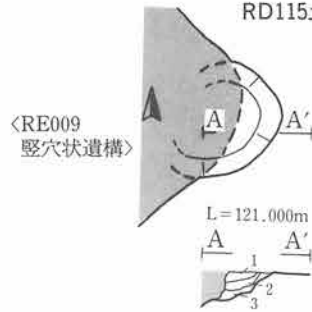
第287図 RD土坑(4)

RD113土坑



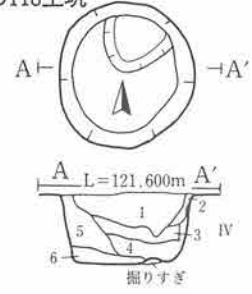
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 締まりややあり 黄褐色土粒多量混入
2. 10YR1.7/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土ブロック(3cm大)混入
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土ブロック(3cm大)多量混入

RD115土坑



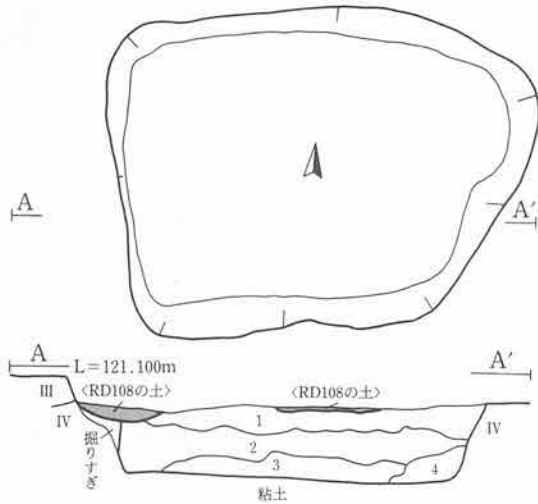
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 褐鉄含む
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒(0.1~0.5cm大)少量含む
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土粒(0.1~0.3cm大)少量含む

RD118土坑



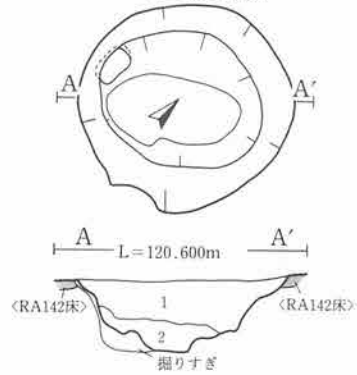
1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.5~1cm大)混入
2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 混入物なし III層の崩壊土
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック・黒色土ブロック混入
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黒色土ブロック(5~10cm)多量混入
5. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(1~2cm大) 黒色土ブロック(1~3cm大)混入
6. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土粒混入

RD116土坑



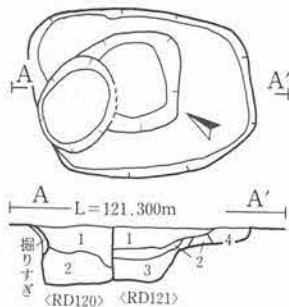
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック(0.5~5cm大)・砂質シルト・ブロック(0.5~5cm大)多量に混入 埋め戻しの土
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(1~15cm大)層状に多量混入 埋め戻しの土
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 締まりなし 黒色土ブロック(1~5cm大)混入 埋め戻しの土
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 混入物なし

RD119土坑



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック(1~2cm大)・III層起源の黒色土ブロック(1~3cm大)混入
2. 10YR4/6 褐色土 粘性なし IV層起源の砂質シルトに黒色土が薄く層状に入る

RD120・121土坑



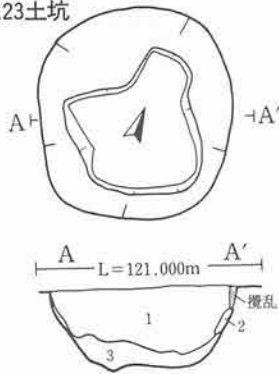
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(0.5~2cm大)
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック(1~5cm大)混入 炭化物(0.5~2cm大)・焼土粒(1~2cm大)含む

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒(0.2~0.5cm大)混入
2. 10YR4/3 黄褐色土 粘性に富む
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック(1~2cm大)混入 炭化物・焼土粒(各0.1~0.5cm大)少量含む



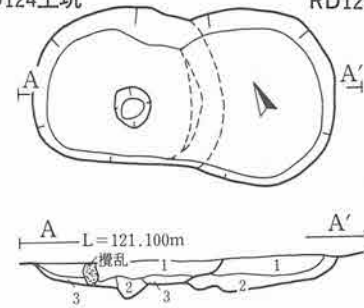
第288図 RD土坑(5)

RD123土坑



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 炭化物含む 黒褐色土・砂質シルトの混合土
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 壁崩壊土
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 暗褐色土・砂質シルトの混合土

RD124土坑



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 砂質シルト粒混入 炭化物含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし 壁・底崩壊土

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物少量含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 焼土粒・炭化物含む

RD126土坑



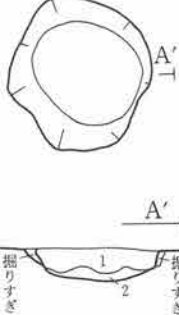
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 焼土・炭化物多量含む

RD127土坑



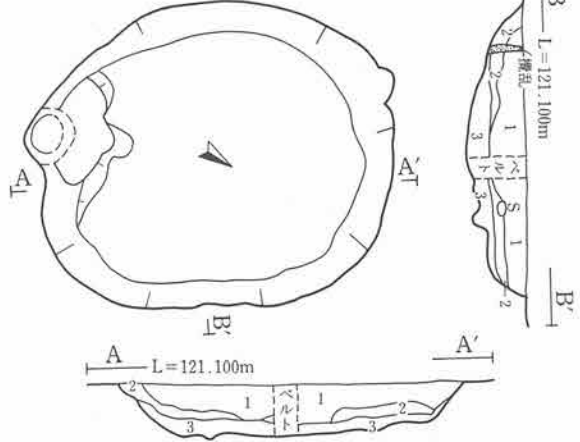
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 炭化物多量含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 炭化物多量含む

RD128土坑



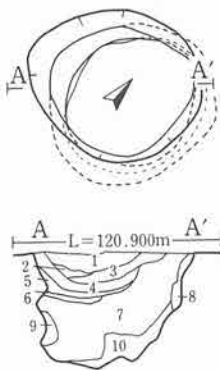
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 焼土・炭粒含む
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 黄褐色粘土ブロック混入 焼土粒・炭粉含む

RD129土坑



1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性なし 砂質シルト粒少量混入 炭化物含む
2. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 混入物なし
3. 10YR4/3 黄褐色土 粘性なし 上面堅く締まる

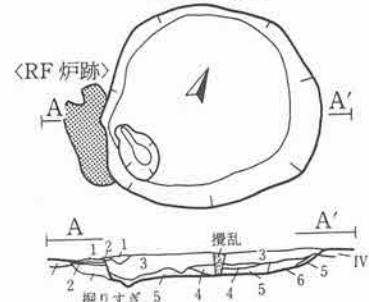
RD130土坑



1. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 黄褐色土粒(7.5YR6/8橙色0.5~2cm大)少量混入
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 焼土少量含む
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(10YR3/4暗色1~3cm大)混入
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(10YR3/4暗褐色1~6cm大)混入
5. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(10YR4/3に黄褐色1~5cm大)多量混入 焼土粒少量含む
6. 10YR1.7/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 焼土(0.5~1cm大)多量含む 異地性の焼土
7. 10YR3/1 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒(10YR3/4暗褐色0.3~0.5cm大)微量混入
8. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 壁崩壊土
9. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土ブロック(10YR3/3暗褐色3~10cm大)多量混入 壁崩壊土
10. 10YR3/1 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土ブロック(10YR3/4暗色1~2cm大)混入



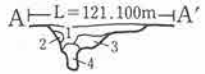
RD133土坑



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 多量の焼土粒・少量の炭化物含む
2. 10YR1.7/1 黒色土 粘性なし 締まりなし 炭化物多量含む
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 焼土粒含む
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 焼土粒の他、全体に焼土含む
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黒色土少量混入 壁等の崩壊土
6. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 焼土粒含む

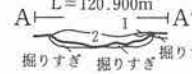
第289図 RD土坑(6)

RD134土坑



1. 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土粒(0.1~0.3cm大)少量混入炭化物(0.3-1cm大)含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性弱 黄褐色土粒(0.3~1.5cm大)混入 壁崩壊土
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱 黄褐色土粒(0.3~1.5cm大)多量混入
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 粘性ややあり

RD135土坑



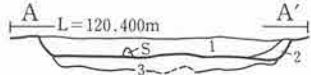
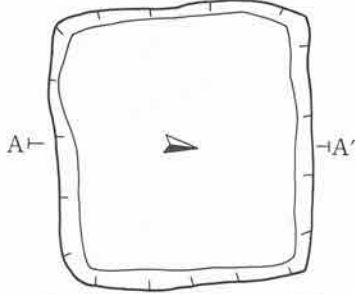
1. 10YR4/6 褐色土 粘性なし 焼土多量含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 焼土粒・炭化物含む

RD136土坑



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり ローム質
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり ローム質 黄褐色土ブロック(10YR5/6)黄褐色ローム)混入
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒混入 ローム質
4. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック混入 ローム質
5. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒混入 グライ化した土

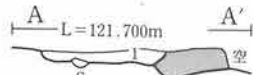
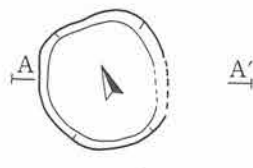
RD138土坑



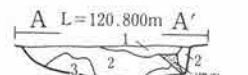
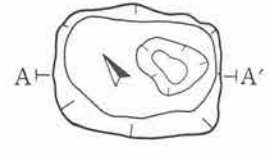
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂質シルト混入
3. 10YR5/8 黄褐色土 粘性ややあり 砂質 貼り床状

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒(砂質)混入 小礫(5cm以下)微量含む

RD139土坑

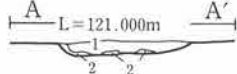
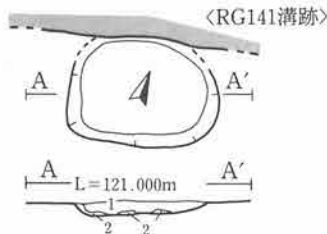


RD140土坑



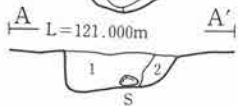
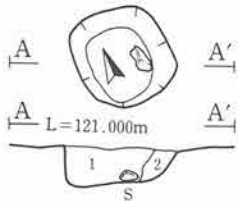
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 締まりなし 黄褐色土粒少量混入 炭粉・下位に焼土含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土・黒褐色土の混合炭化物少量含む
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 壁崩壊土

RD141土坑



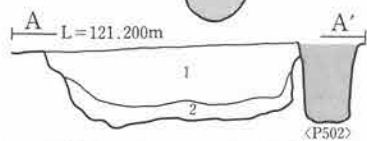
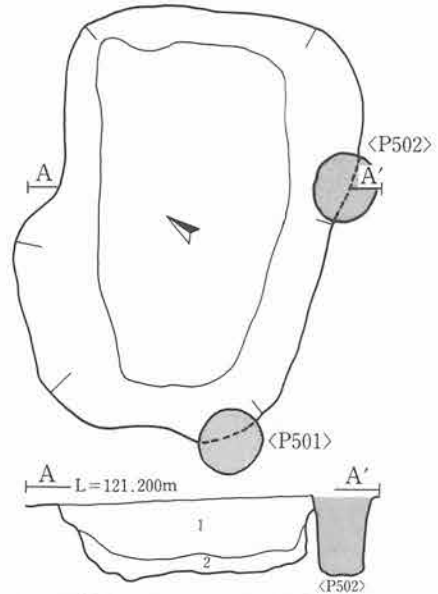
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)5%混入
2. 10YR4/6 褐色シルト質土 粘性あり 黒褐色土(10YR2/2)3%混入

RD142土坑



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック(1~2cm大)混入
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒(0.5~1cm大)含む

RD144土坑



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 焼土粒・炭化物多量含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック多量混入

0 1m

1 : 50

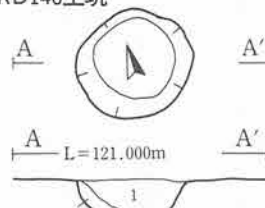
第290図 RD土坑(7)

RD145土坑



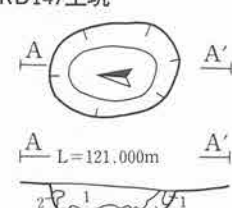
1. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 微量の炭を含む
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 堅く締まる IV層起源 黒色土で汚れている

RD146土坑



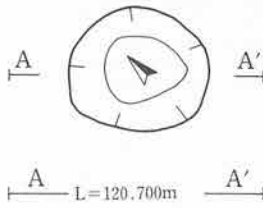
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 上部に焼土粒・微量の炭を含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土の混合土 焼土粒含む
3. 10YR4/6 褐色砂質シルト 指圧痕あり

RD147土坑



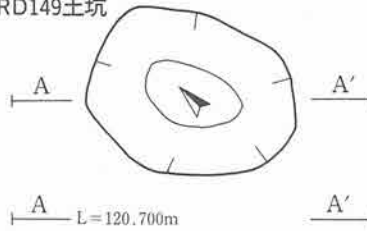
1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 少量の炭(径0.5~1cm大)・微量の焼土粒を含む
2. 10YR4/4 褐色砂質シルト 堅く締まる 黒褐色土で汚れている

RD148土坑



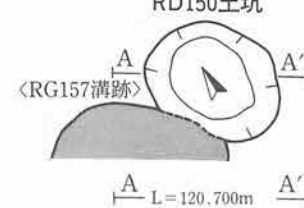
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 黒褐色土(10YR2/3)40%混入 褐色焼土粒(7.5YR4/6)10%含む
2. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 黒褐色土(10YR2/3)10%混入
3. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 褐色砂質シルト(10YR4/6)ブロック状に10%混入
4. 10YR4/6 褐色シルト質土 粘性あり 黒褐色シルト質土(10YR3/1)40%混入

RD149土坑



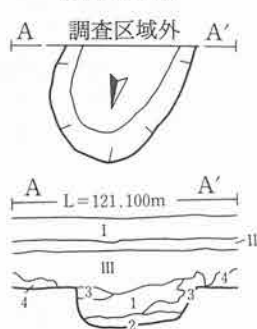
1. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり 褐色砂質シルト(7.5YR4/4)ブロック状に10%混入
2. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 水分多量含む
3. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性に富む 褐色シルト質土(10YR4/6)ブロック状に10%混入
4. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性に富む 黒色土(10YR2/1)5%混入

RD150土坑



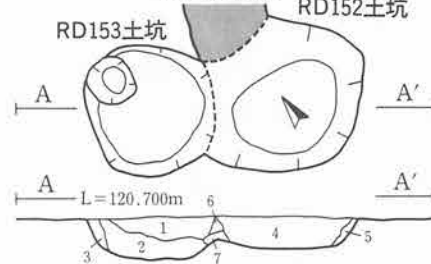
1. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり 褐色砂質シルト(7.5YR4/4)ブロック状に5%混入
2. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む
3. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 褐色砂質土(10YR4/6)ブロック状に3%混入
4. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 褐色砂質土(10YR4/6)ブロック状に20%混入
5. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性なし

RD151土坑



- I. 10YR2/2~2/3 黒褐色土 粘性弱 耕作土
- II. 10YR2/2~2/3 黒褐色土 粘性弱 酸化物含む 床土
- III. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)5%混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色砂質シルト(10YR4/6)40%混入
3. 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性やや弱
4. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性あり IV層

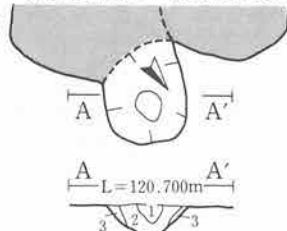
&lt;RG154土坑&gt;



1. 10YR2/1 黒色シルト質土 締まりなし 暗褐色土を1%含む 全体に炭を少量含む
2. 10YR2/1~2/2 黒~黒褐色シルト質土 少量の炭・焼土粒を含む 1層に類似 指圧痕あり
3. 10YR2/2~3/3 黒褐~暗褐色シルト質土 堅く締まる IV層を起源とする壁崩落土
4. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土との混合土炭を微量含む
5. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 締まりなし 壁崩落土
6. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 堅く締まる
7. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト IV層起源 黒褐色土で汚れている

&lt;RD152土坑&gt; &lt;RD153土坑&gt;

RD154土坑

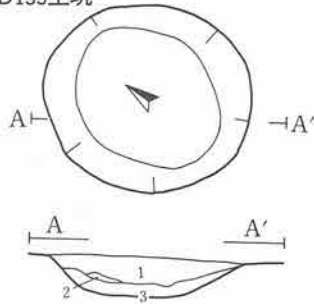


1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土との混合土層
2. 10YR2/2~3/3 黒褐色シルト質土 1層に類似
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト IV層を起源とする壁崩落土



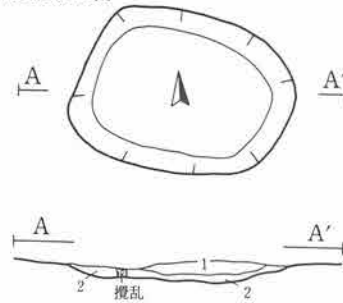
第291図 RD土坑(8)

RD155土坑



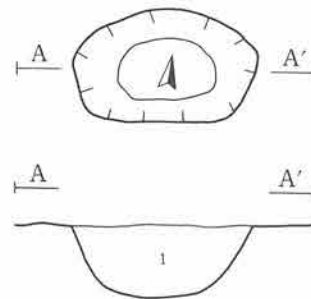
1. 10YR2/1 黒色シルト質土 下部に暗褐色土(10YR3/3)をブロック状に5%含む
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 炭を層状に含む
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 暗褐色土(10YR3/3)ブロック状に20%含む 褐色焼土塊(径1~1.5cm)・炭片含む

RD156土坑



1. 10YR3/1 黒色土 粘性なし 赤褐色焼土粒(5YR4/6・径0.5~1cm)・炭片3%含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 黒色土(10YR3/1)10%混入

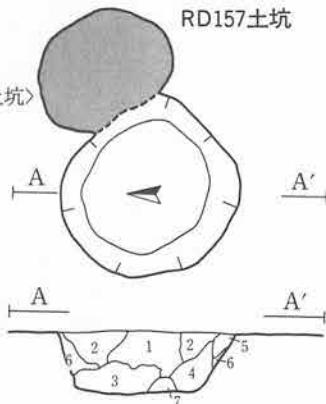
RD158土坑



1. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 炭を微量含む 土師器破片出土

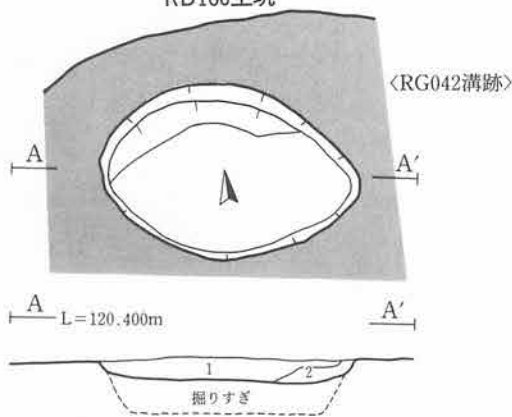
RD157土坑

<RD150土坑>



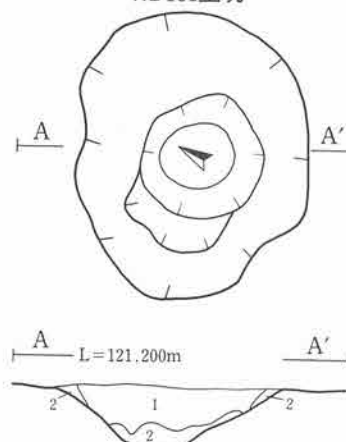
1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土を小ブロックで含む
2. 10YR2/2~3/4 黒濁~暗褐色シルト質土 堅く締まる 混合土層
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 堅く締まる
4. 10YR2/2~2/3 黒濁~暗褐色シルト質土 水酸化鉄混入 2層に類似
5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性に富む 堅く締まる
6. 10YR4/4 褐色砂質シルト IV層を起源とする壁崩落土
7. 10YR4/4 褐色砂質シルト 黒褐色で汚れている 5層に類似

RD160土坑

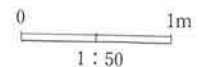


1. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり 炭片・焼土含む 指圧痕あり
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり 褐色粘土質シルト(10YR2/1)

RD161土坑



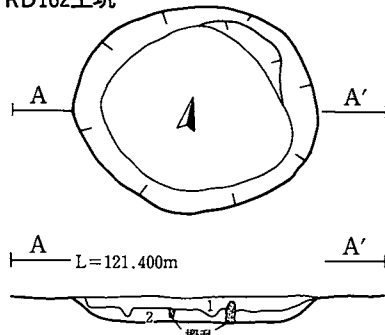
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性極めてあり 褐色砂質土(10YR4/4)粒状に3%含む
2. 10YR4/6 褐色土 粘性極めてあり 堅く締まる 1層の土がブロック状に混入



第292図 RD土坑(9)

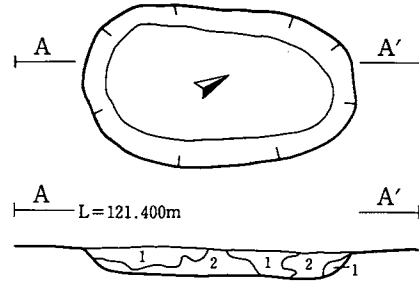


RD162土坑



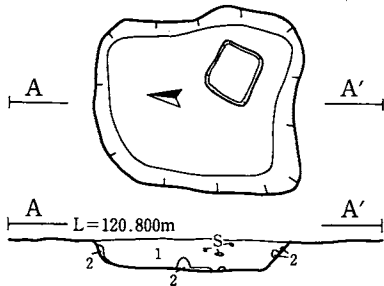
- 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭を微量含む  
土器破片出土
- 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 水酸化鉄微量含む IV層起源

RD163土坑



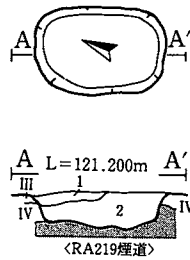
- 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 水酸化鉄微量含む
- 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 堅く締まる 黒褐色土で汚れている  
IV層起源

RD164土坑

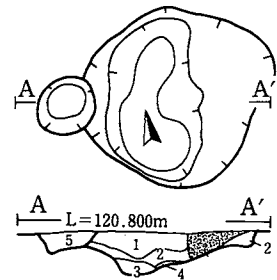


- 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭1%混入 褐色土が  
小ブロック状に点在
- 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土との混合土

RD167土坑

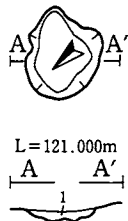


RD172土坑



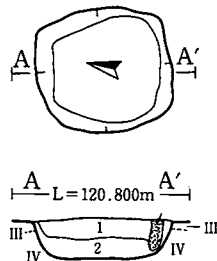
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 混入物の少ない層
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒少量混入
- 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黒褐色土と砂質シルトの  
混合土 壁崩壊土
- 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性なし 壁崩壊土
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒混入

RD173土坑



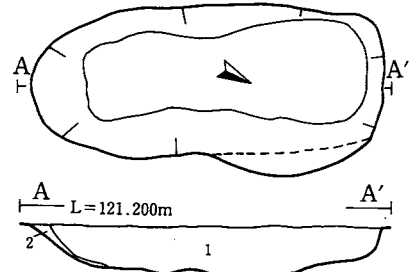
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし  
炭化物多量含む

RD174土坑



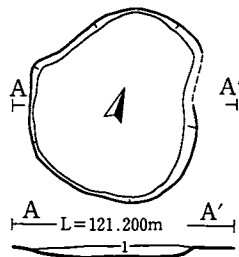
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 砂質シルトブロック少量混入 炭化物少量含む
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 黒褐色の砂質シルトブロック多量含む

RD175土坑

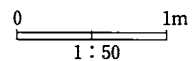


- 10YR2/2-2/3 黒褐色土 粘性あり 砂質ブロック  
部分的に混入 ローム含む
- 10YR4/6 褐色砂質土 粘性ややあり  
ローム多量含む

RD176土坑

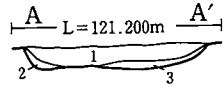
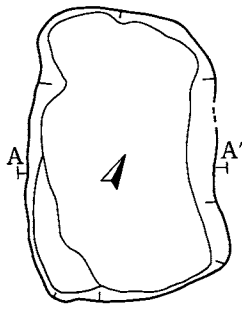


- 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり  
砂質シルトブロック(2~3cm大)混入



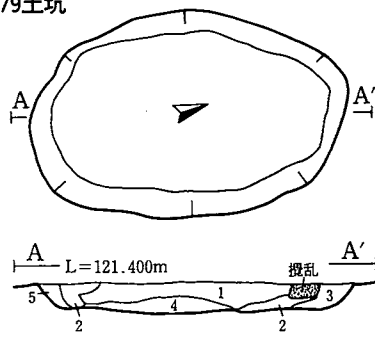
第293図 RD土坑(10)

RD177土坑



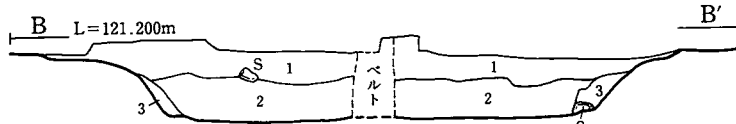
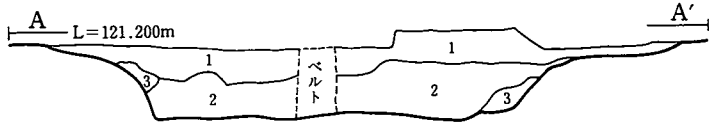
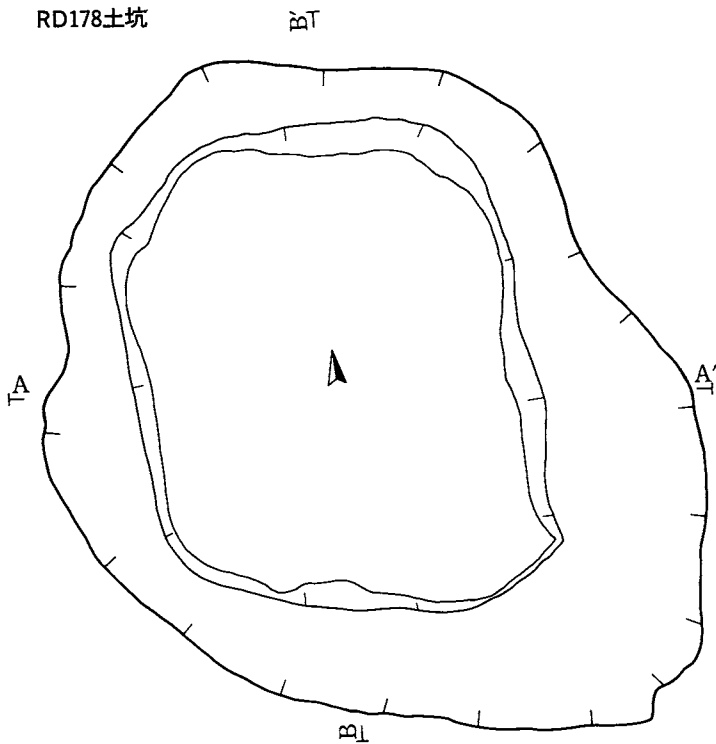
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂粒・ローム含む
- 2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり ローム含む
- 3. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 砂粒含む ローム含む

RD179土坑



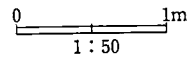
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土粒(0.5~1cm大)混入 炭化物含む
- 2. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土粒(0.5cm大)少量混入
- 3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 砂質シルト混入 壁の崩壊土
- 4. 10YR3/4 暗褐色土 粘性に富む 黒色土粒(0.5~2cm大)多量混入 壁崩壊土
- 5. 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし 砂質シルト混入 壁崩壊土

RD178土坑



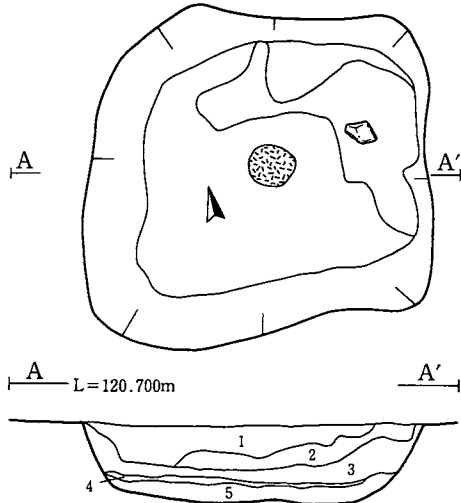
- 1. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック・黒色土ブロック混入
- 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 黒色土ブロック混入
- 3. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 砂質シルト少量混入
- 4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 砂質シルト・黒色土の混合物
- 5. 10YR4/3 黄褐色土 粘性なし 砂質シルトの崩壊土混合物なし
- 6. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 砂質シルト・黒色土の混合物
- 7. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック少量混入

- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 微細な砂粒含む 下位に褐鉄層が見られる礫少量含む
- 2. 2.5Y2/1 黒色泥質土 粘性に富む 締まりなし 上位に褐鉄層・下位に小礫含む
- 3. 2.5Y2/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし 2層の下に壁の崩壊した砂質シルトブロック含む



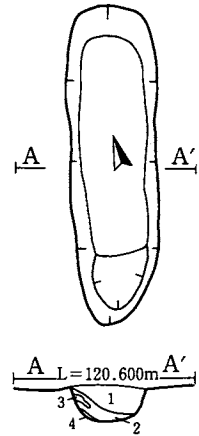
第294図 RD土坑(11)

RD181土坑



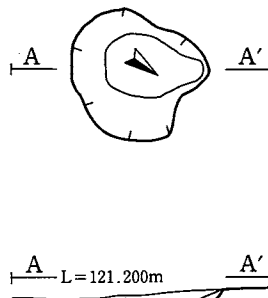
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)20%混入  
炭化粒・焼土粒微量含む
2. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性あり 褐色土(10YR4/6)30%混入
3. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性あり 褐色土(10YR4/6)30%混入
4. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性あり 炭化物を層状に混入
5. 10YR3/4 赤褐色焼土塊(5YR3/4)含む  
暗褐色砂質シルト 粘性なし 褐色砂質土(10YR4/6)10%  
混入 炭化物微量含む

RD191土坑



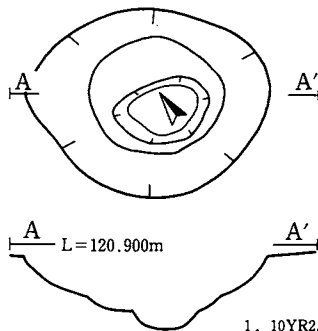
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 強く締まる
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 強く締まる
3. 10YR2/1 黒色シルト質土 強く締まる  
褐色シルト質土(10YR4/6)30%混入
4. 10YR4/6 褐色シルト質土 強く締まる  
黒色土(10YR2/1)20%混入

RD189土坑



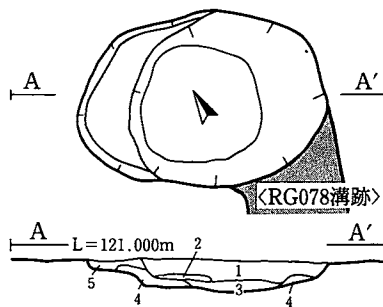
1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 1層より明るい  
ロームブロック3~15%含む

RD192土坑

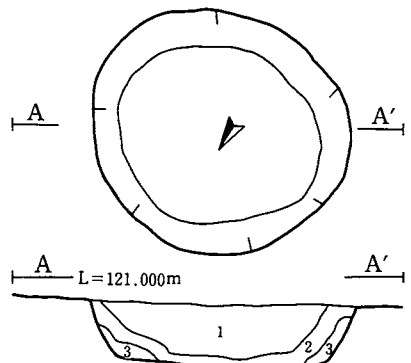


1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色砂質土(10YR4/6)5%  
混入 炭5%・焼土粒微量含む 指圧痕あり
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 炭30%混入 指圧痕あり
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色シルト質土(10YR4/6)  
10%混入 指圧痕あり
4. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性弱 黒褐色土10%混入 指圧痕あり
5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土

RD193土坑

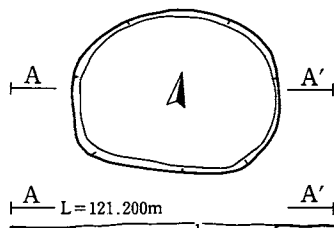


RD194土坑



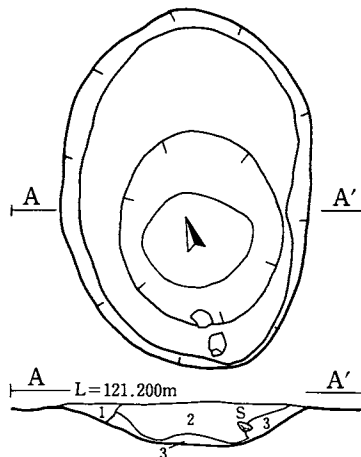
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 指圧痕あり
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 暗褐色土(10YR3/4)10%混入  
指圧痕あり
3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性あり 壁崩落土 指圧痕あり

RD196土坑

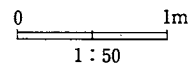


1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 炭化物5%・  
ロームブロック1%含む

RD197土坑

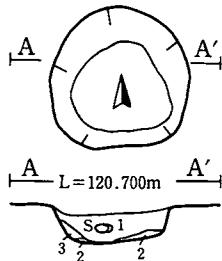


1. 10YR2/2 黒色土 粘性なし 炭化物1%含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 炭化物1%含む
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり  
褐色土(10YR4/6)10%含む



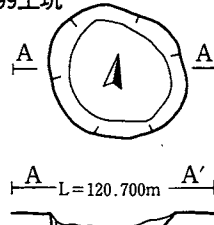
第295図 RD土坑(12)

RD198土坑



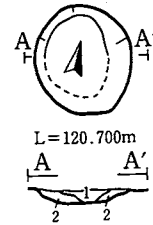
1. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性に富む 指圧痕あり
2. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性あり 堅く締まる

RD199土坑



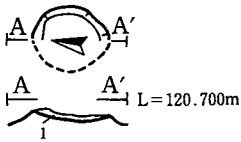
1. 10YR1.7/1 黒色シルト質土 粘性に富む 指圧痕あり
2. 10YR1.7/1 黒色シルト質土 粘性に富む 暗褐色土(10YR3/4)5% 混入 指圧痕あり
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 暗褐色土(10YR3/4)5% 混入 指圧痕あり
4. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性に富む 指圧痕あり
5. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性に富む 指圧痕あり

RD200土坑



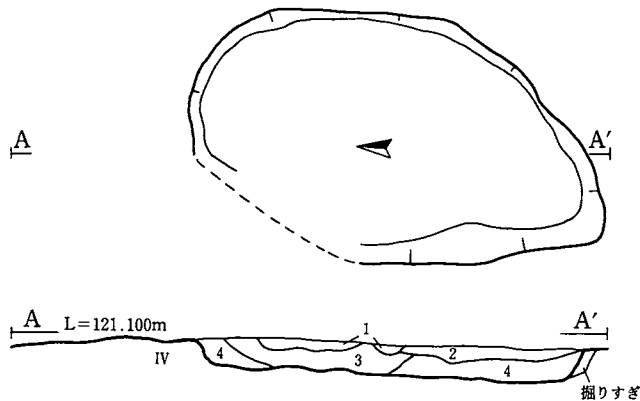
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 炭化物含む
2. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 焼土・多量の炭化物含む

RD201土坑



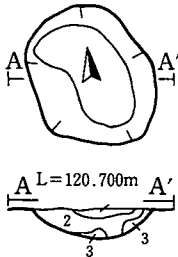
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 炭化物多量含む

RD203土坑



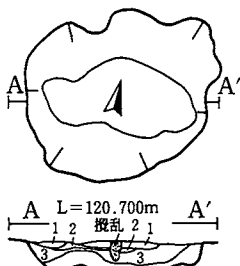
1. 10YR2/2 黒褐色砂質土 粘性なし
2. 10YR2/2 黒褐色砂質土 粘性なし
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 締まりなし
4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 締まりなし 黄褐色土ブロック混入

RD202土坑



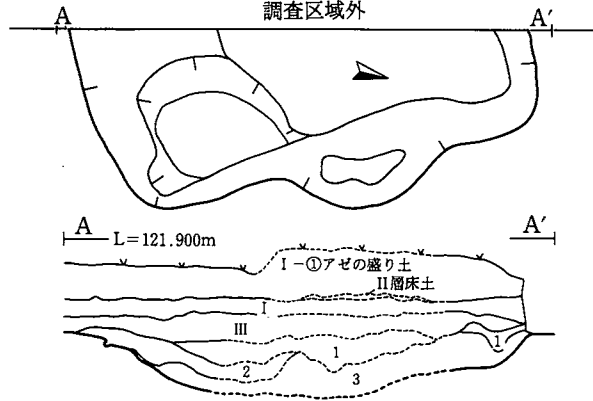
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 締まりなし 炭化物含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 焼土ブロック・多量の炭化物含む
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり III・IV層の崩壊土

RD204土坑

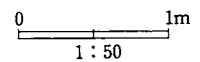


1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 褐鉄含む
2. 7.5YR3/2 暗褐色土 粘性なし 褐鉄多量含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒混入 褐鉄少量含む
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック 多量混入

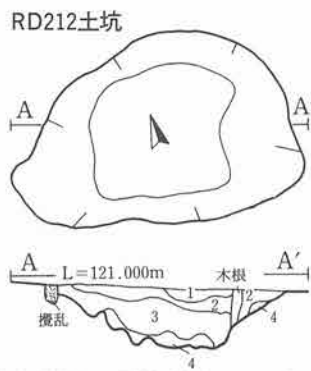
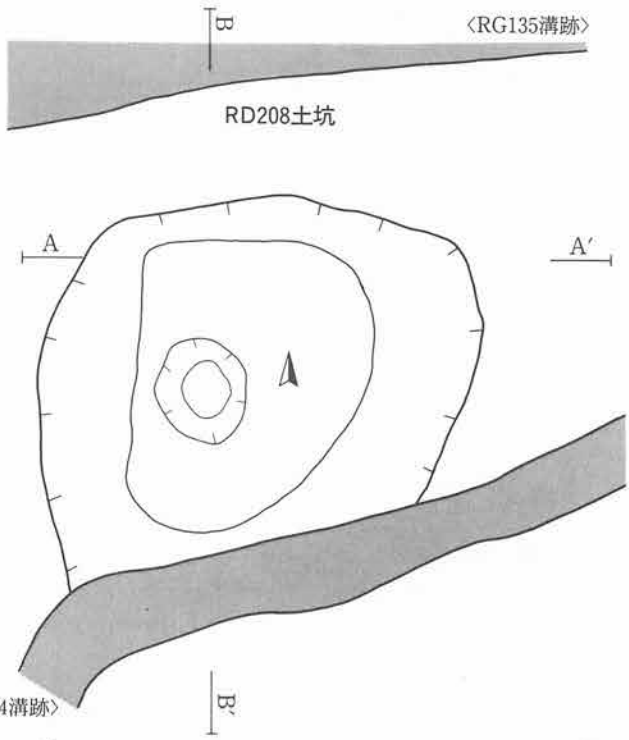
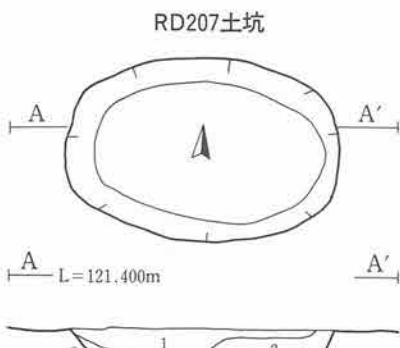
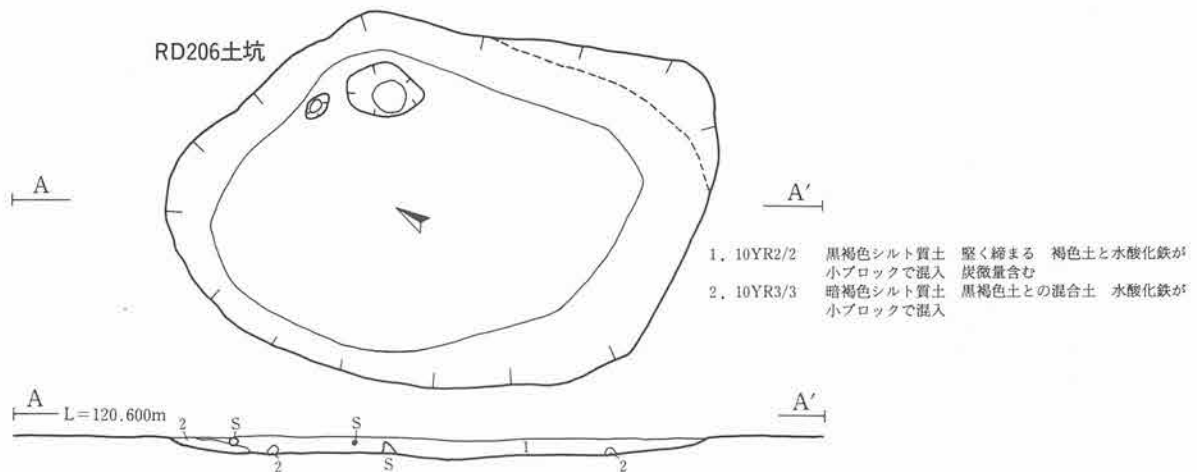
RD205土坑



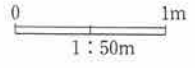
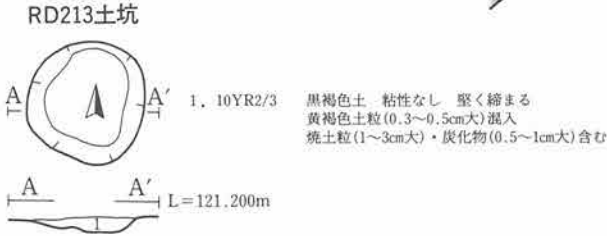
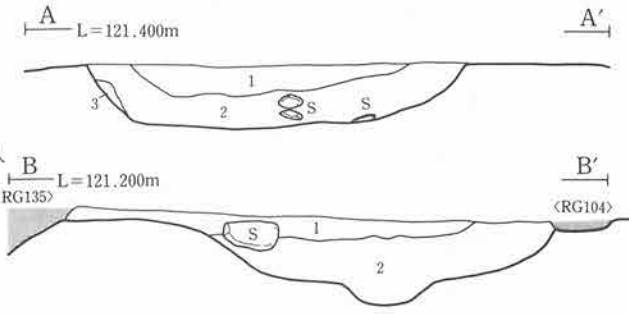
1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック(2~10cm大)混入
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック(2~10cm大)多量混入
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 黒色土ブロック(1~8cm大)少量混入



第296図 RD土坑(13)

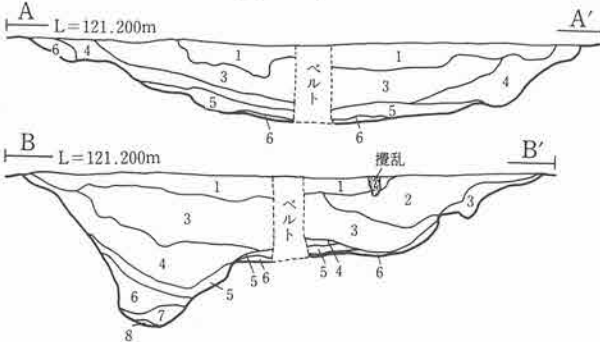
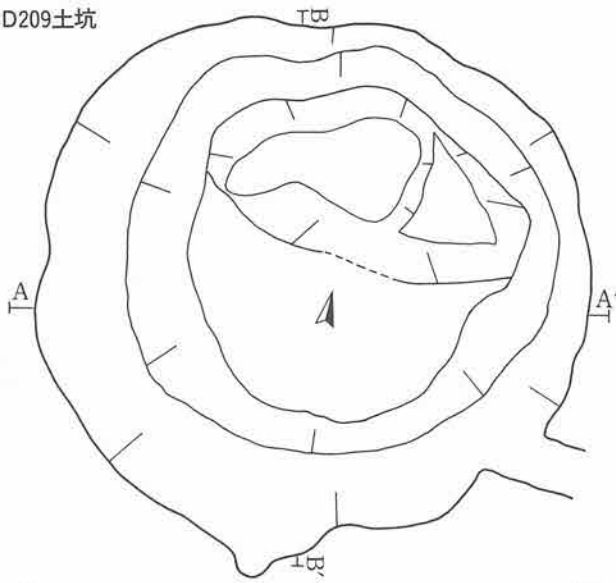


1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒 (0.2~0.5cm大)混入  
 2. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 堅く締まる 黄褐色土粒 (0.5~1cm大)少量混入  
 3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック (1~6cm大)混入  
 4. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性あり 黒色土粒 (2~3cm大)混入



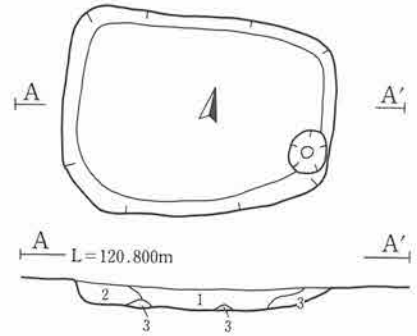
第297図 RD土坑(14)

RD209土坑



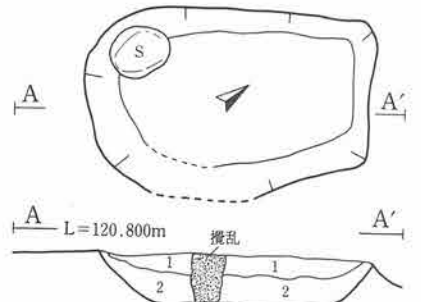
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 堅く締まる
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(2~8cm大)多量混入
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(2~10cm大)混入炭化物(1cm大)含む
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 堅く締まる 黄褐色土ブロック(1~5cm大)混入
5. 10YR4/4 褐色砂質土 粘性なし
6. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(1~4cm大)混入 褐鉄層を間に挟む
7. 10YR4/4 褐色土 粘性ややあり
8. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり

RD214土坑



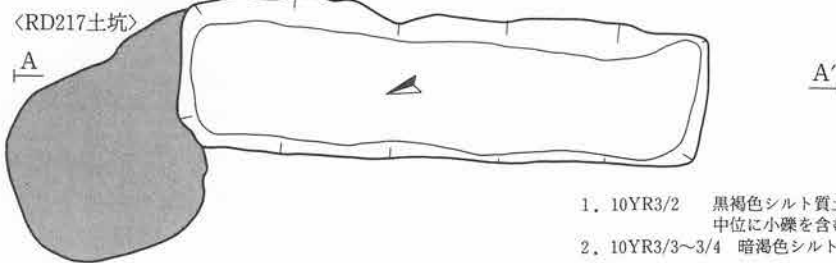
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 炭・焼土2%混入 指圧痕あり
2. 5YR3/3 暗褐色焼土 黒褐色土混入 指圧痕あり
3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 炭微量含む

RD215土坑

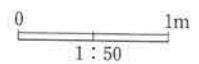
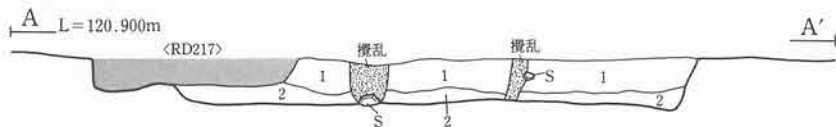


1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土がブロック状に2%混入
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土との混合土 焼土粒・炭微量混入

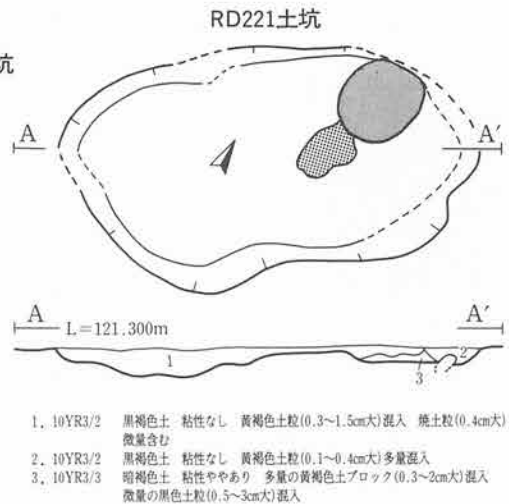
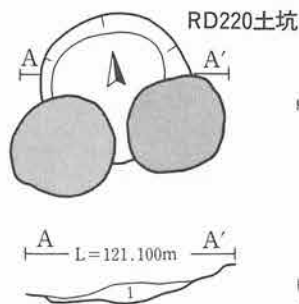
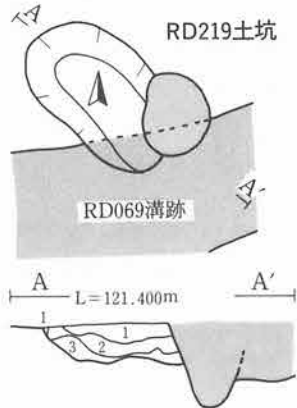
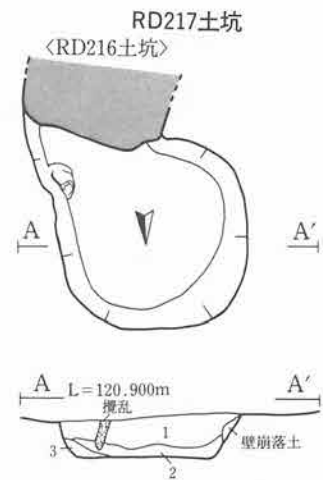
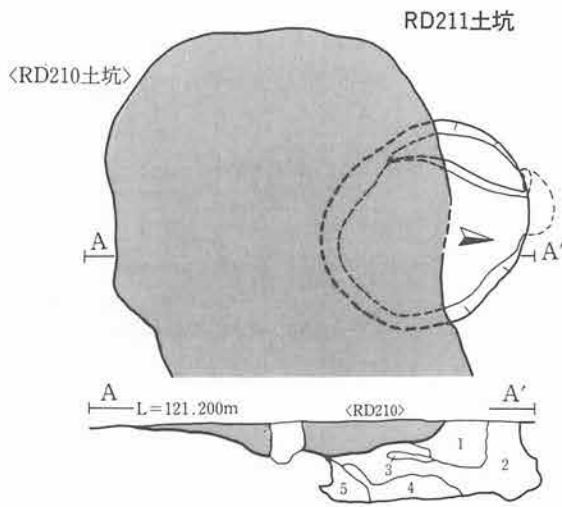
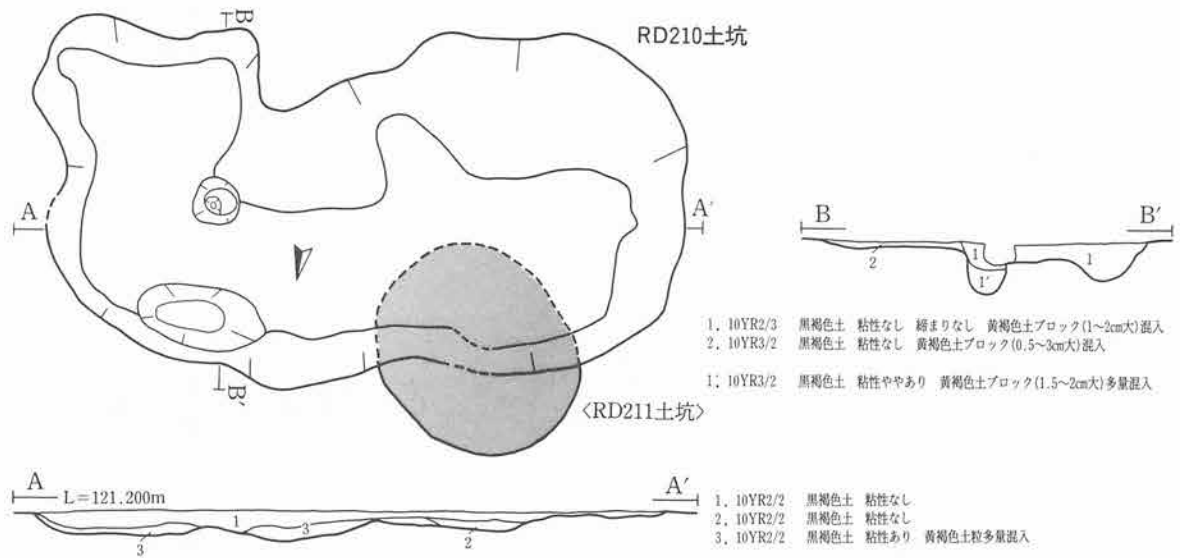
RD216土坑



1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭・焼土をブロック状に含む 中に小礫を含む
2. 10YR3/3~3/4 暗褐色シルト質土 褐色土との混合土 焼土粒微量含む



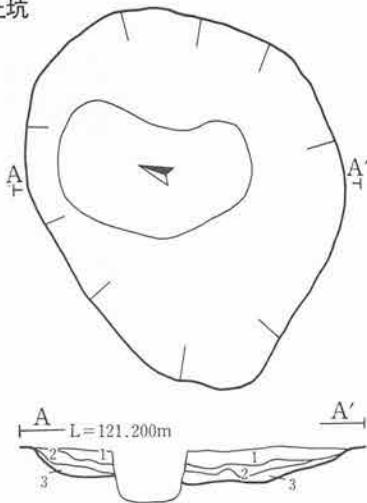
第298図 RD土坑(15)



0 1m  
1:50

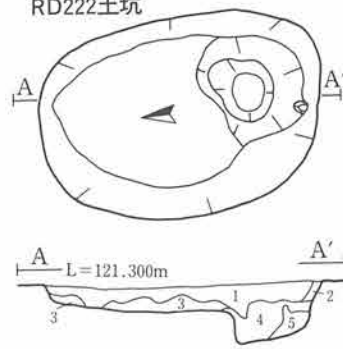
第299図 RD土坑(16)

RD218土坑



1. 10YR3/2 褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(0.5~4cm大)混入
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 堅く締まる 黄褐色土ブロック(1~3cm大)・少量の黒色土粒(0.5cm大)混入
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 黒色土ブロック(1~5cm大)混入

RD222土坑

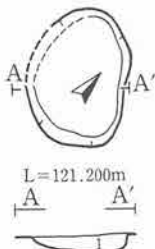


1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 締まりなし 黄褐色土粒(0.5~1.5cm大)混入
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり
3. 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり 黒色土ブロック(2~4cm大)混入
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土粒(0.2~0.5cm大)微量混入
5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土ブロック(3~5cm大)多量混入

RD227土坑

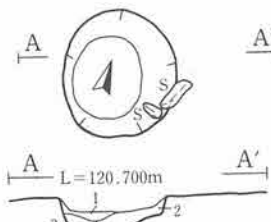


RD223土坑



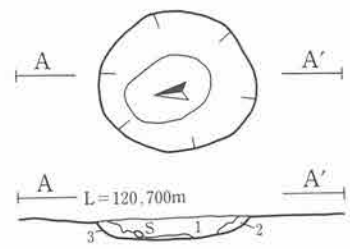
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック(5~10cm大)多量混入

RD230土坑



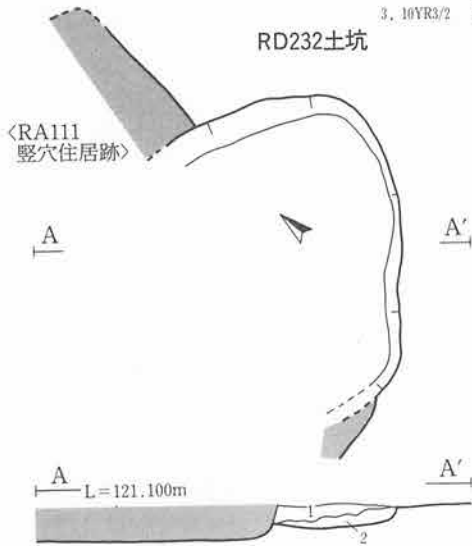
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 暗褐色土(10YR3/3)1%混入 指圧痕あり
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性あり 堅く締まる 暗褐色土(10YR2/3)3%混入 水酸化鉄少量含む
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 粘性あり 堅く締まる

RD231土坑



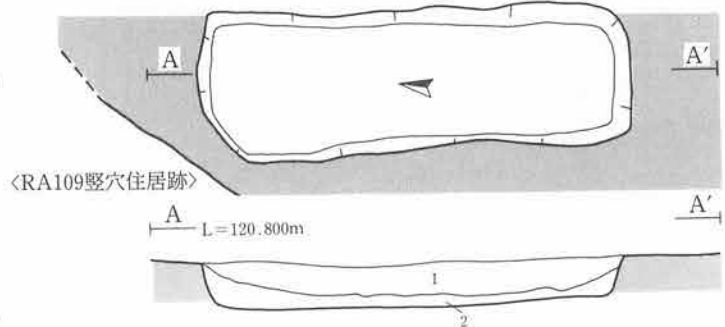
1. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性に富む 黒褐色土(10YR2/2)3%混入 指圧痕あり
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性なし 堅く締まる
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性なし 堅く締まる 砂礫混入

RD232土坑



- <RA111>
1. 10YR2/3 暗褐色シルト 堅く締まる 焼土微量含む
  2. 10YR4/4 暗褐色シルト 褐色土が小ブロックで1%混入 指圧痕有り

RD233土坑

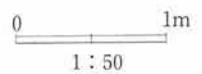
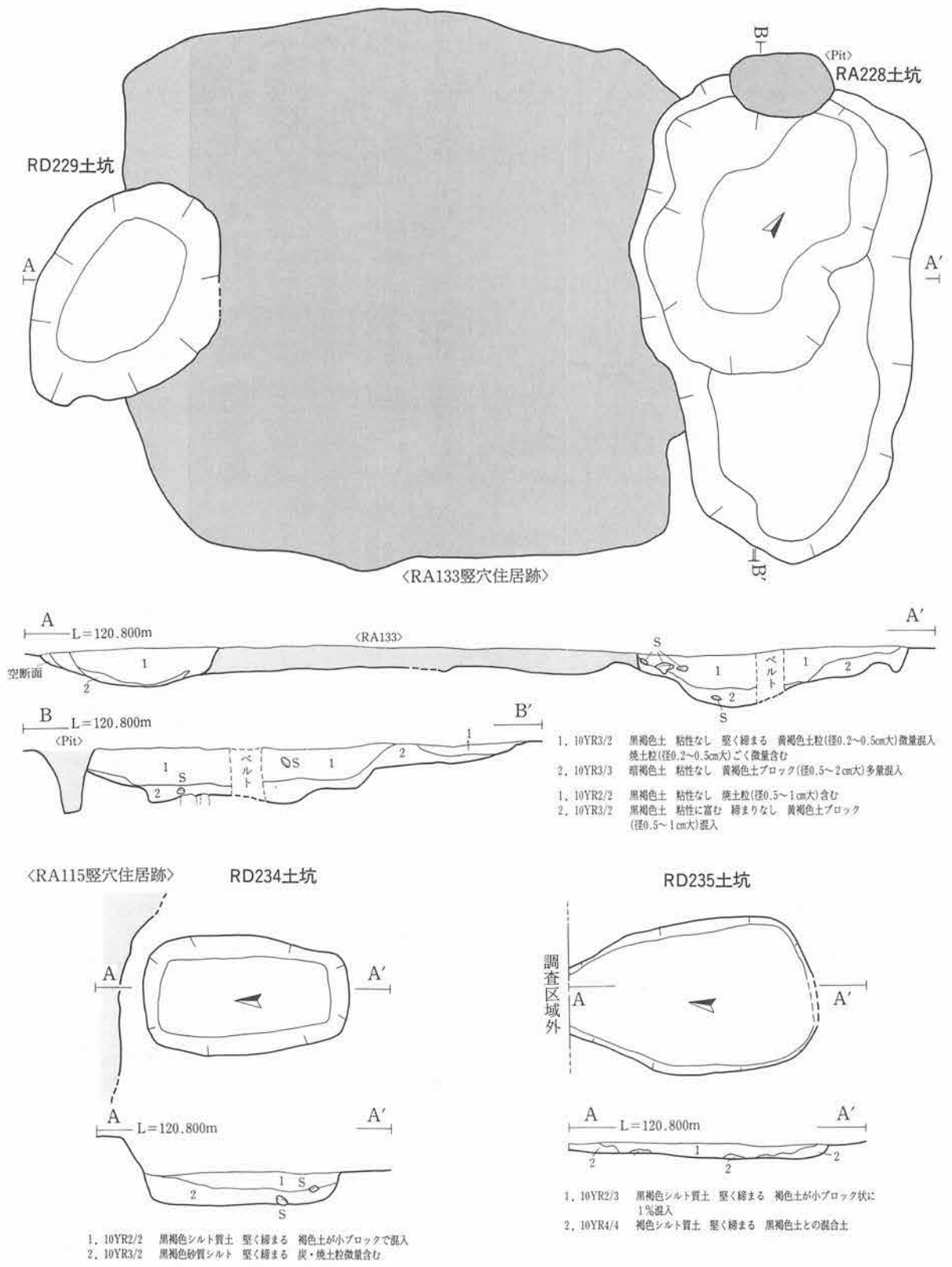


1. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 堅く締まる 褐色土がブロック状で2%混入 焼土粒・炭微量含む
2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 堅く締まる 垂円礫(0.5~1cm大)少量含む

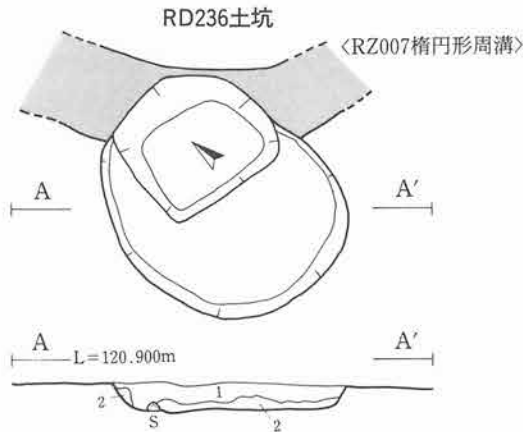


第300図 RD土坑(17)

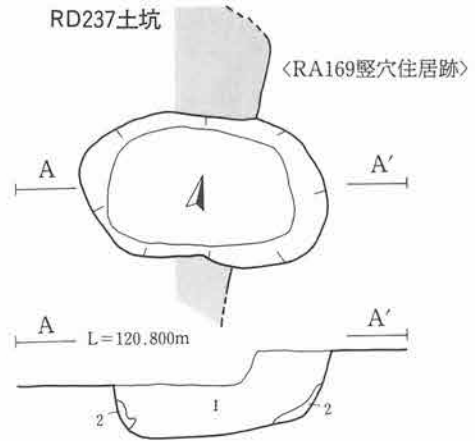




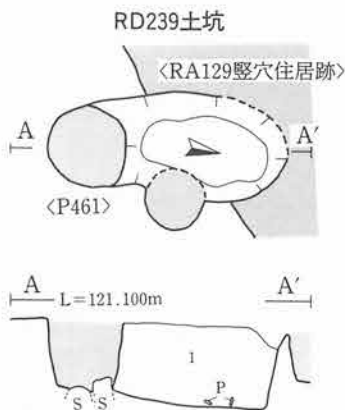
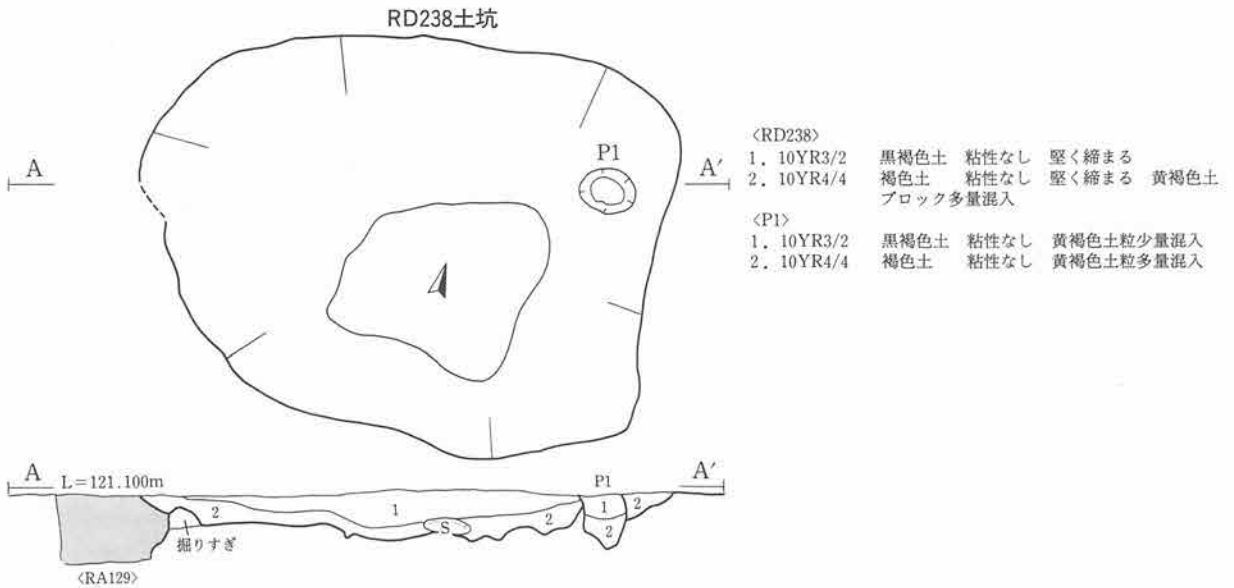
第301図 RD土坑(18)



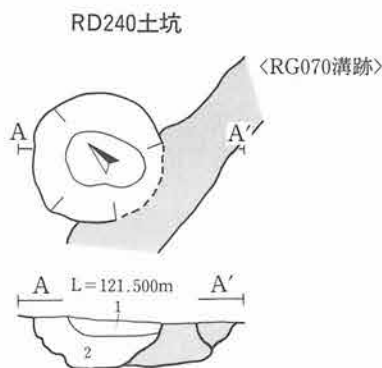
1. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 強く締まる 炭微量混入  
 2. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 強く締まる 褐色土との混合土



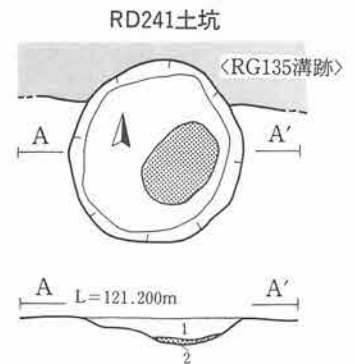
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 強く締まる 焼土粒・炭少量混入  
 2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 強く締まる



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり ローム質 黄褐色土ブロック多量混入炭化物・褐鉄・小礫含む埋め戻しの土



1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし 黄褐色土粒(0.5~0.8cm大)多量混入炭化物(1~3cm大)含む  
 2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.5~2cm大)混入炭化物(1cm大)少量含む

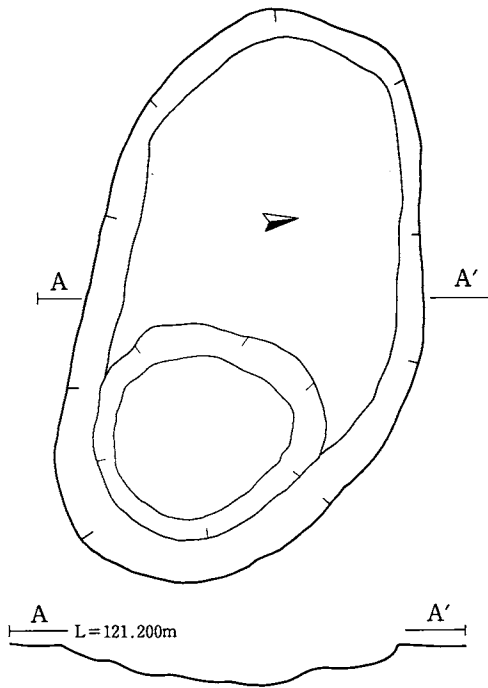


1. 10YR2/3 暗褐色土 粘性なし 明赤褐色焼土粒(5YR5/8)3%混入 炭化物・粘土2%含む  
 2. 2.5YR4/8 赤褐色土 粘性あり

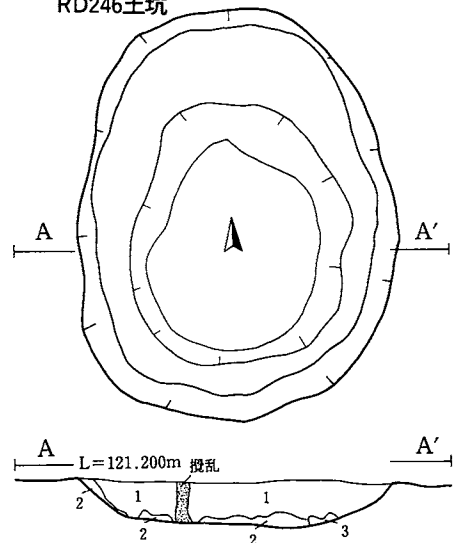
0 1m  
 1:50

第302図 RD土坑(19)

RD242土坑

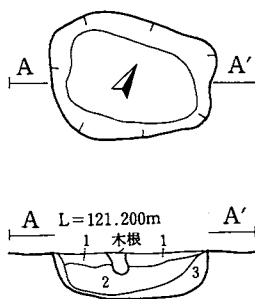


RD246土坑



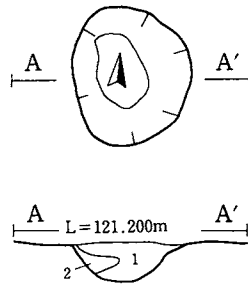
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 炭化物2%・焼土微量含む  
小礫(径2~5cm大)複数含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり やや砂質 底面に礫(径5cm大)複数含む
3. 10YR4/3 黄褐色砂質土 粘性ややあり 1層と2層の混合土

RD243土坑



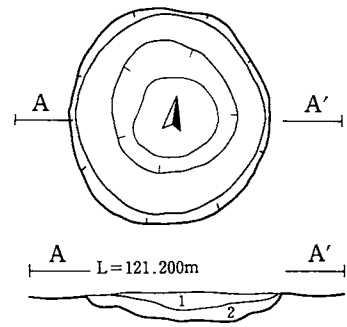
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物1%含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土(10YR4/4) 2%混入
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 褐色砂粒(10YR4/4)5%含む

RD244土坑



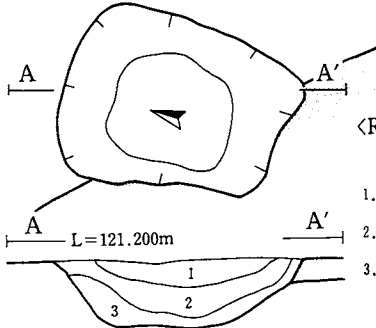
1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 褐色土(10YR4/6) 10%混入
2. 10YR4/6 褐色土 粘性なし 壁崩落土

RD245土坑



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 褐色土(10YR4/4) 5%混入

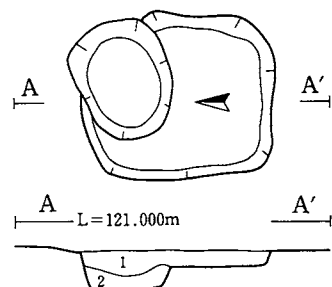
RD247土坑



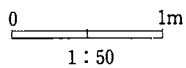
<RD181土坑>

1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土(10YR5/4・径0.5cm大)がブロックで3%混入
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土(10YR5/4・径0.5~1cm大)がブロックで5%混入
3. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土(10YR5/4・径1~5cm大)がブロックで10%混入

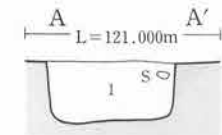
RD248埋土



1. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 褐色土を小ブロックで10%混入 指圧痕あり



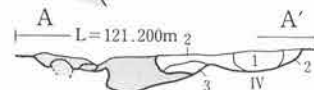
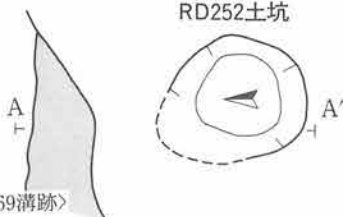
第303図 RD土坑(20)



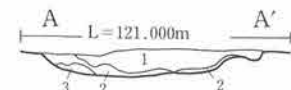
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる  
褐色土が小ブロックで1%混入  
小礫(径1~2cm大)・微量の炭・  
焼土粒を混入

<RA152  
竪穴住居跡>

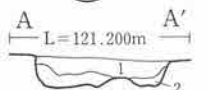
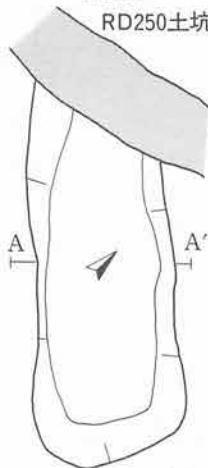
<RG069溝跡>



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 締まりなし  
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒混入  
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒多量混入



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物含む  
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒混入  
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック多量混入

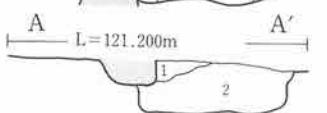
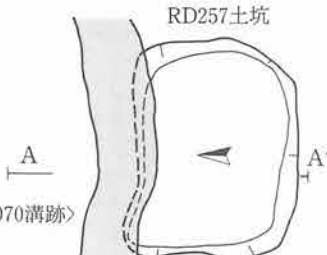
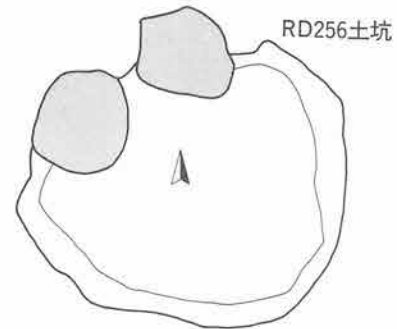


1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒少量混入  
炭化物含む  
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 全体に黄褐色土粒  
多量混入 炭化物少量含む  
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 黒褐色土粒少量混入

<RG070溝跡>



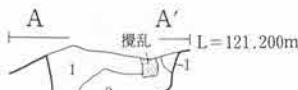
1. 10YR2/1 黒色土 粘性に富む 締まりなし  
黄褐色土ブロック(1~2cm)大混入  
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし  
黒色土ブロック(1~3cm)多量混入



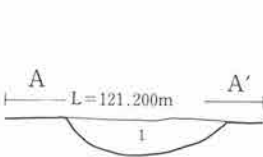
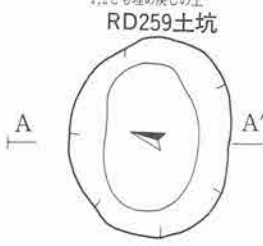
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土粒少量混入  
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック多量混入  
1,2とも埋の戻しの土



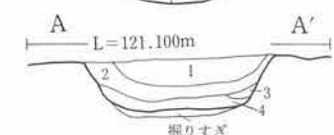
1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 地山ブロック(径0.1~0.5cm大)5%含む  
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 地山ブロック(径0.1~0.5cm大)40%含む



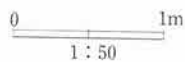
1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし 堅く締まる  
黄褐色土ブロック多量混入  
埋め戻しの土  
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 堅く締まる  
黄褐色土ブロック混入  
埋め戻しの土



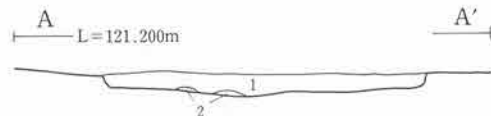
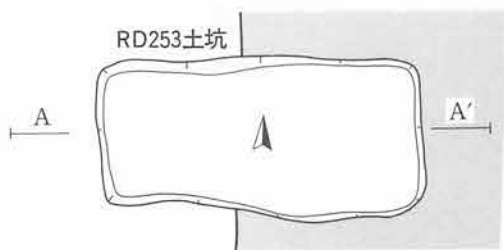
1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 黄褐色粘土(10YR5/4)・  
明赤褐色焼土粒(5YR5/6・径0.5cm大)・炭化物(径0.5cm大)  
各1%混入



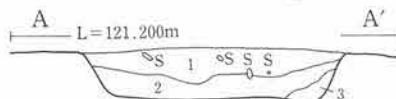
1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 粘土・炭化物1%混入  
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)10%混入  
炭化物5%含む  
3. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 粘土30%含む  
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 褐色粘土(10YR4/4)5%混入



第304図 RD土坑(2)



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる IV層起源の褐色土 (径0.5~3cm大)がブロック状で少量混入
2. 10YR4/4 褐色砂質シルト 若干堅く締まる IV層(基本層序)

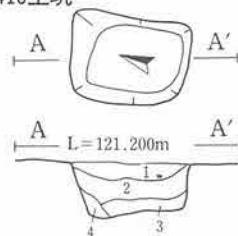


1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土と炭の混合土 石(径3~5cm大)を含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 1層に類似 褐色土を多量混入 指圧痕有り
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 褐色土との混合土 石を含む 指圧痕有り



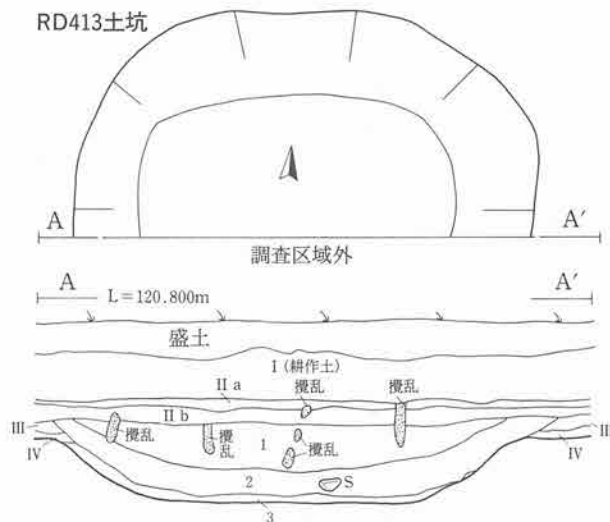
1. 10YR3/4 褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土 亜鉛礫(径2~5cm大)を多量含む
2. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 砂質に富む 亜鉛礫(径5cm大)・焼土粒を微量含む

### RD410土坑



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 褐色土を5%混入 焼土粒・炭を微量含む
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 1層に類似 褐色土を6%混入 炭・焼土物を含む
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 石・微量の焼土粒含む 指圧痕有り
4. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 褐色土との混合土

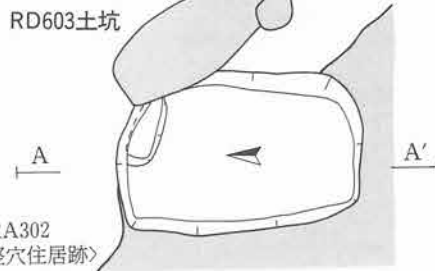
### RD413土坑



1. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 堅く締まる 褐色土が小ブロックで1%混入 全体に水酸化鉄を混入
2. 10YR2/2 黒褐色粘土質土 水酸化鉄30%混入 指圧痕有り
3. 10YR2/1 黒色粘土 粘性に富む 水酸化鉄がブロック状に混入 指圧痕有り

### <RZ023カマド状遺構>

### RD603土坑



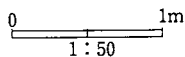
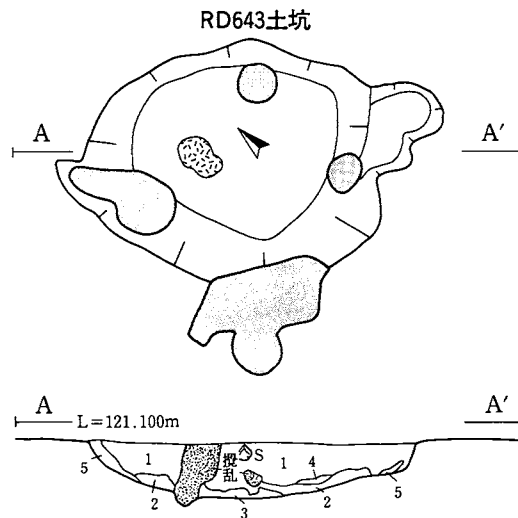
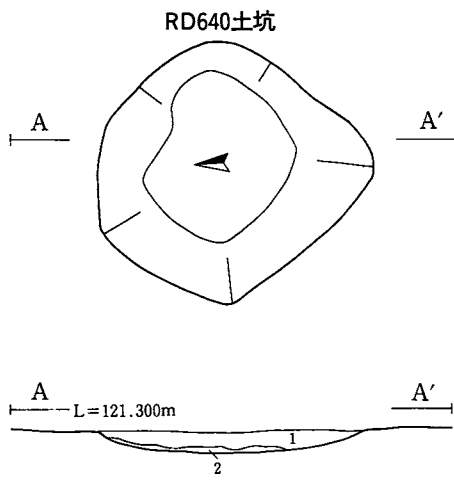
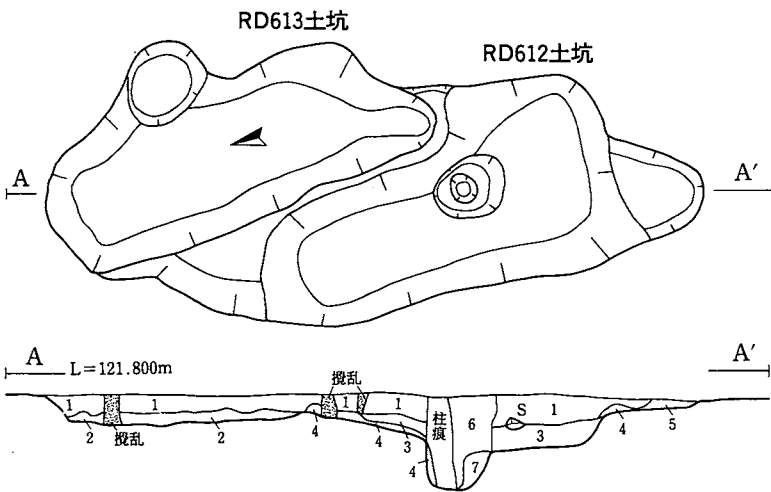
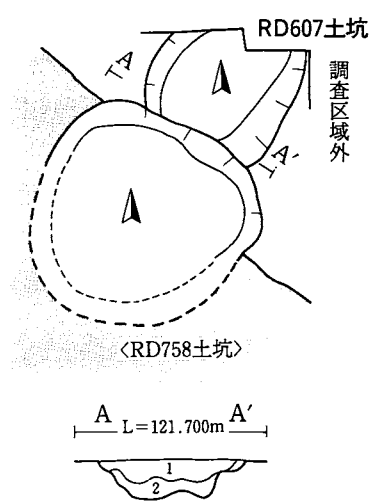
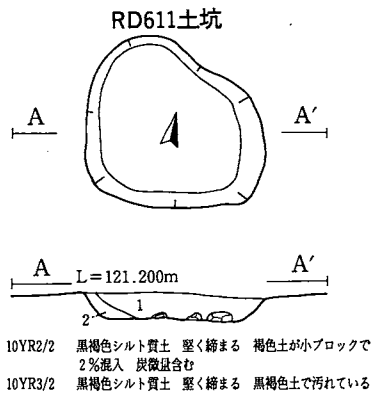
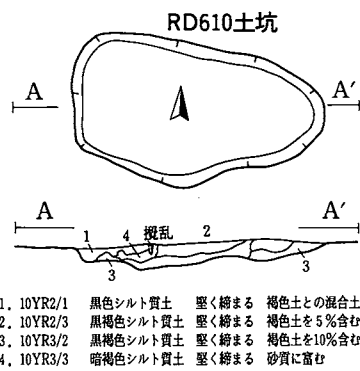
### <RA302 竪穴住居跡>



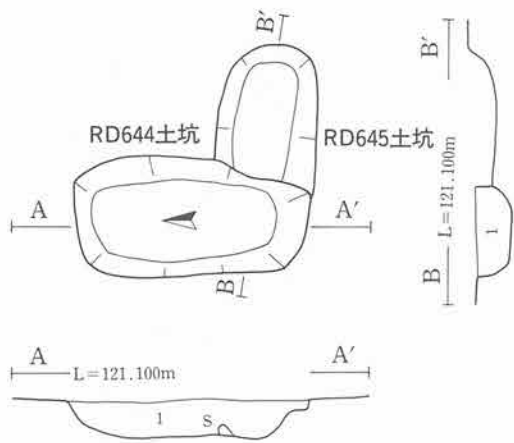
1. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 褐色土5%混入 炭微量含む
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土との混合土 炭少量含む



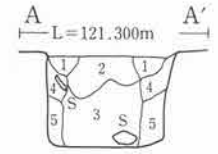
第305図 RD土坑(2)



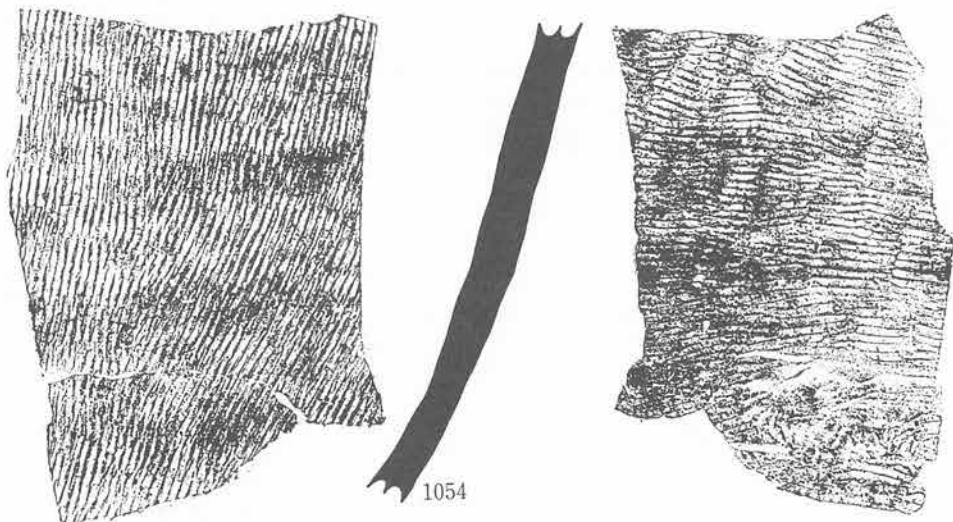
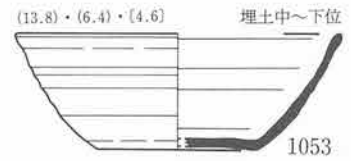
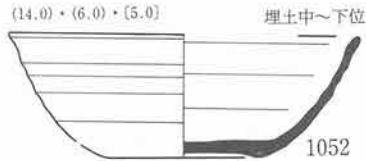
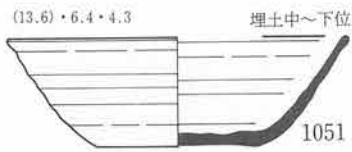
第306図 RD土坑(23)



1. 10VR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土が小ブロック状に1%混入  
 焼土粒を微量含む



0 1m  
 1:50



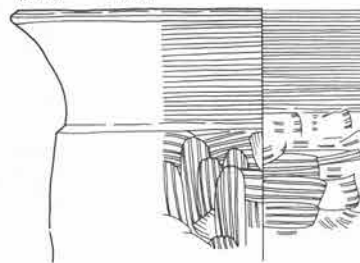
RD095

RD107



RD113

(20.0)・(10.0)



2層

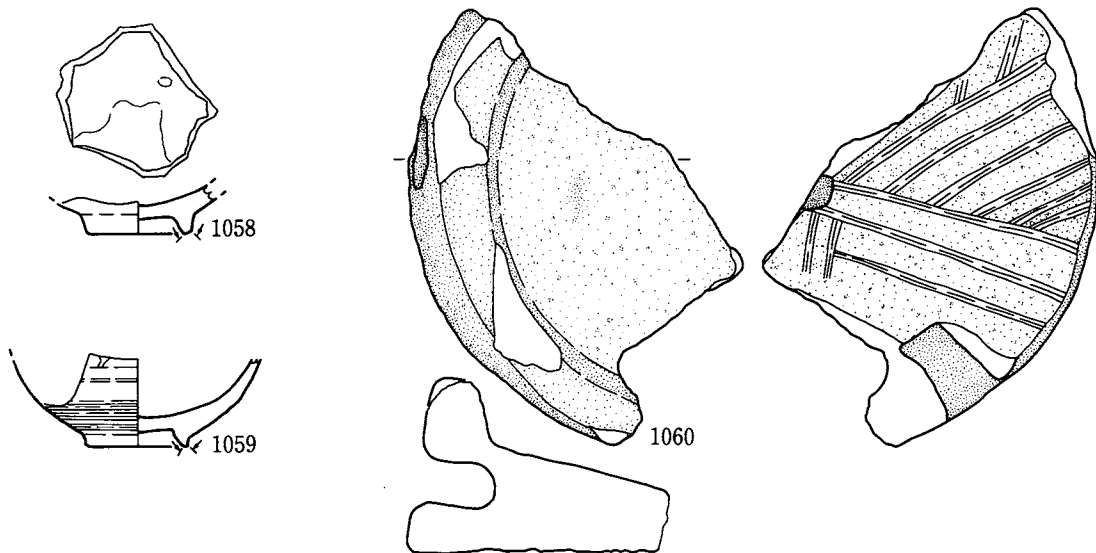
1056

RD413

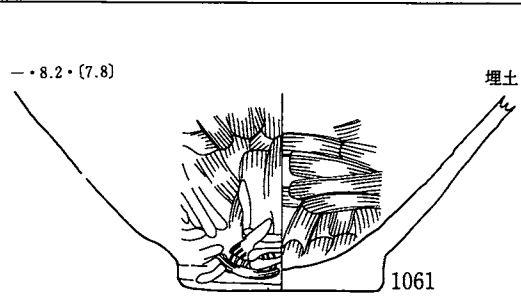


1055・1057は S=1/2  
 他は S=1/3

第307図 RD土坑(24)・出土遺物(1)

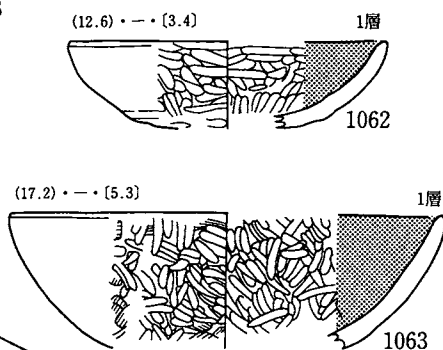


RD102

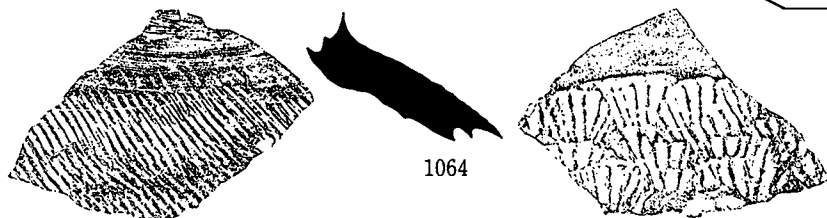


RD122

RD123

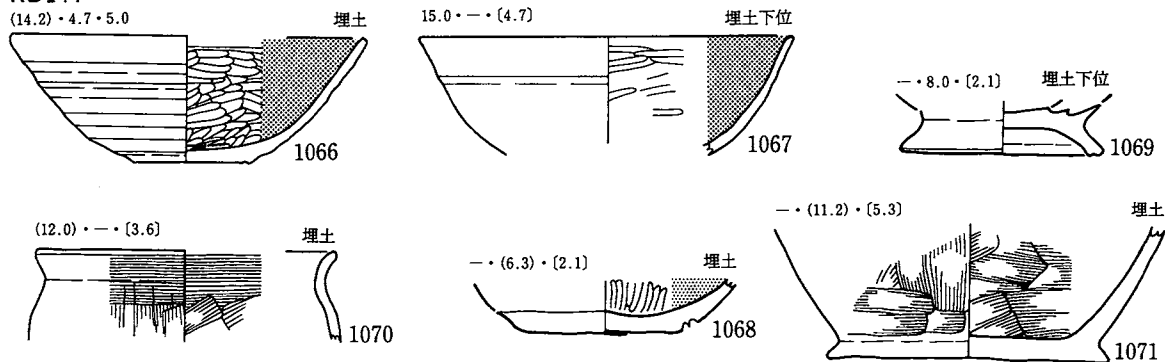


RD130



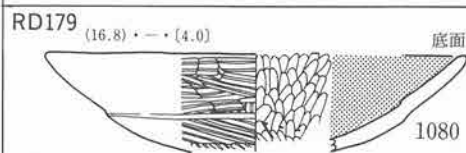
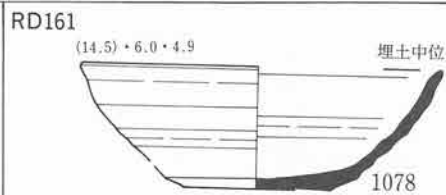
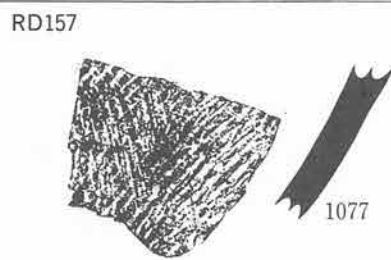
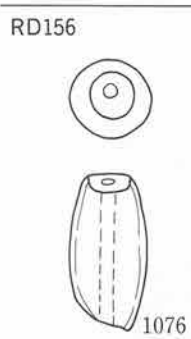
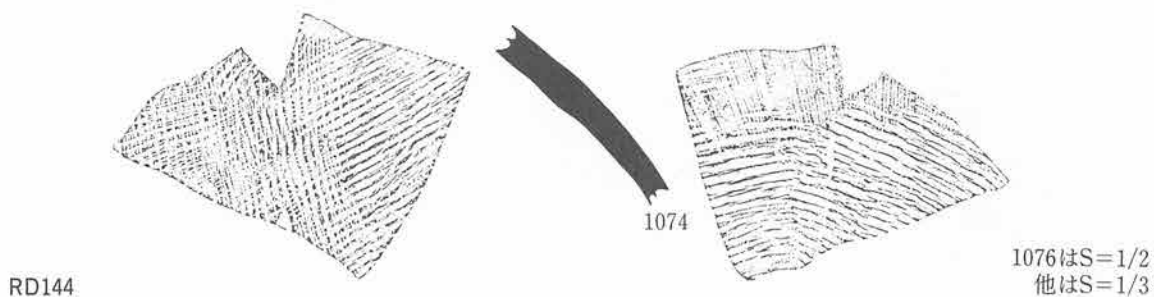
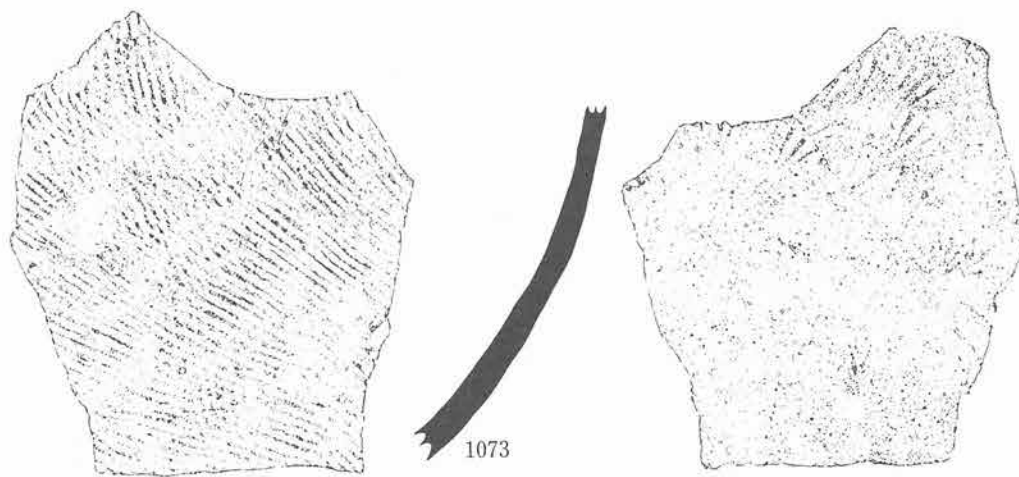
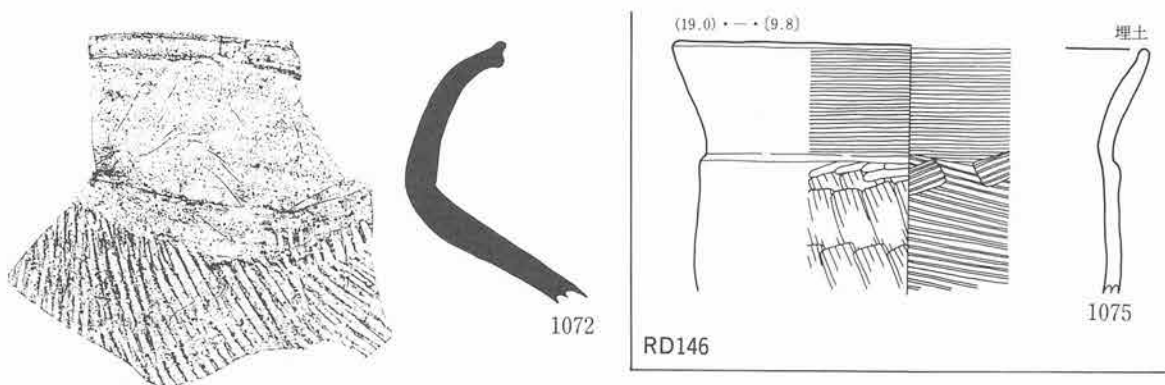
1060は S=1/4  
他は S=1/3

RD144



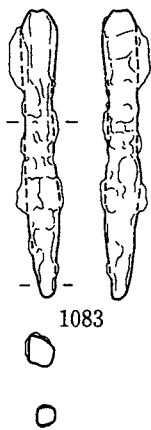
第308図 RD 土坑出土遺物(2)



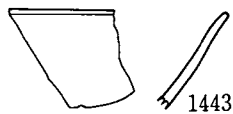


第309図 RD 土坑出土遺物(3)

RD178



1083



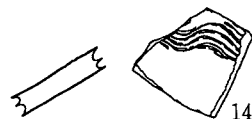
1443

RD181

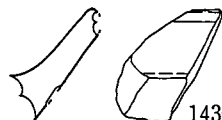


1085

RD255



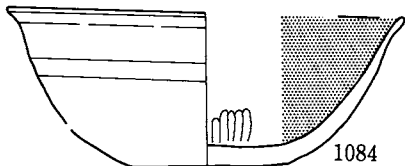
1429



1430

(15.8) · (6.0) · (6.4)

埋土中位

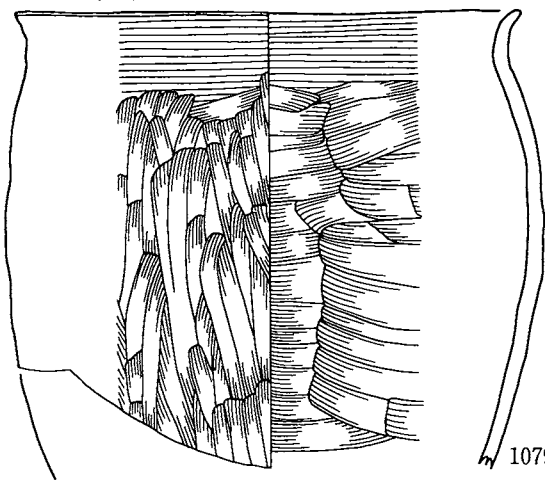


1084

RD167

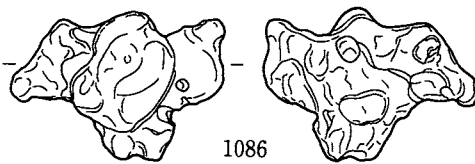
20.1 · -- · (18.3)

埋土



1079

RD194



1086



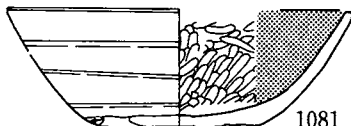
RD180

(25.6) · -- · (20.4)

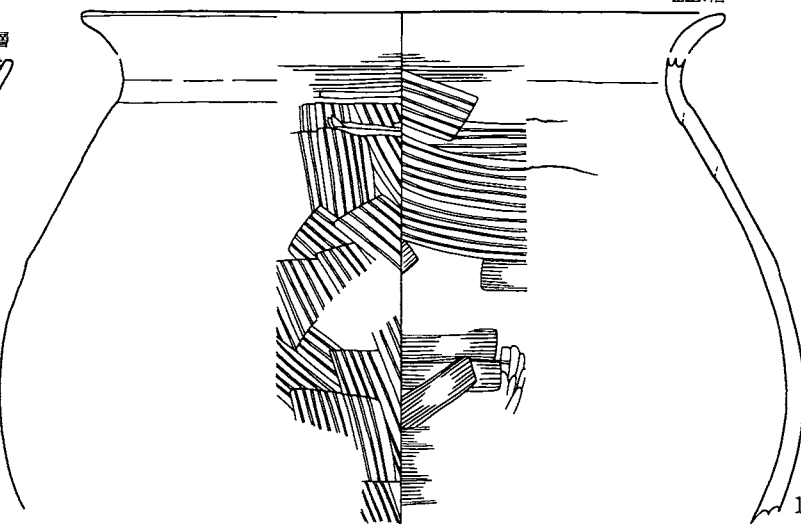
埋土7層

(13.8) · 6.4 · 4.7

1層



1081



1082

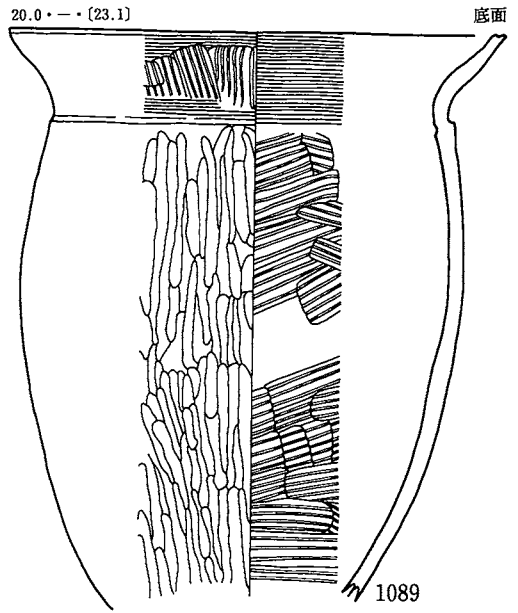
1083 · 1085 · 1086はS=1/2  
他はS=1/3

第310図 RD土坑出土遺物(4)

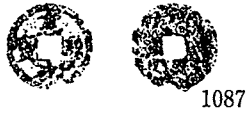
RD209



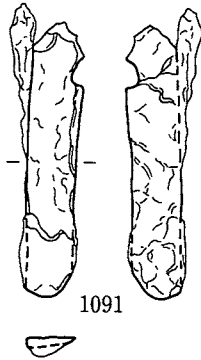
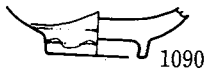
RD217



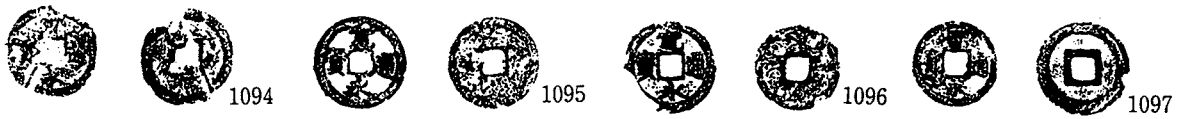
RD208



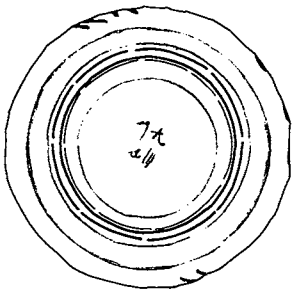
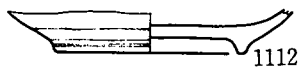
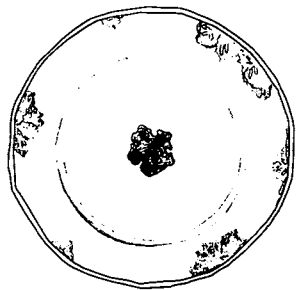
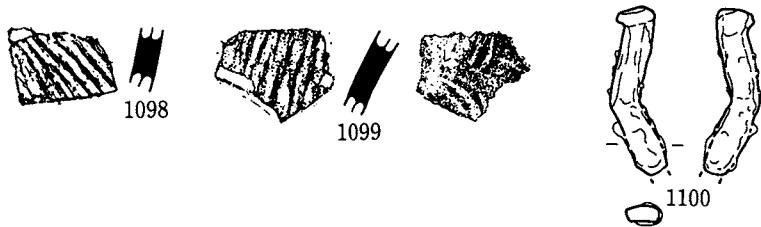
RD238



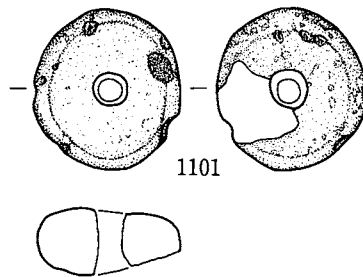
RD227



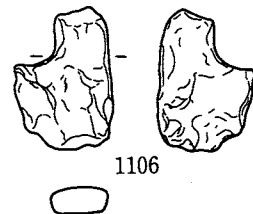
RD242



RD247



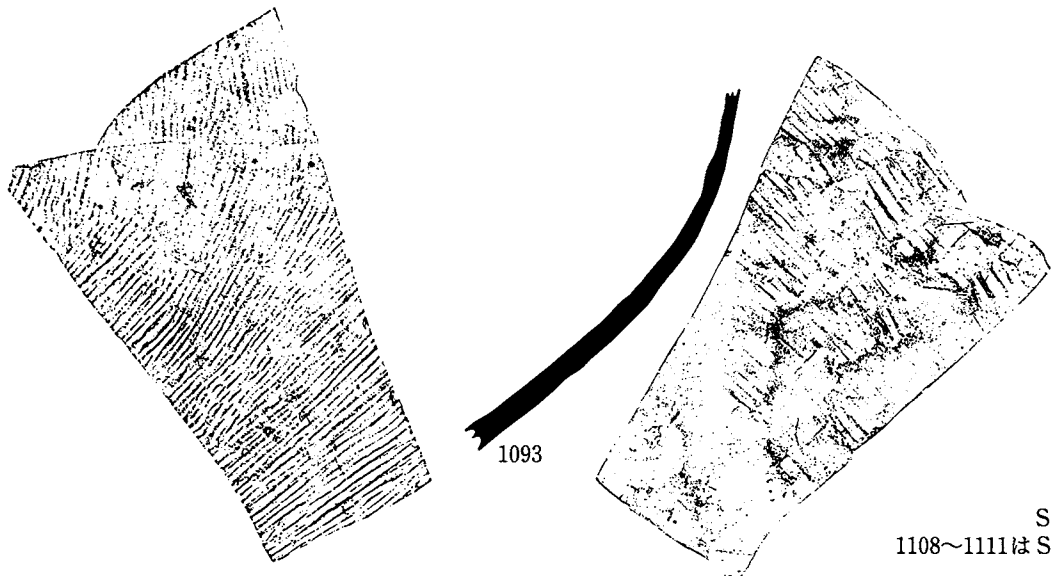
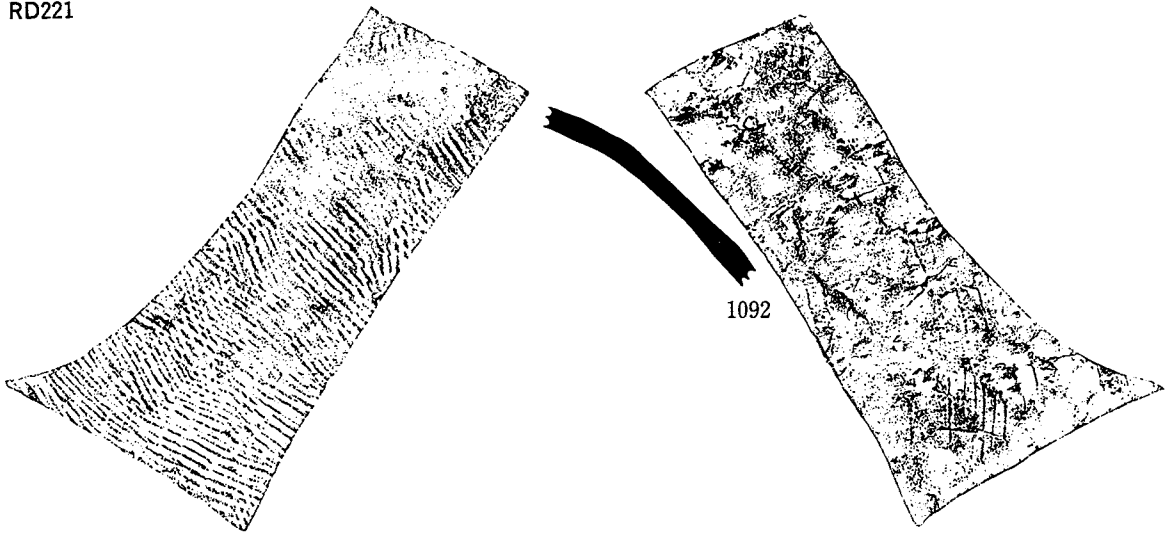
RD664



1088~1090・1098・1099・1112はS=1/3  
他はS=1/2

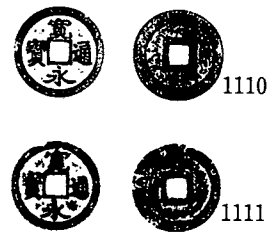
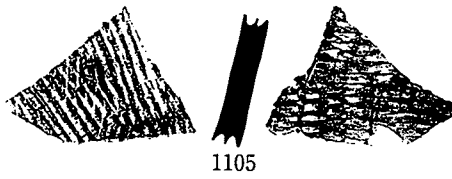
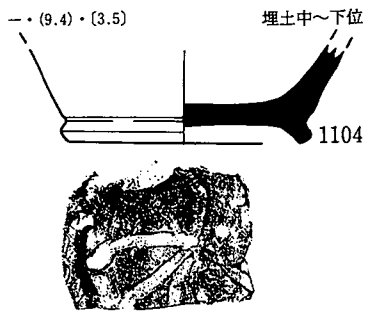
第311図 RD 土坑出土遺物(5)

RD221

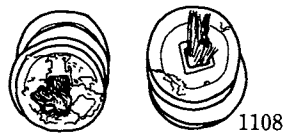


S=1/3  
1108~1111はS=1/2

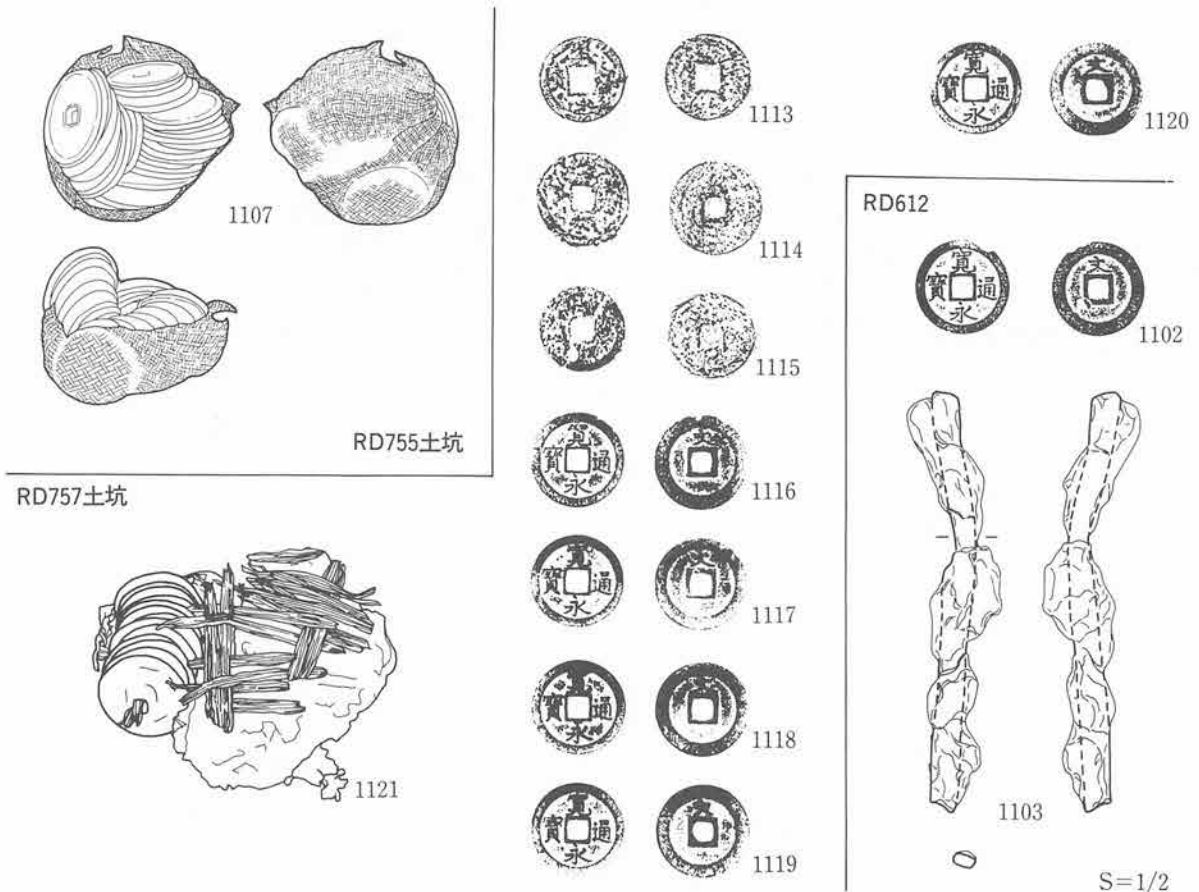
RD613



RD756



第312図 RD 土坑出土遺物(6)



第313図 RD 土坑出土遺物(7)

## 6. 焼土遺構

R F 005～021 焼土 (第 314 図、写真図版 159～161)

<位置> 調査区東・西・北側調査区から 12 基検出している。<平面形・規模> 平面形は円形 (2 基)・楕円形 (4 基)・不整形 (6 基) を呈しており、規模は最大 70×43 cm、最小 18×11 cm である。焼成の厚さは 2～8 cm を測り、堅く締まりのある暗赤褐～赤褐色の現地性の焼土である。<遺物> 大部分は遺物の出土がなく時期が不明である。 (高橋)

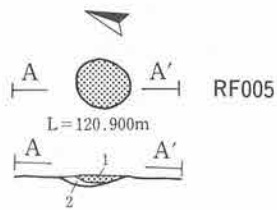
## 7. カマド状遺構

カマド状遺構は西側・南側・北側調査区から 13 基検出している。北側調査区から出土した 8 基は、調査時に種別を決めかね R Z 扱いの遺構として登録してある。

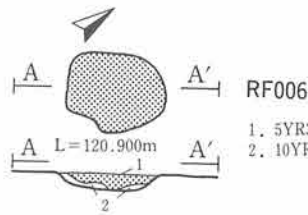
R F 007 カマド状遺構 (第 315 図、写真図版 158)

<位置・重複関係> 調査区西側の 1-A 区に位置する。重複関係はない。付近には本遺構の北側に R F 022 カマド状遺構、R F 009 カマド状遺構、R F 008 カマド状遺構が南北に並んで検出されており、本遺構はその最も南側に位置する。<平面形・規模> 円形の燃焼部と長円形の焚き口と見られる前庭部とで、8 の字形を呈する。燃焼部は径 86×74 cm、焚き口は 1.30 m×75 cm である。深さは燃焼部で最大 24 cm、焚き口で 12 cm である。

<焼土・埋土> 焼土は燃焼部の底面全域及び壁際のほとんどに形成されている。厚さは 3 cm 程度である。

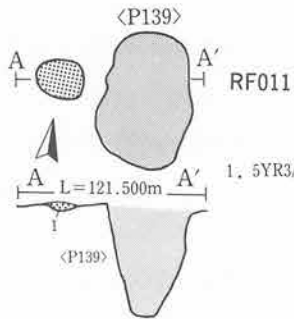


RF005



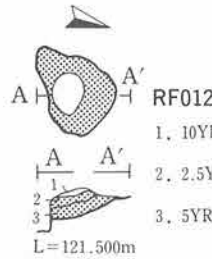
RF006

1. 5YR3/4 暗赤褐色焼土
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 強く締まる 粘性弱



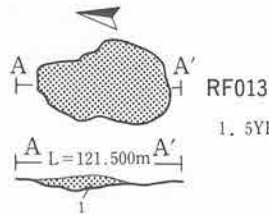
RF011

1. 5YR3/3 暗赤褐色土 粘性なし 強く締まる 現地性の焼土



RF012

1. 10YR7/2 非常に黄色土 粘性なし 非常に強く締まる
2. 2.5YR4/6 赤褐色土 粘性なし 強く締まる 現地性の焼土
3. 5YR3/4 暗赤褐色土 粘性ややあり 現地性の焼土



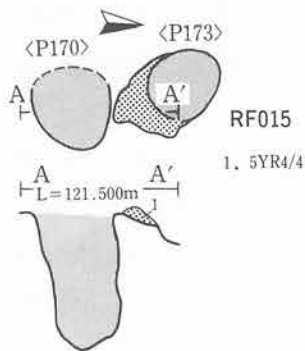
RF013

1. 5YR3/4 赤褐色土 粘性なし 強く締まる 現地性の焼土



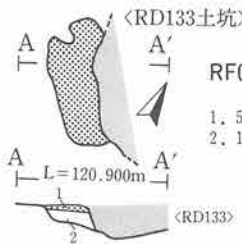
RF014

1. 5YR3/2 暗赤褐色土 粘性なし 現地性の焼土



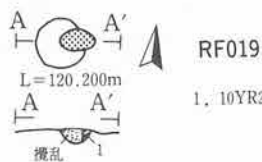
RF015

1. 5YR4/4 非常に赤褐色土 粘性ややあり 現地性の焼土



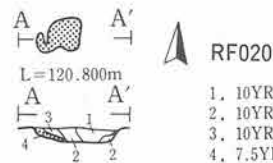
RF016

1. 5YR3/6 暗褐色焼土
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 強く締まる 粘性弱



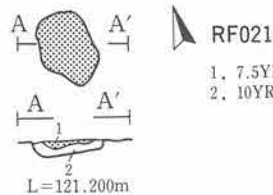
RF019

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 強く締まる 上面に焼土層を形成



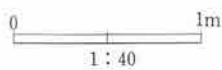
RF020

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり
3. 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし 強く締まる
4. 7.5YR4/6 褐色土 粘性なし 強く締まる



RF021

1. 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性あり 焼土層
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒(0.5~1cm大)混入 焼土ブロック(1cm大)



第314図 RF 焼土遺構

埋土は焼土粒や炭化物、黄褐色土粒などを含む黒褐色土が主体である。〈遺物・時期〉 本遺構からは遺物は出土していない。出土位置と周辺に同じ遺構が複数検出されたことから、この付近は煮炊きの場所であったことが推定され、南側の R I 001 井戸跡及び西側の R B 014 掘立柱建物跡、R B 015 掘立柱建物跡、R B 016 掘立柱建物跡との関連が推測される。 (金子)

#### R F 008 カマド状遺構 (第 315 図、写真図版 158)

〈位置・重複関係〉 調査区西側の 1-A 区に位置する。重複関係はない。付近には本遺構の南北に R F 022 カマド状遺構、R F 009 カマド状遺構、R F 007 カマド状遺構が検出されている。〈平面形・規模〉 円形の燃焼部と長円形の焚き口と見られる前庭部とで、8 の字形を呈する。燃焼部の北東側には焼土が外側に突出して形成されている部分があり、煙出しなどの施設と考えられる。燃焼部は径 80×67 cm、焚き口は 1.30 m×62 cm である。深さは燃焼部で最大 32 cm、焚き口で 9 cm である。

〈焼土・埋土〉 焼土は燃焼部及び壁際の全域に形成されている。厚さは 6～12 cm 程度である。埋土は焼土粒や黄褐色土粒などを含む黒褐色土が主体である。〈遺物・時期〉 本遺構からは遺物は出土していない。出土位置などから南側の R I 001 井戸跡及び西側の R B 014 掘立柱建物跡、R B 015 掘立柱建物跡、R B 016 掘立柱建物跡との関連が推測される。 (金子)

#### R F 009 カマド状遺構 (第 315 図、写真図版 159)

〈位置・重複関係〉 調査区西側の 1-A 区に位置する。重複関係はない。付近には本遺構の南北に R F 022 カマド状遺構、R F 008 カマド状遺構、R F 007 カマド状遺構が検出されている。〈平面形・規模〉 円形の燃焼部と長円形の焚き口と見られる前庭部とで、8 の字形を呈する。燃焼部の北東側には焼土が外側に突出して形成されている部分があり、煙出しなどの施設と考えられる。燃焼部は径 88×80 cm、焚き口は 1.60 m×69 cm である。深さは燃焼部で最大 27 cm、焚き口で 9 cm である。

〈焼土・埋土〉 焼土は燃焼部及び壁際の全域に形成されている。厚さは 8 cm 程度である。埋土は焼土粒や炭化物、黄褐色土粒などを含む黒褐色土が主体である。〈遺物・時期〉 本遺構からは遺物は出土していない。出土位置などから南側の R I 001 井戸跡及び西側の R B 014 掘立柱建物跡、R B 015 掘立柱建物跡、R B 016 掘立柱建物跡との関連が推測される。 (金子)

#### R F 010 カマド状遺構 (第 316 図、写真図版 159)

〈位置・重複関係〉 調査区南西の 5-B 区に位置する。R G 016 溝跡と重複し、新旧関係は (新) R G 106 溝跡→ (旧) R F 010 カマド状遺構である。〈平面形・規模〉 少しくびれのある長円形を呈する。規模は 2.48 m×98 cm で、深さは 30 cm である。

〈焼土・埋土〉 純粋な焼土層は検出されなかったが、燃焼部と思われる北半部の底面から、炭化物層が検出され、その上層から粘土を含む焼土層が検出された。焚き口と思われる南半部の埋土は粘土や砂を含む黒褐色土である。〈遺物・時期〉 本遺構から時期のわかるような遺物は出土していない。図化していないがガラス化した滓のようなものが出土した。 (金子)

#### R F 022 カマド状遺構 (第 315 図、写真図版 162)

〈位置・重複関係〉 調査区西側の 1-A 区に位置する。重複関係はない。付近には本遺構の南側に R F

009 カマド状遺構、R F 008 カマド状遺構、R F 007 カマド状遺構が南北に並んで検出されており、本遺構はその最も北側に位置する。〈平面形・規模〉 円形の燃焼部と長円形の焚き口と見られる前庭部とで、8の字形を呈する。燃焼部の南東側の一部は外側に突出したように焼土の形成されている部分があり、煙出しなどの施設と考えられる。燃焼部は径78×70 cm、焚き口は1.05 m×51 cmである。深さは燃焼部で最大20 cm、焚き口で10 cmである。

〈焼土・埋土〉 焼土は燃焼部と壁際の全域に形成されている。厚さは3～18 cm程度である。埋土は焼土粒や黄褐色土粒などを含む黒褐色土が主体である。底部の焼土層上には炭粉を多量に含む層が形成される。

〈遺物・時期〉 本遺構からは遺物は出土していない。出土位置と周辺に同じ遺構が複数検出されたことから、この付近は煮炊きの場所であったことが推定され、南側のR I 001 井戸跡及び西側に位置するR B 014 掘立柱建物跡、R B 015 掘立柱建物跡、R B 016 掘立柱建物跡との関連が推測される。 (金子)

#### R Z 002 カマド状遺構 (第316図、写真図版163)

〈位置・重複関係〉 調査区北側の-1-A区に位置しており、他の遺構との重複関係はない。〈平面形・規模〉 平面形は円形を呈し、規模は径90×86 cm、深さ23 cmである。

〈焼土・埋土〉 焼土は底部に7 cm形成されている。埋土は黒褐色土を主体とする5層に大別され、下部に焼土粒と炭を多く含んでいる。〈遺物・時期〉 遺物は出土していないため時期が不明である。 (高橋)

#### R Z 003 カマド状遺構 (第316図、写真図版163)

〈位置・重複関係〉 調査区北側の-2-A区に位置する。〈平面形・規模〉 平面形は不整形を呈しており、規模は1.74 m×78 cm、深さ18 cmである。

〈焼土・埋土〉 焼土は底部に6 cm形成されている。埋土は黒褐色とにぶい黄褐色土の5層に大別される。全体に強く締まり炭化物を含んでいる。〈遺物・時期〉 遺物の出土がなく時期は不明である。 (高橋)

#### R Z 004 カマド状遺構 (第316図、写真図版164)

〈位置・重複関係〉 調査区北側の-2-A区に位置している。〈平面形・規模〉 平面形は不整形を呈し、規模は1.48 m×76 cm、中心部で深さ23 cmを測る。

〈焼土・埋土〉 壁と底部は強く焼成を受けており、底部に8 cmの焼土が形成されている。埋土は黒褐色と明赤褐色土を主体とする6層に大別される。焼土化が著しく、強く締まり炭化物を多く含んでいる。

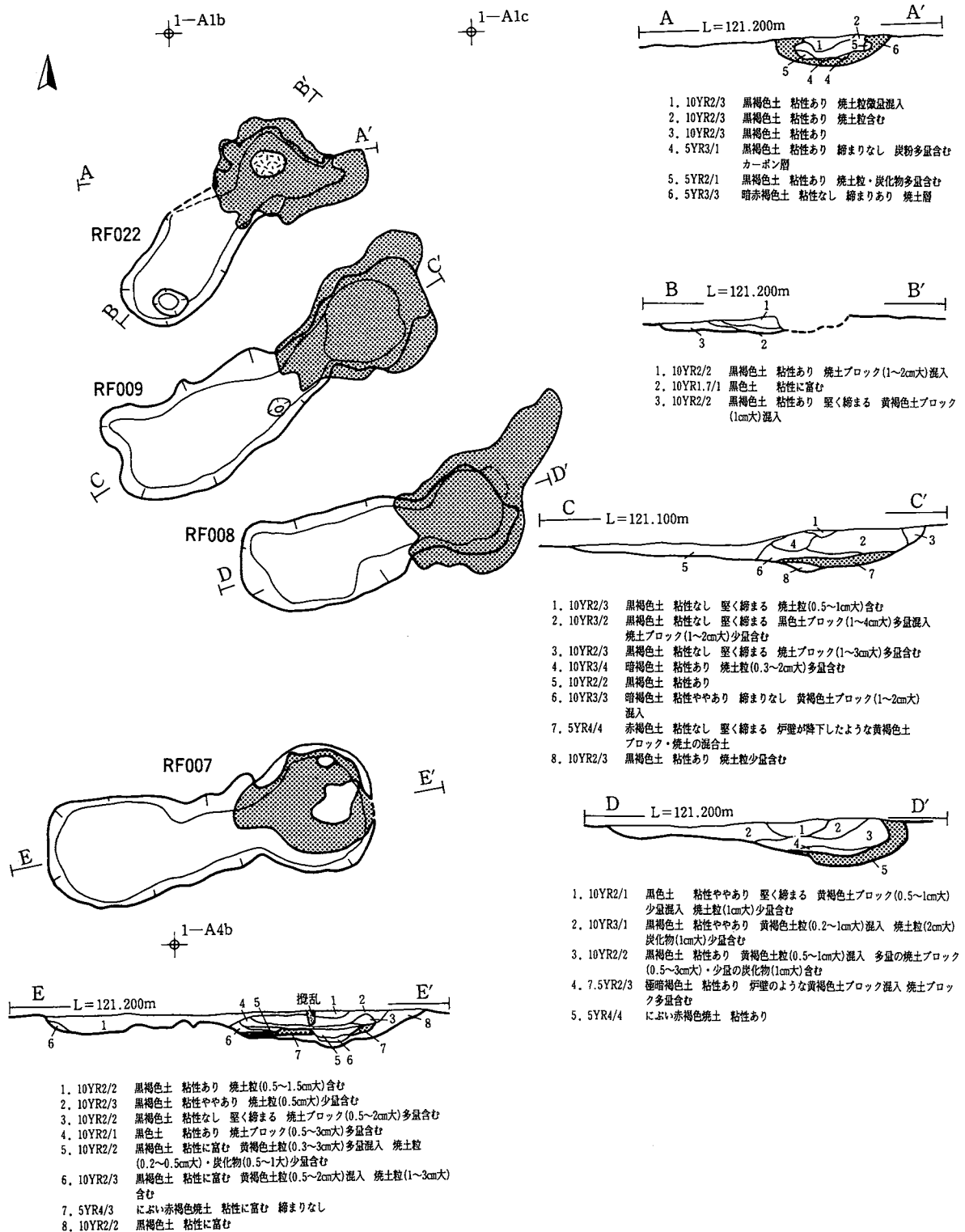
〈遺物・時期〉 遺物の出土がなく時期は不明である。 (高橋)

#### R Z 012 カマド状遺構 (第316図、写真図版164)

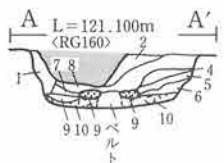
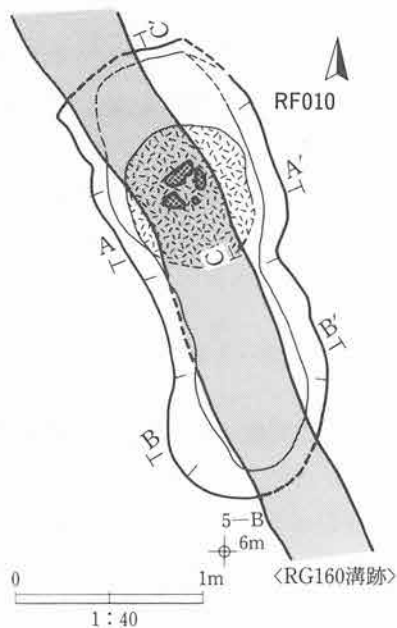
〈位置・重複関係〉 調査区北西側の-1-A区に位置し、東側にR Z 013・014 カマド状遺構が隣接している。〈平面形・規模〉 平面形は不整形を呈し、規模は径97×79 cm、中央部で深さ16 cmを測る。南東側の上部に炭が径50×46 cmの範囲で堆積している。

〈焼土・埋土〉 焼土は下部と底部に4 cm前後形成され、壁も焼成を受けている。埋土は黒褐色土とにぶい黄色褐色粘土を主体とする4層に細分され、下部に厚さ4 cmの炭が堆積をする。〈遺物・時期〉 遺物の出土がなく時期は不明である。 (高橋)

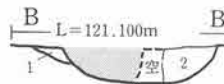




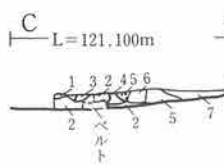
第315図 RF・RZ カマド状遺構(1)



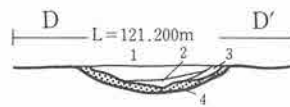
1. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性ややあり 黒褐色粘土混入
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 炭化物(径0.5mm)含む
3. 10YR2/3 黒褐色粘土 粘性ややあり 砂粒含む
4. 10YR4/6 褐色土 粘性あり 粘土多量含む
5. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 砂粒微量含む
6. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性ややあり
7. 10YR2/3 黒褐色粘土 粘性ややあり 締まりなし 焼土粒・砂粒含む
8. 10YR3/2 黒褐色粘土 粘性ややあり 焼土粒・炭化物含む
9. 5YR5/8 明赤褐色土 粘性ややあり 粘土混入
10. 炭



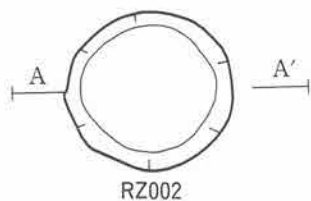
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂粒含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂粒・多量の粘土含む



1. 10YR2/3 黒褐色粘土 粘性あり 締まりなし 焼土粒・炭化物含む
2. 炭
3. 5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性ややあり
4. 5YR4/8 赤褐色粘土焼土 粘性ややあり
5. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性ややあり
6. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 締まりなし 炭化物多量含む
7. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 上に炭化物多量含む



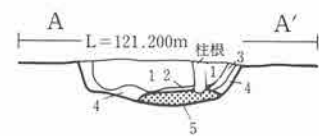
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物を小ブロック状に10%混入 粘土ブロック若干含む
2. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 炭化物層 焼土2%含む
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物・焼土40%含む
4. 5YR3/4 暗赤褐色焼土 粘性ややあり 上部に炭化物若干含む



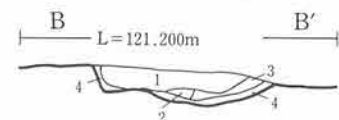
RZ002

1-A3h

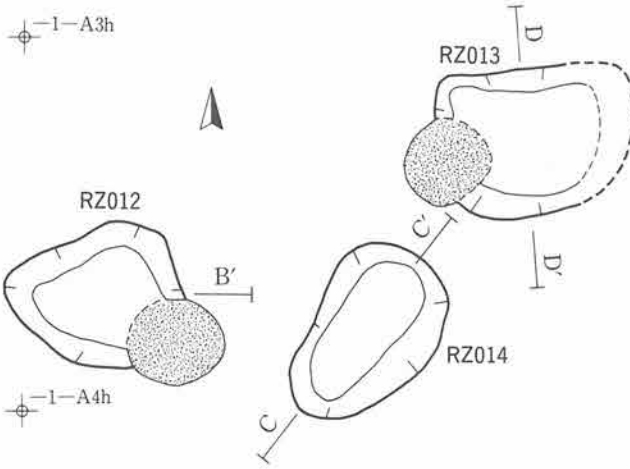
1-A4h



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物を小ブロック状に10%混入 粘土ブロック若干含む
2. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 炭化物層 焼土2%含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 1層と4層の混合土 下部に炭化物・焼土粒含む
4. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物・焼土40%含む



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物を小ブロック状に10%混入 粘土ブロック若干含む
2. 10YR4/3 におい黄褐色粘土 粘性ややあり 層上部に4層の炭化物を若干含む
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物・焼土40%含む
4. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり カarbon層 焼土2%含む

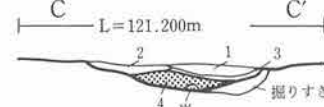


RZ012

RZ013

RZ014

0 1m  
1:40



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物を小ブロック状に10%混入 粘土ブロック若干含む
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物・焼土40%含む
3. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 炭化物層 焼土2%含む
4. 5YR3/4 暗赤褐色焼土 粘性ややあり 上部に炭化物若干含む

第316図 RF・RZ カマド状遺構(2)

R Z 013 カマド状遺構 (第 316 図、写真図版 165)

<位置・重複関係> 調査区北西側の-1-A区に位置している。南西側にR Z 012・014 カマド状遺構が隣接する。<平面形・規模> 平面形は東側が削平されている事から不明であるが、規模は1.00 m×80 cmの隅丸長方形を呈すると思われる。深さは中央部で14 cmを測る。

<焼土・埋土> 底部には焼土が4 cm前後形成され、壁も赤褐色に焼成を受けている。埋土は黒褐色土を主体とする4層に大別され、焼土粒と炭を多く含んでいる。<遺物・時期> 遺物の出土がなく時期が不明である。 (高橋)

R Z 014 カマド状遺構 (第 316 図、写真図版 165)

<位置・重複関係> 調査区北側の-1-A区に位置し、西側にR Z 012、北東側にR Z 013 カマド状遺構が隣接している。<平面形・規模> 平面形は楕円形を呈し、規模は径1.02 m×64 cm、深さ15 cmである。

<焼土・埋土> 焼土は底部に8 cm形成され炭化物を含んでいる。埋土は黒褐色土と黒色土の4層に大別される。<遺物・時期> 遺物は出土していないため時期が不明である。 (高橋)

R Z 015 カマド状遺構 (第 316 図、写真図版 165)

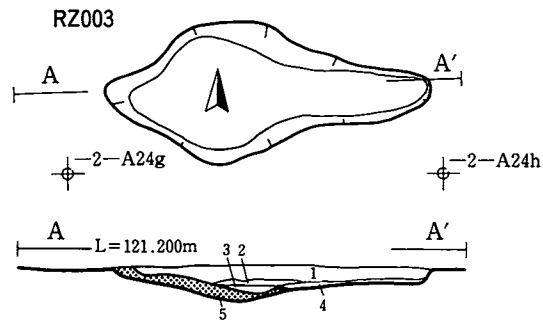
<位置・重複関係> 調査区北側の-1-A区に位置している。<平面形・規模> 平面形は南東隅が攪乱を受けている事から不明であるが、北側は円形を呈している。規模は3.27 m×86 cm、深さ最大28 cmを測る。

<焼土・埋土> 底部は全体に焼成を受けており、焼土が10 cm前後形成されている。埋土は黒褐色土を主体とする4層に大別され、下位に炭と焼土粒を多く含んでいる。<遺物・時期> 遺物の出土がなく時期が不明である。 (高橋)

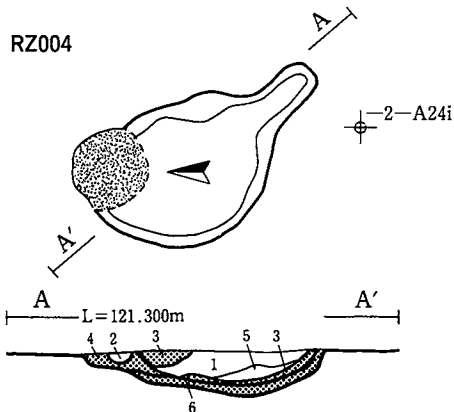
R Z 023 カマド状遺構 (第 316 図)

<位置・重複関係> 調査区北西側の-1-A区に位置し、西側でR D 603 土坑と重複している。新旧関係は本遺構が切っている事から(新) R Z 023 カマド状遺構→(旧) R D 603 土坑である。<平面形・規模> 平面形は楕円形を呈し、規模は1.17 m×51 cm、深さ14 cmである。

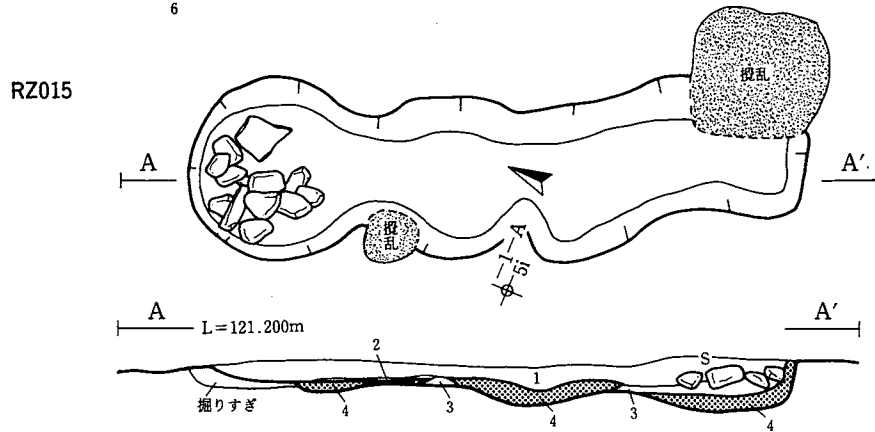
<焼土・埋土> 焼土は底部に6 cm前後形成されている。埋土は黒色土主体の4層に大別され、全体に堅く締まっている。<遺物・時期> 遺物は出土していないため時期が不明である。 (高橋)



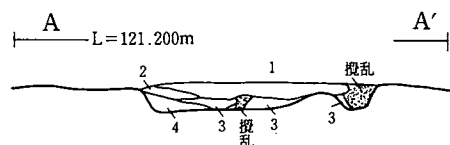
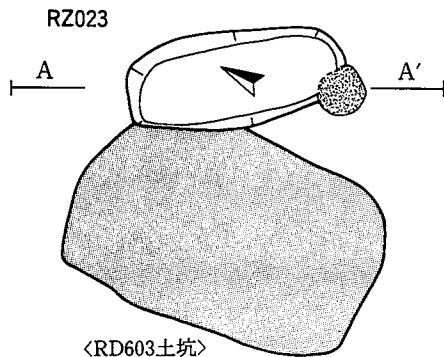
1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 粘土ブロック・明赤褐色焼土ブロック (2.5YR5/8)・炭化物各5%混入
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 粘土ブロック(径3cm大)20%混入
3. 10YR5/4 黄褐色土 粘性なし 堅く締まる 下部でやや赤化
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 粘土ブロック5%・明赤褐色焼土ブロック (2.5YR5/8)10%混入 1層との境界に炭化物少量含む
5. 5YR3/3 暗赤褐色土 粘性あり 1層との境界では赤化がより進む



1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(10YR5/3・径0.5cm大)3%含む
2. 10YR5/3 黄褐色土 粘性ややあり やや砂質 褐色土(10YR3/1)3%混入
3. 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性あり 5層との境界に黒褐色土(10YR3/1)・炭化物・粘土若干含む
4. 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性あり 黒褐色土(10YR3/1)20%混入 2層との境界に黄褐色土(10YR5/3)1%混入
5. 10YR5/4 黄褐色土 粘性あり 炭化物30%含む
6. 2.5YR3/3 暗赤褐色土 粘性あり やや砂質 3・4層との境界で強い赤化

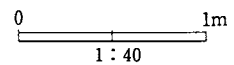


1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物を小ブロック状に10%混入 粘土ブロック若干含む
2. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり 炭化物層 焼土2%含む
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 炭化物・焼土40%混入
4. 5YR3/4 暗赤褐色焼土 粘性あり 上部に炭化物若干含む



1. 10YR2/1 黒色シルト質土 焼土粒3%含む 指圧痕有り
2. 7.5YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 焼土との混合土
3. 5YR3/3 暗赤褐色焼土 砂質に富む 指圧痕有り
4. 10YR3/4 暗赤褐色砂質シルト 堅く締まる 黒色土1%混入

<RD603土坑>



第317図 RF・RZ カマド状遺構(3)

## 8. 堀

堀は東～北側調査区で1条、西側調査区で2条検出している。

### R G 042 堀 (第 318・319・336・337 図、写真図版 166)

<位置・重複関係> 堀は東側～北側調査区に位置しており、第15次(平成9年度)調査区の西側に連続する。検出はⅢ層下位～Ⅳ層上面で、黒褐色土の広がりによって確認している。東側調査区では奈良・平安時代のR A 119・122・128・138・160・199・216 竪穴住居跡、北側調査区が奈良時代のR A 192 竪穴住居跡、R G 045 (平安時代)・107・108・131・137 溝跡、R Z 008 波板状凹凸遺構と重複している。各遺構との新旧関係は、いずれも本遺構を切っている事から(新)堀→(旧)R A 竪穴住居跡・R G 溝跡等である。

<規模・方向> 今次調査でも道路下や西側の調査区域外に延びる事から、規模の全容が不明である。東側調査区で確認された規模は、東北東～西南西方向に長さ85m、上幅が3.20～4.10m、下幅が1.60～2.50m、深さ70～100cmである。北側調査区ではコーナーが確認されており、規模は北東～西南方向に長さ30m、北西～南東方向に長さ25m、上幅が3.60～4.80m、下幅が1.80～2.80m、深さ80～90cm前後を測る。

<埋土> 東側調査区での埋土状況は、黒褐色～暗褐色シルト質土を主体とする15層に細分される。全体に上位は堅く締まり褐色土をブロック状に含み、中位は黒褐色～暗褐色シルト質土で構成され、中位から下部にかけて炭や水酸化鉄の堆積が見られる。

北側調査区の埋土状況は、シルト質土を主体とする8層に大別される。上位は褐色土を小ブロックで含む黒褐色シルト質土で堅く締まり、中位が微量の炭を含む暗褐色シルト質土の混合土、下位が炭と小礫を含む黒色シルト質土で構成されている。両調査区での埋土状況は、自然堆積の様相を示している。

<壁・底面> 壁の大部分は上半部が崩落しており、底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。東側調査区西端部(長さ20m前後)は、Ⅴ層の砂礫層を掘り込んでいるために壁が崩れやすくなっている。底面は比較的平坦で堅く締まっており、東側調査区の東端～中央部で10cm程の段差が見られる。

<遺物・時期> 埋土上部から遺構重複に伴う流れ込みの奈良・平安時代の土師器(1123・1125～1127)、須恵器破片(1124・1128～1134)、鉄製品(1135・1136)等を出土している。中世の遺物は出土していないが、第15次調査区から連続する事から、中世に比定される堀(環濠)の一部と推測される。(高橋)

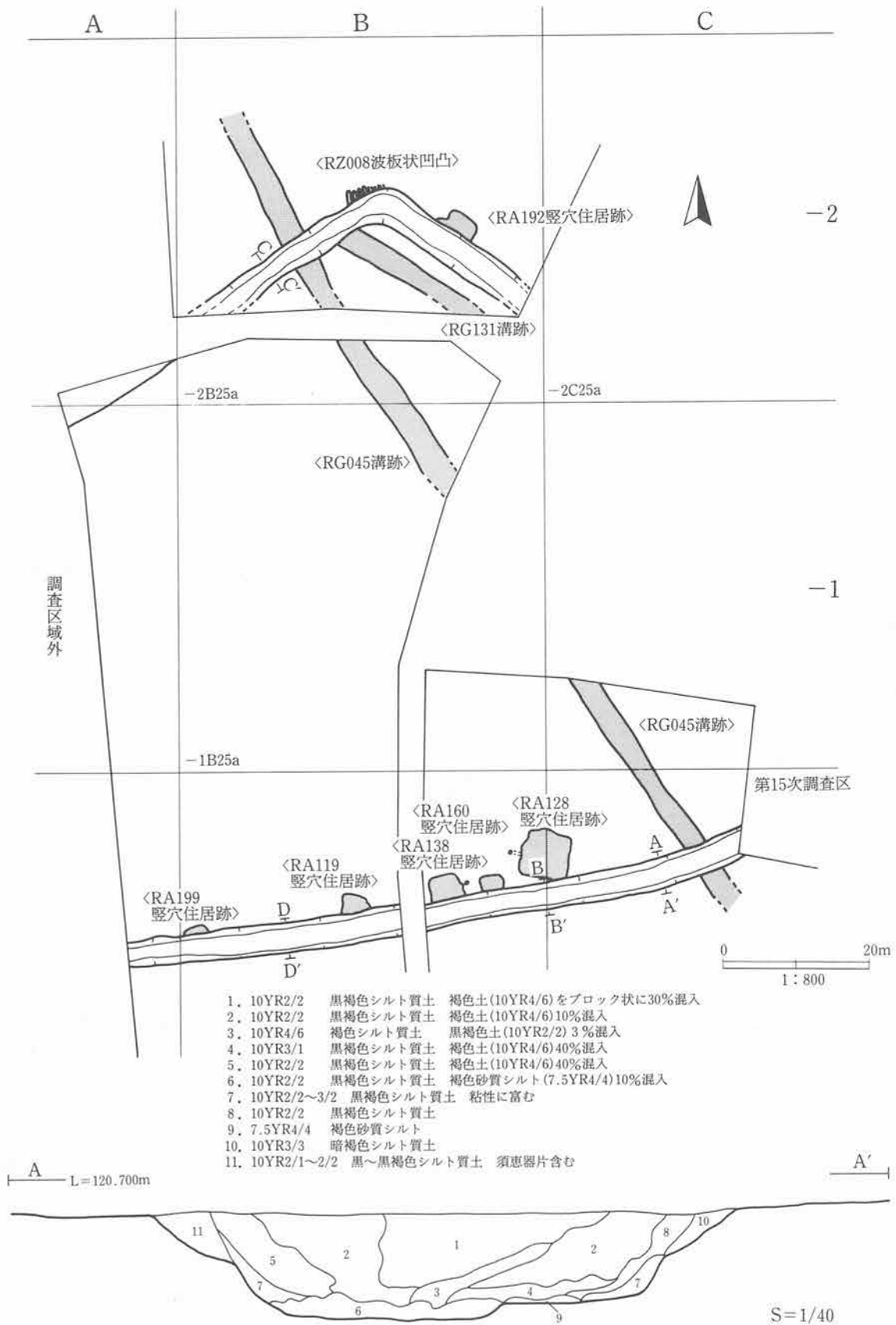
### R G 081 堀 (第 320 図、写真図版 186)

<位置・重複関係> 調査区西側の3A区～3-A区に位置する。R G 084 溝跡と重複するが、新旧ははっきりせず同時期の可能性もある。R G 082 溝跡とも重複するが、同溝はたいへん浅く新旧関係は明らかでない。また、R G 083 堀とは重複はないが、本調査区内では東側ではやや間隔が狭くなるものの、ほぼ平行に掘られており何らかの関係があるものと考えられる。本遺構に囲まれた内側は標高が高く、外側はやや低い。

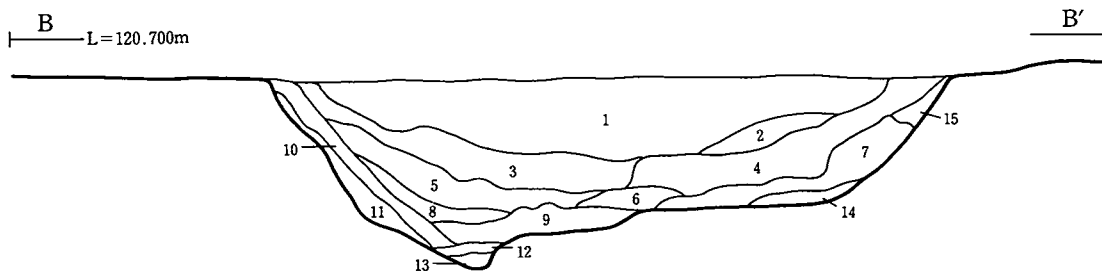
<規模・方向> 幅は4.40m、深さ43cm、長さ71.30mである。底は内湾し壁も緩やかに内湾気味に立ち上がる。南西から直角よりやや広い角度で屈曲し、南東方向へ延びる。

<埋土> 4層から5層に細分され、おおむね混入物の少ない黒褐色土～黒色土である。底面及び壁際に黄褐色土の粒が混入する。底面はⅣ層及び砂礫層まで掘り込んでいる。

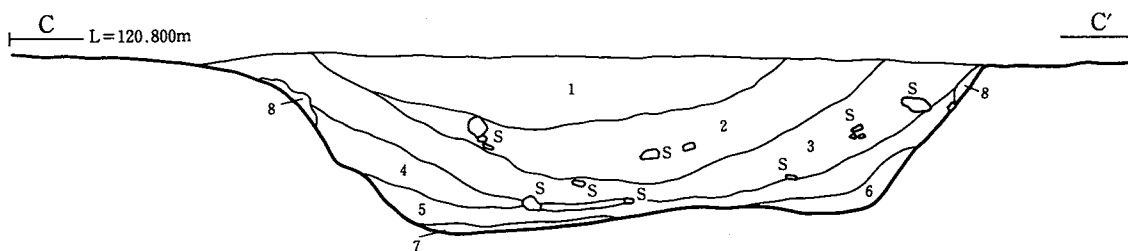
<遺物・時期> 土師器破片が数点出土したが、小片のため図化していない。時期・性格は不明であるが、本遺構南側に位置する諏訪神社を囲む堀の可能性がある。(金子)



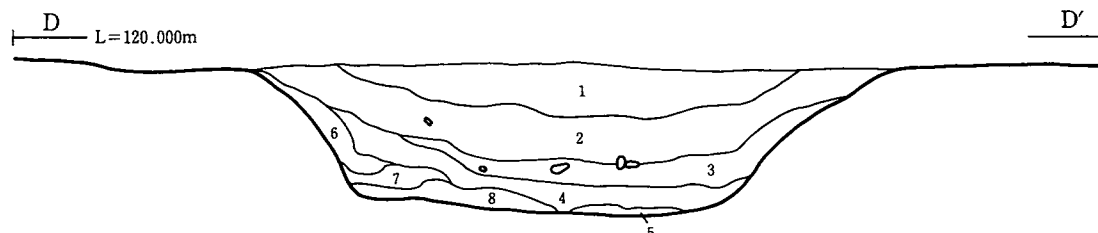
第318図 RG042堀(1)



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 黒色土(10YR2/1)・褐色砂質シルト(10YR4/6)をブロック状に40%含む 土師器片含む
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 褐色砂質シルト(10YR4/6)をブロック状に20%含む 下部に黒褐色土が層状に混入
3. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 褐色砂質シルト(10YR4/6)50%、黒褐色土(10YR2/3)3%含む
4. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 黒褐色土(10YR2/3)をブロック状に30%含む
5. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 黒色土(10YR2/1)が層状に混入 水分多量混入 砂がやや混じる
6. 10YR4/6 褐色シルト質土
7. 7.5YR3/1 黒褐色シルト質土 粘性に富む 暗褐色土(7.5YR3/3)3%混入
8. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 粘性に富む
9. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 黒色土(10YR2/1)・褐色砂質土(10YR4/6)混入
10. 10YR2/1 黒褐色シルト質土 褐色砂質土(10YR4/6)10%混入
11. 10YR4/1 褐色シルト質土 下部にかけて黒色砂(10YR3/1)含む
12. 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性なし 水分多量含む
13. 7.5YR3/3 暗褐色シルト質土 褐色砂質土(10YR4/4)混入
14. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 褐色砂質土(10YR4/4)1%混入
15. 10YR3/4 暗褐色シルト質土



1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで20%混入 炭微量含む小礫(径1~5cm大)少量含む
2. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土の混合土層 礫(径5~10cm大)含む 炭を微量含む
3. 10YR2/1 黒色シルト質土 褐色土を小ブロックで15%混入 小礫(5cm大)少量含む 指圧痕有り
4. 10YR2/2 黒色シルト質土 堅く締まる 炭を少量、礫を微量含む
5. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 礫との混合土(50%)
6. 10YR2/1 黒色砂質土 締まりなし 小礫20%混入
7. 10YR3/4 暗褐色砂質土 堅く締まる 砂礫の混合土で砂質に富む
8. 10YR4/6 褐色砂質シルト 堅く締まる 壁崩落土 IV層起源



1. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 礫(径1~2cm大)含む
2. 10YR2/3~3/3 黒褐~暗褐色シルト質土 炭・酸化鉄微量含む 礫(径5~10cm大)含む
3. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 水酸化鉄、礫(径5~10cm大)含む
4. 10YR1/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 水酸化鉄・炭含む 黒褐色土(10YR2/3)10%混入
5. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 褐色砂質土(10YR4/4)3%混入 水酸化鉄微量含む
6. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色砂質土(10YR4/6)30%混入 炭微量含む
7. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 礫少量含む
8. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 堅く締まる 明褐色砂(7.5YR5/8)を下部に含む

S=1/40

第319図 RG042堀(2)





#### R G 083 堀 (第 320 図、写真図版 186)

<位置・重複関係> 調査区西側の 3 A 区に位置する。R G 081 溝跡の内側である。R A 140 竪穴住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

<規模> 幅は 4.15 m、深さ 65 cm、長さ 34.10 m である。南南西から直角に屈曲して、南東に延びる。R G 081 堀と類似する形状を示す。底はやや内湾気味で、壁は外傾～外反して立ち上がる。

<埋土> 3～4 層に細分される。礫を含む黒褐色土が主体である。

<遺物・時期> 埋土より土師器破片が少量出土しているが、本遺構の時期を示すものではないと思われる。時期・性格は不明であるが、R G 081 堀と同様本遺構南側の諏訪神社を囲む堀の可能性はある。

(金子)

## 9. 溝跡

溝跡は大小合わせて 110 条検出しており、調査区ごとに主な遺構の記述をする。各溝跡の規模と方向等は第 5・6 表に一括掲載をしている。

#### 東側調査区 (第 321～323・325 図)

##### R G 045 溝跡 (第 321～323・338～342 図、写真図版 167)

<位置・重複関係> 東～北側調査区の 1 C～2 B 区に亘って位置している。検出はⅢ層下位～Ⅳ層上面で、黒褐色土の広がりによって確認している。東側調査区内で奈良時代の R A 151 竪穴住居跡と平安時代の R A 159 竪穴住居跡、中世の R G 042 堀、R G 043・151 溝跡、北側調査区が R G 042 堀・R G 077・106・137 溝跡と重複している。各遺構との新旧関係は、中世の R G 042 堀と R G 043 溝跡に切られ他の遺構を切っている事から (新) R G 042 堀・R G 043 溝跡→本溝跡→R G 077・106・137・151 溝跡→R A 159 竪穴住居跡→(旧) R A 151 竪穴住居跡である。

<規模・方向> 今次調査でも道路下や南側と北側で調査区域外に延びる事から、規模の全容が不明である。中央部付近は第 15 次 (平成 9 年度) 調査区に連続している。確認された規模は、南東～北西方向に長さ 46.20 m、上幅が最大 3.40 m、下幅が 1.65 m、深さが 75～90 cm を測る。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする 13 層に細分される。上層は炭と焼土粒を含む暗褐色土の混合土で構成され、十和田 a 降下火山灰が帯状に堆積している。中位はブロック状の暗褐色土と炭を層状に多く含んでいる。下層は褐色砂質シルトと水酸化鉄の堆積が見られる。自然堆積の様相を示している。

<壁・底面> 壁の上半部は大部分が崩落しており、底面から緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は比較的平坦で強く締まっており、北側調査区では V 層の砂礫層を一部掘り込んでいる。

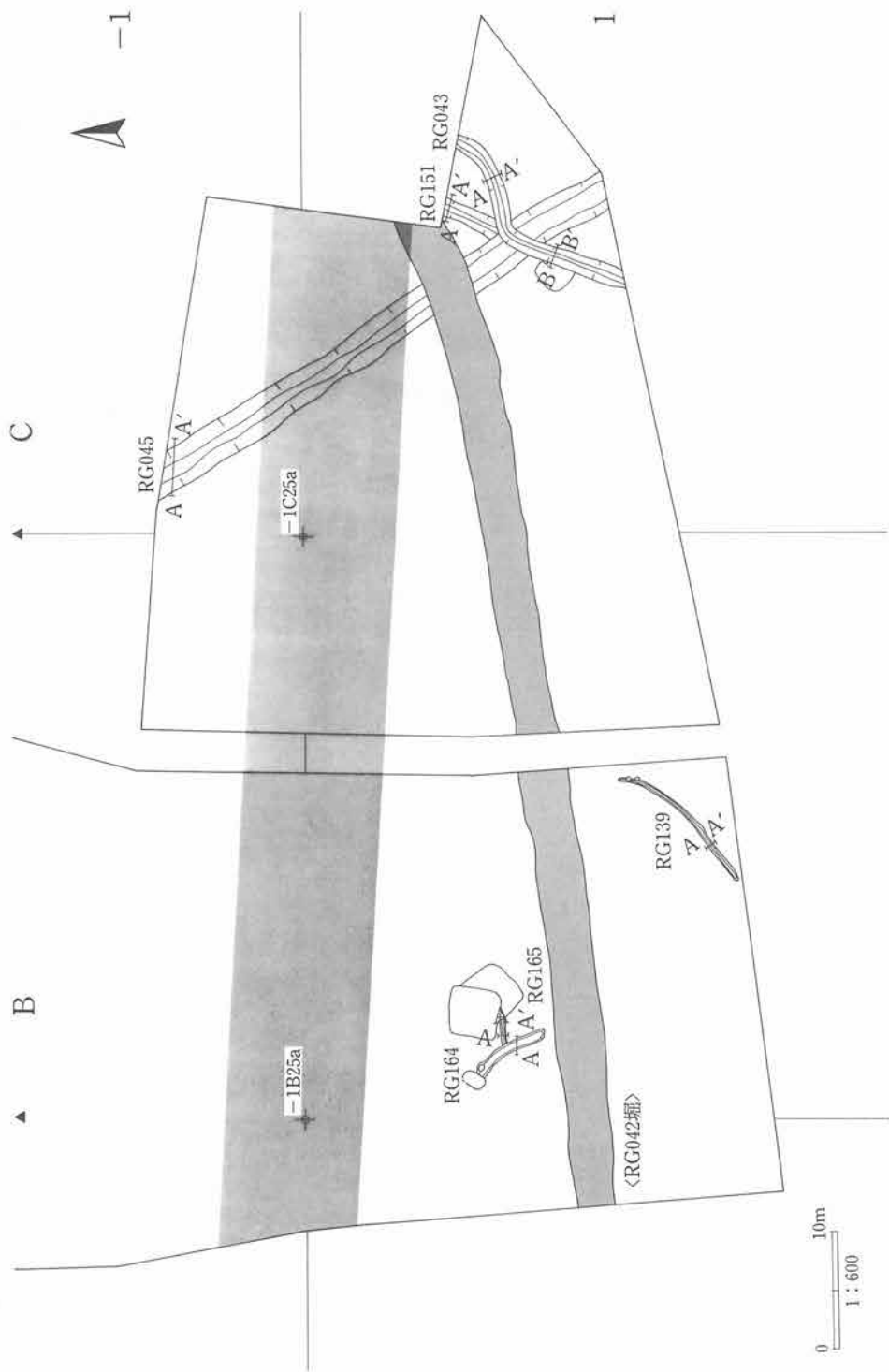
<遺物・時期> 埋土の上層から中位にかけて大量の土師器・須恵器破片、土製紡錘車、管玉、刀子、釘が出土している。遺物に混じり炭化物和焼土の堆積が多く見られる事から、投げ込みされたものである。

1141～1153 はロクロ使用の土師器坏である。1141～1145 の内面は黒色処理を施しており、底部の切り離しが回転系切りである。1151 の口縁部付近には墨書が見られる。1154～1179 は須恵器坏、1180～1183 は土師器甕、1184・1185 は須恵器小型壺、1186～1190・1193～1201 は須恵器甕、1190・1192 は須恵器長頸壺である。

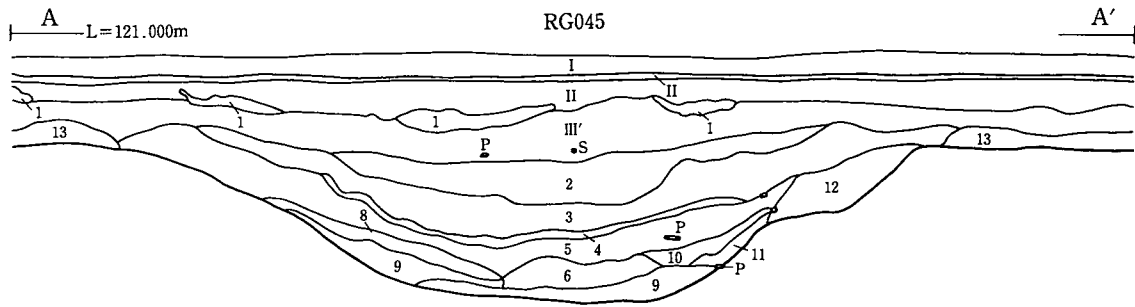
時期は竪穴住居跡の重複と十和田 a 降下火山灰の堆積から、平安時代前半に属すると思われる。(高橋)

##### R G 043 溝跡 (第 321・322 図、写真図版 167)

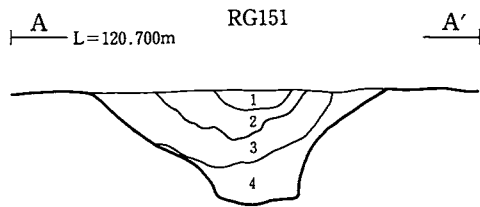
<位置・重複関係> 東側調査区の 1 C 区中央部北寄りに位置する。検出はⅣ層上面で黒褐色土の広がり



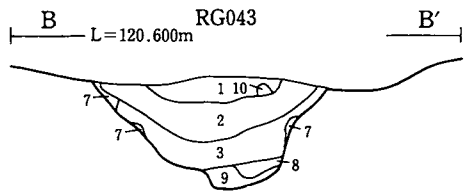
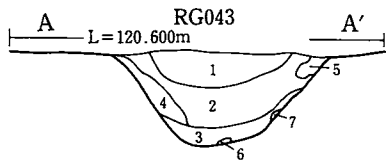
第321図 東側調査区 RG 溝跡(1)



- I. 10YR3/2 黒褐色土 耕作土
- II. 10YR3/2 黒褐色土 床土 酸化物含む
- III. 10YR2/2 黒褐色シルト質土
- III'. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 暗褐色土(10YR3/4)10%混入 炭・焼土粒含む  
 1. 10YR6/4 におい黄褐色火山灰 黒褐色土(10YR2/2)混入
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 褐色土(10YR4/6)5%混入
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 炭を層状に混入
- 4. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性に富む 炭を層状に混入
- 5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性に富む 暗褐色土(10YR3/4)20%混入
- 6. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性に富む 礫(径1~3cm大)含む
- 7. 10YR4/3 におい黄褐色粘土質シルト 粘性あり 下部に褐色砂(10YR4/6)含む
- 8. 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性あり 黒褐色土(10YR2/3)20%含む
- 9. 10YR2/2~2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり
- 10. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性に富む
- 11. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色土(10YR4/4~4/6)3%混入
- 12. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 粘性あり 褐色土(10YR4/4~4/6)30%混入
- 13. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 粘性あり IV層

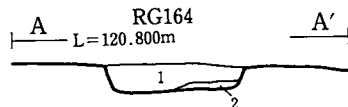


- 1. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土(10YR2/2)20%混入
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 暗褐色土(10YR3/4)がブロック状に30%混入  
炭化物含む
- 4. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 堅く締まる 褐色粘土質シルト(10YR4/6)・  
黒褐色シルト質土(10YR2/2)混入

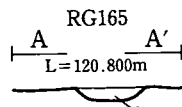


- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 褐色土(10YR4/6)5%混入 指圧痕有り
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 褐色土(10YR4/6)5%混入 炭・焼土粒少量含む
- 3. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 黒褐色土(10YR2/2)10%混入
- 4. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 褐色土(10YR4/6)20%混入
- 5. 10YR4/6 褐色シルト質土 黒褐色土(10YR2/2)10%混入

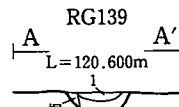
- 6. 10YR4/6 褐色砂質シルト
- 7. 10YR4/6 褐色粘土質シルト 壁崩落土 IV層
- 8. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 褐色砂質土(10YR4/6)50%混入
- 9. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 黒褐色土(10YR3/1)10%混入
- 10. 10YR2/3 黒褐色土 擾乱



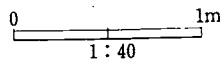
- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 暗褐色土との混合土 水酸化鉄混入
- 2. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色土少量混入



- 1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭微量含む

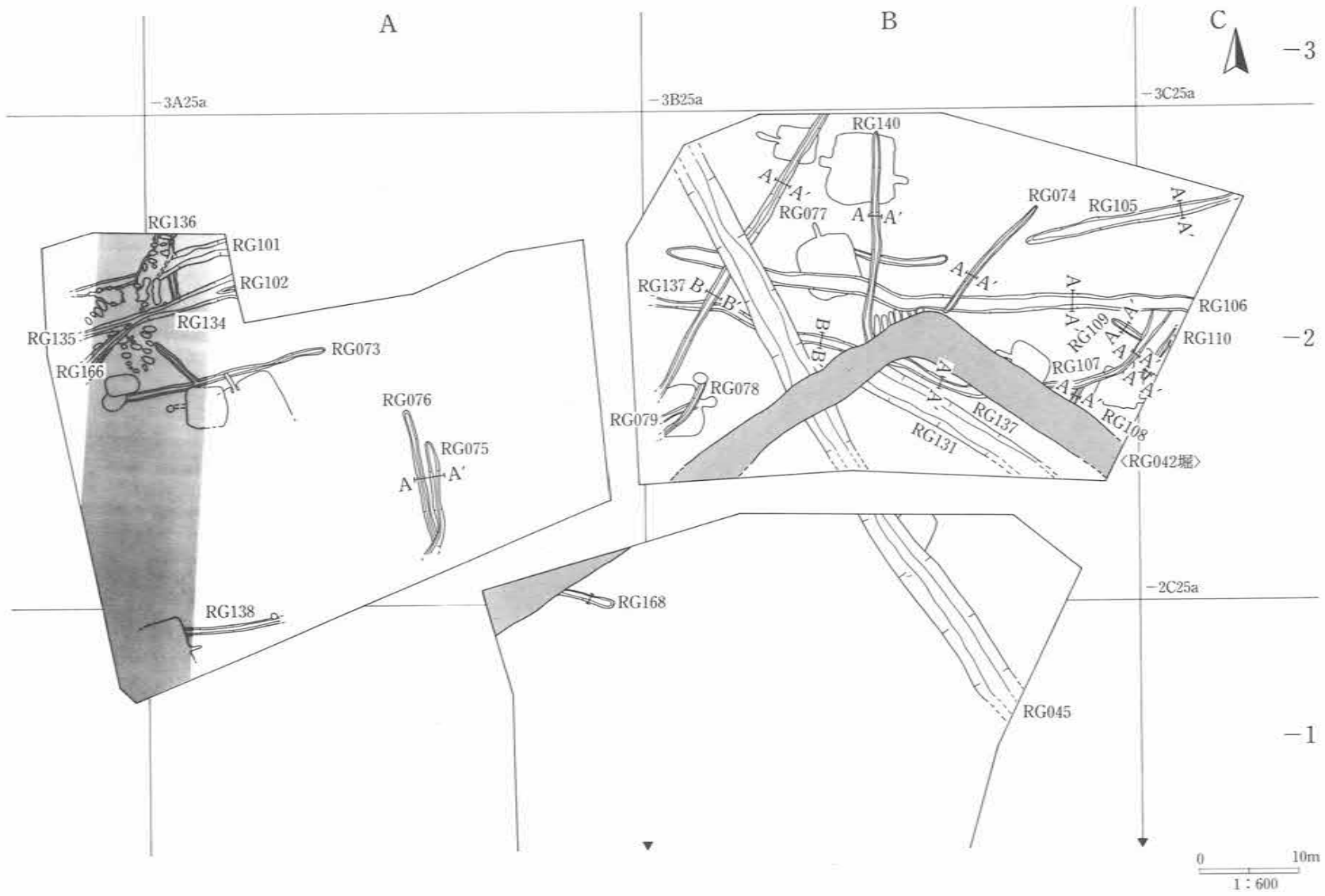


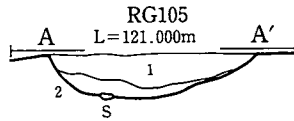
- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 水酸化鉄含む 指圧痕有り
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 褐色土をブロック状に1%混入 指圧痕有り



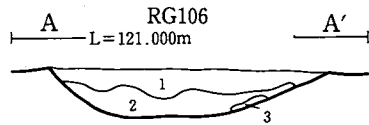
第322図 東側調査区 RG 溝跡(2)

第323图 东侧·北侧调查区 RG 清淤(1)

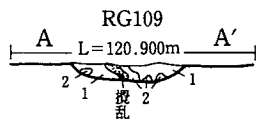




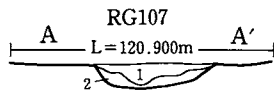
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 礫(径0.5~1cm大)多量含む  
水酸化鉄をブロック状に混入
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 水酸化鉄を帯状に堆積する 1層に類似



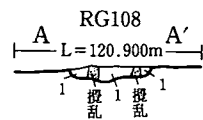
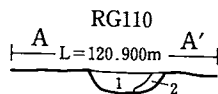
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 水酸化鉄を帯状に混入
2. 10YR2/2~3/2 黒褐色砂質シルト 堅く締まる 水酸化鉄を小ブロック状に混入
3. 10YR3/3 暗褐色シルト質土 堅く締まる 黒褐色がブロックで1%混入



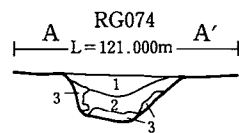
1. 10YR4/4 褐色砂質シルト 堅く締まる
2. 10YR3/3~4/3 暗褐~におい黄褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土で汚れている



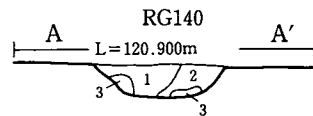
1. 10YR2/2~3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭微量・水酸化鉄含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土シルト質土が小ブロック状で混入  
炭・水酸化鉄を1層より多量含む



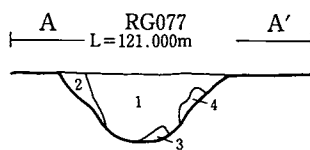
1. 10YR4/6 褐色砂質シルト 堅く締まる 黒褐色土で汚れている



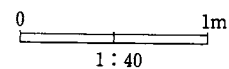
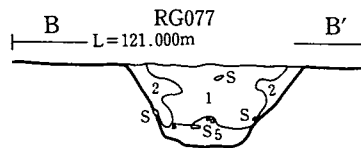
1. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる 褐色土を小ブロックで混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 水酸化鉄が混入 1層に類似
3. 10YR4/3 におい黄褐色砂質シルト 壁崩落土 IV層起源



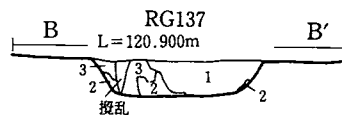
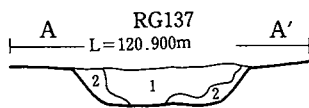
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土(10YR4/6)3%混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土(10YR4/6)10%混入
3. 10YR4/6 褐色シルト質土 指圧痕有り



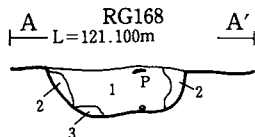
1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 炭を微量混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 褐色土(10YR4/6) 炭を微量混入
3. 10YR4/6 褐色砂質シルト 黒褐色土(10YR2/2)20%混入 指圧痕有り
4. 10YR3/4 暗褐色シルト質土 指圧痕有り
5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 礫(径1~5cm大)50%混入



第324図 東側・北側調査区 RG 溝跡(2)



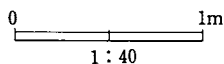
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 水酸化鉄少量含む
- 2. 10YR3/3 褐色シルト質土 黒褐色土40%混入
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 黒褐色土(10YR3/1)20%混入



- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 強く締まる 粘性あり
- 2. 10YR4/6 褐色シルト質土 強く締まる 粘性あり 黒褐色土5%混入
- 3. 10YR4/6 褐色砂質シルト 強く締まる 粘性あり



- 1. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 強く締まる 水酸化鉄微量含む
- 2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 強く締まる IV層起源
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 強く締まる 粘性に富む
- 2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 強く締まる 壁崩落土 IV層起源
- 3. 10YR2/3 暗褐色砂質シルト 強く締まる



第325図 東側・北側調査区 RG 溝跡(3)

によって確認している。RG 045・151 溝跡と重複し、本遺構が切っている事から新旧関係は(新)本溝跡→RG 045 溝跡→(旧)RG 151 溝跡である。

<規模・方向> 南側と北側は調査区域外に延びている事から、規模の全容が不明である。確認された規模は、北東～南西方向に長さ19.40m、上幅が最大1.26m、下幅が38cm、深さが50～60cmである。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする10層に大別される。上層はブロック状の褐色土の混合土で構成され、中位が褐色土と炭・焼土粒を含み、下層は強く締まり水酸化鉄が堆積している。自然堆積の様相を示している。

<壁・底面> 壁の上半部は崩落しており、底面から外傾気味に立ち上がっている。底面は平坦で強く締まっている。

<遺物・時期> 遺物の出土がなく時期は不明である。

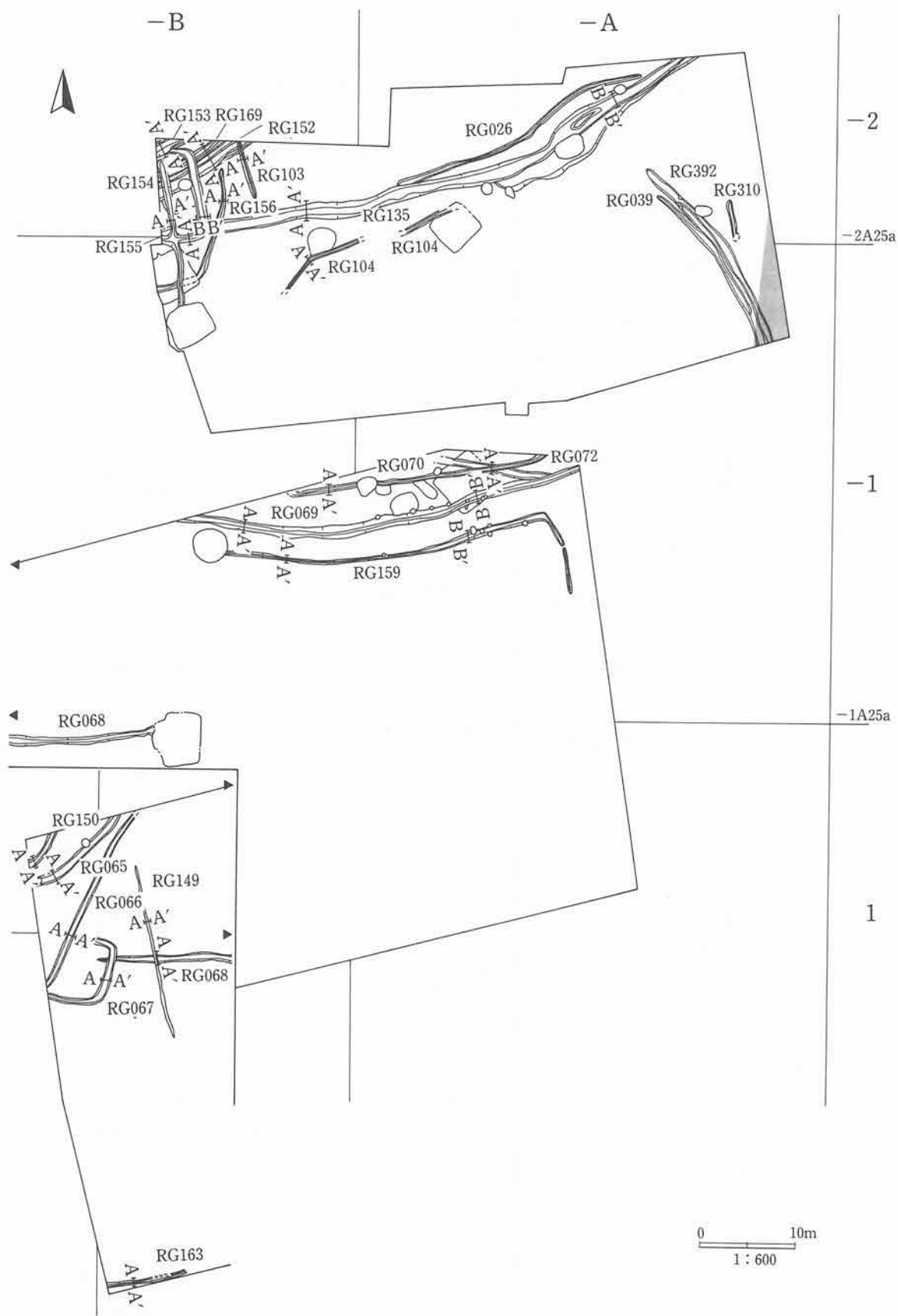
(高橋)

#### RG 151 溝跡 (第 321・322 図、写真図版 168)

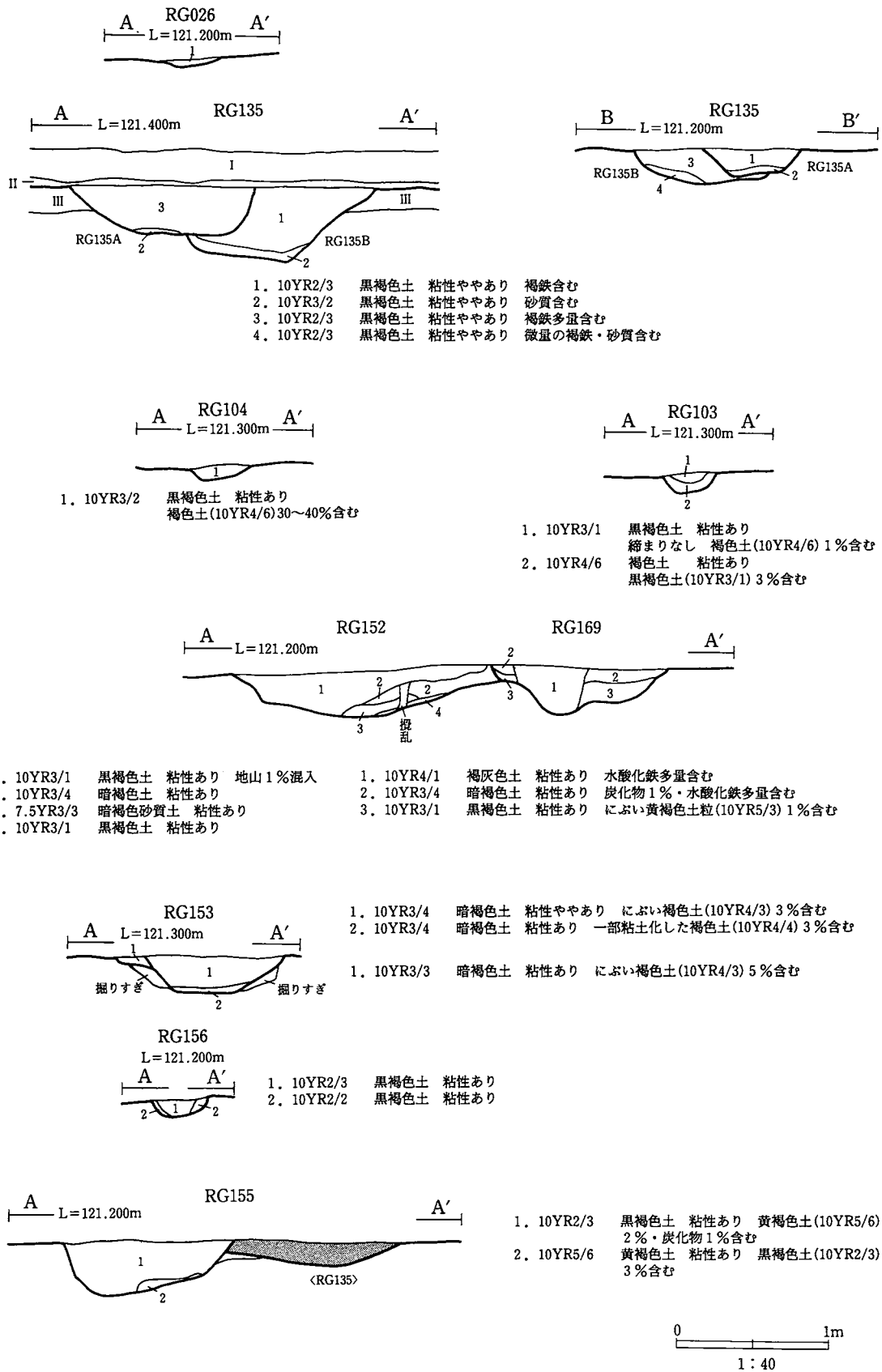
<位置・重複関係> 東側調査区の1C区北寄りに位置する。検出はIV層上面で黒褐色土の落ち込みによって確認している。RG 042・043 溝跡と重複し、新旧関係は本遺構が切られている事から(新)RG 043 溝跡→RG 042 溝跡→(旧)本溝跡である。

<規模・方向> 南側は重複し北側は調査区域外に延びている事から、規模の全容が不明である。確認された規模は、南南西～北北東方向に長さ5.10m、上幅が最大1.62m、下幅が45cm、深さが60cm前後である。

<埋土> 埋土は4層に大別される。上層は暗褐色シルト質土で、ブロック状の黒褐色土を含み強く締まっている。中位は黒褐色シルト質土と暗褐色土の混合土で炭化物を含んでいる。下層は暗褐色シルト質土で構成され、褐色粘土質シルトと黒褐色シルト質土を混入する。自然堆積の様相を示している。

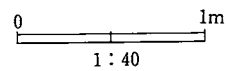
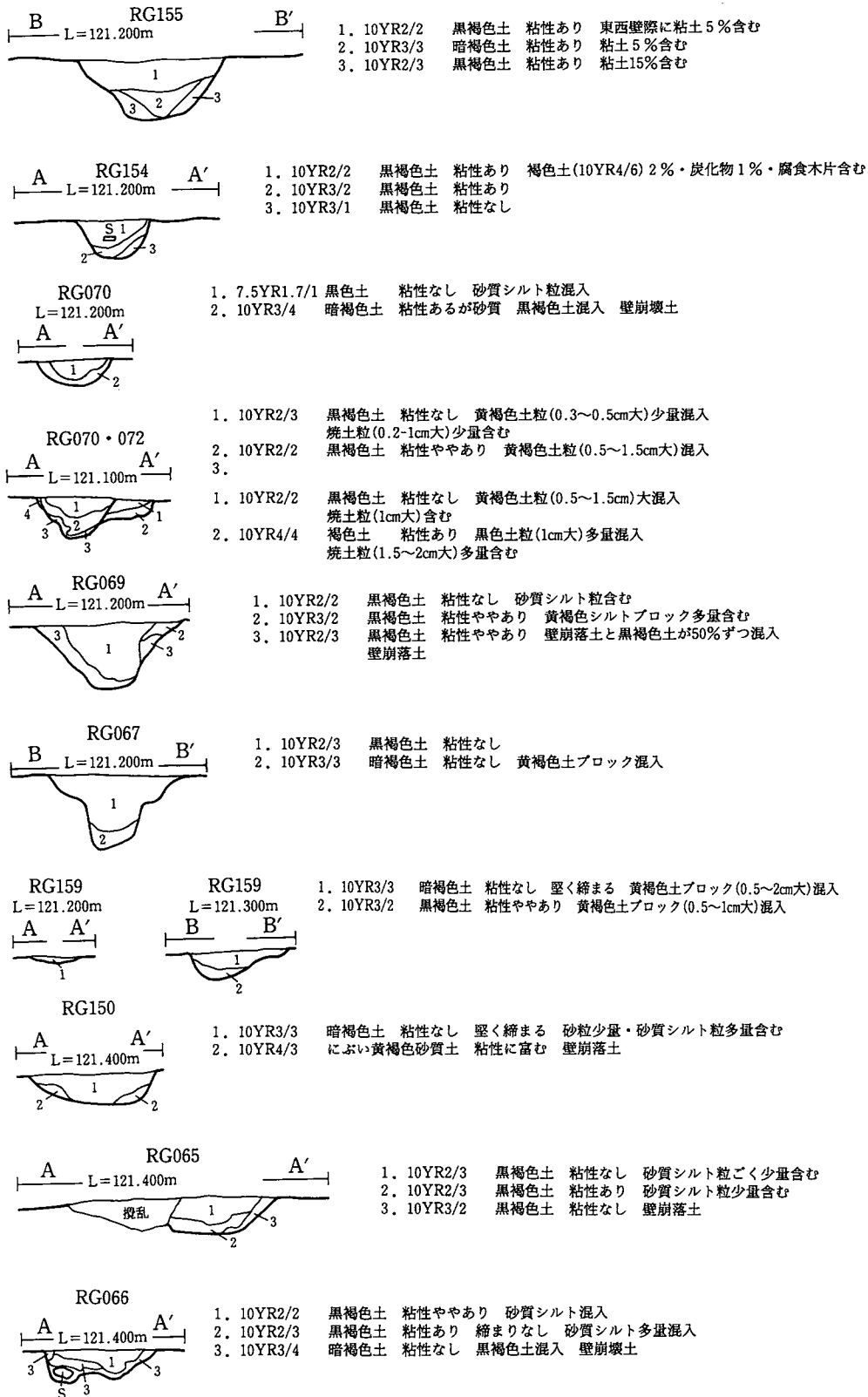


第326図 北側・西側調査区 RG 溝跡(1)



第327図 北側・西側調査区 RG 溝跡(2)





第328図 北側・西側調査区 RG 溝跡(3)

<壁・底面> 壁は上半部が崩落しており、底面から緩やかに外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平担で堅く締まる。

<遺物・時期> 遺物は出土していないが、十和田 a 降下火山灰を堆積する R G 045 溝跡に切られている事から平安時代前半に属する。  
(高橋)

#### 北側調査区 (第 323～328 図)

##### R G 106 溝跡 (第 323・324 図、写真図版 172・173)

<位置・重複関係> 北側調査区の一 2 B 区中央部付近に位置している。検出は III 層下位～IV 層上面にかけて、黒褐色土の広がりによって確認している。R A 218 竪穴住居跡、R G 045・074・077・107・140 溝跡、R Z 008 波板状凹凸遺構と重複している。各遺構との新旧関係は、奈良時代の R A 218 竪穴住居跡、R G 107 溝跡、R Z 008 波板状凹凸遺構を切り、他の遺構に切られている事から (新) R G 045・074・077・140 溝跡→本溝跡→R Z 008 波板状凹凸遺構・R G 107 溝跡→(旧) R A 218 竪穴住居跡である。

<規模・方向> 東側が調査区域外の道路下に延びる事から、規模の全容が不明である。確認された規模は、東～北方向に長さ 53.70 m、上幅が最大 1.48 m、下幅が 71 cm、深さが 20～26 cm を測る。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする 3 層に大別され、全体に堅く締まり水酸化鉄がブロック状に混入している。自然堆積の様相を示している。

<壁・底面> 壁の上半部は削平されており、底面から緩やかに外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平担で堅く締まる。

<遺物・時期> 時期を決定する遺物は出土していないが、十和田 a 降下火山灰を堆積する R G 045 溝跡に切られている事から平安時代前半に属する。  
(高橋)

#### 西側調査区 (第 326～332 図)

##### R G 069 溝跡 (第 326・328 図)

<位置・重複関係> 調査区北側の一 1-B～一 1-A 区に位置する。R A 132 竪穴住居跡、R D 144 土坑、R G 072 溝跡を切り、R B 006 掘立柱建物跡に切られている。

<規模・方向> 幅は 1.40 m、深さ 46 cm、長さ 43.20 m である。東北東より西方向に延びる。南側に移行して延びる R G 159 溝跡と大部分が平行している。底面は内湾し、壁は一旦急に立ち上がった後、やや開いて立ち上がる。

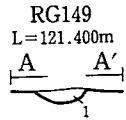
<埋土> 2～3 層に細分される。粘性のない黒褐色土が主体である。

<遺物・時期> 埋土から須恵器甕破片が出土している。これらの遺物や埋土の状態、重複関係から、本遺構は平安時代に属すると考えられる。  
(金子)

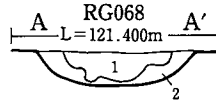
##### R G 159 溝跡 (第 326・328 図、写真図版 179)

<位置・重複関係> 調査区北側の一 1-B～一 1-A 区に位置する。R D 219 土坑を切り、R B 006 掘立柱建物跡に切られている。R D 219 土坑と重複する部分では徐々に浅くなり、消えてしまう。<規模・方向> 幅 88 cm、深さ 33 cm、長さ 42.60 m である。南から屈曲して西方向に延びる。東西方向に延びる部分では R G 069 溝跡と 3.00～3.70 m (溝の中心間) の間隔で、平行に延びている。間隔は西に向かうにつれ若干狭くなる。

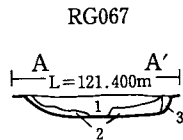
<埋土> 締まりのある暗褐色土である。



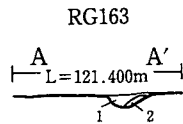
1. 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし 堅く締まる 黄褐色土粒(0.5~1.5cm大)・黒色土粒(0.3~1cm大)混入



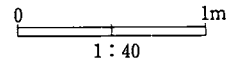
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性に富む 砂質シルト粒混入
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 壁崩壊土・黒褐色土の混合土



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 炭化物少量含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 砂質シルト多量混入  
炭化物少量含む
3. 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし 壁崩壊土



1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土粒含む



第329図 北側・西側調査区 RG 溝跡(4)

<遺物・時期> 遺物は出土していない。RG 069 溝跡と平行して溝が延びることから、対の溝になる可能性もあるが、埋土は若干本溝跡の方が新しいようである。(金子)

RG 088 溝跡 (第 330・331 図、写真図版 182)

<位置・重複関係> 西側調査区の 2-B~3-B 区に位置する。RA 146 竪穴住居跡、RG 115 溝跡、RG 089 溝跡に切られている。

<規模・方向> 幅 80 cm、深さ 31 cm、長さ 60.20 m である。南南東から西北西に緩やかにカーブして延びる。断面は底が内湾し、壁は外傾して立ち上がる。逆台形状を呈する部分もある。

<埋土> 焼土粒や黄褐色土ブロックを含む黒色土が主体である。

<遺物・時期> 特に時期を示すような遺物は出土していないが、奈良時代の RA 146 竪穴住居跡に切られていることから、奈良時代以前の溝と考えられる。(金子)

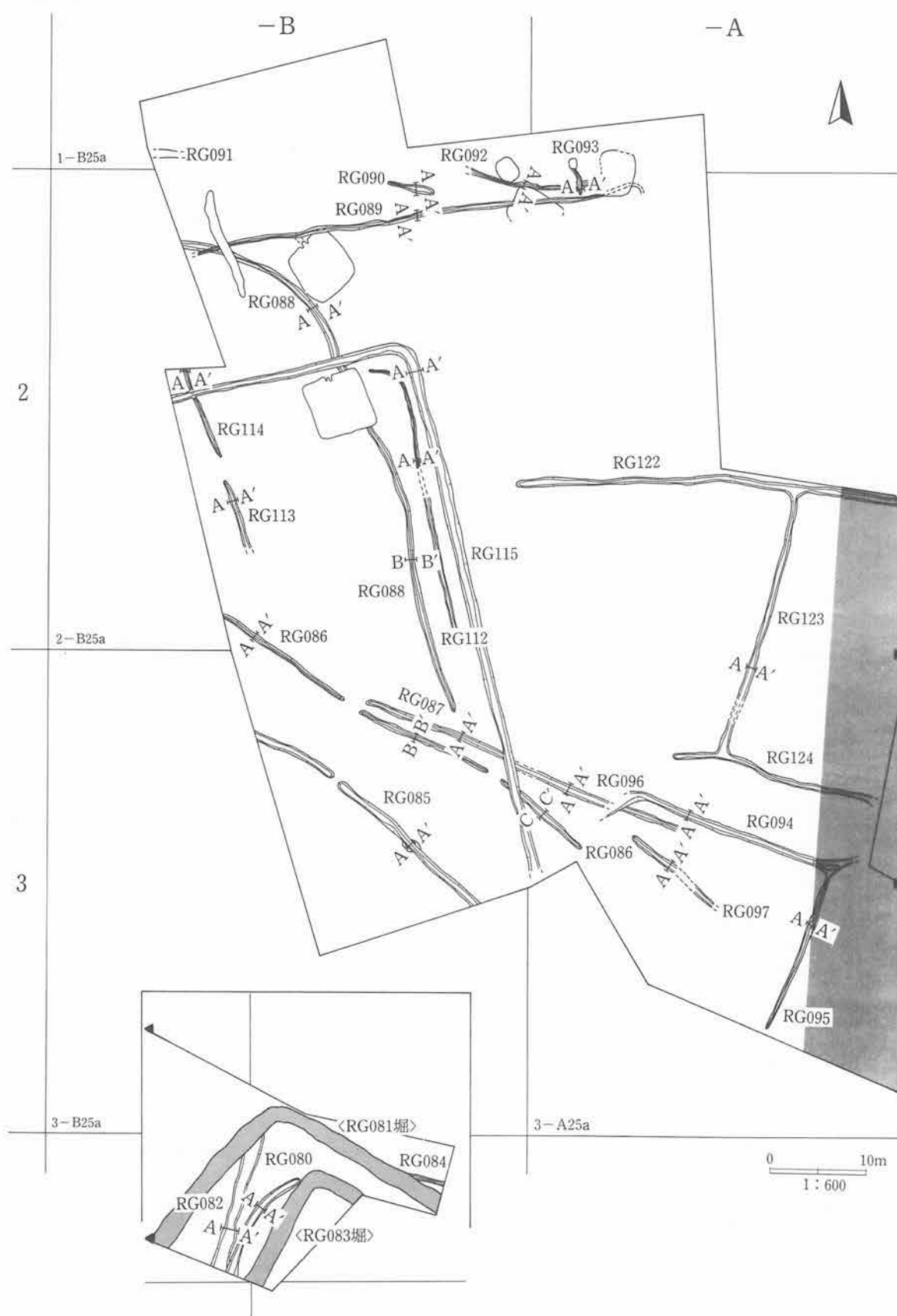
RG 099 溝跡 (第 333 図)

<位置・重複関係> 南側調査区の 5-E~6-B 区に位置する。RG 098・118・125・126・144~146・162・111・117 溝跡と重複する。これらのうち、RG 125・114・145・146・162 溝跡よりも新しいと思われるが、RG 098・117・111・118 溝跡より古い。はっきりしないものもある。

<規模・方向> 幅 3.10 m、深さ 45 cm、長さ 152.20 m である。西から東へ蛇行し、分岐しながら延びる。

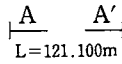
<埋土> 褐鉄や砂質シルトの混入する黒褐色土が主体である。一部には壁際に十和田 a 降下火山灰とみられる灰白色火山灰の堆積が確認された。

<遺物・時期> 本溝の 5-C 区より東側の埋土から多量の土師器 1218~1227、甕 1234・1235、須恵器 1228~1231、甕 1236~1239・1243~1248、長頸瓶 1240~1242、あかやき土器高台付坏 1232・1233 が出土している。これらの遺物と火山灰から、本溝跡は平安時代に属すると考えられる。また、埋土と蛇行している形状から、遺溝ではなく自然の流路と考えられる。(金子)



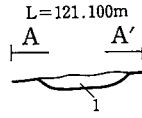
第330図 西側調査区 RG 溝跡(1)

RG093



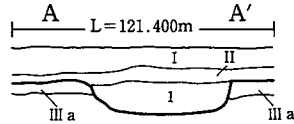
- 1. 10YR2/1 黒色土 粘性なし 締まりなし 黄褐色土粒(0.2~0.5cm大)含む
- 2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし

RG092



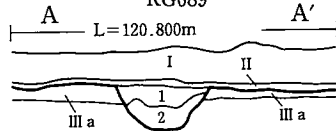
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黒色土・砂質シルトの混合土 溝底の土

RG090



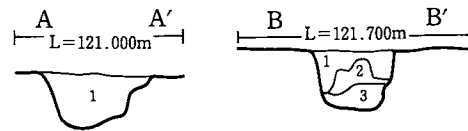
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒微量混入

RG089



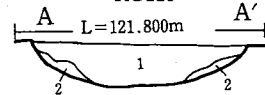
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり
- 2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黒色土ブロック混入

RG088



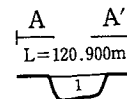
- 1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 焼土粒少量含む
- 2. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 混入物なし
- 3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 壁・底の崩壊土

RG115



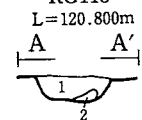
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性有り 黄褐色土粒少量含む
- 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 黄褐色土粒多量含む

RG112



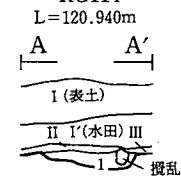
- 1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 堅く締まる 黄褐色土粒混入

RG113

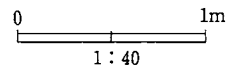


- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒少量混入
- 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 壁崩壊土

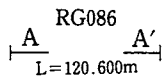
RG114



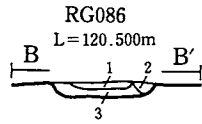
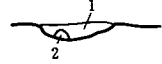
- I. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土粒(径0.5~1cm大)10%・黒色土粒(10YR2/1・径1~4cm大)40%含む 表土
- I'. 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし 褐鉄(径0.1~0.3cm大)10%含む 水田
- II. 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり 堅く締まる 黄褐色土粒(径0.2~1cm大)多量含む
- III. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 非常に堅く締まる 黄褐色土粒(径0.2~1cm大)10%含む
- 1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性に富む 堅く締まる 黄褐色土粒(径0.3~0.5cm大)7%含む



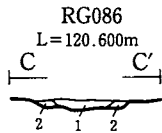
第331図 西側調査区 RG 溝跡(2)



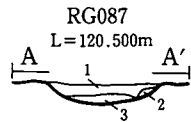
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.1~1cm大)混入
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.1~1cm大)混入



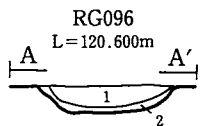
1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.1~1cm大)混入
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(0.1~0.5cm大)多量混入



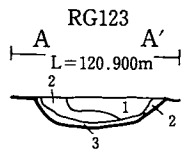
1. 10YR2/1 黒色土 粘性なし 締まりなし 黄褐色土粒混入
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性に富む 締まりなし



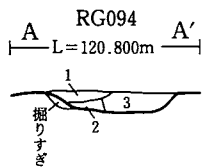
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(1cm大)混入
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり



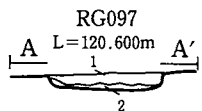
1. 10YR2/1 黒色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(2~3cm大)混入
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 壁崩壊土



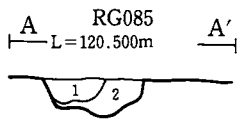
1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土粒少量含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 締まりなし 黄褐色土ブロック多量混入
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 黒褐色土少量混入 壁崩壊土



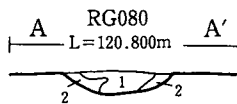
1. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 砂質ローム シルト質黒褐色土粒(10YR2/3)混入
2. 10YR4/4 褐色土 粘性あり 砂質ローム シルト質黒褐色土粒(10YR2/3)少量混入
3. 10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性あり 暗褐色砂質ローム(10YR3/4)下層に多量含む



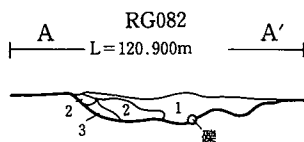
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり 漸移層の褐色土含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり 壁崩壊土



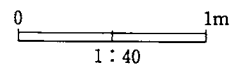
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロック(径1cm大)含む
2. 図面に記載なし



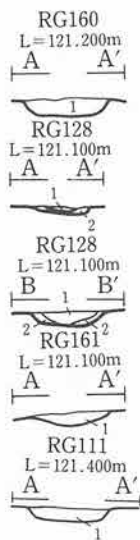
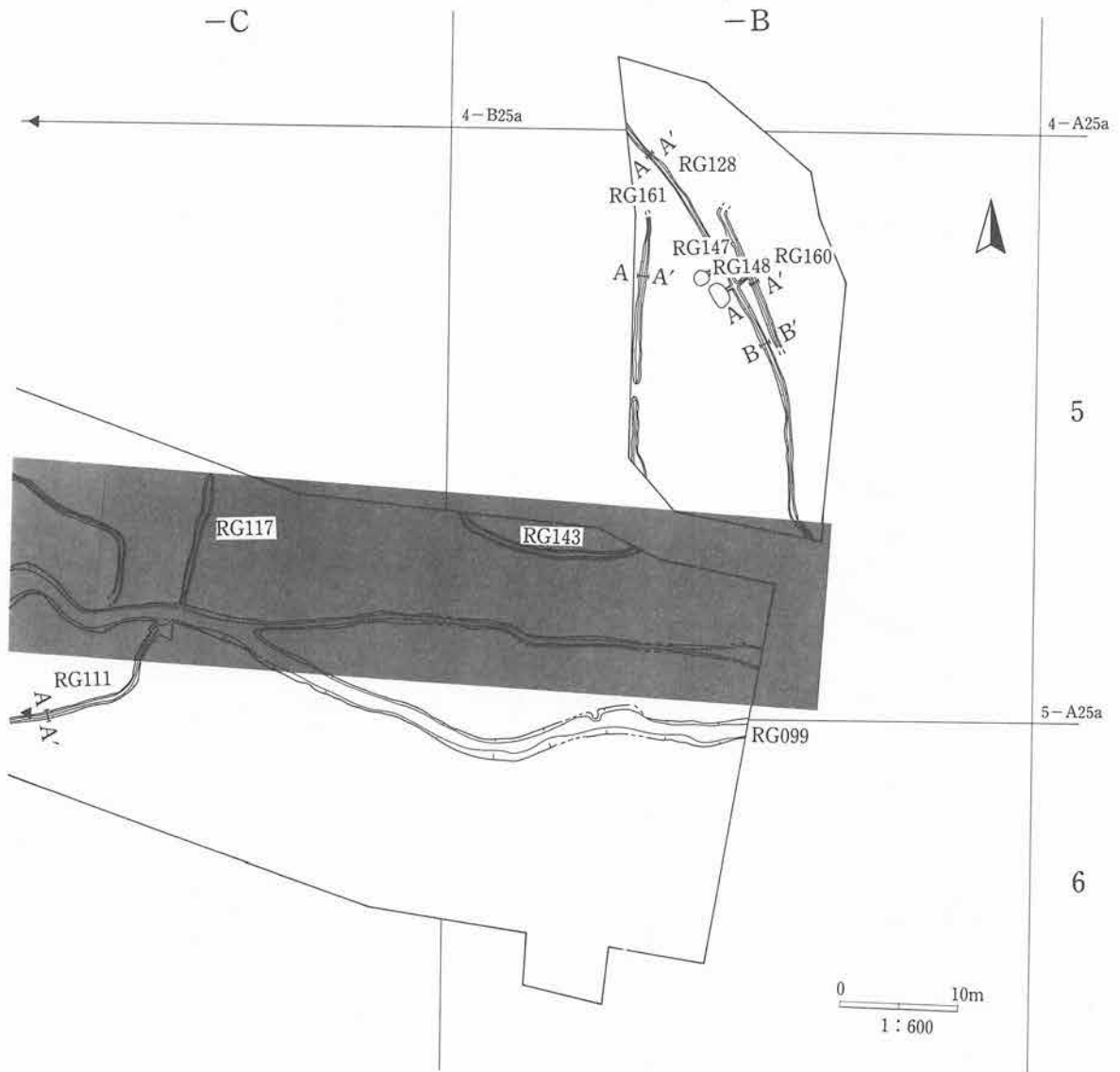
1. 10YR3/4 黒褐色土 粘性あり 褐鉄含む
2. 10YR4/4 褐色土 粘性あり 黄褐色土混入 褐鉄含む 壁崩壊土



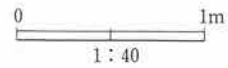
1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり 強く締まる 黄褐色土粒混入 礫(2~5cm大)含む
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色土ブロック(1~3cm大)混入 礫(2~3cm大)少量含む
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性ややあり



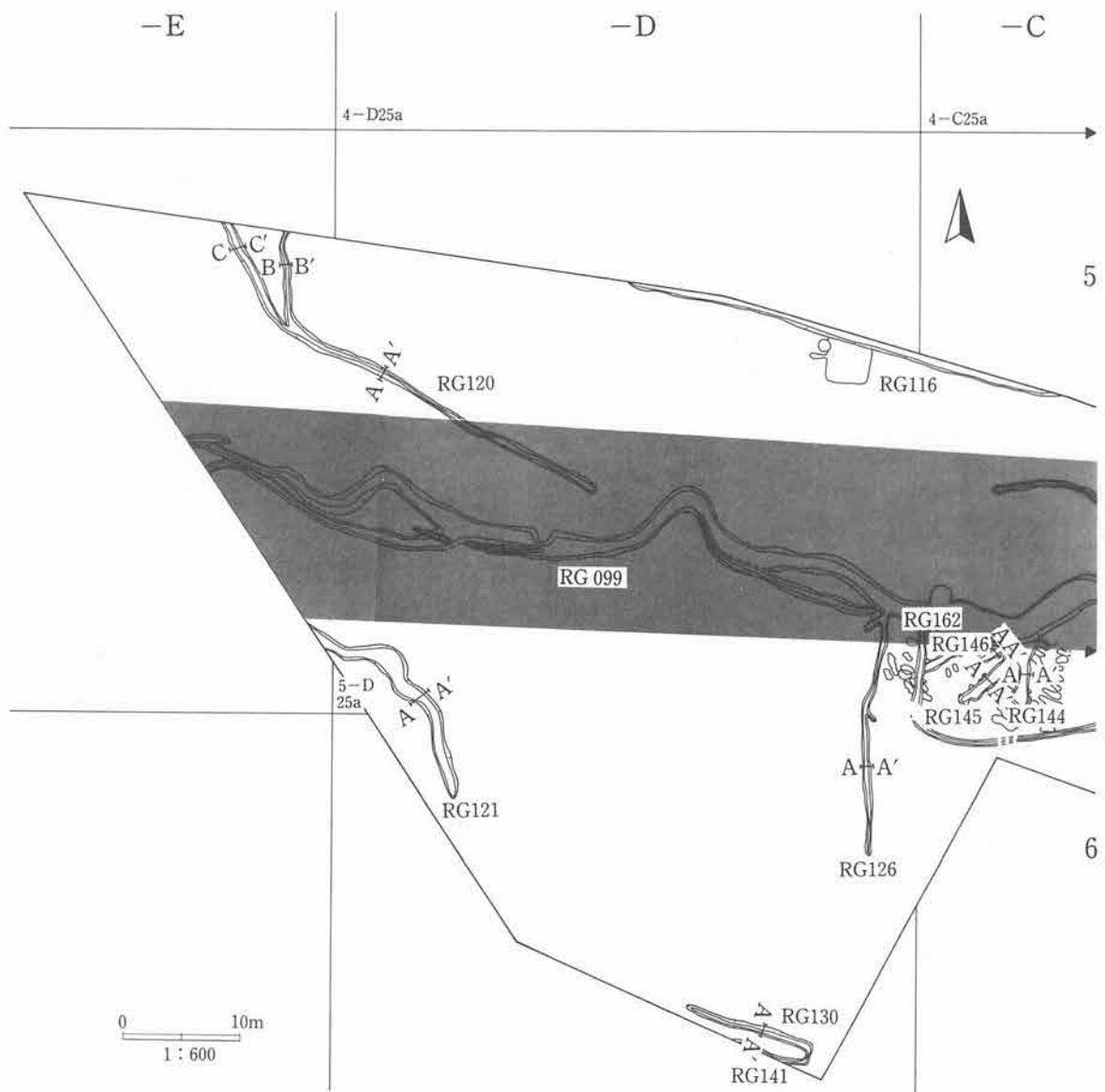
第332図 西側調査区 RG 溝跡(3)



- |                                      |   |
|--------------------------------------|---|
| <p>RG160<br/>L=121.200m<br/>A A'</p> | <p>1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂粒・粘土含む</p>   |
| <p>RG128<br/>L=121.100m<br/>A A'</p> | <p>1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり 砂質(径0.5~0.8cm大)粒状に混入<br/>2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂質混入</p>          |
| <p>RG128<br/>L=121.100m<br/>B B'</p> | <p>1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂質(径0.5~0.8cm大)粒状に混入<br/>2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂質混入(RG128埋土)</p> |
| <p>RG161<br/>L=121.100m<br/>A A'</p> | <p>1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 下層に砂・小礫含む</p>   |
| <p>RG111<br/>L=121.400m<br/>A A'</p> | <p>1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 砂粒含む</p>  |



第333図 南側調査区 RG 溝跡(1)



第334図 南側調査区 RG 溝跡(2)

南側調査区 (第 333～335 図)

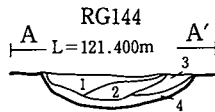
RG 144 溝跡 (第 334・335 図、写真図版 190)

〈位置・重複関係〉 南側調査区の 5-C 区に位置する。R Z 008 波板状凹凸遺構を切り、RG 145 溝跡、RG 099 溝跡に切られる。〈規模・方向〉 幅 1.60 m、深さ 18 cm、長さ 6.00 m である。南から北に延びている。幅は一定でなく、南側の方が広く北側は狭い。

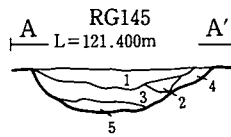
〈埋土〉 褐鉄や砂を含む褐灰色粘土や黒褐色～暗褐色土である。

〈遺物・時期〉 遺物は出土しなかった。時期は不明な点が多いが、平安時代と思われる RG 099 溝跡に切られていることから、平安時代以前の溝と考えられる。本溝跡は RG 145・146・162 溝跡と埋土や波板状凹凸遺構を切っていることなどの共通点が多い。おそらく同じような時代、性格の溝と思われる。波板状凹凸遺構に関連する施設の可能性もある。 (金子)

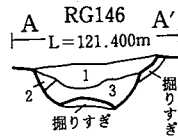




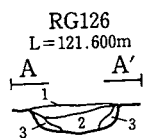
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 褐鉄含む
- 2. 10YR4/1 褐灰色土 粘性に富む 褐鉄含む
- 3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富む 砂質土少量混入
- 4. 10YR3/2 黒褐色砂質土 粘性なし やや酸化



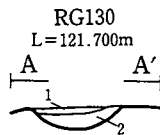
- 1. 10YR3/2 黒褐色粘土質土 粘性に富む 褐鉄少量含む
- 2. 10YR3/3 暗褐色粘土質土 粘性に富む 砂粒含む
- 3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性に富むが砂質 締まりなし 褐鉄多量含む
- 4. 10YR4/4 褐色粘土 粘性に富む
- 5. 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし 堅く締まる 砂層底面に褐鉄層



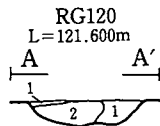
- 1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 黄褐色土粒少量混入 褐鉄含む
- 2. 10YR4/6 褐色土 粘性あり 締まりなし 壁崩壊土
- 3. 10YR3/2 黒褐色粘土 粘性あり 締まりなし 砂粒大量に含む



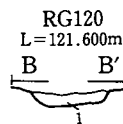
- 1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり 砂質土・微量の粘土含む
- 2. 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性ややあり 粘土・多量の砂質土多量含む
- 3. 10YR3/3-3/4 暗褐色砂質土 粘性ややあり 粘土・多量の砂質土多量含む



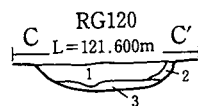
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 締まりなし 混入物少ない層
- 2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 黄褐色土粒・砂質シルト・灰白色火山灰少量混入



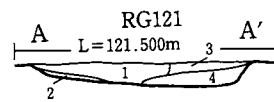
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性あり 褐色砂質土(10YR4/6)がブロック状で混入
- 2. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性あり 粘土多量含む



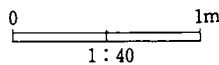
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり



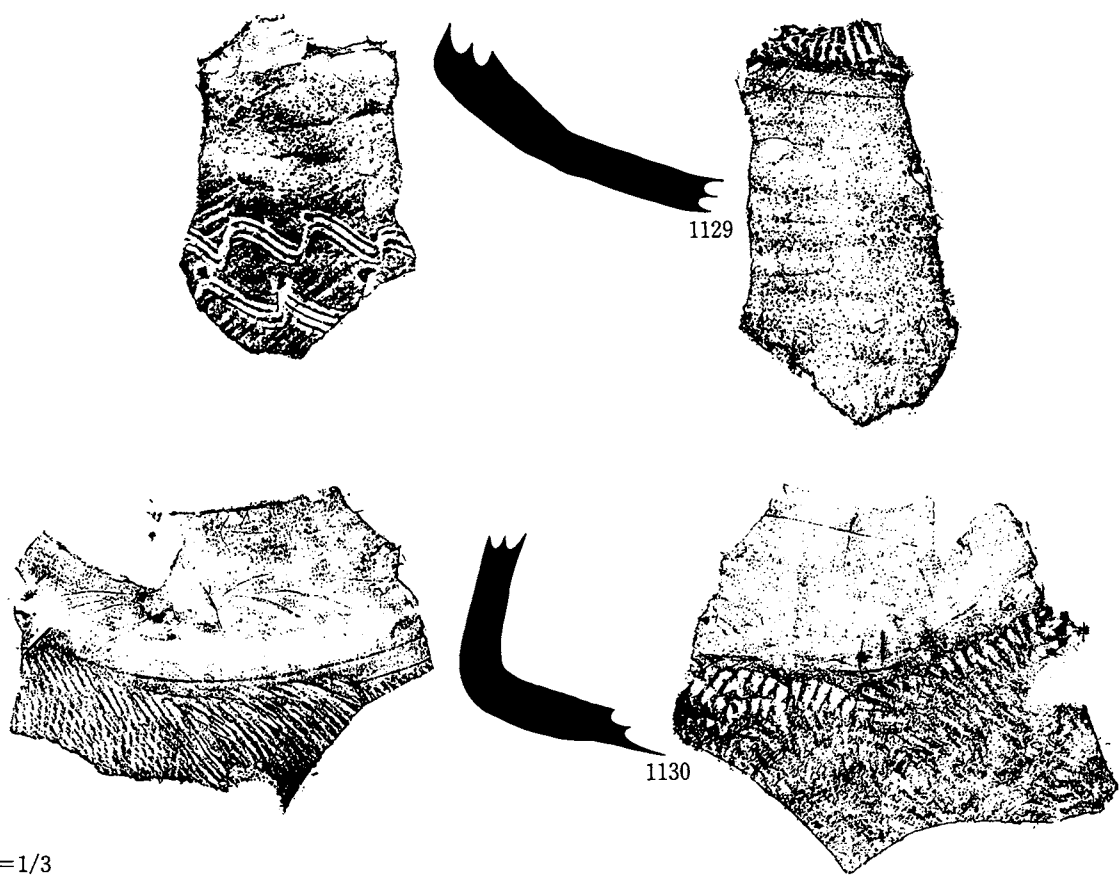
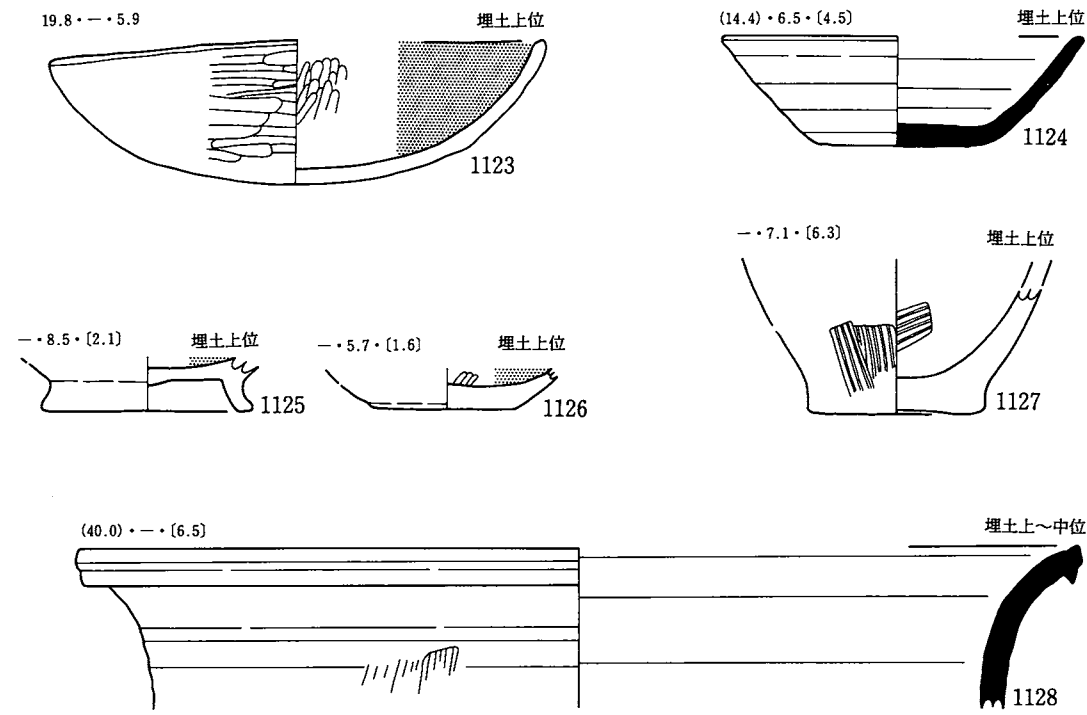
- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり
- 2. 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性ややあり 粘土含む
- 3. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性ややあり 粘土・砂土含む



- 1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり 黄褐色粘土・攪乱含む
- 2. 10YR4/6 褐色砂質土 粘性ややあり 粘土含む
- 3. 10YR3/2 黒褐色砂質土 粘性ややあり 粘土微量含む
- 4. 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性ややあり 粘土微量含む



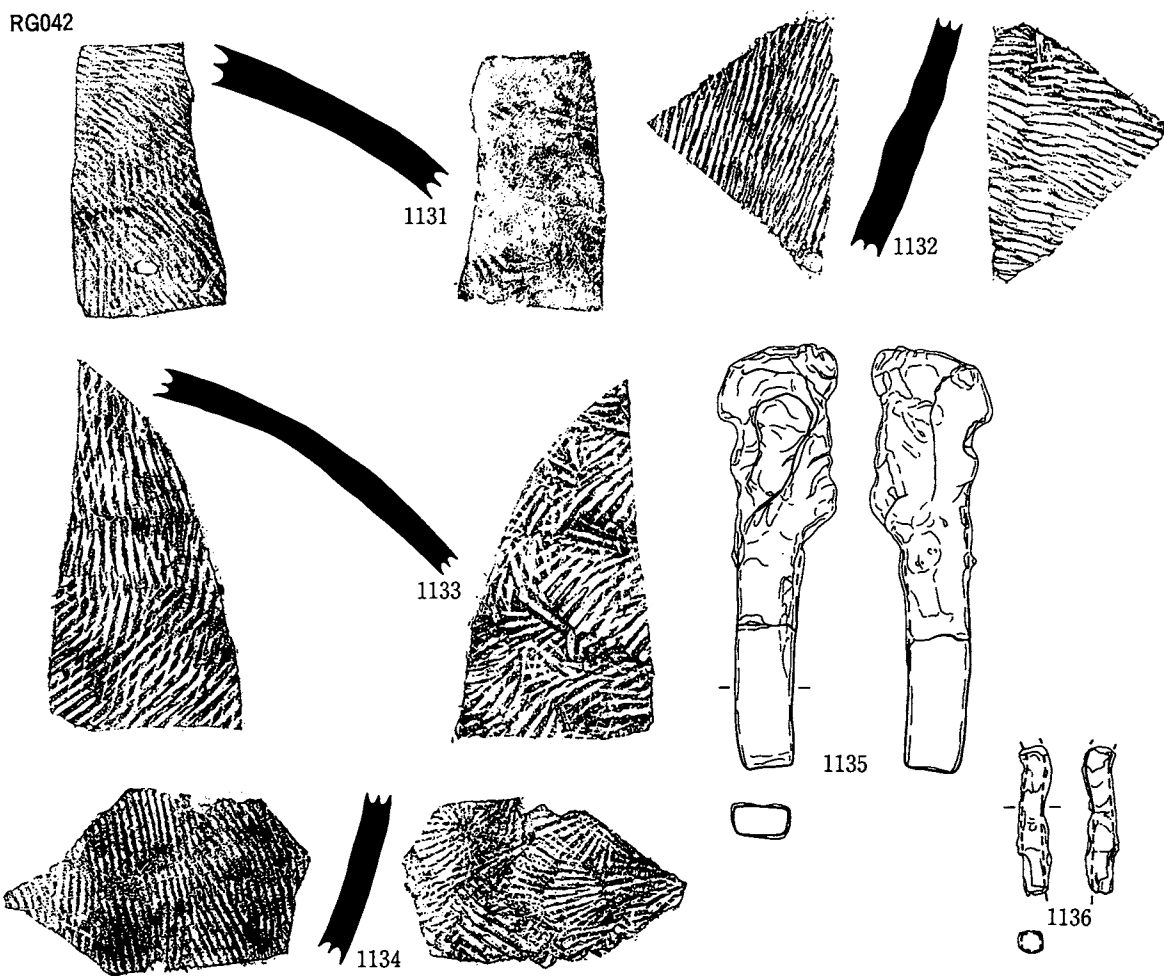
第335図 南側調査区 RG 溝跡(3)



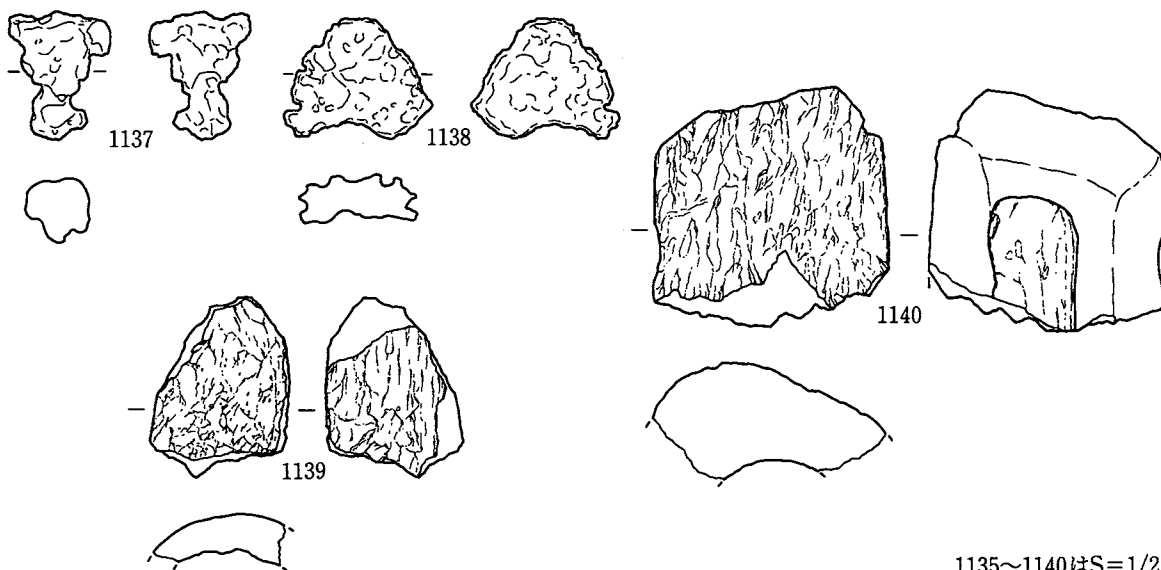
S=1/3

第336图 RG042掘出土遺物(1)

RG042

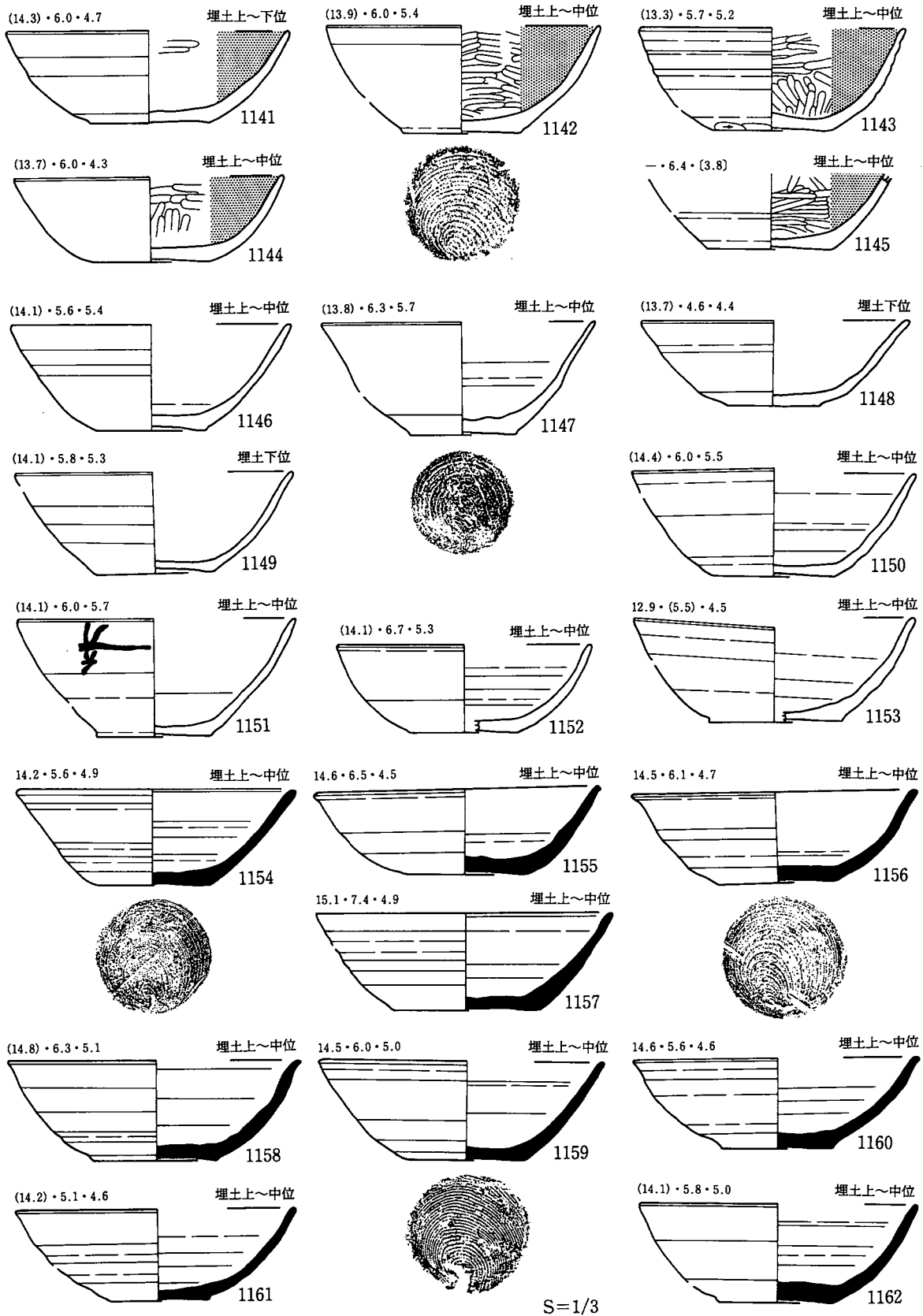


RG067

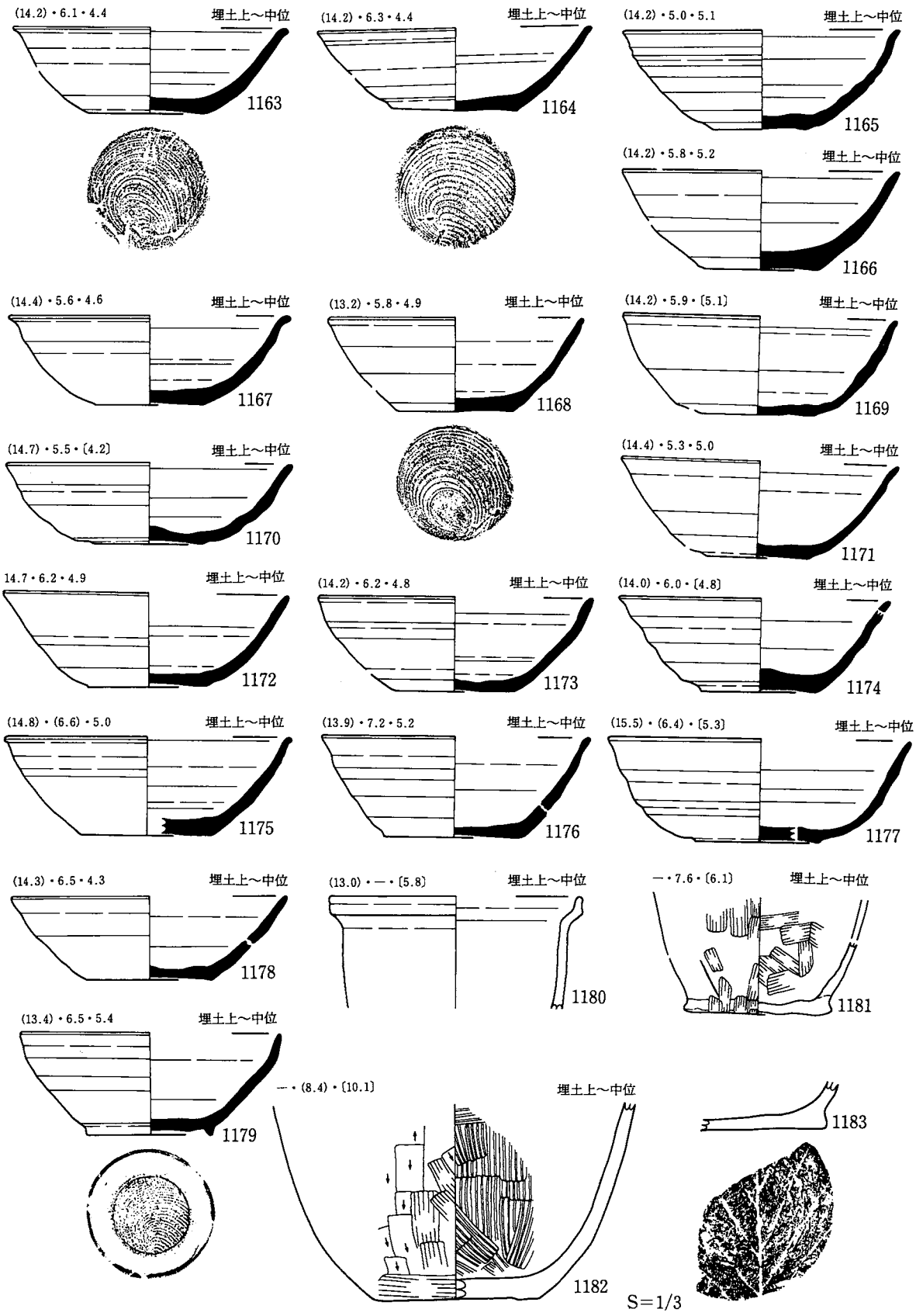


1135~1140はS=1/2  
 1131~1134はS=1/3

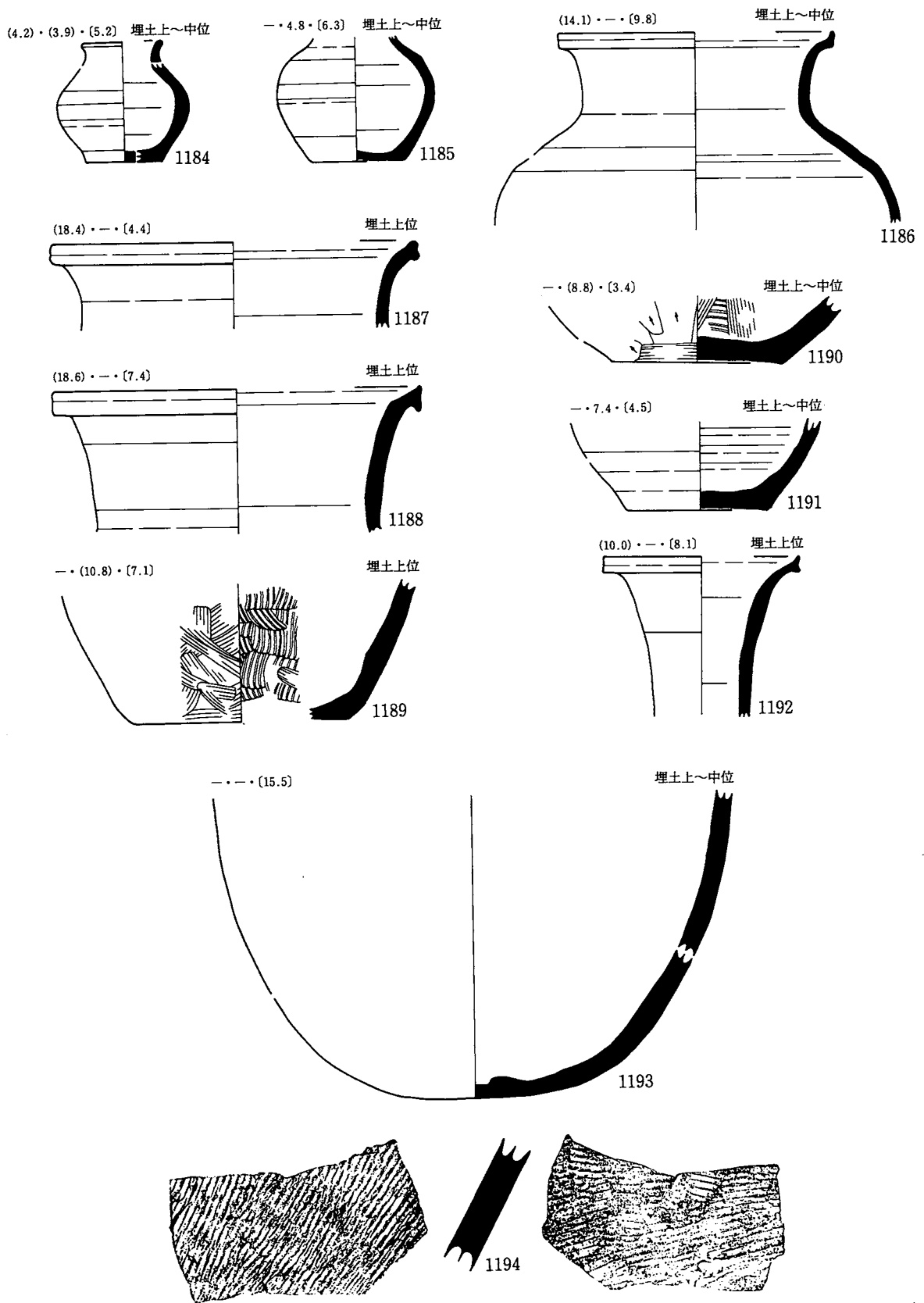
第337図 RG042堀(2)・067溝跡出土遺物



第338図 RG045溝跡出土遺物(1)

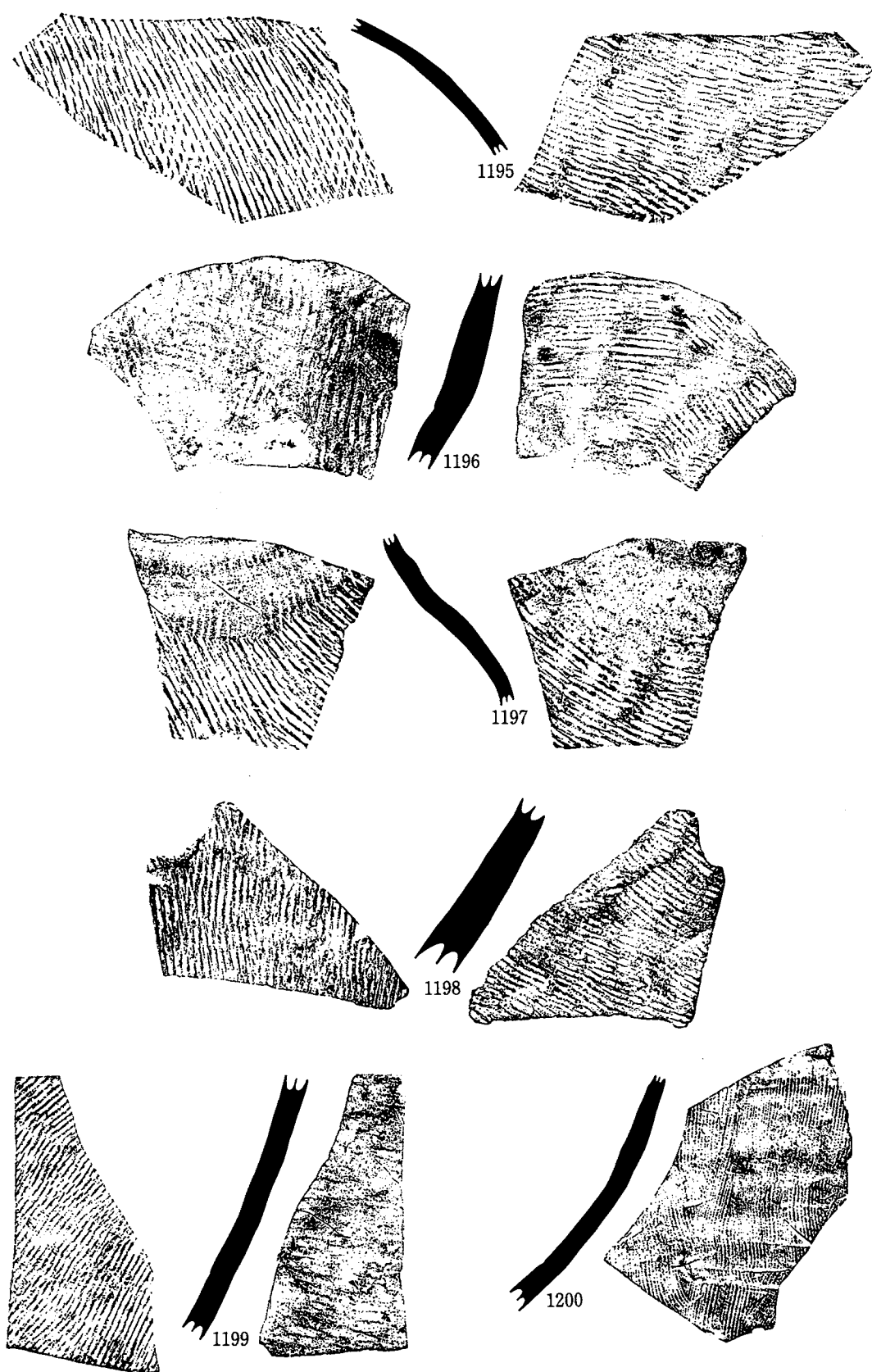


第339図 RG045溝跡出土遺物(2)



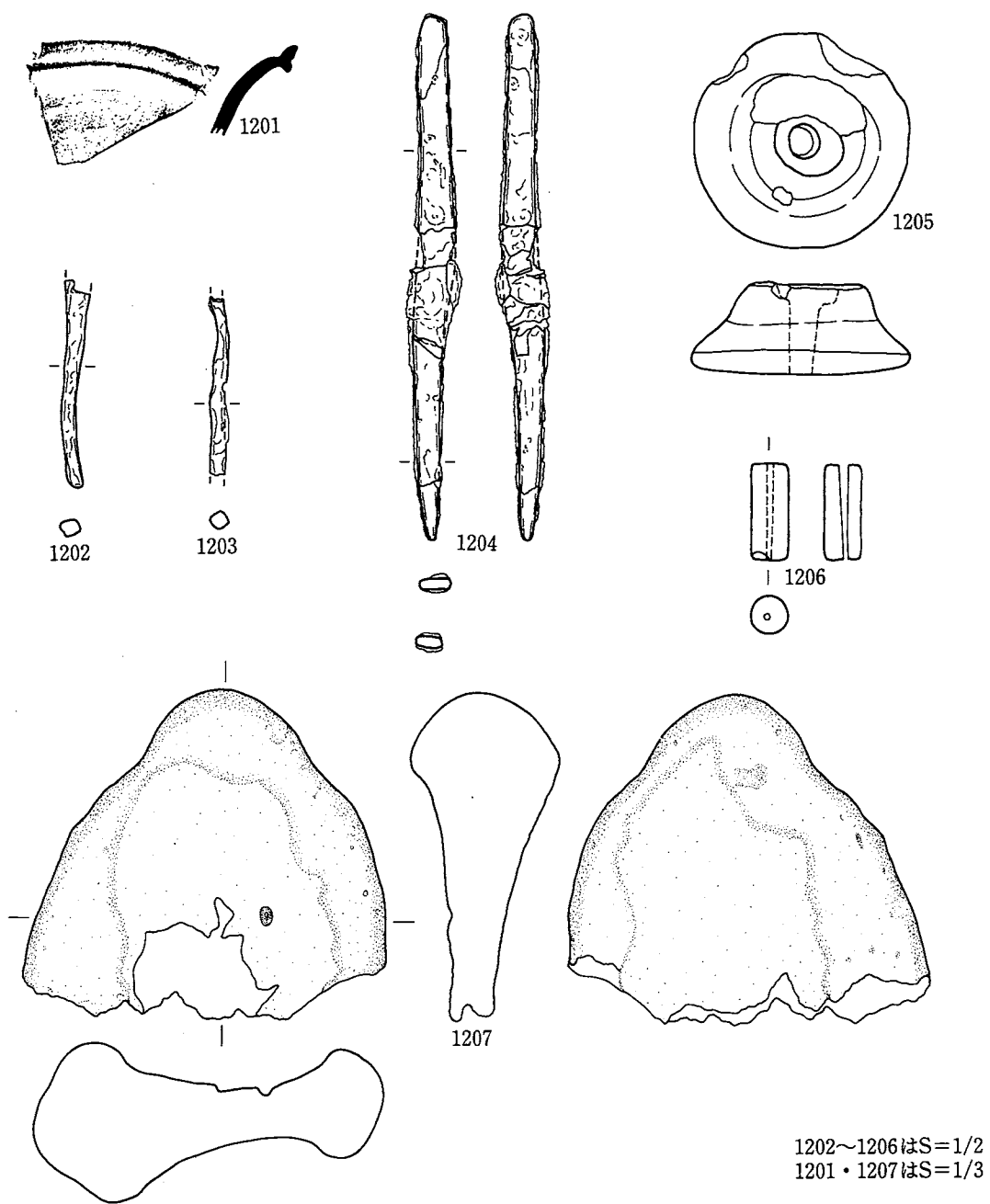
S=1/3

第340図 RG045溝跡出土遺物(3)



S=1/3

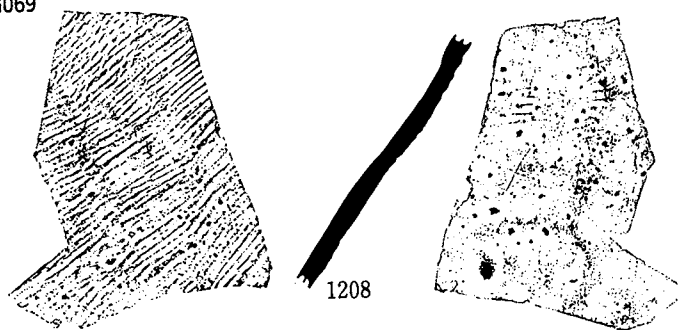
第341图 RG045沟迹出土遗物(4)



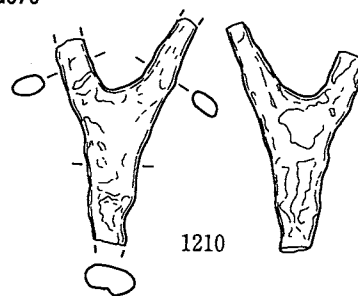
第342図 RG045溝跡出土遺物(5)



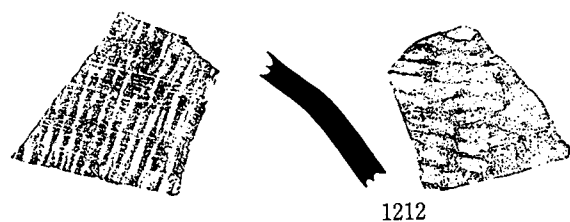
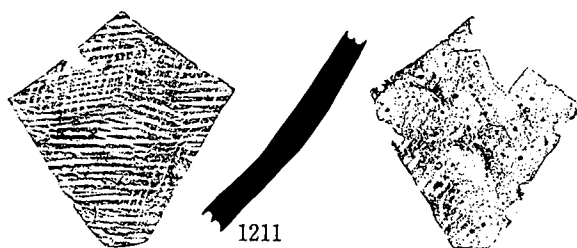
RG069



RG070



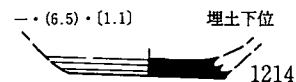
RG072



RG076

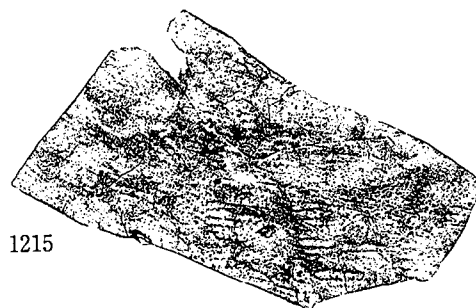
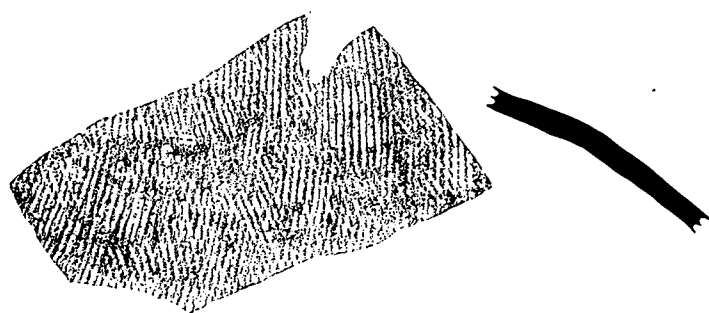


1213

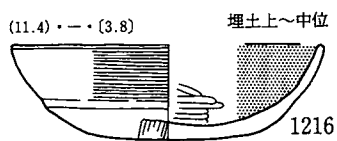


埋土下位

RG097



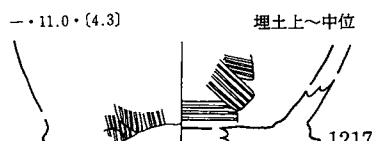
RG106



(11.4) · — · (3.8)

埋土上～中位

1216



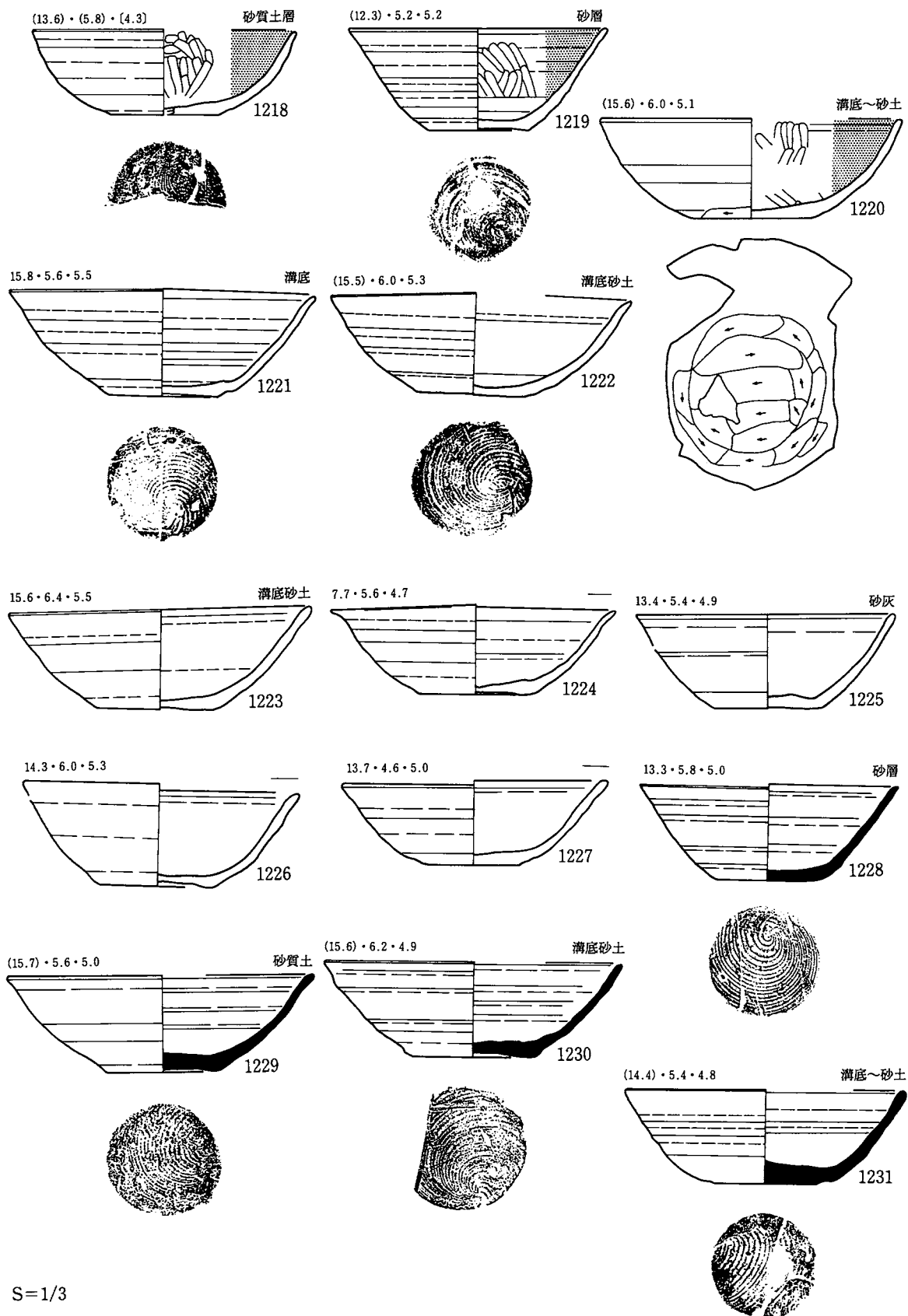
— · 11.0 · (4.3)

埋土上～中位

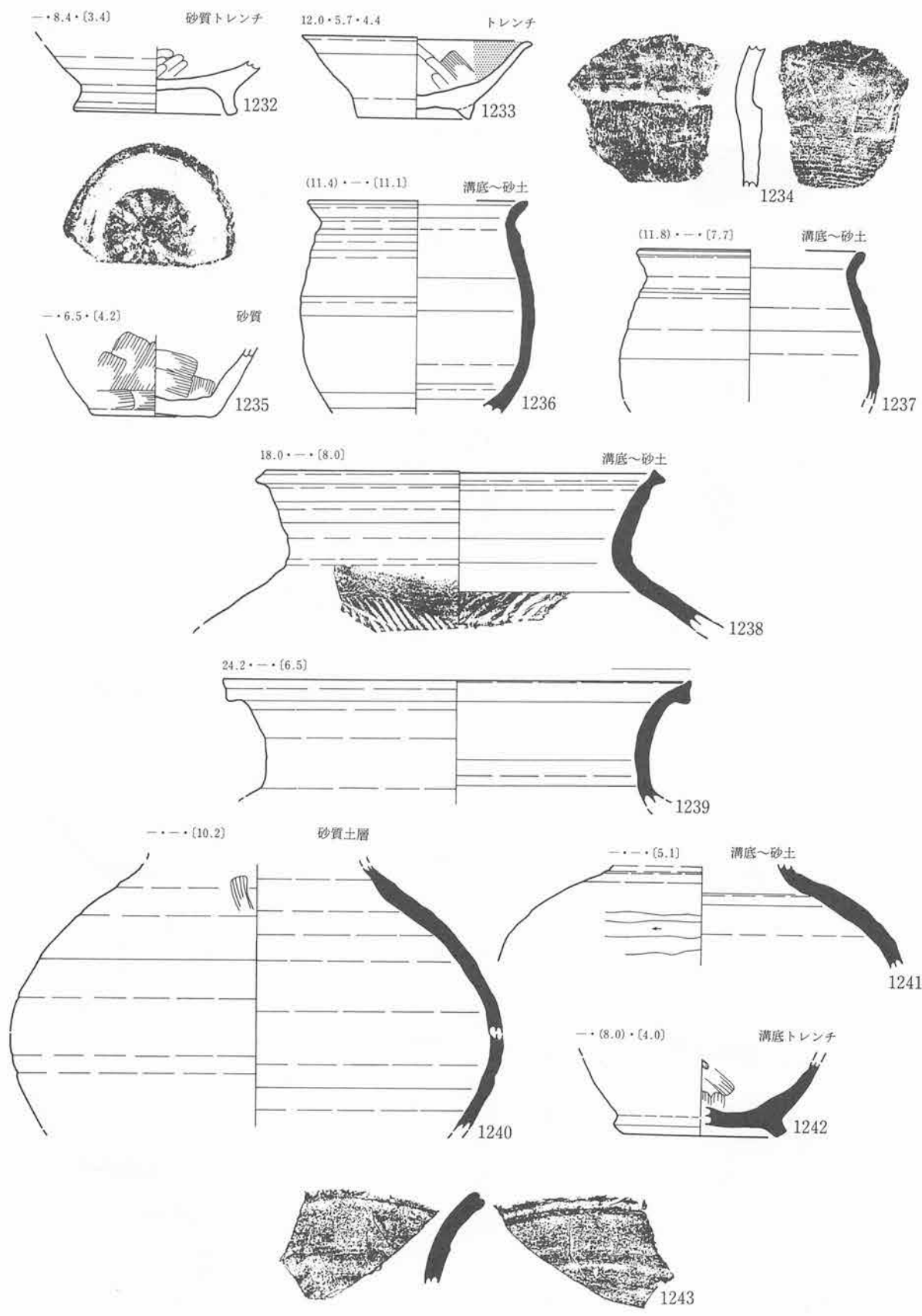
1217

1210 · 1213はS=1/2  
他はS=1/3

第343図 RG069 · 070 · 072 · 076 · 097 · 106溝跡出土遺物

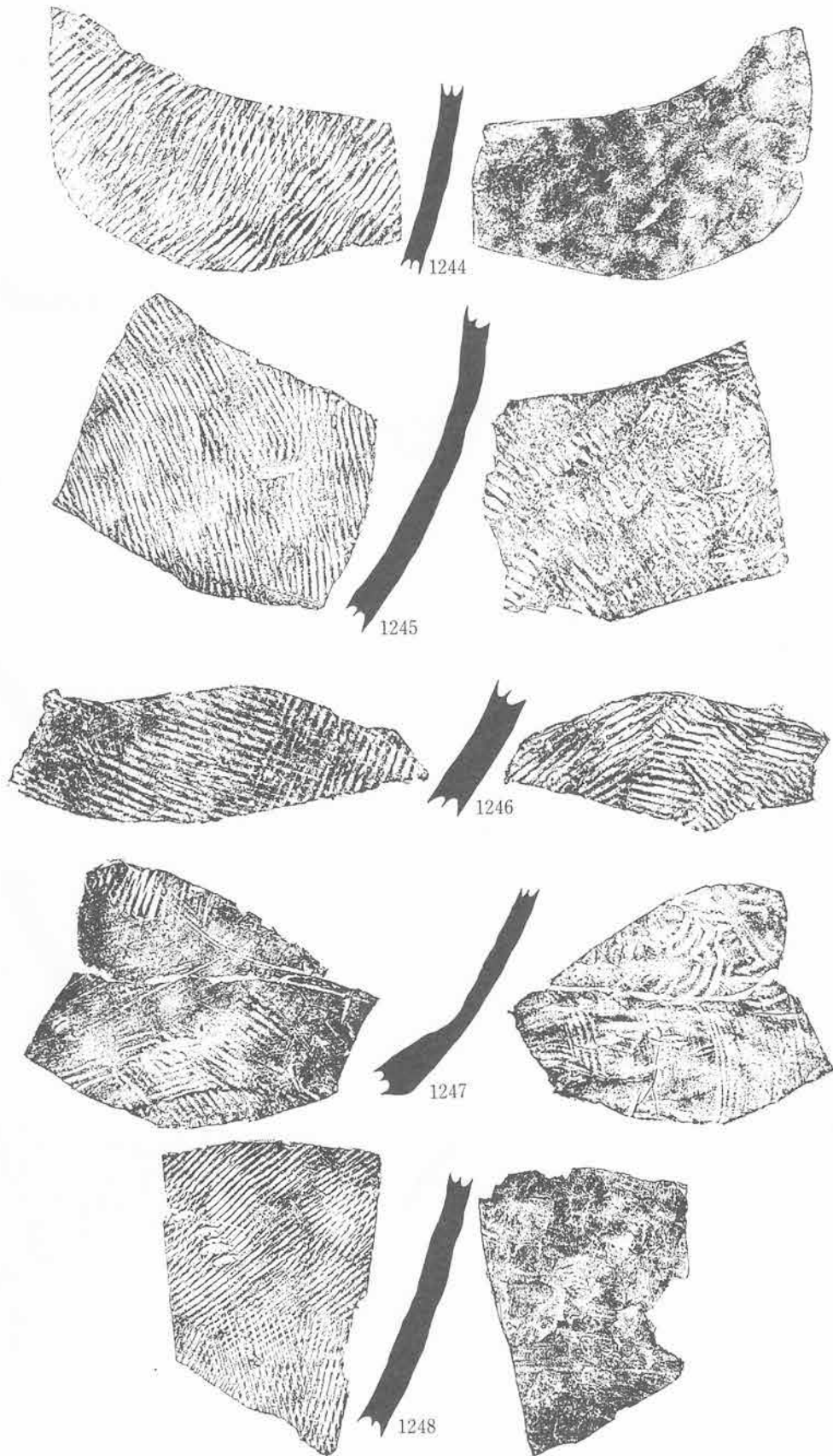


第344図 RG099溝跡出土遺物(1)



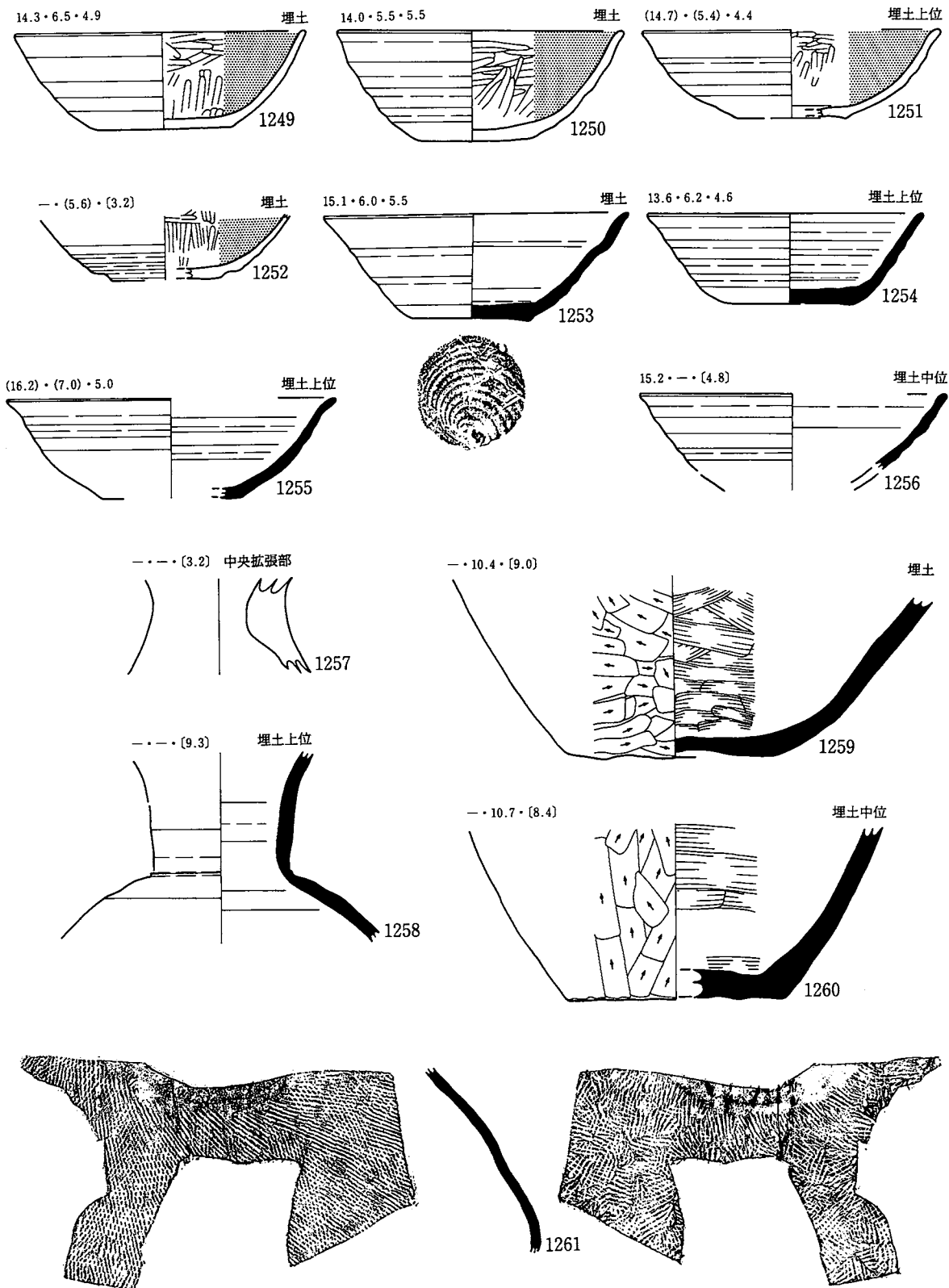
第345図 RG099溝跡出土遺物(2)

S=1/3



第346图 RG099溝跡出土遺物(3)

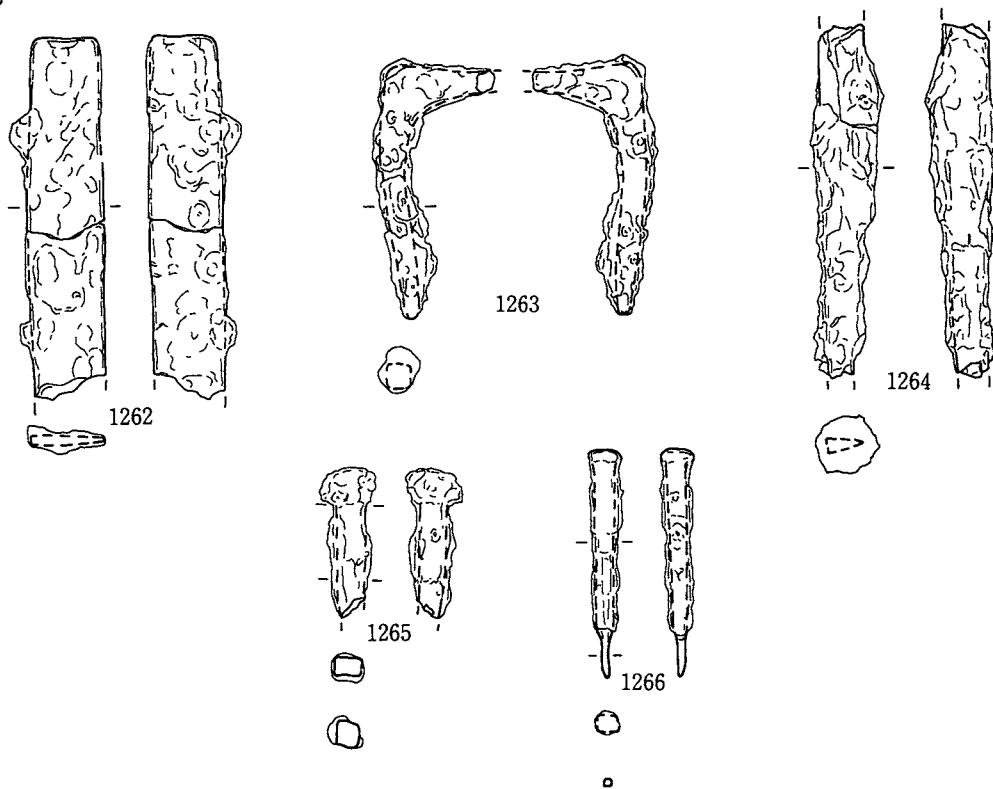
S=1/3



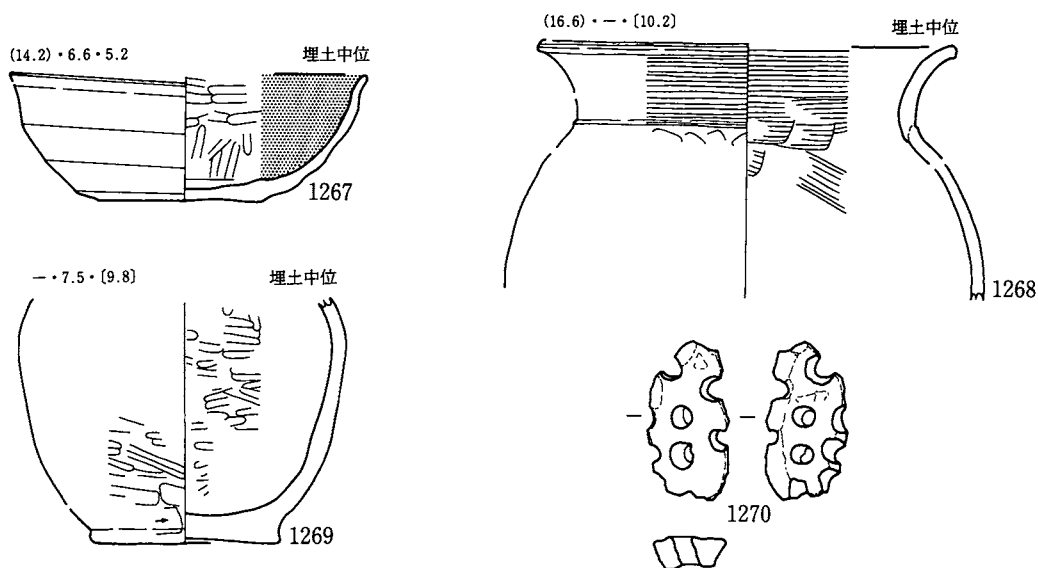
S=1/3

第347図 RG135溝跡出土遺物(1)

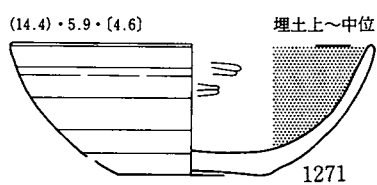
RG135



RG152



RG168



1262~1266・1270はS=1/2  
他はS=1/3

第348図 RG135(2)・152・168溝跡出土遺物

第5表 溝跡一覧(1)

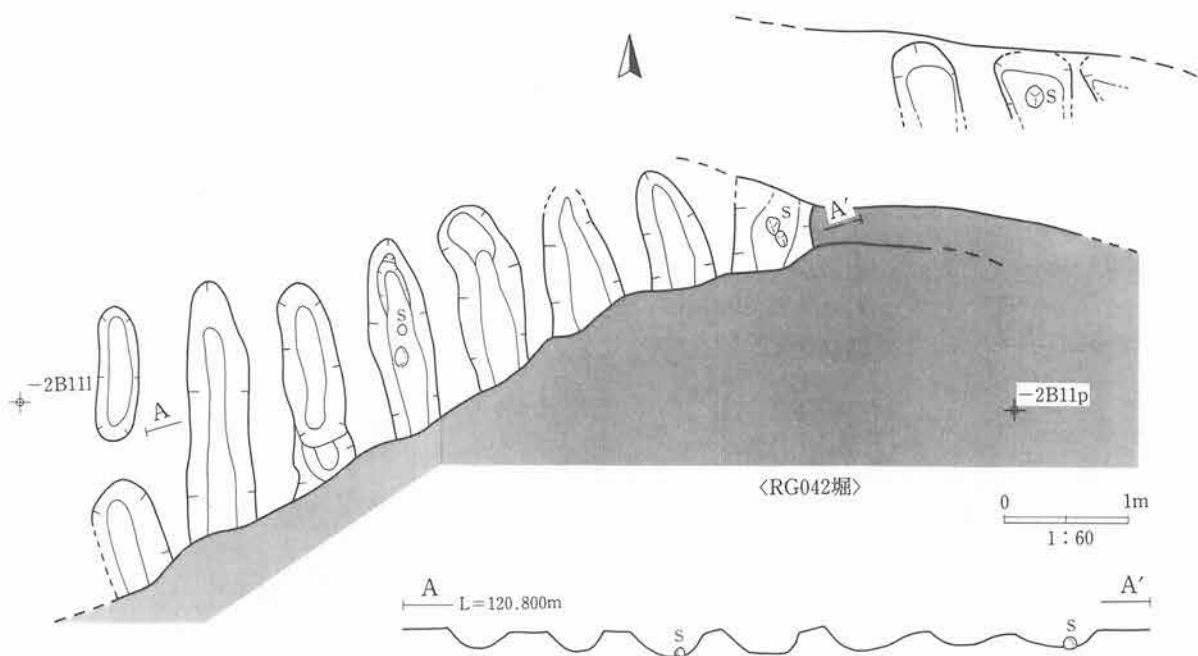
No	遺跡名	上幅 cm	下幅 cm	深さ cm	長さ m	方 向	検出面	位 置	重 複 関 係 ・ 出 土 遺 物	時 期	図 版	写 真
1	RG026	37	21	5	28.1	東北東～西南西		-2-A	RG135に切られている	不明	326・327	169
2	RG039	80	40	?	[19.2]	南東～北西		-2-A	RG310と重複する	〃	326	—
3	RG042	415	264	73	[35.5]	南南東～北北西	IV層下位	-2B～-1B	第15調査の続きの中世の環濠、RG045を切っている	中世	318・319	166
4	RG043	126	38	60	[19.4]	北東～南西		1C	RG042に切られ、RG045・151を切っている	不明	321・322	167
5	RG045	340	165	75	[46.2]	南東～北西		-1C～1C	RG043に切られ、RG151を切っている	平安	〃	〃
6	RG065	93	55	23	[12.1]	南西～北東		-1C～-1-B	埋土から須恵器破片出土	〃	326・328	179
7	RG066	68	43	20	[20.4]	南南西～北北東		-2C～-1-B	埋土から土師器破片出土	古代	〃	〃
8	RG067	78	64	11	[14.4]	東～西?		1-C～1-B	RG068を切っている 直角に二度屈曲 鉄滓、羽口、土師器片出土	〃	326・329	179・180
9	RG068	84	66	17	[29.4]	東～西		1-B	RG067・068・149・RA157に切られている	〃	〃	180
10	RG069	90	28	45	[43.5]	東～西		-1-B～-1-A	RG072を切っている 須恵器出土	平安	326・328	178
11	RG070	49	18	24	[22.6]	東～西		-1-B～-1-A	RG072を切っている 雁又鏝出土	古代	〃	〃
12	RG072	90	45	13	[21]	東南東～西北西		-1-A	RG069・070に切られている 須恵器 出土	平安	〃	〃
13	RG073	70	30	?	[20.7]	東北東～西南西		-2-A～-2A		不明	323	—
14	RG074	64	30	24	[14.4]	南西～北東		-2B	RG106を切っている	〃	323・324	170
15	RG075	90	34	27	[11.2]	南～北		-2A	RG076を切っている	〃	323・325	〃
16	RG076	66	30	17	[13.4]	南南東～北北西		-2A	RG075に切られている	平安	〃	〃
17	RG077	96	44	45	[34.1]	南南西～北北東		-2B	RG045に切られ、RA213・RG137を切っている	〃	323・324	171
18	RG078	78	22	?	[7.7]	北東～南西		-2B	RA193・RG097を切っている	不明	323	〃
19	RG079	70	40	?	[3.6]	東北東～西南西		-2B	RG078に切られ、RA193を切っている	〃	〃	〃
20	RG080	113	85	16	[14.8]	南南西～北北東		3-A～3A	RG082を切る 新しい埋土	近世以降	330・332	187・188
21	RG081	211	138	33	[38.8]	南西～北東		3-A～3A	RG084を切る? (埋土類似) 諏訪神社を囲む堀 土師器片数点出土	中～近世	320	186・187
22	RG082	58	33	13	[12.8]	南南西～北北東		3-A～3A	北へ向かうにつれ、徐々に浅くなり、RG081との新旧は不明	不明	330・332	187・188
23	RG083	225	94	60	[18.4]	南西～北東		3-A～3A	RA140の煙出しを切る 土師器片少量出土	中～近世	320	186・187
24	RG084	60	29	?	[3.8]	東～西		3A	RG081と重複するが、埋土が類似のため不明	不明	330	187
25	RG085	55	48	20	[28.8]	南東～北西		3-B	RD100を切る 一部途切れる	古代	330・332	186
26	RG086	57	52	7	[41.4]	東南東～西北西		3-B～3-A	RG115に切られている 2ヶ所途切れる RG087と埋土類似	〃	〃	184
27	RG087	59	46	9	[15.4]	東南東～西北西		3-B	RG096と同じ(西半分) RG086と埋土類似 RG115・094に切られる	〃	〃	〃
28	RG088	59	33	29	[60.4]	南南東～北北西		2-B～3-B	RA146・RG089・115に切られている 緩くカーブして西方向へ	奈良以前	330・331	182
29	RG089	49	20	23	[43.1]	東～西		2-B～2-A	RG088RE012・015を切り、RD108に切られる 新しい埋土	近世	〃	181・182
30	RG090	74	61	17	[5.1]	東～西		2-B	水田畦跡? RG091とつながる? 褐鉄含む	近世以降	〃	181
31	RG091	85	?	?	[2.1]	東～西		1-B	水田畦跡? RG090とつながる? 褐鉄含む	〃	330	182
32	RG092	49	37	6	[13.1]	東～西		2-B～2-A	RG093に切られている	不明	330・331	181
33	RG093	48	23	9	[2.8]	南～北		2-A	RG092を切っている	〃	〃	〃
34	RG094	69	47	10	[27.3]	東南東～西北西		3-A	RG096を切り、RG095と合流する 水田畦跡? 新しい埋土	近世以降	330・332	185
35	RG095	60	15	?	[17.2]	南南西～北北東		3-A	RG094と合流する 新しい埋土 水田畦跡?	〃	330	186
36	RG096	73	56	14	[19.3]	東南東～西北西		3-A	RG087と同じ(東半分) RG094・115に切られている RG086と埋土類似	古代	330・332	184
37	RG097	61	58	8	[11]	東南東～西北西		3-A	RG094に切られる 須恵器、土師器破片出土	平安	〃	185
38	RG099	195	98	?	[151.3]	東～西		5-E～5-B	蛇行 自然の流路 壁際に十和田a降下火山灰? 遺物多量	〃	333	—
39	RG101	160	65	?	[14.1]	東北東～西南西		-2-A～-2A	RG136と重複する	〃	323	—
40	RG102	110	65	?	[16.2]	東北東～西南西		-2-A～-2A	RG134・136・166と重複する	〃	〃	—
41	RG103	36	19	13	[6.2]	南南東～北北西		-2-B	RG152を切っている	不明	326・327	171・172
42	RG104	40	23	9	[19.3]	東北東～西南西		-1-B～-2-A	RA181を切っている	〃	〃	〃
43	RG105	110	56	24	[22]	東北東～西南西		-2B		〃	323・324	172
44	RG106	148	71	26	[53.7]	東～西		-2B	RG045・074・140に切られ、RA218・RG107を切っている	平安	〃	172・173
45	RG107	64	48	14	[15]	南西～北東		-2B	RG042に切られ、RG108・109を切っている	〃	〃	173
46	RG108	43	41	7	[2]	南南西～北北東		-2B	RG042・107・108に切られている	〃	〃	174
47	RG109	60	46	10	?	?		-2B?	RG107に切られている	〃	〃	〃
48	RG110	41	28	10	[6.5]	南南西～北北東		-2B	RA191と重複する	〃	〃	174・175
49	RG111	44	36	7	[29.5]	東北東～西南西		5-C	RG099・RZ009を切る RG117とつながる? カーブする	不明	333	189
50	RG112	31	24	11	[29.1]	南南東～北北西		2-B	新しい埋土 水田畦跡?	近世以降	330・331	182・183
51	RG113	40	29	13	[7.5]	南南東～北北西		2-B	南へ向かい浅くなり消える RG114と埋土、方向が同一	不明	〃	183

第6表 溝跡一覧(2)

No	遺跡名	上幅 cm	下幅 cm	深さ cm	長さ m	方 向	検出面	位 置	重 複 関 係 ・ 出 土 遺 物	時 期	図 版	写 真
52	RG114	51	43	10	10.1	南南東～北北西		2-B	RG115に切られている RG113と埋土、方向が同一	不明	330・331	183
53	RG115	108	75	22	70.9	南南東～北北西		2-B～3-A	RA146・RG086・088・096・114を切る 新しい埋土 直角に曲がる	近世以降	〃	182・183
54	RG116	85	65	?	38.7	東南東～西北西		5-D～5-C	RA147を切る 褐鉄を下層に多く含む 木椀出土	近世	334	—
55	RG117	80	40	?	11.2	南～北		5-C	RG099と重複する	不明	333	—
56	RG120	75	59	15	41.4	東南東～西北西		5-E～5-D	二手にわかれる 土師器出土	平安	334・335	191
57	RG121	119	106	11	21.6	南東～北西		5-D～6-D	蛇行する 浅く、壁もはっきりしない 自然の流路	不明	〃	〃
58	RG122	80	36	?	40.7	東～西		2-B～2-A	RG123と合流する 新しい埋土 水田畦跡? 現代の畦と平行	近世以降	330	185
59	RG123	69	47	16	28.5	南南西～北北東		2-A～3-A	RG122・124と合流する 新しい埋土 水田畦跡?	〃	330・332	〃
60	RG124	65	35	?	21.8	東～西		3-A	RG123と合流する 新しい埋土 水田畦跡?	〃	330	177
61	RG126	48	39	15	22.3	南～北		5-D～6-D	粘土、砂を含む RG099と重複(新旧不明)	不明	334・335	192
62	RG128	41	30	8	38.9	南南東～北北西		5-B	RG147・148と重複する	〃	333	188・189
63	RG130	48	33	12	11.7	東南東～西北西		6-D	RG141と重複する 底～壁に十和田a降下火山灰 RG141を切る	平安	334・335	191・192
64	RG131	315	150	?	20.6	東南東～西北西		-2B	RG042に切られている	〃	323	175
65	RG134	70	30	?	5.9	東北東～西南西		-2A	RG102と重複する	〃	323	—
66	RG135	180	65	51	59.5	東北東～西南西		-2-B～-2-A	RG154・155・156に切られている	〃	326・327	175
67	RG136	80	35	?	6.6	南～北		-2A	RG101・102と重複する	不明	〃	〃
68	RG137	92	68	20	10.3	東南東～西北西		-2B	RG042に切られている	平安	323・325	175・176
69	RG138	70	30	?	10	東～西		-1A	RA198に切られ、RD096・143を切っている	不明	323	—
70	RG139	35	20	11	13.5	南西～北東		1B		〃	321・322	168
71	RG140	70	43	18	21.3	南～北		-2B	RG042に切られ、RA214・RG106を切っている	平安	323・324	176
72	RG141	55	15	?	7.1	東南東～西北西		6-D	RG130に切られる	平安以前	334	192
73	RG144	160	120	17	5.6	南～北		5-C	RG099・RG145に切られ、RZ008を切る 埋土に褐鉄を含む	〃	334・335	190
74	RG145	97	59	21	7.7	南西～北東		5-C	RZ008・RG144を切る RG144・146と同じ土	〃	〃	〃
75	RG146	67	40	23	3.9	南西～北東		5-C	RG099に切られ、RG144・145と重複する	〃	〃	〃
76	RG147	?	?	?	3.1	東北東～西南西		5-B	RG128を切る RD176との新旧は不明 RG148と埋土類似	不明	333	〃
77	RG148	?	?	?	2.1	東北東～西南西		5-B	RG128・RD177を切る RG147と埋土類似	〃	〃	〃
78	RG149	27	19	7	18.2	南南東～北北西		-1-B～-1-B	RG068を切っている	近世以降	326・329	180
79	RG150	78	57	16	5.2	南西～北東		-1-C	古代の埋土より明るい 新しい土	近世	326・328	179
80	RG151	162	45	60	5.1	南南西～北北東		1C	RG043・045に切られている	平安	321・322	168
81	RG152	168	128	30	11.1	南西～北東		-2-B		〃	326・327	—
82	RG153	92	45	23	3.6	南西～北東		-2-B	RG155を切っている	不明	326・327	176
83	RG154	46	23	23	15.5	南～北		-2-B～-1-B	RG155・156と重複する	〃	326・328	177
84	RG155	113	75	36	15.3	南～北		-2-B～-1-B	RG153に切られ、RG135を切り、RG154と重複する	〃	326・327	〃
85	RG156	37	29	10	15.7	南～北		-2-B～-1-B	RG135・154と重複する	〃	326～328	—
86	RG159	60	28	16	38.7	東～西		-1-B～-1-A	直角に曲がる RD209を切る RB006に切られる 一部途切れる	近世以前	326・328	179
87	RG160	45	36	10	13.1	南南東～北北西		5-B	RG147・148と合流する(同時?)	不明	333	188
88	RG161	72	36	7	21.3	南～北		5-B	一部途切れる	〃	〃	188・189
89	RG162	70	45	?	4.9	南西～北東		5-C	RG111・099・RZ009を切る 褐鉄を含む	平安以前	334	—
90	RG163	45	15	6?	8.5	東～西		1-B	東方向に向かうにつれ、消える	古代	326・329	180
91	RG164	75	67	14	6.7	南東～北西		1B	RD215に切られ、RG165を切っている	不明	321・322	168
92	RG165	37	25	6	2.2	東～西		1 B	RG164に切られている	〃	〃	169
93	RG166	100	45	?	6.6	南西～北東		-2-A	RG102と重複する	〃	323	—
94	RG167	15	?	?	2.8	南～北		1B		〃	326	—
95	RG168	74	52	24	5.7	東南東～西北西		-2A	RG042に切られている	平安	323・325	169
96	RG169	117	64	31	7.5	南西～北東		-2-B		不明	326・327	—
97	RG310	65	29	?	3.6	南東～北西		-2-A		〃	326	—
98	RG392	105	68	?	22.8	南東～北西		-2-A～-1-A	RG039と重複する	〃	〃	—

[ ] は現存値、( ) は推定値である。





第349図 RZ008波板状凹凸遺構

## 10. 波板状凹凸遺構

R Z 008 波板状凹凸遺構 (第 349 図、写真図版 193)

<位置・重複関係> 北側調査区-2 B区の中央部付近に位置している。南側は中世の R G 042 堀、北側が R G 106 溝跡と重複しており、新旧関係は (新) R G 042 堀→R G 106 溝跡→(旧) R Z 008 波板状凹凸遺構である。また、R G 106 溝跡は西側で R G 045 溝跡 (十和田 a 降下火山灰を堆積する) と重複し切られている。

<形状・規模> 浅い土坑が波板状に一行に 12 基並んでいる。土坑は堀と溝に切られている事から規模の全容が不明である。現存する規模は径 33~56 cm×0.60~2.00 m、深さが 12~20 cm 前後を測る。底面は丸味をもち堅く締まっている。

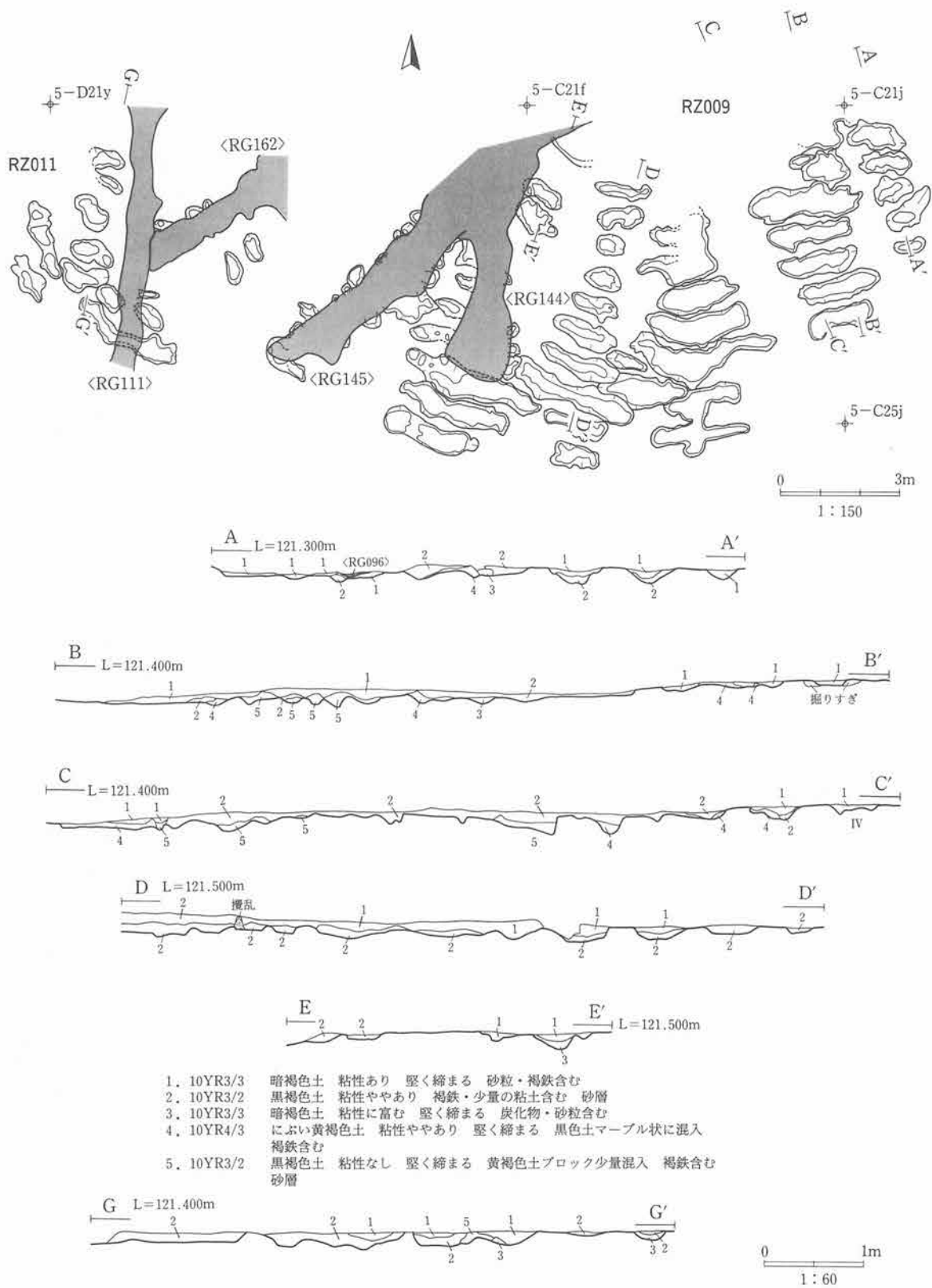
<埋土> 埋土は部分的に水酸化鉄を含む黒褐色シルト質土の単層で構成されている。

<遺物・時期> 遺物の出土がなく時期は不明であるが、R G 045・106 溝跡との遺構重複関係から平安時代もしくはそれ以前の可能性も考えられる。 (高橋)

R Z 009 波板状凹凸遺構 (第 350 図、写真図版 193・196)

<位置・重複関係> 調査区南側の 5-C~6-C 区の境付近に位置する。R G 144 溝跡、R G 145 溝跡と重複し、新旧関係は (新) R G 144・145 溝跡→R Z 009 波板状凹凸遺構である。なお、第 350 図には図化されていないが、本遺構のすぐ北側には自然の流路と思われる R G 090 溝跡が西から東へと流れていて、本遺構の北側一部を切っている。また、本遺構はごく浅い土坑が波板状に群となって存在している。単位は不明であるが、本群の 2.50 m ほど西側、5-C 区と 5-D 区の境付近にも同様の群が見られるので、便宜上本群を R Z 009 波板状凹凸遺構、西側の群を R Z 011 波板状凹凸遺構と呼ぶことにした。

<形状・規模> 径 30~90 cm×0.68~3.2 m、深さ 5~35 cm の不整な浅い土坑が長径方向に平行に、南北



第350図 RZ009・011波板状凹凸遺構

に6列並んでいる。一列には6～10基の土坑が並んでいる。ところどころ密接している部分もあり、一つ一つの土坑が、何らかの目的で穿たれたというより、全体で用をなしていたと考えられる。底面は凹凸がある。R G 009 土坑に向かって6列がやや扇形に配されている。それぞれの列の新旧関係などは調査の際の不幸で観察していない。

<埋土> 場所により1層から3層に細分される。堅く締まった砂質の暗褐色土や黒褐色の砂層である。褐鉄を含んでいる部分もある。

<遺物・時期> 遺物は出土していない。本遺構は平安時代と考えられるR G 099 溝跡に一部を切られているので、平安時代以前に属すると考えられ、道路の舗装跡の可能性が高い。(金子)

#### R Z 011 波板状凹凸遺構 (第350図、写真図版193)

<位置・重複関係> 調査区南側の5-C区、5-D区の境付近に位置する。R G 162 溝跡とR G 111 溝跡と重複しており、新旧関係は(新)R G 111 溝跡→R G 162 溝跡→(旧)R Z 011 波板状凹凸遺構である。

<形状・規模> 本遺構も浅い土坑が群となって存在している。合計16基の土坑が配列がやや乱れてはいるが、2列に並んでいるようである。東側のR Z 009 波板状凹凸遺構ほどは整然としていない。土坑は径15～55 cm×0.75～2.87 m、深さは8～33 cmである。底面は平坦でなく、凹凸がある。

<埋土> 堅く締まる砂質の黒褐色土、あるいは砂層である。部分的に褐鉄を含む。

<遺物・時期> 遺物は出土していない。時期は不明であるが、R Z 009 波板状凹凸遺構と同様の平安時代以前の可能性がある。同じく、道路の舗装跡の可能性が高い。(金子)

## 11. 楕円形周溝

東側調査区からR Z 006・007 楕円形周溝が2基検出されている。

#### R Z 006 楕円形周溝 (第351図、写真図版194)

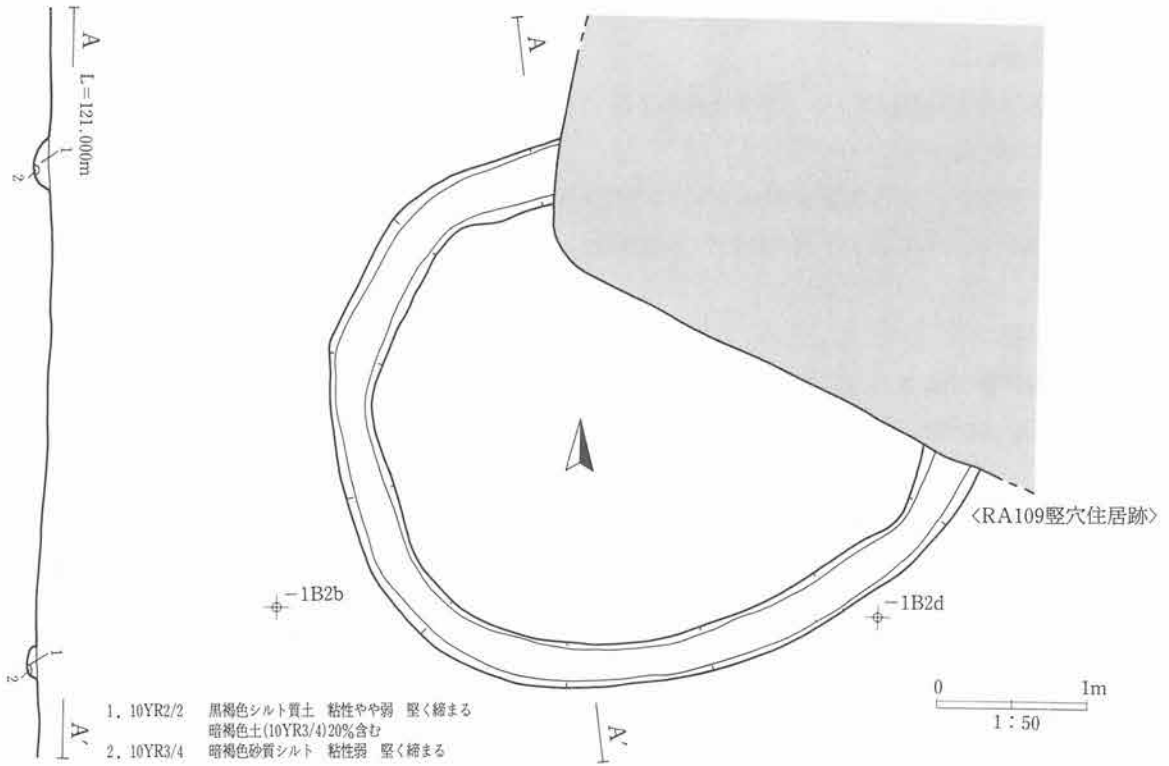
<位置・重複関係> 遺構は東側調査区北寄りに位置し、北側3 mにR Z 007 楕円形周溝が近接している。北東側でR A 109 竪穴住居跡と重複しており、新旧関係は竪穴住居跡に切られている事から(新)R A 109 竪穴住居跡→(旧)R Z 006 楕円形周溝である。検出はIV層上～中位で黒褐色土の落ち込みによって確認されている。<平面形・規模> 上部は削平を受けており、一部重複する事から規模の全容が不明である。上幅は31～40 cm、下幅が19～30 cm、深さ6～10 cmを測る。推定される規模は、4.30×3.70 m前後の楕円形状を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土を主体とする2層で構成され、暗褐色土を小ブロック状に含み堅く締まっている。

<遺物・時期> 時期を確定する遺物は出土しないものの、切り合い関係から平安時代のR A 109 竪穴住居跡より古い事がいえる。(高橋)

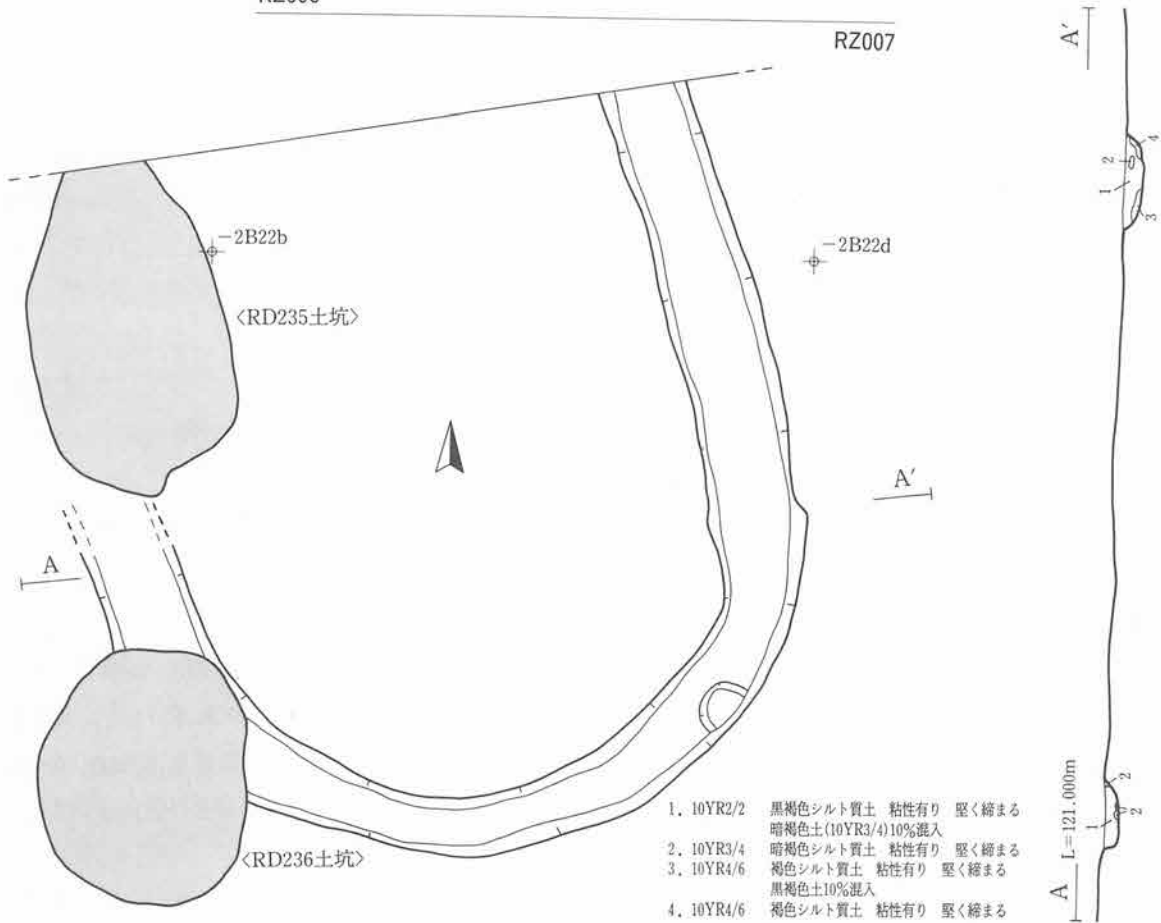
#### R Z 007 楕円形周溝 (第351図、写真図版194)

<位置・重複関係> 遺構は東側調査区の北端部に位置しており、南側3 mにR Z 006 楕円形周溝が近接している。西側でR D 235・236 土坑と重複し、新旧関係は土坑に切られている事から(新)R D 235・236 土坑→(旧)R Z 007 楕円形周溝である。検出はR Z 006 楕円形周溝と同様にIV層上～中位で確認されている。<平面形・規模> 西側は土坑2基と重複し、北側は道路下に延びている事から規模の全容が不明である。上



RZ006

RZ007



第351図 RZ006・007楕円形周溝

幅は45～60 cm、下幅が25～48 cm、深さ3～13 cmを測り、推定される規模は6.80×4.80 m前後の楕円形状を呈すると思われる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土主体の4層に大別され、褐色・暗褐色シルト質土が帯状や小ブロック状に含まれ堅く締まっている。

<遺物・時期> 遺物の出土がないために時期は不詳である。形態や埋土の様相がR Z 006 楕円形周溝に類似する事から、ほぼ同時期（平安時代）と思われる。 (高橋)

## 12. 井戸跡

### R I 001 井戸跡 (第352・353 図、写真図版195・304)

<位置・重複関係> 調査区西側の1-A区に位置する。重複関係はない。<平面形・規模> 歪んでいるが、円形を基調としている。開口部径は4.20×4.10 mである。深さは全掘していないが、2.20 m以上である。<壁・施設等> 中央に井戸枠が据えられる。枠は縦板を方形に立てた外枠の下位内側に横木を方形に組み、さらにより底面近くに横木方形枠と、その内側に円形の桶状の枠を据えている。断面形は井戸枠から壁が漏斗状に開いている。

<埋土> 掘り下げる段階で、降雨のためベルトが崩壊し、記録できなかった。

<遺物・時期> 井戸枠以外の遺物は出土していない。1276～1279 は出土した井戸枠である。時期は特定できなかった。 (金子)

### R I 002 井戸跡 (第352 図、写真図版195)

<位置・重複関係> 東側調査区-1 B区の中央部西寄りに位置している。他の遺構との重複関係はない。<平面形・規模> 平面形は円形を呈しており、規模は開口部径2.58×2.48 mである。深さは90 cmを測る。<壁・施設等> 壁はほぼ垂直に底面から立ち上がっている。井戸枠等の施設は検出されない。底は砂礫層の上端部を少し掘りこんでいる。

<埋土> 埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成され、全体に堅く締まっている。また、径10～40 cm大の亜角礫が大量に出土する事から、人為的に埋め戻しを行ったと思われる。

<遺物・時期> 遺物の出土がなく、時期は不明である。 (高橋)

## 13. 柱穴状土坑

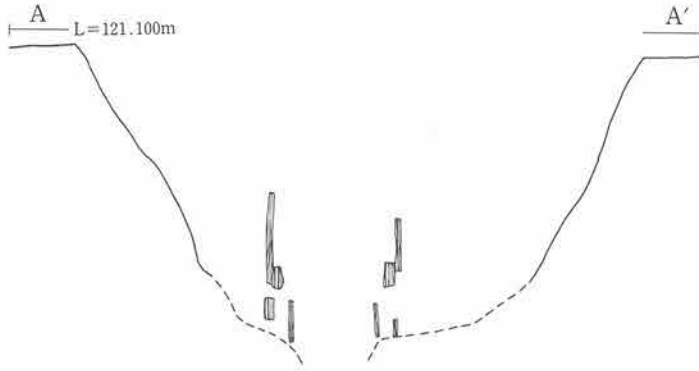
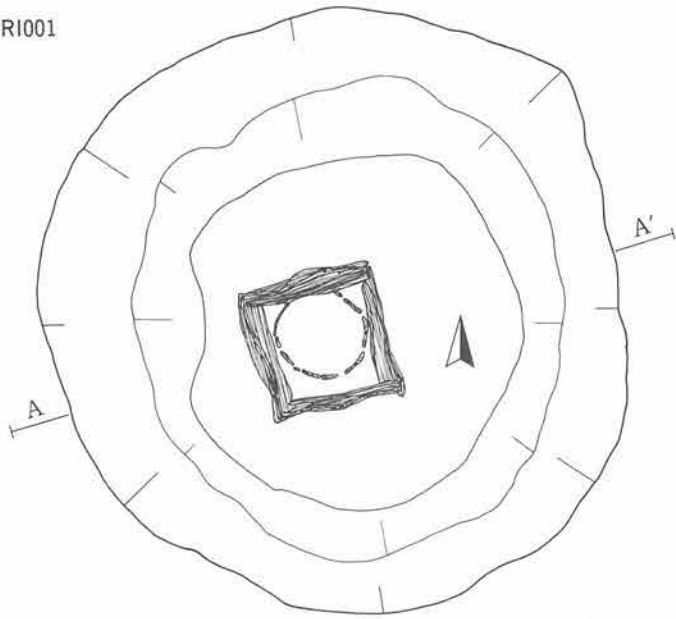
今回の調査では、R Z 005 柱穴状土坑は東側と西側調査区から検出されている。計測値と形状等は、第9～14 表にまとめている。東側調査区から順に記述する。

### 東側調査区 (第354・355 図)

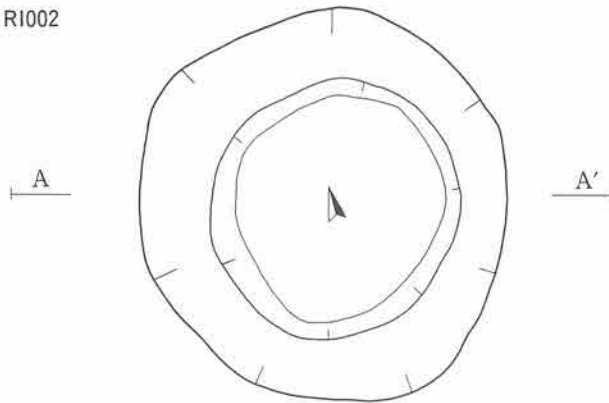
<位置> 東側調査区では、III層中～IV層上面にかけて378 基が検出されている。<平面形・規模> 平面形は方形1 基、隅丸長方形2 基、隅丸方形5 基、不整形30 基、楕円形151 基、円形189 基等があり、約9割が円形ないし楕円形を基調としている。規模は長軸径が14～95 cm、短軸径が18～76 cmの範疇で、長軸径30～50 cm大が過半数を占めている。深さは削平のために1 cm未満もあるが1～最大66.8 cm、平均25.7 cmを測る。柱痕の径は10 cm前後で、確認できたのは数基だけである。

<埋土> 埋土は暗褐色～黒褐色シルト質土を主体とする単層が大部分を占めており、粘性があり堅く締まっている。また、一部に炭や焼土粒を少量含有するものも見られる。東側調査区では、中世掘立柱建物跡

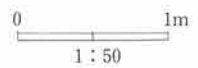
RI001



RI002



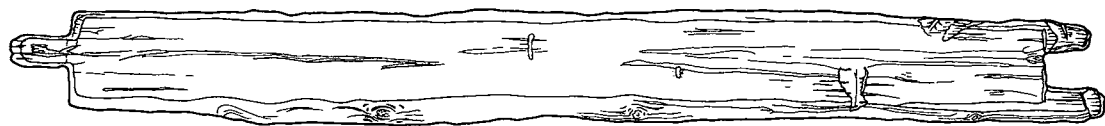
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 堅く締まる 亜角礫を多量含む 人為的な様相を呈している



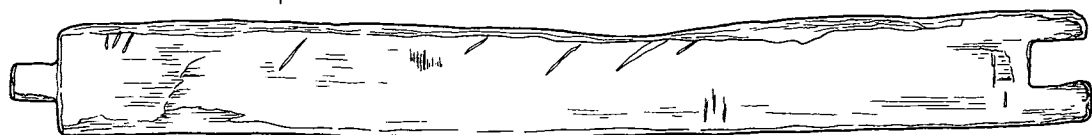
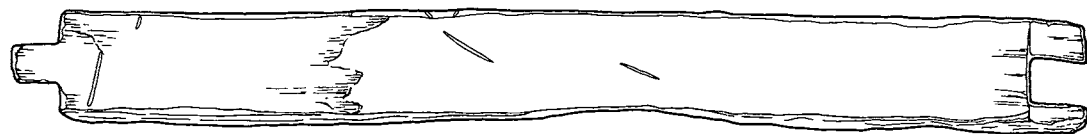
第352図 RI001・002井戸跡



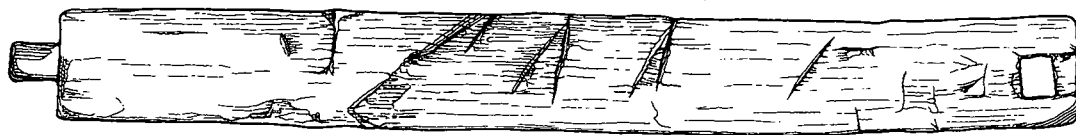
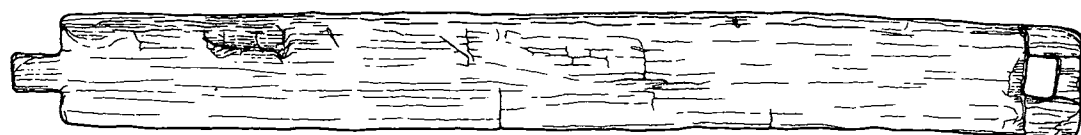
1276



1277



1278



1279



S=1/6

第353图 R1 井戸跡出土遺物

の周辺部付近に集中して分布するものの、建物跡や柵列との規則性は認められない。

<遺物・時期> 時期は遺物の出土がなく不明であるが、埋土状況から近世～近代に属する杭穴や田んぼのはせ杭も多く混在すると思われる。(高橋)

#### 西側調査区(1)(第356図)

<位置・重複関係> 調査区西側の1-A区付近のIII～IV層上で多くの柱穴状土坑が検出された。本区域にはRB 006 掘立柱建物跡や古代よりは比較的新しい土坑と思われるRD 228 土坑やRD 221 土坑が存在し、その周辺に柱穴が密集している。本来ならば、掘立柱建物を構成するものと思われるが、建物を組むことができなかつた。重複するほとんどすべての遺構より新しい。<平面形・規模> 円形～楕円形を基調とし、径は20～80 cmである。<埋土> 埋土はやや灰色がかつた黒褐色土が多い。

<遺物・時期> P 560 から大堀相馬の陶器碗が出土している。全ての柱穴状土坑の時期については不明であるが、この付近はRB 006 掘立柱建物跡を中心とする近世の屋敷跡であり、RB 006 掘立柱建物跡に付随する各種の建物などを構成していたものと思われる。(金子)

#### 西側調査区(2)(第357・359図)

<位置・重複関係> 調査区西側の1-A区～1-A区にかけて多くの柱穴状土坑が検出された。この区域にはRB 014～016 掘立柱建物跡が存在しており、本来ならば、本土坑群も掘立柱建物跡を構成するものと思われるが、建物を組むことができなかつた。この付近にはRA 129・130・157 竪穴住居跡、RD 220・238・239・256・265 土坑などがある。柱穴状土坑群はRD 238・256 土坑以外の遺構より新しい。<平面形・規模> 円形、楕円形を基調とし、径は18 cm～1.9 mである。<埋土> 灰色がかつた黒褐色土、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が多い。柱痕、根固め石を残すものもある。

<遺物・時期> P 423 から永楽通寶が3点出土している。いずれも薄く、軽いことから模鑄銭である可能性が高い。全ての柱穴状土坑の時期は不明であるが、この付近はRB 014～016 掘立柱建物跡を中心とする近世の屋敷地であり、これらの建物に付随する建物などを構成していたものと思われる。(金子)

#### 西側調査区(3)(第358・359図)

<位置・重複関係> 調査区西側の1-A区～2-A区にかけて多くの柱穴状土坑が検出された。この区域にはRB 010～012 掘立柱建物跡があり、本柱穴状土坑も掘立柱建物跡を形成するものと思われるが、組むことができなかつた。本区域にはRD 017 土坑、RZ 010・012 馬屋状遺構があり、これらの遺構よりも重複している柱穴のほうが古い。また、RA 143 竪穴住居跡やRE 015 竪穴状遺構よりも新しい。RB 010・012 掘立柱建物跡とは重複しているが、直接柱穴が切り合っていないので、不明である。<平面形・規模> 円形、楕円形を基調とする。規模は径が19～75 cmである。

<埋土> 埋土は黒褐色土、黄褐色土ブロックを含む黒色土が多い。柱痕や根固め石を残すものもある。

<遺物・時期> P 1 から肥前産の磁器染付、P 117 から18世紀の肥前産染付、P 119 から18世紀の肥前産の呉器手陶器碗、P 181 から近代に属する肥前産陶器鉢が出土している。このことから、全てとはいえないが、近世に属する柱穴があり、RB 010～012 掘立柱建物跡を中心とする近世の屋敷地に付随する建物を構成していたものと考えられる。また、RZ 012 馬屋状遺構のように近現代に属する遺構もあるが、馬屋周辺の簡易な小屋などの施設の柱穴の可能性もある。(金子)



第7表 東側調査区柱穴状土坑一覽(1)

柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形 状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形 状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形 状
1	57×44	41.5	楕円形	51	28×23	17.8	楕円形	101	25×23	12.1	円形
2	50×36	17.2	楕円形	52	28×26	34.2	円形	102	60×50	32.0	不整形
3	25×23	21.9	円形	53	31×28	20.7	円形	103	54×36	14.1	楕円形
4	43×42	36.5	円形	54	35×35	25.3	円形	104	26×23	28.3	円形
5	57×42	36.0	楕円形	55	32×31	17.5	円形	105	42×37	20.3	楕円形
6	84×64	32.5	楕円形	56	60×52	22.5	楕円形	106	28×23	16.5	楕円形
7	37×37	27.1	円形	57	34×33	33.1	円形	107	43×36	21.6	楕円形
8	32×27	12.5	楕円形	58	28×20	10.2	楕円形	108	37×30	24.2	楕円形
9	49×39	21.0	楕円形	59	45×32	31.3	楕円形	109	43×31	43.7	楕円形
10	40×34	28.0	楕円形	60	31×27	23.2	円形	110	37×29	30.8	楕円形
11	28×27	9.5	円形	61	26×25	12.8	円形	111	68×59	28.2	不整形
12	56×27	2.4	楕円形	62	46×38	27.0	楕円形	112	51×46	15.6	円形
13	45×30	9.7	楕円形	63	40×39	44.5	円形	113	51×41	35.7	楕円形
14	40×33	29.6	楕円形	64	22×21	23.2	円形	114	69×56	33.0	楕円形
15	51×37	39.0	楕円形	65	28×24	9.4	楕円形	115	66×64	38.8	円形
16	47×40	11.0	楕円形	66	37×35	19.6	円形	116	50×41	13.2	楕円形
17	45×44	25.6	円形	67	44×41	15.0	円形	117	46×44	34.4	円形
18	43×40	36.0	円形	68	39×34	9.9	隅長形	118	60×45	29.5	楕円形
19	45×44	44.8	円形	69	70×63	4.5	方形	119	66×48	50.3	楕円形
20	58×42	4.0	不整形	70	54×53	41.0	隅方形	120	40×37	10.4	隅方形
21	49×35	27.8	楕円形	71	68×52	27.9	楕円形	121	40×33	32.8	楕円形
22	50×41	43.7	楕円形	72	71×45	40.3	不整形	122	79×62	51.0	不整形
23	40×40	23.7	円形	73	31×31	20.4	円形	123	60×52	56.1	不整形
24	41×37	28.7	円形	74	36×35	19.4	円形	124	41×41	17.8	円形
25	38×33	37.2	楕円形	75	57×56	15.0	円形	125	26×18	14.3	楕円形
26	46×42	23.8	円形	76	38×38	28.0	隅方形	126	37×36	52.9	円形
27	35×33	40.3	円形	77	49×48	51.4	円形	127	29×25	19.8	楕円形
28	42×40	39.7	円形	78	34×33	26.9	円形	128	53×39	56.4	楕円形
29	64×62	6.5	円形	79	66×41	30.2	楕円形	129	48×41	32.8	不整形
30	70×65	21.7	不整形	80	33×31	30.1	円形	130	33×30	37.2	円形
31	31×30	29.6	円形	81	36×34	1.0	円形	131	28×23	18.1	楕円形
32	66×55	32.1	楕円形	82	—	—	—	132	27×24	25.6	楕円形
33	58×56	15.5	円形	83	51×48	22.5	円形	133	29×26	40.5	楕円形
34	40×35	6.6	楕円形	84	42×35	35.7	楕円形	134	23×20	33.9	楕円形
35	34×30	5.3	楕円形	85	43×41	11.8	円形	135	52×48	39.1	円形
36	38×36	19.3	円形	86	31×27	12.0	楕円形	136	31×28	22.3	円形
37	27×26	9.0	円形	87	40×37	18.5	円形	137	67×65	62.5	楕円形
38	68×59	41.0	不整形	88	43×41	29.6	円形	138	71×56	32.7	楕円形
39	30×20	20.9	円形	89	35×30	10.8	楕円形	139	44×30	25.8	楕円形
40	43×35	30.8	楕円形	90	61×49	41.0	楕円形	140	45×32	27.7	不整形
41	32×30	31.7	円形	91	31×29	24.0	円形	141	22×22	13.9	円形
42	34×29	35.1	楕円形	92	48×47	37.2	円形	142	26×22	41.5	円形
43	47×40	26.0	楕円形	93	34×33	12.7	円形	143	23×22	29.2	円形
44	22×22	12.2	円形	94	83×76	20.5	円形	144	90×47	29.0	不整形
45	41×39	52.2	円形	95	50×43	9.2	楕円形	145	22×19	16.0	楕円形
46	62×40	26.0	楕円形	96	40×35	9.6	楕円形	146	71×67	39.8	円形
47	49×42	34.5	楕円形	97	18×16	13.0	円形	147	34×32	29.8	円形
48	40×35	40.7	楕円形	98	42×34	66.8	不整形	148	35×32	33.1	円形
49	65×44	29.5	円形	99	35×31	12.9	楕円形	149	73×50	66.7	不整形
50	28×28	25.9	円形	100	35×35	13.0	円形	150	28×27	29.9	円形

第8表 東側調査区柱穴状土坑一覧(2)

柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状
151	43×40	32.4	円形	201	41×36	24.7	円形	251	53×48	42.4	円形
152	43×43	39.2	円形	202	44×40	13.5	円形	252	40×38	49.1	円形
153	56×53	47.8	円形	203	65×60	8.6	不整形	253	53×49	20.3	円形
154	57×54	65.3	円形	204	46×37	41.2	楕円形	254	27×26	13.1	円形
155	26×24	20.5	円形	205	29×27	23.7	円形	255	53×42	43.0	楕円形
156	42×41	20.0	円形	206	50×40	27.1	楕円形	256	34×31	56.6	円形
157	32×30	15.0	円形	207	39×38	27.2	円形	257	55×51	36.6	円形
158	46×44	17.8	円形	208	41×37	3.9	円形	258	35×34	13.9	円形
159	41×40	27.7	円形	209	40×37	11.1	円形	259	42×36	15.7	楕円形
160	50×37	13.2	楕円形	210	45×36	19.8	楕円形	260	83×59	29.0	不整形
161	25×23	36.7	円形	211	28×25	24.4	楕円形	261	35×35	13.9	円形
162	40×35	23.4	楕円形	212	31×27	19.6	楕円形	262	35×34	15.0	円形
163	41×33	2.7	楕円形	213	30×28	13.4	円形	263	63×60	58.0	円形
164	42×41	38.5	円形	214	52×48	52.7	円形	264	27×26	12.5	円形
165	51×48	15.9	円形	215	45×39	30.8	楕円形	265	38×36	17.1	円形
166	46×44	33.6	円形	216	50×43	29.8	楕円形	266	64×49	50.6	楕円形
167	36×36	25.2	円形	217	39×38	8.3	円形	267	40×40	43.3	円形
168	63×39	38.8	不整形	218	30×23	13.9	楕円形	268	60×52	44.7	楕円形
169	51×50	50.6	円形	219	31×23	7.3	楕円形	269	38×38	15.2	円形
170	36×32	19.9	不整形	220	38×33	18.0	楕円形	270	46×43	42.4	円形
171	58×47	47.9	不整形	221	49×47	14.4	円形	271	58×56	18.3	円形
172	26×26	13.5	円形	222	51×38	9.3	楕円形	272	43×42	17.1	円形
173	47×45	22.7	円形	223	46×32	9.4	楕円形	273	79×65	40.3	不整形
174	35×32	24.4	円形	224	37×36	1.8	円形	274	45×44	19.6	隅方形
175	30×29	27.2	円形	225	38×29	5.1	楕円形	275	75×55	1.0	楕円形
176	30×28	20.4	円形	226	37×34	14.6	円形	276	32×30	16.7	円形
177	31×26	22.4	楕円形	227	33×25	11.8	楕円形	277	32×29	21.6	円形
178	27×26	16.3	円形	228	43×33	15.8	楕円形	278	83×47	26.6	不整形
179	33×30	22.3	円形	229	41×39	14.3	円形	279	39×34	29.2	楕円形
180	40×36	30.2	円形	230	46×40	21.7	楕円形	280	41×40	23.1	円形
181	55×39	27.1	楕円形	231	38×33	24.0	楕円形	281	53×50	21.7	円形
182	87×71	18.3	不整形	232	46×41	23.3	楕円形	282	39×33	25.6	楕円形
183	55×53	47.8	円形	233	57×50	8.2	楕円形	283	60×47	29.9	楕円形
184	50×46	49.9	円形	234	39×38	20.8	円形	284	63×46	33.1	楕円形
185	35×33	14.3	円形	235	38×30	24.5	楕円形	285	28×28	11.3	円形
186	34×33	26.4	円形	236	30×29	25.4	円形	286	56×27	18.9	不整形
187	41×41	42.5	円形	237	56×50	19.6	楕円形	287	48×39	36.9	楕円形
188	44×42	33.6	円形	238	30×28	19.0	円形	288	41×34	29.2	楕円形
189	50×46	47.3	円形	239	56×37	30.3	楕円形	289	41×40	23.1	円形
190	46×44	41.3	円形	240	45×44	19.1	円形	290	37×34	13.8	隅長形
191	40×40	37.6	円形	241	54×51	19.7	円形	291	41×40	25.7	円形
192	34×31	28.0	円形	242	46×43	25.0	円形	292	44×34	29.9	楕円形
193	32×30	26.8	円形	243	33×30	18.8	円形	293	62×39	21.7	不整形
194	70×57	47.2	楕円形	244	56×50	29.1	楕円形	294	40×32	27.2	楕円形
195	50×46	15.6	円形	245	36×35	18.0	円形	295	40×36	17.1	不整形
196	43×38	27.7	楕円形	246	44×38	25.3	楕円形	296	37×37	35.2	円形
197	54×50	25.3	楕円形	247	52×50	32.5	円形	297	35×35	11.6	円形
198	95×64	37.3	不整形	248	33×31	17.2	円形	298	48×46	40.5	円形
199	61×56	25.9	円形	249	47×46	15.5	円形	299	53×45	34.0	楕円形
200	38×33	22.7	楕円形	250	30×23	35.5	楕円形	300	60×56	28.5	円形

第9表東側調査区柱穴状土坑一覧(3)

柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状
301	32×25	12.5	楕円形	328	29×28	35.3	円形	355	—	—	—
302	40×34	17.2	楕円形	329	48×47	41.3	円形	356	57×45	19.0	楕円形
303	32×28	13.8	楕円形	330	66×48	51.3	楕円形	357	54×44	19.8	楕円形
304	30×27	10.2	円形	331	31×29	31.2	隅方形	358	33×30	7.2	円形
305	38×33	17.1	楕円形	332	35×31	28.5	楕円形	359	30×28	9.3	円形
306	32×31	31.0	円形	333	24×23	43.1	円形	360	28×25	18.2	円形
307	66×57	17.5	楕円形	334	30×30	36.2	円形	361	34×26	24.0	楕円形
308	78×72	13.8	不整形	335	45×43	35.7	円形	362	29×22	6.1	楕円形
309	43×38	34.9	楕円形	336	35×30	26.3	楕円形	363	27×23	15.1	楕円形
310	37×33	19.0	楕円形	337	31×29	61.5	円形	364	34×25	14.6	楕円形
311	30×28	20.9	円形	338	38×34	23.1	楕円形	365	28×28	15.3	円形
312	47×43	38.1	円形	339	62×44	43.0	楕円形	366	41×40	25.3	円形
313	42×35	33.4	楕円形	340	44×43	27.8	円形	367	30×28	15.3	円形
314	38×32	33.1	楕円形	341	55×54	13.2	円形	368	35×35	21.4	円形
315	49×31	29.2	不整形	342	44×39	7.5	楕円形	369	33×20	16.4	楕円形
316	46×40	27.5	楕円形	343	46×40	46.0	楕円形	370	31×28	21.4	円形
317	38×33	27.5	楕円形	344	59×57	25.1	円形	371	28×26	18.5	円形
318	46×43	47.3	不整形	345	37×36	17.9	円形	372	32×29	30.6	円形
319	35×30	19.8	不整形	346	49×46	14.2	円形	373	40×32	21.1	楕円形
320	40×39	39.7	円形	347	57×46	25.7	楕円形	374	41×22	32.3	楕円形
321	44×31	19.1	楕円形	348	35×31	13.2	楕円形	375	31×25	16.9	楕円形
322	39×28	15.5	楕円形	349	41×36	23.8	円形	376	30×28	22.8	円形
323	40×28	15.8	楕円形	350	69×54	18.7	楕円形	377	42×33	21.0	楕円形
324	28×26	10.5	円形	351	59×51	16.2	楕円形	378	26×26	33.5	円形
325	35×34	15.9	円形	352	53×44	28.1	楕円形	379	44×43	23.0	円形
326	57×39	21.1	楕円形	353	54×45	27.3	楕円形	380	35×30	12.7	楕円形
327	82×50	21.8	不整形	354	46×45	25.1	円形				

第10表 西側調査区柱穴状土坑一覧(1)

柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状
514	47×43	58.0	円形	541	46×42	15.0	円形	564	37×34	27.0	円形
520	39×35	33.0	円形	542	47×43	53.0	楕円形	568	50×43	54.0	楕円形
522	42×40	59.0	円形	543	38×31	36.0	円形	569	38×35	37.0	楕円形
523	44×37	26.0	楕円形	544	38×35	48.0	円形	570	31×29	38.0	楕円形
525	44×43	12.0	円形	545	35×34	70.0	円形	571	31×29	38.0	楕円形
526	45×44	15.0	円形	546	50×43	20.0	円形	572	42×40	32.0	楕円形
527	28×27	31.0	円形	547	38×37	—	円形	573	35×33	28.0	楕円形
528	37×33	26.0	円形	548	58×50	—	円形	574	34×25	39.0	円形
529	32×30	33.0	円形	549	47×—	50.0	楕円形	575	39×38	23.0	円形
530	51×42	33.0	楕円形	551	58×52	51.0	円形	576	27×26	37.0	楕円形
531	33×33	58.0	円形	552	55×43	40.0	楕円形	578	46×37	37.0	円形
532	30×27	58.0	楕円形	553	77×55	39.0	楕円形	579	56×45	39.0	楕円形
533	44×40	24.0	楕円形	556	31×31	33.0	円形	580	36×34	23.0	円形
534	32×31	32.0	円形	557	40×38	8.0	楕円形	581	48×32	39.0	楕円形
535	36×34	37.0	円形	558	54×53	35.0	円形	582	27×—	39.0	円形
535	31×31	39.0	円形	559	48×43	37.0	円形	584	31×29	20.0	円形
536	27×25	36.0	円形	560	89×67	60.0	楕円形	585	48×46	58.0	楕円形
538	28×27	37.0	円形	561	55×55	41.0	円形	586	38×35	41.0	円形
539	32×31	66.0	円形	562	27×25	53.0	楕円形	587	31×31	23.0	円形
540	30×28	48.0	円形	563	39×37	29.0	円形	589	43×—	43.0	楕円形

第11表 西側調査区柱穴状土坑一覧(2)

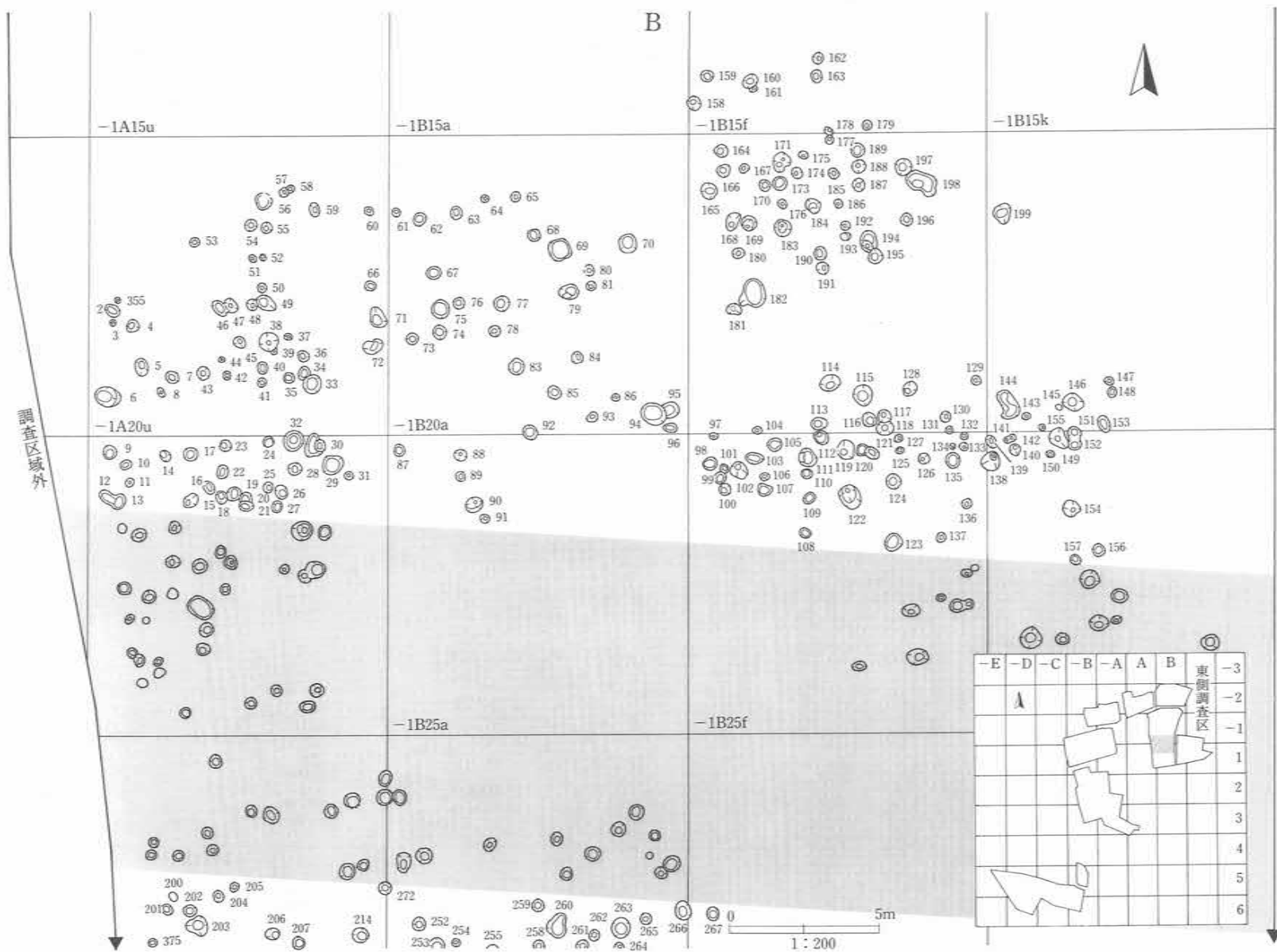
柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状
590	48×45	50.0	円形	357	30×29	—	円形	451	32×31	17.0	円形
591	38×35	13.0	楕円形	360	43×—	35.0	円形	452	37×33	41.0	円形
592	55×53	38.0	円形	361	39×36	51.0	円形	454	40×32	60.0	円形
593	27×27	44.0	楕円形	362	53×48	54.0	円形	456	40×—	32.0	円形
594	39×30	23.0	楕円形	363	66×—	23.0	楕円形	457	30×30	17.0	円形
595	32×27	45.0	円形	364	58×50	72.0	円形	458	56×47	61.0	楕円形
596	53×42	30.0	楕円形	365	65×53	73.0	円形	459	34×—	44.0	楕円形
597	30×25	21.0	楕円形	367	29×—	33.0	円形	460	36×34	47.0	円形
598	37×35	48.0	円形	369	45×45	49.0	円形	461	55×52	49.0	円形
599	27×26	47.0	円形	370	33×30	68.0	円形	462	37×36	71.0	円形
600	37×35	27.0	円形	371	43×—	15.0	円形	463	58×46	66.0	楕円形
601	29×27	43.0	円形	372	68×63	27.0	円形	464	39×—	34.0	円形
602	34×33	33.0	円形	373	93×64	39.0	楕円形	465	37×—	39.0	円形
603	36×36	45.0	円形	377	52×42	65.0	楕円形	466	42×37	68.0	円形
605	65×53	27.0	楕円形	381	41×38	64.0	楕円形	467	36×35	51.0	円形
606	43×41	34.0	円形	382	40×35	18.0	楕円形	468	41×39	10.0	円形
609	40×34	21.0	円形	384	48×42	52.0	円形	469	44×36	46.0	楕円形
653	26×26	—	円形	392	25×23	24.0	円形	539	28×23	—	円形
654	32×30	—	円形	398	48×42	36.0	円形	613	48×35	—	楕円形
655	59×56	41.0	楕円形	399	36×34	10.0	円形	617	27×—	12.0	楕円形
656	23×23	—	円形	405	37×34	31.0	円形	618	18×—	—	円形
657	30×28	62.0	円形	406	40×37	51.0	円形	622	46×40	42.0	円形
658	31×31	56.0	円形	407	28×28	44.0	円形	624	63×61	43.0	円形
659	28×27	—	円形	408	32×32	46.0	円形	625	33×30	37.0	円形
670	25×23	—	楕円形	409	36×35	35.0	円形	626	45×—	—	楕円形
671	37×37	59.0	円形	411	40×38	47.0	円形	630	35×28	—	円形
672	40×34	36.0	楕円形	412	32×30	31.0	円形	631	28×27	48.0	円形
673	49×32	—	楕円形	413	55×43	55.0	不整形	632	27×18	51.0	楕円形
674	45×38	—	円形	414	50×47	70.0	円形	633	47×43	51.0	円形
687	55×—	58.0	楕円形	415	36×32	18.0	円形	634	38×29	38.0	楕円形
690	41×38	52.0	円形	417	32×28	38.0	円形	635	52×50	26.0	円形
692	37×35	29.0	円形	419	57×—	70.0	楕円形	636	75×71	72.0	円形
693	55×43	—	楕円形	421	43×42	57.0	円形	639	51×49	—	円形
324	65×53	71.0	円形	423	81×68	54.0	円形	640	48×—	55.0	円形
327	55×60	45.0	円形	424	53×52	63.0	円形	641	32×—	78.0	円形
329	47×47	53.0	円形	425	57×52	81.0	円形	643	38×32	39.0	円形
331	48×48	—	円形	429	68×—	80.0	円形	644	36×32	51.0	円形
334	52×48	68.0	円形	430	55×—	55.0	楕円形	645	36×33	—	円形
337	49×53	72.0	円形	432	45×—	—	楕円形	646	52×—	61.0	楕円形
339	37×33	39.0	円形	434	36×36	27.0	円形	647	31×30	58.0	円形
340	38×30	—	楕円形	435	38×35	30.0	円形	648	41×40	46.0	楕円形
344	56×45	40.0	円形	436	51×36	49.0	円形	649	46×45	39.0	円形
347	42×43	34.0	円形	437	39×39	33.0	円形	650	45×42	32.0	楕円形
348	48×43	49.0	楕円形	439	49×43	67.0	円形	651	32×29	18.0	円形
350	35×33	50.0	円形	442	40×38	46.0	円形	652	37×34	66.0	円形
351	33×32	38.0	円形	445	42×—	73.0	楕円形	676	48×40	—	円形
352	54×48	30.0	円形	446	30×30	32.0	円形	678	60×53	—	円形
354	44×43	61.0	円形	448	45×43	52.0	楕円形	679	47×35	—	楕円形
355	32×30	42.0	円形	449	56×53	65.0	円形	680	61×53	—	円形
356	31×31	25.0	楕円形	450	40×38	53.0	円形	681	50×48	—	円形

第12表 西側調査区柱穴状土坑一覧(3)

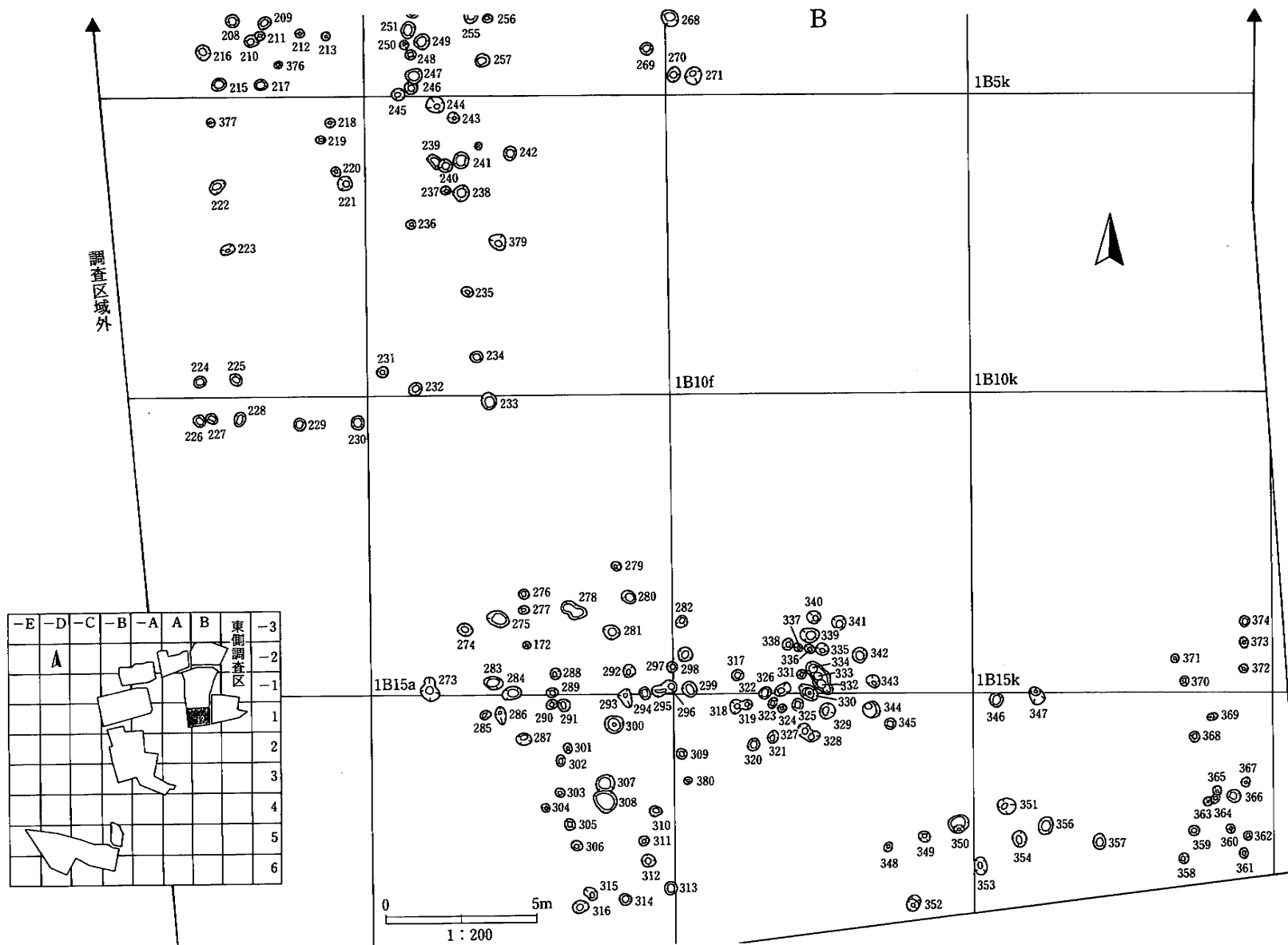
柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状	柱穴 No	開口部 cm	深さ cm	形状
684	35×32	—	円形	124	40×28	30.0	楕円形	183	28×27	45.0	円形
685	38×29	—	円形	126	56×52	52.0	楕円形	184	37×31	26.0	円形
686	37×28	—	円形	128	70×53	54.0	楕円形	185	43×38	27.0	円形
691	38×31	—	円形	129	43×32	47.0	楕円形	186	33×30	25.0	円形
694	47×40	62.0	円形	130	38×31	41.0	楕円形	187	40×—	—	円形
697	32×31	63.0	円形	131	38×37	22.0	円形	189	27×28	18.0	円形
698	47×45	57.0	円形	134	37×33	29.0	円形	190	56×43	48.0	円形
2	44×42	35.0	円形	136	48×48	10.0	円形	191	34×31	40.0	円形
3	50×—	50.0	円形	137	38×32	25.0	円形	192	38×34	44.0	円形
4	60×53	24.0	楕円形	138	58×—	32.0	楕円形	193	31×31	65.0	円形
7	45×38	21.0	円形	140	30×25	21.0	円形	194	69×49	56.0	楕円形
33	40×43	12.0	円形	141	43×50	43.0	円形	195	34×33	—	円形
34	68×54	37.0	円形	142	25×21	34.0	円形	196	46×44	—	円形
35	56×43	19.0	円形	143	45×—	51.0	円形	196	76×73	16.0	円形
36	40×41	28.0	円形	144	37×—	41.0	楕円形	196	46×44	—	円形
37	58×54	39.0	円形	146	50×43	52.0	円形	197	51×36	43.0	楕円形
39	36×41	11.0	楕円形	147	33×30	24.0	円形	198	43×32	47.0	楕円形
40	53×46	9.0	円形	148	26×—	35.0	楕円形	199	38×27	15.0	楕円形
41	42×46	26.0	円形	149	27×—	49.0	楕円形	200	27×23	36.0	円形
42	33×30	41.0	円形	151	73×64	55.0	円形	201	57×—	66.0	円形
46	47×—	37.0	楕円形	154	26×25	28.0	円形	202	40×38	54.0	円形
47	28×25	18.0	円形	155	58×55	53.0	円形	203	26×22	42.0	円形
48	28×28	23.0	円形	156	43×40	22.0	円形	204	23×20	74.0	円形
49	48×46	28.0	円形	157	35×—	34.0	円形	205	32×—	—	円形
50	29×25	21.0	円形	158	38×—	45.0	円形	206	31×—	48.0	円形
51	35×30	15.0	円形	160	29×27	21.0	円形	207	33×23	49.0	円形
52	53×47	54.0	円形	161	71×62	30.0	楕円形	209	43×43	74.0	不整形
52	54×52	49.0	円形	162	28×25	29.0	円形	213	39×—	18.0	円形
53	62×55	58.0	円形	163	30×29	39.0	円形	214	42×—	20.0	円形
54	39×40	27.0	円形	164	73×62	23.0	不整形	215	40×39	23.0	円形
56	35×35	47.0	円形	165	38×33	42.0	円形	218	42×39	38.0	円形
57	41×33	24.0	円形	166	32×29	51.0	円形	219	42×40	23.0	円形
59	48×46	58.0	円形	167	42×37	71.0	円形	220	32×33	39.0	円形
63	48×48	45.0	円形	169	48×49	23.0	円形	221	41×—	54.0	不整形
77	63×48	16.0	円形	171	37×35	16.0	円形	222	60×60	222.0	円形
78	72×49	42.0	楕円形	172	49×40	13.0	円形	223	32×28	45.0	円形
79	25×22	43.0	円形	173	41×38	14.0	楕円形	226	36×—	22.0	円形
87	38×37	37.0	円形	174	56×44	70.0	楕円形	227	43×41	26.0	円形
89	28×27	—	円形	176	34×35	30.0	円形	228	54×30	53.0	楕円形
97	49×42	50.0	円形	177	37×35	45.0	円形	229	48×31	41.0	楕円形
113	48×45	39.0	円形	178	45×43	51.0	円形	700	28×—	28.0	楕円形
116	37×38	—	円形	179	42×40	51.0	円形	701	33×33	28.0	円形
119	70×69	34.0	円形	180	35×—	52.0	円形	38a	60×49	40.0	不整形
120	28×—	22.0	円形	181	35×32	18.0	円形	38b	37×31	37.0	不整形
122	50×48	46.0	楕円形	182	64×53	30.0	円形				

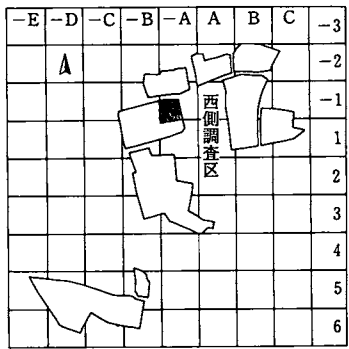
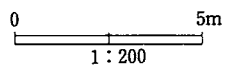
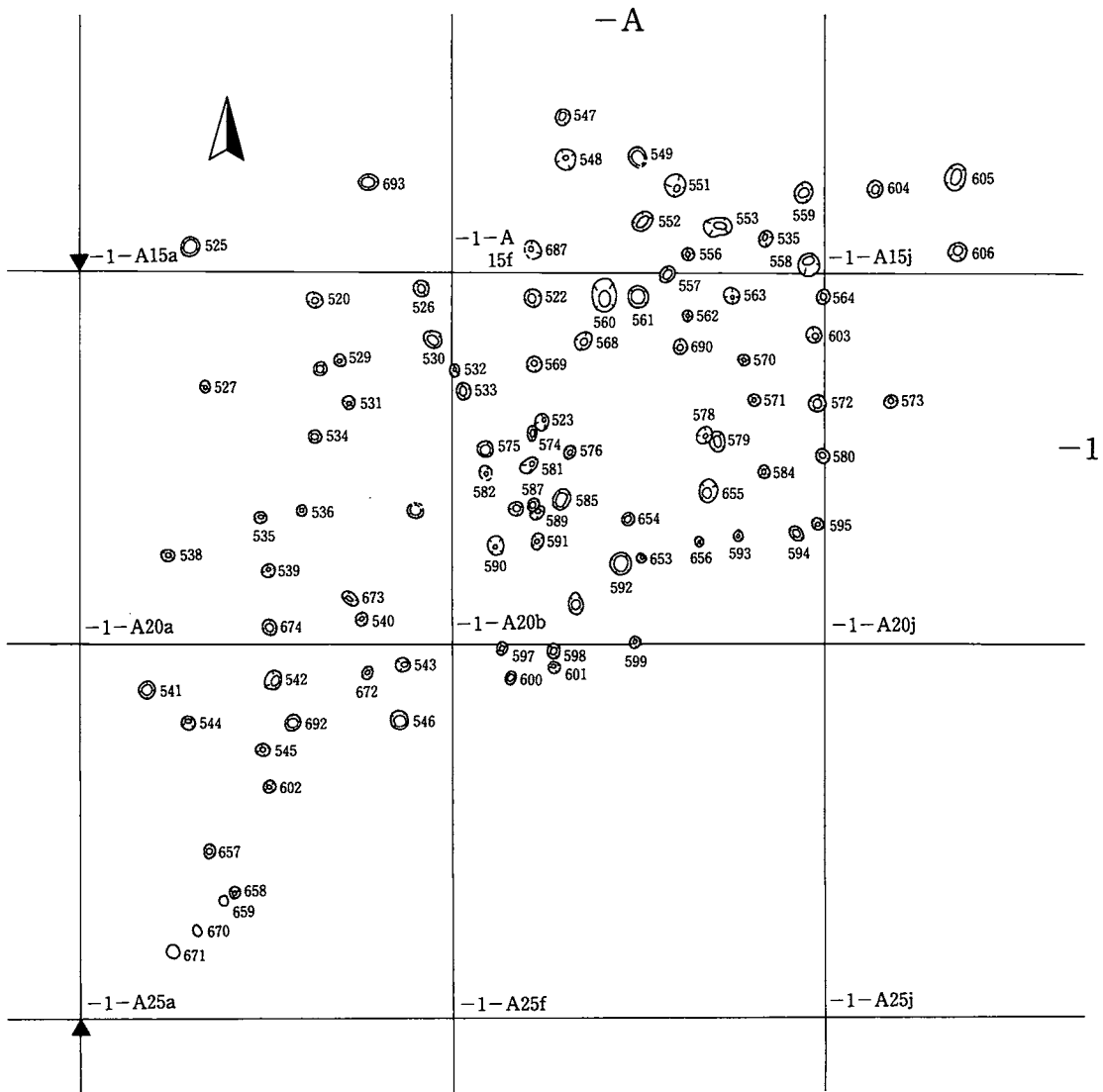
\* 隅方形は隅丸方形、隅長方は隅長方形の略。—は不明ないし欠番。

第354図 R2005柱穴状土坑東側調査区(1)



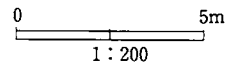
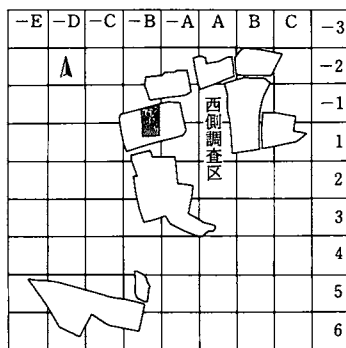
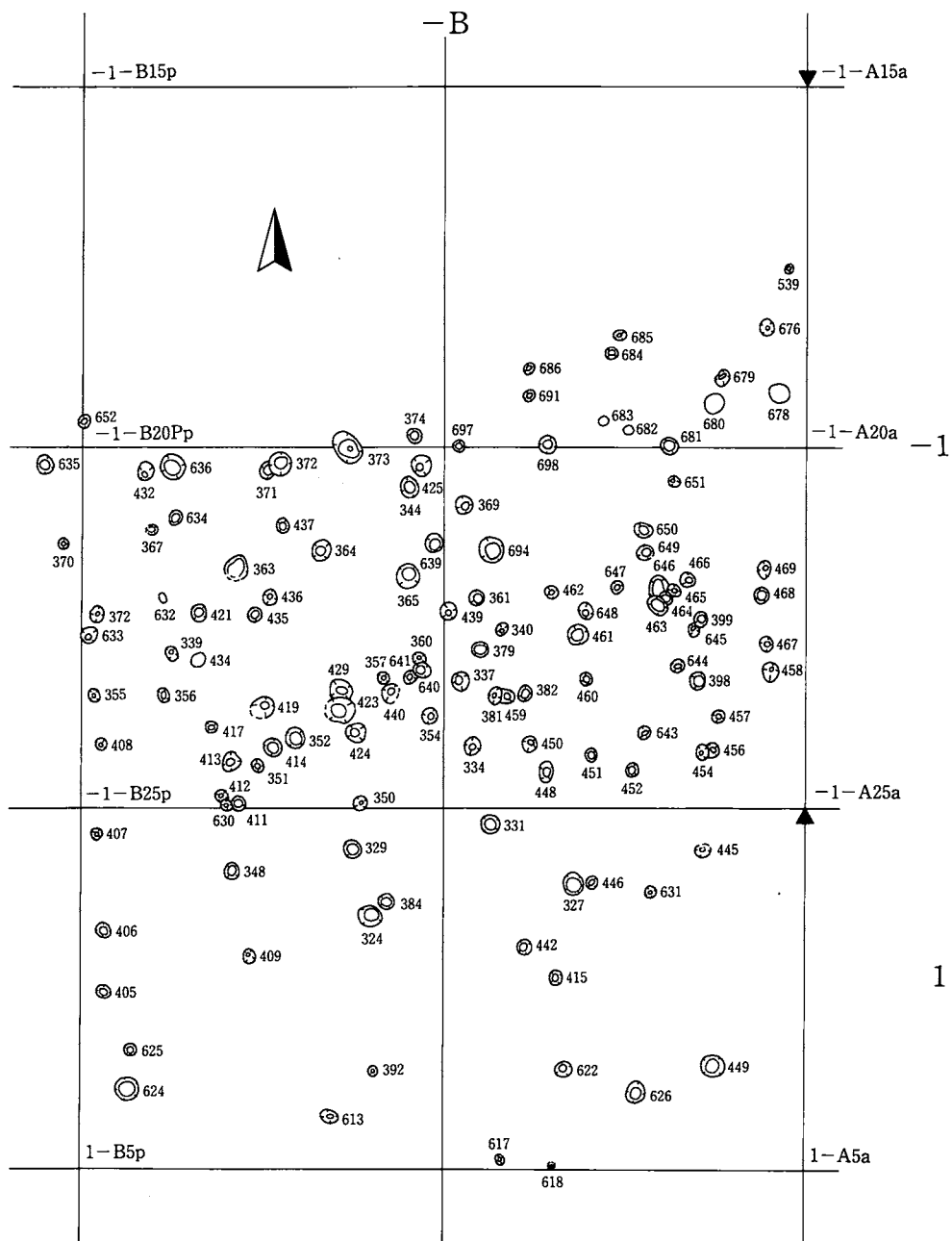
第355図 RZ005柱穴土坑東側調査区(2)



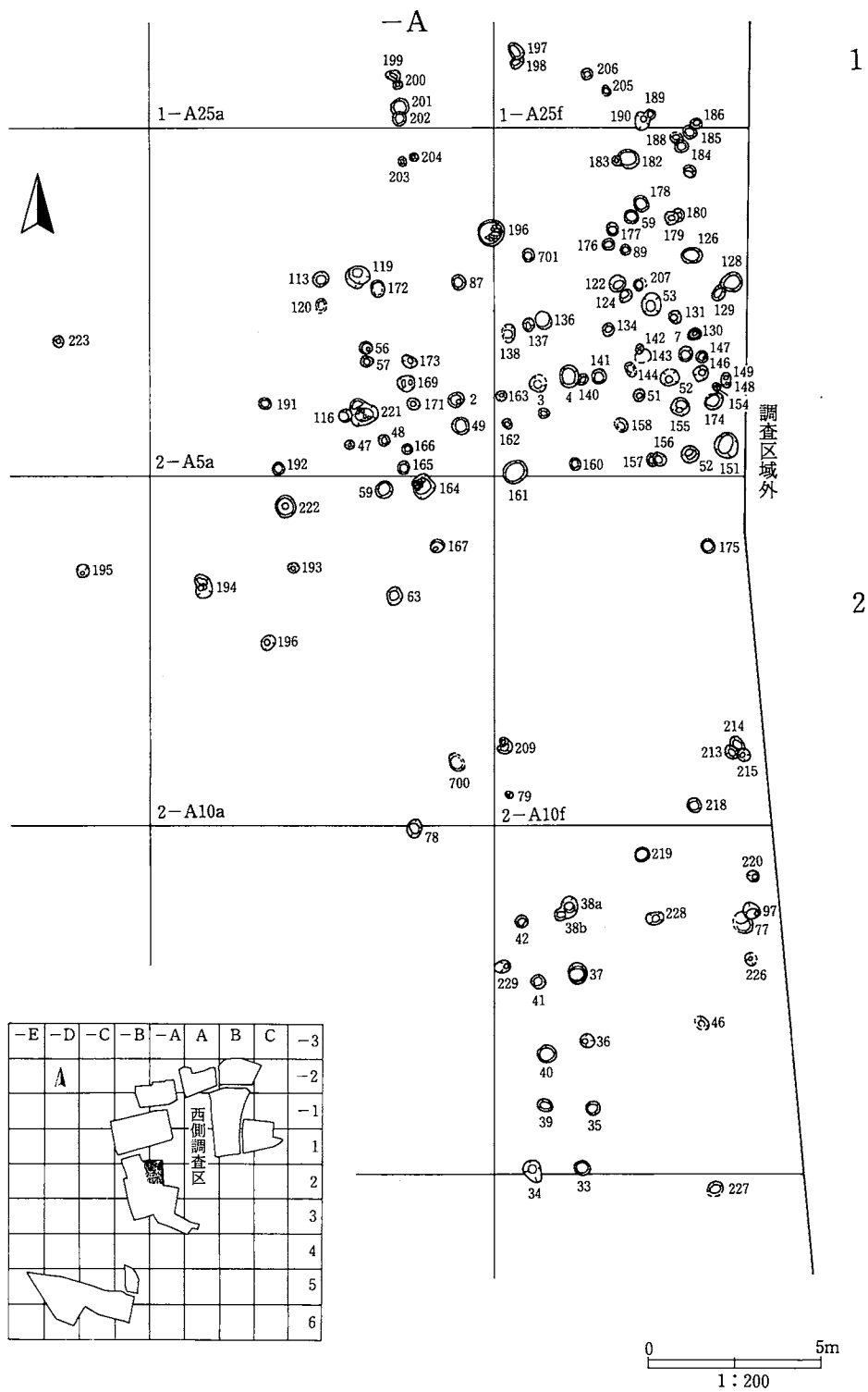


第356図 RZ005柱穴状土坑西側調査区(1)

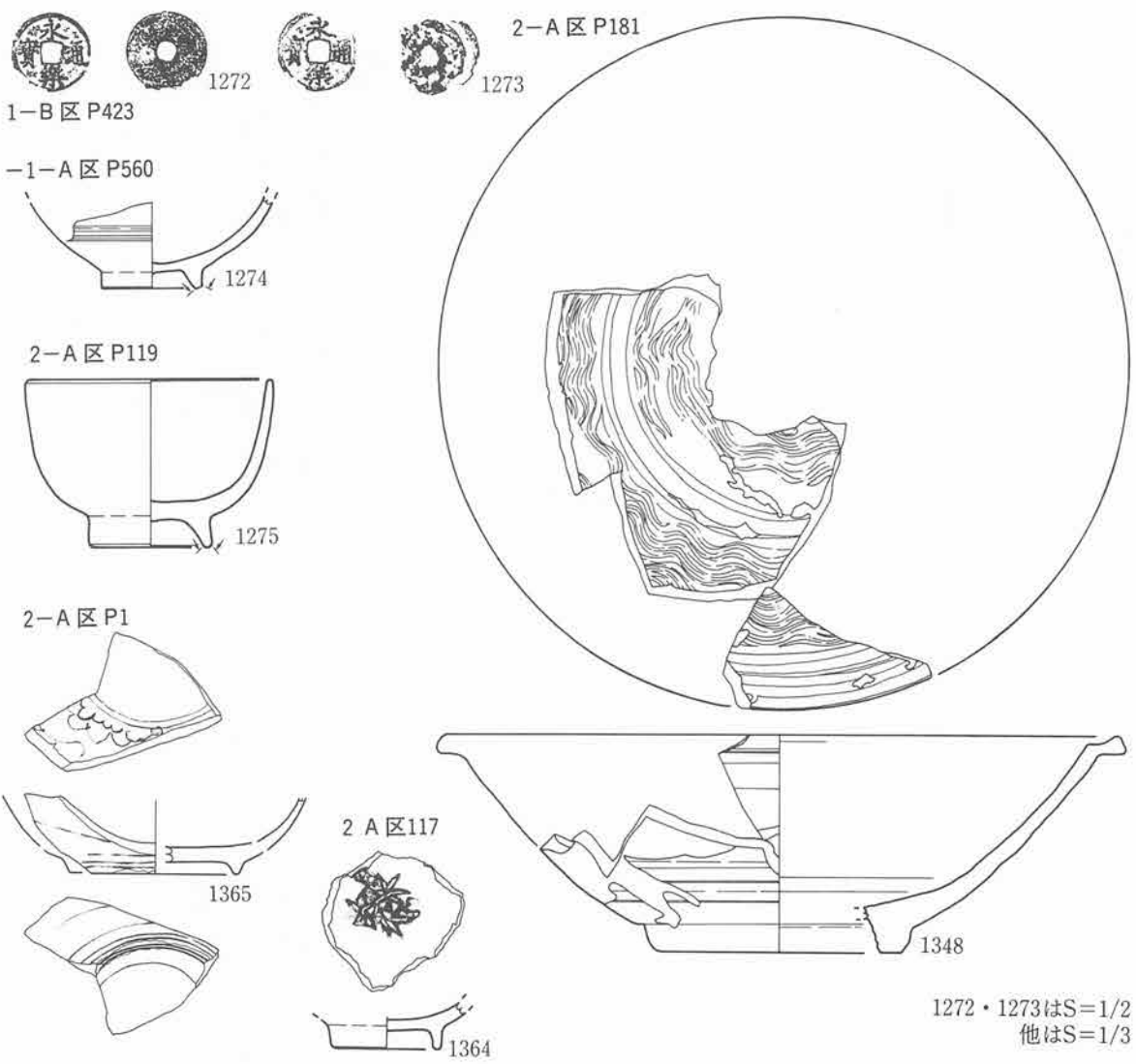




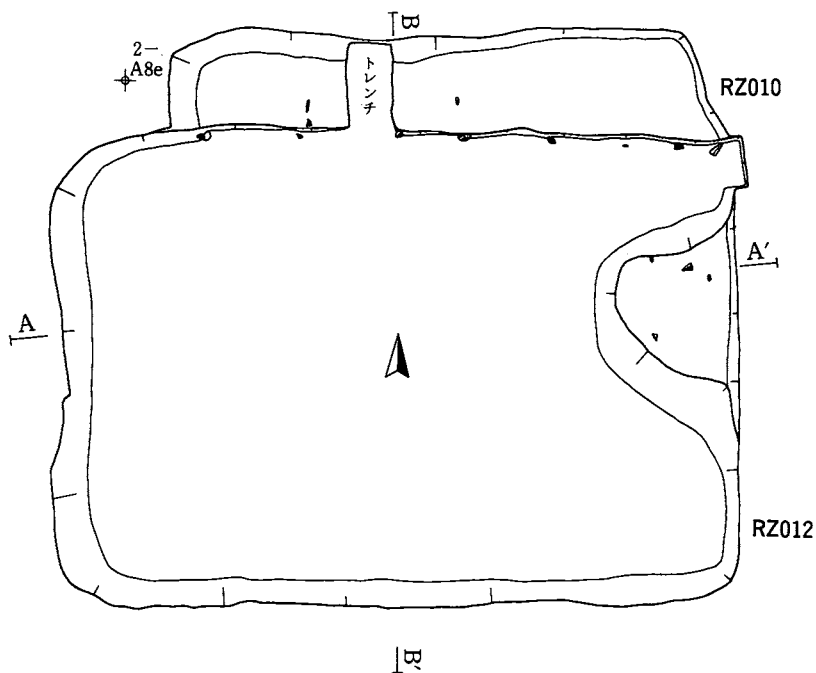
第357図 RZ005柱穴状土坑西側調査区(2)



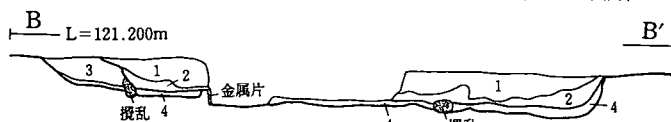
第358図 RZ005柱穴状土坑西側調査区(3)



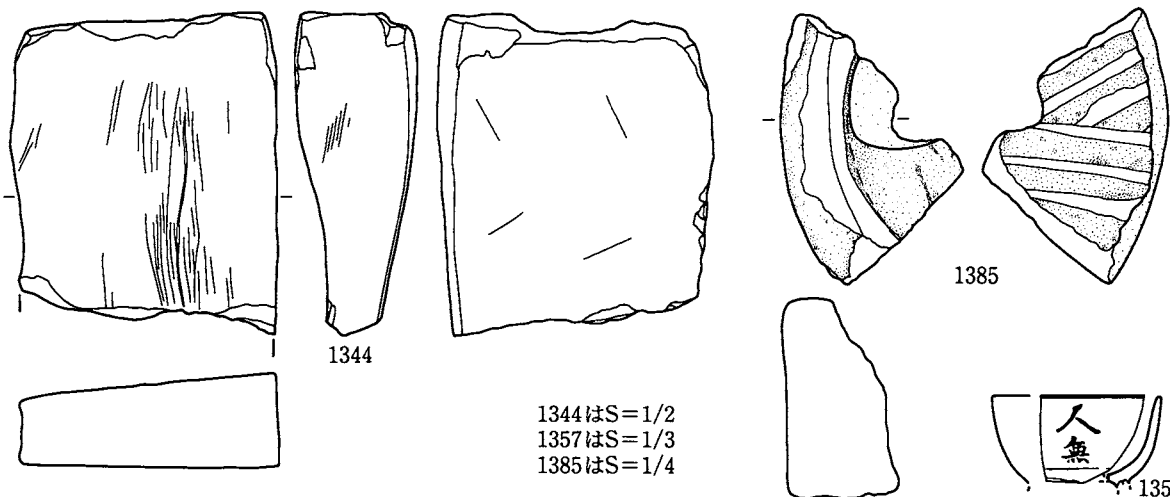
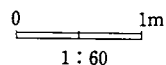
第359図 RZ005柱穴状土坑出土遺物



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック(径0.5~10cm大)少量・礫(こぶし大)多量含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック(径0.5~3cm大)・礫(こぶし大)・炭粒・炭塊・少量の砂質シルト・下層に炭層含む 埋め戻しの土
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 堅く締まる 黄褐色土ブロック(径1~3cm大)含む



1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 黄褐色土ブロック(径0.5~10cm大)少量・礫(こぶし大)多量含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロック(径0.5~3cm大)・炭粒・炭塊含む 埋め戻しの土
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む 堅く締まる 黄褐色土ブロック(径1~3cm大)含む(RZ 馬屋状遺構の土)
4. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性に富む 黄褐色土ブロックごく少量含む 下層の上面の砂質シルトが褐色に酸化し堅い



1344はS=1/2  
1357はS=1/3  
1385はS=1/4

第360図 RZ010・012馬屋状遺構・出土遺物

## 14. 馬屋状遺構

### R Z 010 馬屋状遺構 (第 360 図)

<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。R Z 012 馬屋状遺構、R B 011 掘立柱建物跡、R B 012 掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は(新) R Z 012 馬屋状遺構→R Z 010 馬屋状遺構→R B 011 掘立柱建物跡→(旧) R B 012 掘立柱建物跡である。<平面形・規模> R Z 012 馬屋状遺構に切られているため、全体像は不明であるが、隅丸の長方形と考えられる。現存している辺の長さは 4.45 m、壁高は 33 cm である。全体にグライ化している。

<埋土> 2 層に分けられる。上層は黄褐色土ブロックを含む堅く締まった黒褐色土、下層は粘性に富む灰黄褐色土である。<壁・床> 床には IV 層を覆うように灰黄褐色粘土が張られている。床は北側が高くなっており、壁に至って緩やかに外傾して立ち上がる。R Z 012 馬屋状遺構との境付近に木杭が、3 カ所から検出された。なお、本遺構に伴うと考えられる柱穴は検出できなかった。

<遺物・時期> 遺物は出土していない。重複する R Z 012 馬屋状遺構は本遺構の位置、方向を踏襲していることから、R Z 012 馬屋状よりは旧いが、おおくはさかのぼらない時期と考える。(金子)

### R Z 012 馬屋状遺構 (第 360 図、写真図版 196)

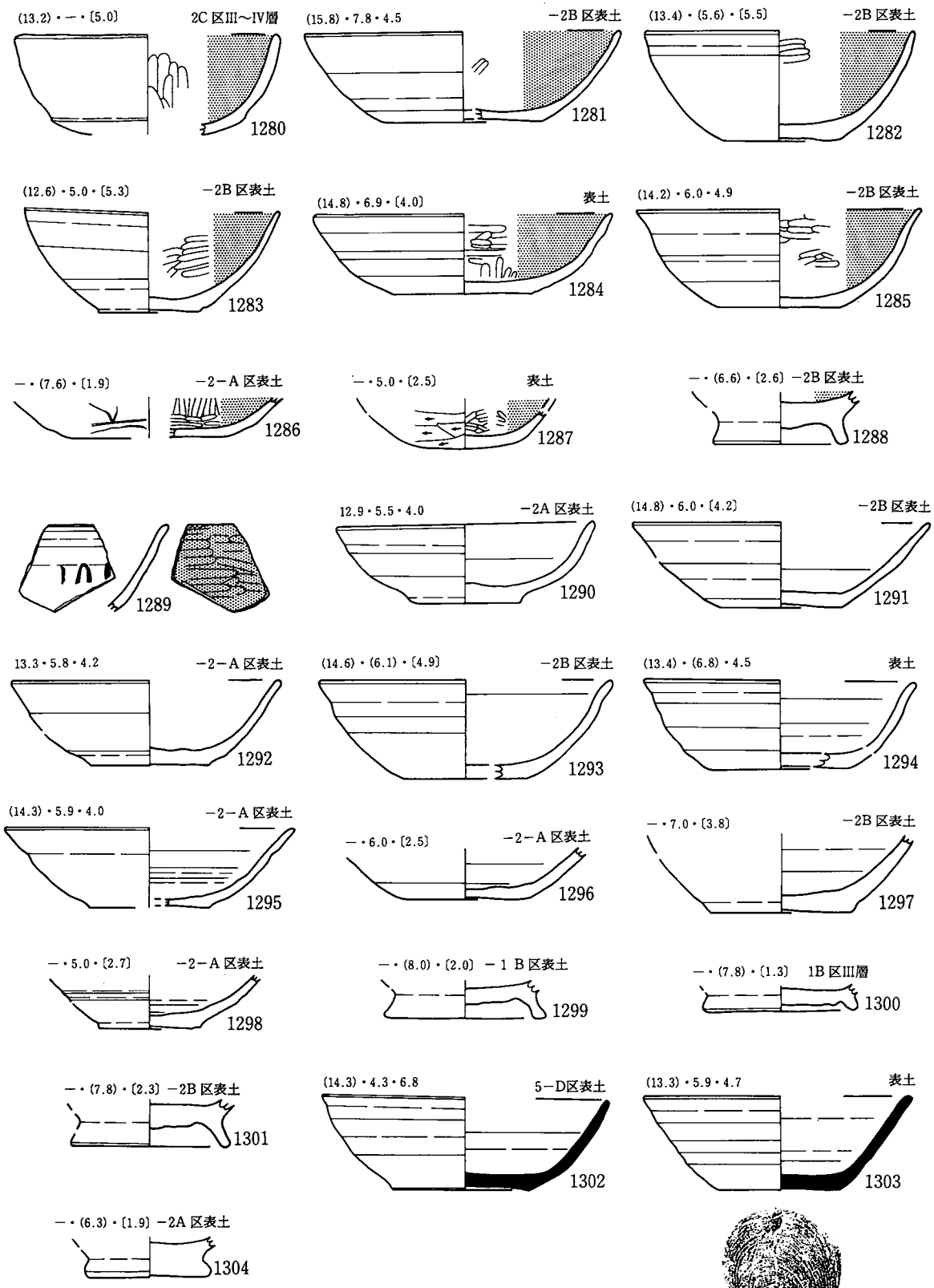
<位置・重複関係> 調査区西側の 2-A 区に位置する。R Z 010 馬屋状遺構、R B 011 掘立柱建物跡、R B 012 掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は(新) R Z 012 馬屋状遺構→R Z 010 馬屋状遺構→R B 011 掘立柱建物跡→(旧) R B 012 掘立柱建物跡である。<平面形・規模> 東西に長い隅丸長方形を呈する。辺の長さは 5.52×3.83 m、壁高は 33 cm である。

<埋土> 4 層に細分される。上層は黄褐色土ブロックや拳大の礫を多量に含む黒褐色土、中層は炭粒や炭魂を含む黒褐色土とともに埋め戻されている。最下層は粘性に富む黄灰褐色土で、IV 層砂質シルトを覆うように張られている。<壁・床・その他の施設> 床は前述の黄灰褐色土が張られており、おおむね平坦である。壁はやや内湾気味に立ち上がるが、東辺中央部がごく緩やかである。この部分には木の杭が 4 カ所に打ち込まれている。また、北側の壁面、本遺構より古い R Z 010 馬屋状遺構と重複する部分には壁に沿って 9 カ所に杭が打たれ、そのうち最も西側の部分には杭と杭の間に土留めと思われる板、横木が渡されている。おそらく、壁の崩壊を予防するためと思われる。遺構に伴うと考えられる柱穴は検出できなかった。

<遺物・時期> 埋土中から砥石 1344、陶磁器 1357、石臼 1385 が出土している。その他、スコップの先と思われる鉄製品、近世から近代に属すると思われる陶磁器、ガラスが出土した。これらの遺物から本遺構は近世～近現代に属すると考えられる。(金子)

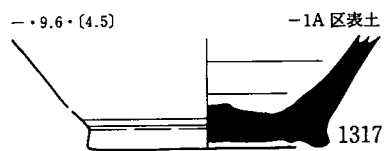
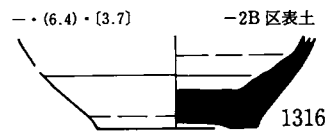
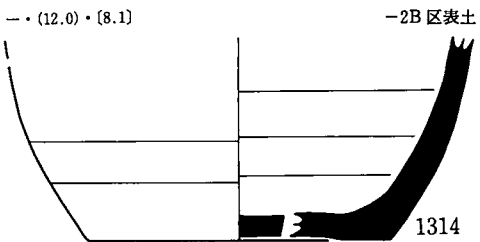
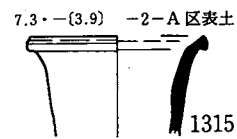
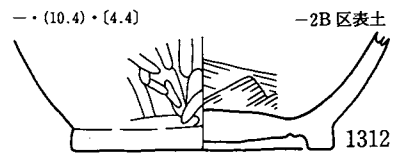
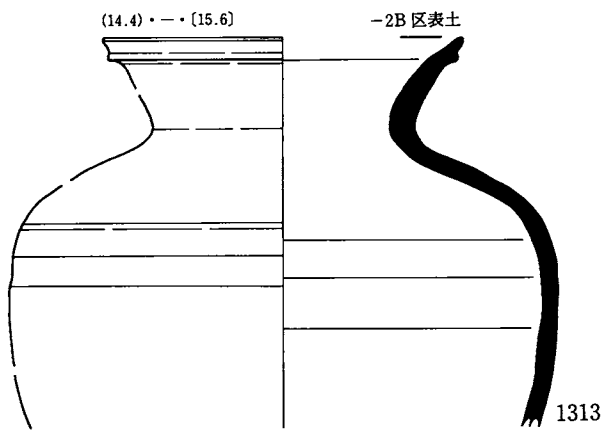
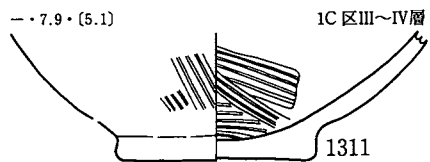
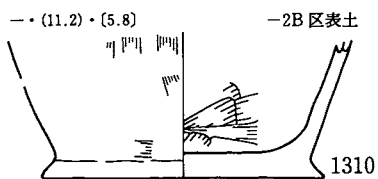
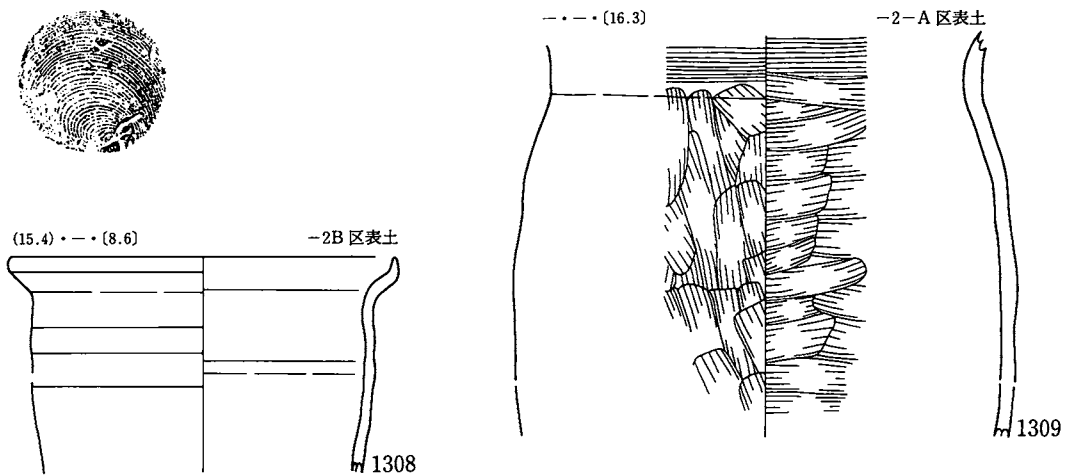
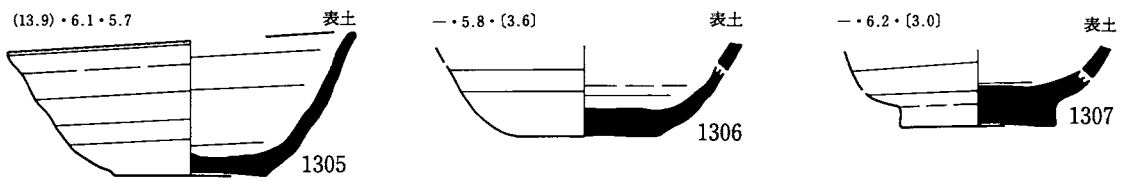
## 15. 遺構外出土遺物

遺構外からは土器、鉄製品、土製品、石製品、石器、陶磁器、古銭(第 361～371 図、写真図版 306～315)が出土している。土器は 1280～1329 が奈良・平安時代の土師器・須恵器(坏・高台坏・長頸瓶・甕・球胴甕・大甕)、1428～1442 が縄文時代後～晩期の土器破片である。縄文時代の遺物の多くは奈良・平安時代の遺構埋土中から出土している。鉄製品は 1335 が鋤先、1331・1388 が釘、1330・1332・1335・1337・1339 が刀子、1349・1399 が煙管(近世～近代)である。1341 は一部欠損した土製の紡錘車である。石製品は 1345 が敲石、1346 が石皿、1404～1427 は剥片石器類である。1352～1384 は陶磁器破片で、碗・皿・甕・蓋・德利・壺・消し壺等の器種が見られる。古銭は 1386・1387 が北宋銭、1388～1392 が寛永通寶である。(高橋)



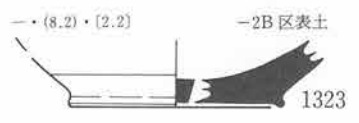
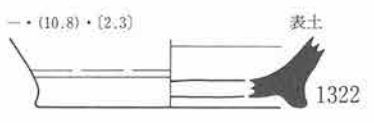
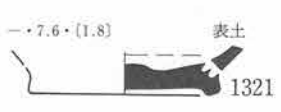
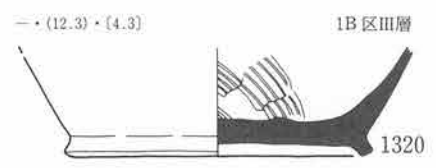
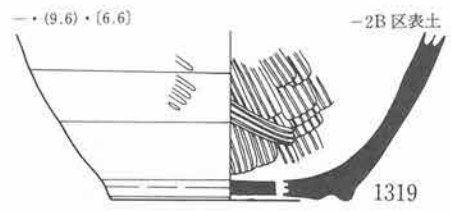
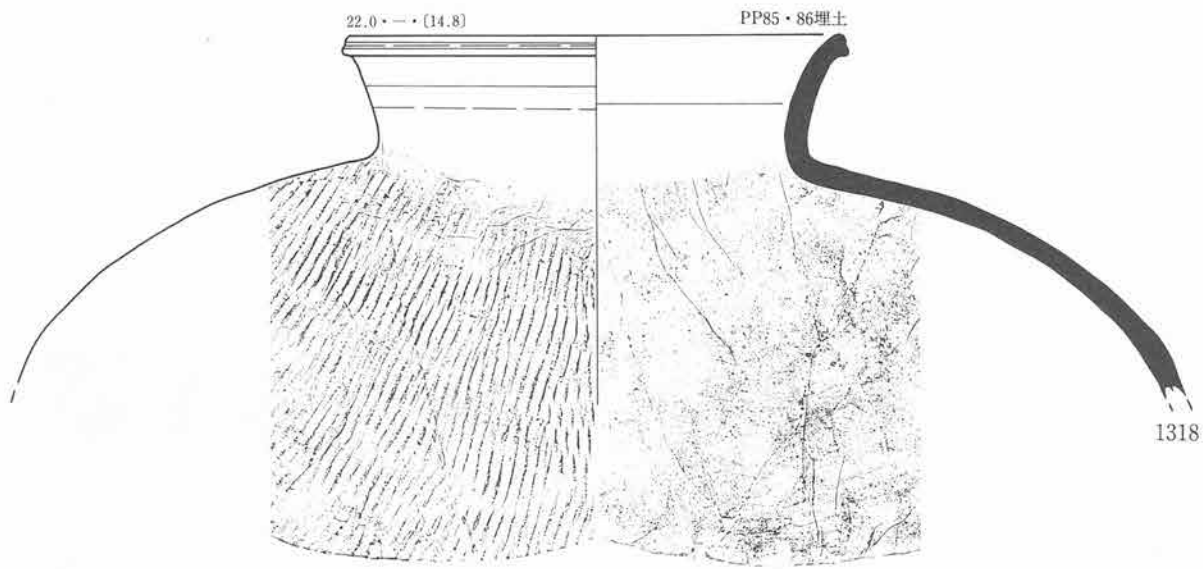
S=1/3

第361图 遺構外出土遺物(1)

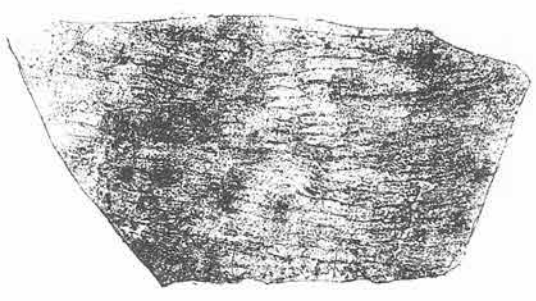
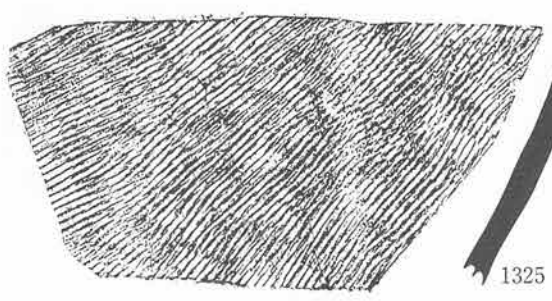
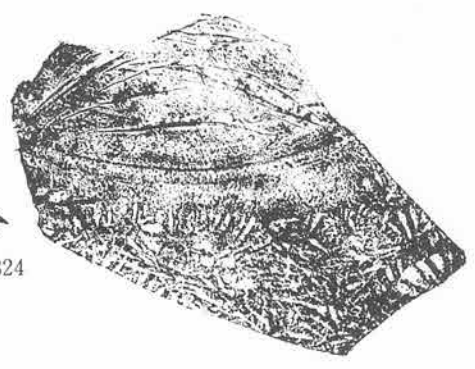
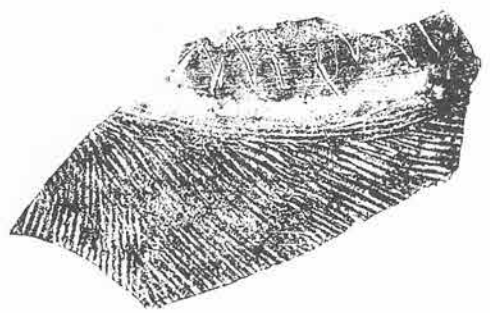


S=1/3

第362図 遺構外出土遺物(2)

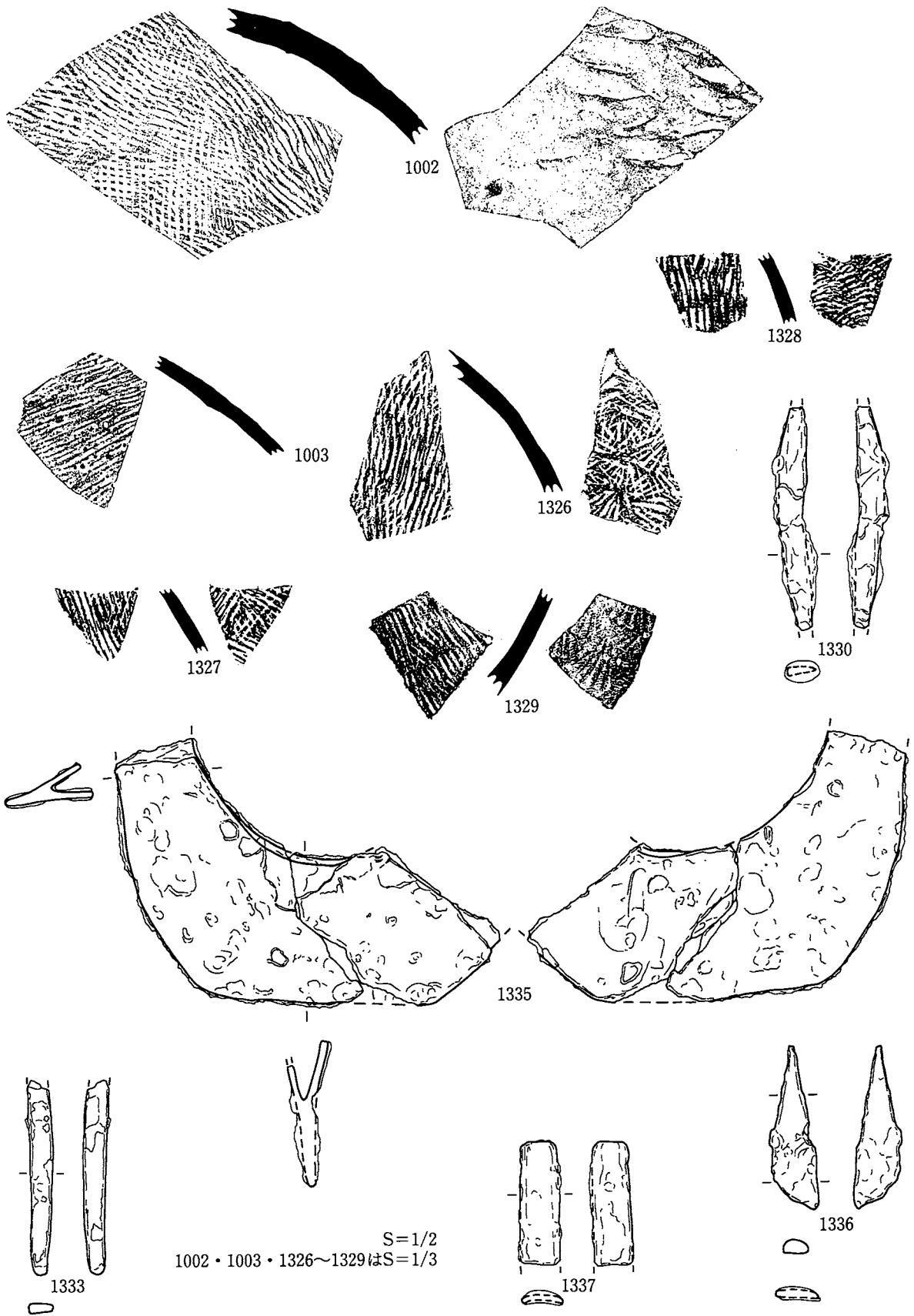


S=1/3



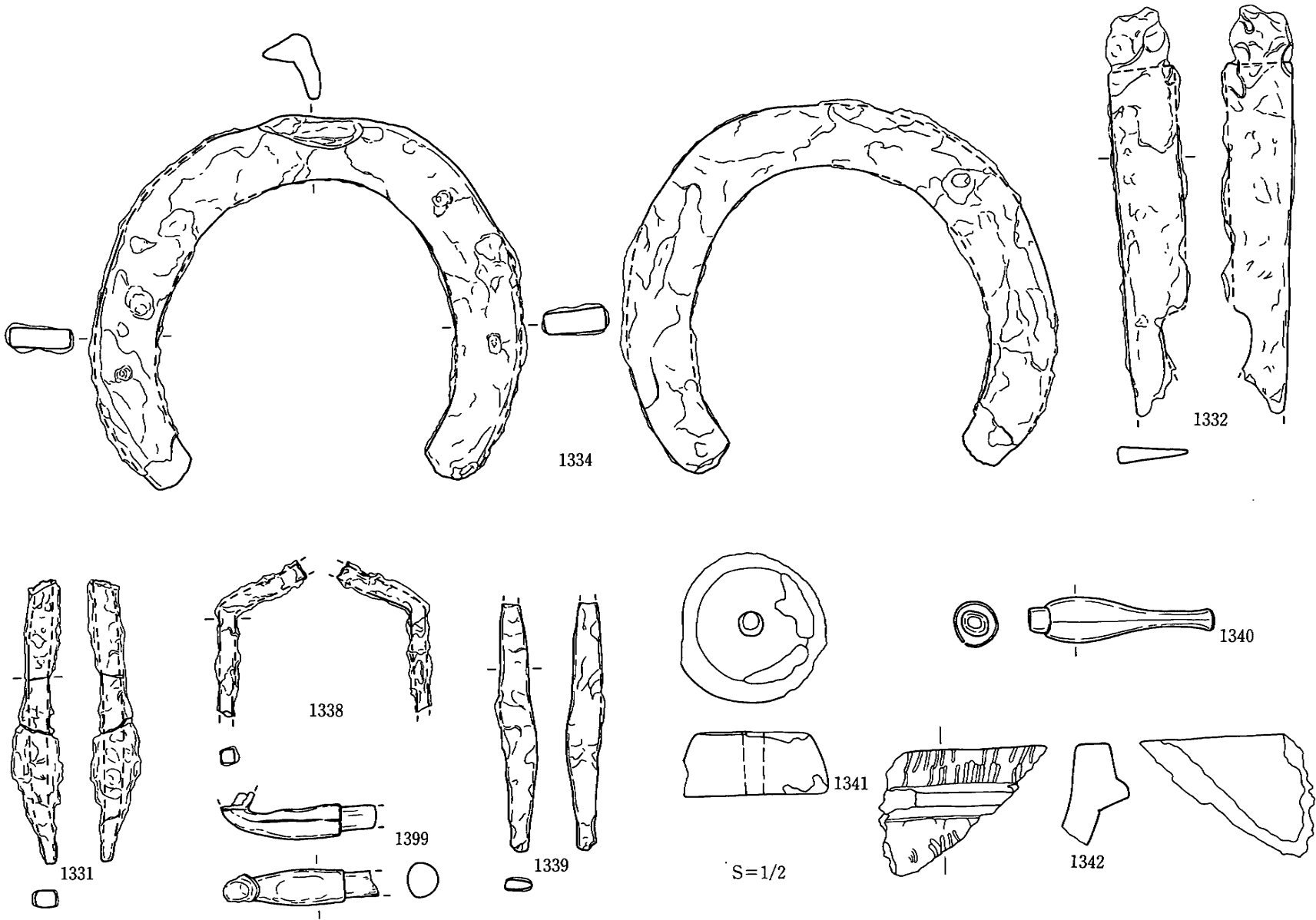
第363图 遺構外出土遺物(3)

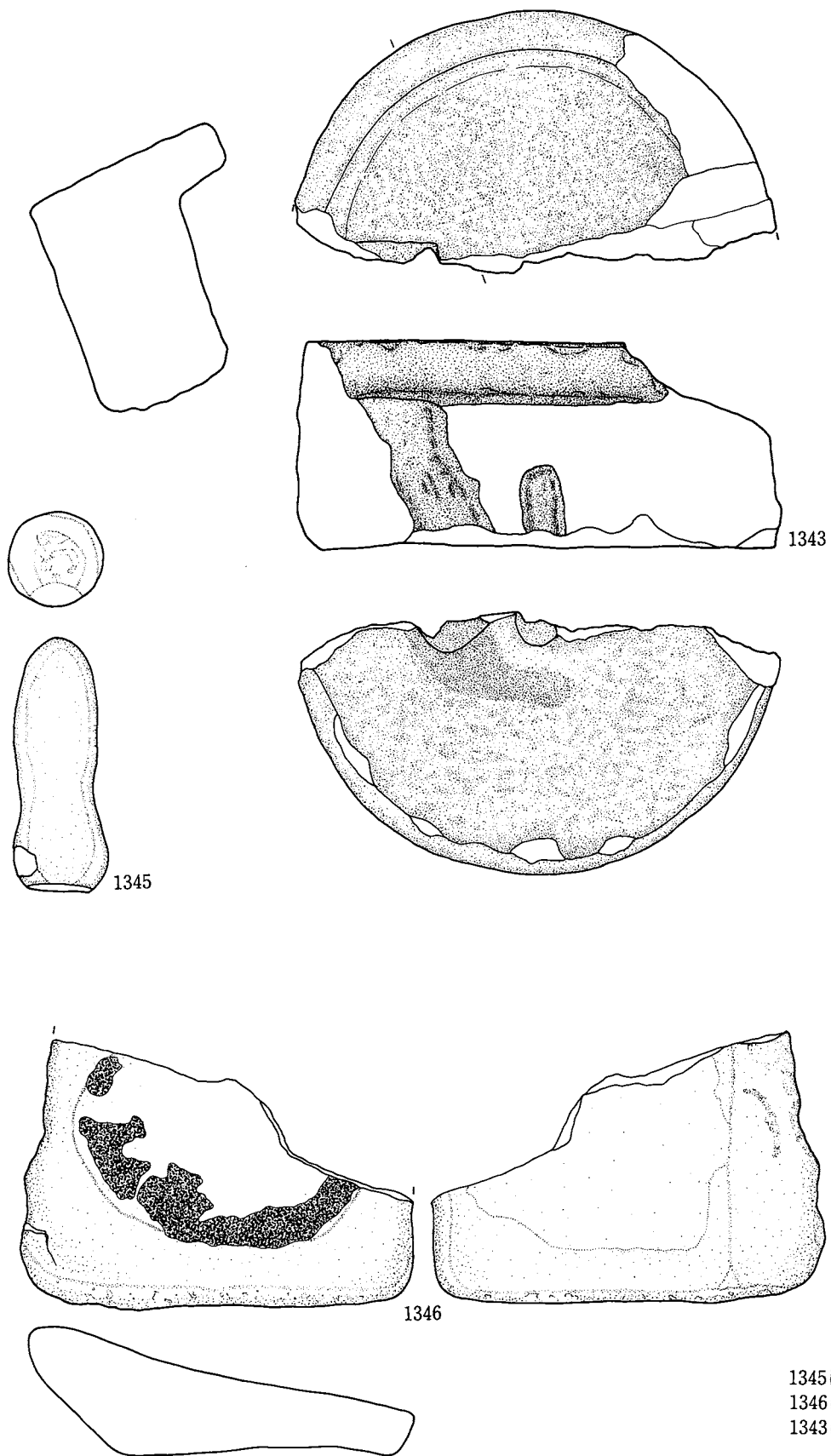




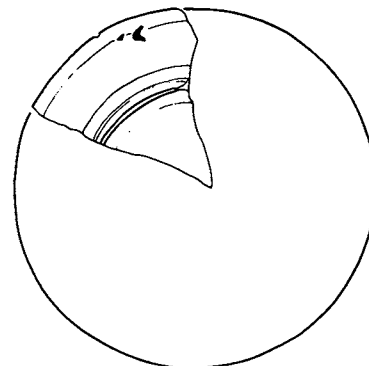
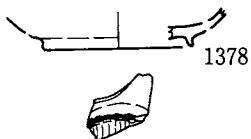
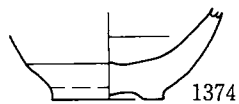
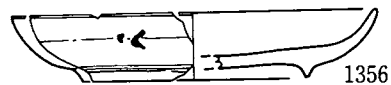
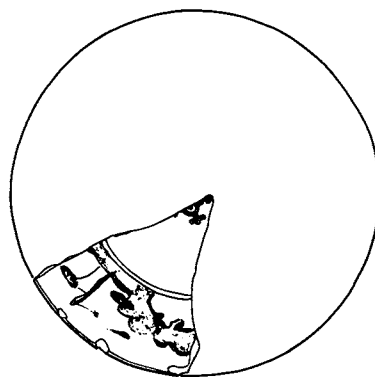
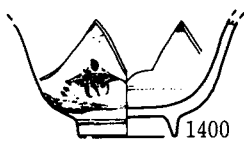
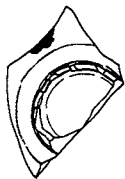
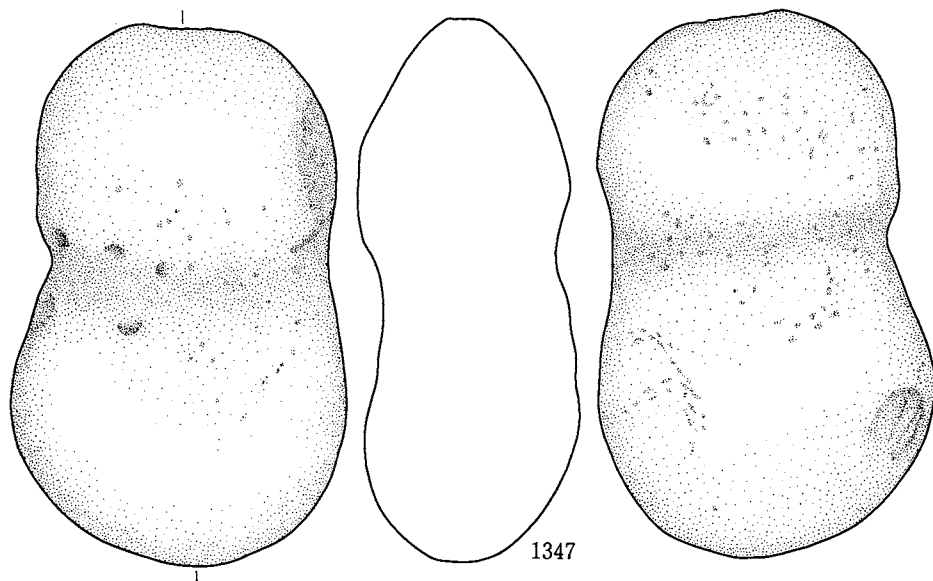
第364図 遺構外出土遺物(4)

第365图 遗物出土(5)



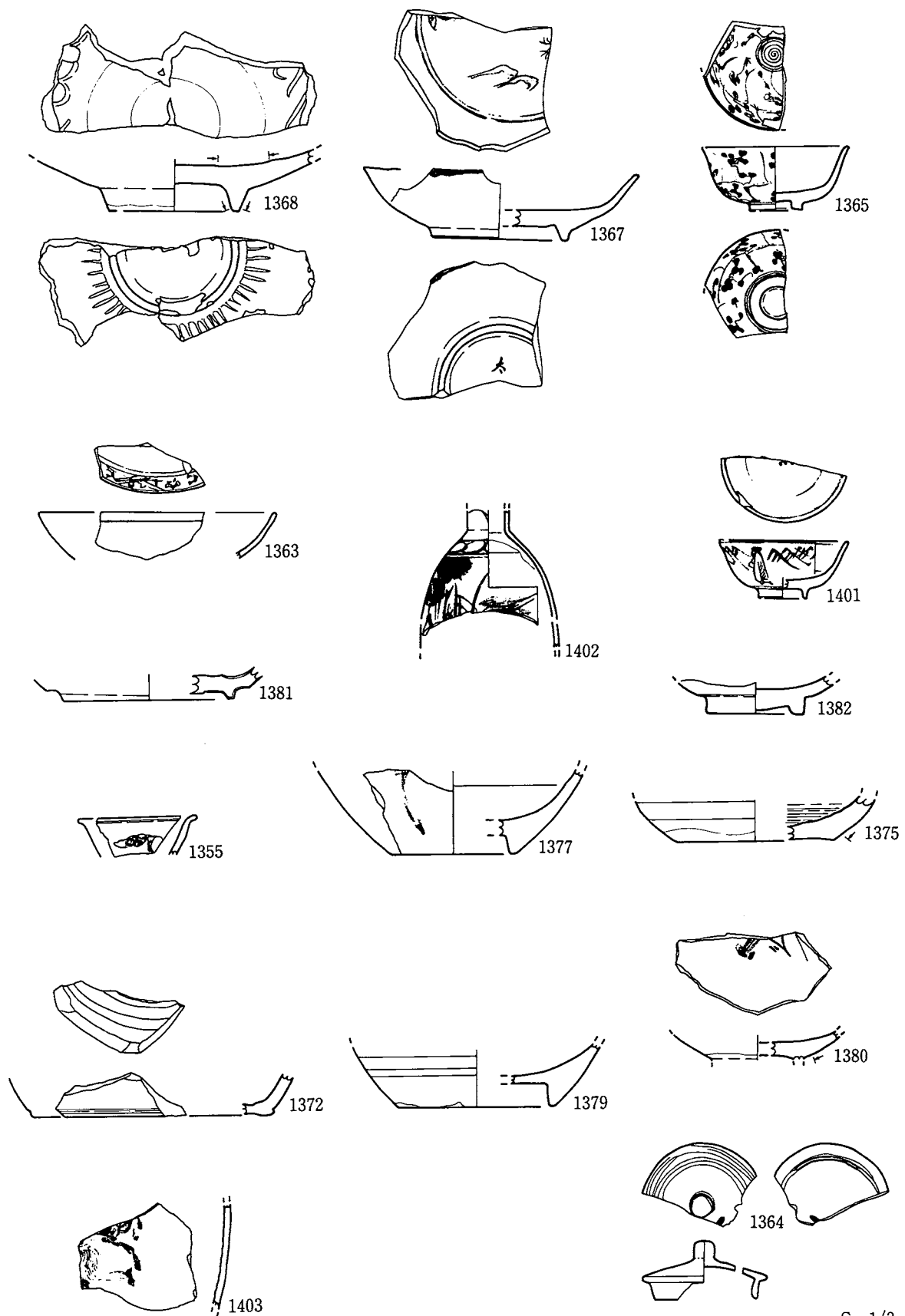


第366図 遺構外出土遺物(6)



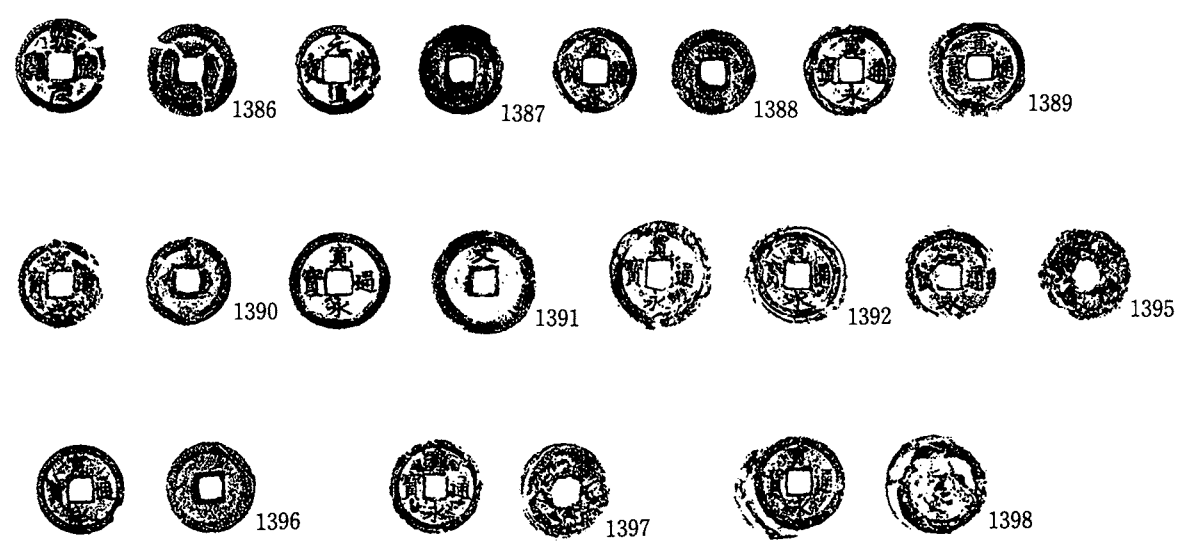
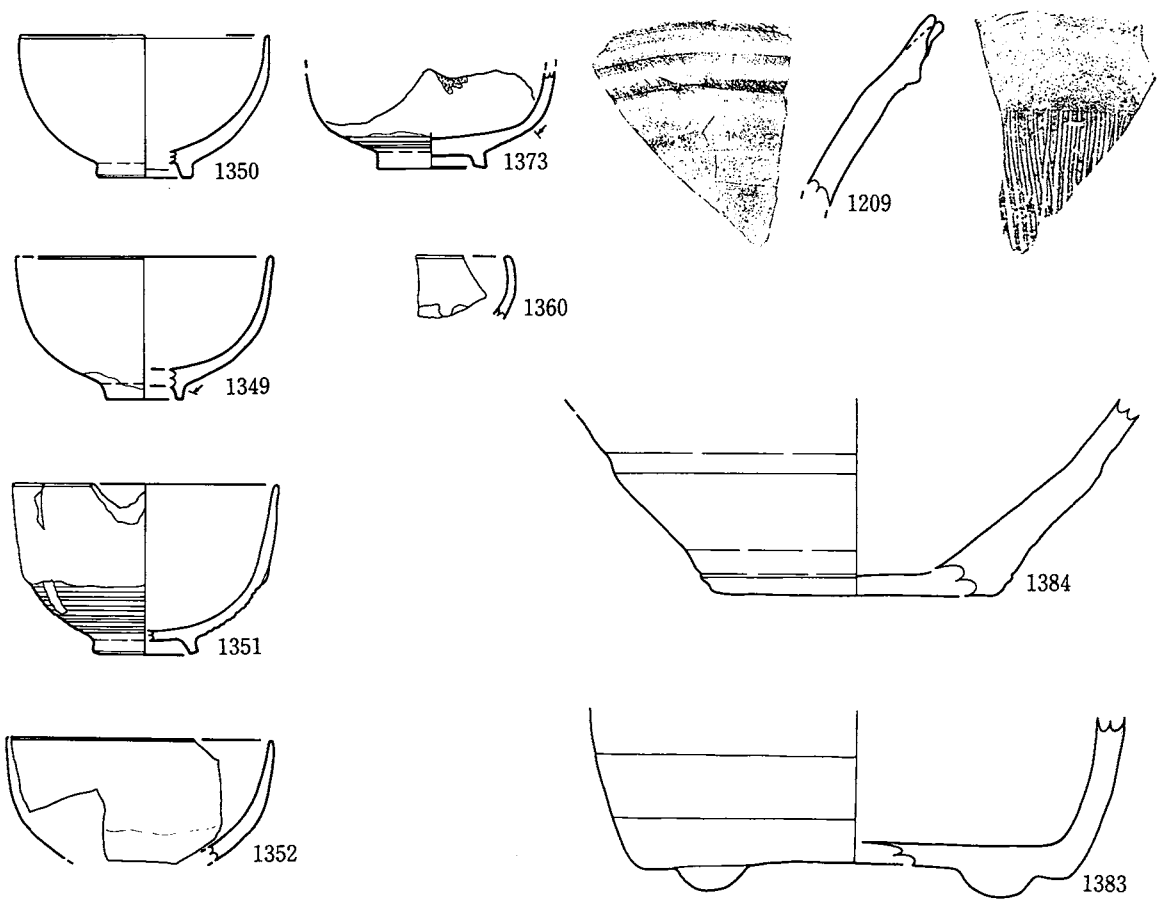
第367図 遺構外出土遺物(7)

S=1/3



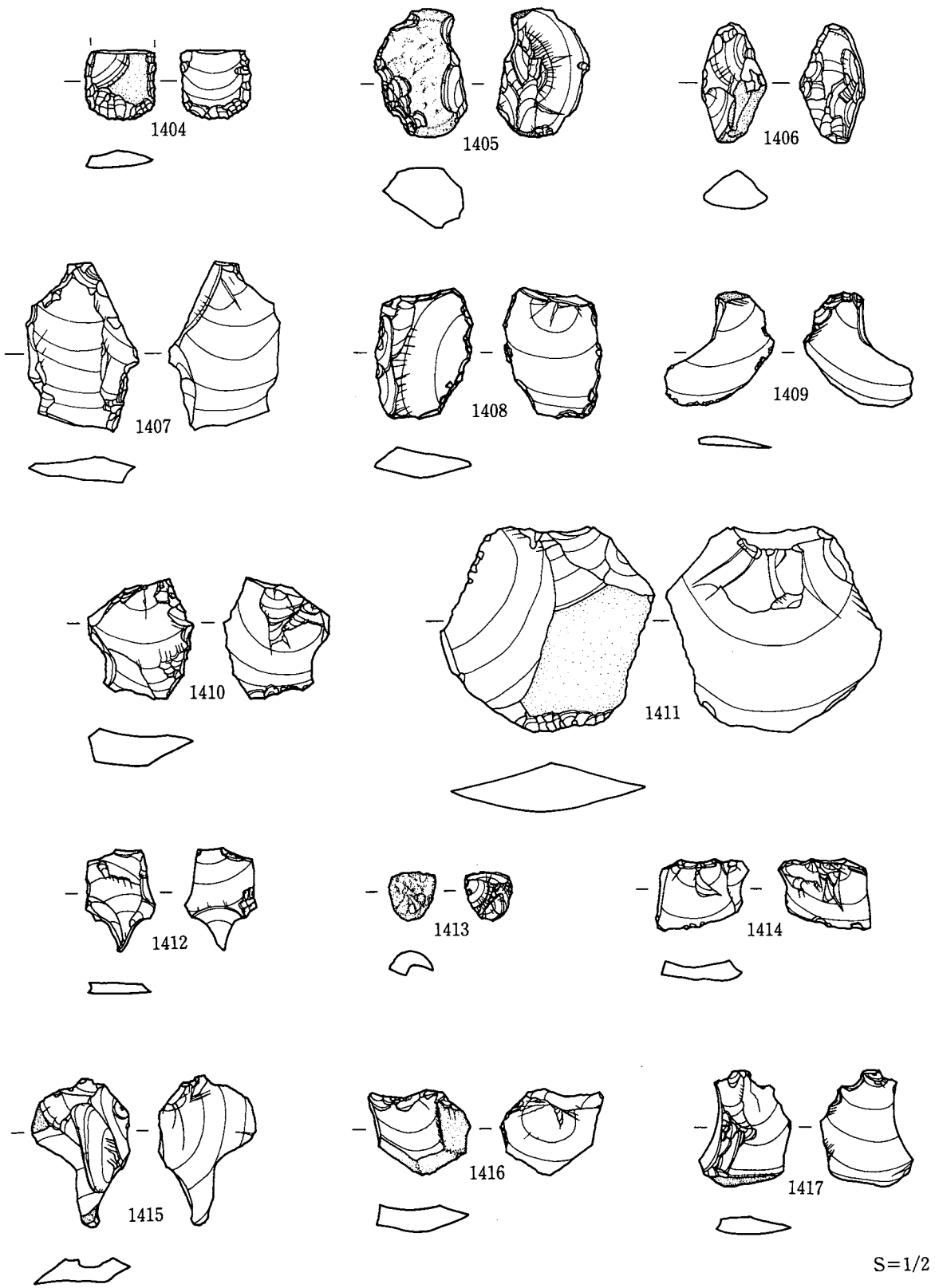
第368图 遺構外出土遺物(8)

S=1/3

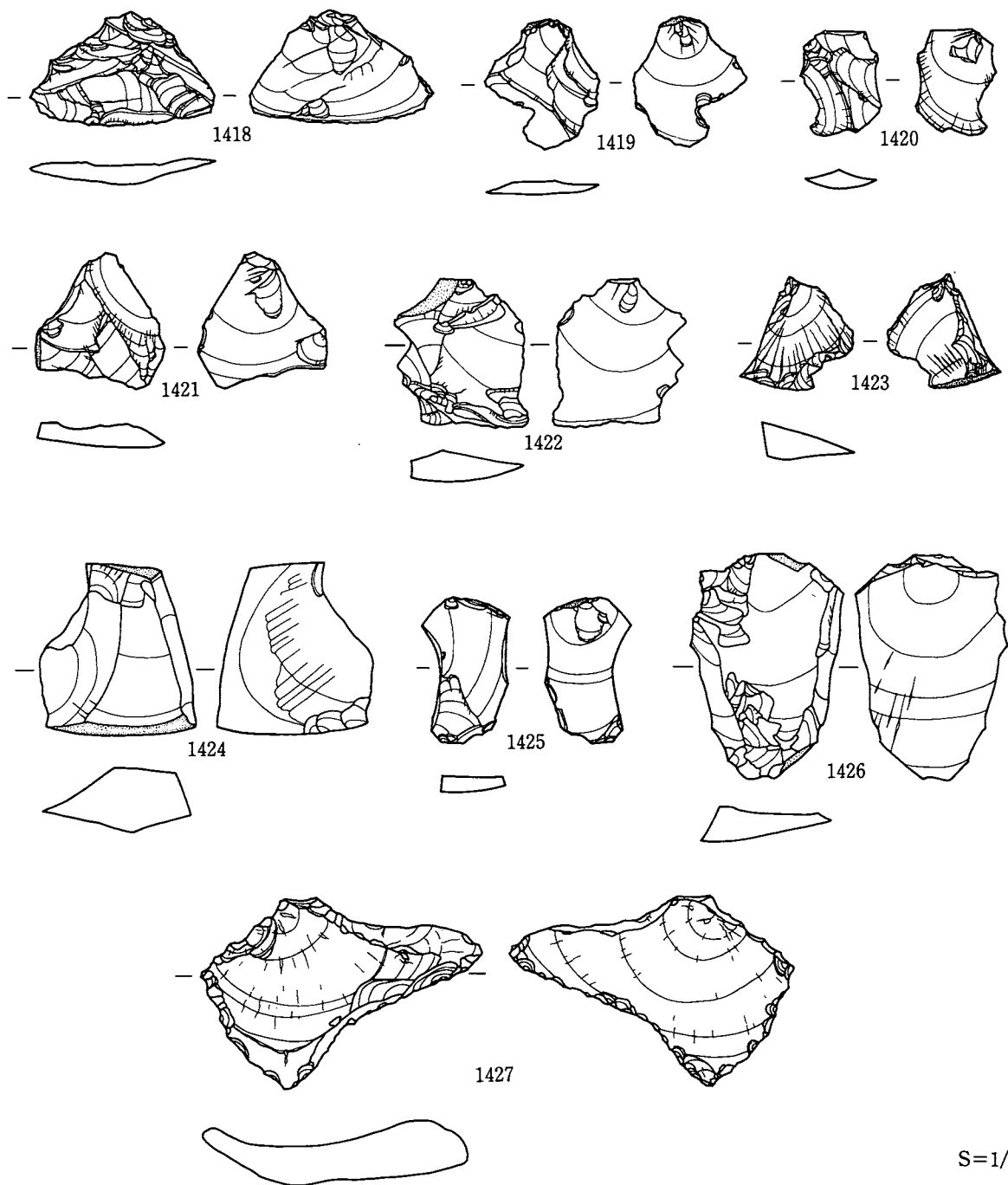


1386~1392・1395~1398は S=1/2  
 他は S=1/3

第369図 遺構外出土遺物(9)

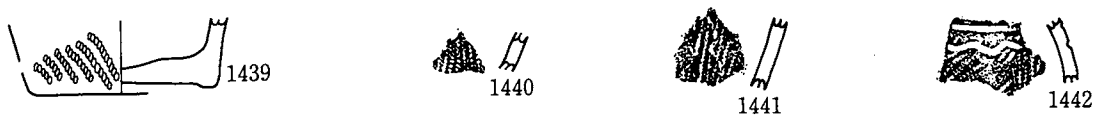
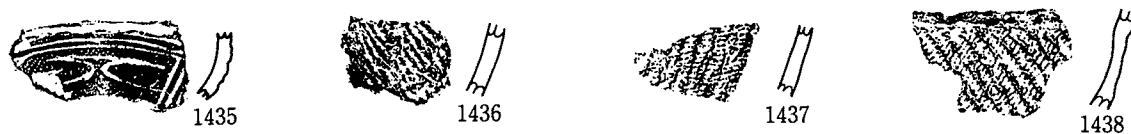
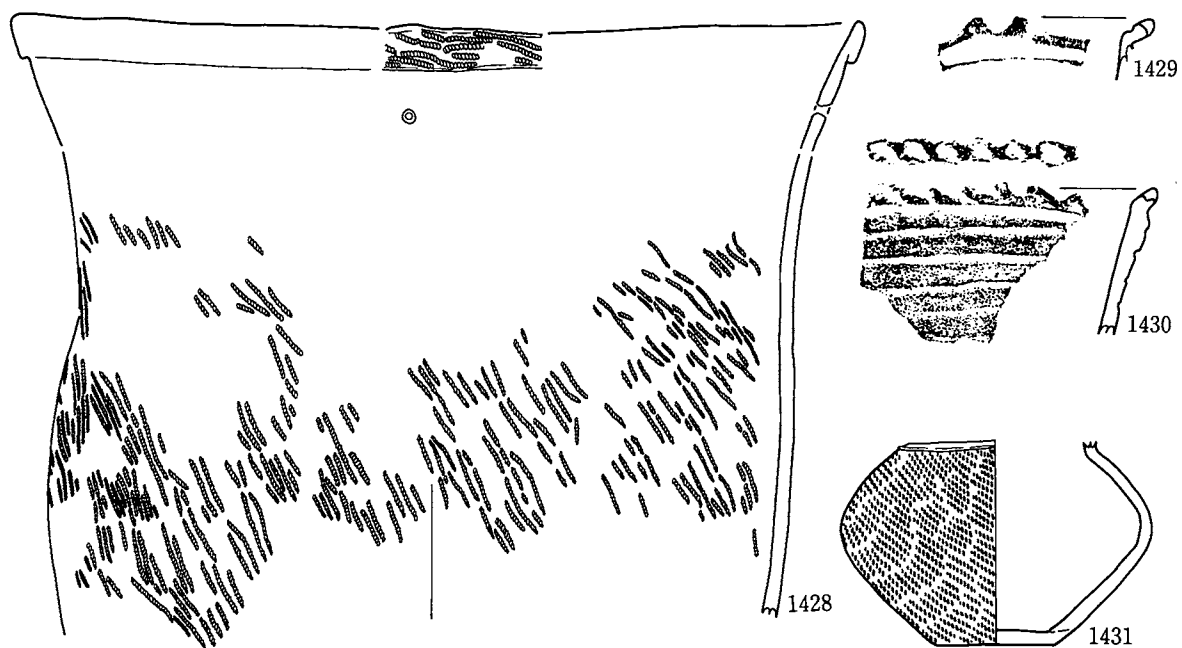


第370图 遺構外出土遺物(10)



第371図 遺構外出土遺物(11)





S=1/3

第372图 遺構外出土遺物(12)

第13表 奈良堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(1)

No.	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考	
1	9	RA 099	床下/Na7	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ	(15.4)	-	4.9	I A a	内黒処理、体部内外面に段がある	
2	13	〃	カマド上部	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ケズリ/ハケ・ケズリ	ヘラナデ	(14.0)	5.6	13.7	A II	磨減が著しい、煤付着	
3	12	〃	床上/甕Na1	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	(16.2)	(7.1)	[19.0]	A II	口縁~底部1/4現存、煤付着	
4	10	〃	床上/甕Na2	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	20.7	8.2	25.6	A II	完形、内外面磨減が著しい	
5	11	〃	床上/甕Na7	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	20.5	7.8	30.4	A II	完形、内外面磨減大、胎土に砂と石を多く含む	
6	56	RA 117	埋土中~下位	土師器/手捏ね	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	6.0	3.8	5.2	A II	小型の手捏ね土器、胎土に砂を含む	
7	57	〃	床	土師器/甕	非ロクロ	-	ヘラミガキ/ヘラナデ	-	-	-	[22.5]	A II	口縁部と底部を欠損、内外面に磨減している	
8	58	〃	埋土中~下位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	-	[9.9]	-	中世陶器口縁部破片、流れ込み	
9	59	RA 118	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラナデ	(16.2)	-	[5.1]	I A a	内黒処理、体部下段有り、胎土に金雲母が混入	
10	62	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(17.0)	-	[15.6]	A II	底部欠損、口縁部2/3現存、磨減している	
11	60	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ヨコ	ヘラケズリ/ハケメ	-	19.4	-	[13.3]	A II	底部欠損、胎土に金雲母を多く混入する	
12	61	〃	P4	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(19.4)	-	[21.4]	A II	底部欠損、口縁部2/3現存、胎土に金雲母を含む	
13	63	〃	カマド焚き口	土師器/甕	非ロクロ	-	ヘラナデ/ヘラナデ	-	-	-	[20.1]	A II	口縁部と底部を欠損、磨減が著しい	
14	65	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	-	ヘラナデ/?	ヘラナデ	-	7.0	[8.9]	A II	底部破片、内外面磨減が著しい	
15	64	〃	カマド焚き口	土師器/壺	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(16.4)	-	[15.0]	A II	口縁部1/2現存、胎土に金雲母が混入	
19	737	RA 121	P9	土師器/小型坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラナデ	10.0	5.5	3.4	I B b	内黒処理、底部に十字の線刻	
20	738	〃	P3	土師器/高坏	非ロクロ	-	ヘラナデ/ヘラナデ	-	-	10.1	[3.3]	-	高坏の台部破片、焼成良好	
21	95	〃	P17	土師器/鉢?甕?	非ロクロ	ハケメ/ヨコナデ	ハケメ/ヘラナデ	ヘラナデ	11.1	6.6	11.3	A II	口縁部一部欠損、胎土に金雲母を含む	
22	91	〃	P20	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ヘラナデ	-	13.2	-	[8.5]	A II	底部欠損、胎土に金雲母を含む	
23	777	〃	P8	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	14.0	-	[10.7]	A II	底部欠損、外面に煤付着	
24	93	〃	カマド周辺/P7	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/	-	17.3	-	[11.9]	A II	底部欠損、全体に焼成を受け磨減している	
25	775	〃	カマド袖	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコ・ハケメ	ハケメ/ハケメ	-	(18.0)	-	[15.5]	A II	口縁~体部破片、胎土に砂と石を多く含む	
26	87	〃	カマド/P18・19	土師器/甕	非ロクロ	ナデ・ヨコナデ/ヨコ	ハケメ/ケズリ・ハケメ	ヘラナデ	(17.5)	6.8	27.4	A II	口縁部1/4現存、全体に磨減が著しい	
27	92	〃	カマド袖	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(17.2)	-	[13.7]	A II	口縁部1/3現存、内外面とも磨減が著しい	
28	90	〃	カマド袖	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	-	(14.1)	-	[12.0]	A II	底部欠損、口縁部1/2現存、磨減している	
29	96	〃	カマド袖	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/	-	15.8	-	[12.8]	A II	底部欠損、内外面とも磨減している	
30	89	〃	P15	土師器/甕	非ロクロ	-	ヘラナデ/	-	-	7.4	[6.2]	A II	底部破片、内面磨減が著しい	
31	776	〃	カマド	土師器/甕	非ロクロ	-	ヘラナデ/ヘラナデ	-	-	7.6	[18.7]	A II	器形の歪みが大きい、胎土に砂と石を多く混入	
32	97	〃	埋土	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ハケ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	22.0	8.2	28.0	A II	内外面とも磨減が著しい、胎土に砂と石を多く含む	
33	835	〃	P11	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケ/ヨコ	ハケメ・ヘラミガキ/ハケ	-	15.8	(8.0)	23.4	A II	外面磨減が著しい、胎土に砂と石を多く含む	
34	94	〃	P7	土師器/甕	非ロクロ	-	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	8.0	[12.3]	A II	口縁部欠損、焼成を受け磨減している	
35	88	〃	埋土	土師器/長頸瓶	非ロクロ	-	ヘラミガキ/ヘラナデ	ヘラナデ	9.1	5.3	21.7	A	焼成良好、口唇部に浅い沈線が通っている	
36	86	〃	P16・17	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ヘラナデ	-	(18.0)	-	17.1	A II		
37	774	RA 122	カマド付近	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	木葉痕	(16.5)	8.0	[24.0]	A II	口縁部1/3現存、内外面磨減が著しい	
38	101	RA 123	埋土Q2 / 3層	土師器/坏	非ロクロ	ナデ・ハケ/ヨコ・ミガキ	ヘラナデ・ハケメ/ミガキ	-	23.1	-	5.9	I A a	外面に沈線、丸底	
39	100	〃	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ・ナデ	-	21.3	-	[18.7]	A II	頸部に格子状の沈線文	
40	99	〃	床上	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ・ハケ/ナデ・ハケ	ハケ・ケズリ/ナデ・ハケメ	-	19.9	8.8	31.6	A II		
41	102	〃	埋土Q3 / 3層	土師器/甕	非ロクロ	-	ヘラナデ/ヘラナデ	-	-	7.4	[3.9]	A II	底部破片	
43	109	RA 124	埋土上位	土師器/坏	非ロクロ	ミガキ・ナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ	(9.0)	(5.8)	[3.1]	I B b	内黒?	
44	105	〃	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラナデ/ヘラミガキ	ナデ・ミガキ/ヘラミガキ	ヘラナデ	(15.1)	(6.4)	4.5	I B b	内黒処理、胎土に金雲母を含む	
45	108	〃	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	内外ナデ・ミガキ	ハケ/ハケ	-	(16.7)	-	[19.9]	A II	口縁部に段、胎土に金雲母を含む	
46	107	〃	床上Q1ア	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコ・ナデ	ナデ・ミガキ/ナデ・ハケ	-	17.1	-	[14.4]	A II		
47	103	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコ・ナデ	ナデ・ハケ/ナデ・ハケ	-	(17.2)	25.9	6.8	A II	胎土に砂と小石を少量含む	
48	104	〃	埋土下位	土師器/手捏ね	非ロクロ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	5.9	-	4.1	-	-	胎土に金雲母を含む
49	106	〃	埋土	土師器/高坏	非ロクロ	-	ナデ/ミガキ	-	-	-	[3.2]	-	脚部の破片内黒	
51	〃	RA 125	ウQ1壁際	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケ・ナデ/ヘラミガキ	-	10.5	-	3.9	I A a	内黒処理、丸底	
52	1069	〃	Q1埋土中位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ	10.6	-	3.5	I A a	内黒処理、口縁部一部欠損、丸底	
53	1064	〃	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ヨコ・ナデ/ヘラミガキ	ヘラケズリ	10.5	7.0	3.1	I B b	内黒処理、平底	
54	110	〃	埋土上位	土師器/坏	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	(6.0)	[1.4]	A II a	底部破片、磨減が著しい、内黒処理、流れ込み	
55	1067	〃	カマド右袖	土師器/甕	非ロクロ	ハケメ・ヨコ/ヨコ・ナデ・ハケメ	ハケメ/ハケメ	-	19.0	7.5	21.0	A II	体部一部欠損、胎土に金雲母を含む	

第14表 奈良堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(2)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
56	1065	RA125	カマド左袖	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケ/ヨコ	ハケメ/ハケメ	-	(16.4)	-	[9.6]	A II	口縁部1/3現存、焼成良好
57	1068	//	カマド	土師器/甕	非ロクロ	ハケメ・ヨコ/ヨコ	ミガキ・ハケ/ナデ・ハケ	-	(18.7)	7.5	29.5	A II	口縁~底部、体部下半に爪痕有り、金雲母含む
58	1066	//	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	ハケメ・ナデ/ヨコナデ	ナデ・ハケ/ナデ・ハケ	-	(20.6)	7.0	32.4	A II	口縁~底部、口縁部一部残し欠損
59	111	//	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	-	ハケメ/ハケメ	-	-	-	[7.0]	A II	体部破片、砂・金雲母含む、内面におこげ付着
60	135	RA129	カマド/埋土下	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	11.2	7.9	3.6	I B a	内黒処理、外面に段がある
61	134	//	床上カ/埋土下	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ・ケズリ/ミガキ	-	14.2	10.4	4.0	I A a	内黒処理、外面に段がある、1/2現存
62	133	//	床上	土師器/坏	非ロクロ	ナデ・ミガキ/ハケ・ミガキ	ナデ・ハケメ/ヘラミガキ	-	(15.0)	(11.0)	5.7	I A a	内黒処理、外面に段がある、金雲母含む
63	129	//	埋土Q1/3層	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	18.9	-	5.2	I A a	内黒処理、外面に段がある、丸底
64	138	//	P3直上	土師器/手捏ね	非ロクロ	ナデ/ナデ	ナデ・ハケ/ナデ・ハケ	木葉痕	8.9	4.6	4.8	-	-
65	123	//	カマド内	土師器/甕	非ロクロ	-	ミガキ・ハケ/ナデ・ハケ	-	-	7.0	[10.7]	A II	底部破片
66	122	//	床上/埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ミガキ・ハケメ/ナデ・ハケ	-	21.2	7.9	34.2	A II	口縁部内面に段
67	132	//	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ハケメ	ハケメ・ヘラナデ/ハケメ	-	18.3	8.1	20.3	A II	口縁部外面に段
68	131	//	カマド右袖	土師器/甕	非ロクロ	ナデ・ハケ/ヨコナデ	ヘラミガキ・ハケメ/ハケメ	-	-	-	[27.0]	A II	主に下半が火熱で赤化
69	121	//	床上/埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	18.8	-	[22.9]	A II	口縁部内面にかすかに段
70	120	//	床上/埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	木葉痕	(23.8)	8.6	35.4	A II	-
71	136	//	床上/エ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコ・ハケ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	ヘラナデ・ハケメ	15.0	5.6	18.2	A II	底部突出
72	125	//	床上/カ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ハケメ・ナデ	ハケメ/ハケメ・ミガキ	-	(17.2)	-	[18.7]	A II	-
73	126	//	カマド脇	土師器/甕	非ロクロ	ナデ・ハケ/ハケ・ナデ	ハケ・ミガキ/ハケ・ナデ	-	-	-	[20.1]	A II	頸部に段がある、胎土に金雲母を含む
74	124	//	床上/オ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	-	-	[16.0]	A II	頸部に段がある
75	137	//	P3直上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコ・ハケ	ハケメ/ハケメ・ヘラミガキ	-	18.1	8.0	26.8	A II	頸部に2段の段・上段は内面にも段有り、金雲母
76	130	//	埋土上層	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ・ナデ/ヘラナデ	-	(21.0)	-	[10.6]	A II	RD250、1層出土土器と接合口縁部内外に段
77	127	//	カマド上	土師器/甕	非ロクロ	ナデ・ハケ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ・ミガキ	-	(14.4)	-	13.8	A II	頸部に段がある
78	128	//	埋土2層~下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ナデ・ハケ	-	(15.1)	-	[17.2]	A II	口縁部にかすかに屈曲
81	144	RA130	床上/イ	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ/ミガキ	ケズリ	(12.5)	(8.2)	3.0	I B a	内黒処理、1/2現存、平底
82	149	//	埋土下位6層	土師器/坏	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヘラミガキ	ヨコ・ナデ/ヘラミガキ	-	(14.8)	-	5.2	I B a	内黒処理、外面に段がある(3段)、平底
83	155	//	埋土下位6層	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	18.5	-	5.3	I A a	内黒処理、外面に段がある、平底気味
84	146	//	床上/ス・セ	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケメ・ナデ/ヘラミガキ	ハケメ	14.5	-	5.1	I B a	内黒処理、外面に段がある、丸底
85	159	//	床上/ク	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ	14.8	5.8	6.5	I A a	内黒処理、外面に段がある、平底
86	152	//	床上/ア・ス・サ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコ・ハケメ・ナデ	ハケメ/ハケメ	-	(13.9)	6.2	15.0	A II	-
87	142	//	カマド周辺埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ/ハケメ	-	14.1	6.2	17.7	A II	-
88	161	//	床上ア/埋土6層	土師器/甕	非ロクロ	ヘラミガキ/ヨコ・ナデ	ハケメ/ハケ・ナデ・ミガキ	-	10.1	6.9	15.2	A	-
89	154	//	床上/シ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコ・ハケメ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	木葉痕	15.2	6.0	17.2	A II	口縁部内面にかすかに段、底部突出気味、金雲母
90	153	//	床上/ウ・エ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	15.2	7.0	16.5	A II	頸部内面に段・一部二段、底部張り出し
91	160	//	埋土壁際6層	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	(17.7)	(7.5)	24.8	A II	口縁部に段・屈曲
92	140	//	床上/カ・ケ・シ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ハケ・ナデ	ハケメ/ヘラナデ・ハケメ	-	19.3	8.2	28.4	A II	頸部に浅い段がある、金雲母含む
93	158	//	床上カ・セ/6層	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ・ハケ/ヨコ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	18.4	8.0	27.5	A II	胎土に金雲母含む
94	162	//	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ/ハケメ	-	18.9	(9.0)	30.0	A II	胎土に金雲母を多く含む
95	141	//	埋土6層	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(19.7)	-	[25.6]	A II	段がある、RA133埋土出土の土器と接合、金雲母
96	148	//	埋土下位壁際5層	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ・ナデ	-	(15.6)	-	[11.5]	A II	下半欠損、口縁部内面に段
97	156	//	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	15.2	-	[16.3]	A II	頸部に段がある、口縁部かすかに段、底部欠損
98	143	//	埋土/RA133埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ・ナデ	-	(17.4)	-	15.6	A II	段がある、RA133埋土出土の土器と接合、金雲母
99	150	//	埋土下位壁際6層	土師器/甕	非ロクロ	-	ハケメ/ハケメ	ハケメ	-	(7.8)	[11.3]	A II	口縁部欠損
100	164	//	カマド周辺埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケメ・ナデ	-	20.3	-	[26.4]	A II	底部欠損、1/2現存、金雲母含む、体部内面全体に煤
101	147	//	埋土下位壁際6層	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコ・ハケ	ハケ・ナデ/ミガキ・ハケ	-	16.1	6.7	25.2	A II	-
102	163	//	床上/キ	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ハケメ	ナデ・ハケ/ハケ・ナデ	-	18.7	7.6	22.6	A II	金雲母含む、体部外面2/3に煤付着
103	157	//	床上/コ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ヘラナデ	-	(22.2)	-	[22.9]	A II	1/2現存
104	151	//	埋土下位Q3/5層	土師器/甕	非ロクロ	-	ハケメ/ヘラナデ	木葉痕	-	(7.8)	[10.3]	A II	-
105	145	//	床上/オ	土師器/甕?鉢?	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ	-	(9.6)	5.1	6.6	-	-
107	1094	RA132	床上/ケ	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラナデ/ヘラミガキ	ナデ/ミガキ	26.4	-	8.4	I A a	内黒処理、体部に浅い段がある
108	1079	//	Q1埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(21.1)	-	[23.0]	A II	底部欠損、器形の歪みが著しい

第15表 奈良堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(3)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
109	1087	RA132	Q1埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	20.3	(8.0)	30.0	A II	全体に器形の歪みが大きい、金雲母を多く含む
110	1086	〃	Q1埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(17.6)	-	(21.4)	A II	底部欠損、金雲母含む、口唇部に浅い凹
111	1085	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	-	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	8.0	(26.5)	A II	口縁部欠損、外面磨減している、金雲母含む
112	1095	〃	Q1土坑上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	18.4	-	(10.5)	A II	口縁部一部欠損、焼成良好、口唇部に沈線
113	1081	〃	Q1埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ・ミガキ/ハケメ・ナデ	-	(22.0)	-	(20.4)	A II	底部欠損、金雲母含む
114	1080	〃	床上/イ・埋土上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(19.0)	-	(6.8)	A II	底部欠損、磨減している、金雲母含む
115	1078	〃	床上/ワ	土師器/壺	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ナデ?/ヘラナデ	ヘラナデ	10.2	7.4	11.8	A	外面磨減が著しい
116	1082	〃	床上/ア	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ・ミガキ	ハケメ・ミガキ/ハケメ	ヘラナデ	19.0	8.5	27.3	A II	焼成良好、金雲母含む
117	1083	〃	Q1埋土	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ヘラナデ	-	18.6	-	(18.7)	A II	底部欠損、内外面磨減が著しい、金雲母含む
118	1093	〃	床上/ウ	土師器/球胴甕	非ロクロ	-	ミガキ・ナデ・ハケ/ハケ	ヘラナデ	-	8.2	(12.5)	A II	磨減著しい、底部より8cm上の外面に煤、金雲母
119	1088	〃	床上/ワ	須恵器/甕	非ロクロ	-	-	-	-	-	-	B	拓本
123	168	RA133	カマド左袖	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(18.7)	-	(9.5)	A II	口縁部破片
124	166	〃	P5内/エ	土師器/甕	非ロクロ	ハケメ・ヨコ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(16.3)	-	(17.8)	A II	頸部に段がある、口縁部に屈曲、金雲母少量
125	167	〃	カマド	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ/ハケメ	-	17.4	7.6	27.9	A II	頸部段がある、口縁部段、口唇部に部分的に沈線
126	165	〃	床上/イ	土師器/球胴甕	非ロクロ	ハケメ・ヨコ/ハケメ・ヨコ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	18.3	-	(12.1)	A II	体~口縁部破片、口唇部に部分的に沈線
127	169	〃	壁際	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ・ミガキ	-	(21.4)	-	(22.6)	A II	頸部に段がある、口唇部に浅い沈線
128	174	RA135	埋土中位	土師器/坏	非ロクロ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラミガキ	-	(16.0)	-	(4.6)	I A a	内黒処理、内面剥落が著しい、底部欠損
129	179	〃	カマド右袖	土師器/坏	非ロクロ	/ヘラミガキ	/ヘラミガキ	-	(13.2)	(5.7)	5.2	I A	内黒処理、底部欠損
130	175	〃	カマド上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ・ナデ	-	(18.1)	-	(7.7)	A II	口縁部1/3現存、焼成良好
131	178	〃	床上	土師器/甕	非ロクロ	ハケメ/ハケメ・ヨコ	ハケメ・ナデ/ハケメ	ヘラナデ	(18.0)	6.6	25.3	A II	1/3現存、全体に器形の歪みが大きい
132	176	〃	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	-	ハケメ/ハケメ・ナデ	ヘラナデ	-	7.0	(7.2)	A II	底部破片
133	177	〃	埋土中位	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケ/ヨコ	ハケメ/ハケメ	-	(22.0)	-	(17.5)	A II	口縁部1/5現存、内外面磨減している
134	753	RA139	埋土上~中位	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	-/ヘラナデ	ヘラナデ	15.1	6.1	5.1	I B b	口縁部2/3現存、器形の歪みが大きい
135	751	〃	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコ・ナデ	ヘラナデ/ハケメ・ナデ	-	(22.1)	-	(18.4)	A II	口縁~体部破片、内外面磨減が著しい
136	752	〃	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ヨコ	ヘラナデ/ハケメ	-	(16.1)	-	(11.4)	A II	口縁~体部1/3現存
137	750	〃	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	-	(21.1)	-	(27.2)	A II	底部欠損、口縁部1/2現存
140	209	RA140	埋土/ウ	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ミガキ・ハケメ/ミガキ	-	11.2	-	4.7	I A a	底部に刻印、丸底、内外面に段
141	208	〃	床上/イ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	19.3	-	(20.5)	A II	頸部に段、口縁部外面に3条の沈線、金雲母
142	210	〃	埋土/エ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ	-	21.2	7.3	31.4	A II	頸部に段、頸部に鋸歯状沈線、口縁外面に沈線
143	211	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	-	ミガキ・ナデ/ヘラナデ	-	-	-	(15.8)	A II	破片
144	207	〃	P4埋土/ア	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコ・ハケ	ハケ・ナデ/ハケナデミガキ	-	19.7	6.2	25.9	A II	金雲母含む
145	213	RA141	床上/イ	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ヨコ・ハケ・ミガキ/ミガキ	ハケメ・ミガキ	12.8	8.7	3.6	I A b	内黒処理、金雲母含む
146	223	〃	埋土中位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ナデ・ミガキ?	-	8.0	5.1	I A b	内黒処理
147	225	〃	埋土	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ・ナデ	ナデ	17.3	7.1	5.5	I A b	内黒処理、丸底、体部外面下端にかすかな段・沈線
148	220	〃	床上・埋土上位	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ヨコ・ハケ/ヘラミガキ	ナデ・ミガキ	15.0	8.0	4.3	I A b	内黒処理
149	219	〃	床上/カ・埋土	土師器/坏	非ロクロ	ヨコ・ミガキ/ヨコナデ	ハケ・ミガキ/ズリ/ハケ・ミガキ	ハケ・ミガキ	11.8	6.3	4.4	I A b	
150	221	〃	埋土下位・6層	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ナデ・ミガキ	15.4	12.5	3.3	I B b	内黒処理、平底、体部下端にかすかな段
151	224	〃	埋土上位・6層	土師器/坏	非ロクロ	ミガキ・ヨコ/ヘラミガキ	ヨコナデ/ヘラミガキ	-	15.1	-	(4.6)	I A a	内黒処理、内外面に段がある
152	234	〃	埋土	土師器/甕?	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコ・ナデ	ハケ・ナデ/ナデ・ハケ・ミガキ	-	(20.1)	-	(20.0)		破片、金雲母含む
153	216	〃	床上/エ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	19.2	7.7	25.9	A II	胎土に砂を含む
154	212	〃	床上/ア	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ/ナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	21.9	8.6	24.1	A II	口唇部に深い沈線
155	232	〃	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ・ハケ/ハケ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	(22.9)	-	(23.1)	A II	破片、体部下外面に煤付着
156	226	〃	床上/オ・キ	土師器/甕	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラナデ	-	18.0	-	16.4	A II	金雲母を多く含む
157	214	〃	床上/イ・エ・埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコ・ナデ・ハケ	ハケ・ナデ/ナデ・ハケ	-	(19.6)	-	(19.0)	A II	
158	229	〃	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	19.6	-	(18.2)	A II	口唇部平~凹
159	227	〃	埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケメ	-	16.0	-	(16.5)	A II	部、口唇部に段、内面に屈曲がある、金雲母含む
160	215	〃	床上/ウ・埋土中	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコ・ハケ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	(17.5)	-	(19.4)	A II	金雲母含む
161	228	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	16.6	-	(12.0)	A II	頸部段、口縁部段と沈線、口唇部浅い沈線、金雲母含む
162	218	〃	床上/埋土上~下	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケ・ナデ	-	-	-	(13.4)	A II	金雲母を少量含む
163	233	〃	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ・ミガキ/ハケ・ミガキ	木葉痕	-	(10.0)	(29.0)	A II	破片

第16表 奈良堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覽(4)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
164	217	RA141	床上/エ・埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	ヘラナデ	-	9.2	11.2	A II	
165	235	カマド上位	土師器/長胴甕	非ロクロ	- / -	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ			-	-	23.8	A II	内面の輪郭も痕跡に残る。残存部上端開き気味
166	230	床上/ア	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ		(18.8)	-	8.5	A II	口縁部破片	
167	222	カマド袖上・埋土	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ミガキ・ナデ/ナデ・ミガキ		19.2	-	18.7	A II	口縁部に屈曲、口唇部に沈線	
168	231	埋土	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ミガキ・ハケ/ナデ・ハケ・ミガキ	ミガキ	(22.0)	-	20.8	A II	1/2現存	
178	237	RA142	床上/ウ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	ナデ	18.3	8.4	30.9	A II	口唇部に沈線、金雲母少量含む
177	244	壁際	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ミガキ・ナデ/ヘラミガキ	ナデ	(15.2)	-	6.0	I A a	内黒処理、体部下半内外面に段	
179	240	床上/カ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコナデ	ハケメ/ハケ・ナデ		20.0	-	18.0	A II	口唇部平~浅い凹、金雲母含む	
180	238	床上/エ・カ/P1埋	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	ナデ	18.8	8.7	27.4	A II	口唇部に沈線、金雲母含む	
181	239	床上/オ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケ・ナデ	ナデ	19.5	8.5	28.0	A II	口唇部に沈線、金雲母含む	
182	243	P5/埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	ナデ	-	6.6	7.0	A II	底部破片、金雲母少量含む	
183	241	カマド支脚	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケ・ナデ		-	(6.6)	5.0	A II	底部破片、火熱で赤化、煤付着、胎土に砂含む	
184	236	床上/イ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコ・ナデ	ナデ・ハケ/ナデ・ハケ		(22.0)	-	16.2	A II	口唇部に沈線、金雲母含む	
185	242	P1	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ナデ/ヨコ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ		15.4	-	11.4			金雲母少量含む
189	693	RA143	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ナデ		-	7.3	3.7	A II	底部破片、剥落が多い
190	245	床上	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケ・ナデ		(19.6)	-	16.5	A II	破片、口唇部浅い凹	
191	246	RA145	壁際/ア	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ミガキ・ケズリ/ミガキ	ケズリ・ナデ	(15.8)	-	4.0	I A a	内黒処理、内外面に段がある
192	248	埋土/ウ	土師器/坏	非ロクロ	ミガキ/ヘラミガキ	ミガキ/ミガキ・ナデ	ハケメ・ナデ	(12.8)	-	4.0	I B a	内黒処理、外面に段がある、金雲母含む	
193	249	床上/カ	土師器/高坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ミガキ・ナデ/ハケメ/ミガキ・ナデ	ナデ・ミガキ	17.2	10.2	11.1			内黒処理、内外面に段がある
194	247	カマド左袖	土師器/球胴甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ナデ・ハケ	ナデ	-	7.8	5.9	A II	底部破片、胎土に砂を含む	
196	250	RA146	カマド	土師器/坏	非ロクロ	ヨコ・ミガキ/ヘラミガキ	ミガキ・ケズリ/ミガキ	ナデ・ミガキ	10.8	-	4.6	I A b	口縁部内面に黒色残る、丸底、砂を含む
197	253	埋土	土師器/台	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ		-	5.4	4.4			段がある、金雲母少量含む
198	252	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコ・ハケ	ハケメ/ハケメ		17.8	-	13.6	A II	頸部に段、口唇部平~浅い凹、金雲母・砂を含む	
199	251	カマド支脚	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケ・ナデ・ミガキ/ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	-	8.1	7.8	A II	底部破片、体部一部赤化	
200	259	RA148	埋土中位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	4.7	I A a	内黒処理、外面に段、底に格子状の線刻→ミガキ
201	258	カマド内	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	(13.7)	(4.4)	3.4	I A a	1/2現存、内黒処理、底部にXの線刻、体部下沈線	
202	998	RA151	Q 4埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(12.1)	(6.4)	2.6		内黒処理、1/4現存、流れ込み
203	273	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	(16.3)	-	4.9	I A a	内黒処理、1/3現存、焼成良好	
204	274	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ		(18.5)	-	14.9	A II	頸部に段がある、内外面磨滅している	
205	278	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ナデ・ハケメ/ミガキ	ヘラナデ	18.9	7.3	28.5	A II	口縁部一部欠損、口縁部に二条の沈線が巡る	
206	277	埋土下位	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	(17.9)	6.6	26.5	A II	口縁部一部欠損、焼成良好	
207	275	床上	土師器/球胴甕	非ロクロ	- / -	ナデ・ミガキ/ヘラナデ		-	7.2	8.4	A II	底部欠損、磨滅が著しい	
208	347	RA155	カマド周辺	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	9.8	-	2.8	I B a	内黒処理、体部下半に浅い段がある
209	348	床上/Na1	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	16.2	-	5.0	I A a	内黒処理、体部下半に段がある、内面一部剥落	
210	345	床上/Na2	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	15.3	7.8	18.3	A II	底部一部剥落、金雲母を含む	
211	343	床上/甕Na4	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ヘラナデ		12.6	-	6.5	A II	底部欠損、砂と金雲母を多く含む	
212	344	カマド袖	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	9.4	5.0	11.4	A II	完形、焼成良好	
213	349	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	17.4	7.4	18.3	A II	底部一部欠損、金雲母含む	
214	353	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ		(18.0)	-	20.1	A II	底部欠損、焼成良好	
215	352	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコ・ハケメ	ハケメ/ハケメ		(18.5)	-	14.3	A II	1/3現存、全体に器形の歪みが大きい、外面磨滅	
216	346	床上/Na5	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ		(22.5)	-	3.5	A II	胎土に砂と石を多く含む、器形の歪み大	
217	342	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	22.8	9.0	36.3	A II	焼成良好、胎土に砂と金雲母を含む	
218	350	床上/Na3	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ・ヘラミガキ/ハケメ		(18.3)	-	21.3	A II	外面磨滅、胎土に砂の混入が多い	
219	354	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	8.6	15.2	A II	口縁部欠損、体部外面磨滅が著しい	
220	355	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	8.6	17.8	A II	口縁部欠損、体部剥落が著しい	
221	357	床上	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	8.6	3.1	A II	底部破片、全体に磨滅している	
222	356	床上	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ		-	-	24.7	A II	口縁~体部破片、内外面磨滅が著しい	
223	351	床上/Q2埋土	土師器/片口	非ロクロ	- / -	- / ハケメ		(16.9)	-	14.3			底部欠損、内外面磨滅が著しい
224	754	埋土下位	須恵器/提瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	カキメ/ -		-	-	21.9	B	口縁部欠損	
225	358	床上	須恵器/甕	ロクロ	- / -	- / -		-	-	-	B	拓本	

第17表 奈良堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覽(5)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
227	780	RA156	P 3	土師器/坏	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ	16.7	-	5.6	IA a	内黒処理、底部に十字の刻線
228	757	//	P 4	土師器/坏	非ロクロ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ	17.9	-	6.1	IA a	内黒処理、胎土に砂と石を多く含む
229	756	//	P 2	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ	17.0	-	6.0	IA a	完形、内黒処理、外面磨滅が著しい
230	755	//	P 1	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヨコナデ	ヘラナデ	12.7	7.2	4.0	IB a	器形の歪みが著しい、金雲母を多く含む
231	359	//	床上	土師器/高坏	ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラナデ	-	(10.8)	-	[10.4]	-	内黒処理、胎土に砂と石を多く含む
232	758	//	P 6	土師器/球胴壺	非ロクロ	- / -	ハケメ/ヘラナデ	木葉痕	-	10.1	[4.6]	A II	底部破片、内外面磨滅している
233	383	RA167	床上	土師器/坏	非ロクロ	- /ヘラミガキ	- /ヘラミガキ	ハケメ	(16.0)	(11.4)	[3.2]	IB b	内黒処理、1/3現存
234	384	//	床上	須恵器/甕	ロクロ	- / -	- /ヘラミガキ	-	-	-	-	B	拓本
235	387	RA169	カマド周辺	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.8)	(5.6)	[5.0]	B II a	底部1/4現存
236	388	//	カマド周辺	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ・ヘラナデ	ヘラナデ	20.1	6.3	26.3	A II	体部外面磨滅が著しい
238	418	RA180	貯蔵穴	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラケズリ/ヘラミガキ	ヘラケズリ	12.9	-	3.8	IA b	内黒処理、内外面剝落が著しい
239	424	//	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	(15.7)	-	5.0	IA a	内黒処理、外面剝落が著しい、丸底
240	417	//	カマド袖	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ヘラケズリ/ヘラミガキ	ヘラケズリ	13.6	-	4.2	IA a	内黒処理、焼成良好、1/2現存
241	415	//	カマド周辺	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	13.5	6.0	11.4	A II	金雲母含む、口唇部に浅い沈線が巡る
241	452	//	埋土中位	土師器/壺	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ・ナデ	-	(17.9)	-	11.9	A	口縁部破片、金雲母の混入が多い
242	416	//	カマド周辺	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ナデ・ハケメ	-	13.0	-	[10.0]	A II	底部欠損、外面は剝落している
243	419	//	床上	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	木葉痕	-	6.0	[11.1]	A II	金雲母含む、1/2現存
244	414	//	カマド周辺	土師器/球胴壺	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	8.7	[7.4]	A II	焼成良好、金雲母含む
245	420	//	床上	須恵器/甕	ロクロ	- / -	- / -	-	-	(13.3)	[9.8]	B	拓本
247	457	RA185	埋土	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	15.2	-	4.4	IA a	内黒処理、丸底、外面剝離ある、体部に段がある
248	460	//	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	17.7	-	5.6	IA b	内黒処理、全体的に器形の歪みが著しい
249	459	//	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ナデ	ヘラナデ/ハケメ	-	(19.2)	-	[16.5]	A II	焼成良好、口縁部に浅い沈線
250	458	//	P3埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコ・ハケメ	ハケメ/ハケメ・ミガキ	-	(20.0)	-	[12.6]	A II	口縁部破片、焼成良好、金雲母含む
251	//	//	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ・ヘラナデ	-	(17.9)	-	[11.9]	A II	-
252	455	//	1号土坑埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	-	-	-	[18.3]	A II	体部破片、砂と金雲母を多く含む
253	453	//	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ・ハケメ/ハケメ	-	-	-	[10.2]	A II	体部破片、輪積痕が明瞭である
254	454	//	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	7.6	[3.0]	A II	底部破片、内面剝落が著しい
257	781	RA186	P 3	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケメ・ミガキ	(18.8)	-	6.4	IA a	内黒処理、口縁部1/2欠損
258	768	//	カマド・P 9	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	(16.0)	5.4	5.8	IB a	口縁部1/2欠損
259	901	//	P 2	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	15.6	7.8	19.2	A II	金雲母と砂を多く含む、煤付着
260	900	//	カマド・P 5	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	(15.4)	(7.8)	20.4	A II	焼成良好、金雲母を多く含む
261	903	//	カマド・P 8	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ナデ	ヨコナデ・ハケメ	ヘラナデ	(16.1)	8.2	[20.2]	A II	砂と金雲母を多く含む、口縁部1/2欠損
262	766	//	カマド	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ナデ	ハケメ/ハケメ	-	16.7	-	[21.2]	A II	底部欠損
263	769	//	P 1	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ・ケズリ/ハケメ	-	-	9.4	[4.3]	A II	底部破片
264	902	//	P 4	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	7.6	[3.0]	A II	底部破片、焼成良好
265	767	//	カマド・P 7	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	19.2	9.2	27.2	A II	ほぼ完形
266	904	//	P 5	土師器/甕	非ロクロ	ミガキ・ハケメ/ミガキ	ミガキ・ハケメ/ミガキ	-	18.6	-	[14.2]	A II	胎土に砂を多く含む、口唇部に浅い沈線が巡る
267	905	//	P 1	土師器/球胴壺	非ロクロ	- / -	ハケメ・ナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	7.8	[19.1]	A II	口縁部欠損、胎土に砂と石を多く含む、焼成良好
268	784	RA192	埋土中位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	11.8	6.4	[4.1]	IA a	内黒処理、口縁部1/2現存、外面磨滅している
269	783	//	埋土中位	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ/ミガキ	ヘラナデ	12.3	-	5.1	IA a	底部内外面に米状の刻線がある
270	782	//	埋土中～下位	土師器/坏	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ/ミガキ	ヘラナデ	(13.8)	-	[5.9]	IA a	口縁部2/3現存、内面に米状の刻線がある
271	472	//	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	(12.2)	7.3	[11.2]	A I	口縁部1/2現存、外面剝落と磨滅が著しい
272	473	//	カマド煙道	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	木葉痕	17.2	8.2	22.4	A I	焼成良好、外面煤付着
273	474	RA193	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	16.8	6.5	17.4	A II	内外面磨滅が著しい
274	477	//	埋土上～中位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ハケメ	木葉痕	-	10.2	[7.7]	A II	体～底部破片、胎土に砂を多く含む
275	476	//	埋土上～中位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	6.5	[7.7]	A II	体～底部破片、磨滅している
276	475	//	床上	土師器/球胴壺	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ヘラナデ・ハケメ	-	(18.7)	-	[22.4]	A II	底部欠損、胎土に砂と石を多く含む
277	478	//	埋土上～中位	土師器/球胴壺	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ナデ	ハケメ/ハケメ	-	-	-	[25.3]	A II	底部欠損、口縁部1/4現存
278	907	RA210	床上坏No1	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケメ	17.2	-	6.0	IA a	内黒処理、1/2現存、内面剝落が著しい
279	909	//	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	21.6	6.8	22.7	A II	砂と金雲母を多く含む、口縁部1/2現存

第18表 奈良堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覽(6)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
280	910	RA 210	カマド右袖部	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ・ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	8.0	[10.0]	A II	全体が歪み磨滅している、底部破片
281	908	カマド右袖部	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ナデ/ハケ・ナデ・ミガキ	-	19.5	-	[19.1]	A II	底部欠損、外面磨滅、頸部に鋸状の施文	
282	526	RA 215	埋土中～下位	土師器/坏	非ロクロ	- /ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	(13.1)	-	[4.0]	I A a	内黒処理、丸底、内面磨滅している
283	786	埋土中～下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	(7.8)	4.4	[4.1]	I B b	焼成良好、胎土に砂と石を多量含む	
284	527	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ヨコ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	(19.4)	(7.8)	[29.0]	A II	本、口縁部1/3現存、底部1/4現存	
286	532	RA 218	床上	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	14.8	-	5.2	I A a	
287	533	床上/坏No1	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	(15.3)	-	4.8			丸底
288	534	埋土中～下位	土師器/高坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	-	(14.3)	7.8	6.8			内黒外黒処理
289	537	埋土中～下位	土師器/甕	非ロクロ	ナデ・ミガキ/ナデ	ハケ・ケズリ/ハケメ	ナデ	(15.5)	7.2	[14.8]	A II		
290	535	埋土中～下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ミガキ/ハケメ	-	(15.2)	(7.4)	[14.7]	A II		
291	538	埋土中～下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ/ハケ・ミガキ	-	(17.4)	-	(7.5)	A II		
292	536	埋土中～下位	土師器/甕?鉢?	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラナデ	ハケメ/ヘラナデ	-	12.0	-	9.7	A II		
293	540	床上	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	17.6	-	24.0	A II		
294	539	埋土中～下位	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(19.8)	-	[26.6]	A II		
296	564	RA 219	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ナデ・ハケ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ・ナデ	-	(18.0)	-	25.2	A II	口唇部に沈線、金雲母含む
297	563	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	(18.0)	-	13.2	A II	口唇部に沈線、口縁部内湾、金雲母含む	
298	560	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ・ナデ/ナデ	-	(17.2)	-	13.8	A II	口縁部内湾、金雲母含む	
299	561	カマド左袖	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ミガキ/ハケ・ミガキ	-	17.2	-	[28.7]	A II	底部を欠く、口唇部平～浅い凹	
300	562	カマド支脚	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケ・ミガキ・ナデ/ナデ・ハケ	ハケメ・ナデ	-	(7.0)	[10.0]	A II	全体に赤化、金雲母含む	
301	1090	埋土	土師器/鉢?	ロクロ	ヘラナデ/ヘラナデ	ハケ・ナデ/ヘラナデ	-	-	-	-			
302	568	RA 221	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	17.2	-	[5.8]	I A a	内黒処理、丸底
303	569	床上	土師器/坏	非ロクロ	- / -	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	12.7	-	4.1	I A b	丸底、砂を多く含む、内面剥落が著しい	
304	567	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	(16.0)	7.4	14.1	A II	砂と金雲母を多く含む、黒斑がある	
305	566	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ヘラナデ	ヘラナデ	18.0	7.9	26.8	A II	砂と金雲母を多く含む、体部外面剥落	
306	570	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	-	18.9	-	[25.1]	A II	底部欠損、胎土に砂と石を多く含む、磨滅有り	
307	572	カマド燃焼部	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ヘラナデ	-	19.4	7.3	[26.8]	A II	1/2現存、焼成良好、金雲母と砂を含む	
308	573	カマド燃焼部	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	-	(21.0)	-	[14.8]	A	底部欠損、砂と金雲母のを多く含む	
309	583	RA 225	床上	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ミガキ・ナデ/ミガキ	ナデ、ミガキ	13.0	4.0	4.2	I B a	外面に段がある、内面屈曲、金雲母含む
310	582	埋土1層	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコ・ハケ	ハケメ/ハケメ	木葉痕	(17.9)	6.3	30.7	A II	口唇部玉縁状	
311	581	床上・3層	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコ・ハケ	ハケメ/ハケメ	-	(20.0)	-	[7.5]	A II	口縁部に段、口唇部に浅い沈線、金雲母含む	
316	921	RA 229	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラケズリ	11.9	-	[4.2]	I A a	内黒処理、丸底で体部下半に段がある、1/2現存
317	922	埋土中位	須恵器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転ヘラ切り	14.2	8.6	4.6	B	焼成良好、2/3現存	
318	927	P 5	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ヨコ	ハケメ・ミガキ/ハケメ	ヘラナデ	20.6	9.0	30.2	A II	砂と金雲母を多く含む、外面に煤付着	
319	933	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコ・ハケ	ヘラミガキ/ハケメ	ヘラナデ	(21.6)	7.8	27.7	A II	体部外面剥落が著しい、全体に器形が歪んでいる	
320	932	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	24.5	-	[21.3]	A II	全体に器形の歪み大、砂と金雲母を含む	
321	930	Q 4埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	15.5	-	[17.8]	A II	外面は磨滅が著しい、底部欠損	
322	924	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ・ナデ	ヘラナデ	14.2	6.1	14.8	A II	小型の器形、金雲母と砂を多く含む	
323	929	P 5	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ヨコ	ハケメ・ミガキ/ナデ・ハケメ	-	-	-	[16.5]	A II	底部欠損、砂と金雲母を多く含む	
324	923	P 2	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ナデ/ハケメ・ナデ	木葉痕	-	6.4	[11.0]	A II	口縁部欠損、外面に煤が付着	
325	928	P 7	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	8.9	[32.1]	A II	砂と金雲母を多く含む、煤付着	
326	926	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	(21.0)	-	[9.3]	B	口縁部破片	
327	934	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	タタキメ	-	-	[9.6]	B	底部破損、丸底	
328	931	埋土中位	土師器/片口	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	14.1	8.4	15.0	A II	全体が磨滅、砂と金雲母を多く含む	
329	925	P 3	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ヘラナデ/ナデ	ハケメ・ナデ/ハケメ	-	18.1	10.4	14.9	A	全体に磨滅が著しい、単口式である	
332	1058	RA 272	床上/No3	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	13.3	6.1	13.7	A II	小型、完形品、内底に煮汁付着?
333	1147	カマド東袖部	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	19.3	-	[27.7]	A II	器形の歪みが大きい、底部欠損	
334	1061	カマド周辺	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(25.5)	-	[22.0]	A II	口縁～体部、剥落が大きい	
335	1063	カマド周辺部	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	木葉痕	19.2	8.6	31.5	A II	ほぼ完形	
336	1148	カマド西袖部	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ヨコ	ハケメ/ハケメ	-	(20.6)	-	[26.4]	A II	全体に器形が歪んでいる、底部欠損	
337	1062	床上/No7	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	(21.3)	5.7	[29.2]	A II	頸～底部1/2現存	

第19表 奈良竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(7)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
338	1060	RA272	床上/Na6	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	16.8	-	[17.1]	A II	口縁~体部、輪郭復が顕著に見られる
339	1059	〃	床上/Na1	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ヘラナデ	-	24.6	-	[20.4]	A II	口縁~体部、頸部に二本の沈線
344	1156	RA307	埋土上~中位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	(17.6)	-	[5.6]	I A a	内黒処理、丸底、内面が磨滅している
345	1162	〃	カマド袖部一括	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	(18.7)	-	[6.5]	I A a	内黒処理、丸底、口縁部1/4現存
346	1163	〃	Q1埋土上~中	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	(15.4)	-	(5.0)	I A b	丸底、口縁部1/3現存
347	1161	〃	P1埋土	土師器/坏	非ロクロ	ヘラナデ/	ヘラナデ/	ヘラナデ	(18.4)	-	[7.7]	I A a	内面剝落、胎土に砂と石を多く含む
348	1160	〃	甕No7	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(13.4)	(6.2)	[8.9]	A II	口縁部1/3・底部一部現存
349	1153	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	(19.0)	8.5	[26.1]	A II	口縁部1/3現存、内外面磨滅が著しい
350	1159	〃	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(21.0)	-	(11.5)	A II	口縁部1/2現存、内外面磨滅している
351	1155	〃	埋土中~下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ヘラナデ	-	18.9	7.5	25.9	A II	体部一部欠損、外面磨滅が著しい
352	1154	〃	甕No3	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ハケメ	ヘラナデ	(15.5)	7.9	[23.9]	A II	口縁部1/2現存、外面磨滅している
353	1158	〃	甕No5	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ミガキ/ミガキ・ハケメ	-	(21.4)	-	[15.6]	A II	底部欠損、外面煤付着
354	1157	〃	甕No6	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ヘラナデ	ヘラナデ	20.3	8.8	31.2	A II	内外面磨滅している、金雲母含む
355	1164	〃	埋土上位	土師器/長頸瓶	非ロクロ	- / -	- /ハケメ	木葉痕	-	6.6	[3.2]	A II	底部破片、外面磨滅が著しい
356	1166	〃	埋土上位	土師器/球胴甕	非ロクロ	ハケメ/ハケメ	ハケメ/ハケメ	-	17.8	-	[28.4]	A II	口縁~体部下半破片、金雲母含む
1016	655	RE010	埋土3層	土師器/坏	非ロクロ	ナデ・ケズリ/ミガキ	ナデ・ケズリ/ミガキ	ヘラケズリ	16.6	-	5.5	I A a	内黒処理、
1017	657	〃	埋土5層	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ミガキ・ケズリ/ミガキ	ヘラミガキ	(17.3)	-	4.2	I A a	内黒処理、丸底
1018	656	〃	埋土5層	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	5.9	[9.9]	A II	体部下~底部破片、底部突出
1019	661	RE011	床上/埋土2層	土師器/手捏ね	非ロクロ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	-	(7.2)	3.5	4.5		口縁部1/2欠損、金雲母含む
1020	664	〃	埋土2層/ア	土師器/鉢	非ロクロ	- / -	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ・ミガキ	ヘラミガキ	14.6	6.7	12.9		ほぼ完形、金雲母含む
1021	663	〃	床上/エ	土師器/鉢	非ロクロ	- / -	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ・ミガキ	ヘラナデ	19.2	6.8	15.9		完形、Na1022(RE014)と接合、金雲母含む
1022	667	RE014	埋土7層	土師器/鉢	非ロクロ	- / -	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ・ミガキ	-	-	-	-		完形、Na1021(RE011)と接合、金雲母含む
1023	665	RE011	床上/オ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ/ハケ・ナデ	-	15.1	-	[17.6]	A II	底部欠損
1024	658	〃	床上/ウ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ハケ・ミガキ	ミガキ・ハケ・ケズリ/ハケメ	-	18.1	6.8	18.3	A II	完形、金雲母含む
1025	660	〃	埋土/カ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコ・ナデ	ミガキ・ハケ/ナデ・ハケ	-	18.7	-	[14.4]	A II	体~口縁部、金雲母含む
1026	662	〃	埋土2層/イ	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ミガキ/ミガキ・ナデ	ヘラナデ	17.3	6.9	13.5	A II	ほぼ完形
1027	659	〃	床上/キ	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ミガキ・ナデ/ナデ	ヘラケズリ	-	7.6	[7.7]	A II	体部下~底部破片、金雲母含む
1028	668	RE014	埋土上位	土師器/手捏ね	非ロクロ	- /ヘラナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	(8.0)	-	4.7		1/4現存、胎土に砂粒多い
1029	666	〃	埋土6層	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	16.9	-	5.0	I A a	内黒処理、胎土に砂粒多い
1030	669	〃	埋土2層	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ミガキ・ハケメ/ミガキ	-	(17.0)	-	[5.0]	I A a	1/3現存、胎土に砂粒多い
1031	672	RE015	埋土8層	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ミガキ・ハケメ/ミガキ	-	(14.4)	-	[5.0]	I A a	1/4現存、胎土に砂粒、金雲母少量含む
1032	670	〃	埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ・ナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	(9.2)	[9.9]	A II	体部下~底部破片、金雲母少量含む
1033	671	〃	埋土7層	土師器/球胴甕	非ロクロ	- / -	ハケメ・ナデ/ナデ	ヘラナデ	-	9.2	[18.5]	A II	体部下~底部破片、金雲母少量含む

調整痕の省略文字 ヘラナデ→ナデ ヘラケズリ→ケズリ ヘラミガキ→ミガキ ハケメ→ハケ ヨコナデ→ヨコ ロクロナデ→ロクロ



第20表 平安堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覽(1)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
357	1	RA047	カマド焚き口	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	13.1	5.5	4.5	A I a	内黒処理
358	2	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(4.5)	(5.2)	4.9	A II a	1/2現存、胎土に砂と石を多く混入
359	3	〃	カマド	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	7.4	5.0	B	底部破片、胎土に砂と石の混入が多い
360	796	〃	埋土上位	須恵器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	5.7	[1.5]	B II a	底部破片、焼成良好
361	4	〃	カマド	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	(12.5)	8.0	13.7	A II	1/2現存、口縁部短小、表面剥落が著しい
362	6	〃	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(20.0)	-	[18.9]	A II	1/4現存、胎土に石の混入が多い
363	8	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
364	7	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
365	17	RA 107	床上	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転ヘラ切り	-	6.1	[2.3]	A I e	内黒処理、底部破片、内面磨滅が著しい
366	14	〃	カマド右袖No.1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.3	6.0	5.2	A II a	焼成良好、胎土に砂を多く含む
367	21	〃	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	12.8	4.9	5.2	A II a	焼成良好、口縁部一部欠損
368	16	〃	カマド右袖	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転ヘラ切り	14.0	5.6	5.6	A II c	煤付着、口縁部一部欠損
369	22	〃	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転ヘラ切り	(14.1)	6.3	5.1	A II c	胎土に石の混入が多い、口縁部1/3現存
370	15	〃	床上/No.2	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転ヘラ切り	13.2	5.9	5.3	A II c	焼成良好、胎土に砂と石を多く混入
371	19	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラケズリ	-	6.9	[2.4]	A II	底部破片
372	20	〃	埋土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.8)	6.0	[4.1]	B II a	焼成良好、口縁部1/6現存
373	18	〃	床上	須恵器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り/再	-	6.7	[2.9]	B II b	底部再調整
374	29	RA 109	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	13.9	5.9	4.5	A I a	内黒処理、胎土に砂と石を多く含む
375	25	〃	カマド周辺	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.5)	(6.0)	4.5	A I a	内外面黒色処理、1/3現存
376	26	〃	カマド焚き口	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	(15.1)	-	[4.2]	A I a	内黒処理、1/3現存、胎土に金雲母を含む
377	28	〃	カマド煙出し	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラケズリ・ナデ/ハケメ	木葉痕	(19.2)	(10.0)	27.2	A II	口縁部・底部欠損、胎土に石の混入が多い
378	27	〃	カマド焚き口	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ケズリ・ハケメ/ナデ	木葉痕	-	(10.4)	[3.5]	A II	底部破片、胎土に砂と石の混入が多い
380	34	RA 110	床上	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	-	5.2	[2.2]	A I a	内黒処理、底部破片
381	31	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.7	6.4	5.0	A II a	胎土に砂と石の混入が多い、焼成良好
382	32	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.6	5.8	4.8	A II a	器形の歪みが著しい、胎土に砂と石を多く含む
383	728①	〃	埋土上~中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.9)	(5.7)	4.9	B II a	1/5現存
384	33	〃	床上	須恵器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	6.4	[3.7]	B II a	口縁部欠損、焼成良好
385	30	〃	床上	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	14.4	7.2	4.3	A I	内黒処理、焼成良好、胎土に砂の混入が多い
386	36	RA 111	埋土上~中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	5.4	[4.6]	A II a	底部破片、全体に磨滅している
387	35	〃	埋土	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ -	-	-	6.0	[2.6]	A I	内黒処理、高台破片
388	37	〃	埋土上~中位	須恵器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	6.4	[1.9]	B II a	底部破片、1/3現存
389	38	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	(18.3)	-	[6.0]	B	口縁部破片、1/4現存
391	729	RA 112	P 1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.8)	5.2	4.4	A II a	口縁部一部欠損
392	39	〃	埋土上~中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(16.0)	(6.2)	4.4	B II a	1/3現存
393	730	〃	P 1	須恵器/坏	ロクロ	- / -	- / -	回転糸切り	14.5	6.2	4.8	B II a	
394	731	〃	P 2	須恵器/坏	ロクロ	- / -	- / -	回転糸切り	(15.4)	5.9	5.5	B II a	口縁部一部欠損
395	49	RA 113	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	13.8	5.4	4.8	A I a	内黒処理、磨滅有り、胎土に砂と金雲母を含む
396	43	〃	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.6)	6.1	4.9	A I a	内黒処理、胎土に金雲母と砂を多く含む、1/3現存
397	45	〃	埋土中位	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラケズリ	ロクロナデ/ヘラケズリ	-	(15.8)	-	[5.4]	A I ?	内黒処理、焼成良好で線刻がある、1/3現存
398	42	〃	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.4)	5.8	4.2	A II a	体部に工具痕がある、焼成良好で1/4現存
399	44	〃	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.6)	5.8	5.2	A II a	磨滅が著しい、胎土に砂と石の混入が多い
400	47	〃	埋土中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.6)	5.7	4.9	B II a	胎土に砂と石を多く含んでいる、1/3現存
401	48	〃	埋土中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.1	5.9	5.5	B II a	焼成は良好で胎土に砂を混入、1/2現存
402	46	〃	埋土中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	5.9	4.9	B II a	焼成良好、器形の歪みが大きい、1/2現存
403	40	〃	埋土中位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	12.3	-	[11.0]	A I	器形の歪みが大きい、胎土に砂と石を多く含む
404	41	〃	埋土中位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	6.8	[9.5]	A I	口縁部欠損、胎土に砂と石を多く含む
407	52	RA 115	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/?	ロクロナデ/?	回転糸切り	(13.3)	6.0	4.6	A I a	内黒処理、内面磨滅、底部にXの刻印がある
408	50	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	(20.2)	-	[6.2]	B	口縁部破片
409	51	〃	埋土下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	- / -	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
410	53	RA 116	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転ヘラ切り	(13.6)	6.7	4.2	A I e	内黒処理、1/4現存、胎土に金雲母を多く含む

第21表 平安堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(2)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
411	54	RA116	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	6.0	[2.7]	A II a	底部破片
412	55	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
414	67	RA119	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	6.0	4.6	B II a	1/3現存、焼成良好
415	732	〃	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	(5.9)	4.7	B II a	1/3現存、焼成良好
416	66	〃	床上/坏Na1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.6	6.4	5.0	A II a	胎土に砂と石の混入が多い、外面煤付着
417	69	〃	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.7	5.6	5.2	B II a	口縁部一部欠損、外面剥落している
418	68	〃	床上/壺Na1	須恵器/壺	ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ロクロナデ	回転糸切り	5.2	6.4	8.5	B	完形、磨滅している
419	72	〃	埋土上～中位	土師器/甕	ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(14.3)	-	[17.0]	A II	底部欠損、焼成良好
420	733	〃	埋土中～下位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(16.2)	-	[10.5]	B	口縁部破片
421	734	〃	埋土中～下位	須恵器/小型壺	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	[3.2]	B	体部破片、焼成良好
422	71	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
423	70	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
424	75	RA120	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	13.7	5.8	5.2	A I b	内黒処理、底部再調整、磨滅している
425	85	〃	埋土中～下位	土師器/坏	非ロクロ	- / -	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラナデ	-	4.2	[4.4]	I A b	内黒処理、口縁部欠損
426	735	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	7.1	5.2	A II a	焼成良好、胎土に砂の混入が多い
427	78	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	6.2	[1.4]	A II a	底部破片
428	80	〃	埋土中～下位	土師器/高台坏	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラミガキ	-	-	-	[3.9]	A I	内黒処理、高台部破片
429	81	〃	埋土中～下位	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	-	6.9	[2.8]	A I	内黒処理、1/4現存、胎土に砂の混入が多い
430	79	〃	埋土中～下位	土師器/手捏ね	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	5.0	[4.3]	-	1/2欠損、胎土に砂の混入が多い
431	77	〃	埋土中～下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヘラナデ	ハケメ/ハケメ	-	(18.0)	-	[19.3]	A II	口縁部直立する、胎土に砂と石の混入が多い
432	84	〃	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ -	-	(20.2)	-	[10.8]	A II	口縁部破片、内面は磨滅が著しい
433	76	〃	床上	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	9.5	[10.7]	A II	口縁～底部破片、胎土に砂と石の混入が多い
434	736	〃	埋土中～下位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	-	-	[7.4]	B	口縁部破片、焼成良好
435	82	〃	埋土中～下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
436	847	RA126	④-2	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ -	ロクロナデ/ -	回転糸切り/再	13.7	6.4	4.7	A I b	内黒処理、内面磨滅
437	848	〃	④	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ -	ロクロナデ/ -	回転糸切り	(14.1)	6.6	4.8	A I b	内黒処理、内面磨滅
438	1073	〃	カマド南小 Pit	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.9)	(6.2)	[4.2]	A I a	内黒処理、外面剥落煤付着
439	1103	〃	Q 3埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.8	6.7	4.6	A I a	内黒処理、口縁部一部欠損、磨滅している
440	1102	〃	Q 2埋土中～下	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.1)	5.5	[5.0]	A I a	内黒処理、底部剥落が著しい
441	1100	〃	Q 3壁際	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.0)	(5.6)	[4.7]	A I a	内黒処理、内外面の磨滅が著しい
442	1101	〃	P 3埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.6)	6.6	[4.6]	A I a	内黒処理、内面一部剥落有り
443	870	〃	Q 3埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.0)	(5.8)	[4.2]	A I e	内黒処理、口縁部1/5現存
444	845	〃	Q 1埋土上層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り/再	(14.5)	6.2	4.7	A II d	3/4現存、胎土に金雲母を含む
445	849	〃	Q 1埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.6	5.2	4.5	A II a	胎土に砂と石を多く含む
446	778	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.1)	5.0	4.8	A II a	器形の歪みが大きい、胎土に砂を多く混入
447	851	〃	Q 1埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.2	6.4	3.8	A II a	口縁部一部欠損、器形が歪んでいる
448	855	〃	⑬	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	5.5	4.8	A II a	焼成良好
449	868	〃	Q 2壁際埋土下	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.5)	6.1	[4.5]	A II a	口縁部1/6現存
450	863	〃	④-1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.7	4.8	5.0	A II a	一部欠損、器形の歪みが大きい
451	861	〃	Q 3埋土中～下	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.6)	6.2	[4.9]	A II a	一部欠損、焼成良好
452	779	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	5.5	5.0	A II a	焼成良好、口縁部1/4現存
453	859	〃	埋土中	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.9)	5.5	4.7	A II a	口縁部一部欠損、器形の歪みが大きい
454	864	〃	⑬	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	5.7	4.9	A II a	口縁部1/2現存、外面磨滅している
455	862	〃	Q 4	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	4.8	5.6	A II a	1/2現存、外面煤付着
456	850	〃	Q 3埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.8	5.3	5.4	A II a	口縁部一部欠損
457	846	〃	Q 3埋土下層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.8	6.1	5.6	A II a	口縁部一部欠損、器形に歪みがある
458	857	〃	Q 1埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.3)	5.4	5.2	A II a	2/3現存、胎土に砂と石を多く含む
459	1071	〃	カマド南小 Pit	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.9)	5.5	[5.0]	A II a	口縁部1/4現存、外面煤付着
460	1098	〃	Q 1埋土中～下	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.3	6.7	5.1	A II a	口縁部一部欠損、器形の歪みが大きい
461	865	〃	Q 1とQ 4の間	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.5)	4.7	4.8	A II a	口縁部1/2現存

第22表 平安堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(3)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
462	869	RA126	Q3壁際床上	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(15.5)	6.0	[4.9]	AIIa	口縁部1/3現存、内外面磨減している
463	1070	〃	カマド南小Pit	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	13.6	5.0	5.2	AIIa	外面剝落がある、口縁部一部欠損
464	1099	〃	Q1・Q2埋土下	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.9)	5.0	4.9	AIIa	口縁部1/2現存、器形に歪みがある
465	866	〃	①	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(15.4)	5.0	[5.8]	AIIa	口縁部1/5現存、胎土に石の混入が多い
466	853	〃	⑤	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転ヘラ切り	14.0	5.2	4.4	AIIc	完形、胎土に砂と石を多く含む
467	860	〃	Q1埋土上位	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り?	14.7	6.2	5.0	AIIa	一部欠損、外面の磨減が著しい
468	1072	〃	カマド南小Pit	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.9)	5.2	[4.7]	AIIa	口縁部1/5現存、焼成良好
469	856	〃	Q1埋土中位	土師器/環	ロクロ	-/-	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	-	9.0	[3.6]	AI?	内外面黒色処理、焼成良好
470	852	〃	②	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(16.6)	7.9	6.0	AII?	焼成良好
471	858	〃	Q2埋土上位	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(16.3)	(8.3)	6.3	AII?	内外面磨減している
472	844	〃	埋土中～下位	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(17.6)	8.4	7.3	AII?	胎土に砂と石を多く含む、器形の歪みが大きい
473	955	〃	P3埋土	土師器/高台環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(16.3)	7.6	6.5	AII	口縁部1/2現存、器形に歪みがある
474	854	〃	⑧	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(11.1)	6.3	9.1	AI	口縁部に煤付着、胎土に砂と石を多く含む
475	867	〃	Q2埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(18.6)	-	[13.4]	AI	口縁～体部破片、外面煤付着
476	996	〃	カマド裡出し	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ナデ・ケズリ/ハケメ	木葉痕	(23.2)	8.3	[28.5]	AII	全体に器形が歪んでいる
477	871	〃	Q3壁際	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(20.6)	-	[13.6]	AI	口縁～体部破片、胎土に石を多く含む
478	113	〃	埋土上位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(26.0)	-	[6.9]	AI	口縁部くの字状に外反
479	1097	〃	Q3埋土	土師器/甕	非ロクロ	-/-	ヘラケズリ/ハケメ	ヘラナデ	-	10.1	[5.8]	AII	底部破片
480	1104	〃	Q3埋土中位	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	(6.5)	[6.3]	AI	底部1/2現存
481	843	〃	Q1とQ4の間	須恵器/壺	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラケズリ/ロクロナデ	ヘラナデ	-	11.0	[32.3]	B	口縁部一部欠損
482	1084	〃	カマド脇・他	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ナデ・ケズリ/ナデ	ヘラナデ	-	12.8	[27.4]	B	口縁部欠損、全体に歪んでいる
483	1074	〃	埋土下～中位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(7.3)	-	[12.6]	B	焼成良好
484	115	〃	埋土上位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	-/-	-	(7.3)	-	[5.0]	B	口縁部1/2現存
485	116	〃	埋土上位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	-/-	-	-	-	[7.1]	B	口縁部1/3現存
486	114	〃	埋土上位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	[5.6]	B	口縁部破片
487	117	〃	埋土上位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-/-	ロクロナデ/-	-	-	(10.0)	[4.1]	B	底部破片
488	994	〃	Q1埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	-	(43.1)	-	[68.0]	B	底部欠損、大型器形
489	1075	〃	Q1埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/ロクロナデ	-	(21.6)	-	[8.5]	B	口縁部1/5現存
490	1076	〃	Q1埋土中位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-/-	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	[11.5]	B	体部破片、口縁・底部欠損
491	118	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	-/-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
492	119	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	-/-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
493	1077	〃	Q1埋土中位	須恵器/甕	非ロクロ	-/-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
495	741	RA128	P4	土師器/環	ロクロ	-/-	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	-	5.5	[2.4]	AIa	内黒処理、内面磨減
496	740	〃	P2	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	6.2	[3.8]	AIIa	底部破片、胎土に砂と石を多く含む
497	739	〃	P1	須恵器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(15.2)	6.8	4.5	BIIa	全体が磨減している、胎土に砂と石を多く含む
498	748	〃	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-/-	ロクロナデ/-	-	-	7.4	[1.8]	B	拓本
499	770	〃	カマド焚き口	須恵器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.5)	6.1	5.1	BIIa	口縁～底部破片、1/2現存
500	742	〃	埋土上～中位	土師器/甕	非ロクロ	-/-	ヘラナデ/ハケメ	木葉痕	-	(10.6)	[4.4]	AII	胎土に砂と石を多く含む
501	744	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	-/-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
502	743	〃	埋土上	須恵器/甕	ロクロ	-/-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
503	749	〃	埋土上	須恵器/甕	ロクロ	-/-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
504	745	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	-/-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
505	746	〃	埋土上	須恵器/甕	ロクロ	-/-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
506	747	〃	P5	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-/-	-	-	-	-	-	B	拓本
509	172	RA134	埋土	土師器/環	ロクロ	-/-	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	-	5.9	[3.1]	AIa	
510	173	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	-/-	-	-	-	-	-	B	拓本
511	180	RA136	カマド	土師器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラナデ	(13.8)	6.8	4.7	AIIa	1/2現存、焼成良好
512	181	〃	埋土	土師器/甕	ロクロ	ヘラケズリ/ハケメ	ヘラケズリ/ハケメ	-	-	(11.0)	[4.5]	AII	底部破片、底部1/3現存
513	727	〃	埋土上～中位	須恵器/環	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.4)	5.8	[4.7]	BIIa	墨書、口縁部1/3現存
514	182	〃	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	-	[8.3]	B	外面一部剝落

第23表 平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(4)

No.	登録No.	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
515	183	RA136	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
518	184	RA137	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(13.8)	5.6	[4.5]	A I a	内黒処理、口縁部2/3現存、内面剥落している
519	185	〃	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(14.2)	5.6	[4.6]	A I a	1/3現存、内面剥落が著しい
520	194	〃	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.9)	6.3	5.7	A II a	口縁部1/2現存、焼成良好
521	187	〃	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	15.3	5.9	5.9	A II a	内外面磨減が著しい、胎土に砂と石を含む
522	186	〃	カマド右袖	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.6)	4.9	[5.2]	A II a	口縁部1/2現存、全体に磨減が著しい
523	190	〃	埋土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(15.7)	(6.2)	[6.3]	B II a	口縁部1/2現存、焼成良好
524	188	〃	カマド周辺	土師器/小型甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(11.6)	5.6	10.7	A I	口縁部1/2現存、胎土に砂と石を多く含む
525	191	〃	埋土	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	13.6	-	[9.3]	A I	底部欠損、胎土に砂と石を多く含む
526	195	〃	カマド右袖	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	(12.2)	[5.5]	B	底部1/3現存
527	192	〃	埋土	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロ・ケズリ/ロクロ・ハケメ	-	(14.0)	-	[14.2]	B	口縁部1/2現存、胎土に砂と石を多く含む
528	189	〃	カマド周辺	土師器/甕	ロクロ	ヘラケズリ/ハケメ	ヘラケズリ/ハケメ	ヘラナデ	-	10.7	[5.2]	A II	底部破片、内外面磨減が著しい
529	193	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	-	(42.0)	-	[13.2]	B	口縁～体部破片
532	196	RA138	P1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	14.1	5.4	5.1	A II a	内黒処理、内面剥落している
533	198	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	14.6	6.8	4.7	B II a	口縁部一部欠損
534	199	〃	埋土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	13.6	5.6	4.1	B II a	口縁部1/2現存
535	197	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	14.3	5.0	4.9	B II a	焼成良好、胎土に金雲母を含む
536	200	〃	埋土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.6)	4.8	[4.1]	B II a	口縁部1/5現存
537	728②	〃	埋土上～中位	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ / -	-	-	7.1	[3.5]	A II	内黒処理、内面剥落が著しい
538	206	〃	埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	9.5	[5.5]	A II	底部破片、底部剥落が著しい
539	204	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/ロクロナデ	-	(19.0)	-	[9.0]	B	口縁部1/3現存、底部欠損
540	205	〃	床上/埋土上	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラケズリ/ハケメ	-	(18.7)	-	[32.0]	B	底部と口縁部1/2現存
541	201	〃	埋土上～中位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	[11.6]	B	底部欠損
542	202	〃	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロ・ケズリ/ハケメ	ロクロナデ	-	11.2	[20.9]	B	口縁部欠損
543	203	〃	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	(10.4)	[11.7]	B	口縁部欠損、内外面の剥落が著しい
548	257	RA147	カマド袖	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ミガキ・ハケ	回転系切り	13.4	6.0	5.1	A I b	内黒処理、口縁部内面におこげ、体部外面に線刻
549	256	〃	床上/B	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	10.5	6.1	5.1	A II a	
550	254	〃	床上/F	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	17.9	8.0	6.4	A II a	外面部分的に煤付着、表面一部剥落
551	255	〃	床上/E～D	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	16.2	6.0	6.4	A II a	
552	261	RA149	カマド袖、焼土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	14.4	5.0	5.5	A II a	火熱により一部赤化?外面剥落部分多い
553	262	〃	カマド支脚	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	15.5	6.0	5.0	A II a	内黒処理?内面に若干黒色部分残存
554	260	〃	カマド袖、埋土	土師器/甕	非ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(13.5)	-	[9.8]	A I	1/2現存
555	263	RA150	P1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	13.0	4.9	5.6	A I a	内黒処理、全体に器形が歪んでいる、外面剥落
556	264	〃	床上	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.5)	5.5	4.6	A II a	器形の歪みが大い、焼成良好
557	272	〃	埋土上～中位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	[8.4]	B	口縁部破片
558	265	〃	P3	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラケズリ/ヘラナデ	ヘラナデ	23.2	(12.3)	30.4	A II	底部欠損、内面磨減、胎土に砂と石を多く含む
559	266	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
560	268	〃	床上	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
561	270	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
562	271	〃	粗掘	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
563	267	〃	床上	須恵器/甕	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	B	拓本
564	269	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	B	拓本
566	280	RA152	カマド	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ / -	ナデ・ケズリ / -	回転系切り/再	14.2	7.2	5.2	A I b	内黒処理、底部再調整、内外面とも磨減している
567	279	〃	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ / -	ロクロナデ / -	回転系切り/再	13.3	6.1	4.4	A I b	内黒処理、底部再調整、内面磨減している
568	282	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(15.0)	5.1	4.1	A II a	1/3現存、胎土に砂と石を多く含む
569	281	〃	東カマド/坏Na1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	13.7	5.4	4.5	A II a	1/2現存、焼成良好
570	283	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(16.3)	(6.1)	[4.6]	A II a	口縁が外反する、焼成良好
571	284	〃	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.4)	6.1	[4.6]	B II a	口縁部欠損、胎土に砂と石の混入が多い
572	290	〃	床上	須恵器/高台坏	ロクロ	- / -	- / -	-	-	9.0	[2.1]	B II ?	高台
573	286	〃	東カマド/甕Na2	土師器/甕	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラナデ	回転系切り	-	7.4	[4.6]	A II	体～底部破片、胎土に砂と石の混入が多い

第24表 平安堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(5)

No.	登録No.	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
574	287	RA152	床上	土師器/甕	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	6.9	[7.9]	A I	体~底部破片、体部内外面磨減が著しい
575	285	//	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	木葉痕	21.3	10.2	28.4	A II	短小の口縁部、胎土に砂と石を多く含む
576	288	//	床上	土師器/甕	ロクロ	ヨコナデ・?/ヨコナデ	タタキメ/アテグ	-	(5.0)	-	[16.3]	B	口縁部1/4現存
577	289	//	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片/拓本
578	291	//	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
579	292	//	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
584	329	RA153	埋土下位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	15.1	5.7	4.6	I A a	内黒処理、丸底
585	301	//	カマド燃焼部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラケズリ?	(14.8)	(6.6)	5.3	A I	内黒処理、胎土は緻密である
586	307	//	埋土中位/Na5	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	14.9	6.8	5.4	A I b	内黒処理、器形の歪みが大い
587	322	//	カマド袖	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(14.3)	5.7	4.2	A I a	内黒処理、胎土に金雲母が混入
588	331	//	埋土上位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(14.6)	(6.1)	5.1	A I e	内黒処理、再調整がある
589	327	//	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(14.3)	(6.8)	3.7	A I b	内黒処理、内面の剝離が著しい
590	328	//	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	14.4	5.5	5.1	A I e	体部下半に再調整、砂の混入が多い
591	317	//	貼り床	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	-	6.4	[3.5]	A I b	内黒処理、磨減が著しい
592	305	//	埋土中位/Na7	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.9	5.4	4.9	A II a	器形全体に歪みがある、煮汁が付着
593	297	//	カマド燃焼部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.2	4.3	5.1	A II a	器形に歪みがあり、胎土に砂を多く含む
594	304	//	北カマド上位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.6	5.6	5.1	A II a	全体が磨減している
595	330	//	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.9	5.5	5.2	A II a	全体が磨減している
596	309	//	埋土中位/Na2	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.1	6.7	4.7	A II a	焼成良好、煮汁が付着
597	296	//	カマド燃焼部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.1	6.3	4.7	A II	器形に歪みがある、口縁部一部欠損
598	310	//	貼り床	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.3	6.5	4.3	A II a	焼成良好、内面の一部は剝落する
599	323	//	埋土上位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.1)	(6.0)	4.7	A II a	焼成良好
600	315	//	貼り床	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.9	(5.0)	4.7	A II a	器形の歪みが大い、焼成良好
601	300	//	カマド燃焼部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.8	(5.4)	4.8	A II a	胎土に砂を含む
602	308	//	埋土下位/Na8	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.1	5.6	4.6	A II a	焼成良好、胎土に砂の混入が多い
603	326	//	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(21.4)	5.8	5.0	A II a	磨減が著しい
604	298	//	カマド燃焼部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.1	6.0	4.7	A II a	磨減が著しい、2/3現存
605	325	//	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(16.8)	5.8	4.6	A II a	器形の歪みが大い、磨減が著しい
606	324	//	埋土上位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.6	5.8	4.7	A II a	器形の歪みが大い、焼成良好
607	299	//	カマド燃焼部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.1	5.9	5.0	A II a	磨減が著しい、胎土に砂を多く含む
608	303	//	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(16.2)	5.8	5.3	A II a	胎土は緻密で砂を多く含む
609	321	//	カマド袖	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.6)	5.9	4.8	A II a	焼成良好、胎土に砂の混入が多い
610	319	//	貼り床	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	5.8	[2.6]	A II a	墨書土器、胎土に砂の混入が多い
611	320	//	カマド袖	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	(5.7)	[2.5]	A I a	墨書土器、底部破片
612	332	//	貼り床	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.7)	5.5	4.7	B II a	胎土に砂を含む、1/4現存
613	311	//	埋土中位/Na5	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	13.3	7.9	4.7	A II a	内黒処理、胎土に金雲母が混入
614	316	//	貼り床	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	(12.7)	-	[3.8]	A I a	内黒処理、内面に剝離が見られる
615	302	//	床上/Na9	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(15.6)	8.5	6.4	A II a	磨減が著しい、胎土に砂を多く含む
616	306	//	埋土上位	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	15.5	8.0	5.6	A II a	焼成良好、口縁部1/2現存
617	318	//	貼り床	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	16.4	-	[4.8]	A II a	高台欠損、焼成良好
618	312	//	埋土中位/Na6	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	- / -	-	-	8.3	-	A II a	高台、磨減し胎土に砂の混入が多い
619	295	//	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ハケメ	ヘラナデ・ケズリ/ハケメ	ヘラナデ	15.1	8.8	9.8	A II	小型器形、器形の歪みが大い
620	313	//	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ヘラナデ	ナデ	-	11.1	[4.2]	A II	胎土に砂を含む
621	294	//	埋土上位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラケズリ/ヘラナデ	-	11.5	8.6	[27.4]	B	1/2現存、焼成良好
622	314	//	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ヘラナデ	ヘラケズリ	-	(11.6)	[8.0]	B	底部破片
623	293	//	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	タタキメ/アテグ	-	(10.1)	-	[18.0]	B	口縁部1/2現存
634	333	RA154	埋土中位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ハケメ	18.6	-	4.8	I A a	内黒処理、浅い段がある
635	334	//	埋土中~下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.0)	5.6	[5.2]	B II a	焼成良好
636	338	//	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(20.6)	-	[12.9]	A II	口縁部1/3現存、焼成良好
637	337	//	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ・ハケメ/ヨコ	ハケメ/ハケメ	-	19.4	-	[15.0]	A II	底部欠損、胎土に金雲母を多く含む

第25表 平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(6)

No	登録地	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
638	336	RA154	埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラミガキ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	8.8	[19.1]	A II	口縁部欠損、外面磨滅
639	340	//	埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	7.0	[7.4]	A II	底部破片、外面一面剥落
640	339	//	埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	7.8	[5.3]	A II	底部破片、胎土に金雲母を含む
641	335	//	埋土中～下位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	12.2	6.9	13.8	A II	口縁部短小、胎土に砂と石を多く含む
642	341	//	埋土中位	須恵器/長頸瓶	非ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	(8.6)	-	[4.0]	B	口縁部破片
647	360	RA158	カマド脇床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロ/ロクロ・ミガキ	ロク・ナデ・ケズ/ロク・ミガキ	回転糸切り/再	14.5	6.0	5.4	A I c	内黒処理、再調整は体部下端と底の一部
648	362	//	カマド付近	土師器/坏	ロクロ	ロクロ/ロクロ・ミガキ	ロクロナデ/ロクロ・ナデ	回転糸切り	14.0	6.0	5.2	A I a	内黒処理
649	363	//	埋土2層	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.1	6.5	5.0	B II a	
650	361	//	床上・2層	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ケズリ・ハケメ/ハケメ・ナデ	-	-	(11.0)	[10.2]	A II ?	1/2現存、砂底(全体に砂が付着)
651	759	//	床上	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、破片
652	364	RA160	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/再	14.4	6.6	5.0	A I c	内黒処理、磨滅が著しい
653	365	//	埋土	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	-	6.6	[4.0]	A I a	内黒処理、底部破片
654	366	//	埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ -	ヘラナデ	(8.8)	4.0	13.8	A	口縁部1/3現存、外面全体に赤色顔料付着
655	872	RA161	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	14.2	6.2	5.3	A I b	内黒処理、焼成良好、口縁部に炭化物付着
656	875	//	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(16.5)	(8.2)	4.9	B II a	胎土に砂と石を多く混入する
657	873	//	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.1)	(6.0)	4.9	A II a	胎土に砂を含む
658	874	//	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	5.8	4.6	B II a	焼成良好、胎土に砂を多く含む
659	876	//	P1	土師器/球胴甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	木葉痕/ナデ	-	(9.9)	[4.2]	A II	胎土に金雲母と砂を多く混入、底部一部ヘラナデ
660	878	//	埋土上～中位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	-	B	頸～体部破片
661	877	//	埋土上～中位	須恵器/壺 or 瓶	ロクロ	- / -	ロクロ・ケズリ/ナデ	-	-	-	[10.6]	B	体部破片、胎土に砂を多く混入する
663	367	RA162	埋土中位	土師器/手捏ね	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ	7.4	4.0	2.6		内黒処理、胎土に砂と石を多く含む
664	369	//	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ -	ロクロナデ/ -	回転糸切り	(14.3)	5.9	4.9	A I a	内黒処理、内外面磨滅が著しい
665	541	//	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.0)	5.6	[4.9]	A I a	
666	553	//	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.1)	5.2	[4.7]	A II a	
667	555	//	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.0)	5.5	[5.3]	A II a	
668	551	//	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.7)	5.8	[5.7]	A II a	
669	368	//	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.3)	5.9	5.4	A II a	1/3現存、内外面磨滅し剥落している
670	554	//	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.3)	5.8	[5.7]	A II a	
671	542	//	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.0)	(6.3)	[5.9]	A II a	
672	556	//	埋土上位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.3)	6.0	[4.7]	A II a	
673	552	//	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.9)	6.0	[4.8]	A II a	
674	370	//	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	6.4	4.8	A II a	磨滅が著しい、胎土に石の混入が多い
675	788	//	埋土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	(6.1)	[5.1]	B II a	
676	790	//	埋土	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(13.7)	-	[4.3]	A II	
677	543	//	埋土上～中位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	(7.4)	[5.5]	A	
678	557	//	埋土	土師器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ナデ・ロクロ/ロクロ	-	-	9.8	[19.0]	A	
679	373	//	床面	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	9.3	[9.4]	A	体～底部破片、内外面磨滅が著しい
680	374	//	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	9.0	[9.8]	A	内外面磨滅が著しい、胎土に砂を多く含む
681	372	//	埋土上～中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ヘラナデ	木葉痕	(21.7)	10.0	32.0	A II	口縁部2/3現存、内外面磨滅が著しい
682	565	//	埋土上位	土師器/球胴甕	非ロクロ	- / -	ハケ・ナデ/ヘラナデ	-	-	8.0	[13.0]	A II	
683	377	//	埋土中～下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	B	拓本
684	379	//	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
685	378	//	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
686	544	//	埋土	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	ヘラナデ	(19.0)	(15.0)	[32.8]	B	
687	494	//	埋土中～下位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	-	-	-	[7.2]	B	
688	558	//	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	-	(37.2)	-	[10.8]	B	
689	545	//	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	-	(46.5)	-	[53.5]	B	
690	789	//	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	タタキメ	-	(11.0)	[18.9]	A I	
691	376	//	埋土中～下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	B	拓本
692	547	//	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	[7.2]	B	

第26表 平安堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覽(7)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
693	550	RA162	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	-	(10.5)	B	
694	546	〃	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(10.9)	-	(16.4)	B	
695	548	〃	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	(11.0)	(7.0)	B	
696	375	〃	埋土中～下位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-	ケズリ/ナデ・ハケメ	ヘラナデ	-	9.7	(11.5)	B	体～底部破片、焼成良好
697	549	〃	埋土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	(12.9)	(11.8)	B	
699	380	RA163	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/再	(13.8)	6.4	5.5	A I c	内黒処理、底部再調整、内面磨滅している
700	381	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.0)	(7.1)	(5.0)	A II a	1/3現存、焼成良好
701	382	〃	埋土上～中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ・ケズリ/ヘラナデ	ヘラナデ	(11.2)	5.0	(8.7)	A II	1/2現存、胎土に砂と石を含む
702	895	RA165	カマド周辺	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.6)	6.4	4.6	A I a	内黒処理、内面の磨滅が著しい
703	763	〃	P 6	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.2	5.8	5.0	A II a	ほぼ完形、胎土に砂と石を多く含む
704	898	〃	埋土	土師器/鉢	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラケズリ/ -	-	(21.5)	-	(12.0)	A	内黒処理、内面磨滅、胎土に砂と石を含む
705	896	〃	カマド	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ケズリ・ナデ/ケズリ	-	20.8	8.2	31.1	A I	全体形手の巻みが大きい、胎土に砂と石を含む
706	772	〃	P 1	土師器/壺	ロクロ	-	ヘラケズリ/ハケメ	ヘラナデ/再	-	9.0	(8.5)	A I	体部～底部破片、胎土に砂と石の混入が多い
707	899	〃	Pit 5埋土	土師器/甕	非ロクロ	-	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	14.6	(3.3)	A II	底部破片、2/3現存、胎土に砂の混入が多い
708	897	〃	Q 2埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラケズリ/ヘラナデ	ヘラナデ	15.5	8.3	24.0	A II	胎土に砂と石を多く混入する
709	762	〃	P 5	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ/ヨコ・ヘラミガキ	ハケメ/ナデ・ケズリ	ヘラナデ	18.0	6.0	27.2	A II	口縁部1/2現存、胎土に石と金雲母を多く含む
710	771	〃	P 1	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	(15.8)	7.2	(9.9)	A II	内外面磨滅が著しい、胎土に金雲母を含む
711	879	〃	P 8	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラケズリ/ロクロナデ	ロクロナデ	12.4	9.2	22.4	B	体部外面一部剥落、胎土に砂と石を多く混入する
712	881	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(16.3)	-	(12.0)	B	口唇部に浅い北線が巡っている
713	764	〃	P 7	須恵器/壺	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラナデ/再	-	9.0	(8.5)	A I	体部～底部破片、胎土に砂と石の混入が多い
714	883	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(37.8)	-	(8.5)	B	焼成良好
715	882	〃	埋土上～中位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(12.4)	-	(10.0)	B	焼成良好、胎土に砂の混入が多い
716	884	〃	Q 3・4埋土中	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	(8.5)	B	底部欠損、1/4現存
717	880	〃	P 3	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	(13.5)	B	口縁部と底部欠損、体部に一部ヘラナデ調整
718	893	〃	床上	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(6.1)	B	拓本、体部破片
719	887	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(10.8)	B	拓本、体部破片
720	891	〃	P17	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(9.9)	B	拓本、体部破片
721	886	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(10.0)	B	拓本、体部破片
722	888	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(10.2)	B	拓本、体部破片
723	892	〃	P 4	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(9.8)	B	拓本、体部破片
724	889	〃	床上	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(6.8)	B	拓本、体部破片
725	890	〃	カマド周辺	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(8.7)	B	拓本、体部破片
726	894	〃	P17	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	(10.5)	B	拓本、体部破片
727	885	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	-	(1.5)	B	拓本、口縁部破片
730	385	RA168	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	13.4	5.7	5.6	A I a	内黒処理、外面一部剥落している
731	386	〃	埋土中～下位	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
733	1113	RA170	P7埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(12.9)	6.6	(5.1)	A I a	内黒処理、口縁部1/2現存
734	1006	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(14.6)	5.8	5.5	A I a	内黒処理、口縁部1/2欠損、焼成良好
735	1007	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転ヘラ切り	(12.9)	(6.1)	(5.8)	A I e	内黒処理、内面磨滅している
736	1008	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	-	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転ヘラ切り	-	(6.8)	(1.1)	A I e	内黒処理、底部破片
737	1018	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	-	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	-	6.0	(2.2)	A I a	内黒処理、底部破片
738	1017	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.2)	4.9	(4.7)	A II a	口縁部1/5現存、胎土に砂と石を多く含む
739	1014	〃	床上/坏No3	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.9)	5.2	5.4	A II a	口縁部2/3現存、胎土に砂と石を多く含む
740	1013	〃	床上/坏No1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	12.6	5.4	4.7	A II a	口縁部一部欠損、胎土に砂と石を多く含む
741	1011	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.7)	5.3	(5.4)	A II a	口縁部1/3現存
742	1016	〃	床上/坏No4	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.0)	6.0	(4.8)	A II a	口縁部1/5現存、焼成良好
743	1015	〃	床上/坏No2	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.4)	5.6	(4.9)	A II a	口縁部1/3現存、胎土に砂と石を多く含む
744	1010	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.7)	(5.6)	4.7	A II a	口縁部1/2現存、胎土に砂と石を多く含む
745	1009	〃	埋土中～下位	土師器/高台坏	ロクロ	-	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	-	(6.0)	(4.5)	A I a	内黒処理、底部1/2現存
746	1019	〃	埋土中～下位	土師器/高台坏	ロクロ	-	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	-	(7.0)	(3.5)	A I	内黒処理、底部1/2破片



第27表 平安堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覽(8)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
747	1022	RA170	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.7)	5.6	[5.0]	B II a	口縁部1/2現存
748	1026	〃	床上/坏Na4	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.1)	5.6	[4.6]	B II a	口縁部1/2現存、器形の歪みが大きい
749	1025	〃	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.5)	6.5	[4.2]	B II a	口縁部1/2現存
750	1024	〃	埋土下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.8)	(5.8)	[5.2]	B II a	口縁部2/3現存、器形の歪みが大きい
751	389	〃	埋土上位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	6.8	[4.2]	B II a	口縁部1/8現存
752	1020	〃	床上/坏Na5	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.5)	6.0	[4.4]	B II a	口縁部1/3現存
753	765	〃	埋土上位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.5)	5.9	[7.0]	B II a	口縁部1/3現存
754	1021	〃	床上/坏Na6	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.6)	6.2	[7.5]	B II a	口縁部1/3現存
755	1023	〃	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.2)	6.4	[7.6]	B II a	口縁部1/5現存
756	390	〃	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	- /ヘラナデ	-	(16.7)	-	[7.4]	A II	口縁部1/4現存、外面剝落し調整不明
757	1028	〃	床上/甕Na4	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ・ヘラミガキ/ハケメ	-	-	-	[27.8]	A II	口縁部と底部欠損、内外面磨滅している
758	1012	〃	埋土中～下位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	(8.4)	[9.3]	A II	底部1/2現存、外面煤付着
759	1027	〃	床上/甕Na3	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	22.0	-	[30.8]	A I	底部欠損、内外面磨滅している
760	1005	〃	床上/甕Na1	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ケズリ・ナデ/ナデ・ハケメ	ヘラナデ	-	8.0	[18.6]	A II	口縁部欠損
761	1004	〃	床上/甕Na2	須恵器/鉢	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	22.3	7.8	13.0	-	口縁部一部欠損
762	1003	〃	床上	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラナデ	(13.5)	9.5	26.6	B	口縁部2/3現存
763	1031	RA171	床上/Na4	土師器/坏	非ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(13.7)	6.2	5.2	A I b	内黒処理、口縁部2/3現存
764	1038	〃	床上埋土中/Na3	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(13.6)	6.0	[5.2]	A I b	内黒処理、口縁部1/3現存
765	1039	〃	Q 2埋土中～下	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(13.0)	(6.2)	[4.8]	A I b	内黒処理、口縁部1/2現存
766	1040	〃	Q 4埋土上～中	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(13.0)	(5.9)	[4.9]	A I b	内黒処理、口縁部1/5現存
767	1114	〃	P 13埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ -	ロクロナデ/ -	回転糸切り	(14.2)	6.4	5.3	A I a	内黒処理、内外面磨滅と剝落が著しい
768	1035	〃	床上/Na2	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	再調整	(13.2)	6.0	[5.4]	A I b	内黒処理、口縁部1/2現存
769	1036	〃	Q 3・Q 4埋土中	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	13.5	(5.9)	5.1	A I a	内黒処理、底部一部欠損
770	1030	〃	Q 1・Q 4埋土中	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ケズリ/ナデ	回転糸切り/再	(16.1)	7.4	[5.6]	A I b	内黒処理、口縁部2/3現存
771	1037	〃	床上/Na1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/再	13.4	5.9	6.0	A I b	内黒処理、内外面磨滅している
772	1032	〃	カマド焚口上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り/再	(13.6)	6.0	[5.4]	A II d	口縁部1/3現存、焼成良好
773	1165	〃	貼り床	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	16.5	6.5	6.9	A II a	口縁部一部欠損、焼成良好
774	1034	〃	埋土中～下	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.9)	6.0	5.4	A II a	口縁部2/3現存、胎土に砂と石を多く含む
775	1041	〃	Q 4埋土上～中	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(14.6)	6.2	[5.5]	A II a	口縁部2/3現存、胎土に砂の混入が多い
776	1042	〃	Q 4埋土上～中	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.6)	5.8	[5.0]	B II a	口縁部1/3現存
777	1033	〃	床上/Na5	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.4)	(6.6)	(4.6)	B II a	口縁部1/2現存
778	1043	〃	Q 2埋土中～下	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転ヘラ切り	-	(7.8)	[2.8]	A I	内外黒色処理、台部破片
779	1029	〃	床上/Na1	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.3)	7.6	14.5	A I	口縁部一部欠損、外面剝落が著しい
780	1144	〃	P 13埋土	土師器/甕	-	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(13.8)	-	7.6	A I	口縁部1/3現存
781	1044	〃	Q 4埋土中～下	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	9.8	[3.9]	A II	底部破片、底部剝落が著しい
782	1146	〃	カマド支脚	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	木葉痕	-	10.9	[10.2]	A II	底部一部欠損、胎土に砂と石の混入が多い
783	1145	〃	カマド支脚	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	-	-	7.4	[10.0]	A II	内外面磨滅している、胎土に砂と石を多く含む
784	1115	〃	P 13埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	- /ハケメ	-	-	(13.2)	[5.4]	A II	内外面磨滅と剝落が著しい
785	1089	〃	Q 4埋土中～下	須恵器/壺	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.6)	7.5	14.7	B	口縁部2/3現存
786	1045	〃	Q 2埋土中～下	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	[4.3]	B	体部破片
787	1046	〃	Q 2埋土中～下	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、787～790まで同一個体
788	1047	〃	Q 2埋土中～下	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、787～790まで同一個体
789	1048	〃	Q 2埋土中～下	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、787～790まで同一個体
790	1049	〃	Q 2埋土中～下	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、787～790まで同一個体
791	1050	〃	Q 2埋土中～下	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/ -	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
794	392	RA173	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転ヘラ切り	14.7	6.2	5.6	A I b	内黒処理、体部下半ヘラケズリ、煤付着
795	394	〃	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(16.9)	5.8	5.3	A II a	胎土に砂の混入が多い、1/4現存
796	393	〃	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	14.3	5.4	4.9	A I a	内黒処理、胎土に金雲母と砂混入
797	391	〃	床上	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/ -	-	-	-	-	B	拓本
799	396	RA176	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.1	5.2	5.1	A II a	外面は剝落が著しい、煤付着



第28表 平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(9)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
801	405	RA177	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	14.2	5.7	4.8	A I a	内黒処理、器形の歪みが大きい
802	403	〃	貼り床	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転ヘラ切/再	(14.3)	6.8	4.7	A I b	内黒処理、底部再調整、磨減が著しい
803	402	〃	貼り床	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.8)	5.5	4.5	A I a	内黒処理、磨減が著しい、1/3現存
804	401	〃	貼り床	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	14.7	6.0	5.3	A I b	内黒処理、底部再調整、砂の混入が多い
805	399	〃	カマド周辺	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(14.1)	(5.4)	5.2	A I a	内黒処理、胎土に金雲母が混入、1/2現存
806	404	〃	貼り床	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	16.2	5.8	4.8	A I a	内黒処理、器形の歪みが大きい、内面剥落
807	400	〃	カマド周辺	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.4)	(5.4)	4.9	A II a	胎土に金雲母が混入、1/6現存
808	406	〃	土坑埋土中	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.9	5.3	5.1	A II a	焼成良好、胎土に砂の混入が多い
809	397	〃	埋土上位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	- / ハケメ	-	-	(8.8)	[5.9]	B	体部破片
810	398	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
824	1051	RA178	埋土上~中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/再	(16.1)	(5.8)	[4.9]	A I c	内黒処理、外面磨減している
825	1116	〃	掘り方埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.7)	5.4	[3.4]	A II a	口縁部1/3現存
826	1052	〃	埋土上~中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.8)	5.8	[4.9]	A II a	口縁部1/3現存、外面剥落が著しい
827	1119	〃	掘り方埋土	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
828	408	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
829	1118	〃	カマド埋土	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
830	1117	〃	カマド埋土	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
831	1053	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
833	1120	RA179	カマド袖上部	土師器/甕	非ロクロ	ヨコ・ハケ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	(19.5)	7.7	28.2	A II	ほぼ完形
834	409	〃	埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ハケメ	-	-	-	11.6	A II	体部破片
835	1054	〃	埋土中~下位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	(7.6)	[16.1]	A II	底部1/3現存、外面磨減している
836	1055	〃	埋土中~下位	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
837	1056	〃	埋土中~下位	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
838	410	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
839	413	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
840	411	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
841	412	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
844	423	RA181	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ヘラナデ	-	(18.2)	-	[15.0]	A II	頸部に段を有し、口唇部に浅い沈線が巡る
845	422	〃	埋土下位	須恵器/甕	ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	- / -	-	(4.8)	-	-	B	口縁部破片
847	437	RA183	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	14.0	5.4	5.7	A I a	内黒処理、胎土に砂の混入が多い
848	432	〃	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	-	6.0	[3.0]	A II d	内黒処理、底部破片、磨減が著しい
849	425	RA182	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.5	5.2	5.5	A II a	器形に歪みがあり、胎土に砂の混入がある
850	426	〃	P1埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	12.9	5.3	5.2	A II a	焼成は粗雑、胎土に砂の混入が多い
851	436	RA183	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り/再	14.7	7.2	4.7	A II b	胎土に砂と石を多く含む、焼成良好
852	435	〃	カマド燃焼部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.0	5.4	5.1	A II a	胎土に砂と石を多く含む
853	429	RA182	P2埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.2)	5.8	4.3	A II a	胎土に砂の混入が多い、1/3現存
854	428	〃	P2埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転ヘラ切り	(13.6)	5.2	4.8	A II c	体部下半部に再調整がある、1/4現存
855	438	RA183	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.0)	5.2	4.6	A II a	胎土に砂の混入が多い、1/4現存
856	427	RA182	P2埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.0)	5.0	5.8	A II a	焼成良好、1/2現存
857	440	RA183	床上	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.4	4.7	4.7	B II a	胎土に砂と径2~3mm大の石を含む
858	441	〃	床上	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.4	6.3	4.7	B II a	胎土に砂と径2~4mm大の石を含む
859	439	〃	床上	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.2	6.0	5.6	B II a	胎土良好、径2~3mm大の石を含む
860	430	RA182	P埋土中位	須恵器/片口	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.1	5.2	5.2	B II a	焼成良好、口縁部一部欠損
861	433	RA183	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(14.8)	-	[8.7]	A II	口縁部1/4現存、胎土に砂と石の混入が多い
862	434	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
864	448	RA184	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転ヘラ切り	14.0	6.0	4.5	A I b	内黒処理、体部下半ヘラケズリ調整
865	449	〃	土坑1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	14.1	6.4	4.7	A I b	内黒処理、胎土に砂と金雲母の混入が多い
866	451	〃	カマド燃焼部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	13.8	6.1	4.4	A I a	内黒処理、胎土に金雲母の混入が多い
867	444	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(14.2)	6.3	4.3	A I a	内黒処理、器形に歪みがある、1/2現存
868	443	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	14.8	6.0	4.8	A I b	内黒処理、胎土に砂と金雲母を少量含む

第29表 平安堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(10)

No.	登録No.	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
869	450	RA184	カマド袖	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(13.4)	5.2	4.4	A I a	内黒処理、内面磨減が著しい、1/2現存
870	445	〃	貼り床	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.9)	5.0	4.8	A II a	胎土に砂を多く含む、1/4現存
871	446	〃	貼り床	土師器/甕	非ロクロ	ヘラナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ	-	12.0	-	(7.5)	A II	器形の歪みが著しい、体部外面剝落
872	447	〃	埋土下位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(14.6)	-	9.5	A I	全体が剝落し、胎土に砂の混入が多い
873	442	〃	床上	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-	-	ヘラ切り/再	-	10.7	(7.0)	B	底部破片、焼成良好
874	906	RA188	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	タタキメ/アテグ	-	22.6	-	(9.1)	B	口縁部破片、焼成良好
875	462	RA189	床上/Na1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	13.6	5.0	4.8	A II a	口縁部2/3現存、胎土に砂と石を多く含む
876	463	〃	床上/Na2	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.6)	5.2	5.1	A II a	口縁部1/3現存、内外面磨減している
877	464	〃	埋土上~中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.8)	5.0	5.2	A II a	口縁部1/3現存、焼成良好
878	465	〃	床上	土師器/小型甕	非ロクロ	-	ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	7.3	8.3	A II	外面剝落著しい、胎土に石を多く含む
879	466	〃	カマド煙道	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/-	-	22.3	-	(11.0)	B	口縁部破片
880	468	RA191	床/カマド煙道	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.3)	(7.0)	(4.7)	A II a	口縁部1/2現存、全体に磨減している
881	469	〃	カマド煙道	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.2)	(6.7)	(5.2)	A II a	口縁部1/3現存、胎土に金雲母を含む
882	470	〃	埋土中位	土師器/小型甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(15.2)	7.0	15.5	A I	口縁部1/2現存、胎土に砂と石を多く含む
883	484	RA194	カマド焼き口	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/再	14.4	6.6	5.4	A I c	内黒処理、口縁部2/3現存
884	480	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(14.0)	6.0	(5.2)	A I a	内黒処理、口縁部一部現存、胎土に石を多く含む
885	479	〃	東カマド焼き口	土師器/手捏ね	非ロクロ	-	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	3.6	(1.1)		内外面黒色処理、口縁部欠損
886	483	〃	カマド焼き口	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	14.7	6.0	5.5	A II a	口縁部一部欠損、焼成良好
887	481	〃	埋土中位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(19.6)	-	(15.0)	A II	口縁部1/4現存、胎土に石を多く含む
888	482	〃	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ	-	(20.1)	-	(8.0)	A II	口縁部1/4現存
889	785	〃	床上	須恵器/長頸瓶	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	7.0	(6.0)	B	底部破片
890	485	RA195	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(15.1)	7.3	5.7	A I a	内黒処理、口縁部2/3現存
891	487	〃	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.4)	(5.4)	(4.7)	A I a	口縁部1/3現存、内外面磨減が著しい
892	486	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(15.5)	5.6	(6.1)	A II a	口縁部1/2現存
893	488	〃	埋土中~下位	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(15.4)	-	(6.8)	A II	1/4現存
894	489	〃	埋土中~下位	土師器/高台坏	ロクロ	-	-	-	-	(7.8)	(2.2)	A II	高台破片1/2現存、磨減している
895	491	〃	埋土中~下位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(20.5)	-	(7.4)	A I	口縁部1/4現存
896	490	〃	埋土中~下位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(16.2)	-	(9.6)	A I	口縁部1/5現存
897	492	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	-	ケズリ・ナデ/ロクロ	-	-	(10.8)	(4.2)	B	底部破片、1/4現存
898	493	〃	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	-	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
901	96	RA198	カマド焼土直上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	14.6	7.0	4.5	A I a	内黒処理
902	97	〃	カマド焼土直上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/-	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	14.4	6.6	4.6	A I a	内黒処理
903	496	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	5.4	(1.5)	A I a	内黒処理、底部破片
904	497	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラナデ/再	(13.6)	(5.8)	(4.9)	A II d	底部再調整、口縁部1/3現存、内面剝落
905	95	〃	P 6 / 1~2層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	15.0	6.2	5.4	A II a	
906	499	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	5.8	(2.7)	A II a	底部破片
907	901	〃	カマド4層	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ミガキ・ハケ・ナデ/ハケメ	-	19.9	-	(19.4)	A II	胎土に金雲母を含む
908	103	〃	カマド	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラケズリ/ハケメ	-	(26.0)	-	(18.9)	A II	
909	105	〃	支脚	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ナデ・ケズリ/ハケメ	-	(14.0)	-	(11.5)	A II	胎土に小石含む
910	104	〃	カマド焼土直上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラケズリ/ヘラナデ	-	(22.3)	-	(13.9)	A II	胎土に金雲母を含む
911	102	〃	煙道煙出し	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ナデ・ミガキ/ハケ・ナデ	-	19.4	-	(12.0)	A II	炭化物付着
912	100	〃	支脚	土師器/甕	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	7.0	(6.7)	A I	
913	101	〃	支脚	土師器/甕	ロクロ	-	ナデ・ハケメ/ロクロ	回転系切り	-	7.2	(3.9)	A I	
914	498	〃	埋土中~下位	土師器/甕	ロクロ	-	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	7.2	(2.7)	A I	底部破片、胎土に砂と石の混入多い
915	500	〃	埋土中~下位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロ・ケズリ/ロクロ	-	(17.8)	-	(13.6)	A I	口縁部1/3現存、外面煤付着
916	501	〃	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(11.0)	-	(13.4)	B	口縁部1/3現存
918	504	RA213	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.0)	5.0	(6.1)	A I a	内黒処理、口縁部2/3現存
919	506	〃	埋土中~下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	14.6	5.5	4.8	B II a	口縁部一部欠損
920	505	〃	埋土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	14.9	5.4	4.9	B II a	焼成良好
921	507	〃	埋土中~下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.8)	5.1	5.0	B II a	口縁部2/3現存

第30表 平安竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(11)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
922	509	R A 213	カマド周辺	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	6.8	9.9	B	体~底部破片、焼成良好
923	510	〃	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	-	(22.6)	-	39.5	B	口縁部1/2現存、底部欠損
924	508	〃	埋土中~下位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.4)	7.0	15.1	A I	口縁部2/3現存、胎土に砂と石を含む
926	512	R A 214	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(14.0)	6.3	4.6	A I b	内黒処理、底部調整、口縁部1/3現存
927	513	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(14.2)	6.5	4.5	A I b	内黒処理、底部調整、内外面磨滅している
928	515	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.6)	(4.4)	5.1	A II a	口縁部1/4現存、胎土に砂と石を多く含む
929	516	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.6)	(6.6)	4.0	A II a	口縁部4/5現存
930	514	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.4)	5.6	5.8	A II a	口縁部2/3現存、器形の歪みが大きい
931	523	〃	埋土中~下位	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	(6.4)	2.0	A II	高台破片、磨滅している
932	517	〃	床上	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	(5.8)	5.0	B II a	口縁部1/4現存、焼成良好
933	519	〃	埋土中~下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.4)	(6.0)	5.7	B II a	口縁部1/4現存、焼成良好
934	518	〃	埋土中~下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.6)	(6.4)	5.5	B II a	口縁部1/4現存
935	511	〃	床上	土師器/耳皿	ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	10.8	5.9	4.3		内外面黒色処理、胎土に金雲母を含む
936	522	〃	P2	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ヘラケズリ/ロクロナデ	-	(24.0)	-	16.4	A I	口縁部短小、胎土に砂と石を多く含む
937	520	〃	P1	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ハケメ	ヘラナデ	-	9.5	14.4	A II	体~底部破片、内面にヘラ書きの沈線有り
938	521	〃	埋土中~下位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	13.5	10.7	A II	体~底部破片、外面磨滅している
939	524	〃	P3	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(9.6)	-	15.2	B	底部欠損、器形に歪みがある
942	529	R A 217	カマド袖	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.4	5.4	5.1	A II a	1/2現存、胎土に砂と石の混入が多い
943	528	〃	カマド	土師器/高台坏	ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	(15.3)	8.7	6.0	A I a	内外面黒色処理、全体に磨滅している
944	530	〃	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ / -	-	-	-	-	B	拓本
945	531	〃	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
946	576	R A 224	埋土1層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	14.2	5.9	4.8	A I a	内黒処理
947	575	〃	床上・2層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.0)	(6.2)	4.8	A II a	1/2現存
948	577	〃	埋土1層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.8)	(4.7)	5.4	A II a	1/2現存、赤化?
949	578	〃	埋土1層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.4	6.6	4.5	A II a	胎土に砂を含む
950	574	〃	床上・2層	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(16.4)	(7.7)	6.7	A II ?	高台、1/2現存
951	580	〃	埋土1層	土師器/小型甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ケズリ/ハケメ・ナデ	-	(15.9)	(8.6)	12.8	A II	胎土に砂の混入が著しい、底部砂底?剥落?
952	579	〃	埋土中~下位1層	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケ・ナデ・ケズリ/ハケメ	-	(18.0)	-	9.8	A II	口縁部破片、胎土に砂の混入が多い
953	914	R A 227	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.0)	6.0	5.5	A I a	内黒処理、1/2現存、内面の剥落が著しい
954	912	〃	カマド煙道部	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(14.0)	6.0	4.5	A I a	内黒処理、全体に器形の歪みが多い
955	913	〃	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.6)	6.0	5.6	A II a	焼成良好、口縁部1/5現存
956	916	〃	埋土中~下位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ハケメ	木葉痕	-	10.2	5.8	A II	底部破片、胎土に砂と石の混入が多い
957	915	〃	土坑/No1	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ヘラナデ	ヘラナデ	-	8.2	8.6	A II	内面剥落が著しい、胎土に砂と石の混入が多い
958	911	〃	床上	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ナデ・ハケメ/ハケメ	木葉痕	20.1	12.4	30.9	A II	胎土に砂と石の混入が多い、器形に歪みがある
959	919	〃	埋土中~下位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	-	-	6.5	B	口縁部破片、胎土に砂の混入が多い
960	918	〃	埋土中~下位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ・ケズリ/ハケメ	-	-	(14.8)	8.4	B	底部破片
961	920	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/ヘラナデ	-	-	-	-	B	底部破片
962	917	〃	床上	須恵器/甕	ロクロ	- / -	ロクロ・ケズリ/ロクロ	-	-	-	9.0	B	体部破片
963	1104①	R A 230	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
964	1104②	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
965	1091	〃	煙道上層	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
966	1092	〃	床面	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
967	997	R A 271	Q2埋土上位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(14.0)	(4.7)	5.5	A I a	内黒処理、焼成良好
968	1057	〃	埋土中~下	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(16.2)	6.0	7.1	A I a	内黒処理
969	999	〃	Q2埋土上位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(12.8)	6.1	5.4	A II a	胎土に砂と石を多く含む
970	1002	〃	埋土下/坏No1	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	6.9	5.0	B II a	1/2現存、器形の歪みが大きい
971	1001	〃	床上/坏No2	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.3)	(6.5)	7.0	B II a	1/2現存、焼成良好
972	1000	〃	埋土中~下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.0)	(6.8)	4.9	B II a	1/3現存
973	1123	R A 302	埋土中~下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(14.2)	6.2	(4.9)	A I	内黒処理、内面剥落している
974	1122	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	14.0	6.0	5.4	A I	内黒処理、内面磨滅している

第31表 平安堅穴住居跡・堅穴状遺構出土土師器・須恵器一覧(12)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
975	1125	RA302	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.9)	4.4	4.7	A II a	全体に器形の歪みが大きい
976	1126	〃	床上一括	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	14.6	5.4	5.5	A II a	口縁部2/3現存、歪みが大きい
977	1127	〃	床上一括	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り/再	(17.1)	(6.9)	[5.4]	A II d	口縁部1/2現存、内外面磨減している
978	1124	〃	床上	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	14.7	5.6	5.2	A II a	完形、焼成良好
979	1131	〃	Q1埋土中～下	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.1)	5.0	4.6	B II a	口縁部2/3現存
980	1129	〃	床上	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.6)	(6.7)	[5.1]	B II a	口縁部1/2現存、焼成良好
981	1130	〃	床上一括	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.8)	6.2	[5.1]	B II a	口縁部1/4現存
982	1128	〃	床上	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	13.5	5.2	4.9	B II a	完形、器形に歪みがある
983	1121	〃	床上	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	13.9	7.7	4.8	A I	内黒処理、口縁部2/3現存、胎土に金雲母を含む
984	1152	〃	煙出し上～中	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	ハケメ	20.2	(13.9)	31.4	A II	底部一部現存、胎土に砂と石の混入が多い
985	1151	〃	埋土下位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(21.2)	-	[18.2]	A II	口縁～体部破片、口縁部1/3現存
986	1150	〃	煙出し上～中	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(22.0)	-	[27.6]	A II	口縁～体部下半破片、口縁部わずかに現存
987	1149	〃	煙出し下部	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロ・ナデ/ロクロ	-	(21.7)	-	[16.2]	A I	口縁～体部破片、口縁部1/5現存
988	1132	〃	カマド煙道埋土	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	ミガキ・タタキメ/ナデ	ヘラナデ	-	(13.4)	[9.0]	B	底部破片、一部外面にタタキメ痕有り
989	1136	〃	床上一括	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
990	1135	〃	床上一括	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
991	1137	〃	カマド煙道埋土	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
992	1134	〃	埋土中～下位	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
993	1133	〃	埋土中～下位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	肩部破片、縁袖
1034	591	RE018	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラケズリ/ハケメ	-	(18.5)	-	[21.9]	A II	口縁部1/4現存、外面磨減が著しい
1035	593	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片
1036	592	〃	埋土中位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	B	体部破片
1037	594	RE019	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	-	(6.2)	[2.2]	A I a	内黒処理、底部破片、内面磨減が著しい
1038	598	RE020	埋土中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	(6.3)	[3.9]	B II a	底部1/2現存
1039	600	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1040	599	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1042	993	RE021	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.2)	(5.2)	5.8	B II a	1/4現存
1043	992	〃	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.7)	6.4	4.9	B II a	焼成良好、胎土に砂の混入が多い
1044	1105	RE024	床上/Na1	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.7)	5.1	4.7	A II a	口縁部2/3現存、内外面剥落が著しい
1045	1108	RE025	Q4埋土中～下	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.7)	6.2	4.6	A II a	口縁部一部現存、焼成良好
1046	1107	〃	埋土中～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.1)	5.5	[4.2]	A II a	口縁部1/3現存
1047	1106	〃	Q1埋土上～中	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(15.7)	5.2	4.5	A II a	口縁部1/5現存、胎土に砂と石を多く含む

調整痕の省略文字 ヘラナデ→ナデ ヘラケズリ→ケズリ ヘラミガキ→ミガキ ハケメ→ハケ ヨコナデ→ヨコ ロクロナデ→ロクロ

第32表 竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外出土土師器・須恵器一覧(1)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
1002		2-A区	柱穴流れ込み	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片、拓本
1003		〃	柱穴流れ込み	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/	-	-	-	-	B	体部破片、拓本
1049	698	RE023	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	B	拓本
1050	1109	RE026	埋土中～下位	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部小破片
1051	804	RD095	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	13.6	6.4	4.3	B II a	口縁部1/2現存、焼成良好
1052	805	〃	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.0)	(6.0)	(5.0)	B II a	口縁部1/3現存
1053	806	〃	埋土中～下位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.8)	(6.4)	(4.6)	B II a	口縁部1/2現存
1054	603	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1056	644	RD113	2層	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ	-	(20.0)	-	(10.0)	A II	口縁部破片
1061	645	RD122	埋土	土師器/球胴甕	非ロクロ	- / -	ナデ・ミガキ/ナデ	-	-	8.2	(7.8)	A II	体～底部破片
1062	647	RD123	1層	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	(12.6)	-	(3.4)	I Aa	内黒処理、1/2現存
1063	646	〃	1層	土師器/坏	非ロクロ	ナデ・ミガキ/ヘラミガキ	ナデ・ミガキ/ヘラミガキ	-	(17.2)	-	(5.3)	I Bb	内黒処理、1/2現存
1064	648	RD130	1層	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、頸～体部小破片
1066	649	RD144	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(14.2)	4.7	5.0	A I a	内黒処理
1067	673	〃	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	15.0	-	(4.7)	A I ?	内黒処理、口縁部破片
1068	674	〃	埋土	土師器/高台坏?	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	-	(6.3)	(2.1)	A I	内黒処理、底部
1069	675	〃	埋土下位	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	- / -	-	-	8.0	(2.1)	A II b	底部、胎土に金雲母を含む
1070	650	〃	埋土	土師器/甕?	ヨコナデ/ヨコナデ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	-	(12.0)	-	(3.6)	A ?	A ?
1071	676	〃	埋土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	-	-	(11.2)	(5.3)	A II	底部、1/2現存、胎土に砂粒を含む
1072	677	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/	-	-	-	-	B	拓本、口縁部～体部破片
1073	678	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
1074	679	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/ハケメ・アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
1075	605	RD146	埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ハケメ	-	(19.0)	-	(9.8)	A II	口縁部破片、1/4現存、胎土に金雲母を含む
1077	800	RD157	〃	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/	-	-	-	-	B	
1078	695	RD161	埋土中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.5)	6.0	4.9	B II a	1/2現存、焼成良好
1079	839	RD167	埋土	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	-	20.1	-	(18.3)	A I	口縁～体部1/2現存
1080	651	RD179	床	土師器/坏	非ロクロ	ハケメ/ヘラミガキ	ハケメ/ヘラミガキ	-	(16.8)	-	(4.0)	I Aa	内黒処理
1081	652	RD180	1層	土師器/坏	ロクロ	- /ヘラミガキ	- /ヘラミガキ	回転ヘラ切り/再	(13.8)	6.4	4.7	A I b	内黒処理、1/2現存
1082	653	〃	埋土7層	土師器/球胴甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ハケメ/ハケメ・ヘラナデ	-	(25.6)	-	(20.4)	A II	口縁～体部破片
1084	602	RD181	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(15.8)	(6.0)	(6.4)	A I a	内黒処理、口縁部1/3現存、内面磨滅が著しい
1088	801	RD209	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1089	601	RD217	底面	土師器/甕	ロクロ	ヨコ・ハケメ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ハケメ	-	20.0	-	(23.1)	B	底部欠損
1092	803	RD221	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1093	802	〃	1層	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1098	696	RD242	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/	-	-	-	-	B	拓本
1099	697	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1104	1138	RD613	埋土中～下位	須恵器/甕	ロクロ?	- / -	ロクロナデ/	-	-	(9.4)	(3.5)		底部破片、台付、底部に指による刻線?
1105	1139	〃	埋土中～下位	須恵器/甕	非ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片
1123	808	RG042	埋土上位	土師器/坏	非ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ	19.8	-	5.9	I Ab	内黒処理、口縁部一部欠損、丸底
1124	811	〃	埋土上位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.4)	6.5	(4.5)	B II a	口縁部1/6現存
1125	809	〃	埋土上位	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/	-	-	8.5	(2.1)	A I c	内黒処理、高台部、磨滅が著しい
1126	807	〃	埋土上位	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	-	5.7	(1.6)	A I a	内黒処理、底部破片
1127	810	〃	埋土上位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	7.1	(6.3)	A II	底部破片、外面磨滅している
1128	812	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	- / -	-	(40.0)	-	(6.5)	B	口縁部破片
1129	815	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	B	拓本
1130	813	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	頸部破片
1131	819	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1132	818	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1133	816	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本
1140	817	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本

第33表 竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外出土土師器・須恵器一覧(2)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
1141	820	RG045	埋土上～下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	(14.3)	6.0	4.7	A I b	内黒処理、口縁部1/3現存、内面剥落している
1142	958	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.9)	6.0	5.4	A I a	内黒処理、胎土に砂と石を多く混入する
1143	957	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロ・ケズリ/ミガキ	回転糸切り	(13.3)	5.7	5.2	A I a	内黒処理、焼成良好
1144	959	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	?	(13.7)	6.0	4.3	A I a	内黒処理、全体に磨滅が著しい
1145	960	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	—	6.4	[3.8]	A I a	内黒処理、胎土に砂と石を多く混入する
1146	955	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.1)	5.6	5.4	A II a	胎土に砂と石の混入が多い、器形歪みが大い
1147	953	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.8)	6.3	5.7	A II a	焼成良好、口縁部1/6現存
1148	938	〃	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.7	4.6	4.4	A II a	器形の歪みが大い、全体に磨滅が著しい
1149	937	〃	埋土下位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.1	5.8	5.3	A II a	体部外面一部剥落
1150	935	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.4)	6.0	5.5	A II a	胎土に砂と石の混入が多い、焼成良好
1151	954	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.1)	6.0	5.7	A II a	墨書、1/3現存、胎土に砂と石の混入が多い
1152	936	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.1)	6.7	5.3	A II a	器形の歪みが大い、胎土に砂と石の混入が多い
1153	956	〃	埋土上～中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	12.9	(5.5)	4.5	A II a	焼成良好、1/2現存
1154	961	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.2	5.6	4.9	B II a	焼成良好
1155	962	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.6	6.5	4.5	B II a	胎土に砂と石の混入が多い
1156	963	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.5	6.1	4.7	B II a	焼成良好、胎土に砂を多く混入する
1157	965	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.1	7.4	4.9	B II a	胎土に砂と石の混入が多い
1158	822	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	6.3	5.1	B II a	口縁部1/2現存
1159	966	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.5	6.0	5.0	B II a	1/2現存、胎土に砂と石の混入が多い
1160	980	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.6	5.6	4.6	B II a	1/2現存、胎土に砂と石の混入が多い
1161	978	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	5.1	4.6	B II a	1/2現存、焼成良好
1162	972	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.1)	5.8	5.0	B II a	胎土に砂と石を多く混入する、1/3現存
1163	969	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	6.1	4.4	B II a	1/2現存、胎土に砂と石の混入が多い
1164	971	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	6.3	4.4	B II a	1/2現存、焼成良好
1165	821	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	5.0	5.1	B II a	口縁部2/3現存、焼成良好
1166	823	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	5.8	5.2	B II a	口縁部1/2現存
1167	977	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.4)	5.6	4.6	B II a	1/3現存、胎土に砂と石の混入が多い
1168	973	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.2)	5.8	4.9	B II a	1/3現存、内面にモミ痕あり、焼成良好
1169	975	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	5.9	5.1	B II a	1/3現存、焼成良好
1170	824	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.7)	5.5	[4.2]	B II a	口縁部1/2現存、焼成良好
1171	974	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.4)	5.3	5.0	B II a	1/3現存、焼成良好
1172	964	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.7	6.2	4.9	B II a	外面に煤付着
1173	968	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	6.2	4.8	B II a	1/3現存、胎土に砂の混入が多い
1174	825	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.0)	6.0	[4.8]	B II a	口縁部一部現存、胎土に砂と石の混入が多い
1175	976	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.8)	(6.6)	5.0	B II a	1/3現存、胎土に砂の混入が多い
1176	979	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(13.9)	7.2	5.2	B II a	1/3現存、焼成良好
1177	826	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.5)	(6.4)	[5.3]	B II a	口縁部1/2現存
1178	967	〃	埋土上～中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.3)	6.5	4.3	B II a	1/3現存、焼成良好、器形の歪みが多い
1179	981	〃	埋土上～中位	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	—	(13.4)	6.5	[5.4]	A I	1/2現存、焼成良好、煤付着
1180	982	〃	埋土上～中位	土師器/甕	非ロクロ	— / —	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ	(13.0)	—	[5.8]	A II	底部破片、小型の器形
1181	970	〃	埋土上～中位	須恵器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	—	7.6	[6.1]	—	1/3現存、焼成良好
1182	983	〃	埋土上～中位	土師器/甕	非ロクロ	— / —	ナデ・ケズリ/ハケメ	ヘラナデ	—	(8.4)	[10.1]	A II	底部破片、胎土に砂と石の混入が多い
1183	940	〃	埋土上～中位	土師器/甕	非ロクロ	— / —	—	木葉痕	—	(9.6)	[2.4]	A II	拓本、底部1/2現存
1184	828	〃	埋土上～中位	須恵器/小型壺	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(4.2)	(3.9)	[5.2]	B	口縁～底部破片、口縁部1/5現存
1185	827	〃	埋土上～中位	須恵器/小型壺	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	—	4.8	[6.3]	B	口縁部欠損、体部1/3現存
1186	989	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	—	(14.1)	—	[9.8]	B	口縁部破片、口唇部を上引き出している
1187	985	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	— / —	—	(18.4)	—	[4.4]	B	自然釉、口縁部破片
1188	986	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	— / —	—	(18.6)	—	[7.4]	B	口縁部破片
1189	988	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	— / —	ヘラナデ/ハケメ	ヘラナデ	—	(10.8)	[7.1]	B	底部破片
1190	984	〃	埋土上～中位	須恵器/甕	ロクロ	— / —	ケズリ・ナデ/ハケメ	ヘラナデ	—	(8.8)	[3.4]	B	底部破片、1/2現存

第34表 竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外出土土師器・須恵器一覧(3)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
1191	991	R G 045	埋土上~中位	須恵器/長頸壺	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	7.4	4.5	B	底部破片、焼成良好
1192	990	〃	埋土上位	須恵器/長頸壺	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	(10.0)	-	8.1	B	口縁部破片、1/2現存
1193	987	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	15.5	B	体~底部破片、丸底、自然釉
1194	949	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	6.8	B	拓本、体部破片
1195	952	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	6.6	B	拓本
1196	948	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	9.6	B	拓本、体部破片
1197	950	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	8.2	B	拓本、頸~体部破片
1198	941	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	8.5	B	拓本、体部破片
1199	943	〃	埋土上~中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	12.9	B	拓本、体部破片
1200	951	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ハケメ	-	-	-	11.3	B	
1201	939	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	-	-	4.0	B	拓本、口縁部破片
1208	683	R G 069	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片
1211	687	R G 072	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片
1212	686	〃	埋土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片
1214	688	R G 097	埋土下位	須恵器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	(6.5)	1.1	B II a	底部破片
1215	689	〃	埋土底	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片
1216	606	R G 106	埋土上~中位	土師器/坏	ロクロ	ヨコナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ	(11.4)	-	3.8	I A a	内黒処理、口縁部1/2現存、外面磨滅が著しい
1217	607	〃	埋土上~中位	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	11.0	4.3	A II	底部破片、内外面磨滅が著しい
1218	219	R G 099	砂質土層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	(13.6)	(5.8)	4.3	A I a	内黒処理
1219	220	〃	砂層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り	12.3	5.2	5.2	A I a	内黒処理
1220	221	〃	溝底~砂土	土師器/坏	ロクロ	ロクロ/ロクロ・ミガキ	ロクロ・ケズリ/ミガキ	ヘラケズリ	(15.6)	6.0	5.1	A I c	内黒処理
1221	222	〃	溝底	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	15.8	5.6	5.5	A II a	
1222	223	〃	溝底砂土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.5)	6.0	5.3	A II a	
1223	224	〃	溝底砂土層	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	底部再調整あり	15.6	6.4	5.5	A II c	
1224	225	〃	〃	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	底部再調整あり	7.7	5.6	4.7	A II c	
1225	226	〃	砂灰	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	底部再調整あり	13.4	5.4	4.9	A II b	
1226	227	〃	〃	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	14.3	6.0	5.3	A II b	
1227	228	〃	〃	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.7	4.6	5.0	A II a	
1228	229	〃	砂層	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	13.3	5.8	5.0	B II a	
1229	230	〃	砂質土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.7)	5.6	5.0	B II a	
1230	231	〃	溝底砂土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(15.4)	6.2	4.9	B II a	
1231	232	〃	溝底~砂土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	(14.4)	5.4	4.8	B II a	
1232	233	〃	砂質トレンチ	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	調整痕有り	-	8.4	3.4	A I	内黒調整
1233	234	〃	トレンチ	土師器/高台坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロ/ミガキ・ナデ	-	12.0	5.7	4.4	A I	内黒調整
1234	250	〃	〃	土師器/甕	ロクロ	- / -	-	-	-	-	-	A II	頸部破片
1235	235	〃	砂質	土師器/甕	ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	-	-	6.5	4.2	A II	
1236	238	〃	溝底砂土	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(11.4)	-	11.1	B	
1237	239	〃	溝底~砂土	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(11.8)	-	7.7	B	
1238	236	〃	溝底~砂土	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	-	18.0	-	8.0	B	
1239	237	〃	〃	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	24.2	-	6.5	B	
1240	248	〃	砂質土層	須恵器/長頸壺	ロクロ	- / -	ロクロ・ナデ/ロクロ	-	-	-	10.2	B	
1241	246	〃	溝底~砂土	須恵器/長頸壺	ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ロクロナデ	-	-	-	5.1	B	
1242	247	〃	溝底トレンチ	須恵器/長頸壺	ロクロ	- / -	- / ヘラナデ	-	-	(8.0)	4.0	B	
1243	241	〃	〃	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	-	-	-	B	口縁部破片、拓本
1244	240	〃	〃	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片、拓本
1245	242	〃	〃	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片、拓本
1246	243	〃	〃	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片、拓本
1247	244	〃	〃	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/タタキメ	-	-	-	-	B	体部破片、拓本
1248	245	〃	〃	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	体部破片、拓本
1249	709	R G 135	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転糸切り/再	14.3	6.5	4.9	A I b	内黒処理、胎土に金雲母の混入が多い



第35表 竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外出土土師器・須恵器一覽(4)

No.	登録No.	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
1250	710	RG135	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り/再	14.0	5.5	5.5	A I b	内黒処理、2/3現存、胎土に砂と石を多く混入
1251	702	〃	埋土上位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(14.7)	(5.4)	4.4	A I a	内黒処理、胎土に砂の混入が多い
1252	711	〃	埋土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	-	(5.6)	[3.2]	A I b	内黒処理、体部~底部破片
1253	708	〃	埋土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	15.1	6.0	5.5	B II a	完形、焼成良好
1254	704	〃	埋土上位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	13.6	6.2	4.6	A II a	2/3現存、胎土に砂の混入が多い、煤付着
1255	703	〃	埋土上位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(16.2)	(7.0)	5.0	A II a	口縁~底部破片、1/4現存
1256	699	〃	埋土中位	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	15.2	-	4.8	A II a?	底部欠損、焼成良好
1257	1143	〃	中央拡張部	土師器/高台坏	?	?	?	?	-	-	[3.2]		高台部、内外面磨減している
1258	705	〃	埋土上位	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	-	[9.3]	B	破片、焼成良好
1259	707	〃	埋土	須恵器/甕?	ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ヘラナデ	-	-	10.4	[9.0]	B	底部破片、底部剥落
1260	701	〃	埋土中位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ヘラナデ	-	-	10.7	[8.4]	B	体~底部破片、底部剥落
1261	706	〃	埋土上位	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテダ	-	-	-	-	B	拓本
1267	715	RG152	埋土中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(14.2)	6.6	5.2	A I a	内黒処理、2/3現存、内面剥落が著しい
1268	713	〃	埋土中位	土師器/甕	非ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	-	(16.6)	-	[10.2]	A II	口縁~体部破片、胎土に砂と金雲母の混入が多い
1269	714	〃	埋土中位	土師器/壺	非ロクロ	- / -	ヘラミガキ/ヘラミガキ	刻線	-	7.5	[9.8]	A	体~底部破片、焼成良好、胎土に砂を多く含む
1271	829	RG168	埋土上~中位	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(14.4)	5.9	4.6	A I a	内黒処理、口縁部一部現存、内面磨減している
1280	832	粗掘	2 C区III~IV層	土師器/坏	非ロクロ	- /ヘラミガキ	- /ヘラミガキ	-	(13.2)	-	[5.0]		内黒処理、口縁部1/4現存
1281	621	〃	-2 B区表土	土師器/坏	非ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(15.8)	7.8	4.5	A I a	内黒処理、口縁部2/2現存、内面剥落し磨減
1282	622	〃	-2 B区表土	土師器/坏	非ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/再	(13.4)	(5.6)	[5.5]	A I a	内黒処理、口縁部1/3現存、内外面磨減が著しい
1283	620	〃	-2 B区表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(12.6)	5.0	[5.3]	A I a	内黒処理、口縁部1/3現存、外面磨減している
1284	609	試掘	表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	(14.8)	6.9	[4.0]	A I a	内黒処理、口縁部1/5現存、内面磨減している
1285	619	粗掘	-2 B区表土	土師器/坏	非ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ヘラナデ/再	(14.2)	6.0	4.9	A I b	内黒処理、口縁部1/2現存、内面剥落している
1286	722	〃	-2 -A区表土	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	回転系切り	-	[7.6]	[1.9]	A I a	内黒処理、底部破片、刻線がある
1287	610	試掘	表土	土師器/坏	非ロクロ	- / -	ヘラケズリ/ヘラミガキ	ヘラケズリ	-	5.0	[2.5]	I A b	内黒処理、底部破片、胎土に砂の混入が多い
1288	623	粗掘	-2 B区表土	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	-	(6.6)	[2.6]	A I	内黒処理、高台破片
1289	725	〃	-2 -A区表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ヘラミガキ	ロクロナデ/ヘラミガキ	-	-	-	[4.3]	A I a	内黒処理、口縁部破片、墨書
1290	638	〃	-2 A区表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	12.9	5.5	4.0	A II a	内外面磨減している
1291	626	〃	-2 B区表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.8)	6.0	[4.2]	A II a	口縁部1/3現存、胎土に砂と石を多く含む
1292	724	〃	-2 -A区表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	13.3	5.8	4.2	A II a	口縁~底部破片
1293	625	〃	-2 B区表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.6)	(6.1)	[4.9]	A II a	口縁部1/2現存、内面磨減している
1294	611	〃	表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.4)	(6.8)	4.5	A II a	口縁部1/2現存、底部一部現存
1295	720	〃	-2 -A区表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.3)	(5.9)	4.0	A II a	1/2現存、焼成良好
1296	719	〃	-2 -A区表土	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	6.0	[2.5]	A II a	体~底部破片、胎土に砂と金雲母を混入する
1297	624	〃	-2 B区表土	土師器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	7.0	[3.8]	A II a	底部破片、内外面磨減している
1298	721	〃	-2 -A区表土	土師器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	5.0	[2.7]	A II a	体~底部破片、焼成良好
1299	640	〃	-1 B区表土	土師器/高台坏	非ロクロ	- / -	- / -	ナデツケ	-	(8.0)	[2.0]		高台破片
1300	636	〃	1 B区III層	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	- / -	回転系切り	-	(7.8)	[1.3]	A II	台破片、内面剥落している
1301	629	〃	-2 B区表土	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ -	-	-	(7.8)	[2.3]	A II	高台破片、内面剥落している
1302	690	〃	5 -D区堆積層	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(14.3)	4.3	6.8	B II a	口縁部一部欠損
1303	613	試掘	表土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.3)	5.9	4.7	B II a	口縁部1/2現存
1304	639	粗掘	-2 A区表土	土師器/高台坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	(6.3)	[1.9]	A II	底部破片
1305	612	試掘	表土	須恵器/坏	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	(13.9)	6.1	5.7	B II a	口縁部1/2現存
1306	615	〃	表土	須恵器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	5.8	[3.6]	B	口縁部欠損
1307	614	〃	表土	須恵器/坏	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転系切り	-	6.2	[3.0]	B II a	口縁部欠損
1308	635	粗掘	-2 B区表土	土師器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(15.4)	-	[8.6]	A I	口縁部一部、底部欠損、胎土に砂と石を多く含む
1309	726	〃	-2 -A区表土	土師器/甕	ロクロ	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	-	-	-	[16.3]	A II	口縁部~体部破片、胎土に砂と石を多く含む
1310	627	〃	-2 B区表土	土師器/甕	非ロクロ	- / -	ヘラナデ/ヘラナデ	木葉痕	-	(11.2)	[5.8]	A II	口縁部1/2現存、内面磨減している
1311	831	〃	1 C区III~IV層	土師器/球胴甕	非ロクロ	- / -	ハケメ/ハケメ	ヘラナデ	-	7.9	[5.1]		底部破片、内外面磨減している
1312	634	〃	-2 B区表土	土師器/壺	非ロクロ	- / -	ヘラミガキ/ヘラナデ	-	-	(10.4)	[4.4]	A	底部破片、胎土に砂と石を多く含む
1313	628	〃	-2 B区表土	須恵器/甕	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	ロクロナデ/ロクロナデ	-	(14.4)	-	[15.6]	B	底部破片、口縁部1/4現存



第36表 竪穴状遺構・土坑・溝跡・遺構外出土土師器・須恵器一覽(5)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	成形	口縁部(外/内)	体部(外/内)	底部	口径cm	底径cm	器高cm	分類	備考
1314	630	粗掘	-2 B区表土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	(12.0)	[8.1]	B	底部細片
1315	723	//	-2 A区表土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	- / -	-	7.3	-	[3.9]	B	口縁部破片
1316	633	//	-2 B区表土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	回転糸切り	-	(6.4)	[3.7]	B	底部破片
1317	643	//	-1 A区表土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	ナデツケ	-	9.6	[4.5]	B	底部破片
1318	838	//	PP85・86 埋土中	須恵器/壺	ロクロ	ロクロナデ/ロクロナデ	タタキメ/アテグ	-	22.0	-	[14.8]	B	拓本、口縁～肩部破片
1319	631	//	-2 B区表土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ハケメ・ナデ	-	-	(9.6)	[6.6]	B	底部細片
1320	637	//	1 B区III層	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ハケメ	ヘラナデ	-	(12.3)	[4.3]	B	底部1/3現存
1321	616	試掘	表土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	7.6	[1.8]	B	底部破片、底面に米の刻印有り
1322	617	//	表土	須恵器/長頸瓶	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	ナデツケ	-	(10.8)	[2.3]	B	底部1/5破片
1323	632	粗掘	-2 B区表土	須恵器/長頸壺	ロクロ	- / -	ロクロナデ/ロクロナデ	-	-	(8.2)	[2.2]	B	底部細片
1324	1140	//	-2 A区表土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、頸～肩部破片
1325	1111	//	-1 A区	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
1326	1112	//	-1 A区	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
1327	1142	//	-2 A区表土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
1328	1141	//	-2 A区表土	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本、体部破片
1329	833	//	3 C区III～IV層	須恵器/甕	ロクロ	- / -	タタキメ/アテグ	-	-	-	-	B	拓本

調整痕の省略文字 ヘラナデ→ナデ ヘラケズリ→ケズリ ヘラミガキ→ミガキ ハケメ→ハケ ヨコナデ→ヨコ ロクロナデ→ロクロ

第37表 陶磁器一覽(1)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考	図版	写真
1001	1110	RB018	B2中上位	甕	-	(12.8)	[4.5]					底部1/3現存	262	287
1012	33	RB014	P380埋土	磁器碗	[12.3]	5.3	5.7	灰白色	染付 砂目積み	肥前	1610～1650	1/2現存漆継ぎ	272	//
1013	32	RB014	埋土	須恵器系陶器摺り鉢	-	-	-	灰褐色	無釉		中世	底部破片	//	//
1058	57	RD102	埋土	陶器碗	-	4.1	[1.9]	灰色	外面鉄釉 見込灰釉	大塚相馬		底部破片	308	290
1059	56	//	埋土	陶器碗	-	4.0	[3.7]	灰色	外面鉄釉 見込灰釉	大塚相馬		体～底部破片	//	//
1090	22	RD238	埋土	磁器碗	-	3.9	[2.1]	灰白色	白磁	肥前	1690～1780	底部破片	311	295
1112	31	RD227	埋土下位	磁器皿	-	7.5	[1.6]	白色	染付 見込五弁花 桐の葉 高台内に「大明年製」	肥前	1690～1780	口縁部欠	//	292
1209	681	RG069	埋土(流れ込み)	摺り鉢	-	-	-	黒褐色	鉄釉			口縁部破片	369	-
1274	34	P560		陶器碗	-	(4.2)	[3.8]	淡橙色	外面鉄釉 見込灰釉	大塚相馬		底部破片	359	306
1275	41	P119	2-A区埋土	陶器碗	10.0	5.1	4.9	灰白色		肥前	18C前半	3/4現存 呉器手	//	//
1348	29	RE015	埋土8層(流れ込み)	陶器鉢	[28.8]	[10.2]	[9.0]	赤錆色	三島文 白化粧 無釉	肥前		底部破片	//	//
1348	42	2-AP181	埋土	陶器鉢	[28.8]	[10.2]	[9.0]	赤錆色	三島文 白化粧 無釉	肥前		口縁破片	//	//
1349	44		2-A区北III層上面	陶器碗	(10.2)	(3.0)	5.8	灰色	灰釉	大塚相馬		2/5現存	369	312
1350	8	RA136	埋土上～中位	陶器碗	[9.9]	[3.9]	5.7	灰色	灰釉	大塚相馬		1/5現存	//	//
1351	47		2-A2e区III層上面	陶器碗	[10.6]	[4.2]	6.8	灰色	外面下半鉄釉他灰釉	大塚相馬		1/2現存	//	312
1352	60	粗掘	-1-A・A区	陶器碗	(10.6)	-	[5.0]	灰白色	灰釉	大塚相馬		口縁部～体部破片	//	//
1353	19	粗掘	-1B区	陶器碗	[9.6]	-	-	灰白色	灰釉 鉄絵	大塚相馬		口縁破片	367	311
1354	20A	粗掘	-1B区埋土	磁器碗	[10.4]	-	-	灰白色	染付		1690～1780	口縁破片1376と同一?	//	//
1355	10	RA145	床上(攪乱)	磁器杯	[6.2]	-	-	灰白色	染付(黒色)			口縁破片	368	312
1356	43		2-A区III層上面	磁器皿	(14.4)	(9.0)	(2.7)	白色	染付見込五弁花菊莖印	肥前	1690～1780	五弁花菊莖印	367	311
1357	55	RZ012	埋土	磁器杯	[4.6]	-	-	灰色	染付(黒色)「人無」			1/4現存 見込貫入	360	306

第38表 陶磁器一覽(2)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考	図版	写真
1358	16	RA226	埋土中～下位	青磁碗	[16.2]	—	—	灰白色	鎊連弁文	龍泉窯系	13C前半	口縁破片	367	311
1359	17	RA099	埋土中位	青磁香炉	[10.0]	—	—	灰白色	内面無釉	肥前	17～18C	口縁破片	〃	〃
1360	6	RG135	埋土中央	陶器碗	—	—	—	淡橙色	灰釉	大堀相馬		口縁部破片	369	312
1361	50		5-B区Ⅲ層上位	青磁碗	—	—	—	灰色	連弁文	龍泉窯系	13C	口縁破片	367	311
1362	59		-1A～-1B区検出時	白磁梅瓶?	—	—	—	淡黄灰色	篋、櫛目文			体部(肩)破片	〃	〃
1363	27	RA047	埋土中位	磁器皿	[12.4]	—	—	淡灰色	染付 四方禪			口縁破片	368	〃
1364	?	土捨場	-1-A区付近	陶器土瓶蓋	—	—	—	—	灰釉	大堀相馬		1/2現存	〃	—
1365	30	2-API	埋土	磁器杯	(7.6)	(2.8)	3.4	白色ガラス質	染付		近代	1/3現存	〃	311
1366	18	粗掘	-1B区北側	磁器皿	—	—	[7.0]	白色	染付	肥前	18C前半	体部破片	359	306
1367	58B	粗掘	-1-A～A区	磁器皿	(14.2)	(7.2)	3.5	白色	染付 口紅 高台内に「太」	肥前	1610～1650	体部破片	368	311
1368	36		1-A区近世攪乱	青磁皿	—	(6.8)	[3.7]	白色	青磁 見込蛇の目釉剥ぎ	波佐見	17C	底部破片	〃	〃
1369	40	粗掘	2-API17	陶器碗	—	4.5	[1.9]	灰色	染付 蒟蒻印判	肥前	18C前半	底部破片	359	306
1370	39	RB010	P29埋土	陶器碗	—	5.2	—	浅黄橙色	銅緑釉 見込蛇の目釉剥ぎ	肥前	1690～1780	底部破片	265	287
1371	21	試掘	耕作土	磁器碗	—	3.8	—	淡褐色	染付 蒟蒻印判	肥前	18C前半	底部破片	367	311
1372	14	RA214	埋土(流れ込み)	陶器甕	—	[12.4]	—	灰褐色	灰釉(胴部破片に鉄絵あり)	大堀相馬		体部破片	368	312
1373	37	粗掘	1-B21y区近世攪乱	陶器碗	—	(4.3)	[3.8]	灰黄色	鉄釉			底部破片 漆継ぎ	369	〃
1374	371	RA162	埋土上～中位	茶碗	—	4.4	[4.2]	—	—			破片	367	311
1375	61	表採		陶器甕?	—	(8.0)	[2.3]	灰色	緑釉				368	312
1376	20B	粗掘	-1B区埋土	磁器碗	[10.4]	—	—	灰白色	染付	肥前	1690～1780	口縁破片1354と同一?	367	311
1377	49	粗掘	2-A14y攪乱	瓶	—	(6.4)	(4.4)	白色	染付	伊万里?		Ⅲ期?	368	312
1378	3	RA177	P1埋土	磁器皿	—	[5.9]	—	白色	—			底部破片	367	311
1379	45	RD108	埋土/2-A区Ⅲ層	陶器瓶?	—	[7.9]	—	淡黄橙色	灰釉	相馬		底部破片	368	312
1380	46	粗掘	2-A2e区Ⅲ層	陶器皿	—	[4.8]	—	淡黄灰色	黄褐釉	肥前		京焼風陶器	〃	〃
1381	1		表面採集	陶器	—	[5.9]	—	淡黄灰色	黄褐釉			底部破片	〃	〃
1382	35	粗掘	1-A2c区Ⅰ層下位	陶器	—	5.0	—	淡橙色	透明釉			底部破片	〃	〃
1383	1096	粗掘	-1-A?	消し壺?	—	(17.0)	[7.3]	—	—			底部破片足付	369	〃
1384	642	粗掘	-1B表土	壺	—	(11.0)	[7.9]	—	—			底部1/5現存	〃	〃
1385	11	RA145	床上	?石臼	—	—	—	—	—			体部破片	360	306
1400	54	墓場	2-B墓地表採	磁器碗	—	(3.9)	[4.7]	白色ガラス質	染付	瀬戸	19C前半	底部破片	367	311
1401	51	墓場	2-B墓地表採	磁器杯	(6.6)	(2.5)	3.0	白色ガラス質	染付・人物?		19C前半	1/2現存	368	〃
1402	52	墓場	2-B墓地表採	磁器德利	—	—	[7.2]	淡褐色	染付・山水文	平清水	19世紀	破片	〃	〃
1403	53	墓場	2-B墓地表採	陶器德利?	—	—	—	灰色	鉄絵(馬)			破片	〃	312
1429		RD225	埋土	陶器皿	—	—	—	淡褐色	灰釉	美濃	17C前半	体部破片	310	295
1430		RD225	埋土	瓦質陶器?	—	—	—	灰色	—	不明	不明	口縁部?破片	〃	〃
1443		RD178	埋土中層	磁器碗	—	—	—	淡灰色	—		近代以降	口縁部破片	〃	〃

第39表 鉄製品一覧(1)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	時期	図版	写真
17	38	RA118	床上	器種不明	[14.6]	1.0	1.0	[41.6]				
18	39	"	床上	刀子	[8.7]	刀1.6	刀0.6	[11.4]	基幅0.8×厚さ0.3cm	奈良	18	199
22	17	"	埋土下位	釘?	[3.5]	1.2	1.0	[12.7]		"	"	"
42	92	RA123	埋土上層	刀子	[5.1]	1.5	0.3	[11.3]	基部と先端部欠損	"	25	201
79	93	RA129	P1	釘	[4.5]	1.5	1.0	[8.0]	欠損	"	34	206
169	95	RA141	床上	刀子	14.2	刀1.4	刀0.2	19.1	基幅0.9×厚さ0.6cm ほぼ完形	"	59	219
170	97	"	埋土中位	刀子	[15.0]	刀2.0	刀0.3	[20.4]	基幅1.1×厚さ0.3 先端部欠損	"	"	"
171	96	"	床上	刀子	[10.7]	刀2.4	刀0.2	[22.4]	基幅1.0×厚さ0.3 先端部欠損	"	60	"
172	94	"	床上	刀子	[6.0]	1.6	0.3	[5.7]	基部と先端部欠損	"	"	"
226	51	RA155	埋土上～中位	刀子	[7.2]	2.0	0.8	[16.4]		"	77	226
255	26	RA185	埋土1層	刀子	[4.7]	2.0	0.3	[9.2]	刀部	"	84	228
256	27	"	埋土1層	刀子	[5.5]	2.0	0.3	[13.9]	茎欠損	"	"	"
295	69	RA218	埋土上～中位	リング状製品	4.4	2.5	0.8	16.1		"	99	232
314	102	RA225	埋土上位	刀子	[7.9]	刀1.9	刀1.9	[9.3]	基幅0.8×厚さ0.2cm 茎欠損	"	105	235
341	65	RA272	埋土上位	鉄鏃	[8.9]	3.5	0.5	[22.8]	基部一部欠損	平安	113	239
342	66	"	埋土中位	刀子	[6.6]	3.7	0.5	[49.0]	破片	"	"	"
343	64	"	埋土上位	釘	[4.7]	0.5	0.5	[2.8]		"	"	"
379	35	RA109	埋土上位	鉄鏃	[5.3]	1.0	0.6	[6.6]	基部現存	"	124	242
405	1	RA113	埋土中位	?	5.1	7.2	?	77.7		"	129	243
406	36	RA114	埋土上位	釘	[25.3]	2.1	1.0	[212.2]	端部欠損	"	130	244
413	37	RA116	埋土中位	紡錘車	[3.2]	0.4	0.3	[0.8]	先端部	"	133	"
494	106	RA126	焼土上	鏃	[9.3]	2.6	0.3	[26.9]	破片	"	144	249
508	40	RA128	床上	釘?	[3.7]	0.4	0.3	[3.0]		"	149	250
530	41	RA137	埋土中位	鉄鏃	9.7	刀1.6	刀0.6	11.4	基幅0.8×厚さ0.3cm ほぼ完形	"	155	252
531	42	"	床上	カマ	[15.8]	2.7	0.3	69.8		"	"	"
544	45	RA138	埋土中位	紡錘車	[1.1]	0.4	0.5	[32.4]	幅②5.2×5.6	"	158	253
545	43	"	カマド周辺	釘	[3.7]	0.4	0.6	[4.4]		"	"	"
546	44a	"	埋土中位	鉄滓	3.0	3.9	2.0	23.5		"	"	"
547	44b	"	埋土中位	釘状	[5.1]	0.4	0.4	[1.5]		"	"	"
565	98	RA150	壁際上位	釘	[15.8]	1.1	0.6	[33.1]	一部欠損	"	163	255
580	46	RA152	床上	鋤先	11.8	16.1	0.7	218.7		"	168	257
581	48a	"	土坑 No1	器種不明	[4.8]	[2.3]	0.8	[13.8]		"	"	"
582	48b	"	"	釘	[3.5]	0.6	0.6	3.8		"	"	"
583	47	"	埋土中～下位	紡錘車	6.4	0.8	0.6	[16.2]		"	"	"
625	4 a	RA153	埋土上位	鏃	[9.1]	3.5	※	[34.5]	※厚さ0.2～0.4cm	"	173	259
626	2	"	埋土上位	鏃	[7.5]	3.3	※	[30.3]	※厚さ0.2～0.4cm	"	"	"
627	3	"	埋土上位	鏃	[7.8]	2.6	※	[21.1]	※厚さ0.1～0.4cm	"	"	"
628	6	"	床上	?	[15.1]	2.8	?	[102.1]		"	"	260
629	8	"	床上	釘	[5.8]	0.8	0.8	[7.8]		"	"	259
630	4c	"	埋土上位	釘	[3.2]	0.7	0.6	[2.7]	4b と同一固体?	"	"	260
631	4b	"	埋土上位	釘	[6.3]	0.7	0.6	[6.3]	4c と同一固体?	"	"	"
632	5	"	埋土下位	?	5.8	4.0	0.9	77.0		"	"	"
633	7	"	床上	鏃?	[6.3]	0.9	0.7	[37.5]		"	"	"
645	50	RA154	埋土上位	鉄鏃	[4.1]	1.0	0.4	[2.9]	基部	"	175	261
646	49	"	埋土上位	釘?	[3.7]	0.7	0.6	[3.5]	基部	"	"	"
662	52	RA161	埋土上位	刀子	[6.7]	1.4	0.2	[14.8]		"	180	262
698	90	RA162	埋土上～中位	鏃	[13.3]	3.0	※	[57.3]	※厚さ0.2～0.4cm	"	186	265
728	53	RA165	床上	刀子	[10.6]	刀1.5	刀0.3	[13.3]	基幅0.9×厚さ0.3cm	"	193	269
729	54	"	床上	釘	8.5	0.4	0.4	[9.5]		"	"	"
732	55	RA168	埋土中～下位	器種不明	4.5	0.3	0.3	[1.9]		"	194	"
792	108①	RA171	床上	鏃	[13.0]	2.8	—	[47.9]		"	202	273
793	108②	"	床上	鏃	[6.1]	3.2	—	[25.8]		"	"	"
798	21	RA173	床上	紡錘車	[1.3]	0.5	0.3	[10.6]	幅②4.9×?、一部破片	"	203	"
800	107	RA176	床上一括	?	3.0	3.3	1.6	24.0		"	204	"
811	15	RA177	埋土下位	鉄鏃	[8.5]	3.8	1.0	[32.0]	基部一部欠損	"	207	274
812	10	"	埋土中位	紡錘車	[5.1]	0.6	0.4	[26.6]	幅②4.9×4.7	"	"	"
813	18	"	埋土下位	紡錘車	[4.2]	0.4	0.4	[6.9]	幅②[2.8]×?、一部破片	"	"	"
814	20	"	埋土下位	紡錘車	[4.9]	0.6	0.6	[4.9]	破片	"	"	"
815	19	"	埋土下位	紡錘車	[15.7]	0.7	0.7	[17.4]	先端部?	"	"	"
816	16	"	埋土下位	鏃?	[1.9]	[3.4]	0.2	[4.9]		"	"	"
817	11	"	埋土中位	釘	[4.0]	0.5	0.5	[4.6]	両端部欠損	"	"	"
818	13	"	埋土下位	釘	[6.0]	0.7	0.6	[8.6]		"	"	"
819	14	"	埋土下位	釘	[3.4]	0.6	0.5	[1.9]		"	"	"
820	22	"	貼り床	釘	[5.6]	0.6	0.5	[10.9]		"	"	"
821	23	"	貼り床	釘	[3.7]	0.7	0.5	[5.4]	両端部欠損	"	"	"
823	12	"	埋土中位	釘?	[5.1]	0.5	0.5	[3.4]		"	"	"
832	117	RA178	貼り床中	?	[4.1]	1.2	0.7	[5.6]		"	209	275
842	24	RA179	埋土上位	釘	[5.8]	3.4	2.7	[51.3]		"	211	276
843	109	"	埋土中～下位	釘	[3.7]	0.5	0.4	[2.3]		"	"	"
863	25	RA183	埋土中～下位	器種不明	4.4	5.2	0.4	15.9		"	215	"
899	56	RA195	埋土上位	紡錘車	[13.2]	0.6	0.7	[47.3]	幅②5.6×5.6	"	225	278
900	57	"	埋土上位	?	[17.3]	1.2	0.6	[126.8]		"	"	279
917	101	RA212	埋土下位	鏃の鳩尾板?	[14.8]	[8.3]	0.3	[77.2]		奈良?	"	221
940	67	RA214	埋土中～下位	刀子	[4.1]	3.0	0.2	[12.9]	先端部	"	236	282

第40表 鉄製品一覧(2)

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	時期	図版	写真
941	68	RA214	床上	器種不明	3.5	3.1	3.0	33.2	ボール状	平安	236	282
995	110	RA302	埋土中～下位	紡錘車	5.5	5.6	0.2	[15.9]		〃	255	286
996	112	〃	床上一括	刀子?	[4.7]	1.2	0.5	[4.9]		〃	〃	〃
997	113	〃	床上一括	?	[7.6]	1.3	0.9	[17.8]		〃	〃	〃
998	100	RA157	埋土下位	鎌	20.2	2.9	※	76.0	※厚さ0.1~0.5cm ほぼ完形	中世	256	〃
999	99	〃	埋土上位	釘	[9.0]	1.3	1.1	[24.6]	一部欠損	〃	〃	〃
1000	71	RB008	C2柱埋土	刀子	[5.7]	0.8	0.4	[10.3]	基部分	〃	259	287
1041	73	RE020	埋土中位	刀子	[11.2]	1.2	0.4	[17.8]	先端部欠損	平安	280	289
1048	111	RE025	埋土中～下位	刀子	[6.5]	1.3	0.4	[14.5]		〃	281	〃
1083	103	RD178	埋土上位	釘	7.6	0.7	0.8	[12.0]	一部欠損	近世	310	295
1086	72	RD194	埋土中位	鉄滓	4.0	5.7	2.8	18.3		不明	〃	292
1091	104	RD238	埋土	刀子	[7.8]	1.3	0.2	[12.5]	茎欠損	近世	311	295
1100	28	RD242	埋土中位	釘	[4.4]	1.0	1.1	[5.6]		平安	〃	〃
1103	114	RD612	埋土中～下位	?	[11.2]	0.6	0.5	[19.7]		近世	313	293
1106	115	RD664	埋土中	?	[3.8]	1.5	0.7	[17.4]		不明	311	294
1135	76	RG042	埋土上位	刀子	[11.4]	1.4	0.3	[100.5]		中世	337	296
1136	75	〃	埋土上位	釘	[3.9]	0.7	0.5	[4.0]		〃	〃	〃
1137	91a	RG067	埋土	鉄滓	3.4	2.7	1.6	11.9		古代?	〃	〃
1138	91b	〃	埋土	鉄滓	2.8	3.7	1.2	18.8		〃	〃	〃
1202	77	RG045	埋土上位	紡錘車	[6.0]	0.8	0.4	[2.2]	先端部破片	平安	342	300
1203	78	〃	埋土上位	紡錘車	[5.2]	0.6	0.5	[1.8]	先端部破片	〃	〃	〃
1204	79	〃	埋土上位	鉄鏃	15.6	1.0	0.5	13.9		〃	〃	〃
1210	118	RG070	埋土	不明	-	-	-	-	破片	不明	343	〃
1213	80	RG076	?	紡錘車	[11.7]	1.5	1.4	[29.4]	先端部破片	平安	〃	301
1262	29	RG135	埋土中位	刀子	[9.8]	2.0	0.3	[28.2]	茎欠損	不明	348	304
1263	30	〃	埋土中位	釘	[6.9]	1.0	1.2	[14.6]		〃	〃	〃
1264	32	〃	中央部拡張部	?	[9.3]	1.0	0.3	[29.7]		〃	〃	〃
1265	33	〃	埋土中位	釘	[4.0]	0.6	0.7	[6.5]		〃	〃	〃
1266	31	〃	中央部拡張部	釘	6.1	0.9	0.7	[4.5]		〃	〃	〃
1330	83	粗掘	-2B区表土	?	[7.8]	1.2	0.7	[8.0]		〃	364	309
1331	89	不明	?	?	[9.8]	0.9	0.6	24.3		〃	365	〃
1332	82	〃	-1A区表土	刀子	[14.2]	1.8	※	[56.8]	※厚さ0.2~0.6cm 先端部破片	〃	〃	〃
1333	86	〃	-1B区III層	釘	[6.7]	0.9	0.4	[4.7]		〃	364	〃
1334	87	〃	-1B区III層	蹄鉄	12.8	15.6	0.8	297.8		近世～近代	365	310
1334	88a	試掘	トレンチII層	鋤先	[7.0]	[10.0]	0.4	[53.7]	破片、1335に接合	平安?	〃	〃
1335	88b	〃	トレンチII層	鋤先	[6.0]	[6.9]	0.4	[38.3]	1334と接合	〃	364	310
1336	84	〃	-2B区表土	?	5.8	1.6	0.2	[5.9]		不明	〃	309
1337	34	粗掘	埋土上位	刀子	[4.4]	1.5	0.2	[5.0]		〃	364	〃
1338	116	-2-A区	IV層	釘?	[5.4]	0.6	0.6	[6.8]		〃	365	〃
1339	85	〃	-1B区III層	刀子	8.6	1.0	0.5	[8.7]		〃	〃	〃
1340	81	粗掘	-1A区表土	キセル	[5.9]	1.5	1.5	[9.3]	木質部一部現存	近世	〃	〃
1399	105	墓?	埋土下位	キセル	[5.4]	1.4	1.1	[6.4]	木質部一部現存	〃	〃	〃

第41表 土製品一覧

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	時期	図版	写真
16	7	RA118	埋土下位	紡錘車	[3.7]	[4.4]	[1.2]	15.8	一部破片	奈良	18	199
138	10	RA139	埋土中位	紡錘車	4.0	4.0	2.9	40.8	一部欠損、外面黒色	〃	50	215
139	11	〃	床上	紡錘車	5.1	5.0	2.7	65.1	完形、胎土に金雲母を含む	〃	〃	〃
237	13	RA169	床上	紡錘車	5.4	5.4	2.6	76.2	完形、表面磨滅が著しい	〃	80	226
246	2	RA180	床上	紡錘車	4.9	4.9	2.9	66.5	一部欠損、焼成良好	〃	82	227
285	15	RA215	埋土中位	土鍾	5.2	1.9	1.8	13.0	完形	〃	96	231
312	24	RA225	Q1床直	紡錘車	4.4	3.9	3.1	67.9	胎土に金雲母含む	〃	105	-
313	25	〃	Q1埋土下層	紡錘車	(3.7)	(1.9)	(1.9)	10.8	破片	〃	〃	-
315	〃	〃	カマド内	不明土製品	(12.9)	(2.0)	(1.7)	40.7	両端欠損 胎土に金雲母多量を含む	〃	〃	-
330	16	RA229	埋土中位	紡錘車	4.1	4.2	1.9	31.4	一部欠損	〃	109	237
331	17	〃	埋土中位	紡錘車	4.2	4.1	3.7	47.0	一部欠損	〃	〃	〃
340	22	RA272	Q4埋土	紡錘車	5.0	5.0	2.6	59.2	完形、全体に磨滅している	〃	113	239
516	9	RA136	P4	土鍾	4.5	1.7	1.6	10.7	完形	平安	152	251
517	8	〃	埋土上位	土鍾	4.5	1.4	1.3	7.0	完形	〃	〃	〃
624	1	RA153	埋土下位	土鍾	4.1	2.2	2.2	19.3	完形、一部剝落	〃	173	259
643	12	RA154	埋土中位	紡錘車	5.5	5.4	2.3	64.0	重複するRA135住(奈良)の流れ込み	平安?	175	261
925	14	RA213	床上	紡錘車	5.0	5.0	1.9	54.4	完形、流れ込みか?	〃	233	281
994	23	RA302	P4埋土	土鍾	5.6	2.4	2.0	26.8	一部欠損	平安	255	286
1014	仮1	RB016	P304	土鍾	6.1	2.2	2.1	21.4	片側欠損	不明	272	287
1076	18	RD156	埋土中位	土鍾	4.2	2.1	2.1	15.2	完形	平安?	309	291
1085	6	RD181	埋土上位	土鍾	5.8	2.2	2.1	18.8	完形	〃	310	292
1139	20	RG067	埋土	鞆の羽口	[4.8]	[3.7]	[1.4]	19.2	破片	〃	337	297
1140	21	〃	埋土	鞆の羽口	[6.4]	[6.3]	[3.1]	81.0	破片	〃	〃	〃
1205	19	RG045	埋土	紡錘車	6.2	6.3	2.7	74.3	一部欠損、胎土に砂と石を多く含む	奈良?	342	300
1270	4	RG152	埋土中位	紡錘車	[4.2]	[2.2]	0.9	7.1	穿孔されている	〃	348	305
1341	5	粗掘	-2-A22m	紡錘車	[5.2]	(5.0)	2.2	57.5	一部欠損と剝落している	〃	365	309

第42表 石器・石製品一覧

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	時期	図版	写真
50	27②	RA124	埋土	敲磨石	(7.3)	(10.2)	(6.3)	868.2		奈良	27	203
80	6	RA129	埋土	凹石	5.4	5.1	3.9	77.3	浅い使用痕である	〃	34	206
106	29	RA130	Q1埋土	敲石	(10.3)	4.7	3.2	143.2	先端部欠損、側面に高打痕有り	〃	39	210
120	28	RA132			13.6	6.4	3.7	453.1		〃	44	212
121	29①	〃			10.3	4.7	3.2	143.2		〃	〃	〃
122	27	〃	Q2埋土	砥石	(8.3)	5.0	3.5	220.1	6面使用されている	〃	〃	〃
173	33	RA141	Q2埋土中位	敲石	12.9	8.6	6.3	851.6	欠損	〃	60	219
174	39	〃	床面	凹石	11.4	13.8	5.7	921.1	火熱による?赤化がみられる	〃	〃	〃
175	32	〃	Q3埋土下位	円盤状石製品?	6.5	7.0	1.6	130.7	周縁部を打ち欠いている	〃	〃	〃
176	32	〃	Q3埋土下位	磨石?	11.5	12.5	3.0	658.8	磨面がある	〃	〃	〃
186		RA142		ガラス小玉	0.4	0.3	0.2	0.1	コバルトガラス	〃	64	220
187	8	〃	埋土	管玉	2.6	0.9	0.9	3.8	一部欠損	〃	〃	〃
188	37	〃	Q3壁際	敲磨石	16.9	10.6	6.2	1545.5		〃	〃	221
195	36	RA145	床面	磨石?	11.5	9.8	5.3	784.7		〃	67	〃
390	2	RA111	埋土上位	磨石	6.2	5.4	4.7	93.0	一面使用、両端部欠損	平安	127	243
507	20	RA128	埋土中位		5.5	4.7	2.3	52.6		〃	149	250
644	3	RA154	埋土上~中位	砥石	[5.5]	2.4	1.7	21.0		〃	175	261
1064	35	RB010	P30埋土	有孔石製品	16.6	12.7	6.3	925.0	両側から穿孔	近世	265	287
1011	14	RB015	P336埋土	有孔石製品	5.1	4.1	1.2	21.2	軽石	近世?	272	〃
1015	13	RB016	P311埋土	円盤状石製品	5.3	5.2	1.5	60.8		〃	〃	〃
1060	9	RD102	埋土	石臼	24.4	17.5	9.7	2280.0	上臼1/4現存	近世	308	290
1065	31	RA130	埋土	凹石	13.0	9.5	4.2	520.8	軽石状の多孔質の石材を使用	?	39	210
1101	1	RD247	埋土中位	紡錘車	4.3	3.9	1.8	20.3	一部欠損	古代	311	293
1206	4	RG045	埋土上位	管玉	[2.8]	1.1	1.1	6.6	半分欠損中央部側がよく使用されている	平安	342	300
1207	9	〃	埋土上~中位	石皿	[14.3]	15.6	6.9	1381.5	半分欠損中央部側がよく使用されている	〃	〃	〃
1342	7	粗掘	埋土上~中位	石鍋	[4.5]	[5.9]	2.4	50.4	口縁部破片 突帯	不明	365	309
1343	10	pit470	埋土	石臼	(30.9)	(16.6)	(12.9)	5790.0	上臼破片約1/2現存	近世	366	309
1344	12	RZ012	埋土	砥石	(8.5)	(7.0)	(3.0)	263.9	欠損	〃	360	306
1345	5	粗掘	埋土上位	敲石	[7.9]	3.0	2.9	64.1	先端部を使用している	縄文	366	311
1346	26	試掘		石皿	(12.8)	18.3	6.2	1271.1	再面使用、一面には炭化物が付着	〃	〃	〃
1347	15	粗掘		不明石製品	21.6	13.4	8.6	3210.0	先端部を敲いている	不明	367	311
1385	11	RZ012	埋土	石臼	(14.5)	(9.0)	(11.3)	1469.0	上臼破片約1/5現存	近世	360	306
1404	25	RA123	貼り床		2.3	2.4	0.6	4.3		縄文	370	313
1405	22	RG045	埋土上位		4.3	3.1	2.0	23.1	黒曜石	〃	〃	〃
1406	12	RA221	表土		4.0	2.2	1.3	10.3		〃	〃	〃
1407	4	RA177	P1		5.6	3.8	0.9	17.6		〃	〃	〃
1408	2	RA173	埋土上位		4.3	3.4	1.0	17.6		〃	〃	〃
1409	17	RG152	埋土中位		3.8	3.6	0.3	4.2		〃	〃	〃
1410	1	RA153	埋土下位		4.0	3.5	1.3	12.6		〃	〃	〃
1411	14	RG104	埋土中位		6.9	7.2	1.7	70.5		〃	〃	〃
1412	16	RG135	埋土中位		3.5	2.4	0.4	3.3		〃	〃	〃
1413	21	RA166	北壁側		1.6	1.6	0.8	1.9	黒曜石	〃	〃	〃
1414	10	RA221	表土		2.4	3.1	0.7	5.0		〃	〃	〃
1415	11	〃	表土		5.0	3.3	0.9	9.0		〃	〃	〃
1416	18	RG152	埋土中位		2.9	3.4	0.9	7.9		〃	〃	〃
1417	8	RA182	貼り床下		3.9	3.1	0.6	7.0		〃	〃	〃
1418	15	RG135	埋土上位		3.5	5.7	0.8	13.3		〃	371	〃
1419	3	RA176	埋土上位		4.0	3.5	0.4	5.0		〃	〃	〃
1420	19	RA099	埋土上~中位		3.2	2.5	0.6	4.3	黒曜石	〃	〃	314
1421	7	RA181	埋土下位		4.2	4.0	0.8	14.6		〃	〃	〃
1422	9	RA183	埋土中~下位		4.6	4.1	1.0	15.1		〃	〃	〃
1423	23	粗掘	1A~1B区		3.5	3.5	1.2	9.1	黒曜石	〃	〃	〃
1424	13	RD259	埋土中位		5.3	4.9	2.0	46.8		〃	〃	〃
1425	5	RA177	P1		4.5	2.7	0.5	8.4		〃	〃	〃
1426	6	RA180	埋土中位		6.9	4.7	1.1	40.8		〃	〃	〃
1427	30	粗掘			4.9	8.7	1.6	69.5		〃	〃	〃

第43表 古銭一覧

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	時代	初鑄年	西暦	直径cm	重さg	備考	図版	写真
1005	10①	RB012	P16埋土中位	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.3	3.5	古寛永	272	287
1006	10②	〃	P16埋土中位	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.4	2.4	古寛永	〃	〃
1007	10③	〃	P16埋土中位	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.4	6.5	2枚密着、裏面の銭は新寛永(文銭)初鑄年1668	〃	〃
1008	10④	〃	P16埋土中位	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.35	2.6	古寛永	〃	〃
1009	10⑤	〃	P16埋土中位	寛永通寶	江戸	寛文8以降	1668以降	2.5	5.6	2枚密着、表面の銭は新寛永(時期不明)裏面不明	〃	〃
1010	10⑥	〃	P16埋土中位	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.35	1.9	古寛永	〃	〃
1055	5	RD107	埋土	寛永通寶	江戸	元禄10	1697		1.0	1/3残存	307	290
1057	12	RD413	埋土上位	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.4	2.1	古寛永	〃	〃
1087	1	RD208	埋土1層	寛永通寶	江戸			2.3	2.2	古寛永か新寛永か不明、腐食が進んでいる	311	292
1094	7①	RD227	埋土下層	寛永通寶	江戸				1.2	古寛永か新寛永か不明、腐食が進んでいる	〃	293
1095	7②	〃	埋土下層	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.4	5.2	2枚密着、裏の銭は時期不明	〃	〃
1096	7③	〃	埋土下層	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.5	8.4	3枚密着、中、裏の銭は時期不明	〃	〃
1097	7④	〃	埋土下層	寛永通寶	江戸			2.3	6.6	3枚密着、3枚とも古寛永か新寛永か不明	〃	〃
1102	13	RD612	埋土中～下位	寛永通寶	江戸	寛文8	1668	2.5	2.2	新寛永文銭	313	〃
1107	仮1	RD755	埋土	寛永通寶	江戸	寛永13?	1636	2.4	136.6	麻布に入る 43枚が密着 最も上の1枚は古寛永?	〃	294
1108	15	RD756	埋土	寛永通寶	江戸	寛文8以降	1668以降	2.4/2.4	12.7	4枚が密着 裏と思われる襷でさしの状態 新寛永?	312	〃
1109	14	〃	埋土	寛永通寶	江戸	寛文8以降	1668以降	2.5/2.3	5.3	2枚が密着 裏と思われる襷でさしの状態 新寛永	〃	〃
1110	仮1	〃	埋土	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.4	3.4	新寛永	〃	〃
1111	仮2	〃	埋土	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.4	3.3	新寛永	〃	〃
1113	18	RD757	埋土	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.3	2.4	新寛永?	313	〃
1114	17	〃	埋土	寛永通寶	江戸	寛文8	1668	2.5	3.5	新寛永文銭	〃	〃
1115	19	〃	埋土	寛永通寶?	江戸			2.3	1.9	腐食が進んでいる	〃	〃
1116	仮1	〃	埋土	寛永通寶	江戸	寛文8	1668	2.5	3.2	新寛永文銭	〃	〃
1117	仮2	〃	埋土	寛永通寶	江戸	寛文8	1668	2.5	2.9	新寛永文銭	〃	〃
1118	仮3	〃	埋土	寛永通寶	江戸	寛文8	1668	2.5	3.5	新寛永文銭	〃	〃
1119	仮4	〃	埋土	寛永通寶	江戸	寛文8	1668	2.5	3.5	新寛永文銭	〃	〃
1120	仮5	〃	埋土	寛永通寶	江戸	寛文8	1668	2.5	3.0	新寛永文銭	〃	〃
1121	16	〃	埋土	寛永通寶?	江戸			2.4	158.3	麻布にくるまれ、筒に入る 変状の襷でさしの状態 39枚以上	〃	〃
1272	9①	RZ003	埋土	永楽通寶	明?	永楽6?	1408?	2.2	1.4	模鑄銭?	359	306
1273	9②	〃	埋土	永楽通寶	明?	永楽6?	1408?	2.3	2.0	2枚密着、模鑄銭?	〃	〃
1386	2①	遺構外	粗掘	元豊通寶	北宋	元豊元	1078	2.35	2.1	行書、RA151 検出時に出土	369	312
1387	2②	〃	粗掘	熙寧元寶	北宋	熙寧元	1068	2.45	1.6	篆書、RA151 検出時に出土	〃	〃
1388	3①	試掘	-1-C区表土	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.3	1.6	新寛永	〃	〃
1389	3②	〃	-1-C区表土	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.45	6.0	2枚密着、裏は新寛永	〃	〃
1390	3③	〃	-1-C区表土	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.25	2.1	新寛永	〃	〃
1391	3④	〃	-1-C区表土	寛永通寶	江戸	寛文8	1668	2.7	3.6	新寛永文銭、ゆがんでいる	〃	〃
1392	3⑤	〃	-1-C区表土	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.7	30.3	新寛永、9枚密着	〃	〃
1393	4①	RB014	P447埋土	永楽通寶	明?	永楽6?	1408?	2.1	破損不明	模鑄銭? 腐食が進んでいる	272	287
1394	4②	〃	〃	永楽通寶	明?	永楽6?	1408?	2.2	0.8	模鑄銭? 腐食が進んでいる	〃	-
1395	11①	墓地	2-B区墓地	寛永通寶	江戸	寛永13	1636	2.4/2.4	3.9	2枚密着、裏の銭は時期不明	369	312
1396	11②	〃	〃	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.4	2.4	〃	〃	〃
1397	11③	〃	〃	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.5	3.2	2枚密着、裏の銭は時期不明	〃	〃
1398	11④	〃	〃	寛永通寶	江戸	元禄10	1697	2.4/2.4	10.2	3枚密着、裏の銭は時期不明	〃	〃

第44表 縄文土器一覧

No	登録No	遺構名	出土地点・層位	器種	口径cm	底径cm	器高cm	備考	図版	写真
1428	712	RG152	埋土中位	深鉢	(34.0)	-	[27.2]	口縁～体部破片、補修孔有り	372	315
1429	947	〃	埋土上～中位	深鉢	-	-	[2.1]	拓本、口縁部破片	〃	-
1430	942	RG045	埋土上～中位	深鉢	-	-	[5.9]	拓本、口縁部破片	〃	-
1431	834	RA118	床面	壺	-	-	-	1/2強現存、口縁部欠損	〃	314
1432	944	〃	埋土上～中位	深鉢	-	-	[4.8]	拓本、口縁～体部破片	〃	-
1433	717	〃	埋土中位	鉢	-	-	-	破片	〃	315
1434	700	RG135	埋土中位	鉢	-	-	-	〃	〃	〃
1435	718	〃	埋土中位	鉢	-	-	-	破片	〃	〃
1436	421	RA180	埋土中位	甕	-	-	-	拓本	〃	-
1437	946	〃	埋土上～中位	深鉢	-	-	[3.0]	拓本、体部破片	〃	-
1438	945	〃	埋土上～中位	深鉢	-	-	[4.0]	拓本、体部破片	〃	-
1439	716	〃	埋土中位	ミニチュア	-	3.6	[1.5]	底部破片、外面煤付着	〃	315
1440	431	RA182	埋土	?	-	-	-	拓本	〃	〃
1441	571	RA221	床上	?	-	-	-	拓本	〃	〃
1442	407	RA177	P1	?	-	-	-	拓本、破片	〃	〃

## V まとめ

古墳末～奈良・平安時代の遺構と遺物を中心に補足を加えまとめとする。

### 1. 遺構

#### (1) 竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は古墳時代末～奈良時代 42 棟、平安時代 65 棟、中世 1 棟である。各時代の記載項目について要約をする。

〈占地〉 竪穴住居跡の大部分は、北側の段丘縁部から南側 250 m 円内に分布をしている。古墳末～奈良時代の竪穴住居跡は散在しており、平安時代の竪穴住居跡は縁部寄りの 150 m 内外に多く見られる。各時代の遺構は、段丘砂礫層の露出部分を避けて掘り込んで造られている。

〈遺構の重複関係〉 古墳末～奈良時代の竪穴住居跡は、単独のもので占められ同時期での重複関係はない。平安時代は複数の竪穴住居跡で見られる。

〈平面形・規模〉 平面形は古墳末～奈良・平安時代が隅丸方形、方形を基調とするものが 6 割以上を占めており、他に隅丸長方形、隅丸台形、台形、円形等がある。

規模は古墳末～奈良時代が一辺 3～6 m、平安時代が 2～7 m、中世が 5 m 前後のものが多く、一部に張り出しの付く遺構もある。一辺が約 7～9 m の大型竪穴住居跡は、古墳末～奈良時代が 3 棟、平安時代が 3 棟検出されており、集落の中心的役割を果たしたと思われる。

〈埋土〉 埋土は人為的な埋め戻しの痕跡はなく、いずれも自然堆積の様相を示している。

〈床〉 貼り床を施した竪穴住居跡は古墳末～奈良時代が 14 棟、平安時代が 13 棟である。主に黒色～黒褐色土を主体とする混合土で構成されており、厚さは 2～10 cm 前後である。また、その下部からは不整形な凹凸状の掘り方を検出している。

〈柱穴〉 柱穴を確認できたのは古墳末～奈良時代が 16 棟、平安時代が 15 棟である。柱穴の掘り方規模は径 20～30 cm 前後のものが多くを占めており、主柱穴は 4 本柱を基本としている。大型の R A 307 竪穴住居跡（奈良時代）からは 6 本柱を検出している。

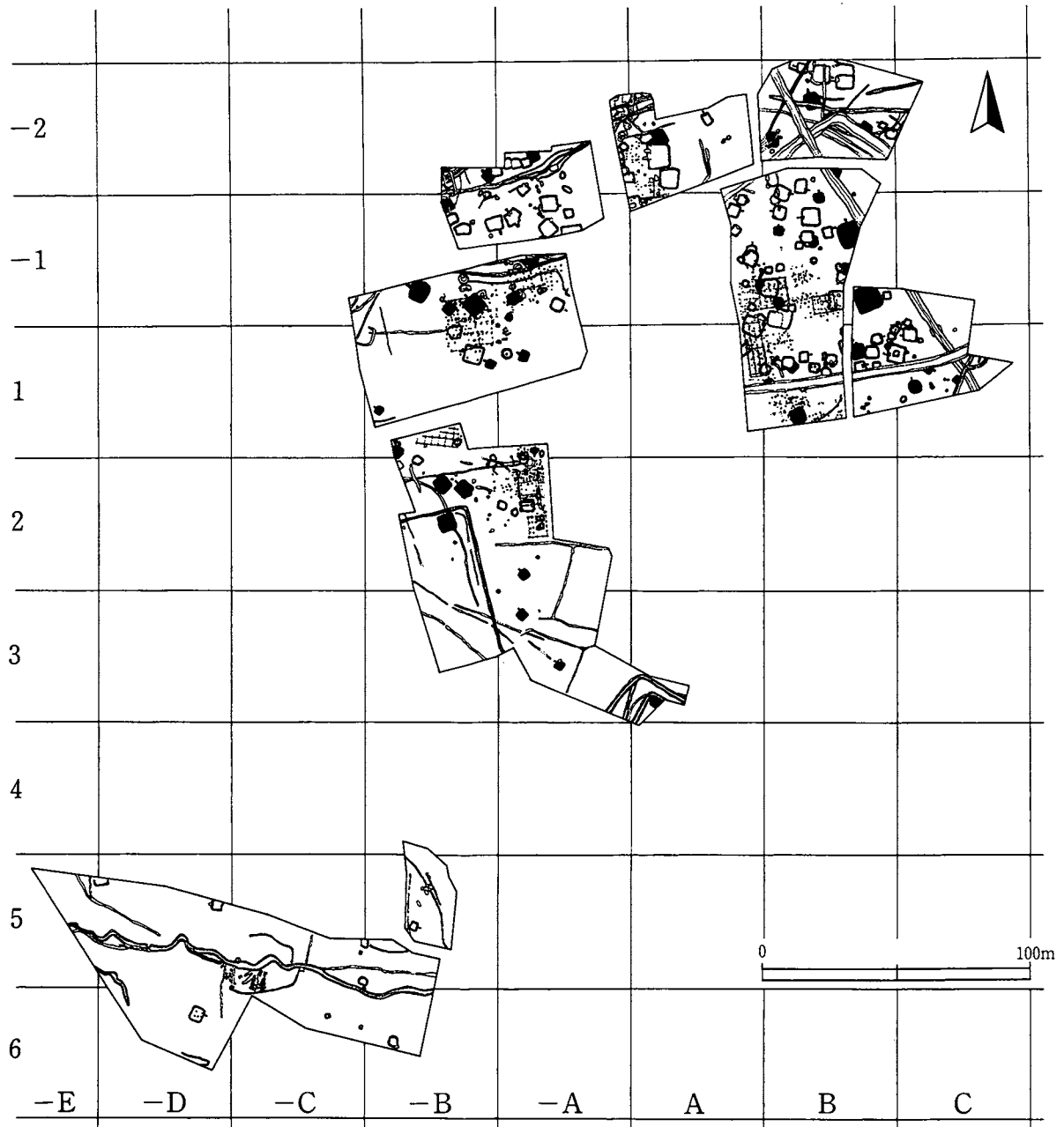
〈貯蔵穴〉 カマドの両脇かカマドが設置された壁側で検出される例が多い。古墳末～奈良時代が 11 棟、平安時代が 8 棟で、2～3 基の複数を有する竪穴住居跡も見られる。

〈周溝〉 カマド部分を除いて全周するものと一部だけ回るものがあり、37 棟で検出されている。

〈カマド〉 カマドの設置位置は、古墳末～奈良時代が北壁（14 棟）、北西壁（15 棟）の中央部が約 7 割を占めている。平安時代は東壁（22 棟）、西壁（15 棟）、北壁（4 棟）、北西壁（5 棟）側にあり、中央部からコーナーに寄るものが多い。本体部は崩壊しているものが大半で、天井部の構造等は不明である。

袖部は地山を削り出して造り出すもの、芯材に垂角礫や土師器甕の体部下半から底部を転用して使用しているものがある。芯材の上を粘土で被覆し構築していると思われるが、多くは流失し僅かに下端部が現存するだけである。

煙道部は掘り込み式と削り貫き式があるが、上半部が削平されている事から不明のものが多くを占めている。削り貫き式は 3 割程確認されている。また、天井部と側壁に垂角礫を使用した掘り込み式は、平安時代に 1 棟検出されている。煙出し部は円形ないし楕円形状の土坑が掘り込まれているが、上部の構造は削平されている事から不明である。土坑の埋土中には石の堆積が多く見られる。



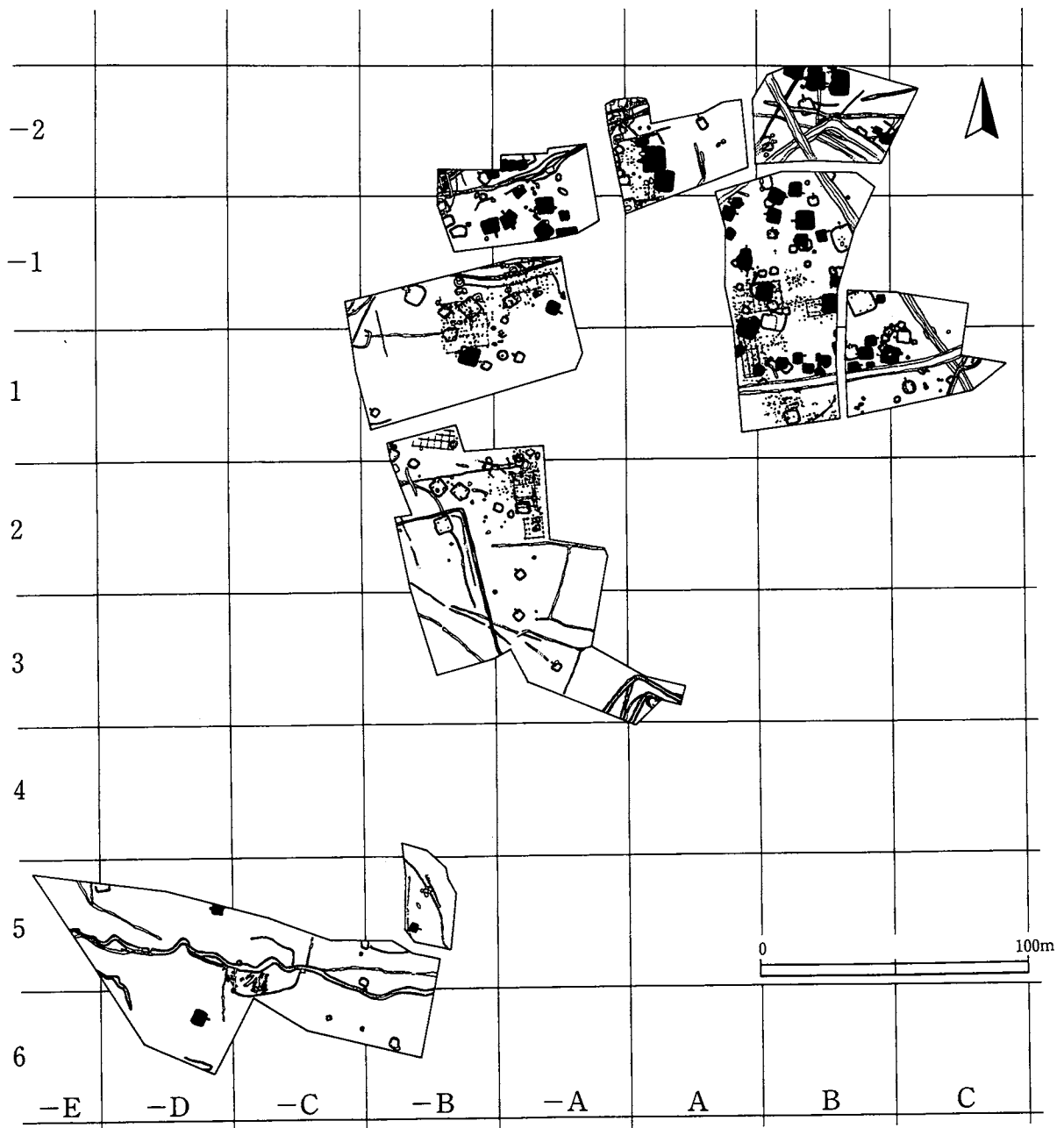
第373図 奈良時代竖穴住居跡分布図

(2) 掘立柱建物跡

東側・西側・北側調査区で13棟検出している。中世の掘立柱建物跡は6棟あり、規模は①桁行2間(3.88 m)×梁行2間(3.80 m)、②桁行4間(8.40 m)×梁行3間(6.40 m)、③桁行5間(10.74 m)×梁行3間(6.50 m)、④桁行5間(10.90 m)×梁行5間(10.60 m)、⑤桁行6間(15.50 m)×梁行3間(7.10 m)、⑥桁行9間(19.30 m)×梁行3間(6.42 m)である。棟方向は南南東～北北西、東北東～西南西、東南東～西北西を示している。柱穴の掘り方は径25～90 cm前後で、平面形は円形を基調とするものが大部分を占め、楕円形と隅丸長方形がある。⑥の掘立柱建物跡は礎石を使用している。

近世に属するものが7棟あり、規模は①桁行6間(11.60 m)×梁行4間(8.00 m)、②桁行4.5間(8.90 m)×





第374図 平安時代竪穴住居跡分布図

梁行2間(4.30m)、③桁行6間(14.38m)×梁行3間(6.64m)である。①の棟方向は東北東～西南西を示している。

### (3) 竪穴状遺構

各調査区から19棟検出している。規模は一辺が2.15～5.00m前後で、平面形は方形を基調とするもの(12棟)、隅丸長方形(4棟)、楕円形(1棟)、不整形(2棟)等がある。時期は奈良時代が5棟、平安時代が9棟、時期不明が5棟である。多くの遺構は作業小屋か物置として使用したと思われるが、平安時代のRE 018竪穴状遺構は工房跡の可能性もある。

第45表 古墳時代末～奈良時代 RA 竪穴住居跡一覧

No	遺構名	平面形	規模m	カマドの位置	煙道	柱穴	貯蔵穴	周溝	貼り床
1	RA099	隅丸方形	3.58×3.34	北壁中央部	不明	なし	なし	なし	なし
2	RA117	(隅丸方形状)	(3.50×3.50)	北壁中央部	〃	〃	〃	〃	〃
3	RA118	隅丸方形	8.20×8.00	北壁中央部付近	〃	〃	1基	〃	〃
4	RA121	円形	4.72×4.58	北壁中央部付近	割り貫き	4基	なし	〃	〃
5	RA122	(隅丸方形状)	不明	東壁北東コーナー寄り	不明	なし	1基	〃	〃
6	RA123	隅丸方形	2.77×2.58	北西壁中央部	割り貫き	1基	なし	〃	あり
7	RA124	隅丸方形	3.10×3.07	北西壁中央部	〃	なし	〃	あり	〃
8	RA125	隅丸長方形	3.76×3.30	北西壁中央部	〃	2基	3基	〃	〃
9	RA129	隅丸方形	7.18×6.85	北西壁中央部	〃	4基	1基	〃	〃
10	RA130	隅丸方形	4.10×3.90	北東壁中央部	〃	4基	なし	〃	なし
11	RA132	胴張り方形	4.77×4.70	北西壁中央部	不明	4基	3基	〃	あり
12	RA133	隅丸長方形	4.43×4.25	東壁中央部	〃	4基	なし	〃	〃
13	RA135	不明	不明	北西壁中央部	〃	なし	〃	〃	なし
14	RA139	(隅丸方形)	(5.20×5.06)	北壁中央部	〃	〃	1基	〃	あり
15	RA140	(隅丸方形)	(3.50×3.30)	北西壁	割り貫き	3基	1基	〃	なし
16	RA141	隅丸方形	6.12×5.22	北西壁中央部	〃	4基	なし	〃	あり
17	RA142	胴張り隅丸方形	5.70×5.64	北西壁中央部	〃	4基	〃	〃	〃
18	RA143	隅丸長方形	2.76×2.30	北東壁	不明	なし	〃	〃	〃
19	RA144	隅丸方形	4.11×3.65	北西壁中央部	〃	〃	〃	〃	なし
20	RA145	隅丸方形	3.17×2.88	北西壁中央部	割り貫き	〃	〃	〃	あり
21	RA146	方形	6.13×6.00	北壁中央部	〃	4基	〃	〃	〃
22	RA148	隅丸方形	3.60×3.39	北西壁中央部	〃	なし	〃	〃	〃
23	RA151	(隅丸方形)	不明	不明	不明	〃	〃	〃	なし
24	RA155	(隅丸方形)	(9.00×8.30)	北壁中央部	〃	〃	〃	〃	〃
25	RA156	(隅丸方形)	(2.74×2.31)	北東壁中央部	〃	〃	〃	〃	〃
26	RA167	(隅丸長方形)	(3.58×3.42)	不明	〃	〃	〃	〃	〃
27	RA169	隅丸長方形	3.28×2.92	北壁中央部東寄り	不明	〃	2基	〃	〃
28	RA180	隅丸長方形	3.76×3.52	北西壁中央部	割り貫き	〃	1基	〃	〃
29	RA185	不明	不明	不明	不明	〃	なし	〃	〃
30	RA186	(隅丸方形)	不明	北壁中央部	割り貫き	〃	〃	〃	〃
31	RA192	(隅丸方形)	(4.10×4.10)	北西壁側	〃	〃	〃	〃	〃
32	RA193	不明	不明	北壁側	不明	〃	〃	〃	〃
33	RA199	(隅丸方形)	(3.00×3.00)	不明	〃	〃	〃	〃	〃
34	RA210	隅丸方形	3.53×3.41	東壁南東コーナー寄り	〃	〃	〃	〃	〃
35	RA215	(隅丸方形)	(3.50×3.50)	不明	〃	〃	〃	〃	〃
36	RA218	隅丸方形	5.90×5.80	北壁中央部	割り貫き	〃	〃	〃	〃
37	RA219	隅丸方形	2.48×2.32	北東壁中央部	〃	1基	〃	〃	〃
38	RA221	(隅丸方形)	(4.60×4.60)	北壁	不明	なし	1基	〃	〃
39	RA225	隅丸方形	3.40×3.20	北西壁中央北側	割り貫き	〃	なし	〃	あり
40	RA229	(隅丸方形)	(8.98×8.87)	北壁中央部	不明	4基	〃	〃	なし
41	RA272	(隅丸方形)	(7.90×7.60)	北壁中央部	〃	2基	1基	〃	〃
42	RA307	(隅丸方形)	(6.75×6.75)	西壁中央部	割り貫き	6基	なし	〃	〃

( )は推定

#### (4) 土坑

各調査区から155基検出しており、平面形は方形、隅丸方形、隅丸長方形、円形、楕円形、不整形等と多様である。開口部の規模は径50cm～最大3.85m、深さが4cm～1.20m前後を測る。平安時代に属する隅丸方形・隅丸長方形・円形・楕円形土坑は埋土の様相と出土遺物から墓壇の可能性が高い。また、大部分は埋土の堆積状況から、近・現代の土坑と思われる。

#### (5) 焼土遺構

現地性の焼土が12基検出している。規模は径11～最大70cm、平面形は円形、楕円形、不整形等がある。焼成の厚さは2～8cm前後である。時期は出土遺物がなく不明であるが、近世～近代の掘立柱建物跡に伴うと思われるものが多い。

第46表 平安時代 RA 竪穴住居跡一覧

No	遺構名	平面形	規模m	カマドの位置	煙道	柱穴	貯蔵穴	周溝	貼り床
1	RA047	隅丸方形	6.46×6.34	西壁中央部	掘り込み	なし	なし	なし	なし
2	RA107	隅丸台形状	4.90×4.44	東壁南東コーナー寄り	不明	〃	〃	〃	〃
3	RA109	隅丸長方形	5.80×5.10	東壁北東コーナー寄り	削り貫き	〃	〃	〃	〃
4	RA110	隅丸方形	4.20×3.80	東壁北東コーナー寄り	不明	〃	〃	〃	〃
5	RA111	隅丸方形	3.28×3.00	西壁南東コーナー寄り	削り貫き	1基	〃	〃	〃
6	RA112	隅丸方形	3.20×3.10	不明	不明	1基	〃	〃	〃
7	RA113	隅丸方形	3.50×3.40	東壁中央部	〃	なし	〃	〃	あり
8	RA114	(隅丸方形)	(一辺3.40)	不明	不明	2基	〃	〃	なし
9	RA115	(隅丸方形)	(4.70×4.60)	西壁中央部	削り貫き	なし	1基	〃	〃
10	RA116	方形	7.58×6.86	北壁中央部	不明	〃	なし	〃	〃
11	RA119	隅丸長方形	3.00×2.80	北壁中央部西寄り	〃	〃	〃	〃	〃
12	RA120	隅丸長方形	4.10×3.90	西壁中央部	削り貫き	2基	〃	〃	〃
13	RA126	胴張り長方形	4.80×4.35	東壁中央南寄り	不明	不明	〃	〃	〃
14	RA127	不明	不明	不明	〃	4基	〃	〃	あり
15	RA128	隅丸方形	6.10×6.00	西壁中央南寄り	削り貫き	不明	〃	〃	〃
16	RA134	隅丸方形	3.76×3.50	北西壁中央部	〃	なし	〃	〃	なし
17	RA136	台形状	3.60×3.20	東壁南東コーナー寄り	〃	不明	2基	〃	〃
18	RA137	隅丸長方形	3.80×3.30	東壁北東コーナー寄り	〃	なし	なし	〃	〃
19	RA138	不明	不明	東壁側	〃	〃	〃	〃	〃
20	RA147	隅丸方形	3.60×3.35	西壁中央北寄り	〃	〃	〃	〃	〃
21	RA149	隅丸方形	3.15×2.70	東壁北寄り	〃	不明	〃	〃	あり
22	RA150	隅丸方形	2.66×2.50	西壁中央部	〃	なし	〃	〃	なし
23	RA152	隅丸方形	5.30×4.60	東壁南東コーナー寄り	〃	不明	1基	〃	〃
24	RA153	隅丸方形	6.20×6.00	東壁中央南寄り	不明	4基	なし	〃	あり
25	RA154	(隅丸方形)	(一辺6.20)	不明	〃	なし	〃	〃	なし
26	RA158	方形	6.80×6.52	北西壁中央部	削り貫き	4基	〃	〃	〃
27	RA160	(隅丸方形)	不明	不明	不明	なし	〃	〃	〃
28	RA161	隅丸方形	4.50×4.40	北壁中央部・西壁中央部	削り貫き	〃	〃	〃	あり
29	RA162	不明	(一辺6.40)	西壁側	不明	〃	〃	〃	なし
30	RA163	(隅丸方形)	(一辺3.50)	東壁中央部北寄り	〃	〃	〃	〃	〃
31	RA165	隅丸長方形	3.70×3.57	西壁北東コーナー寄り	削り貫き	〃	〃	〃	あり
32	RA168	隅丸長方形	4.70×4.20	南壁南東コーナー寄り	不明	〃	〃	〃	なし
33	RA170	隅丸台形	7.30×6.65	西壁中央部	削り貫き	〃	〃	〃	〃
34	RA171	隅丸長方形	8.70×8.20	西壁中央部	不明	4基	〃	あり	〃
35	RA173	不明	不明	不明	〃	1基	〃	なし	あり
36	RA176	不明	不明	不明	〃	なし	〃	〃	なし
37	RA177	隅丸長方形	6.40×4.40	南壁南東コーナー寄り	削り貫き	3基	1基	〃	〃
38	RA178	隅丸長方形	4.60×4.20	南壁中央部東寄り	不明	2基	なし	〃	あり
39	RA179	(隅丸方形)	(一辺4.20)	北西壁中央部	〃	4基	1基	〃	〃
40	RA181	隅丸長方形	3.90×3.60	北西壁中央部	削り貫き	4基	なし	〃	なし
41	RA182	(隅丸方形)	不明	(西壁側?)	不明	1基	〃	〃	〃
42	RA183	隅丸方形	3.60×3.50	東壁北東コーナー寄り	〃	3基	〃	〃	〃
43	RA184	隅丸方形	3.65×3.55	東壁北東コーナー寄り	〃	なし	1基	〃	〃
44	RA188	(方形～菱形)	(5.00×4.55)	東壁北東コーナー寄り	削り貫き	〃	なし	〃	〃
45	RA189	隅丸方形	3.80×3.60	東壁北東コーナー寄り	不明	〃	〃	〃	〃
46	RA190	隅丸長方形	2.80×2.40	東壁中央部	削り貫き	〃	〃	〃	あり
47	RA191	(隅丸方形)	不明	北西壁中央部	不明	〃	〃	〃	なし
48	RA194	隅丸長方形形状	3.90×3.10	東壁南東コーナー寄り	〃	〃	〃	〃	〃
49	RA195	(隅丸方形)	不明	不明	〃	〃	〃	〃	〃
50	RA196	不明	不明	不明	〃	〃	〃	〃	〃
51	RA198	(隅丸方形)	不明	東壁中央部南寄り	削り貫き	〃	〃	〃	あり
52	RA212	(隅丸方形)	不明	不明	不明	〃	〃	〃	なし
53	RA213	隅丸長方形	3.75×3.20	西壁中央部	削り貫き	〃	〃	〃	〃
54	RA214	隅丸長方形	6.70×6.10	東壁中央部・西壁中央部	削り貫き	〃	〃	〃	〃
55	RA216	(隅丸方形)	不明	不明	不明	〃	〃	〃	〃
56	RA217	隅丸長方形	4.10×3.10	東壁北東コーナー寄り	〃	〃	〃	〃	〃
57	RA220	不明	不明	不明	〃	〃	〃	〃	〃
58	RA222	不明	不明	不明	〃	〃	〃	〃	〃
59	RA224	胴張り隅丸方形	5.10×4.80	東壁北寄り	〃	3基	1基	〃	〃
60	RA226	(隅丸方形)	(一辺3.50)	北壁中央部	削り貫き	なし	なし	〃	あり
61	RA227	(隅丸方形)	不明	西壁南西コーナー寄り	〃	3基	〃	〃	なし
62	RA230	隅丸方形	2.00×2.00	東壁最も北寄り	〃	なし	〃	〃	〃
63	RA231	(隅丸方形)	不明	不明	〃	〃	〃	〃	〃
64	RA271	(隅丸方形)	(一辺3.80)	西壁中央部北寄り	不明	2基	〃	〃	〃
65	RA302	(隅丸長方形)	(6.00×5.60)	南西壁南コーナー寄り	削り貫き	4基	1基	〃	〃

( )は推定

#### (6) カマド状遺構

西側・南側・北側調査区から13基検出している。平面形は円形、楕円形、8の字形等があり、燃焼部に焚き口と思われる土坑を付属するものが半分以上を占めている。遺物の出土がなく時期は不明であるが、隣接する近世の掘立柱建物跡群との関連が推測される。

#### (7) 堀

東側～北側調査区に亘って1条、西側調査区で2条検出している。①RG 042堀は中世の堀（環壕）の一部で、西側が調査区域外に延びている事から全容が不明である。上幅の規模は3.20～4.80 m、深さが70 cm～1.00 mである。確認された長さは東北東～西南西側に85 m、北東～南西側に30 m、北西～南東側に25 mである。②③RG 081・083堀の規模は、上幅が4.15～4.40 m、深さが43～65 cm、長さが34.10～71.30 mである。時期は不明であるが、遺構の南側にある諏訪神社を囲む堀と思われる。

#### (8) 溝跡

各調査区から110条検出している。上幅の規模は15 cm～3.40 m、深さが5～75 cm前後、長さ2.10～70.90 mである。長さは大部分の遺構が調査区域外に延びている事から、全容の不明なものが多い。調査区内を北西～南東方向に延びる①RG 045溝跡の埋土には、十和田a降下火山灰のレンズ状の堆積が見られる。

#### (9) 波板状凹凸遺構

北側調査区から1カ所、南側調査区で2カ所検出している。径15～90 cm、長さ60 cm～3.20 m、深さ5～35 cmの不整形な土坑が長径方向を同一に並列する。土坑の間が近接する事から見て畷とは考えにくい。これらの凹凸機能は不明な点もあるが、道路跡の可能性もある。時期を決める遺物は出土していないが平安時代の溝跡と重複し切られている事から、平安時代もしくはそれより以前と思われる。

#### (10) 楕円形周溝

東側調査区から2基検出しているが、遺構の半分以上が削平されているために全容は不明である。上幅は31～60 cm、深さが6～13 cm前後を測る。確認された規模から①RZ 006楕円形周溝が径4.30×3.70 m、②RZ 007楕円形周溝が径6.80×4.80 m前後の楕円形状を呈すると思われる。時期は平安時代の竅穴住居跡と重複し切られている事から、平安時代もしくはそれ以前の可能性もある。

#### (11) 井戸跡

東側と西側調査区から2基検出しているが、遺物の出土がなく時期は不明である。平面形は円形を基調としており、開口部の規模は①RI 001井戸跡が径4.20×4.10 m、深さ2.20 m以上、②RI 002井戸跡が径2.58×2.48 m、深さ90 cmである。①は中央に井戸枠を組み、中に単筒式の井筒を据えている。

#### (12) 柱穴状土坑

東・西側調査区から大小合わせて638基検出しており、平面形は円形、楕円形、隅丸方形、隅丸長方形、不整形等がある。東側調査区では長軸径が30～50 cm大の土坑が主体を占めており、深さは平均25.7 cmを測る。大部分の時期は不明であるが、埋土の堆積状況から近代に属する柱穴や田んぼのはせ杭も多く混在して

いる。西側調査区は近世の屋敷内に分布する事から、これらに付随する施設の柱穴の可能性もある。

### (13) 馬屋状遺構

西側調査区から2棟検出しており、時期は出土した遺物から近世～近現代に属する。(高橋)

## 2. 遺物

主な遺物は古墳時代末～奈良・平安時代の竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、溝跡等から土器が出土している。各時代の土器分類基準は、器種と焼成方法(酸化炎・還元炎)を識別型式とし、これに調整技法を加え細分している。これらの遺構から出土した土師器・須恵器は、第14～37表に一括掲載している。

### (1) 古墳時代末～奈良時代の土器

今回の調査で出土した古墳時代末～奈良時代の土器は、ほとんどが土師器である。器種は、土師器が坏、高坏、片口、鉢、甕(長胴)、壺、長胴扁平土器、球胴甕、手捏ねのミニチュア土器など、須恵器は高台付坏、提瓶が各1点出土している。

#### 土器の分類

大部分の土器がロクロ不使用の土師器で、須恵器は2点のみである。分類は全体の器形がわかるもの、あるいは推定できるものについて行ったが、分類図には器形がわかるものについてのみ掲載した。

#### <坏>

I群……………酸化炎焼成されているもの(所謂、土師器)

A類……………ロクロ使用で底部が丸底のもの

a種……………体部に段を有するもの(後述)

b種……………体部に段が無いもの 1123、145、147、149、238、148、146

第375図では上から12段めまでのものがほぼA類にあたる(右端の84を除く)。この図では上段左側ほどしっかりとした丸底で、下段に行くにつれ平底となる。中段ぐらいに配した土器は丸底に分類されていても、かなり平底に近いものも多い。

また、a種のうち内外面ともに段を有するものと外面のみに段、または沈線を有するものとに分類される。

#### ・内外面とも段を有するもの

316、9、1、278、345、140、209、228、83、269、191、227、1080、270、247、177、240、1029、1017

#### ・外面のみに段、または沈線を有するもの

107、347、257、63、286、62、38、239、200、302、344、203、201、85、1016、1030、282、268、61、52、51、1030、1216

B類……………ロクロ不使用で底部が平底のもの

a種……………体部に段を有するもの 309、84、258、230、192、208、81、60、82

b種……………体部に段が無いもの 150、134、19、43、53、233、44

b種には盤状を呈するもの(150、233)と、それ以外のものがある。これらの坏類を口縁部の形態で分類すると①口縁部が内湾するもの、②口縁部が外傾するもの、③口縁部が外反するものとに大別される。大部分の坏は①、あるいは②に分類されるが、240、1080のように③に分類されるものも若干ある。

製作技法については、口縁部がミガキあるいはヨコナデ、底部がナデ、ハケメ、ケズリ、ミガキが施されており、内面はほとんどが黒色処理が認められる。胎土は、細砂の他に金雲母を含むものが多い。

出土した坏のなかでも、240 は器形、質感などが本遺跡出土の他の坏に例を見ないもので、手に取った際にシャープな印象を受ける。製作技法は口縁部ヨコナデ、底部ケズリの組み合わせで、他にない。胎土に関しても金雲母を含まないきめの細かいもので、本遺跡出土の他の土器と一緒に製作されたものとは考えにくく、持ち込まれたものであろう。また、81 は平底からいったん直に立ち上がり、急に外傾して立ち上がる器形が60、82 と類似してはいるが、底部が極めて薄く、シャープな作りであることが際だっている。

#### <高台付坏>

A群……酸化炎焼成されているもの 該当なし

B群……還元炎焼成されているもの（所謂、須恵器） 317 のみの出土である

#### <高坏>

3点を分類図に掲載した。碗型の坏部に短い脚部の付く231、浅い坏部柱状の脚にハの字状の裾部の付く193、浅い坏部に短いハの字状の脚部の付く288がある。すべて内面黒色処理されている。

#### <片口>

2点を分類図に掲載した。鉢形を呈する土器の口縁部の一部を外側に少しつまみ出したような形状である。

#### <鉢>

分類図に掲載したのは5点である。突出気味の底部から外傾気味に立ち上がる1020、1021。直立気味に立ち上がる292。口縁部がやや内湾する21。212は鉢とすべきではないかもしれない。コップ状に直立して立ち上がる。

#### <甕>

A群……酸化炎焼成されているもの

I類……ロクロによって焼成されているもの 該期の土器にはない

II類……ロクロによって成形されないもの 小型の甕と中・大型の甕に分類した

#### <小型甕>

出土した甕のうち、おおむね器高21cm程度までのものを小型の甕として分類した。262は底部が少し欠けていることもあり、どちらに分類して良いかわからないものである。また、105は鉢とすべきかもしれない。全てに頸部の段が認められる。分類図の上段から3段目までが、体部がやや短い小型の部類、4段目からはやや大きめの部類である。

前者には最大径を口縁部に持ち、底部から直線的に開いて立ち上がり、口縁部にいたって強く外反するもの、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反～外傾するもの、体部に最大径があり、球状にふくらみ、口縁部が外反するもの、体部が緩く内湾して立ち上がり、口縁部が内湾気味に開くものがある。

後者には口縁部が外反するもの、口縁部が外傾するもの、口縁部が内湾気味に立ち上がるものがある。

#### <中型～大型甕>

中型（器高26cm以下）のものは、第377図上位2段と第378図左上351、349、第379図352、33である。最大径は33、352以外は、口縁部、33、352は胴部である。口縁部の器形は①口縁部が強く外反するもの、②外傾するもの、③内湾するものがある。頸部はほとんどが段を持つ。口唇部の形態は丸いものがほとんどであるが、154は口唇部が平坦である。調整は内外面ともハケメで、口縁部ヨコナデが多い。底部は台状に突き出るものはない。154、279は体部の最大径を頸部直下にもち、底部にかけて細くすぼまる。272は体部が筒状を呈し、底部が大きい。体部最大径を91、272は体部中程に持ち、その他は体部上半にある。

大型の甕は器高27～36cmのものである。口縁部の形態は①口縁部が強く外反するもの、②外傾するもの、

③内湾するものがある。また、体部は長楕円状に内湾するものが多いが、底部に向かってすぼまるもの、筒状のもののほか、胴張って球胴状に近くなる 75 がある。頸部は段を明瞭に持つもの、沈線状のもの、段も沈線も認められないものがある。口唇部は凹～平坦なもの、丸いものがある。調整は、内外面ともハケメのものが最も多いが、内面にナデ、あるいはハケメを施し、外面が磨かれているものもある。底部は、台状に突き出るものはないが、若干円盤状になるものと全くの平底とに分けられる。底部内面は平底と丸いものがある。体部最大径はおおむね上半から中程にあるが 57、66、92、236、354 は下半にある。

#### <甗>

甗と思われる破片はもっとあるが、ここでは全体の器形がわかる 3 点を分類図に載せた。すべて無底であるが、329 は底部の周縁が若干残る。胴部は若干内湾気味に立ち上がり、口縁部で外傾～外傾気味に開く。分類図には載せていないが、甗ではないかと考えられる破片には口縁部が直立するものも見られた。

#### <壺>

A 群……酸化炎焼成されているもの 第 379 図 35、88、115

B 群……還元炎焼成されているもの 第 381 図 224

器形のわかる 3 点を分類図に載せた。115 は体部が球胴に強くふくらみ、口縁部が外傾する小型の壺である。88 は緩やかに内湾する胴部を持つ小型の壺。35 は外面全体にミガキを施した球胴で長頸の壺である。この壺は須恵器を模倣したものと考えられる。

224 の提瓶は口縁部を欠くほかは完形である。体部は正面は円形、側面は一方が扁平で、一方は丸味がある。肩部にはボタン状の粘土塊が付く。この粘土塊は胴部への貼付後、特に丁寧に調整されたような跡は見えず、リング状、あるいは鈎手状把手の落ちたものというよりは把手などの形骸化したもののように思われる。西野修氏によれば、県内出土のリング状あるいは鈎状把手を持つ同種の資料は 7 世紀前半ごろの所産と位置づけられている。この事から 224 は、7 世紀中葉は下らないにしろ、後続するものと考えられる。

#### <長胴扁平土器>

RA 141 竪穴住居跡カマドから出土した土器で、この 165 のみ 1 点の出土である。口縁部及び底部を欠くが、体部下端は若干外傾して、上半は直に立ち上がる。外面はナデ、ハケメが施されるが、内面は荒いハケメとナデで、粘土の輪積み痕が明瞭に残っている。横断面は扁平である。これに類似する土器は、県内では徳丹城第 35 次発掘調査において、体部中程で分割された完形のものが出土しており、調べた限りでは報告されているものはこの 1 点のみである。なお、台太郎遺跡第 23 次調査でも同様の土器が出土した。

#### <手捏ね>

6 点を分類図に載せた。ミニチュアの土器である。大別すると丸底のもの(48、1019、1028)、平底のもの(6、64、283)に分類される。平底のものうち 6、64 は坏と類似する器形を示す。

#### <球胴甕>

器高 26 cm を境に大小に分類される。小型の 101、102、144、271 とその他の大型のものである。

小型は体部がほぼ球状に張り出す 253 と、緩やかに内湾する 102、144、断面形が菱形に近くなる 101 である。最大径はいずれも体部中央とやや上で、口縁部は外反するものと外傾するものがある。

大型は最大径が胴部中央で、球状にふくらむものが大部分であるが、最大径を中程よりやや下にもつ 4 がある。また、断面形がやや菱形に近くなる 116、337 がある。口縁部の形態は外反する 5、40、206、294、外傾する 116、337、いったん直に立ち上がった後外傾する 356、いったん直に立ち上がった後、内湾気味に直立する 32、同じくやや内湾気味に開く 4、293 がある。

## 土器の年代について

以上、これらの土器の特徴を再度まとめると次のようになる。

坏は内外に段を持つ丸底のものから、外面のみ段又は沈線を持つ、平底風の丸底のもの、平底のものまで存在するが、主体となるのは平底風の丸底のものである。

甕は長胴と球胴甕があり、長胴甕は底部の突出するものから平底までがあるが、大部分は底部の突出はなく円盤状で、口唇部は凹～平坦なもの、丸いものがある。器種は以上のものに加えて、高坏、片口、鉢、甑、壺、手捏ねのミニチュア土器、長胴扁平土器がある。須恵器は極少量伴う。

該期の土器については岩手県では八木光則氏（1998）、伊藤博幸氏（1998）等の土器編年研究がある。これらを参考に、本遺跡の年代を考えてみたい。

RA 155・156 竪穴住居跡出土の土器群は、内外に段の付いた坏（209）、底部に向かってすぼまる甕の器形（217 など）、土器の組成などから八木氏のB期、伊藤氏のd期に相当し、栗田式の新しい段階に併行する7世紀後半とみて大過ないと思われる。また、住居に確実に伴う資料が少ないが、RA 229 竪穴住居跡出土の土器は同様の観点で該期に相当し、RA 140・210 竪穴住居跡はやや新しく、7世紀末頃と考えられる。

RA 123・125・129・132・148・218 竪穴住居跡出土の土器群は坏、甕の器形から八木氏のC期、伊藤氏のe期、f期で、国分寺下層式の古い段階に併行する8世紀前半と考えられる。RA 130・141 竪穴住居跡は坏の形態から、これに後続する時期か。RA 121・124・186 竪穴住居跡は平底の坏を伴う土器で、八木氏のD期、伊藤氏のg期に相当し、国分寺下層式の新しい段階で8世紀後半代の土器と見られる。 （金子）

## (2) 竪穴住居跡出土獣骨について

今回発掘調査した古墳時代末～奈良時代の住居跡から、骨片が出土している。以下に同定結果を示す。同定は佐々木務氏（岩手県教育委員会文化課）が行った。 （金子）

出土位置	層位	種名	部位名	備考・その他
RA 125 P 2	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 125 カマド内	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 133 カマド	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 140 カマド	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 140 カマド	3層	不明	基節骨あるいは中節骨	遠位端 熱による変色有り
RA 140 カマド	焼土中	シカ	中節骨	遠位端 近位端各1. 同一個体かどうかは不明 熱による変色有り
RA 140 カマド	3層	シカ	中節骨1	遠位端 熱による変色有り
RA 140 カマド	焼土中	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 140	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 141 P 9	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 141 カマド	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 141 Q 1 北東隅	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 141 ア	床面	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り
RA 142 P 10	埋土	不明	手根あるいは足根骨	種不明 熱による変色有り
RA 145 カマド	埋土	不明	不明	ほ乳類の骨片 全て熱による変色有り



### (3) 平安時代の土器

平安時代の土器は周辺遺跡との比較検討のために、小幅遺跡第4次調査報告書（平成8年刊行）の分類に準じている。各器種における分類は以下とおりである。

#### <坏>

A群……酸化炎焼成されているもの

I類……内面にミガキ、黒色処理が施されるもの（所謂、土師器）

a種…底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施され無いもの

b種…切り離した後に再調整されるもの

c種…再調整のため切り離し技法が不明なもの

d種…切り離し技法が静止糸切りのもの

e種…回転ヘラ切りのもの

II類……内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないもの（所謂、赤焼き土器）

a種…底部の切り離し技法が回転糸切りのもの

b種…切り離し技法が不明なもの

c種…回転ヘラ切りのもの

e種…切り離した後に再調整しているもの

B群……還元炎焼成されているもの

I類……底部の切り離し技法が回転ヘラ切りによるもの

a種…再調整が施され無いもの

b種…切り離した後に再調整されるもの

II類……底部の切り離し技法が回転糸切りのもの

a種…再調整が施され無いもの

b種…切り離した後に再調整されるもの

#### <高台坏>

A群……酸化炎焼成されているもの

I類……内面にミガキ、黒色処理が施されるもの

II類……内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないもの

a種…輪高台のもの

b種…輪高台で無いもの

B群……還元炎焼成されているもの

#### <甕>

A群……酸化炎焼成されているもの

I類……ロクロによって成形されているもの

II類……ロクロによって成形され無いもの（ロクロ不使用）

B群……還元炎焼成されているもの

#### <壺>

A群……酸化炎焼成されているもの

B群……還元炎焼成されているもの

各器種の出土量の割合は坏と甕が大部分を占めており、他の器種は僅かである。坏に関してはA I群・A II群が遺構内から混在して出土する例が多く見られる。坏のA II群（赤焼き土器）土器に関しては、小幅遺跡第4次調査では住居跡からの出土例はほとんどなく、大部分が十和田a降下火山灰の上位からであるが、本遺跡では竪穴住居跡からのものが多い。B群の坏は底部の切り離し技法が回転糸切りのB II群が主体を占め、回転ヘラ切りのB I群は僅かに出土している。

甕はロクロ使用のA I群と不使用のA II群が共伴して出土する例が多い。B群は大型の器形ものが大部分を占めている。

壺のA群にはロクロ使用と不使用が混在しており、小型の器形ものが多くを占めている。また、B群には長頸瓶が多い傾向を示している。

各遺構ごとの器種組成と出土状況は一律ではないが、焼失家屋での出土例から坏・甕・小型の甕・壺を基本としている。甗は全てが単口式であり、出土数は数点だけである。須恵器の大甕（B群）は破片で多数の遺構から出土している。

第18次調査の平安時代における遺構・遺物の年代を土器編年から考えていきたい。土器編年研究は前記した相原康二氏（1981）、高橋信雄氏（1982）、八木光則氏（1992）等の業績があり、これらを参考とする。該期の土器の特徴は相原氏のIX期、高橋氏のIII-2期、八木氏のF期に比定され、時期としては9世紀中葉～10世紀初頭が想定される。本遺跡も同時期の集落と位置づけられる。また、北西側約2 kmに位置する古代城柵の志波城跡との関連性は今後の検討課題でもあり、次年度以降周辺地域の調査が進むにつれて全体的な集落構造と変遷の様相が明らかになると思われる。（高橋）

#### 引用・参考文献

1. 相原康二（1981）：「鳥海A遺跡」 岩手県文化財調査報告書第59集 岩手県教育委員会
2. 高橋信雄（1982）：「岩手の土器」 岩手県立博物館
3. 遠藤勝博・相原康二（1983）：「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第I型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢』
4. 宇部則保（1989）：「青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として」『北海道考古学』25
5. 西野 修（1989）：「岩手県内出土「古墳時代須恵器」の集成とその年代的位置付けについて」『岩手考古学』1
6. 八戸市教育委員会（1991）：「丹後平古墳」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集
7. 八木光則（1992）：「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」 第18回古代城柵官衙遺跡検討会
8. 伊東 格（1995）：「本宮熊堂B遺跡第1次調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第226集
9. 矢巾町教育委員会（1995）：「徳丹城跡—範囲確認調査・第1次3カ年計画—」
10. 酒井宗孝（1996）：「小幅遺跡第4次調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集
11. 伊藤博幸（1998）：「北上盆地南部」『東北地方の古代集落』第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム資料
12. 西野 修（1998）：「北上盆地北部」『東北地方の古代集落』第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム資料
13. 村田晃一（1998）：「栗園式土器の成立と展開」『考古学の方法』東北大学文学部考古学研究会会報2
14. 八木光則（1998）：「馬淵川流域」『東北地方の古代集落』第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム資料

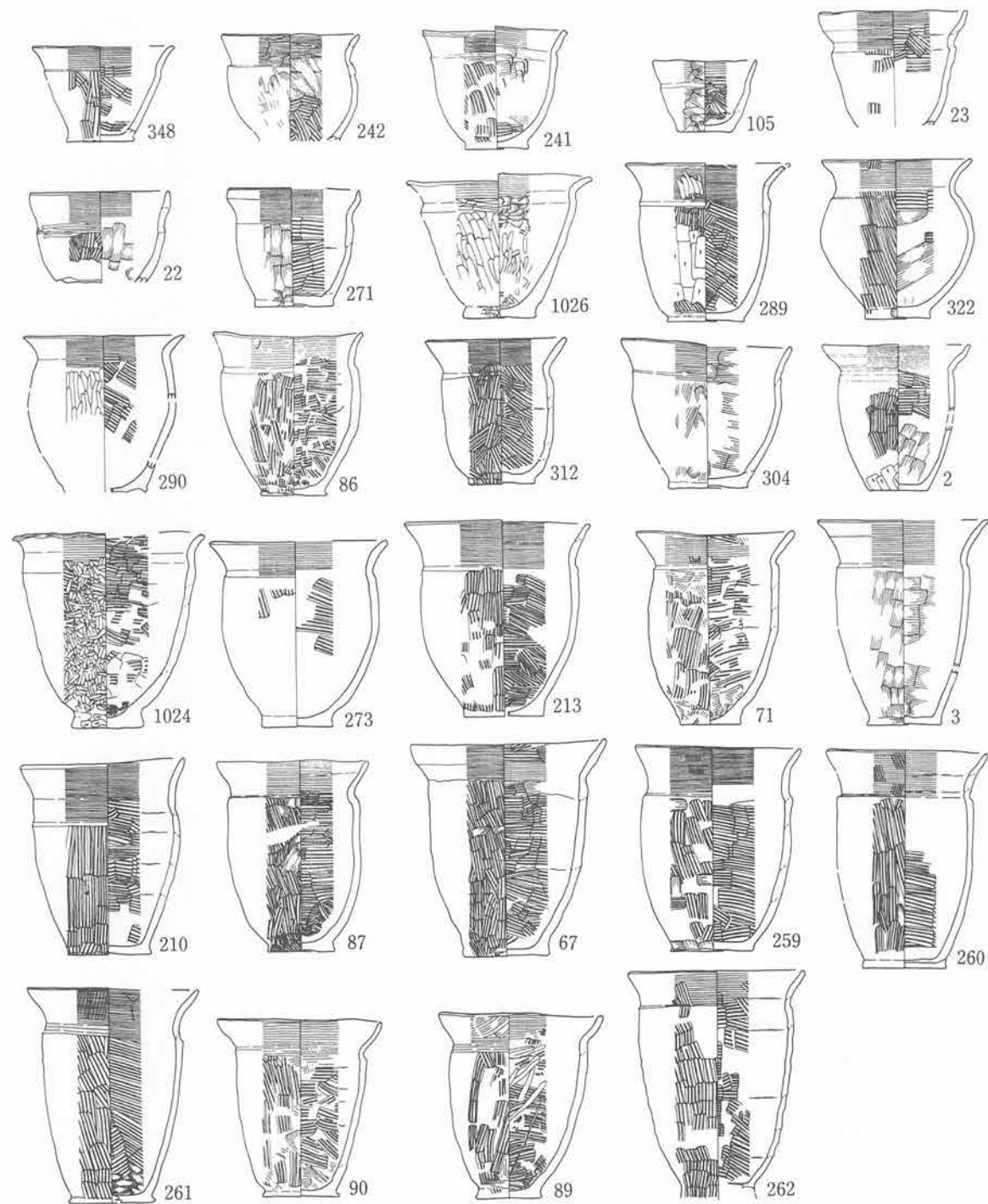


第375图 土器分類图(1)碗·高碗·片口

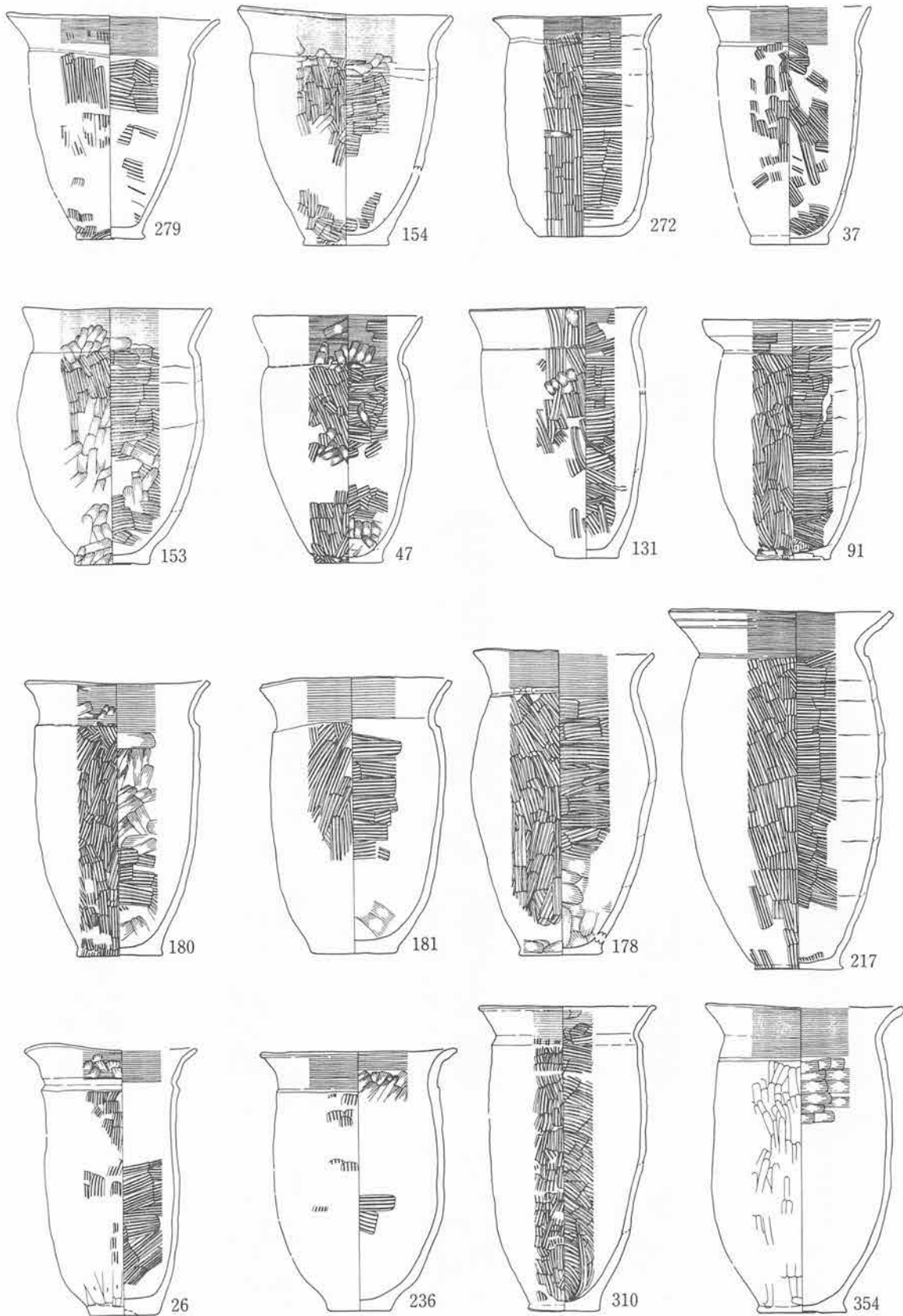


鉢

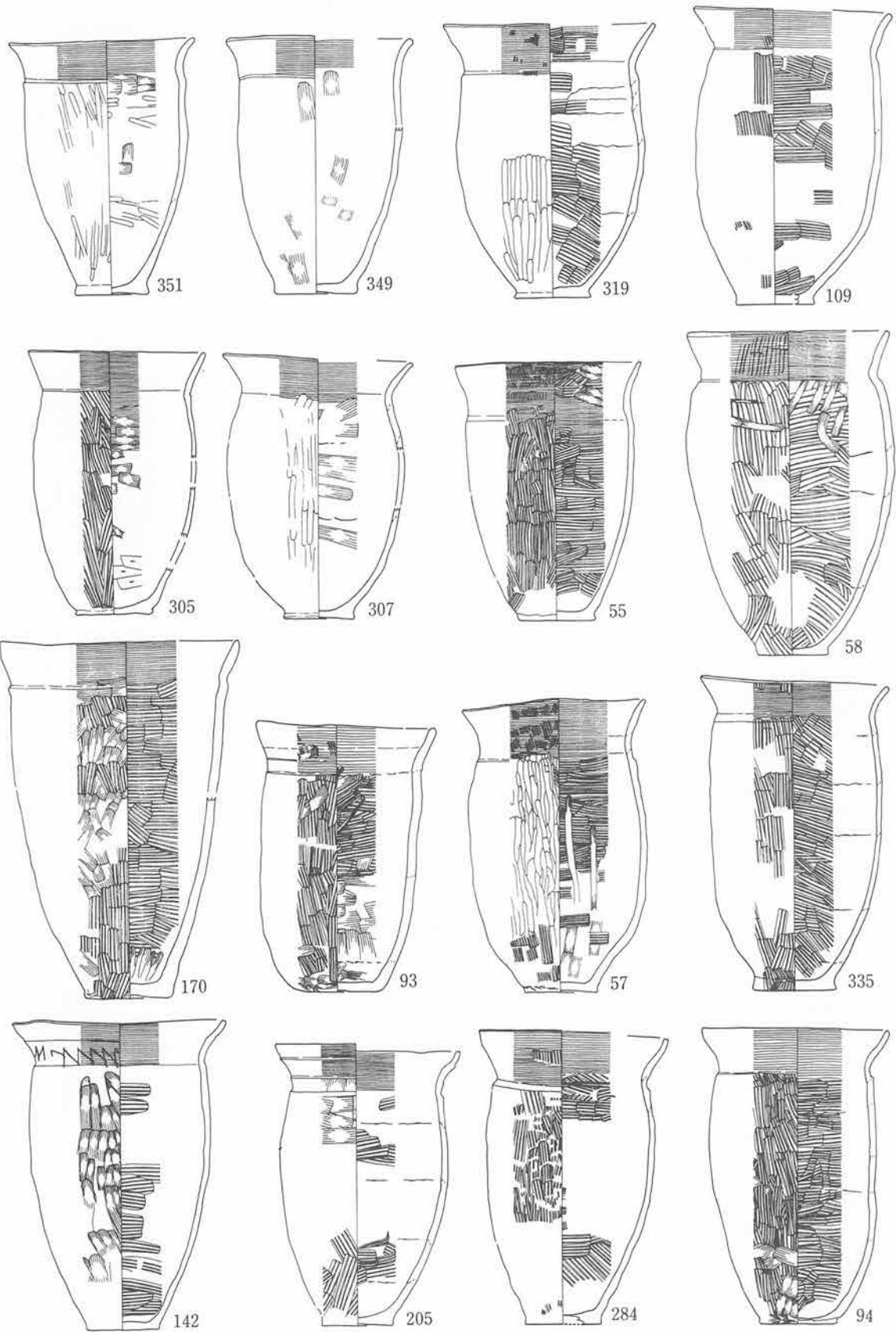
小型甕



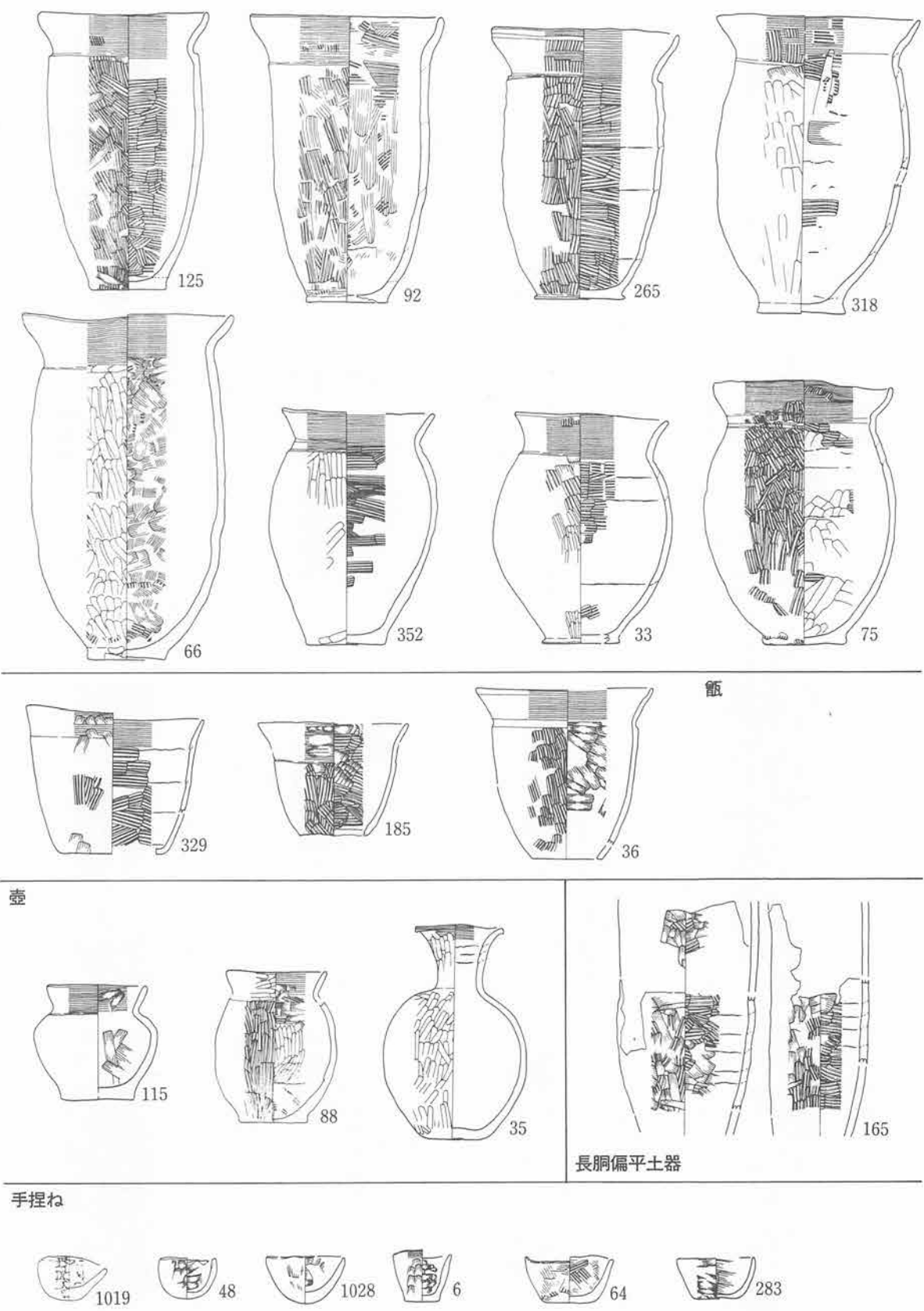
第376図 土器分類図(2)鉢・小型甕



第377图 土器分類图(3)中型・大型甕

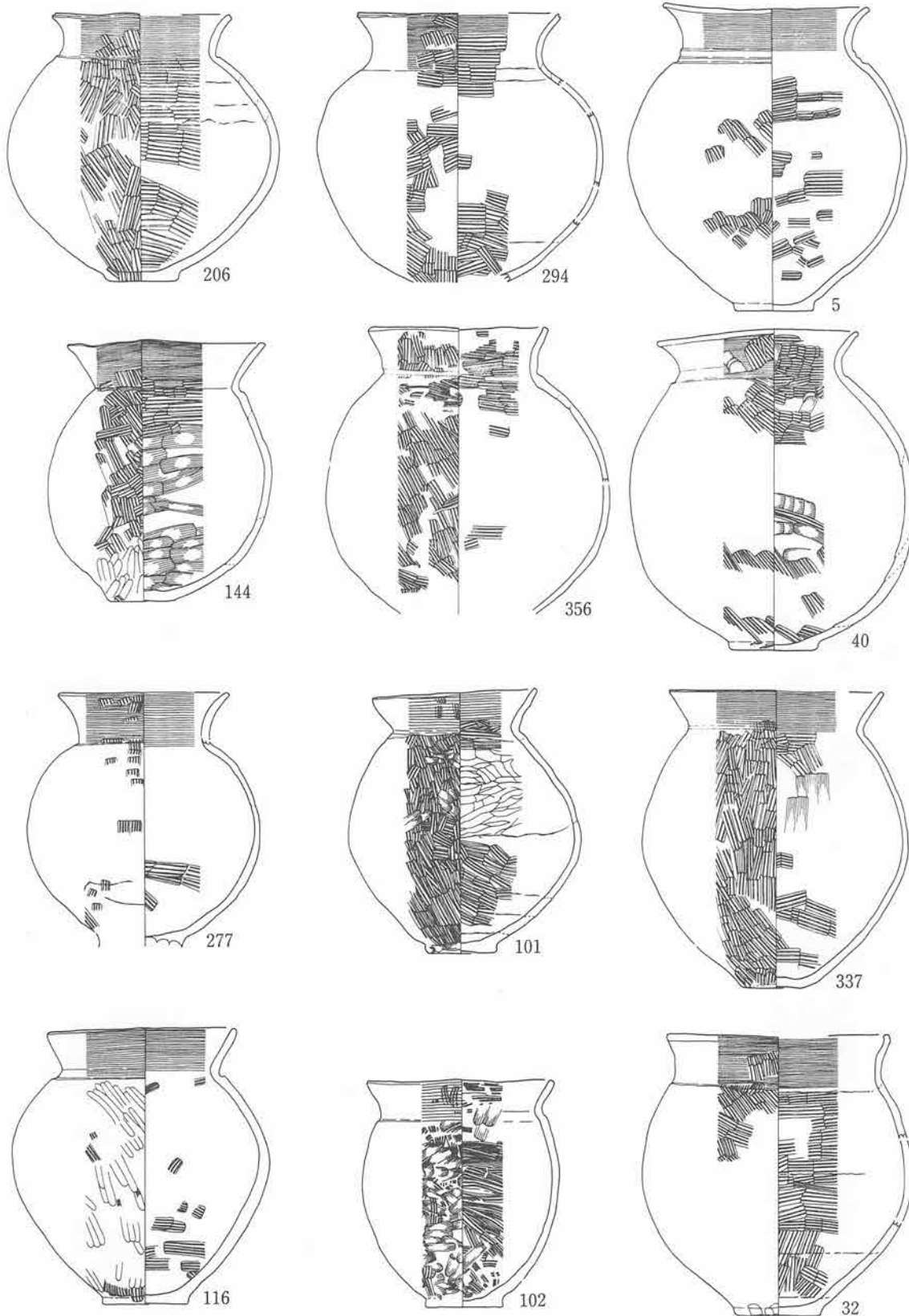


第378图 土器分類図(4)中型・大型甕



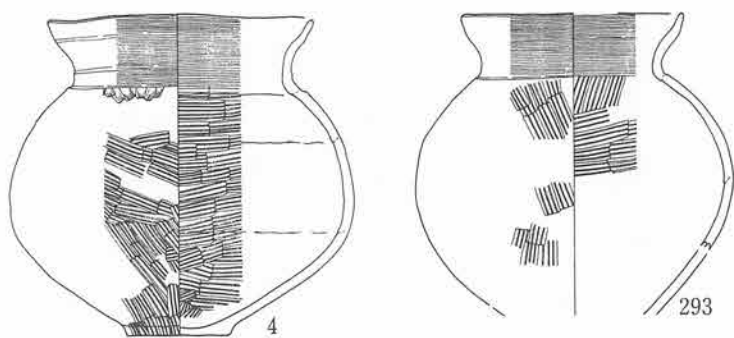
第379図 土器分類図(5)中型・大型甕・甑・壺・長胴偏平土器・手捏ね



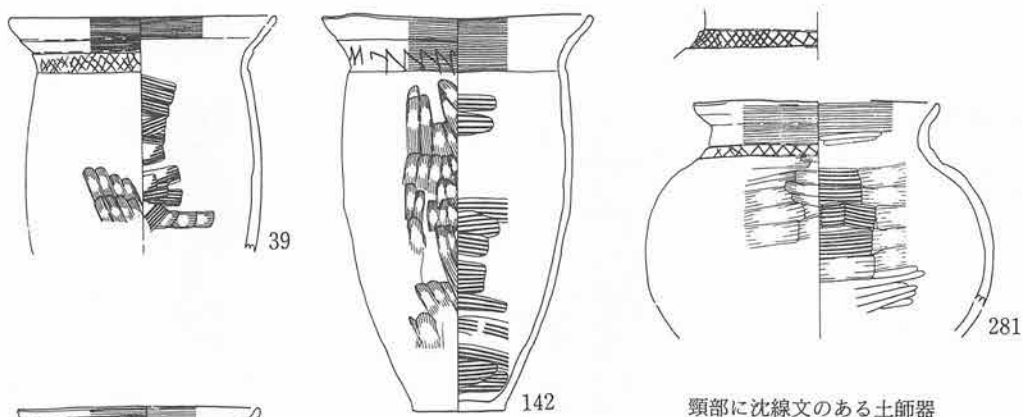
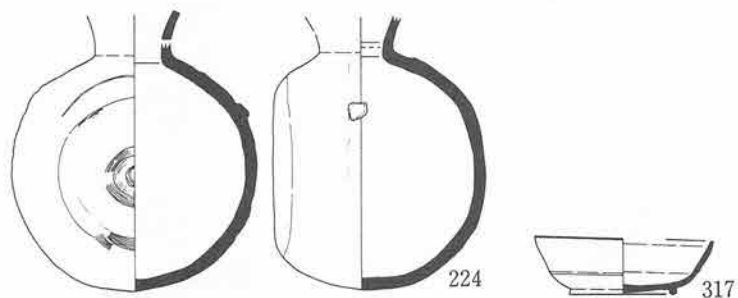


第380图 土器分類図(6)球胴甕(1)

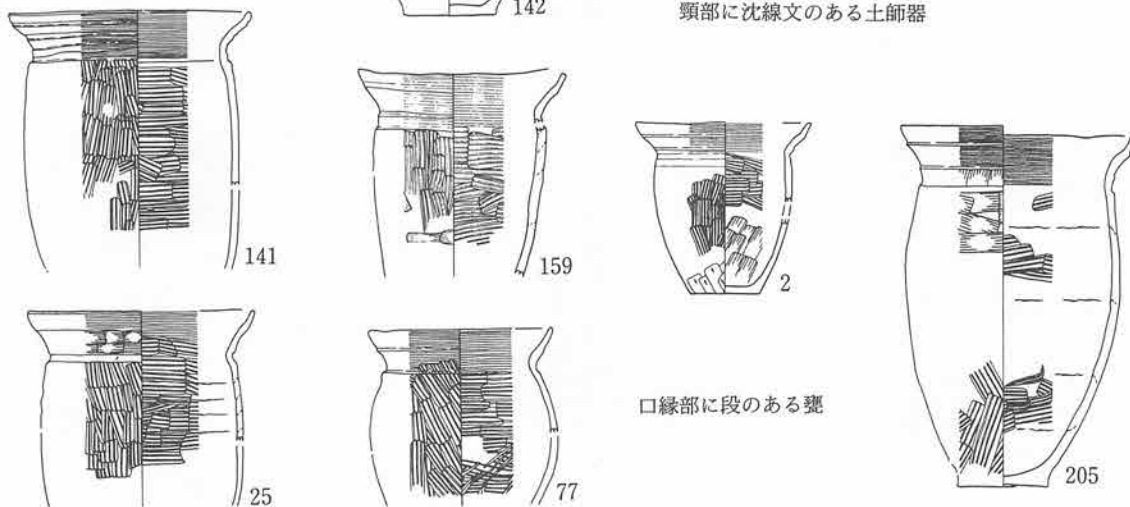




須恵器



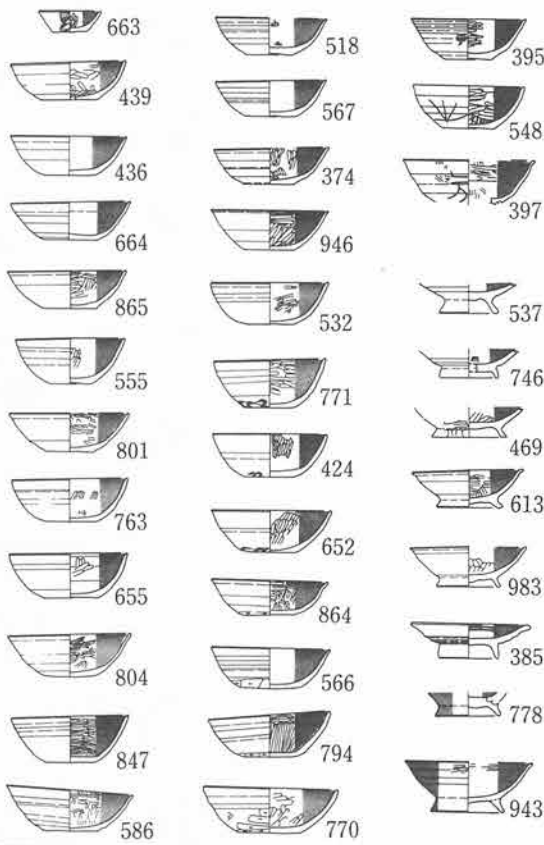
頸部に沈線文のある土師器



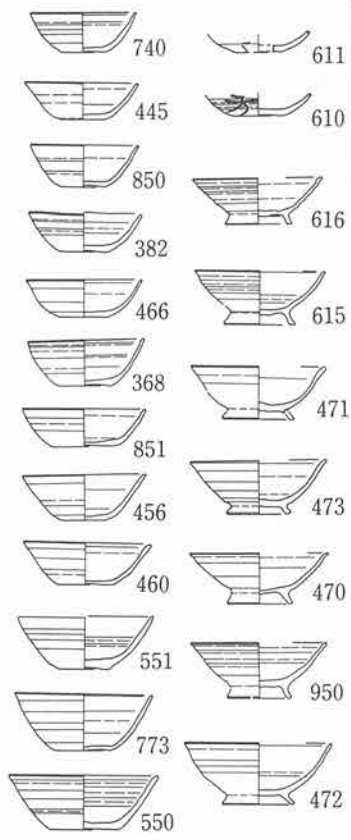
口縁部に段のある甕

第381図 土器分類図(7)球胴甕(2)須恵器・その他

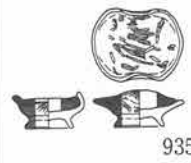
坏・墨書坏・線刻坏



坏



耳皿



935

鉢

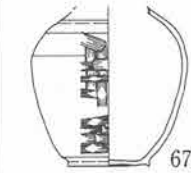


704

壺

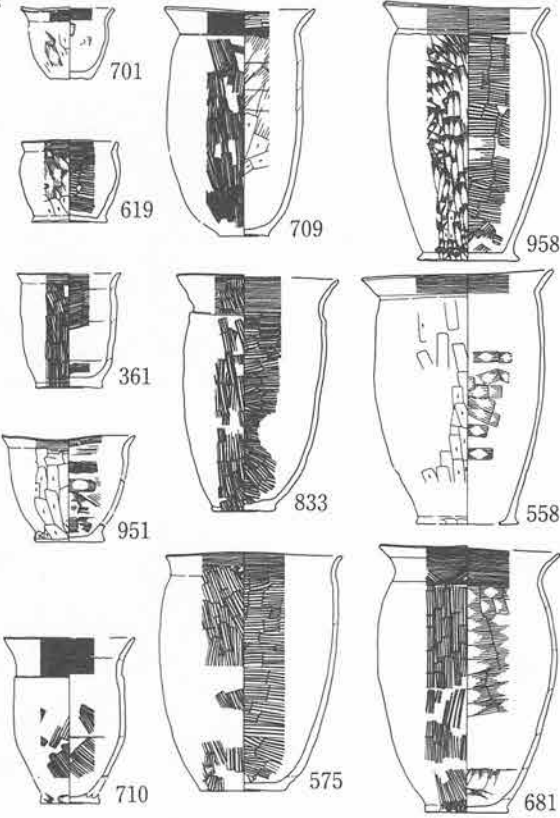


654

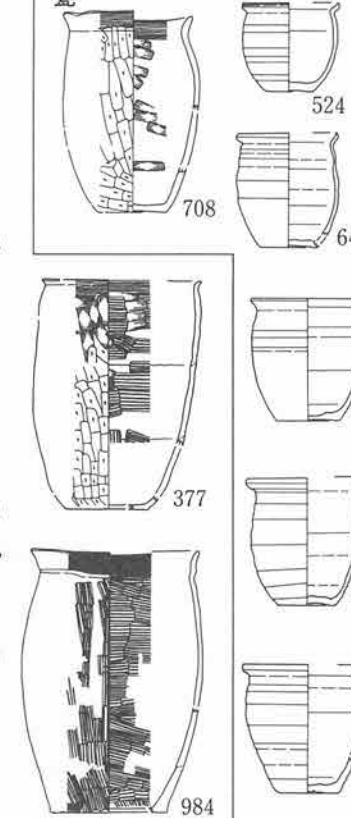


678

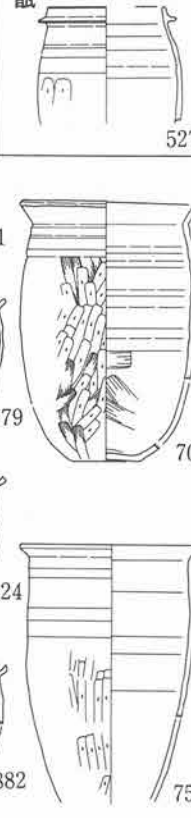
甕



甕

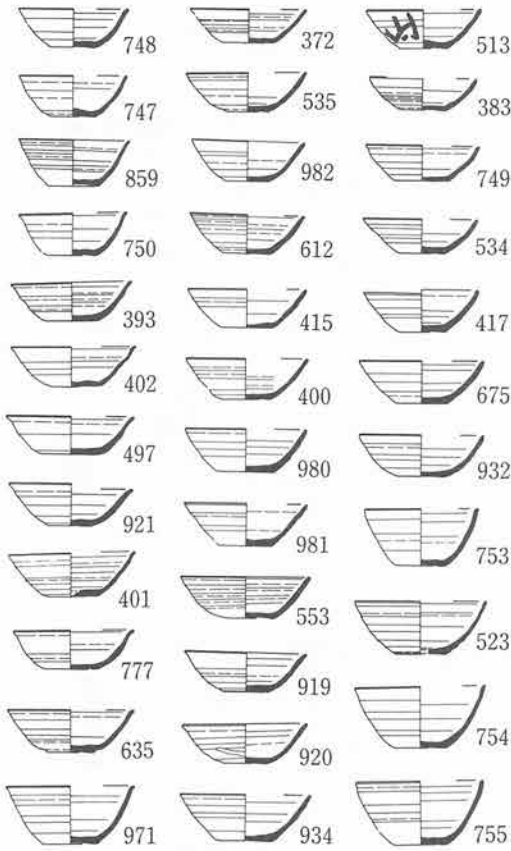


甗

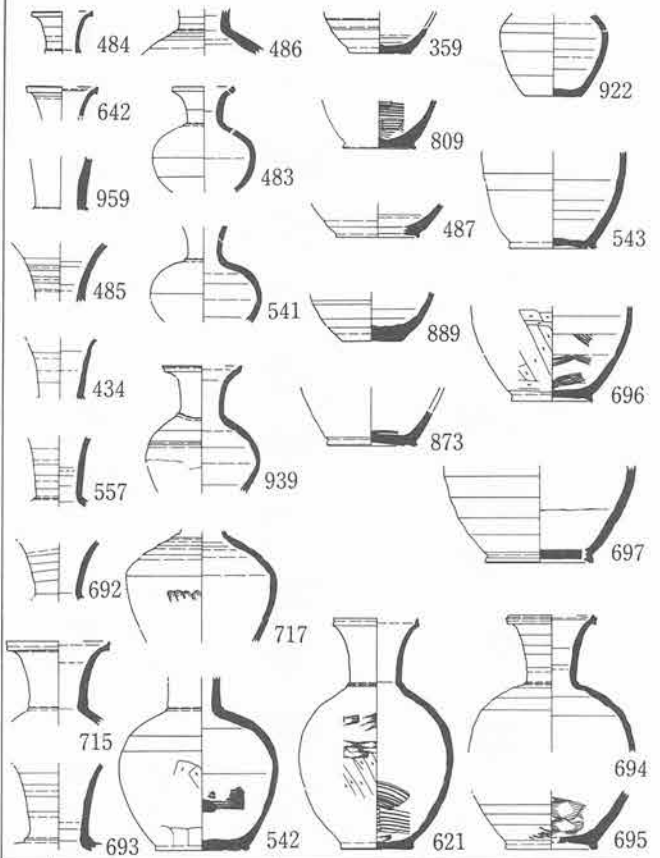


第382图 土器分類图(8)土師器手捏ね・坏・高台坏・耳皿・鉢・甗・壺・甕

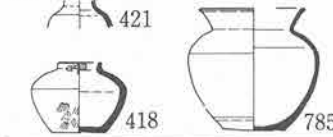
坏・墨書坏



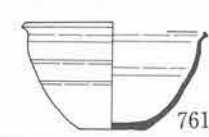
長頸瓶



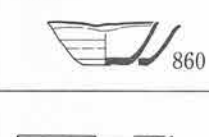
壺



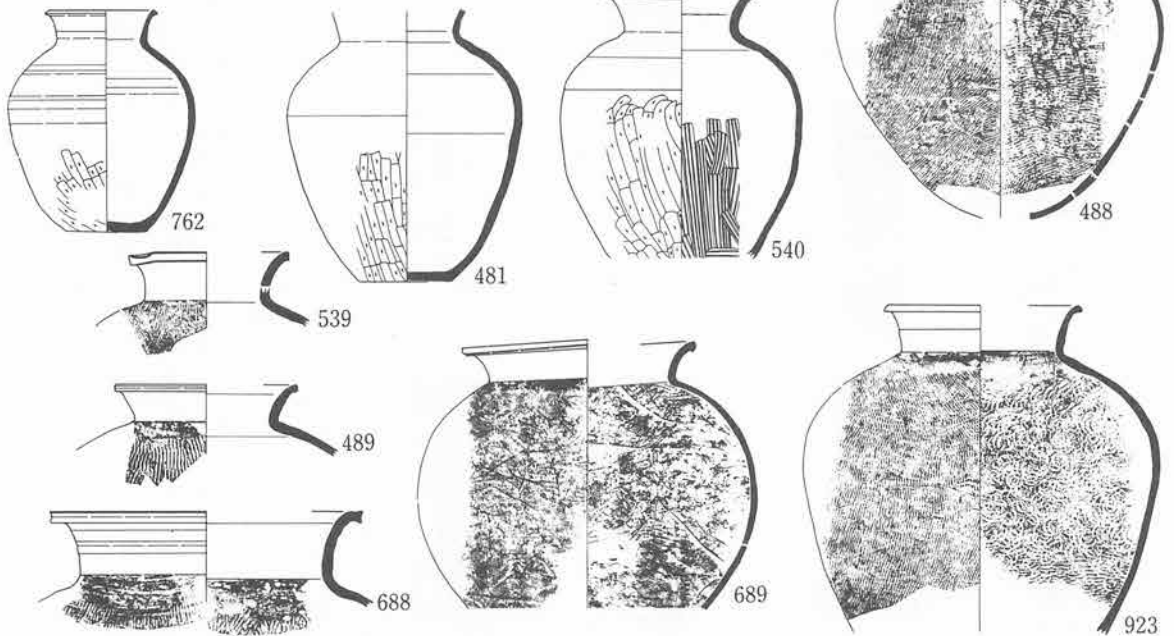
鉢



片口



甕・大型甕



第383図 土器分類図(9)須恵器坏・長頸瓶・壺・鉢・片口・甕・大型甕

## 報告書抄録

ふりがな	だいたろういせきだいじゅうはちじはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	台太郎遺跡第18次発掘調査報告書							
副書名	盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第369集							
編著者名	高橋義介・金子佐知子・佐藤綾子							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦 2001年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃	〃			
だいたろういせきだいじゅうはちじはつくつちょうさほうこくしょ 台太郎遺跡 第18次調査	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 向中野字向 中野26-6ほか	03201	LE162269	39度 40分 47秒	141度 8分 40秒	19980415～ 19981124	27,133 m <sup>2</sup>	盛岡南新都市開発整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
台太郎遺跡 (第18次)	集落跡	古墳時代末～ 奈良時代	竪穴住居跡42棟、竪穴状遺構5棟、 土坑14基、溝跡1条		須恵器	坏・長頸瓶・甕・大甕・提瓶・ 片口・壺等		
		平安時代	竪穴住居跡65棟、竪穴状遺構9棟、 土坑43基、楕円形周溝2基、溝跡 19条、波板状凹凸遺構3カ所等		土師器	坏・高台坏・鉢・長頸瓶・甕・ 長胴甕・球胴甕・甑・片口・ 壺		
		中世	竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡6 棟、土坑3基、堀3条等		土製品	土錘・紡錘車		
		近世～近代 (不明)	掘立柱建物跡7棟、竪穴状遺構5 棟、土坑27基、焼土遺構12基、カ マド状遺構13基、溝跡90条、井戸 跡2基、柱穴状土坑638基、馬屋状 遺構2棟等		鉄製品	刀子・釘・環状製品・鋤先・ 紡錘車・鎌		
					石製品	砥石・磨石・凹石		
					装飾品	勾玉・管玉・小玉		
					古銭	寛永通寶		

## 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

	所 長 伊 藤 民 也		副 所 長 櫻 田 次 男
[管理課]			
	管 理 課 長 川 浪 清 徳		嘱 託 千 葉 芳 夫
	管理課長補佐 山 崎 善 光		〃 藤 島 恵 子
	主 査 立 花 多加志		〃 新 田 ト ヨ
	主 事 日 影 睦 夫		〃 佐々木 光 重
[調査第一課]		[調査第二課]	
	調査第一課長 佐々木 勝		調査第二課長 高 橋 與右衛門
	課 長 補 佐 佐々木 清 文		課 長 補 佐 中 川 重 紀
	主 任 文 化 財 員 小 山 内 透		主 任 文 化 財 員 高 橋 義 介
	主 任 文 化 財 員 赤 石 登		〃 金 子 佐知子
	〃 吉 田 充		〃 中 田 迪
	〃 小 原 眞 一		〃 工 藤 道 孝
	〃 小笠原 健一郎		〃 古 舘 貞 身
	〃 金 野 進		〃 阿 部 眞 澄
	〃 島 居 達 人		〃 松 尾 芳 幸
	〃 金 子 昭 彦		〃 工 藤 徹
	〃 東海林 淳 美		〃 前 田 稔
	〃 阿 部 勝 則		〃 岩 渕 計
	〃 羽 柴 直 人		〃 早 坂 悟
	〃 小野寺 正 之		〃 濱 田 宏
	〃 菅 原 靖 男		〃 安 藤 由紀夫
	〃 長 村 克 稔		〃 高 木 晃
	〃 溜 浩二郎		〃 千 葉 正 彦
	〃 菊 池 貴 広		〃 佐 藤 淳 一
	〃 村 上 拓		〃 半 澤 武 彦
	〃 本 多 準一郎		〃 杉 沢 昭太郎
	〃 北 村 忠 昭		〃 中 村 直 美
	〃 丸 山 浩 治		〃 (星 雅 之)
	〃 村 木 敬	期 限 付 員	鈴 木 聡(12月退職)
期 限 付 員	小 林 弘 卓	〃	吉 川 徹
〃	江 藤 敦	〃	北 田 勲
〃	藤 原 賢 徳(6月退職)	〃	吉 田 里 和
〃	菊 池 賢	〃	原 美津子
〃	井 上 信 介	〃	齋 藤 麻紀子
〃	川 又 晋	〃	島 原 弘 征
〃	吉 田 真由美		
〃	北 田 博 義(11月退職)		

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 369 集  
台太郎遺跡第 18 次発掘調査報告書  
盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

(第 1 分冊 本文編)

印 刷 平成13年 3 月19日

発 行 平成13年 3 月26日

発 行 財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 山口北州印刷株式会社

〒020-0133 盛岡市青山 4 丁目10-5

TEL (019) 641-0585